昭和七年六月一日印刷
昭和七年六月五日發行

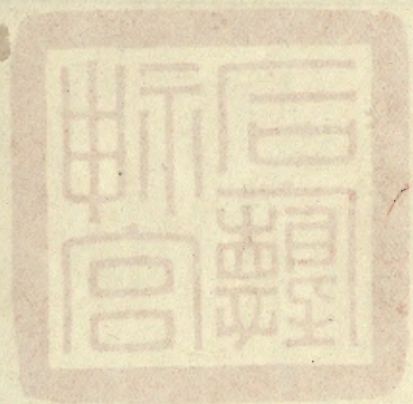
（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
發行者　川俣馨一

印刷者　和田助一

東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
發行所　古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

東京市小石川區竹早町三十二番地
發賣所　內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番
　　　　　　　　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）

明治四十四年五月二十八日印刷

明治四十四年五月三十一日發行

神宮司廳

明治四十四年五月二十八日印刷
明治四十四年五月三十一日發行

神宮司廳

〔鵞峯文集 頌百十二〕賀茂葵頌

賀茂之山、葵草之生、兩葉相對、中有二一英一、象二日月星三光一德弁、維其向レ日、不レ失二其誠一、維花之垂、銜レ足而傾、其本既守、其末自榮、兩葉之對、擬二陰陽精一、一英之秀、譬二諸神明一、此物雖レ微、託レ意不レ輕、神域靈產、祝二國家禎一、

○按ズルニ、賀茂祭ノ時ニ、葵ヲ用キル事ハ、神祇部賀茂祭篇ニ載ス、

〔藻鹽草八草〕葵

あふひ草、又たゞあふひとばかりも云、葵はなさく、もろかづら、もろは草、二葉草、神山によめりかざし草、かざしの草と、のもじありても、ひかげ草、是も異名とふるき物にありすこし不審、かたみぐさ、略○註庭草、これはつちあふひなり、ちしはり草の事也、又にはの草とも、たゞには草共いふと、ふるき物にいへり、からはひといへり、是馬也、からあふひ也、あふひはかも神山、また松尾山にも、みあれひくけふに葵、

〔和漢三才圖會濕草九十四本〕葵○中略
山州賀茂山中有二葉葵。毛呂久佐波布地生、其葉圓而微尖、面青背帶紫色、賀茂神事著葵於桂木枝、掛簾及器、謂之葵祭、毎年四月中酉日被行之、獻葵於北山中村、

〔古今和歌集物名十〕あふひ　かづら　よみ人しらず
かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしと思はざるべき
人めゆゑのちにあふひのはるけくばわがつらきにや思ひなされん

〔古今和歌六帖六〕あふひ
思ふなかさけにゑひにし我なればあふひならではやむ藥なし

〔古今和歌六帖標注六〕童蒙抄卷五に、酒にゑひたるには、あふひの實をくへばさむといへりとみゆ、今按ずるに、こは何によりてかくいはれたるにか、物に見えず、

〔枕草子三〕草は
あふひいとをかし、祭のをり神代よりして、さるかざしとなりけん、いみじうめでたし、もの、さまもいとをかし、

〔枕草子八〕うつくしきもの
あふひのちひさきもいとうつくし、何も〱ちひさき物はうつくし、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕杜衡　カ。ン。ア。フ。ヒ。　チ。ヤ。ウ。ジ。ヤ。ノ。カ。マ。越後　オ。ケ。バ。ナ。同上　チ。ヤ。ガ。マ。ノ。キ。　カ。ゲ。ノ。ア。フ。ヒ。共ニ城州按馬　サ。イ。シ。ン。ア。フ。ヒ。種樹家　ト。キ。ハ。グ。サ。同上　イ。シ。バ。サ。ミ。勢州　ツ。ボ。ハ。ナ。　一名蘅香香譜、薗香同名、　金鎖匙附方、山豆根ト同名、五雜組ニ出、　馬蹄草同上　杜衡葵爾雅翼　馬蹄香赤水玄珠　衡薇香楊升庵文集　蘅同上　土杏正字通、品字箋、　皺兒草大倉州志　杜細辛集解

山ニ多クアリ、陰地ニ生ズ、葉圓ニ末尖リ、莖ノ附クトコロカケテ馬蹄ノ形ノ如シ、大サ二三寸形圓ナルモノアリ、長キモノアリ、又苦蕎麥(ミツバ)葉ノ如キモノアリ、質皆厚シ、冬ヲ經テ枯レズ、一カブニ葉叢生ス、莖紫黑色葉ニ白斑文アリ、其斑數品アリ、葉中左右相對シテ白キ者アリ、中央ノミ白キ者アリ、葉後白キモノアリ、中央一線白キ者アリ、滿葉細白條網ノ如キ者アリ、又全ク斑ナキ者アリ、是ヲ種樹家ニテ細辛ト呼ハ誤ナリ、細辛ハ葉薄シ、杜衡ハ三四月花ヲ開ク、紫黑色此花ヲ鹽藏ニシテスイモノニス、味淡シ、花ノ形釜ノ如クシテ上ニ三瓣アリ、根ハ細辛ヨリ粗クシテ臊氣アリ、コレヲ藥舖ニテ近江細辛又土細辛ト名ケテ、細辛ニ充テ貨ル、眞ノ細辛ニアラズ、一種葉小ニシテ香氣多キ者アリ、是集解所謂其臭如蘼蕪ト云モノナリ、加州ニ産ス、大サ八分許ニシテ圓ク扁シ、コレヲ錢葉ノ杜衡ト云フ、世ニ錢細辛ト云ハ非ナリ、

〔佐渡志五物産〕杜衡　方言チヤウジヤノカマ　山中ニアリ

二葉葵

〔倭訓栞前編二阿〕あふひ　葵をいふ、〇中略賀茂祭に用らるゝあふひは、訓義同じく物異れり、二。葉。草。とも兩(モロ)葉草ともいへり、杜衡を杜葵ともいふ、其類也、

〔兼載雜談〕一賀茂祭に出る葵は二葉也、そばの葉に似たり、又世上に多き花の紅にさく葵も用ゆるなり、

葵草照日は神の心かもかげさす方に先むかふらん

此歌にてみれば二葉の葵にかぎらざるなり、この歌は葵花向陽の心なり、

頭上、貼地生、紫花、其花似見不見、開結實如豆大、實內有碎子、似天仙子、苗葉俱青、經霜即枯、其根成簇、有鬚縱密開、細長四五寸、微黃白色、味辛、

〔書言字考節用集 六生植〕杜衡 一名馬蹄香 石蘭 同 俗用此字、誤、石蘭者石斛也、 杜衡 杜葵、土細辛並同、俗以杜衡為及已者誤、見本草、 馬蹄香 同 本草、杜衡葉似葵、形似馬蹄、故云爾、

〔古今要覽稿 草木〕ふたまかみ　かんあふひ　杜衡

ふたまかみ、一名つぶねぐさ、俗名かんあふひ、一名ちやうじやのかま、一名おけばな、一名ちやがまのき、一名がけのあふひ、一名つぼはな、西土にいはゆる杜衡一名馬蹄香、一名土鹵、一名土若、一名杜葵、一名土杏、一名杜細辛なり、此物古飛驒國より貢せしこと、延喜式にみえたれど、今は處處山中陰濕の地に往々これあり、形狀は大略細辛に似て、一根兩莖或は三莖を生じ、數根相連りて數莖むらがり生ず、花は其兩莖の間より出て地上に貼し、狀細辛花に似て紫黑色、內空にして底に村て、蕊の如きものあり、其內に至て微細なる實數十粒あり、頗る罌粟子二ッ三ッに碎きしが如くにして、黃白色、葉はすべて光澤ありて、蜻蛉背の如し、一種武藏多磨郡に產するものは、其葉白斑なくして光澤稍薄し、其他また數十種あり、その形狀はくわしく本草啓蒙にみえたり、

釋名

ふたまかみ、本草和名、和名鈔、名義詳ならず、つぶねくさ、同上 按につぶ疑らくは、別に一種の草の名にてもあるべきか、さすればつぶねくさは、猶みらのねぐさの如く、根の狀全く其草の根に似たるによりて、命せし名なるべきか、かんあふひ、本草啓蒙、按に此草嚴寒の時といへ共、葉かれずして其狀葵の如し、故に名づく、ちやうじやのかま、同上、越後方言、按に此花の狀、頗る釜の如し、よりて名づく、おけばな同上、按に其狀おけに似たるをいふ、ちやがまのき、同上、山城駿馬方言、按に茶釜もまた其狀相似るをいふ、きは甘草あまきといへるきの如し、がけのあふひ、同上、按にがけは山のかたはらをいふ、つぼはな同上、按につぼもまた其狀によりて名づく、杜衡證類本草、引名醫別錄、圖經本草、

延喜式ニ載ルハ、當時何ノ草ヲ以テ細辛ト爲シタルヤ詳ナラズ、眞ノ細辛ハ近來出タリ、加茂アフヒヲ以テ細辛ニ充ル古說ハ穩ナラズ、加茂アフヒハ古歌ニモロハグサ、フタバグサ、カザシグサ、ヒカゲグサ、カタミグサ、モロカヅラトモ云、是ハ雙葉細辛ナリ、根粗クシテ辛味少シ眞ニアラズ、眞ノ細辛ハ和州大峯ノ麓赤瀧村ニアリ、根細ク黃白色、コレヲ嚙バ辛カラズ、暫シテ大ニ辛シ、加茂葵ノ葉ニ似テ、微シ長ミアリテ毛ナシ、又葉形變ジタルモアリ、三月新葉生ズレバ、根上ニ三瓣ノ花ヲ開ク厚シ、大サ三四分、下ニ圓筒アリテ釜ノ狀ノ如シ、紫黑色內ニ小子アリ、熟シテ自ラ落チ、春ニ至テ嫩苗ヲ生ズ、冬ハ葉枯ル、又常州江州豆讚州野等ニモ產ス、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種、〇中略細辛十一斤、　武藏國廿八種、〇中略細辛廿斤、〇下略

〔佐渡志物產五〕細辛　山中ニ多シ、採テ藥舖ニ賣ルニ、他邦ノ產ニ勝レリトイフ、

〔本草和名草八〕杜衡楊玄操香衡一名馬蹄香、蘇敬注云、形似馬蹄、故以名之、一名楚衡、一名土鹵、一名土杏、已上出釋藥和名布多末加美、一名都布禰久佐、

〔倭名類聚抄草二十〕杜衡　蘇敬本草注云、杜衡一名馬蹄香、衡一音衡、和名布太末賀三、一云豆不禰久佐、形似馬蹄、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄草十〕證類本草中品引云、杜衡葉似葵、形如馬蹄、故俗云馬蹄香、與此所引字句少異、本草和名引與此同、按葉似葵三字似不可缺、若無是三字、則云形似馬蹄者、無知斥何物也、本草和名刪節、非是、西山經、天帝之山有草焉、其狀如葵、其臭如蘼蕪名曰杜衡、爾雅、杜、土鹵、郭注云、杜衡也、似葵而香、別錄、杜衡香人衣體、陶注、根葉都似細辛、惟氣小異爾、史記司馬相如傳索隱引博物志云、杜衡一名土杏、其根一似細辛、葉似葵、按杜衡土杏古同聲、然則此草似莕生土故有土莕之名也、王念孫蘇又云、生山之陰水澤下濕地、根似細辛白前等、圖經、根亦麄黃白色、圖經細辛注云、杜衡春初於宿根上生、苗高二三寸、莖如麥藁麄細、每窠上有五七葉或八九葉、別無枝蔓、又於葉莖間罅缺內蘆

細辛

堅ク、舶來ノ莢柔軟ニ子ノ薄片ニシテ、尤輕虛ナルニ異ナリ、根ハ巨クシテ香アリ、コノ草勢州志州ニハ自生アリ、漢種ニハアラズ、

〔武江產物志　藥草〕早稻田邊　馬兜鈴（大葉ハ中里ニアリ）

〔新撰字鏡　草〕細辛（彌○良○乃○彌○草○、又似ニ地白一）

〔本草和名　草六〕細辛一名小辛、一名細草、（出ニ釋藥性一）和名美良乃彌久佐、一名比○岐○乃○比○太○比○久○佐○

〔倭名類聚抄　草二十〕細辛　釋藥性云、細辛一名小辛、（和名美良乃禰久佐、一云比木乃比太比久佐、）

〔箋注倭名類聚抄　草十〕按千金翼方證類本草並云、細辛一名小辛、則知小辛之名出ニ本草一、細草之名出ニ釋藥性一也、疑以ニ本草和名於ニ小辛下一失一レ著ニ出典一、源君誤以爲ニ小辛之名亦出ニ釋藥性一也、太平御覽引ニ吳氏本草一云、細辛如ニ葵葉一赤黑、一根一葉相連、本草圖經云、其根細而其味極辛、故名レ之曰ニ細辛一、

〔古名錄　香草十八〕按ニ美良乃禰ハ、卽生ニ根鬚一韮根如キヲ云、（本草和名曰、韮和名古美良、○中略）其根ノ味香アリテ辛ニヨリ、美良乃禰久佐ト云、（○中略）註比岐乃比太比ハ、其葉形狀蟾蜍ノ額ニ似テ、根味亦蟾蜍ノ味ノ如ヲ云、

〔大和本草　藥六〕細辛　一說賀茂葵ヲ細辛トス、其根甚辛シ、和俗ノ細辛ト稱スル者ハ杜衡也ト云、モロコシニモアヤマルヨシイヘリ、又山野ニ一種根ノ味細辛ニ似タルモノアリ、是世俗ノ所レ謂細辛ナルベシ、是白微ナリ、京都蓮臺野藥園ニアリ、

〔和漢三才圖會　山草九十二末〕細辛　小辛　少辛（和名美良乃禰、或云比木乃比太比久佐、○中略）

按細辛倭漢共用レ之、奧州津輕及江州之產良、阿波及豐前小倉之產次レ之、其葉似ニ小葵一而靑、有ニ小白點一、夏月開ニ小紫花一、朶短根直、外黃內白、其氣略如レ椒、雖レ辛不レ甚、用ニ細辛一藏ニ人參一、則人參不レ蛀云、

〔重修本草綱目啓蒙　山草八〕細辛　ヒ○キ○ノ○ヒ○タ○ヒ○グ○サ○（延喜式）ミ○ラ○ノ○子○グ○サ○（和名鈔）ミ○ヤ○マ○ヌ○ス○ハ○（本草類編選）一名玉蕃綠（種杏仙方）綠鬚蓋（輟耕錄）

按青木香、(重出于芳草下)用之雜僞於木香、又倭無馬兜鈴、而蘿藦根似之、故亦僞爲青木香、

〔書言字考節用集 六生植〕馬兜鈴(バトレイ) 馬兜鈴(ムマノスヾ)(蔓艸也)(ノ名)

〔重修本草綱目啓蒙 十四蔓草〕馬兜鈴 ○ジヤカウサウ○(備ノ名下圖) ○ムマノスヾカケ和州 ○ツヾンポグサ播州、(此實耳チ落ス、故ニ名ク、)○チドリサウ○播州 ○ムマノスヾクサ○片玉本草 ○ムマノスヾ○實ノ名 ○スヾナリ○勢州、同上

青木香(根名) 一名玉皇瓜(藥譜、駢餘及事物異名、皇ヲ黃ニ作ル、) 雲南枝(楊州府志、枝ハ根ノ誤ナルベシ、) 天仙藤(万病回春) 兜鈴

苗(附方) 冬兒冬乙羅(村家方)

馬兜鈴ハ實ノ名、土青木香ハ根ノ名、古方ニ青木香ト云ハ南木香ナリ、後世ノ方ニ青木香ト云ハ多ハ此根ヲ指ス、即土青木香ノ路ナリ、和名ニモ青木香ト云、故ニ和方ニ青木香ト云ハ、コノ根ヲ用ユベシ、此草原野路傍ニ多シ、苗山藥(ヤマノイモ)ニ似テ春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、色黑シテ衆草ニ異ナリ、長ジテ蔓延シ、葉互生ス、山藥葉ヨリ厚ク黑色ヲ帶ブ、長サ一二寸、切レバ臭氣多シ、夏月葉間ニ花ヲ出ス、本筒ニシテ末兩瓣ニ分レ、屈曲シテ馬頭ノ形ノ如シ、紫綠色後實ヲ結ブ、長サ一寸許、濶サ六七分下垂シ、外ニ薄キ皮アリテ包ミ、雞卵ノ形ノ如シ、皮ノ本ゴトニ各一絲アリテ穢斗菜(オダマキ)ノ花ノ形ノ如シ、故ニ集解ニ開四系ト云フ、熟スレバ褐色中ニ薄扁子數多アリ、形楡莢(ニレノミ)及百合子ノ如クニシテ白色ナリ、一種大葉ノ者アリ、長サ三寸許、

增、種樹家ニ漢種ノ馬兜鈴ト呼モノアリ、春舊莖ヨリ葉ヲ互生ス、葉蒂長クシテ二寸許ニモ及ブ、葉ノ形木防已葉ニ似テ三岐ヲナス、中葉長サ三寸許、幅五六分、左右ノ岐葉圓ク短クシテ、僅ニ六七分ニ過ギズ、ソノ缺刻深クシテ下漸ク窄シ、恰モ正面ニ韭ケル鼻ノ狀ノ如シ、夏月葉間ニ下垂シテ花ヲ開ク、長サ一寸六七分、本ハ筒ニシテ一寸許ニシテ上ニ彎曲シ、横ニ向テ兩瓣ヲ分ツ、內ニ黑斑アリ、甚異形ニシテ比ン象リガタシ、花後莢ヲ結ブ、大拇指ノ大サニシテ末尖リ、縱ニ六七線アリテ淡茶色熟シテ自ラ裂ク、中ニ堅ニ薄皮ヲ隔テ、一分許ノ子數多クアリ、灰色ニシテ甚ダ

〔日本書紀三十持統〕七年三月丙午、詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁等草木、以助五穀、

〔牧民金鑑十七〕明和五子年十月

御代官所御預所村々の內、から虫有之候場所、糸にとり機物等にいたし候得者、村方勝手にも相成候筋に候處、其儘打捨置候場所多く候間、以來御代官所御預所〻、右の趣寄々申渡、候樣可被致候、

右之趣申達候樣、備後守殿被仰渡候間、申渡候、以上、

子十月

柳イチゴ

〔大和本草附録草一〕柳イチゴ　葉ハ如柳、其幹如柳樹頗大ナリ、高五六尺無刺、駿州薩陲山ニ多シ、葉ノ表深綠色裏白シ、三月末開黃紅白花、五月子熟、黃赤色味頗甘シ、無毒可喰、其花一處ニ叢生ス、子モ亦然リ、

赤車使者

〔多識編二芳草〕赤車使者、今案阿加惠、異名小錦枝、炮炙論

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕赤車使者　クチナハジヤウゴ　ヤマカゴ加州　シヅクナ佐州　ミヅナ但州　ミヅ南部、凡圃埜ニシテ淡紅色、透明ノミヅモノチミヅト云、蛭蝋ノ略ナリ、　ウハバミサウ

此草蛇過食ノ時食ヘバ即チ消ス、故ニクチナハジヤウゴト云、深山溪側陰地ニ生ズ、莖斜ニシテ直立セズ、葉ハ欅(ケヤキ)及加條(ムクノ)葉ニ似テ互生ス、黃綠色、四月葉間ニ極テ細小ナル白花ヲ簇生ス、秋ニ至テ脚葉ノ間ニ實ヲ結ブ、零餘子(ムカゴ)ノ形ノ如シ、根ハ淡紅色、又一種ミヅト云アリ、苗高サ一尺ニ滿タズ、葉ハ苧麻葉ニ似テ小ク、節節ノ間ニ生ジ、節ニハ葉ナシ、花ハ苧麻花ニ似テ葉間ニ簇生ス、花ハ葉ノ色ニ同ジ、コレモ赤車使者ノ屬ナリ、

馬兜鈴

〔多識編二蔓草〕馬兜鈴、今案牟末乃須須、異名獨行根、唐本

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕馬兜鈴(はとれい)　二百兩銀葉都淋藤　土青木香根名　雲南根根名　獨行根同

テ分ケ植、ホエヲ出サセ、夏土用ニ刈リ、又秋ノ末ニ刈リ、兩度眞麻ヲ取、此麻ヲ以布ヲ織ニ、分テツヨシ、土地ニ嫌ヒナクハビコルモノナリ、越後信濃上野、此國々ノ土民、能作リ得テ國々へ出ス也、

〔農業全書六三草〕麻苧

麻苧をうゆる事、先苗地を寒耕し、いかほどもよくこなし、塊少もなく委しくこしらへ、濃糞を多くうちさらし置、二月中旬、麥畦のごとく畦作りし、横にせばく筋をかき、種子を薄く蒔、土をいかにも少おほひ、又其上に糠を少おほひ置なり、生出ては、先草ながら生立をき、根よく出來て後中を削りても痛むまじき時、かるき鍬にてさら〳〵と削り、草を殺しやがて糞を置べし、馬やごゑ其外何にても多くをくべし、糞すくなければふとりかぬる物なり、種子を蒔て明る年、苗ばらひをして、又こゑを多く入れ芸り中うちしをき、三年めより刈取物なり、尤冬雪霜に痛まざる様に、馬屋糞など一尺も厚くおほひ、春になりてはかきのけ芸り、又糞を入をきて、五月初め一鎌かり取、六月半又一鎌、八月一鎌、以上三度かる物なり、中の度を上とすべし、はぎとる事、中よりをしおれば、皮は二筋になりて、木は本末へげてのく物なり、さて其皮を日の當らざる所に置て、水に漬るか、池川なくば、井の水を汲かけてぬらし、竹刀を以て内の方よりこけば、却て上の皮よくのく物なり、いかにも懇にこきて、其後上中をゑり分、さらし干し上て、百目宛を一把とするなり、是は芳野にて作りこしらへ立る大概なり、〇下略

〔令義解三賦役〕凡〇中略其調副物、〇註略正丁一人〇中略枲十二兩、

〔延喜式一四時祭〕鎭花祭二座

大神社一座、〇中略枲六兩、　狹井社一座、〇中略枲八兩、

〔延喜式五齋宮〕祓料〇中略枲一斤

〔延喜式四十二東西市〕紵廛〇中略右五十一廛東市、　紵廛、〇中略右卅三廛西市、

シ。ヲ。ソ。雲州　ヤ。マ。ソ。佐州　シ。ロ。ソ。肥前　シ。ロ。ハ。　シ。ロ。ホ。共ニ同上　ヒ。ウ。ジ。播州　一名青麻附方

青花麻千金方

他國ニハ苧麻ヲ栽テオヲ採ル、京師ニハ栽ルモノナシ、野生多シ、山苧野苧ナリ、ノマオト呼ブ、又グロウジ、城州笠置ハツ豫州ノ名アリ、採テ圃ニ栽レバ苧麻トナル、春宿根ヨリ生ジ、一根叢生ス、高サ四五尺、葉互生ス、形楮葉ニ似テ岐ナク背白シ、集解ニ謂フトコロノ形狀ヨク的當ス、頌ノ說殊ニ詳ナリ、夏葉間ニ穗ヲ生ズ、宇落樹花ニ似リ、一穗數枝、花最碎小ナリ、開ク時ハ細黃粉散落ス、後細子ヲ生ジテ下垂ス、落テ自ラ苗ヲ生ズ、此皮ヲ剝ギ水ニ漚シテ、外ノ粗皮ヲ去リ、內ノ白絲ヲ取リ、夏布ノ用トス、コレヲ奈良ソト云、南都ニテ此オヲ以テ布ヲ織リ、晒シテ四方ニ貨ス、白苧ト云、越後ニテ織ルモノ最上品トス、野苧麻葉ヲ乾シ、揉テ綿ヲ取用テ能血ヲ止ム、ソノ根打撲腫痛ニ効アリ、生根ヲ採リ薑擦ニテ研リ、紙ニノベ痛處ニ貼レバ、骨節ノイタミヲ治ス、蒴藋接骨木ノ煎湯ニテ洗ニ勝レリ、一種ヤブマオアリ、路旁ニ多シ、葉苧麻ヨリ大ニシテ兩對シ、背ニ白毛ナク、皮ニ絲ナシ、穗粗クシテ直立ス、此類數多シ、一種アカメト呼者アリ、一名サヽヤキグサ、キヽシグサ、シヽヤキグサ、皆同名アリアカガシラ、豫州アカダ、仙臺タモ、南部グチエ、同上アカワタ、越後山野共ニ生ズ、葉ノ形野苧ニ似テ小シ、大サ二三寸、莖赤クシテ兩對ス、葉間ニ花ヲ開ク、苧麻穗ニ似リ、是ニハ皮ニ絲アリ、奧州ニテハ、織テ足袋及頭巾ニ製ス、此絲ヲ南部ノ方言ニクチエオト云、頭巾ニ製シタルヲアカダ帽子、仙臺クチエボッチ、南部アカワタボウシ白川ト云、風ヲ透サズト云ヘリ、市人コノ草ノ根ヲトリテ、紫大戟ニ僞リ、野苧麻根ヲトリテ大戟ト名ケ售ル、皆大戟ノ僞物ナリ、

〔百姓傳記十一〕青苧ヲ作ル事

青苧ハ實ヲ取置、春ノ彼岸ノ內蒔、夏土用ニ至リテ苅取、其儘日ニ干シ、其後水ニヒタシホトボシテ、皮ヲムキテ上皮ヲ竹ベラニテコキ取リ水ニテ濕ヲ洗、眞麻トナル、マタ年々根ヲ九十月ニ堀

同、卽本書布帛類所載紵布是也、此所載草名、則引典泉注非是、說文紵檾屬、又周禮掌葛職、徵草貢之材於澤農、注草貢出澤、萯紵之屬、可緝績者、本草苧根陶注云、卽今績苧爾、蜀本注云、苗高丈以來、南人剝其皮爲布、圖經云、其皮可以績布、苗高七八尺、葉如楮葉、面青背白、有短毛、夏秋間著細穗青花、其根黃白而輕虛、陸機草木疏云、苧一科數十莖、宿根在地中、至春自生、不須栽種、本草衍義云、苧根如蕁麻、花如白楊而長、成穗生、每一朶凡數十穗、青白色、李時珍曰、苧麻作紵、可以績紵、故謂之紵、是皆草名、可以訓加良无之、

〔令集解十三賦役〕枲古記云、枲司里反、爾雅枲麻也、野王案、喪服傳、牡麻者枲麻也、則麻之有子者爲枲也、

〔類聚名義抄八艸〕枲音子、ナモミ、カラムシノチ、カラムシ、　葈耳同　苧音佇、カラムシ、カラムシノチ、

〔運步色葉集草花名〕枲　紙麻

〔大和本草九民用草〕苧麻　本草十五卷載之、大麻トハ別ナリ、葉ハ紫蘇ノ形ニ似テ青ク大ナリ、又蕁麻葉ニ似タリ、一根ヨリ莖多生、長ジタルヲ刈テ皮ヲ取リ苧トシ布トス、大麻ニマサレリ、冬宿根不枯、春又生ズ、又實ヲマキテ生ズ、圃ニ多クウヘテ利トス、又野苧アリ、是亦布トス、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕苧麻　苧音除　紵麻　凡麻絲之細者爲絟、粗者爲紵、和名加良無之、俗云眞苧、

按苧麻大麻共剝皮爲絲、通稱苧、故以苧麻曰眞苧、羽州最上之產爲良、名青絲線苧、織奈良漂布者是也、賀越之產亦佳、乃織越後縮布、信濃之產最勁强、爲網繩、不劣於鐵線、故名鐵引、凡使時浸熱湯得冷和米糠揉合之、日乾去糠用、其大繩爲海船組、呼曰加賀苧、

凡苧麻初下種後每歲再三苅取宿根生、第一苅者長三四尺、去枝葉用莖、浸河水取出覆薦筵蒸之、故名虛蒸乎、剝麤皮採肌皮青白色者、以竹篦刮、淨晒乾用之、織奈良及阿部屋布、故呼稱奈良苧、曾者與於通、

第二次苅者稍短、其性不如初苅者、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕苧麻　カラムシ和名鈔　マオ　カツホウ豫州　シロオ土州　衣草和方書

麻苧

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草下〕蕁麻(正字通ニ蕁麻ニ作、通雅ニ燖麻蕁麻ニ作ル、)イ○ラ○グ○サ○　ユ○ナ○グ○サ○摂州　マ○ム○シ○サ○　ウ○オ○ニ○ア○サ○　ヒ○ト○サ○シ○グ○サ○　イ○ラ○イ○ラ○　疼草和方書　イ○タ○イ○タ○グ○サ○加州　増一名蟄草貴州通志

陰地ニ生ズ、方莖高サ二三尺叢生ス、葉苧麻ノ葉ニ似テ深緑色兩對ス、莖葉共ニ毛刺アリ、人ヲ螫スコト甚シ、然レドモ煮ル時ハ食フベシ、花實共ニ苧麻ニ同ジ、其穗葉上ヘ立上ルヲ異ナリトス、苧麻ノ花ハ葉下ニ垂ルレバナリ、木曾ニハ細葉ノモノアリ濶サ五分長サ三寸許、増、一種木曾山中ニ蔓生ノモノアリ、葉ノ形ラシヤウモンニ似テ、刺弱クシテ人ヲ傷ラズ、花實ノ形尋常ノモノニ似タリ、カラハナサウト名ク、又蕁麻ノ人ヲ刺シタルニ、鹽ヲ傳レバ疼ヲ止ム、人尿モ亦可ナリ、

〔新撰字鏡草〕枲(加○豆○牟○自○)　葈(加豆牟自)

〔倭名類聚抄十四機織具〕麻苧(中略)　爾雅注云、枲(司里反、和名介○無○之、)麻無子名也、周禮注云、苧(直呂反、上聲之重、和名加○良○無○之、)麻屬、白而細者也、

〔箋注倭名類聚抄六機織具〕按儀禮喪服傳云、牡麻枲麻也、周禮疏同、玉篇云、有子曰苴、無子曰枲、作無爲是、然廣韻云、麻有子曰枲、無子曰苴、因考春秋正義引喪服傳、苴絰者麻之有蕡者也、馬融注云、蕡者枲實、枲麻之有子者、其色麤惡故用之、疑注爾雅者、誤讀馬注爲枲者麻之有子者、廣韻亦承其誤也、其作無者、蓋後人所校改、非爾雅注之舊、經籍纂詁枲字條引馬注枲麻之有子者、亦誤讀馬注、枲字爲逗(中略)所引文(周禮注)原書不載、按冢宰之屬、典枲職、布緦縷紵、注云、緦十五升布、抽其半者、白而細、疏曰、紵白而細、注以釋緦、疏以釋紵也、源君或引之、脫疏字、且誤句讀也、毛詩東門之池、可以漚紵、釋文云、紵字又作苧、故源君引作苧也、又南都賦有藨苧、王褒僮約有蒲苧、皆謂三稜、與此自別、又按紵有草名布名二義、典枲所云布名、說文紵字注、細者爲絟、粗者爲紵、絟字注細布也、皆與典枲所云

阿新殿〇中略夜モハヤ次第ニ明離テ、忍ベキ道モナケレバ、身ヲ隱サントテ日ヲ暮、麻ヤ蓬ノ生茂タル中ニ隱居タレバ、〇下略

〔甲子夜話二十四〕或日ノ坐話ニ聞ク、麻ノ初生ノ芽ヲ食スレバ發狂スト云、先年谷中妙傳寺ト云ニテ、早朝人ユキタルニ、ソノ住持小僧奴僕ナド皆沈睡シテ熟臥ス、又視ルニ、佛壇ノ本尊ヨリ器具戸障子ノ類、悉ク打破テアリ、其人不審ニ思ヒ、睡リタル者ヲ搖シ起セドモ覺メズ、頻ニ起シテヤウヤク覺タリ、因テ其次第ヲ問フニ、サテ〳〵能寐タリ、夜前ハ面白キコトナリト云ユヱ、夫ハイカニト尋レバ、カノ打碎キシ物ヲ見テ大ニ驚キ、始テ狂ノ所然ヲ知リタリト云、カノ毒消ヌレバ故ニ復スルニヤ、此時坐傍ノ人曰フ、夏日麻ノ襦袢ヲ著タルモノ、酒ヲ飮デ汗出レバ、襦袢ニ酒氣殊ニ移リテ有リ、コレ酒氣ヲ吸フナリト云キ、然レバ麻ノ性ハ酒ヲ惹モノナルカ、又一客曰フ、麻毒ノ狂モ酒ヲ飮メバ發スルコトナシト、然レバ又酒ハ麻ニ克ツ乎、又本草大麻ノ條ニ、附方一舊風癲百病、麻子四升、水六升、猛火煮令芽生、去滓煎取二升、空心服之、或發或不發、或多言語、勿怪之、但令人摩手足、頃定進三劑愈、千金是等カノ發狂ノ據トスベシ、又カノ寺ニテ數人發狂ノトキ、十二歲ナル兒、兩手ニ箸ヲ持チ、面白ヒト云ツヽクルヒ出シ、其次ニ住持ガ狂シタリト云、年少ノ腹中故ニヤ、和尙ハ多ク食セシ故ニヤ、

〔農業自得下〕麻

麻の相生の地といふは、山間の土地こはく、厚地によし、依て野州粟野へんは、關東一の麻地なり、平地にては益少し、

〔延喜式四十二東西市〕苧鄽〇中略　右五十鄽東市　麻鄽、績麻鄽、〇中略　右卅三鄽西市

〔毛吹草三〕信濃　白苧　上野　白苧　出羽　青苧奈良布ニ用之　越後　綱苧　但馬　苧

〔多識編二蕁草〕蕁麻、今案比。土。左。志。久。左。異名毛蘞

所居、便名安房郡、(今安房國是也)

〔續修東大寺正倉院文書後集六〕錢用帳　天平寶字六年

同日(〇閏十二月六日)下錢壹伯肆拾陸貫壹伯拾玖文(〇中略)一百文買麻大五斤(斤別廿文)

〔續日本紀二十七孝謙〕天平神護二年六月丁亥、日向大隅薩摩三國大風、桑麻損盡、詔勿收柵戶調庸、

〔萬葉集七雜歌〕羈旅作

夏麻引、海上潟乃、奥津洲爾、鳥者簀竹跡、君者音文不爲、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

櫻麻乃、苧原之下草、露有者、令明而射去、母者雖知、

〔袖中抄十一〕さくらあさ

さくらあさのおふの下草はやくおひばいもが下ひもとかざらましを

顯昭云、さくらあさとは、麻の花は、しろき中にすこしうすすはう色あるあさのある也、それを櫻麻とは云也、又下人の申侍しは、くらあさといふ物なりと申き、くらあさとは、もしくらら(苦參)と云物にや、それもぬのにをれば、それをもあさといふ歟、それにさもじ(文字)をくはへて、さくらあさといふにや、櫻麻とかきたる所心えねど、万葉は書樣ともかくもあり、石の根をも石金(イハネ)とかけり、當時よみよきやうに書也、さくらあさのおふと云をも、或は櫻麻の麻原とかけり、これは麻の義にかなへり、或櫻麻の苧原ともかけり、これはいはれず、麻と苧と別の物なる故也、苧をばまをといひ、からうしともいふ也、

〔散木弃謌集一春〕なしの花さかりなりけるをみてよめる

櫻あさのおふのうらなみ立かへり見れどもあかぬ山なしのはな

〔太平記二〕長崎新左衞門尉意見事附阿新殿事

〔延喜式内藏十五〕御服料〈○中略〉熟麻大五斤〈絲緒料〉
中宮御服料〈○中略〉熟麻大三斤〈絲緒料〉
造御靴料、〈○中略〉麻子一斛二斗五升、
諸國年料供進〈○中略〉麻子二斛〈常陸七斗、下總七斗、武藏國六斗、〉

〔延喜式民部二十三〕年料別貢雜物
武藏國〈○中略〉麻子六斗　下總國〈○中略〉麻子七斗　常陸國〈○中略〉麻子七斗　下野國〈○中略〉麻子三斗
交易雜物
尾張國〈○中略〉苧一百五十斤　參河國〈○中略〉苧九十斤　遠江國〈○中略〉苧一百卅斤　信濃國〈○中略〉熟麻十斤　上野國〈○中略〉苧八十斤

〔延喜式主計二十四〕凡中男一人輸作物〈○中略〉東木綿苧各一斤、〈○中略〉茜、熟麻、枲各二斤、〈○中略〉麻子、荏、椶椒油各五合、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥
丹波國卅三種、〈○中略〉麻子三斗五升、備後國廿八種、〈○中略〉麻子一斗四合、紀伊國卅五種、〈○中略〉麻子八升、讃岐國卅七種、〈○中略〉麻子二斗五升、伊豫國卅二種、〈○中略〉麻子三斗、

〔延喜式内膳三十九〕造雜味鹽魚廿石六斗、〈和泉國網曳厨所進、〉料商布十六段、信濃麻百斤、

〔出雲風土記大原郡〕高麻山、郡家正北一十里二百歩、高一百丈、周五里、〈○中略〉古老傳云、神須佐能袁命御子、青幡佐草䏶命、是山上麻蒔初、故云高麻山、卽此山峯坐其御魂也、

〔古語拾遺〕建都橿原、經營帝宅、〈○中略〉令天富命率忌部諸氏、作種種神寶鏡玉矛盾木綿麻等、〈○中略〉天日鷲命之孫、造木綿及麻并織布、〈古語阿良多倍〉仍令天富命率日鷲命之孫、求肥饒地、遣阿波國、殖穀麻種、其裔今在彼國、當大嘗之年、貢木綿麻布及種々物、所以郡名爲麻殖之縁也、天富命更求沃壤、分阿波忌部率往東土、播殖麻穀、好麻所生、故謂之總國、穀木所生、故謂之結城郡、〈古語麻謂之總也、今爲上總下總二國是也、〉阿波忌部

〔重修本草綱目啓蒙十七麻稻麥〕大麻　コ。ヲ。リ。グ。サ。古歌　ヌ。キ。グ。サ。同上　ア。サ。和名鈔　ヲ。同上　ヒ。チ。リ。土州　一名山絲苗救荒本草　綿麻本經逢原　絡蘇同上　好麻群芳譜　吐乙麻村家方　春種ヲ下ス、方莖直上七八尺葉對生ス、形細長葉八九個ニ並ビテ、モミヂノ葉ノ形ノ如クニシテ長大ナリ、コレニ雌雄アリ、雄ハケムシ古名ヲアサ、サクラアサト云フ、花ヲ生ジテ實ヲ結バズ、釋名ニ枲麻牡麻ト云フ、一名枲牡麻群芳譜　瑞華楚辭九歌　雌ヲメアサ、ミアサト云、花ナクシテ實ヲ結ブ、釋名ニ苴麻苧麻ト云フ、一名麻母救荒本草　大麻ノ皮ヲハギタルアトノ稭ヲ、アサギト云フ、一名アサガラ、コレヲ麻骨訓蒙字會ト云、一名積麻骨物類相感志　食物本草ニ、花名麻勃子名麻蕡ト云フ、釋名ニ花名麻蕡麻勃ト云ハ、本經ノ文ニ據ル、コレハ誤ナルコト正誤ニ辨ゼリ、

〔農業全書六三草〕麻

あさをうゆる法、先たねをゑらぶ事、白きが雄麻なり、白しといへども、嘗て心みるに、かるくうるほひなきは粃なり、白く堅きをよしとす、これはいかにも良々田を好む物なり、中分以下の畠には作るべからず、いかほども深く耕しこなす事、力の及ぶほど塊少もなき樣に、委しくこしらへたるにしかず、十耕蘿蔔九耕麻とて、九度も耕しこなす物と云なり、又堅横七遍づゝ犂かきすれば、麻に葉なく本末なりあひて、節少もなく皮うすくながく出來ると云へり、凡種子を一段に七八升ほど蒔を中分とするなり、厚過れば細くして長からず、薄ければ皮あらく枝さきて苧あしし、蒔時なげうつべからず、節高しと云習はせり、地のぬれたるに蒔たるは、生じて瘠る物なり、地の白くかはきたる時蒔くべし、○下略

〔令義解三賦役〕凡○中略其調副物○中略註正丁一人○中略麻二斤、熟麻十兩十六銖、○中略麻子油七勺、

〔延喜式五齋宮〕造備雜物○中略　熟麻大一斤八兩、苧小二斤二分、

凡諸國送納調庸、幷請受京庫雜物、積貯寮庫、支配雜用、○中略麻四百斤、熟麻一百斤、已上下總

〔本草和名十九米穀〕麻蕡（楊玄操音墳）一名麻勃（此麻花上勃々者）牡麻也（蘇敬注曰、蕡即麻實也、陶景為花大誤也）人精（出太清經）華名青葙（出神仙服餌方）和名阿佐乃三、

〔倭名類聚抄十四織機具〕麻苧　說文云、麻（音磨、和名乎、一云阿佐、）枲屬也、

〔箋注倭名類聚抄六織機具〕原書云、麻與䔍同、人所治在屋下、與此異、按玉篇云、麻枲屬也、源君疑誤引之、

〔類聚名義抄七广〕麻（音磨、ヲ、一云アサ、）

〔伊呂波字類抄安植物附殖物具〕麻（アサ、麻紵枲屬也、）　苴（アサヌキ、麻子、）

〔倭訓栞前編二〕あさ（中略）麻をいふは、淺き義也、麻の狭衣などいへり、或は青搨の義、白栲にむかへたる言也、栲を白和幣とし、麻を青和幣とする也、麻をみそぎの具とし、又麻の葉を流すをもて歌にもよめり、（中略）あさがらは古語拾遺に麻柄と見えたり、麻につるゝよもぎといへる諺は、荀子に蓬生麻中、不扶而直と見えたり、

〔八雲御抄三上〕麻　あさて　あさを　さくらあさ（あさの名也）

〔宜禁本草乾五穀〕大麻子　甘平、取汁為麻粥、及為麻子粥、多食損血滑精、補中益氣、主中風汗出、利小便、逐水、破積血、復血脈、治孀婦產後餘疾、長髪可為沐藥、令人作布、麻蕡合人參服、令逆知未來事、麻蕡花上勃々者、七月七日採耳、去殼法、麻子帛包、沸湯浸、湯冷出之、垂井中一夜、勿著水、次日日中暴乾、就新瓦上挼去殼、簸揚取仁、粒々皆完、大便不通、研和為粥食、

〔大和本草六民用草〕大麻（アサ）　一名火麻、雌ハ子アリ、麻仁ナリ、雄者名枲麻、又牡麻ト云、實ナシ、雌雄共ニ皮ヲトリテ布トス、宿根ヨリ不生、毎春實ヲマク、上世ニハ麻仁ヲ五穀トス、月令ニ食麻トアルハ麻仁ナリ、今ハ食セズ、胡麻ハ上代ノ穀ニハアラズ、麻仁ノ功能多シ、本草ニ見エタリ、麻葉ヨク瘧ヲ治ス、用ヤウ本草ニ見エタリ、

コト大麻子ノ如シ、子熟シテ苗根共ニ枯ル、

〔草木育種後編(下藥品)〕葎草(本草)の一種　和蘭にてホツペといふ、葎草一種にて葉に叉なくして、楮の葉に似たり、草に雌雄あり、莖葉ともに毛刺あり、花をとりて藥用とすべし、

〔和爾雅(七草木)〕木蓮(薜荔、木饅頭、鬼饅頭並同)、

〔倭訓栞(中編二伊)〕いたび　木蓮子をいふ、日本紀、倭名鈔同じ、即木饅頭也、花なくて實を結べり、今俗蔓生の木蓮を訓ずるはあらず、延喜式に諸國雜贄腹赤魚木蓮子等と見えたり、

〔大和本草(八蔓草)〕薜荔　イタビ也、木饅頭ト云、其葉木犀ニ似テ其實無花果ニ似タリ、其蔓コハシ、本草ニ木蓮ト云、其實八月以後中實ス、八月以前ハ實ノ中虚ナリ、熟シテ味甘シ、小兒食ス、マサキノカツラト訓ズルハ非也、舊事記日本紀ニ木蓮子ヲイタミト訓ズ、數年ヲヘテ後葉厚大ニシテ實ナル、小ナルハ大ナルト別物ノ如シ、壁ニヒロク延蔓ハビコル、

〔重修本草綱目啓蒙(十五蔓草)〕木蓮　イタミ(日本紀)　イタビ　イタビカヅラ　イヌタブ　キマンヂウ　チヽデヨ(江州)

一名木蓮蓬(本草彙言)　石蓮蓬(物理小識)　羊兒藤(保赤全書)　桑上羊兒藤(丹臺玉案)　爬城草(南寧府志)　無花果(本草洞詮)

山野ニ生ズ、葉木樨ニ似テ厚硬鋸齒ナシ、深綠色互生ス、冬ヲ經テ凋マズ、其藤纏繞セズ、物ニ倚テ蔓延ス、地錦ノ蔓ノ如ク木石ニツキテ鬚根ヲ生ズ、蔓ノ末ハ枝ヲ分テ下垂ス、花無シテ葉間ニ實ヲ生ズ、形天仙果ノ如シ、秋ニ至リ熟シテ黑ク柔ニシテ味甘シ、中空シテ細子殼ニツク、一種實大ニシテ一寸許ナルアリ、肥前ニテクヒイタビト云フ、又紀州ニ小葉ニシテ大實ヲ結ブ者アリ、クライタボト云フ、又一種圓葉ノ者アリ、

木蓮ニ同名アリ、此條ハ木蓮房ノ略ナリ、實ノ形ヲ以テ名ク、木芙蓉木蘭ニモ木蓮ノ名アリ、コレハ花ノ形ヲ以テ名クルナリ、

葎草

幅ハ三分許リナリ、實ハフタリシヅカニ同ジ、是及已ノ一種ナリ

〔廣益地錦抄六〕及已(ぎやうい) 宿根より春生、小草なり、三四寸に生出て、白花毛のごとくに、しべばかり咲、草花にまゆはきさうといふ、花ちりて後に葉出、一莖に四葉づゝ、莖(クキ)のかしらにあり、實は葉の間より下へさがりて付ク、又一種あり、形狀同じ事にして、高さ二尺程にのび立なり、三四寸の小草なるがあひらしく、鉢にうへてながめ有、三月に花さく、根は細辛のごとくにほそく、香氣あり、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產 及已(ふたりしづか)

〔本草和名十一草〕葎草(仁諝音律) 一名葛律蔓(出蘇敬注) 一名葛勒蔓(出稽疑) 和名毛久良、

〔倭名類聚抄二十草〕葎草 本草云、葎草(上音律、和名毛久良)

〔箋注倭名類聚抄十草〕唐本注、葉似草麻而小薄、蔓生、有細刺、蜀本圖經云、蔓生、葉似大麻、花黃白、子若大麻子、

〔類聚名義抄八艸〕葎草(音律 モクラ) ムクラ

〔多識編二蔓草〕葎草、和名毛久羅、又云加那牟久羅、異名勒草、(別錄)

〔書言字考節用集六生植〕葎(カナムグラ ムグラ) 葎(本朝俗作葎非、蔓草似葛而有刺者、) 來苺草(同)(又云葛勒艸)

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕葎草 カナムグラ(轉ジテカナモグラト云フ) ナヽモダラ スイジンノテ(佐州) ムマコカシ(播州) 一名澀蘿蔓(救荒本草) 攬藤 葛勒子秧(共同上) 擄擄藤(野菜博錄) 割人藤(本經逢原) 葛葎草(附方) 勒蔓(同上) 勒麻藤草(訓蒙字會) 勾勒蔓(壘職小錄) 汗三(鄕藥本草) 増 一名黑草(證類本草)

舊子地ニアリテ春芽ヲ發ス、初二葉ヲ發ス、細長ニシテ大麻苗ノ如シ、漸ク長ジテ藤蔓繁延ス、葉兩兩相對ス、形蓖麻(トウゴマ)葉ニ似テ小ク三四寸許、淺綠色、藤ト共ニ毛刺アリ、八九月葉間ニ穗ヲ出ス、長サ五七寸、枝多シ、小花數百聚リ生ズ、大サ一分許、五出細尖淺黃綠色、外ハ淡紫ヲ帶テ蕚ナシ、中ニ黃白色ノ五蘂アリ、是雄ナリ、其雌ナル者ハ花ヲ開カズ、葉間ニ小穗ヲ出ス、長サ一二寸、實ヲ結ブ

及巳

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕孩兒菊（ちゃらん）○中略

按蘭草古未有、本朝延寶年中大寃國姓爺始渡之、其形狀如上說、而葉似茗葉而厚、故俗謂之茶蘭、四五月開花如蓼穗、而不悉開、初青後黃色、一枝甚香、盛止一日、而餘枝亦追開、故花盛至數日、常好水畏寒、如冬月被紙袋、以令不中風寒、或時破油盞漫水、其水可灌根

〔本草和名 十草〕及巳 仁諝音以 和名都岐禰久佐、一名於宇、

〔倭名類聚抄 二十草〕及巳 本草云、及巳、仁諝〔諸譯誤〕音義巳音以、和名豆木禰久佐、

〔藥鹽草 八草〕和名少々 芨巳 いきくさ

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕吉野靜 俗稱本名未詳 靜者源義經之寵妾、有於吉野山歌舞之事、好事者比其美、以名之、

按吉野靜、高尺許、葉似澤桔梗而大、三四月開花白色、而紫彩點及赤黃色小點甚巧艷、

二人靜 俗稱本名未詳 新歌云、靜女之幽靈爲二人同遊舞、此花二朵相双艷美、以名之、

按二人靜、高尺許、葉似櫻桃（ユスラウメ）葉而厚、三月葉間開白花、形如蓼穗而二小朵成枝、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕及巳 音以 フタリシヅカ サヲトメバナ 石州

新校正ニカタバミト訓ズルハ誤ナリ、幽谷陰地ニ多クアリ、春宿根ヨリ叢生ス、莖高サ五七寸、或ハ一尺許リ、三四節アリ、ソノ葉莖梢ニ二重ニ兩對シ生ズ、葉ノ形チ紫繡毬（アヂサイ）葉ニ似テ鋸齒細ナリ、四葉ノ上ニ細莖二條ヲ出ス、長サ一寸餘、白ク小ク圓ナルモノヲ綴ル、是レ其花ナリ、漸ク綠色ニ變ジ漸ク大ニ一分許トナル、是ソノ實ナリ、而シテ漸ク葉間ニ下垂ス、凡ソ二穗ヲ常トス、故ニフタリシヅカト呼ブ、然ドモ瘠タルモノハ一穗、肥タルモノハ數穗及ビ十餘穗ニ至ルモノアリ、又一種ヒトリシヅカ、一名ヨシノシヅカト云アリ、此モ宿根ヨリ生ズ、共ニ冬月苗枯ル、高サ五寸許、肥地ノモノハ一尺ニ盈ツ、形狀ハ二人シヅカニ同ジ、葉ニ光澤アルヲ異ナリトス、此穗ハ一條ノミナリ、花ハ白絲ノ如キモノ多クツキ、穗ノ長サ一寸許リ、フタリシヅカノ如ク、花圓ナラズ、穗ノ

蒟醬

南藤葉蔞藤葉ソノ形ハ能似タレドモ、脈理ハ大ニ異ナリ、

〔多識編 二芳草〕蒟醬、末。多。多。比。今案安南在之日本無之、

〔和爾雅 七草木〕蒟醬（キンマ）蠻語也、蒟子、土蔞茇並同、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕蒟醬 キ。ン。マ。蠻名 ルベシナ 一名蔞通雅 荖葉八閩通志 相思葉廣東新語 辛蒟通雅
蒟給同上 無留藤本草蒙言 芙蒥泉州府志 蔞葉藤廣輿記 蔞藤一統志

嶺南ニテハ此葉ニ生ノ檳榔子ト蚌灰トヲ包ミテ果ニ充テ食フ、コレヲ入ルヽ器ヲ桂海虞衡志ニ檳榔合ト云、茶家者流ニテキンマデノ香合トテ弄ブモノ是ナリ、一器三室ノモノアリ、又三層ニシテ香撞ノ如キモノアリ、皆外ニ細ナル描花アリ、享保年中ニ、此葉ニテ檳榔ト蚌灰トヲ包ミ、蜜漬ニシタルモノ渡ル、ソノ葉ノ形秋海棠ノ葉ノ如シ、即今フウトウカヅラト呼モノナリ、コレハ四國九州豆州紀州海濱ノ崖ニ、蔓延シテ生ズ、葉ハ蕺菜（ドクダミ）葉ニ似テ厚ク互生シ、深綠色ナリ、切レバ胡椒ノ香有リ、故ニ世人胡椒或ハ蓽茇ナリトス、並ニ非ナリ、京師ニテハ冬月窖ニ入レザレバ枯ル、四月葉間ニ細キ穗ヲ生ズ、長サ一寸餘、細小白花ヲ開ク、子ハ纍々トシテ穗ヲナス、長サ一二寸、子ハ椒目ノ大サノ如シ、外ニ薄皮アリ、色赤シ、内ニ栗殼色ノ硬殼アリ、ソノ肉ニ仁アリ、色白シ、コレヲ嚼メバ味淡ニシテ微辛ク、香氣蓽茇ニ近シ、先年蠻人ニ見セシニ胡椒ナリト云、然レドモ形色氣味胡椒ニ異ナリ、即土蔞藤ニシテ蒟醬ノ下品ナリ、夏以後節ゴトニ根鬚ヲ生ズ、土中ニ入ルモノハ鬚多クナリ、土ニ遠ケレバ鬚一條ノミ、故ニ節ゴトニ切レバ、皆分チ栽ベシ、葉大サ二寸許リ、或ハ四五寸、長葉アリ、圓葉アリ、土蔞藤一名山蔞藤、廣東新語

茶蘭

〔增補地錦抄 六〕蘭のるひ○中略
茶蘭（ちやらん） 葉は仙蓼（せんりやう）ニ紛ばかり似て、草立も毛頭違ず、花形は蓼の穗に少似て黄色なり、盛の時分は、異香こと〳〵く室内ニ薰香する事、大蘭にこへたり、

風藤蔓

りて、うちかざしたるぞ、いとおかしうおぼへたる、

〔多識編二蔓草〕南藤、或曰久知久佐誤也、異名丁公寄、(別錄)

〔和爾雅七草木〕南藤(フウトウ)丁公藤、風藤並同、

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕南藤(ふうとうかづら)　風藤　石南藤　丁父　丁公藤　丁公寄　俗云風藤蔓(○中略)
按南藤能治諸風、故有風藤之名乎、今痿痺癱瘓人用爲洗藥、(痘後手足腫痛者、用風藤煎汁、頻洗有効、)

〔物類品隲三草〕南藤　一名風藤、一名石南藤、和名フウドウカヅラ、紀伊湯淺橋本仙室曰、先輩南藤ヲツルウメモドキトスルハ非ナリ、形狀本草ニ合ズ、フウドウカヅラ眞ノ南藤ナリ、蘇頌曰、南藤生南山山谷、今泉州榮州有之、生依南木、如馬鞭有節、紫褐色、葉如杏葉而尖、采無時、又曰、天台石南藤四時不凋ト、此說ツルウメモドキノ形狀ニアラズ、フウドウカヅラニ近シト、此說是ナリ、此物紀伊伊豆ニ甚多シ、土人皆フウドウカヅラト呼ブ、恐(○平賀源内)謂ラク、本邦往昔藥物ヲ以テ國國ヨリ貢上ス、當時能此物ノ風藤タルコトヲ知テ、其名稱到今民間ニ傳ルカ、或ハ又暗ニ風藤ノ名和漢同キカ、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕南藤　詳ナラズ　一名鬼目(保壽元世)
ツルムメモドキ、又フウトウカヅラニ充ル說ハ皆穩ナラズ、(○中略)
增、南藤一名風藤、和俗フウトウカヅラト呼ブ、土蔞藤ト同名ナリ、(○中略)外科正宗藥品異名考ニ云、此草熊野山中ノ者ハ長サ數十丈、山巖喬木上ニ延蔓シ、莖ノ巨サ一虎口餘、二三寸每ニ節アリテ馬鞭ノ如シ、一莖一葉形杏葉ニ似テ厚シ、又細葉モアリ、皆切テ辛辣ノ氣アリ、其莖ノ樹石ニツク處小瘤アリ、中ニ小孔アリ、夏月葉間ニ小黃花穗ヲナシ、後小赤實ヲ結ブ、味微シ辛シ、四時萎マズ、コノ形狀本綱ノ說ト的當ス、小野蘭山翁ノ說ニ、此草ヲ土蔞藤ニ充テ、南藤ハ和產詳ナラズト云ヘリ、コレ南藤ハ暖地ノ產ニシテ、熊野山中ニ生ル如キ、大蔓ノモノヲ目擊セザル故ニ誤ルナリ、

なせしと見えたり、即今ドクダミといふものゝ如きは、其臭氣食ふべしとも思はれず、人の嗜好の如きも、古今の異またかくの如し、其ドクダミといふも、蕺をダミたる義に似たり、

〔大和本草雜草九〕蕺菜　ドクダミト云、又十藥トモ云甚臭アシヽ、家園ニウフレバ繁茂シテ後ハ除キガタシ、駿州甲州ノ山中ノ村民、ドクダミノ根ヲホリ、飯ノ上ニオキムシテ食ス、味甘シト云、本草ニモ柔滑菜類ニノセタリ、サレドモ本邦ノ人アマネク食ハズ、菜トスベカラズ、且有小毒ト云、和流ノ馬醫用之馬ニ飼フ、十種ノ藥ノ能アリトテ、十藥ト號スト云、

〔和漢三才圖會柔滑菜百二〕蕺菜　菹菜　魚腥草（和名之布木、俗云地宇也久、又云止久陀三、）

本綱、蕺菜生濕地山谷陰處、亦能蔓生、葉似蕎麥而肥、莖紫赤色、又云、似荇葉、其狀三角一邊紅、一邊青、有腥氣、可以養猪、山南人好生食之、多食令人氣喘、小兒食之覺脚痛、恐由閉氣故也、素有脚氣人食之一世不愈、

葉（辛微温有小毒）　治疔瘡、擣爛之傅、乃痛一二時、不可去草、痛後一二日即愈、又治痔瘡、煎湯熏洗、仍以草揾痔即愈、

一種有五。蕺草。（則五毒草）花葉相似、但根似狗脊、（見山草部）

按蕺菜葉如荇水葵、初生帶紫色、或面青背紫、老則皆青色、夏開四葉小白花、有節不直不蔓、高五七寸、切葉鮮者觸手即魚腥氣、其臭也難言、又能傅便毒良、

〔廣益地錦抄四〕蕺菜　田野木の下の日かげなる所をこのみて多く生ズ、花極て白く、四花にして四方へ出、中に花しべ長ク立て唐人笠をみるごとく成かたち、葉にあしき香ありて、手につみ切れば臭久しくやむ事なく、俗に十藥といふ、馬のくすりに用ひて、十種のあるゆへ、十藥といふともいへり、いかゞしらず、

〔蜻蛉日記中〕かくのみこゝろつくせば、ものなどもくはれず、しりへのかたなるいけにし。ぶ。き。といふ物おひたるといへば、とりてもてこといへば、もてきたりける、けにあへしらひて、ゆをしき

蕺

ケ鎌倉　ハゲセウグサ　ハゲセウ泉州　ハンゲセウ勢州　ハンゲグサ備前　一名三葉白草〔西陽雑俎〕翻白草〔痘疹要訣〕

水草ナリ、湖澤及大川ノ側ニ多シ、陸地ニ移シ栽ルモヨク繁茂ス、春宿根ヨリ生ズ、其莖圓ニシテ三四尺、葉互生ス、形楕ニシテ長ク、薯蕷(ヤマノイモ)葉ニ似テ尖ラズ、厚シテ深緑色縦道多シ、切レバ其臭馬兜鈴(ムマノスヾ)ノ如シ、五月半夏生ノ時、梢上ノ三葉ノミ、面白色ニ變ズ、背ハ然ラズ、故ニハゲセウグサ等ノ諸名アリ、其白葉ノ間ニ穗ヲ生ズ、長サ三寸許リ、小花密ニツヾリ、白色綠蕚ナリ、花後細子ヲ生ズ、熟シテ苗枯ル、根ハ枯レズ、大サ筋ノ如シ、白色ニシテ甚ダ繁延ス、邵武府志曰、土人每歳候二其初一葉白一插レ秧、至二三葉俱白一則爲二後時一矣、一種琉球種ノ三白草アリ、苗高サ二尺許、莖ニ七八稜アリテ正圓ナラズ、其色紫赤色、葉莖ニ互生ス、ソノ形牛尾蒿(シホア)ノ葉ニ似テ、厚ク大ニシテ縦脈五道アリ、面綠色ニシテ、背淡綠ナリ、半夏生ノ候ニ至ルト雖ドモ、梢葉白色ニ變ゼズ、稀ニ一葉或ハ半片、淡白色ニ變ズルコトアリ、夏ニ至レバ脚葉悉ク脱シテ、竹ノ狀ノ如シ、夏ノ末葉ニ對シテ穗ヲ生ズ、車前(オホバコ)ノ穗ニ似テ長サ僅ニ二三寸、花實ノ形大抵尋常ノ者ニ同ジ、根ハ白色ニシテ節多ク横行シ、春ニ至テソノ節ヨリ新芽ヲ生ズ、

〔武江産物志〕〔藥草〕尾久ノ原　三白草(はんげしやう)

〔本草和名〕〔十八菜〕蕺〔楊玄操音、蕺立反〕一名葅菜〔出蘇敬注〕一名出茄〔音加、出兼名苑〕、和名之布岐、

〔倭名類聚抄〕〔十七水菜〕蕺　唐韻云、蕺〔祖立反、養生秘要云、之布木〕、菜名也、

〔物類稱呼〕〔三生植〕蕺菜　さうやくふぶき　江戸にてどくだみといふ、武藏にてぢごくそばといふ、上野にてどく草といふ、駿河沼津にてさびとばなと云、越前にてどくなべといふ、

〔東雅〕〔十三穀蔬〕蕺シブキ〔略〕○中　蕺は味辛しと見えたれば、シブキとは其味をもていひしに似たり、或人説に、蕺は今俗にドクダミといふ物なりといふ、唐本草に蕺菜は江南江左人好生食之、關中謂之蕺菜と見え、又北戸録に、其葉腥氣、故俗以爲魚腥草など見えて、我國の如きも、古の時には菜蔬と

〔本草和名 十一草〕三白草 蘇敬注云、葉上有三黒點、古人秘之、隱白爲黒耳、 和名加多之呂久佐

〔倭名類聚抄 二十草〕三白草 蘇敬本草注云、三白草、和名加多之呂久佐 葉上有三黒點、古人秘之、隱黒爲白耳、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草下品引云、葉如水葒、亦似蕺、又似菝葜葉、上有三黒點、高尺許、根如芹根、黄白色而麁大、無古人以下九字、按證類本草又引陳藏器本草云、按此草初生無白、入夏葉端半白如粉、農人候之蒔田、三葉白草便秀、故謂之三白草、若云三黒點古人秘之、據此即爲未識妄爲之注、爾、其葉如薯蕷、亦不似水葒、其若云三黒點以下、陳氏引蘇注駁之也、若蘇注缺此所引九字、則陳說中古人秘之文、不可知何等語也、證類本草引蘇注、無是二句、誤脱也、本草和名引亦有之、但隱黒爲白作隱白爲黒、非是、

〔大和本草 九雜草〕三白草(カタジロ) 國俗半夏生草トモ云、五月ノ半夏生ノ時、此草ノ葉面白クナル、背ハ青シ、故カタジロト云、莖ノ梢三葉白ケレバ苗秀ヅ、故ニ三白ト云、梢三葉ノ外ハ白クナラズ、農人是ヲ以テ蒔田時ノタメシトス、水草也、陸ニモ生ズ、高二三尺、葉ハ柹ノ葉ノ大ノ如シ、毎葉タテスヂ五アリ、五月ニ白花開ク穗ノ如ク長シ、ヨキ香アリ、蘇恭ガ說、葉似蕺又似菝葜ト云ハ可也、其餘ハ與三白草不合、

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕三白草 和名加太之呂久佐、俗云半夏草、

本綱、三白草生田澤畔、八月生苗、高二三尺、莖如蓼、葉如商陸及青葙、四月其顚三葉、面上三次變作白色、餘葉仍青不變、俗云一葉白食小麥、二葉白食梅杏、三葉白食黍子、五月開花、成穗如蓼花狀、而色白微香、結細實、根長白虛軟有節鬚、狀如菖蒲根、○中略

按、本草蘇恭注云、三白草葉上有三黒點、非白也、仍和名抄亦用其說、其非也、半夏生時分變白、故曰半夏草、

〔重修本草綱目啓蒙 十二濕草〕三白草 カタシログサ和名鈔 カタジロ大和本草 ミツジロ ヲシロヒカ

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕赤箭天麻　カミノヤガラ和名鈔　ヲトヲトシ同上　ニツカウヤガラ　タウガシラ　オニノヤガラ　ボウズグサ土州　ヌスビトノアシ越前　スチナ奧州　ノヅチ野州　キヤウヲウサウ豫州　赤箭一名石箭類書纂要　赤箭脂事物異名　天麻一名鄴芝輟耕錄　都

羅本郷藥本草

赤箭ハ苗ノ名、天麻ハ根ノ名、諸州平原及水邊竹林中ニ生ズ、四五月ニ獨莖ヲ發ス、ソノ長ズルコト速ニシテ直上四五尺ニ至リ、圓ニシテ淡黃赤色ナリ、故ニ赤箭ト名ク、莖ニ節アリ、節ゴトニ小薄皮アリ、色黑シ、初出ノ時ハコノ小皮相包テ筍ノ狀ノ如シ、大抵莖二尺許ノ時、梢間ニ蕾ヲ綴リ穗ヲナスコト五七寸、草蓯蓉(ハマウツボ)ノ形ノ如シ、花旋開キ莖旋長ス、花ノ形玄參(ゴマノハグサ)花ノ如ニシテ大ナリ、黃赤色、中ニ黃蕊アリ、花下ニ莢ヲ結ブ、蘭筍ノ形ノ如ニシテ小ク短シ、內ニ細黃粉アリ、コノ時穗長サ一尺五寸許、ソノ根ハ大塊ニシテ橫生ス、長サ六七寸徑一寸餘ニシテ、本ハ圓カニ末ハ扁クシテ尖ラズ鬚ナク、甚人足ニ似タリ、タマ〳〵直根ナルモノアリ、俱ニ淺褐色、又旁ニ小子多ク生ズルモアリ、秋ニ至レバ苗根俱ニ腐朽シ、移シ栽ベキ者ニアラズ、又下種スベキモノニモ非ズシテ、翌年復忽然トシテ生ズ、故ニ赤箭芝獨搖芝ト名ケテ芝類ニ入ル、集解、還筒子ノ說甚誤レリ、根ヲ暴乾シテソノ色羊角ニ同ジ、故ニ羊角天麻ト呼ト、時珍ノ說是ナリ、本草原始ニハ、羊角天麻不ㇾ堪用ト云、是ハ形瘠テ羊角ニ似タル下等ノ名トス、非ナリ、藥舖ニ和漢俱ニアリ、和ヲ上トス、和州宇陀、紀州、關東ヨリ出、藥用ニハ透明ナルヲ良トス、故ニ方書ニ明天麻ノ名アリ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、○中略鬼箭三升、　丹波國卅三種、○中略鬼箭一斗三升三合、　出雲國五十三種、○中略赤箭一合、

〔出雲風土記飯石郡〕凡諸山野所在草木、○中略赤箭、

此もの一莖直上して枝葉なく、其狀頗る箭幹のごとくなるによりて、加美乃也賀良と名づく、加美は卽神字の意にして、其さま常に異なるによりてなり、又加美乃也賀良、鬼乃也賀良といへるも、其義全くこれに同じ、其鬼乃也賀良は、新抄本草に太清經を引て、赤箭一名鬼箭とあるによれば、卽和漢通名なり、又日光也賀良は、此もの下野の日光に產するもの多きによりて名付しなり、盜乃阿之　按に赤箭の人足に似たるよしは、既に弘景注にもみえたり、本草啓蒙にも其說を載たれど、今足の上に盜字を冠して、これを稱するものは、凡盜の人家をうかがふには、物音もせず、ひそかにぬき足して行來するものなれば、此物の今年植し所には、來年は生せずして、ひそかに外の所へ行て生ずること、全く盜のぬきあしして行來するに、その趣やゝ似たるによりて、俗にこれを盜のあしとはいへる物なるべし、○下略

〔和漢三才圖會九十二本山草〕天麻(てんま)　赤箭○中略

按赤箭和名乎止乎止之、一云加美乃夜加耳、乃天麻也、出武州所澤者良、藝州廣島次之、倭天麻者一莖一花而無枝葉爲異、

〔物類品隲三草〕赤箭天麻　和名ヌスビトノアシ、又タウカシラト云、西國ニハ希ナリ、關東ニハ多シ、莖ノ長三四尺、黃赤色ニシテ葉ナシ、小薄皮アリテ初メ生ズル時莖ヲ包ミ、長ジテ後莖ニ付テヒレノゴトシ、蘇頌所謂貼莖微有尖小葉ト云モノ是ナリ、莖ノ狀矢ノゴトクニシテ赤シ、故ニ莖ヲ赤箭ト云、莖上數花ヲ開ク、大サ二三分許、莖ト同色ナリ、根魁アリテ橫ニ出ヅ、形小兒ノ臂ノゴトク、或ハ小子傍生スルコト芋子ノゴトキモノアリ、其數定ラズ、又小子ナキモノアリ、此物化生ニシテ秋ニ至レバ盡ク朽ルナリ、故ニ他處ニ植テ再ビ生ゼズ、又實ヲ植テ生ゼズ、本草ニ其實却透虛入莖中潛生土內ノ說等信ズベカラズ、東都產上品、一種黃白色ノモノアリ、形狀ハ異ナルコトナシ、

赤箭

モ生ズ、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕鷺草　鷺草佐岐草　連鷺草豆禮佐岐　共俗稱也、本名未詳、

按鷺草奥州處處有之、春生苗、葉如麥嫩苗高尺許、六月抽莖開花、正白色如雪、形似鷺鳥故名、

○連鷺草豆禮佐岐　與鷺草一類異種、性惡濕喜陰處赤土、原非濕草、高五七寸、葉略大似万年青嫩葉而淺

青色、夏開花白色帶微青、其形似鷺十有餘群飛故名、

〔本草和名六草〕赤箭蘇敬注云、遠看如箭、一名離母、一名鬼督郵、仁諝音尤　一名神草、一名獨搖、一名當苦、一名味子、或作口子

一名鬼箭、已上五名出太清經和名乎止乎止之、一名加美乃也、

〔倭名類聚抄二十草〕赤箭　蘇敬本草注云、赤箭、和名乎止乎止之、一云加美乃夜加比　遠看似箭有羽故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注云、按此草亦是芝類、云莖赤如箭幹、葉生其端、根如人足、又云、如芋、有十二

子爲衞、有風不動、無風自搖、如此亦非俗所見、蘇注又云、根皮肉汁與天門冬同、惟無心脈、去根五六

寸、有十餘子衞似芋、其實似苦楝子、核作五六稜、中肉如麪、日暴則枯萎也、藥性論云、赤箭脂一名天

麻、衍義云、赤箭天麻苗也、開寶本草云、天麻葉如芍藥而小、當中抽一莖、直上如箭幹、莖端結實、狀若

續隨子、至葉枯時、子黃熟、其根連一二十枚、猶如天門冬之類、形如黃瓜、亦如蘆菔、大小不定、圖經云、

赤箭、四月開花、此草爲物、下根如芋魁、有游子十二枚、周環之、去大魁數尺、雖相須而實不連、但以氣

相屬耳、如菟絲之草下有伏菟之根、無此則絲不得上、亦不相屬也、

〔古今要覽稿草木〕をとゝし　天麻

乎止乎止之　名義いまだ詳ならず、按に古語に多豆多豆之といふ詞を、後世は多止多止之とい

へど、此乎止乎止之とは其義似よるべくもあらず、又赤箭は前年に植しもの腐敗して、今年に至

れば、其產地をかへて、思もよらぬ所に生ずるものなれば、前年を乎止止之といひ、前日を乎都比

などいへるによりて、此名義をとかまくおもへども、いまだ其たしかなる考を得ず、　加美乃也

まひ、この艸和名いわとくさ、いわくすりなどいふて、言のはの御すさみのたねともならんと、めでましければ、このむの友どちよろこびあへて、數品のあつめを望み、遠近に同好の友の廣し、（草云此文拙キコトノ字チ見テシルベシ）このたび四季の壽てふ摺物を繪がき、春秋のうつりかはるかたち、冬は下葉よりうつろひて落葉となり、根に來る年の新芽をもよふし、身につもる老の數おもわすれ、春まちどふに思ひつゝ、かく四時のたのしみつきせぬも、遠近に沙汰せんと、同好つどひ、すりものひらきする事しかり、

草の名によりてや人の好らんいわくすりとぞ弄ける

有馬草

〔和漢三才圖會　九十四末濕草〕有馬草（攝州有馬多有之故名）

按有馬草高尺許、葉似初生棕櫚葉而小、二三月抽莖開黃花、形略似蘭花而不香、

〔剪花翁傳　三五月開花〕有馬艸　花黃色、葉は縮りて形ち山茱萸の葉に似たり、開花五月中旬、河州生駒山に產す、里にては育ちがたし、名にし負ふ池田の栽樹家とても、植育ることを得ず、

綟摺草

〔大和本草　九雜草〕モジズリ　莖長尺ニミタズ、花紅白ナリ、花連リテ小ナリ、一莖ニ十餘連リ開ク、紫蘇ノ如シ、四五月ニ開ク、其花戻レリ、葉ハ百合ノ如ニシテ狹シ、好事ノ人園ニウヘテ玩賞ス、

〔和漢三才圖會　九十四末濕草〕綟摺草　俗稱（本名未詳）（古者奧州信夫郡出絹、名綟摺、其文如亂髮而美、以比之名乎、）

按綟摺草高五六寸、葉如初生稻苗而細軟、三月開花如穗而色淺赤、

〔倭訓栞　中編二十六毛〕もちずり、〇中略　今俗一種の草をいふは、その花の綟の如くなれば、爾雅の注に綬蘭と見えたり、或は虹花とも、ねぢ花ともいふ、水巴戟も是なりといへり、筑前にもんこはなといふ、

鷺草

〔大和本草　八水草〕鷺草　葉ハ澤瀉ニ似テ小ナリ、背ニ角アリ、又モヂズリノ葉ニ似タリ、七月白花ヲ開ク、其形鷺ノ飛ニヨク似テ一足垂タリ可愛、慈姑ノ如ク小キ圓根アリ、或曰濕草也、非水草、山ニ

アリ、形小クシテ穗ヲナシテ生ズ、其根樹皮ニ生ジ、石上ニナシ、共ニ花後實ヲ结ブ、蘭(ランノ)葉ニ似テ小ナリ、九州地方ニ生ズル者、莖長ク、葉花モ又大ナリ、

集解、麥斛ハムギラント呼者ナリ、一名イボラン、土州マメラン、勢州朽木ニ生ズ、一根一葉根ハ麥粒ノ如シ、淡綠色、葉ハ石斛ヨリ短小ニシテ光リアリ、六月花ヲ開ク、白色形最小シ、雀髀斛ハ花戸ニテバクコクラント呼ブ、一名オサラン、紀州熊野山中ニ生ズ、根長サ七八分、濶サ三分許、並ビ連ルコト十餘ニシテ筬ノ形ノ如シ、當年ノ新根上ノミニ二葉ヲ生ズ、形石斛ヨリ大ナリ、六月花ヲ開ク、形色石斛ニ同シテ小ナリ、

增、花戸ニタウセキコクト呼ブ者アリ、莖短ク葉圓ニシテ厚ク莖モ太シ、花尋常ノモノヨリ大ニシテ白色ナリ、唐種ト云ヘドモ、出雲隱岐等ニ多ク產スト云、一種花戸ニ銀邊ノモノアリ、莖葉共ニ痩小ナリ、ヘリトリノセキコクト云フ、其他四季ザキ、黃花セキコク、キクザセキコク、マルバセキコク等アリ、品類甚多シ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊賀國卅三種、〇中略木斛夜干各十斤、　伊勢國五十種、〇中略木斛卅斤、　伊豆國十八種、〇中略木斛三斤、石斛十一斤、　美濃國六十二種、〇中略石斛七十斤、〇下略

〔出雲風土記 意宇郡〕凡諸山野所在草木、〇中略石斛、

〔一話一言 四十一〕石斛

浪華の近藤正齋、重藏名守重、御弓矢鎗奉行、己卯臘月十五日發の書簡に、此比傳承候へば、京攝ともに石斛至て流行、一根七八金に至り候由、摺物入手則呈上候、凡文如左

百川子海〇中略

こゝに石斛と名づくる小艸あり、閑雅の逸物にして、著地なきも、寒暖土地の嫌ひもなく、作り樂しむに、いとやすふして、愛するの人多し、近き比やんごとなき御たちにも、數品の石斛を集めた

た雲南通志に、五色石斛出禄勸普渡河石壁紺紅者佳といへるものは、ともに國産いまだ詳ならず、

釋名

すくなひこのくすね（延喜式、本草和名、和名鈔）、按に少名彥命は皇朝醫藥の祖神なり、くすねは卽くすりの義、蓋し太古の時、少名彥命此藥を以て衆病を療せしより、かゝる名は出來しものなるべし、凡人の名を以て藥名とせしものは、我のみならず、徐長卿劉寄奴の類、西土にもいと多し、いはくすり（同上）、按に此草岩上に叢生す、故に名づく、みたから（大同類聚方）按にみたからは卽御寶の義、上古の人此藥を尊ぶ事、猶珍寶の如くなりしより、名付しなるべし、いはとくさ（千金方藥注、本草啓蒙、按に此もの石上に生じ、狀木賊の如し、故に名く、）石ちくらん（本草啓蒙、按に薩摩方言、卽竹蘭の意なり、）せんこく（同上、紀伊方言、按にせんこくは、卽石斛の訛傳なり、）石斛（神農本經、按に石上に生ずる義、時珍云、石斛名義未詳、）林蘭（同上）杜蘭（證類本草引名醫別錄）按に蘭はその花葉頗る建蘭に似たるによりて名づく、按に林杜の字、疑らくは原一は正字一は誤字なるを、後に誤りて一名とはせしものなるべし、凡本草中この類おほく有、金釵石斛（本草衍義、荊州記）按に宗奭云、金釵石斛、蓋後人取象而言之、時珍云、其莖如金釵之股、故名、今蜀人栽之呼金釵花、荊州記云、來陽龍石山多石斛、精好如金釵是矣、千年潤（本草綱目、典籍便覽、按に時珍曰、經年不死、俗稱爲千年潤、）長生草（物理小識、按に卽千年潤の意なり、）

【重修本草綱目啓蒙十六石草】石斛　スクナヒコノクスネ（和名鈔）　イハグスリ（同上）　スクナヒコグスリ（大同類聚方）　ミタカラ（同上）　イハマメ　イハドクサ　センコク（紀州）　チクラン（薩州）　一名

長生草（物理小識）　百丈鬚（藥譜）　釵斛（醫級）　石䉶草（康熙字典）

今ハ和漢通名、山中岩石上ニ生ズ、莖ハ木賊ノ如クニシテ細ク、黃綠色、寸餘一節、節ゴトニ一葉ヲ生ズ、形竹葉ニ似テ小ク、厚ク光リアリ、莖長サ三四寸多ク叢生ス、夏舊莖ノ節ノ下ニ二花並ビ生ズ、形白及（シランノ）花ニ似テ白色、又粉紅色ナル者アリ、紅色ナル者ハ稀ナリ、筑前土州ニハ淡黃花ナル者

種、出蘇敬注、麥斛、狀似大麥、出稽疑、石斛者山精也、出范注方、又石精也、出神仙服餌方、和名須。久。奈。比。古。乃。久。須。禰。、一名以。波。久。須。利。、

〔倭名類聚抄 草二十〕石蔛　本草云、石蔛、胡谷反、和名須久奈比古乃久須禰、一云以波久須利、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕按廣韻、蔛石蔛、然說文所無、蓋俗字也、本草云、生六安山谷水傍石上、陶注云、生石上、生櫟樹上者名木斛、其莖形長大而色淺、蘇注云、江左又有二種、一者似大麥、累累相連、頭生一葉、名麥斛、一種如雀髀、名雀髀斛、葉在莖端、其餘斛如竹、節間生葉也、圖經云、五月生苗、莖似竹節、節間出碎葉、七月開花、十月結實、其根細長黃色、衍義云、石斛若小草、長三四寸柔韌、折之如肉而實、今人多以木斛混行、木斛折之中虛、如禾草長尺餘、但色深黃光澤而已、李時珍曰、石斛叢生石上、其根糾結甚繁、乾則白軟、其莖葉生皆青色、乾則黃色、開紅花、節上自生根鬚、人亦折下以砂石栽之、或以物盛挂屋下、頻澆以水、經年不死、俗稱爲千年潤、石斛短而中實、木斛長而中虛、

〔類聚名義抄 八艸〕石蔛　スクナヒコノクスネ

〔多識編 二石草〕石斛、須久那伊比、〇伊比誤、恐古乃久須禰、

〔古今要覽稿 草木〕すくなひこのくすね　いはとくさ　石斛

すくなひこのくすね一名いはくすり、一名みたから、一名いはどくさ、一名ちくらんは、漢名を石斛、一名林蘭、一名杜蘭、一名千年潤、一名長生草をいふ、古者出雲國諸郡に產するよし、其國の風土記にみえ、伊豆、下野、陸奥、美濃、紀伊、備後、安藝、丹波、但馬、伯耆、周防等より、これを貢せし事、延喜式にみへたり、今は豊前、伊豫、筑前、攝津、土佐、薩摩等の山中にも、往々これあり、其狀大略木賊に似て寸寸節あり、內實して肉の如く、長さ三四寸、或は六七寸、其頭細竹葉に似て稍厚き兩三葉を生じ、白花を開く事、建蘭の如し、儻に此種は紹興本草圖する所の、温州石斛と全く同種なるべし、又一種淡紅花のものあるよし、物類品隲及び本草啓蒙に見へたれど、本草綱目に、石斛開紅花といひ、ま

ス、葉ハ互生、形圓直ニシテ細キ箸ノ如シ、長サ五六寸、深緑色、水松ノ形ニ似テ端ニ一尖アリテ爪ノ如シ、冬枯レズ、五月ニ葉下ニ花ヲ開ク、臭氣アリ、形蘭花ニ似テ至テ小ク淡黄色、蕊ハ紫黒色、花後角ヲ結ブ、蘭花ノ角ニ似テ小ナリ、

〔本草和名十草〕白芨楊玄操音及 一名甘根、一名連及草、本條一名臼根、出雜要訣一名連桑、出釋藥和名加〻美、

〔多識編二山草〕白及加加美久佐、異名連及草、本經甘根、同異

〔和爾雅七草木〕白及（シラン）白給、連及草並同、今按倭俗誤呼紫蘭者是也、

〔大和本草六藥〕白及（シラン） 園中ニウフルシラント云物アリ、葉ハエビ子ニ似タリ、四月ニ紫花ヲヒラク、其根ヲ白及トス、カラヨリモ來ル、藥肆ニアリ、花紫白二色アリ、花賞スベシ、紫白一處ニ種レバ白者枯、此類ノ別種ニケイト云物アリ、葉ヒロク短シ花尤ヨシ、是亦白紫二色アリ、葉何レモエビ子ニ似タリ、花園ニウヘテ賞スルモノナリ、又花黄色ナルアリ、葉廣、國俗白及ノシランナル事ヲシラズ、蒙筌云、山根ニ敷ケバ衄ヲ止ム、山根ハ兩眼ノ間クボキ處ナリ、疥癬ニスレバ虫ヲ殺ス、糊ニスレバ甚干、バル、裱畫ニ用ユ、冬月手足ニアカヾリキルヽニ、此根ヲアブリテ糊トシ、用テキレタル處ヲフサゲバ愈ユ、白及ヲハクリト云説アリ、非ナリ、丹溪曰、凡吐血不止、宜加白及、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕白及 シラン シケイ花戸 シユラン筑前、阿州、播州、雲州、讃州 ラン奥州 根一名雪如來輟耕錄 竹栗膠郷藥本草 花一名箬蘭本草蒙筌 朱蘭秘傳花鏡

人家ニ多ク栽テ花ヲ賞ス、葉ノ箬（チマキザヽ）葉ニ似テ縱ニ皺多シ、又藜蘆（ニツカウラン）葉ニ似リ、夏月莖ヲ出シ、三四葉互生シ、上ニ數花ヲ開ク、形蘭花ニ似テ紅紫色香氣ナシ、一種白花ナル者アリ、葉長大ナリ、花家ニ誤リテケイト呼ブ、故ニ尋常ノ者ヲシケイト名ク、又淡紅色ナル者アリ、ウスケイト名ク、市中ニ販グ者舶來ハ根瘠小ナリ、和產ハ肥大ナリ、宜ク和ヲ用ベシ、

〔本草和名六草〕石斛、一名林蘭、一名禁生、一名杜蘭、一名石蓫仁諝音勅六反 木斛、生櫟樹上者也 雀髀石斛、狀如雀髀故名之、已上二

蘭雜載

〔毛吹草三〕薩摩　白蘭

〔採藥使記下遠州〕重康曰、遠州ニテ蘭ヲ見シニ、關東ナドト違ヒ、圃ヲ作リテ種ル、甚ダ丈高ク三尺ニアマレリ、關東ニテハ寒暑風雨ニ傷ム故カ、盆植ニセザレバタモチガタシ、

光生按ズルニ、遠州ニカギラズ、駿州豫州ノ大洲紀州ノ若山ナド、何レモ圃ニ作ルト云フ、

〔江東部集下草〕秋夜守庚申同賦蘭以香爲貴以風爲韻

以香見貴一蘭葉、禮重得時似有功、拾紫手匀桀耀露、鳴珠佩染德音風、江楓葉落沈淪久、籬菊花遲採擢空、幸遇薫蕕分別日、腐儒獨愧志難通、

〔鷲峯文集九記〕盆蘭記應堀飛驒守直寛之求三浦氏爲价

花之可愛者甚蕃、然其色之秀、其香之幽、其葉之茂、其德之化、全備者蘭也、故國色天香之名、所以超羣芳、不亦宜乎、或蘂之畹、或樹之畝、或植之堂、或蒔之沙、或譬諸君子、或比之美人、或以金錢求之、或以綺石養之、皆愛之之至深也、今栽於盆、置其左右、無朝無暮常常見之、眼悅其色、鼻襲其香、心感其德、則其愛之之至切、庶幾其有所化乎、嗚呼古之愛蘭匪直也人、然則今之愛蘭、亦慕古之愛之人而可也、庚戌之夏

〇按ズルニ、蘭ノ字ハ、又蘭草(フヂバカマ)及ビ蘭蒿草(アラヽギ)ニ當ツル事アリ、宜シク各條ヲ參看スベシ、

釵子股

〔物類品隲三草〕釵子股　一名金釵股、和名バウラン、東璧曰、石斛名金釵花、此草狀似之故名ト、按ズルニ是卽バウ蘭ナリ、琉球產近世薩摩ヨリ來ル、樹石上ニ寄生ス、石斛ノ類ナリ、中山傳信錄ニ直ニ棒蘭ニ作ル、曰狀如珊瑚樹、綠色無葉、花從極間出、似蘭較小ト、此物寒ニ堪ガタシ、又土ニ植テ育ガタシ、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕釵子股　ボウラン　マツラン肥前　キミル筑前　ミルラン薩州　一名石蘭廣東新語　棒蘭中山傳信錄　増一名三十根藥性奇方

初メ琉球ヨリ來ル、今ハ四國九州其他暖地ニ皆アリ、木或石ニ寄生ス、莖長サ一尺許一窠ニ叢生

〔古今要覽稿 草木〕雄蘭 駿河蘭、建蘭○中略

凡蘭は海濱近き暖國の產をよしとす、故に和漢三才圖會に、豫州大洲、紀伊若山、及遠州者能茂盛といひ、和漢蘭稱增山河内守家臣淺倉半右衞門義方著には、伊豫のもの名產、遠江駿河の產これにつぐといへり、されど今江都にある所は、すべて駿河の產を移し植て、培養せしものなれど、其品最よし、おもふに伊豫の產は、我いまだ其種をみずといへども、今ある駿河の種は、かならずそれより劣れるものにはあらざるべし、

〔東海一漚集 記三〕神山移蘭記

筑之香椎、環海皆山、山之斷爲衍而復起、突如獨峙者多多良也、其麓頫首、下飮諸江者神山也、其間峩然冠山、翼然臨江者顯孝寺也、是山也多有香草嘉樹、所謂香草者蘭蕙其半焉、而土人無有識而採之者、歲次壬申夏、予○僧圓月自南粤而東海、纏疾息焉、明年春數爲家書所招、臨當促裝而兵革塞途、故盤桓而止、毎日觀望林園、按花騃之覓夕而歸、以効王右軍避亂蘭亭之故事也、一日天朗氣淸、時携二三朋友、臨水登山、且行且吟、忽聞幽香淸遠可愛可親、稍行數步、終到參差之中、盛有紫莖赤節而葩糙淺碧者、猗猗然藹藹然叢叢相望、不可勝計、予欣然分將數叢、滋之寺之間地甃石砌焉、課童灌焉、數日之後、夜雨滂沱徹曉而霽、早起視吾植則靑秀敷舒、花態豔冶、不減九畹百畮之景、然後士人之好事者、或謂而移之階除、若養之瓦缶、以朝夕愛親、甚者燒燭夜翫、惜其暫時與之相疏也、自昔以降、騷人文士、或以罪左遷者、或率性之遊者、或官吏茲邦者、詩若歌於此、固是取用彼宮崎松西都梅、其他旁及瑣瑣之景致、屑屑之風物、亦與焉、獨斯秀質、未見咏且稱、何哉、若也昔之未有焉、而今乍有焉、則豈可得其盛多如此哉、蓋是凡物之潛乎昔而見乎今者、由其爲人所咏且稱、各自有時也、雖然是蘭也、不可有心於潛見故毋以竢也、是故雖久蕪沒蒿艾之林、其態常自若也、所以人不知而不芳而已、故予爲記以倘俾來者知君子之遇不遇皆有時而無所竢云、

六分陰、地一分半濕の例也、されど土長流砂を微細に篩ひ整へて、盆栽にすべし、肥鰹節の煎汁を平日に澆ぐべし、移二月中旬よし、根に腐入ときは清水をもてあらひ、水氣を拭ひ去て植べし、長二尺ばかり、よく生育ときは三尺にもおよぶ、夏月は葭簀をもて日覆すべし、夕方より葭簀を取除き、夜露を受べし、雨天には雨覆ひすべし、秋彼岸より屋の內か、又は温室に入べし、初冬前より油障子をもて風を防ぐべし、風なき日は日の光を當るもよし、此時より來四月頃迄、油障子を開く事なかれ、四月より後風なき日は開てもよし、寒中地窖に入べし、

〔草木育種後編下蘭類并冒稱の類〕鹿角蘭廣東新語　壽蘭琉球　入面蘭同　延命蘭薩州ともいふ、文化丙子の年、始て琉球より來る、中山入面の地に產す、故にえゆめんらんといふ、俗ににふめんらんといふは訛なり、葉仙人指甲蘭に似て大なり、屋周のごとく高く生長す、花は葉間より枝をなし、淡黃色にして黑褐色の斑點あり、油點艸の花に似たり、へこをくだきて卷柏の根を少しまじへ、鉢の下へ炭を入て栽べし油かす胡麻の類を土へまじへてよし、十月の比より暖窖に入れてよし、〇中略

〇〇岩蘭　房州淸澄山にて採り得たり、花戶にあるは大坂より來る、根に小塊あり、麥門冬の塊に似たり、傍より鬚根六七を生じ、葉は黃精に似て長く、莖赤みあり、淡紫の花を開く、赤土のごろたに栽てよし、一種岩〇〇千鳥、一名君ヶ世三州方言といふあり、予〇阿部喜任三州巴川の邊にてとる、崖の石の上に生ず、根に塊あり、岩蘭より莖葉ともに小なり、花に紅白の二品あり、赤土のごろたよし、豆肥を澆ぎてよし、二種ともに年々栽かへてよし、雙鶴蘭さき弁なり柳らんの類、かや屋根のふるくくさりたるを細かにし、合土一合、此ごみ一合まぜ合せうゑてよし、〇中略

〇〇鈴蘭　野土にても赤土にてもよし、春月早く根を分けてよし、畦に作りてよし、和蘭にてマイブルームといふ、頭腦の神經を强壯にするに花を用ふ、又花の細末を鼻に入て嚏藥とし、頭痛を治すといふ、〇下略

萬年榾（萬年草とも）もかもめ同様にてよし

棒蘭、なご蘭、にうめん蘭、風蘭、ひも蘭、かや蘭、石薢、ゑこう蘭等の類は、土へ植ては悪し、へごを打くだき細かにして、岩ひばの根を細かにし少し交、鉢の下へ炭を多く入、右へごにて植る、又は措へご等へ植るもよし、魚肥少しはよし、懸水日々澤山懸べし、

麥蘭（豆岩とも）石豆蔦（豆ごけとも）等は、措へご石類へ付てよし、付るには鳥をとるもちを措、又は石類へ少しぬり付、其上へ蔓をもちへ付、はりがねか細きゑゆろ糸にて巻、極蔭へ置、日々水澤山懸べし、

山谷の產蘭の名目ある品并三角草植土

雙鶴蘭、（さぎ草）飛鶴蘭、柳蘭、千鳥蘭、（岩ちどり・野州の產）

右は古き茅家根の腐りたる塵す、多く付たるは別して吉、右の品干細かに振ひ一合、合土一合まぜ合せ植る、下水時々懸てよし、（○中略）

蘭の名目ある植土違ふ品并養ひ方

鶴蘭、錦けい、岩石、花蘭、松葉蘭、ゑびね蘭、くま竹蘭、櫻蘭、（つるなのばす傳は、六巻目うの部にあり、）右は合土三合、赤土一合、川砂一合交合せ植る、松葉の外下肥豆肥よし、

蘭の名目ある品植土并養方

桔梗蘭　鹿子島蘭　のし蘭　日光蘭　芙蓉蘭、　茶蘭　鈴蘭　吉祥蘭　草竹蘭　紫蘭　萑蘭

紫錦蘭（紫おもと）

右いづれも合土にてよし、紫おもとの外、下肥を用ゆ、豆肥もよし、

榮蘭　渡り橄欖　並土よし、合土なれば別して吉、下肥を用ゆ、かん蘭は秋肥悪し、本蘭（雄蘭の事也）の根同じ成品は、植土皆同様にて吉、持方も同様也、

〔剪花翁傳（三五月開花）〕蘭　花青色に黄色を含めり、開花五月より七月下旬迄あり、香氣賞すべし、方

眞蘭ナリ、今ノ蘭ハ本草別ニ不出之、蘭草ノ集解正誤ニノセタリ、琉球ヨリ來ル風蘭ト云物アリ、コレハ木ニカケヲク處ノ風蘭ニハアラズ、葉長三尺バカリ、花如蘭有香畏寒、薩摩ニアリ、琉球ノ山石ニ生ズ、葉ノ形及廣サモ香モ常ノ蘭ニ同ジ、

〔草木六部耕種法十需花〕凡蘭ヲ植ル法ハ、赤土カ黄土ヲ細ニ碎キ、軟沙トヲ等分ニ合セ、胡麻油粕干鰛ヲ粉ニシテ、其土ノ二十分之一ホド能ク粑交テ植ルヲ良トス、不淨ナル者ヲ肥養ニ用ルコト勿レ、且又蘭ヲ植替ルモ分チ植ルモ、八月九月ヲ時トス、群芳譜ニ井水ヲ灌ヲ忌ムト云ヘリ、廼ニ井水ノミナラズ、總テ寒烈ナル水ヲ用ルハ宜シカラズ、又花鏡ノ養蘭訣ニハ、春不出夏不日秋不乾冬不濕ト云フ、今世上ノ蘭ヲ作ル者ハ、大抵盆栽ニシテ此ヲ賞翫ス、然レドモ盆栽ニノミスルトキハ、其根自由ニ蔓衍スルコト能ハザルヲ以テ、莖葉モ盛ニ繁生スベカラズ、宜ク高燥ノ地ヲ精碎シ、畹ヲ作リテ此ヲ植ベシ、上ニ說タル如ク、胡麻油粕ト干鰛ヲ肥培ニシテ植付置キ、時々盛養水ヲ薄クシテ、其根ニ澆グトキハ、意外ニ能ク茂生スル者ナリ、又ハ閉藏法ヲ嚴密ニスベク、夏秋ハ乾燥セザルヤウ遮陽ヲ爲シ、且溼氣ヲ能ク除クベシ、又鉢植ニスルニハ、水ノ能ク脫ルヤウニシ、久霖ニ當ルコトヲ禁ジ、冬ハ閉藏法ヲ行フ、ニ宜シ、或ハ蘭ヲ花壇ニ植ルトキハ、消失ルト云フ說アリ誤ナリ、下總國銚子港ハ、各別ノ暖地ニモ非ズ、且土性モ亦宜キ處ニアラズ、然レドモ植田屋德平ナル者ノ庭ニ植タル建蘭ハ、甚盛ニ繁榮シ、數歩ノ間深碧ニシテ藺田ノ如ク、花開トキハ其香近隣ニ薫ズ、以テ蘭ノ花壇ニ宜キヲ證スルニ足レリ、

〔草木錦葉集緒〕深山物產蘭の名目ある品植土并養法

深山產のうち、南かくらん、相蘭、檜らん、かもめ蘭、天鵞蘭、

右は赤土一合、肥氣なき土（竹やぶの土よし）二合、川砂五勺、予（水野忠敬）が秘事の水ねりにして、丸藥のごとく成土へ植る、かもめ蘭、天鵞蘭の二品は懸肥惡し、外の三品は水肥少しはよし、

國成茶甌大、以猛火煨之、取出槌碎、舖以皮屑、納盆缶中、二八月分種、溉之以土煨者、爲其根最甘恐蚯蚓傷耳、莖葉柔細、生幽谷竹林中、宿根移植膩土、多不活、卽活亦不多開花、其莖葉肥大而翠勁可愛者、率自閩廣移來也、非草蘭比、　廣東新語、草蘭以短葉白幹者爲上、其花肥、喜食霜雪、不資灌積、

冬月花ヲ開ク故ニ寒蘭ト云、暖地ノ深山ニ自生アリ、移栽テ育シガタシ、花史ニ言ヘルガ如シ、花ニ品類多シ、紫カンラン、青カンラン、紅カンラン等ノ稱アリ、葉瘦テ春ランニ似テ長ク光アリ、花莖細シテ瓣モ亦細シ、香氣甚清遠ナリ、冬月書齋中ニ置テ清玩ニ堪タリ、

〔大和本草八芳草〕蘭　是世俗ニ花ヲ玩賞スル蘭ナリ、眞蘭ニアラズ、葉ハ大葉麥門ニ似タリ、數種アリ、皆寒暑ヲ畏ル、盆ニウヘタルハ、寒月ニ至リ屋下ノ暖處ニヲクベシ、上ヲオホフベシ、平地ヲ高クシテウフルモヨシ、地ニウヘタルハ、冬春厚キコモヲ二重ニシテオホフベシ、三月上旬取出スベシ、北風ヲ最ヲソル、北方ヲ厚クフセグベシ、樹下ヲ忌ミ陰地ヲコノム、又水ヲ好ム、水ヲシバシバソヽグベシ、溼地ヲ忌ム、甚鐵器ヲヲソル、剪葉忌犯鐵、暑月ハ日ニアツベカラズ、旱ヲ忌、涼地ニヲキテ頻澆水ニ宜シ、蘭ノコヤシニ、クジラノ油ヲ用テヨシ、魚ノ洗汁モ可也、人ノ浴シタル垢汁ヲカケタル尤ヨシ、正二月傍苗生ズ、此時肥シヲイム、又茶ノセンジカスヲ末シテ根ニヲキ、又センジ茶ノ汁ヲソヽグベシ、茶ノカスヲ末セズシテ其マヽヲケバ、溼生ジテアシヽ、葉ニ小虫生ズルヲバ、手ニ油ヲ付、或紙ニ油ヲ付テヌグヒトルベシ、花鏡ニハ魚ノ洗汁ヲソヽギ、又大蒜ヲスリテ水ニ和シテソヽゲバ、虫自無ト云、又葉上ニ斑點アルニ魚汁ヲカクル、蒜汁ヲバ白筆ニテ付ル、盆ニウフルハ座間ノ清賞ノタメ也、二月下旬地ニウフレバ、根ヒロク繁生シテサカヘヤスシ、盆中ハ不榮茂、ツバキノ實皮ヲ去センジ、蘭根ニソヽゲバ、根ニアル虫去ル、一說一切糞ヲ忌、魚汁モ勿用、久シキ糞土ニウフベシ、大蘭アリ葉大ナリ、春花ヲ開ク春蘭トモ云、稀ナリ、小蘭アリ、青莖ト云アリ、赤莖アリ、黃蘭アリ、葉廣ク短シ、黃花ヲ開ク、本草芳草類蘭草ヲ栽タリ、フヂバカマナリ、是

心蘭ノ名ハ香雪野村氏ノ考ルトコロナリ、

碧玉幹　一名青蘭　和名アヲシベ　セイセイラン

花鏡、碧玉幹花雖白、微帶黃、有十五萼、合并幹而生、竟有二十五萼、其葉細最肥厚而深綠、〇中略

葉建蘭ニ似テ勁シテ直立ス、深綠色愛スベシ、春發芽ノ時紫色最深シ、秋花ヲ開ク、建蘭ニ似レリ、花ニ三品アリ、花萼青白ニシテ、幹苞共青白ナル者ヲ、シヤムノ青青ト云、上品ナリ、花萼青白ニシテ幹青色、苞微紫ナル者ヲ青青ト云、中品トス、花萼青白ニシテ、幹苞共ニ紫色ヲ帶ル者ヲ、アヲシベト云、下品トス、三種共ニ花ハ青白色ニシテ、香氣清遠ナリ、貴ブベシ、

金稜邊　一名金線邊、一名金邊蘭、　和名ヤキバラン　コンリンザイ

花鏡、金稜邊花豐腴而嫵媚、每幹十二萼、色同奥蘭、妙在葉自尖上生一黃線、直下如金絲、喜肥、〇中略

建蘭ノ一種ナリ、葉質建蘭ニ同シテ、葉端ノ尖ヨリ四五寸ノアイシ、兩邊ニ黃白色ノ線アリ、花ハ六七月ノ間ニ開ク、高サ尺許、幹紫色ニシテ花黃綠色、舌ノ如キ瓣ニ紫色ノ細點アリ、香氣ヨシ、金稜邊ノ名ハ紫泉平井氏ノ考ナリ、

銀線邊　一名玉邊蘭　和名ココンリン　ココンリンザイ

蒔圃同春、銀線邊有白有香、　興化府志、蘭有葉邊一線如金一線如玉、謂之金邊玉邊蘭、

銀線邊ニ兩種アリ、葉質建蘭ニシテ銀邊ナル者ヲ、古金輪ト云、葉質漳蘭ニシテ銀邊ナル者ヲ玉花ト云、倶ニ葉端ノ尖ヨリ四五寸ノ間、兩邊潔白ニシテ鮮明ナリ、其內ココンリンハ發芽ノ時ヨリ銀邊潔白ニシテ、金稜邊ノ成長ノ後ニ現ルヽニ異ナリ、秋花ヲ開ク、瓣ノ兩稜モ潔白ニシテ葉ト同ジ、香氣モ高クシテ愛スベシ、

草蘭　和名カンラン

花史左編、草蘭紫梗青花者爲上、青梗青花者次之、紫梗紫花者又次之、餘不入品、種時須將山土和勻、

長サ二三尺、深綠色ニシテ至厚ク甚光澤アリ、能直立ス、春花ヲ開ク、紅紫色、萼大ニシテ瓣細シ、莖ノ高サ二尺ニ及ブ、山柰甘松ヲ併タル如キ匂アリ、幽蘭ノ淸香馥郁タルニ異ナリ、故ニ無香ト云、

紫蘭　和名キンリヤウ　チヤウジユラン

蒔圃同春、紫蘭三月開、色鮮可愛、但恨無香、　汝南圃史、紫蘭葉狹如水仙、比蘭蕙短而柔、三月中開紫花、有色無香、春初苗長可分、

文政ノ比舶來スルトコロナリ、俗ニ金稜邊ト云ハ誤ナリ、葉ハ鳳蘭ニ似テ深綠色光アリ、婀娜トシテ斜ニ垂レテ直上セズ、一科ヨリ七八葉排生ス、花ハ冬ヨリ苞ヲ發シ、三月比花ヲ開ク、莖ノ長サ一尺餘、二十餘萼ニ及ブ、紅紫ニシテ瓣ノ邊色ウスシ、香氣絕テナシ、生育シヤスシ、

玉魫蘭　一名魚魫蘭、一名玉幹、一名玉軫蘭、

金漳蘭譜、魚魫蘭花片澄澈、宛如魚魫、采而沈之水中、無影可指、葉頗勁綠、此白蘭之奇品也、○中略

紫蘭ト同時ニ唐山ヨリ渡ル、葉ノ長サ尺餘、幅廣シテ少シ垂テ直上セズ、深綠色ニシテ光アリ、漳蘭ノ如シ、發芽ノ時色白シ秋花アリ幹細ク青白色、花建蘭ト同形ニシテ潔白ニシテ、香氣最高シ、蘭中ノ上品ナリ、

玉整花　一名素心蘭　和名ソシンラン

雲間潘穉峯百花詩、素心蘭詩、人生至友杳難尋、蘭草因移澗谷陰、長與隱淪成契合、淸風披拂素居心、

花鏡、玉整花葉脩長而瘦、色甚瑩白可愛、白花之最能生者、

此亦前年唐山ヨリ舶來ス、葉玉魫ヨリ幅狹シテ細長ナリ、又草蘭ノ葉ニモ稍似レリ、秋花ヲ開ク、潔白ニシテ玉魫ニ同ジ、幹苞トモニ青白色玉魫ニ似レリ、秋花ヲ開ク、潔白ニシテ玉魫ニ同ジ、幹苞トモニ青白色、玉魫ニ似レリ、淸香馥郁トシテ最諸蘭ニ優レリ、蘭中ノ魁ト稱スベシ、素

花(中山傳信錄) 義香(尺牘雙魚) 蘭花(通雅) 建蘭(本草滙) 幽蘭(正誤) 土續斷(同上、根ノ名、)

正誤、春蘭ハ一名報春先、(秘傳花鏡)獨頭蘭(蘭譜)ホクロハ此一種ナリ、秋蘭ハ蘭花ナリ、楚辭ノ秋蘭ト同カラズ、猗蘭ハチヤラン、致富奇書ノ伊蘭ト同ジ、

增、(中略)蘭花ハ王氏蘭譜金漳蘭譜等ニ詳ナリ、品類尤多シ、葉長クシテ直立スルモノヲ雄トス、即建蘭ナリ、福建ノ地ニ多ク產ス、葉柔弱ニシテ直立セザルヲ漳蘭ト云、漳州ニ多シ、共ニ八九月コロ別ニ莖ヲ抽テ花ヲ開ク、淸香馥郁タリ、一種十月ヨリ十一月ニ至テ、花ヲ發スルモノアリ、ソノ葉柔軟ニシテ小ナリ、花モ瘦テ小ナリ、コレヲ寒蘭ト云、花ニ品類多シ、色ニヨリテ紫カンラン、靑カンラン等ノ稱アリ、又淡紫紅白サラサ等ノ數品アリ、阿州海部郡、土州山中等ニ自生アリ、漢名花史左編ノ草蘭ナリ、又歲蘭、紫蘭、玉魫蘭、素心蘭、靑蘭、金稜邊、銀稜邊等アリ、詳ニ百品考ニ見ヘタリ、

ホクロ一名ホクリ、(阿州)ホウクリ、(藝州)ハイクリ、(備後)エクリ、(土州)ガジヤ、(丹波)アカヾリサウ、(勢州)此草根ヲ炙リテ搗ケバ糊ノ如ク成ル、コレヲ皸瘃ニ貼スレバ能ク愈ユ、故ニアカヾリサウト云、

〔物類稱呼 三生植〕鹿蹄草すゞらん 大和にてまきをもてと云江戶にてべつかうさうといふ、鹿蹄草(未詳)江戶には四谷大宮八幡社地に見えたり、同名別種あり、

獨頭蘭ほくり 畿內にてほくりといふ、播磨にてほくろと云、四國にてゑくり、東國にてはくりと云、又ほつくりと云、ほくりは略蘭に似て愛しつべき花也、奴僕其根をとりて皸(あかゞり)をそくふもの也、

〔百品考 上〕歲蘭 一名拜歲蘭 和名ホウサイラン

灌園草木識、歲蘭葉長四尺餘、花一莖廿餘蘂、赤黑色、無香不韻、拜歲時方開、亦蘭類也、植以備品、(中略)天保ノ初琉球ヨリ渡ル、花戶誤呼テ豐歲蘭ト云、形狀ハクランニ似テ長大ナリ、葉ノ幅一寸餘、

テ、花ハ其色純白ク、花背ハ微青シ、其香亦甚ダ芬シ、信ニ珍奇ナル名品ナリ、風蘭ハ九州土州紀州伊豆房州等ニ多シ、風ノ能ク徹ル處ノ樹木ニ結ビ付テ置モ、能ク繁榮シテ皮ニ根ヲ纏ヒ、籠ニ入レテ釣置モ宜シ、此亦花開トキハ香氣最モ愛スベシ、桂蘭モ此ト同類ナリ、又紀州伊豆房州等ニ生ズルハ、葉幅七八分長四寸許ニ、建蘭ニ似テ小キ花ヲ開ク者アリ、其葉ノ竹柏ニ似タルヲ以テ、俗ニ此ヲ竹柏蘭ト呼ブ、

〔草木育種 下 或賞翫べきもの〕幽蘭 本草 秋蘭 事物紺珠 なり、秋花あり、又葉に斑あるものを地軸又こゝんりんなど、いふ、又對馬國に產する、青幹蘭紫幹蘭 廣東新語 等あり、俗に寒蘭といふ多花あり、又漢土より素眞蘭と稱して舶來あり、其葉小蘭に似て花の形建蘭のごとく色純白くして背綠色を帶、其香又愛すべし、蘭中の奇品なり、又濘蘭は葉短し、小蘭は葉短く狹し、花の香氣甚勝たり、又なぎ蘭は土佐國紀伊國等に產す、葉の幅七八分長さ三四寸にして、形狀竹栢の葉のごとく、花は蘭に似て小し、又琉球より來る鳳蘭 五雜組 あり、俗に菖蒲蘭といふ、葉は建蘭に似て少し軟く、長さ二三尺、十月花あり、又所々山中に生ずる報春先 花鏡 あり、葉は小蘭に似て濶く、春花を開ゆへ春蘭 蘭譜 と名く、其外蘭の類多し、又蘭の類に非して蘭の名あるもの甚多し、

〔草木育種後編 下 蘭類并冒稱の類〕竹柏蘭 葉なご蘭に似て長く、莖は石斛に似たり、赤土のごろたに栽てよし、又延命蘭といふあり、八月花あり、一葉蘭といふあり、根に近き處塊ありて一莖を抽き、三月の比に花あり、二葉蘭一名玄らんといふものあり、山の陰地に生ず、一莖に抽き、梢に黃色花、五六花あつまり生ず、

〔重修本草綱目啓蒙 九 芳草〕蘭草 中略〇

蘭花一名媚世 類書纂要 王者香 花譜名 玉整花 汝南圃史 國香 典籍便覽 劒葉蘭 事物紺珠 馨列侯 同上 香祖 同上 待女 因樹屋書影 芳友 事物異名 幽客 同上 幽谷客 花鳥爭奇 幽草 名物法言 謝階草 同上 孔子

る吉詳の如し、その花を開き實を結ぶ事、また建蘭と一樣にして、たゞ花莖紅色なるを異なりとす、此卽建蘭の一種にして、其品稍劣れるものなり、○中略

博蘭　吳蘭

博蘭は漢名を吳蘭といふ、花は秋に至り一幹五六花を開く、形狀幽蘭に似て圓く、紫黑色にして頗る桼盧の花の如し、葉は金燈草に似て黑綠色にて光澤あり、長さ一尺三四寸、濶さ七八分、此種近時多く唐山より來る、一種黑蘭ありと、和漢三才圖會にみへたれど今詳ならず、○中略

寒蘭　冬蘭

寒蘭一名おほらんは、漢名を冬蘭といふ、和漢蘭稱に、寒蘭はたれまた蘭花の類なり、一莖數花、對州土州豫州紀州勢州等の暖國、海近き山よりいづ、葉に長短狹濶あり、花は青色のもの多し、また紅紫及黃色のものあり、十月の頃にさくといへり、今圖する所のものは、卽狹葉青花のものなり、

〔草木六部耕種法 十需花〕蘭ノ類ニハ建蘭、秋蘭、冬蘭、歐蘭、蕙蘭、漳蘭、箬蘭、桂蘭、賽蘭、風蘭、小蘭、鳳蘭、青幹蘭、紫幹蘭、素眞蘭、春蘭等アリ、又蘭ニ非レドモ、蘭ヲ以テ稱スル者ハ、竹柏蘭、紫金蘭、兒蘭、文珠蘭、獨脚蘭、松葉蘭、一船𧑥、間道一船𧑥、白星一船𧑥、高良薑等、其他尙多シ、○中略蘭ノ種類モ頗多シ、暖國山中ニ春初ニ花開アリ、春蘭ト呼ブ、葉ハ小蘭ノ如クニシテ濶シ、花鏡ニ此ヲ報春先ト名ク、秋花開モノヲ秋蘭ト云フ、又對馬國ニ多花開者アリ、莖ノ紫ナルト綠ト有リ、廣東新語ニ紫幹蘭、青幹蘭ト稱スルハ、卽是ナリ、又冬花ノ開ヲ以テ俗ニ寒蘭ト云フ、又琉球國ヨリ來ル、俗ニ菖蒲蘭ト呼ブ者アリ、葉ハ建蘭ノ如クニシテ長三尺ニ及ビ、其性微軟ニシテ垂下コト多シ、此モ亦冬ニ花ヲ開ク、五雜俎ニ鳳蘭ト稱スルハ、卽是ナリ、又漳蘭ハ葉短シ、又蕙蘭、歐蘭、箬蘭、賽蘭等モ、漳蘭ト大同小異ノミ、小蘭ハ其葉モ細ク且短シ、然レドモ小蘭ノ花ハ其香ノ極テ馥郁者ナリ、又漢土ヨリ舶來ノ素眞蘭ト稱スル有リ、其葉ハ小蘭ノ如ク、花ハ建蘭ト形狀ヲ同クシ

ほふて分離せず、香氣衆蘭よりもやゝ劣れり、

雄蘭　駿河蘭　建蘭

雄蘭一名大蘭、一名駿河蘭は、漢名を蕙一名秋蕙、一名薫草、一名秋蘭、一名建蘭、一名劍葉蘭、一名玉整花といふ、中略抑駿河の種は葉頗る菅茅の如くにして叢生し、色青綠に少しく黒みを帶び、直立して劍脊あり、長さおほよそ二尺より三尺餘に至る、初秋の頃に至れば、その葉心より淡黄色なる花莖を抽て、其梢七八花或は九花を開く、又温暖の地にては、その花五月の頃に開く、故に西土にても建蘭盛於五月格致鏡原引學圃雜疏或は建蘭五六月放一幹九花祕傳花鏡などいへり、その細縱道あり、また花內に二に瓣を生じ、その瓣並に紫黒色の星點あり、香氣殊に高し、故に漳州府志に、建蘭芬郁方今爲海內所推度、他種無能見勝者とみへたり、さて蘭には花蕊の間に細かなる白露珠ありて、これをなむれば味いと甘し、此卽西土にいはゆる蘭膏蘭言祕傳花鏡なり、また花後實を結ぶ、狀馬蘭に似て長さ二寸許、これを蘭筍物理小識といふ、內に白き粉の如きものあり、これをまけども、遂に苗を生ずる事を聞ず、さすれば西土にて其子熟亦可種也同上といへるは、甚疑ふべし、又根は天門多に似て細く、其色また相似たり、これを土續斷草木通志略といふ、俚俗或は採て引風の藥とす、今これを試るに、根は味甘く香氣なし、されど五雜俎に蘭根食之能殺人不可不愼とみへたれば、用ゆるものよろしく斟酌すべし、又花は味辛くして苦し、これは五雜俎に、閩建陽人多取蘭花以少鹽水漬三四宿、取出洗之以點茶絶不俗とみへたれど、事物紺珠には峽中儲毒蘭花第一といへり、今その花を試るに、おほく服すれば、少く逆上の氣味あるものといへども、根はしからず、さすれば花根ともに全く大毒はなきものなるを、殺人などいへるは、けだし傳聞の誤りなるべし、中略

雌蘭　房州蘭

雌蘭一名房州蘭は、漢名を漳蘭といふ、其葉全く建蘭に似てやゝ薄くして短く、斜にしだれて頗

奈吾蘭　風蘭之類、形相似葉長三四寸、亦不著土能活、開黃花香佳、自薩摩出之、曰有深谷難採、

琉球風蘭　葉長尺許、似蘭而柔、抽莖開小白花、微有風蘭之狀、蓋此觀音草之白花者也、

〔中山傳信錄物產六〕名護蘭、葉短而厚、與桂葉同、大僅如指、三四月開花、與蘭無異、一箭八九朶攢開、香清越勝、蘭出名護嶽巖石間、不假水土、或寄樹極上、或以棕皮裹懸之、又有風蘭、葉比蘭較長、香如山柰茴香、蔑竹爲盆、懸挂風前、極易蕃衍、俗皆尙蘭、號爲孔子花、

粟蘭一名、芷蘭、葉如鳳尾、花如珍珠、　又有松蘭竹蘭棒蘭、狀如珊瑚樹、綠色無葉、花從椏間出、似蘭較小、

〔古今要覽稿草木〕春風蘭　蕙蘭

春風蘭は漢名を蕙蘭一名九節蘭、一名輿蘭と云、その形狀鳳蘭に似て葉に光あり、花は二三月の頃に開く、一幹七八花、其瓣既蘭よりも瘦細にして末尖り、其色淡黃にてかばいろの縱道あり、これを土窖中に入おく時は、初春に花を開く事既蘭に同じ、さて顧野王の頃に蕙といへるは、全く秋蕙にして、秋花さく蘭をいひ、黃山谷以下に蕙といへるは、春秋に拘はらず、すべて蘭の數花を開くものをいふ、憶に渠の頃は、いまだ蘭の種類世に多からざるによりて、たゞ春蘭秋蕙を以て其別をなせしなり、後世に至りては、其種類おのづから多く出て、春月數花を開く、蕙をも見出せしより、遂に蕙は春秋にかゝはらぬ名とはなりぬ、これは全く時勢のしからしむる所にして、必しもあやまりを傳へしにはあらず、世に蕙を翫ぶもの、よろしく古今によりて、その違ひある事をおもふべし、〇中略

小蘭　王小孃

小蘭一名姬蘭は、漢名を王小孃といふ、其葉極て細小にして、長さ一尺餘、濶さ二分許、秋白莖抽て三五花をつく、形寒蘭に似て白色にして黃を帶び、瓣ごとに五紅線ありて、心には同じ色の星點多し、凡此花は五瓣なりといへ共、上瓣は大にして三方に分離し、二瓣は小にして上より心をお

南京蘭　葉一二尺、濶七八分、花似秋蘭而香淺、

白蘭　葉似秋蘭而弱、秋開青白花、香太深、

隈蘭　葉端緣限白、其似秋蘭而香太深、

春蘭　俗云保久利

按春蘭葉似蘭而細短、長不通七八寸、春月開花亦似秋蘭香稍淺、冬月采其根似慈姑、能治皸瘃、

蕙蘭　紫蕙　黄蕙　按零陵香異名爲蕙草、與此不同、　紫蕙卽紫蘭

按蕙蘭立莖生葉、似秋蘭而濶薄、色淡青有縱理、三四月莖端開白花、不香、其根圓扁多髭、

黄花者俗呼名黄蕙、以愛其花、　紫花者名紫蕙、又曰紫蘭、此乃山草之白及乎、可考、

草木花詩譜有朱蘭蕙蘭之二種、形狀稍似、雖得蘭名無芳香、但花莖狀以略似蘭、後人稱之耳、

銀蘭

按銀蘭葉似小玉簪葉而莖長、三四月抽莖開白花似蘭花、又有紫花者、其葉陰乾以清油傅小兒草瘡、

青蘭

按青蘭葉似帯草、而莖梢葉間生青花、似蘭而不香、

棒蘭　正字未詳

按棒蘭圓莖無葉、頗似箸、故名棒蘭、五六月枝杈之間生花似蘭花、而小有微香、

風蘭　桂蘭　仙草

三才圖會云、風蘭不土而生、小籃貯掛樹上、人稱仙草、細花微香、

五雜俎云、風蘭根不著土、叢蟠木石之上、取而懸之簷際、時爲風吹則愈茂盛、其葉花與家蘭全無異也、

按風蘭深山有之、榧椵等幹間多有之、葉形似万年青而細小、其長二三寸、六月抽一莖開小白花、末曲微香、

小蘭　花は大らんのごとく、葉みじかく、葉先みだれてあし、ひめらん共いふ、

白茎　葉も花も茎白し、是を上トス、今は中絶してすくなし、黒茎、紫茎、青茎トテいろ〳〵有、大蘭は青茎なり、又は菖蒲蘭といふ有、大蘭と同じ、〇中略

石蘭　葉はしらんはくらんなどのごとくにて、根本土の上に二三寸高ク岩のごとく成かぶ有、年々に敷出て後は岩窟のごとし、其間々に花七八寸ニ出ル、花形は大蘭に似て色うこん也、岩石蘭共云、

風蘭　葉はみじかくせきせうのごとし、花白し、根を竹の皮につゝみ、中につりて置、風を得て栄ル也、

春蘭草の部にくはし　沢蘭花うすむらさき

ばらん　葉は大キクあつし、花は未見、本草綱目馬蘭、時珍曰、其葉似蘭大キシ、其花似菊紫也、故名、俗称物之大者為馬云々、此事にや不知、

日光蘭　葉はしらんによくにて、花は九りん草のごとくなれ共、咲ぶり各別なり、ほそきゑだをうちてさく、色はこいむらさきト白トうす色かきいろ四五色有、

紫蘭　葉はさゝのやうにて、中より花出て、こいむらさき、

白蘭　葉はしらんよりみじかく、花しろし、

黄蘭　葉はあつもり草といふ草のごとし、花黄色、

〔和漢三才図会九十三芳草〕蘭花〇中略

按蘭花最不忍寒暑風雨、故多鉢植之、唯豫州大洲、紀州若山、及遠州作圃畦、種之能茂盛、長三尺者多、秋芳者即真蘭花也、春芳者即春蘭也、

黒蘭　長尺許、葉花並似秋蘭而小、其花黒赤色、

ノ末ヨリ土窖ニ入ザレバ枯レ易シ、

〔増補地錦抄七〕美人蕉　花極てくれなゐなる事、ともし火のごとく、又はざくろの花の色に似り、されば唐にては紅蕉といふ、葉はばせうのやせたるごとくちいさし、花のうつくしきとて、びちんせうといふといへどもしからず、此葉をせんじ、女中髪をあらふに、けを長クしてくろからしむ、又は油をとりて、びん水にして、髪をくしけづりて、けのおつるをとゞめ、かみすぢをふとくし、つやを出し、葉をくろやきにしてかみの油にねり、髪のはげたる所にぬりて、けをせうず、其しるしばせうにすぐれたるとて名付よし、誠に女は髪のめでたからんこそ、人のめたつべかめりといへば、美人蕉とよぶもにくからず、

〔剪花翁傳四八月開花〕美人蕉　紅蕉　花黒紅色、形ち蘭蕉に似たり、開花八月下旬より九月也、方地盆栽物、土回塵、肥油精、寒中又花前にも入る也、尤時を見合てよし、分株移春彼岸よし、花後より三月迄地窖に入る也、

〔草木六部耕種法十需花〕美人蕉ハ其葉芭蕉ノ如ク、六七月ニ花ヲ開キ、其色眞朱ニシテ、極テ美ナル者ナリ、暖地ノ產ナルヲ以テ、九月下旬ニ其根ヲ掘リ出シ、藁ニ包ミ閉藏法ヲ行ヒ、三月ニ至リ出シ植付ベシ、

蘭名稱

〔下學集下草木〕芝蘭　○二共香草、可貴艸也、然日本俗呼芝、爲原野細草者、不得其理云云、

〔和爾雅七草木〕○蘭(ラン)花　○或名幽蘭、葉如麥門冬而潤、而且勒長及一二尺、四時常青、花黃綠色者爲蘭花、今世所玩栽者是也、與蘭草適別、　風蘭(フウラン)又名桂蘭、吊蘭、　獨頭蘭(ホクリ)(ハクリ)出于蘭譜、又名弱鄖蘭、春蘭、

蘭種類

〔増補地錦抄六〕蘭のるひ

大蘭(おふらん)　花うす黄色のやうに見ゆる、さかりの時は、ふん〳〵たる香ありて、家内くんずる也、蘭は葉長く大かぶなるをよしとす、大蘭は葉ながし、

紅蕉

スシ、糞ヲ忌ム、胡麻糟ニ宜シ、稻若水云、葯圃回春日曇花、花紅子堪串珠微香、是檀特花ナルベシト、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕檀特花

按檀特草高三四尺、葉似芭蕉而小不甚柔、又似薏苡而大不甚硬、長尺餘濶三四寸、冬枯春生、七月抽莖開花深赤色、形如穗、最可愛、結子圓黑色甚硬、用作念珠、本西南外國之草性最畏寒、如値霜雪則失種、故防北向南之地可種、冬則覆稃或稻藁等、以禦寒濕、其子爲念珠、形色如作成而良、

〔草木育種下美花〕蘭蕉農圃六書　冬中圃へ人糞を曝し壅置、四月種を蒔べし、夏は根廻へ藁を敷て日を防べし、赤花のもの黄花のものあり、

〔剪花翁傳三五月開花〕檀特　蘭蕉　花黄あり、赤あり、形蘘荷の花の細長きがごとし、開花五月上旬なり、是は新根を土に圍ひ置、春彼岸に移れば五月に咲也、方日向、地畝を高くして一分濕りよし、濕氣多き時は枯朽るなり、土えらばず、肥淡小便、春芽出し前一二度、又花前に一度そゝぐべし、下種移春ひがんより三月中よし、新根貯ひやうは、地二三尺ばかり堀砂をしき、其上に籾を布、又乾き土を布て新根を並べ、又土を厚くおきて、筵などを覆ひ置べし、

〔大和本草七花草〕紅蕉〇中略　今案ニ、美人蕉初薩州日州ニアリ、琉球ヨリ來レリ、近年畿内處々ニウフ、甚寒ヲオソル、九十月ニ根ヲホリ出シ日ニヨクホシ、南ニ向ヘル屋下ノ土ニ埋ミ、上ニオホヒヲスベシ、或春ヨリ南ニ向ヒ、北フサガリタル濕ナキ陽地ニウヘ其マヽヲキ、上ニ大ナル箱或瓶ヲ以掩ヒ、寒風ニアツベカラズ、然ラザレバ寒ニアヒテクサリ枯ル、冬ハ水ヲソヽグベカラズ、三月温ニナリテホリ出シウフベシ、又實ヲマクベシ、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕甘蕉〇中略

集解、紅蕉和名モ美人蕉ト云、一名ヒメバセウ、琉球ヨリ來ル、苗芭蕉ニ似テ小シ、葉モ狹ク短シ、花ハ紅ニシテ朱ノ如シ、形蘘荷ノ花ノ如ク、狹瓣三寸許、左右ニ互生スルコト四五寸、觀ニ堪タリ、秋

檀特草

リ、形黄苓花ニ似テ內黄色ナリ、又一種葉ニ紫斑ナキモノアリ、根ノ形色舶來ニ同ジ、舶來ニ二品アリ、上品ヲ御物(官府ニ入テ云)ト云、芋卵ノ形ニシテ外黄白色、內ハ淺靑黑色ナリ、下品ヲ商賣ト云、形小ク內外トモニ色黑ク朽蝕多シ、藥用ニ堪ヘズ、又先年丹後但馬ヨリ和ノ莪朮ト稱シテ、市ニ出セシ者ハ、根ノ形細ク內外白色ニシテ味苦シ、是エンレイサウノ根ニシテ、王孫ノ一種ナリ、莪朮ノ類ニ非ズ、

〔廣益地錦抄五〕我朮　葉形うこんに紛る丶程よく似たり、一所に二種をならべ植見るに、いかやうにも見わけがたし、花さく事もまれなり、根のかたち各別なるにてしれり、我朮は根丸く、うこんは根せうがのごとく、寒をおそる丶、冬は土中にうづみ、春出し植る、

〔草木育種(藥草下品)〕莪茂(本草)　漢種のもの二種あり、形狀鬱金に似て、葉の中に紫色あり、此根淡赤し、按ずるにこれ眞の莪朮なり、一種は官園に多植、葉に紫色なく、根黄色なり、然ども鬱金とは氣味少く異なり、此眞の薑黄なり、莪朮に非ず、植る地は赤土野土ともによし、大抵芋を植る如くにしてよし、夏も多く人糞を澆べし、十月頃皆掘あげ乾て藥に入べし、又よくゑまりたる根を、來年の種に貯べし、尤子を缺ぬ樣にして但莖を切、根はそのま丶にて南に向て山の崖の日あたりよき地を三四尺掘て、根を埋置ば寒中傷ことなし、四月に入て掘いだし、親根を捨、子を植べし、

〔書言字考節用集六生植〕檀特草(芭蕉之屬、今按本草所謂紅蕉是矣、)

〔大和本草七花草〕檀特花　是亦紅蕉ノ類ナリ、葉ハ恰芭蕉ニ似テ小ナリ、葉長キ事一尺餘、五月抽莖高キ事四五尺或六七尺許、鮮紅花ヲ開ク事、五月ヨリ九月ニイタル、莖頭ニ數花連リ開ク、花長ク不全開、花落テ結實コト他物ヨリ早シ、實ノ形蒼耳子ノ如ク、大如大拇指少長シ、殼ノ內ニ實アリ、如蓮肉堅シ、秋實熟シタル時早クマクベシ、生ジヤスシ、又春實ヲマクベシ、寒ヲ畏ル丶事如紅蕉、寒ヲフセギテ十月ヨリ根ヲ向南、屋下ニウヘ養フ事モ紅蕉ノ如クスベシ、生シテハ甚繁茂シヤ

ト、良薑ニ同ジ、莖葉ハ生姜ノ如クニシテ大ナリ、葉間ニ穗ヲ抽デ花ヲ發ク、根ハ靑芋(ヤトイモ)ニ似テ深黃色ナリ、此ヲ作ル法ハ、日當リ能キ野原ノ眞土或ハ壚土ヲ軟膨シ、此ニ廐肥ノ腐テ土ノ如クナリタルヲ二荷ト、三和土製法培養秘錄ニ詳ニ見エタリ一荷ヲ耕リ混ゼテ培養シ、畑ヲ一歩三畦ニ作リ、百合ヲ作ルガ如ク種根ヲ五目ニ植付ベシ、能ク他草ヲ耘リ、時々盛養水ヲ灌ギ、且蒟蒻ヲ作ル如クニ培養スルトキハ、意外ニ能ク肥テ兒根モ蕃息スル者ナリ、十月上旬マデニ悉掘リ採ルベシ、又種根トスルニハ、今年作リタル根中ニテ能ク實シタルヲ撰ビ、附タル兒根ノ、皺テ脫落ザルヤウニ、其莖ヲ斷去テ、南向ナル崖下ノ日當能溫處ニ、深三四尺モ坑ヲ掘テ、十月初ヨリ埋置ベシ、若スレバ寒ニ傷コト無シ、翌年八十八夜頃ニ至リ、其親根ヲバ除テ兒根ヲ植ベシ、凡熱帶ニ應合スル草根ヲ、涼際赤道下ヲ去ルコト、二十三四度以下四十度以内ノ、霜降氷結コト有ルベキ國土ヲ云フ、ノ土地ニ作ルニハ、皆此法ヲ用テ、其種根ヲ貯フベシ、然ラザルトキハ必皆腐敗者ナリ、又染料ニ用ル草根ノ色ヲ、濃厚スル培養アリ、其法血茅茜草ノ莖ヲ燒タル灰一石、銅山鞴爐ノ灰二斗以上、二品細末シ、馬溺及馬溺鹽泥ニテ煉リ合セ、水ヲ加ヘ稀シテ、其根ヲ離ルコト一尺許ノ地ニ、時々此ヲ澆トキハ、大ニ根ノ肥大ノミナラズ、其根色ノ甚濃厚ナル者ナリ、故ニ紫根茜等ヲ作ルニモ、皆此培養ヲ用フベシ、

莪茂

〔多識編二芳草〕蓬莪茂、音通、宋開寶、異名蒁藥、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕蓬莪茂　一名蓬莪朮本草彙言　蓬茂本經逢原　蓬莪三才圖繪　蓬朮本草原始　廣茂本草述　破關符輟耕錄　青薑續醫說　莪茂附方　蓬萊朮羅浮山會編

略シテ莪朮ト云フ、通名ナリ、享保年中ニ唐種ヲ渡シ官園ニアリ、又明和年中琉球種薩州ヨリ來リ、京師浪華ニ競ヒ栽レドモ、皆多ヲ經ズシテ枯ル、今尾州江州ニハ栽傳ユルモノアリ、苗ノ狀鬱金ニ異ナラズ、只葉ノ中心ニ紫黑色ノ斑一條アリ、六月ニ花ヲ生ズ、大抵鬱金ノ如ニシテ小シ、細長ナル葉多ク重リテ、欵冬花ノ如シ、面白色背ハ綠色、梢葉ハ深紅色、其脚葉間ゴトニ朱花一ツア

俗ニ〇ウ〇コ〇ン〇ト呼ブ、卽鬱金ノ略音ナリ、琉球種世上ニ多ク栽ユ、唐種モ享保年中ニ渡ル、共ニ形狀相ヒ同ジ、葉ノ長サ二尺許、蘭蕉(ダンドク)ノ葉ニ似テ長シ、又芭蕉葉ノ小ナルガ如シ、葉ノ莖ハ靑芋梗(サトイモノジク)ノ如ク、長サ一尺許、葉淡綠色ニシテ叢生ス、秋月花アリ、細長葉數百鱗次スルコト一尺許、形欵冬花苞ノ老タルガ如シ、白色ニシテ末ノ方微紅ヲ帶ブ、葉間ゴトニ黃花アリ、衰テ後ソノ蘂ニ頭瞥アリテ、小烏島ノ形ノ如シ、此草性霜雪ヲ畏ル、秋ノ末ヨリ土窖ニ入レザレバ枯レヤスシ、船來ニ二種アリ、遲羅ヨリ來ルハ脂アリ、下品トス、琉球ヨリ來ルハ脂ナシ、上品トス、皆黃赤色ナリ、此ニ二等アリ、根雞卵ノ形ノ如クニシテ差狹ク、兩頭尖リ横文多キモノヲ蟬肚鬱金ト、薑黃ノ集解ニ云ヘリ、藥舖ニテカシラウコント呼ブ、卽老根ナリ、其旁ニ附タル嫩根ハ、形細長ク大サ小指ノ如ク、長サ一二寸ニシテ、兩頭一般ノ大サナリ、是集解ニ謂ユル四畔ノ子根ニシテ、藥舖ニテジクウコント呼ブ、ジクトハ細キヲ云フ、筆管ヲ俗ニ軸ト云、老根ハ染家ニ賣リ、又薑黃ニ充テ賣リ、嫩根ヲ鬱金ト爲シテ、醫家ニ賣ルハ非ナリ、藥ニモ老根ヲ用ユベシ、

〔廣益地錦抄 五〕鬱金(うこん)　春宿根より生ル、葉形我朮のごとく、又だんどく草の葉に似たり、花さく事まれなり葉をながめ根はうこんに用る也、寒氣をおそる、冬は根を取日向成所の土中にうづみおくべし、三月にとり出し植べし、

〔剪花翁傳 四 八月開花〕鬱金蕉　花白、形蘘荷の花に似たるもの四方に出て、段々高く伸咲なり、開花八月下旬より九月に咲也、方日向、地二分濕、土回塵、肥淡大便、寒中花前に淡小便を澆ぐべし、分株春彼岸よし、移三四月中也、花後より三月迄霜覆ひすべし、盆に栽る時は油糟を入べし、九月より三月迄地窖(ちむろ)に入べし、世俗に所謂鬱金粉は卽此根也、

〔草木六部耕種法 四 需根〕茜草紫草ノ根ヲ作ル法

鬱金ハ熱帶ノ地(赤道下ヨリシテ夏至規ニ至リ、二十三度半ノ間ニ係ル國土チ云フ、)ニ繁生スル草ナリ、故ニ寒ヲ畏レ霜ニ傷ムコ

リ、内ニ黄條紫斑點アリ、稀ニ實ヲ結ブ、無患子(ムクロジ)ノ大サナリ、京師ニテハ熟セズシテ落ツ、此根形色共ニ良薑ニ似タリ、然レ共氣味薄ク、舶來ノ子ノ形モ亦異ナリ、故ニ良薑ノ一種トスベシ、

薑黃

〔多識編二芳草〕薑黃、和名今案岐。禰。、異名蒁(音述)、寶鼎香(綱目)

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕薑黃　一名赤天佩(輟耕錄)　野薑(藥性奇方)

是唐山及ビ琉球ヨリ別ニ渡ニ非ズ、本邦藥舖ニテ鬱金莪茂ノ中ヨリ根ニ枝アリテ、生薑ノ形ノ如ク節アリテ、重キモノヲ撰ビ出シ、コレヲ薑黃ト名ケ賣ル、剖レバ内黄色ナレドモ鬱金ヨリ淺クシテ生薑ノ氣アリ、卽是異物ニシテ琉球ノ産ナリ、今藥舖ニテ普通ニ薑黃ト名ケ賣ルモノハ、カシラウコンニシテ、鬱金ノ老根ナリ、鬱金ト名ケ賣ルモノハ、チクウコンニシテ、鬱金ノ嫩根ナリ、然レドモ老嫩共ニ鬱金ナリ、又カシラウコンヲ細末トナシ、薑黃ト名ケ賣ルモノモアリ、漢種ノ薑黃ノ苗今ハ少シ、和産モナシ、唐山ニテモ薑黃ト鬱金ト混ジ賣ルコトアリ、唐山ニハ鬱金少クシテ薑黃多シ、故ニ薑黃ノ老根ヲ薑黃トシ、嫩根ヲ鬱金ト爲テ賣ル、故ニ通雅ニ本根卽薑黃、旁附卽鬱金ト云ヘリ、薑黃鬱金蓬莪茂ノ三物、諸說紛々タリ、而シテ集解藏器色味ヲ以テ三物ヲ分別スルノ說、最モ詳ナリ、今コレニ從フ、然レドモ三年以上ノ老薑ヲ以テ、薑黃トスルハ誤甚シ、又薩州ニ山ウコント稱スル草アリ、根色淺クシテ物ヲ染ルニ堪ヘズト云フ、コレ薑黃ニ能似タリ、然レドモ未ダ親シクコレヲ見ズ、

鬱金

〔多識編二芳草〕鬱金、今案加。保。利。沙。嬉。乃。久。左。、異名馬蒁。

〔大和本草六藥〕鬱金　葉ハ美人蕉檀特花ニ似タリ、薑黃モ同類ナリ、甚畏寒、冬月ハ早ク堀根、日アテヨキ暖處ニ埋ムベシ、不然根爛、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕鬱金　一名金母蛻(輟耕錄)　玉金(名醫指掌圖)　蔚金(醫學正傳)　深黃(鄕藥本草)　川乙金(本事方)

姜三へぎと云ふ俗語と記せり、諺の意を押て考るに、盈指生姜手にておもうやうに物かゝれぬ手のわろきなり、三へぎは音信なるべし、生姜は指の事よりいひ、三片はすこしばかりをいふ、心ざしは松の葉といへるごとく、生姜三片といひたることより、音信とりかはしもしたるもの歟、

山薑

〔多識編二芳草〕山薑、今案伊奴波志加美、異名美草、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕山薑　ハナメウガ　杜若モ國ニ因リテハナメウガト云フ　ハナヤリヤウキヤウ

漢渡ナシ、花戸ニ此草ヲ良薑ト呼ビ、藥舖ニコノ根ヲ良薑ト名テ貨ルモノハ、並ニ非ナリ、和州ノ三輪、江州ノ三井寺山中ニ有リ、又紀州、豆州、勢州、尤多シ、葉ノ形薑葉ニ似テ互生シ、毛茸多シ、夏莖ノ高サ一尺許、梢ニ穗ヲ成シテ花ヲ開ク、色白クシテ紅斑アリ、形建蘭ランノ花ノ如ニシテ至テ小ナリ、實ヲ結ブ、熟スレバ色赤ク、形圓長五分許、破レバ中ニ子アリ、コレヲ伊豆縮砂ト稱シテ僞リ貨ル、子ノ形縮砂ニ似タルヲ以テナリ、黑手白手ノ二種アリ、節山薑實ナリ、此根細長シテ、淺茶褐色、味苦シテ臭氣アリ、渾テ良薑ノ氣味ニ非ズ市人良薑ト呼者ハ非ナリ、

高良薑

〔多識編二芳草〕高良薑、今案於保久禮、今俗誤爲伊豆縮砂、異名蠻薑、綱目子名紅豆蔻、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕高良薑　クマタケランノ類　一名埋光烏藥藥譜　孽花八閩通志　比目連理花主會新篇　花一名豆蔻花夢溪筆談補

略シテ良薑ト云、藥舖ニ舶來ノモノアリ、先年福州ヨリ種ヲ傳フル、クマタケ蘭ト呼モノ此類ナリ、ソノ草寒氣ヲ畏ル、故ニ冬月外ニ置ケバ腐リ易シ、屋內ニ入置ベシ、苗ノ高サ四五尺許、葉長サ二尺餘、厚クシテ短毛アリ、薑葉ニ似テ光澤アリ互生ス、切レバ樟腦ノ香アリ、當年出タル幹冬枯レザレバ、翌年六月ニ至リ、ソノ梢ニ花ヲ開ク、然ドモ多クハ冬ノ中ニ莖枯レヤスシ、ソノ花初出ルトキ葉ニテ卷ク、後ニ葉ヒラケバ花ノ穗六七寸許、莖花トモニ白色ニシテ、光アリテ蠟花ノゴトシ、花ノ形鳳仙花ニ似タリ、而シテ鳳仙花ハ二瓣、コレハ一瓣ナレドモ、二瓣ナラビタル濶サナ

諸人貴せんぐんじゆす、すし、しやうが、うす、其外諸色市立也、

〔名物鹿の子上〕題神明市

神風は吹ともわかじ生姜市　一漁

生姜市　燕宴舍安士

牛車生姜車耳押遺禮

〔梅園日記一〕飯倉神明

毎年九月、此神明祭に、參詣の人、必生姜を買ふ事あり、山中稠有の、芝神明宮開始緣起石塚豐芥所藏に、生姜を此神へ奉る事は、昔社を造立せし飯倉山は、近邊皆赤土也、赤土には種を殖ずとも、生姜おひ出る物なり、自然に出來たる物故に、取あへず神に奉りし事、例になれり、又大石千引の、野乃舍隨筆に、神明祭に生薑を鬻事は、論語鄕黨篇に、不撤薑食とある注に、薑通神明去穢惡、故不撤とあり、これより誤るかとある人いへり、などあり、按するに、これらの說うけがたし、皇太神宮年中行事に、四月十四日、遠江神戸所進種薑子良宿館南垣內所奉殖也、九月御祭之時御饌所供進也、とありて、伊勢の神宮にて、九月の御饌に奉りしを、そのかみこゝにうつしたる遺風なるべし、

〔嬉遊笑覽六下飮食〕生姜市は、貞享江戸鹿子に、九月十六日、芝神明祭、鮨、しやうが、うす、其外諸色市立なりとあれば、久しきことゝみゆ、俗に目くされ生姜とて、此市には目のたゞれなどしたる者の售るを求む、翺隨筆に、拾芥抄食禁物部に、三月五辛を食はず、九月生姜を食はずとあり、あさつき鱠は、雛の膳供にさだまり、芝神明の生姜祭り、食品にあらずして何ぞといへり、げに本草に、孫思邈云、八九月多食薑、至春多患眼云々、孕婦食之令兒盈指、とあり、目くされ生姜は、この儀にはよるべからず、その辛味つよく目にしむの意なり、これを相贈ることは、其時肥たる節物なればなり、其うへ古諺あり、貞德百韻に、生姜手が三へぎと筆にかすませて、其自注に、手がはじかみならば、生

〔建久三年皇大神宮年中行事四月〕十四日風日祈宮祭禮中略
遠江神戸種薑、詔刀御門ニ捧参テ、風日祈詔刀畢後、八重榊ノ上ニ進也、件種薑ハ、兼日ニ酒殿ニ進納、今日件出納、從西申ク、今年ノ四月ノ十四日ノ今時以、掛畏キ天照坐ス皇太神ノ廣前ニ、恐ミ恐ミモ申ク、宮司ノ常モ催奉ル、遠江神戸種薑ノ御贄ヲ奉狀ヲ、平ク安ク聞食テ、朝廷寶御位無動、常石堅石ニ、夜守日守ニ、護奉幸給、阿禮坐皇子達ヲモ慈給ヒ、百官仕奉人等ヲモ、天下四方國々人民ノ作食ル、五穀豐饒ニ恤幸給ト恐ミ恐ミモ申、中略抑遠江神戸所進種薑、今日供進ノ用殘、禰宜中ニ分配、而禰宜各以其內子良宿館ノ南ノ垣內ニ所奉殖也、爲物忌父等之役奉殖、然後九月御祭之時、御饌ニ所供進也、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕生薑　河內嶺岩間ノ東邊稲暖地ニシテ薑ニ宜シク、逸見筋信州ヘモ駄運販賣ス、中略中郡玉川村、西條新田村ノ生姜肥大ニシテ筋ナシ、

〔豐後國志三速見郡〕土產　薑、石垣莊別府村、及朝見鄉濱脇村多出、

〔玉露叢十八〕一寬文五年正月ニ、將軍家ノ仰出シ、
一葉生姜　三月ヨリ

〔鹽尻六〕薑を撤せざるは、往昔食饌に有し物故に、これを食せずして盤盂に殘置、たうべざる事なりと、淺見氏いへり、誠に文義明らかにして、おもしろしといひ侍りしに、岩付氏がいふ、此事古書に證なくば、今說用ひがたしと、予〇天野信景曰、四書備考孔安國云、齋禁葷物、薑辛而不臭、故不去、夫雖齋亦不去、則常食之有薑可知云々、淺見氏が博識考所有てかいへるなるべしといひし、南史の婁子野が傳に、孔稱不撤といひ、百川學海にのする荊公の問に、劉貢が答ふる所皆謬れり、本草に孔子民をすゝめて、はじかみを食せしむるといへる、可笑の事也、

〔江戶總鹿子名所大全二年中行事〕九月
十六日　芝神明祭

薑產地

右年料請内膳司漬造、至于明年三月更易鹽精、斂隨殊多少、(但如殘薑一石、料鹽一斗、精五斗之類、)始當年九月迄明年七月供之、

〔庖丁聞書〕一生姜飴は、雪飴のごとくもりて、上におろし生姜を懸て出す也、

一同(○引渡)に生姜を組付る事は、穢の氣を去との事也、此ゆへに用ゆ、

〔毛吹草三〕山○城○ 干姜 生姜

〔和漢三才圖會九十九(葷草)〕生薑

生薑處々皆有之、山州綺田(カバタ)、平尾、殿村之產雖稍老而肥大無筋、肥州長崎、因州長柄之產亦不劣、

〔成形圖說二十四(菜蔬)〕波自加美(○中略)

乾生薑延喜主計式越前薑見えたり、今藥肆中乾薑と呼ものは、三河遠江わたりより出す、外白内黐黒に、堅實ものなり、遠江薑名高し、又近來生乾薑と呼倣ものあり、皆切片て日乾藥用に用ふ、伊豫の產を良とす、

〔延喜式二十四(主計)〕越○前○國○(○中略)

中男作物(○中略)薑

〔延喜式十五(內藏)〕諸國年料供進

干薑小一百斤 薑種十石 右遠○江○國○交易所進

〔延喜式二十三(民部)〕交易雜物 遠江國(中略)干薑一百斤、種薑十石、

〔延喜式三十七(典藥)〕諸國進年料雜藥

遠江國十三種(○中略)干姜八十六斤、

〔二宮年中行事三月〕三日種薑御贄事

遠江國濱名神戸所課也、宮司正月一日遣符、今日於離宮院奉送二宮、分配方々、目代祝部散行也、

〔宜禁本草乾五菜〕生姜　辛微温、九月採、殺半夏毒、久服少智少志、傷心氣、論語云、不撤薑食、言可常噉、但勿過多、爾、主傷寒、頭痛、鼻塞、欬逆上氣、止嘔吐、去臭氣、孟洗云、去痰下氣、多食少心智、八九月食傷神、須熱即去皮、要冷即留皮、去燥糞、削如小指、長二寸、塗鹽、內下部中立通、善治狐臭、生姜汁塗液下、絕根本、八月九月食姜、至春多患眼、損壽減筋力、暴赤眼無瘡者、古銅錢刮薑上、取汁點目、熱淚出來日愈、

子姜　日用本草曰、生姜之嫩者、秋社前收糟藏之、辛温、醋食之、眼疾上壅痔病、動脚氣、發灸瘡、調中、開胃止嘔下氣、

〔延喜式三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料、○註略僧別日菓菜料、○中略漬薑七勺、

仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、○中略干薑四銖、海菜料并汁物料各二銖生薑一合九勺五撮、好物料一勺、菹菜料二勺、汁物料一五撮、菓餅料一勺、漬菜料五勺、薑料一合、有莖生薑一房、生菜料

〔延喜式三十七典藥〕元日御藥中宮准此白散一劑、度嶂散一劑、千瘡萬病膏一劑、○中略所須、○中略干薑一分、

臘月御藥　犀角丸六劑、芍藥丸三劑、○中略所須、○中略干薑二兩、

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜

日別一斗、○中略生薑八房、准二升、六七八月

漬年料雜菜○中略

稚薑三斗、料鹽六升、汁糟一斗五升、

右漬秋菜料

生薑四石五斗、料鹽一石四斗二升、汁糟四石二斗、柏卅五把、退口料匏二柄、汲汁料擇薑女孺單五十人、女丁十二人半、給間食、人別日八合

薑利用

四五月古根をもぎ取事、唐の書にあり、しかれどもこれははやかるべし、鹽漬醬漬糟にも藏し、又は乾姜にこしらへ、藥屋にうるもよし、さて七八月根薄あかく、紅をぬりたるごとくなるを、紫薑と云なり、此時料理によし、市町にも賣べし、其後莖葉枯いろになり、根によく肉いりて、九月の末、十月の節に入比ほり取、屋の内の暖かなる濕氣なき所に穴をほり、わらを合せて埋みをき、用にまかせて、わきより手風の觸ざる樣にとるべし、又雪霜のをそくふる國にては、十月まで置てほり取ば、彌からくなる物なり、又ほり取て穴には入ずして、棚をかき、下にも遮りをも、こもにてよくしとみ、其中へ生姜を入、下にぬか火ををきてふすべ濕氣さりてしとみたる口をよくふさぎをくべし、尤畠よりほり取時、土をよく去べし、又生姜の時、賣餘りたるを、干姜にすべし、淨く洗ひざつと湯煮して、かき灰にませ乾し上て、籠などにもりをきて、藥屋にうるべし、生姜にてうりたるに、價をとらぬ物なり、若自分に用ゆるは、灰を交るに及ず、功能ある物にて、日用かくべからずといへども、秋姜を食すれば、夭年を損ずと醫書に見えたり、されども世俗なべて秋よく用ゆるものなり、但秋は用捨して多くは食すべからず、

〔成形圖説菜蔬二十四〕波自加美〇中略

其圃は濕地によろし、されど寒暑を畏るものなり、夏は炎威を覆ひ、冬は凝澌を防ひ、地を易て暖處に移し養ふべし、しかはあれど乾たる處へ植れば、又枯萎なり、二月の頃舊根を栽れば、四五月にいたり黄芽を發し、既に新根を生ず、今江門近郊にては、土窖の中に釀し養ひ、四時絶ることなし、これ日用かくべからず、常にくらひて精神を爽にするものぞ、

〔藥經太素上〕干姜　大温ニシテ熱味辛

水ニ付テ能洗テ、石炭ノ氣ヲ去、少焙ヲ用、冷痢腹中ノ痛ヲ治、血ヲ止ト胸ノ痛ヲ治ニハ、毒ヲ不取治、勁除胸滿、除霍亂腹心疼、

かげ藪かげなど吉といへ共、全くの陰は悪し、半日二時之内陰有所吉、種子置にくき物也、又種子取時分を大事にす、今大略は三霜四霜あてゝ取たるよし、扨生姜は遲く座取て、八九月迄も子を生ず、其若根はいまだ實いらず、其不熟なるを同じごとく取置故、それより朽る、又朽ずともそれは種子にならず、それをより分て、實のよく入たるを種子にすれば吉、夏秋旱の年には座取遲し、故に實不入、其年の生姜は腐安し、夏中雨繁く、秋旱の年には吉、可心得、

一唐茼　肥たる土に早く植て吉、是もしやうが唐胡麻などのごとく、末久敷實のるゆへ、遲く植ては實少し、早ければいか程も實多くなる、種子は七八月取、二月始に植、

〔農業全書四菜〕薑

しやうがはすぐれたる上品の物なり、論語にも不撤して食すとあり、史記にも廣くうへて、其利の過分なる事を載たり、うゆる地は、細沙の肥地に宜し、深く耕し糞を多くうちて、度々犂返し、塊少もなく、縦横四五遍もかき熟しをき、三月うゆる時、又かきこなし、さて種子の疵なく芽の少出んとするを分て、指三つのふとさ程を一かぶとし、がんぎを間一尺ばかりをきて深く切、ならびの間五六寸にしてうへ、土を少おほひ、其上より馬屋ごゑのよくかれ熟したるを、四五寸もおほひ、少培ひ置べし、さて芽立少出ると、芸り中うちし、人糞油精は云に及ず、馬糞麥ぬかなどを厚くおほひ、中うち培ひ段々して、後は高き所を溝のごとくし、萬手入をよくすれば、利潤他の作り物の及ぶ物にあらず、されども早に痛み、又寒氣のつよき所、又は濕氣のつよきをばにくむゆへ、日あてのつよき所ならば、六月は日棚をかき、蘆すゝきなどを、葉ながらあみておほひ置べし、濕氣つよくは畦を高くし、溝を深くして、濕をもらすべし、ひでりに早くいたみ、又濕氣をも嫌ふ物なるゆへ、初うゆる時、しやうが畠はよく吟味し、日當つよからず、濕はもれやすく、沙がちなるによしと知べし、さて四五月芽立漸くさかへしげりて後、竹のへらにて根の一方を掘、薑母をもぎ取、

り、年中行事に見ゆ。

〔本朝食鑑三 葷辛〕生薑（訓志也宇加、又云波之加美）

集解、處處所在有之、采去年之舊根而二月種之、四五月生淡碧黃芽、根亦碧白、附于舊根而生、倶如初生蘆芽漸長、葉似竹葉對生、而味辛香、靑莖根頭著紅皮、其新根橫連如列指狀、至秋尙壯、霜後作老薑、性暴濕畏日、若犯之値夏秋之暑則多無根爾、近時采新根同生梅紫蘇葉作醃以經年、或作味噌漬糟漬蜜漬等物、又采老薑臘月水曝日乾、以藏貯之、使不服水土者對而服之、故爲行旅之具、亦能不被犯霧濕煙瘴之氣、或治冷腹痛、呼號寒薑、是白薑之不去皮者也、若無寒薑則用乾白薑亦可矣、

薑種類

〔成形圖說二十四 菜蔬〕波自加美（書紀卽薑也、今も京人は子薑を波自加美と稱へ、母薑をはしやうがとは呼ける、○中略）

此種大小柔硬の品あり、九州及(マタ)は四國わたりに產は大にして柔に、尤辛辣なり、關東地方のものは皆小なり、中に柔硬兩種あり、柔にして筋少きを良とす、

〔重修本草綱目啓蒙十八 葷辛〕生薑

一種長崎ノオホセウガト呼ブアリ、一名長セウガ、長崎セウガ、形最肥大ニシテ佛掌薯(ツクネイモ)ノ如シ、辛味少シテ糖漬ニ可ナリ、藥ニ入ルヽニ堪ヘズ、

薑栽培

〔延喜式三十九 内膳〕耕種園圃

營薑一段、種子四石、總單功七十八人、耕地五遍、把犁二人半、馭牛二人半、牛二頭半、料理平和二人、糞二百十擔、運功卅五人、分畦四人、殖功四人（四月）、芸三遍、第一遍九人、第二遍七人、第三遍六人、採擇功六人、

〔清良記七上〕生姜苛類之事

一生姜　十月に種子を取て、三月に植、但寒に痛ゆへ、いづくにても柹の葉の間より雲を見て、雲の見へざる時を、時節と心得植る吉、旱に痛ゆへ、少ばかり水氣の有畑、又半日は陰の有畑吉、木

來りし所也、薑の如きは、ハジカミといふ、既に上世の時に聞えしを、倭名鈔にかくいひし事、其義如何にやあるらん、また倭名鈔に、蜀椒をナルハジカミ、一にフサハジカミといひ、辛夷をヤマアラヽギ、一にコブシハジカミと云ひ、蔓椒をイタチハジカミ、一にホソキといひ、呉茱萸をカハハジカミといふと註せり、古にハジカミといひし物、皆其味辛辣の物を云ひしなり、ハジカミといふ義も、蜀椒辛夷等の類を呼びし所のごときも、並に詳ならず、

〔倭訓栞中編十九〕はじかみ　薑をいふ神武天皇の歌にもよみたまへり、今子薑をはじかみ母薑をこぞやうがとするはいかゞ、歯䶢の義なり、辛辣の味をもていへり、新撰字鏡に椒を訓せり、倭名抄に生姜を呉のはじかみといふによれば、神武天皇のよませたまひしは山椒なるべしといふ説あり、主計式に越前國薑見えたり、神名式に波自加味神社あり、神宮雜例集に種姜を獻ることも見え、江戸芝神明にこぞやうが祭といふあり、和名抄に薑をあなはじかみ、蜀椒をなるはじかみとも、ふさはじかみとも、辛夷をこぶしはじかみ、呉茱萸をかははじかみと訓せり、新撰字鏡に、檓字をくまはじかみと訓せり、檓の誤なるべし、又秦椒をいだはじかみとも茖はじかみともよめり、臭氣をいふ、

〔倭訓栞後編九〕しやうが　生姜をいふは、音の急語なるべし、姜呉音かう也、しやうが石は即薑石也、

〔古事記中神武〕然後將擊登美毘古之時、〇中略歌曰、美都美都斯、久米能古良賀、加岐母登爾、宇惠志波士、加美、久知比比久、和禮波和須禮士、宇知氐斯夜麻牟、

〔古事記傳十九〕宇惠志波士加美は所殖薑なり、薑は今もたゞ波士加美と云を、和名抄には、生薑は和名久禮乃波之加美、俗云阿奈波之加美、乾薑和名保之波之加美と見え、字鏡には、干薑久禮乃波自加彌と見ゆ、これらに久禮乃と云るは、いかなる由にか、加賀國加賀郡波自加彌神社式に見ゆ、又大神宮四月十四日祭に、遠江神戸より進れる種薑を獻る神事あ

〔倭名類聚抄 十六薑蒜〕薑　膳夫經云、空腹勿食生薑、居良反、和名久禮乃波之加三、俗云阿奈波之加美、

乾薑　養性要集云、乾薑一名定薑、和名保之波之加美、

〔箋注倭名類聚抄 四鹽梅〕醫心方引同、說文作薑、云禦濕之菜也、昌平本下總本有和名二字、按本草和名、乾薑生薑並擧、唯云和名久禮乃波之加美、不載阿奈波之加美、保之波之加美之名、醫心方、生薑、和名都知波之加美、○中略 養性要集無傳本、按隋書唐書皆有張湛養生要集十卷、則性恐生之譌、然草類昌蒲條引作性、本草和名引亦皆作性、則源君所見從心無疑、今不徑改、本草和名引、定薑作定美、昌平本有和名二字、按生薑見大膳職內膳司式、干薑見民部省式、稚薑見內膳司式、種薑見民部省式、本草圖經云、薑苗高二三尺、葉似箭竹葉而長、兩々相對、苗靑根黃、無花實、秋採根、於長流水洗過、日曬爲乾薑、李時珍曰、五月生苗、如初生嫩蘆、而葉稍濶、葉亦辛香、秋社前後新芽頓長、如列指狀、

〔類聚名義抄 八艸〕乾薑 ホシハシカミ

〔易林本節用集 加食服〕干薑

〔和爾雅 七菜蔬〕乾薑又云白薑

〔類聚名義抄 八艸〕薑 音姜、クレノハシカミ、俗云、アナハシカミ、ツチハジカミ、ハジカミ、ナルハシカミ、　生薑 和名同上

〔下學集 下草木〕生薑

〔易林本節用集 之草木〕生薑

〔和爾雅 七菜蔬〕薑 同薑　子薑 初生爲子薑、紫薑同、　母薑 宿根爲母薑

〔日本釋名 下草〕薑　端赤也、あを略せり、はしかみは薑と根の端赤し、

〔東雅 十三穀蔬〕薑 ハジカミ　神武天皇の御歌に、垣本に殖しハジカミクチヒヾクとよみ給ひしを、日本紀釋に、ハジカミは薑也、薑をもて口に銜みぬれば、ヒビクこと甚しきをいふと見えたり、倭名鈔には、薑讀てクレノハジカミといふと註せり、凡物の名、クレをもて呼びしは、皆これ吳國より

絕間にありて賞翫なり、めうがは專樹木の下などに種たるがよし、若さやうの地なくば、つねの畠にうへ、其わきにかきをゆひ、上に棚をかまへ、薯蕷葡萄、其他何にても、蔓のはひまとひて、上をおほふ物の類を側にうゆれば、みやうがさかへ、兩樣の利あり、

蘘荷利用

〔宜禁本草 乾五菜〕蘘荷　微溫、中蠱者服其汁、臥其葉、卽呼蠱主姓名、主中蠱及瘧、(食赤者爲辟、藥用白者、)多食損藥勢、又不利脚、人家種白蘘荷辟蛇、其性好陰、在木下生者尤美、其根堪爲葅、

〔延喜式 三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料、〇註略　僧別日菓菜料、〇中略　蘘荷漬、菁根漬各二合、

仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、〇中略　蘘荷二合、漬菜料

〔延喜式 三十九內膳〕漬年料雜菜

蘘荷六斗、料鹽六升、汁糟二斗四升、〇中略　右漬秋菜料

〔重修本草綱目啓蒙 十隰草〕蘘荷〇中略　增、蘘荷ノ莖ヲ取リ、水ニ浸シ又雨ニ晒セバ、外皮爛レテ筋ノミ殘ル、コレヲ苧ニ代テ用ユ、ソノ形相似タレドモ、至テヨハシ、五月節句ノ人形ノ飾ニ多クコレヲ用ユ、縫物ニハ用ユルニ堪ヘズ、

蘘荷產地

〔續江戸砂子 一〕江府名產 近在近國

早稻田茗荷　牛込の內高田の近所

他所にすぐれて大く美味也、江府のめうが多く此邊より出る、

薑名稱

〔新撰字鏡 草〕干薑 久〇禮〇乃〇波〇自〇加〇彌〇

〔本草和名 八草〕乾薑一名定姜、出養性要集、生姜一名地辛、一名揚樸、一名蕆、音織　一名茽、音辨、已上二名出兼名苑、和名久禮乃波之加美、

〔倭名類聚抄 十七園菜〕薑　兼名苑云、薑居良反　一名蕆、音織、和名久禮乃波之加美、

蘘荷栽培

〔本朝食鑑 三 葷辛〕蘘荷（訓美也加、古訓米加、）

集解、蘘荷處處樹下及陰處多生、二月種根、四五月生苗、似薑之葉莖而稍潤心、芽卷起而抽、如竹葉蘆芽既長、高四五尺、根有赤白二種、夏月及七八月根旁生子、其子卽花、似藕花之未開而平扁、葉葉相重至葉心亦同、其色上淺紫而尖、下碧白而有柔莖、俗稱蘘荷子、以可爲菹、葉莖亦嫩時可啖、其根辛而不佳、故啖之者少矣、八九月踏却其苗令死、則根滋茂、冬月以馬屎中之稻草而覆其根、或鋤耘加人糞、則値寒不凍死、至春不待種蒔而生、是永生之法也、蘘荷自古用之、本朝式內膳部載之、未言其根葉子花之別焉、

〔延喜式 三十九 內膳〕耕種園圃

營蘘荷一段、種子三石、總單功卅五人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上作二人、九月糞百卅二擔、運功廿二人、殖功三人、芸二人、採功二人、

〔淸良記 七 上〕蘘荷之事

一夏茗荷　一晚茗荷

此二色別て作りて無益物也、植樣は右蕗の如く、二月末より四月迄は莖を用、六月より八月初迄子を用、蕗には劣たる物也、然共畑を不費して、木陰屋かげに植るゆへ、外の妨なし、

〔農業全書 四 菜〕蘘荷

みやうがは、樹の下其外日かげ、陰地を好む物なり、二月に根を分てうゆべし、（一說に鍬をいむ、鍬にてほるべからずともいふ、）一度うへて、年久しく其まゝ置て、さかゆる物なり、二月比草あらば取去、糞土をおほひ置、秋花を取、十月上をふみ付、莖葉を枯し、ぬかあくたなど多くかけをけば、來年よくさかゆる也、又是に夏秋の二種あり、五六月根のわきより花を生じ、秋までも相つゞきて生ず、是を夏みやうがと云、又七八月花出るを、秋みやうがと云なり、ともに料理によき物なり、夏を取分作るべし、諸菜の

荷蕁苴皆大名、後世說者多歧耳、

〔類聚名義抄八艸〕蘘荷穰音メカ

〔下學集下草木〕蘘荷蘘或作名字也

〔運歩色葉集見〕茗荷　蘘荷

〔易林本節用集美草木〕蘘荷

〔多識編二隰草〕蘘荷、米賀、又稱美也宇加、

〔東雅十三穀蔬〕蘘荷メガ　倭名鈔に、馬琬食經を引て、蘘荷はメガ、赤色者爲佳と註せり、卽今メウガといふもの是也、義不詳、或人の說に、メガとは若荷の字の音をよぶなりといふ、然かるべしとも思はれず、馬琬の食經には赤色を佳とし、又本草圖經にも其根似薑芽などゝも見えたり、メカとは其芽の赤きをいふなるべし、

〔倭訓栞後編十六〕めうが　蘘荷を訓ず、和名抄にめがと見えたり、芽香の義なるべし、字音にはあらじ、俗に芽をめうがたけといひ、花をめうがのこといへり、莖は干て軍用の草鞋とすべし、根を眼科にめう石とす、薮めうがは花めうがともいふ、實を伊豆縮砂と稱せり、山めうがは高良姜也、子を紅豆蔻と名くといへり、めうが草あり、俗說に蘘荷を多く食へば愚ならしむるといふは、東坡が志林に、本草に生姜多食損智とあるによて、无佐吾愚、吾食姜多矣と、戲れし事ありしを、訛りて傳へいふなるべしといへり、

〔傍廂前篇〕蘘荷　生薑

蘘荷をメウガといひ、生薑をセウガといへるは、俗の音便なるべし、和名抄に蘘荷米加、薑久禮乃波之加美とありて、メウガとも、セウガともなし、同じ形容なれば、蘘を米加といへるによりて、薑を兄香として、妹兄の義にかなへたるなるべし、いづれも香氣のある中に、わきて薑は香氣深ければ、兄香といひしを、セウガと誤り、妹香をメウガと誤りしなるべし、皆音便より崩れたるなり、

蘘荷名稱

ちばなの匂ひもさすがに遠からざれば、人々の契も昔にかはらず、猶此あたりえ立さらで、舊き庵もやゝ近う、三間の茅屋つぎ〳〵しう、杉の柱いと淸げに削なし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚くしわたし、南に向ひ池にのぞみて水樓となす、地は富士に對して、柴門景を進てなゝめなり、淅江の湖三ッまたの淀にたゝへて、月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ、名月のよそほひにとて、先ばせをを移す、其葉廣うして琴をおほふにたれり、或は半吹をれて、鳳鳥の尾をいたましめ、靑扇破れて風を悲しむ、たま〳〵花咲どもはなやかならず、莖太けれども斧にあたらず、かの山中不伐の類、木にたぐへて其性尊し、僧懷素は是に筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て、修學の力とせしとなり、予其二ッをとらず、只此陰に遊びて、風雨に破れやすきを愛するのみ、

ばせを植てまづにくむ荻の二葉哉

〔本草和名 十八〕白蘘荷(音而羊反) 一名覆葅(赤也、楊玄操音姉反、○姉下恐有脱文) 和名女加。

〔倭名類聚抄 十七〕蘘荷(讓何二音、和名米加、) 馬琬食經云、蘘荷赤色者爲佳矣、兼名苑云、一名覆苴(伏且二音) 唐韻云、蓴苴(上音柏) 大蘘荷名也、

〔箋注倭名類聚抄 九〕本草和名、白蘘荷同訓、今俗呼女字賀、○中略 本草白蘘荷陶注云、於人食之赤者爲勝、藥用白者、蜀本圖經云、葉似初生甘焦、根似薑牙、其葉冬枯、○中略 按本草陶注云、今人乃呼赤者爲蘘荷、白者爲覆苴、同一種爾、說文云、蘘荷一名蒚蒩、史記司馬相如傳作猼且、漢書作巴且、注引張揖曰、蓴且蘘荷也、史記索隱云巴且蘘荷屬、楚辭大招、膾苴蓴只、九歎注、蘘荷蓴蒩、皆字異音近、然則蕧苴古蓋作復且、俗加艸頭耳、非假盜庚之蕧字履苴字也、○中略 廣雅、蘘荷蓴苴也、古今注蘘荷似䕮苴而白、䕮苴色紫、花生根中、花未散時可食、葉似薑、宜陰翳地種之、常依陰而生、王念孫曰、古今注以紫爲蓴苴、白爲蘘荷、別錄注、以赤爲蘘荷、白爲蓴苴、廣韻則云、蓴苴大蘘荷、是又以大小分也、其實蘘

〔後拾遺和歌集二十釋教〕維摩經の十喩のなかに、この身芭蕉のごとしといふこゝろを、

前大納言公任

風ふけばまづやぶれぬる草の葉によそふるからに袖ぞ露けき

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年七月九日、藥師堂谷邊、有獨住僧號淨蓮、於件坊前庭優曇花開散之由風聞、鎌倉中男女爲觀之成群、自二品〇平政子遣遠藤左近將監、爲後被見之處、芭蕉花之由申之云云、

〔蕉峯文集一賦〕芭蕉不耐秋賦 癸卯七月廿五日匆齋即席

芭蕉芭蕉吾感其榮枯之有時、維葉之卷漸展而垂、維花之生先結而披、豈信湘水之夢妄感彭氏、唯想塞外之雨驚回牧之、維秋風之暴、葉破而萎、露華之脆、花凋而衰、誰不傷哉、誰不悲哉、試比愛寵之廢、孰與相如於卓文君、譬之壯士之老、奈何覇陵之舊將軍、猶期雪中之殘葉、摩詰之墨痕有聞、對此豈不勵節義哉、見歷代忠臣之勤、嗚呼芭蕉枝葉雖枯、知本根之在、待來歲之再榮、勿恨秋風之不耐、匪啻此物之感人、人亦可隨時進退、何必憐敗葉之見於外、不悟本心之存於內哉、

〔芭蕉翁文集〕芭蕉を移す辭

菊は東籬にさかえ、竹は北窻の君となる、牡丹は紅白の是非ありて、世塵にけがさる、荷葉は平地にたゝず、水淸からざれば花さかず、いづれの年にや栖を此境に移す時、芭蕉一もとを植ゆ、風土芭蕉の心にや叶ひけん、數株莖を備へ、其葉茂り重りて庭をせばめ、萱が軒端もかくるゝ計なり、人呼て草庵の名とす、舊友門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、所々に送る事年々になん成ぬ、一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破んとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたり近き人々に、霜の覆ひ風のかこひなど、返す〴〵賴み置て、はかなき筆のすさみにも書殘し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅ねのむねにたゝまり、人のわかれ、芭蕉のなごり、ひとかたならぬ侘しさも、終に三とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉に泪をそゝぐ、今年五月の半、花た

〔中山傳信錄六物産〕蕉實、芭蕉所結實名甘露、花紫紅色、大如瓢、日開一瓣、結實如手、五六指並垂、採久之膚理似藕之最嫩者、可成熟之、如蜜而甘、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕甘蕉　バ。セ。ヲ。ハ。和名鈔　ニ。ハ。ミ。グ。サ。古歌名　バ。セ。ヲ。今名　ウ。ド。ン。ゲ。東鑑、花ノ名、　一名芭苴事物異名　扇仙群芳譜　扇子仙事物紺珠　草帝同上　綠叅差同上　傳且同上　翠旌名江物書　綠天秘傳花鏡　羅裙鬼琅車志、葉ノ名、

元來和産ナク、南方ノモノ故ニ寒ヲ畏ル、唐山ニテ南方ニハ品類多ク、北方ニハ只一品ト云、本邦モタヾ一品ナリ、花ヲ生ズレバ、旁ヨリ小苗ヲ生ジ、本根ハ枯ル、東鑑ニ此花ヲ優曇花（ウドンゲ）ト云、年々ハ花サカザル故ナリ、恭モ經六年方有花ト云、花ノ形最大ナリ、一尺餘ノ長サノ、粗クシテ節多キ莖下垂シテ、其端ニ一花アリ、黃白色ニシテ蓮花ノツボミノ形チノ如シ、集解ニ似倒垂菡萏ト云ハ是ヲ指ナリ、花瓣多シテ數十重アリ、一日ニ只一瓣開キ落ツ、瓣ゴトニ中ニ蘂多アリ、實ハ莖ノ本ニ連リ生ズ、長サ一寸許、徑五六分、五稜ニシテ綠色、熟セズシテ落ツ、北間者但有花無實ト云是ナリ、嶺南ニハ紅熟シ、米穀ニ代ル者アリト云、本邦古ハ庭ニ栽ルコトヲ忌、故ニニハミグサト云、唐山ニモ屋内不可多種、芭蕉久而招祟ト、遵生八牋ニ見タリ、

〔廣益地錦抄五〕芭蕉　本草に年々子を生ズ、草中尤大成ルものなり、暮春に葉を出、秋に止といへり、水腫脹滿に生葉敷て妙なり、又血をよく止ム、きりきずをばせをの皮にてまけば、はやく血をとめてきずいゆ、ばせを油をとりて髮をくしけづれば、鬢黑つやよく、毛のぬけるをとゞむ、花は初夏に出て、一日に一葉づゝひらき、冬までさく、さかり久敷なり、稀に花出故優曇花といふ、

〔剪花翁傳四七月開花〕芭蕉　花黃色、開花立秋後より葩開くこと一日に一枚宛、凡百日の間に咲也、莢の長さ二尺又は三尺ばかり伸る也、方半陰、地三分濕、土回塵、肥大便、寒中に入べし、株に生ずる芽を、春彼岸より三月中旬迄に缺分植べし、

れば省くべきよし、餘材抄にもいへり、焦は韻鏡二十六轉宵韻の字なり、セヲの如く聞ゆる故に、轉じてかくいへるか、褉子をアヲシといふも同じ、そも〳〵韻に用るはアイウエオ等なれば、セオと書べけれども、拗音のヲをかけるは、直音の字なれども、御國の音より見ればなほ拗音なる故に、御國の拗音の韻を用しにや、御國の音韻は紀伊、基肄、都宇、斗於、喩唹、弟翳、頴娃、など丶は韻けども、セオとは韻かず、焦は子姚切にてシエウの約まる音ゆゑに、拗音にておのづからセヲの如く聞ゆるなり、紀長谷雄卿の書給へる、大藏太夫の七十壽序にも、自のを發昭と書給へり、この昭字も同じ宵韻の字にてセヲなり、

〔茅窻漫錄下〕庭忌草

芭蕉を庭忌草と名付くるは、桔梗をきちかふといふとおなじく、字音にては、歌によみにくきによりて名付たるにや、庭忌といふは、佛書に此身如二芭蕉一と云ふ、其葉脆く風に破れやすき故に、庭に植うる事を忌むとみえたり、西國にては神社佛閣より外は植ゑず、然るに此草に花咲く時は、優曇華の咲きたるとて、大に貴ぶも亦をかし、

〔大和本草七草〕芭蕉　潛確類書曰、懷素治二芭蕉一取レ葉代レ紙而書、三體詩註、古人多喜書二芭蕉葉一如二懷素一種二芭蕉一供レ書是也、本草濕草ニ載ス、軟地ニウヘテ繁ヤスシ、年々子生ズ、草中最大者也、暮春生レ葉至レ秋而止、其新卷方ニ舒レバ新葉又生、冬ニ至テ根及莖不レ枯、年々發生歷レ久而大開二黃花一極稀、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕芭蕉　甘蕉　芭苴　天苴　和名發勢乎波○中略

按芭蕉薩摩多有レ之、畿内寺院希有レ之、人家忌レ之不レ植、凡經二三歲一者剝レ皮織レ布絢レ繩、自二琉球一多出二芭蕉布一、光白色美二於練絹一、而弱二於麻布一、其子呼名二比牟者吾一、今俗陰囊腫者用二芭蕉葉一裹レ之、亦有レ據矣、

鎌倉淨密法師庵優曇花開、遠近群集、二位禪尼使二左近將監見一レ之、曰芭蕉花也、蓋芭蕉以レ花開希有、人以爲二優曇花一也、按優曇花者乃是無花果之名也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕廣韻云、芭芭蕉、又云、蕉芭蕉、與此不同、本草甘蕉根陶注云、本出廣州、今都下東間並有、根葉無異、惟子不堪食爾、蘇注云、嶺南者子大味甘冷、北間惟有花汁、無實、開寶本草云、此花葉與芭蕉相似而極大、子形圓長、及生青熟黃、南人皆食之、蜀本圖經云、俗爲芭蕉、多生江南、葉長丈許、闊二尺餘、莖虛軟、圖經云、甘蕉今出二廣閩中、蜀川者有花、閩廣者實極美可啖、他處雖多而作花者亦少、近歲都下往往種之甚盛、皆芭蕉也、蕉類亦多、此云甘蕉、乃是有子者、葉大抵與芭蕉相類、但其卷心中抽幹作花、初生大蕚如倒垂菡萏、有十數層層皆作瓣、漸大則花出瓣中、極繁盛、紅者如火炬、謂之紅蕉、白者如蠟色、謂之水蕉、其花大類象牙、故謂之牙蕉、其實亦有青黃之別、品類亦多、閩人灰理其皮、令錫滑、績以爲布、如古之錫衰焉、本草衍義云、芭蕉三年已上卽有花、自心中出一莖止一花、全如蓮花葉亦相似、但其色微黃綠、從下脫葉、花心但向上生、常如蓮樣然、未嘗見其花心、剖而視之亦無蘂、悉是葉、但花頭常下垂、每一朶、自中夏開直至中秋後方盡、凡三葉開則三葉脫落、

〔下學集下草木〕芭蕉(バショウ)

〔多識編二隰草〕甘蕉、波勢乎、異名芭蕉、衍義天苴、史記注

〔東雅十五草卉〕卷柏イハグミ○中略　漢音により呼ぶ事、芭蕉をバセヲバといひ、蒴藋をソクトクといふが如き、皆是漢字傳へし後に、名づけしと見えたり、

〔古今和歌集十物名〕さゝ、まつ、びは、ばせをば、　　きのめのと
いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人にみえつゝ

〔信明集〕はせをば、長谷寺やけたりときくころ、
世中のたのみ所にせし物をはせをばかくややかんと思ひし

〔倭字例〕芭蕉
芭蕉は、倭名抄に、巴焦二音、倭名發勢乎波(ハセヲバ)とあり、古今集にもバセヲバと書り、波字は葉のことな

サフラムは近歳刊行せし六物新志に載せてより、始めて西洋歐邏巴、亞弗利加、亞細亞洲の諸國に生ずる、草花の蕊なることを人皆知れり、それまでは蠻國に生ずる紅花を、蜜にて製するものといひ、其草の形狀知れざるゆゑ、此邦山中に生ずる猩々袴といふ草を充てたる人もあり、漢土にも時珍の綱目までは知れざるにや、隰草の部に番紅花を出だし、釋名に泊夫藍撒法郎をならべ載せて、西番回回地天方國の紅藍花なりといひ、又獸部羊心の附方に正要を引きて、泊夫蘭は即回回紅花なりといひ、同腎の附方にも泊夫蘭と書けり、遵生八牋には撒夫蘭とも書けり、皆是番名を字音に假借する者にて、實物を見ざる故なり、形狀は新志に載せて、一種花の中心三線の蕊をなし、細き長舌の狀に似たり、その色赤黃にして味辛く、少苦を帶びて、油氣のあるに似たり、其氣芳烈にして人の鼻を撲つもの、又一種春苗を生じ、秋に至りて花を開く、六瓣にして其色緋黃、其香百合に似たり、花後に實を結ぶ、ともに三房をなす、根は韮蒜(ニラコビル)に似て、毬をなせり、然るに品類ありて、形狀其地に隨ひて少々異なりといへり、さもあらむ、以前浪華蒹葭堂へ、蕃國より贈り來るを寫眞し、一幅となし、人に見せらる、予〇茅原定其圖をこひ得て爰に摸す、〇圖略新志に載せたるものとは、形狀また少々異なり、萬國地球圖に載せたる形狀ともおなじからず、いかにも種類多しと見ゆ、此品近歳貴賤一統に珍重し、其價韓參に等しくすれど、時珍の綱目には、心氣鬱結、或は活血驚悸の症のみに用ひて、格別の功能を載せず、近歳主治を法のごとく數人に用ひ見るに、功能奇驗格別の事更になし、兎角にも末世に及びて、貴賤一統奇を好む癖情、世と推し移ると見ゆ、いふ程の功能奇驗あらば、漢土の書にも多く載すべし、當今清朝の方書、多く舶來するにも未見當たらず、此邦の主治方書は、往古より大抵漢土を法則とすれば、風土人情格別に異なる事はあるまじ、

〔倭名類聚抄草木二十〕芭蕉　唐韻云、芭蕉、巴焦二音、和名發勢乎波、其葉如席者也、兼名苑云一名甘蕉、

香紅花

彼岸より早春までにすべし、葉よく伸るときは、七八寸より二尺にもいたる也、下種は成長おそし、

〔草木六部耕種法四需根〕細條根ノ草ヲ作ル法
細條根トハ馬蘭細辛ノ類ヲ云フ、此ヲ作ニハ芍藥ヲ作法ノ如ク、壤土墳土ヲ深二尺モ細碎軟膨シ、根ヲ分テ亂散密邇ニ植エ置トキハ、夥ク番衍者ナリ、今年春植エタルヲ、翌年秋ニ至リ掘採ベシ、馬蘭根ハ箒ニシテ妙ナリ、細辛ハ藥物ナリ、

〔増補多識編二隰草〕番紅花、和名未詳、異名泊夫藍、綱目撒法郎、

〔物類品隲三草〕泊夫藍　ラテイン語サフラン、紅毛語フロウリスエンタアリス、又コロウクスヲリエンタアリト云、此物生草絶テナシ、乾花蠻國ヨリ來ル、東壁曰、番紅花出西番回回地面及天方國、卽彼地紅藍花也、按ズルニ此說大ナル誤ナリ、泊夫藍番國產ナルガ故、李氏モ其何物タルコトヲ知ズ、花色紅ニシテ頗紅花ニ似タルヲ以テ、妄ニ番紅花ヲ以テ命ズ、近世紅毛人ドヾニヤウストト云者本草ヲ著ス、泊夫藍ヲ圖スルコト甚詳ナリ、根葉山慈姑ニ似テ、五瓣ノ赤花ヲ開ク、蠻國ヨリ來ル所ノ泊夫藍ハ、卽其花ノ蕊ナリ、紅藍ノ類ニハアラズ、有圖可考、

〔重修本草綱目啓蒙二十隰草〕番紅花　チヤフラン羅甸　サフラトン同上　フロウリスエンタアリ　紅毛スフロウリスハ花ナリ　コロウクスヲリエンタアリ同上　コロウタスハ花ナリ　一名咱夫蘭獸類
羊心附方ノ撒藩蘭遵生八牋
此書ニハ紅花ヲ蜜ニテ製スト云ハ非ナリ、番國ニテサフラトンント云草ノ花蘂ヲトリタル者ナリ、舶來アリ、形紅花瓣ノ如ク至テ細シ、味苦クシテ梔子ノ氣アリ、色紅黃ニシテ潤多シ、年ヲ經レバ漸ク乾キ、色黑ク香氣薄クナルナリ、

〔茅窻漫錄中〕サフラム花

莖開花紫碧色、五月結實作角子、如麻大而赤色有稜、根細長通、黄色、人取其根以爲帚、〇中略

按馬藺音寄、俗云波〇平恐牟誤 葉長一二尺、似薤水仙及蘭葉而甚勁硬、三四月開花淺紫色、六瓣、三大三小可愛、人家種者根可爲帚者未見之、倭名抄爲燕子花之訓者誤也、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕蠡實 バ〇リ〇ン〇 バ〇レ〇ン〇 ト〇ウ〇ラ〇ン〇江州 ネ〇ヂ〇バ〇リ〇ン〇筑前 ネ〇ヂ〇ア〇ヤ〇メ〇紀州 ネ〇ヂ〇ガ〇ネ〇尾州 一名紫蘭汝南圃史 掃帚通雅 掃帚草救荒野譜 蠡實草同上 馬蓮花續醫說 馬蓮草藥性要略大全 馬楝花宣明方 馬楝草盛京通志

人家庭際ニ多ク栽ユ、最モ繁茂シヤスシ、山野ニハ自生ナシ、葉ハ溪蓀アヤメ葉ニ似テ細ク厚ク、中心殊ニ厚シ、徑リ三分長サ二三尺、一根數百葉、綠色ニシテ微白ヲ帶ブ、二三ニネヂレタルモノ多シ、秋ニ至テ葉枯ル、其根細クシテ硬ク强シ、唐山ニテハ此根ヲ束テ物ヲ洗フニ用ユ、年ヲ歷テ腐ラズ、故ニ馬帚馬刷ノ名アリ、春ノ末宿根ヨリ新葉ヲ生シ、長サ數寸ノ時、叢葉中ニ數莖ヲ抽ヅ、高サ一尺許、其梢ニ花ヲ生ズ、淡紫碧色六瓣ナリ、其三瓣ハ大ニシテ、三瓣ハ小ク、全ク溪蓀花ニ異ナラズ、惟瓣小クシテ狹シ、花後莢ヲ結ブ、燕子花カキツバタノ莢ニ似テ小ク、內ニ小扁子アリ、色赤シ、是藥用ノ蠡實ナリ、藥舖ニテ燈心草根ヲ馬藺ト稱シテ售ル、大ニ誤ナリ、和俗藺ノ字ヲキト訓ズル故ニ誤ルナリ、釋名ニ救荒本草ノ鐵掃帚ヲ併セ入テ、馬藺ノ一名トスルハ非ナリ、馬藺モ鐵掃帚ノ名アレドモ、救荒本草ノハ別物ニシテ、メドハギナリ、

〔廣益地錦抄四〕馬藺ばりん 葉はあやめのごとくにてねぢけたる物、花ハむらさき、三月さく草花にはばれんとよぶ、朝にひらき、夕にしぼみ、次の花明朝又ひらく、此花を藥種のばりん花と云、根は刷ハケに拵コシラフと云、しゆろの毛のごとくにてつよし、

〔剪花翁傳二四月開花〕馬藺ばりん 花青色、貌あやめに似て少く葉厚く堅して幅狹し、開花四月上旬、方日向、地干、土砂雜、肥大便、寒中に入べし、春淡小便兩三度そゝぐべし、斑入葉は干鰯を入べし、分株秋

蠡實

いひければよめる、

から衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬる旅をしぞおもふ、とよめりければ、みな人かれいひのうへに、涙おとしてほとびにけり、

〔拾遺和歌集 七物名〕かいつばた　よみ人しらず

こき色かいつはたうすくうつろはん花に心もつけざらんかも

〔枕草子 五〕めでたきもの

一の人の御ありき、春日まうでえびぞめのをりもの、すべて紫なるはなにも〳〵めでたくこそあれ、花も、いとも、かみも、むらさきの花の中には、かきつばたぞすこしにくき、いろはめでたし、

〔俳家奇人談 上〕山崎宗鑑

山崎宗鑑は、近江州の人、○中略或時逍遥院殿實隆へ、宗長諸とも參るとて、常に愛しける燕子花(かきつばた)を折て獻りけるに、卿御覽じて、手に持てる姿を見れば餓鬼つばた、と興じ玉ひけるを、のまんとすれど夏の澤水、宗長、蛇に追れて何地かへるらん、鑑が第三なり、

〔東都歳事記 二四月〕杜若花(かきつばた)、立夏より二三日め頃より木下川淨光寺藥師堂境内、池中八橋を架せり吾妻森、近年社前の溝に八橋を架せり寺島村蓮花寺、同百花園、根津權現境内池、

〔武江産物志 遊覽〕燕子花　根津社内　三囲社内　蒲田新梅屋敷中和中散　木下川藥師立夏廿日頃　牛島　駒込千駄木　坂植木屋

〔多識編 二隰草〕蠡實、加○岐○豆○波○多○、今案俗稱馬○利○牟○、

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕馬藺(ばれん)　劇草　蠡實　豕首　旱蒲　馬帚　鐵掃帚　馬薤　馬楝子　荔

實　三堅

本綱、馬藺生荒野中、就地叢生、一本二三十莖、苗高三四尺、葉似薤而長厚硬、馬牛亦不食、三月葉中抽

紅淡赤に淡青を帶たり、白極白あり、並白あり、藍、大輪濃色あり、並花あり、大葩なるものあり、俗に是を六葉といへり、此花に青色はなし、いづれも變色花なり、方陽面、地水邊の濕地よし、常に水の滯らぬやうにすべし、肥淡小便、春芽出し前に澆ぐべし、下種春彼岸にすべし、されど成長遲し、分株春秋兩彼岸ともよし、分株の方は分べき株を、地中にて缺とるべし、殘る親株動痛ずして榮はやし、○中略

四季咲燕子花　花の色青し、開花八十八夜頃より四月中旬迄咲也、又夏の土用より咲出して、漸漸に年中花あり、方地分株等春の花と同じ、

〔剪花翁傳三五月開花〕四季咲燕子花　花青色、開花五月中旬より咲なり、是二度目にて夏の花なり、又土用より秋の花出る、夫より凡十一月まで節々花出る、故に四季咲の稱あり、育方は三月燕子花と同じ、

〔草木六部耕種法十一花〕燕子花モ品類多ク、四季ニ開モ有リ、且紫花アリ、白花アリ、白花ノ紫斑アルヲ鷲尾ト云ヒ、紫花ノ紅ヲ帶タルヲ蜀江ト云フ、花大ニシテ六瓣アルヲ六曜ト名ク、此物ハ池沼溝等總テ水ノ淺キ處ニ繁生スル者ナルヲ以テ、盆植ニセンコトヲ欲セバ、根傍ニ干鰛ノ類ヲ刺込テ、時々意ヲ用テ水ヲ澆グベシ、

〔萬葉集七譬喩歌〕寄花

墨吉之、淺澤小野之、垣津幡、衣爾摺著、將衣日不知毛、

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、その男身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき國もとめにとて行けり、○中略みかはの國八はしといふ所にいたりぬ、○中略其さはのほとりの木のかげにおりゐて、かれいひくひけり、そのさはにかきつばたいとおもしろく咲たり、それをみてある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句のかみにすへて、たびの心をよめと

も八葩出ル、　八橋　こいむらさき、花首に葉一まひづゝ出ル、是迄かきつばたのるひ也、何も莖一本に花三度づゝ咲物なり、肥たるは四ッ五ッも咲、一ばん花二番花といふ、

〔增補地錦抄八〕杜若るひ　水草也、田土にうへ常に水をたむべし、肥はごまめ又はごみほこりを入たるもよし、植分春秋、かきつばたは當年花咲たるは、來年消て不生、花立のきわに付きて、ひあふぎの樣成葉有り、是に來年花咲故に買調ルに心を付べし、能花の咲たるに、つねのたくさん成かきつばたを根にそへて、大かぶにして賣ル、然ば來年はかの能花立はくさりて、下成つねの花さく、能々吟味有べし、是をかきつばたの養子共、やとひ子共いふ、○中略

四季杜若　四季共に暖成所に田土に合、肥等分水を少づゝたむべし、水ふかければ、ひへてさかず、時々ごまめをさすべし、又はごみほこりを入たるも可、

〔草木育種下美花〕杜子花○津州府志中略　扨燕子花は四七十月に花咲を、四季ざきと云、又白あり、白くして紫斑あるを鷲の尾と云、紅みを帶る紫をゑよくこうと云、花瓣大にして六枚あるを六曜といふ、總て田の傍池などに植たるは肥に及ばず、淺水に植べし、盆に植たるは干鰮ごまめ等をさし込てよし、又花菖蒲も同じ、

〔剪花翁傳一正月開花〕早燕子花　色青く尋常の花種也、開花正月上旬、方陽面地此土地たるや俗に堀拔と稱する井水の、晝夜湧流るゝ水涯の南陽受なる、片下りの地に株を植て、西北の風寒をよく園ひ、此水の温暖なるを惹入るときは、春はやく花咲也、此花初夏の頃も花咲なり、されど暖氣になりては、平常の花より却て遲し、肥淡大便、秋彼岸に根際に溜りし水を、二日ばかり干上、根本の高き方に右の肥を入、また三日ばかり干切て後、此水を惹入べし、

〔剪花翁傳二三月開花〕燕子花　此花多種也、其四五種左の如し、いづれも開花三月中旬也、橋姫、花中心青く緣白限になる、村雲、花名の如し、吹墨、白地に青き吹點あり、濃紅、紅梅色に淡青を含めり、淡

して杜若の字を用ひて、カキツバタと讀みし、非也とも云ふべからず、近き頃ほひ、或人漳州府志海澄縣志等に據りて、溪蠻叢笑に見えし燕子花、此にいふ所のカキツバタ也といふなり、紫花全似燕子などいふは、似たる事は似たれど、叢笑には生於藤也とも見えて、まだ正しく其物をも見れば如何にとも思ひ分たず、

〔八雲御抄三上〕杜若　池によめり、かきつばたとて、かきによせてもよめり、其も不離水歟、萬十七、きぬにすりつけますらをのといへり、

〔大和本草七花草〕燕子花　國俗昔ヨリ杜若ヲカキツバタトス非也、杜若ハヤブミヤウガト云モノ也、燕子花ハ三四月ニ花ヲ開ク、其性未詳、福州府志ニ出タリ、倭名貌吉花ト云由、藏玉ニ見エタリ、水草ナリ、然ドモ水深クシテ葉ノ鋒マデヒタレバ枯ル、陸地ニモウフ、濃紫色ニシテ四時花開クアリ、又白花アリ、猶異品アリ、小燕子花アリ、葉莖花ノ形ハ同、莖高二三寸、花甚小ナリ、正月ニ開花、是大ナルト異リ、濕地ニ宜シ、不宜于水中、

〔和漢三才圖會九十七水草〕燕子花　加岐豆波太
漳州府志云、紫花全類燕子、一枝數葩、漳人名爲紫燕、
按燕子花其葉似白菖而大、色淡、其花實共似白菖而肥大、爲紫色之正、近頃出淺紅者白色者、皆變種也、五月爲盛、又有四時開花者、參州八橋之產得名、

〔增補地錦抄六〕杜若のるひ
鷲尾　花るりこん色、花中に白キ筋あり、ゑべのごとく成ほこ三まひづゝ上へ立ッ物なり、是もるりこん色々、　羅生門　花うすくろし　村雲　白花にるり色のほし、さらさのごとくあり、　橋姫　むらくものごとくにて、るりのさらさ成ほど見事、大りん也、　濡鷺　花水あさぎいろ　薄雲　白花に村々とかすり有　四季咲　るり色、四度花咲、　ごまほし　白にうす紫のほし有　白　白に二種あり、つねのゑろは花中に紫のさしうつろひ有、ぬけ白といふはうつろひもなし上々、　六葉　むらさき色よし、葩六まいづゝ出ル、　八葉　むらさき、是

挺也、高誘注呂氏春秋云、荔草挺出也、本草蠡實一名荔實、其作蠡者假借字也、張揖注子虛賦謂之馬荔、荔藺一聲之轉、馬藺亦馬荔之假借、圖經云、北人訛呼爲馬棟子、圖經又云、葉似薤而長厚、三月開紫碧花、五月結實、作角子、如麻大、而赤色有稜、根細長通黃色、人取以爲刷、時珍曰、蠡草生荒野中、就地叢生、一本二三十莖、苗高三四尺、葉中抽莖、開花結實、按是草皇國不產、享保以來有漢種繁殖、今俗呼唐藺、或呼禰治阿也米、用其根作刷、印刻本具呼馬棟、其加岐豆波太、亦是草之一種、無別可充漢名、則輔仁所訓非誤也、後人以杜若充之、杜若山薑、其說固謬、不足辨、近人以燕子花充之、燕子花出蠻溪叢笑、其草蔓生、不得充加岐豆波太、不如輔仁以馬藺充之之不遠也、

〔下學集下草木〕杜若（カキツバタ）

〔和爾雅七草木〕燕子花（カキツバタ）潯州府志云、溪蠻叢笑云、紫花全類燕子、一枝數萼、溪人名爲紫燕、

〔日本釋名下草〕燕子花（カキツバタ）　かきはかけり也、けりの反しハき也、つばハつばめ也、めを略す、たは立（タツ）也、此花のかたちハ、かけるつばめの、はねをひろげながら、しばらく物にとまりて立ににたり、かけるつばめたつ也、つばめににたる故、からの書にも燕子花と云、

〔東雅十五草卉〕劇草カキツバタ〇中略　萬葉集には、垣旗また垣津幡などの字を用ひて、カキツバタと云ひけり、後の人また杜若の字、讀てカキツバタといふなり、即今俗にバリンといひ、カキツバタといふ者は、相似て同じからず、今いふ所のバリンは即馬藺也、カキツバタは即今紫羅欄、俗名墻頭草、一名は高良薑といふ是也、カキツバタといひしは、其花の垣下にさきたつるをいひし名とこそ聞ゆれ、本草圖經に據るに、馬藺子は葉似薤而長厚、三月開紫碧花、五月結實作角子、江東頗多、種於庭階、呼爲旱蒲と見えたり、補筆談通雅等の書に據るに、杜若即高良薑也、楚地山中時有之、大者曰高良薑、細者爲杜若、唐時陝州貢之と見えたり、また花鏡には、紫羅欄俗名墻頭草、一名高良薑、葉似蝴蝶、而更濶澤、四月中發花、青蓮色、葉鱗赤類蝴蝶花、大而超羣、紫翠奪目可愛と見えたり、彼是を併せ見れば、我國の古にありては、今の如くにカキツバタ、バリンなど分ちいふにも及ばず、すべてカキツバタと云ひしな、倭名鈔には馬藺をもてカキツバタとなし、世の人また杜若をもて、カキツバタといひしに因りて、後に倭名鈔にいふ所のものをば、其字の書によりてバリンなど分ち呼びしなり、杜若即高良薑、紫羅欄一名高良薑などいふの說に依らむには、我國にて

之光而便於舒陳編耳、丁巳仲冬氷輪減一分之夜作之記、

〔大江俊矩記〕文化十二年六月十七日辛未、於上立賣筑後面會、花菖蒲銘、隱レ蓑、先年自裏松家被進青蓮院宮、若于今其根在彼宮者、一芽申受度間、鬮藉可申由、內々自堀川家申來、仍筑後へ進藤式部卿へ內々鬮藉之事相願置、當方之名前は出し不給、若可相成者、一芽式部卿拜領致し置可給樣賴置候、領掌也、

〔萬寶鄙事記 五〕石菖蒲を瓦石の器に植へば、旦夕水をかへてよし、水にごり泥滓(どろかす)あれば萎む、

〔毛吹草 三〕山城　美豆菖蒲 五月五日洛中用之

〔雍州府志 六土產〕菖蒲　伏見美豆多菖蒲、洛下端午所用悉出自斯所、

〔武江物產志 藥草〕嵐山ノ產　紫羅襴(あやめ)

〔風俗文選 三譜〕百花譜　許六

あやめは小づくりなる女の、目を病る心地ぞする、

〔本草和名 八草〕蠡實 楊玄操音禮 一名劇草、一名三堅、一名豕首、一名荔實、一名馬蘭子、一名馬薤、已上二名出蘇敬注 一名旱蒲、出稽疑 一名茢薤、列眞二音出兼名苑 一名獨行子、一名豨首、已上出釋藥 和名加岐都波太、

〔倭名類聚抄 二十草〕劇草　蘇敬本草注云、劇草一名馬蘭、和名加木豆波太

〔箋注倭名類聚抄 十草〕千金翼方證類本草中品云、蠡實一名劇草、證類本草引唐本注云、此卽馬蘭子也、本草和名云、一名馬蘭子、出蘇敬注、按本草所載蠡實、是劇草之子、故蘇云、卽馬蘭子、蘇又引通俗文云、一名馬蘭、是擧此草之一名、故但云馬蘭、不云子、源君此亦似從本草和名引之、則一名馬蘭下、恐脫子字、引劇草、不及蠡實、故不載蘇云馬蘭子也、載蘇所引通俗文一名馬蘭歟、今姑依舊不遽增、○中略 說文、荔似蒲而小、根可爲刷、月令仲冬之月荔挺出、顏氏家訓載蔡邕月令章句云、荔似挺、鄭玄曰、荔挺、馬薤也、以荔挺爲草名、逸周書時訓篇、及顏氏家訓引易通卦驗皆同、則或單言荔、或累言荔

後のとしおひいで、侍けるを見て、　　栗田右大臣〇藤原道兼

ゑのべとやあやめもゑらぬ心にもながからぬ世のうきにうへけん

〔枕草子三〕草は　さうぶ

〔枕草子六〕卯月の晦日に、はせ寺にまうづとて、淀のわたりといふものをせしかば、舟に車をかきすへてゆくに、ゑやうぶこもなどの末みじかく見えしを、とらせたれば、いとながゝりける、こもつみたるふねのありきしこそ、いみじうおかしかりしか、たかせのよどには、これをよみけるなめりと見えし、三日といふに歸るに、雨のいみじう降しかば、さうぶかるとて、笠のいとちいさきをきて、はぎいと高きおのこわらはなどのあるも、屛風のゑにいとよくにたり、

〔東海一漚集一古詩〕求菖蒲幷序

行庭忽見盆菖蒲、不知其厝之者爲誰也、詩以干之、欲永屬吾也、

我自筑紫歸、空庭日日遊、空庭有何物、雪消蘭芽抽、菖蒲不知主、委靡横蟠蟉、鬼神非吾畏、坡仙語可羞、正是訪薄者、欲之未敢偷、願言情人意、惠斯靑髮贈、

〔鵞峯文集九記〕石菖盆記

有人寄石菖蒲一束、其葉之長或可二尺、或尺餘、其短也或七八寸或五六寸、參差秀出尖尖獵獵、所謂水劍草是也、屈曲其根、疊結葉中、提之不亂動之不分、貯水於盆以涵其根、置之座右以爲文房之一具、其色之靑可以益老眼之明、其精之或可以收燈油之煙、則於讀書得其便、不亦悅乎、嘗聞蘇玉堂有言、石菖蒲濯去泥土、漬以淸水、置盆中、數十年不枯果然否、嗚呼我老矣、數十年之久非所期也、唯就今日論之、時是陰氣之極木葉悉脫、唯此一物渾靑自若、謂之歲寒草、可與松栢並稱也、且席上之觀、暗合玉堂之言、不亦奇乎、對此欲說神仙服餌之事、則醫藥非我所知也、爲之欲詠吟、則疊山歌備矣、其歌尾曰、人間千花萬草儘榮艶、未必敢與此草爭高名、可謂說得好、然豈徒草而已哉、言之長也、我唯取添銀海

〔百姓傳記十三〕菖蒲ヲ植ル事

一菖蒲ヲ植ルニ土地ニ嫌ヒナシ、雨池堀岸河岸土崩レ損ゼル處々ニ、根ノハルコト限リナシ又水ナキ處ヘモ生上ルゾ、雨池ナドノ小サキ池ニハ忌ベシ、生茂リ水ヲ減スモノナリ、〇中略

石菖ヲ植ル事

一石菖ノ種色々アリ、土民ノ用ルハ大石菖ヲ植ベシ、山間ナドノ雨池石地ナドニテ崩ル丶處ノ水付、又澤水池水ノ餘リテ地ヲ破ル處ニ植テ、地ヲシメサセ、石ヲトヂ合ヨ、四季トモニ水ノ付ク處ニハ、古根ヲ裂キ植ヨ、井ノモトナドノ土ウクヤキ流レ、小石出ル處ニ植テトヂ合ヨ、赤葉サイサイ取テ捨テ、葉ヲ刈リタルガヨシ、肥エテハ益ナク、痩テハ根茂クナリテヨシ、

〔草木六部耕種法十需花〕石菖蒲モ世ニ賞セラル丶ヲ以テ、種類甚多シ、其中ニ於テ高麗、黄金、西湖、鷄(トリ)ノ尾、雨根、有栖川、晝夜等、其名ノ高キ者ナリ、凡ソ石菖ハ水濱ニ繁生スル者ナルヲ以テ、水ヲ澆テ作ルヨリ外ニ、作法アルコト無シ、肥養ニハ鼠糞蝙蝠糞ヲ古來稱スレドモ、然レドモ馬溺鹽ヲ用ルヲ殊ニ宜シトス、又其葉ヲ悉ク剪去リ、鐵線ヲ以テ根ヲ石ニ卷附ケ、恒ニ水ノ下滴ヲ乾ザルヤウニシテ置トキハ、鬚根ミナ石ニ繞著者ナリ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、〇中略昌蒲三斤　伊賀國廿三種、〇中略昌蒲木斛夜干各十斤、〇下略

〔萬葉集十夏雜歌〕詠鳥

霍公鳥(ホトヽギス)、厭時無(イトフトキナシ)、菖蒲(アヤメグサ)、蘰(カヅラニ)將爲日(セムヒ)、從此鳴度禮(コユナキワタレ)、

〔古今和歌集十一戀一〕題しらず　よみ人しらず

郭公鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉

〔拾遺和歌集二十哀傷〕ふくたりといひ侍けるこの、やり水にさうぶをうゑをきてなくなり侍にける、

に變ことなし、又有栖川と云は葉の先皆上に向、これ又漢種なりと云、又竪に黄色の筋あるを黄金又虎の巻など丶云、又葉の面白く背青きを晝夜と云、其外高麗、雉尾等色々有、又兩根と稱するものは、根の兩面より鬚根を生ずるを云、常の石菖にも多き中には自然に兩根になりたるものあり、又兩根を拵る法あり、常の石菖は皆根の腹より鬚を生ずる也、片根なるを以て、葉と鬚を剪て、根ばかりを竪に起て植置ば、兩方より根を生るなり、然れども久く植置時は、又常のごとく片根に返る也、又石菖を石に著るには、葉を剪て根を石へ添て、細き針金にてぐるぐるかと卷て、絕ず水を灌ときは、鬚根皆石に著もの也、花鏡曰、鼠糞蝙蝠屎を水に和し澆ば榮るといへり、

〔草木育種下美花〕蘭蓀本草　野土眞土ともによし、魚洗汁を澆ば花多し、冬は人糞を用てよし、あやめ種類多し、紫は常なり、紫と白との紋あり、又鳶尾もあやめの手入にてよし、又俗に扁菖花、尾張國にてひおふぎあやめと名く、葉は射干いちはつなどに似て、花はあやめに似たり、

〔剪花翁傳二三月開花〕鎌山溪蓀　花青紫形大きし、開花三月中旬、方日向、地二分濕、土薤交、肥小便、春芽出し前より花前まで、三四度澆ぐべし、分株春彼岸十日前にすべし、燕子花より高き所よし、水氣の少き方ぐるぐるかるべし、

〔剪花翁傳三四月開花〕溪蓀　花白青、又姫あやめあり、花青し、いづれも開花四月上旬、方日向、地二分濕、土えらばず、水氣は少き方よし、肥小便、芽出し前に入べし、芽出して後にも入べし、分株春彼岸十日前よし、○中略

花菖蒲　種々あり、開花紅は立春より百十日頃に咲也、紫は是に後る丶事五日ばかり、瑠璃紺は又五日ばかり、白又是に五日許おそし、村雲絞、白紺絞、網絞、吹墨等の斑入あり、さて斑入に六葩のものもあり、是は三葩の八重なるものなり、咲頃ともに同じ、方日向、地三分濕、土えらばず、肥淡小便、芽出しの時より二三度そ丶ぐべし、其外は用ひず、移分株春彼岸よし、

少かけて持べし、年をふるほど、根しまりてよし、さて冬は土藏に入、時々朝日のさす所へ出したるよし、又朝日のさす所に、上と脇を寒氣のあたらぬ様にかこいて、置たるもよし雪霜少もあたれば、葉先かるゝ、二月の時分より取出て、葉をすかし指南をすべし、からせきせうは、鉢に植る砂土にかべ土をませ鉢にならし、せきせうの葉を、根本ゟ切テすて、鉢の中よりあつく植る、廿日ほどして葉しげりて見事なり、冬は雪霜にあたらぬ様にすべし、まきせうは、岩松をあつめつがねて、針金にてまき、さてせきしやうの根をあらい、わらび繩又はしゆろなわの、成ほどほそきにて、右の岩松へまき付る、尤葉は切てすてたるがまきよし、やがて葉出る物なり、節々箸にてなづべし、岩松にまきたるは、よく水をあげ、久敷さかへてよし、外の物にまきたるはくさりてわるし、近年の仕出しに、ちいさきほうろくに、田土合肥をねりませ、平にしてせきせうの根の長きをあらい、葉をむしりすて、右のほうろくのねり土へならべ、所々へ竹の串をさして、根のうごかぬやうにして置、五ケ月にしてほうろくをやぶりすつるに、よく根からみて有る葉をすかし、手入して用る、俗に龜子せきせうといふ、その形中高くして龜子似たればなり、ほうろくは其性土にして水をふくむゆへ、せきせうをして早くからましむる、又こけらせきしやうといふ有り、是はせきせうの根も葉もよくあらい、油綿を以てなづれば、葉色うるはしくなるを、竹のくぎをけづり、せきせうをあつめ、根と根へかの釘をうちてかため、夕に拵朝に賣る、初心人は是をしらず、かの油にてなでたる葉色の見事成にまかせて調るに、根は釘付成ゆへ、明日をまたずしてかるゝ、吟味有べし、

又澤せきせうと云は、在郷の澤よりほりて來るを、其まゝあらい、油わたにてなで鉢に入る、是も後はわるし、右の外にもつくり様侍れ共、大方此分よし、

〔草木育種 下 藥品〕菖蒲（せきしやう）（本草）　種類數十品あり、漢土西湖の邊に生ずるもの舶來（はくらい）る、其形狀本邦の石菖

しといふ、又一種花形同斷にて、白地に紅のさらさとびいり有、さらさ花びしといふ、又一種櫻色にてやゑにひらくあり、やゑ花びしといふ、又一種花形切りさきて、せんやう白花有、はぐまといふ、右何も花形異風にしてかはりたる物也、總名をいぎりすといふ、せきちく也、

咲分白菖　花形つねのあやめなり、花白地にあさぎ色のさらさ、さきわけのごとくにあり、四月咲、

鷹羽白菖　花はつねのあやめにて、むらさき色、四月さく、葉に鷹の羽のごとくなるもやうあり、

琉球菖蒲　花形丸く極大りん、指渡し曲尺八九寸餘迄、花中のくもでほこ花かつこうよりちいさく異形也、うす紫のうすくき、やう色也、五月咲、葉大く長く高さ六七尺ほどまで立のびる、琉球國より種來るよし、

〔增補地錦抄 八〕せきせう　せきせうはたくさん成物にして、又よきせきせうはすくなし、其品さまざま有る中にも、鎌倉せきせうといふを上とす、先植樣はひりの木にてまげたる器物か、又は手水たらいのそこに水ぬけの穴をほり、しのぶ土に合肥少まぜ、右の器物に一はい入れ、中の少し高樣にならして、さてせきせうの根を水にてあらい、根の長さ一寸ほど置て切てすて、器物の中より段々植て、日かげ成所に上にすだれをかけて置く、成ほどしげく植たるよし、四五月に植たるは、來年の三四月に、器物をやぶりすて見れば、白き根計になりてからむ、水鉢に入葉をすかし、箸にて葉をなでつやを出す、箸にてなづるに心得あり、先づ箸のさきをほそくけづりて、やわらか成紙をまき、清き水にひたしてせきしやうの根本より、葉すへまでなづる、葉末外へねたるは內へ成やうに、又內へまがりたるは外へねせる樣に箸をつかふ、手心大節なり、時々手かけてしるべし、とかく毎日箸にてなづれば、葉色いさぎよくなりて、しやんとする物也、つねに水をつけて置ば、根やわらかになりてわるし、葉末より赤くかるゝも、水のすぎたるゆゑんなり、但水を

二尺多ク叢生ス、四月花ヲ開ク、圓莖高サ一尺許、梢ニ二三花開謝相續グ、形ハナセウブニ似テ小ク、瓣狹ク、紫碧色、大小數十種アリ、又白花ナル者アリ、秘傳花鏡ニ白花蓀紫花蓀ノ名アリ、

〔增補地錦抄六〕花菖蒲るひ

るり八重　るり色、黑きほどなり、せんやう、大りん、　しやれかき　うすがき色、ひとへ、

江戸紫　こいむらさき、八重と一重あり、　白　雪白、ひとへ八重有、八重は少さくら色、

村雲　白ひとへに、うすきべにのかすりうるはしく有、　紅絞　むらくものごとく、白にべにかすり有、　縮緬　へりしぼりにて、さらさあり、　紫縮緬　むらさきにちゞみ有、ひとへ、　花せうぶるひ、右之外いろ／＼有、

白昌草

紫あやめ　葉は花せうぶのごとくなり、菖蒲杜若鞍草等に紛やすく、あやめたれ共各別ちがひ有草也、花紫せんやうとひとへ有、　白あやめ　しろし、花の中黃色、八重ひとへ有、

柿あやめ　うすかきいろ、八重ひとへあり、　是まであやめるひ〇中略

菖蒲　端午に家をふく草也

鬼石菖　葉ひろく長し、しやうぶに似たれば、菖蒲せきしやう共云、

鎌倉石菖　葉ほそく長く色青み上々よし、葉先しやんとたちてほそし、是を上とす、

東石菖　葉形かまくらにまぎるゝ、計似たれ共、しやんとたゝず故にわろし、

唐石菖　葉みじかく色青みよし

琉球　からせきせうのるひ、葉大きくわろし、

〔地錦抄附錄二〕花菱石竹　花形紋所の花びしのかたちにて、色上々の紅、ながめすぐれてよし、五月中旬、つねの石竹同時に花開く、又一種花形同斷にて、うす色ほんのりときれいなるあり、櫻び

春莖ヲ抽テ頂ニ穗ヲナス、長サ一二寸、形筆頭菜ツクヅクシニ似テ狹ク堅シ、華茇ニ似タリ、淡黃色、俗ニメハジキト呼ブ、根ハ綠色節多シ、大サ三分許、節多ヲ良トス、故ニ一寸九節ト云フ、然ドモ必シモ九ノ數ニ拘ハラズ、本草原始ニモ、多節者良、不必泥于九節、但忌鐵ト云フ、石菖ノ品類甚多シ、大葉ナル者アリ、小葉ナル者アリ、直葉ナル者アリ、兩面ナル者アリ、白色ナル者アリ、間道ナル者アリ、小葉ナル者ハ高麗ゼキセウト呼ブ、卽錢蒲ナリ、本草彙言ニ、甚有短一二分者ト云フハ、ビロウドゼキセウナリ、葉長サ二三分ニシテヨク石ニ附ク、是卽浦城縣志ニ謂ユル雀舌ナリ、又尋常ノセキセウモ、度々葉ヲ剪ル時ハ細短ニナル、時珍モ亦コレヲ云リ、然レドモ高麗ゼキセウ、ビロウドゼキセウ等ハ、剪洗ニ因ルニ非ズ、自然ニ小ナル者ナリ、花戶ニハ鬼ゼキセウ、鎌倉ゼキセウ、アヅマセキセウ、唐セキセウ、琉球セキセウ、其餘數品アリ、セキセウヲ養フ法ハ、秘傳花鏡ニ詳カナリ、

增、種樹家ニテ名稱尤多シ、大ナル者ニダテクラベ、龍門、中ナル者ニ有栖川、正宗、チウヤ、シマゼキセウ、兩根、タニミヅ、黃八丈、光龍、ミダレガミ、アサギ、マタゼキセウ、小ナル者ニ龍ノヒゲ、カマクラ、カウライセキセウ等アリ、其他品類多シ、○中略

白昌　アヤメグサ古歌　ウタカタグサ　ノキアヤメ　白實草共ニ同上　セウブ　一名泥蒲群芳譜

古歌ニアヤメト讀ハ、皆今端午ニ簷ニ插ムセウブナリ、今俗ニアヤメト呼テ、花ヲ賞玩スル者ハハナアヤメノ略ナリ、セウブハ水中ニ生ズ、燕子花カキツバタノ葉ニ似テ狹長、淡綠色、薄シテ一縱道アリ、葉ノ長サ四五尺叢生ス、夏穗ヲ出ス、セキセウノ穗ニ似テ大ナリ、根モ亦粗大ニシテ香氣アリ、藥ニ入レズ、一種間道ノ者アリ、又一種ハナセウブハ葉ノ形同クシテ、花ハ燕子花ノ如シ、數百品アリ、

漢名詳ナラズ、

釋名、溪蓀、蘭蓀、　コノ二名ハハナアヤメニシテ卽水昌蒲ナリ、今略シテアヤメト云フ、山溪ニ自生ス、陸地ニ移シテ繁茂シ易シ、人家ニ多ク栽ユ、葉白昌ニ類セズ、燕子花葉ニ似テ狹シ、長サ一

以石菖根漬酒飲之、則禳邪氣、

一種有花菖蒲、開紫花、似白菖花而瘦小、

石菖蒲（セキシヤウ）　錢蒲（カウライセキシヤウ）

本綱、石菖蒲生於水石之間、葉有劒脊、瘦根密節、高尺餘、一種人家以瓦石器栽之、一年至春剪洗愈剪愈細、高四五寸、葉如韭根如匙柄粗、入藥須用此二種一寸九節者、

一種　錢蒲。其根長二三分、葉長寸許、

石菖根（辛温）通九竅明耳目、出音聲益心智延年、（手少陰足厥陰）心氣不足者用之、虛則補其母也、肝苦急以辛補之是也、以爲神仙之靈藥、（忌飴餹羊肉、勿犯鐵器、令人吐逆）

按石菖多栽水盆、常灌水則能繁茂、眼病人弄之見其蒼色爲快、春抽莖開細黃花成穗、凡石菖菖蒲之類、葉有劒脊、而爲香臭氣也、白菖燕子花之類、葉無劒脊、色亦淡、軟弱而無香氣以爲異、所謂錢蒲乃俗云髭石菖、（又名高麗石菖）葉長一二寸、其細小者爲佳品、

白菖（あやめ）　泥菖蒲　莖蒲　昌陽　水昌蒲　水宿　溪孫　蘭孫（今云阿夜女）、

本綱有二種、一種生於池澤、根大而肥白、節疎者白昌也、俗謂之泥菖蒲、一種生溪澗、根瘦而赤、節稍密者溪孫也、俗謂之水菖蒲、其葉俱無劒脊、其根乾後輕虛、多滓不堪入藥、

按白菖蒲葉花皆似燕子花而瘦小、其花紫色、如飛燕狀、又有白花者淡紅花者、皆變種也、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕菖蒲　セキセウ　ネガラミ（大和本草）　一名綠劒眞人（輟耕錄）　石澗菖蒲（遵生八牋）　石上草（山堂肆考）　劒背草（揚州府志）　堯薤（典籍便覽）　望見消（外科啓玄）　木臘　陽春雪（共ニ同上）　紫茸（名物法言）　松衣（採取月令）　跛者（金光明經、梵名）　石菖（白昌條下）　菖莆（正字通）　苤（典籍便覽）　昌羊（通雅）

溪澗水旁ニ生ズ、或ハ石ニ附テ生ズ、平地ニ移シ栽テ繁茂シ易シ、石ニ附タル者ヲ採、土ヲ洗ヒ去リ、水ヲ用テコレヲ養フモ亦茂ス、葉皆深綠色ニシテ劒脊アリ、冬モ枯レズ、是ヲ切レバ香氣アリ、

昌蒲なるなり、此に高麗石菖蒲といふものは、錢蒲といふもの是也、アヤメといふ義不詳、昔も此物の名によりて相論の事ありなど云ひ傳へしなり、

〔日本釋名下草〕菖蒲(アヤメ)　あやはあざやか也、めは見ゆる也、他の草より色うるはしく、あざやかに見ゆる也、せきしやうの事也、花さくあやめは溪蓀、はなあやめと云、菖蒲の葉ににたる故に、是もあやめと云、

〔八雲御抄三上草〕菖蒲　あやめぐさ　抑只あやめとばかりいへり、但くちなはの名なりと云り、通俊匡房と有種々相論、但あやめといへるうたおほし、非難、通俊難無由、万にあやめぐさかつらにきむ日いへり、

〔藻鹽草八草〕菖蒲

あやめ草略○註　あや引、あやめふく、五月五日　あやめかほる、ねながきよしいへり、あやめ草こますさめず、あやめな馬くはずと云々、すさめぬとはくはぬ事也、あやめのくさ、拾遺　袖のうへにねざしとゞめよあやめ草、あやめ草玉にぬく、同○同、恐衍　万　かくれぬ下よりねざすあやめ、草、やどにかざれる花のあやめ草、

〔宜禁本草乾藥中草〕菖蒲　辛温平、開心孔、通九竅、明耳目、出音聲、止小便利、小兒温瘧身熱不解作浴湯、久服益智、聰明不忘不迷、五月十二月採根甚去虫并蚤虱、抱朴子、韓蒙服菖蒲十三年、身上生毛、日視書万言皆誦之、冬袒不寒、近人瓦石種、旦夕易水則茂、水濁有泥滓則萎、

〔和漢三才圖會九十七水草〕菖蒲　昌陽　堯韭　水劒草　和名阿夜女久佐、今唯呼字音、

本綱、菖蒲冬至後五十七日菖始生、菖者百草之先生者、春生青葉、四時常青、新舊相代、葉中心有脊、狀如劒、二三月間抽莖開細黄花成穗、其根一寸九節者良、

按菖。蒲。者。總。名。而本草有五種、今。分。爲。三。種。菖蒲石菖白菖(アヤメ)是也、入藥宜用石菖根、醫書雖曰菖蒲根不可惑、菖蒲乃石菖之大者長二三尺、濶五六分、有劒脊、五月五日葺屋檐者也、或件日浴菖蒲湯、或

根盤屈有節、狀如馬鞭大、一根傍引三四根、傍根節尤密、一寸九節者佳、亦有一寸十二節者、人多植于乾燥砂石土中、臘月移之尤易活、別說云、今陽羨山中生水石間者、其葉逆水而生、根鬚略無少泥土、根葉極緊細、一寸不啻九節、今二浙人家、以瓦石器種之、旦暮易水則茂、水濁及有泥滓則萎、李時珍曰、蘇頌言無花實、然今菖蒲二三月間抽莖、開細黃花成穗、而昔人言菖蒲難得見花、非無花也、是知本草所載菖蒲、後人呼石菖蒲者、今俗省呼石菖、非皇國所謂阿夜米久散也、陶注又云、好在下濕地、大根者名昌陽、別說云、池澤所生肥大、節疎麁慢、恐不可入藥、李時珍曰、生於池澤、蒲葉肥根、高二三尺者、泥菖白菖也、是可以充所謂阿夜米久佐也、阿夜米久佐、脊有劒刃、開小蘆華、與石菖蒲同、今俗音讀菖蒲、五月五日葺屋者是也、今俗又有別呼阿夜米者、葉無劒背、有呼波奈菖蒲者、葉有劒背、並開花紫碧色、皆是馬藺別種、非菖蒲類也、李時珍云、菖蒲乃蒲類之昌盛者、故曰菖蒲、又呂氏春秋云、冬至後五十七日菖始生、菖者百艸之先者、於是始耕、又取此義也、陶注又云、東溪澗側又有名溪蓀者、根形氣色極似石上菖蒲、而葉正如蒲、無脊、俗人多呼此爲石上菖蒲者謬矣、詩詠多云蘭蓀、正謂此也、又有水菖蒲、生溪澗水澤中、甚多葉、亦相似、但中心無脊、時珍云、生於溪澗、蒲葉瘦根、高二三尺者、水菖蒲溪蓀也、是今俗呼犬石菖者、

〔類聚名義抄八艸〕昌黃アヤメクサ　昌蒲（同）　菖蒲（同）　菖蒲（上香晶）

〔下學集下草木〕菖蒲（シヤウブ）

〔尺素往來〕爲庭上之景、莊嚴前栽仕候、（中略）○雜草木者（中略）○石菖蒲、

〔和爾雅七草木〕菖蒲（シヤウブ）昌陽、堯韭、水劍草（セキシヤウ）並同、　泥菖蒲（シヤウブ）白菖同、生于池澤、蒲葉肥根高三四尺者、　水蒲（アヤメ）（シロアヤメ）　花菖蒲（ハナシヤウブ）　錢蒲（カウライセキシヤウ）

〔東雅十五草卉〕昌蒲アヤメグサ　倭名鈔に養性要集を引て、昌蒲一名臭蒲、アヤメグサといふと註せり、唐本草に據るに、昌蒲を臭蒲といふは香蒲に對し言ふなり、李東璧本草に、昌蒲凡五種ありと見えたり、此にアヤメグサといふものは、白菖溪蓀の類也、此に石菖蒲といふもの、類は、卽眞の

菖蒲

〔剪花翁傳三五月開花〕檜扇艸　花一重、色黃にして蕋本に黃朱の點あり、葉の並び檜扇に似て中高く伸るなり、開花五月中旬なり、方日向、地二分濕、土回込、肥油粕、移正月中より巳下の諸檜扇艸ともに育方同じ、

國部檜扇艸（こくぶひあふぎさう）　花形ちとも尋常の檜扇艸に同じ種なれど、英低き曲り屈むほどに、花莖漸々延るにいたつて丸く纏はれ、英覺に外に出て咲也、開花五月中旬、育方前に同じ、〇中略

蝦夷檜扇艸　花二種、赤色黃色最上品なり、開花五月末なり、育方既に上の章に出たり、形容花莖短く、葉もくねりてよくゑまり、長七八寸に過ず、

〔剪花翁傳三六月開花〕孔雀檜扇艸　花一重色黃にして、蕋本に黃朱點あり、芊延るころ葉縮みて雅なり、長二尺餘にいたる、勢ひ孔雀の尾に似たり、育方同種に等し、開花六月中旬なり、

〔剪花翁傳四七月開花〕鳳凰檜扇艸　花並種のごとし、開花七月中旬より八月下旬迄あり、育方並種のごとし、葉の形ち孔雀檜扇よりも亦目挾に繁密也、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、〇中略香薷夜干各十五斤、　攝津國卅四種、〇中略夜干五斤、〇下略

〔本草和名六草〕昌蒲　一名昌陽、一名溪蓀、一名蘭蓀、已上二名出陶景注、一名臭蒲、出蘇敬注、香蒲條、一名堯時韭、出雜要訣、一名靈身、一名昌陽之草、出太淸經、一名水中泉、出錄驗方、一名白昌、一名水昌、一名水宿、一名莖蒲、已上出拾遺、昌蒲者水精也、出范注方、菖蒲一名菖陽、注云、石上者名之蓀、出錄名苑、一名荃、出文選、和名阿也女久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕昌蒲　養性要集云、昌蒲一名臭蒲、和名阿夜女久佐

〔箋注倭名類聚抄十草〕按依本草和名、堯時韭之名出養性要集、臭蒲之名出蘇敬注也、源君以一名臭蒲爲出養性要集、本草云、菖蒲一名昌陽、一寸九節者良、陶注云、生石磧上、穊節爲好、眞菖蒲葉有脊、一如劒刃、四月五月亦作小蕚華也、圖經曰、春生靑葉、長一二尺許、其葉中心有脊、狀如劒、無花實、其

而硬、

一種小射干一名姫射干葉小而長六七寸、如石菖蒲、花亦小淺紫、略似菖蒲花而小、美可愛、

〔重修本草綱目啓蒙十三下毒草〕射干　ヒアフギ京　カラスアフギ　ウセン烏扇ハ郎溪名ナリ　ミチキリ伯州

一名鬼箭草江部新志　秋胡蝶秘傳花鏡　地扁竹鎭江府志　麝乾痘科鍵　夜干本方事　扁筑通雅　玉燕花暦百詠

山中ニ自生アリ、家圃ニモ多栽テ花ヲ賞ス、鳶尾ノ如キ長葉、互ニ斜ニ並ビ扁ク生ズ、扁ヲ開タル形ニ似タリ、ソノ中心ニ一莖ヲ抽ヅ、六七月ニ至テ高サ三四尺、梢ニ多ク小枝ヲ分チ花ヲ開ク、大サ一寸許、六瓣、瓣細長黄赤色ニシテ紫斑點アリ、其紅色ノモノハ、ベニヒアフギト云、黄色ノモノハ黄ヒアフギト云フ、共ニ紫點ナキモノヲ賞ス、藥ニハ尋常ノモノヲ用ユベシ、集解ニ陶弘景又別有射干相似而花白ト云、コレハ胡蝶草ニシテシヤガノコトナリ、射干ニ白花ナルモノハナシ、朱震亨紫花者ト云ハ、是鳶尾ニシテイチハツナリ、次ニ本條アリ、紅花者非ト云フハ反テ誤レリ、紅花ノモノ卽射干ナリ、李時珍ハ射干鳶尾ヲ混ジテ一物トス誤レリ、紫胡蝶ハイチハツノコトナリ、射干胡蝶草鳶尾ノ分別、本草彙言ニ詳ナリ、宜ク從フベシ、又松岡先生用藥須知ニモ辨ゼリ、增一種チヤボヒアフギ、一名大坂ヒアフギ、又エゾヒアフギトモ云モノアリ、葉短クシテ幅廣ク、葉ノ末ニ微ク皺アリ、又一種江戸ヒアフギ、一名クジヤクヒアフギ、又タチノボリトモ名クルモノアリ、莖長ク直上シテ葉莖ニ附テ登リタルガ如ク見ユ、又一種四方ヒアフギト呼ブモノアリ、葉四方ニ並ビ生ズ、又間道ノモノアリ、ホウワウト呼ブモノアリ、葉ノ形ニ因テ名ク、又一種ヒアフギアヤメト呼ブモノアリ、加賀ノ産ナリ、形容共ニ射干ノ形ニシテ、花ハ全ク溪蓀花ノ形ノ如シ、奇品ナリ、

〔剪花翁傳二月開花〕射干　胡蝶花、花の色白に紫點あり、開花二月中旬より四月最中なり、方半陰、地土肥撰ばず、分株、移春彼岸よし、

作杆、徐廣曰、杆音楷、是也、蜀本圖經云、高二三尺、花黄實黒、根多鬚、皮黄黒肉赤黄、陳藏器曰、本草射干、即人間所種爲花草、亦名鳳翼、葉如鳥翅、秋生紅花赤點、圖經、葉似蠻薑而狹長、横張、疎如翅羽狀、故一名烏翣、謂其葉中抽莖、似萱草而强硬、六月開花黄紅色、瓣上有細文、秋結實作房、中子黒、

〔饅頭屋本節用集草木〕射干（カラスノツギ）

〔書言字考節用集生植六〕射干（カラスアフギ）　紫金牛、仙人掌、鳳翼、鬼扇並同、烏扇同、野萱草並見本草、烏蓮同文選

〔東雅十五草卉〕射干カラスアフギ〇中略　カラスアフギとは烏扇の字の訓をもて呼びしなり、今俗にヒアフギといふは、檜扇を開くに似たるをいふなるべし、又俗にシ。ヤ。ガ。といふ物は蝴蝶花也、花史花鏡等に蝴蝶花類射干といふなり、（シヤガといふ義詳ならず、万葉集抄にシヤガとは、ツレガといふ謂也と見えたり、此花のカキツバタ、ハナアヤメなどいふものに似たれば、かく云ひしも知らず、又俗にカラスアフギならば烏扇となし、此物をば射干の字の音を轉じて、シヤガと云ひしも知るべからず、）

〔大和本草藥類六〕射干　和名カラスアフギ、漢名モ亦烏扇ト云、本草ニ陳藏器曰、射干葉如鳥翅、秋生紅花赤點、人間所種爲花草、丹溪曰、紫花者是ナリ、紅花者非ナリト、今日本ノカラスアフギニハ未見紫花者、但中夏ニアリテ日本ニナキ也、時珍曰、紫花者呼爲紫胡蝶、イチハツト云物、射干ニ似テ花紫ナル故、是丹溪ガ所謂花紫ナル者ナラント云人アレドモ、射干ト鳶尾ハ全ク別ナリト、蘇恭モイヘリ、只日本ニハ射干ノ紫花ナル者ナシトスベシ、射干非一種、有花白者花黄者花紫者トイヘリ、

〔和漢三才圖會九十五毒草〕射干（あやが）　野萱花　草薑　黄遠　仙人掌　紫金牛〇中略

按本草綱目射干與烏扇爲一物、因倭名抄亦云、射干一名烏扇、和名加良須安布木並未詳審、其二物莖葉花形狀各別也、蘇頌所謂莖梗疎長、正如射之長竿之狀者射干也、莖短葉側相比而如扇者烏扇也、

射干葉似鳶尾而濶、段段抱莖上生、中心抽一莖、高三四尺、七月開花似萱草花、而六瓣黄赤、俗呼紅朽葉色有細點、略如山丹花、結實作房、如胡麻房而三稜、一房六隔、有中子、二三十粒大如豌豆、而生青熟紫黒色

烏扇
胡蝶花

目ニ鳶尾トアルハ是イチハツナリ、蘇恭保昇ガ説ヨシ、時珍ガ説不可據、民家茅屋ノ棟ニイチハツヲウヘヲ大風ノ防トス、風イラカヲ不破、蝴蝶花モ此類ナリ、又花白アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十三下 毒草〕鳶尾 イチハツ ヤツハシ 薩州 一名紫羅傘 圖書 石扁菊 藥性要略大全 墻頭草 秘傳花鏡 高良薑 同上、芳草類ノ高良薑ト同名、 紫羅欄 同上 花薑 廣東新語 紫羅蘭 本草彙言

人家ニ多ク栽ユ、一尺許ノ長葉扁布シテ繁茂ス、射干胡蝶草葉ニ似テ深緑色、三四月茎ヲ抽コト一尺許、頂ニ花アリ、大サ三寸餘、凡六出、三出ハ大ニシテ三出ハ小ク、燕子花ニ似タリ、紫碧色ニシテ深紫點アリ、又白花及淡黄褐色ノモノアリ、藥肆ニテ此根ヲ採テ知母ニ僞リ雑ユ、射干鳶尾ノ分別、蘇恭及韓保昇ノ説是ナリ、李時珍ハ地ノ肥瘠ヲ以テ言ヲ立テ一物トス、最非ナリ、

〔剪花翁傳 二 三月開花〕一八艸 鳶尾花、花二種白あり青あり、青は渓蓀に等し、開花三月中旬、方日向、地一分濕、土えらばず、肥小便、寒中澆ぐべし、移十月也、

〔狗猧集 三 夏〕一八

すがりてもなや一八の花の庭 ○作者不詳

千種あれど先一はつの花野哉 正滿

〔本草和名 十 草〕射干 楊玄操音、上音夜、下音寒反、 一名烏扇、一名烏蒲、一名烏翣 仁諝音所甲反 一名烏吹、一名草姜、一名鳶尾、葉名也、出陶景注、 一名鳶頭 根名也、出蘇敬注、 一名烏喙 出雑要決 一名烏麼 出兼名苑 和名加良須阿布岐

〔倭名類聚抄 二十 草〕射干 本草云、射干一名烏扇 射音夜、和名加良須安布木、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕陶云、射干相似而花白、似射人之執竿者、故阮公詩云、射干臨層城、蘇頌曰、今觀射干之形、其莖梗疎長、如長竿之狀、得名由此耳、王念孫曰、子虛賦云、騰遠射干、張氏彼注云、射干似狐能緣木、射干之獸、不得謂之狀如竿、則射干之草亦不如陶氏蘇氏所説也、蓋草之名、多取雙聲疊韻、射干疊韻字也、射字古音在虞部、干字之聲亦有轉入此部者、禹貢惟箘簵楛、史記五帝紀別本楛

鳶尾

あつめたるものどもをとらせて、わらはゝうせぬ、この子うれしと思ひて、もていきて、はゝにくはす、この、ちは山にいりて、みせしらせしいもところをほり、このみ、かづらのねをほりてやしなふ、

〔源氏物語 三十七横笛〕御寺のかたはらちかきはやしにぬきいでたゝたかうな、そのわたりの山にはれるところなどの、山里につけては、あはれなれば、奉れ給ふとて、御ふみこまやかなるはしに、春の野山霞もたど〳〵しけれど、こゝろざしふかくほり出させて侍るしるしばかりになん、

〔常磐嫗物語〕山のものにとりては、ところ、さわらび、くずの根、まつたけ、ひらたけ、○中略月よだけまでもくはばやな、

〔有德院殿御實紀 二十三〕享保十一年十二月廿四日、增上寺より佳茗草蘚を獻じ、傳通院より蜜柑を獻じて、ともに歲杪を賀し奉る、

〔本草和名 十草〕鳶尾　一名烏(○烏下恐脫園一名三字)烏園子、一名烏茵(已上出釋藥)一名烏固(出雜要決)和名古也須久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕鳶尾　本草云、鳶尾一名烏園、(和名古夜須久佐)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕唐本注云、鳶尾葉似射干而濶短、不抽長莖、花紫碧色、根似高良薑、皮黃肉白、獨本云、此草葉名鳶尾、根名鳶頭、亦謂之鳶根、又圖經云、葉似射干布地生、黑根似高良薑而節大、數个相連、

〔和爾雅 七草木〕鳶尾(イチハツ)一名烏園　紫羅傘(同)(出于閩書)

〔大和本草 七花草〕紫羅傘(イチハツ)　又鳶尾ト云、閩書云、本草圖經名鳶尾、葉似射干、花色紫碧、不抽高莖、俗呼紫羅傘、其根卽鳶頭、亦入藥、射干胡蝶花此類也、圖經又曰、人家亦種、葉似射干而濶短、與射干全別、射干花紅抽莖長、今案(○貝原篤信)陳藏器蘇恭所說射干ハ、倭名カラスアフギナリ、鳶尾ハイチハツナル事分明也、カラスアフギハ莖高ク花紅ナリ、イチハツハ莖短ク葉ヒロク、花紫ニ燕子花ニ似タリ、綱

ふこと久し、いにし天保甲午の年、三河田原に遊事し、俸祿を辱ふせられ、館舍をも給りければ、其四周の竹林中に草薢の多く生じたるを、家奴に命じほらしめ製し試み、其わざをつばらかにしるし、世にひろくすることゝ、はなしつ、

乙未年仲冬　　黄葉園主人誌

〔毛吹草三〕河内　芹谷野老　武藏　津久美野老

〔雍州府志土産六〕野老　案草薢之類也、洛北鞍馬山之產爲佳、土人掘其根、水洗煮之後、村婦盛布嚢、戴頭上賣京師、一種有稱江戸野老者、其狀長大而其味甘美也、

〔食物知新首〕日域諸國名產

果類　鞍馬草薢城州　久津美草薢武州

〔出雲風土記島根郡〕凡諸山野所在草木、〇中略　薯蕷、草薢、

〔古事記景行中〕於是坐倭后等、及御子等諸、下到而作御陵、卽匍匐廻其地之那豆岐田、自那下三字以音而哭爲歌曰、那豆岐能多能伊那賀良邇、伊那賀良爾波比母登富呂布、登許呂豆良、

〔拾遺和歌集物名七〕ところ、ところ、たちはな、　すけみ

思ふどちところもかへずすみなれんたちはなれなば戀しかるべし

〔拾遺和歌集雜春十六〕春ものへまかりけるに、つぼさうぞくして侍ける女どもの、野べに侍けるを見て、なにわざするぞととひければ、ところほるなりといらへければ、　賀朝法師

春の野にところもとむといふなるはふたりぬばかり見てたりや君

返し　　よみ人しらず

春の野にほる〳〵みれどなかりけり世に所せき人のためには

〔空穗物語俊蔭〕いきたるものころすはつみぞ、これをひろひてくへとをしへて、このほかひろひ

〔武江年表六〕天明六年、淺草心月院門前なる輿市といふもの、草薢の根を以蕎麥の如く製し夫食とし、又葛の如く製して、食物にも糊にも用ふる工夫をなし、官許を得て、九月の末より、在々諸州迄も賣弘む、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕一草薢和名土古呂　食經燒蒸充糧トアレドモ、今食者ナシ、蒸搗テ爲餅、乾シテ碁盤及硯材ニ造ルベシ、

〔嬉遊笑覽十二附錄〕草木軍談と云草子に、美濃國横藏の藥師如來は萩にて作る、同國石越の圓興寺に安置せらるゝ觀音菩薩も萩なり、越後國久米山の藥師は野老にて作れり、歌に久米山の藥師のみくじところにて苦々しくもたふとかりけり、萩は大木ありとぞ、トコロは粉にして、煉りて器物に作るといへり、この藥師も然せしにや、

〔廣益國產考四〕草薢　ところ

草薢はところなり、本草諸書を按ずるに、無毒にして諸病を治するの大功あり、且食用にもあつべきものなれば、飢歲には五穀にかへて餓死をまぬかるべし、されば我邦にても、古へは食料となせしゆへ、和名抄にも芋の類におさめられ、崔禹錫が食經を引て、薢は味ひ苦く少しく甘し毒なし、燒蒸て糧にあつといへり、○中略今は國により食ふ所あれども、大かたは只艸とこゝろえて、食となるべき事はしらず也けり、且此物藥となりて諸病を治する事も、唯醫師のみ知りて、諸人是をしることなし、年凶にして五穀登ず、邊境の民食に乏しく、飢餓におよぶの時に至りては、偶これを掘出すといへども、其苦味をしのびかね、得も食ざること多し、曾て戸谷老人なる人是をなげき、苦味を去る工夫をなし、此物毒なくして藥となる事どもの證をひき、製草薢略記といへる書をつゞりて、世人にしらせたれども、苦味をぬき製するに至りては、口傳とばかりしるし、且その書、梓にのぼせざれば、世に知る人稀なり、故に予○大藏永常これを歎じ、其書を補はんことを願

〔延喜式大膳三十三〕正月最勝王經齋會供養料、○略註僧別日菓菜料、○中略署預䓁各二合、

仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、○中略薢四葉、好物料

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種、○中略松蘿、草薢、地楡、桑螵蛸各二斤、

〔類聚雜要抄一〕二五節殿上饗目錄保延元年右衛門督家成進ニ五節ㇾ時、玄蕃頭久長調ニ進之ㇾ○中略

居物次第○中略

次菓子小餅　唐菓子　枝柹　小柑子　搗栗○野老○椿餅　甘栗

〔德川禁令考四十四農家〕天明六午年九月

草薢を以夫食等に致し候儀御觸書

右之もの儀、山葵等に生候草薢之苦味を拔、粉ニ製候方ハ、食物幷糊ニ致し、如ニ割麥ニ之製候方ハ、米麥等を交、夫食相成、尤毒無ㇾ之品之旨申立候間、吟味之上、在方助にも可ㇾ成品ニ付、願之通草薢之問屋株賣場差免候、依ㇾ之京大阪其外國々江も、相對を以出店差出賣弘、右製法習請方旨望候ものは、最寄之出店江申聞次第、聊之禮物ニ不ㇾ及致遣候筈ニ候、右製方習請、在方ニ而致ニ手製ニ、夫食糊等ニ用候儀ハ勿論之儀候得共、商賣ニ致度存候者ハ、最寄與市出店江差出、外賣ハ不ㇾ致候樣可ㇾ致候、

淺草心月院門前
家主　與市

右之趣、御料ハ御代官、奉行支配之所ハ其奉行、私領ハ領主地頭より、寺社領共城下幷在町迄、不ㇾ洩樣可ニ相觸ニ者也、

九月

右之通可ㇾ被ニ相觸ニ候

〔易林本節用集 草木〕草薢(トコロ)又黄精、又野老、

〔多識編 二蔓草〕草薢、乎爾登古呂、今案度古呂、

〔倭訓栞 前編登 十八〕ところ 〇中略 和名鈔に黄薢、新撰字鏡に土薢をも訓せり、拾遺集によめり、古事記にところづらとも見ゆ、薢蔓の義也、春盤に用るは所領の義を取也、本朝式に苳と見え、漢語抄には野老と書り、所出未詳といへり、長鬚あるをもて名くる也、類聚雜要五節殿上饗にも見えたり、あまどころと稱するは萎蕤也、姫どころと稱するは女萎也、鬼どころと稱するは草薢也、枕草紙に見ゆ、山どころといふは知母也、字鏡に見ゆ、

〔本朝食鑑 三柔滑〕薢(訓土古呂)

集解、野老處處家園多種之、蔓生、葉似薯蕷而圓、大如盌有小尖、花有三稜、如桔梗之微花未開、碧色根類老薑薯蕷之狀、而有節多長鬚、煮之則根黄鬚白、故稱野老、冬春采根煮熟、拔鬚去皮而果食、味苦而甘、山中自然生者、節多肉瘠、味亦太苦、宜入藥用、凡采老肥根煮熟、擣碎堅之作器形、數日晒乾、卽勁堅如石、刀鐵不入、故造碁枰砧盤、然費功難成、故造之者少矣、本邦春初供蓬萊盤中之一種、而祝多壽及住處繁昌、其多壽者以白鬚多長黄肉堅固有野老之稱也、

〔和漢三才圖會 九十六蔓草〕草薢(ところ) 〇中略

按草薢蔓葉頗似薯蕷、開小白花、結青子三稜、其根類老薑薯蕷之狀、最肥者如甘藷而黄色、有節多長鬚、俗以爲野老、以鰕爲海老、共充嘉祝之食品、出於武陽者、肥大肉柔、味苦甘相半、煮之食甚佳也、山中自然生者、肉瘠味甚苦、呼曰鬼野老、豫州今治、藝州廣島、多出草薢、可藥入用、

〔藥經太素 下〕草薢　平味苦

能洗テ酒ニ一夜付テ剉焙、小瘡積聚テ治ス、主除腰背痛、治風寒温痹、周身補温、水藏堅筋骨、失溺陰萎益老人、

薢

コレハ薯蕷ノ類ニシテ蔓生ナリ、葉ハ薯蕷ヨリ圓、大五寸許、秋時葉間ニ穂ヲナシ花ヲ開ク、山萆薢穂ニ似タリ、別ニ子ヲ生ズ、零餘子ヨリ大ニシテ圓扁一寸許、周邊ニイボアリ、褐色、秋後苗枯ル、根ハ年ヲ經テ漸ク大ニナル、形圓扁ニシテ三四寸許、蒟頭(コンニヤクイモ)ニ似テ粗鬚多ク味苦シ、故ニ灰汁ヲ以煠過シ、再煮食フ、色黄ニシテ栗ノ如シ、是藏器後說及恭ノ說ノ土芋ナリ、又藏器ノ前說ハ別物ナリ、俗名ホド、一名フド紀州、ツチクリ江州、シバグリ同上、一名香芋食物本草、土圞兒救荒本草、地栗子同上、山中ニ生ズ、藤蔓紫黑色、葉互生ス、形小豆葉ニ似テ五葉、夏月葉間ニ花ヲ生ズ、數蕚穂ヲナス、長サ一寸餘、形豆花ノ如ニシテ、淺黄微紫色、其根モ蔓ニシテ數塊ヲ連ヌ、形鷄卵ノ如ク黄赤色、奥州南部ニハ端午ニ根ヲ用テ節物トス、　又一種三葉ナル者アリ、ミヅホド和州ト云、一名マメツル土州

〔古今著聞集十一畫圖〕小野宮のおとゞ、つゐたち障子に松をかゝせんとて、常則をめしければ、他行したりけり、さらばとて、公望をめしてかゝせられにけり、後に常則をめして見せられければ、かしら毛芋に似たり、他に難なしとぞ申ける、

〔新撰字鏡草〕薢°遅地反、山薢上二字止°己°呂°、

〔本草和名八草〕萆°薢°一名赤節、一名白支、一名快筋、一名具擎、已上三名出釋藥性一名虎膝、一名地脊、出大清經一名蜀脊、一名強脂、已上二名出兼名苑和名於°爾°止°古°呂°、

〔本草和名十七菓〕薢°出崔禹和名止古呂、

〔倭名類聚抄十七芋〕薢　崔禹錫食經云、薢音解、和名土古呂、俗用苄字、漢語抄用野老二字、今按所出並未詳、味苦小甘無毒、燒蒸充粮、衆名苑注云、黄薢其根黄白而味苦者也、

〔類聚名義抄八艸〕萆解オ°ホ°ト°コ°ロ°

〔伊呂波字類抄止殖物附殖物具〕薢トコロ　苄俗用字、或用野老二字、未詳、　野老已上同、俗用之、

〔下學集下草木〕萆薢トコロ又云、世俗皆謂野老也、

〔和漢三才圖會 百二柔滑菜〕黄獨　苦蔞 出于鄧武府志　俗云介以毛　時珍、以黄獨爲土芋之異名者非也、鎭江府志云、黄獨莖蔓花實、絕類山藥、葉大而稍圓、根如芋而有鬚、味微苦、按黄獨、葉似佛掌薯葉而大、色稍淡、其零餘子似薯蕷之零餘子而大、其根如芋魁而有硬鬚、煮則皮毛自脫、肉白、味淡甘美、處々皆有、藝州廣島多出之、

〔五雜俎 物十一〕何首烏、五十年大如拳、服一年則鬚髮黑、百年大如椀、服一年則顏色悅、百五十年大如盆、服一年則齒更生、二百年大如斗、服一年則貌如童子、走及奔馬、三百年大如三斗栲栳、其中有鳥獸山嶽形狀、久服則成地仙矣、

〔物類稱呼 三生植〕黄獨けいも　畿内にてけいもと云、東國にてかしゆうと云、(藥種の何首烏にあらず、同名にして異なり、)駿遠にてせつぷといふ、相模にてせんぶと云、仙臺にてべんけい芋といふ、

〔成形圖說 二十二菜〕毛芋(根芋鬚のごとくて、硬鬚あるを以て名けり、)何首烏芋(或は毛芋、何首烏ともいふ、)大頭久　比米 西州中略○

毛芋は藤生にて、葉宛がら薯蕷に類て稍長太く、色深し、野生なし、園圃中に種藝り、棚に搭し引上す、晚夏葉間に花開く、暮秋に根成て實著く、暖地にては葉に虫を生せり、而其根圓に、大さ斗の如く毛多し、外土黄色、肉は微黄なり、味略家芋に似て粘とねばらざるあり、中略○註其根を乾し蓄て、明年の種となせり、中略○上總あたりにて、大ツクと呼て、湯に淪し、鹽を傳て朝夕の飯にかて・食へり、

〔草木育種 下菜〕黄獨 鎭江府志　貯置たるかしうむかごを、四月頃山畑に穴をほること四五寸、一つ植る也、尤まやげ肥を土へませ植べし、

〔重修本草綱目啓蒙 十九柔滑〕土芋　ケ○イ○モ○　カ○シ○ユ○ウ○イ○モ○　カ○シ○ユ○ウ○東國　ゼ○ツ○プ○遠州　ゼ○ン○プ○
相州　ベ○ン○ケ○イ○イ○モ○仙臺　中略○

黄獨

ごとし、或石或人の手にも似たり、故にかく名づくるなるべし、

〔庖厨備用倭名本草一實疑〕甘藷、多識篇ニツクネイモ、或人曰、此和名ハ穩當ナラズ、江戸トコロト云アリ、恐クハ是甘藷ナルベシ、他日老圃ニ江戸トコロヲ問ニ、老圃曰、江戸トコロハ、常ノトコロノ如ニシテ鬚多ク生ジ、其長サ一二尺アリ、肉色黄ニシテ味アシヽ、灰湯ニテ煮熟スレバ煮栗ノ如シ、又ツクネイモヲ問ニ、老圃曰、其葉ノ形ハ山ノイモノ葉ト同シテ、色ウスクヤハラカ也、其根ノ色モ、山ノイモノ色ト同シテ、山ノイモヲツクネタルガ如シ、山ノイモノ根ハ牛蒡ノ如ク長シ、是ニヨリ長イモツクネイモト云ワケタリト云、本草集解ニ、甘藷ハ薯蕷ト云或ハ根葉トモニ芋ニ似タリ、其根ハ芋魁ノ如シ、故ニ芋類ト云、然ニ又本草説ニ、性味功用ハ薯蕷ニ同トイヘリ、是ニ依テミレバ、甘藷ハ江戸トコロニアラズ、ツクネイモナルコト疑ナシ、其根ノ芋魁ノ如シト云ハ、是土地ノカハリナルベシ、漢土ノ薯蕷ハ根ノ形圓也ト本草ニミエタリ、日本ノ薯蕷ノ根ハ長シ、又西國ノ蕪菁根ハ圓也、江州ノカブラハ稍長シ、加州山中ニ一種長キカブラアリ、是皆土地ノカハリ也、漢土ノ甘藷ハ芋魁ノ如ク、日本ノ甘藷ハツクネタル如キモ、土地ノカハリナルベシ、甘藷ハツクネイモ疑ナシ、

〔本朝食鑑三柔滑〕薯蕷

甘藷（近俗稱豆久禰伊毛、根似薯蕷而不長、如老薑芋魁、皮紫或灰黑、肉白或黄微青、味亦同、比薯蕷則不粘、莖葉亦同、然葉不尖而微圓、零餘亦生、氣味甘平無毒、主治亦與薯蕷同、必大（平野）按、是薯蕷之類也、）

〔本朝食鑑三柔滑〕蘚

何首烏芋、（春生苗、蔓生莖、紫色葉葉相對、如薯蕷而不光澤、其三稜亦小異、根大者似大芋魁、而有小稜、其色有黄有白、黄者味苦、似萆薢、白者甘而不苦、其花微小似薯蕷、其子著莖如零餘子、世人以爲有雌雄、而賞美之、必大（平野）按、葉莖略相似、然雌雄不交、根不赤白、味不苦澁、狀不五稜、花實亦似薯蕷零餘、則乖夜合交藤紅内消之名、惟近俗多食之、而無中其毒者、則非野芋天荷之比、暫爲無毒而可乎、）

はふほどにいもがぬかごはなりにけり、といひたりければ、ほどなく小大進、

今はもりもやとるべかるらむ、とつけたりける、おもしろかりけり、

薯蕷雜載

〔嬉遊笑覽附錄十二〕江州日野近邑山中、例年八月十日野神の祭あり、東西の村より芋を出して長短をくらぶ、是を芋くらべといふ、毎年かくあれば、よく作たてゝ、長さ一丈に近き芋ありとぞ、

〔風俗文選四説〕山芋説　吾仲

芋に數種あり、山中に生ずるを山芋と號し、自然生と稱して山藥に用ゆ、畑に植てまろがせとなるを、つくねと呼て、其功もすくなく其味も次也、秦楚には玉延といひ、鄭越には土藷と號す、杜詩嚢中の法をこゝろみず、陳簡齋は玉延の賦作る、鐘山の薯蕷は、三日炊るれど色を變せず、我國みちのくの芋は、糸を引事繭のごとし、四月に葉を生じ、初秋に子を結ぶ、ぬかごとよばれて座禪豆に入られ、いもが子ははふ程とよみて、叡聞に預る、寒夜の寢酒には、峨眉山の芋をすり込、卯月の麥飯には、まり子の宿のとろゝをうらやむ、世に腎藥ともてはやさるれど、鈍僧の爲には少よろしからず、人參よく人を活し、よく人を殺す類なればとて、機榾ばせを植ませて、其勢ひをもどされけるこそおかしけれ、

佛掌薯

〔書言字考節用集六生植〕甘藷（ツクネイモ）本草

〔物類稱呼三生植〕佛掌薯つくねいも　東國にてつくねいも、又つくいも、又山のいも、又やまとなどと稱す、關西にても山のいもといひ、又一名うちいもといふ、奥州仙臺にてはだいしいもと云、津輕にては唐いもと云、土佐にて手いもと云、上野にてみねいもといふ、

今按に山のいもと呼所をゝし、然どもやまのいもは薯蕷にて、東國に長いもといふ是なり、又藥物の山藥は、自然薯蕷を用ゆ、南郭遺契ニ負暄雜錄ヲ引テ、山藥本名薯蕷、避唐代宗諱豫、改名薯藥、避宋英宗諱曙、遂名山藥云云、又つくねいもを山のいもといふは、其形山のごとく、又峯の

山藥ノ實ナリ、葉間ニ生ズ花ハ別ニ穗ヲナシ生ズ、土芋ノ穗ニ同ジ、ムカゴハ大サ四五分、大小一ナラズ、形ノ圓長モ等シカラズ、褐色ニシテ斑アリ、食用ニ良トス、

〔空穗物語藤原の君〕かくて人まいりなどするを、とくまちいちへ出たるまに、さむらひに人まいりて、ひるましり侍に、さるなゝしとて、うへに申ければ、おとゞ心まどひて、われか人かにもあらでの給、かゝればこそは、人なくて年ごろへつれ、いかなるついえ有らん、ましてあたらしくとも人は、十五人つけ、まめをひとさやあてにいだすとも、とをまりいつゝなり、たねなくしていくそばくなりぬる、こをひとつあてにいだすとも、とをまりいつゝなりならしてとらば、おほくのぬかごいも出きぬべし、

〔源平盛衰記二十六〕忠盛歸入事

此子〇平清盛三歳ノ時、保安元年ノ秋、白川院熊野御參詣アリ、忠盛北面ニテ供奉セリ、絲鹿山ヲ越給ヒケルニ、道ノ傍ニ薯蕷絃枝ニ懸リ、零餘子玉ヲ連テ生下、イト面白ク叡覽アリケレバ、忠盛ヲ召テ、アノ枝折テ進セヨト仰ス、忠盛零餘子ノ枝ヲ折進スルトテ、仰下シ給ヒシ女房、平產シテ男子也、オノコヾナラバ、汝ガ子トセヨト、勅定ヲ蒙リキ、年ヲ經ヌレバ、若思召忘タル御事モヤ、次ヲ以テ驚奏セント思ヒテ、一句ノ連歌ヲ仕ル、

道程ニイモガヌカ子モナリニケリ、是ヲ捧タリ、白川院打ウナヅカセ御座シテ、

忠盛トリテヤシナヒニセヨ、ト付サセ御座ケリ、思召忘サセ給ハヌニコソト、悦思ヒケル處ニ、

還御ノ後三歳ト申冬冠給テ、熊野權現ノ御託宣ナレバトテ、清盛ト名ク、

〔今物語〕小大進と聞えし歌よみ、〇中略ほどなく八幡の別當光淸に相ぐして、たのしく成にけり、子などいできて後、もろともに居たりける所、近き所にいものつるのはひかゝりて、ぬかごなどのなりたりけるを見て、光淸、

零餘子

〔本朝食鑑 三柔滑〕薯蕷

和城河丹江紀諸州最好、奥之南部、野之二荒、駿之富士根、甲之郡内、武之八王棘間等處皆佳、京師江都市上惟肥厚者足作蔬矣、

〔奥羽觀蹟聞老志 三貢土産〕薯蕷(ヤマノイモ) 俗謂之山薯、以出于名取郡爲佳

〔延喜式 三十三大膳〕諸國貢進菓子

越。前。國。(中略)薯蕷二擔、薯蕷子二擔、

〔出雲風土記 意宇郡〕凡諸山野所在草木、(中略)薯蕷、

〔本草和名 二十本草外藥七十種〕零餘子、此薯蕷子、在葉上生、大如鷄卵、和名奴。加。古、

〔倭名類聚抄 十七芋〕零餘子 拾遺本草云、零餘子(和名沼加古)薯蕷子也、

〔伊呂波字類抄 奴植物附植物具〕零餘子(ヌカゴ)薯蕷子也 零陵子 同

〔本朝食鑑 三柔滑〕薯蕷

零餘子 源順曰、和名沼加古、必大(平野)按、今世呼爲奴加古、即山藥藤上結子者也、長圓不一、皮黄或青、黄青雜色、小塊多出、亦有、肉白、煮熟作果食、味似山藥、氣味主治與山藥同、尤爲小兒之弄、

〔物類稱呼 三生植〕零餘子ぬかご 相州にてくろめと云、常陸にていもしが子といふ、肥前唐津にてばんごといふ、常陸の國にていふいもしがこは、いもがこにして、しは助字也、平忠盛のいもが子ははふほどにこそなりにけれとありしも、此事とかや、故事こゝに略す、

〔倭訓栞 後編十四奴〕ぬかご 倭名抄に零餘子を訓せり、糠子の義、ちひさきをいふなるべし、大臣大饗にも用ひらるゝ事、江家次第に見えたり、今むかごといへり、伊豫にてめかごといふ、(下略)

〔重修本草綱目啓蒙 十九柔滑〕零餘子 ヌカゴ古名薩州 ムカゴ メカゴ豫州 マカコ石州 ガコ筑前

クハンゴ同上 カゴモ防州 カグモ長州 イモカゴ三州 イモシカゴ常州 イモゴ佐渡

クロメ相州 パンコ肥前 (中略)

薯蕷產地

〔廻國雜記〕ところ澤といへる所へ、遊覽にまかりけるに、福泉といふ山伏、觀音寺にてさゝえをとり出しけるに、薯蕷といへる物、さかなに有けるを見て、誹諧、

野遊のさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老澤かな

〔梵舜日記〕慶長二十年正月十四日辛酉、妙法院殿ゟ荷桶肴三種、(饅頭 [illegible] 昆布)薯蕷一折被下也、

〔官中秘策 二十 年中行事〕年中諸大名獻上物之事

九月

一薯蕷　大久保長門守

十月(寒中獻上此月ニ入ル)

一薯蕷　鹽雉子(寒中)　秋元攝津守

一薯蕷　松平越中守

一薯蕷　南部甲斐守

十二月

一自然生薯蕷　牧野豐前守

〔年中恒例記〕九月九日

今日より十二月廿日迄、御かゆ栗こぶ參る、山のいもおろし候て參せ候、御かゆの入料、政所より請取之云々、進士說、

〔梅花無盡藏 三上〕二十日(〇長享二年十一月)能生逆旅之主、爲余調薯蕷之麪子、設浴湯之室、懇切不知所謝、蓋以薯蕷爲麪者、越府大主(〇上杉房定)之筵而始見之、惜哉洛盤未知此風味、

逆旅眉寒離帶稜、麪調薯蕷主人蒸、蛻塵衣入浴湯室、忘却途中履薄氷、

〔毛吹草 三〕山城 ヌカゴ

デ飮飽セ奉ラバヤトイヘバ、五位何ニ喜フ侍ント云テ止ヌ、〇中略而ル間、物高ク云音ハ何ゾト聞バ、男ノ叶テ云樣、此邊ノ下人承ハレ、明旦ノ卯時ニ、切口三寸長サ五尺ノ署預各一筋ヅヽ持參レト云也ケリ、奇異クモ云哉ト聞テ寢入ヌ、未ダ曉ニ聞バ庭ニ筵敷音ス、何態爲ニカ有ムト聞ニ、夜曉テ蔀上タルニ、是レハ長筵ヲゾ四五枚敷タル、何ノ料ニカ有ムト思フ程ニ、下衆男ノ木ノ樣ナル物ヲ一筋打置テ去ヌ、其後打次ギ持來ツヽ置ヲ見レバ、實ニ口三四寸許ノ署預ノ長サ五六尺許ナルヲ持來テ置、巳時マデ置ケレバ居タル屋許ニ置積ツ、夜前叫ビシハ、早フ其邊ニ有下人ノ限リニ、物云ヒ聞スル人呼ノ岳トテ有墓ノ上ニシテ云也ケリ、只其音ノ及ブ限ノ下人共ノ持來ルダニ然許多カリ、何況ヤ去タル從者共ノ多サ可思遣、奇異ト見居タル程ニ、解納釜共五ツ六ホド搔持來テ、俄ニ杭共ヲ打テ居ヘ渡シツヽ、何ノ料ゾト見程ニ、白キ布ノ襖ト云物著テ中帶シテ若ヤカニ穢氣无キ下衆女共ノ、白ク新キ桶ニ水ヲ入テ持來テ此釜共ニ入ル、何ゾノ湯涌スゾト見レバ、此水ト見ハ味煎也ケリ、亦若キ男共十餘人許出來テ、袪ヨリ手ヲ出シテ、薄キ刀ノ長ヤカナルヲ以テ、此署預ヲ削ツヽ撫切ニ切ル、早フ署預粥ヲ煮ル也ケリ、見ニ可食心地不爲、返テハ疎シク成ヌ、サラ〱ト煮返シテ署預粥出來ニタリトイヘバ、參ラセヨトテ、大キナル土器ノ銀ノ提ノ斗納計ナル三ツ四ツ計ニ汲入テ持來タルニ、一盛ダニ否不食テ飽ニタリト云ヘバ、極ク咲テ集リ居テ、客人ノ御德ニ署預粥食ナド云ヒ嘲リ合ベリ、

〔殿中申次記〕正月八日

同〇永正十三

一土筆一折、〇中略山芋一折、　若王子例年之上遣

〔建久三年皇大神宮年中行事五月〕五月御節供、〇中略御饌ハ、粽山芋蒜名吉菓子等也、

〔武家調味故實〕一このみてまいるべき物

山のいも

〔宜禁本草乾五藥〕山藥　甘温平、一名山芋、二月八月採根、暴乾、且愈疾而補、主傷中泄精、補虛羸、益氣力、長肌肉、下氣止腰痛、充五臟、除煩熱、强陰、食療云、利丈夫、助陰力、益顏色、心鏡云、主下焦虛冷、小便數、瘦損無力、長志安神、主健忘、衍義云、竹刀刮去皮、於簷下風徑處、盛竹篩、不得見日色、全乾收之、生則滑不可入藥、熱則壅、亦滑氣、略

〔農業全書五山野菜〕薯蕷

藥種にする法は、寒中に皮をさり、長さ三寸ばかりに切折、かき灰又は米粉をぬり、竹かごに入、風にあて陰干にし、或は糸にてあみ、寒中さらしをき、能干たる時籠に入藏め置べし、都又は城下などの大邑に、遠き所の山中にて、山藥は多けれども、運送の費かゝり、其利なき所柄にては、乾山藥に調へ藥屋に賣べし、取分藥種には山中の自然生を用ゆるなり、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料〇中略　薯蕷三根半根長一尺、徑一寸、菓餅料二根、好物料一根、生菜料半根、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、〇中略　署預七斗、　攝津國卌四種、〇中略　署預六升、

〔今昔物語二十六〕利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七

今昔、利仁ノ將軍ト云人有ケリ、若カリケル時ニ□ト申ケル、其時ノ一ノ人ノ御許ニ格勤ニナン候ケル、越前國ニ□ノ有仁ト云ケル勢德ノ者ノ聟ニテナム有ケレバ、常ニ彼國ニゾ住ケル、而ル間、其主殿ニ正月ニ大饗被行ケルニ、當初ハ大饗畢ヌレバ、取食ト云者ヲバ追テ不入シテ、大饗ノ下ヲバ其殿ノ侍共ナン食ケル、ソレハ其殿ニ年來ニ成テ所得タル五位侍有ケリ、其大饗ノ下侍共ノ食ケル中ニ、此五位其座ニテ署預粥ヲ飲テ舌打ヲシテ、哀レ何カデ署預粥ニ飽カント云ケレバ、利仁此ヲ聞テ、大夫殿未ダ署預粥ニ飽セ不給カト云ヘバ、五位未ダ不飽侍ト答フ、利仁イ

薯蕷利用

る物なるゆへ、瓦を廻りに立、その中に糞土を一盃入、たねを指三つばかりのふとさに割て、五七寸も間を置てうへ、其後もわきより、能こゑを入べし、牛馬糞など土の和らぐ物をおほひをけば、その瓦の内殘らず皆いもになる物なり、土龍のくはざるふせぎをよくすれば、是又多く作りて厚利の物なり、凶年飢饉をも助る事、穀に劣らぬ物にて、性よく人に藥なり、取分手入次第にて、凶年をもいとはず、甚益おほく、損なき物なり、諸國にても、城下ちかき所、又は人家多き大邑の邊にては、多く作りて、利潤ある物なり、尤つねの料理にも、品々用ひてよし、

〔成形圖説菜二十二〕山津芋

山芋は根は更にも云ず、食にも藥にも皆悉味の美のみならず、性も良こと野蔬中の巨魁ともいふなるべし、本山原に產るものにして、亦家園にも生(ハエ)り、三四月の交、宿根より苗を出し蔓と成る、葉に縱(タテ)道(スヂ)の光澤ありて軟けし、老(フル)くなれば三尖(ミカド)なすあり、其根大きは蔓亦從て太し、中夏の頃葉間に細花さく、棘の花に頗似れり、色白きと淡紅とあり、實なりて中秋に至りて熟り、圓扁大小乙(ヒトシ)からず、色栗子に似て、是亦味佳しく、生も熟(ウマ)たるも食ふべし、卽糠子なり、○中略根は四時よろしけれど、其發芽の節は味腴からず、二八月掘采ぞよき、大なるは圍み二握に近く、長さ四尺にも餘れり、○中略凡大和、山城、丹波、近江、紀伊等に產る山芋嘉し、中國西州より東陸山形日光富士郡內棘間の諸地また宜し、

〔浪花の風〕長芋には長きものあれども、是は江戶にて一年芋と云類にて、橫に延る樣に人力にて製せしものなり、自然と根入深くして、延大なるものは絕てなし、

〔藥經太素下〕薯蕷　温味甘　山藥トモ　一說ニ銅鐵ヲ忌

能洗テ上皮ヲ刮去テ、白水ニ付テ切干モ有、又石灰ヲヌリテ干モ有、腰痛ト膝ノ力ナキト、耳ノ聞ヘザルニ用、能安寸白、鎭心神、補虛下氣、强筋骨、

て横にねせ、其上より又糞を土とかき合せ入る事三四寸ばかりおほひ置、早せば水をそゝぐべし、但甚うるほひの過るはあしゝ、山藥は人糞を用る事を嫌ふと云ならはせり、されども久しくよくかれたるを、わきよりかくるはよし、つるの出るを待て、竹や柴などを立て、是にまとはせ、或棚をかまへて、はひまとはせ、又多く作るには籬をゆひて、まとはするもよし、わきを削り、草あらば去べし、求めのなる所ならば、油糟、鰯などの糞を調へ置、側を少ほりくぼめて、次第に多く入べし、糞し養ひによりて過分に利潤ある物なり、霜ふりて掘取べし、麥をまかざる地ならば、霜月の後までもをきて掘取べし、遲き程根よく入物なり、○中略又山城にて、薯蕷を作る法、細沙のよく肥たる地の濕氣なきを、いか程も細かにこなし、何にても先作りて、さて來春山藥を作るべき前の冬よりは、麥を作らずして、よく／＼寒耕しこなしをき糞をも多くうち、度々犂かへし、熟しをきて、畦を作る事、麥畦の廣さのごとく、竪にても、横にても、筋を廣く切、筋と／＼の間、凡二尺ばかり、さてたねは、大きなる蘆頭の細長き所ばかりがよけれども、多く作るには求る事成難き故、肥たる太き山藥を四五寸ばかり、竹刀にて切折て、筋の中に横にふせ、其間一尺程をきて、兩方より土をおほふ事、一寸餘なり、同うゆる時分の事、二月初よし、遲くうゆるは、芽立出て痛む事あり、同じく糞を用る事、芽立の土を出る時、油糟にても鰯の粉にても、芽のきは近く、一二寸をきて、鍬にて土を兩方へかきのけ、能ほど入べし、勝手次第糞の多き程よし、其後土をおほひをき、又山草にても馬屋ごゑにても、多くおほひ置べし、是は日おほひのためにもなるゆへ、薄ければ根に日とをりて痛む事あり、其後とても、水糞などを度々かくべし、扨つる漸く出る時、竹にても柴のくきにても、半間に二三本づゝさし、横ぶちを二とをりゆひ、まきつかせをくなり、同掘取時分の事、九月の末十月の間、わきより溝を立、おれざる樣にほるべし、急ぎてあらくすれば、必おるゝ物なり、○中略又つくねいもをうゆる法、是は常の畠など、屋敷の内にても、其まゝうゆれば、土龍のよく食す

釋名、山芋、(源順曰、署預一名山芋、兼名苑藷薁音署預同、必大(平野)按、王旻山居錄曰、曾得山芋子、然則山芋之名華和俱有之、)

集解、薯蕷山中野處自然生、稍短而堅實者、製作山藥、宜入藥用、家種長而肥豐者、宜入廚用、其味不及自然生之山產、故入廚亦宜山產、四月生苗延蔓、紫莖綠葉、葉有三尖、中一尖長、左右兩尖短而不尖、略似白牽牛葉而更光潤、五六月開花成穗、初碧後淡赤、結莢成簇、莢凡三稜、合成堅而無仁、其子別結於一旁、卽零餘子也、霜後收子留種、或春月采根截種皆生、冬月采根爲蔬食、或製作乾山藥、(略)〇(中)

根、氣味、甘涼無毒、主治、益腎氣、健脾胃、止洩痢、化痰涎、潤皮毛、餘詳于綱目、

薯蕷種類

〔重修本草綱目啓蒙(十九柔滑)〕薯蕷　ヤマツイモ(和名鈔)　ヤマノイモ　ナガイモ(〇中略)

家ニ栽ユル者ヲナ。ガ。イ。モ。ト云、一名マイモ、(和州)根ノ形圓ニシテ長サ一二尺、食用ニ良トス、救荒本草ニ家山藥ト云フ、又山中自生ノ者ヲジ。ネ。ン。ジ。ヤ。ウ。ト云フ、一名エグイモ、(大和)救荒本草ニ野山藥ト云フ、一名土山藥、(廣東新語)白鳩薯、(同上)家山藥ヨリ根細クシテ堅ク長シ、至テ長キ者ハ六七尺ニ至ル、藥用ニ良トス、頌ノ說南中一種生山中ト云者是ナリ、國ニヨリ家山藥ナクシテ、此品ヲ藥食共ニ用ユルアリ、筑前モ然リ、方言ヤマイモ、又一種ツ。ク。ネ。イ。モ。ト呼ブ者數品アリ、和州ノ產ヲ良トス、故ニ大和イモ、ウダイモト云フ、其形扁ク、枝アル者ヲイ。チ。ヤ。ウ。ガ。タ。ト呼ブ、一名ミネイモ、(上野)ミカハイモ、(仙臺)ハダヨシ、(同上)テイセ、(土州)トウイモ、(津輕)漢名佛掌薯、(鎭江府志)一名掌薯、(撫州府志)其形肥厚ニシテ、人形ノ如キ者ヲ、ダ。イ。コ。ク。イ。モ。ト呼ブ、一名トイモ、(仙臺)漢名觀音薯、(陽春縣志)人薯、(南寧府志)又最肥大ニシテ、長サ一尺餘ナル者ヲキネイモト呼ブ、是皆山藥ノ類ナリ、苗ノ形狀モ異ナラズ、

薯蕷栽培

〔農業全書(山野菜)〕薯蕷

うゆる法、細沙の地、山ごみ(田舍にてはあずと云)など、いか樣和らかにして、深く牛蒡など作りてよき地心、少つまり心の地に宜し、畠に長く溝を掘、深さ廣さ各二尺ばかりにして、牛馬糞と土と合せ、溝の中に半分過入、山のいもの肥たる長き皮の薄きをゑらび、三四寸に折、溝の中に五六寸間ををき

薯蕷名稱

〔萬葉集相聞 四〕柿本朝臣人麻呂歌四首〇三首略
三熊野之浦乃濱木綿百重成、心者雖念、直不相鴨、

〔拾遺和歌集戀 十四〕屏風にみくま野のかたかきたる所　かねもり
さしながら人の心をみくま野のうらのはまゆふいくへなるらん

〔源氏物語少女 二十一〕殿のさやうなる御かたち、御心とみ給ふて、はまゆふばかりのへだてさしかくしつゝ、なにくれともてまぎらはし給ふめるも、むべなりけりと思ふ、

〔新撰字鏡草〕署預山〇伊〇毛〇

〔本草和名草 六〕署預一名山芋、秦楚名玉延、鄭越名土藷、仁諝音諸一名土茶根、一名茅茶根、已上二名出小品方一名諸署、一名王延、一名脩脆、齊越名芋、鄭越名山陽、已上出釋藥性一名藷薁、署預二音一名延草、已上二名出兼名苑一名玉茅、一名土餘、一名大餘粮、出雜要訣又有猪餘、和名也〇末〇都〇以〇毛〇、

〔倭名類聚抄芋 十七〕山芋　本草云、署預一名山芋、和名夜万都以毛、俗云山乃以毛、兼名苑云、藷薁、今按藷音與、署預同

〔伊呂波字類抄也 植物附植物具〕薯蕷ヤマノイモ、本草和名、無草冠、俗作署預、　山芋一名山芋、本草云、署預　藷薁同、已上　署預　秦楚名三延、鄭越名土藷、仁諝音諸　土茶根　茅茶根已上二名出少品方　脩脆　鄭越名山陽出釋藥性　玉茅　土餘
大餘粮ヤマノイモ、出雜要訣、已上

〔下學集草木 下〕薯蕷山芋也、又云預藥、或云山藥、趙宋之時、爲度去諱、故有多名也、

〔易林本節用集伊 草木〕薯蕷山

〔和爾雅菜蔬 七〕薯蕷山芋、藷薁、土藷、山藥、玉延並同、　野山藥俗云自然生

〔東雅穀蔬 十三〕山芋ヤマツイモ　倭名鈔に薯預一名山芋、ヤマツイモ、俗にはヤマノイモといふ、零餘子はヌカゴ、薯預子也と註せり、ヌカゴとは、其子小しきなるをいふなり、

〔本朝食鑑菜滑 三〕薯蕷訓也、末乃伊毛、或云長伊毛、古者和名夜萬都伊毛、俗曰山乃伊毛、

濱木綿

ヲ生ズ、

〔大和本草九雜草〕濱木綿　ヲモトニ似タリ、俗名ニハマヲモトヽモ云、海邊ニ生ズ、七八月白花ヲヒラク、莖高クノビテ只梢ニ數花アツマリヒラク、卷丹ノ花ノ形ニ似タリ非好花、季秋結實、花サキタルアトニ數顆ミノル、一顆ノ大如胡桃、內ニ無核有白肉、萬葉集第四柿本人丸歌云、ミクマノヽウラノハマユフモヽエナルコヽロハ思ヘドタヾニアハヌカモ、仙覺抄云、濱ユフハ芭蕉ニ似テチイサキ草也、莖ノ幾重トモナクカサナリタル也、ヘギテ見レバ、白クテ紙ナドノヤウニヘダテアルナリ、大臣大饗ナドニハ、鳥ノ別足ツヽマンレウニ、三熊野浦ヨリシテノボセラルヽトイヘリ、綺語抄云、濱ユフハ芭蕉葉ニ似タル草、濱ニ生ル也、莖ノ百重アルナリ、篤信曰、今按ニ西土ニモアリ、ハマバセウト云、紀州熊野ノ濱ニ多シ、甚雪寒ヲ畏ル、宅中ニウヘテハ冬月ワラニテアツクツヽミ、或コモヲ以オホフベシ、不然枯ル、盆ニウヘテ屋下ノ暖處ニヲクベシ、海濱ニアリテハ潮風温ニシテ雪早ク消ルユヘカレズ、二種アリ、一種ハ葉柔薄、其莖ノ皮多ク重レリ、是百重ナルトヨミシナルベシ、一種ハ葉ツヨクアツシ、莖皮カサナラズ、

〔和漢三才圖會九十五毒草〕木藜蘆　黃黎蘆　鹿蹏俗云濱木綿、又云濱芭蕉〇中略

按木藜蘆南紀海濱溪澗有之、高二尺許、莖葉微似芭蕉而狹長、又似蜀黍苗、有淺黑皮、裹蘆數片層層、夏抽莖開黃花、不如藜蘆花之艶、性畏寒、移植之於京大坂多難茂、又以不甚美人不爲珍、自古以藜蘆稱於毛止、故是亦呼曰濱於毛止、客誤而已、

〔筆のすさび上〕萬葉集四にある所の濱木綿といふ草は、一名濱芭蕉一名濱をもと共云、廣東新語にのする所の文殊蘭なり、芭蕉に似て小なり、莖幾重となく重り、花は夏の末より秋に至て開く、極めて潔白なり、形百合のごとし、十二花漸々上へ咲上る、紀州熊野海邊に多く生す、花盛の時は白木綿を見るがごとし、よつてはまゆふと名づく、

仙茅

して日に乾こと三度ほどして、暖地に植るといふ、花鏡の法も是に似たり、水仙は安房國に多し、山にて早く花をひらく、盆に植たるは花咲がたし、地にうへて七月頃根廻を堀て、酒粕馬糞人糞とませ合、多入てよく土を踏つけ、夏中度々水を灌てよし、花鏡云、七月猪屎和泥種、

〔毛吹草三〕攝津　水仙花（分テ當所ニ多シ、桶ノ箱ニ入テ諸方ヘ遣ス、）

〔多識編二山草〕仙茅、今案也末知、異名獨茅、（開寶）茅瓜子、（同）

〔物類品隲三草〕仙茅　和名キンバイザヽ、先輩キスゲトスルハ大ナル誤ナリ、頌曰、仙茅葉青如茅、而軟且略濶、面有縱文、又似初生椶櫚秧、高尺許、至冬盡枯、春初乃生、三月有花如梔子花、黄色不結實、其根獨莖而直、大如小指、下有短細根相附、外皮稍粗褐色、內肉黄白色、東璧曰、蘇頌所說詳盡得之、但四五月中抽莖四五寸、開小花深黄色、六出不似巵子、以上兩說キスゲニアラズ、此モノ葉初生ノ椶櫚葉ニ似テ、六瓣ノ深黄花ヲ開ク、大サ五六分許甚可愛、根ハ菖蒲根ノゴトクニシテ、又別ニ小根ヲ附ク、其形略人參ニ似タリ、皆頌ガ說ノゴトシ、但頌不結實ト云モノハ非ナリ、花謝後莖更ニ延ルコト寸餘、莖下豊ニシテ形棗核ノゴトク、內ニ實アリ、熟スレバ迸裂ス、其內白穰アリテ實ヲ包ム、實ハ椒目ノゴトクニシテ稍小ナリ、長崎八郞山產、戊寅歲田村先生始テ是ヲ得タリ、己卯主品中ニ具ス、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕仙茅　キンバイザヽ（增一名阿輪勒陀（本草經）　阿輪乾陀（本草原始））肆中ニ舶來ノ根多シ、形胡黄連ノ如ニシテ緊實、味甘蒼色黑シ、今キンバイザヽニ充ル說アリ、ヨク允當セリ、ソノ草ハ北地ニ產セズ、南紀及四國九州地方ニ多シ、葉ハ薹（スゲノ）葉ニ似テ短ク、柔軟ニシテ廣ヲ傷ラズ、長サ數寸或ハ一尺餘、綠色ニ微白毛アリ、一根數葉、夏秋葉間ニ小根ヲ出シ、上ニ黄花ヲ開ク六出、大サ五六分、ソノ根直生ス、橫紋アリ、旁ニ小根ヲ附ルコト、長解ノ說ニ異ナラズ、又舶來ノ者ト同ジ、又一種細葉ナル者アリ、花微シ小ナリ、俱ニ冬ハ苗枯レ、春ニ至リテ舊根ヨリ葉

眼、有效、絞汁入眼亦佳、又傅臃瘡愈、

〔重修本草綱目啓蒙 山草 八〕水仙 セツチウクハ 集下學 ハルタマ 大坂 キンダイ 房州 今ハ通名

一名凌波客 花鳥爭奇 水鮮 草花譜 凌波僊子 典籍便覽 凌波子 名物法言 雅蒜 汝南圃史 雅客 事物紺珠 儷蘭 三餘記 配玄 同上 銀臺金盞 中山傳信錄 增一名女星 三餘記 歳寒友 學圃雜疏 女史花 內觀日疏 姚女兒花 同上 波上靈妃 事物異名 栗玉花 同上 黃玉花 同上 玉蕊花 同上

花ニ單瓣アリ、千瓣アリ、單瓣ノモノヲ金盞銀臺ト云フ、同名アリ、銀ノ盃托ニ金ノ盞ヲ載タルニ象ドレリ、千瓣ノ者ハ一瓣ゴトニ黃色ナルモノアリテ、盞ノ形ヲナサズ、コレヲ玉玲瓏 祕傳花鏡ト云フ、又一種千瓣ニシテ淡綠色ナル者稀ニアリ、コレハ白花ノ變ジタルモノナリ、紅花ノモノ越後ニアリト云、然ドモ未ダ見ズ、群芳譜ニ、唐玄宗虢國夫人ニ、紅水仙十二盆ヲ賜ルコトアリ、名花譜ニ諺曰、五月不レ在レ土、六月不レ在レ房、栽向二東籬下一、花開朶朶香、汝南圃史ニ五ヲ六ニ作リ、六ヲ七ニ作リ、花開ヲ寒花ニ作ル、水仙單葉ノ者ハ皆六瓣ナリ、而ルニ時珍五尖ト云者ハ誤レリ、諸書ニ多クコノ誤ヲ襲フ、タヾ廣東新語ニ六瓣ト云是ナリ、本邦タマタマ變ジテ五瓣ナル者アレバ最奇品トス、又酉陽雜俎㮈祇ノ文ハ、十四卷山奈ノ條ニモ引テ山奈ノコトトナス、此ニハ水仙ノコトトス、水仙ノ說ヲ是トスベシ、

增、一種重瓣淡紫ノモノアリ、又蠻產ノモノアリ、文政十三年ニ舶來ス、奇品ナリ、

〔廣益地錦抄 五〕水仙　今多く草花につくり、冬の詠とせり、〇中略水仙の根をこまかにして粘におしませ、指いたみて腫るに付て甚妙也、又らう地の紙に書たる文字をぬぐひとるに、水仙の根の切りめにすりて取れば、紙にあとなくとれるといへり、すり取に墨付たるをば殺て、新たなる所にて、數遍すりぬぐふべしとぞ、

〔草木育種 下美花〕水仙 木草　農業全書の植法は、夏中根の塊を堀出して日に乾、人糞汁に浸置、又採出

の水仙は遲きといひしとぞ、又月令廣義に、水仙は雪中四友の一なり、又水仙の名のあるものは、なつ水仙といふものは、鐵色箭、又をらんだ水仙、じやがたら水仙といふものは、月下香なり、此類は其根の狀は葉の狀にて名づけしものにて、花の時節も、皆夏秋開くものなれば花信風には入がたし、

〔大和本草七草花〕水仙　金盞銀臺ヲ上品トシ、千葉ヲ下品トス、ウフルニ鐵器ヲオカセバ三年花サカズト云、海ノカタノ土ヲ用ヒテウフレバ花多シ、五月ノ初ニ根ヲホリテ、小便ニ一夜ヒタシ、ホシテ七八月ニ肥土ニ間遠クウフレバ春花多シ、又九月初ニ可植ト、諸書ニ見エタリ、早ク栽レバ葉莖長過テアシ、濕地モヨシ、糞小便スヽカヤカマドノヤケ土ナド宜シ、斥土尤ヨシ、北フサガリ南ニムカヘル陽地ニウフレバ花早シ、樹下ニ植テモ花開ク、又二年三年ハ夏間其マヽ根ヲホリ出サズシテヲクモ無害、如此スレバ苗早ク生ジテ、長ジ過テアシヽ、ホリ出セル根ヲヲソクウフレバ葉莖短シ、根ヲホリ出ス時、側子ヲ可分、花ヲキルニ根ノキハヨリキレバ根イタム根ノ三四寸上ヨリキルベシ、瓶ニサスニハ鹽水ヲ用テヤシナフベシト、花鏡ニ見エタリ、梅花モ又シカリ、名花譜曰、霜降後搭棚遮霜、雪ニ不折タメニ早ク掩フベシ、王思義三才圖繪曰、余家香雪林常蒔數畝、毎花時芳氣襲人トイヘリ、本邦好事ノ家亦有如此者、根ノ皮ヲ去研クダキ、日ニホシテ收ヲキ、打目ツギ目ニ乳汁ニ和シテツクル、又黑燒ニシテ乳汁ニ和シツクル、甚効アリ、本草ニ此能ヲノセズ、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕水仙　金盞銀臺〇中略

按水仙南面岸陰能茂生、如遠州駿州向陽地、則三四尺者不乏、或夏土用中掘其根、浸尿晒乾、一宿種之則佳、大抵十一月開花、近時有七八月開者、蓋因培糞之功也、河州志紀郡舟橋村出早華、紀州松江之產亦早、千瓣者名玉玲瓏、見于畫譜今有千葉淡青色者未見其紅花者、凡眼科取其根細末、水飛以點突

水仙

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　鐵色箭(きつねのかみそり)

〔下學集 草木〕水仙華(スイセンクワ)馮夷華陰人、服花八石、得爲水仙、見韻府、涪翁山谷詩、含香體素欲傾城、山礬是弟梅是兄、日本俗名曰雪中華也、

〔尺素往來〕爲庭上之景、莊嚴前栽仕候、春花者○中略 水仙花、

〔多識編 二山草〕水仙、今案爾波岐、異名金盞銀臺、

〔和爾雅 七草木〕水仙(スイセン)單瓣者名金盞銀臺、千葉者名玉玲瓏、

〔古今要覽稿 草木〕水仙

水仙は花信風小寒三候にあて、梅つばきと共に、嚴冬に花開き、その香も梅にをとらず、盛りも久しきものにて、めづべきものなれども、皇國にて歌にも詠せられず、本草和名、和名類聚抄等にも載られざるは、この花の不幸なり、抑この花元より此國に自生多くして、人家園砌にも植置て、冬月のながめとし、盆にうへ插花となし、金殿玉樓の上段に咲匂ふことゝ、餘花の及ばざるもの也、これにも單瓣重瓣あれども、單瓣のもの最勝れり、古へより圖に畫き、物に彫したるもの、皆單瓣のものにて、祐乘の彫せし水仙は、時珍の五瓣といへるも同日の誤なり、金盞銀臺もひとへのもの也、大和本草にも、千葉を下品とすといへり、すべて花はひとへなるよしは、徒然草にもいへども、殊に水仙は單をよしといふべし、又伊豆島日記に云、三宅島新島には、水仙寒菊は道もせ垣根などに、をのづからありてば草のごとし、霜の降ること稀なれば、葉も花もいきほひよしといへり、さて、安房國も暖氣にて自生殊の外にこえたり、さて花信風小寒三候に配したれども、其苗は九月頃より生じ、葉は二枝づゝ相對して、一株四枚のものなれども、五枚出るもあり、花は四葉の中より出て、初は帽をかぶりたる如し、其莟大きくなり、帽やぶれて花の開くもの也、其數多きは七八輪に至るもあり、少きものにても三輪より少なきはなし、早きは九月末より開くあり、をくるるは二月末三月に及もあり、信濃國人多咲たる水仙の花を見て驚きて、我國にてはる咲に、江戶

ヲ莖腐シ新葉ヲ生ズ、冬ヲ經テ枯レズ、根ノ形水仙ノ如ク、大サ一寸許、外ハ薄キ茶色ノ皮ニテ包ム、内ハ白色、コレヲ破レバ重重白薄皮ナリ、一種白花ノモノアリ、此ヲ銀燈花ト云、秘傳花鏡ニ見エタリ、〇中略

增、石蒜ノ根ヲ取リ水飛シテ、葛粉ヲ製スル如クシテ賤民食用トス、阿州一宇山ノ俗水粉ト呼ブ、或ハカタクリニ僞ル、ソノ味能ク似タリ、然レドモソノ製麁ナル時ハ、大ニ人ヲ醉ハシム、又石蒜汁ニ黄蘗ノ末ヲ加ヘ、卽効紙ニ代用ス、

〔廣益地錦抄五〕石蒜　是もさんじこのごとくなれども、花は八月中の比ひらく、色極朱紅花、しべ長く多く出ル、俗に曼珠沙花といふ、根は水せんのごとくなるたまなり、此根をこまかにすりて枯におしませ、屛風ふすまの下張に用れば、いつまでも虫はむ事なしとて、多く表具細工に用ユ、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　石蒜王子へン千住

〔佐渡志五物產〕石蒜　方言マムシユシヤケ　路傍ニ生ズ、一種鐵色箭アリ、人家ニ種ユ、

〔和爾雅七草木〕鐵色箭（ナツスイセン）與石蒜一類二種

〔大和本草九雜草〕金燈草（マンジユシヤケ）（ナツスイセン）　鐵色箭トモ云、月令廣義曰、冬春葉茂、夏月花生而葉死、花葉不相衡、此花最下品也、其葉石蒜ニ似タリ、一類ナリ、此花ヲ國俗曼珠沙華ト云、翻譯名義曰、曼珠沙此柔軟、又曰赤華、酉陽雜俎曰、金燈草俗惡人家種之、一名無義草ト云、花アル時ハ葉ナシ、葉アル時ハ花ナシ、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕石蒜〇中略

鐵色箭ハナツズイセン、キツネノカミソリ、石蒜ヨリ葉濶ク長シ、黄色ヲ帶ブ、山麓ニ多シ、四月ニ葉枯レ、五六月ニ莖ヲ生ジテ花ヲ開ク黄赤色、形狀石蒜ノ花ニ似テ反卷セズ、根ハ石蒜ニ同ジ、又一種ナツズイセント呼者アリ、葉濶ク長サ二尺許、色白ヲ帶ブ、夏ニ至テ葉枯ル、秋深テ花ヲ開ク、石蒜ヨリ莖モ長ク、花モ大ニシテ粉紫色、是宮人草ナリ、任昉ガ述異記ニ見エタリ、

彼岸花、小兒取之寸寸折之、脆而皮不絕、略作念珠狀、掛頸爲戲、莖汁臭、又法華經曰、摩訶曼陀羅華曼珠沙華、乃曼陀羅花、今云朝鮮牽牛花也、曼珠沙花此石蒜也、摩訶者大之義、其稱其美耳、其根似水仙根而不如蒜有隔也、塗諸瘡佳、或和泥土塗壁則鼠不敢入、又播和繪具書於漆器則不褪滅、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕石蒜　マ○ン○ジ○ユ○シ○ヤ○ケ○京　シ○ビ○ト○バ○ナ○同上　テ○ン○ガ○イ○バ○ナ○同上　キ○ツ○チ○ノ○イ○モ○同上久世下　チ○ゴ○ク○バ○ナ○　カ○ラ○ス○ノ○マ○ク○ラ○　ケ○ナ○シ○イ○モ○　キ○ツ○チ○バ○ナ○備前　サ○ン○マ○イ○バ○ナ○勢州　ヘ○ソ○ビ○同上粥見凶年ニハ團子トナル食用ス、ヘソビダンゴト云フ　ホ○ソ○ビ○同上　シ○タ○カ○リ○バ○ナ○同上松坂　キ○ツ○チ○ノ○タ○イ○マ○ツ○越前　キ○ツ○チ○ノ○シ○リ○ヌ○グ○ヒ○同上　ス○テ○ゴ○ノ○ハ○ナ○筑前　ス○テ○ゴ○グ○サ○同上　シ○タ○マ○ガ○リ○江州　ウ○シ○ノ○ニ○ン○ニ○ク○同上　シ○タ○コ○ジ○ケ○同上和州　ヒ○ガ○ン○グ○サ○仙臺　セ○ウ○〳〵○　バ○ナ○同上　ク○ハ○エ○ン○サ○ウ○同上　ワ○ス○レ○グ○サ○同上　ノ○ダ○イ○マ○ツ○能州　テ○ク○サ○リ○バ○ナ○同上　テ○ク○サ○リ○グ○サ○播州　フ○ヂ○バ○カ○マ○同上三ケ月　シ○ビ○レ○バ○ナ○同上赤穗　ヒ○ガ○ン○バ○ナ○肥前　ド○ク○ス○ミ○ラ○　同上　キ○ツ○チ○ノ○ヨ○メ○ゴ○同上　オ○ホ○ス○ガ○ナ○熊野　オ○ホ○キ○ヽ○同上　マ○ン○ジ○ユ○サ○ケ○同上　ユ○ウ○レ○イ○バ○ナ○上總　カ○ハ○カ○ン○ジ○駿州　ス○ヾ○カ○ケ○土州　ウ○シ○モ○メ○ラ○石州　ハ○ヌ○ケ○グ○サ○豐後　ジ○ユ○ズ○バ○ナ○豫州　イ○チ○ヤ○ニ○ヨ○ロ○リ○同上今治　ホ○ド○ヅ○ラ○同上松山　テ○ア○キ○バ○ナ○丹波笹山　キ○ツ○チ○ノ○ア○フ○ギ○濃州　ウ○シ○ヲ○ビ○同上　イ○ツ○ト○キ○バ○ナ○防州　ヤ○ク○ベ○ウ○バ○ナ○越後　ハ○ミ○ズ○ハ○ナ○ミ○ズ○加賀　一名石垂三才圖會　天蒜南産志、汝南圃史　重陽花花暦百詠　酸頭草附方　兎耳草證治準繩　脫紅換錦廣東新語　脫綠換錦同上　脫衣換錦同上

翻譯名義集ニ曼珠砂、此ニ朱華ト云、俗ニマンジユシヤケト云ハ此ニ據ナルベシ、又小兒コレヲ玩ベバ言語訥シ、故ニシタコヂケト名ク、原野甚多ク、阡陌道旁皆アリ、一根數葉、葉ハ水仙ヨリ狹ク長サ一尺許、綠色ニシテ黑ヲ帶ブ、厚ク堅クシテ光アリ、夏中卽枯、七八月忽圓莖ヲ出ス、高サ一尺餘、其端ニ數花聚リ開ク、深紅色六瓣ニシテ細ク反卷ス、内ニ長鬚アリ、花後圓實ヲ結ブ、實熟シ

古事類苑

植物部十六

草五

〔和爾雅 草木七〕石蒜(シビトバナ、ステゴバナ)烏蒜、老鴉蒜、蒜頭草、一枝箭、水麻並同、

〔物類稱呼 生植三〕石蒜 しびとばな 伊勢にてせそび、中國及武州にてしびとばな、又ひがんばな、又きつねのかみそり、上總或は美作にていうれいばな、又ひがんばな、越後信濃にてやくひうばな、京にてかみそりばな、大和にてしたこじけ、出雲にてきつねばな、尾州にてしたまがり、駿河にてかはかんじ、西國にてすてごばな、肥唐津にてどくずみた、土佐にてしれい、又しびと花、又すゞかけと云、又まんじゆしやけと云有、種類なり、

〔大和本草 雜草九〕石蒜 老鴉蒜也、シビトバナト云、四月或八九月赤花サク、下品ナリ、此時葉ハナクテ花サク故ニ、筑紫ニテステ子ノ花ト云、本草山草下ニアリ、

〔和漢三才圖會 山草 九十二 末〕石蒜 烏蒜 老鴉蒜 水麻 蒜頭草 婆婆酸 一枝箭 俗云死人花、又云彼岸花、

曼珠沙華 東國中略 ○

按、石蒜者山慈姑之類、而山野墳墓邊多有之、故俗曰死人花、而人家忌之不種者非也、唐人呼山慈姑曰無義草、惡葉花不相見亦同意也、九十月生苗似蒜葉而長有劒脊、四散布地、紀州人用藉密柑籠中、四月葉枯徒爲空地、七月抽一莖尺餘、莖端開花七八朶有靑節、毎朶開紅花六出、狹長攅簇如深紅絲紐、(無)瓣著赤蘂、七筋長而耑戴小子、形如伊乃牟(インド)土、而初赤後黄、老則花緣變白亦有之、秋分盛開、故名

〔重修本草綱目啓蒙十六 雜草〕吉祥草　和漢通名　ミカングサ勢州　クハンヲンサウ通名　一名観音草天台山方外志　吉祥蘭福州府志

路旁陰地ニ生ズ、葉萱草ノ葉ニ似テ短小、麥門冬ノ葉ヨリ短薄、一根ニ叢生ス、冬ヲ經テ枯レズ、夏根上ニ莖ヲ抽ルコト長サ數寸、穗ヲナシテ花ヲ開ク、大サ四分許、五瓣ニシテ厚ク、外ハ紅紫色内ハ白色ニシテ瑞香花ノ如シ、後圓實ヲ結ブ、麥門冬ヨリ大ナリ、初綠色、熟スレバ紅色、枯レテ黑色トナル、時珍ノ説ニ非、此吉祥也ト云フハ誤ナリ、

吉祥草

〔剪花翁傳 三 五月開花〕擬寶珠艸　花二種色白に淡紅、又白に淡靑、開花五月、方三分陰、地土えらばず、肥小便、冬中に二三度、又芽出し前に四五度澆ぐべし、分株九十月又春ひがんまへよし、

〔剪花翁傳 四 九月開花〕秋擬寶珠艸　花紫色葉少くして長し、開花九月上旬也、方三分陰、地土撰ばず、肥淡小便、芽出し前二三度、花前に四五度澆ぐべし、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　紫蕚(ぎぼうし)志村ニモ、

〔佐渡志 五 物產〕玉簪　方言キシキシナ、又キリキリナ、　山野ニ生ズ、此ノ國ノ兒戲ニ葉ヲ採、假面トスルヲ以テ、メムパト名ヅク、

〔書言字考節用集 六 生植〕吉祥草(キチジヤウサウ)夏開紫花成穗、

〔和漢三才圖會 九十八 石草〕吉祥草(きつしやうさう)

草本花詩譜云、吉祥草易生、不拘水土中石上俱可種、惟得水爲佳、用以伴孤石靈芝淸甚、花紫、蓓生然不易發、如家居種之、有花似云吉祥、

按紀州熊野山谷有草、俗名谷渡、其葉長二三尺、似石韋而薄硬、色亦淡、一根數葉、未見其花有無、如是吉祥草之類乎、

〔草木性譜 地〕吉祥草 本草拾遺

山中の產にして陰濕の地に叢生し、地上を橫行す、葉形くさらんに似て淺綠色、冬萎まず、夏新葉を生じ、秋新舊の葉間に紫莖を抽で、五瓣の小花を開く、面白色背紫色黃蕊あり穗をなす、其實翌歲冬に及で漸く熟し紅紫色、俗に云此花稀なり、花ある時は其家必す吉祥の事有りと、閩書云、家有吉事定自開花、故名吉祥、又花鏡云、花不易發、開則主喜と、或は云ふ十歲に一たび花を開くと、蓋し繁茂すれば卽花あり、稀に非ず、又きちじさう(漢名未詳)と云ふあり、俗に吉事あれば花を開くと云ふ、繁茂すれば卽花あり、

シテ微ク狹シ白花暮ヨリ開キ朝ハ凋ム、コレハ正開シテ小百合ノ如シ集解ニ亦有「紫花者」ト云、コレハ葉細長クシテ短キ箬葉ノ如シ、一根數葉叢生ス、秋花ヲ開ク、莖高サ一尺許、花小ニシテ淡紫色、又正開セズ、コレヲ紫鶴群芳譜ト云、一名紫蕚汝南圃史紫簪八閩通志和名ギボウシ京サギサウ筑前アマナ越後サジギボウ和州ツチレンゲ羽州ワスレグサ防州イワナ勢州勢州ノ土人葉ヲ取煮テ食フ、酸味アリ、又一種葉ニ黄色ノ縦條アルモノアリ、キ。ン。ギ。ボ。ウ。シ。ト云、白色ノ縦條アルヲギ。ン。ギ。ボ。ウ。シ。ト云フ、總ジテスヂギボウシト呼ブ、秋ニ至テ花ヲ開ク、淡紫色、莖ニ葉互生ス、コレヲ間道玉簪汝南圃史間道花群芳譜紫玉簪秘傳花鏡ト云、又一種至テ細葉ニシテ紫花ナルモノアリ、和名キ。ン。ラ。ン。漢名小紫群芳譜白花ナル者アリ、和名ギ。ン。ラ。ン。漢名小白同上又一種ブ。ン。チ。ヤ。ウ。ト呼ブアリ、其葉白鶴ヨリ狹ク、紫鶴ヨリ大ニシテ尖リ銀邊アリ、

〔廣益地錦抄六〕紫蕚　宿根より春生、濕地にえげる、所々溝のかたはらに多く生ス、葉はぎぼしのちいさき形車前葉に似り、六七月はなさく、花形もぎぼうしのごとく、鷺の飛ぶかたちなり、花の色、るり、紫、白色の三種有、花壇に植てあひすべし、草花の名う。る。い。さ。う。といふ、民俗葉をとり蒸て食、凶年に飢を救ふ、

〔地錦抄附錄二〕銀蕙花　草はつねのぎぼうしなり葉のまはり、雪白のへりをとり、筋のごとく見事に銀薄をおすがごとし、ながめすぐれてよし、花はつねのぎぼうしのごとくなり、

一寸蕙花　花形葉共につねのぎぼうしのごとくにて、生立ちいさく、葉あつくえまりてみじかく、莖むらさき色、花はうす紫、小りん、小鉢に植てながめとなる、八月花さく、

〔剪花翁傳三四月開花〕唐擬寶珠艸　花白に淡紅を帶たり、開花四月下旬、方三分陰、地土えらばず、肥淡小便、冬中に二三度、又芽出し前に四五度そゝぐべし、分株春彼岸前、又秋九月より十月よし、葉はいたつて丸く裏に粉を吹也、已下の擬寶珠艸育方並び同じ、

〔尺素往來〕先爲庭上之景、莊嚴前栽仕候、〇中略夏花者、〇中略寶珠花、〇中略秋花者、〇中略秋法師(ギ)、

〔大和本草花草七〕玉簪花　六月開花、葉潤有文條、本草毒草類ニノス、有毒一名白萼ト云、京都ニテ高麗ギボウシト云、筑紫ニテギボウレト云、

紫萼　玉簪ヨリ花葉トモニ小ニ、花ウス紫ナルヲ、京都ニテギボウシト云、筑紫ニテサギ草ト云、是紫萼也、玉簪ト一類別物也、紫萼ハ花未開時ハ鷺ノ不飛時ノ形ニ似テ、頭長ク觜身足備ハレリ、開テハ鷺ノ飛形ノ如シ、花六出ナリ、莖ノ末ニ花二十餘ツラナリサク、シベ長シ、玉簪花ハ葉大ニ、紫萼ハ葉小ナリ、紫萼ハ秋花サク、又四五月ニ開クモアリ、

〔和漢三才圖會芳草九十五〕玉簪　白鶴山　俗云岐保宇之〇中略

按玉簪葉潤圓末尖、似橋欄干之形、故俗呼名岐保宇之、五月開花也、如上說、〇本草綱目六七月結實作莢、長寸許、一莖十餘莢垂下、生青熟枯黃色、內有細子、正黑色也、然本草謂不結子者非也、

小玉簪(こぎぼうし)〇中略

按俗云小玉簪葉狹長抽莖也、二三尺長、於白鶴仙(ギボウシ)、其花微紫或純白也、又有葉上黃縱理者、謂之筋玉簪花、以爲異、近年出之、畫譜所言者是也、

〔重修本草綱目啓蒙芳草十三下〕玉簪　チヤウセンギボウシ　トウギボウシ　カウライギボウシ京　ギボウシ筑前　メンバ佐州、兒戲ニ此葉ヲ以假面トス、故ニ名ク、　ウルイサウ江戸　ギボウシユ越後　一名白鶴汝南圃史　白萼秘傳花鏡　白玉簪同上　季女群芳譜　內消花附方　綠莊嚴事物紺珠

葉圓ニシテ大サ六七寸、一根ニ數十葉叢生ス、葉ニ竪筋多シ、夏圓莖ヲ抽ヅルコト高サ四五尺、上ニ花多ク穗ヲナス、一花ノ長サ一寸五分許リ、白色六瓣ナリ、集解ニ四出ト云フモノハ誤ナリ、其花半開ニシテ正開セズ、長蕊花外ニ出テ、鶴ノ形ニ似タリ、ヨツテ白鶴仙ト名ク、後細莢ヲ結ブ、內ニ小黑子アリ、秋後苗葉トモニ枯ル、一種種樹家ニタマノカンザシト呼ブ者アリ、葉玉簪ノ如ニ

玉簪
紫萼

〔草木六部耕種法 十二書花〕萬年青ハ陰地ノ濕氣アル處ニ宜シ、根ハ甘薯ノ如クニシテ、側ニ小根ヲモ生ジ、培養ヲ精クスレバ能ク茂生ス、此物ニ金覆輪、銀覆輪、雪山、曙、鍬形、大名、長島、南京等ノ名アリ、南京ハ小ニシテ三寸ヨリ長キハ無シ、花モ無ク實モ無キ者ナリ、作法ハ何レモ同ジ、植地ハ細沙交ノ地ヲ好ム、必シモ土色ニ拘ハラズ、肥養ハ胡麻油粕ヲ第一トシ、干鰛、厨下溝泥、或ハ豆肥水及ビ米泔水ヲ澆グモ宜シ、實ヲ蒔モ根ヲ分モ、皆能ク活者ナリ、紫萬年青ハ別種ノ物タリ、故ニ其形ハ似タリト雖ドモ、絶テ同種ニ非ズ、莖ハ龍舌草ニ似テ、葉ハ文珠蘭ノ如ク、其表面ハ綠色ニシテ裏面紫色ナリ、七月下旬ニ葉間ヨリ紫色ニテ、蛤蜊ノ如クナル苔ヲ抽テ、小ニシテ白色ナル六瓣ノ花ヲ開キ、根側ヨリ蘖ヲ生ズ、其蘖芽ヲ分植レバ卽チ活ク、元來此物ハ文化十三年ニ、琉球國ヨリ渡リ、大坂ニテ紫金蘭ト名テ珍賞セリ、今ハ世ニ頗多シ、暖地ノ產ナルガ故ニ、寒ニ傷ムコト甚シ、夏中ハ時々盛養水ヲ澆グトキハ能ク成長ス、十月ヨリ塘窖中ニ温養シ、三月中旬ニ至テ出スベシ、若コレヲ霜ニ當ルトキハ、卽チ腐リ消失ル者ナリ、

〔嘉永明治年間錄 一〕嘉永五年十一月十五日、小萬年青高價ヲ以テ賣買スルヲ禁ズ、

近年世上無益之鉢物を翫び、就中小萬年青之儀、格別高價之品賣買致し、其上武家寺院之輩、植木屋共に立交、諸所にて集會致し、專ら損益を競ひ、身分不相應之及所業候族も有之趣、廉恥を失ひ候段、如何之事に候、尤武家寺院等慰迄に、鉢植草花の類培養いたし候は、不苦事に候得共、利德を爭ひ、賣買に携り候は、卑劣の至り不埓事候、以來右體之儀於相聞は、夫々及吟味候間、心得違致間敷候、

〔俚頭屋本節用集 草木〕秋法師

〔書言字考節用集 六生植〕玉簪草 一名白鶴仙、見本草、

〔多識編 二草〕玉簪、今案古。呂。比。俗云岐保宇志、

深綠色ニ至ル、コレヲ花戸ニ眞ノ靑實ト云、一種ハ熟シテ微シク褐色ヲ帶ブ、カバミト名ク、下品トス、其餘花戸ニホウトク、ラシヤ、イモバ等ノ名、五七品アリト雖ドモ、悉ク變化ニ屬シテ、久ク其形ヲ存スルコト能ハズ、故ニコヽニ略ス、

〔草木育種 下 葉或實觀べきもの〕万年靑（おもと） 花鏡 種類多し、長島雪山大名曙鍬形等猶多し、又なんきんおもとは、幅三四分長さ三寸ばかり花實なし、總て植る地は赤土に砂をまぜて植、油糟溝の水米泔水等澆てよし、陰地に植べし、或は云おもとは毒あり、然ども鳥此實を食を見れば、格別の毒もあるまじ、漢土にては万事の祝儀ごとに万年靑を用ること、本邦にて松竹を用るがごとし、花鏡云、万年靑一名蒀、呉中人家多種之、以其盛衰占休咎、造屋移居行聘治壙、小兒初生一切喜事、無不用之、以爲祥瑞口號、至於結姻幣聘、雖不取生者、亦必剪造綾絹、肖其形以代之、又與吉祥草葱松四品並列盆中、亦俗套也、

〔剪花翁傳 三 五月開花〕万年靑 老母艸・藜蘆 周屋 花黄也、開花五月、方二分陰、地中濕り、土砂雜、肥油粕年中用ふべし、又にしん絞粕よく乾、おのづから粉となりしを入べし、干鰯などの油物は惡し、是もよく乾きたるは粉にして入るゝも可也、されどにしんには如ず、分株、下種、移兩彼岸共におかるべし、花壇に植るもよし、大概盆栽の方勝れり、夏日は葭簀を以日覆すべし、夕方より取はらうべし、冬日は風寒雨霜を防ぐべし、種類多し、插花に用ふるの其三四種は、都の尉、宗碩、長島、筑前、久安寺、此外白縱斑、黄縱斑等、種類異名なるもの數多也、花實葉四季に應じて用ふるもの也、因云、葉筒に成て、左右合せ目なし、形恰吹矢の羽のごとし、長九寸許、纔に一株而已、豊後より產す、一覽せしに寔に希代の雅種なり、

〔剪花翁傳 四 九月開花〕万年靑 九月實淡赤し、漸々色増て春に至迄實保つ也、されど霜雪又は鳥を防ぐために、澀紙の袋を被せおくべし、

クニシテ、葉微シク大ナリ、淡黄色ノ縦道アリ、　筑前。久安寺ノ形ニ似テ、黄色ニシテ白條雜リ生ズ、久安寺ヨリ白條多シ、　布引。久安寺ニ似テ葉細ク、能クノビテ葉サキ少シク外ヘ曲ル、葉ノ直立スルヲ上品トス、　雪山。村雲ノ形ノ如ニシテ直上ス、白條アリテ雪白ナリ、上品トス、　永島。雪山ニ似テ葉細クシテ長シ、直立ハセザレドモ、葉サキ垂レズ、間道至テ潔白ナリ、上品トス、江都ノ人專ラ此品ヲ愛玩ス、　燒葉。葉ノ色粉緑色ニシテ、銀邊ヲナス、故ニヘリトリヲモトトモ云、二種アリ、一種ハ葉細長クシテサキ垂レズ、上品トス、一種ハ葉ノ幅廣クシテ葉サキ垂ル、下品トス、又銀邊ニシテ白條アルモノアリ、又斑入ノモノアリ、又淡紅邊ノモノアリ、アカフクリン、一名ベニフクリント云、又金邊ノモノアリ、黄フクリント名ク、赤實ノ者アリ、黄實ノモノアリ、

片葉。半片ハ青ク、半片ハ白シ、大名筋或ハ村雲ヨリ變生ス、又銀邊ニシテ片葉ノ者アリ、フクリン片葉ト名ク、　竹ヲモト。　蘆頭竹節ノ形ノ如クシテ、五寸或ハ七寸許立ノビテ生ズ、　斑入(フイリ)爪白銀邊(ツマジロフクリン)タテジマ等アリ、其葉直立セズ、　玉花葉。葉厚ク光澤アリテ玉花蘭ノゴトク、葉サキノミ銀邊ヲナス、又爪白トモ云、奇品ナリ、　シマヲモト。ヲモトノ葉ニ間道アルモノヲ、凡テシマヲモトヽ云、品類殊ニ多シ、大葉立葉ノモノヲ筑前ジマト云、又伊勢ジマアリ、間道潔白ナレドモ、葉薄クシテ細シ、又シカミジマト云モノアリ、葉厚ク色濃クシテ皺アリ、　白ムク。葉潔白ニシテ青ミナシ、コレ村雲ヨリ變生ス、　青フクリン。葉シマヲモトノ形ニシテ間道潔白ナリ、青邊ヲナス、世俗奇品トスレドモ、コレ變生ニ屬ス、　芭蕉。葉ノ幅廣ク大ニシテ長ク、芭蕉葉ノ趣ヲナス故ニ名ク、然レドモ葉柔弱ニシテ上品ニアラズ、　黄實ヲモト。葉ノ形尋常ノヲモトノ如クニシテ細ク、實熟シテ黄色ナリ、根ヲ分チ栽ユベシ、實生ハ變ジテ赤實ノモノトナル、又黄實ノ斑入アリ、　白實ヲモト。黄實ヲモトノ形ニシテ、實熟シテ淡白色ナリ、一種熟シテ潔白ナルヲ水晶實ト云、然レドモ未ダ其潔白ナルモノヲ見ズ、　青實ヲモト。二種アリ、一種ハ實熟シテ

ク、コレニ一種葉ニ白斑點アルモノアリ、斑點ノ趣ニ因テ各稱呼ヲ異ニス、黃斑點ノモノアリ、虎斑宗碩ト云奇品トス、久和加多　葉大ニシテ厚ク末尖レリ、然レドモ宗碩ノ如ク直立セズ、葉ニ皺文多ク、其葉左右ニ分レテヂレタル如クニ成テ、クワガタノ形ノ如シ故ニ名ク、コレニ一種江戸久和加多ト云モノアリ、葉微シク小ニシテ皺文少シ、下品トス、又一種斑入ノモノアリ、又葉短ク幅廣クシテ薄キモノヲ、朝鮮久和加多ト云フ、名古屋丸　形狀久和加多ト同ジ、只葉ノサキ尖ラズシテ圓キヲ異ナリトス、翁　尋常ノ萬年青ノ如ニシテ葉ノ色淡ク葉サキ垂ル、初夏新葉ヲ生ズ、始メ正白色ニシテ漸ク葉ノ本ヨリ半ニ至ルマデ青ク、半ヨリ末白クシテ、葉端又微シク青シ、凡テ萬年青ハ歲ゴトニ必ズ三葉ヲ生ズレドモ、此ノ品ハ夏以後又二葉ヲ生ズ、後ニ生ズル葉ハ全ク淡綠色ナリ、葉ノ色ノ變リシコト、麥門冬類ノ翁草ニ同ジ、故ニ翁ト名ク、村雲　尋常ノモノヨリ微シク大ニシテ厚ク、深綠色ニシテ葉サキ垂レズ、處處ニ白斑アリ、又淡黃斑ノモノアリ虎斑ト稱ス、コレニ一種斑點多クシテ、美ナルモノヲ琴ノ浦ト名ケ珍トス、チリメン　葉細ク淡綠色ニシテ縱ニ皺文アリテ白條多シ、コレニ一種銀邊ノモノアリ、ヤキ葉チリメント云フ、蘭ヲモト　葉厚クシテ細ク、長サ三尺許ニ至ル、葉ノサキ銳ニ尖リ、葉ニ光澤多シ、花實普通ノモノニ異ナラズ、兒ヲモト　萬年青ニ類スレドモ、僅ニ三五寸ニ過ギズ、葉薄クシテサキ尖リ、數葉重疊ス、實ヲ結バズ、萬年青ノ類ナルヤ否ヲ知ラズ、豆瓣　一名朝鮮ヲモト、又ヒメヲモトトモ名ク、形狀全ク萬年青ニシテ、葉ノ長サ僅ニ三五寸、花實アリ、共ニ小ナリ、盆ニ栽ヘ愛玩スベシ、大名筋　葉細クシテサキ尖リ、光澤アリテ潔白ノ直條アリ、立ノビテ生ズレドモ、葉ノ本白ラケ柔カナルユヘ倒レ易シ、葉邊卷テヂレタル形ノ如シ、異生ナリ、此ノ品變生シ易シ、阿磨ノ川、布引、久安寺等、皆此品ヨリ變生ス、阿磨ノ川　大名筋ヨリ變生ス、正シク左右ヘ葉ヲ生ズ、大名筋ヨリ短ク、柔カニシテ地ニタヲレ布ク、縱ニ白條多シ、久安寺　阿磨ノ川ノ形ノ如

〔和爾雅 草木七〕万年青(ヲモト) 出于三才圖繪

〔大和本草 草七 圖〕萬年青　三才圖繪曰、葉似芭蕉、隆冬不衰、以其多壽故名、圖史曰、一名千年蒕、又名蒕、葉潤叢生、深綠色、冬夏不枯、宜春秋二分時分種、瓦盆置背陰處、又花鏡ニモ出タリ、モロコシニハ一切祝儀ニ是ヲ用ルヨシ、花鏡ニ見ヘタリ、萬年青ノ名ニヨレルナルベシ、肥土ヲコノミ、冷茶ヲ澆グ事ヲ好ム、是亦花鏡ニイヘリ、俗醫ヲモトヲ藜蘆ト云非也、藥肆ヨリモ、ヲモトノ根ヲ藜蘆ト稱シテウル不可用、此草陰地ニ宜シ、日アテニ植レバ葉不美、

〔和漢三才圖會 九十五 毒草〕萬年青　千年蒕　萬年春　今云於毛止 中略

按萬年青性好陰濕石間、葉布地生、似玉蜀黍(ナンバンキビ)葉而小、厚勁深青、四時不凋、夏根傍抽莖生花、無葉瓣、其莖一寸許、淡青色、花房黄白色、而亦一二寸、大可拇指、形如橫槌、結子初青後正赤、纍纍攢生、大如櫻桃、一種有葉縱文白者、呼名筋萬年青、以爲珍、中略 俗誤藜蘆爲萬年青之訓、藜蘆葉略似而花實大異 終以萬年青根爲倭藜蘆、沽之、豐前中津之產良、遠州朝比奈、藝州廣島亦佳、插葉及實於花瓶、稱萬年青前置、以爲極秘傳、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕藜蘆 中略

增、中略 近年萬年青ヲ愛玩スルモノ多シ、愛スルニ隨テ其形ヲ異ニシ、其形ノ異ナルニ隨テ其名ヲ異ニス、其名悉ク花戸鄙夫ノ言ニ出テ、的證スルニ足ラズ、亦醫事ニ關係セズト雖ドモ、姑ク其名稱ヲ贅シテ、多識ノ一端ニ備フ、

都ノ尉、　文化年間薩州ヨリ其苗ヲ出ス、葉細長クシテ厚ク、粉綠色ニシテ悉ク直立ス、始メ新葉生ズル時ハ葉青クシテ、出デソロイテ後銀邊(フクリン)ヲナス、ソノ趣燒葉ニ類スレドモ、銀邊ヲナスコト燒葉ヨリ深シ、コレ萬年青中ノ最トモ上品ナルモノナリ、盆ニ栽テ愛玩スルニ堪タリ、

宗碩　葉大ニシテ厚ク、本細クシテ末廣シ、葉ノ末垂レズ、東都木村宗碩ガ家ニ始テ其種ヲ出ス故ニ名

江州伊吹山ニ多シ、又野州日光山殊ニ多シ、故ニ種樹家ニテ日光ラントト云フ、春宿根ヨリ苗ヲ發シ、數葉叢生ス、葉濶サ五六分、長サ一尺許、深緑色、縦ニ皺多クシテ椶(シユロノ)秧ニ似タリ、年ヲ經タル者ハ葉漸ク濶ク三四寸ニ至リ、エビネノ葉ノ如ク、初出ノ葉細キニ異ナリ、夏月別ニ一莖ヲ抽ヅ、長サ二三尺、小葉互生シ、上ニ枝ヲ分テ花ヲ開ク、紫黒色、形白薇(フナハラノ)花ニ似テ、大サ三四分、六瓣、臭氣アリ、後ニ短扁莢ヲ結ブ、中ニ小實アリ、又黄花ノモノ白花ノモノ稀ニアリ、コノ根葱根ニ似タリ、故ニ集解ニ葱白藜蘆ト云フ、根下ニ粗キ鬚根多シ、晒シ乾セバ味辛黄、蘆頭ニ黒毛アリ、椶毛ノ如クシテ苗本ヲ包ム、古渡ニ此ノ如ク椶毛ニテ包ムガ如キモノアリ、今ハ渡ラズ、今渡ル者ハ毛ニテ包マズシテ根大ナリ、コレ本草原始ノ蒜藜蘆ナリ、種樹家ニバイケイサウト呼ブ、豫州ニテハ蠅ノドクト云フ、江州比良山中ニ多シ、春早ク宿根ヨリ芽ヲ出ス、故ニユキワリト云、又ユキワリノ藜蘆トモ云、圓莖高サ三四尺、葉互生ス、形萎蕤ノ葉ニ似テ大ナリ、縦文多シ、莖上ニ穗ヲ出コト一尺許、枝ヲ分テ花ヲ開ク、形日光ランノ花ニ似テ、大サ小錢ノ如シ、五瓣ニシテ梅花ニ類ス、故ニバイケイサウト名ク、色白クシテ微緑ヲ帶ブ、臭氣アリ、コノ根日光ランヨリ塊大ニシテ、蒜(ニンニク)根ニ似テ小ク、蘆頭ニ椶毛ナシ、根下ニ粗キ鬚多シ、味辛ク黄白色、飯ニ雜ヘ蠅ニ飼ヘバ死ス、故ニハイノドクノ名アリ、

古ヘヨリ藜蘆ヲ誤リテヲモトト訓ズ、故ニ和方書ニ藜蘆ト云フハ、皆ヲモトヲ指ス、ヲモトハ万年青ニシテ、藜蘆ノ類ニ非ズ、○下略

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種、○中略 藜蘆二斤四兩、　飛驒國九種、○中略 藜蘆十斤、

〔饅頭屋本節用集 遠草木〕藜蘆(ヲモト)

〔書言字考節用集 六生植〕藜蘆(ヲモト)俗云老母草　萬年青 三才圖會　老母草(ラウボサウ)一名藜蘆(ヲモト)　藜蘆(シンノクビキ)

開ク、六瓣淡黃色、花謝テ小莢ヲ結ブ、中ニ細子アリ、又花ニ粉紫淡紅淺綠茶褐ノ數品アリ、

〔武江產物志 藥草〕目黑邊ノ產　白花猩々袴 上北澤

〔採藥使記 上奧州〕照任曰、奧州南部遠野ト云フ所ニ、萵苣葉ノ藜芁ヲ產ス、其花葛ノ花ノ如ク紫色ナリ、卽チ官園ニ納ム、

光生按ズルニ、萵苣葉ノ藜芁ト云フハ、猩々袴ト云フ草ノ一種ナリ、根ノ形チ左右ヘネジレタル物ナリ、張璐ガ醫通ニ曰、左ニネジレタルヲ藥トシテ溼病ヲ治シ、右ニネジレタルヲ芁トシテ、是ヲ用ユル時ハ脚氣ヲ發ス、愼テ用ユルコトナカレト云ヘリ、

狐ノ尾

〔草木育種後編 下 圃類井智稱の類〕老虎蕉(のぎらん) 質問本艸 俗に花の形を以て狐の尾ともいふ、播州野州日光山等にあり、猩々袴の類にて、葉地に塌て中心より莖を抽きて花あり、赤土に栽て、根に胡麻油かすを少しヅヽ入てよし、喜任按に、質問本艸の原圖にて考るに、世間に猩々袴の淸俗名とするは誤なり、

藜蘆

〔本草和名 草十〕藜蘆 楊玄操音上力號反　一名葱苒 仁諝音冉　一名葱菼 仁諝敢反　他　一名山葱、一名葱葵、一名蕙葵、一名公舟、一名山惠、一名繩、已上五名出釋藥性　一名豐蘆、出雜要決　和名也末宇波良、一名之々乃久比乃岐、

〔倭名類聚抄 二十草〕藜蘆　本草云、藜蘆、上音黎、和名夜末宇波良、一云之之乃久比乃木、

〔箋注倭名類聚抄 十草木〕陶云、根下極似葱而多毛、蜀本圖經云、葉似鬱金秦芁蘘荷等、根若龍膽、夏生冬凋、圖經、三月生苗葉青、似初出椶心、又似車前、莖似葱白、青紫色、高五六寸、上有黑皮、裹莖似椶皮、其花肉紅色、根似馬腸根、長四五寸許、黃白色、此有二種、一種水藜蘆、莖葉大同、只是生在近水溪澗石上、根鬚百餘莖、不中入藥、今用者名葱白藜蘆、根鬚甚少、只是三二十莖、生高山者爲佳、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草〕藜蘆　シユロサウ　日光ラン　一名山椶 藥性要略大全　藜閭 本事方　朴草 郷藥本草　朴鳥伊 採取月令　藜蘿 三才圖繪

猩々袴

〔大和本草（花草）〕ホトヽギス　葉は紫蕚ノ葉ニ似テ短小ナリ、スヂ多シ、又篠ノ葉ニ似タリ、ツボミハ筆ノ如シ、花ハ秋開ク六出アリ、中ヨリ一蘂出テ又花ノ形ヲナセリ、毎蕚ニ小紫點多シ、杜鵑ノ羽ノ文ニ似タリ、シボリ染ノ如シ、莖ノ高一二尺ニスギズ、漢名不知、

〔和漢三才圖會（九十四末濕草）〕杜鵑草　俗稱（本名未詳）

按杜鵑草高尺餘、葉似百合葉、六七月抽莖、葉間開小黄花、或白、或白入紫苔子、或濃紫入白苔子、一種白色有淺紫點、名之山杜鵑、

〔剪花翁傳（三六月開花）〕郭公花　油點艸　花二種黄色あり、葩中筋黄にして左右淡黄の隈に成也、又赤あり、淡赤みに丁子茶の色を帶たり、形鐘艸に似たれども花仰くなり、開花六月末也、方半陰、地三分濕土回塵、肥油糟よし、小便澆げば葉焦る也、干鰯の出し汁二分雜の水を澆ぐべし、分株春彼岸にすべし、成長はやし、黄花の大きなるは一尺許也、赤花の大きなるは三尺餘にもおよぶなり、

〔大和本草（九雜草）〕シヤウ〳〵ハカマ　葉土ニ付テ生ズ、其形如此、○（圖略）葉ノ中ヨリ莖ヲ生ズ、處々有之、

〔和漢三才圖會（九十四末濕草）〕猩猩袴　俗稱（本名未詳）

按猩猩袴高六七寸、葉似蔥而短、五六月開花淺紅色、似櫻草花而稍小、

〔百品考（上）〕粉條兒菜　一名玉帶春苗　和名シヤウジヤウバカマ

救荒本草、粉條兒菜、生田野中、其葉初生就地叢生、長則四散分垂、葉似萓草葉而瘦細微短、葉間攛葶開淡黄花、其葉甜、（有圖）

野菜博錄、玉帶春苗、（文與救荒本草同、無而其二字、甜上有味字、）

山中陰地ニ自生多シ、冬ヲ經テ凋マズ、地ニ付テ叢生シ、形狀鵯蔥ニ似テ深綠色光アリ、又狐ノ尾ノ葉ニモ似タリ、萓草ニ似テ至短シ、春葉中ヨリ莖ヲ抽デ高サ尺許、頂ニ數花聚附テ俯テ

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　萱草

〔佐渡志物產五〕萱草　方言ギボキナ　野生ナリ、初生ハ、トキ賤民採テ菜トス、

禪庭花

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕禪庭花　俗稱本名不詳

按禪庭花高二三尺、葉似萱草而纖、六月開花、黃色帶微赤、單葉似百合花、蓋萱草之種類乎、

綿棗兒

〔物類稱呼三生植〕綿棗兒つるぼ　山城にてつるぼといふ、筑紫にてずいべら、又たんぱんぐはゐと云、江戶にてうしのふし、又牛うらうと云、田野に多く春宿根より生ず、夏に至て藤色の穗の如くなる花さく、翁ぐさの花に似たり、高さ四五寸、根は水仙の如し、

〔大和本草九雜草〕綿棗兒(ツルボ)　野圃ニ多ク自生ス、葉ハ薤ニ似テ、若キ苗ハ紫色ヲ帶ブ、冬モ葉アリ不枯、ツルボハ京都ノ方言也、筑紫ニテハズイヘラト云、根ハ水仙ノ如シ、救荒本草曰、一名石棗兒、根ハ獨頭蒜ニ似タリ、花ハ莧ノ穗ニ似テ淡江微帶紫色、其子小ニシテ黑色、根味甘採取根淶水久煮、極熟食之、不換水煮食、後腹中鳴有下氣、國俗ニ婦人ノ積滯アルニ煮テ食スレバ驗アリト云、虛人ニハ不可也、性冷滑ニシテ瀉下ス、飢人食ヘバ瀉下シヤスク、身バルヽト云、故ニ凶年ニモ多ク食ハズ、水ヲカヘテ久シク煮レバ無害、村民不知之、是ヲスミレト云ハ誤レリ、水ヲカヘテ久ク煮ル事ヲ貧民ニ可救、

〔廣益地錦抄五〕綿棗兒　田野に多く宿根より生ズ、根も葉も山慈姑(サンシコ)のごとく、春生夏藤いろなる穗のごとくに花さく、たかさ四五寸のおきなさうの花のごとく、根は多くしげりて、畑のさまたげとなる、俗にウシウロウと云、

〔武江產物志藥草〕上野邊ノ產　綿棗兒(つるぼ)道灌山ニモ

杜鵑草

〔倭訓栞前編二十八〕ほとゝぎす○中略　山艸の名にもいへり、小紫花斑文、杜鵑羽に似たるをもて名く、葉に點あるを山ほとゝぎすといふ、三黑艸なりといへり、黃花のものあり、

テイクハ、日光キスゲ、葉長大ニシテ厚ク硬シ、夏月花ヲ開ク、形キスゲヨリ大ニシテ金黄色、コレモ金萱(汝南圖史)ト云フ、又一種スジクハンザウト云アリ、葉ニ白キ縱條アリ、琉名文萱花、(中山傳信錄)又一種ベニスゲト云アリ、葉細小ニシテ花紅色、集解ニ云フ所ノ紅萱ナリ、又一種水中ニ生ジ、小花ヲ開キ黄色ナル者アリ、コレヲ水スゲト云、集解ニ引トコロノ水葱是ナリ、其他品類多シ、

〔剪花翁傳 三四月開花〕唐萱草　花一重、色極黄隈なし、形よく抱へて力あり、開花四月中旬、方えらばず、地中濕、土塵交、肥淡小便、寒前にそゝぐべし、分株秋彼岸すべし、葉立て堅く、莖枝とも約りて出るをもて、插花に最佳也、萱草に勝れるものなり、

並萱草　わすれぐさ、花八重一重、色黄にして黄赤の隈あり、開花四月下旬、方撰ばず、地中濕、土塵雜、肥小便、分株秋彼岸、同種斑入葉あり、

〔萬葉集 三雜歌〕帥大伴卿歌五首〇四首略
萱草、吾紐二付、香具山乃、故去之里乎、不忘之爲、

〔萬葉集 四相聞〕大伴宿禰家持贈坂上家大孃歌二首〇一首略
萱草、吾下紐爾、著有跡、鬼乃志許草、事二思安利家理、

〔伊勢物語 下〕昔男、後涼殿のはざまをわたりければ、あるやんごとなき人の御つぼねより、わすれ草をしのぶ草とやいふとて、いださせ給へりければ、たまはりて、
　忘草生る野べとはみるらめどこはしのぶなり後もたのまん

〔枕草子 八〕故殿の御ふくのころ、六月卅日の御はらへといふ事に、出させ給ふべきを、しきの御ざうしは方あしとて、宮のつかさのあいたる所にわたらせ給へり、〇中略女房庭におりなどしてあそぶ、ぜんざいにはくわんざうといふ草を、ませゆひておほくうへたりける、花きはやかにかさなりて咲たる、むべ〳〵しき所のせんざいにはよし、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕萱草　忘憂　療愁　丹棘　鹿葱　妓女　鹿劍　宜男草　和名和須禮久佐○中略

按萱草有數種、並立春布稻藁於根、則二月苗葉盛、

鬼萱草　葉廣其花黃褐色千葉、　姫萱草　葉狹而花黃褐色單葉、形如百合花、　黃萱草　似姫萱草而花厚色黃　筋萱草　葉大如鬼萱草、而有白縱線、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕萱草　ワスレグサ延喜式　シノブグサ古歌　クワンザウ今通名 枕草子、　ヒルナ俗名　ギボキナ佐渡　アマナ播州　シヤウビ防州　カツコバナ南部　トツテコウ信州　クワンス肥前　ニクナ土州　ヤブニンニク伯州　一名紫蕙華夷花木考　宜男草本草原始　川草花救急本草　鷺脚花左花編史　石蘭秘傳花鏡　兒女花錦字箋　無憂草汝南圃史　萬年韭事物異名　婁尾春潛確類書、巧藝　忘歸花卓氏藻林　仍叱菜鄉藥本草　令草事物異名　皐蘇典籍便覽　雞脚花秘方集驗　合歡草通志略　護堦ト同名、　君子事物紺珠　後庭草　黃鵠嘴共ニ同上　金罌根本事方　綠葱萬病必愈　紫萱述異記

家ニ栽テ花ヲ賞スルモノアリ、又原野路旁自生ノモノアリ、皆春時宿根ヨリ長葉ヲ叢生ス、家ニ栽ル者ハ花單葉ナリ、野生ノ者ハ皆花千葉ナリ、コレヲ鬼クハンザウト呼ブ、倶ニ秋月長莖ヲ抽デ、枝ヲ分チ花ヲ開ク、家ニ栽ルモノハ花六瓣、形卷丹オニユリノ如シ、色紅黃ニシテ紫黑點アリ、賤民野生ノ嫩葉ヲ采リ食フ、毒ナシ草花譜ニ、單瓣者可食、千瓣者食之殺人ト云、本經逢原ニ其花起層者有毒勿食ト云ハ、花ヲ食フコトヲ云、唐山ニテハ花ノ開キカヽリヲ採、貯テ食料トス、集解ニ黃花菜ト云是ナリ、今清商モ攜來ル、金針菜ト云、單葉ノ者ト千葉ノ者トハ、其種自ラ別ナリ、然ルニ時珍ノ說ニ、肥土所生則花厚色深云云、瘠土所生則花薄而色淡、開亦不久ト云ハ、花ノ單重ハ土地ノ肥瘠ニ因ルトス、甚誤レリ、一種ヒメクハンザウアリ、一名キスゲ、ハリマスゲ和州、葉短小長一尺許リ、三月花ヲ開ク、形小クシテ斑ナク、金黃色ナリ、漢名金萱汝南圃史、又一種センテイクハアリ、一名セツ

開暮蘂、至秋深乃盡、其花有紅黄紫三色、結實三角、内有子、大如梧子、黑而光澤、其根與麥門冬相似、最易繁衍、

〔下學集 草下木〕萱草 或說云、忘憂草也

〔撮壤集 草中〕萱草 萱喧音和名類聚 忘憂草 萱草同和名類聚 萱注 療愁草 宜男草

〔書言字考節用集 生植六〕萱草 萱本字蘐、又作藼草、 忘憂草 同本艸 宜男草 同上 療愁草 同 鹿葱 同上 皐蘇 同指南、萱一名 諼草 同万葉

〔和爾雅 草木七〕萱草 諼草、鹿葱、忘憂草、宜男草、蘐草、萲草並同、

〔倭訓栞 前編四十二和〕わすれぐさ 倭名鈔に萱草をよめり、わするゝ草とよめるも同じ、忘憂の漢名に本づきたる名成べし、今音をもてよべり、ひるなとも呼り、おもふにもと、美艸を見てうさを忘るゝ意にや、泛く指る詞なるべし、詩經の意も亦同じ、一艸に限りたるは後世の事にや、藏玉集に萱とも見え、又紫苑をもよみ、俊頼は櫻をもよめりといへり、古き物語に、塚墓の上に生る草の名也ともいへり、伊勢物語に、

つみもなき人をうけへばわすれぐさおのが上にぞ生といふなる、大和物語にこのぶ草同物のよしいへるは、伊勢物語に別物をわざとこしらへかまへていへるを、取あやまれる成べし、今關東にて忘草といふは、しのぶに似たる小鳳尾草也、續古今集に、

忘るゝも忍ぶも同じふる里の軒端の草の名こそつらけれ、とあるは、大和物語に據て誤を傳ふるなり、攝州住吉の社に忘草の神供あり、御厨より獻ず、秘して人に傳へずといへり、新後撰集、

墨江の朝みつしほに御祓して戀わすれ草つみて歸らん

〔物類稱呼 草木三〕萱草くわんざう 信州にてとつてこうと云、肥唐津にてくはんすと云、

〔宜禁本草 乾五菜〕萱草 凉無毒、治沙淋、下水氣、主酒疸、根擣汁服之、亦嫩苗煮服、又主小便赤澀、身體煩熱、利胸膈、

萬葉卷十に、菅根乃、長春日乎、卷四に、菅根之、念亂而云云、こは山菅なり、糸の如き根の多く長く這亂る物なればさる語に冠らせたり、卷十一に菅根、惻隱君、結爲、我紐緒、解人不有、卷十二に、菅根之、惻隱々々、照日、乾哉吾袖、於妹不相爲、こをたゞ根とのみ重ねつとするはことたらず、根も凝とこそつゞけたれ、卷十三に、菅根之、根毛一伏三。向凝呂爾、吾念有、卷三に、足日木能、石根許其思美、菅根乎、引者難三等、標耳曾結焉、などよめるを思へ、さて此菅は山菅なれば、石根などに生るはもとよりにて、大かたも根多く延て、且根に丸き物さへあまた有故に、こりて虫がたきなり、山菅は和名抄に麥門冬（夜麻須介）てふにて、集中には右の如く、すげとのみよめるも、多くは山菅なり、

〔枕草子 三〕草は　山すげ

〔和泉式部集 五〕秋花どものさきたるに、やますげのさきたるをみて、
おときけば人の物思ひやますげの心みがほにさける花かな

〔武江産物志 薬草〕道灌山ノ産　麥門冬（小葉中葉ノモノアリ、大葉ハ日黒ニアリ、）

熨蘭

〔剪花翁傳 三 六月開花〕能勢蘭　又熨蘭　花一重、色白、開花六月末也、方半陰、地二分濕土、墓土、肥淡小便、寒中春芽出し前、又花前とも兩三度ツヽ澆ぐべし、大能勢蘭は長二尺許、中能勢蘭は一尺三四寸許、小能勢蘭は四五寸也、移春彼岸より三月上旬迄よし、

萱草

〔倭名類聚抄 二十 草〕萱草　兼名苑云、萱草一名忘憂、（萱音喧、漢語抄云、和須禮久佐、俗云如環藻二音、）

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕按毛詩、焉得諼草、傳、諼草令人忘憂、說文云、藼令人忘憂草也、引詩曰、焉得藼草、又載萱字、兼名苑本之、焦循曰、以忘憂有諼名、因諼而轉爲藼萱也、嵆康養生論、合歡蠲忿、萱草忘憂、時珍曰、萱宜下濕地、冬月叢生、葉如蒲蒜輩而柔弱、新舊相代、四時青翠、五月抽莖、開花、六出四垂、朝

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、麥門冬、

〔萬葉集四相聞〕大伴坂上郎女歌二首〇一首略
〇山菅乃、實不成事乎、吾爾所依、言禮師君者、與孰可宿良矣、

〔冠辭考十也〕やますげの　みならぬ事を　亂り戀のみ
万葉卷四に、山菅乃、實不成事乎、吾爾所依、言禮師君者、孰與可宿良牟、こはまことならぬことを、實ならぬことゝいひて、山菅の實ならぬとはいひかけたり、さてこゝは卷一に、實不成樹爾波神曾著とよみたるとは異にて、山菅は實を結ぶ物なれば、實成といふより實ならぬとはいひ下したり、かの皮ずゝきほにはさき出ず、眞十鏡見ぬめの浦などいへる類なり、
卷十一に、山菅、亂戀耳、令爲乍云々、こは山菅の葉は繁くて亂れなびく物なるを、戀の亂れにいひかけつ、卷十四に、東歌の挽歌の末可奈思伊毛乎、伊都知由可米等、夜麻須氣乃、曾我比爾宿思久、伊麻之久夜思母、こは既佐部の辟竹の條にいひつ、
山菅は和名抄に麥門冬夜末須介といへる物にて山に生ひて瑠璃の玉なす子あり、卷七に、妹爲菅實採、行吾、とも卯名手之神社之、菅彌乎、衣爾書付、令服兒欲得などもよめるは、此子の紫なるして、かたなどを摺し故と見えたり、今の童べがもてあそぶものにて、中々に古への樣を忘らざる、

〔萬葉集七雜歌〕羈旅作
妹爲、菅實採、行吾、山路惑、此日暮、
右四首、〇三首略柿本朝臣人麿之歌集出、

〔萬葉集十春相聞〕寄草
不明、公乎相見而、菅根乃、長春日乎、孤戀渡鴨、

〔冠辭考四須〕すがのねの　ながきはる日を　おもひみだれて
ねもころ

バ肉潤ニシテ色白シ、其藝州ノ產ハ小葉ノ者也、一種雞尾蘭ト云アリ、葉ノ幅七八分、長サ一尺、光澤アリ、葉ノ生ズル所ノ形雞尾ノ如ク撓ンデ、兩方ヘ互ニ出ヅ、夏白花ヲ生ズ、穗ニ支アリ、形尋常ノモノト同ジ、

一種、紀州泉州等ニ多ク栽テ根ヲ取リ、或ハ池塘ノ周圍ニ栽テ、土砂ノ壞ルヽヲ防グ、ソノ葉至テ細長キモノアリ、葉ノ形大葉ノ者ニ比スレバ狹ク、小葉ノ者ニ比スレバ微ク廣シ、深綠色ニシテ四時枯レズ、陽地ニ栽ユルモノハ葉短ク、陰地或ハ盆ニ種ユレバ、長サ三尺許ニ及ブ、夏秋ノ間別ニ莖ヲ生ジ、穗ニ成テ花ヲ開ク、綿棗兒(サンダイガサ)ノ花ニ似テ小ク、淡紫色ニシテ六瓣アリ、花謝シテ細實ヲ結ブ、コレ秘傳花鏡ノ書帶草一名秀墩草ナリ、コノ根藥用ニ上品トス、卽紀州ヨリ出ル所ノモノ是ナリ、小葉ノモノハコレニ次グ、大葉ノモノハ、ソノ根連珠少ナク、緊實ナラズシテ却テ下品ナリ、

〔農業全書十藥種之類〕麥門冬

ばくもんとう、是に大小二種あり、大きなるはやぶの中に多し、紫花をひらく性尤よし、大小共に圃に通りをなしてうへ、時々糞水をそゝげば、其根子大きなり、圃に作りたるは大にして、野に生る物にまされり、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進

麥門冬煎二斗、〇中略　右太宰府所進

〔延喜式二十三民部〕年料別貢雜物

太宰府〔中略〕麥門冬二斛二斗、〇中略　右別貢雜物並依二前件一

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊賀國廿三種、〇中略　麥門冬四升、　屋張國卅六種、〇中略　麥門冬四升、〇下略

多ケレドモ、實ヲ結ブコト少シ、又狹葉ノヤブラン數品アリ、ソノ海島ニ產スルモノハ、葉濶サ七
八分、長サ尺許ニシテ光アリ、花實ハ異ナラズ、又漢種ノ麥門冬モ大葉ニシテ海島ノ產ニ略同シ
テ長シ、又一種種樹家ニオキナグサト云アリ、一名音羽ラン、形狀ハヤブランニ異ナラズ、惟葉白
色ニシテ美シ、然レドモ夏已後ハ漸ク綠葉ニ變ズ、又一種綠葉ニシテ白色ノ斑文アルアリ、コレ
ヲベツコウラント云、又琉球ノ產ニノシラント云アリ、葉長サ三尺許リ、濶サ四五分、色淺クシテ
光アリ、花穗ノ莖形扁クシテ葉ノ如シ、花ハ白色、大サ五分許リ、初ハ莖短シ、花開クヨリ漸ク長ク
シテ葉ト等シ、實モ亦大ナリ、熟シテ碧色、葉間ニ雜リ下垂ス、

小葉ノ麥門冬ハジヤウガヒゲ、ヤブミ、フキダマ泉州テツポウノタマ、江州カシラゴ、ジヤノヒゲ共ニ同上ジユズダマ、播州リウノヒゲ、筑前リヤウノヒゲ、江戸ヲンドノミ、志州チイノヒゲ、雲州タツノヒゲ奥州加州インキヨノメダマ、加州ヅクダマ、丹波ヲドリコ、勢州ヲフクダマ、同上ハヅミダマ、メツチヨヒガラ、豫州路旁ニ多シ、人家簷溜ノ處ニ多ク種ユ、葉ノ濶サ一分餘、長サ一尺餘、年久キモノハ二三尺ニ至ル、一根ニ多ク叢生ス、花ハ淡紫色、莖ノ長サ四五寸ニ過ギズシテ花實倶ニ少シ、實熟スレバ碧色、春ニ至リテ猶アリ、根ハ大葉小葉倶ニ連珠ヲナス、藥用ニハ心ヲ去ル、藥肆ニアルハ皆和產ナリ、紀州ヨリ出スヲ上品トス、形圓ク大ニシテ心ヲ去ル、是大葉ノ根ナルベシ、藝州廣島ヨリ出スハ、形長ク小ニシテ心ヲ去ラズ、是小葉ノ根ナルベシ下品ナリ、集解ニ根肥大者爲上ト云、稀ニ漢渡アリ、長サ一寸許リ、濶三四分ニシテ兩頭尖レリ、漢種及海島ノ產ハ船來ト同ジ、增、今藥店ヘハ紀州藝州ヨリ多ク出ス、紀州ヨリ出ルモノハ中心ヲ抽去リ、竪ニ壓シテ其狀圓シ、又近年心ヲ去テ壓搾セズシテ長キ者アリ、共ニ色白クシテ實ス、上品ナリ、藝州ヨリ出ル者ハ心ヲ取ラズ、生ノマヽ乾シタル故形長シ、下品ナリ、又或ハ赤ク或ハ黑クシテ、實セザル者ハ下品ナリ、他藥ハ皆根ヲ取リ日ニ乾ス、麥門冬ハ日ニ乾セバ乾潤ス、故ニ根ヲ取リ火ニテ炙リ、陰乾スレ

〔大和本草六藥〕麥門　大葉ハ葉アツシ、五月ニ莖立テ、頭ニ穗ノ如ク長ク連リタル紫花ヲ開キテ實ナル、秋熟ス、林中ニ多ク生ズ、葉蕃茂ス、實ヲマクベシ、根モ小葉麥門ノ如ニシテ大ナリ、觀音草ノ葉ハウスクシテ少廣シ、花ナシ、能似タリトイヘドモ別也、大小麥門トモニ藥ニ用ユ性同、大葉ハ蘭葉ニ能似タリ、庭園ニウヘテモヨシ、本草ニモ大小三四種アリトイヘリ、大小麥門共ニ根大ナルヲ良トス、一種葉ハ大葉麥門ニ同ジ、葉春及夏初純白ナリ、故ニ翁。草。ト云、後漸靑クナル、根ハ門冬アリ、花モ大葉麥門ノ如シ、異草ナリ、是大葉麥門冬ノ別種也、又一種大葉麥門ニ似テ葉狹ク、地筋ノゴトク、葉莖ツヨシ、根ハ同、

〔和漢三才圖會九十四本隰草〕麥門冬　虋冬　不死草　禹韭　階前草　忍凌　烏韭秦名　愛韭齊名　馬韭楚名　羊韭越名　禹餘糧略○中

按麥門冬、俗云尉之鬚也、出於河州石川者最良、紀州者次之、藝州者又次之、今人家栽檐下可以受雨滴、階前草據此乎、近年藥肆去其心售、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕麥門冬　ヤ。マ。ス。ゲ。和名鈔　ヤ。ブ。ラ。ン。　ム。ギ。メ。シ。バ。ナ。勢州　カ。ウ。ガ。イ。サ。ウ。加州　總一名安神隊杖輟耕錄　忍陵群芳譜　不死藥事物異名　雉骨木採取月令　雉烏老草同上　冬兒沙里根村家方　麥冬通雅　麥門方書略稱　麥文同上　麥門東永州府志　大葉者一名珍珠蘭通雅　大葉門冬群芳譜　大杭冬幼幼集成　杭棟冬同上　小葉者一名沿階草江西通志　向子草同上　百靈草揚州府志　護門草同上　護堦草江都新志　秀墩草秘傳花鏡

是ニ大小葉數種アリ、大葉ノ者ヲヤブラント云、樹下竹陰及路旁ニ多ク生ズ、葉ノ濶サ三四分許、長サ一二尺、厚クシテ縦道多シ、面ハ深綠色背ハ淺シ、一根ニ多ク叢生シ、冬枯レズ、夏ニ至テ叢葉中數莖ヲ抽ヅ、高サ一尺餘、小花數多ク綴リ、長穗ヲナス、花ハ六瓣淡紫色、綿棗兒ノ花ニ似タリ、又白花ノ者アリ、倶ニ花後實ヲ結ブ、正圓ニシテ大サ南天燭子ノ如シ、秋ニ至リ熟シテ黑シ、花ハ數

る所など へ植る草也、室町將軍正月御祝の供物に大山形と云物あり、それに山菅を用る事、大草流正月祝儀飾の繪に見えたり

〔物類稱呼 三生植〕麥門冬せうがひげ　關西及四國共に、せうがひげと云、東國にてりうのひげと云、奧州にてたつのひげと云、尾州にて蛇のひげといふ、

〔古今要覽稿 草木〕やますげ 麥門冬

やますげ、〔本草和名〕　按にこの葉細小なりといへども、その形すこぶる山菅に似よりたるを以て名付しなるべし、又按に山菅は小葉の麥門冬にして、大葉の麥門冬は、天和の比より以後の物なれど、物によりては、後世より却て古のくはしき事いと多ければ、延喜の時には、この大葉のものもありけんを、山菅と稱せしにやあらん、蛇の鬚、〔用藥須知、物類品隲〕附の鬚、〔和漢三才圖會〕龍の鬚、〔江戶俗稱〕麥門冬、〔出雲風土記、延喜式〕按に此根穬麥に似たるを以て、麥門冬と名付たるよしは、既に弘景の說にみえたり、されどもそれにては、麥字の意は詳なれど、いまだ門冬の義をしらず、今按にこれを門冬といふものは、天門冬の門冬とおなじく、卽門冬二合の音髦の義にして、此草細根極めて多く、形狀髦の如くにして其中に穬麥のごとき、連珠をなすに塊あるによりて麥門冬とは名付しなり、或其葉叢生髦の如く、また麥のごとしといへるにても、その義また通ずべし、然るを時珍の說に、麥鬚曰虋、此草根似麥而有鬚、故謂之麥虋冬、俗作門冬、便于字也といへど、字彙に虋は赤苗嘉穀、今赤粱粟とありて、麥鬚の意見へず、時珍天門冬を釋して、草之茂者爲虋、此草蔓茂而功同麥門冬、といへるものとあはざれば、麥鬚を虋といへるはうけがたし、

〔宜禁本草 乾中藥草〕麥門冬　甘平微寒、强陰益精保神、定肺氣和地黃、爲丸食後服去溫瘧變白明目、三月新根去心擣絞、取汁和白蜜、銀器中重湯煮攪不停手、如飴乃成、酒化溫服、益心悅顏、安神益氣、肥健甚驗、衍義曰、治心肺虛熱虛勞客熱、可取苗作熟水飮、加五味子人參爲生脈之劑、

根本ノ土際ニ花開テ實ヲ結ビ、秋ニ至レバ其形狀柚子ノ如ク、其中ノ仁ハ玉蜀黍ノ種子ニ似タル者ナリ、此ヲ採テ直ニ植レバ、能ク生ジテ長ジ易シ、總テ此等ノ草ハ寒氣ヲ惡ドモ日光ヲ畏ル、宜ク陰地ニ此ヲ植テ、冬ハ避冷ノ法ヲ行フベシ、凡ソ一船棋ヲ種ルニハ、狹葉濶葉ノ別アリテ、濶葉ナルハ、其性軟弱ニシテ葉下低ル下品ナリ、狹葉ハ性剛強ニシテ葉直立ツ、上品ナリ、頭髮頭垢ヲ肥養ニ用レバ、殊ニ能ク直立ス、培養ヲ懇到ニスレバ、其丈六七尺ニ及ブ、狹葉ニテモ甚ダ大ナル葉ヲ生ズル者ナリ、凡ソ草木ヲ作リテ其葉ニ斑ヲ生ゼシムルコトハ、全ク糞苴ニ因テ、種々ノ變化ヲ發スル者ナリ、

麥門冬

〔新撰字鏡草〕麥門冬山菅、又云馬亦、又云鳥亦、

〔本草和名草六〕麥門冬陶景注云、根似穬麥、故以名之、秦名羊韭、齊名愛韭、楚名烏韭、隱居本草作馬韭、越名羊蓍、楊玄操音尸一名禹葭、仁諝音家一名禹餘粮、已上本條一名禹芝、一名虫寧藥、一名忍冬、一名忍陵、一名不死藥、一名果、一名濮壘、一名隨脂、楚名馬韭、越名齊羊、已上出釋藥性一名羊芥、一名烏韭、出雜要訣和名也末須介、

〔倭名類聚抄草二十〕麥門冬 本草云麥門冬和名夜末須介

〔箋注倭名類聚抄草十〕本草云、麥門冬葉如韭、冬夏長生、陶注云、冬月作實如青珠、根似穬麥、故謂麥門冬、陳藏器曰、大者苗如鹿葱、小者如韭葉、大小有三四種、蘇頌曰、葉青似莎草、長及尺餘、四季不凋、根黃白色、有鬚根、作連珠形、四月開淡紅花、如紅蓼花、實碧而圓如珠、

〔撮壤集中草〕麥門冬ヤマスゲ 〔同下藥種〕麥門冬

〔書言字考節用集六生植〕麥門冬バクモンドウ階前草、不死草並同、 麥門冬ヤマスゲ一名階前草 麥門冬ゼウガヒゲ

〔貞丈雜記一下祝儀〕一正月の祝、又女の髮そぎの祝などに山菅を用る事あり、やますげとは麥門冬の事也、此草冬も葉青くしてかれぬ物也、雪霜にもいたまぬ物ゆへ、祝に用る也、麥門冬に葉の大成と細なると二品あり、葉の大なるを山すげと云、細なるをば玄やうがひげと云、りうのひげとも云雨だり落

葉蘭

漢種、享保年中ニ傳フ、福州ノ產ト云フ、蔓生葉ハ竹葉ノ如シ濶サ一寸ナレバ長サ七八寸ニシテ、三縱道アリ、春嫩藤ヲ舊藤ヨリ抽テ、葉ゴトニ二鬚アリ、葉間ニ一莖ヲ出シ、二三十花簇生ス、紫黃色、形菝葜花ニ似タリ、今花戶ニ竹葉ト呼ブ者數品アリ、葉厚キ者薄キ者濶キ者狹キ者、中心白斑アル者アリ、皆藤ニ刺ナシ、一種琉球種、亦享保年中ニ傳フ、今花戶ニ多シ、葉ハ菝葜葉ニ似テ圓軟莖ニ刺ナシ、實ハ菝葜ヨリ小タ、熟シテ色黑シ、今花戶ニ圓葉大ニシテ光澤ナル者アリ、又尖長ナル者アリ、總ジテ琉球種ト呼ブ、又一種葉長大ニシテ尖リ、質薄キ者アリ、カラスキバト呼ブ、又薩州ノ產ハ、葉圓ニシテ莖硬ク微刺アリ、藥家貨スルトコロ其品一ナラズ、形ニ大小長短アリ、色ニ粉紅白色赤色黃黑色黃赤色アリ、質ニ硬軟アリ、廣東ヲ上品トス、

〔草木育種下、葉或實覩べきもの〕。。。一船蜞（はらん）〔本草小識〕　葉に狹と濶と二種あり、葉のせばきはよく立ものなり、又星あるもあり、葉の濶は葉の先垂るものなり、是に間道（しま）あるをあふみと云、是はあまり肥過れば斑返るもの也、肥を少ヅヽ用て手入をよくすべし、盆に植れば斑かへらず、春根の本に花を開、秋實を結て、形柚のごとく中に實あり、玉蜀黍の種に似たり、直に植ればよく生ず、根分八九月よし、地は黑ぼく野土は惡し、下谷邊の土よし、又赤土に溝の揚土を切まぜ植てよし、肥は冬春の間根もとへ人糞馬糞を入てよし、又折々油糟を解て澆べし、又月代の毛を置てよし、日陰に植、日陽なれば蘆簀を覆、冬は霜除を拵てよし、手入よければ長さ五尺に至るなり、

〔草木六部耕種法十、需花〕葉蘭。。葉蘭は物理小識ニ、一船蜞ト稱スルモノ即是ナリ、此物ニモ白キ星アル者アリ、間道ナル者アリ、間道ナルヲ俗ニ近江葉蘭ト云フ、此モ餘リ多ク糞肥ヲ用レバ、其白斑變ジテ常ノ如キ青葉ニ歸ル者ナリ、故ニ一船蜞ヲ作ルニハ、眞土ニ溝底ノ揚土ノ乾タルヲ、各半ニ耕交、馬溺鹽ヲ少々入テ植ルヲ良トス、油糟ヲ粉ニシテ、水ニ釋置テ時々此ヲ澆ゲバ、殊ニ能ク繁生ス、根ヲ分テ植ルハ、時ニ拘ハラザレドモ、八九月ヲ上トシ、二三月モ亦宜シ又此物ハ春分前後ニ

土茯苓

なく聲はあまたすれども鶯にまさるとりのはなくこそ有けれ

〔佐渡志物產五〕菝葜　方言ガンナイバラ　五六月ノ頃、子ノ小サクシテ青キモノヲ採テ茶ニカウ、山家ノ民誤リ稱シテ、和ノ山歸來トイフ、

〔多識編草二〕土茯苓、今案可。天。草。俗云山。歸。來。

〔書言字考節用集生植六〕土茯苓（ドブクレウ）今云山歸來也、土萆薢　土茯苓（カナサク）俗云山歸來　山歸來（サンキライ）本名土茯苓

〔和爾雅草木七〕土茯苓（サンキライ）土萆薢、仙遺粮、冷飯團、山地栗並同、

〔和漢三才圖會蔓草十九〕土茯苓　仙遺粮　刺猪苓　冷飯團　土萆薢　硬飯　草禹餘粮　山猪糞　山地栗　俗云山歸來、又云加天草、〇中略

按土茯苓阿媽港之產爲最上、皮薄外色淺赤、內白如米粉、然近年絕不來、今以廣東者爲上、交趾東京並次之、太寃爲下、但色白柔輕虛者良、色赤堅重實者不可、

凡楊梅瘡盛流行也、於今凡不過二百年、市中好淫人交濁陰、彼此傳染然焉、古者罕識其治療、而肢體拘攣終至眼鼻腐爛、故如有患之者、則不同器巾、其重者或棄於山野、近來多服土茯苓、用使病人自山來歸、實良藥也、其方有數品、總名歸建方、中得效驗者以爲家秘、〇下略

〔物類品隲草三〕土茯苓　和名山歸來、漢產上品、享保中種ヲ傳テ官園ニアリ、葉竹葉ニ似テ厚ク光滑ナリ、三縱文アリ、琉球產下品、享保中種ヲ傳テ官園ニアリ、葉菝葜ニ似テ圓ナリ、莖細ニシテ刺ナシ、實菝葜子ニ似テ稍小ニシテ色黑シ、駿河產下品、大抵琉球種ニ似タリ、壬午歲、同國沼津驛清春達始テ是ヲ得タリ、壬午客品中ニ具ス、

〔重修本草綱目啓蒙蔓草十五〕土茯苓　山歸來和方書、卽山奇粮ノ音、　一名過山龍附方　地茯苓外科眞方經驗　山硬飯同上　冷飯救荒野譜　冷飯塊本草新編　皷良同上　奇糧新修餘姚縣志　奇良秘方集驗　木猪苓長沙府志　山牛本經逢原　黃牛根藥性略大全　導河橡藥譜　硬㯶山東通志　木猪腰子赤水玄珠　尾糍濟俗

パ○四圖　一名金剛骨(附方)　拔殼(同上)　金剛刺(救荒本草)　老君鬚(同上)　剤崗楷(藥性要略大全)　金岡楷
(本草衍義)　鑑兒欟根(本草蒙筌)
俗ニ誤テ和ノ山歸來ト云フ、山野ニ多シ、蔓ハ節ゴトニユガミテ、質堅ク光リアリ、大ナル者ヲ箸ト爲シ牙杖ト爲ハ、齒ヲ堅クスト云フ、春舊藤ノ節間ヨリ新藤ヲ出シ葉互生ス、葉ゴトニ二鬚アリテ物ニ纏フ、葉ハ圓扁厚滑、大ナル者ハ三四寸、其筋皆堅直ナリ、又正圓ナル者アリ、又微長ニシテ柹葉ニ似タル者アリ又葉初出ノトキ紫斑アル者アリ、又細長ニシテ竹葉ニ似タル者アリ、皆蔓ニ硬キ刺アリ新葉間ニ穗ヲ出ス、長サ一寸餘、六瓣ノ小花ヲ簇リ開ク、大サ二三分、淺黃微綠色、後實ヲ結ブ、正圓、大サ無患子ノ如シ、生ハ綠色、秋ニ至リ熟シテ朱紅色觀ルベシ、山人食フテ渴ヲ解ス、其根ハ草薢ニ似テ長大凸凹多シ、市人多ク土茯苓ニ僞ル、菝葜根ハ只屠蘇散ニ入ル、其他用ユルコト稀ナリ、一種木本ノ者山野甚多シ、高サ一尺許、大ナル者ハ二尺ニ至ル、枝多シテ鬚ナク刺アリ、葉ハ小クシテ橢或ハ圓、一寸許ニ過ズ、花小ク實亦小ニシテ二分許、秋ニ至テ紅熟ス、是救荒本草ノ山棃兒一名金剛樹一名鐵刷子ナリ、阿州ニテ平家酷ト呼ブ、一種小葉ノモノアリ、高サ四五寸、葉ノ大サ三分許ニシテ圓シ、夏月花實ヲ生ズ、形常ノモノニ似タリ、

〔延喜式(三十七典藥)〕元日御藥(中宮准此)
白散一劑、度嶂散一劑、屠蘇一劑、千瘡萬病膏一劑、(中略)所須(中略)拔葜二分、
諸國進年料雜藥
大和國卅八種、(中略)拔葜卅斤、　出雲國五十三種、(中略)菝葜、桑茸各三斤、
〔出雲風土記(仁多郡)〕凡諸山野所在草木、(中略)拔葜、
〔拾遺和歌集(七物名)〕さるとりの花　　藤原すけみ

〔本草和名草八〕拔葜、楊玄操音古八反、○古下恐脱二八字一 一名卑葜、出二雜名苑一 和名宇○久○比○須○乃○佐○留○加○岐○、一名佐○留○止○利○、一名於○保○宇○波○良○、

〔倭名類聚抄草二十〕菝葜　本草云、菝葜、方八反、和名佐流止里、一云於保宇波良、

〔箋注倭名類聚抄草十〕按此草有レ刺、雖二獮猴一、不レ能レ登、爲レ人所レ捕、故名二猴捕一、本草和名又有二宇久比須乃佐留加岐之名一、博物志拔揳與二萆薢一相亂、陶云、拔葜莖紫短小、多二細刺一、小減二萆薢一而色深、蘇云、萆薢有レ刺者葉粗相類、根不二相類一、萆薢細長而白、菝葜根作レ塊、結黄赤色、殊非二狗脊之流一也、圖經曰、苗莖成レ蔓、長二三尺、有レ刺、其葉如二冬青烏藥葉一、又似二菱葉一差大、秋生二黄花一、結二黒子一、櫻桃許大、

〔饅頭屋本節用集草木左〕荊芡（サルトリイバラ）

〔書言字考節用集生植六〕菝葜（タマバラ）時珍云、其莖似レ蔓而堅強、有レ刺、葉圓大、　菝葜（サルトリハラ）俗謂二之山歸來（ベンケイハラ）一　金剛根同上

〔和爾雅草木七〕菝葜（サルトリイバラ・カメイバラ・エビイバラ）菝葜、金剛根、王瓜草並同、

〔重修本草綱目啓蒙蔓草十五〕菝葜

ウ○グ○ヒ○ス○ノ○サ○ル○古歌　サ○ル○ト○リ○和名抄　オ○ホ○ウ○バ○ラ○同上　サ○ル○ト○リ○イ○バ○ラ○京　ワ○サ○ン○キ○ラ○イ○　カ○キ○イ○バ○ラ○　イ○ビ○ツ○イ○バ○ラ○筑前　ガ○メ○イ○ゲ○同上　ガ○ン○タ○チ○イ○[illegible]ラ○勢州　ガ○ン○タ○チ○同上　エ○ビ○イ○バ○ラ○　ガ○ラ○タ○チ○バ○ラ○讃州　カ○ラ○タ○チ○土州　サ○ル○ト○リ○イ○ギ○防州　ホ○ウ○テ○ウ○イ○ギ○　ホ○テ○ン○ド○ウ○共ニ同上　ミ○ヽ○ヅ○タ○イ○バ○ラ○泉州　ム○マ○ガ○タ○グ○イ○備前　ム○マ○カ○タ○イ○バ○ラ○同上　ボ○ラ○グ○イ○備後　ガ○ン○ナ○イ○バ○ラ○佐渡　カ○ナ○イ○バ○ラ○同上　カ○タ○ラ○石州　モ○ガ○キ○バ○ラ○仙臺　モ○ガ○ク○バ○ラ○南部　モ○ン○ガ○タ○バ○ラ○同上　ク○ハ○〱○ラ○イ○ゲ○薩州　シ○ヤ○ウ○ガ○ク○バ○ラ○信州　フ○キ○ダ○マ○同上、小葉麥門冬ト同名、　サ○ル○カ○ケ○イ○バ○ラ○越前　サ○ル○カ○キ○バ○ラ○越後　サ○ル○カ○ケ○イ○ゲ○肥後　サ○イ○カ○チ○イ○バ○ラ○加州　シ○リ○ガ○セ○イ○バ○ラ○播州酒見北條　ム○マ○グ○イ○同上姫路　カ○メ○ノ○カ○ウ○イ○バ○ラ○同上　ガ○ン○ラ○イ○イ○バ○ラ○能州　ゴ○キ○イ○バ○ラ○同上　カ○タ○ラ○グ○イ○藝州　イ○ヌ○バ○ラ○豫州　イ○ギ○ン○ド○ウ○長州　イ○チ○ビ○熊野尾鷲　バ○ン○ガ○チ○同上三木　カ○ゴ○バ○ラ○上總　五○郎○四○郎○シ○

〔農業全書〔十藥種〕〕天門冬(てんもんどう)

天門冬は、山谷に自ら生ずる物なり、されど苗を藥園にうへ、糞養をよくすれば、根甚多く太し、蜜漬にし砂糖につけて好物なり、深柔なる地にうへ、枝竹にはゝせ、又棚を作りまとはするもよし、幾の土地にても、手入によりて、根甚多く出來る物なり、春苗をうへて、九十月堀取べし、是又藥屋にうりて利なき物にあらず、

〔草木育種〔下藥品〕〕天門冬〔本草〕　葉は杉に似たり、故にすぎかづらと云、蔓長ふして木竹を纏、又特生のものあり苗小し根母指の如にして長し、湯を通て心と皮を去、乾て藥に入、又壓石(おし)て自然汁を搾去て、砂糖に漬或蜜に漬てよし、植るには山畑を深耕て春分植人糞をそゝぎ、九十月に堀採べし、

〔延喜式〔三十七典藥〕〕諸國進年料雜藥

播磨國五十三種、〇中略天門冬三斤十兩、　備前國卅種、〇中略天門冬、桑螵蛸各一斤、〇下略

〔寛政四年武鑑〕松平豐後守齊宣〇薩摩鹿兒島　時獻上〔暑中〕砂糖漬天門冬

細川越中守齊茲〇肥後熊本　時獻上〔五月〕砂糖漬天門冬、

〔和漢三才圖會〔九十四末濕草〕〕雉子篋(きじがくし)　俗稱〔本名未詳〕　〔此草葉細密、雉子逃隱可免獵佃、故名、〕

按雉子篋高二尺餘、葉似杉菜葉而細密、三月葉間著小白花極細難見、隨結子青圓、秋熟則赤、大如南天之子、

〔大和本草〔七草〕〕百部(キジカクシ)　莖葉天門冬ニ似タリ雉ガクシト云、又茴香ノ葉ニ似タリ根多シ、赤實アリ、一種實ナキヲサウチクト云、是百部ノ雄ナルベシ、世俗百部ヲヘクソカヅラト訓ズ、大ニアヤマレリ、ヘクソカヅラハ女青ト云、

〇按ズルニ、百部ハホドヅラナリ、

〔新撰字鏡〔草〕〕拔葜、乃〇曾〇眞〇自〇、一云佐〇留〇加〇支〇、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕天門冬　スペルグサ延喜式　スマログサ和名抄　クサスギカヅラ　今ハ通名　一名萬年松種杏仙方　金華本草滙　天門醫約　天冬通雅　天文冬本草滙　天文同上　商棘正字通

自生ハ海邊ニアリ、紀州豆州四國等最多シ、花戶ニモ多ク栽ユ、三月宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一根叢生藤蔓甚繁延ス、枝ヲ分テ纖葉ヲ生ズ、形杉葉ノ如クニシテ長ク、軟ニシテ光リアリ、深綠色、始メ出ル時枝ノ本ニ柔刺アリ、後ニハナシ、一種長ズルニ及テモ硬刺アルモノアリ、夏月葉間ニ小白花ヲ開ク、キジカクシノ花ニ似タリ、後圓實ヲ結ブ、南燭子ヨリ小ク、熟スレバ白色中ニ黑子透見ス、秋後苗枯ル、一種草本ニシテ高サ尺ニ及バザル者アリ、根ハ冬ヲ經テ枯レズ、一科ニ數十根簇生ス、長サ三寸許、大サ五六分、兩頭尖リ新舊相易ル、採ラザル時ハ腐ス、根ヲ採蒸テ皮心ヲ去リ藥用ニ入ル、藥舖ニハ肥前五島ヨリ多ク來ル、

〔廣益地錦抄 五〕天門冬　春宿根より生ズ、蔓草なり、葉はこまかに、ういきやうのごとくに切れ、しげく付て、丈までものびて見るにたれり、根に天門冬多ク生ズル物也、

〔古今要覽稿 草木〕すまろ草　天門冬

この種皇朝にては、瀕海の地に產するもの多くして、山生の物至て少なし、傳聞比叡山會て此物を生せしが、每歲京都の人きそひてこれを採しより、今は絕てみえずとか、ゝれば皇朝にも山生のものなしとはいふべからざれど、瀕海のものよりは、その種はなはだまれなるは、自是風土のしからしむるなり、また抱朴子、天門冬生高地、根短味甜、氣香者上、其生水側下地者、葉細似蘊而微黃、根長而味多苦、氣臭者下とみえたり、西土にも山生のみならず、水側下地に生ずるもあること明らけし、されど皇朝の產は多く瀕海の地に生ずれども、其品却てよろし、これ又風土の然らしむる故なるべし、

草互名之也、圖經云、春生藤蔓、大如釵股、高至丈餘、葉如茴香、極尖細而疎滑、有逆刺、亦有澀而無刺者、其葉如絲杉而細散、皆名天門冬、夏生白花、亦有黄色者、秋結黑子、在其根枝傍、入伏後無花、暗結子、其根白、或黄紫色、大如手指、長二三寸、頗與百部根相類、然圓實而長、一二十枚同撮、

〔撮壤集中草〕天門冬和名類聚〔同下藥種〕天門冬

〔饅頭屋本節用集草木〕天門冬

〔多識編二蔓草〕天門冬、須倍留久左、異名天棘綱目、万歳藤、

〔書言字考節用集六生植〕天門冬天棘、万歳藤並同、天門冬本草、蔓大如釵股、高丈餘、

〔古今要覽稿草木〕すまろ草　天門冬

須末呂久佐本草和名、新撰字鏡、　按に須岐末呂久佐の中略なるべし、須岐末呂とは即杉麻呂の意にして、猶以奈古を以奈古麻呂、猿を猿丸といふがごとし、俗に須岐加豆良といふも、また杉葛の意にして、杉葉に似て蔓延するがゆへなり、この形狀をかく杉葉に比していへるは、古今人情一つなればなり、　天門冬集註本草　岡村尙謙曰、時珍の説に、草之茂者爲虋、俗作門、此草蔓茂而功同麥門冬、故曰天門冬、故曰天棘、爾雅云、髦顚棘也、因其細葉如髦有細棘也、即門冬二合の音にして、また天顚通音なれば、天門冬は即顚髦の義なり、此草蔓延すること、頗る顚髦のごとくなるによりて名づく、時珍門冬を以て、功同麥門冬といへるは全く誤れり、虋といひ門といふも、共にその音をかりていへるものなれば、その字に付て深意あるにはあらず、　スギカツラ大和本草　クサスギカツラ同上　ソウチク同上　キジカクシ同上　絲體博物志　顚棘同上　浣草同上　顚勒同上　蘠蘼爾雅　虋冬同上　棘刺集注本草　淫羊藿抱朴子　管松同上　無不愈同上　百部同上　萬歳藤救荒本草　婆蘿樹同上

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕天門冬　虋冬　顚勒　顚棘　天棘　萬歳藤　和名須末呂久佐○中略

按天門冬出於豫州宇和島者佳、藝州廣島者次之、今漬沙糖食之、故可有與鯉合食不可不知、

天門冬

意といへど、葱臺の貌九輪のあたりに似たるをもて、俗に塔のたつといふ意にて、蘭葱より出たる詞なるべし、

〔日本書紀十三允恭〕二年初皇后(○忍坂大中姫)隨母在家、獨遊苑中、時闘雞國造從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后、嘲之曰、能作園乎汝者也、(汝、此云那鼻苦也)且曰、壓乞戸母、其蘭(アララギ)一莖焉、(壓乞、此云異提、戸母、此云覩自)皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠛也、(蠛、此云摩愚那岐)時皇后結之意裏乘馬者辭无禮、即謂曰、首也余不忘矣、

〔延喜式三十二大膳〕園韓神祭雜給料(春冬同井)

蘭(アララギ)十把

〔延喜式三十九内膳〕漬年料雜菜(○中略)

蘭葅三斗(料鹽二升四合、楡一升二合、○中略)　山蘭二斗(料鹽四升○中略)

右漬秋菜料

〔新撰字鏡草〕天門冬(須○万○呂○久○佐○、又云似○屑○、)

〔本草和名六草〕天門冬(楊玄操音義作東字)一名顚勒、一名絺休、(仁諝音勑遲反)一名顚棘、一名浣草、(金城人名之)一名棘刺、(苗名也、已上四名出陶景注)一名地門冬、一名莚門、一名淫羊食、一名管松、一名百部、(自別有百部也、已上五名出抱朴子)一名棘鍼、一名反刺、一名女木、(已上三名出疏注)一名仙人粮、(甘始名之、出太清經)一名延門、一名烏韭、(出雜要訣)一名仙粮、(出神仙服餌方、甘始公名之)和名須末呂久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕天門冬　本草云、天門冬、(和名須末呂久佐、今案、楊玄操音義冬作東也、)

〔箋注倭名類聚抄十草〕爾雅、髦顚棘、郭注、細葉有刺蔓生、本草陶注引博物志云、天門冬逆捋有逆刺、若葉滑者名絺體、一名顚棘、可以浣縑、金城人名爲浣草、此非門冬、相似爾、蘇注云、此有二種、苗有刺而澀者、無刺而滑者、俱是門冬、俗云顚棘浣草者、形貌銘之、雖作數名、總是一物、二根浣垢俱淨、門冬浣

〔空穗物語藏開上〕ひさしのわたりには、おほいなるひとりに、よき程にうづみて、よきちん、あはせたきものおほく具へて、おほひつゝ、あまたすへわたしたり、御帳のかたびらかべしろなどは、よきうつしどもにいれしめたれば、そのおとゞのあたりは、よそにてもいとかうばし、ましてうちにはさらにもいはず、しるしばかりうちほのめくひるのかなどは、ことにもあらず、

〔新撰字鏡草〕葆阿良々支 蒜家阿良々支

〔本草和名十八菜〕蘭蒚草、出崔禹 和名阿良々岐、

〔倭名類聚抄十六葷菜〕蘭蒚 養生秘要云、蘭蒚音隔、和名阿良々木、

〔箋注倭名類聚抄四鹽梅〕按蘭蒚草、爾雅所謂蒚山蒜蓋是、其菜薰臭、故名蘭蒚也、又按爾雅釋文蒚力的反、爾雅又云、莞苻離、其上蒚、郭注今西方人呼蒲爲莞蒲、蒚謂其頭臺首也、釋文蒚郭音翮、廣韻亦云、蒚山蒜、郎擊切、又云蒚蒲臺頭名、下各切、是山蒜之蒚、蒲臺頭之蒚、其音不同、此當以歷音之、音隔非是、○中略新撰字鏡葆阿良良支、蒜家阿良良支、按蘭蒚草、蒜之生於山者、今俗呼野蒜者是也、以葷菜故名岐、與葱訓岐同、而是物自生稀疏、不得如園種蒜葱之稠密、故云阿良良、猶神功紀阿邏邏摩菟磨邏之阿邏邏也、允恭紀所謂蘭一莖者、即蘭蒚草、蓋操觚者厭繁節之故單言蘭、然仍訓阿良良岐、不訓布知波加麻、可以見非蘭蕙之蘭也、大膳職內膳司等式及雜要抄所載蘭、亦即此、內膳司式別有山蘭、蓋亦是物、

〔饅頭屋本節用集安草木〕蘭葱アラヽギ

〔倭訓栞前編二阿〕あらゝぎ 日本紀に蘭をよみ、和名抄に蘭蒚をよめり、荒々葱の義にて、蘭葱をいへり、大膳式に蘭幾把と書せしも是なり、又山蘭といふものも見えたり、催馬樂に、手なふれそといへる是なるべし、新撰字鏡に蒜を家あらゝきと見えたり、倭名鈔に辛夷をやまあらゝきと訓せるは、其香をいふなり、今も木蘭に去かいへり、齋宮の忌詞に塔をあらゝきといふは、阿蘭若の

〔年中恒列記〕六月晦日

今月土用に、三ヶ度御めぐり、御かゆにんにくのみあかいて水を參也、御美女調進之、

蒜産地

〔鹽尻六〕今俗疫病流行の時、蒜を戶にかけ侍るは、如何なるまじないにやと問ふ人あり、漢家の書にある事見及び侍らず、我舊記には、古事記に日本武尊足柄の坂本にして、食御粮したまふ時、山祇荒振神に蒜を以て彈きかけ給へる事をしるせり、是山氣の瘴邪を除のよしなりとぞ、かゝる事を傳へて、除疫のわざにし侍るにや、　右者備忘雜書に見えたり

〔毛吹草三〕紀伊　蒜ニンニク（外ニ替大師ヵヘ玉フト云）

〔國花萬葉記三大和〕大和國中名物之出所

大峯蒜

蒜雜載

〔令義解二僧尼〕凡僧尼、飮酒食宍、服五辛者、（謂飮酒者、不至醉亂也、食宍者、廣包含生之肉也、五辛者、一曰大蒜、二曰慈葱、三曰角葱、四曰蘭葱、五曰興蕖也、）卅日苦使、

〔本朝食鑑三葷辛〕蒜

凡本邦自中古迄今、崇神社佛寺者每忌五辛、而上下皆然、五辛者、令義解曰、大蒜、茖葱、慈葱、蘭葱、興渠、大蒜葫也、茖葱小蒜也、慈葱葱也、蘭葱胡葱也、興渠薟香也、此據釋氏之說乎、或曰、葱韭薤大蒜小蒜也、大抵忌之有期、蒜七日、葱三日、薤一日、又曰五辛、皆七日忌之、天喜年中、上服御蒜、自六月十六日、至七月二十三日、祈年穀奉幣、是隔七日也、江納言所謂、世俗五十日許、內典七十日、或三七日、或因神社有不忌、又有三十日忌、悉是據釋氏之說、有長短而忌臭穢、惟上古未論之乎、五辛之說略見于異同、可併考、近世瘍醫多用之、

〔延喜式二十四主計〕凡中男一人輸作物、〇中略 蒜紫菜各二斤、

〔延喜式四十二東西市〕蒜廛、〇中略　右五十一廛東市

蒜ノ本ノ立タルヲ取去テ、新キ上筵ヲ敷テ、可入給キ由ヲ申ス、三位ノ中將殿、人ニ懸テ入テ臥給ヌ、持經者ハ水ヲ浴テ、暫許有テゾ出來タル、見レバ長高クシテ痩セ枯レタリ、現ニ貴氣ナル事无限シ、持經者寄來テ云ク、風病ノ重ク候ヘバ、醫師ノ申スニ隨テ、蒜ヲ食テ候ヘドモ、態ト渡ラセ給ヘレバ、何デカハトテ參候也、亦法花經ハ淨不淨ヲ可撰給キニモ非ネバ、誦シ奉ラムニ、何事候ハムト云テ、念珠ヲ押攤テ寄ル程ニ、糸憑モシク貴シ、〇下略

〔源氏物語二帚木〕こゑもはやりかにていふやう、月比ふびやうおもきにたへかねて、ごくねちのさうやくをぶくして、いとくさきによりなん、えたいめん給はらぬ、まのあたりならずとも、さるべからんざうじらはうけ給はらんと、いとあはれにむべ〳〵しくいひ侍り、いらへになにとかはいはれ侍らん、たゞうけ給はりぬとてたちいで侍に、さう〳〵しくやおぼえけん、この香うせなん時に、たちより給へと、たかやかにいふをきゝすぐさすもいとおし、しばし立やすらふべきに、はた侍らねば、げにそのにほひさへ花やかにたちそへるもすべなくて、にげめをつかひて、

ささがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせといふがあやなさ、いかなることづけぞやと、いひもはてず、はしり出侍ぬるにをひて、

逢ことのよをしへだてぬ中ならばひるまもなにかまばゆからまし、さすがにくちとくなどは侍きと、しづ〳〵と申せば、君だちあさましと思て、そらごとゝてわらひ給、

〔源氏物語湖月抄二帚木〕ごくねちのさうやく　細土用のひるなどいひて、藥に用る事のある也、註草藥はひる也、夏の暑氣などに用る物にや、

〔後拾遺和歌集二十誹諧〕ひるくひて侍ける人、今は香もうせぬらんと思ひて、人のもとにまかりたりけるに、名殘の侍けるにや、七月七日につかはしける、　皇太后宮陸奥

君がかすよるのころもをたなばたはかへしやしつるひるくさしとて

〔本朝食鑑三葷辛〕蒜

今用葫根一兩片、入魚鳥羮中而食者、非獨除羶腥之氣、亦能解毒、或夏月土用初日之旦、用蒜一兩片、赤小豆二三粒、水飲下、以除疫邪、或疫癘傳染之時、家家懸大蒜于門上以避之、或臘月用蒜和味噌鹽貯于瓷壺、緊固封口埋于土中、經春夏至夏土用而食、謂能辟除暑熱疫邪、此未試之、

〔倭名類聚抄十六葷菜〕韲　四聲字苑云、韲郎稽反、訓安不、一云阿倍毛乃、擣薑蒜以醋和之、

擣蒜　食療經云、擣蒜韲比流豆木

〔延喜式三十二大膳〕鎮魂　雜給料　參議以上　人別〇中略　漬蒜房、蒜英、韮擣各二合、

園韓神祭雜給料春冬同　蒜一斗、

〔延喜式三十三大膳〕造雜物法

蒜房蒜英各一斛、韮擣一斛、　右神事料、造法見內膳式、

〔日中行事〕四月賀茂のまつりの日は、ひるを供ずる也、

〔今昔物語十二〕神名睿實持經語第卅五

今昔、京ノ西ニ神明ト云フ山寺有リ、其ニ睿實ト云フ僧住ケリ、〇中略而ル間閑院ノ太政大臣ト申ス人御ケリ、名ヲバ公季ト申ス、九條殿〇藤原師輔ノ十二郎ノ御子也、母ハ延喜ノ天皇ノ御子ニ御ス、其ノ人其ノ時ニ若クシテ三位ノ中將ト聞エケルニ、其比瘧病ト云フ事ヲ重ク惱ミ給ヒケレバ、所々ノ靈驗所ニ籠テ、止事无キ僧共ヲ以テ加持スト云ヘドモ、露其ノ驗无シ、然レバ此ノ睿實止事无キ法花ノ持者也ト聞エ有テ、其人ニ令祈ムト思テ、神明ニ行キ給フニ、例ヨリモ疾ク賀耶河ノ程ニテ其ノ氣付ヌ、神明ハ近ク成ニタレバ、此ヨリ可返キニ非ズトテ、神明ニ御シ付ヌ、房ノ檐マデ車ヲ曳寄テ、先ヅ其由ヲ云ヒ入サス、持經者ノ云ヒ出ス様、極テ風ノ病ノ重ク候ヘバ、近來蒜ヲ食テナムト、而ルニ唯聖人ヲ禮ミ奉ラム、唯今ハ可返キ様无ト有レバ、然ラバ入ラセ給ヘトテ、

互生シ頂ニ花ヲ開ク、韮ニラノ花ノ如ニシテ大ニ、六瓣淡紫色、又白花ノ者アリ、後實ヲ結ブ形韮ノ子ノ如シ、熟シテ苗枯ル、根ハ枯レズ、形水仙ノ根ノ如シ、

蒜栽培

〔延喜式 三十九 內膳〕耕種園圃

營蒜一段、種子三石、總單功九十三人、耕地七遍、把犂三人半、馭牛三人半、牛三頭半、料理平和二人、分畦三人、糞二百十擔、運功卅五人、殖功六人、八月芸三遍、第一遍十人、第二遍八人、第三遍七人、採功十五人、

〔農業全書 四 菜〕蒜

にんにくにたね大小あり、大なるたねをゑらびて作るべし、種る地の事、良軟に宜しとて、性よく肥てやはらかなる地によし、白く和らかなる地にうゆれば、味甘く根莖も大し、黑く堅きこはき土などにうへたるは、辛くして瘠て小し、地のこしらへ、三遍耕し、細かにこなし、畦作りし、小筋にがんぎを切、間を二三寸づゝをきて、一粒づゝならべうへ、牛馬糞の久しくかれたるを多くおほひ培ひ、其上より水ごゑをそゝぎ、生出て後草あればぬき去、中をかぢり、熊手にてかきあざりなど、さいさいして、其度ごとに糞水をそゝぐべし、うゆる時分の事、八月中旬九月初めまではよし、小蒜は少早くうゆべし、

蒜利用

〔宜禁本草 乾 五 菜〕葫　辛温有毒、葫子種名、獨蒜、久食傷人損目、散癰腫䘌瘡、建脾胃、消穀食、止霍亂吐瀉腹痛、除勞瘧痃癖、蒜研左衄塗右、右衄塗左、足心、多食却明、傷肝、久食血清髮白、俗作韲以啖鱠、損性伐命、莫此之甚、此物惟生食、不中煮、孫眞人曰、正月之節食五辛以辟厲氣、蒜、葱、韮、薤、姜、食多、白髮早、面無顏色、四八月食傷神損膽、

蒜　辛温有小毒、歸脾腎、主霍亂腹中不安、消穀理胃、温中、除邪痺、至五月葉枯取根、損人不可長食、三月勿食、

胡葱　辛温、久食傷神、多忘、損目、發痼疾、益甚胡臭、温中、消穀、下氣、殺虫、四月食、氣喘多驚、

茖葱

賞之、家家畦圃蒔之、以灰培之糞之亦佳、

〔和漢三才圖會 九十九 葷草〕胡葱(アサツキ)○中略

按胡葱宿根自生、或收根於籠、置陰處、至秋生芽、卽移種、正二月取二三寸如針者、生和醋食之、甚佳、不宜煮、三四月最長、亦細而不過尺、其辛味倍于餘葱、臭氣淺于餘葱、故名淺葱、(津者、假名之助語也、)

〔重修本草綱目啓蒙 十八 葷辛〕胡葱　詳ナラズ○中略

和名鈔ニアサツキト訓ズレドモ穩ナラズ、又和名鈔延喜式ニ島蒜ヲアサツキト訓ズ、清醫周氏等ハ、香葱麥葱ト云、アサツキハ葉細ク色淺シ、上巳ニ食用トス、其後ハ葉コハクナリテ食ベカラズ、一名ヒトモジ、(筑前、肥前、)センブキ、(筑前)センボンワケギ(伯州)三月ワケギ(勢州)是廣東新語ノ絲葱ノ類ナリ、

〔令義解 三 賦役〕凡調、○中略正丁一人、絹絁八尺五寸、○中略若輸他物者、○中略島蒜(アサツキ)一石二斗

〔書言字考節用集 六 生植〕茖葱(ノビル)(クワジヤニンニク)(時珍云、茖葱也、)

〔本朝食鑑 三 葷辛〕茖葱(訓古比留)

釋名、山葱、(源順)行者蒜、(俗稱、此葱不臭、釋氏勤行者食之、謂無穢忌、故名、野之二荒山中種之、山僧食之、故亦稱二荒蒜、)

集解、茖葱似葱之初生、或似加利岐、莖葉細尖柔滑、根白類小蒜而至小、味微辛不甚臭、故人多賞之、山谷野處所有甚多、開白花結子、如小葱頭、然種蒔者少矣、移根可植耳、

〔重修本草綱目啓蒙 十八 葷辛〕茖葱　○ギヤウジヤニンニク　○ゼンジヤウニンニク(新校正)　○ゼツチヤウニンニク　○天台蒜(大和本草)　○エイザンニンニク　○タケシマニンニク　○ヤマビル　○ジウニヒトヘ(野州)○中略

東北州深山ニ生ズ、古ハ城州比叡山ニモアリト云フ、今ハナシ、花戸ニ多ク栽ユ、早春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、根上絲ニテ包裹シ、葱白藜蘆ノ如シ、葉ハ紫萼(ギボウシノ)葉ニ似テ縱道ナシ莖高サ八九寸、三葉下ニ

島蒜

集解、根葉倶似蒜而細小、味亦稍同、然不甚臭、故嗜蒜忌臭者采而食、其味不爲佳也、

〔重修本草綱目啓蒙〕十八葷辛 山蒜 ネビル和名鈔 ノビル ネムリ阿州 ネブリ江州 ネンブリ加州 ヒルコ奥州福島 チモト仙臺 キモト コアサツキ同上 〇中略

原野道旁磧間甚多シ、葉ハ葱葉(チギノ)ニ似テ至テ細ク、微稜アリ、年ヲ經ル者ハ徑リ二分許、長サ一二尺、數葉互生ス、其臭亦葱ノ如シ、〇中略 山蒜、澤蒜、石蒜、皆ソノ生ズル處ヲ以名ク、皆一物ナリ、

〔令義解〕三賦役 凡調、〇中略 正丁一人、絹絁八尺五寸、〇中略 若輸雜物者、〇中略 澤蒜(ネヒル)一石二斗、

〔延喜式〕二十四主計 凡諸國輸調、〇中略 澤蒜島蒜各七十二斤、

〔古事記〕中應神 天皇聞看豐明之日、於髪長比賣令握大御酒柏、賜其太子、〇中略 爾御歌曰、伊邪古杼母(イザコドモ)、怒毘流都美邇(ヌビルツミニ)、比流都美邇(ヒルツミニ)、和賀由久美知能(ワガユクミチノ)、〇下略

〔古事記傳〕二十七 怒毘流は野蒜なり

〔倭名類聚抄〕十七葷菜 島蒜 楊氏漢語抄云、島蒜、阿佐豆木、本朝式文用之、

〔類聚名義抄〕八艸 島蒜 アサツキ

〔伊呂波字類抄〕安殖物附殖物具 角葱 アサツキ、五辛三日云、備尼令云也、 島蒜 如韮葱者也 阿佐岐 已上同

〔撮壤集〕中草 角葱(アサツキ) 島萩 同 〔同〕下菜 異說 島蒜 和名類聚同 朝月 同 胡葱

〔饅頭屋本節用集〕安草木 胡葱(アサツキ)

〔書言字考節用集〕六生植 胡葱(アサツキ) 韮葱、蒜葱並同、 回々葱 同 並出本草 島蒜 同 延喜式、順和名、

〔本朝食鑑〕三葷辛 胡葱 訓阿佐豆岐

釋名、島蒜、本朝式、和名、 蘭葱、令義解、必大(平野)按、島蒜字義未詳、島者所以別山野水澤之葱耶、蒜葱通名耶、蘭者胡葱細小成叢、如蘭之茂也、

集解、胡葱葉似葱而形圓細長鋭、根上莖著赤皮、似蒜而小、不甚臭、八九月下種、正二月採嫩芽二三寸者、供膳和膾、是賞其新珍乎、三四月葉莖盈尺、柔滑臭美、連根可食、五六月開花結子、而采收之、近代最

山蒜ヲ圃ニテ培養スル者ニシテ、卽小蒜ナリ、故ニコビルト云、

獨子蒜

〔倭名類聚抄 十七菜〕獨子蒜 崔禹錫食經云、獨子蒜、和名比止豆比流、一云獨子葫、孟詵食經云、獨頭蒜、

〔箋注倭名類聚抄 九蒜〕本草和名云、葫、崔禹曰、獨子大者、蒜、小如百合片者、按崔意獨子大者名葫、小如百合片者名蒜也、此引作獨子蒜、恐誤、○中略 本草和名獨子葫在葫條、別無和名、○中略 按本草葫條、陶注云、取其條上子、初種之成獨子葫、明年則復其本也、是獨子葫出陶弘景注、此蓋從本草和名引之、一云似當作陶景曰、

〔類聚名義抄 八艸〕獨子蒜 ヒトツヒル

澤蒜

〔倭名類聚抄 十七菜〕澤蒜 兼名苑云、澤蒜一名蒚、音曆、和名禰比流、水蒜也、生水中、葉形氣味不異家蒜、

〔箋注倭名類聚抄 九蒜〕澤蒜又見本草拾遺、李時珍曰、本草衍義所說宅蒜、卽澤蒜之誤、玉篇、蒚、似蒜、生水中、蒚古文、音曆與集韻合、○中略 本草綱目引陳藏器曰、澤蒜根如小蒜、葉如韭、又生石間者名石蒜、與蒜無異、李時珍曰山蒜澤蒜石蒜同一物也、但分生于山澤石間不同耳、人間栽蒔小蒜、始自三種移成、故猶有澤蒜之稱、又呂忱字林云、蒚水中蒜也、則蒜不但產于山、而又產于水也、按澤蒜、見賦役令主計寮式、

〔類聚名義抄 八艸〕蒚 音曆、ネヒル、 〔澤蒜 ネヒル

〔倭訓栞 中編十八乃〕のびる 古事記の歌にみゆ、日本紀にはのにひるつみなどみゆ、野蒜の義、小蒜也といへり、和名抄にはこひる、又めひるとよめり、加賀にねんぶりといふ、野必大は和名抄の澤蒜ねびるといふ是也といへり、

〔物類稱呼 三生植〕野蒜 のびる 加賀にてねんぶりと云

〔本朝食鑑 三菜辛〕山蒜 訓禰比流、今訓野比流、

釋名、澤蒜 源順、野蒜 俗稱、(中略)必大(平野)按、是不獨生水中、亦山野林墅自生而長者、因地可名之、今處處多有焉、

小蒜

〔重修本草綱目啓蒙十八葷辛〕葫　オホビル和名鈔　ニンニク　オホニンニク　ヒル東國　ロクドウ大和本草　トチ勢州○中略
葉ハ扁クシテ、水仙ノ葉ヨリ濶ク尖リ、臭氣多シ、數葉互生ス、夏月粗圓莖ヲ抽テ、梢ニ白花簇生シ、葱花ニ似タリ、花後子ヲ生ズ、稜アリテ根形ノ如ニシテ甚小シ、根皮色赤シ、保昇ノ說ニ、涇陽者皮赤甚辣ト云是也、一種苗大ナル者アリ、葉長大ニシテ柔輭、ソノ端常ニ卷曲ス、故ニツルクビ江戸ト呼ブ、臭氣少シテ味美食用ニ可ナリ、早ク生ジ早ク枯ル、根皮色白シ、保昇ノ說ニ、出梁州者大徑二寸、最美少辛ト云フ者是ナリ、其子莖中ニ胎生ス、倶ニ根ハ六七瓣簇リ籜中ニアリ、採リ收メ皮ヲ去リ、一瓣ヅヽ分チ栽ユレバ、其年中ハ栽タルマヽニテ瓣ヲ增サズ、是ヲ獨子葫ト云フ、藥ニハコレヲ用ユ、故ニ五月獨蒜附錄方ノ名アリ、和名鈔ニヒトツビルト訓ズ、

〔本草和名十八菜〕蒜楊玄操音蒜亂反　一名薍子、根名也、五患反、出陶景注、一名蘭葱小蒜　一名蒜卵巳上出兼名苑　和名古比留

〔倭名類聚抄十七葷菜〕小蒜　陶隱居本草注云、小蒜和名古比流、一云米比流、生葉時可煮和食之、至五月葉枯、取根噉之、甚薰臭、性辛熱者也、

〔箋注倭名類聚抄九葷菜〕古比留依輔仁、米比流之名、輔仁不載、○中略　蜀本圖經云、小蒜野生小者、一名薍、一名蒚、苗葉根子似葫而細數倍也、本草衍義云、蒜、小蒜也、又謂之蒚、苗如葱針、根白、大者如烏芋、子兼根煮食之、又謂之宅蒜、李時珍曰、家蒜有二種、根莖倶小、而瓣少辣甚者、蒜也小蒜也、根莖倶大而瓣多、辛而帶甘者、葫也大蒜也、小蒜之種、自蒚移栽、從古已有、故爾雅以蒚爲山蒜、所以別家蒜也、王禎農書云、一種澤蒜最易滋蔓、隨劚隨合、熟時採子、漫散種之、此正別錄所謂小蒜是也、其始自野澤移來、故有澤名、而寇氏誤作宅字矣、諸家皆以野生山蒜澤蒜解家蒔之小蒜、皆失於詳攷、小蒜雖出於蒚、既經人力栽培、故不得不辨、

〔重修本草綱目啓蒙十八葷辛〕蒜　ヒル和名鈔　コビル新校正○中略

蒜初見

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一にんにく　にもじ

〔古事記 中景行〕倭建命(中略)亦平和山河荒神等而、還上幸時、到足柄之坂本、於食御粮處、其坂神、化白鹿而來立、爾卽以其咋遺之蒜片端、待打者中其目、乃打殺也、

蒜種類

〔本朝食鑑 三葷辛〕蒜 訓比流、或曰仁牟仁久、

釋名 小蒜、順 大蒜、同 獨子蒜、同(中略)必大(平野)按、獨子蒜今亦有之、最希有之、或曰、獨子者蒜之未長也、此亦有理爾、

集解、蒜處處多有、家圃田畦俱蒔種之、根葉俱小而瓣少、辣甚者小蒜也、根莖俱多而瓣多、辛中帶甘者葫也、大蒜也、今多用大蒜而用小蒜者希矣、食藥俱然、八月種二月食苗、三四月開花、花中有實、亦可爲根瓣狀而極小、可種之、四月食薹、五月葉枯食根、此大蒜小蒜皆同、

大蒜

〔新撰字鏡 草〕菻 蒜 同蒜亂反、葫、於保比留、

〔本草和名 十八菜〕葫 仁諝音荒烏反 葫 崔禹曰、獨子大者、 蒜 小如百合片者 獨子葫 出陶景注 一名䵴 音煩、出兼名苑 和名於保比留、

〔倭名類聚抄 十七葷菜〕大蒜 本草云、葫 音胡、和名於保比流、 味辛溫、除風者也、兼名苑云、葫一名䵴 音煩 大蒜也、

〔箋注倭名類聚抄 九菜〕和名依輔仁、今俗呼仁无仁久、東奧俗尙呼比流、千金翼方證類本草菜部下品、風下有邪字、無者也二字、陶注云、今人謂葫爲大蒜、謂蒜爲小蒜、本草圖經云、葫每頭六七瓣、初種一瓣、當年便成獨子葫、至明年則復其本矣、然其花中有實、亦葫瓣狀而極小、亦可種之、按說文無葫字、李時珍曰、按孫愐唐韻云、張騫使西域、始得大蒜葫荽、則小蒜乃中土舊有、而大蒜出胡地、故有胡名、又引伏候古今注云、蒜、茆蒜也、俗謂之小蒜、胡國有蒜、十子一株、名曰胡蒜、俗謂之大蒜、(中略)按說文䔉、小蒜、李善南都賦注引字書同、玉篇廣韻並云、百合蒜、崔氏食經所謂蒜小如百合斤者蓋是、兼名苑以䵴爲大蒜一名、恐非、

〔類聚名義抄 八艸〕葫 音胡、大ヒル、又音呼、

蒜名稱

白散一劑、屠蘇一劑、千瘡万病膏一劑、（中略）○所須、（中略）○薤白廿莖、（已上自二寮庫一行之）

臘月御藥

犀角丸六劑、芍藥丸三劑、（中略）○所須、（中略）○薤白廿莖、

〔倭名類聚抄（十七菜蒜類）〕蒜（附）唐韻云、蒜（音算、和名比流、）葷菜也、楊氏漢語抄云、蒜顆（比流佐木、今案顆小頭也、音果、見二玉篇一、）

〔箋注倭名類聚抄（九蒜）〕比流、見二應神紀御歌、萬葉集景行紀同訓、新撰字鏡、葱訓二比留、谷川氏曰、其味辛辣、食レ之口中疼痛、故名二比流、（中略）○按說文、蒜、葷菜也、葷臭菜也、孫氏依レ之、（中略）○按鋒頭皆訓二佐歧、比流佐歧、蒜頭也、內膳司、大膳職式、所レ謂蒜房、卽是、今本玉篇頁部云、顆、小頭貌、與二此所一レ云合、按說文、顆、小頭也、顧氏蓋本レ之、玉篇又云、顆、口火切、果、古禍切、顆屬二次清音溪母、果屬二清音見母、其音不レ同、廣韻亦同、此以レ果音レ顆、恐誤、

〔類聚名義抄（八艸）〕蒜（音算、ヒル、オホヒル、）蒜顆（ヒルサキ）　小蒜（コヒル、一云ノビル、）

〔撮壤集（中草）〕蒜（ヒル）　葫（ニンニク、和名大蒜注）

〔饅頭屋本節用集（仁草木）〕葱蓐（ニンニク）　蒜（ニンニク）〔同（比草木）〕蒜（ヒル）

〔易林本節用集（仁草木）〕蒜（ニンニク）　葱蓐（ニンニク）

〔書言字考節用集（六生植）〕蒜（ニンニク、小蒜、茆蒜並同、）　蒜（マヒル）　蒜（ヒル）

〔物類稱呼（三生植）〕蒜ひる　關東にてひるといふ、關西にてろくたうといふ、筑紫にてにんにくといふ、

〔倭訓栞（前編二十五比）〕ひる（中略）○蒜をよむは、味のひら〳〵するをいふ也、今俗忍辱（ニンニク）と呼は、其臭きをもて也、（中略）○倭名抄に蒜顆をひるさきと訓せり、さきは裂の義也、又大蒜おほひる、小蒜めひる、獨子蒜ひとつひる、澤蒜ねびると見えたり、又新撰字鏡に、白芒を馬びるとよみ、令に島蒜あり、あさつき也、

ワ○カ○ム○ラ○サ○キ○花日　ラ○ン○キ○ヤ○ウ○筑前、根名、〇中略

圖ニ栽ユ、葉ハ葱ヨリ狹細、長サ一二尺、三稜ニシテ内空シ、臭氣アリ、一根ニ多ク叢生ス、秋數莖ヲ抽テ、高サ一二尺、頂ニ小花簇リ開ク、韭ノ花ニ似テ大ニ、紫色觀ツベシ、後實ヲ結ブ、亦韭子ノ如シ、根ハ山蒜ノビル根ニ似タリ、旁ニ子根ヲ多ク生ジ繁殖ス、〇中略一種ヤマラツキヤウハ、下濕ノ地ニ自生ス、薤葉ヨリ細ク厚クシテ色深シ、其花深紫色ニシテ美シ、是山薤ナリ、

薤栽培

〔農業全書菜四〕薤らつけう やよにらとも云

薤是を火葱とも云、味少辛く、さのみ臭からず、功能ある物にて、人を補ひ温め、又は學問する人つねに是を食すれば、神に通じ魂魄を安ずる物なり、うゆる地、白砂の軟かなる肥地を、二三遍も耕しこなし、二三月分て一科に、四五本づゝうゆべし、さい〳〵中うちし、根の廻りをかきさらへ、畦中をきれいにしてをくべし、濕氣のつよきをにくむ物なり、是もわけぎのごとく分てとるべし、根を鹽醬に漬置て用ゆべし、又煮て食し、或糟に漬、醋に浸、又少ゆびき、醋と醬油に漬たるは久しく損せず、味よき物なり、又は醋味噌にて食す、牙香ありて、氣味おもしろき物なり、たねを取をく事も、春葱と同じ、時珍が云、八月に根をうへ、正月にわかちて肥地うへ、五月に根をとるべし、

〔大和本草附錄二〕薤ラツケウハ六月土用ニホリ出シ、子ヲワカチテ一日ホシ、其翌日土ニ一根ヅヽ別ニアサクウフベシ、一處ニ二根付合テウユベカラズ、クサリヤスシ、ホリ出シテ久クホスベカラズ、又溼ニアタレバクサル、ワラヲイム、又ウヘ付ニシテ其マヽヲクハアシヽ、葉生ジテ三四寸ニナラバ、小便ヲカケテヨクフミ付ベシ、ウグロモチナドウゴモテルハ、コトニヨクフミテカタクス、如此スレバ根大ナリ、地和ナラバ時々フミカタクスベシ、肥ヲシバ〳〵カケテヨシ、フミ付ザレバ、根小ニシテ長シ、フミ付テ肥セバ根丸ク大ナリ、

薤利用

〔延喜式典藥三十七〕元日御藥中宮准此

韮而葉闊、多白無實、春分蒔之、至冬葉枯、本草衍義云、薤葉如金燈葉、差狹而更光、故古人言薤露者、以其光滑難佇之義、李時珍曰、葉狀似韮、韮葉中實而扁有劍脊、薤葉中空、似細葱葉而有稜、氣亦如葱、二月開細花、紫白色、根如小蒜、一本數顆相依而生、

〔類聚名義抄八佛〕薤（俗益字、香械、オホミラ、ナメミラ、ミラ、ニラ、ヒル、）

〔書言字考節用集六生植〕薤（ラツキヤウ、又云大葱）　薤（ヤブニラ、火葱、莜子、菜芝、鴻薈並同、）　藠子（同上、並見本草、）

〔東雅十三穀蔬〕薤ヲホミラ　神武天皇御製の來目歌の中に、カミラといふ事の見えしを、日本紀釋には、大薤をいふ也と註したり、倭名鈔には、本草蘇敬註を引て、薤是薤類也、オホミラといふ、韮はコミラ、又菜總名也と註せり、ミラといひ、また菜總名也といふ義並不詳、後俗呼てニラといふもの是也、（韮薤の類、後にニラといひしは、ミラといひ、ニといふ、相通じていふは常也、萬葉集鈔に、ナミハヤの國をナニハといひ、ニラをミラといひ、ニナをミナといふが如しと見えたり、或は後の人梵語によりて、其青色なるを云ひしも知るべからず、梵語に尼羅といふは、漢に青色と飜するなり、）

〔倭訓栞中編二十八〕らつけう　薤をいふ、辣韮の音也といへり、らんけうともいふ、中山傳信錄に、辣蕎とせしも是にや、和名抄には、薤をおほみらと訓ぜり、

〔本朝食鑑三葷辛〕薤（訓於保仁良）

集解、薤當世賞之者少、處處希有、八月栽根、正月分蒔、宜肥壤、其葉中空似細葱而有稜、氣亦如葱、二月開細花、紫白色而無實、故分根而種、根如小蒜、一本數顆、俗混稱羅津岐與（ラツキヨ）、五月葉青可掘之、否則肉不滿也、

〔本朝食鑑三華和異同〕薤

薤本邦之大韮也、世未多種之、俗混稱羅津岐與、然薤根有臭、羅津岐與者不臭、此水晶葱也、葱葉蒜根、其根與薤根全相似、則混之亦無害、

〔重修本草綱目啓蒙十八葷辛〕薤　オホミラ（和名鈔）　サトニラ（古名）　ラツキヤウ　タマムラサキ（新校正）

き、古葉ちりあくたなど少もなく、きれいにして水糞をかけ、又時々熟糞或鷄の糞をそけば、よくさかへ、年中幾度ともなく刈て、廿日ばかりにては、本のごとく長くしげる物なり、又冬に成て韮のかぶをおこし、屋のかげなどにならべ置、馬屋ごゑにて培へば、其暖りにてながくさかへ、風寒にもあはぬゆへ、其葉黄色にして、和らかなり、是を韮黄と云となり、つねのにらよりは、すぐれて賞翫にて、めづらしき菜なりとしるしをけり、又にらは少深く筋をきりてうゆべし、根上にあがる性の物なれば、淺くうゆればかならず瘠るなり、又かぶをわけてうゆる時、古根のしやうがのごとくなりたるを、かきてのくべし、其まゝうゆれば、是又やする物なり、又にらを久しくうへ付にして置たるは、變じて莧となる、又葱も變じて韮となる事間多し、

韮利用

〔宜禁本草 乾五菜〕韮　辛微酸温、與牛肉同食、生塊病、忌蜜、根養髮、歸心、安五臟、除胃熱、利病人、補虚、益陽下氣、圃中種、一歲三割、春食則香、夏食則臭、多食昏人神、熱病後十日不可食、發困、治漆咬、韮葉研傅、和臟府、益陽、止泄精尿血、暖腰膝、除心腹痼冷、肥人、中風失音研汁服、多食昏神、暗目、酒後尤忌、五月勿食、子主夢泄精、虚勞、腎損、尿白、花動風、

〔厨事類記〕御產御膳

窪器物盛餉物　生物、鯛雉鹿猪或韮蒜盛之、

薤名稱

〔新撰字鏡 草〕薤 不戒反、奈○女○彌○耳、

〔本草和名 十八菜〕薤 蘇敬注曰、韮類也、菜芝也、一名草葱、一名菜定、一名鴻會、已上三名出類也　一名羊芝、出養性要集　一名薤薑、根也、出大清經、和名於○保○美○良、

〔倭名類聚抄 十七葷菜〕薤　唐韻云、薤 胡介反、與械同、葷菜也、本草云、薤味辛苦無毒、和名於保美良、蘇敬注云、是韮類也、

〔箋注倭名類聚抄 九蒜〕廣韻云、䪥葷菜也、葉似韮薤俗、說文、䪥菜也、葉似韮 中略 ○ 和名依輔仁、新撰字鏡、薤奈女彌良、今俗呼辣韮 中略 ○ 證類本草引作薤乃是韮類、蘇敬又曰、薤有赤白二種、本草圖經云、似

韮栽培

陰乾、勿レ令ニ浥鬱一、〔○平野必大〕昔取ニ韮黃一、如ニ李氏法一、大抵韮者、最可レ爲ニ佳蔬一、乃菜中最可レ人者矣、

〔重修本草綱目啓蒙 十八 葷辛〕韮 ○コミラ〔和名鈔〕 ○コニラ ○ニラ ○フタモジ〔上總〕 辛葉〔和方書、葉名、○中略〕俗名ニラ、故ニ又フタモジト云、圃中ニ多ク栽ユ、葉ハ小葉ノ麥門冬葉ニ似テ、潤ク厚ク色淺シ、一根ニ叢生ス、刈取ル時ハ速ニ復出ヅ、故ニ年中ニ幾度モ刈取ベシ、又一度栽テ其根久ク生ズ、故ニ韮ト名ク、夏別ニ數莖ヲ生ズ、高サ一尺許、梢ニ小枝數十聚リ、上ニ花ヲ開ク、大サ三分許、六瓣白色、形山蒜ノヒルノ花ノ如シ、後圓實ヲ結ブ、熟シテ自ラ開ク、内ニ小黑子アリ、是藥用ノ韮子ナリ、霜後苗枯ル、春ニ至リ宿根ヨリ葉ヲ生ズ、

〔延喜式 三十九 内膳〕耕種園圃

營韮一段、種子五石、總單功七十五人、耕地三遍、把犂一人半、馭牛一人半、牛一頭半、料理平和二人、畦上作二人、糞二百十擔、運功卅五人、擇ニ苗子一功六人、殖功六人、〔九月〕芸三遍廿一人、〔度別七人〕

〔農業全書 四 菜〕韮

にらは古來名高き物にて賞翫なり、陽起草とて、人を補ひ温むる性のよき菜なり、又一度うへをけば、幾年も其まゝをき付にしてさかゆる故、怠り無性なる者のうゆべき物とて、懶人菜とも云なり、古かぶを分てうへ、又は秋たねを取をきて、春苗としうゆるもよし、されども多くさかへしげる物なれば、たねをうゆるに及ばず、かぶをわけてうへたるがしるしすみやかなり、三葱四韮とて、にらは四もとづゝ、一かぶにしてうゆると也、うゆる時灰ごゑにてうへ、九十月又わらの灰を以て二三寸もおほひ、其上に土を少かけ置べし、たねを二月蒔て九月わけてうへ、十月かくのごとくするなり、韮は上品の菜にて、唐人は甚賞翫し、常の膳に多く用ゆるとみえたり、されば都近き所などは、過分に作りて利を得ると也、千畦の韮圃を作りて持たる者は、其人の分限、千戸侯と同じとて、一郡もとる大名の富にかはらずと、史記にもしるし置り、畦の中を細々熊手にてか

〔安齋隨筆前編一〕韮、俗に韮をニラといふは誤也、本名ミラ也、和名抄に薤和名於保美良、韮和名古美良とあり、大みら小みら也、日本紀神武天皇御歌にも瀰羅とあり、

〔物類稱呼三生植〕韮にら　上總にてふたもじと云、是は葱をひともじと呼故に、にらをふたもじと云、

〔倭訓栞前編十九〕にら　俗に韮をいふ、みらの轉せる也、上總の國俗はふたもじといふとぞ、きをひともじといふに對へたる名也、やまにらは山韮也、又水韮あり、

〔倭訓栞後編十六〕みら　倭名抄に薤をおほみら、韮をこみらと訓せり、今は韮をにらといへり、新撰字鏡には、薤をなめみらと、韮をたゞみらとよめり、又葱もみらとよめり、萬葉集にくゝみらとよめるは、莖韮の義也といへり、

〔古事記中神武〕然後將擊登美毘古之時、歌曰、美都美都斯、久米能古良賀、阿波布爾波、賀美良比登母登、曾泥賀母登、曾泥米都那藝氏、宇知氏志夜麻牟、

〔古事記傳十九〕賀美良比登母登、美良は韮なり、和名抄には、薤和名於保美良、韮和名古美良と見え、字鏡には薤奈女彌良、韮太々彌良、また葸韮彌良と見ゆ、万葉十四(十八丁)に、久君美良ともよめり、莖韮なるべし、さて賀美良と云は物に見えず、別に一種か、又たゞの韮にて臭韮と云るにても有べし、越前國敦賀郡鹿蒜も臭蒜の意の地名歟、式には加比留神社とあり、(書紀釋には、謂大韮と云れども據を知らず、契沖は、賀は、か青か黑などの加にて、助語歟と云れど、さも聞えず、又延佳は、和名抄の古美良を引たれども、古の通音ともきこえざるなり、)美良、後には爾良と云り、

〔本朝食鑑三菜辛〕韮(古訓古美良、今訓仁良、)集解、韮者家家種之、滋養而食、然爲五辛之一、而不妄食、亦宜煮食、不宜生食、或燒而煮食亦宜、凡韮叢生、豐本長葉、形似胡葱而葉平扁、中實不圓、有劒脊、色深青翠、根白、可以根分、可以子種、一歲不過五剪、收子者一剪、或不可剪、剪後用冷灰培根、則再葉易生、八月開花成叢、九月收子、其子黑色而扁、風處可

韮名稱

太平御覽（七百二十七）王隱晉書曰、韓友善卜占、行京費厭勝之術、劉世則女病鬼魅積年、友筮之、令作布囊、女發時張囊著窗牖間、友閉戶作氣、若有所驅逐、斯須之間囊大脹、如吹葱葉、因便敗、女仍大發、友乃更作皮囊二枚、沓張之、施如前、囊復脹滿、因急縛囊口、懸著樹間、二十許日漸消、下開視、有二斤毛、狀如狐毛、女遂大差、と出たれば最久し、

〔新撰字鏡（草）〕韮（居有反、太○彌○耳○、）　䪥（相力反、韮、彌○耳○、）

〔本草和名（十八菜）〕韮（楊玄操音九）一名白韮、一名豐本、（已上二名出兼名苑）一名寒菜、（出千金方）一名草鍾乳、（言其宜人也、故以名之、出拾遺）和名古○美○良○、

〔倭名類聚抄（十七菜羹）〕韮　本草云、韮（擧有反、與玖同、和名古美良、又菜總名也、）味辛酸、温無毒、崔禹錫食經云、韮食之除病、

〔箋注倭名類聚抄（九菜羹）〕和名依輔仁、新撰字鏡䪥、彌良、韮、太太彌良、按古謂之加美良、神武天皇御歌云、賀美良比登母登、謂韮一莖也、加美良蓋咬苛之義、謂食之辛辣、口中疼痛也、美良是省語耳、古美良、又對於保美良之言也、今俗譌呼爾良、或呼二文字、對呼葱爲一文字也、○（中略）說文韭菜名、一種而久者、故謂之韭、象形在一之上、一地也、此與耑同意、本草圖經云、圃人種蒔一歲而三四、割之其根不傷、至冬壅培之、先春而復生、信乎一種而久者也、在菜中此物最温而益人、宜常食之、李時珍曰、韭叢生豐本、不得外長、葉高三寸便剪、八月開花成叢、九月收子、其子黑色而扁、

〔類聚名義抄（八草）〕韮（俗韭字、音玖、コミラ、タヽミラ、ニラ、）

〔下學集（下草木）〕薤（ガイニラ）葱（ソウ）

〔易林本節用集（仁草木）〕薤（ニラ）　韭（同）

〔干祿字書（上聲）〕韮韭（上通、下正、）

〔大上臈御名之事〕女房ことば
一にら　ふ○た○も○じ○

し、殊に霜を經しものは、別て柔らかなり、

〔一話一言十七〕しころ根葱

下野國栃木村にしころといふ根葱あり、岩槻根葱のごとく、白み多くして味美也、上方西國ともに、根葱の白みなく、蘿蔔の長きなし、此二ッの物江戸にまされるはなし、

〔一話一言二十八〕京大坂江戸の名物を讀侍る狂歌

江戸　鮭　鰹　大名屋鋪　鰯(ナマイハシ)　比丘尼　紫　冬葱(チブカ)　大根

〔續江戸砂子一〕江府名產　井近在近國

岩槻葱　莖ふとく白根おほく、青みすくなし、甚甘味也、當所關東の葱の佳品とす、

〔張州府志二十四海東郡〕土產　大宮葱　出神守及高臺寺等村、其莖肥白脆美、以鬻四方、

〔日本書紀十五仁賢〕六年九月壬子、遣日鷹吉士使高麗、召巧手者、是秋、日鷹吉士被遣後、有女人居于難波御津、哭之曰、於母亦兄(オモニモセ)、於吾亦兄(アレニモセ)、弱草吾夫(ワカクサノアガツマ)何怜矣(ハヤ)、〇註略　哭聲甚哀、令人斷腸、菱城邑人鹿父、鹿父人名也、俗呼父爲柯曾、聞而向前曰、何哭之哀甚若此乎、女人答曰、秋葱之轉雙(アキヤイヤフタ)、雙重也、納(コモリ)可思惟(オモフ)矣、〇下略

〔言經卿記〕慶長十年十二月三日癸卯、東寺寶輪院ヨリ眞言相尋書狀有之、〇中略

一葱之事、佛部へは、御食以後、口手を漱、御看經不苦候、但天等部へは、三日を隔御行水候て、淨衣を著し可有御念珠候、淨衣は淸淨の御小袖たるべし、五辛共に儀同前之事、

一明王部へは、五辛食後御行水候て、即時御念珠不苦事、

〔梅園日記四〕吹葱

小兒の葱を吹ことは、淸朝にてもするなり、夜譚隨錄に、某領催の一條に、啾啾作聲、如小兒吹葱然と云り、明朝にてもあり、明良記に、武宗在宮中、偶見黃葱、實氣促之作聲爲戲、宦官遂以車載進御、葱價從貴數月、また宋の時、蘇軾が東坡集被酒獨行云々の詩に、總角黎家三小童、口吹葱葉送迎翁と見えたり、ふるく

るべし、夏わけぎもうゆる法前に同じ、灰糞を多く用ゆべし、是は春に成て分てうゆべし、四五月さかへて六月枯る、是根土中にありて、春に成て新葉青く出て夏さかゆ、春葱にくらぶれば、細く味も劣れり、蕎麥切にいれては、是にしく事なし、三月分てうゆべし、かりぎは韭のごとくうへ付にして、年中かりとり、灰小便をかけをくべし、夏葱よりなを細し、

葱利用

〔宜禁本草乾五菜〕葱白（ヒトモジ） 辛平可作湯、主傷寒々熱、出汗、中風面目腫、喉痺、安胎、歸目、除肝邪氣、安中、利五臟、益目睛、殺藥毒、根鬚主傷寒頭痛、葱涎汁、平温主瀉血、葱實、辛温、明目補中、大抵發散爲功（白冷青熱）、傷寒用不得有青、益精、多食昏人神、發疸、動氣、出汗、冬月不宜多食、虚人不可、同蜜食、殺一切魚毒、治瘡中有風水腫疼、止衄、利小便（少食則得可作湯飲、多食則氣上衝五臟閉絶、） 正月生葱、發面上遊風、胎動腰痛搶心下血、葱白濃煮汁飮之、

〔延喜式大膳三十二〕園韓神祭雜給料（春冬並同）

葱二斗

葱產地

〔毛吹草三〕武藏 根深 美濃 宮代根深

〔本朝食鑑葷辛三〕葱

葱種不宜關西之地、而江東處處最好、野之下州梅澤之冬葱、白根肥長、味甘美、爲江東第一、故佐野足利日光及上野處處次之稱佳、

〔和漢三才圖會九十九葷草〕葱

下野州梅澤、濃州宮代之葱白（ネブカ）、其白處近尺、長於葉也、上（○上恐下誤）野鹿沼產亦良、近頃畿內出夏根葱、肥大無異於冬葱、

〔雍州府志六土產〕葱 處々出、然此菜幷胡蘿蔔菠薐菜者、東寺幷油小路南不動堂邊之產爲宜、

〔浪花の風〕葱は宜し、江戸產よりもいづれも柔らかなる方なり、江戸の如き强きものあることな

三葱とて、にらは四本、葱は三本づゝといへども、大葱は子さかざるゆへ、三本は少し、又うゆる時、がんぎの底に、小便をうちたる灰を敷てうゆれば、よくさかゆるなり、うへ付てほどなく有付ものなれば、熊手にて間をかきあざり、草少もなくすべし、有付て後、五七日に一度小便を根にそゝぎ、折々間をかきやはらげては、小便をかくべし、白みの長くみ事にて、味のまさらん事を好まば、地深きよき畠を、がんぎを一尺あまり深くほり、其間二尺餘りにして能苗をゑらび、一かぶに四五本、かぶの間を六七寸ばかりにうへ、がんぎの底にて、根に土を二三寸ばかりもかけ、よく有付て後、根に小便を少そゝぎては、土を一寸餘りかけ、又五六日過て小便をかけて、前のごとく土をかくべし、凡五六日に一度づゝ、かやうにし、十度も其上もかけて、六七十日に餘りては、がんぎのみぞを皆うづみ、其後も猶根に小便をそゝぎ、少づゝ土をよせ、後にはねぶかの根、却て次第に高くなる様にすべし、凡園菜にかくる小便は、久しく桶に入おきて、次第に久しきより用べし、念を入かくのごとくし、せん／＼に土をよせ、小便をかくれば、勝れたる能地にては、白み一尺四五寸程も有、○中略

わけぎ、是に春と夏との二色あり、又かりぎとて細くして、韮をかるごとく、度々かりて用るものあり、先春葱をうゆる事、是は三四月には、葉は枯てつぶたちたる根、土中にあり、夫をほり出し、其中にて實りのよきを日に干、よく干たる時、ふごなどに入て、火をたく上につり置、七八月畦作りし、是もがんぎを少深く切、大葱よりは少しげくうへ、糞水を幾度もそゝぎ、中うち芸り、畦中をきれいにしてをくべし、是をわけぎと名付る事は、糞養手入によりて、段々いか程わけ取ても、又もとよりもしげりさかゆる故なり、又秋うへて十月苗よくしげりさかへたるを、悉くほりおこし、一かぶを二つ三つにも見合せ分て、畦作り右のごとくしてうへ、灰を多くかけ、糞水をさい／＼そゝぎ、手入をよく／＼して、春段々分取べし、正二三月の間、いか程分とりても、又々さかへしげる事かぎりなし、三月盡て枯て根に入ものなり、葉あかく成を、践付をきて、根よく入たる時、たねにと

取べし、二三日も筵などおほひ、少むしをきて取出し、日に干してうちとるもよし、苗地の事、旱にいたまざる物かげのしめり氣ありて、少ひきめなる細沙地をよくこなし、糞をうち乾しさらしをきて、四月蒔べき前、畬も細かにこなし、塊ちりあくたなど、少もなくして、畦のはゞ三尺ばかり少深くがんぎを切、さて河の細沙と、灰とに、小便をうちさらし置たるにたねを合せ、をよそ一畝の畠ならば、たね三升ばかりの積りにて蒔べし、がんぎは間をいかにもせばく切べし、生そろひては、小き熊手にて、畦の高き所を、かるくかきあざり、草少もなくしをき、旱せば、水を畦の溝より夕方入て、曉は落すべし、水の便りなき所ならば、高さ一尺ばかりに棚をかき、筵にてもこもにても、又は蘆すゝきのすだれにても、おほひて日をふせぐべし、又四月たねをまく時、がんぎを深く切、鹽氣のある沙糞などを下にしきて、たねを蒔、たなおほひ少厚くしをきて、上よりもわらの灰をおほひ置たるは、少の旱にては、かれざる物なり、又四月たねをもみ取て、よく肥しこしらへ置たる苗地に、其まゝ早く蒔たるは、早く根にも入ふとるゆへ、六月極熱の時分、上は少々痛めども、大かた根まで枯る事はなき物なり、隨分手をつくし早く蒔て、つゆの中によき程さがへふとれば、大概のかはきたる地にても、日おほひなくて苦からず、又葱たねは、蒔時分うるほひなければ生りかぬるゆへ、うるほひを見合せて蒔べし、又蒔時五穀を何にても炒て、たねと少合せてまけば、よく生る物なり、同じく移しうゆる地の事、此類何れも細沙の肥深き地よし、ねばく堅き土に宜からず、地を深く耕し、糞を多くうち極て干晒し、數遍かきこなし熟しをきて、七月中旬八月初め、うるほひを得て、苗を取うゆべし、大葱はうへて後、小便を度々そゝぐべし、婦人糞或粉糞の類みないむ、又はちりあくたなど、少も畦中へ入べからず、凡て小便の外の糞を甚いむ物なり、畦のはゞ三尺五寸四尺ばかりにして、がんぎを一尺餘りに極て深く切、苗の大小をゑりそろへ置、四五本を一手にとりて、一かぶとし、六七寸間を置て、三尺五寸の畦ならば、五かぶ程うゆべし、四韭、

葱栽培

樓。葱。ハヲランダネギ、一名ヤグラネギ、マンネンネギ、サンガイネギ、奥州南部ニ多シ、何レノ地ニ移シ栽ユルモ繁茂シ易シ、葉ハネギヨリ肥大ナリ、當中ノ葉梢ニ短小葉多ク聚リ生ジ、又其葉上ニモ短葉生ジ、三重ニモ七重ニモナル、其短葉ノ本ニ根アリテ鬚ヲ生ズ、地ニ移シテ生ジ易シ、又根旁ニモ嫩苗ヲ多ク生ジ分栽スベシ、

〔一話一言二十三〕樓。葱。

樓葱　一名龍瓜葱、和名マンネンネギ、又サンガイネギトモ云、救荒本草曰、樓子葱、苗葉根莖倶似葱、其葉梢頭又生小葱四五枝、疊生三四層、故名樓子葱、不結子、但掐下小葱栽之便活ト、此物葉ノ末ニ根ヲ生ジ、又葉ヲ出スコト、覇王樹ノ枝ヲ出スガゴトシ、甚異品ナリ、東都希ニアリ、其由テ出ル所未詳、壬午主品中予具之、(物類品隲卷四)

予(○太田覃)去年玉川のほとり、橘樹村百草村の一農家にて、此樓葱を見たり、土人に名を問へば、カルワザ葱といふと答へしもおかしかりき、ことしはからずも此名を正す事を得たり、讀書の一歲今にはじめず、(庚午四月既望)

〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃

營葱一段、種子四升、苗一千二百把、總單功八十七人半、耕地三遍、把犂一人半、馭牛一人半、牛一頭半、料理平和一人、畦上作二人、糞二百十擔、運功卅五人、下子半人、(八月)殖功廿人、(二月)芸三遍、第一遍十人、第二遍九人、第三遍七人、

〔農業全書四菜〕葱(和名きと云、きは一字なる故、後世に、ひともじと云、わけぎ、かりぎ、れぎなど云も、本名きと云故なり、)

葱は冬を大葱と云、春夏を小葱と云、春夏葱は糞培手入次第に、いか程科の内を分取ても、又もとのごとく數多くさかゆるゆへに、わけぎと名付るなるべし、大葱はたねを取べき分は、根のふかきを好まず、大かたに培ひ、よき程に肥しをき、三月よく實り、たねの黑き時取てよく干し、もみて

葱種類

可用、本邦正月朔旦、以冬葱供雜煮之具、呼稱福主、然辟邪之故乎、凡葱雖有冬春二種、實一種、不可過二時種、但近世田夫以八月彼岸下種、翼年自五月迄九月采葉、自九月迄來春正二月采根、卽白根而舊根復生葉、年年八月下種如前法、則平生無絕矣、〇中略一種俗有稱和計岐者、略似加利岐、而形圓色淡、莖根柔滑不甚臭、四五月採之、六七月生花實、采收至春蒔之、又山野平原有自生者、人未采之、

〔本朝食鑑　三華和異同〕葱　葷辛

冬葱慈葱上官葱者一物、而本邦之冬葱也、漢葱木葱一物、而本邦之春葱也、凡葱一名芤草、中有芤、芤脉亦象之、葱之初生曰葱針、葉曰葱靑、衣曰葱袍、莖曰葱白、葉中涕曰葱苒、諸物皆宜、故曰菜伯和事、蘇頌謂、龍角葱一名羊角葱、此非別種、沃地所生之老葱也、

〔和漢三才圖會　九十九葷草〕葱　芤　和事草　菜伯　鹿胎　和名紀　俗云比止毛之、又云祢布加、言心根深也、〇中略

按葱葉圓長無枝、故呼名一文字也、蓋冬葱漢葱本此十月中下種、初生葉細如針、正月芟葉、和鱠和醋未嘗食之、再三可芟、故俗呼曰芟葱、夏月葉硬不可食、所謂漢葱是也、芟葱稍長者、八月可移種、灌水培養則肥盛、莖根長白色、俗呼曰根葱、又名根深、經霜則柔軟、堪煮食、味甚甘美、溫能除寒氣、所謂冬葱是也、四月葉耑圓脹、靑白色、似花而不開、中有細子、如雞頭子、七月熟時取之、十月種之成芟葱、一物而如二種、

〔重修本草綱目啓蒙　十八葷辛〕葱

集解、冬〇葱〇ハワケギト呼ブ、オホ子ギヨリハ葉細シ、實ヲ結バズ、故ニ苗ヲ分テ栽ユ、一名科葱鎭江府志

大葱、群芳譜註大莟葱、本草彙言

漢〇葱〇ハカリギト呼ブ、一名キナヘ、佐渡コレモ葉小ナリ、夏月刈テ食用トス、刈レバ愈盛ニ茂ス、夏葱ナリ、五月葱ト云ト、大和本草ニ見ヘタリ、コレニハオホ子ギト同ク花實アリ、一名小葱、群芳譜註夏葱、同上又オホ子ギヲ刈テ食フモカリギト云、同名ナリ、俗誤テカレギト呼ブ、

ふ、關東にてねぎといふ、ねぶかとは根ぶかく土に入こゝろ、胡葱(あさつき)は淺き葱の意、根深(ねぶか)に對したるの名なるべし、つは助字なり、和名きといふ、故に一文字と云、分葱(わけぎ)はわかちとる義、刈葱(かりぎ)は刈とる義とぞ、又ひともじを詠せし歌に、

引見れは根は白糸のうつぼ草ひともじなれど數の多さよ

〔倭訓栞前編 七〕き○中略　葱をよむは氣(いき)の義也、根葱、分葱、刈葱など稱せり、根を賞すべく、分て採べく、刈て用うべきの名也、

〔倭訓栞前編 二十二〕ねぎ○中略　葱をいふは本名きにて、根を賞するものなるをもて、根葱といへる也、和名抄に冬葱ふゆきといへる是なるべし、ねぶかともいふ、根深の義也、禁裏女中のいふは大根也とぞ、

〔倭訓栞中編 二十一〕ひともじ　俗に葱をいふ、きといふ、一文字の義なり、今專ら夏葱をいふ、かりきともいふ、刈葱の義、科葱なりといへり、春葱をわけぎといふ、葉をかきて用う、漢葱なりといへり、禁裏にうつぼ草といふ、

〔七十一番歌合 中〕四十番　左　葱うり

紅葉せで秋も萌黄のうつぼ草露なき玉とみゆる月哉

戀といふ一もじゆへにいかにしてかきやる文のかず盡すらん

〔本朝食鑑 三 葷辛〕葱 古訓紀、今訓禰岐、又曰比登毛志、

釋名、冬葱、源順 凍葱、上同、順曰、葱有冬春二種、冬葱和名布由木、凍葱即冬葱也、必大(平野)按、今亦有冬春二種、春葱初生如針、俗訓加利岐、

集解、春葱種子、春末開花成叢、青白色、其子味辛色黑、有皺文、文作三瓣、收取陰乾、勿令浥鬱、可種可栽、初生葉細如針、根亦細白、稱加利岐、可為羹、可生食、生食和醋味噌則彌好、至五六月、莖粗硬如木、不耐食之、冬葱者無子、移根、根有白莖著衣、植之生黃青芽、芽葉及白根、柔細而香、經冬至春、其味尤佳、入藥

〔箋注倭名類聚抄 九菜蒜〕本草和名凍葱在葱實條、別無和名、按凍葱即今食用葱、非別種、詳見上條、不由岐不知斥何物、

〔類聚名義抄 八艸〕葱葱下正、歛音聰、キ、ナキ、ニラ、ヒル、ツキ　冬葱フユキ

〔伊呂波字類抄 幾植物附植物具〕葱音忽葷菜　苳同　葱實　山葱　苳仁語古百反　胡葱　興渠　倉蒿已上三名出蘇名苑　凍葱冬不死　漢葱冬葉死　葱白冷　葱苒莖中涕也、已上六種出陶景注　薤葱冬根不死　沙葱莖葉皆細、已上出崔禹

鱗葱味甘　灊葱味辛　細葱温、已上三種出七卷食經　波蘭出蘇名苑　時空停已上キ、出五金粉藥決

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一き　ひともじ

〔饅頭屋本節用集 比草木〕葱ヒトモジ

〔易林本節用集 幾草木〕葱花ギボウシ　同葱ソウ　〔同 比草木〕葱ヒトモジ　同葱フウ

〔日本釋名 下草〕葱　きとはきたなき也、其臭くさくきたなし、ひともじと云は、葱の訓きの字一字なるゆへ名づけたる也、

〔東雅 十三穀蔬〕葱キ　倭名鈔に、葱はキ、冬葱フユキといふ、漢語鈔に島蒜はアサツキといふ物は、本朝式文にも是を用ゆ、また水葱はナギ、一に蘇菜といふ、今按ずるに、蘇宜作薮、唐韻に薮は水菜可食也、と見えたりと註したり、キといふ義並に不詳、葱の類を呼びてキといふは總名なり、今俗に子ギといふは、其根歛ふべきをいふなり、ヌケギといふは、分種しをいふ也、カリギといふは、刈たるをいふ也、島蒜讀てアサツキといふは、日本紀に島の字よむでアサキといふは、韓國の方言と見えたり、さらばキといふも、もと是彼方言に出しも知るべからず、或人の説に、蒜をヒルといふは、猶晝といふが如し、されば其語を反してアサといふ也、アサとは朝也、ツは詞助也、キは即葱也といふなり、いかにやあるべき、ナギは天智天皇の御代の童謡を始めとして、古歌にも亦よめり、其義は不詳、橋のギボウシといひ、草花にギボウシといひ、又輦に葱花といふ制あるも、皆此物によりて云ひしとなり、

〔鹽尻 三十〕葱は和名紀きの一字を名とする故、一文字(ヒトモジ)とよべり、

〔物類稱呼 三生植〕冬葱ねぎ　關西にてねぶかと云、近江にてひともじと云、ひともじは通稱なれ共、常に用ゆる所をさして

葱名稱

紫色、正二月比花咲ク、其根ヲトリ葛(クズ)ノ如ク水飛シテ水ニテ子リ餅トナシ食フ、葛ヨリハ色白ク甚ダミゴトナル物トナリ、土人專ラ久痢ニ用ヒテ、益アリト云フナリ、
光生按ズルニ、カタクリ江東所々ニ生ズ、一名初ユリ、一名姥ユリ、一名ブンタイユリトモ云、正月頃花咲ク、故ニ初ユリト稱ス、花萎(シボ)ミテ後ニ葉ヲ生ズ、花ノトキ葉ナキ故ニ姥ユリトモイフ、葉ノ形チ車前草ノ葉ニ似タリ、葉ノ面ニ黑キ斑アリ、是レ萬葉集及ビ新撰六帖ニ詠ズル所ノ堅香子ト云フモノナリ、或曰、本草紫參ノ下ニ載スル旱藕ナルベシ、

〔武江産物志 藥草〕道灌山ノ産　山慈姑(あまな)

〔本草和名 十八菜〕葱實、山葱一名茖、(仁諝音古百反)胡葱一名興渠、一名傖蒿、(已上二名出雜名苑)凍葱、(經冬不死)漢葱、(冬死)葉葱白、(冷)葱莗、(葉中涕也、已上六種出陶景注)獲葱、(冬根不死)沙葱、(莖葉皆細、已上出崔禹)䕲葱、(味甘)澀葱、(味辛)細葱、(温、已上三種出七卷食經)葱一名波蘭、(出雜名苑)一名時空停、(出五金粉藥決)和名岐、

〔倭名類聚抄 十七菜羹〕葱　唐韻云、葱(音聰)葷菜也、本草云、葱莖冷、葉熱、(和名紀)蘇敬注云、有數種、山葱曰茖、(古百反)

要抄云、生葱不可合食鯉魚、成病、

〔箋注倭名類聚抄 九菜蔬〕和名依輔仁、仁賢紀、新撰字鏡同訓、按今俗呼爾伎、又爾不加、以貴白也、又呼比止毛之、卽一文字、以單呼岐也、○中略 按外臺秘要引救急柴胡湯方中有葱白根、注云勿令有青處、青卽熱、白卽冷、卽此義、○中略 說文蔥菜也、證類本草引唐本注云、人間食葱、又有二種、有凍葱、卽經冬不死、分莖栽蒔而無子也、又有漢葱、冬卽葉枯、食用入藥、凍葱最善、則知今人所啖凍葱也、葱見內膳司大膳職式、證類本草中品引、茖下有葱字、本草和名云、山葱一名茖、無葱字、與此同、按爾雅茖山葱、蘇氏蓋依之、無葱字、似是、說文茖艸也、郭璞曰、茖葱細莖大葉、邢昺曰、生山中者名茖、蜀本圖經云、茖葱生於山谷、李時珍曰、茖葱野葱也、山原平地皆有之、開白花、結子、如小葱頭、今呼行者仁、无仁久、

〔倭名類聚抄 十七菜羹〕冬葱　廣志云、葱有冬春二種、(冬葱、和名布由木、)蘇敬注云、有凍葱、凌冬不死充食、(今按凍葱卽冬葱也)

と見ゆ、此草昔は堅香子といふ、一名猪の舌ともいふ、萬葉集第十九 天平感寳元年五月十二日、於越中國主館、大伴宿禰家持作」之攀」折堅香子草花」一首、○歌略 萬葉目安に、堅香子花は、つゝじに似たる草なりとて、

小車の諸輪にかくるかたかゞのいづれもつよき人心かな 道音 新撰六帖には堅香子を讀み誤りて樫とこゝろえ、木部に入れて、萬葉下句を寺井のうへの堅かしの花と出だせり、此草の形葉は、和大黄の初生、または車前葉のごとく、一根にたゞ二葉生じて相對す、其葉に淡紫色の斑點あり、山生は四月頃葉間に莖立ちて、莖頭に六瓣の紫花を開く、長五寸許、徑一寸五分許、唯一莖一花のみ、俯してひらく、百合花のごとし、瓣の末は上に翻る、希には白花もあり、根は白慈又は水仙のごとし、北國能登邊にては、此根を採り煮熟して食に供す、所在寒國に多く生ずる物なれど、今は諸國往々にあり、京都近邊は、叡山雲母坂篠原の中に多く生ず、嫩葉を摘みて漬物となし菜に充つ、又播州神出山、雄子尾、雌子尾の山中に多くある事、播州名所圖會に載せたり、此根を採りて葛を製するごとくにし、餅とするを堅子(カタコ)餅といふ、越前にて多く製す、南部にての製、東府へ獻上せらる、又大和宇陀葛屋藤助よりもおなじく獻上す、此草諸國方言多し、京師にてカタユリとも、初ユリともいふ、東府にてカゞユリとも、フムタイユリともいふ、佐渡にてカタハナといふ、延命長生の語より事起りて、危篤の病人一椀に服餌する風俗となり、遂には進獻供用の物となるも奇ならずや、

〔笈埃隨筆八〕雜說八十ヶ條

奧州南部のカタクリは公儀へ獻上也、津輕の中別して寒國に生ず、故に熱暑を避る、其功を能人知りて、今賣物にあり、

〔採藥使記上奥州〕重康曰、奥州南部ニカタクリト云フ草アリ、其形チ百合ニ似タリ、花モユリニ似テ、

テ厚ク、白綠色面ニ紫斑アリ、嫩根ノモノハ只一葉ナリ、年久モノハ二葉トナル、二葉ノモノハ二三月兩葉ノ中間ニ一莖ヲ抽ヅ、高サ五六寸、頂ニ一花ヲ倒垂ス、大サ一寸半許、六出淡紫色、蕾ハ紫色深シ、形山丹花ニ類シテ瓣狹細、ソノ末皆反卷ス、又稀ニ白花ナルモノアリ、花謝シテ實ヲ結ブ、大サ三分許、形圓ニシテ三稜アリ、ソノ色亦白綠ナリ、根ノ形葱本ニ似テ白色性寒ヲ喜、故ニ東北ノ地方ニ產スルトコロノ者、苗根最肥大ナリ、土人ソノ根葉ヲ採リ烹熟シテ食フ、又根ヲ用テ葛粉ヲ造ル、法ノ如ク製シテ粉ヲ取ル、甚潔白ニシテ葛粉ノ如シ、餅トナシテ食フ、カタコモチト呼ブ、奥州南部及和州宇陀ヨリ此粉ヲ貢獻ス、カタクリト云フ、古說ニ此草ヲ旱藕トスルハ穩ナラズ、

〔萬葉集十九〕攀折堅香子草花歌一首
物部能、八十乃媳嬬等之、挹亂、寺井之於乃、堅香子之花、

〔萬葉集抄十九〕此歌の落句、古點にはかたかしのはなと點せり、是をかたかこの花と點すべし、かたかしと點ずれば、樫の木にまがひぬべし、端作の詞に、堅香子草花とかけり、草と聞えたり、かたかこをば、又はゐのしりといふ、春花さく草也、その花の色はむらさきなり、

〔茅窻漫錄上〕カタクリ
病人飲食進みがたく、至りて危篤の症になると、カタクリといふ葛粉のごとくなる物を、湯にたて、飲ましむ、近歲一統の風俗となれり、最初何者のいひ出だし、事にや、是は本草綱目山草類王孫の釋名に出でたる、旱藕といふ草の根を製したるものにて、東國北國より多く出だし、奥州南部加州山中及越前より出づる物最上品なり、唐書方技傳に、開元末、姜撫言、終南山有旱藕、餌之延年、狀類葛粉、帝作湯餠賜大臣、右驍衞將軍甘守誠能銘藥石曰、旱藕牡蒙也、方家久不用、撫易名以神之、爾とあり、餌之延年といひ、陳藏器の說に、長生不飢黑毛髮といふにより、かゝる風俗となりし

甘シ食スベシ、人ヲ補益スト云、萬葉十九、攀ニ折堅香子(カタカゴ)草花ニ歌云々、古抄云、香子ハ猪舌トモ云、春紫色ノ花サク、今按是カタコナルカ、新撰六帖ニモカタコノ歌アリ、

〔重修本草綱目啓蒙山草入〕山慈姑　アマナ　トウロウバナ　トウロン　ムギクハイ麥地ニ生ズル故名ク　ナンキン　マツバユリ江州　ムギグハイ根ニ皮アル故名ク、以上京、　アマツボロ同、鳥羽村、　アマイモ同上、加賀、　ズイセン同家花　ハルヒメユリ同上　ステッポウ筑前　カタスミラ肥前　スミラ同上　ツルボ丹波　ウグヒス攝州　一名山茨菰百一選方　金燈籠醫燈續焰、古今醫統、壽世保元、　馬[illegible]乙串本草彙言　紅燈籠附方　鹿蹄正字通

原野陽地ニ生ズ、正月舊根ヨリ葉ヲ出ス、年ニヨリ十二月ニモ出ス、大葉小葉アリ、土地ノ肥瘠ニ因ル、別種ニアラズ、大葉ハ長サ一二尺許リ、水仙ノ葉ノ如シ、花モ小ナリ、小葉ハ二三寸許リ、綿棗(サンダイ)兒(ガサ)葉ノ如シ、花モ小ナリ、又一種花ノ最小ナルモノアリ、一根一葉ノ者ハ嫩根ナリ、二葉ノ者ハ老根ナリ、ミナ葉ハ白色ヲ帶ブ、根ノ老タルモノハ、二葉ノ中間ヨリ一兩莖ヲ抽ヅ、高サ五六寸許、其端ニ細小葉二三ヲ對生シ、上ニ一花アリ、肥地ノモノハ二三花、大サ七八分、六瓣、白色外ニ深紫條アリ、日光ヲ得テ開キ、夕ニ至レバ收ル、中ニ黃色ノ蘂アリ、數日ノ後瓣脫ス、ソノ實三角大サ二三分、ハッユリノ實ニ似テ四月ニ至リ苗枯ル、根ハ圓カニ小クシテ澤蒜(ノビル)ノ根ノゴトシ、堀出セバ外ニ白キ綿アリ、根ヲ包ム、駿州ニハ淡紅花ナルアリ、此モ花瓣ニ紫條アリ、和州ノ下市ニハ黃花ナルモノアリ、苗ノ高サ八九寸、三葉許互生シ、莖ノ末ニ花多ク簇生ス、外ハ綠色內ハ黃色、其中ニ黃蘂アリ、開テ大サ五分許、紫金錠ハ醫學入門、萬病回春、外科正宗、卽附方ノ萬病解毒丸ナリ、ソノ主藥ハ此山慈姑ナルニ、今石蒜ヲ代用ルモノ誤ナリ、藏器ノ說ニ葉似ニ車前ト云ハ車。前。葉。山。慈。姑。ナリ、和名ハツユリ、カタカコ萬葉集、猪舌萬葉抄、香子同上、カヽユリ江戶ブングイユリ、カタバナ佐州カタクリ、南部ゴンベイル、日光ゴンベイロウ、同上カタグリ、カタコ、カタユリ、深山ニ多ク生ズ、葉ノ形萎蕤(アマドコロ)葉ニ似

シテ大ナリ、卽本草彙言ノ象山貝母ナリ、
又和產ノ貝母アリ、深山幽谷ニ生ズ、高サ僅ニ五六寸、苗葉ノ形小葉ノ貝母ニ似テ細小ナリ、莖葉共ニ茶色ヲ帶ブ、二三月花ヲ開ク、ソノ花必ズ橫ニ向フテ倒垂セズ、根ノ形相似テ小ナリ、四月ニ至テ苗葉共ニ枯ル、阿州深山ニ產ス、

〔草木育種後編 下藥品〕貝母 本草 和名は、くり、和名抄 一名おひ、字鏡 俗にはるゆりといふ、早春より芽を出し、二月の比花を開く、畦を作り秋月糞汁を澆ぎ置て、冬月根を堀り出し、大なるを製し、小なるは畦へ植べし、此品享保九年三月、唐山より始めて日本へ献せし時、御醫師へも鑒定を命せられたれども知れず、翁の門人植村某をして將翁先生 ○阿部 に審定せしむ、翁是は貝母なりと云、官始めて舶來の品よく審定せりとて、卽其生根を賜はり培養せしむ、以後本邦に此藥ありて、當今隨地養ふて、或は早春の插花にも用ゆ、

〔剪花翁傳 一正月開花〕貝母 花小さく、色綠み黃み白み相和せしごとくにて、赤黑き鹿の子の斑入なり、開花正月上旬、方三步陰、花のためには日向よし、されど夏月旱を厭へり、地一步濕、土塵土、肥淡小便、水七步にして寒中まで澆ぐべし、入寒より油粕を少し入てよし、分株移十月よし、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥
美濃國六十二種、○中略 貝母三斤、

山慈姑

〔書言字考節用集 六生植〕金燈花 山慈姑花也、山慈姑 又作山茨菰、時珍云、葉如水仙而狹、根如水慈姑、花如燈籠而朱色、金燈草 又云、無義草、

〔和爾雅 七草木〕山慈姑 金燈、鬼燈檠、鹿蹄草、並同、

〔大和本草 九雜草〕山慈姑 若水云、今多以鐵色箭及石蒜爲山慈姑俱非是、
カタコ 高二尺許、莖紫色葉面ニ有黑點、花カザグルマノ如シ、紫色ナリ、比叡山ニアリ、正月ノ末開花尤美、根ノ形芋ノ如ク、又蓮根ノ如シ、若水云、本草紫參下ニ出タル旱藕ナルベシ、其粉如米味

ノ葉ニ似タリ、一科ニ叢生ス、老根ノ者ハ春圓莖ヲ抽デ高サ一二尺許、二三葉相對シテ生ズ、漸ク狹細ニシテ石竹葉ノ如シ、梢葉ハ端ニ一線アリテ卷曲ス、三月ニ莖ノ末葉間ゴトニ花ヲ倒垂ス、形風鈴ニ似テ小ク白頭翁(オキナグサ)花ノ如シ、長サ七八分、徑リ六分許、六瓣、外ハ淡黃色、内ハ紫色ノ網ノ紋アリ、實ヲ結ブ者稀ナリ、夏ニ入テ苗枯ル、歲ゴトニ子根繁殖ス、實ヲ結ブモノハ根枯ル、實ハ百合實ノ形ノ如ニシテ八稜アリ、稜ゴトニ羽起ル、内子輕薄ニシテ百合子ノ如シ、嫩根ハ小クシテ半夏ノ如シ、藥用ニ佳ナリ、之ヲ川貝母ト云、老根ハ大ニシテ水仙、或ハ大蒜(ニンニク)ノ如シ、

集解、頌曰、似蕎麥葉云云、是ハ蕎。麥。葉。貝。母。ナリ、山中ニ多シ、俗名ガワユリ、京エイザンユリ、同上テングユリ、同上バカユリ、ミヅユリ、テズミユリ、ゴボウユリ、筑前シカヽクレユリ、同上ウバユリ、阿州勢州、ヤマカブラ、加州カシハユリ、江州メギワ、河州メグワイ、同上ハユリ、濃州、若州、サルタヒコ、ウバガユリ、勢州ヤマカブ、越後ギワイ、播州ヤヽ、備後ヤマグワイ、勢州ソノ葉初出小ナルモノハ蕎麥葉ニ類ス、老葉ハ太ニシテ牛蒡ノ葉ノ如クシテ毛ナシ、長サ一尺許、厚クシテ光澤アリ、又葉ノ紋脈紫色ナルモノアリ、春宿根ヨリ一尺許ノ圓莖ヲ生ジ、ソノ末ニ五七葉密ニ互生ス、對生ニハ非ズ、又其上ニ長莖立ノビテ、六七月莖梢ニ花ヲ開ク、形麝香百合ノ如シ、六瓣ニシテ長サ三四寸許、横ニ向テ開ク、外ハ白クシテ微綠色ヲ帶ブ、内ニ深紫色ノ斑點アリ、花ヲ開ク時、葉巳ニ枯テナシ、故ニウバユリノ名アリ、肥地ニ植レバ高サ五六尺許ニ至リ、花モ多ク開ク、根ハ卷丹或ハ百合ノ根ノ如シ、野人取リテ食用トス、故ニ山カブラノ名アリ、實ハ百合實ニ同ジ、今此草ヲ象山貝母ト爲モノハ非ナリ、

增、一種大。葉。ノ。貝。母。アリ、初春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、脚葉ハ小葉ノ者ト同ジクシテ、正中ヨリ莖ヲ生ズルコト、甚ダ太クシテ、高サ二三尺、莖ニ葉互生シテ梢ニ至レバ二葉或三葉對生ス、梢葉ハ漸ク細ク、瞿麥葉ニ似テ末ハ糸ノ如シ、莖頂ニ四五輪モアツマリテ花ヲ開ク、形色共小葉ノ者ニ同ク

貝母

とくにながくのび立、花の色うす紫、三四月にさく、又六七月のころつぼみ出れば、九月まで花さきながめたへず、○中略此草人の手にふるゝをきらふ、手にて葉をなづれば、まがりくねるものなり、庭にうへ鉢にうへていさぎよし、

〔延喜式 三十七典薬〕諸國進年料雜藥
攝津國卌四種、○中略茹苺、○中略白皮各四斤、　伊勢國五十種、○中略茹苺卅二斤、○下略

〔新撰字鏡 草〕貝母於比。一云波。万。久。利。

〔本草和名 八草〕貝母陶景注云、形似聚貝子、故以名之、一名空草、一名藥實、一名苦華、一名苦菜、一名商草、一名勤母、一名茵、仁諝音莫耕反、又作蓷、一名商草、一名茖甍、已上二名出釋藥性、和名波。々。久。利。

〔倭名類聚抄 二十草〕貝母　陶隱居本草注云、貝母和名波々久里形似聚貝、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕爾雅莔貝母、郭注、根如小貝、圓而白、華葉似韭、鄘風載馳、言采其蝱、傳、蝱貝母也、正義引義疏云、蝱今藥草貝母也、其葉如栝樓而細小、其子在根下、如芋子正白、四方連累、相著有分解、蘇敬云、此葉似大蒜、圖經、根有瓣子黄白色、如聚貝子、故名貝母、二月生苗莖細青色、葉亦青、似蕎麥、葉隨苗出、七月開花碧綠色、形如鼓子花、時珍云、宜謂根狀如宜也、

〔藻塩草 八草〕和名少々　貝母はゝくさ

〔書言字考節用集 六生植〕貝母バイモ、ハヽクリ時珍云、二月生苗、似蕎麥、七月開花、形如鼓子花、

〔倭訓栞 中編二十波〕はゝくり　和名抄に貝母を訓せり、母栗の義、根の形栗に似て、母の子を抱く如し、今呼て編笠ゆりといふ、新撰字鏡に陽起石を訓ずるは、形狀の類したるをもてなり、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕貝母　ハ。ヽ。ク。リ。延喜式　ハ。ヽ。グ。サ。古歌　ハ。ル。ユ。リ。種樹家　ア。ミ。ガ。サ。ユ。リ。
一名瓦壠斑 物類品隲、事物異名、　空菜 藥性奇方　商草花 花鏡秘傳
漢種今諸國ニ多ク種ユ、丹後大江山ニハ自生アリト云、冬月ノ末宿根ヨリ葉ヲ生ズ、初生ハ卷丹オニユリ

〔頭註〕按、芪字彙補未詳、按疑爾雅本草並作蕁、

〔倭名類聚抄 草二十〕知母 本草云、知母一名兒草、（和名夜萬之）

〔箋注倭名類聚抄 草十〕本草又云、知母一名蚳母、一名蝭母、玉篇作蒊母、御覽引范氏計然作提母、按芪正字、知提假借字、蚳蝭莐皆俗字、時珍曰、宿根之旁、初生子根、狀如蚳蝱之狀、故謂之蚳母、陶注、形似菖蒲而柔潤、葉至難死、掘出隨生、須枯燥乃止、圖經曰、根黃色、四月開青花、如韭花、八月結實、禹錫按爾雅云、蕁莐藩、郭云、生山上、葉如韭、一名提母、

〔書言字考節用集 六生植〕知母（チモ）（一名地參、生山中、似菖蒲、）

〔物類品隲 三草〕知母 葉韭ノゴトク、長二三尺、中間莖ヲヌキ、穗ヲナシテ淡碧花ヲ開ク、實ノ長三四分許、內ニ三黑子アリ、三稜ニシテ扁ナリ、實ヲ植テ甚生ジ易シ、二三年ニシテ掘取ベシ、漢種享保中種子ヲ傳テ、今官園及世上多アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕知母 ヤマシ（和名鈔） ハナスゲ カラスヽゲ カラスノスヽキ 今ハ通名 一名孝梗（輟耕錄） 蕁芫（品字箋）

春舊根ヨリ叢生ス、葉ハ芒葉ノ如ニシテ狹ク厚クシテ深綠色、長サ二三尺、人ヲ傷ラズ、夏月叢葉中ニ莖ヲ起ス、高サ亦二三尺、ソノ端一尺許、小長花繁ク綴リテ穗ヲ作ス、淡紫碧色、後細莢ヲ結ブ、長三四分、內ニ三稜ノ黑子アリ、地ニ下シテ生ジヤスシ、又花ヲ開カズシテ莖上ニ零餘子（ムカゴ）ノ如キモノヲ生ジ、直ニ芽ヲ發スルモノアリ、莖ヲ斷テ栽レバ卽繁茂ス、凡子種ヨリ三年ヲ歷ルモノハ其根用ユベシ、根ハ皆橫生ス、形萬年青（ヲモト）根ノ如クニシテ痟橫文多シ、黃褐毛アリ、切レバ肉茶褐色、舶來ノ者ハ形肥大ニシテ鬚アリ、潤ナシ、上品トス、朝鮮ハ唐ニ同クシテ微ク短シ、和ハ形細長ク鬚ナクシテ潤アリ、下品トス、藥舖ニ鳶尾（イチハツ）根ヲ雜ルモノアリ宜シク擇ビ去ルベシ、

〔廣益地錦抄 六〕知母（ちい） 宿根より春生（はへ）、葉ほそながく、葉の色あざやかに青くながめ有、花形穗のご

〔倭名類聚抄草二十〕王孫　本草云、王孫一名黄孫、和名沼波利久、此間云豆知波利、

〔箋注倭名類聚抄草十〕蜀本注云、葉似及己而大、根長尺餘、皮肉亦紫色、時珍云、王孫葉生顚頂、似紫河車葉、

〔書言字考節用集生植六〕王孫草チハリ長孫、海孫、蔓延草、白功草、並同、

〔重修本草綱目啓蒙山草七〕王孫　ツクバネサウ同名アリ

東北州深山幽谷ニ生ズ、一根一莖、葉ハ百合サヽユリ葉ニ似テ薄ク縱文アリ、四葉莖端ニ攅生シテ傘ヲ張ガ如シ、又三葉五葉ヨリ七八葉ニ至ルモノアリ、ソノ上ニ一莖ヲ出シ、一花ヲ著ク、四出綠色内ニ金線八條長ク出、別ニ蘂アリ、

又一種延年サウト呼ブ者アリ、一名ヤクトウシ、ヤウラウサウ勢州ヤウラウグサ同上ホクボウギドクエン、キドクエン、タチアフヒ武州クルメキナ越後ミツバイチゴ同上ミツバアフヒ、ミツバニンジン、エンレイサウ、エレサウ花戸エレグサ阿州此草モ深山幽谷ニ生ズ、形モ相似テ大ナリ、葉ハ圓尖ニシテ細長ナラズ、三葉ゴトニ莖端ニ並ビ生ジテ傘ノ狀ヲナス、中心小莖ヲ出シ、花ヲ開ク、三瓣紫色或綠色或白色或粉紅色數品アリ、花大サ五六分、中ニ圓實アリ、六ノ紫蕊圍ム、ソノ實生ハ綠色熟ハ黑色、根ハ莪朮根ノ形ニ似テ白色味苦シ、和州村民乾シ貯テ傷食ノ藥トス、訛テエレンサウト呼ブ、市中ニ或ハ僞テ莪朮ニ充、或ハ唐蒅蘆ニ雜ユ、

知母

〔新撰字鏡草〕茹母山止己呂、一名野蓼、

〔本草和名草八〕知母　一名蚳母、仁諝音巨支反一名連母、一名野蓼、一名地參、楊玄操音所晉反一名水參、一名水浚、仁諝音私俊反一名貨母、一名蝭母、仁諝音匙一名女雷一名女理一名兒草、一名鹿列、楊玄操音辣一名韭逢、楊音九一名兒踵、一名雨木根、古眼反一名水須、一名沈燔、仁諝上音直臨反、正作茷、下音方袁反、一名𧛉、仁諝音徒南反一名旋母、一名提母、一名祗母、一名茹母、一名東行、一名枷母、已上六名出釋藥性一名明蓼、一名蓮母、出兼名苑和名也末止古呂、

山中陽地ニ生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズル時、筍狀ヲ成シテ出ルコト黃精ノ如シ、微紫色、苗亦直上セズ、長サ一二尺或ハ四五尺、形黃精ニ似タリ、ソノ莖黃精ヨリ粗大ニシテ三稜、本紫ニシテ末ハ靑シ、ソノ節紫黑色、ソノ葉互生ス、形長楕ニシテ細縱理アリ、質厚强ニシテ光滑ナラズ、白色ヲ帶ブ、又葉狹長ナルモノアリ、細葉ノ萎蕤ト云フ、倶ニ花實ノ形狀ハ黃精ニ異ナラズ、ソノ根白色橫行ス、長サ二寸許、年年增長シ一尺餘ニ至ル、竹節ノ形ヲナサズ、大サ小指ノ如シ、味甘ク生ニテ食フベシ、乾カスモノハ淡茶褐色ニシテ、滋潤透明ナリ、藥舖ニ貨ルモノ舶來アリ、奥州南部ヨリ出スハ最肥大ニシテ良トス、蒸熟タルモノアリ、誤リテ蒸黃精ト云フ、凡黃精萎蕤ノ形狀相似テ混淆シヤスシ、世人多ク誤リ認ム、宜シク二條ヲ參考シテ辨明スベシ、

增、一種圓葉ノモノアリ、城州白川山ニ自生アリ、誤テ圓葉ノ黃精ト云、苗ノ高サ五七寸、直生シテ生ズ、葉ノ形マルミアリテ厚ク黑ミヲ帶ブ、花ノ形尋常ノモノニ同ジ、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕萎蕤略〇中

鹿藥　ユ。キ。ザ。ヽ。サ。ウ。　一名延壽果通雅　鹿跑草同上　深山背陰ノ地ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ發ス、形狀萎蕤ニ似タリ、大小三種アリ、大ナル者ハ高サ二三四尺、中ナル者ハ一尺許、小ナルモノハ數寸、葉ハ萎蕤ヨリ柔薄ニシテ色深シ、花ハ三月莖梢ニ穗ヲナシテ簇生ス、白色大サ三分許、後圓實ヲ結ブ、大サ南燭子ナンテンノ如シ、城州和州ノモノハ、熟シテ綠黑色、甲州野州ノモノハ熟シテ赤色ナリ、夏ニ入ル時ハ苗枯ル、ソノ根ハ橫生シテ節アリ、黃精根ニ似タリ、長サ三五寸許、冬ヲ經テ枯レズ、

〔本草和名九草〕王孫　吳名ニ白功草、楚名ニ王孫、齊名ニ長孫、楊良兩反一名黃孫、一名海孫、一名蔓莚、一名黃民、一名牡蒙、已上二名出ニ陶景注一一名公草、出ニ釋藥性一和名奴。波。利。久。佐。、一名乃。波。利。、

鹿藥

王孫

蕤、據證類本草、女萎白字、萎蕤黑字、陶注云、按本經有女萎無萎蕤、別錄無女萎有萎蕤、而爲用正同、疑女萎、卽萎蕤也、惟名異爾、唐本注云、女萎功用及苗蔓、與萎蕤全別、列在中品、今本經朱書是女萎能効、墨字乃萎蕤之功、中品唐本先附有女萎、蘇注云、女萎其葉似白斂、蔓生、花白子細、荊襄之間、名爲女萎、亦名蔓楚、故蘇以女萎萎蕤爲二物也、李時珍曰、本經女萎、乃爾雅委萎二字、卽別錄萎蕤也、上古抄寫、訛爲女萎爾、古方治傷寒風虛用女萎者、卽萎蕤也、承本草之訛而稱之、諸家不察、因中品有女萎名字相同、遂致費辨如此、爾雅熒委萎、郭注藥草也、葉似竹大者如箭竿、有節葉狹而長、表白裏靑、根大如指、長一二尺可啖、陶注又云、其根似黃精、圖經云、三月開靑花結圓實、李時珍曰、其根橫生似黃精差小、黃白色、性柔多鬚、其葉如竹、兩兩相値、

〔本草辨疑　二〕萎蕤

今ノ世ニ黃精ト云モノ皆此萎蕤ナリ、藥家ニ賣モノモ黃精ニアラズ、京近邊所々山中甚多シ、唯黃精ハ希ナリ、花葉根共ニ能ク似テ、只根ノ大ニ節高ク黃ナル者黃精ニシテ、平直ニ節ヒキク長ク黃白ナル者ハ萎蕤ナリ、唐ヨリ來者アリ、形白芨ニ似テ細小ナリ、節高シ細小ニシテ、難見分トイヘドモ是眞ナリ、生ノ時ハ甚大ナレドモ、乾之トキハ細小ニナル者ナリ、

〔和漢三才圖會　九十二本山草〕萎蕤　葳蕤　萎蕤　女萎　萎香　委萎　熒(音行)　玉竹　地節　和名惠美久佐、一云阿末奈(○中略)

按、萎蕤河州金剛山之產良、其莖帶紫色葉似竹而厚、窄不對生而向上、花如風鈴狀、白色本末帶靑結子、

〔重修本草綱目啓蒙　七山草〕萎蕤　ヱミクサ(和名鈔)　アマナ(同上)　アマドコロ　カラスユリ　ジイ　ガヒザ・ハチムマ(阿州)
一名女草(述異記)　娃草(同上)　麗草(同上)　黃芝(發明)　豆應仇羅(本草鄉藥)

シテ光アリ、ソノ花亦小ナリ、根ハ竹葉ノ者ニ異ナラズ、唐種ノ黄精アリ、卽享保年中ニ渡ルトコロナリト云フ、ソノ形狀竹葉黄精ニ異ナラズ、惟ソノ葉互生シ、或兩葉相對シ、或五七葉相對スルモノ一莖ニ雜リ生ジ、紹興本草ニ圖スルガ如キヲ異ナリトス、是正精ナリ、藏器ノ說ニ、偏精功用不ㇾ如二正精一ト云、此ニ據ルトキハ唐種ト稱スルモノヲ上品トスベシ、和產ハ皆偏精ナリ、物理小識ニ、偏精ヲ萎蕤ト爲ハ非ナリ、此外品精猶多シ、

藥舖ニ販ク者舶來ナシ、皆和產ナリ、奥州南部ヨリ出ヲ上品トス、ソノ形最肥大ナリ、然レドモ多ク萎蕤ヲ混ズ、故ニ市人コレヲ擇ビ分チ、節アル者ヲ生薑手ノ黄精ト呼ブ、卽黄精ナリ、節ナキ者ヲ地黄手ノ黄精ト呼ブ、卽萎蕤也、又南部ヨリ蒸黄精ヲ出ス、黑色ニシテ味熟地黄ノ如シ、用テ果食ニ供ス、蘇頌ノ說ニ、蒸黄精ノコトヲ云フ、本草原始ニ、熟味甘甜堪ㇾ食、熟深黑色象二地黄一、有二二三岐一者、有二一二岐者一ト云フ是ナリ、熟ハ九蒸九曝スルヲ云フ、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

下總國卅六種、〇中略 黄精、〇中略 白薇各二斤、 越前國十八種、〇中略 黄精十二兩、〇下略

〔殿中申次記〕三月

一栗一籠、黄精一籠、例年進二上之一、仍御太刀被ㇾ下ㇾ之、 八瀨童子 私云、式日不ㇾ定歟、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產 黄精(なるこゆり)

萎蕤

〔倭名類聚抄草二十〕女葳蕤 拾遺本草云、女葳蕤一名黄芝、葳音威、蕤音汝誰反、和名惠美久佐、一云安麻奈、

〔箋注倭名類聚抄草十〕證類本草引二陳藏器一云、女萎萎蕤二物同傳、陶云、同是一物、但名異耳、又云、魏志樊阿傳、青黏一名黄芝、一名地節、此卽萎蕤、此所ㇾ引節二是文一也、按千金翼方、證類本草、皆作二女萎萎蕤一、本草和名亦同、故陳氏有二一物二物之辨一也、此女葳蕤似ㇾ當ㇾ作二女萎萎蕤一、而太平御覽引二吳普本草一云、女萎一名葳蕤、則恐拾遺本草有ㇾ作二女萎葳蕤一者、源君所ㇾ見本誤脫二萎字一也、又按本草上品題二女萎萎

〔書言字考節用集 六生植〕黃精(ワウセイ) 黃芝、野生姜、救窮草、太陽草並同　黃精(アマトコロ)　甘野老 俗字　黃精(サヽユリ)

〔和爾雅 七草〕黃精(ナルコユリ サヽユリ ワウセイ) 黃芝、菟竹、鹿竹、救窮草、龍銜、垂珠並同、

〔倭訓栞 中編奈十七〕なるこ 略〇中 黃精をなるこゆりと云も、花の形鳴籠をかけたるが如く、莖葉はゆりに似たり、大葉の物あり、寶鐸草とよぶは委蛇也といへり、

〔和漢三才圖會 九十二本山草〕黃精 略〇中 按、黃精 和名於保惠美、一名夜末惠美、形狀華和相似、而倭者味帶苦、出於河州金剛山者良、江州高島郡者次之、武州所澤又次之、

今所渡者多萎蕤也、藥肆取肥者爲黃精、瘦者爲萎蕤、又云、黃色節高者黃精、黃白色節低者萎蕤也、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕黃精 オホヱミ 和名鈔 ヤマヱミ 同上 ナルコユリ サヽユリ サヽカンザウ ツリガ子サウ 丹波 ツユクサ 地錦抄 一名黃獨 典籍便覽 沙田髓 輟耕錄 玉芝草 群芳譜

大陽草 事物紺珠　竹大根 鄉藥本草

山中陰地ニ生ズ、數品アリ、皆春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、初メ地ヲ出ル時籜アリテ包ミ、小筍ノ狀ノ如シ、長ズレバ莖ノ高サ一二尺或ハ四五尺、微斜ニシテ直上セズ、圓形嫩綠光澤アリテ、百合莖ニ似テ細ク瘦ソノ葉互生ス、竹葉黃精ハ葉形狹長ニシテ竹葉ノ如ク、又百合葉ニ似テ柔薄、光滑ニシテ細縱理アリ、長サ三五寸、四五月葉間ニ花ヲ開ク、本ハ筒ニシテ末ハ五瓣ニ分レ、形沙參花ノ如クニシテ蔕ナシ、色シロクシテ瓣ハ微綠、ミナ下垂シテ生ズ、後圓實ヲ結ブ、南燭子ヨリ大ナリ、熟スレバ黑色中ニ細子アリ、其根白色橫生シテ節アリ、年ゴトニ一節ヲ增シ、年ヲ積テ漸ク長ジ、生時味微簽、本草原始ニ、生刺人喉ト云、是玉竹黃精ナリ、大葉黃精ハ葉長大ニシテ粗理、苗高サ四五尺、ソノ根節節圓扁、大サ一寸餘、橫二連生シテ白及(シラン)根ノ形ノ如シ、山人煮熟シテ食フ、味薯蕷ノ如シ、是白及黃精ナリ、圓葉黃精ハ苗高サ一二尺、莖ハ竹葉ノ者ヨリ細ク、葉ハ萎蕤葉ヨリ短ク、硬ク

黃精

佐由理波奈、由利毛安波牟等、於毛倍許曾、伊末能麻左可母、宇流波之美須禮、

右一首、大伴宿禰家持、（和）

〔八丈物產志　一〕イチラハ國地ノ姫百合ニ似テ、島人根ヲトリテ食ス、アシタ草ノ畑ニ生ルコト、至テ多シ、五月花咲ク、又鬼百合ニ似タルアリ、墓所ナドニ多ク、葉ノ間ニ黑キ實ヲ結ブ、花ハ仲夏ニ開ク、

〔新撰字鏡　草〕黃精（安万奈、又云惠彌、又云重樓、又鷄格、又救窮、）

〔本草和名　草六〕黃精　一名重樓、（楊玄操音直龍反）一名菟竹、一名鷄格、一名救窮、一名鹿竹、一名垂珠、（出抱朴子）一名大陽之精、一名飛英、（花名）一名流精、（根名）一名馬箭、一名委蕤、一名河沮、一名羊括、一名仙人餘粮、一名苟格、一名白及、一名救窮之粮、一名黃花精、一名高樓根、一名代巳芝、（天官名之、已上十四名出太清經、）一名龍銜、（出廣雅）一名天精、（出兼名苑）一名馬煎、一名可通、一名羊捶、（已上三名出神仙服餌方）一名仙羊、（出釋藥）和名阿末奈、一名也末惠美、

〔倭名類聚抄　草二十〕黃精　本草云、黃精、（和名於保惠美、一云夜末惠見、）

〔箋注倭名類聚抄　草十〕陶注云、二月始生、一枝多葉、葉狀似竹而短、根似萎蕤、萎蕤根如荻根及菖蒲、節而平直、黃精根如鬼臼黃連、大節而不平、雖燥並柔軟有脂潤、黃精葉乃與鉤吻相似、惟莖不紫花不黃為異、蘇注云、黃精肥地生者、卽大如拳、薄地生者猶如拇指、萎蕤肥根、頗類其小者、肌理形色都大相似、今以鬼臼黃連為比、殊無髣髴、又黃精葉似柳及龍膽徐長卿輩而堅、其鉤吻蔓生、殊非比類、陳藏器曰、其葉偏生不對者為偏精、圖經云、三月生苗、高一二尺以來、葉如竹葉而短、兩兩相對、莖梗柔脆、頗似桃枝、本黃末赤、四月開細青白花、如小豆花狀、子白如黍、亦有無子者、根如嫩生薑黃色、江南人說、黃精苗葉稍類鉤吻、但鉤吻葉頭極尖而根細、蘇恭注云、鉤吻蔓生、殊非比類、恐南北所產之異耳、李時珍曰、葉似竹而不尖、或兩葉三葉四五葉、俱對節而生、其根橫行、狀如萎蕤、又曰、以得坤土之精粹、故謂之黃精、五符經云、黃精獲天地之淳精、故名為戊己芝、是此義也、

百合利用

〔宜禁本草乾集五〕百合　甘平無毒、主邪氣腹脹心痛、利二便、補中益氣、除浮腫痞滿身痛乳難喉痺、止涕涙、堪服食、安心定膽益志、養五藏、治癲狂驚悸產後血暈、根如葫蒜、二月八日採曝乾、人亦蒸食之甚益氣、治肺藏壅熱煩悶、新百合四兩蜜半盞和蒸令軟、時々含一棗大、嚥汁、葉間有黑子、不堪入藥、不在花中、此又異也、

百合雜載

〔古事記中神武〕於是其伊須氣余理比賣命之家、在狹井河之上、天皇幸行其伊須氣余理比賣之許、一宿御寢坐也、〈其河謂佐韋河由者、於其河邊、山由理草多在、故取其山由理草之名、號佐韋河也、山由理草之本名云佐韋也、〉

〔古事記傳二十〕今世に姫由理と云物も山丹なり、さて山由理てふ名は、他に見えざれども、凡て木草の名に、山某と云多ければ、此姫由理も、山由理と云つべき物なり、

〔大倭神社註進狀〕率川神社

養老令曰、孟夏三枝祭、義解謂率川社祭也、以三枝〈和名佐井草、古事記山由理草之本名、云佐韋草也、或曰鳥羽、〉華飾酒罇祭、故曰三枝也、

〔出雲風土記神門郡〕凡諸山野所在草木、〈○中略〉百合、

〔萬葉集夏相聞八〕大伴坂上郎女歌一首

夏野乃、繁見丹開有、姫由理乃、不所知戀者、苦物乎、

〔萬葉集十八〕同月〈○天平感寶元年五月〉九日、諸僚會少目秦伊美吉石竹之館飲宴、於時主人造百合花縵三枚、疊置豆器、捧贈賓客、各賦此縵作三首、

安夫良火能、比可里爾見由流、和我可豆良、佐由利能波奈能、惠麻波之伎香母、

右一首、守〈○中略〉大伴宿禰家持、

等毛之火能、比可里爾見由流、佐由理婆奈、由利毛安波牟等、於母比曾米氐伎、

右一首、介內藏伊美吉繩麻呂、

メ、別ニ苗地ヲ調理置テ、九月頃ニ疎ク此ヲ植テ、細土一寸許覆土シ、霜月ニ至リ、其上ニ厩肥、或ハ朽茈、腐葉ノ類ヲ被置(カブセオク)ベシ、如此スルトキハ、春分後ニ芽ヲ出シ、莖ヲ抽デ漸々成長シ、季秋ニハ其根鷄卵ノ大ニ成長ス、其翌年早春野腐墟ヲ法ノ如ク調理シテ、一歩三畦ニ作リ、五寸隔ホドニ五目ニ植ベシ、暖國ハ春分前後、寒國ハ三月下旬ニ植ルト雖ドモ苦カラズ、芽出テ莖立タル後、時々鍬ヲ用テ草耘シ、且盛養水ヲ灑ギ、亦根ヲ肥太スルノ法ヲ施シ行フベシ、花過ギ葉衰ルニ及デ、其莖ヲ根一尺上ヨリ斷去テ、種子ヲ取ベシ、斯ノ如クスルトキハ、其根益々肥太ス　者ナリ、九月或ハ霜降ノ節ヨリ此ヲ掘リ採ルベシ、卷丹モ能作トキハ、一歩六七十球出來ル者ナリ、然レバ一段二萬球ヲ得ベシ、此ヲ金一兩二千球ニ賣ルトモ、十金ノ產業ナリ、且此物ハ米ニ雜テ飯ニ焚モ甚宜ク、又乾シテ細末ニシ、團餜ニ製スルモ、其味頗美ニシテ救荒ノ要物ナリ、宜ク多ク作ルベシ、絕テ賣リ餘ルノ患アルコト無シ、然レドモ此物ヲ作ルニハ、心得ザレバアルベカラザルノ一事有リ、其仔細ハ此物ハ種子ヲ蒔タル年、ハ、其苗ノ根成長シテ、鷄卵ノ大ニ至リ、翌春植地ニ移シ植ル頃ニハ、鵝卵大ナル者有リ、此ヲ植地ニ移シ植テ、培養ヲ精クスルトキハ、其年九月迄ニ大ニ肥太(フトリ)、其翌年ニ動モスレバ、莖二本立コト有リ、一球ノ根ニ莖二本生ズルトキハ、其根割テ極下品ト爲ル故ニ、此理ヲ能心得テ其根肥太スルトキハ悉掘リ採ルベシ、薤亦蕪菁ノ作法ニテ能ク成長スル球根ナリ、然レドモ窮理家ニ於テハ此ヲ襲根草(カサナリネクサ)ト稱シ、百合卷丹等ヲ鱗根草(ウコロネクサ)ト稱ス、其形狀ヲ以テ分タルナリ、

〔草木育種下〕卷丹(ゆり)　鬼ゆりは花紅色なり、花の白は百合類にして藥に入べし、食料のゆりは、眞土にて細き砂まぢりたる地を、柔く耕し、冬の內土へ籾糠を切まぜ置、植る時灰人糞を切まぜ埿て植べし、雞屎を用て尤よし、葉の間に生ずる實をとり、土へまぜ貯置春植べし、花の出る梢を一尺餘も摘切ば根に實入よし、

に咲てうるはしきものなり、民家にも必うゆべし、第一民の食を助けて飢饉をすくふ、又山林にまかかくれゆりと云物あり、葉はいもの葉のごとく光ありてひろく長し、根は即つねのゆりのごとし、是又煮て食とする事つねのゆりのごとし、

〔草木錦葉集 緒〕保百合作方 附 葉らんの丈を長す事

保百合は實を取土へ交置、春彼岸頃、川砂五分、赤土三分、黒土二分交合せ實を蒔、家根の下中日の所へ置、生たる節より、懸水澤山懸るは惡し、よき程に少しかはきたるは吉、雨を當れば枯る也、二才の二月初頃、植分に孫鉢へ三四本位植る、土は實蒔の土同樣にて吉、置所は實生の時より少し日の強き方吉、併日向は惡し、尤雨に當らざる所よし、三才二月初一本ツヽ、孫鉢へ植分、置所等同樣花出たらば日向へ置、雨に當てよし、雨降ば水を受保ちたる事をためし見べし、落花後は又元のごとく雨に當らざる樣にして、ひさしの下抔へ置てよし、肥は魚肥の薄きを、四月より七月頃迄三四度懸て吉、

〔草木六部耕種法 三 根〕百合、薤、大蒜ヲ作ル法

百合巻丹ハ花葉異形ナレドモ、其根ハ同物ナリ、百合ハ山谷間ニ生ジ、好デ瀑布ノアル近傍ニ集棨スル者ナリ、故ニ山陰ノ濕氣アル處ニ、自然ニ生ズルコト多シ、是ヲ以テ此物ハ耕種スル物ニ非シテ、野人此ヲ採テ喫フ、其味耕種スル者ヨリハ格別ニ美ナリ、然レドモ此ヲ耕種センコトヲ需ルニ、應合ノ土性少ク、盛ニ之ヲ作ルベカラズ、此ヲ植テ試ルニ、根ハ自然生ヨリ味大ニ劣リ、唯其花ヲ愛スベキノミ、花ニ白ト淡紅アリ、頗ル雅ナル者ナリ、故ニ根ヲ需テ作ル者ハ、大抵皆巻丹ヲ植ルヲ恒トス、此物亦氣候ノ寒暖ニ拘ラズシテ生長スル者ナリ、巻丹ハ其植地ノ調理ハ、蕪菁ヲ植ルニ同クシテ、土性ハ野腐壚ニ宜シ、苗ヲ爲立テ此ヲ植ベシ、種子ハ其葉間ナル瘤ノ如キ者ヲ、花過ギ葉衰タル頃ニ、此ヲ採テ眞土ニ小便灰ヲ各半ニ混タル土中ニ埋メ置テ、其生氣ヲ萌シ

百合栽培

金剛山(こんがうせん)百合　俗に爲朝百合といへり、白地に赤鹿の子の點入也、開花六月中旬、河州金剛山に生ず、他所に下種分株しても、決して育つことなし、此花を陰干にして、あぶらに浸しおき、疵に附るに、其功いたつて妙なりとぞ、

〔剪花翁傳四七月開花〕鹿の子百合　花淡赤く濃赤の點斑入なり、開花七月下旬、花中形也、

〔剪花翁傳四八月開花〕秋透百合　花並百合と同じ、開花八月下旬より十月中あり、

〔甲子夜話七十〕蝦夷草紙ト云ヘル書ニ最上德内著彼地ノ產物ヲ擧ゲシ中ニ、黑花ノ百合アツケシ地名邊ヨリ奧處々ニアリト、コレ深紫ノ色ナルベシ、珍シ、林子曰、今ハ珍シカラズト、然レバ他ニ移栽ノ者アルカ、予松浦清ハ未見、

〔農業全書四菜〕百合

藥種にも用る物なり、本草を考ふるに、花白きを用ゆと見えたり、今世に關東ゆり薩摩ゆりなど云類なり、又一種莖高くして、葉の間に黑き子を生じ、五六月紅黃花を開く、花の上に黑胡麻をまきたるごとき黑點あり、是卷丹(をにゆり)なり、子を土に埋み置て、零餘子のごとく春植べし、居家必用云、行をなして植へ、科(かぶ)ごとにこゑを置、水をそゝぐべし、間五寸許にし、後しげくば別のうねに移すべし、三年の後大さ盃の如し、年々次第して植べし、よくわきの草を去べし、本草に百合新なるはむして食し、肉に和して又よし、乾きたるは粉にして餅となして食す、人に益あり、ゆりの根を取用るには、外よりかき取て、下の方を三ヶ一も取殘して、それを植へこやし養へば、次の年は又大かた前のごとくなるなり、生る物を皆殺さず、毎々加樣に心を殘すは、仁愛の物に及ぶ心なり、又子を年々植置ば、いか程も多くなる物なり、又ゆりの根を鹽湯にてゆびき、菓子に用ひてよし、吸物にしめ物、かれ是料理におほし、百合は子をうへ根をそだて、年々にこやして作れば、殊外多くなる物なり、右に記すごとく、かれこれ料理によく、其性もよき物にて、ことに作でま入ず、其花も暑月

の葉のごとくなればなり、所々山中に多ク有り、一種花に黄筋もほしもなく極テ白花成ル有り。う。き。う。ゆ。り。と云、此種はりうきうより渡ッたる物也、外科に用ル、又一種丹巻(テニユリ)といふ有、花赤くやゑとひとへ有て、花中に黒きほしあり、六月咲、余草花まれなる時節に花さくゆへ、尤ながめあり、根は料理につかふ味よし、外のゆりは味苦クして不食、丹巻は葉の間ニ黒く實あり取て植べし、此外花をあいす、百合數種有、是は藥種の分、

〔剪花翁傳 一二月開花〕春。透。百。合。(はるすかしゆり)　花淡赤色、開花二月下旬より三月中旬迄あり、方日向、地二分濕、土回塵、肥芥土をおくべし、淡小便秋彼岸より春花前迄、月々二三度宛澆ぐべし、移秋彼岸よし、已下の諸百合育方並び同じ、

〔剪花翁傳 三五月開花〕千。艸。(ちくさ)百合　花の色眞百合の色よりも甚濃し、開花五月上旬なり、

姫。百。合。　花の色赤地あり、黄地あり、両種とも赤むらさきの色の點斑入なり、開花五月上旬なり、

唐。子。(からこ)姫百合　花の色朱にして、葩厚く丸し、開花五月上旬也、

京。(きやう)百合　花の色黄にして赤み淺し、開花五月上旬也、

太。田。(おほた)百合　花の色黄にして赤みふかし、開花五月上旬也、〇中略

最。上。(もがみ)百合　花は並百合のごとし、されど英垂低かずして悉く仰き咲、甚奇花也、開花五月下旬なり、

竹。島。(たけしま)百合　花眞白なり、開花五月下旬なり、

鬼。百合　花の色赤く濃赤の點斑入なり、開花五月末也、莖高さ六尺にもおよぶものは、枝四方に出て、一房をなせり、英すくなきは六七箇ばかり、多きは三十英も生いづるなり、

〔剪花翁傳 三六月開花〕鹿。の。子。百合　花地白に赤茶の飛點少し入なり、又淡赤紫の鹿の子斑入なるもあり、開花六月中旬なり、

ビ重リテ蓮花ノ如シ、食用ニ入ルユリ子ト呼ブ、今薬店ニ貯ル者ハ皆卷丹根ナリ、味苦シ、今ハ細葉ノ卷丹ヲ種テ賣ル、味苦カラズ、和州談山ニ自生ノ百合アリ、食用ニ良ナリ、故ニ方言料理ユリト云、卽芳野ユリナリ、苗ノサヽユリヨリ長大、葉モ亦大ナリ、花ハ白色最大ニシテ尺ニ近シ、瓣ゴトニ黃道及ビ紫點アリ、香氣甚シ、汝南圃史ニ載スル所ノ天香百合ナリ、根モ亦大ナリ、又變科ニ用ユル、レリヨウロンハリウキウユリナリ、筑前ニテタカサゴト呼ブ、其莖高サ一尺ニ過ズ、花ハ白色サヽユリヨリ長クシテ五寸許、旁ニ向テ開ク、香氣甚シ、是汝南圃史ノ麝香百合ナリ、

正誤、卷丹ハヲニユリナリ、一名クルマユリ、仙臺ガウロ、豫州、防州、ガウル、豫州此草路旁ニ甚多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、圓莖紫黑色、葉形狹長ニシテ竹葉ニ似ズ、多ク互生シ深綠色、秋ニ至テ莖梢ニ花アリ、枝ヲ分テ開ク、六瓣皆反卷ス、赤黃色ニシテ紫點アリ、子ハ已ニ夏中根葉間ニ生ズ、圓小ニシテ零餘子ノ形ノ如ク、紫黑色、自ラ落自ラ生ズ、此草花ハ梢上ニアリ、子ハ根葉間ニアリ、故ニ群芳譜ニ回頭見子花ノ名アリ、一名虎皮百合汝南圃史 連珠同上 珍珠、群芳譜 番山丹、捲丹、共同上

山丹　ヒカリグサ古歌　ヒメユリ　ヒユリ　一名渥丹秘傳花鏡　沃丹群芳譜　散丹同上　石榴紅汝南圃史　鶴頂花曆百詠

種樹家ニ多ク栽ユ、人家ニモ蒔テ花ヲ賞ス、和州伊州山中ニハ自生アリ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、一根一莖高サ一尺餘、葉密ニ互生ス、卷丹葉ニ似テ小ク色淺シ、五月莖頂ニ花アリ、大サ躑躅花ノ如シ、六瓣天ニ向テ開ク、紅黃色、其深紅色ナル者ヲヒユリト云、黃色ナル者ヲキヒメユリト云、遵生八牋ノ黃山丹ナリ、又黃花ニシテ紅間ナル者アリ、共ニ花戶ニ多シ、唐山ニハ白花ノ者アリ、遵生八牋ニ白山丹ノ名アリ、山丹三物同名アリ、一ハ單葉牡丹、一ハ紅繡毬(サンダンクハ)ナリ

〔廣益地錦抄　四〕百合(ゆり)　藥種には花白キを用といふ、大和河内にて吉野ゆりと云、芳野山に多ク有ル故か、花の色白ニ紫のほし有て、櫻色のごとく成ルとて云か、關東にてはさゝゆりと云、葉形笹

卷丹　番山丹　俗云鬼百合

本綱、卷丹莖葉似山丹而稍長大、其花六瓣、紅花帶黃而四垂、大於山丹、上有黑斑點、四月結子、其子先結在枝葉間、入秋開花在顚頂、誠一異也、其根有瓣似百合不堪食、

按卷丹有千葉有單葉、處處皆多不甚賞之、

畫譜云、番山丹有二種、一種花大如碗、瓣俱捲轉高四五尺、一種花如碗、砂本止盈尺、茂者一幹兩三花朶更可觀也、亦須每年八九月分種方盛、

車山丹　正字未詳　久留末由利

按此亦卷丹之別種也、葉略濶對生如車輪、故名車山丹、其花瓣捲轉橫垂有數種、下野日光之產、花小深黃色、和州大峯之產、赤色有黑點爲珍、黃色花大者名竹島、俱以花賞之、

〔庖厨備用倭名本草柔滑四〕山丹サンタン〇中ヒメユリ略　元升〇向井曰、ヒメユリハ花色深紅也、凡ソユリノ花ノ赤キハ山丹ノ類也、山丹ノ外ハ卷丹ト云、是常ノユリナリ、百合ハ俗ニ白ユリト云、又カウライユリト云、山野ニ自然ニ生ズ、其花長ク色白ク香氣アリ、世人此花ヲ愛セズ、タヾ山丹卷丹ヲ愛ス、サテ山丹ヲバ本草ニ菜部ニ入テ、根モ花モ食セリ、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕百合　サヽユリ　ヤマユリ　サユリ　一名鬼蒜汝南圃史　野百合附方

摩羅春秘傳花鏡　犬伊日根村家方　倒仙福州府志　增一名重匡格致鏡原　介伊日草鄉藥本草　玉手爐八閩通志

ユリノ品類甚多ク、二三百種ニ止マラズ、皆花ヲ賞スルノミニシテ藥ニ入ズ、藥用ハ山中自生ノ者ヲ採ル、故ニヤマユリト呼ブ、春舊根ヨリ生ジ、圓莖高サ三四尺直立ス、葉ハ竹葉ノ如ニシテ、厚シテ光リアリ、故ニサヽユリト呼ブ、五月莖梢ニ花ヲ開クコト一二萼、年久シキ者ハ五六萼ニ至ル、皆開テ旁ニ向フ、六瓣長サ四寸許、瓣ノ本ハ聚テ筩ノ如ク、末ハ開テ反卷ス、白色ニシテ微紫、花後實ヲ結ブ、形卵ノ如ク、綠色熟スル時ハ内ニ薄片多シ、卽其子ナリ、其根ハ白色ニシテ瓣多ク並

トシ蔬トス、味ヨシ、春月早クホリテ食ベシ、ヲソクトレバ根片カレテ食スベカラズ、根片マハリヲトリテ中ヲウフベシ、ムシテホシ爲末、麪ニ加ヘテ糕トス、野蔌品ニ見エタリ、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕百合　𩐙音藩　蒜腦藷　強瞿　重箱　和名由利

本綱、百合一莖直上、四向生葉、苗高二三尺、葉似短竹葉、五六月莖端開大白花、長五寸、六出紅蕊、四垂向下、結實略似馬兜鈴、其肉子亦似之、根如大蒜、數十片相累四向、其味如山藷、故名蒜腦藷、或云蚯蚓結纏化成百合也、此恐亦訛傳而已、百合卷丹山丹一類三種也、○中略

按百合北國最多、以根爲調菜必用之物、畿內只賞花食根者不多、有數品、今取所美稱者記左、

秩百合　花正白色葩厚大而向上、或橫垂最可愛、本出琉球深山溪谷間難得之、人纔纏下幾一株入秩復纔上、故名秩百合珍重之、

黑百合　凡花黑色者絕無之、惟此紺色可愛、本出於奧州、畿內移種之、而花甚希也、土地不相應然矣、

透明百合　有白紅黃數種、向上開、花瓣鮮明而美也、出於奧州、佐渡越後亦有之、

博多百合　花黃白色、背有赤斑文理、

山丹　紅百合　連珠　川強瞿　紅花菜　俗云姬百合

本綱、山丹其根似百合小而瓣少、莖亦短小、其葉狹長而尖、頗似柳葉與百合迥別、四月開紅花、六瓣不四垂、亦結小子、其根亦食之不甚良、不及白花者、　根甘凉　治瘡腫及女人崩中、其花活血、其蕊傅疔瘡惡腫、

畫譜云、山丹花如朱紅、外有黃白二種者稱奇、亦在春分分種、

按山丹花橫垂或向上、肉紅色有細點或無之、攝州多田奧山中多有之、

兒山丹チゴユリ　花小美而莖矮甚可愛、出於江戶、

唐山丹カラユリ　花色正赤、瓣厚而向上、同相似而瓣薄者名耕山丹、此二種來於中華種也、唯未見外黃白二種耳、

百合種類

り、山由理といふは、百合紅花者名二山丹一といふもの是也、百合ユリと云ひし事は、日本紀に見えし所に據るに、高麗百濟等地方の呼びし所と見えたり、(ヤマユリの本名、サヰといひし事の如き、古事記に註せる事なからましかば、誰かは知る事を得べき、物名ひとり地方によりて異なるのみにあらず、古今の同じからぬ、かくの如し、今に依りて其說なし難き事也、)百合をよめり、花大に莖ほそくて、風にゆるもて名くる成べし、品類多し、

〔倭訓栞前編三十五〕ゆり

〔藻鹽草八草〕百合

さゆり(さゆり花とも、又さゆりの花とも、)　さゆりばの花　くさふかゆり(ふるくさゆり共云り、萬、)　光草(ひめゆりの異名也、これをほたるの異名といへるはいはれず、これはひかり草也、かながきのものにて、まぎれたりと云々、)　さゆり花ゆりもあはむと　つくば山、またまの、いそに、さゆりをよめり、くだら野にひめゆりをよめり　またさゆりば、まの、いり江にも、わがせこが、やどのかきうちの、さゆりばな(萬)　ゆり花(新六)　さゆりば

〔大和本草六藥〕百合　本草ニ百合ト云ヘルハ花白キヲ用ユ、日本ニ關東ユリ薩摩ユリナド云類也、藥ニ入ベシ、卷丹ハ百合ニ非ズ、藥ニ不可用、只食スベシ、百合ハ何レモ味苦シ、食スルニタヘズ、卷丹ハヲニユリト云味ヨシ、前ニシルセリ、百合ハ根ノ上莖ノ下ニ子生ズ、卷丹ハ葉間ニ實生ズ、二物ノ子生ズルコト不同ヒメユリト云物アリ、山丹也、五月ニ花ヲ開ク消ヤスジ、又ヒユリアリ是モヒメユリノルイ也、花深紅色也、年々土ヲカヘテ改ウフベシ、不然バ消ヤスシ、ムカシハ百合ノ品多カラズ、近年世ニ其花ヲ賞ス、故其品ヤウヤク多シ、幾十種ト云事ヲシラズ、百種ニ及ブ、其花向天アリ、向地アリ、傍向フアリ、

〔大和本草五菜蔬〕卷丹(オニユリ)　莖高クシテ黑ク葉セバク、葉間ニ子ヲ生ズ、夏秋紅黃花ヲヒラク、花ニ黑キ斑點アリ、子ヲ多クトリ、其マヽ地ニマクベシ、又土ニヲサメ置、ムカゴヲ植ル如ク春ウヽベシ、百合ハ白花ナリ、相似テ不同、百合ノ子ハ根下ニ生ズ、又梢ニモ子アリ、百合ハ味苦シ、卷丹ハ甘シ、果

百合名稱

あるは、あまたなるを、是のみ毒物といへるはいぶかしき事なり、漢名俗名あるべきをと思ひつるに、後その筋なる物産醫に問ひければ、俗に毒の木といへり、漢名は木本黄精葉鉤吻となんいひける、天野信景の鹽尻に、芫花といひて毒物あり、三月紫花を開く、藤に似たり、二尺許の小木にて、紫荊樹に似たりといふもこれなるべし、

〔新撰字鏡草〕百合(由利)

〔本草和名草八〕百合一名重[illegible]楊玄操音逐龍反)一名重邁、一名磨羆(仁諝薄買反)一名中逢花、一名強瞿一名强仇(仇即瞿也、出陶景注)一名山丹、(出拾遺)和名由利、

〔倭名類聚抄草二十〕百合　本草云、百合一名磨䕭、(音羆、和名由里、)

〔箋注倭名類聚抄草十〕千金翼方證類本草中品磨䕭作摩羅、本草和名作磨羆、按本草和名引仁諝云、薄買反、與此云音羆合、則知羆是䍧字之譌、此從艸俗寫、其作羅者誤也、〇中略陶注、根如胡蒜、數十片相累、人亦蒸食之、蘇云、有二種、一種細葉花紅白色、一種葉大莖長、根麁花白、圖經云、春生、苗高數尺、莘麁如箭、四面有葉如雞距、又似柳葉青色、葉近莖微紫、莖端碧白、四五月開紅白花、如石榴嘴而大、又有一種花黄有黑斑、細葉、葉間有黑子、

〔下學集草木下〕百合(ユリ)艸

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、〇中略時以後菓子者、〇中略百合草、

〔書言字考節用集六生植〕百合(ユリ)草(本草、治傷寒後百合病、故名、)䍧(同本草)中逢花(同又云強瞿)

〔日本釋名草下〕百合(ユリ)　ゆすりと云意、すを略す、くき高く花大にしてゆする也、ゆするとはうごくをいふ、

〔東雅十三穀蔬〕百合ユリ〇中略　古事記に神武天皇狹井河の上に幸ませし事を記して、其河謂狹韋河由者、於其河邊山由理草多在、故取其山由理草之名、號佐韋河也、山由理之本名云佐韋也、と見えた

黃精葉鉤吻

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
出雲國五十三種、〇中略百部根二斗、
〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、〇中略百部根、
〔重修本草綱目啓蒙十三下毒草〕鉤吻〇中略
蔓生、黃精葉、芹葉等數種アリ、〇中略黃。精。葉。ノ。鉤。吻。ハ草木二種アリ、木本ノ者ハハナベワリ、加州一名ヒトコロビ、ヒトコロバシ、能州ドクノキ、同上子チコロシ、越中サルコロシ、西國ムマヲドロカシ、ムマアラヒウツギ、佐州カナウツギ、北國ミソヤカズ、同上ブス、木曾マシツペイ、上野カワラウツギ、水戸トリヲドロカシ、市郎兵衞ゴロシ、東北國ニ多シ、移シ栽ユレバ繁茂シ易シ、高サ五六尺叢生ス、葉兩對シテ龍膽葉ニ似テ尖リ長シ、三縱道アリ、夏ノ初花穗ヲナス紅色、長サ六七寸、枝アリ、實ハ圓ニ扁ク二三分許、熟シテ色赤シ、誤テ食フ時ハ死ス、葉ヲ採リ飯ニ雜ヘ、鼠ニ飼フモ亦死ス、故ニ子ジコロシト云、草本ノモノモ亦ナ。ベ。ワ。リ。ト呼ブ、中國及河州金剛山、勢州鈴鹿山ニ產ス、苗黃精ニ似タリ、葉ハ萎蕤ニ似テ光澤アリ、莖ハ赤クシテ粉ノフキタルガ如シ、花ハ酸棗ノ花ノ如シ、人誤テ其葉ヲ嘗ムル時ハ舌破裂ス、故ニナベワリト名ク、〇中略
余〇小野職愨嘗テ阿州醫學館ニ在シ時、藥ヲ甲乙山ニ採ル、友人左手ニ金瘡アリ、黃精葉ノ鉤吻ヲ採リシニ、ソノ手忽チ紫色ニ變ジテ暈倒ス、蓋シ毒氣創痕ヨリ經脉ヲ犯スニ因ル、記シテ以テ戒トス、又近年蘭學者流芹鉤吻ヲ取テ煎劑ニ用ユ、名ケテシキウダト呼ビ、藥肆ニモコレヲ售ル、然レドモ未ダ其功効ヲ知ラズ、
〔傍廂前篇〕毒物
荏原郡石川村の邊の道路のかたへの草村に、目なれぬ草花ありしを、來かゝりたる農夫にとひければ、毒物なりとこたへていにけり、こゝろえぬ事いふをのこ識、草にも木にも大毒小毒

百部

〔多識編 二 濕草〕石龍芻、宇之乃比多比、又稱太豆乃比計、

〔書言字考節用集 六 生植〕龍鬚（一名懸莞）、龍鬚（木名石龍芻、又云縉雲草、）　石龍芻（莞之屬）　縉雲草（同、又云龍鬚艸、並出本草、）

〔和漢三才圖會 九十四 中 濕草〕石龍芻〇中略

按和名抄云、石龍芻（和名宇之乃比太非）江浦草（和名豆久毛、一云太久萬毛、）以爲二物、今謂豆久毛者、即本草所謂石龍芻、形狀能似也、似鳬茈苗、而長四五尺、太如筋簳、中肉白而不空、開小穗花、結細實、今人取其實充海金砂可辨之、莖織筵、多出於紀州熊野、稱太藺席、然比莞席脆弱也、疑江常草石龍芻一物矣、而牛額和名之物未知、

〔重修本草綱目啓蒙 十 濕草〕石龍芻　コヒゲ　一名草毒（證類本草）　公明草（楊升菴文集）　席草（本經逢原）　席上草（藥性要略大全）　石龍（福州府志）

水田中ニ種ユ、燈心草ノ類ナリ、燈心草ヨリ細クシテ短シ、長サ二尺許リ、備後福山ヨリ席ニ織リ出ス、備後席ト名ク、其草纖細ナル故、席至テ草密ナリ、草短キ故席中ニテ續キ織ル、故ニ中ツギトモ云、席中ノ上品ナリ、近來豐後邊ヨリモ織リ出セドモ、草粗ニシテ備後ノ產ニ及バズ、

〔新撰字鏡 草〕百部根（富度）

〔本草和名 九 草〕百部根、欵藥、（陶景注云、九眞有一種草、似百部、）一名伯父根、（是百部也、出范注方、）和名布止都良、

〔倭名類聚抄 二十 葛〕百部　陶隱居本草注云、百部（和名保止豆良）一種以有百部、故以名之、

〔康賴本草 草〕百部　味苦无毒、和保止川良、二月八日採暴干、似天門冬、事林廣記云鐵忌ヘタソカツラト云說アリ、布止都良、一名婆婦艸、

〔書言字考節用集 六 生植〕百部根　婆婦草（同）　百部根　百部根

〔倭訓栞 中編 二十三〕ほとつら　和名抄に百部をよめり、新撰字鏡に百部根をほどとのみよめり、今特生蔓生の二種あり、つらはかづらの謂なり、

種にしてよわきものあり、何國にも澤邊池などに生ひて、土人三角(みつかど)とも鷺の尻さしともいふ、其かたちすこしも琉珠藺にかはる事なけれど、花實の付どころにのみかはりめあり、是は莚に織り草履に作るによわくたもたず、

石龍芻

〔新撰字鏡 草〕石龍蒭 太豆乃比介、一云牛乃比太比、又云草續斷、又龍米、又龍花、又龍莬、

〔本草和名 七草〕石龍芻 一名龍須、一名續斷、一名龍朱、一名龍華、一名懸莞、楊玄操音官 一名草毒、一名方賓、出蘇敬注 一名龍鬚、一名西王母簪、已上出兼名苑 一名縉雲草、出古今注 一名龍韮、一名龍草、一名續斷、出雜要訣 和名宇之乃比太比、一名太都乃比介、

〔倭名類聚抄 二十草〕石龍芻 本草云、石龍芻、和名宇之乃比太非 崔豹古今注云、縉雲草、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按本草和名、石龍芮訓之々乃比多比久佐、一名布賀都美、新撰字鏡石龍芮訓不加豆彌、又云、牛乃比太比、然詳形狀、是草可名龍鬚、而不可名牛額、疑石龍芻、石龍芮、其名相近而混也、宜以太都乃比介訓石龍芻、以不加豆美、宇之乃比太比、之々乃比太比訓石龍芮也、但不加豆美之名、今世不傳、其實未詳、宇之乃比太比、蓋今俗呼宇之毘太比又牛面草者、當以苦蕎麥充之、○中略 原書問答釋義條云、龍鬚草一名縉雲草、按本草云、石龍芻一名龍鬚、故引縉雲草在於此也、崔豹以下九字舊無、下總本廣本有之、今附存、本草石龍芻一名龍鬚、陶注、莖青細相連、實赤、今出近道水石處、似東陽龍鬚以作席者、但多節爾、蜀本圖經云、莖如綖叢生、俗名龍鬚草、今人以爲席者、時珍曰、龍鬚叢生、狀如粽心草及鳧茈、苗直上、夏月莖端開小穗花、結細實、並無枝葉、今吳人多栽蒔織席、他處自生者不多也、本經明言龍芻一名龍鬚、而陶弘景言龍芻似但多節、似以爲二物者非矣、今俗呼古比計、卽備後所用以織席者也、時珍云、刈草包束曰芻、此草生水石之處、可以刈束養馬、故謂之龍芻、

〔撮壤集 中草〕龍鬚(リウノヒゲ)

七島藺

〔甲斐國志 百二十三産物及製造〕一藺　萬力筋窪八幡諸村ニ植エ、爲二藺席一甚多シ、藺田ハ上々田ニテ上田ノ登リヨリモ高ク、大抵壹段貳石貳斗ナリ、八幡内市河村ノ産ヲ佳トス、疊席ノ表ニ用フ、方言ニ上敷又御座トモ云、莞筵熊野村ヲ古昔ハ御座郷橫井村ト稱シキ、此邊ニテ製セシコトナルベシ、河内ノ中山夜子(ヨゴ)澤村、切石村ノ邊ニテ作ヲ切石御座ト呼ブ、下部村、田ツ原村邊ニテモ作ル、西郡ノ落合村、湯澤村、舂米村邊ニテモ作リ藺田アリ、此ニテ製スル莞筵(ゴザ)ハ叉緣方言ミヽカキト云、兩端ノ緣ヲ編ミ付ルナリ、疊表ニハ狹クシテ用ガタシ、一スヂ縱トヲ絲ヲ一線スルナリ、凡ヲ藺ヲ植ル處ニハ麻ヲ植ウ莞筵ノ絲ニ用フル故ナリ、湯澤御座、明王御座ト云、明王トハ舂米ノ枝村ナリ、皆單(ヘスベリ)席ニ用フ、

〔倭訓栞 中編十〕志ちたう　七島と書り、薩摩國に隷す、○中略七島藺、七島おりてなどいへり、

〔大和本草 八水草〕藺○中略

七。島。　海邊鹹淡相雜ハル淺水ノ地ニ生ズ、燈心草ニ似テ三角ナリ織テ席トス、琉球ヨリ此席來ル、薩州ノ七島ヨリ多ク出ル、故ニ名ヅク、他州ニモ多シ、七島席ト名ヅク、民用ニ利アリ、

〔農業全書 六三草〕席。草。

席草是を琉。球。藺。と云て、疊の面にうつものなり、うゆる時分藺と同じ、六月刈取事も又同じ、白泥を付ざるのみ、うへ樣、刈かぶを其まゝをき、九十月堀おこし古根を去、分てうゆる事稻をうゆるにかはる事なし、こゑを入れ中をかき培ひをき、三月叉糞を入べし、糞は河の泥と灰に、人糞を合せて、根にをくべし、三月過は糞灰を入べからず、必虫を生じ色もあしくなる物なり、いか程も肥たる田に宜し、殊に潮氣のある干潟の邊、肥泥の所に取分よく出來るものなり、

〔廣益國產考 三〕席草釋名

此席草を琉球藺叉七島藺といふ、○中略藺の形三角にして燈草より三ッがけほどふとし、叉同

色あしくなれども至てつよし、尤自家のつかひやうは、見かけによらぬものなれば、藺を割ずとも、丸なりに其まゝ干あげて織ても佳なり、琉球にて織たるものとて、薩摩より來る筵は、色あしけれども、大坂邊まで賣買の直段、壹枚にて銀五六匁位なり、又正眞の七島より來るは、壹枚にて三四匁なり、是等はみな刈旬おそきと見え色あしく、然れども強き事、青筵の三四枚がけたもつといふ、自家に用ふるだけはおそく刈、商ひものとするははやく刈べし、早くかれば色よく、又風にそこなはるゝ患ひなし、風に中れば、藺折てあしゝ、然れども自家のつかひやうにさのみかまひなし、此刈旬の考へもつとも大事なり、第一日和を見合刈べし、刈て翌日日和あしければ刈たる藺に赤みさし、筵に織て色あしく價下直也、兩三日先の天氣を見すまして刈べきなり、

刈様の事

時至て藺を刈には、常の稻を刈鎌をよく〳〵硎て田に入、草を刈ごとく左右に拂かりに刈て、元末を混せざるやう、兩手を以ていだき上又片手にかゝへ直し、右の手にて藺の末の程よき所を持てふるへば、短き分は田へ落る也、是を多く作る所にては、其まゝ田に捨置ども、悉く取かへり乾あげて、縄になひ草履に造り、又は錢さしになひ、或は下品なる中次筵に織てよろし、　凡此刈たる藺一かゝへを、むしろ壹枚の分とあつる也、大概壹反の田に五六百枚の織草は有もの也、尤豐凶にもよる也、

〔延喜式(二十二民部)〕凡掃部寮殖藺田一町、量置山城國便近之處、其營料者、以當國正税三百束、毎年充之、刈收者卽用本司仕丁、

〔延喜式(二十六主税)〕凡營掃部寮藺田一町料稻三百束、毎年以山城國正税充彼寮、

〔延喜式(三十八掃部)〕殖藺田一町、(在山城國)耕殖卅一人、(以當國正税雇充)刈得藺三百八十圍、(寮家仕丁刈運)

〔武江產物志(藥草)〕道灌山ノ產　燈心草(ゐぐさ)

かた、此ごとくすべし、大抵の地味は二遍ほどにてよし、三返も耕ば益々宜し、畿内邊にては、なんばと號し、板にて造りたるものを下駄のごとくはき、深田に入て自由に働くなり、九州にては右のごとく竹をふまへて耕せり、何れとも利方のよきを用べし、依てなんばの作りやうを爰にゕるす、○圖略

植附の仕様幷肥しの事

先苗を植る二三日前に耕したる田を日に乾かし、糞の熟したるに水を合せ、杓にて能々かきまぜ、程よくして田一面に水を打ごとく打散して、尙々乾かすべし、其後水を放入て、稻をうゝるごとく植る事也、苗と苗との間は、稻よりゕげく植べし、追々芽を生じ、入梅前には凡七八寸に至るべし、其とき糞か又油粕か干鰯を粉にして、壹反に代銀三四拾目分をふり込施べし、又土用前に銀三四拾目分同じく施べし、豐後にては壹反に都合銀六拾目より百目内外施てつくる也、稻とは違ひ肥し多くいるゝ程、藺の出來よく收納多く、筵に織て出來よく賣直段もよく、肥しの代銀より倍まして、餘計なるもの也、　藺の伸るは六月土用中なり、其頃は一夜に三四寸も伸るといへり、　上田には肥しをひかへ施べし、伸過ては藺こける也、上田に植肥しと、其後入梅前後を見合せ、兩度に銀四五目分、油粕を粉にして施べし、田の上下にて肥しの分別あるべし、若土用時分に、藺の伸あしくば、小便を水うつごとく、藺に上より杓にて打べし、小便乏しき時は、水を餘計に加え、はしく\〳〵迄ゆきわたるやうに打べし、又餘の肥しを水に和し施て宜し、盆時分には六尺餘に伸る也、

刈旬の事

刈旬は中元の前後二百十日を目當に刈べし、其年の氣候により、伸の能とあしきとあるは見合せ刈べきなり、また自家に入用だけ作りたるは、此刈旬より廿日も三十日もおそく刈べし、藺の

得る事過分なり、又右二尺五寸繩の藺にて、四はへの面を四枚うち立る事なり、備後の藺田の土は、少ねばりけありて小石少々交り、性のつよき地なり、藺は地の甚深きをよしとせず、底の堅くして中分の土地、早稻を作る地を糞にあかせ、十分に作れば、上藺出來るなり、深田の肥たるに、ながくふとく出來たるは、寢席にうつなり、上面をうち出す所は、三名(みな)、わらや、草深などいふ里なり、他村の女は及ぶ事なしとなり、藺の苗をおく事、刈取て、二番を生立(そだて)置て用ゆるなり、又は一番をからずして、其まゝ置て苗とするもよし、別に糞し手入にも及ばず、若草あらばぬき去べし、備後は肥良の地多き國にて、南方を受るゆへ、土產色々おほき中に、藺田の利勝れて多し、六月刈取、藺のかぶをぬき去、跡を其まゝ耕して、かねて晩稻の苗を仕立おき、早速うへて、手入だん〳〵常のごとくすれば、大かた時分にうへたる稻に、さのみはおとらず、霜ふりて刈取と云なり、何國にも必田地肥過て、其實りよからぬ所ある物なり、左樣の地に、此法を用ひて藺を作るべし、畳にうつ事ならざるものは、藺にて賣たるも利ある物なり、殊に跡にも又稻の出來る地ならば、誠に過分の利なり、所によりて考へ、或(ハ)なをも習を得て、心を用ひ其利を求むべし、

〔草木育種下 服器に用ある物〕燈心草　池澤の邊に植、或水田に植るなり、此草の瓤を取て燈に入、蠟燭の心に入、又藥に用、此草にて席を織たるを近江席と云、此類に細して短ものをこひげと云、是にて織たる席を備後席といふ、短ゆへ中にて繼なり、皆肥は雞屎を第一とす、又塵ほこり干鰮等を用てよし、

〔廣益國產考三〕藺田耕しやう

凡稻を作る田を耕すに異る事なし、若至極の深田にて、人の臍より上にもふみ込程ならば、凡二月の末つかたに至りて、周り壹尺壹貳寸もある大竹を、貳本ならべて是をふまへ、鍬にて前へ前へとかえし耕すべし、又ふまへたる竹を、向ふへやりては耕し〳〵して行べし、其後三月の始つ

る法、來年藺を作る田は、今年早稻を作り、時分に刈收めて、其まゝ耕しこしらゆる事は、稻田にかはる事なし、塊少もなく、細かにくだき熟しをきたるに、山草其外地の和らぐ物を多く入れ、水をためをきよくかきならし、十月初うゆるを上時とし、それより段々十二月までうゆるなり、苗をおこし古根を去、稻の苗をとるごとく、一手づゝにたばね、十本許を一かぶにとりて、間を三寸ほど宛にうゆべし、さて十五日程にて芸る事も稻と同じ、其後熟糞を上より切々うつべし、四月までの間に、凡十遍ばかり、糞を入るを上功とはするなり、三月の比は、山のわかき草柴など出來るを、多く刈取てつみをき、是をすさわらのごとく細かに切て、物をおほひ置、むせたる時きりくだきて、苗の上よりふるひかくべし、いかほどもおほきにあきはなし、いなごの出來る時になりては、稻の有方の畦に、わらかこもにて、おきをゆひ、蛉をよくふせぐべし、又は竹竿を持て、をひはらひたるもよし、冬苗をうへ付てよりこゑを入はじめ、それより草かじめ、蛉をふせぎをひはらふまで、一日も怠り由斷なく手入を用ゆべし、糞たらざれば色あしく、さきかれて上面にはならず、色を見合せ、鰯などを頻りに多く入べし、刈時分の事、六月土用にいりて、日和を見合せ、ゆふだちもすまじき晴日に、よくきるゝうすき鎌にて、稻をかるごとくかりて、其田にて其まゝすぐり、地をほりて其中にて白き泥を、濁酒のごとくとき、右の藺を此泥にひたしまぶし、きれいなる芝原ある所ならば、うすくひろげ干べし、二日ばかりにてよく干る物なり、其時凡二尺五寸繩にてたばね、色よきわらか、小麥わらにて包み、すゝけのせざる所に、棚をかき上をくなり、其後上中下段段ゑり分、よくそろひたるを上とす、上面をうつは、たねりをこき、苧をうみ事にて合せ、わくにかけをきて、打時用ゆるなり、又中面以下はあら苧をうみて、是を車合せにして用ゆるなり、其後疊にうつ事は、女一人にて一日一夜に、四はへの面を、二枚うち上るを定りたる仕事とするなり、所のならはしにて、此功のならざる女は媒人なしと也、此ゆへによりて、女功の格式となりて、利を

按蘭玉篇云、似莞而細堅、宜爲席、今原野叢生、似燈心草而微扁、長一尺餘、中空而無白瓤、一株布地叢生、中長者起莖生杈葉、如絲芒、以指爪拗葉、則音爲莎雞聲、

燈心草　虎鬚草　碧玉草　莞（和名抄音官）　和名於保井（中略）

按燈心草用小刀按指以裂皮、取白穰、凡剝六斤、得白穰半斤者爲上、武州之產肥大爲最上、江州之產次之、凡貯燈心、略蒸熱湯、晒乾、則經久不瘦、以每十一月子日貯之、未知其據也、備後備中者白穰少、堪織席、

〔重修本草綱目啓蒙十三隰草〕燈心草　キ。古名　キ。グ。サ。仙臺　ニ。グ。サ。南部　ア。ミ。勢州　ヒ。メ。ス。コ。隱州

穰ノ名ハ　トウシミ（和名鈔）　トウシン　トウスミ勢州　ジミ肥前　トウジミ同上　トウシメ南部　トウスン雲州　キノミ佐州　一名　燒底賤（錦繡中）　古乙心（郷藥本草）　席草（藥性要略大全）　燈草（本草原始）

原野下濕地及池澤ノ傍ニ多シ、自然生ハ皆苗短細ナリ、江州ニテハ冬ヨリ夏ニ至マデ水田ニ栽ユ、コレヲ燈草田ト云、ソノ草長大ニシテ五尺ニ及ブ、采テ席ニ織ルヲ近江席ト云、其席備後席ニ比スレバ甚粗ニシテ下品ナリ、草長キ故ニ中ニテ繼ガズ、丹波ヨリモ此席ヲ織リ出ス、丹波席ト云、又此草中ノ白穰ヲ出シテ燈火ニ供スルヲ燈心ト云、其皮ヲキガラト云、粽ヲクヽルニ用ユ、燈心ニ熟草生草ノ別アルコト宗奭ノ說ニ云リ、煮テ心ヲ出スヲ熟草ト云、煮ズシテ心ヲ出スヲ生草ト云、藥ニハ生草ヲ佳ナリトス、今常用ノ者ハ皆熟草ナリ、

〔農業全書六三草〕藺

藺一名は燈。草。ともいふ、疊の面とし寢席とし、燈心に用ひ、藥ともなる、凡衣食すでに足りては、居所を安からしむべし、されば是功用おもき物也、土地相應する所にては、廣く作るべし、備後に作

藺

すこしもめさましからんほどめせといへば、三十すぢばかりむず〳〵と折くふ、このなぎは三町ばかりぞうへたりけるに、かく〳〵へば、いとあさましく〳〵はんやうも見まほしくて、めしつべくば、いくらもめせといへば、あなたうとうとて、うちいざり〳〵、おりつゝ、三町をさながらくひつ、○下略

〔新撰字鏡 草〕藋 古官反、葦也、卒○志○呂○井、知○比○佐○支○井○　茈 子此反、久○比○井、　葋 荒烏反、大森、奈万井、　莞 莧 同古丸反、似蒲員弁、加万、又大○井、　薺 祖禮反、栗甘、奈豆奈、又支○波○井、
萑 乎支、又井、　藺

〔倭名類聚抄 草二十〕藺 玉篇云、藺 音吝、和名爲○、辨色立成云、鷺尻刺、似莞而細堅宜爲席、

〔類聚名義抄 艸八〕藺 音吝、キ、ヰクサ、

〔書言字考節用集 生植六〕藺 ヰグサ　莞 同　燈心草 同　碧玉草 同　燈心草 トウシンサウ

〔日本釋名 草下〕藺 キ　いる也、むしろに作る草也、むしろは人の座 キ るものなり、

〔圓珠庵雜記〕ゐを鷺のしりさしといふは異名なり、萬葉に知草とよめるは、この鷺のしりざしを略していふにや、
(頭書)眞淵云、今田舍にて鷺のしりさしと云ふは、いと〳〵短くて和かなり、藺をいふにあらず、

〔倭訓栞 前編四十三 爲〕ゐ ○中略　藺は席にする物なれば居の義なるべし、燈心草也、七島と稱するは薩州の七島より出るをいふ也、新撰字鏡に藋をむしろゐ、葋をなまゐ、莞をおほゐ、薺をきはゐ、茈をくひゐとよめり、くひは食の義成べし、

〔大和本草 水草八〕藺○　順和名ニ藺ヲヰト訓ジ、又鷺尻刺 サシ ト訓ズ、似莞而細堅宜爲席トイヘリ、今俗鷺尻指ト云物、水草ニテ三角アリ、ヨハシ、爲席ヤハラカナリ、ヤブレヤスシ、又草履トス、本草綱目燈心草龍鬚ノ異名ニ藺ノ字ナシ、

〔和漢三才圖會 濕草九十四 本〕稂心草　龍當草　藺 音吝、倭名抄　和名爲、俗云野芒、○中略

〔日本書紀二十七天智〕十年十二月乙丑、天皇崩于近江宮、癸酉殯于新宮、于時童謠曰、美曳之弩能曳之弩能阿喩、阿喩舉底播、施麻倍母曳岐、愛倶流之衛、奈疑能母騰、制利能母騰、

〔萬葉集十六有由縁井雜歌〕詠酢醬蒜鯛水葱歌

醬酢爾、蒜都伎合而、鯛願、吾爾勿所見、水葱乃煮物、

〔萬葉集三譬喩歌〕大伴宿禰駿河麻呂、娉同坂上家之二孃歌二首、

春霞、春日野爾乃〇爾恐誤殖子水葱、苗有跡云師、柄者指爾家牟、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

可美都氣努、伊可保乃奴麻爾、宇惠古奈宜、可久古非牟等夜、多禰物得米家武、

右二十二首〇二十首略上野國歌

譬喩歌

奈波之呂乃、古奈伎我波奈乎、伎奴爾須里、奈流留麻爾末仁、安是可加奈思家、

〔新撰六帖六〕なぎ　爲家

露むすぶ田中の井どのなぎの葉に光さしそふ夕づくひ哉

〔催馬樂〕呂　田中ノ井戸一段、拍子十、諸家五拍子用之

たなかのゐどに、ひかれるたなぎ、つめ〳〵あこめ、田中のこあこめ、たらり、らり、たなかのこあこめ、

〔宇治拾遺物語二〕今はむかしせいとくひじりといふ聖のありけるが、〇中略京へ出る道に、西京になぎいとおほくおひたる所あり、此聖こうじて物いとほしかりければ、道すがら折て食ほどに、ぬしの男出きてみれば、いとたうとげなる聖の、かくすゞろに折くへば、あさましと思て、いかにかくはめすぞといふ、聖こうじてくるしきまゝにくふ也と云、時にさらばまいりぬべくは、いま

いへり、中國九州にあきなしといふ、駿河に菨をなぎといふ、歌にこなぎともよめり、田水葱とい
ふも見ゆ、田につくりたる事、宇治拾遺に見えたり、催馬樂にもよめり、枕草紙に八幡の事書るに、
みゆきなどに、なぎの花のみこしに奉るなど、いとめでたしとみえたり、
〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕蘋草　ナギ和名鈔　コナギ古歌　イモバ伯州　一名蕣菜通雅、同名アリ、
卽水アフヒノ小ナル者ナリ、田中ニ生ズ、一根數葉、始ハ鴨跖草アヲバナノ葉ニ似テ厚ク、深綠色光アリ、後
漸ク圓葉ヲ出ス、秋ニ至テ莖ノ高サ三四寸、五瓣ノ花ヲ連綴ス、大サ三四分、深碧色、又白花ナル者
アリ、ソノ池澤中ニ生ジテ形最大ナル者ヲ、ミヅアフヒト云、一名ナギ、サハギキヤウ、タイモガラ、
豐前カハイモジ、紀州是三才圖會ノ浮蔷ナリ、
〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃
營二水葱一段一、苗廿園、總單功五十三人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和一人、糞百廿擔、
運單功廿人、殖功十五人、五月播殖三度、十五人、度別五人採功十五人、三度
〔長生療養方一菓菜功能〕蘋菜　主二暴熱喘一、小兒丹腫食レ之、去二熱氣一、
〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料
僧一口別菓菜料、〇中略水葱漬菜料、以二一圍一充二廿口一、〇中略干水葱實干茬各三勺、已上海菜料
〔延喜式三十九内膳〕供奉雜菜
日別一斗、〇中略水葱四把、準二四升一、五六七八月、
漬年料雜菜
水葱十石、料鹽七升糟漬小水葱一石、料鹽一斗二升、汁糟五斗、〇中略右漬二秋菜一料
〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造物所作物帳斷簡年紀不詳、按成卷文書四十五卷所收天平六年造佛所作物帳中卷斷簡恐與レ此同物也、
水葱二千六百五十束

〔新撰字鏡 草〕茈穀 二字奈○支○

〔本草和名 九草〕蘋菜 仁諝音胡木反 一名蘋菜、一名接余、一名穀菜、一名水葱 巳上三名出七卷食經 和名奈岐、

〔倭名類聚抄 十七水菜〕水葱 唐韻云、穀 胡谷反 水菜可食也、楊氏漢語抄云、水葱 奈木 一云蘋菜 蘋音與穀同、今按蘋宜作穀、蘋者石蘋、他草名也、

〔康頼本草 草〕蘋草 味甘寒、无毒、和奈支、似澤瀉、花青白、

〔伊呂波字類抄 奈殖物 附殖物具〕水葱 ナキ 葱 正字 穀 蘋菜 仁諝音 斛榮 接余 薮 水葱 巳上三名出七卷食經、巳上五名ナキ、亦名メナキ、

〔和爾雅 七草木〕浮薔 ナギ 出三才圖繪

〔古名錄 二十三水草〕子水葱 コナギ 萬葉集 漢名蘋草 本草 今名コナギ

按雨久花 ミヅアフヒ、蘋草 コナギ ハ、一種ニシテ草ニ大小アルノミ也、蘋草ヲナギトスルコト、古ク本草類編ニ見エタリ、小ナギト云ハ、雨久花ノ小ナルモノナレド、延喜式ニ小水葱ヲ雜菜ニ供スルヲ以テ觀レバ、コナギハ蘋草ナルコト明也、

〔動植名彙 二〕なぎ

頭註 三川吉田人中山美石云、世ニ水あふひト云フ水草ヲ、遠江濱名郷アタリニテハ、なぎトノミ呼ビテ、水葵云フ名ハサラニシラズト云ヘリ、近信按ニ、ナギト水葵トハ同類別種也、ナギハ高サ一尺ニ過ギズ、水田中ニ自生アリ、ミヅアフヒハ高サ二尺ニ餘リ、栽傳ヘテ愛翫スルモノ也、其自生イヅコニ在ヲシラズ、ナギ水葵ノ差別ハ、石竹ト瞿麥トノ異ナルガ如シ、

〔倭訓栞 前編十九奈部〕なぎ ○中略 倭名鈔に水葱を訓せり、古へ菜茹したるにや、新猿樂記に腐水葱と見え、萬葉集になぎのあへものとよめり、菜葱の訓義なるべし、されど水葱はふとゐ也、なぎは三才圖會にいふ浮薔也といへり、新撰字鏡には、苔をうきなぎとよめり、俗に水葵とも、澤桔梗とも

杜若

〔本草和名草七〕杜若一名杜衡一名杜連、一名白連、一名白芥、仁諝音㯹口反一名若芝、一名芳杜若、出陶景注一名土鹵、出雜名苑一名杜若、一名白吟、已上出要訣一名寶㚖、出釋藥一名寶靈根、出隱居本草注唐、

〔書言字考節用集生植六〕杜若トジャク杜蓮、若芝、楚衡並同、芳草也、本草、葉似薑而有文理、今按、本朝俗用爲馬蘭、謬來實矣、

〔大和本草八芳草〕杜若　ヤブシヤウガト云、葉ハ生薑ニ似テヒロシ、ヤブノ内隱地ニ生ズ、楚詞ニ出タリ、根ハ良薑ニ似テ小ナリ、實似豆蔲、與本草合ヘリ、我國俗杜若ノ根ヲ良薑トシ、子ヲ砂仁トス、伊豆宿砂ト云アヤマレリ、又國俗アヤマリテ杜若ヲカキツバタトヨム、カキツバタハ燕子花ナルベシ、杜若ニハアラズ、又別ニヤブシヤウガ、又山ミヤウガ共云草アリ、與此不同、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕杜若　ヤ○ブ○メ○ウ○ガ○　サ○ヽ○リ○ン○ダ○ウ○紀州　メ○ウ○ガ○サ○ウ○加州　チ○ク○ラ○ン○サ○ウ○薩州　ハ○ナ○メ○ウ○ガ○播州　增一名鮮草果○廣東新語○中略

杜若ハ多ク竹木林下ニ生ズ、春舊根ヨリ箸ノ大サ許ノ莖ヲ出ス、數寸ノ上ニ七八葉ヲ互生ス、蘘荷ノ葉ニ似テ莖葉トモニ糙澀ス、面ハ深綠色、背ハ淡シ、中心又莖ヲ抽コト一尺餘、ソノ梢ニ六瓣ノ小白花、層ヲナシテ開キ、長穗ヲナス、花ニ光澤アリ、蠟花ノゴトシ、圓實ヲ結ブ、初ハ白シ、後チ綠色標碧色黑色ニ變ジ、熟シテ又白色トナル、内ニ細黑子アリ、三角ニシテ凹ナリ、山薑ハナメウガノ子ニ似テ至テ小シ、秋冬苗枯レテ白行根ヲ多ク生ジ、横ニ引コト二三尺、其狀旋䔰ヒルガホノ根ニ似タリ、コレ若水翁ノ證スルトコロナリ、

水竹葉

〔重修本草綱目啓蒙十三下毒草〕牛扁○中略

水竹葉　イ○ボ○グ○サ○　メ○イ○ボ○グ○サ○越前　イ○ボ○ト○リ○グ○サ○同上

水草ナリ、溝瀆及池澤邊ニ多シ、圓莖地ニ引ク、葉ハ鴨跖草アヲバナノ葉ヨリ細長節ニ互生ス、節ゴトニ根ヲ生ズ、莖葉共ニ黄綠色、夏月枝梢ゴトニ一花ヲ開ク、三瓣ニシテ淡紫色、澤瀉ノ花ニ似タリ、大サ二分許、

州ニテハボウシガミト云、關東ニテハアキガミト云、衣服ノ下繪ヲ畫クニ必用ノ者ナリ、此紙ヲ切リ、皿ニ水ヲ入レテ絞レバ、青キ汁出ルヲ用テ、衣服ノ花樣ヲ畫キ、糊ヲカキテ染汁ノ內ニ入レバ皆消去ル、又扇面ニモ用ユ、色鮮好ナレドモ、水カヽル時ハ皆脫去ス、舶來羊皮燈ノ彩色ニ用ユ、火ニ映シテ鮮明ナリ、

〔廣益地錦抄四〕鴨跖草（あをばな）葉形笹の葉のごとく田野に多く生、花形ほうせんくわのごとく、色花こんせうのごとく、此の花をもみて繪具に用る、こんせうの色を染、草花につゆくさ共はながら共いふ、此葉をもみて、蛇犬のくらひたるに付ケてしるしあり、毒虫さしたるにぬりて妙藥なり、

〔延喜式十五內藏〕奉諸陵幣〇中略

鴨頭草木綿廿枚〇剗二枚中略

已上陵十所料

〔萬葉集四相聞〕大伴坂上家之大娘報贈大伴宿禰家持歌四首

月草之、徙安久、念可母、我念人之、事毛告不來、

〔萬葉集七雜歌〕臨時

月草爾、衣曾染流、君之爲、綵色衣、將摺跡念而、

〔空穗物語嵯峨の院〕御とものはうすいろのあをつゆくさして、とを山にすれり、わたみないれたり、

〔今昔物語二十八〕左京大夫□□付異名語第廿一

今昔、村上天皇ノ御代ニ、舊宮ノ御子ニテ、左京ノ大夫□□ト云人有ケリ、〇中略色ハ露草ノ華ヲ塗タル樣ニ青白ニテ、眼皮ハ黑クテ鼻鮮ニ高クテ、色少シ赤カリケリ、

〔枕草子八〕見るにことなることなき物の、もじにかきてこと〴〵しきもの、露草、

〔大和本草九雜草〕鴨跖草（アヲハナ）　葉ハ竹葉ニ似タリ、花ノ形ハ鳳仙花ニ似テ碧色ナリ、和名月草トモ、露草トモ云、苗ノ性大寒腫氣ヲケシ熱ヲ消ス、蛇犬ノクラヒタルニツケテヨシ、花ハ用テ繪ヲカク、藍ノ色ノ如シ、水ニテ洗ヘバヲツル故、下繪ヲカクニ用ユ、又和名ウツシ花トモ云、鈍色トハウツシバナニテ染ルヲ云、又白花アリ、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕鴨跖草　オ○モ○ヒ○グ○サ○古歌　ツ○ユ○ク○サ○　カ○モ○ノ○カ○シ○ラ○グ○サ○　モ○ヽ○ヨ○グ○サ○　ハ○ナ○ダ○グ○サ○　ツ○ミ○グ○サ○共ニ同上　ツ○キ○グ○サ○和名鈔　ア○ヲ○バ○ナ○京　ホ○タ○ル○グ○サ○勢州　カ○マ○ツ○カ○播州、阿州、石州、　カ○マ○ツ○コ○讃州　ウ○ツ○シ○バ○ナ○　ウ○ツ○シ○筑前　ト○ン○ボ○グ○サ○但州　カ○ウ○ヤ○ノ○メ○ン○加州　カ○ウ○ヤ○メ○ン○同上　カ○ウ○ヤ○ノ○ヲ○メ○ン○防州　コ○ウ○ヤ○タ○ロ○ウ○濃州　コ○ン○ヤ○タ○ロ○ウ○江州　タ○ロ○ベ○同上　ハ○ヽ○シ○グ○サ○佐州　カ○ギ○バ○ナ○同上　ギ○ス○グ○サ○雲州　チ○ク○サ○伊州　ス○ヾ○ム○シ○サ○ウ○薩州　ハ○ナ○ガ○ラ○長州勢州　チ○コ○ノ○ハ○ナ○ガ○ラ○仙臺　ベ○チ○〱○バ○ナ○同上　ア○ヲ○ア○キ○松前　ハ○タ○オ○リ○グ○サ○上總　チ○ン○チ○ロ○バ○ナ○越前　ホ○ウ○シ○バ○ナ○尾州、濃州、常州、　カ○ウ○ガ○ミ○越中　カ○メ○ガ○ラ○石州、雲州、　ア○キ○バ○ナ○阿州、播州、　カ○マ○ツ○カ○土州、讃州、　一名靑峯兒本草原始　秋峰兒同上　竹節菜救荒本草　翠蝴蝶　翠蛾眉　萱竹花　倭靑草共ニ同上　鼻斫草證類本草　瑠璃草外科準繩　花菅草　地篇蓄　耳環尻共ニ同上　鴨脚草百一選方　藍胭脂草通雅　竹靑同上　鳳嘴藍花曆百詠　小靑秘傳花鏡　大靑醫學叢函　碧蟬兒藍本草原始

原野ニ極テ多シ、人家ニモ春月自ラ子生ズ、莖幹地ニ布キ、節ゴトニ葉ヲ互生ス、形チ竹葉ニ似テ厚シ、夏月枝梢葉間ゴトニ花ヲ生ジ、朝間ニヒラキ午前ニ萎ム、深碧色ニシテ二瓣ナリ、又白花モアリ、又縹白色モアリ、又靑クシテ白キフクリンアルモアリ、江州栗本郡山田村ニハ、熟地ニ栽テ花瓣ノ汁ヲ採ル名産也、其種尋常ノ者ニ異ナリ、苗高サ三四尺、葉ノ濶サ一寸許リ、長サ六七寸、花大サ一寸餘、毎朝瓣ヲトリ直ニ搾リテ紙ヲ染メ四方ニ賣出ス、コレヲ山田ノアヲバナト呼ブ、勢

鴨跖草

俗ニアダン筆ト云、此核船來多シ、新實ハ蒔テ生ジ易シ、

〔倭名類聚抄 十四染色具〕鴨頭草　楊氏漢語抄云、鴨頭草、都○岐○久○佐○辨色立成云、押赤草、

〔箋注倭名類聚抄 六染色具〕按鴨頭草、又見內藏寮式萬葉集、然於西土諸書無見、獨本草和名云、鴨頭草和名都岐久佐、出新撰食經、與漢語抄合、都岐久佐蓋以其花染著物、得是名也、萬葉集坂上大娘報贈大伴家持歌云、月草之徙安久、寄物陳思歌云、月草之移情、皆是也、今俗呼露草、又按證類本草引嘉祐、載鴨跖草云、葉如竹、高一二尺、花深碧、有角如鳥觜、可以充都岐久佐、則押赤蓋鴨跖之通音假借、猶鹿尾菜作六味菜也、李時珍曰、竹葉菜、處々平地有之、三四月生苗、紫莖竹葉、嫩時可食、四五月開花、如蛾形、兩葉如翅、碧色可愛、結角尖曲如鳥喙、實在角中、大如小豆、豆中有細子、灰黑而皺、狀如蠶屎、巧匠採其花、取汁作畫色、及彩羊皮燈、青碧如黛也、卽嘉祐本草所言鴨跖草也、

〔類聚名義抄 八艸〕鴨頭草ツキクサ

〔下學集 下草木〕露草ツユクサ 又云日草、亦云鴨頭草也、

〔撮壤集 中草〕鴨頭草ツユクサ

〔饅頭屋本節用集 草木門〕鴨頭草ツユクサ

〔書言字考節用集 六生植〕鴨跖草カラアイ 万葉作鴨頭　鴨跖草ツキクサ 其花碧色、用畫彩、　竹葉菜同 碧竹子、竹鷄草、碧蟬花並同、　鴨頭草同 万葉、俗又作月草、　鴨跖草アヲバナ 今云露草

〔倭訓栞 前編十六都〕つゆくさ　露草の義、玉吟によめり、つき草をいふなるべし、插瓶家にいふは黃精の葉なり、

〔物類稱呼 三生植〕鴨跖草 あをばな、つきくさ、つゆくさ、うつしばな、　畿內にてあをばな、又つゆくさと云、江戸にてつゆくさと云、上總にてはたをりぐさと云、尾張にてぼうしばなといふ、加賀にてこうやめんといふ、近江にてこんやたらうと云、讃岐にてかまづかと云、土佐にてかまづか、又ほたるぐさとい

エラン

小白花ノアツマリタルナリ、後中ニ細子ヲ結ブ、秋後子落テ苗根枯ル、莖ヲ連テ毬ヲ採リ、收貯テ藥用ニ入ル、其毬下ニ蕚アルモノ多シ、下品ナリ、舶來ノ者ハ、蕚ナク尤長大ニシテ莖長サ一二尺、毬ノ大サ三分餘ナルモノ稀ニアリ、

〔百品考下〕不灰木　一名阿咀泥一名鳳梨　和名エラン　モクアダン

本草綱目、李時珍曰、不灰木、有木石二種、伏深齊地記曰、東武城有勝火木、其木經野火燒之不滅、謂之不灰木、楊愼丹鉛錄云、太平寰宇記云、不灰木、俗多爲鋌子、燒之成炭而不灰、出膠州、其葉如蒲草、今人求以爲燎、謂之萬年火把、此皆言木者也、時珍常得此火把、乃草葉束成而中夾松脂之類、一夜僅燒一二寸爾、

中山傳信錄、阿咀泥、葉長旁有刺、久成林、連臺堅利、可爲藩籬、葉可造席、根可造索、開花者爲男木、花白如蓮瓣合尖、左右迸疊、十餘朶直上、五椏、藥露如杖長數寸、芳烈如橘花、女木無花結實、大如瓜、膚紋起釘、皆六稜可食、卽波羅蜜別種、粵東亦有之、名鳳梨、

臺灣府志、鳳梨、葉似蒲而濶、兩傍有刺、果生叢心、皮似波羅蜜而色黃、味酸甘、末有葉一簇、因形狀類鳳、故名、

萬年火把ハ舶來多シ、俗ニ百里ダイマツト云、長サ一尺餘、徑リ一寸許、萬年青(オモト)ノ如キ厚キ葉ヲ卷キ、中ニ松脂ノ如物ヲ包メリ、火ヲ點ズレバ能燃テ、風雨ニモ滅エズ、至テ明ナリ、此葉ヲ拔キ察スレバ、阿咀呢ノ葉ナリ、然レバ木ノ不灰木ハ阿咀呢タルコト必定ナリ、阿咀呢和名エラン又木アダント云、琉球ノ產ナリ、甚寒氣ヲ畏ル、冬ハ土窖ニ收テモ枯易シ、葉ハ文珠蘭(ハマユウ)ニ似テ細ク、正中ヨリ折タルガ如シ、葉厚ク堅シテ蒲葵(ビロウ)椰子ノ如ク、葉ノ兩邊及ビ脊道ニ逆刺アリテ鉤ノ如シ、又萬年青ノ葉ニ似テ薄クカタシ、葉ノ末至テ細長シ光澤アリ、一處ニ攢簇スルコト文珠蘭ノ如シ、年ヲ經テ丈餘ニ至リ、花ヲ開キ實ヲ結ブト云、此核ヲ採テ墨ヲ浸シ字ヲ書スベシ、

ハ陸草トナル、集解ニ藏器蘋葉圓濶寸許ト云者ハ別物ニシテ、スッポンノカヾミノコトナリ、莕菜ノ集解ニ水鼈ト云リ、

〔小町集〕やすひでが三河になりて、あがた見にはいでたゝじやといへるかへりごとに、
侘ぬれば身をうき草のねを絶てさそふ水あらばいなんとぞ思ふ、

〔伊勢集上〕舟に乘てうき草とる所
ねをたへて水にうかべる浮草は池のふかさをたのむなるべし

〔枕草子三〕草は　うきくさ

〔多識編二隰草〕穀精草、今案波世久左、異名流星草、

〔書言字考節用集六生植〕穀精草ハゼクサ時珍云、收穀荒田中生之、抽細莖高四五寸、頭有小白花點々如亂星、　戴星草同又云文星草

〔本草辨疑三〕穀精草
日本ニモ所々ニアリ、關東道中吉田與二川間、又池鯉鮒與岡崎ノ間ニアリ、荒田ニハ不生、山ヨリ潤水濔リ傳フ少シクボミニ生ズ、常ニ水アル所ニアラズ、只水氣アル山ノスソニ、八月ニ花サク、時珍ガ說ノ如シ、所ノ者和名スモトリ花ナド云フ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕穀精草附穀精方ニ出、又谷ニ作ル、石決明ニ借リ、
ハゼグサ　ミヅダマ　コリン尾州名古屋　竹筒草江戸　ホシクサ　ヨルノホシ仙臺　タイコノブチ　デンツク　タイコグサ　一名
鼓槌草藥性要略大全、牛臍ト同名、　増一名穀菁草事物門覽
池澤水旁及田中ニ生ズ、小草ナリ、故ニ水深キ處ニハ生ゼズ、多クハ稻ヲ收タルアトニアリ、故ニ穀精草ト名ク、然レドモ稻ナキ處ニモ多ク生ズ、穀ノ餘氣ニ因テ生ズルニ非ズ、宿子地ニ在テ春ニ至テ自ラ生ズ、葉細長ク地楊梅スヾメノヤリ葉ニ似テ、一科數十葉叢生ス、長サ三五寸、秋ニ至テ叢中ヨリ數莖ヲ抽ク、長サ五六寸許、上ニ正圓ノ小毬ヲ結ブ、大サ二分許白色ニシテ、鼓槌ノ形ノ如シ、コレ細

本綱、浮萍池澤水中甚多、季春始生、或云、楊花所化、一葉經宿、卽生數葉、葉下有微鬚、卽其根也、有背面皆綠者、又有面青背赤若血者、謂之紫萍、入藥爲良、七月採之、

浮萍辛寒、或日酸、　性輕浮入肺經、達皮膚、能發邪汗、治時行熱病、甚有効、又利小便、治水腫、爲末服之、又能止吐衂、

〔重修本草綱目啓蒙十六〕水草　水萍　カヾミグサ古歌　タヽナシ同上　ナキモノグサ同上　ウキクサ　ドンスガヘシ丹波　タツナミサウ紀州　一名鴨栂事物異名　水簾頴解集　九子萍埤雅　擁蓮名物法言　鴨麿品字箋　水中萍子草附方　瓢南寧府志　浮薸大倉州志　水蘇正字通名アリ、同　水衣典籍便覽　池星同上　魚食採取月令　蛙食村家方　釋名水花本經　水白別錄　水蘚同上

夏月田澤止水上ニ生ジ、水面ニ浮ブ、葉大サ二三分、形圓ニシテ光リアリ、面綠色ニシテ背ハ紫色ナル者、眞物ナリ、二三葉アツマリ生ズ、四葉ニナレバ分レテ兩科トナル、三葉ノ裏ニ細キ鬚根アツマリ、二三分ノ長サアリ、一名紫萍集解　紫背萍附方　紫背浮萍同上　一種葉小ク橢ニシテ水馬歯ノ葉ノ如ク、米粒ノ大サニシテ、面背共ニ綠色ナル者ハ青萍ナリ、アヲウキクサト呼ブ、一種アカウキクサハ、淺溝及ビ止水面ニ多シ、冬モ枯レズ、形柏葉ノ如クニシテ厚ク軟ナリ、甚繁殖シテ水面ニ滿ツ、其面紅色、或ハ紫色、是滿江紅ナリ、雜草ノ部ニ出ヅ、藥舖ニ賣ル所ノ浮萍ハ、皆コノ滿江紅ニシテ眞物ニ非ズ、藥ニハ紫背浮萍ヲ用ユベシ、

蘋。ウキクサ　ヨツバ　田字草通名　カタバミモ　一名水鑑草聖濟總錄　水田草同上　十字草通雅　㵶蘋同上　覆雪名物法言　水蘋百病主治

池澤田中ニ生ズ、根ハ蔓ノ如ク泥中ニ長ク延ク、春葉ヲ生ズ、大サ一寸許、小葉四片一葉ニ合成ス、酢漿草葉ノ如ク、田ノ字ノ形ニ似タリ、其質銀杏ノ葉ノ如シ、夏花ヲ開ク、白色四瓣ナリ、故ニ白蘋ト云フ、集解ニハ陸生ヲ青蘋トシ、水生ヲ白蘋トス、然レドモ元一物ナリ、水草ナレドモ水涸ク時

ら販賣の事を行はしむ、これより磽确荒廢の岨地は開けて生產の場となり、販路も益廣まりて、水戶蒟蒻の名は大に世に著はれたり、

水萍

〔本草和名 草九〕水萍一名水花、一名水白、一名水蘇、一名水中大萍、一名蘋、大者也、已上二名出蘇敬注、一名水華、(華恐苹誤)一名苹、一名出雑要決、一名藻、小者也、出崔禹、一名七英、一名水英、已上出兼名苑、水中大馬萍、一名馬菜、一名馬葉、已上出小品方、一名苹、一名藻音謂、出爾雅、和名宇岐久佐、

〔段注說文解字 艸一下〕苹、萍也、無根浮水而生者、小雅呦呦鹿鳴、食野之苹、傳曰、苹萍也、釋草苹字兩出、一曰萍、一曰藾蕭、鄭箋以水中之艸、非鹿所食、易之曰、苹藾蕭也、於月令曰、萍始生、於周禮萍氏、引爾雅萍蓱、似分別萍為水艸、苹為藾蕭、所據爾雅自作萍蓱、而毛詩夏小正、以苹為萍、皆屬假借、許君則苹蓱萍三字同物、不謂苹為假借、李善注高唐賦引說文、苹艸皃、音平、从艸平聲、符兵切、十一部、

〔干祿字書 平聲〕苹萍上通下正

〔倭名類聚抄 草二十〕萍　說文云、萍薄經反、字亦作洴、和名宇木久佐、無根浮水上者也、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕原書艸部云、萍苹也、又云、苹萍也、無根浮水而生者、水部云、萍苹也、水艸也、三字不同、按玉篇云、萍萍草、無根水上浮、萍同上、又云、苹萍也、合萍萍為一字、又以無根水上浮訓之、則疑此源君從玉篇引之、其生作上亦與玉篇合、蘇注本草云、水萍者有三種、大者名蘋、又有荇云々、水上小浮萍、陳藏器云、小萍子、是溝渠間者、又按爾雅苹萍、其大者蘋、注、水中浮萍、陸機毛詩義疏云、其麁大者謂之蘋、小者曰萍、時珍曰、本草經所用水萍、乃小浮萍、陶蘇以大蘋注之誤矣、浮萍處々池澤止水中甚多、季春初生、或曰楊花所化、一葉經宿、即生數葉、葉下有微鬚、即其根也、一種背面皆綠者、一種面青背紫赤若血者、謂之紫萍、

〔和爾雅 草木七〕萍(ウキクサ)水萍、浮萍也、苹、洴、蘋並同、如血色者名紫萍、　蘋四葉草、田字草並同、花名白蘋、

〔書言字考節用集 生植六〕蘋(ウキクサ)田菜、田字艸、並同、　萍(同)凡浮生水上艸(アシ)有三種、大者曰蘋、中者曰荇、小者曰萍、詳本草、　浮萍(同)　藻方言、江東謂浮萍為藻、

〔和漢三才圖會 水草 九十七〕浮萍　和名宇岐久佐

川山間を紆廻して東南に注ぎ、村落多くは此川に沿ふて散在し、水陸の田畑も至て少く、且砂石甚多くして、他の作物に適せざりしかば、居民の頼て以て生活する所のものは、全く蒟蒻にあり、しかるに斯る僻地に拘らず、此産の起りしより保内の富みは、郡中に甲たるに至れり、いつの頃より蒟蒻を植ゑ始めしか、年代未だ詳かならざれども、古くよりこれを耕作せしもの、如し、されども當時は全く根塊の儘鬻ぎしのみにて、利益も甚薄かりしならん、天保初年の舊記を閲すれば、土根六俵（一俵十二貫目）の相場金壹分とあり、此を以てもその一斑を窺ふに足るべし、今を距ること七十餘年前即文化年中、同郡（○久慈）諸澤村に中島藤右衛門といへる農夫あり、此諸澤は保内郷の東に在る一村にて、蒟蒻を産せしが、彼根塊の運搬不便にして、需用の廣がらざるを憂ひ、種々に工夫を凝らし、遂に粉末に製することを發明したり、其法は秋季に及び根塊を採收せば、清くこれを洗ひ揚げ、外皮を去り、大庖丁もて厚さ凡二分程に切りて片となし、三尺餘の篠串に貫き、天日に乾して之き碎き、水車に掛けて粉末となすなり、此製次第に廣まり、保内に於ても皆これに倣ひ、遂に一方の産をなしたり、其後金藏（姓氏詳ならず）かといふものあり、藤右衛門が製法に改良を加へ、今の製造は復これに進歩を與へたるものなり、

水戸藩にては、初より蒟蒻粉製造を保護し、販路も爲めに開けたりしが、一時粗製濫造の弊を生じ、大に聲價を墜し、産業も衰へんとせしをもて、同藩は其弊を矯めんが爲め、同郷袋田村に物産會社といへるを設け、製造家の名望あるものを擧げて其役員とし、折々諸國を巡廻して、濫造を戒め、製粉を敎へ、其俵には俵毎に水戸産物粉蒟と記したる燒判を押し、若し法に背き粗品を密賣するもの露顯したるに於ては、輕きものは製造を差止め、重きものは入牢申付るなど、嚴重の取締法を設けし故、誰とて犯すものなく、能く事業を勉めしかば、製造頓に精良に趨き、産額も大に增したり、江戸にも亦一の玉會所といふを置き、其役員は袋田と交代して專

〔大和本草 附錄一〕蒟蒻 其葉莖他草ヨリ早ク枯ル、其根ニ灰ヲヲホフベカラズ、枯ヤスシ、

〔宜禁本草 乾五菜〕蒟蒻 辛寒有毒、擣碎以灰汁煮成餅、五味調和爲茹、主消渴、生戟人喉出血、主癰腫風毒、摩傅腫上、治腸風、

〔雍州府志 土產六〕蒟蒻 蒟蒻根至冬採之、俗謂蒟蒻玉、然去麁皮入石臼、緊急杵之細末、後以手採之、而加石灰少許、釜煮之、乘熟而盛幅五寸許之長宮、然後截之、方五寸許、入水而賣之、買者再湯煮去石灰氣、而後隨意調和之、

〔鈴鹿家記〕應永二年正月十日庚申、當屋鈴鹿勝畠定師次男定好弟、始テ神事ヲ勤、御本所へ赤飯荷桶一、手酒干鯑壹連、上座敷十四人朝振舞、汁(スマシ コンブ) 生鱠 仁物(イリコ○コンニヤク○)

〔毛吹草 三〕周防 蒟蒻玉 蒟蒻

〔攝陽群談 十六名物土產〕同所蒟蒻 同莊(住吉郡平野莊)ノ田園ニ作リ、則當所市店ニ於テ製之所々ニ送ル、味他ニ勝テ宜シ、因テ作之商フ者、總テ平野蒟蒻ト云リ、不製蒟蒻玉トシテ諸國ニ沽渡セリ、

〔江戶總鹿子名所大全 六〕諸職名匠諸商人

こんにやく

神田土物棚 なべ山や長左衞門

屛風坂 宮樣こんにやく

〔農商工公報 十八號〕水戶蒟蒻 蒟蒻の生根塊は磨碎して食料となすべく、又粉末にして遠方に送り、製して食料蒟蒻となすべく、或は凍蒟蒻とし、或は糊に用ふる等の利ありて、需用も亦多し、各地多少の產あれども、最も著名なるは茨城縣常陸國久慈郡のものをもて第一とす、同郡中盡くこれを產するにあらず、其一部なる保內鄕と稱する四十二ケ村の產に係れり、保內の地は須藤、月居等の高山ありて、其山脈起伏して、平地極めて少く、磐城國より來れる久慈

〔本朝食鑑三柔滑〕蒟蒻和名古邇夜久、今亦然焉、

集解、春生苗、至五月移之、長一二尺、與天南星苗相似、但多斑點、秋開紫花結子、宿根亦生苗、經二年者、根大如椀、及芋魁、外黑内白有理、味戟人咽、亦麻舌、秋後采根浸水、以繩子擦去外黑皮而洗淨、搗碎作餅、以釅灰汁煮十餘沸、以水淘洗、換水煮五六遍、成凍子、用時復煮湯四五沸、去惡汁而食、或與早稻草同煮數沸、則作氷樣而味佳、京師丸山寺僧造之、最稱美味、江都以總州鍋山之產為佳、又有佐倉之產、色黑而略粗、謂初以灰汁煮時入石灰少許則然、其味亦殊而不足為佳也、

〔地方役人四〕山林竹木仕立樣之事

一蒟蒻の種は、小芋の如く成る少きを用ゆ、一度植置ば永代迄も、其畑に種殘るなり、大きなる根計每年堀取、少きは其儘殘し置、翌年の種となる、根を掘取たる跡の畑は、耕返さずして、足にて筋を付、麥を蒔てよし、翌年麥を刈とひとしく柴を刈て、厚サ七寸計ニ懸置、此外には培を入るゝ事なし、滿作すれば畑壹反ニ金子三四兩程の玉出來なり、初て種を植る時は、五兩計種を植る也、得分あるものなれ共、平地に出來兼る故、人每に作らぬと見へたり、

〔百姓傳記十二〕蒟蒻芋ヲ作ル事

蒟蒻芋ヲ作ルニ、何國ニテモ山家ニ多ク作リテ、平場ノ村里ニ多ク作ルモノナラズ、何國ニモ山中ハ五穀雜穀センザイノ品々、蒔植スルコトナラザル地多キ故ナリ、木影物影ニ植テモ能ク育チ芋出來ナリ、

蒟蒻芋ハ、黑ブク地、其外木カヤノ腐リ重ナリタル所ニ植テ相應セリ、一度植タル處ニハ、コツゼント小サキ芋、每年ハヘ出ル、葉ノ露莖ノ露落テ種トナル、子モサカズ一本立ニ育ツモノナリ、肥シ養ナヒ塵芥灰ヲ用テヨシ、不淨ハ能ラズ、多クハ諸草ノ腐リタルヲ畑ニ置テヨシ、濕地日ヤケ處ヲ嫌フモノナリ、在家ニテハ大芋ニナルコト遲シ、二年三年ニシテ大キニナルナリ、

れる者亦少からず、唯擧體腫脹て患ふと云り、

〔本草和名 二十本草外藥〕蒟蒻 已上八種出新撰食經 一名蒟頭 此名出拾遺 和名古爾也久

〔倭名類聚抄 十七圃菜〕蒟蒻　文選蜀都賦注云、蒟蒻 枸弱二音、和名古迩夜久、其根肥白、以灰汁煮、則凝成、以苦酒淹食之、蜀人珍焉、

〔文選 四〕蜀都賦

其圃 圃音作圃 則有蒟 蒟字俱 蒻 弱 茱萸、瓜疇、芋 于句 區、甘蔗 之夜 辛薑、陽蓾 吁 陰敷、劉曰、蒟蒟醬也、緣樹而生、其子如桑椹、熟時正靑、長二三寸、以蜜藏而食之、辛香温調五藏、蒻草也、其根名蒻、頭大者如斗、其肌正白、可以灰汁煮則凝成、可以苦酒淹食之、蜀人珍焉、

〔康頼本草 草〕蒟蒻　味辛寒、有毒、和コンニヤク、秋有花生赤子其根也、

〔類聚名義抄 八艸〕蒟蒻 枸弱二音

〔伊呂波字類抄 古植物附殖物具〕蒟蒻コンニヤク　蒟若 同　蒟蒻 已上出新撰食經　蒻頭 此名出拾遺、已上コンニヤク、

〔下學集 下草木〕昆若コンニヤク

〔饅頭屋本節用集 古草木〕昆若コンニヤク

〔書言字考節用集 六生植〕蒟蒻コンニヤク 一名鬼芋、本草、與天南星相類、但蒟蒻莖斑花紫、根極大肌麁、南星莖青花黃、根小柔膩肌、

〔新撰類聚往來 上〕先爲菜料見來分少々令進候、

其調菜方者 附 海菜野菜

蒟蒻

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一こんにやく　にやくとも

〔拾遺和歌集 七物名〕こにやく　すけみ

野をみれば春めきにけり青つゞらこにやくまゝしわかなつむべく

一名白花太乙蓮（三才圖繪）　一瓣蓮（秘傳花鏡）　旱金蓮　觀音芋（同上共）　佛燄花（汝南圃史）　御魁（百花譜）　天荷芋（同上）

水草ナリ、葉澤瀉ニ似テ厚ク尖リ黄綠色、長サ七八寸、濶サ三四寸、一根ニ叢生ス、莖ハ靑芋（サトイモ）ノ如シ、肥タルモノハ長サ二尺許、夏月根上ニ短莖ヲ抽テ花ヲ開ク、只一瓣ニシテ長サ三四寸、濶サ一寸半許、白色中ニ長蕊アリ、天南星ノ蕊ノ如シ、集解ニ如觀音像在圓光之狀ト云ハコレヲ指ナリ、圓光ハフナゴコウノコトナリ、一種ザゼンサウ、一名ダルマサウ、牛ノミヽ（藝州）ト云アリ、花ノ形達磨ノ坐禪ノ狀ニ似タリ故ニ名ク、春花ヲ開ク紫黑色、天南星ノ花ヨリ濶ク短ク、長サモ相侔シ、中ニ蕊アリ、南星ノ如シ、葉ハ海芋ヨリ短ク濶シ、コレハ地湧金蓮ナリ、秘傳花鏡ニ出ヅ、南寧府志ニ湧地金蓮ト云フ、○中略

增、眞ノ海芋ハ文化年中琉球ヨリ來ル、○中略ミヅバセウヲ海芋ニ充ツルハ誤ナリ、

〔剪花翁傳三四月開花〕水芭蕉　花白、開花四月下旬より五月に咲、株春彼岸水田に植べし、成長すれば一尺五六寸におよぶ、盆栽のものは少さく育也、芭蕉の剪花は半月たもつ也、此花は三日保つべし、越中立山の半に大澤あり、此所に生ずるもの、大さ七八尺に及ぶ、よく水氣を逐ふ、是眞の澤瀉也と、古矢氏の說なり、

〔成形圖說二十三菜〕石芋（イシイモ）（相模等の國にていふ、又木芭蕉觀音蓮などの異名おほし、）　毒芋（ドクイモ）（亦曰大師芋、俚諺に曰、むかし弘法大師道に饑て、芋を洗ふ婦人の過へるに、之を乞て與ざりしより、其芋遂に毒艸に化りとぞ、是其事を誣て神にせんとし、此不用の毒艸をして、大師芋てふ惡名を賂せり、實は弘法の冤と云べし、）　芭蕉芋（ハセヲイモ）（南島はせをやは、はせをの傳るなり、）　熊坂（クマサカ）（信濃）　倍古乃舌（ベコノシタ）（東奧牛をべこと云、此花牛舌に似たり、○中略）

此自生の毒芋なり、莖葉深綠にして光澤あり、博物志云、野芋小ニ于家芋、食之殺人、蓋菸也、本艸中にも、野芋は大毒不可啖之よし見えたり、しかるに南島の地此もの、多く、一たび荒歉に遇て死を免かれがたき時は、已ことを得ずして、此ものを掘とり砂糖に和て煮食ふことあり、而其毒に中

〔倭訓栞中編十九〕ばせをば略○中　水芭蕉は宋史にいふ蟬紫水蕉也、

〔百品考上〕海芋　一名觀音蓮、一名隔河仙、一名旱金蓮、一名一瓣蓮、　和名マンシユウ

本草綱目、李時珍曰、海芋生蜀中、今亦處處有之、春生苗、高四五尺、大葉如芋葉而有幹、夏秋間抽莖開花、如一瓣蓮花、碧色、花中有蘂長作穗、如觀音像在圓光之狀、故俗呼爲觀音蓮、方士號爲隔河仙、云可變金、其根似芋魁、大者如升盌、長六七寸、蓋野芋之類也、宋祁海芋贊云、木幹芋葉、擁腫盤戾、農經弗載、可以治癘、　周之璵樹藝書、觀音蓮、一名旱金蓮、一名一瓣蓮、葉如大芋、秋間開白花、止一大瓣如蓮、葉中花蘂、頗類佛像、故名、　四川總志、海芋木幹芋葉、高四五尺、不可食、

暖國ノ產ナリ、寒ニテハ冬育チガタシ、初ハ芋苗ノ如ク、長ズルニ隨テ幹ヲ成シ、高サ二三尺ニ及ブ、幹巨クシテ横スヂアリ、大サ握ニ盈ツ、或ハ枝ヲ分テ鳳尾蕉(ソテツ)ノ如シ、葉ハ白芋(ハスイモ)ト同シテ厚ク光アリ、葉背ノ筋高シ、六七月葉心ヨリ花ヲ出ス、大半夏ノ花ノ如クニシテ大ニ幅廣シ、天南星ノ如クカヽヘズ、瓣端直立シテ下ヘタレズ、恰モ佛像ノ船ゴクワウノ如シ、花中ノ蘂、天南星ノ花蘂ニ似テ長ク巨シテ、觀音ノ像ノ如シ、故ニ觀音蓮ノ名アリ、俗ニマンシユウト云、薩摩ニテバシガシハト云、一種此ニ類シテ、幹ヲ成サヾルモノヲクハズイモト云、卽野芋ナリ、

觀音蓮　和名ミヅバセウ

南寧府志、觀音蓮株葉似芭蕉、花如湧地金蓮、

海芋ノ觀音蓮ト殊ナリ、水草ニシテ葉澤瀉ニ似テ、厚大ニシテ脈理ナク、長サ七八寸、幅三寸許、黃綠色、一根叢生シテ芋ノ如ク莖短ク、夏根上ニ別ニ短莖ヲ抽テ花アリ、一瓣ニシテ長サ三四寸、幅一寸餘、色潔白中ニ長蘂アリ、根上葉傍ニ花ヲ開クコト、全ク地湧金蓮(ダルマサウ)ノ如シ、此草ヲ海芋ニ充ルハ謬ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十三草下〕海芋　ミヅバセヲ　觀音蓮和漢通名　クマサカ信州　ベコノシタ羽州

芋雜載

其美殆差ヽ別也、

〔延喜式 七踐祚大嘗祭〕阿波國所獻、中略乾羊蹄、蹲鴟、橘子各十五籠、已上忌部所作

〔德川禁令考 四十九魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月

野菜もの之儀節に入候日より賣出之事

覺中略

一ねいも　　三月節ゟ

〔精進魚類物語〕豐葦原の中津國五畿七道をわかたれし、王城より子の方、北陸道越後國大河郡鮎の庄の住人、鮭の大介鰭長が嫡子鯆太郎粒實、生年積て廿六歲にまかりなる、われとおもはむものは、押ならべてくめやといひて、ゑびらのうはざしより、鯖の尾の狩俣ぬき出し、能引つめて放矢に、芋頭の大宮司かしら射わられ、馬より下に落にけり、芋が子共引しりぞき、いかにせむとぞなげきける、中略そのゝち大宮司、世にくるしげなる息をつき、鬚かきなでの給ひけるは、われはたけ黑を出しより、命をば御料に奉る、かばねをば龍門原上の土にうづみ、名を後代にあげむと存せしなり、しかり〇か下恐脫字しにより て、此疵をかふむる、これにてたすかる事はよもあらじ、たゞ跡に思ひ置事とては、そゝりごの事ばかり也、我いかにもなりなむ後は、すりだうふの權の守をたのむべし、始より今にいたるまで、なさね中はよからぬ事なり、かまへて〳〵權の守にたのむべしとのたまひければ、嫡子黑ゆでの太郎是をきゝ、我等弓箭とる身にて候へば、けふあればとて、明日あるべしともおぼえず候、乍去そゝり子は、權の守に申つくべく候と申ければ、大宮司是をきゝ、ずいきのなみだをぞ流されける、御料是を御覽じて、かくぞ詠せさせ給ひける、

このいものはゝいかばかりはかるらんにたる子どもをみるにつけても

海芋

〔多識編 二毒草〕海芋、今案乃伊毛、異名觀音蓮、綱目天荷、同

芋產地

〔庖丁聞書〕一雜煮上置之事
串蚫　串海鼠　大根　青菜　花鰹
右の五種を上置にする也、口傳下盛ニ里いも、其上にもちを置也、
〔年中恆例記〕八月十五日
御いも、御かゆ、茄、大草調進之、
〔宮中秘策二十年中行事〕年中諸大名獻上物之事
十二月
一白芋莖鹽煎蚫　細川越中守
〔秇苑日涉七〕民間歲節
十五日、〇八月謂之中秋、爲看月會、攜酒啖芋、〇中略
廣東新語曰、八月蓼花水至、有月則是歲多珠、爲大餅象月、浮桂酒、剝芋、芋有十四種、以黃爲貴、
〔浪花の風〕月見には〇中略芋を賞翫す、故に十五夜の月を賞して芋明月といふ、
〔南浦文集下〕和人山老韻詩十三首
稻已熟時農抃野、心如玉兎走虛空、我曹相聚煮根芋、鼓腹村村奴視公、　八月
〔毛吹草三〕山城　芋　肥前　蓮芋
〔張州府志二十四海東郡〕土產　芋魁　出同所〇津島　紫莖大魁味美、四方貴之、以津島芋爲稱、
〔續江戶砂子一〕江府名產井近在近國
赤山芋莖(ずいき)　同芋　赤山は葛飾郡の內、江戶より六里計、芋莖は長六尺計、莖ふとく色濃紫也、六月の末、盆前後さかんなり、
〔奧羽觀蹟聞老志三庸貢土產〕芋子(サトイモ)　俗謂之鄉芋、宮城郡多湖村所出爲上品、比之他鄉、則其味大異、而

芋莖〔和名以毛加良、一名以毛之、〕俗云須伊木、煮食之柔味淡甘、剝皮乾之、正白色如干瓢、肥後之產最佳、壯夫以爲春意之用、又穿大石燒莖於石上、乘熱切之、則石脆易穿、

〔大草家料理書〕一生青鷺料理之事、作候て二度湯がき、酒にて付て、古味噌こくしてかへらかして、出し候時しぼり候て、にだしをもさして吉、但古味噌の時は、いものずいきを、酒にて煎て入候也、

一野鷄はすまし味噌能也、〔○中略〕但ふくさみその時にはいもがらも吉、

〔延喜式 三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、〔○中略〕芋莖二把、〔六七八九月〕

〔沙石集 九〕證月房上人之遁世事

松尾ノ證月坊上人ハ、三井ノ流ヲ受テ、三密ノ行タケク、道心有人ト聞ヘテ、遁世ノ初ノ事ヲ人ノ語シハ、人間ニナガラヘテモヨシナシ、如說修行シテ臨終セント思ヒ立テ、只一人松尾ノ奥ニ、人ニモシラレズシテ、七日ガ時料ヲ用意シテ、カリニ庵ヲムスビテ修行セラレケリ、七日ノ食盡テ、芋ノ莖ノヒタルヲ水ニ入テ、ヤハラカニナシテニテ食テ、今日ノ命ヲノベント思ハレケル程ニ、薪取山人見アヒテ、其日ノ食ハ供養シテケリ、又イモノクキヲバホシテヲキテ、次ノ日水ニ入食ニアテガヘバ、又山人見ツケテ供養シケリ、其後連々人見アヒテ、時料ヲヲクリケレバ、ツキニイモノクキモチキズシテ、食物アヒツイデ行ハレケリ、

〔延喜式 三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料、〔○中略〕僧別日菓菜料、〔○中略〕芋六合、〔菓子幷菜料各三合〕

〔延喜式 三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、〔○中略〕芋子四升、〔正九十十一十二月〕〔○中略〕中宮准此、其東宮雜菜五升、〔○中略〕波々古芋子各二升、

〔東大寺要錄 五〕年中節會支度〔寬平年中日記〕

一元節　客備料米〔在別支度、但彼日食堂隨員〕　太僧一人料〔○中略〕　芋子一升〔代米五合〕

〔雍州府志六土產〕芋魁並芋莖　九條邊專種之、其根一塊、形如老茄子、是謂芋頭、煮而食之、其莖謂土芋莖、里芋莖其色青、其味不佳、其根專用之、一種有稱唐芋者、其莖薄紫色也、長大者有至六尺餘者、其味甘而堪食之、其根比里芋則爲劣矣、

〔今昔物語三十一〕佐渡國人爲風被吹寄不知島語第十六

今昔、佐渡國ニ有ケル者、數一船ニ乘テ物ヘ行ケルニ、奧中ニシテ俄ニ南ノ風出來テ、船ヲ北樣ニ箭ヲ射ルガ如クニ吹キ遣リケレバ、船ノ者共、今ハ限リゾト思テ、艣ヲモ引上テ、只風ニ任セテ行ケルニ、奧ノ方ニ一ノ島ヲ見付テ、構テ彼ノ島ニ著バヤト思ヒケルニ、思ノ如ク其島ニ著ヌ、○中略島ノ者寄來テ云ク、此ノ島ヘ呼ビ可上ケレドモ、上ナバ其ヽ達ノ爲ニ惡キ事ノ有ヌベケレバ也、此レヲ食ヒテ暫ク有ラバ、自然ラ風直リナム、其ノ時ニ本國ニ返リ可行キ也ト云テ、不動ト云フ物ト芋。頭。ト云フ物トヲ、持來テ食スレバ、糸吉ク食テケリ、不動ト云フ物モ極テ大キ也、芋頭モ例ノヨリモ事ノ外大キニテナム有ケル、此ノ島ニハ此ヲ食物トシテ過ル也トゾ云ケル、

〔徒然草上〕眞乘院に、盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり、いも。が。し。ら。といふものを、このみておほくくひけり、談義の座にても、おほきなる鉢にうづだかくもりて、ひざもとにをきつゝ、くひながら文をもよみけり、煩ふ事あるには、七日二七日など療治とてこもりゐて、思ふやうに、よき芋がしらをえらびて、おほく喰ひて、よろづの病をいやしけり、人にくはすることなし、たゞひとりのみぞくひける、きはめてまづしかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫にうりて、かれこれ三萬疋を、いもがしらのあしとさだめて、京なる人にあづけをきて、十貫づゝとりよせて、芋がしらをともしからずめしけるほどに、又こと用にもちゆる事なくて、其あしみなに成にけり、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕芋○中略

等の婦女篠と手引てふ金篦を提げもて〇略註田に下り、芋の大なるを撰み、手引もて根鬚の四邊を周鋤て取上つゝ、小きのは田に殘し置て三年一收こと也、又婦女布帛の縷を染む、其色や赤褐にて千回百般浣といへども脱ず、倘その莖を吾家に採もち還て染る時は、其色を發さず、唯其所に就て且折且染る也、寒國に此芋希し、

芋栽培

〔延喜式 三十九内膳〕耕種園圃

營芋一段種子二石、總單功卅五人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、畦上作料理功四人、殖功三人三月、壅功六人、芸三遍六人五六七月、度別三人、掘功四人、擇功十人、

〔農業全書 五山野菜〕芋

芋は軟白沙に宜しとて、ごみ沙などいかにも和らかなる深き肥地の、終日は日のあたらぬ所、或河の邊り、其外少水氣の濕氣はもれやすき所を好みて、高くかはきたる薄き地などは、すべてよからず、又地はいか程も深きを好む物なれども、種る事はさのみ深くはうゆべからず、ふかさ二三寸にして、上より牛馬糞あくた枯草など、何にても地のふくやぎ和らぐ物を多くおほひ培へば、子多くさきて、大なる物なり、〇中略山城の鳥羽にて、瓜田の間に芋をうゆる事は、畦のはゞ一間ばかりもあり、中一通りは瓜をうへ、瓜區の四方に芋を一かぶづゝ、生立をき、瓜を取終りて中うちし、糞を入培ひ、其外手入つねの芋畑と同じ、

芋利用

〔宜禁本草 乾五菜〕芋頭。 辛平有毒、靑芋細長而毒多、初煮須灰汁、易水煮乃堪食、白芋眞芋紫芋、毒少、蒸煮啖之、野芋大毒不堪啖、如一根並殺人、土漿救之、冬月食不發病、他月不可食、鯽魚鱧魚和作臛良、久食虛勞無力、煮汁洗膩衣、白如玉、浴去身上浮風、產後煮食之破血、飲之止血渴。 芋子。卽四邊附生、多食發痼疾、炊煮服之、喜動風、多食滯氣困脾、主寬腸胃、充肌膚、滑中、下氣補虛、破血、芋葉。冷無毒、除煩止瀉、療姙心煩悶、胎動不安、搽蜂螫處愈、

東奥にて黒茎、遠江などにて女芋と呼べり、○眞芋肥後あたりにて云○臺乃芋或頭の芋とも○中略赤いもは高三尺より五六尺にも至る、其魁大缶の如し、地深は長く、淺ければ圓し、此物黒皮厚く、毛多く、肉は白し、絶て蘞なく、味柔滑なり、又栗芋てふ種は、生ながら食ふべし、京師近郊には隴區に水を引て蒔るもの殊に茎肥太し、四時ともに取用ふ、○註略○八頭芋亦日八口、又親せ賀美芋など云、子芋の魁の四旁に圓附て生る故の名なり、此もの魁扁く、一頭に數芽を生す、故に名とす、茎少紫く尾細にして、下に子芋支出なり、○切芋と云あり、魁を幾にも切分て、灰に塗てうゝるものぞ、肉赤く、粘あること餅の如し、○註略○穴芋は皮薄し、穴、書紀に通凡と訓る、此義也、植る時圃中を一所づゝ穴を掘窪て母魁を置、故に名とす、大なるは尺に餘れり、○音頭芋、魁極て巨なるは尺五寸回に過て、長さも是に稱し、皮薄く、味も菲く子少し、大隅種島に產るは甚大きく、頭巨にて長し、○中略○霜芋、亦日島芋、蓋しもとしま音近し、又是を根芋あるは蘞芋など稱ふ也、此芋中の中手なり、茎甚高からず、茎葉ともに淡青し、味蘞くて人の咽を戟かす、魁はなく、子は根を環りて多く附り、皮薄く毛なし、外は黄白色に肉白し、清人是を芋卵、或は芋仍と云、中夏の頃出すもの其味よし、秋に到りて子熟れば稍劣る、又能貯ふれば明春に及びて食用に供ふなり、唐本艸に青芋とあるは、即此ものなり、○中略○蓮芋畿内○臺乃芋西州魁なく、唯茎を採用る故に名く、○中略此もの種子なし、春暖を得て宿根より芽を發し、高三尺許に至り、子芋を植しは、本年の中には長がたし、茎葉の形もろくて淡縹色なり、皮剝易し、又幹の中荷茄のごと孔あるをもて蓮芋の名を負す、生ながら魚生に伴ひ、酢醬に和て食ふ、夏秋の変亦一の佳趣を得たり、煮は生に及ず、此もの秋の季霜將に降なんとすには、株の上に穢の罩しつゝ、其儘に種子となすべし、別に埋るはあしゝ、○田芋○水芋並に水田の中に栽るよりの名也○中略此もの東西共に暖地水中に栽る也、或は稻田の際に培へり、形青芋に似て、茎僅に尺許、春の末に舊茎より生り、味勝たり、獸肉に変て羹とす、南島專之を營る、島時は海風多し、此芋は水田に栽る故風損なし、栽るには芋の土頭涯を一二分切て、茎を一寸許殘し、切口をば田に打沒置ば、其もの復芋と成る、沖繩等

集解、處處多有、二月種芋子肥大者、生苗葉、似荷而長、莖青紫色、三邊圓、一邊凹、高尺餘、或三五尺、采莖乾者俗稱芋柄、源順曰、唐韵莪音耿、芋莖也、和名以毛加良、一曰以毛之、今未聞稱者也、其花黃色、旁有一長萼護之、如葉之卷而不常有、根如烏頭、一頭兩邊生數子、山中田園沃地生者、肥圓最好、又一種有全載人咽者、此稱蕟芋、青芋及野生者亦然、味粗不可食、自秋末至冬、作魁味尙甘美、有魁大子多者、有子少者、有味美者、有不美者、有蕟者、有青者、有白者、有紫者、有黃者、其狀不一、世人稱芋頭芋子、俱愛美之、就中近世八月十五夜賞月者、必以芋子青連莢豆而煮食、九月十三夜賞月者、以芋子著薄皮者稱衣被、與生栗煮食、正月三朝以芋魁入雜煮中、而俱賞之、上下家家爲流例也、芋莖生乾俱作蔬食、攝州和州江州及肥之後州等處出乾芋莖、色白而太長、最脆美也、一種有蓮芋者、芋有數小竅、莖亦同、而如蓮莖之有竅無絲、味亦俱好、一種有栗芋者、生食甘美不蕟、如生栗及烏芋、煮食亦肉實美、然不似熟栗之甘爾、

〔和漢三才圖會 百二柔滑菜〕芋(音虚)　土芝　蹲鴟　家芋　和名以閉都以毛、俗云里芋、對山芋名之、○中略　靑芋、粒芋　其莖有紫理、子小圓、味美、　唐芋　莖帶紫色、魁大子少、其子足細長、魁味美似栗、○中略
俗云蕟芋(惠久以毛)此亦有二種、一種其子如常而細長、一種如薑而附生於魁、味爲勝、

〔成形圖說 菜二十二〕凡芋に早中晩の屬、水旱の二種あり、其品數十名にして、大小と圓く長き等の異、又は味の美惡、地道の厚薄に因て諸道同じからず、○中略　早芋は七月生靈會の頃に熟て、中手なるは八月に及て取れり、早手は鶴兒芋てふものを上等とす、(其芽長きが故に名く、沖繩にて芋の大名を鶴の子と云、こは西土の蹲鴟と云)に相似たり、一種美賀志伎芋あり、(俗言野菜芋、すひき芋などゝ呼り、)子なく、根より蔓のごと四方へ筋を延して、其端より淡青莖を生ず、植るも其筋を畠に漫撒し、上より踏積糞堆の類を覆ひ置ば、中夏の頃には既く其莖を引拔つゝ、羹料に剉用て少も蕟味なし、○中略
赤芋(根莖ともに紫色なるをもて云)　栗芋(略○註)　衣被芋(皮かぶりたる名なり、又皮ながらに煮を黑煮と云、)　都芋(日向わたりにて稱ふ、南京芋とも云り、)

芋種類

〔倭名類聚抄十七芋附〕芋　四聲字苑云、芋于過反、和名以毛、葉似荷、其根可食之、　唐韻云、䔧音耿、和名以毛加良、一云以毛之、俗用芋柄二字、芋莖也、

〔伊呂波字類抄伊殖物〕蹲鴟イモカシラ　魁イモカシラ芋根也

〔下學集下飲食〕蹲鴟サンシ芋頭、イモノカシラ如鴟、故云爾、

〔易林本節用集伊草木〕蹲鴟イモガシラ　魁芋同　芋イモ家　芋莖イモノクキ　䔧イモガラ

〔和爾雅七蓏菜〕芋イモ一名土芝　芋魁イモガシラ芋頭也　蹲鴟イモガシラ出于華陽國志　踆鴟イモガシラ出于漢貨殖傳　芋葯イモノコ芋子也　芋梗イモカラ芋莖也、䔧イモジ同、

〔書言字考節用集六生植〕芋イモ香虛、一名土芝、　芋魁イモガシラ頭也、指南、芋　蹲鴟同花陽國志、汶山郡安縣有大芋、如蹲鴟、　芋莖イモノクキ　䔧イモガラ同順和名、芋莖也、

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一いも　おいも　まもとも

〔東雅十三穀蔬〕芋イへツイモ　倭名鈔に芋はイへツイモ、䔧はイモガラ、一つにイモシといふ、俗用芋柄字、芋莖也と註せり、イモといふ義詳ならず、イへは家也、イへをもて呼ぶは、山芋に對しいふ也、ツは詞助也、今の如きイモといふは總名也、根なば子イモといひ、魁なばイモガシラといひ、莖なばイモノクキといひ、葉ないばイモノハといひ、子なばイモノコといひ、其莖な乾したるを、イモガラといふ事なり、

〔物類稱呼三生植〕芋いも　駿河及美濃越後高田所在、又常陸にてぼゝと云、唐芋を遠州にて女芋と云、蓮芋、武州品川にて八ツがしらと云、又栗芋といふ所をゝし、芋莖京にていもじといふ、東國にてずいきと云、これは諸國の通語なり美濃尾張にてだつと云、奥州仙臺にてからどうと云、土佐日記いもしあらめも歯がためもなき、かうやうの國也と云々、いもしはいもにて、しは助字成共云

〔萬葉集十六有由縁井雜歌〕詠荷葉歌
蓮葉者、如是許會有物、意吉麻呂之、家在物者、宇毛之葉爾有之、

〔本朝食鑑三柔滑〕芋和名以閉都以毛、今訓以毛、或稱里以毛、

芋名稱

サ五寸許、コノ花ノ形船中ニ柱ヲ立タルガ如シ、花ニ惡臭アリ、花謝シテ後實ヲ結ブコト、天南星ノ如シ、根ノ形ハ半夏ニ似タリ、甚ダ寒氣ヲ畏ル、コレ半夏ノ類ナリ、

〔草木六部耕種法四需根〕諸藥物小草根ヲ作ル法

半夏ハ自然生モ甚多シト雖ドモ、法ヲ行テ此ヲ作トキハ、大粒ノ根ヲ夥ク生ズル者ナリ、其法壤土ノ日當能土地ヲ撰ビ、新墾故畑ヲ論ゼズ、中等ニ精碎術ノ培養秘錄ニ五等アリ、中等ハ第三四番ノ精碎術ニテ、荒野畠ヲ論セズ、牛馬ノカヲ用テ、縱横ニ幾遍モ犂返シ、石塊凝土等少シモ無ク、墾耕スルヲ云フ、其第三番ハ深一尺七八寸、第四番ハ深一尺二三寸ナリ、考合スベシ、施シ、此ニ土用中ニ濃糞ヲ一段十荷餘モ澆テ、大陽ニ照付サセ置テ、八月初ニ能ク細密ニ耙錯ヘ、直ニ種子ヲ蒔著テ、上ヨリ細土ヲ三四分覆置トキハ、翌年五月ニ、大粒ノ半夏一段三石餘モ得ラル丶者ナリ、金一兩四斗ツツ賣モ、一段年々七兩二歩ナリ、種子ハ別畑ニ作リテ取ルベシ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊賀國卄三種、〇中略半夏二斗、　伊勢國五十種、〇中略半夏六升、〇下略

〔武江產物志藥草〕隨地有之類

半夏白花多シ、紫花ハ目黑邊ニアリ、

〔佐渡志五物產〕半夏　和名ホソグミ　方言ツブロコ　所々ニアリ、採テ藥舖ニ販ギ、又他國ヘモ賣出スナリ、

〇按ズルニ、半夏生ノ事ハ、歲時部歲時總載篇二十四氣條ニ在リ、

〔新撰字鏡草〕蕷芋　二字伊。毛。

〔本草和名十七菓〕芋仁諝音于盱反、楊玄操音于句反、一名土芝梠芋、楊玄操作根、又作侶、皆音呂、野芋一名左芋、已上三名出兼名苑青芋、紫芋、眞芋、白芋、連禪芋、野芋、一名存䗣、已上七名出蘇敬注君子芋、大如升車轂芋、鋸子芋、青邊芋、夢緣芋、鷄子芋、黃色百果芋、畝取百斛早芋、七月熟九百芋、大而不美家控芋、曹芋、百子芋、魁芋、已上十三種出廣志一名長味、一名談善、已上二名出兼名苑和名以。倍。都。以。毛。、

野生多シ、圃中墓地ニ多ク自生ス、二三月舊根ヨリ數莖ヲ生ズ、莖頭ゴトニ三葉ツキテ、慈姑(ヲモダカ)花ノ葉ノ形ニ似タリ、上ノ一葉大ニシテ下ノ二葉小シ、或ハ長ク或ハ短ク變態多シ、又竹葉ニ類スルモアリ、竹葉半夏ト云フ、四五月別ニ一莖ヲ抽ズルコト、葉莖ヨリ長シ、頂ニ長筒アリ、後縱ニ開テ深キ匙ノ如シ、外ハ綠色、内ハ紫黑色ニシテ蕊アリ、南星ノ蕊ノ如クニシテ小ク、蕊上ニ長ク尾アリテ直立ス本ハ粗ク末ハ漸ク細ク尖リテ鼠尾ノ如シ、其根ハ土中ノ白蒻ノ末ニアリ、形チ圓シ、コレ宿根ナリ、採リテ藥用トス、又莖上葉際ニ小白塊アリ、嫩根ナリ、禮記月令ニ、五月半夏生ズト、(半夏生ハ夏至ノ第二候ナリ)コノ苗ハ二月ニ生ズ、五月ト云フモノハ嫩根ノ生ズルヲ云フナルベシト、先師ノ說ナリ、コレ羊眼半夏ナリ、一種オホ半夏アリ、高サ一尺餘、葉花根共ニ大ナリ、方書及附方ニ齊州半夏大半夏ト云是ナリ、藥家ニ賣ルモノハ皆和產ナリ、白色ノ者ヲ以テ上トス、其黑色或ハ赤色ヲ帶ルモノハ腐タルナリ、防州ヨリ來ルモノハ粒小ナレドモ、皮淨ク採レテ內ニ腐リナシ、藝州モ亦同ジ、江州ノモノハ皮淨ク採レズ、大ナル者ハ內ニ腐リアリ、肥後モ亦同ジ、藥肆ニテ皮ヲ去タルヲ洗半夏ト云、皮ヲ帶ブル者ヲ麴下(キクジタ)ト云、(麴ノ下地ト云フコト)至テ小ナルモノヲ豆半夏(マメハンゲ)ト云、小ニシテ賣レザルモノヲ揀ビ出シ、湯ニ浸シ杵碎、圓餠ニナシテ麴半夏ト云フ、製造精シカラズ、故ニ毒アリ、宜シク自ラ製スベシ、其法ハ修治及本草彙言ニ詳ナリ、薑汁白礬湯ニ和シテサセ、黃衣(ハナ)ヲ生ズルヲ麴半夏ト云フ、只碎テ堅メタルハ麴ニ非ズ、本草備要ニ十種ノ麴法アリ、

增、一種細葉ノモノアリ、高サ六七寸、葉細長クシテ三岐ヲナス、莖弱クシテ直立シガタシ、花實ノ形尋常ノモノニ似タリ、又一種蠻產ノ半夏アリ、又琉球ノ半夏トモ呼ブ、大抵半夏ニ似テ小ク、葉ノ形チ旋花(ヒルガホ)、或ハ苦蕎麥(ミゾソバ)葉ノ如ク、一葉ニシテ下兩方ヘ分ル、一根數葉ヲ生ズ、夏月別ニ莖ヲ抽テ花ヲ開ク、半夏ヨリ大ニシテ形天南星ノ如ク、一瓣ニシテ長サ三四寸、末下ニ曲リテ象鼻ノ如シ、瓣外淡青色ニシテ綠條アリ、內ニ光澤アリ、紫黑色ノ斑文アリテ、瓣頭ニ至テ漸ク淡ク、ソノ蘂長

サシアブミトス、穩ナラズ、コノ草モ亦天南星ノ類ニシテ別種ナリ、形狀大抵相似タリ、葉品字ヲナシテ、左右ノ二ツハ長大、中ノ一ツハ短小、肥根ノ者ハ莖高サ二三尺、花瓣ハ天南星ヨリ濶クシテ、紫黑色、鐙ノ形アリ、又一種ユキモチサウアリ、亦三葉ニシテ花筒、內白色、中ニ圓藥アリ、亦白色ニシテ雪ノ如シ、和州多武峯ニ產ス、是亦天南星ノ種類ナリ、

〔本草和名草十〕半夏一名地文、一名水玉、一名守田、一名示姑、一名羊眼半夏、生平澤者一名和姑、一名天貢、一名水洛、已上出釋藥性和名保曾久美、

〔倭名類聚抄草二十〕半夏　本草云、半夏、和名保曾久美

〔箋注倭名類聚抄草十〕蘇注云、生平澤中者、名羊眼半夏、蜀本圖經云、苗一莖、端三葉、有二根相重、上小下大、圖經、二月生苗、一莖莖端三葉、淺綠色、頗似竹葉而光、根皮黃、肉白、

〔撮壤集藥種下〕半夏ゲ

〔多識編草二〕半夏、加多保曾比加久智、又云加羅須比志也久、異名守田、本經水玉、同地文、別錄

〔書言字考節用集生植六〕半夏ハンゲ守田草、地文草、並同、ホゾクミ　半夏カラスビサク　守田草同　和姑草同

〔物類品隲草三〕半夏　和名カラスビシヤク、處處ニ多アリ、一種根葉肥大ナルモノアリ、形由跋ニ似テ由跋ニアラズ、是半夏ノ一種ナリ、蘇頌所謂生江南者似芍藥葉、根下相重ト云モノ是ナリ、蘇恭半夏ニアラズト云モノハ、其苗由跋ニ似タルヲ以ナリ、頌ガ說ニ隨ベシ、一種細葉ノモノアリ、葉長コト六七寸、廣三四分許、異品ナリ、以上二種己卯主品中予○平賀源內具之、

〔重修本草綱目啓蒙草十三下〕半夏　カタホソ醫書式　ホソグミ和名抄　カラスビシヤク京　シヤク　シサウ　ミヅダマ江戶　スズメノヒシヤク防州　キツネノシヤクシ江州　カラスノコメ　同上草津　ヘブス仙臺　カブラブス南部　クリコ肥前　ヘヒス奧州　ホゾクリ筑前　ツブロ　コ佐渡　ヘソクビ備後　一名痰宮勞歷經驗耕錄　雉毛邑月令採取　示姑本草證類　雉毛奴邑村家方

由跋

杖ハ多シ、故ニ賣者多ハ此根ナリ、肥前五島ヨリ多ク出ス、斑杖ノ名ハ蒻蒻ノ下ニ見エタリ、蘇頌ハ虎掌天南星ヲ分チ説ク、時珍ハ混ジテ一トス、宜シク蘇ノ説ニ從テ、二物トナスベシ、天南星ハ根圓扁ニシテ、黄獨(カシユウイモ)根ノ如ク、大塊唯一顆ニシテ子ナシ、蘆頭ニ鬚アリ、虎掌ハ根ノ周圍ニ小子多ク著リ、苗ノ形天南星ニ似タレドモ、莖ニ白斑ナクシテ細黒點アリ、一根一莖一葉、葉狹長ニシテ數多シ、花中ニ長蘂ナク、長線ヲ出シ垂ル、長サ一尺餘、俗ニ此ヲ浦島草(ウラシマサウ)ト呼ブ、浦島太郎釣ヲタレシ形ニ象ル、加州ニテ天狗ノハチト呼、本草彙言曰、南星卽虎掌同類而異種ト云、本草原始ニモ虎掌南星ノ分別ノ説アリ、○中略

埼、一種蝦夷産ノ天南星アリ、苗高サ七八寸、莖青クシテ淡褐色ノ斑文アリ、葉ノ形ユキモチサウニ似テ細ク、粉緑色ナリ、葉中ニ黒斑アリ、夏月花ヲ開ク、青色ニシテ淡紫色ノ斑點アリ、

〔武江産物志 藥草〕道灌山ノ産　虎掌(うらしまさう)　大タボヘンニモ

〔佐渡志 五物産〕天南星　方言ヘビノダイワウ　山中ニ生ズ、大小葉ノ二種アリ、藥ニ用ルニ小葉ナルヲ佳トストイヘリ、斑杖トイフモノ相混ジテ、同ジクヘビノダイワウトイフ、是モ其一種ナリトイヘリ、

〔本草和名 十草〕由跋、楊玄操音蒲葛反　和名加岐都波奈、

〔倭名類聚抄 二十草〕由跋　本草云、由跋、蒲葛反、和名加木豆波奈、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注、狀如烏翣而布地、花紫色、根似附子、蘇云、由跋根、尋陶所注乃是鳶尾根、卽鳶頭也、由跋今南人以爲半夏、頓爾乖越、非惟不識半夏、亦不知由跋與半夏也、陳藏器曰、由跋苗高一二尺、似蒟蒻、根如雞卵、生林下、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草下〕由跋

卽天南星嫩根ノ小ナル者ナリ、時珍ノ説ニ從フベシ、本經逢原曰、新生芽曰由跋、先師ノ説ニハム。

結實、似天南星及萬年青子而小、攅生爲一團、正紅色、至冬葉落而唯見子耳、故側植石葦而假用其葉、

歡喜草　雪餅草（皆俗稱也）

按歡喜草卽天南星變生於子種者也、近頃始出豫州移栽攝陽、人以爲奇異、好事者附異名也、三月生一莖、作花房、其本一二寸如筒、帶微褐色、而爲半片如匙、白色亦似佛後光、末尖曲覆于花上、其花生筒中、圓白如餅、故名雪餅草、四五月花落結實、形如玉蜀黍而細小、青色熟乃紅色、莖葉如蒟蒻、

〔重修本草綱目啓蒙（十三下毒草）〕虎掌　天南星　トラノオ　ヤマニンジン　テンナミサウ（加州、天南星ノ音ノ轉ジタルナリ、）一名半夏精（輟耕錄）　蛇頭草根（藥性奇方）　豆也摩次作只（採取月令）　豆也麻造作只（村家方）　豆也末注作只（鄕藥本草）

深山幽谷ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一根一莖、根肥大ナル者ハ莖徑一寸許、長サ六七尺、小根ノ者ハ二三尺、形圓ニシテ直立ス、淡綠色ニシテ白斑アリテ光澤アリ、其莖ニ二葉互生ス、一ハ大ニシテ下ニアリ、コレニハ長葉九ツ或ハ十三簇レリ、一ハ小ニシテ上ニアリ、此ニハ長葉五ツ或ハ九ツ簇レリ、其蔕モ亦同色ナリ、四月莖ノ梢ニ花ヲ開ク、本ハ卷テ筒ノ如シ、末ハ開テ尖レリ、蓮花ノ一瓣ノ如シ、漸ク半ヨリ前ニ折テ、筒ノ上ヲ蓋テ鐙ヲクツガヘスガ如シ、其瓣綠色ト紫黑色トノ粗キ間道（シャスヂ）アリ、筒ノ中ニ長圓棊一ツアリ、大サ小指ノ如シ、上大下小ニシテ臥槌（ヨコヅチ）ノ形ノ如シ、黃白色、花衰テ瓣黃色ニ變ジ、漸ク皺ミ垂テ落ツ、中ノ棊漸ク長大ニシテ上出ス、外ニ圓珠多ク綴リ綠色ナリ、秋ニ至レバ實ノ大サ南天燭子ノ如ク、色赤ク愛スベシ、冬ハ莖葉腐爛シ、實地ニ落來春自生ス、根ハ冬ヲ經テ枯レズ、形圓扁ニシテ蒟蒻（コンニヤクイモ）ノ如シ、一種斑杖形狀甚ダ相似テ紛レ易シ、山谷ニ多シ、又竹林中ニモ生ズ、莖淡綠色ニシテ紫黑斑アリ、葉花實根並ニ天南星ニ同ジ、唯莖紫斑花綠白間道ノ者多シ、俗ニヘビノ大八ト云、一名マムシグサ、ヤマゴンニヤク、クチナハノシヤクシ、ノドシバリ（雲州）ヘビノダイワウ（佐州）ダイハチ（南部）此ハ根ニ毒多シ下品トス、然レドモ南星ハ少ク斑

〔大和本草 六 藥〕天南星　二種アリ、一種葉芋ノ葉ノ色ニ似テ光アリ、岐アリテ三ニワカル、實紅ナリ、一歳ニ多クアツマリミノル、玉蜀黍ノ實ノ如シ、十月ニ熟ス、一種蒟蒻ニ似テクキニ黒點多シ、本草ニモ二種アリトシルセリ、花ハ反リテ鐙ノ如シ、根ヲ藥トス、藥ニハ二種トモニ用ユ、又白花アリ皆毒アリ、サレドモ虫コノンデ食フ、久ク貯ルニハアラク剉ミ、時々日ニ干ベシ、不然虫食フ、大ナル根ヲ可用、小根ハ性薄シ、製法アラク剉ミ沸湯ニ泡ス、泡シテ湯ヒエテ後、又沸湯ニ泡ス、熱ノサメザル内ニ、又泡スベカラズ、能ヒエテ後又沸湯ニ泡ス、凡七度、又剉ミ日ニホシ、アラク末シ、生薑ノ自然汁ニヨキホドニ和スベシ、甚シルク和過タルハアシヽ、堅メテ小餅トシ、籃ニ入上ニ木葉ヲ掩ヒ、器ニ入フタヲオホヒ、又戸棚ノ内ニ入置、或カウジ屋ノムロニ七日ホド入置、黄ナル麴出ル時取出シ、クダキ日ニホシ炒ル、夏月ニ製スベシ、麴出ヤスシ、製法ヨカラザレバ毒サラズ、半夏モ同ジ、本草通玄曰、生ニテ用者温湯洗過、礬湯浸三日夜、日日換水晒乾、熟用者酒浸一宿、入甑蒸一日、以不麻舌為度、時珍云、小者為由跋、乃一種也、今案山中ニ似天南星而小者アリ、是由跋ナルベシ、

〔和漢三才圖會 九十五 毒草〕天南星　虎掌　鬼蒟蒻　虎膏　和名於保々曾美　〇中略

按虎掌本名也、倭名抄亦有虎掌無天南星、蓋天南星之名、始出於唐時也明焉、今却虎掌無識者、疑此從虎掌子種所出異品、名天南星、一物異品異名也　近頃亦出異品、歡喜草武藏鐙之類是也、既虎掌與天南星相似而各別也、又天南星有二種、花房淺青色、而末如鼠尾者、高不過尺、惟如匙及佛後光也、無鼠尾者高二尺許、是自一類二種也、三才圖會及本草必讀出虎掌與天南星之二圖、為二物明焉、天南星日向薩摩之產最良、豐前中津、藝州廣島之產次之、

武○藏○鐙○　草珊瑚

按此出於虎掌子種高尺許、葉大似虎掌、三四月開花、外青内赤黒色、形似馬鐙、故俗名武藏鐙、其稍秋

天南星 虎掌

かずならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかくねをとゞめけん、とのみほのかなり

〔枕草子三〕歌の題は、みくり

〔枕草子五〕あきのぶの朝臣のいへあり、そこもやがて見んといひて、車よせておりぬ、田中だち、事そぎて、馬のかたかきたるさうじあじろびやうぶ、みくりのすだれなど、ことさらにむかしの事をうつしいでたり、

〔後拾遺和歌集十一戀〕女のもとにつかはしける　藤原道信朝臣

あふみにかありと云なるみくりくる人くるしめのつくま江の沼

〔新撰字鏡草〕虎掌（蛇枕、又蛇乃宮曾久佐）

〔本草和名十草〕虎掌（陶景注云、四畔有圓牙、如看虎掌、故以名之、）一名虎卷（出釋藥）和名於保々曾美

〔倭名類聚抄二十草〕虎掌　陶隱居云、虎掌（和名於保曾美）四畔有圓牙、如看虎掌、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕按類本草下品引陶注云、形似半夏、但皆大、四邊有子如虎掌、又引唐本注云、此藥是由跋宿者、其苗一莖、莖頭一葉、枝了胑莖、根大者如拳、小者如鷄卵、都似扁柿、四畔有圓牙、看如虎掌、故有此名、則知此誤蘇注為陶說也、但本草和名引與此同、蓋輔仁誤引源君承之也、圖經、初生根如豆大、漸長大似半夏而扁、累年者其根圓及寸、大者如鷄卵、周匝生圓牙、二三枚或五六枚、三四月生苗、高尺餘、獨莖上有葉如爪、五六出分布、尖而圓、一窠生七八莖、時出一莖作穗直上如鼠尾、中生一葉如匙、裹莖作房、傍開一口、上下尖中有花微青褐色、結實如麻子大、熟即白色、自落布地、一子生一窠、

〔饅頭屋本節用集天草木〕天南星（ナンシヤウ）

〔多識編二毒草〕天南星（於於曾比、異名鬼蒟蒻、日掌）

〔書言字考節用集六生植〕天南星（ナンシヤウ）（本名虎掌、又云鬼蒟蒻、時珍云、根圓白、形如老人星、故名、）

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕荊三稜　ミ○ク○リ○和名鈔　ミ○ツ○カ○ド○藝州　ウ○キ○ヤ○ガ○ラ○伏見　ヤ○ガ○ラ○河州　ロ○ウ○ト○ウ○播州　一名削堅都尉 藥譜　削堅中尉 錄耕　牛夫月乙 本草集郷

今漢渡ナシ、水澤中ニ多ク生ズ、春後舊根ヨリ苗ヲ生ズ、葉ハ臺葉ニ似テ狭ク厚ク光アリ、一科ニ叢生ス、長サ二三尺、中心莖ヲ出ス、高サ四五尺、三稜アリテ削リ成スガ如シ、葉互生ス、上ニ至リテ漸ク短シ、莖頂ニ三小葉ヲ對生シ、上ニ小叉ヲ分生シ、黄紫色ノ小圓穗ヲ出ス、地楊梅(スヾメノヤリ)ノ穗ノ形ノ如シ、根ハ芋卵ノ如ク兩頭尖リ黑毛アリ、又三方ニ短莖ヲ分チ、其末ゴトニ嫩根ヲ生ズルコト品字ノ如シ、後漸ク大ニナリテ新苗ヲ生ズ、藥舖ニ賣ルモノ、丹波肥後ノ產ハ皮ヲ去リ易シ、上品ナリ、佐渡ノ產ハ扁クシテ皮ヲ去リ難シ、コレハ救荒本草ニ載スル黑○三○稜○ニシテ、集解ノ黑三稜トハ別ナリ、又葧臍ニモ黑三稜ノ名アリ、黑三稜ハコレモ俗ニミクリト呼ブ、蒲ノ葉ニ似テ狭窄ニシテ三稜アリ、叢中ヨリ圓莖ヲ抽テ、上ニ青毬數塊ヲ貫ヌキテ累々タリ、其毬大サ六七分、慈姑實ニ似タリ、コレ集解ニ謂ユル淮南江浦根ナリ、藥用ニハ下品トス、又京師ノ加茂川及御菩薩(ミゾロ)池ニ生ズルモノハ形狀略同ジケレドモ根小サシ、赤黑三稜ノ一種ナリ、別ニ又石三稜(クサスゲ)、草三稜(オホカヤツリ)アリ、増、石三稜ハ水陸共ニ產ス、大抵三稜ノ葉ニ似テ硬クシテ短シ、長サ僅ニ一二尺、春月別ニ莖ヲ生ジテ、ソノ末ニ枝ヲ分チ各穗ニナリテ花ヲ開ク、黑色ニシテ正中ニ白キ蕊アリ、實熟スレバソノ穗瘦テ下垂ス、一種山中石間ニ生ジテ、形小ク葉細キモノアリ、イワスゲト名ク、

〔古今和歌六帖 六〕みくり

戀すてふさやまの池のみくりこそ引ば絶すれ我やねたゆか

〔源氏物語 二十二 玉鬘〕ものまめやかに、あるべかしくかき給て、はしにかく聞ゆるを、

　しらずとも尋てしらんみしま江におふるみ○く○り○のすぢはたえじを、となんありける、中略○まづ御返をとせめてかゝせ奉る、中略○

スベカラズ、病ニ隨テ生ト炒ト黑炒ト三種用ユベシ、一ヤウニ炒過シテ用ベカラズ、

〔和漢三才圖會 芳草九十三〕香附子○中略

按香附子處處多有之、而西國之產細小不佳、攝州住吉之產爲上、近時京師坂陽以鐵杵碓搗碎出之、呼曰砂利香附子、以製方簡便人喜求之、然所犯鐵再宜製、其葉不過七八寸、非可爲雨衣者、與水莎草混註者矣、

三稜草

〔本草和名 草九〕莎草 一名縞、楊玄操音古晧反 一名俟莎、實名緹、楊玄操音他禮反 鼠蓑、楊玄操音蘇和反 根名香附子、一名雀頭香、一名沙草、已上三名出蘇敬注 一名三稜草、出稽疑 一名烏堙、出藥訣 一名滈菮、一名地髮、出雜要訣 一名鎬隻、一名青莎草、已上出釋藥 和名美久利、一名佐久、

〔本草和名 二十本草外藥〕三稜草、本草所謂莎草是也 和名美久利、

〔倭名類聚抄 二十草〕三稜草 本草云、三稜草、稜音魯登反、和名美久里、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕千金翼方不載三稜草、證類本草中品引宋開寶本草載之、則知唐本草無三稜草也、按本草和名莎草條云、一名三稜草、出稽疑、本草外藥條亦云、三稜草、本草所謂莎草是也、出本草稽疑蓋源君引之、則單云本草非是、○中略 圖經、春生苗高三四尺、似茭蒲葉、皆三稜、五六月開花、似莎草黃紫色、生淺水傍或陂澤中、其根初生成塊、如附子大、或有扁者、傍生一根、又出苗、時珍曰、三稜多生荒廢陂池濕地、春時叢生、夏秋抽高莖、莖端後生數葉、開花六七枝、花皆細碎成穗、黃紫色、中有細子、其莖葉花實俱有三稜、並與香附苗莖花實一樣、但長大爾、其莖光滑三稜如椶之葉莖、莖中有白穰、剖之織物、柔韌如藤、

〔類聚名義抄 八艸〕三稜草 ミクリ

〔大和本草 六藥〕三稜 葉有三稜、莖末有葉、似香附子、高四五尺、矢ガラノ如シ、故河內ニテハ矢ガラト云、水草也、

雀腦香 本草原始

莎草ハ苗ノ名ニシテ、香附子ハ根ノ名ナリ、而シテソノ苗ヲ用ルニハ、カヤツリグサヲ用ルヲ良トス、蜀漆、常山、澤漆、大戟ノ例ノ如シ、故ニ根ナキモノヲ莎草トシ、カヤツリグサト訓ジ、根アルモノヲ香附子トシ、ハマスゲト訓ズベシ、宗奭ノ說ニモ根上或有或無ト云フ、カヤツリグサハ品類多シ、倶ニ香附子ニ似テ春生ジ、冬枯レ、根ニ塊ナシ、ソノ花ハ香附子ヨリ粗ナリ、香附子ハ田野道旁甚多シ、海邊殊ニ甚シ、故ニハマスゲト呼ブ、葉ハ臺ノ葉ニ似テ小ク濶サ一分許、長サ六七寸、肥地ノモノハ一二尺、三春ニシテ光アリ深綠色、一根ニ叢生ス、夏月莖ヲ抽ルコト一尺許、ソノ頂ニ數叉ヲワカチ、上ニ、碎花簇生ス、莎草花ニ似テ細ク紫黃色、此根ニ一魁アリ、麥門冬(ヤブラン)ノ如クニシテ大ナリ、黑皮有リテコレヲ裹ム、新根ハ旁鬚ニ生ジ、數塊一窠ニ生ズ、肆中ニ漢渡アレドモ、皆黑皮ヲ去ラズシテ輕虛ナリ、故ニ和產ヲ上品トス、和產ハ石臼ニテツキ皮ヲ去ル、ソノ時碎ケテ末トナリタルヲ粉香附子ト云、半碎ケタルヲ、ジャリ香附子ト云、形全キヲ粒香附子ト云、然レドモソノ舂ク時多クハ鐵杵ヲ用ユ、此藥固ヨリ鐵ヲ忌ムモノナレバ、藥舖ニテ山出シト稱シテ、皮ヲ去ラザルモノヲ用テ、自製スルニシカズ、又赤白ノ二品アリ、白キモノハ嫩根ナリ、藥用ニ良トス、赤キモノハ老根ニシテ下品ナリ、

〔廣益地錦抄 七〕香附子(かうぶし) 宿根より生ル、土中をはいて多く出る、葉ハ細く麥門冬に似て、せきせうのごとく、所々道邊に多生ル、

〔大和本草 六藥〕香附子 上代ハ藥ニ不用、陶弘景曰、方藥不復用、是梁ノ時モ猶未爲藥而用也、今案ニ古人ノ詩ニハ、莎草ヲ多ク作レリ、然レドモ古昔要藥ナル事ヲ不知シテ不用、後世ニハ用之テ要藥トス、然ラバ本草ニ不載、藥ニモ猶功用アル物多カルベシ、本草香附子ノ集解ニ、時珍此事ヲ論ゼリ、○中略 今案凡香氣アル物ハ火ヲ忌、香附子ハ生ニテ用、炒テモ用、血ヲ止ル藥ノ外ハ、常ニ炒過

増、一種莞ニ白斑アルモノアリ、又縦ニ白キ間道アルモノアリ、共ニシマガマト呼ブ、又リウキウシチトウノ二名ハ、𦱤芏ヲ以テ誤混ジタルモノナリ、

〔延喜式 三十八 掃部〕諸司年料
蔣沼一百九十町 在河内國茨田郡 刈得 中略 莞五百圍 攝津國傭夫刈運

〔倭名類聚抄 二十 草〕莎草 唐韻云、莎草 蘇禾反、揚氏漢語抄云具々、 草名也、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕廣韻云、莎草名、此衍二一草字、按本草和名引本草稽疑云、莎草一名三稜草、故輔仁於三稜草條載莎草、並訓美久利也、然證類本草莎草根條引唐本注云、莖葉都似三稜、又京三稜條引圖經曰、五六月開花似莎草、並以莎草三稜為別草、故漢語抄則訓莎草為久具、源君從之分三稜草莎草為二物也、蘇敬注本草莎草云、此草根名香附子、一名雀頭香、莖葉都似三稜、根如附子、周匝多毛、交州者最勝、大者如棗、近道者如杏仁許、圖經云、今近道生者、苗葉如薤而瘦、根如筋頭大、衍義、莎草、其根上如棗核者、又謂之香附子、今人多用、雖生於莎草根、然根上或有或無、是今俗呼波萬須介、或呼加夜都利具佐、漢語抄訓久具、

〔書言字考節用集 六 生植〕香附子 カウブシ 莎草、續根草、地毛、地巔、水巴戟、雷公頭並同、 莎草 カヤツリグサ 上同 莎草 マスゲ ハマスゲ 香附子 同上 水香稜 地毛、地巔並同、

〔東雅 十五 草卉〕莎草クヽ 中略 蘇頌圖經に、此草用莖作鞋履と見え、李東璧本草にも、可為笠及雨衣、又作蓑など見えたり、即今俗にもクヽと云ひて、或は蓑となし、或は縄となすもの是也、クヽの義不詳、クヽとは莖也、倭名鈔莖立の字をクヽタチといふ此なり、

〔大和本草 八 水草〕クヽ 海濱斥地ニ生ズ、水陸共ニ宜シ、葉ハ香附子ノ葉ニ似テ、背ニカド一條アリ、織テ短席トス、農人コレヲ以馬具トシ、又縄トス、武人是ヲ用テ陣中ニ飯ヲ包ム苞トス、槌ニテウツベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 九 芳草〕莎草香附子 ハマスゲ ヤガラ 讃州 一名回頭青 濟異錄 水三稜 品字箋

莞

叢垂ス、夏月莖ヲ抽テ花ヲ開ク、山莎(ミノスゲノ)穗ニ似テ小クシテ黒色、後實ヲ結ブ、
崖椶ニ兩說アリ、此書ノ圖ニ據レバ、イトスゲナリ、證類本草ノ圖ニ據レバ、サヽスゲナリ、サヽスゲハ一名タガヲサウ、尾州ヤマヲバコ、播州ギヤウジヤサウ、薩州山中陰處ニ甚ダ多シ、一根數葉、長サ三四寸、濶サ一寸許、三脊アリテ薹(スゲ)ノ如シ、又萱草ノ葉ニ似テ短ク淡綠色、高山ニハ深紫斑點ナル者アリ、皆夏中花ヲ開ク、形色ヒメスゲニ異ナラズ、秋後苗枯レ根ハ枯レズ、形麥門冬(ヤブラン)ノ如ニシテ、粗ク堅ク連珠ヲナス、内ニ硬心アリ、コヽニ根去粗皮ト云ハサヽスゲナリ、

〔倭名類聚抄 二十草〕莞　唐韻云、莞(音完、一音丸、漢語抄云、於保井、)可以爲席者也、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕玉篇云、莞似藺而圓、可爲席、小雅斯干釋文、莞草叢生水中、莖圓、江南以爲席、形似小蒲、玄應音義、莞草外似葱、内似蒲而圓、爾雅、莞苻蘺、小雅斯干正義引某氏注云、本草云、白蒲一名苻蘺、楚謂之莞蒲、藝文類聚引舊注云、今水中莞蒲可作席也、郭璞注、今西方人呼蒲爲莞蒲、江東謂之苻蘺、說文、蒚苻蘺也、莞艸也、可以作席、

〔倭訓栞 中編二十二不〕ふとゐ　大莞也、おほゐともいへり、如意ともいふ、

〔重修本草綱目啓蒙 十六水草〕香蒲 中略 ○

莞　ツクモ(和名抄)　タクマモ　オホキ(共同上)　マルスゲ　マルガマ　ニヰイ　オキ(仙臺)　フトキ　ブツジヤウ(大和本草)　トウキ(勢州、濃州、)　リウセイ(江州)　サシモグサ(藝州)　リウキウ(播州)　シチトウ(備前)　オヱ(羽州)　一名水葱(正字通、同名アリ)　翠管(同上)　葱蒲(訓蒙字會)　蔙(正字通俗名)　蔙(同上)

增一名夫離(東方朔傳注)

水澤中ニ生ズ、葉濶サ五分許、正圓ニシテ心ナシ、長サ丈餘、深綠色、一根ニ叢生ス、夏巳后葉ノ梢ヨリ、少シ下ニ花ヲ旁出ス、薦草(サンカクスゲ)ノ花ニ似テ褐色ナリ、秋時葉ヲ刈リ置キ編テ席トス、ガマムシロト呼ブ、仙臺ニテオキムシロト云フ、漢名水葱席、(唐六典)

黄菅　紅菅

〔大和本草　七花草〕黄莎(キスゲ)　葉ハスゲニ似タリ、花黄ニシテ萱草ニ少似テ單葉ナリ、又ベニスゲアリ、花細長色紅ナリ、七月ニ開ク、

〔和漢三才圖會　九十四末濕草〕粉條兒菜(きすげ)　黄菅草　紅菅草　共俗稱

農政全書云、粉條兒菜生田野中、其葉初生就地叢生、長則四散分垂、葉似萱草葉而瘦細微短、葉間攛葶、開淡黄花、葉甜、煠熟油鹽調食、

按黄菅草高二三尺、葉似萱草而細硬、又比菅則少潤、六月開花、黄色單葉、似姫萱草花、所謂粉條兒菜是也、

紅菅草　葉與黄菅草同、抽莖開花、濃紅色似萱草花、

〔剪花翁傳　三四月開花〕黄菅(きすげ)　萱草の少きものに似たり、開花四月中旬、方日向、地二分濕、土えらばず、肥淡小便、芽出しまへにそゝぐべし、分株九月末也、

香茅

〔和漢三才圖會　九十二末山草〕香茅　菁茅　瓊茅　俗云太末保、又云蓑草、〇中略

按香茅葉似菅茅(チガヤ)而有三稜、微柔軟、農家用之作雨衣、蓑、其穗黄赤色、其他茅穗白、播州多有之、

崖椶

〔和漢三才圖會　九十八石草〕崔椶　俗云加牟豆久、崖椶之字香之訛乎、

本綱、崖椶施州石崖上有之、苗高一尺以來、狀如椶、四季有葉無花、土人采根去粗皮入藥、〇中略

按件四草〇崖椶、半天回、雞翁藤、野蘭根、共生施州、不謂有於他國、〇略註本朝尚無之、但有而不見識乎、

崖椶　生深谷石間、其根株大有赤黑毛、似椶櫚、莖硬長亦如椶、其葉似番蕉(ソテツ)葉而片片微圓、如編破萱、四時不凋、無花實、移栽人家不活、其枯葉經年不落、立花者用插水則潤亦奇也、總形狀近于番蕉、遠于椶櫚也、蘇頌之時代中國番蕉不有、故唯謂如椶乎、

〔重修本草綱目啓蒙　十六石草〕崖椶　〇〇〇イトスゲ

山岸ニ多ク生ズ、又平地ニモ陰處ニ多シ、葉極テ細ク、龍常草(タツノヒゲノ)葉ノ如ク深綠色、長サ一尺餘、一根ニ

〔延喜式内匠十七〕御輿一具、〇中略蓋料菅一圍、山城國進
野宮裝束　御輿中子菅蓋一具、〇菅圍笠縫氏參來作、井骨料材、從攝津料、〇下略

〔倭訓栞中編十一〕すげがさ　菅蓋也、古歌に三島すげ笠、又王のみかさにぬへる有馬すげとも見えたり、延喜齋宮寮式に、御輿の蓋の事に、攝津國笠縫氏より參り來りて作ると見えたり、祭儀に用るは神代よりの風なり、今も伊勢齋宮の遺跡のあたりには、菅の小笠を賣もの多し、三才圖會に、臺笠臺夫須也、卽莎草なりと見えたり、長曆官符に、菅笠柄長八尺五寸と見ゆ、今だいがさとするも、臺笠の義などにや、

〔播磨風土記宍禾郡〕敷草村、〇中略此村有山、南方去十里許、有澤二町許、此澤生菅、作笠最好、

〔古事記下仁德〕天皇戀八田若郎女、賜遣御歌、其歌曰、夜多能、比登母登須宜波、古母多受、多知迦阿禮那牟、阿多良須賀波良、許登袁許曾、須宜波良登伊波米、阿多良須賀志米、爾八田若郎女答歌曰、夜多能、比登母登須宜波、比登理袁理登母、意富岐彌斯、與斯登岐許佐婆、比登理袁理登母、

〔萬葉集七雜歌〕旋頭歌
橋立、倉椅川、河靜菅、余苅、笠裳不編、川靜菅、
右二十三首、〇二十二首略柿本朝臣人麿之歌集出、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕譬喩
三島菅、未苗在、時待者、不著也將成、三島菅笠、
三吉野之、水具麻我菅乎、不編爾、刈耳苅而、將亂跡也、
右四首〇二首略寄草喩思

〔萬葉集十四東歌〕雜歌
美奈刀能也、安之我奈可那流、多麻古須氣、可利己和我西己、等許乃敝太思爾

ノ如ニシテ長シ、笠ニヌフ、近江伊勢多ク水田ニウヘテ利トス、他州ニモ多クウフ、詩ノ陳風ニ曰、東門之池可₂以漚₁菅、朱子傳曰、菅葉似₂茅而滑澤、莖有₂白粉柔韌₁宜₂為₁索也、今按スゲノ類多シ、水澤ニ生ズ、

〔農業全書 六 三草〕菅

すげを種る法、八月古かぶを引わりて、三本程づゝ一手に取、間を五寸許をきて、稻をうゆるごとくにし、糞は何にてもいとはず、鰯などは云に及ばず、有所にては牛馬鹿などの毛を糞にするもよし、二三月の比、わかく出る心葉をぬきて捨べし、其まゝ置ばわきの葉さかへず、刈干事は藺にかはる事なし、土用の中刈て、晴日に干し上、筵に包み畑の當らぬ所にをくべし、長短をゑり分る事は、桶を前にをき、其中にて本をつきそろへ、末を取て長きを上とす、天氣を見合せ、二三日に干し上ざれば色よからず、若夕立にあへば、色あしきのみならず、さび入て用に立ず、菅を作る地は、深田の稻の出來過るを上とす、相應の地にては、稻にをとらぬ厚利の物と云り、笠にぬふ人手間ある所などは、おほく作るべし、

〔草木六部耕種法 五 需幹〕莎(スゲ)モ亦莞ノ類ナリ、以テ笠ヲ製スベシ、此ヲ作ル田地ヲ調理(コシラヘ)ルコトハ、席艸ニ同ジ、苗ハ古株ヲ秋分ノ前後十日許ノ内ニ掘リ出シ、其善キ所ヲ撰ビ分テ、三四本ヲ一株ニシテ植ベシ、糞養スルモ大抵莞藺ニ異ナルコト無シ、且禽獸魚鼈等ノ肉ヲ、水ニ漬テ腐タル汁ヲ澆ルハ殊ニ宜シ、春分後ニ至テ心葉ノ立出タルヲバ、悉ク拔棄ベシ、然セザルトキハ繁衍コト能ハザル者ナリ、土用中ニ刈採テ、二三日ニ急テ乾上ベシ、若シ雨ニ遭カ、或ハ日數カヽリテ乾タルハ皆色惡ク、無用ノ物ト爲ル、察セズンバアルベカラズ、○中略 此莎(カサスゲ)ハ寒國ニテモ繁生スル者ナレバ、耕農ヲ業トスル者ノ作ルベキノ一物タリ、予○佐藤信淵モ亦上總ニテ莎ヲ作リ見テ、熟其利潤ヲ察スルニ、稻ヲ作ルヨリハ厚シ、

至秋而枯、其根至潔白、

〔段注説文解字艸一下〕菅茅也、詩白華菅兮、釋艸曰、白華野菅、毛傳足之曰、已漚爲菅、按詩謂白華既漚爲菅、又以白茅收束之、菅別於茅、野菅又別於菅也、从艸官聲、古顔切、十四部、

〔書言字考節用集六生植〕菅スゲ陸璣云、似茅而滑無毛者、莎同

〔日本釋名下草〕菅スゲ　すが〳〵しとは淸き心也、祓の具に用て淸き物なり、一説すぐ也、葉もなくてすぐにたつ草也、

〔東雅十五草卉〕菅スゲ　茅チ　萱カヤ　倭名鈔に菅はスゲ、茅はチ、萱はカヤといふと註せり、蘇頌圖經、李東璧本草等に據るに、彼にしては、茅といひ菅といふ、異れる物とも見えず、白茅は詩に云ふ菅茅也とも、菅また茅類也とも、又茅に數種あり、夏花さくを茅とし、秋花さくを菅とすとも見えたり、此にして菅讀てスゲといふ者も、茅の類也、圖經註に茅蒲と見えしも、詩疏に臺草といふもの、一種こゝにして笠に縫ふもの、漢もまた然り、一種莎といふもの、此にしては山菅などいひて、蓑となせしものと見えたり、但し麥門冬讀てヤマスゲといふものとは、其名同じけれども、其物は同じからず、万葉集抄にスゲとはスグ也、衆草は枝葉ありて、をさなきより生ひしげるもあるに、菅はすぐにたてる物なりといふといふなり、たゞ其細く立てるをいふ事、芒をスヽキといふが如くなりとぞ聞ゆる、

〔倭訓栞前編十二須〕すげ　菅をよむはすがと通ず、すが〳〵しき意、歌に白菅、岩小菅などよめり、祓中にも用るものはみそぎのそぎとすげと同じ語なるをもて也、穢をはらひ放ソケるの名とす、住吉にて六月祓を菅の祓と稱すといへり、新撰字鏡に葌も訓せり、黄すげは仙茅也、日光黄菅あり、はますげは莎草也、姬すげは地楊梅也、又一本菅あり、

〔大和本草八水草〕菅　本邦昔ヨリ菅ノ字ヲスゲトヨメリ、スゲハ水草葉ニカドアリテ、香附子ノ葉

古事類苑

植物部十五

草四

〔新撰字鏡草〕蕳。上字。須介。

〔倭名類聚抄二十草〕菅。唐韻云、菅（音姦、字或作蕳、和名須計）草名也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕說文、菅茅也、楚辭招魂注、廣雅同、皆以菅茅爲一、毛詩小雅白華篇、白華菅兮、白茅束兮、傳云、白華野菅也、已漚爲菅、箋云、人刈白華於野、已漚名之爲菅、菅柔忍中用矣、而更取白茅收束之、茅比於白華爲脆、據毛鄭意、在野未漚、謂之野菅、刈取已漚、謂之菅、與茅同類異物、故東門之地陸機疏云、菅似茅而滑澤無毛、根下五寸、中有白粉者、柔韌宜爲索、漚乃尤善矣、中山經郭注云、菅似茅也、本草圖經云、菅亦茅類也、然則許愼王逸張揖以茅釋菅、統言之耳、但陶弘景注本草茅根云、此卽今白茅菅、詩云、露彼菅茅、其根如渣芹甜美、蘇敬於此注載菅花、亦似混同菅茅爲一、宜依鄭箋郭注爲一類二種也、李時珍曰、茅有白茅菅茅黃茅香茅芭茅數種、葉皆相似、白茅短小、三四月開白花成穗、結細實、其根甚長、白軟如筋而有節、味甘、俗呼絲茅、可以苫蓋及供祭祀苞苴之用、本經所謂茅根是也、其根乾之、夜視有光、故腐則變爲螢火、菅茅只生山中、似白茅而長、入秋抽莖開花成穗如荻花、結實尖黑、長分許、粘衣刺人、其根短梗、如細竹根、無節而微甘、爾雅所謂白華野菅是也、按白茅或單呼茅、故本草謂此根爲茅根、下條訓茅爲知、爲允、今或呼知賀夜、謂其花爲知婆奈、今俗呼都婆奈者訛也、菅乃可充加夜、訓須計者非是、圖經曰、茅根春生、苗布地、俗間謂之茅針、夏生白花茸々然、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕龍舌草

大和本草ニミヅアサガホニ充ツルハ穏ナラズ、ミヅアサガホハ胡蘿蔔ノ如キ根ナキ故ナリ、然レドモ其類ナルベシ、ミヅアサガホハ一名ミヅオホバコ、ミヅホコリ筑前ミヅアフヒ同上カハホウヅキ備前タオホバコ江州池澤及田中ニ生ズ、一根數葉形車前葉ニ似テ薄ク、黄綠色ニシテ常ニ水底ニアリ、秋ニ至テ莖ヲ抽テ頂ニ一花ヲ開テ水上ニ出ヅ、三瓣、大サ錢ノ如ク、淡紅色又白花ナル者アリ、共ニ花下ニ實アリ、長サ七八分、三稜ニシテ鋭ナリ、内ニ小子アリ、一種大葉ノ者ハ圓ニシテ尖リ、大サ五六寸、花實モ亦大ナリ、

〔草木育種下藥品〕龍舌草臺灣府志　油葱嶺南雜記とも云、其脂液を本草に蘆薈といふ、本暖國の産なり、阿蘭陀には種類甚多し、本邦には黄花と淡紅花と二種あり、葉は蘿蔔の莖の如にして大なり、その形鰹魚の尾に似たり、夏秋二度花咲ことあり、花の莖三四尺あり、根より生る小科を分植べし、夏中人糞魚洗汁など多く澆てよし、尤盆栽なれば、土乾たる時澆べし、濕過れば腐易し、十月中頃より唐むろへ入、清明過に出してよし、

は入るに及ばず、稲によき程の地ならば、五月の中に、濃糞を一二遍もうつべし、若地の性つよく和らぎかぬる所ならば、くさりたる草、あくた、其外土の和らぐ物を入べし、但長ながらば入べからず、すさのごとく切て、ふるひかくべし、山草どほろ猶よし、されど肥過て、莖葉甚さかゆれば、根の實り少し、中うち芸る事も、うへ付てはなりがたき物なるゆへ、うゆる前方こなし、草生ぬ樣にすべし、さて掘取事は、九十月水をおとし、乾してほり取べし、若水を落す事ならぬ田ならば、廻りをせき水をかへ、乾しをき、一方に鍬にて一筋掘口をあけて、手にて掘取べし、鍬にてほれば、根に疵付損ずる物なり、但一度に悉くほり取べからず、市町にうるとても、一度に過分には入ざるゆへ、度々におこすべし、清水にてきよく洗ひ、桶に水をため入て外にをき、日おひをし、日風に當べからず、夜は内に入べし、又は泥ながら濕地にいけ置て、用にまかせて、洗ひたるもよし、掘取て廿日ばかりは、折々水をかけ置ても、損ずる事なし、

〔堀川院御時百首和歌春〕苗代　阿闍梨隆源

くはゐ生る野澤の荒田打かへしいそげるしろは室の種かも

苦草

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕苦草　セキセウモ江州　ヘラモ同上

江州琵琶湖ニ多シ、根ハ水底ニアリ、葉ハ黒三稜ミクリニ似テ薄ク、チヂレテ叢生ス、一種葉邊ニ軟刺アルヲコウガイモト云フ、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　苦草

龍舌草

〔多識編二水草〕龍舌草、今案多豆乃之多、

〔大和本草八水草〕龍舌草　水中ニ生ズ、葉如車前、水中生花、花白如菱而大、處々有之、本草水草類載之、西土ノ方言水ホコリト云、水カハケバ葉枯ル、又水葵ト云、葵葉ニモ似タリ、花ハ三出ナリ、八月ニサク、實ハ三角アリ、細ナリ、

分チ花ヲ開ク、白色三瓣ニシテ内ニ黄蕊アリ、頌ノ說ニ四瓣ト云ハ非ナリ、一種千葉ノ者ハ鈴子菊花ノ如シ、コノ根狹小食用ニ堪ヘズ、只種テ花ヲ賞スルノミ、池澤ニ自生多シ、オモダカハ東醫寶鑑ノ野茨菰草、花譜ノ慈菰花ナリ、慈姑ハ花ヲ開カズ、稀ニ花ヲ開ク者アリ、其根夏秋ハ細白條ノミ、冬春掘ル時ハ塊根アリ、京師ノ產ハ、形圓ニシテ大サ七八分、或ハ一寸、皮淡青ニシテ肉白シ、皮ヲ去リ煮テ食用ニ供ス、他州ノ產ハ形大ニシテ、微長味劣レリ、一種根小ニシテ無患子(ムクロジ)ノ大サナル者アリ、マメグワヰト云フ、又スイタグワヰト云フ、攝州吸田村ニテ多ク種ヘ出ス故ニ名ク、二三月京師ニ賣ルハ、カリグワヰト云、能州ニテゴワヰト云、苗形同ジク小ナリ、一種細葉。ノヲモ。ダカ。池澤ニ自生アリ、葉濶サ三四分、長サ一尺許、花モ亦小シ、コレヲ烏羽繪グワヰト云、一名アギナシ、(筑前)ヲトガイナシ、(仙臺)其初出ノ葉岐ナクシテ、竹葉ノ長キガ如シ、故名ク、是等皆慈姑ノ品ナリ、

〔農業全書 五 山野菜〕慈姑

くはいは是泥中の珍物也、先たねを收めをく事、來年作るべき、分量をはかりて、水を落せば、卽堅田となる所に、別にうへをき、春移しうゆる時分まで、其田にをき、うゆる時にいたりて掘取、中にてふとく見事なるをゑらびてうゆべし、うゆる地の事、第一は稻は出來すぎてよからず、濁水など流れ入て、他の物は過て實りなき所を上とす、もとより稻に宜しき田なりとも、地心其外利潤をはかりて所によりて作るべし、都或は國都などの、大邑に遠き所にては、過分には作るべからず、水濕絕ざる所の、泥深く肥たるに、糞しをも多く用ゐてうゆれば、厚利ある物なり、うゆる時分の事、三月初より四月初まではよし、耕しこなす事、稻田のごとくくはしからずしても苦しからず、凡七八寸ほど間を置て、一ッ宛芽の方を上にしてうゆるべし、臘月に水田にうへをき、來年四月苗生じて、稻をうゆるごとく種べしと、唐の書に記せり、同じく糞を用る事、稻の出來過る地に

慈姑

〔重修本草綱目啓蒙二十二水果〕烏芋 クロクワヰ グワヰヅル ギワヰヅル播州 イゴ ズルリン共同上 コメカミ阿州土州 ゴヤ阿州 ズルリ備前 ギワ防州 シリサシ越前 アブラスゲ 備畫

池澤中ニ多シ、葉ハ莞葉ニ似テ細小、長サ二三尺、多ク叢生ス、質柔ニシテ内空シ、夏ニ至リ葉上ニ穗ヲ出ス、長サ一寸許、黒色ニシテ白蘂アリ、薹ノ穗ニ似タリ、是花ナリ、根ニ細白條多シ、秋後苗枯ル、冬春ノ間泥ヲ掘レバ、白條ノ末ニ根アリ、形圓扁、大サ六七分、皮黒ク肉白シ、生熟皆食フベシ、唐山ニテ栽ル者アリ、本邦ニテ皆野生ナリ、

〔朱氏談綺下菜蔬〕慈姑 チヨダカ シロクワイ

〔和爾雅六果蔬〕慈姑 シログハイ クモダカ 水萍、白地栗、茨菰並同、苗名剪刀艸、燕尾艸、

〔書言字考節用集六生植〕慈姑 クハヰ シロクハイ 慈姑 シロタハイ 藉姑、白地栗並同、本草、出水田中、葉如澤瀉、其根黄、似芋子而小、

〔本朝食鑑三水菜〕慈姑 釋於毛多加、根釋白久和井、

集解、慈姑生淺水中、或亦種之、三月生苗、靑莖中空有稜、葉如燕尾箭鏃、而前尖後岐、四五月開小白花作穗、霜後葉枯、根乃結顆、如小芋魁、冬及春初掘以爲果、煮熟食則不麻澀戟人咽、灰湯煮之亦佳、本邦有以澤瀉爲同物、此據陶弘景狀如澤瀉、蘇恭爲澤瀉之類歟、澤瀉葉有後岐而前不尖、如牛舌、今處處別有之、近世藥市采之以需矣、

〔宜禁本草乾五菓〕茨菰　苦甘冷、多食生脚氣、腸風、痔瘻、孕婦勿食、主消渇、益氣、產後餘血悶亂攻心、及胎衣不下、煮汁服之、下石淋、除癰腫、久食發瘡緩風、損齒失顏色、以上二種、○烏芋茨菰　藥罕用、荒歲多以充粮、

〔重修本草綱目啓蒙二十二水果〕慈姑 和名 クワヰ 鈔 クワエ シログワヰ ツラワレ越前 中略 ○

水田ニ栽ユ、葉長シテ尖リ、下ハ二ツニ分レ、剪刀ノ形ノ如シ、故ニ剪刀草燕尾草ノ名アリ、一種オモダカアリ、一名ハナグワヰ、葉ノ形狀クワヰニ異ナラズ、只痟小ナリ、夏月別ニ莖ヲ抽テ、三枝ヲ

〔撮壤集 中草〕烏芋(クワイ)

〔易林本節用集 久草木〕烏芋(クハイ)

〔朱氏談綺 下菜蔬〕荸薺(クロクワイ)同、一名地栗、葧臍

〔和爾雅 六果蓏〕烏芋(クロクハイ)葧臍、地栗、鳧茈、鳧茨並同、蓋皮黑肉硬者、名猪葧薺、皮紫肉軟者、名羊葧薺、

〔書言字考節用集 六生植〕烏芋(クロクハヰ)時珍云、烏芋慈姑原是二物、慈姑有葉、其根散生、烏芋有莖無葉、其根下生、　葧臍　鳧茈黑三稜、地栗、並同、

〔東雅 十三穀蔬〕澤寫ナマヰ　烏芋クワヰ　倭名鈔に澤寫一名芒芋、ナマヰといふ、烏芋はクワヰ、生水中、澤寫の類也と註せり、ナマヰといひ、クワヰといふ、義不詳、ヰといふは、イモといふ語の急なるなり、二物並に芋の名ありて、倭名鈔に亦芋類に收載せし即此也、ナマとは生也、クワとは鍬也、その莖葉をつらね見るに、鍬の形に似たる故也、頭鑿の飾に鍬形といふものを、古俗相傳へてチモダカの葉のひらけたるにかたどれるなどいふも、此義なる也、後俗澤寫の字讀て、ヲモダカといふは、然るべからず、ヲモダカといふものは慈姑草也、澤寫には異なるものなり、古俗チモダカと云ひしもの、今俗にシロクワヰといふなり、シロクワヰは、陶弘景がいひし藉姑生水田中、葉有椏狀如澤瀉、其根黃、似芋而小、煮之可啖といふものにして、即慈姑一名河鳧茈、一名白地栗、一名水萍、また剪刀草、箭搭草、槎牙草、などいふもの是也、それをシロクワヰといふは、倭名鈔にみえし烏芋、彼俗に葧臍などいひ、此にクワヰといふものに、紫黑二種あるに對しいふなり、其慈姑は三瓣の小白花開くなり、慈姑の如くにもして、深藍色の花開きぬるをも、爾久花などいふなり、

〔農業全書 五山野菜〕烏芋

烏芋、荸臍、地栗とも云、農政全書に云、正月に種子をとる、芽を生ずる時、土がめなどに土をませて入置、二三月になり水田にうつし、扨芽さかへて後分ちうゆべし、冬春ほり取て菓子とし、生にても食ひ、煮ても食ふ、唐にては多く作りて、凶年には粮とすると見えたり、津の國河内邊に多く作る物なり、

〔雍州府志 六土産〕烏芋　黑白俱和惠之中、其白者味爲佳、烏芋亦其味淡脆而堪食、共賞京師、

〔宜禁本草 乾五菓〕烏芋　苦甘微寒、色黑、名鳧茨、苗似龍鬚而細、正青色、根黑如指大、皮厚有毛、小名葧薺、大名地栗、白者名茨菰、皮薄澤、葉大根大、名茨菰、　主消渴痺熱、多食患脚氣、有冷氣人不可食、腹脹滿、與驢同食筋急、除胸熱黃疸、益氣、下丹石、

烏芋

土氣ヲ能洗テ、酒ニ一日一夜付テ、剉テ焙用、腎虚尤吉、止泄精、頭旋、消渇、耳虚鳴、治淋、多服令人眼病生、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥
大和國卅八種、〇中略 澤寫當歸各四斤、　近江國七十三種、〇中略 澤寫三斤、　若狹國廿四種、〇中略 澤寫六兩、〇下略

〔枕草子 三〕草は
おもだかも名のおかしき也、心あがりえけんとおもふに、

〔本草和名 十七菜〕烏芋一名藉姑、一名水萍鳧茨、(仁諝音上府下在此反、出陶景注、)一名槎牙、(仁諝音鋤加反)一名茨菰、(澤瀉之類也、已上出蘇敬注、)烏茈、(出崔禹)一名水芋、(出兼名苑)一名王銀、(出雜要訣)和名於毛多加、一名久呂久和為、

〔倭名類聚抄 十七芋〕烏芋　蘇敬本草云、烏芋(和名久和井)生水中、澤寫之類也、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕本草云、烏芋、一名藉姑、二月生葉、葉如芋、陶注云、今藉姑生水田中、葉有椏狀、如澤寫、不正似芋、其根黄、似芋子而小、煮食乃可噉、疑其有烏名、今有烏者、根極相似、細而美、葉乖異狀頭如莞草、呼為鳧茨、恐此非也、蘇注云、此草一名槎牙、一名茨菰、葉似錍箭鏃、按陶注藉姑、蘇注茨菰槎牙、詳其形狀、可充久和為、陶注葧茨、其說不可讀、雖似有誤葧茨即烏芋、故本草圖經云、烏芋今葧茨也、苗似龍鬚而細、正青色、根黑如指大、輔仁訓為久呂久和為是也、然本草統言以藉姑為烏芋一名、陶注混說二物、蘇所說亦是藉姑、故源君訓久和為也、其實藉姑訓久和為、烏芋訓久呂久和為為允、久和為鑺蘭也、其莖似莞、其葉似鑺鏃、故名之、烏芋根似藉姑而黑、故名久呂久和為、其葉不似鑺鏃也、又輔仁烏芋或訓於毛多加、按於毛多加其葉如人仰見之狀、故有是名、當以東醫寶鑑野慈姑、草花譜慈姑花充之、其草頗似藉姑、則知輔仁所云於毛多加、以訓藉姑、非訓烏芋也、

〔伊呂波字類抄 久殖物附殖物具〕烏芋(クロクワイ 澤寫類也、)　〔同 於殖物附殖物具〕烏芋(オモダカ)

亦可₂煠食₁、是皆可ㇾ充₂久和爲₁也、

〔類聚名義抄 八艸〕澤蔦（ナマキ、一云オモタカ、）

〔伊呂波字類抄 奈殖物附殖物具〕澤寫（ナマキ、オマタカ）　烏芋　慈草　芒芋　蔦芘　蔦芘（已上同芘）　薢鶯（仁諝音昔、一楊玄操音私也反、澤寫、一云、藥草也、車前別名、）〔同 於殖物附殖物具〕澤舄（オモタカ、亦ナマキ）

〔撮壤集 中草〕澤瀉（ナマタカ）

〔易林本節用集 於草木〕澤瀉（オモダカ）

〔書言字考節用集 六生植〕澤瀉（オモダカ、鵠瀉、禹孫、並同、藚同、並見₂本草₁）澤瀉（ミツナキ）　藚（同）

〔重修本草綱目啓蒙 十六水草〕澤瀉　ナマキ（○○○和名鈔）　サジヲモダカ（○○○○○○京）　ナヽトウグサ（○○○○○○佐州）　ナヽト（○○○新校正）

水澤中ニ生ズ、奥州仙臺ノ產眞物也、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、葉ノ形車前ノ葉ニ似テ、大ニシテ厚ク、數葉叢生ス、夏ノ末莖ヲ抽コト高サ三四尺、節ゴトニ三枝ヲ分チ、枝ゴトニ三叉ヲ分チ、叉ゴトニ一花ヲ開ク、三瓣白色、大サ三分許、下ニ三蕚アリ、花後實ヲ結ブ、圓小ニシテ薄ク、圓ニ並ビテ冬葵子ノ如シ、霜後苗枯ル、諸國自生ノ者ハ、葉ノ形羊蹄ノ葉ニ似テ長ク、花ノ色淡紫、其根至テ小クシテ輕虛、コレ即本草原始ニ載ル所ノ水澤瀉ニシテ下品也、藥舖ニ鬻グ所舶來ノ者ヲ上品トスレドモ、今少シ、仙臺ヨリ出ル者多シ、舶來ニ次テ上品トス、古ハ丹波、近江、越後ヨリ水澤瀉ヲ出ス、今ハ否ズ、古ヨリ澤瀉ヲオモダカト訓ズルハ非ナリ、オモダカハ野茨菰、（東醫寶鑑）慈菰花（草花譜）ナリ、

〔農業全書 十藥種之類〕澤瀉（たくしや）

たくしやは、水田にうへてよし、是も藥屋にうるべし、蔺をうゆる法に同じ、丹波にて尤も多く是を作る、

〔藥經太素 下〕澤瀉　冷味甘鹹

大葉藻

〔重修本草綱目啓蒙水草十六〕海藻

大葉藻アマモ、アヂモ、播州ムクシホ、勢州モシホグサ、同上二見カモメノヲビ、能州スゲモ、土州サコキ、同上ハマユフ、豊前カナクヅ、リウグウノヲトヒメノモトユヒノキリハヅシ、モバ、雲州讃州モハ、讃州海中ニ生ジ、泥草(シヤウブノ)葉ニ似テ細ク長シ、生ハ青ク、枯ルレバ黒色、久シテ變ジテ白色トナル、土人生ナル者ヲ採リ麥ノ肥トシ、或ハ草履ニ造リテ甚輕シ、讃州ニテハ稲草ニテ小ク束子、春盤ノ飾トス、

澤瀉

〔本草和名草六〕澤蕮(仁諝音昔、楊玄操音私也反、)一名水寫、(一名及寫)一名芒芋、一名蕍寫、一名鼠烏、一名鬼烏、一名水芒、一名鵠朱、一名蓬、(已上出釋藥性)一名澤足、一名禹芝、一名悲通天、一名鵠朱、一名蓬蕒、(已上出神仙服餌方)一名鵠珠、一名藥菜、(藥名也、已上出雜名苑)和名奈末爲、一名於毛多加、

〔倭名類聚抄十七〕澤寫　本草云、澤寫一名芒芋、(和名奈萬井)

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕按爾雅、蕍、蕮、蕢是草根如烏履、故名烏、生池澤中、故又名澤烏、後從艸作蕮、或増六作寫、或作蕮或連澤字、増水旁作瀉、皆俗爲字、非假借書寫字泄瀉字也、李時珍謂、澤瀉之功長於行水、如澤水之瀉也、其説恐非是、陶注云、葉狹長、叢生諸淺水中、本草圖經云、春生苗、葉似牛舌、獨莖而長、秋時開白花、作叢、似穀精草、今俗呼佐自於毛太加、○(中略)本草和名云、和名奈末爲、一名於毛多加、新撰字鏡蒟訓奈万井、按奈末爲不詳、於毛多加可以東醫寶鑑野慈姑、草花譜慈姑花充之、然其根不可食、則此所擧奈万爲、當是今俗呼久和爲者、本草、藉姑、二月生、葉如芋、陶注云、生水田中、葉有椏狀、如澤寫、不正似芋、其根黃、似芋子而小、煮食之乃可噉、蘇注云、此草一名槎牙、一名茨菰、生水中、花似錍箭鏃、澤寫之類也、本草圖經云、剪刀草、生江湖及京東近水河溝沙磧中、味甘微苦寒無毒、葉如剪刀形、莖幹似嫩蒲、又似三稜苗、甚軟、其色深青綠、每叢十餘莖、內抽出一兩莖、上分枝開小白花、四瓣蘂深黃色、根大者如杏、小者如杏核、色白而瑩滑、一名慈菰、李時珍曰、慈姑生淺水中、人亦種之、三月生苗、青莖中空、其外有稜、葉如燕尾、前尖後岐、霜後葉枯、根乃練結、冬及春初、堀以爲果、嫩莖

ガマホコト云フ、魚肉糕カマボツコレニカタドル、漢名蒲槌ト云フ、一名蒲棒救荒本草、蒲槌上ニ小葉アリテ、黄粉ヲ包ム、ソノ粉ヲ蒲黄ト云ヒ、藥用ニ入ル、故ニ頌曰、黄卽花中蘂屑也、本草彙言ニ蒲黄卽香蒲花上黄粉是也ト云フ、然ルニ釋名ノ下恭ノ説ニ、蒲黄卽此蒲之花也ト云フハ非ナリ、一種ヒメガマアリ、葉濶サ三分許、長サ三四尺、槌モ亦細小ニシテ二層或三層ニモナル、潭州府志ノ水燭廣東新語ノ水蠟燭是ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

河內國三種、○中略蒲黄一斤、上總國廿種、○中略蒲黄四斤、下總國卅六種、○中略蒲黄二斤、○下略

〔古事記 上〕於是到氣多之前時、裸菟伏也、○中略於是大穴牟遲神敎告其菟、今急往此水門、以水洗汝身、卽取其水門之蒲黄、敷散而輾轉其上者、汝身如本膚必差、故爲如敎、其身如本也、

〔日本書紀 七景行〕五十三年八月、乘輿幸伊勢、轉入東海、十月至上總國、從海路渡淡水門、○中略得白蛤、於是膳臣遠祖名磐鹿六雁、以蒲爲手繦、白蛤爲膾而進之、

〔播磨風土記 揖保郡〕槻折山、○中略此山南有石穴、穴中生蒲、故號蒲阜、至今不○不恐誤字生、

〔倭訓栞 中編二十一比〕ひるむしろ 枕草紙にみゆ、○中略今いふやぶゑらみ也、今稱する者は蛭藻なり、水草の品にて大に異也、さゝもともいふ、信州にびりこ、津輕にびり物といふ、

〔倭訓栞 中編二十一比〕ひるも 蛭藻の義、葉の蛭に似たる也、眼子菜也といへり、大同類聚方にみゆ、

〔物類稱呼 三生植〕眼子菜 ひるむしろ 畿內及北越にてひるむしろと云、關東にてひるもといふ、信州にてびりこといふ、奧の津輕にてびり物といふ、田夫とりて瞼の腫にはるもの也、

〔大和本草 八水草〕眼子葉ヒルムシロ 倭名ヒルムシロト云、水中ニ生ズ、莖長ク水中ニ蔓延ス、水上ニノボラズ、葉ノウラ紫色也、水面ニ葉ウカブ、葉ニ筋アリ光アリ、俗説ニ陰干ニシテ爲末服ス、治傷食霍亂甚有効、煎服亦可ナリト云、

〔宜禁本草乾五菜〕香蒲　甘平無毒、蒲黃即此香蒲花也、春初生用白為葅、亦堪蒸食、主五臟心下邪氣口中爛臭、堅齒明目聰耳、久服輕身耐老、

〔庖厨備用倭名本草四柔滑〕蒲筍(ホジユン)(カマツノ)　倭名鈔多識篇ニ蒲筍ナシ、考本艸下濕ノ地ニ生ズ、元升井○向曰、案ニ倭名鈔ニ蘆之初生ヲアシツノトイヒテ蘆茭トカキ、菰ノ初生ヲコモツノト云テ菰首ト書リ、皆初生ヲ云、筍モ又初生ナレバ、蒲筍ハガマツノナルベシ、

〔和漢三才圖會九十七水草〕香蒲　甘蒲　醮石　蒲黃　蒲槌　蒲蕚花　和名加末　加末乃波奈

本綱、香蒲春初叢生水際、似莞而偏有脊而柔、其嫩葉出水時、紅白色者取其中心啖之、至夏抽梗於叢葉中、花抱梗端、如武士棒杵、故俗謂之蒲槌、其花中藥屑謂之蒲黃、細若金粉、當欲開時便取之、市廛以蜜搜作(コネテ)果食貨賣、八九月收葉以為席、亦可作、軟滑而温、

蒲黃甘平　手足厥陰血分藥也、故能治血、與五靈脂同用、能治一切心腹諸痛、凡破血消腫者生用之、補血者須炒用、又舌脹滿口、或重舌生瘡者、傅之即瘥、

按香蒲花狀頗似鉾、故謂蒲鉾、作松明甚良、採蒲黃入藥、出於尾州者佳、攝州賀州者次之、

〔物類品隲三草〕香蒲　和名ガマ、所在ニアリ、一種細葉ノモノアリ、葉廣三四分ニ過ズ、蒲槌モ亦小ナリ、世俗妄ニ號シテアンペラト云、按ズルニアンペラハ南蠻語ニテ、席ノ總稱ナリ、草ノ名ニアラズ、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕香蒲　ミスクサ古歌　ガマ　ヒラガマ莞ニ對シテ云フ　カバ　一名蒲黃草附方

雎救荒本草　醮同上　越品字箋　蒲黃　ガマノ花ノ上ノ粉　一名蒲灰本草彙言　中央粉輟耕錄

水澤中ニ生ズ、春宿根ヨリ嫩芽ヲ出スヲ蒲筍ト名ク、唐山ノ人ハ食用トス、ソノ葉長サ四五尺、濶サ七八分ニシテ厚ク脊アリ、一根ニ叢生ス、甚繁茂シ易シ、夏圓莖ヲ抽ルコト葉ノ長サニヒトシ、上ニ穗ヲ生ジ、長サ七八寸濶サ一寸許、形蠟燭ノ如シ、短毛アツマリテ形ヲナス、褐色ナリ、コレヲ

名醮蒲、出釋藥一名醮石、出釋藥性一名瓊茅、一名菁䓆、香□者□一名香蒲、一名苞蓏一名蓏狎、一名香萱、一名香蘆、已上出雜要名苑和名女加末、

〔干祿字書平聲〕蒲蒲上俗下正

〔倭名類聚抄二十草〕蒲附蒲黃　唐韻云、蒲薄胡反、和名加末、草名、似藺可以爲席也、陶隱居本草注云、蒲黃和名加末乃波奈蒲花上黃者也

〔箋注倭名類聚抄十草〕本草香蒲蘇注云、此卽甘蒲、作薦者春初生、用白爲葅、亦堪蒸食、山南名此蒲爲香蒲、謂菖蒲爲臭蒲、蒲黃卽此香蒲花是也、圖經曰、春初生嫩葉、未出水時、紅白色茸々然、周禮以爲葅、謂其始生取其中心入地、大如匕柄白色、生噉之甘脆、以苦酒浸、如食筍大美、亦可以爲鮓、今人罕復有食者、時珍曰、蒲叢生水際、似莞而褊、有脊而柔、二三月苗、八九月收葉以爲席、○中略按證類本草上品蒲黃條引云、此卽蒲叢花上黃粉也、本草和名引作此蒲□花上黃也、據證類本草、蒲下缺文是叢字、而源君節此蒲叢一句、則花上有蒲字非是、又按黃下粉字似不可無、按圖經云、至夏抽梗於叢葉中、花抱梗端、如武士棒杵、故俚俗謂蒲槌、亦謂之蒲叢花、黃卽花中藥屑也、細若金粉、當其欲開時有、

〔類聚名義抄八草〕蒲香蒲　カマ　蒲黃カマノハナ

〔饅頭屋本節用集草加木〕蒲ガマ

〔書言字考節用集六生植〕蒲ガマ正曰香蒲蒲黃カツミ蒲花也、本草形如武士棒杵、故俚俗謂之蒲槌、又云蒲蕚花云々、蒲花同上

〔古事記傳十〕蒲黃は、花上の黃粉なるを直に波奈と云るは、此方にては別に黃粉の名は無くて其をも花と云るなるべし、さて漢籍にも蒲黃はもはら治血治痛藥とするは、本此神○大國主神の靈に賴て上代よりしかつたへしものなり、今人は加を濁て賀麻といへど、凡て頭を濁言無し、今も蒲生など云地名などは淸を以て古をしるべし、

アリト、東醫寶鑑ニ見タリ、海邊沙地ニ一根叢生ス、形木賊(トクサ)ニ似テ至テ細ク、中ノ孔甚小ニシテ、實スルガ如ニシテ黄色ナリ、葉ナク莖ノミニシテ節アリ、節ゴトニ寸許、下節ニ枝ヲワカツ、舶來ノ中ニ稀ニ花ノ著タルモ、實ノ著タルモアリ、其實ノ形蘇頌ノ説ノ如シ、外ニ皮アリテコレヲ包ム、故ニ如二百合瓣一ト云、潤サ一分許、長サ一分餘、其內ニ子アリ、形蕎麥粒ノ如ニシテ小シ、三角ニシテ色モ同ジ、其根徑寸許、長サ數尺、黄赤色ナリ、今市人イ°ヌ°ド°ク°サヲ以テ眞ノ麻黄トス、然レドモ此草ハ實ヲ結バズ、故ニ麻黄ニ非ズ、イヌドクサハ一名スギドクサ、江戸スギナドクサ、カハラドクサ、ハマドクサ、ミヅドクサ、種樹家チヤウセンドクサ、同上谷地スギナ、仙臺水邊沙地ニ多シ、形狀問荆(スギナ)ノ如ニシテ枝少シ、枝ナキモノ多シ年ヲ歴レバ粗大ニシテ、徑リ二三分、長サ四五尺ニ至ル、乾セバ輕虛、淡綠色ニシテ麻黄ノ形色ニ異ナリ、質薄クシテ中ノ空虛廣キ故ナリ、夏月中心ヨリ出タル莖端ニ花アリ、筆頭菜ニ同シテ實ヲ結バズ、是問荆ノ一種ナリ、決シテ麻黄ニ非ズ、本草原始ニ、麻黄莖類二節節草一ト云、又舶來麻黄中ニイヌドクサ多ク雜ル時ハ、河原ドクサハ節節草ナルベシ、此草根深ク土中ニ入ルコト、問荆ト同ジ大サニシテ色黒シ、麻黄根ノ黄赤色ナルニ異ナリ、

〔廣益地錦抄 五〕麻黄(まわう) 草たち木賊に似てちいさくほそし、一本に多く生ズ、海邊砂地雪ふりてはやくきゆる所に、よくはびこりて生ズ、夏冬ともにあり、雪ふりて片時もつもる所に植て枯る、麻黄は地へ敷ク、木賊は天へのび立なり、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

相模國卅二種、〇中略麻黄六斤八兩、　武藏國廿八種、〇中略麻黄五斤、　讃岐國卅七種、〇中略麻黄十六斤、

香蒲

〔本草和名 七 草〕蒲黄、陶景注云、此蒲□□花上黄也、一名蒲花、出二蘇敬注一　一名覆章、出二神仙服餌方一　和名加°末°乃°波°奈°、

香蒲　一名雎、仁諝音雖、楊玄操音七余反、一名醮、仁諝音子咲反、菁茅、一名香茅、薫草、燕麥、陶景注云、已上四名皆此類也、蘇敬注云、曾非二香蒲類一也、一

延ス、節ゴトニ根アリテ、ヌキ去リ難シ、葉ハ狗尾草葉ニ似テ小ク互生ス、夏秋ノ間、枝ノ末ゴトニ穂ヲ生ズ、芒ノ形ニシテ至テ小シ、淡緑色ニシテ紫蘂ノモノアリ、又白蘂ノモノアリ、肥地ニ生ズルモノ蔓長クシテ二三尺ニ至ル、又オヒジハアリ、是別種ニシテ馬唐ニ非ズ、田野阡陌ニ多ク生ズ、一根数十茎叢生ス、葉ハ細長ニシテ莎草葉ノ如シ、秋ニ至リ数茎ヲ抽ヅ、扁ニシテ長サ八寸許、穂ノ形メヒジハヨリ大ニシテ扁ク深緑色、其根甚ツヨシ、引テヌケ難シ、故ニチカラ草濃州ト云、筑前ニテ小児此穂ヲ採リ、両穂倒ニオキ対シ、吹テ勝負ヲ決シ戯トス、故ニスモトリ草紫花地丁ト同名ト云、豫州ニテカンザシト云、播州ニテシタキリト云、

麻黄

〔本草和名 八草〕麻黄一名龍沙、一名卑相、一名卑塩、一名狗骨、出釈薬性 和名加都祢久佐、一名阿末奈、

〔倭名類聚抄 二十草〕麻黄　本草云、麻黄、和名加豆祢久佐、一云阿末奈、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕酉陽雑俎続集云、麻黄、茎端開花、花小而黄簇生、子如覆盆子、可食、至冬枯死如草、及春却青、図経云、苗春生、至夏五月、長及一尺已来、梢上有黄花、結実如百合瓣而小、又似皂莢子、味甜、微有麻黄気、外紅皮裏仁子黒、根紫赤色、俗説有雌雄二種、雌者於三月四月内開花、六月内結実、雄者無花不結実、時珍曰、其根皮色黄赤、長者近尺、

〔多識編 二草〕麻黄、加久麻久禮、今案以奴登久左、

〔物類品隲 三草〕麻黄　和名イヌトクサ、又カハラトクサト云、所在水湿ノ地ニ産ス、形木賊ニ似テ稍小ナリ、又賣ニ似タリ、今薬肆ニ有トコロノ、漢産麻黄中堅実ナルモノハ雲花子ナリ、和産ヲ用ウベシ、駿河産形甚長大ニシテ木賊ノゴトシ、壬午客品中、伊豆北條四日市鎮惣七具之、

〔重修本草綱目啓蒙 十隰草〕麻黄　カツネクサ　アマナ 共ニ和名鈔　一名中黄節士 輟耕録　赤根 瘡瘍全書、根ノ名、

和産未ダ詳ナラズ、多ク舶来アリ、朝鮮ニモ古ハナシ、唐山ヨリ移シ栽テ、今ハ江原道慶尚道ニ之

馬唐

草木疏の文に隨ふ、これは地衣ばりといふものなり、その根節ありて、葉も竹に似て蔓延するものなり、さて其ヒシハといふもの雄雌あり、叢生するものにて苅れ共苅れ共生ずる故、肥後にて小ざうころしといふ、漢名は馬唐なり、その穗四ツ五ツ叉になるをつみとりて倒に席上に置、二ツよせて席を敲けば、自ら跳りてすまふ取さまあり、組合せて席をうでば、一ツは倒るゝなり、ヒジハの名義おぼつかなけれど、旱芝(ヒ)にや、(旱地に生て枯れざるなり)

〔倭訓栞 中編 十九〕はぐさ　河内澀川郡の村名に蛇草をよめり、式波牟古曾神社此村にあり、尾州にや〱またといひ、江戸にはくさといふ、こもすまふとり草ともいへり。

〔赤染衛門集〕さてひごろおとせぬを、これよりはなにしにかはおどろかさん、ほどへてすまひ草にさして、

すまひ草たふるゝかたに成ぬるか心こはしくかつはみえつゝ

返し

何にかは心もとらんすまひ草思ひうつるにかたこそあるらめ

〔金葉和歌集 十 連歌〕すまひぐさといふ草のおほかりけるを、ひきすてさせけるを見て、

よみ人しらず

ひくにはよはきすまひ草かな

とるてにははかなくうつる花なれど

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕猶　詳ナラズ　馬唐　一名馬塔　大明一統志中略

集解説クトコロノ馬唐ハ、メヒジハ、京師ニテカヤツリグサト云　同名莎草　トイチゴザシ　備後　コゾウコロシ　同上　スモトリグサ　仙臺　スモウグサ　同上　フヂハイ　雲州　トコロテングサ　淡州　メシバ　薩州　タケヒジハ　石州　ヂシバリ　備前　ホドグサ、アキボコリ、ヤツマタ　讃州　ト云、夏巳後自ラ生ジ、廢地ニ甚多シ、細莖地ニシキ蔓

角觝草

〔大和本草九雜草〕知風草　葉モ莖モ茅ニ似タリ、野ニアリ、倭俗曰、其クキニ節アレバ、其年大風フク、本ニアレバ春フク、中ニアレバ夏秋フク、末ニアレバ冬大風フク、二節アレバ二度フク、節ナケレバ其年大風フカズト云、節ノ文ハ人ノ指ノフシニ似タリ、大明一統志、瓊州府土產、知風草、南海有草叢生如藤蔓、土人視其節以占一歲之風、每一節則一風、無節則無風、廣志所載亦與此同、今本邦ニ大風ヲ試ルハ非蔓草、

〔新撰字鏡草〕旋復花須万比久佐、本云旱人草、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕角觝草　力草本名未詳

按、角觝草、原野濕地有之、葉布地叢生、似忍凌微扁、似石菖而色淺、秋起莖嶺作穗、青白色、可有細子而不見、其莖扁強健、長六七寸、小兒取莖綰穗結如縕、而用二箇一插其褃兩人持莖相引、而切方爲輸以戲、因俗名相撲取草、自茂盛爲農圃之妨、引根強難拔、因名力草、

一種相似而莖葉穗倶瘦者、俗以爲角觝草之雌、

〔倭訓栞後編十須〕すまひぐさ　金葉集、赤染衞門集などに見えたり、白慈艸なるべし、俗にすもとりぐさといふ、西偏にていふものは、かやつり草也、新撰字鏡に旋覆花とよめり常樂會の舞人、すまひ艸を面々にとりてかざす事ありとぞ、

〔嬉遊笑覽十二草木〕すまふ取草にて童ども勝負を爭ふ戲あり、○中略物類稱呼に、菫は、畿内及び近江、加賀、能登、又東海道筋總てすまふ取草と云ふ、江戶にてすみれといふ、○中略又東武にてすまふとり草と云別種あり、江戶の鄙にては、はぐさ。と呼草の穗に出たるを云、尾州にてや。つ。ま。た。と云是也、貞砂が、足を空なるすまふ取草といひし附句合も、むかし語となりぬといへり、本草啓蒙、○中略江戶にて相撲とり草と呼ものは、詩經名物辨解に、芩小雅鹿鳴章朱註、芩草名、莖如釵股、葉如竹蔓生、鄉名ヒ。シ。ハ。云々、此物野外間あり、ヲヒジハ、メヒジハの二種ありといへり、此說誤れり、朱傳は陸璣が

白色、至テ硬シ、淡竹葉ニ同名アリ、古方ニ用ユル所ノ者ハ、卽淡竹ノ葉ニシテ、コノ淡竹葉ニ非ズ、又藎(コブナクサ)草鴨跖草ニモ此ノ名アリ、

カニトリ草

〔倭訓栞前編六加〕かにとりぐさ　細草也、蔓草の如し、其葉相對せず、是を生兒の祝儀に用ゐるは、蟹採の義也、又秧稻と豫知子とを產帶にもたゝみこみ、又產衣を贈るにも、是を添ておくるを古法とすといへり、

〔大和本草九雜草〕カニトリ草　細草也、蔓草ノ如シ、其葉兩々相對セズ、和禮ニ祝儀ニ用ユ、シノブヲ用ルハアヤマリナリ、紋ニモ付ル、

地楊梅

〔多識編二隰草〕地楊梅、今案久。左。毛。毛。

〔物類品隲三草〕地楊梅　和名ヒ。メ。ス。ゲ。所在ニ多シ、藏器曰、苗如沙草、四五月有子、似楊梅也ト、此物穗ヲ出サヾル時、沙草ト紛レヤスシ、莖ヲ生ズルコト二三寸、子形頗楊梅ニ似テ色靑シ、先輩地楊梅ヲスヾメノヤリトスルハ誤ナリ、スヾメノヤリハ救荒野譜ノ看麥娘ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕地楊梅　ス。ヾ。メ。ノ。ヤ。リ。　シ。バ。ク。サ。　ス。ヾ。メ。ノ。ハ。カ。マ。勢州　ヤ。リ。グ。サ。
ス。ヾ。メ。ノ。ヒ。エ。播州　カ。マ。コ。シ。バ。河州　カ。ヘ。ル。グ。サ。江州
原野道傍ニ極テ多シ、細葉叢生シテ莎(カヤツリクサ)草葉ノ如シ、長サ二三寸ニシテ微毛アリ、冬春ハ紫色ヲ帶ブ、暖ニ向ヘバ綠色トナル、二月叢中ニ數莖ヲ抽テ其頂ニ一毬ヲ結ブ、大サ三四分、形楊(ヤマモモ)梅ノ如ク褐色ナリ、初メ毬外ニ小黃蘂ヲ吐ス、コレ其花ナリ、後毬中ニ細子ヲ結ブ、蓼子ノ如シ、肥地ニ生ズルモノハ、葉長サ七八寸、毬モ亦大ナリ、

知風草

〔和爾雅七草木〕知(チカラクサ)風草、葉苑詳註云、南海有草、叢生如藤蔓、土人視其節以占一歲之風、每一節則一風、無節則無風、出瓊州府志、今按大明一統志、瓊州府土產亦有知風草、與此文同、焦氏類林、潛確類書亦載此草、

〔倭訓栞前編十五知〕ちから〇中略　ちから草は知風草也

ズ、ソノ形粟ノ穗ニ似テ長サ一寸五分許、常ノ狗尾草ニ比スレバ、孅嫩ニシテ毛ナシ、近年金雀(カナーリヤ)ノ巢ニ造リ渡リシ故ニ名クト云、カナーリヤハ蠻國ノ名ナリ、然レドモコノ草江州伊吹山ニ自生アリ、又一種朝鮮アハト云者アリ、春月穗ヲ生ズ、其穗細クシテ軟ナリ、

龍常草

〔重修本草綱目啓蒙 隰草十一〕龍常草　タツノヒゲ。キリギリスサウ。和漢三才圖會　ノスヽキ。同上　カンズヽキ。種樹家　ジヤノヒゲ。江州

野生路旁ニ多シ、小草ナリ、其葉至テ細クシテ絲ノ如シ、長サ二三寸、一根數百葉叢生ス、綠色ニシテ白ヲ帶ブ、必陽地ニ生ズ、草中ニ雜ノ生ル者ハ、葉長クシテ尺ニ至ルモノアリ、根ハ赤色ニシテ細シ、四月叢葉中ニ數莖ヲ抽、高サ二尺許、節ゴトニ葉ヲ互生ス、其葉大ニシテ鵝觀草(カモジグサノ)葉ニ類シ、脚葉ニ異ナリ、莖ノ梢ニ枝ヲ分チ長キ穗ヲナス、知風草(カゼクサ)ノ穗ニ似テ葉ト同色ナリ、花後實ヲ結ビ、莖枯テ新葉ヲ生ジ、舊葉代ル、

〔嬉遊笑覽 草木十二〕今ひな草といふは、龍常草なり、タツノヒゲ、又ノスヽキともいふ、路傍に多く生ず、葉の長さ四五寸、一根數百葉叢生す、他の草中に雜り生ずるは、葉長くして尺許に至る、

淡竹葉

〔多識編 隰草二〕淡竹葉、左左久左、

〔大和本草 雜草九〕淡竹(サヽクサ)　本草濕草下ニ出タリ、サヽノ葉ニ似タリ、根ニハ天門冬ノ如ク、長大ナル粒アリ、京ニテハ唐ザヽト云、能治五淋、有效、淋病ノ藥ニ加ヘ用レバ效アリ、七八月有穗、

〔重修本草綱目啓蒙 隰草十一〕淡竹葉　サヽグサ。トウザヽ。大和本草　サウチク。薩州

山足路旁ニ極メテ多シ、春時宿根ヨリ苗ヲ生ズ、竹ノ初生ニ似タリ、莖高サ六七寸、肥地ノモノハ一尺ニ至ル、上ニ六七葉互生ス、竹葉ニ似テ濶サ一寸許リ、長サ六七寸、秋ニ至テ莖ノ梢ニ穗ヲ生ズ、長サ一尺許リ、小枝多シテ小花ヲ生ズ、茭(マコモ)ノ穗ノ形ノ如シ、後實ヲ結ブ、外ニ皮アリテコレヲ包ム、長サ三分許リ、熟スレバ衣服ニ粘著シテ落ズ、秋後苗枯ル、其根形天門冬ノ如クニシテ細ク、黃

説文繋傳引字書云、莠狗尾草也、廣雅莠莠也、故莠莠皆云狗尾、戰國策魏西門豹云、幽莠之幼也似禾、幽卽莠假借字、夏小正、四月秀幽、毛詩作四月秀莠、時珍曰、莠草秀而不實、故字從秀、穗形象狗尾、故俗名狗尾草、原野垣墻甚多生之、苗葉似粟而小、其穗亦似粟黃白色、而無實、程瑤田云、莠亂禾粟之草、一本或數莖、多至五六穗、與禾一本惟一莖一穗異、穗多芒類狗尾、俗呼狗尾草、實小於粟而形長、初生時草全似禾、故聖人惡之、北方人云惟禾中有之、黍地則無、余叩之老農、非黍地本無也、與黍異、見卽鋤去、不爲所亂、生於禾中必成穗可辨耳、

〔書言字考節用集六生植〕狗尾草（ヱノコログサ）　莠（同）　光明草（同上見本草）

〔倭訓栞中編二十九〕ゑぬのこぐさ　和名抄に狗尾草を訓せり、莠草子也、今ゑのころ草といへり、夫木集に、

ゑのこ草おのがころ〳〵ほに出て秋置露の玉やどるらん、七夕に禁中にて芋の葉に露をうつし、ゑのこ草にて結て院中へ進せらるゝよし、年中行事に見えたり、牽牛をいぬかひぼしといへるによるなるべし、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕狗尾草　エヌノコグサ和名鈔　エノコグサ古歌　エノコログサ今名
トウ〳〵グサ備後、狗子チトト云方言　トウ〳〵ボ備中　スヾメノアハ　イノチアハ水月　イノ
コグサ長崎　イヌグサ泉州　エノコボ讃州　カニグサ長州　トヽコグサ防州、犬ナトヽ云方言
ヲヤリ秋田　イヌコロ〳〵肥前　カイルトヽラ丹波　一名猫狗草便方

原野隨地ニ皆アリ、庭際ニモ自ラ生ズ、苗穗共ニ粟ニ似テ小シ、穗ニ紫毛ノモノ、綠毛ノモノアリ、地ノ肥瘠ニ因テ苗ニ大小アリ、蝦夷ノ產ハ穗ニ五六岐ヲ分チ紫色ヲ帶ブ、〇中略　增、一種カナーリサートト云モノアリ、卽細葉ノ狗尾草ナリ、舊子地ニ落テ冬ヨリ苗ヲ生ズ、葉ノ形チ小麥ノ葉ニ似テ、一根數葉地ニ布テ叢生ス、夏ニ至テ莖ヲ抽ズルコト、六七寸ニシテ穗ヲ生

磨ニ多シ、葉穗共ニ芒ニ似テ小ナリ、コレ陸疏廣要ニ載ル所ノ青。茅。ナリ、藎草ト同ジカラズ、カリヤスノ名同ジキニヨリテ混ズベカラズ、一種葉細長ナル者アリ、穗モ異ニシテ狗尾草エノコログサノ穗ノ如シ、是一種ノ藎草ナリ、

〔農業全書六三草〕玉。蜀。

かりやす、畠にうへて能生長す、春苗をうへて手入をし、秋分八月の中を云の後雨氣を去事、五七日もして、よく日にあはせて刈取べし、雨の後やがて刈ば黄色なし、刈ては日に干べし、若雨にあへば用に立ず、煎じて黄色を染べし、

〔草木六部耕種法八藎草〕玉蜀ヲ作ルニハ、必ズシモ肥良ノ地ヲ撰ブニモ及バズ、畠ニ人糞馬糞ヲ入レテ能ク耕耙シ、春分後ニ根ヲ分テ植付ケ、時々上ノ草葉ヲ繁茂セシムル藥汁ヲ澆ギテ、育フトキハ、夥シク繁衍スル者ナリ、秋分頃晴天ノ永ク繼キタル時ニ此ヲ刈採ベシ、此物ハ若シ雨ニ遇タル後ニ刈採トキハ、此ヲ煎ジルトモ、黄色ナクシテ、染料ノ用ニハ立ザル者ナリ、總テ草木ノ葉ヲ採テ、日ニ乾シテ用ル者ハ、晴天ノ永ク繼キタル時ニ非レバ、功能皆薄シ、

〔延喜式十四縫殿〕雜染用度

青白橡綾一疋絁紬絲紬東絁亦同刈安草大九十六斤、紫草六斤、○中略帛一疋刈安草大七十二斤、○中略絲一絇刈安大二斤、貲布一端刈安草大卅八斤、○中略深綠綾一疋○註略藍十圍、刈安草大三斤、○中略深黄綾一疋○註略刈安草大五斤○中略淺黄綾一疋○註略刈安草大三斤八兩

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

近江國(中略)刈安草五百圍○中略　丹波國(中略)刈安草五百圍○中略　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔倭名類聚抄二十草〕狗尾草　辨色立成云、狗尾草、惠。沼。能。古。久。佐。

〔箋注倭名類聚抄十草〕按太平御覽引草曜問答曰、甫田維莠、今何草、答曰、今之狗尾也、毛傳莠似苗也、

名阿之爲、

〔倭名類聚抄 二十草〕藎草 本草云、藎草、上音疾胤反、和名加木奈、一云阿之井、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕本草又云、藎草可以染黄金色、蘇注云、此草葉似竹而細薄、莖亦圓小、生平澤溪之側、荊襄人煮以染黄色、極鮮好、俗名菉蓐草、爾雅所謂王芻者也、嘉祐本草云、按爾雅疏云、菉鹿蓐也、詩衞風云、瞻彼淇澳、菉竹猗猗是也、疾胤反、與仁諝音合、中略○按本書染色具有黄草、即是物、引辨色立成云、加伊奈、與本草和名合、而醫心方作加歧奈、與此同、蓋歧伊一聲之轉耳、今播磨及筑紫人猶呼加伊奈久左、江戸俗呼左左毛土歧、阿之井、本草和名同、新井氏曰、是物如葦如藺、故名醫心方作阿之乃阿爲、愚按阿之井、蓋阿之乃阿爲之省、阿之其狀似葦、其染物與藍同、故名阿爲、猶謂紅花爲久禮乃阿爲也、

〔倭名類聚抄 十四染色具〕黄草 辨色立成云、加伊奈、 本朝式云、刈安草

〔箋注倭名類聚抄 六染色具〕新井氏曰、是草刈採少用力、故曰刈易、按草類所載藎草即是、

〔撮壤集 中草〕苅安(カリヤス) 黄草(カイナクサ)

〔饅頭屋本節用集 草木〕苅安(カリヤス)

〔書言字考節用集 六生植〕藎草(カリヤス) 廣[illegible]、黄[illegible]藎同、時珍云、此草綠色、以可染黄、 菉竹(詩毛) 菉蓐(同)

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕藎草 カリヤス(和名鈔、同) カイナ(同上) コブナグサ(京) サヽモドキ(江州) カイナグサ(播州、筑前) 一名白脚蘋(資暇錄) 淡竹葉(華夷考、同名多シ、) 鹿蓐(爾雅翼)

隨地ニ多ク生ズ、細莖地ニ鋪キ節節葉ヲ互生ス、竹葉ニ似テ短ク長サ一寸許、薄クシテ横ニ皺アリテ平ナラズ、秋月枝ノ末ゴトニ小穗ヲ出ス、馬唐穗ニ似テ小ク、七八分ニ過ギズシテ紫色ナリ、又綠色ナルモアリ、此莖葉ヲ煎ジテ紙帛ヲ染レバ黄色トナル、本邦染人黄色ヲ染ルニ用ユル草ハ、江州長濱ヨリ多ク出ス所ノカリヤスナリ、其草ハ伊吹山ニ多ク産ス、又伊賀伊勢阿波伊豫播

藎草

〔倭訓栞前編十一志〕しば〇中略 莱草をいふは去聲によべり、新撰字鏡に莉をよめり、是も繁葉成べし、一説に絲茅の音轉也といへり、万葉集に、道のしば草、新六帖に百敷の庭のきり芝と見えたり、結縷草也といへり、中山傳信錄に、茸草如茵、極細軟柔、結寸許、連土不散、布滿山上と見えたるも同じ、芝字をよみ來れど、字書に其義なし、古へ莱と通用したるに譯あるべきにこそ、聖武紀に、內裏生玉來と見えたるは、莱音來なれば、玉芝を玉來と書せしと見えたり、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕結縷草(からしば/かうらいしば) 横目草 鼓箏草 傳附音 俗云高麗莱

救荒本草云、師古漢書注曰、結縷蔓生著地之處、皆生細根、如綫相結故名之、今俗呼鼓箏草、兩幼童對銜之、手鼓中央則聲如箏也、

按莱和名之波 一名類草、田廢生草曰莱、今俗用芝字、芝音支 瑞草也、凡荒野堤岸雜草自生、牛鹿常齩之、故夏野莱不過數寸、顛如青氈然、

結縷草此一種莱、似絲芒秧而無枝椏、其根細似蔓而相延結、秋抽細莖出穗、似雀麥(チヤヒキクサ)細、冬枯春生、栽假山稍長時均苅之、則最美也、又其老莖以鼓箏也、如上說、

〔百姓傳記十三〕芝ヲ植ル事

一芝ヲ植ルニ水付ヲ好ム芝ト、水ヲ嫌フ芝アリ、水付ニ植テ能クツカヒテ強キ芝ハ、水ト鹽ト兩方兼タル入江ノ芝間、又ハ海邊ノ川岸ニ生ル、山ニアルカリヤスカ、野原ニアルカルカヤノ如ク育ツ芝アリ、潟ナドノ水氣サス處ヘハ、種ヲ求メ植ベシ、大小ノ繩ニナヒ使フニ、重寶ナル水草ナリ、

〔攝陽群談十六名物土產〕同所〇天王寺 芝 同村〇東成郡四天王村 所々ノ培壤、岸端ヨリ切採、民家ニ商之、庭上ニ假山ヲ構ヘ、美景ヲ樂ム人必ズ設之、莖葉青シテ如(シカ)モ叢生ス、

〔本草和名草十一〕藎。草。仁諝音疾胤反 一名葈薜草、上閭燭反、下乳闥反、一名王蒭、已上二名出蘇敬注 一名鴈脚、出兼名苑 和名加。伊。奈。、一

〔毛吹草三〕山城　蘆眞菰（同日五月五日、洛中粽ニ用之、）

〔採藥使記中奥州〕照任曰、奥州マクナイト云フ所ヨリ菰ヲ產ス、卽米ヲ生ズ、其形チ燕麥(カラスムギ)ノ如シ、又紀州熊野本宮ニモ菰米アリ、他所ノ菰ニ米穗ヲ生ルコトナシ、

〔倭名類聚抄二十草〕萊草　辨色立成云、萊草、（上音來、和名之波、）一名類草、

〔箋注倭名類聚抄十草〕北山有萊傳、萊草也、焦循曰、爾雅釐蔓華、說文萊蔓華也、萊釐古字通、詩貽我麥牟、漢書劉向封事引、作貽我釐牟、書、帝告釐沃、一作來沃、是也、釐卽藜、故玉篇以藜訓萊、月令孟春行秋令、藜莠蓬蒿並興、管子封禪篇云、嘉禾不生而蓬蒿藜莠茂、蓋田畝荒穢、故生此諸草、十月之交、言汙萊、周禮地官、言萊田、蓋不耕治則荒草生、藜莠之類也、言萊概諸草、正義以爲草之總名、則非矣、齊民要術十引詩義疏云、萊藜也、莖葉皆似菉王芻、今兗州人蒸以爲茹、謂之萊蒸、譙沛人謂雞蘇爲萊、是知萊卽藜、

〔撮壤集中草〕芝(シバ)

〔優頭屋本節用集草木〕芝(シバ)

〔書言字考節用集六生植〕萊(シバ)（字彙、田廢生草曰萊、）　芝（本朝俗用此字、謬來舊矣、芝者神仙靈瑞之草也、）

〔東雅十三草卉〕萊草シバ　和名鈔に辨色立成を引て、萊草一名類草、シバといふと註したり、万葉集に道之志波草と云ひしもの卽是也、シバといふ義不詳、仙覺抄に數の字讀てシバといふ事を、シバとは類(シバシバ)也と釋せし事も、草にもあれ、木にもあれ、其の小しくして繁りぬる、並に呼びてシバといひけるなり、（日本紀に柴の字讀てフシと云ふ、万葉集には柴讀てシバといひ、小歷木の字亦讀む事上に同じ、また古にてフシシバなど云ひし此義也、また万葉集に道之志波草といふもの見えけり、されば草にもあれ、木にもあれ、其小にして繁りぬるをいひし詞也とは知られけり、又辨色立成に萊の字讀てもシバと云ひしは、說文に萊は蔓華也といひけり、これは後の俗に盤根草などいひしもの、則草萊などいふ萊の義也、或人の說に、爾雅の傳に、猛目一名桔梗といふもの、卽是也といふ、我國の俗、芝の字讀てシバとなして此物となすは然るべからず、芝草は日本紀にも見えて、讀むこと字の音のまゝにて、瑞草にもして、今俗に靈芝といふものなり、）

ヅラ、コモクラ、筑後マコモズミ、備前婦人首ノ禿スルニヌリ、或ハ油蠟ニ雑ヘテ黒クス、秋苗枯ル、根ハ枯レズ、甚ダ繁茂シ易シ、一種花後ニ實ヲ結ブ者ヲ、ハナガツミト云フ、苗葉最長大ナリ、

〔延喜式 民部 二十三〕凡神祇官ト竹、及諸祭諸節等所ㇾ須箸竹柏生蔣山藍等類、亦仰二畿内一令ㇾ進、

〔延喜式 主殿 三十六〕供奉年料〇中略 御沐料蔣七十二圍 月別六圍、受二掃部寮一、

〔延喜式 掃部 三十八〕蔣沼一百九十町 在二河内國茨田郡一 刈得蔣一千圍、菅二百圍、並刈運夫以二當國正税一雇役

〔延喜式 内膳 三十九〕粽料〇中略 蔣六十束 物 右從二三月十日一迄二五月卅日一供料

五月五日節〇中略 青蔣十圍

〔萬葉集 七 譬喩歌〕寄ㇾ草

三島江之(ミシマエノ)、玉江之(タマエノ)薦乎(コモヲ)、從標之(シメシヨリ)、己我跡(オノガトゾ)曾念(オモフ)、雖未刈(イマダカラネド)、

〔古今和歌集 十二 戀〕題しらず　つらゆき

まこもかる淀のさは水雨ふれば常よりことにまさる我こひ

〔公任卿集〕玉津島にまうでむとてあるに〇中略 あひの松ばらよりゆけば、まこもぐさ生しげり、さはにこまあるに〇下略

〔枕草子 三〕草はこも

〔明良洪範 續篇 三〕本多美濃守忠政領地巡見ノ節、上田ト見ヘル田地ニ、蒲菰ヲ多ク作リ茂リテ有ケルヲ見テ代官ヲ呼ビ、此田地ハ上田ト見ユルニ、イカナレバ稲ヲ作ラデ、カクマコモヲ作ラセケルヤト尋ケレバ、代官答テ、此マコモハ馬具ニ用ヒ候ヘバ至テ宜敷、其價ヒモ稲ニ増リ候、大坂表ヘ廻シ、切付肌付ニ製ジ候ニ、當地ノ蒲マコモヲ第一ノ蒲コモト致候、是故ニ年々多ク作ラセ申也ト云、利勘第一ノ忠政モ、尤ノ事也迚、其儘過ギラレケル、

筍手根、氣味、甘冷滑無毒、米氣味、甘冷無毒、主治、解煩熱及酒毒、止渴利腸胃、

〔本朝食鑑 三 華和異同〕菰（水菜）

菰米者菰實也、八月開花如葦、結青子、長寸許、霜後采之、大如茅針、皮黒褐色、其米甚白而滑膩、作飯香脆、或作餅、今世有佐牟古米者、華船傳之、恐是彫胡米乎、

〔和漢三才圖會 九十七 水草〕菰（音孤）　茭草　蔣草（和名古毛、又云波奈加豆美、）

本綱、菰生江湖陂澤水中、葉如蒲葦輩、刈以飼馬作薦、春末生白茅如筍、謂之菰菜、（又名茭白、）生熟皆可啖、甜美、其中心如小兒臂者、謂之菰手、（又名蘧蔬、）作菰首者非也、其小者擘之、內有黒灰如墨者、謂之烏鬱、人亦食之、其根亦如蘆根、而相結而生、久則并生浮於水上、謂之菰葑、刈去其葉、便可耕蒔、又名葑田、八月抽莖開花如葦、結青子、長寸許、霜後采之、皮黒褐色、其中子甚白滑膩、是乃彫胡（サンコ）米也、歲飢人以當糧爲餅、甘冷、香脆、（又出于穀類下、）菰之種類皆極冷、不可過食之、

按菰葉織薦、卽稱古毛、今多用稻藁織單薦、亦名古毛、本出於菰薦也、又用葉裹粽、

烏鬱（コモノスミ）　用爲婦人黛甚良、無之時用莖根燒灰亦佳、又和油塗軟癤痕禿者、能生毛髮、

〔重修本草綱目啓蒙 十六 水草〕菰　○コモ（和名鈔）○フシシバ（古歌）○カスミグサ（同上）○マコモ○コモガヤ（阿州）○マキグサ（南部）○チマキグサ（仙臺）○コモグサ（同上）○カツボ（越後）　一名茭兒菜（救荒野蔬譜）名ノ　創玉（名物法言、茭白ノ名）

池澤中甚多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、初メ出ル時筍ノ形ヲナス、コレヲ菰筍ト云フ、マコモノ芽ナリ、漸ク長ジテ葉長サ二三尺、泥昌（セウブ）ニ似テ薄ク、邊ニ刃アリ、中ニ一縱道アリ、莖ニ互生ス、秋ニ至テ高サ三四尺、上ニ長穗ヲ發ス、又二尺許、小花多ク綴リテ、淡竹葉花ノ如シ、實ヲ結バズ、秋中根上ニ筍ノ如キ者ヲ生ズ、卽菰首ナリ、コレヲコモツノ（和名鈔）、コモフクロ（同上）ト云フ、今ガンヅルト呼ブ、老テ中ニ灰ノ如キ者滿ツ色黒シ、卽烏鬱ナリ、一名茭鬱（三才圖會）コレヲマコモト云フ、一名ハタチカ

生菰蔣草心、至秋如小兒臂、故云菰首、(依蘇頌作手)煮食之甘冷、圖經曰、其歲久者中心生白臺、如小兒臂、謂之菰手、今人作菰首非是、爾雅所謂蘧蔬、注云、似土菌、生菰草中、正謂此也、○(中略)本草和名、茭鬱、和名古毛都布良、都布良、不豆路必有一誤、按菰首與茭鬱不同、詳見下、此恐誤、按本草和名、本草外藥載新撰食經云、茭弱、和名古毛乃古、茭鬱、和名古毛都布良、按鄭注輪人云、今人謂蒲本在水中者為弱、然則茭弱謂茭本在水中者、按蜀本圖經曰、春亦生筍甜美堪噉、卽菰菜也、又謂之茭白、食經茭蒻、蓋是訓古毛乃古為允、陳藏器說菰首云、又有一種小者、臂肉如墨、名烏鬱、蘇頌說菰首云、其臺有墨者謂之茭鬱、程瑤田九穀考云、菰首嫩則脆滑、中實、老則心虛、有直理、游泥漬入乃生黑脉、謂之烏鬱、亦曰茭鬱、王念孫云、菰之可食者、小曰菰菜、蘇頌本草圖經所云茭白是也、大曰菰首、爾雅所云出隧蘧蔬、西京雜記綠節、是也、二者皆可為蔬矣、

〔和爾雅 七草木〕菰(コモ) 茭草、蔣草並同、菰筍名菰菜、茭白、菰手、又名菰首、菰根名葑、

〔撮壤集 中草〕蔣(コモ) 蔣(コモ)

〔饅頭屋本節用集 末草木〕葑(マコモ)

〔書言字考節用集 六生植〕菰(マコモ) 蔣草(同、又云茭草、並見本草) 眞薦(同、俗字)

〔倭訓栞 中編二十四〕まこも　眞菰也、眞はほめていふ也、萬葉集には眞薦とかけり、

〔本朝食鑑 三水菜〕菰(訓麻古毛、訓古毛)

集解、菰生於江湖池澤中、二三月生白茅如筍、生熟可噉而甜美、是菰筍茭白菰菜也、筍之中心如小兒臂、名菰手、此謂菰首者誤矣、菰葉類蒲葦而蔓茂、夏月水鳥宿于此中以乳、五月五日采葉莖作角粽、繋之以燈心草、此本邦端午佳例也、或七八月苅葉莖以造席、或晒乾綴作天井、八九月抽莖開花如葦、結實長寸許、霜後采之大如茅針、其皮黑褐色、其米甚白而滑膩、煮蒸似葛餅之粒、華人作飯、本邦作餅、呼稱佐牟古米、其根似蘆根入藥用也、

小々妻

菰

するまでかしらいとしろく、おほどれたるをもしらで、むかしおもひ出がほになびきて、かひろぎたてる人にこそいみじうにためれ、よそふる事ありて、それをしもこそあはれともおもふべけれ、

〔藻鹽草八草〕小。々。妻。

山がつのむすびてかづくさゝめこそ衣のせきと雨もとをさね、月清みあけの野はらの白露にさゝめ分くる衣さぬれぬ、ますらをのみのにさゝむと澤に生るさゝめかるにも袖はぬれけり、

〔大和本草九雜草〕小サ々ヽ妻メ　藻鹽草ニアリ、山野ニ生ズ、賤民ハサヽミノト云、蓑ニ結ブ草也、茅。ノ。類。ナリ、長シ、又賤民編之爲筵、カヤムシロト云、

〔新撰字鏡草〕蔣即郎反、又去、蛙苽蔣草、己。毛。、

〔本草和名十一草〕菰根一名蔣、出雜錄名苑和名古毛乃禰、

〔倭名類聚抄二十草〕菰附菰首　本草云、菰一名蔣、上音孤、下音將、和名古毛、辨色立成云、茭草、茭一云菰蔣草、音殺肴反、七卷食經云、菰首味甘冷、和名古毛布豆呂、一云古毛豆乃、

〔箋注倭名類聚抄十草〕千金翼方證類本草下品有菰根、不載一名、本草和名云、菰根一名蔣出雜名苑、疑源君誤引之、廣雅云、菰蔣也、菰正作苽、說文云、苽雕苽、一名蔣、是雜名苑所本、蜀本圖經云、生水中、葉似蔗荻、圖經、葉如蒲葦輩、衍義菰根蒲類、花如葦、結青子、細若靑麻黃長幾寸、○中略本草和名云、菰根和名古毛乃禰、源君纂節根字、故單訓古毛也、王念孫曰、依說文、周禮膳夫食醫注、內則注、楚辭大招注、菰卽蔣草之米、後以菰爲大名耳、高誘注淮南原道訓天文訓、西京雜記、上林賦、子虛賦注、皆以菰蔣爲大名、雕苽爲米名、○中略證類本草云、菰根、別本注云、菰蔣草也、江南人呼爲茭草、辨色立成似本於此、圖經云、其苗有莖梗者謂之菰蔣草、時珍云、茭以其根交結也、蔣義未詳、○中略所引七卷食經與醫心方引同、蜀本圖經云、三年巳上、心中生臺、如藕白軟、中有黑豚堪食、名菰首也、陳藏器曰、菰首、

も可有之歟、根本三尺餘も蘇鐵の如く、夫より末に薄一本には、常の薄の如く數百本生ず、廿七本共に如此、一本に千本宛も生ると、古來よりの說也、穗の出る事も野に有と同事也、往古より人さわる事ならず、

〔類聚國史 三十一帝王〕大同三年九月戊戌、幸神泉苑、有勅、令從五位下平群朝臣賀是麻呂作和歌曰、伊賀爾布久、賀是爾阿禮波可、於保志万乃乎、波奈能須惠乎、布岐牟須悲太留、皇帝〈○平城〉歡悅授從五位上、

〔大和物語 上〕故式部卿の宮のいではのごに、まゝちゝの少將すみけるを、はなれてのち、女すゝきにふみをつけてやりたりければ、少將、

秋風になびくをばなは昔見し袂ににてぞ戀しかりける、いではのごかへし、

袂ともしのばざらまし秋風をなびく尾花のおどろかさずば

〔古今和歌集 四秋〕題しらず　平貞文

今よりはうゑてだに見じ花薄ほにいづる秋はわびしかりけり

寬平御時きさいの宮の歌合のうた　ありはらのむねやな

秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖とみゆらん

〔源氏物語 四十九寄生〕かれ〴〵なる前栽の中に、おばなのものよりことに、手をさし出てまねくがおかしうみゆるに、またほに出さしたるも、露をつらぬきとむる玉のを、はかなげにうちなびきなど、例のことなれど、夕風なほあはれなりかし、

〔枕草子 三〕草の花は

これにすゝきをいれぬ、いとあやしと人いふめり、秋の野のおしなべたるをかしさは、すゝきにこそあれ、ほさきのすはうにいとこきが、朝ぎりにぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある、秋のはてぞいと見どころなき、色々にみだれ咲たりし花の、かたちもなくちりたるのち、冬の

十寸穗芒〈末須保、或云末曾保、〉　登蓮法師問二名何是一也

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕芒　ススキ　ミダレグサ古名　ソデナミグサ同上　ツユソグサ同上　ツキナミグサ同上　ミクサ同上　テキリガヤ阿州

秋ニ至テ花アリ、和歌ニヲバナトヨメリ、獸ノ尾ニ似タルガ故ナリ、又アコメノハナト云、シマススキハ、葉ニ白キタテ筋アルヲ云、烏木(コクタン)ノ嫩キハ堅ニ白キ筋アリ、コレヲ間道烏木ト云、又葉ニ白キ筋アル紫萼ヲ間道玉簪ト云、其例ニ倣テ間道芒ト名クベシ、又一種一本スヽキハ、鐵蕉(ソテツ)ノ如クカブ高ク立テ、其上ニ葉ヲ叢生ス、漢名未ダ詳ナラズ、トラフスヽキハ、葉ニ虎斑アルヲ云、鷹ノ羽スヽキハ、斜ニ黄ナル斑アリテ、鷹羽紋ノ如シ、瓶花ニ多ク用ユ、歌ニ十寸穗ノ芒ト云ハ、穗ノ長クシテ一尺許アルヲ云、マスウノスヽキト云ハ、眞蘇方(マスホ)ノスヽキヲ略スルナリ、色赤キヲ云、以上二名大和本草ニ見タリ、又在原スヽキハ四季トモニ枯レズ、葉大ナリ、歌ニトキハスヽキト云フ、集解石芒ハイトスヽキ、小スヽキナリ、五月ニ花ヲ開ク、形狀芒ニ同ジクシテ小ナリ、播帚ハハハキ、敗芒箔ハフルキスヽキノスダレ、増、一種冬月葉ノ枯レザル者アリ、カンスヽキト云、コレニモ堅ニ白キ筋ノ入タルアリ、シマカンスヽキト云、又葉邊ノミ白キモノヲカゲカンスヽキト云、至テ細キモノヲイトカンスヽキト云、共ニ正月ニ穗ヲ生ズ、

〔剪花翁傳 四 八月開花〕薄　芽は春彼岸後より生ず、穗八月上旬に出るなり、穗葉共に用ふべし、郊野に生ずる物なり、よて育方はいはず、

糸薄　葉至て細く縦斑あり、穗八月上旬なり、穗葉ともに用ふ、性質薄に同じ、

〔渡邊幸庵對話〕一上總の內に山の根と云處あり、是諸星庄兵衞といふ人の御代官所也、是に池有、池の堤より水中へ六尺計有て、一本薄とて廿七本生ず、小さきは廻り壹尺餘、大は壹尺四寸廻り

けれど、和歌のならひ、かやうのふることを用ひるも、又よのつねの事也、人あまねくしらず、みだりに是をとくべからず、

〔大和本草 六 民用草〕芒(スヽキ カヤ)　時珍曰、芒有二種、皆叢生、葉皆如茅而大、長四五尺甚快利、傷人如鋒刃、七月抽長莖、開白花成穗、如蘆葦花者芒也、五月抽短莖、開花、如芒者石芒也、今案本邦ニ所在モ、亦時珍ガイヘル如ク長短二種アリ、短者カヤト云、山野ニ遍ク生ズ、薪トシ屋ヲフク者是也、長キ者ヲスヽキト云、莖紅ナリ、秋花アリ、ウヘテ藩籬トシ、キリテ箔(スダレ)トシ、壁代トシ、箸トシ、其莖穗ハ帚トス、長短並ニ甚民用ニ利アル事、五穀麻棉ニツゲリ、屋上ノカヤフキノフルキト、カヤスダレノフルキモ、皆功能アリ、スヽキニモ亦類多シ、鷹ノ羽スヽキ、葉ニ白文アリ、鷹ノ羽ノ文ノゴトシ、トキハスヽキ、アリ、冬ニ至テ葉不枯、歌ニ尾花トヨメルハ、秋ノ末スヽキノ穗ニ出タル、獸ノ尾ニ似タルヲ云、シノスヽキトハ、シノヽ如ナルヲ云、ハタスヽキトハ旗ヲアゲタルヤウニ穗ニ出タル也、ホヤノスヽキトハ、スヽキノ穗ニテ作タル屋ナリ、十寸穗(マスホ)ノスヽキトハ、穗ノ長クシテ一尺バカリナルヲ云、マスウノスヽキトハ、眞蘇方ノスヽキヲ略セリ、色赤キヲ云、糸スヽキハ、葉細ニシテ糸ノ如クナルヲ云、右何レモ歌ニ詠ゼリ、

〔和漢三才圖會 九十二末 山草〕芒(同芸)　芭茅　杜榮　芭茅(俗云尾花、又云須々木、俗作薄字、○中略)

石芒(一名折草)　生高山、如芒而節短、五月抽短莖、開花亦如芒花、

按芸(俗用薄字)其花作穗而翻翻似物之尾、故俗呼名尾花、順和名抄引爾雅云、草聚生曰薄、(新撰萬葉集和歌云、花薄)釋須波奈須須木、此草以數莖叢生、竟以薄爲此草名、

常芸(一名盤芒)　葉潤於常、夏冬不凋、快利傷人手者也、

鬼芸(ヲニスヽキ)

絞芸(末須之木須)　葉有縱白文、如絞織者也、

鷹羽芒(太加乃波)　葉有白彪、如鷹羽者也、

しなのなるほやのすゝきも風ふけばそよ〳〵さこそいはまほしけれ

顕昭云、ほやのといふ所しなのゝ國に有、その所にあるすゝき也、或書にはちゐさやかなるすゝきなりとかきたれど、それはいかゞとおぼゆ、

〔無名秘抄上〕一雨の降ける日、或人のもとに、おもふどちさしあつまりて、ふるき事などかたり出たりけるついでに、ますほのすゝきといふは、いかなるすゝきぞなどいひしろふ程に、ある老人のいはく、わたのべといふ所にこそ、このことしりたるひじりひとりあるときゝ侍しかども、いまだ尋きかずといひ出たりけり、登蓮法師その中にありてこの事をきゝ、詞ずくなになりて、又とふこともなく、あるじにいふ樣、みのかさちとかしたまへといひければ、あやしと思ひながらとりいでたり、物がたりどもきゝさして、みのうちきわらぐつさしはきて、いそぎ出けるを、人々あやしがりて、そのいはれをとふ、わたのべといふ所へまかるなり、年比いぶかしく思ひ給へしことを、しれる人ありと聞て、いかでか尋ねにまからむといふ、おどろきながら、さるにても雨やめて出たまへといさめけれど、いでやはかなきことをのたまふかな、命は我も人も雨のはれまなど待べき物か、なにごとも今しづかにとばかりいひすてゝいにけり、いみじかりけるすき物かな、さてほいのごとく此所へゆき、たづねあはせて、とひきゝて、いみじう秘藏しけり、このこと第三代の弟子につたへならひ侍ける、此薄のこと同じさまにてあまた侍也、ますほの薄まそをのすゝきますうの薄とて三品あり、ますほのすゝきといふは、ほのながくて一尺ばかりあるをいふ、かのますかゞみをば、万葉集には十寸鏡とかけるにて心うべし、まそをのすゝきといふは、眞麻の心也、俊頼朝臣よみ侍る、まそをの絲をくりかけてと侍るとよ、絲などのみだれたるやうなり、ますうのすゝきとは、まことにすはうなりといふ心なり、ますはうのすゝきといふべきを、ことばを略していふなり、色ふかき薄の名なるべし、是古集などにたしかにみえたることはな

又これあり、何ぞかれをみくさと不云乎、答云、たとひ其義もありぬべくとも、古賢者殊秋のはなすゝきを賞せり、故柿本朝臣人麿歌云、人みなははぎを秋といふいなわれはおばなが末を秋とはいはむ云云、又諸草おほしといへども、此集のうたの義讀の中に、草花とかきておばなとよむ、これすゝきまことのくさなる故也、

〔日本書紀神功九〕九年〇仲哀三月壬申朔、皇后選吉日入齋宮、親爲神主、〇中略亦問之、除是神有神乎、答曰、幡荻穗出吾也、於尾田吾田節之淡郡所居之有也、

〔萬葉集十秋相聞〕寄花
吾妹兒爾、相坂山之、皮爲酢寸、穗庭開不出、戀渡鴨、

〔冠辭考八波〕はたすゝき
はたすゝきてふは、奈良人となりては、さま〳〵に意得しにや、うたがはしき事多し、されどまづ紀に幡荻、万葉卷一に、人麻呂旗須爲寸、四能乎押靡など書たるによらば、秋野の中にすゝきは物より高く顯れて、葉も長くてはゞ有なれば、幡すゝきと云ならむ、

〔萬葉集七雜歌〕詠草
妹所等、我通路、細竹爲酢寸、我通、靡細竹原、

〔萬葉集抄五〕しのすゝきとは、ほにいでぬすゝきをいふ、しのと云はしのぶと云詞也、

〔袖中抄十九〕すぐろのすゝき
あはづ野のすぐろのすゝきつのぐめばふゆたちなづむ駒ぞいはゆる
顯昭云、すぐろのすゝきとは、春のやけのゝすゝきのすゑのくろき也、ゑもじを略してすぐろといへる也、〇下略

〔袖中抄十九〕ほやのすゝき

花スヽキを取りて、ミヌサを奉るといふ是也と見えけり、日本紀には野薦の字スヾとよむを、纂疏には薦は小竹之名と註せられたり、万葉集抄の説によれば、スヽは、スヽキ也、纂疏之説に依れば、スヾといふは猶小竹よむでサヽといふが如し、いづれか是なる事を知らず、

〔松の落葉一〕すゝき

すゝきとは、あつまり生しげりたる草をいひし事にて、和名抄にも草聚生曰薄といへり、又日本書紀神功皇后の卷に、幡荻穗出吾也、孝德天皇の卷に、三河大伴直蘆とありて、荻蘆のもじを、ともにすゝきとよめるも、あつまり生るゆゑにこそ、さて乎花はものよりことにあつまり生しげれば、中むかしよりはおのづからに、此草の亦の名のごとくなれるなるべし、

〔八雲御抄三上草〕薄　をばな　はな　しの　むら　いと　一むら　一もと　はた万　いとすゝき後頼難之　しのゝを薄　さきのをすくろと云は、春やけたる也、　すくろのすゝき同事也、しのすゝきはたゞ薄の名也、ほにいでぬと云正説也、　しの薄ほにいづといへる歌多、但ほにいでぬる、ほにいづるといふに同事也、　又源氏にも、あきのするにほにいづといへり、　又源氏にほに出ぬもの思らししの薄　後撰にすゝきをみならぬといへり　同集、棟梁、はなすゝきそよともすればといへり、　源氏にをばなの物よりことにてをさしいでゝまねくと云り、　おほかたまねくとは、ほにいでゝまねくそでににたる也、

〔萬葉集一雜歌〕額田王歌　未詳

金野乃、美草苅葺、屋杼禮里之、兎道乃宮子能、借五百礒所念、

〔萬葉集抄一〕みくさとはすゝきなり、此歌點にも、或はおばなかりふきとも、或はみくさかりふきとも點之、此歌にはみくさと點せる殊宜也、みくさといふは、もろ〳〵の草の中に、たかくおおしき草なるがゆへに、眞草の義にて、みくさと云べし、難云、たかくおゝしきによらば、萩葦等

快利、傷人如鋒刃、七月抽長莖、開白花、成穗如蘆葦花者芒也、五月抽短莖、開花如芒者石芒也、並於花將放時、剝其籜皮、可以爲繩箔草履諸物、其莖穗可爲掃帚也、是芒可訓須須岐、石芒可訓伊登須須岐也、

〔下學集 下草木〕薄(スヽキ) 韻府曰、木曰林、草曰薄、故云叢、

〔書言字考節用集 六生植〕芒(スヽキ) 時珍云、葉如茅而長四五尺、甚快利、傷人如鋒刃、 芭茅(同)又云芭芒 杜榮(同)並出本草 薄(同)楚辭註、草木交曰薄、今按本朝俗所用據順和名、 芒(スヽキノ)花(ハナ)

〔東雅 十五草卉〕薄スヽキ　倭名鈔に、爾雅には草の聚生を薄と云ふ、萬葉集の歌に、花薄の字よむでハナスヽキといふと註せり、其註せし所の如き、薄の字スヽキと讀む事、然るべしと思へりとも見えねど、また正しくいづれの字を用ゆべしといふ事も見えず、陳藏器李東壁等の本草に據るに、芒は爾雅に莣に作ると見えしは、此にしてスヽキといふ者也、一種莖の短きを石芒といふと見えしは、此にシノスヽキなど云ひし物に類して、其穗に出でぬるをば、ハナスヽキと云ひ、其花をばヲバナといふなり、スヽキとはヲギといふ名に對し云ふなり、スヽとは猶サヽと云ふが如し、其細くして細きをいふなり、キは其葉の人を傷ふ事、鋒刃の如くなるをいふなり、ヲバナとは萬葉集に、麻花としるせり、絲などの亂れたるやうになるをいふと、舊說には見えたり、

藻鹽草にススといひ、ササといふ、其語の轉せしにて、其義は同じ、たとへば雀をスヾメといひ、鷦鷯をサヽキといふ、共にこれ其小鳥なるをいふが如し、

萬葉集抄にミクサとはスヽキなり、眞草の義にてミクサといふべし、此集義讀の中、草花とかきてヲバナとよむ、是スヽキは眞の草なるなり、萬木千草多かりといへども、神祇を祝ひかざり祭るに、榊をミサカキといひ、スヽキをミクサといふべし、天照大神天磐戸にこもり給ひし時、野槌者採五百箇野薦八十五籤と云云、これに因りて信濃諏訪明神のみさやまのかりやに、

茅香

煮テ赤ク染テホクチトス、又燒酒ニテ煮製スルモアリ、

〔多識編 二芳草〕茅香 宋開寶 異名嗢尸羅 金光明經 香麻、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕茅香 カウバウ 江戸 一名綿子檀 綠縣耕

漢渡ナシ、武州原野處處ニ自生アリ、葉ハ白茅(ツバナ)葉ノ如ニシテ白色ヲ帶ブ、夏月穗ヲ出ス、スヽメノカタビラノ穗ニ似タリ、根ハ白色細長ク、茅根ノ如ク土中ニ繁延ス、根葉共ニ香氣多シ、葉ハ秋後ニ枯ル、

薄

〔倭名類聚抄 二十草〕薄 爾雅云、草聚生曰薄、新撰萬葉集和歌云、花薄波奈須須木、今案卽厚薄之薄字也、見玉篇、 辨色立成云、芊 和名上同、今案芊音千、草盛也、見唐韻、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕所引文、原書無載、按廣雅釋草云、草叢生爲薄、則爾雅當作廣雅、蓋傳寫之誤、文選注三引廣雅作曰薄、與此所引正合、則知源君襲李善之誤也、○中略 按古謂草叢生者爲須須岐、非一草之名、須瘦清之義、洲訓須、謂無汚泥也、酢酒訓須、謂其味之清也、訓澄爲須牟、活用是語、直訓須具、進訓須須牟、皆同語、草叢生者其莖必細瘦無枝、故云須、叢生故疊言云須須岐、謂草也、則知須須岐是草叢生之名、赤染衛門集小序、謂瞿麥叢生者、云奈天之古乃須須岐爾奈利多留是也、故訓薄芊字皆爲須須岐、又有一種名須須岐之草、其抽穗之狀頗似蘆荻、故神功紀仁德紀用荻字爲須須岐、孝德紀用蘆字爲須須岐、謂其開花者爲波奈須須岐、而花穗茸茸似獸尾、故呼乎波奈、抽莖放花、狀似樹旌旗、故或謂之波多須須岐、花出於苞、未全發、其色紫赤、故謂之萬曾保乃須須岐、萬曾保眞赭之義、蓋是草叢生過于他草、故專須須岐之名、猶之乃䅺條之總稱、所謂之乃須須岐、草乃之乃屋、皆是、而以篠竹軟靡專是名類也、如新撰萬葉集以薄爲是草名者、訓同假借耳、源君以薄芊字爲卽是草名、非是、按釋草、芞杜榮、郭曰、今芞草似茅、皮可以爲繩索履屩也、陳藏器曰、石芒生高山、如芒節短、江西人呼爲折草、六月七月生穗如荻也、李時珍曰、芒有二種、皆叢生、葉皆如茅而大、長四五尺、甚

天爾有哉、神樂良能小野爾、茅草苅、草苅婆可爾、鶉乎立毛、○二首略

〔宜禁本草乾菜中草〕茅根　甘寒、補中益氣、除瘀血血閉寒熱、利尿下淋、止渇堅筋、久服利人、茅針主惡瘡未潰、煮服、益小兒可噉　生按傳金瘡止血、煮服主鼻衄暴下血、

〔本朝食鑑三柔滑〕茅花　芽俗訓津波奈

釋名　必大(平野)按、本邦以茅訓知、知鍍津同音通用、故稱津波奈歟、本邦自古倭語俗語此類多矣、

集解、茅原野毎多有而民間葺屋者也、春初生芽、即茅針也、二三月含花時、紅青交色、葉中含碧白之絮、兒女采之稱津波奈而噉之、或和鹽揉合而食之、其味甘脆、三四月開白花、如白毛敗筆而結細子、其根甚長白如筋軟脆、味甘、此亦兒女之弄也、花及根倶入藥用、凡茅類有數品、然所用者惟一種爾、

茅花氣味甘温無毒、主治、止吐血衄血、並塞鼻而止、又傳灸瘡、或止金瘡之血及痛、　茅根氣味甘寒無毒、主治、伏熱瘀諸血噦逆喘急消渇黄疸水腫、餘詳于綱目、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕白茅　根名茹根　蘭根　地筋　茅和名智、花曰豆波奈、豆與智通、○中略

按茅生原野堤塘、春月兒女拔茅針、爲野遊、

〔重修本草綱目啓蒙入山草〕白茅　チ和名鈔　ハクウサウ同上　チガヤ　ヲモヒグサ古歌　アサヂ　ミチノシバグサ共ニ同上　ツンバ子播州　カニスカシ同上　ツバ作州　ツバウバナ防州

一名過山龍本草蒙筌　茅草訓蒙字會　茅柴彙品字　菼　秀茅共同上花名　苦菜通雅同上　彙杜證類本草根ノ名　增

一名秋茅彙品字

随地皆アリ、葉ハ稻葉ノ如ニシテ薄ク、長サ一尺或三四尺許叢生ス、春新苗出ル時、葉中ニ花ヲ包ミ、細筍ノ形ノ如シ、コレヲ茅針ト云、一名茅荀、醫學入門茅楃、通雅荑、茀蒋、薆、共ニ同上共ニツバナト呼ブ、チバナナリ、今ノ人草ノ名ヲツバナト呼ブハ誤ナリ、小兒茅荀ヲ採リ、嫩穂ヲ出シテ食フ、集解ニモ小兒ニ益スト云、夏ニナレバ穂長出テ、狗尾草ノ穂ヨリ長ク、白キ絮アリ、此絮ヲ取テ焰硝ヲ加ヘ、

にして茅針といふもの卽是也、或人の說に茅をチといふは、其赤色なるが血の如くなるが故也、といふなり、彥五瀨命御手の血をあらひ給ひし海を、血沼といふ、後に茅渟海といふ是也、また神武天皇の御兄宇迦斯を斬給ひし其地を、宇陀之血原といふ、血とも茅とも見えしは、後に淺茅原などいふ事の如くにも聞えぬれば、かた〴〵其謂あるに似たれども、血と茅とチとよぶ所の同じければ、血といふ名を緣ひて、後に茅の字を用ひしも知るべからず、血によりて茅の名ありといふ事、其徵とすべき事は見えず、またカヤといふ事は、刈りて屋を葺く草なるをいふ也ともいふなり、古事記に葺草の字をカヤと讀み、万葉集に刈草をカルカヤと讀む事も見えたれば、これも其謂あるに似たれど、草屋をカヤノロメと云ひしと見えし如きは、草といふ者の初て生じたらむ時に、旣にそれを刈りて、屋葺く料となすべきなもてカヤといふの神名あるべしとも思はれず、

〔倭訓栞前編十五〕ち○中略茅をよむも神代紀にみえ、倭名抄同じ、千の義多くあつまり生ずるをいふ成べし、

〔日本釋名下草〕茅花　ちはな也、つとちと通ず、ちはちがや也、ちがやとは血のいろの如く赤きゆへ也、かやとはかりてやねをふくなり、又つばなを尾花とも云、けだもの丶尾の如し、

〔萬葉集八春相聞〕紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首

戲奴變云和氣之爲、吾手母須麻爾、春野爾拔流、茅花曾、御食而肥座○一首略

右折攀合歡花幷茅花贈也

大伴家持贈和歌二首

吾君爾、戲奴者戀良思、給有、茅花乎雖喫、彌瘦爾夜須○一首略

〔嬉遊笑覽十二草木〕茅花をゐなかの童部はつみて食ふ、古へは是をくへば肥とて大人もくひたり、万葉八紀の女郎が家持と贈答に、○中略本草にも益小兒といへり、○註略五元集、やせたうてつばなも食はぬ花盛、と付句あり、

〔枕草子三〕草は

つばないとをかし、はまちの葉はましておかし、○中略あさぢ、

〔萬葉集十六有由緣幷雜歌〕怕物歌三首

茅

ナリ、時珍曰、菅。茅。ハカヤナリ、山中ニ生ズ、スヽキニ似テ大ナリ、菅ノ字ヲスゲト訓ズルハ非ナリ、カ。サ。ス。ゲ。ハ臺ナリ、ミ。ノ。ス。ゲ。ハ蓑衣草通雅ナリ、黄。茅。ハアブラガヤ、アブラシバ、メガヤ、アイバサウ、勢州カヤニ似テ葉狹クシテ厚ク光アリ、莖ノ末ニ花叢垂シテ蜀黍ノ穗ノ如ニシテ黄褐色、又穗ニ油ノ香アリ、故ニアブラガヤト云フ、八月ニ花アリ、即穀部ノ蒯草ナリ、香。茅。ハ未ダ詳ナラズ、古ヘ三角スゲノ説アレドモ穩ナラズ、芭。茅。ハスヽキ次ニ本條アリ、荻。ハオギナリ、莖中實ス、花葉トモニ芒ニ似テ大ナリ、三。脊。茅。ハ香茅ナリ、屋敗茅ハヤネニフキタルフキチガヤナリ、四角茅ハ屋上ノコスミノチガヤナリ、

〔本草和名八草〕茅根　一名蘭根、仁諝音菅　一名茹根、楊玄操音加　一名地菅、一名地筋、一名兼杜、一名白茅、出陶景注一名白華、一名藗杜、音速　一名三稜、一名野菅、一名兼根、一名地根、已上六名出兼名苑　一名白羽草、出大清經　一名地煎、出雜要訣　和名知。乃。禰。

〔段注説文解字一下艸〕茅菅也、按統言則茅菅是一、析言則菅與茅殊、許菅茅互訓、此從統言也、陸璣曰、菅似茅而滑澤無毛、根下下當作上五寸中有白粉者、柔韌宜為索、漚乃尤善矣、此析言也、从草矛聲、莫交切、古音在三部、可縮酒為藉、各本無此五字、依韵會所引補、縮酒見左傳、為藉見周易、此與蕭以香口藉、可以為苯席一例、

〔倭名類聚抄二十草〕茅　大清經云、茅一名白羽草、茅音莫交反、和名。智。、

〔和爾雅七草木〕白。茅。チカヤ根名茹根地筋　茅。針。ツバナ初生苗也　荑同上、見詩經

〔撮壤集中草〕茨チカヤ

〔饅頭屋本節用集知草木〕茅チ。草クサ　〔同門草木〕䒬ツバナ

〔書言字考節用集六生植〕茅チガヤ正字通曰、白茅、時珍云、夏花者為茅、秋花者為菅、　白羽草同、順和名　蔛チガヤノホ字彙、茅穗也　茅針ツバナ匀會、茅苗出地曰茅針、チバナ　荑同、毛詩註、茅之始生曰荑、　茅花万葉　秀茅同、匀會、茅花也、

〔東雅十五草卉〕菅スゲ　茅チ　萱カヤ中略　チといひカヤといふ義未詳、中略　古の時にチと云ひしもの、即今俗にチガヤといひ、またチバナとも、ツバナともいひて、万葉集に茅花としるせしは、彼

まめなれどなにぞはよけくかるかやの亂てあれどあしけくもなし　忠岑

〔拾遺和歌集七物名〕かるかや

しら露のかゝるかやがてきえざらば草葉ぞ玉のくしげならまし

〔枕草子三〕草の花は　かるかや

〔散木弃謌集十雜下〕かるかや

我駒はしばしとかるかやましろのこはだの里に有とこたへよ

〔太平記二十八〕三角入道謀叛事

城ノ後ナル自深山、匍々忍寄テ、薄苅萱篠竹ナンドヲ切テ、鎧ノサネ頭冑ノ鉢付ノ板ニヒシト差テ、探竿影草ニ身ヲ隱シ、鼓ガ崎ノ切岸ノ下、岩尾ノ陰ニゾ臥タリケル、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕刈萱　正字未詳　俗云加留加也

按、此草生山原、高二三尺、細莖細葉、毎五葉兩兩對生、八月抽莖開細花、狀如景天草及胡蘿蔔花、而粒粒青色、既開則正黃、是亦可謂如燕栗乎、隨結子、

一云刈萱者芒之類也、秋出穗、

〔剪花翁傳四七月開花〕刈萱(かるかや)　燕麥穗七月初、方日向地一分濕、土えらばず、肥淡小べん、移分株ともに春彼岸よし、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕黃茅　根名地筋　菅根　土筋　俗云加也　〇中略

按黃茅其根細纖而如絲瓜筋及萆薢鬚、束之可以磨物、呼名字豆久利、出於藝州廣島、櫛挽家用之以琢櫛、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕白茅

集解弘景曰、詩云、露彼菅茅、コノ詩ニ詠ズルハ菅ト茅ト二物ナリ、弘景引テ一物トスルモノハ誤

古今集、まめなれど、何ぞはよけく、かるかやの、亂れてあれど、あしけくもなし、實法めきたゝ人も、必よき事のみにはあらず、我おこなひの亂りざまなるも、はたあしきむくひのきたるのみにあらずと也、かるかやはみだれざまになる物也、今は一種の草の名にて、茅の類の、長だち二尺ばかりに、秋は葉も穗も共にもみぢする物也、古歌によみしは是にあらず、なべての草のおひたけ立たるを苅て、假初のいほりに取ふく名、神代紀に、野の神を茅野姫と申も、草といはぬは、家にとりふく用を、専らたとむ故也、そのかみは旅ゆきして、野山に夜ごとやどりをつくりてふせりし、それを行廬と云、萬葉集に、秋のたに眞草刈ふきやどれりし、宇治の都の、かりほしおもほゆ、又、我夫子は、かりほつくらす、かやなくば、小松がもとの、かやをからさね、又、拾遺集にもいにしへにならへる歌、旅人のかや刈おほひ作るてふまろやは人をおもひわするゝ、丸屋を我をまろと云にかけたり是等は荒草なるを、假そめの屋をふくとて刈を、刈かやと云也、かやはかりやのつゞめ言也又坂上是則の集に、霜枯のあさぢがもとのかるかやの亂て物を思ふ比かな、壬生忠岑の集に、咲花のはかなかるかやにほひつゝ人の心をあだになすらん、是等は今の草の名なるべし、又源順のせんざいの歌合せに、ゆく秋の凡そみだるゝかるかやは玄めゆふ露もとまらざりけり、右の方の歌、うつし植ばつかのまもなくかるかやの三千代の數をかぞふばかりぞ、此判の詞に、此かるかやは、たゞのぶが三千代のかずといへるわたり、秋のゝにかるかやにはあらで、春の野に咲けん物の花なん思ひ出らると有て、言の葉の、こはく見ゆれどすまひ草露にはうつるものにざりけるといへるは、何の草にや、詞あきらかならねば、知がたし、

〔八雲御抄三草上〕苅萱　かるかや　たゞかやともいふ　たかゝや万　を　さねかや　ねしろたかかやとも

〔古今和歌集十九誹諧歌〕題しらず　よみ人しらず

〔撮壤集 中 草〕茆カヤ

〔書言字考節用集 六 生植〕地筋カヤ（本草白茅類而小異也）萱（同、順和名）

〔東雅 十五 草卉〕菅スゲ　茅チ　萱カヤ○中略　チといひカヤといふ義不詳、萱の字の如きも、倭名鈔に廣益玉篇を引て、草名也と註したれど、正しくカヤといふべき義とも見えず、此字また他書に見る所もなし、日本紀に草祖草野姫としるされしは、舊事紀古事記に、鹿屋野姫と見えし所にして、並に讀てカヤノヒメといふなり、さらば古の時にカヤと云ひしは、凡そ草を總言ひし言葉とこそ見えたれ、また彥波瀲武の御名の如きも、舊事紀日本紀には鸕鷀草讀てウカヤといふ、古事記には鵜葺草としるして、葺草二字を引合せて、讀てカヤといふと註せり、万葉集の如きも、又刈草の字讀てカルカヤとは云ひけり、

〔古事記傳 五〕加夜は、此卷末に、以鵜羽爲葺草とありて、訓葺草云加夜と註せるぞ本義にて、何にもあれ、屋葺む料の草を云名なり、○中略　芽カヤと云一種あるも、屋ふくに主と用る故の名なり、

〔萬葉集 十四 東歌〕相聞
可波加美能、禰自路多可我夜、安也爾安夜爾、左宿左寢氐許曾、己登爾氐爾思可、

〔類聚名義抄 八 艸〕刈萱カルカヤ

〔下學集 下 草木〕刈カル萱カヤ

〔撮壤集 中 草〕苅カル萱カヤ（和名）

〔倭訓栞 前編 六 加〕かるかや　苅萱の義、萬葉集にも刈草と見えたり、秋にかりとりたるをいふ、かるかやの關も玄か也、○中略　後世一種のかるかやといふ草あり、雀麥也といへり、夫木集に、
かち人のゆきゝの岡のかるかやは折ふすかたや道となるらん

〔冠辭續釋 三 加〕かるかやの　みだれ

モ菅茅花ノ如ニシテ長大ナリ、初ハ淡紫色後漸ク白色ニ變ズ、秋深テ苗枯ル、一名荻子草、訓蒙字會

〔萬葉集十秋雜歌〕詠雁

葦邊在、荻之葉左夜藝、秋風之、吹來苗丹、雁鳴渡、

〔萬葉集十四東歌〕雜歌

伊毛奈呂我、都可布河泊豆乃、佐左良乎疑、安志等比登其等、加多里與良斯毛、

〔後撰和歌集五秋〕秋大輔がうづまさの傍なる家に侍りけるに、おぎのはにふみをさしてつかはしける、

山ざとの物さびしきは荻のはのなびくごとにぞ思ひやらるゝ　左大臣〇藤原實頼

〔更科日記〕冬になりて、日暮し雨ふりくらひたる夜、雲かへる風はげしう打吹て、そら晴て月いみじうあかう成て、軒ちかき荻のいみじう風にふかれて、くだけまどふがいと哀にて、

秋をいかに思ひいづらむ冬深み嵐にまどふ荻の枯はは

〔倭名類聚抄二十草〕萱　廣益玉篇云、萱、魚飢反、與宜同、和名加夜、

〔箋注倭名類聚抄十草〕按玉篇梁顧野王撰、唐孫強增加字、宋大中祥符六年陳彭年等重修、名曰大廣益會玉篇、然則孫強增字者之廣益、至宋重修名曰大廣益會歟、然本書引玉篇皆無有廣益字、唯此有之、疑是後人所增、下總本無者似是、魚飢反與玉篇合、在五支、與宜同、與廣韻合、在六脂、二音不同、此與字上恐脫又字、〇中略今本玉篇艸部云、萱萱苚草、與此所引不同、按嘉祐本草云、萱草一名鹿葱、花名宜男、引風土記云、懷姙婦人佩其花生男也、則知萱苚宜男俗字、然則玉篇萱字、可充和須禮久佐、上文所載菅茅、乃可以充加夜也、〇中略按古事記云、訓葺草云加夜、則知古書訓草爲加夜者、謂葺屋料草、菅芒蘆荻之類皆是、而茅爲葺屋料之最佳者、故專加夜之名、

〔類聚名義抄八艸〕萱音宜　カヤ

〔新撰字鏡 草〕荻遴同、徒歷反、蔍荻也、乎○支○、

〔倭名類聚抄 二十草〕荻　野王案云、荻音狄、字亦作蘧、和名乎岐、與亂相似而非一種矣、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按本草圖經云、爾雅謂菼爲亂、或謂之荻、荻至秋堅成、即謂之萑、補筆談云、亂萑菼荻也、皆以亂荻爲一物、顧氏相似非一種之說、未知所本、

〔書言字考節用集 六生植〕荻ヲギ蘆之屬、事詳本草、　烏蓲同　菼同　亂同　萑同　遴同　藂同

〔東雅 十五草卉〕荻ヲギ　倭名鈔に野王の說を引て、荻はヲギ、與亂相似而非一種と註せり、本草圖經の如きは、菼は亂似葦而小、中實、或謂之遴、即荻也、至秋堅成、乃これを萑スイといふ、葉は似萑而細長、高數尺、其花其萌を呼ぶ事は、葦も荻も相同じと見えたり、さらば亂と荻とは一物にして、葦とは別にこれ一物也、ヲキといひしは、スヽキに對し云ひし所と見えて、オとは大也、キといふは其芒ノギあるを云ひしと見えたり、即今俗にはウミガヤなどいふ是也、葉は即今俗にスダレアシなどいふなり、むかし日向の國人の云ひし事を聞しに、彼國には猶今もウガヤといふ者のあるなり、これは葺不合尊の御産屋を、ふきし者也と云ひつぎぬといひけり、ウガヤといひ、ウミガヤといふ、其語相通じぬれば、太古の時にウガヤといひし物は、荻なりけむも知らず、

〔藻鹽草 八草〕荻野などによむ、水邊にもあるべし云々、したおき、荻原、荻のやけはら、庭荻、から荻、かれたる也　荻の上風、荻のは風、そよぐとも、またなびくともよめり、○中略　荻の花万也、但猶以可尋歟、ともすりのをとのはげしさと讀り、葉風にそへて云り、新六、たかやかなる荻といへり、寺也、河氏、

〔重修本草綱目啓蒙 十一隰草〕蘆

荻　ヲ○ギ○、ヲ○ギ○、ヨ○シ○トモ云フ、古歌ニハフミミグサ、ヤマシタグサ、カゼキヽグサ、トハレグサ、ネカラグサ、ノモリグサ、メザマシグサ、ツユヤグサ、ネサメグサ、カゼモチグサト云、水邊ニ生ズ、陸地ニ移シテ繁殖シヤスシ、大抵菅茅カヤニ似テ長大ナリ、其莖蘆トハチガヒ、肉厚クシテ中ニ小孔アリ、花

か丶るものあきなひて、よにふる人いかならんといひてなきければ、ともの人は、なほおほかたのよを哀がるとなん思ける、かくてこのあしの男に、ものなどくはせよ、物いとおほくあしのあたひにとらせよといひければ、すゞろなるものに、なにかものおほく給はんなど、ある人々いひければ、しゐてもえいひにくゝて、いかで物をとらせんとおもふ間に、したすだれのはざまのあきたるより、この男まもれば、わがめににたり、あやしさに心をさめて見るに、かほもこゑもそれなりけりと思ふに、おもひあはせて、わがさまのいといらなく成たるを、おもひはかるに、いとはしたなくて、あしもうちすてゝ、はしりにげにけり、しばしといはせけれど、人の家ににげ入て、かまのしりへにかゞまりおりけり、この車よりなほこのをとこたづねてゐてこといひければ、ともの人、手をあかちてもとめさはぎけり、人そこなる家になん侍けるといへば、此おとこにかくおほせ事ありてめすなり、なにのうちひかせ給べきにもあらず、ものをこそは給はせんとすれ、おさなきものなりといふ、ときに硯をこひてふみかく、それに

きみなくてあしかりけりと思にもいとゞなにはの浦ぞすみうき、とかきてふむして、これを御車に奉れといひければ、あやしと思ひてもてきて奉る、あけて見るにかなしき事ものににず、よゝとぞなきける、さてかへしはいかゞしたりけんしらず、くるまにきたりける衣ぬぎて、つゝみてふみなどかきぐしてやりける、さてなむかへりける、のちにはいかゞなりにけんしらず、

あしからじとてこそ人のわかれけめなにか難波の浦は住うき

〔更科日記〕むらさき生ときく野も、あし荻のみたかくおひて、馬にのりてゆみもたるすゑ見えぬまで、たかく生ひしげりて、中をわけ行に、たけしばといふ寺あり、

〔新千載和歌集春一〕正治二年後鳥羽院に、百首の歌奉りける時、　後京極攝政前太政大臣

霜枯のこやのやへぶきふきかへて蘆の若葉に春風ぞ吹

〔萬葉集二十〕陳私拙懷一首幷短歌
海原乃、由多氣伎見都々、安之我知流、奈爾波爾等之波、倍努倍久於毛保由、
右二月十三日(○天平勝寶七歲)、兵部少輔宿禰家持、
〔日本後紀二十四(嵯峨)〕弘仁六年十月庚子、安房國獻蘆二枝、長各三丈、圍一尺、
〔續日本後紀十九(仁明)〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十、奉造聖像卌軀、(○中略)副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毗古那加、葦菅遠、殖生志津國固米、造介牟與理、(○下略)
〔拾遺和歌集九(雜)〕つのかみに侍ける人のもとにて　たゞみ
難波がたえげりあへるは君が代にあしかるわざをせねばなるべし
〔枕草子三〕草の花は
あしの花さらに見どころなけれど、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらんとおもふにたゞならず、もじもすゝきにはをとらねど、水のつらにておかしうこそあらめと覺ゆ、
〔大和物語下〕なにはにはらへして、かへりなんとする時に、このわたりに見るべきことなむあるとて、いますこしとやれ、かくやれといひつゝ、このくるまをやらせつゝ、家のありしわたりを見るに、やもなし人もなし、いづかへいにけんと、かなしうおもひけり、(○中略)えばしといふほどに、あしになひたるおとこの、かたゐのやうなるすがたなる、このくるまのまへよりいきけり、これがかほをみるに、その人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、わがおとこにたり、これを見てよく見まほしさに、このあしもちたるをのこよばせよ、あしかはんといはせける、さりければ、ようなきものかひ給とは思ひけれど、えうののたまふ事なればよびてかはす、車のもとちかくになひよせさせよ、見んなどいひて、この男のかほをよくみるにそれなりけり、いとあはれに

生ずるもあらん、此地もいにしへは、入江あるひは流水のところにて、其性をつたへて、今に片葉に生ずるか、風土の一奇事と云べし、つのくに鵜殿のあしと同品なり、

〔攝陽群談十六名物土産〕難。波。蘆。簾。　同郡(成〇西)ニ屬ス、今モ以蘆篇リ、

(夫木十四)すくもたく難波乙女があしすだれよにすゝけたる我身なりけり　爲家

笙。篳。篥。簀。　島上郡鵜殿村ノ蘆ヲ宜トス、因テ樂人設之、簀ニ作リ音ヲ好スルト云ヘリ、

〔古事記上〕國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、(琉字以上十字以音)如葦牙因萌騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神、

〔古事記傳三〕葦牙は阿斯訶備と訓べし、(書紀にも然訓り、但し備を濁て、伊の如く讀はわろし、又訶を濁るもわろし、成坐る神御名の訶備にて、淸濁炳焉)葦のかつ〳〵生初たるを云名なり、牙字は芽と通へり、

〔萬葉集二相聞〕同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首

吾聞之、耳爾好似、葦若末乃、足痛吾勢、勤多扶倍思、

右依中郎足疾、贈此歌問訊也、

〔冠辭考一阿〕あしがひの　あしなへ　わがせ　又あしなべの

万葉卷二に、(歌略〇)この葦若末をあし加比と訓は、神代紀に、天地之中生一物、狀如葦牙、てふに依ぬ、さて葦牙は、葦の若めにて、そは卽葦が苗なれば、葦牙の葦苗てふ意にて、人の蹇に轉じいひかけたる歟、又は葦若末は阿志奈倍と訓て、葦のわかき葉すゑの靡えなへるを、蹇にいひかけしにもや侍らん、

〔萬葉集七雜歌〕旋頭歌

水門、葦末葉、誰手折、吾背子、振手見、我手折、

右二十三首、(〇二十首略)柿本朝臣人麿之歌集出、

水邊ニ多ク生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、初メ出ル時筍ノ如シ、唐山ノ人ハ採リ食フ、コレヲ蘆筍ト云、然レドモ南土ノ者ハ堅クシテ食フベカラズ、北土ノ者ハ柔ニシテ食フベシ、今淸商食用ニ持來ル者、長サ三寸許二ツニ割テ蒸シ乾シタルモノ也、是ヲ水ニ浸シ煮食フ、苗長ズレバ高サ丈餘枝ナシ、葉ハ竹葉ニ似テ長大互生ス、秋ニ至テ莖梢ニ穗ヲ出ス、菅(カヤ)ノ穗ノ如クニシテ枝多シ、長サ一尺餘、秋ノ末莖葉共ニ枯ル、一種莖幹至テ粗大ナル者ヲ鵜。殿。ノ。ヨ。シ。ト云、攝州島上郡鵜殿邑ノ名產ナリ、莖ヲ用テ篳篥ノ義嘴ニ作ル、コノヨシハ證類本草蘇頌ノ說ニ、深碧色ナル者、謂之碧蘆ト云者ナリ、集解ニコノ說ヲ引ケドモ、謂之碧蘆ノ四字ヲ脫セリ、宜シク補フベシ、○中略

蒹。ヒ。メ。ヨ。シ。一名ヨシモドキ、スダレヨシ、カナヨシ、仙臺ヒヨヒヨ、濃州蘆ノ一種形小ナル者ナリ、

〔尺素往來〕爲庭上之景、莊嚴前栽仕候、○中略雜草木者、○中略蒹葭、木賊、姫萩、

〔攝津名所圖會四大坂下〕片葉蘆(かたはのあし)。。。　按ずるに、都て難波は川々多し、淀川其中の首たり、其岸に蘆生繁りて、雨葉に出たるも、水の流れ早きにより、隨ふてみな片葉の如く、晝夜たへず動く、終に其性を繼て、跡より生出るもの、片葉の蘆多し、故に水邊ならざる所にもあり、難波に際(かぎ)らず、八幡、淀、伏見、宇治等にも、片葉の蘆多し、或云、難波は常に西風烈しきにより、蘆の葉東へ吹靡きて、片葉なる物多しといふは僻案なり、

〔續江戶砂子五〕雜樹

增、片葉の蘆、　淺草慶印寺の前片葉の蘆　あさぢがはら かやみの池　片葉の蘆　淺草馬道ひし屋長や

〔紀伊國名所圖會二海部郡〕片葉の蘆　和歌津や村の北の入くちにあり、是また蘆邊の遺跡也、すべて川邊のあしは流につれて、自然と片葉となるものあり、又其性を受て芽いづるより、片葉蘆と

ふ句につけたり、

〔八雲御抄 三上草〕葦　みだれ　えほれ　えほ 万　ながれ　よしとも云り　伊勢には濱をぎと云あしつの　あしつゝ　たまえのあしと云は玉枝也、非江、但寄江多詠也、　あしがきはまちかしとも、思みだれてともいふ、　はなほそきあしがきこえにといへり、是あしの花なり、　なつかりは、夏かりたるなり、一説雁といへり、又鶴といふ可咲、凡夏雁不可然之由、殊に匡房稱之、

〔宜禁本草 乾五菜〕蘆笋　味小苦極冷、法如竹笋堪食反巴豆、蘆根甘寒、主消渇客熱止小便利、當堀取不露出浮水佳、療嘔逆不下食胃中熱噎噦不止、治孕人心熱幷瀉痢人渇、

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕蘆 音盧　葦 音偉　葭 音加　花名蓬蕽 芀　笋名蘿 音拳　和名阿之 ○中略

按蘆 和名阿之 アラシ青之和訓中略也、未長高二三尺、其葉大似馬篠、而莖葉皆蒼蒼、用可裹粽者、攝州難波之產得名、

葦 俗云與之 ヨハシ弱之和訓中略也、蘆既成長四五尺至丈許、其葉亦老衰纖莖、筩帶白色、似竹而弱也、山城鵜殿之產得名、用之作篳篥之簀佳也、近頃武家用葦、乾枯作松明、燒乘馬之首毛 燒訓布留 勝於破竹之松明、又多作筆鞘、

葦筒中白皮曰莩 音孚 甚輕薄者也、

葦花 一名蓬蕽一名芀 說文云、葦花曰芀、抽條搖遠、生華而無莩蕚、今人取以爲帚、曰芀帚是也、

琉球國有大葦、其周匝尺許、筩厚四五分、以爲器物、○中略

蒹 音兼　一名蒹、俗云須太禮與之、

本綱、似荻而細長、高數尺中實者也、　按蒹多出於豫州、以編駕窻之簾甚美也、

〔重修本草綱目啓蒙 十濕草〕蘆　ヒムログサ　タマエグサ　ナニハグサ　サヾレグサ　ハマヲギ 以上古歌名　アシ 和名鈔　ヨシ　一名蒲蘆 琅邪代醉編　華 爾雅　葭 通雅　蘐 同上　葦子草 訓蒙字會

合の判に、あづまの人の言葉なりと見ゆ、ふるくは歌に見えずとぞ、一説に、よしは葉もとに毛なし、根深く入もの也、あしは葉もとに毛ありて、根は土よりうへをはふもの也ともいへり、

〔囘珠庵雜記〕あしをよしといふは、俊成卿の住吉社歌合を判して、末にかき給へる言に、あづまの人のことばなるよしなり、齋宮忌詞に、法師を髮長といへるやうに、あしといふがゆゝしければ、よしといひなすにや、ふるくは歌にみえざるにや、

(頭書)眞淵云、遠江などより東の方にては、今よしとのみいへり、又難波のあしに伊勢の濱をぎとて、此物を同じ事とよめるは、後の俗の歌にて、萬葉の意をよくしらでいへり、東歌には、さゝらをぎよしとひことかたりよらしもとよめるは、似て同じからぬをもていへれば、中々に別なる據なり、

〔書言字考節用集　六生植〕葭(ハマヲギ)　濱荻　同

〔倭訓栞　中編二十波〕はまおぎ　萬葉集に、伊勢の濱荻といへり、蘆をいふなりと顯注密勘にみえたり、されど武藏風土記に濱荻と葦とを並擧たり、濱邊の荻といふ事にて葦に雜りて生ずる物ゆへに、同集に、葦べなる荻の葉さやぎともよめり、葉のかたかたに著たるに荻多しといへり、今も二見ノ浦にかた葉の葦とて名物とせるあり、定家卿万葉の歌をとりて、

二見がたいせの濱荻しきたへの衣手かれて夢もむすばず、後拾遺集の作者侍從命婦を濱荻といふは、祭主輔親が猶子なるをもてといへり、

〔住吉社歌合〕嘉應二年十月九日

神風いせしまには、ばまをぎとなづくれど、なにはわたりには、あしとのみいひ、あづまのかたには、よしといふなるがごとくに、おなじきうたなれども、人の心より〳〵になむある、〇下略

〔俚言集覽　奈〕浪速の蘆は伊勢の濱荻　これは連歌の句也、物の名も所によりてかはるなり、とい

〔撮壤集 中草〕葦(アシ)　葭(アシ)

〔書言字考節用集 六生植〕蘆(アシ)　葦(同) 毛萇云、葦之初生曰葭、未秀曰蘆、長成曰葦、　蓬蕽(アシノハナ) 本草 芦花　蘆花(同)

〔日本釋名 下草〕葦　あしははし也、はじめ也、草木のはじめ也、直指抄

〔東雅 十五草卉〕蘆葦アシ　天地開闢けし初に、葦牙(アシガヒ)の如くにして、化り出でし神の名を、可美葦牙彦舅(ウマシアシガヒヒコヂ)神と申せしと見え、また此國を葦原の國とも云ひしと見えたれば、舊事古事日本紀に我國にして凡そ物名の聞えし、これより先なるはあらず、舊說に俗にはこれをヨシともいひ、また伊勢國にては濱荻ともいふなりと見えたり、藻鹽草に此事によりても古も今も、其地によりて物名同じからぬ事をも知りぬべし、唯其アシといひ、ヨシといふ義の如きは知るべからず、倭名鈔には爾雅註玉篇本草註等を引て、葭一名葦、一名蘆、アシ、薍はアシヅノ、蘆の初生也、蓬蕽は葦の花名也と註せり、本草圖經に據るに、葭は卽蘆也、葦は卽蘆の成れるもの、菼は薍也、或謂二之薕一、薕は卽荻也、蘆の初生をいふにはあらず、〇中略其花をば芀と云ひ、其萌の竹筍の如くなるをば、雚(チ)といふは、古の時にアシガヒといひ、後にアシヅノといひしもの卽此也、

〔倭訓栞 前編二阿〕あし〇中略葦は初めの義なりといへり、開闢の初めまづ生じたるものは葦なり、よて此國を葦原中國といふなり、白き條あるを難波あしといふ、筆篥の簧には、津國鵜殿の葦を用うといへり、

あしのほわた　蘆の穗を衣の絮にするをいふ也、小窻淸記に、製二柳絮枕蘆花被一以連レ牀夜話すとみえたり、眞に似たる中の僞といふ連歌に、蘆の穗はかさねし衣のわたならで、是は閔子騫の故事也、

〔書言字考節用集 六生植〕葭(ヨシ)一名蘆、事詳二本草一、

〔倭訓栞 前編三十六與〕よし〇中略葦をよしともいふは、あしの反語也といへり、俊成卿の住吉社歌

蘆

一薏苡仁　　松平相模守

〔本草和名草十一〕蘆根、花名蓬蕽、(仁諝音而容反、出蘇敬注、)一名葭、一名葦、(已上出雜名苑、)和名阿之乃禰、

〔倭名類聚抄草二十〕蘆葦(茅荑等附)　兼名苑云、葭一名葦、(家偉二音、和名阿之、)爾雅注云、一名蘆、(音盧、)玉篇云、薍(音亂、)菼也、菼(音稜、和名阿之豆乃、)蘆之初生也、蘇敬本草注云、蓬蕽(蓬仍二音、)葦花名也、

〔箋注倭名類聚抄草十〕所引文郭注(○爾雅註)不載、蓋舊注也、說文、葭葦之未秀者、葦大葭也、毛詩七月正義、初生爲葭、長大爲蘆、成則名爲葦、證類本草蘆根條引唐本餘云、生下溼地、莖葉似竹、花若荻花、本草圖經云、蘆根生下溼陂澤中、其狀都似竹、而葉抱莖生、無枝、花白作穗、若茅花、根亦若竹根而節疏、是葭葦蘆充阿之爲允、李時珍曰、葭者嘉美也、葦者偉大也、蘆者色盧黑也、按別有蒹亦蘆之種類、爾雅、蒹薕、郭注似萑而細、高數尺、江東呼爲蒹藡、本草圖經云、蒹今作簾者是也、是可充今俗作簾呼比米與之、或呼須太禮與之者、說文薕蒹也、蒹萑之未秀者、然說文有薍、云萑之初生、又解蒹不得云萑之未秀者、蒹字注當作薕之未秀者也、○中略　今本玉篇云、薍魚患切、廣韻云、五患切、並在三十諫、屬疑母、亂郎段切、在二十九換、屬來母、音韻並不同、此以亂音薍恐非、○中略　今本玉篇云、薍烏藍也、與此不同、按說文、薍𦵧音也、菼即𦵧字、則知古本玉篇依說文也、○中略　按說文、𦵧萑之初生、一曰薍、一曰鵻、又載菼字云、𦵧或从炎、蓋顧氏依說文今本誤萑作藿、源君引誤作蘆也、又按毛詩大車傳云、菼萑也、蘆之初生者也、顧氏或載之、源君節引之、以其云蘆之初生、收之蘆葦條、訓爲阿之豆乃、遂引及薍字也、然說文、葭葦之未秀者、葦大葭也、爾雅葭蘆、郭注葦也、毛詩七月正義、初生爲葭、長大爲蘆、成則名爲葦、說文、𦵧萑之初生、萑薍也、薍𦵧也、八月薍爲萑、葭爲葦、爾雅、菼薍、郭注似葦而中實、江東呼爲烏蓲、本草圖經云、或謂之荻、七月正義、初生者爲菼、長大爲薍、成則爲萑、是葭葦蘆一物、菼薍萑荻一物、葭葦蘆可充阿之、菼薍萑荻可充乎岐、則二物判然無混、毛傳以蘆之初生釋菼、蓋統言耳、或傳本有轉寫之誤、亦未可知也、

〔藥經太素下〕薏苡仁　寒味甘

熱氣ヲ治スルニ、只焙テ用、毒腫ニハ白水ニ浸シテ使、胸腹ノ氣結ルニハ、鹽湯ニテ煮用、蟲積聚ヲ治スルニハ、餅米ニ交テ煎テ、擣碎テ心ヲ去用、筋攣骨痛大能攻、除肺氣痿癰病、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、〇中略薏苡芢十五兩、　近江國七十三種、〇中略薏苡芢一斤八兩、

〔水左記〕承保四年八月四日辛巳、自朝終日陰、心地雖熱氣消散、赤痢已發、辛苦無極、〇中略申時許、典藥頭雅忠朝臣入來、雖爲物忌相逢問云、熱氣內不食之物、其氣消散後食之、可有禁忌乎、如何、答尤可忌之由、爲腹痛可食小口粥干鯛等云々、談次主上〇白河御口仍今夜所參內也、口薏苡一二粒奉令飮、是一之方也者、

〔本朝無題詩七旅館附路次〕遲留江泊戲賦舟中事　同人〇蓮禪

舟中寂寞枕肱臥、見事聞言雜染翰、廚女偸嘲煎夜藥、予宿疲更發、煎薏苡飮之、家奴等各以不請、其中老嫗一人、打掌殊以嘲之也、棹郎各怒乏朝飡、舟子曰、食常以不足、仍强怒之、持經二品收囊掛、提婆觀音二品、年來所誦持也、納經囊掛之、本佛一龕拂紬安、造佛二體、安小廚子奉提携、寶不外求享禿筆、爲掃舟塵持一蓑衣也、故云、根依中絕閣空簞、風帆行路露彌遠、水驛歸心秋早寒、愚息二人還哭父、爲何遙赴海西瀾、

〔石川正西聞見集坤〕一九州大名衆よりよくいを江戸御苑中へ被爲進候を、安藤對馬殿にて見申候、米の如くにして見事に見へ申候、すゞ玉と申草にて、一たびまき候へば、次第々々年々に多く罷成、かうさくにも不及候、よくいは病者のかゆに用申候、こがしにもいりてくわへ申候、藥性一段よく候よし、

〔官中秘策十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事

三月

薏苡利用

れを用ゆべし、一種又丸く皮厚く、實は少くかたきあり、うゆべからず、又一種菩提子とて大きなるあり、數珠とす、うゆる地の事、尤も濕氣を好む物なり、何にても糞しを多く用ひ、旱せば水をそゝぎ、常にうるほひを保つべし、畦作りつねのごとくし、五六寸に一本づゝ見合せうへ、厚く土をおほひ、芸り培ひ別法なし、苗長く心葉出るを、節をかけてぬき捨べし、心葉をぬかずして置たるは實少し、九月霜ふりて實を取收め、よく干して米にする事は、蒸し乾し、すりくだき、米のごとくこしらゆるなり、宿根より生るは、から堅く子少し、二三月蒔置て移しうゆべし、實は薏苡仁と云藥種なり、性のよき物なり、病人の食物に調て用ゆべし、粥になり飯に変へ、だんごにしたゝめ、樣樣料理多し、葉を米にませ、飯に調ずれば、その香早稲米の飯のごとし、茶を煎ずるに、葉を少入れば、香よく味もます物なり、

〔菜譜 穀下〕薏苡　本艸綱目と農政全書を考るに、一種から光ありて薄く、米白して糯米の如く、牙に粘は眞薏苡なり、藥に入れ、粥となし麫として食す、一種圓してから厚くかたきは菩提子也、其米少し、卽粳穲なり、藥に不用、先實をまきて後、苗四五寸なる時うつしうふべし、水邊尤もよし、每科相去事一尺、或云、宿根より生ずるはから堅くしてあしゝ、每年まくべし、子をとるにはよくむして、日にほしからを去べし、農政全書曰、九月霜後收子、至來年三月中、隨耕地於壠內點種撈蓋令平、有草則鋤、居家必用云、熟耕地相去一尺種、一科不間高下、但肥良地卽堪、薏苡葉青きも乾たるも、茶に加へ煎ずれば香よく味よし、又これを煎じて飯をかしぐもよし、性よし濕痺にもよし、むねをひらき食をすゝむ、濕氣にあたりてしびるゝにもよし、

〔庖厨備用倭名本草 穀二 粟〕薏苡仁、味甘、性寒、毒ナシ、筋骨拘攣シテ屈伸シガタキニ、久風濕痺ニ用フ、久服スレバ、身ヲ輕クシ氣ヲマシ、筋骨ノ中ノ邪氣ヲ除キ、腸胃ヲ利シ、水腫ヲ消シ、食ヲスゝム、飯ニシ麫ニシテ食スレバ飢ズ、煮クダシニタキ、センジ用レバ、病ヲ治スル功多シ、脾胃肺ニ益アリ、

薏苡栽培

川。穀。救荒本草、古語拾遺、都須、本草和名、和名鈔並ニ都之太末、新撰字鏡玉豆志、延喜式ニツヽダマ、上の古名倶に薏苡子を訓ずるは誤なり、

各郡原野水傍に多し、藥店にて薏苡に僞り售る、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀〕薏苡仁　シ。コ。ク。ム。ギ。防州中略○

眞。ノ。薏。苡。ハ享保年中ニ渡ル、春種ヲ下シ、苗長ジテ高サ四五尺、葉互生シ、形蜀黍トウキビノ葉ニ似テ狹短、川穀葉ニ異ナラズ、一根ニ莖ヲ叢生ス、夏月葉間ニ實ヲ結ブ、形川穀ヨリ細小ナリ、實上ニ花アリ、玉ナン蜀黍パンキビノ花ニ似テ小シ、實熟シテ淺褐黑色、實中ニ自ラ穴アリテ貫クベシ、重纍シテ生ズル者モアリ、皆兩指ヲ以推ストキハ皮破ル、仁ハ麥ニ似テ潤ク、白色、外ニ褐衣アリ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、一種トウ。ム。ギ。、一名朝鮮ムギ、クスダマ作州城州山城郷ニ多ク栽ユ、仁ヲ採リ粉トナシ食用トス、藥舖ニ出サズ、苗形薏苡ニ異ナラズ、子形潤ク短クシテ尖リアリ皮厚ク硬シ、搫タザレバ破レズ、皮ノ色褐ニシテ微黑、堅ニ筋多シ、秋後苗根共ニ枯ル、一種ジ。ユ。ズ。ダ。マ。、一名ヅシダマ、和名鈔スヽダマ、豫州ズヾゴ、東國ハチコク、上總スダメ、三州スヾダマ、阿州ズヾダマ、新校正野邊荒廢ノ地ニ多シ、春宿根ヨリ多ク叢生ス、莖葉ハ薏苡ニ異ナラズ、子大ニシテ白色光リアリ、或ハ黑色、或ハ黑白斑駁、皆皮甚厚硬、搫トイヘドモ破レズ、實中ニ自ラ穴アリ、穿テ貫珠トナスベシ、小兒採テ玩トス、野人用テ馬飾トス、是救荒本草ニ載ル所ノ川穀ナリ、一名穿穀米、壽世保元菩薹珠、秘傳花鏡一種オ。ニ。ジ。ユ。ズ。ダ。マ。、亦宿根ヨリ叢生ス、形チ川穀ニ異ナラズ、實川穀ヨリ潤ク、扁クシテ堅ニヒダアリ、色モ同ジ、殼甚ダ堅シ、俚人穿テ數珠トス、イラタカノ數珠ト稱シ、役小角ヲ信ズル者コレヲ用ユ、是菩珠ナリ、藥舖ニ賣所ノ薏苡仁ハ、皆川穀仁ナリ、石臼ヲ用テ粗磨シ仁ヲ採ル、又菩珠仁ヲ以テ、唐ノ薏苡ト名ケ賣ル、皆僞品ナリ、藥ニハ眞ナル者ヲ用ユベシ、然レドモ眞物ハ未ダ藥舖ニ出ズ、

〔農業全書二五穀〕薏苡

薏苡是二種あり、其粒細長く、皮うすく米白く粘りて、糯米のごとくなるが眞薏苡なり、藥にもこ

曰、西國ニテジユズタマト云、俗ニ是ヲス、タマトイヘリ、考本草、二三月ニ宿根ヨリ自生ス、葉ハ初生ノ芭蕉ノ如シ、五六月ニ莖ヲ抽デ、花ヲ開キ子ヲムスブ、

〔和漢三才圖會　百三　穀〕薏以仁　回々米　芑實　薏珠子　解蠡　贛米（或作ニ䅬米一）　和名豆之太萬、俗云數珠玉、（中略）○

按薏苡苗類黍、葉間分枝出穗結實、其梢耑開小白花、（謂ニ紅白花一者非也）凡草木花落而結實、此花與實別也、其實青白色滑硬、形團、末微尖、端出白絲三條、略乾則絲脫去、爲孔上下通、小兒貫線以爲念珠、其中子如精麥而大、卽薏苡仁也、又能治喉痺、呑一二枚、（外臺方云、治ニ喉卒腫一、與此理相近、）近頃俗間八月朔日、用果蓏餻餠贈答之、必以薏苡枝葉實連者飾之、未知其據、

薏苡初見

〔古語拾遺〕昔在神代大地主神營田之日、以牛宍食田人、于時御歲神之子、至於其田、唾饗而還、以狀告父、御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神令片巫（志止止鳥）肱巫（今俗竈輪及米占也）占求其由、御歲神爲祟、宜獻白猪白馬白鷄、以解其怒、依敎奉謝、御歲神答曰、實吾意也、（中略）○宜以牛宍置溝口、作男莖形以加之、（是所以厭ニ其心一也）以薏子、蜀椒呉桃葉及鹽、班置其畔、（古語以ニ薏子一曰ニ都須一、）仍從其敎、苗葉復茂、年穀豐稔、

薏苡種類

〔庖厨備用倭名本草　二　穀種〕薏苡仁（中略）○二種アリ、一種ハ牙ニネバル、其形トガリテカラウスシ、是薏苡ナリ、其米白色ニシテ糯米ノ如シ、粥ニシ飯ニシ、麪ニシテ食スベシ、又米ト同ジク酒ニ作ルベシ、一種ハ圓ニシテカラ厚ク堅シ、是レ菩提子也、其米スクナシ、卽チ粳䅬ト云、但穿チ念經ノ數珠ニスベシ、

〔和漢三才圖會　百三　穀〕薏苡仁（中略）○有二種、而一種殼薄米多、一種殼厚硬米少、堪爲念珠、故曰之菩提子、與菩提樹之子同名而別也、

〔紀伊續風土記　物産　二〕薏苡子（本草、本邦の古書に薏苡とあるは、皆下の川穀を誤充つるものなり、）本漢種なり、今國中培養して、藥食の用とする者あれども稀れなり、

薏苡名稱

合八郡天平五年定穀貳拾伍萬捌阡肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合○中略

薹子貳斛　直稻肆拾束　束別五升

〔新撰字鏡　草〕薏苡子　玉豆志　苡　玉豆志

〔本草和名　草六〕薏苡子一名解蠡　仁諝音禮　一名屋菼　吐敢反　一名起實、一名贛　仁諝音貢　一名贛珠　交阯人名之、出陶景注　一名噎珠　悉噎人帶其實、卽愈、出食經　一名芊珠　出兼名苑　一名感米　出千金方　和名都之太末

〔倭名類聚抄　草二十〕薏苡　兼名苑云、薏苡　僮以二音　一名芊珠　和名豆之太萬

〔箋注倭名類聚抄　草十〕說文、㠯、賈侍中說、意㠯實也、象形、薏薏苢也、蘾、一曰薏苢、廣雅、蘾音㠯也、本草圖經、薏苡仁、春生苗、莖高三四尺、如黍、開紅白花、作穗子、五月六月結實、靑白色、形如珠子而稍長、故呼意珠子、小兒多以線穿、如貫珠爲戲、按本草薏苡仁、一名贛、本草和名大觀本草如此、千金翼方作蘾、政和本草从竹、證類本草引陶隱居云、交趾者子最大、彼土呼爲䔿珠、本草和名引作贛珠、集韻云、芊、草名、一云薏苡子、則知贛蘾籟䔿芊同字、則兼名苑本於陶注也、

〔多識編　穀三〕薏苡仁、豆志多麻一種名八石、　粳糯

〔撮壤集　草中〕薏苡　ヨクイ　ツヽタマ

〔書言字考節用集　生植六〕薏苡仁　ヨクイニン　回々米、穎蠡並同、　薏苡仁　ズヾダマ　本草、小兒以線穿如貫珠爲戲者、　回々米　同　草珠兒　同

〔日本釋名　下米穀〕薏苡　ズヽタマ　すゝハ數珠也、中をつらぬきて數珠とす、故に名づく、又つしだまと云、つしはすゝの通音也、これ漢字の音を和語としたる也、此類猶多し、

〔農政全書　雜種四十〕薏苡、漢書曰、馬援在交趾、常餌薏苡、載還爲種、一名芑實、一名屋菼、一名蘾米、一名解蠡、一名薏珠子、一名西番蜀秫、一名回回米、一名草珠兒、處々有之、交趾者最大、春生苗、莖高三四尺、葉如黍、五六月結實、以顆小色靑、味甘、粘牙者良、形尖而殼薄、米白如糯米、此眞薏苡也、可粥、可麪、可同米釀、其一種、圓而殼厚者、卽菩提子也、

〔庖厨備用倭名本草　穀二粟〕薏苡仁　倭名抄ニツシタマ、多識編オナジ、一種八石ト名ヅク、元升　向井○

寸、或ハ一二尺、葉互生ス、梢ニ長穗ヲナス、枝アリテ直立シ、圓扁ナル小子多ク重リ著ク、初夏熟シテ白ク落テ自生ス、村民子ヲ採テ糊トス、又屠者子ヲ採リ飯トナシ食フ、獸肉ノ毒ニ中リ、發熱スルヲ解ス、故ニヱツタムギ等ノ名アリ、一種ミノゴメ、同名ナリ一名ミノグサ、和州スヾメノコメ、若州春時路旁樹下ニアリ、莖高サ一二尺、細長葉互生ス、梢ニ長穗ヲ出ス、正立セズ、二分許ノ苞ヲマバラニ垂ル、後内ニ小實アリ、漢名詳ナラズ、

〔延喜式五齋宮〕月料小月物別減廿分之一

糯米、大豆、小豆、小麥、黍子、胡麻子、葟子。各三斗、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

大和國(中略)葟子六斗〇中略　河内國(中略)葟子五斗〇中略　攝津國(中略)葟子九斗〇中略　右以正税交易進、其運功食並用正税、

〔延喜式三十九內膳〕供御月料

葟子七升五合

〔延喜式四十三主膳〕月料

葟子五升六合四勺

〔東大寺正倉院文書二十八〕越前國郡稻帳

(裏書)越前國郡稻帳天平五年閏三月六日史生大初位下阿刀造佐美麻呂

葟子參斛直稻陸拾束以廿束充一斛

足羽郡貳拾束　坂井郡肆拾束

〔東大寺正倉院文書十五〕尾張國天平六年正税帳

尾張國司解　申收納天平六年字〇以下虫損數

古事類苑

植物部十四

草三

〔倭名類聚抄 十七 稻穀〕葟子 本朝式云、葟子 葟音皇、和名美乃、今案訓釋所出未詳、

〔箋注倭名類聚抄 九 稻穀〕按葟本作皇、爾雅釋草、皇守田、郭注云、似燕麥、子如彫胡米、可食、生廢田中、一名守氣、本草拾遺、茵米可爲飯、生水田中、苗子似麥而小、四月熟、是也、俗從艸作葟、與葟菜字混無別、又齊民要術菜茹類有葟菜、云似蒜、生水中、同名異物、

〔類聚名義抄 八 艸〕葟子 ミノ

〔伊呂波字類抄 見 殖物附殖物具〕葟子 ミノ、出本朝式、

〔倭訓栞 前編三十 美〕みの○中略 倭名抄に葟子をよめり、實の毛の蓑に似たる成べし、今みのごめともいへり、新撰字鏡に莠を田のみの葟を田にあるみのとよめり、

〔庖厨備用倭名本草 二 穀〕茵草米 倭名抄ニ茵草米ナシ、多識篇和名ナシ、考本草、水田中ニ生ズ、其苗ハ小麥ニ似テ小シ、四月ニ盛ニ熟ス、飯ヲ作テ飢ニ充ベシ、

茵草米、味甘、性寒、毒ナシ、飯ニシテ熱ヲサリ、腸胃ヲ利シ、氣力ヲマス、久食スベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 穀〕茵草 ミノゴメ ニノゴメ 雲州 ハルムギ、 エツタムギ エツタゴメ 一名葟 通雅 蘊 蔪 蒶 共同上

溝側或ハ田地ニ生ズ、宿根枯レズ、春早ク葉ヲ生ズ、形細長ニシテ、看麥娘スズメノテツポウノ如シ、莖ヲ抽ルコト數

但籾一俵ニ付稗二俵替

一稗不納村　五島々村（五）燒山村　稲核村　大野田村　大野川村

手當と成べし、

〔救急或問〕一天災流行ハ世ノ常理ニシテ、禹湯ノ聖代ト云フトモ免ルコト能ハズ、古人モ救荒無良策ト云テ、差掛リテハ實ニ救ヒ難シ、預メ備ヲ爲サヾルベカラズ、昔ヨリ常平義倉社倉等ノ法アリテ、今モ之レニ倣ヒテ非常ニ備ル圖アリ、至極ノ美政ナレドモ、米ハ新故出納ノ煩アリ、且價貴キユエ種々ノ惡弊ヲ生ジテ、終ニ有名無實トナルコト多シ、其弊ヲ防グニハ稗ヲ蓄フベシ、稗ハ數十年蓄ヘ置テモ臭腐セズ、味美ナラズ、價賤シケレバ移動ノ憂ナシ、然レドモ饑饉ノ夫食ト爲ンニハ、草根木皮ヨリ其養ヒ萬々ナルベシ、此ヲ以テ食料ノ本トシ、老幼病人等ノ氣力ヲ補ヒ、米ヲ糶フハ容易ノ事ナリ、民ニ喩シテ自ラ蓄サセンハ宜シケレドモ、急ニハ行ハレ難カルベシ、先ヅ上ヨリ其事ヲ始メ、收納高百分ノ一ヲ稗ニシテ納メシムベシ、稗ハ至リテ蕃殖シ易キ物ナリ、墝薄ノ地ヲ開墾シ糞力ヲ費サズシテ、常穀ヨリ多ク收ム、百分ノ一ハ十萬石ノ高ニテ千石高ナリ、然レドモ蕃殖シ易ク價賤キユエ、倍納セシムベシ、是ヲ折色ト云フ、折色トハ品替リノ事ナリ、

稗雜載

〔延喜式民部二十三〕交易雜物

尾張國（○中略）稗子五石（○中略）　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔東大寺正倉院文書十五〕尾張國天平六年正稅帳

尾張國司解　申收納天平六年（○以下數字蟲損）

合八郡天平五年定穀貳拾伍萬捌仟肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合（○中略）

稗伍斛　直稻伍拾束（束別一斗）

〔信府統記八〕每年收納高ノ內（○信濃安曇郡）

一稗四十四俵　納五斗入　拾六ケ村ヨリ納

關東御料所畑方百石ニ付荒稗三斗宛、來酉年ゟ畑方高掛ニ而御藏納爲ㇾ致候積、尤石代米之儀者、荒稗壹石米貳斗宛、稗納石高ニ應じ、御物成米の內を以相渡候間、是迄稗作無ㇾ之村々に而も、來酉年ゟは稗作爲ㇾ致、高掛の積御藏納可ㇾ致旨、村々江可ㇾ被㆓申渡㆒候、右御圍稗の儀者、御沙汰も有候間、前書之趣伺之上申渡候間、可ㇾ被ㇾ得㆓其意㆒候、

寬政四子年五月廿五日申渡

各支配所村々之內、當春中ゟ照勝ニ而、天水場は勿論、用水掛り之場所に而も用水不足いたし、田方植付後れに可㆓相成㆒場所茂有ㇾ之候得共、可ㇾ成丈ヶ出情いたし、植付候樣申渡置候段、被㆓相屆㆒候、尤此頃の雨天に而者、追々植付も可㆓相濟㆒儀には候得共、早稻抔の所に寄候而は、實に旬後れに成、稻作仕付出來兼候も可ㇾ有ㇾ之儀、右體の場所は、毛替作仕付の儀、例年申達、各にも油斷無ㇾ之筈之事には候得共、何品に而茂作付候得ば、乍㆓少分㆒茂御取箇附候儀を厭ひ、亦は當時仕付候而茂、出水の節及㆓損毛㆒候抔申之、打捨置候類の心得違いたし候村方も有ㇾ之趣に相聞候、當年の儀は雜穀とても高直の事に付、小分に而も取實有ㇾ之候得者、夫食足合に成候者勿論の儀、有餘有ㇾ之賣拂候得者、直段宜候に付、格別百姓勝手にも可㆓相成㆒儀に付、粟稗蕎麥は不ㇾ及ㇾ申、何品に而も其場所柄時節等に應じ、毛替植付候樣いたし、右の內に而水稗の儀者、草も高く、出水の節痛も無ㇾ之ものに而、貯候にも宜品に付、稗を第一に植付候樣、理解爲㆓申聞㆒、田地不㆓明置㆒候樣、精々可ㇾ被㆓申付㆒候、

子五月

〔增補救荒事宜〕凶災の初毛替すべき事

補、常陸の地は、稗によろしければ、水戶殿よりの御規定ありて、例救荒の手當に、年々米に取ませ上納せしめらる、誠に御尤の事なり、其ゆへは米にてたくわへば、直段よきまゝに、諸役人ども一時の便利を見て、うり拂ふ事もあるべし、稗は元より直やすきものなればうるまじ、よつて終に

くべし、稗を食料に用ふるに、凶歳の時は糠を去る事勿れ、から稗一斗に小麥四五升を入れて、水車の石臼にて挽き、絹篩に掛けて團子に製して食すべし、俗に餅草と云、蓬の若葉を入るれば味好し、稗を凶歳の食料にするには、此法第一の德用なり、稗飯にするは損なり、されど上等の人の食料には稗を二晝夜間水に漬けて、取り上げて蒸籠にて蒸して、而して能干し、臼にて搗き、糠を去りて、米を少く交せて、飯に炊ぐなり、大に殖る物なれば、水を餘分に入て炊ぐべし、上等の食に用ふるには、此法に如くはなし、されば富有者自分の爲にも、多く圍ひ置て宜敷物なり、勉めて積圍ふべし、

翁曰、人世の災害、凶歳より甚敷はなし、而して昔より六十年間に、必一度ありと云傳ふ、左もあるべし、只飢饉のみにあらず、大洪水も、大風も、大地震も、其餘非常の災害も、必六十年間には、一度位は必あるべし、縦令無き迄も必有る物と極めて、有志者申合せ、金穀を貯蓄すべし、穀物を積圍ふは、籾と稗とを以て第一とす、田方の村里にても籾を積み、畑方の村里にては稗を圍ふべし、

〔延喜式三十五大炊〕正月最勝王經齋會料

同會終日、白米黑米糯米黍稗〇中略各四斛、東西寺豫請備供、

〔延喜式四十主水〕踐祚大嘗會解齋七種御粥料

米粟黍子稗子葟子胡麻子小豆各三斗、

〇按ズルニ、主水式聖神寺七種粥料、正月十五日供御七種粥料ノ中ニモ葟子ノ名見エタリ、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月丁丑、勅、〇中略宜下知五畿內七道諸國、播殖黍稷稗麥大小豆、及胡麻等類、爲中救民急上也、

〔妙法寺記上〕明應六丁巳ノ此年、實買吉、秋モ耕作吉、稗十分也、

〔牧民金鑑十一〕天明八申年十二月

集解、稗處處野生田生倶多、能成長必亂、故生二田中一以作二稲之害一、或不時種レ之亦能生、大抵種レ之如二粟黍一、復有二早晩一、三月種七月苅收、五月種、八九月苅收、惟據二土地之肥瘠寒暖一而有二遲速一、其色黄白赤黑、其名品亦多、作レ飯作レ粥、其味不レ佳、而民間作レ食、若合二稲粟之類一而作二飯粥一、則味稍佳、或畜二小禽一而好、

〔農業全書二五穀〕稗

ひゑに水陸の二種あり、是尤いやしき穀といへども、六穀の内にて下賤をやしなひ、上穀の不足を助け、飢饉を救ひ、又牛馬の飼、殊に水旱にもさのみ損毛せず、田稗は下き澤などの、稲のよからぬ所に作るべし、畑びゑは山谷のさかしく、他の作り物は出來ざる所に、やきうちなどして多く作れば、利を得る物なり、但山に作る時は、あらく毛のあるを作るべし、鹿鳥の犯さぬ物なり、又年なみあしく、稲の苗をさして後、相續きて旱し、苗悉く枯たる時か、又五月洪水にて苗流れ、或水底になりて、腐りたる時も、稗はでくる物なれば、水損ある所はかねてたねを蓄へをき、又は苗をもうへ置、うへつぎて此難をのがるべし、又干潟をひらき穀田となさんとすれども、初の間は潮水もれ來りて、苗かれうせ稲は盛長せず、毎々手をむなしくする所がらに、ゑゐて稲を作り、妄に費を益べからず、先此稗の苗を長くして種れば、大かたは潮氣にも痛まずしてよく榮へ、其功をなす者也、其後に稲を作るべし、又云是下品の穀にして、世人賤め輕しむといへ共、なみ／＼の地にも能いでき、實多く、飯にし粥にし餅に作り、其功粟にもさのみ劣らざるものなり、土地の餘計ある所にては、必多く作りて、上穀の助となすべし、相應の地に作れば甚みのり多き物なり、されば極めて下品の穀なりといへども、貧なる民を救ひ、大きに農家の益となるものなり、又云、潮干潟に作りたらば、刈とる時子のこぼれざるやうにすべし、その實おつれば、次の年稲をつくるに、莠となりて、はなはだ妨をなすものなり、

〔二宮翁夜話五〕翁曰、園穀十年を經て、少も損せぬ物は、稗に勝れるはなし、申合せて成丈多く積置

稗栽培
稗利用

ナリ、形旱稗ニ同シテ田中ニ生ズ、故ニ形長大ナリ、穗形モ旱稗ヨリ大ナリ、古來莠ヲ狗尾草トスルハ誤ナルコト、正字通ニ辨ゼリ、

蘭山翁穇子ノ條ニ說ク所ハ、悉ク稗ナレドモ、コノ條ニ說ク所ハ穇子ニハ非ズ、ノビエハ稗ノ種類ニシテ、主治ニ說ク如ク、飯トナスベキ者ニアラズ、稗ハ集解ニ一斗可㆑得㆓米三升㆒ト云、卽ヒエナリ、一斗ヲ搗テ皮ヲ去レバ僅ニ三升トナル、水稗アルユヘニ、時珍モ旱ノ字ヲ下セドモ、旱稗ハ卽單ニ稗ト云モノ是ナリ、ノビエハ皆自生ノ稗ニシテ、子落テ野ニ生ズルニハ非ズ、野生ニシテ稗ニ類スルヲ云、猶荏ニ野荏アルノ類ナリ、水稗ハコヽニ說ク如ク、俗ニクサビエト呼ブ、卽莠ニシテ、田中ニ多ク生ズ、然レドモ葉細クシテ、旱稗ニ同ジキモノニハ非ズ、故ニ甚ダ稻ニ混ジ易シ、老農ニ非ザレバ辨別シ難ク、穗ノ出ルニ至テ、始テソノ莠ナルコトヲ知ル、孟子ニ惡㆑莠恐㆓其亂㆑苗㆒ト云、時珍モ最能亂㆑苗ト云是ナリ、一種稗ニ矮生ノモノアリ、苗高サ四尺許、尋常ノ稗ノ六七尺ニモ及ブニ異ナリ、莖葉共ニ肥豐ニシテ勁ク、深綠色ナリ、實モ大ナリ、コレヲチゴビエト呼ブ、又一種八斛ビエト云アリ、苗ノ形尋常ノモノヨリ小ニシテ、チゴビエヨリ大ナリ、實ヲ結ブコト最多シ、然レドモ田地瘠テ、反テ翌年種ユル所ノ穀實ヲ結ブコト少ナシ、又集解藏器ノ說ニ、紫黑者似㆑芑有㆑毛、北人呼爲㆓烏禾㆒ト云モノハ、穇子ノ下ニ所㆑謂、紫芒アルヲ毛ビエト云、穤ナリト云モノナリ、

阿州祖谷(イヤ)山一字山ハ深山ニシテ、長サ十三里、幅七里ノ間、田地甚ダ少ナク、且他ノ穀ハ育セズ、故ニ土民山腹ノ樹木ヲ伐テ、乾枯ヲ待チ火ヲ放チ、コレヲ灰トナシ、石間樹根ヲ分タズ、稗ヲ漫撒シテ日用ノ食トス、然レドモ三年ノ後地ヲ換ザレバ、地瘠テ亦育セズ、ソノ樹ヲ伐リ焚テ種ヲ下スヲ火種ト云、本草綱目纂疏引㆓雲谷雜記㆒云、沅湘間多㆓山農㆒、家惟植㆑粟、且多在㆓岡阜㆒、每欲㆓布種㆒時、則先伐㆓其材木㆒縱㆑火焚㆑之、候㆓其成㆑灰、卽種㆓于其間㆒、如㆑是則所㆑收必倍、蓋史所㆑謂力耕火種也、

〔本朝食鑑 一穀〕稗 訓㆓比衣㆒

一生質つよきものに而、旱砂なとの間にも能根深く入る、所に寄田畑の岸がために植る事、

一肥しは、水肥又は牛馬踏候芝草、小肥と唱候こへなり、植付而當分水肥し壹度、又小肥に而も宜し、貳番肥は六月旱の時水肥し壹度、前後貳度なり、白砂肥氣なき所は、水肥前後三度計かける、手入は中けづり壹度、草取壹度ニ候事、

一作り立、丈ケ三尺ゟ上ニ出來、五尺ニ至る、尤手入の多少ニも寄候事、

一穗熟すれば赤色に成而、八月中旬ゟそこかしこ壹穗貳穗づヽ熟す、熟し次第爪ニ而つみ取候得者、跡ゟ又穗を生ず、八月下旬迄ニ凡四五度に全摘取、若熟穗を久しく捨置候得者、風にこぼれ宜しからず又莖がらを牛馬好候事、

一穗落しは、穗を筵にひろげよくほし、凡穗壹斗ほどに、水壹升程の分量に入れ、から臼に而輕く舂き、荒通いたし、當からニ付殘る實を又日にほし、水不入舂て實を取、其後箕に而皮球ふき捨、實を取候事、

一實壹升ひき候得者、粉壹升貳三合になる、粉をよもぎ又は琉球芋和して、蒸餅につき喰す、別而味宜し、湯の中に粉を分量して入れ、湯ごねしてあぶり喰す、湯ごねにすれば、至而和らかめに成事、

一凡壹畝歩に平作貳斗、上作四斗、上々作にいたれば八斗迄は收納有之候、壹反歩八石積を以、一名八石稗と唱候事、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 穀〕稗　ノ。ビ。エ。

野生ノヒエナリ、數種アリ、旱稗ハイヌビエト云フ、陸地路旁庭院ニ自生ス、苗ハ狗尾草（エノコログサ）ノ如ク、扁莖叢生シ正立セズ、夏已後穗ヲ出ス、穇子（ヒエ）ニ似テ小サク、綠色芒アル者アリ、芒ナキ者アリ、紫芒ナル者ヲ黑イヌビエト呼、一名クマビエ仙臺　郎莠ナリ、水稗ハクサビエト呼ブ、一名ミヅビエ、郎莠（クサ）

而配當不行屆、同年は先拙者共支配所に試作申付之上、作德の樣子申立候處、此上諸國一般に作覺候樣、御支配所村々江も配當いたし、先身元相應に高持共江相渡、土地に應、往々利益も有之候はゞ、追年作增、尤不好場所江は强而仕付方不申付樣子、猶御銘々江可及御通達旨、達有之候間、各樣最寄限、拙者共之內江御手代壹人、右種受取として御差出、其作方傳法書をも爲御寫取可被成候、右之段可得其意、一紙早々御順達留ゟ御返却有之候樣致度候、以上、

正月廿六日　　勝田次郎
大熊善太郎
關保右衛門

弘法稗之儀、薄地に作、格別肥し等をも不用、取實多く利益のものに付、右種相渡候間、別紙書付之通、百姓共江能々申教、追年作增、凶年之備に圍置候樣可被取計候、

右之趣、奉行衆被仰渡候、

伯州海岸通におゐて作立候弘法稗、又は八石稗共唱候稗作法左之通、

一春苗を作夏植付る、蒔付は八十八夜前後凡十日程之間を目當に蒔候事、

一種は壹畝歩に三勺程の積を以、苗地廣く薄く蒔候事、

但蒔肥しは水肥壹度懸る、土淺き所は苗を取候十日程前又壹度懸る、是は苗を肥しの事、

一苗を植るには、五寸程延候時植る、遲きは七寸計迄はよろし、五寸伸ゟ內は植痛して育がたし、時分は入梅苗もの植る頃に候、植樣は土をあさく鍬きり、苗間五寸程、八寸程づゝへだて、千鳥懸に壹本づゝ植る、土よき所は別して薄く、壹尺づゝ隔植候事、

一畑は砂地土地石交の地よろし、上畑に植候得者、出來候節、筋虫とて莖中に青虫生じ枯れ候故、下畑よろしき事、

シテ、水陸ノ別アルモノニ非ズ、本草綱目纂疏云、穇子、往歳中山人傳種於薩摩、一窠生數十莖、毎穗盈掌、其利殊多、其穗成岐、時珍言如龍爪是也、コレ眞物ナリ、タウビエ又カモマタキビトモ呼ブ、六月種ヲ下シテ九十月ニ熟ス、高サ三尺ニ過ギズ、葉ノ形稗ニ比スレバ至テ細長クシテ厚ク、深緑色ナリ、穗ノ形オヒジワニ似テ、五六岐ヲ生ズ、各扁クシテ長サ二寸許、鴨爪ノ形ノ如シ、故ニカモマタキビノ名アリ、實ノ形常ノヒエニ似テ熟シテ青シ、百品考ニ見ヘタリ、救荒本草ノ圖ニ、穇子ノ穗ニハ岐ナク、稗子ノ穗ニ岐アルハ互ニ誤ナリ、

〔成形圖說二十五穀〕比延○略　註眞穇稗に對へいへり、○中略此もの水陸の二種あり、卑溼にうゝるを水稗と云、水田に作れり、萬葉に、水をおほみあげに種蒔ひえをおほみえられしゆゑぞ我ひとりぬる、卽このものなり、信濃岩田村は國の高處にて、六月麥を刈あげ、七月僅に稻穗を出すといへども、間もなく秋霜に傷れて、穎實を結びがたきことあり、故に水稗を作れり、○中略陸稗は、山野の樹木を燎夷て、其木灰を肥として、この種を播す也、字鏡に所謂不耕而種を燒蒔とも荒蒔とも云、卽是なり、日向諸縣郡以北、肥後五家の莊に至ては、連山波濤のごとく、絕險狹隘にして稻田を佃がたく、山民時をうかゞひ、叢林を伐、火を烈て、其灰となるを待つ、乃稗子を播植、これを収て周歲の饔飧に供ふ、俗呼て木場稗と云、凡山伐の山林に入て、材木を採の地を木場と云、笠葉とは蒲葵なり、蒲葵の葉菅に似たるをもて、菅笠をばこば笠と名く、而して稗子の葉亦菅に似たり、故に稗子を古據比延と唱といへり、○中略秋稗は芒多く、猪鹿猴も食ず、故に山農好て之を種れり、

〔大和本草附錄一穀〕秋稗ハ毛多シ、猪鹿不食、故ニ農是ヲ好テ種フ、

〔牧民金鑑十一〕弘化元辰年正月

以一紙致啓上候、然ば弘法稗と唱候、至る所實多、作方も辨利の品に付、百姓共江申敎、追年作増、凶年之備に囲置候樣取計候積、御銘々江も可及御通達旨に而、去卯二月中、右種御渡有之候處、纔に

なりともいえり、

稗初見

〔萬葉集 十二 古今相聞往來歌〕寄物陳思
水乎多、上爾種蒔、比要乎多、擇擢之業曾、吾獨宿、

〔日本書紀 神代一〕一書曰、〇略中天照大神、復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、〇略中眼中生稗、

稗種類

〔和漢三才圖會 百三 穀〕稗 音敗　和名比衣　䅬 音匪　䅬 音迭　旱稗　烏稗　俗云久呂比衣
本綱、稗野生、乃禾之卑賤者也、故字从卑、最能亂苗、其莖葉穗粒並如黍稷、一斗可得米三升、有水旱二種、
水稗　生田中、其穗黃白色、以煮粥炊飯磨麪食之、
旱稗　生野中、苗葉似䅉、色深綠、根下葉帶紫色、稍頭出扁穗、結子如黍粒茶褐色、荒年可代糧、謂五穀不熟不如䅬稗也、能殺蟲、煮以沃地、螻蚓皆死、〇略中
按稗處處惡田種之、煮粥或作餻、謂之稗團子、賤農之糧也、如上田亦洪水流失稻苗、則不得止種之、
六月種七月熟、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 穀稷粟〕䅉子 ヒエ　一名鴨脚稗 食物本草 時珍
水陸二種アリ、タビエハ下濕ノ地、稻ニ宜シカラザル處ニ栽ユ、畑ビエハ陸地他ノ作物ノ生ゼザル處ニ栽ユ、皆形粟黍類ニ似タリ、穗ハアハノ如クニシテ小サク枝多シ、一寸許ノ長サノ紫芒アルヲ毛ビエト云、糯ナリ、短毛ナルヲムグロモチト云、芒ナキヲワサビエト云、丹波共ノ方言秋ビエハ生熟共ニ最遲シ、凡ヒエハ賤品ナレドモ、水旱ニ損ゼズ、夏洪水ニテ苗流レ或ハ腐タル時、ヒエヲ種ユ、
増、䅉子ヲヒエニ充ツルハ誤ナリ、蘭山翁コノ條ニ說ク所、悉ク下ノ條ノ稗ナリ、䅉子ハ皆陸生ニ

鶴膝、莖淡紫色、葉色深綠、每一莖又節節抽莖成數穗、穗疏散、至大暑後而穀熟、光澤如黍、農人曰、是野稗也、亦曰水稗、因此見之、比衣當以稗充之、

〔類聚名義抄 七禾〕稗（蒲拜反、ヒエ、）

〔伊呂波字類抄 比植物附植物具〕稗（ヒエ 草之似穀也）

〔多識編 三穀〕穇子、今案比惠、異名龍爪粟、鴨爪稗、　稗、今案久。呂。比。惠。

〔和爾雅 六米穀〕穇子（ヒエ 龍爪粟、鴨爪稗並同、）　稗（クロヒエ 稗稗並同）

〔段注説文解字 七上禾〕稗禾別也（謂禾類而別於禾也、孟子曰、苟爲不熟不如荑稗、左傳云、用秕稗也、杜云、稗草之似穀者、稗有米似禾可食、故亦種之、如淳曰、細米爲稗、故小說謂之稗官、小販謂之稗販、）从禾卑聲（旁卦切、十六部、）

〔段注説文解字 七上黍〕䵃黍屬也（禾之別爲稗、黍之屬爲䵃、音別而略見、言屬而別亦見、䵃之於黍、猶稗之於禾也、九穀攷曰、余目驗之、朵與穀皆如黍、農人謂之野稗、亦曰水稗、）从黍卑聲（并弭切、十六部、篇韻又皆平僻切、）

〔農政全書 二十五樹藝〕稗、爾雅曰、稊英、（按稗禾之卑者、最能亂苗、其莖葉相似、釋曰、稗一名英、似稗之穢草、布生於地、而稗則生下澤中、故古詩曰、蒲稗相因依、羅願爾雅翼曰、稊與稗二物也、皆有米而細小、故莊子曰、道在稊稗、言比於穀則微細而不精、道亦在焉、又曰、若稊米之在太倉、亦言小也、玄扈先生曰、稗亦有多種、水曰水稗、旱曰旱稗、水旱皆有、植有稗、）

玄扈先生疏曰、稗多收能水旱、可救儉、孟子、五穀不熟不如荑稗、淮南所謂小利者、皆以此、且稗稈一畝可當稻稈二畝、其價亦當米一石、宜擇嘉種于下田藝之、歲歲無絶、倘遇災年、便得廣植、勝于流移、㨂拾不其遠矣、

〔日本釋名 下米穀〕稗　いやし也、いやとひゑと通ず、しを略す、穀中のいやしきものなり、一説ひはゑの發音也、ゑは鳥の餌也、是またいやしき穀なれば也、

〔倭訓栞 前編二十五比〕ひえ　新撰字鏡に稗をよめり、微寒の物なれば性の冷る義なるべし、或は振（フリ）荏（エ）の義、ふり反ひ、風にあたりてこぼれ易きをいふとも見ゆ、又ひえ草あり、狗尾艸なり、新六帖に、穂に出る夏田にまじるひえ草のひえ捨られて世をや過さん、一説にひえは穇子、黒ひえは稈

〔延喜式三十三大膳〕七寺盂蘭盆供養料、東西寺、佐比寺、八坂寺、野寺、出雲寺、聖神寺、寺別餠菜料○中略 黍米五升、

〔延喜式三十五大炊〕釋奠料春秋亦同

稻米粱米各一升四合、並先聖先師二座料 稷米六升六合、黍米七升七合、先聖先師九哲十一座料、

親王以下月料

賀茂齋內親王料、日米一斗、稷八合、

〔延喜式三十九內膳〕諸節供御料中宮亦同、下皆准之、 七月七日 米糯米各六升、○中略 黍子小麥各六升

供御月料 黍子三斗

黍雜載

〔延喜式二十一治部〕祥瑞 秬秠 秬者黑黍也、秠者一稃二米者、嘉禾 或異畝同穎、或孳連數穗、或一稃二米也、○中略 右下瑞

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

參河國〔中略〕黍子廿石○中略 右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔元亨釋書二十六資治表〕天治皇帝○崇德

十有五年春三月、秬雨于鳥羽宮、

保延四年二月二十三、四條離宮火、二十四、二條宮火、因茲三月十五、詔定海修孔雀經法于鳥羽宮、

十九朝天雨秬、其色黑、時爲法効、

〔雍州府志六土產〕黍稷 凡黍稷粟麰麥諸豆之雜穀、多在大宮通三條四條之間、

稗名稱

〔新撰字鏡禾〕稗 蒲懈反、去、小官也、下任也、侍也、志○良○介○奧○爾○、又比○江○、

〔倭名類聚抄十七麻〕薭 左傳注云、薭音俾、和名比衣、草之似穀者也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕按說文、稗禾別也、旁卦切、音粺、粺黍屬也、幷弭切、音俾、二字不同、此作音俾者、誤粺音爲稗音也、又按程瑤田曰、稗似禾而別、於禾之穀、余見京東州縣農家種之、莖强穗不下垂、略似粟、但穀色近黑耳、又曰、居京師、庭中芒種後生、一本數十莖、貼地橫出、至生節處、乃屈而上聳、節如

黍利用

條也、假令月三日凍樹、還以月三日種黍、他皆倣之、十月凍樹宜早黍、十一月凍樹宜中黍、十二月凍樹宜晚黍、若從十月至正月、皆凍樹者、早晚黍悉宜也、苗生壟平、即宜杷勞、鋤三遍乃止、鋒而不耩、苗晚耩、即多折也、刈穄欲早、刈黍欲晚、穄晚多零落、黍早米不成、皆即濕踐之、穄踐訖、即蒸而裛於劫切之、不蒸者難舂、米碎、蒸則易舂、米堅、香氣經夏不歇、黍宜曬之令燥、濕聚則鬱、凡黍粘者收薄、穄味美者、亦收薄難舂、雜陰陽書曰、黍生於榆、六十日秀、秀後四十日成、黍生於巳、壯於酉、長於戌、老於亥、死於丑、惡於丙午、忌於丑寅卯、穄忌於未寅、孝經援神契云、黑墳宜黍麥、尚書考靈曜云、夏火星昏中、可以種黍菽、火、東方蒼龍之宿、四月昏中在南方、菽大豆也、氾勝之書曰、黍者暑也、種者必待暑、先夏至二十日、此時有雨、彊土可種黍、一畝三升、黍心未生、雨灌其心、心傷無實、黍心初生、畏天露、令兩人對持長索、搜去其露、日出乃止、凡種黍覆土鋤治、皆如禾法、欲疎於禾、疎黍雖科、而米黃、又多減、及空、令穊、雖不科而米白、且均熟不減、更勝疎者、氾氏云、欲疎於禾、其義未聞、崔氏曰、四月蠶入簇時、雨降可種黍禾、謂之上時、夏至先後各二日可種黍、蟲食李者黍貴也、

梁秫

梁秫並欲薄地而稀、一畝用子三升半、地良多雉尾、苗穊穗不成、種與植穀同時、晚者全不收也、燥濕之宜、杷勞之法、一同穀苗、收刈欲晚、性不零落、早刈損實、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年五月丁丑、勅、○中略宜下知五畿內七道諸國、播殖黍稷稗麥大小豆及胡麻等類、爲救民急也、

〔長生療養方 一米穀功能〕黍米　益氣力、補中、多食令人煩、

〔宜禁本草 乾五穀〕稷米　甘冷、發三十六種冷氣病、不可多食、發痼疾、心鏡曰、益氣力、安中補不足、利胃宜脾、爲五穀之長、久食令人煩、忌附子、

〔延喜式 五齋宮〕供新嘗料

粟糯葟子糯黍子糯各二升

〔延喜式 二十大學〕凡籩實堅鹽五顆、○中略白餅黑餅各用米二升、黑餅以黑黍、

黍栽培

を出し、初は紅に、老ては赤黒くなる、其初出を嬰兒婦女と目て翫ぶ、其形上巳の雛人に肖たれば也、焙て食ふ、又鍋に入燥炒ば、珠粒脹揃て梅花なすあり、又子を炒磨て沙糖に和て菓子となすべし、或は飯に炊き酒媒にまじへ、或燒酎に造る味旨し、莖亦汁ありて微甜し、

〔本朝世事談綺 二 生植〕玉蜀黍

天正のはじめ蠻舶持來る、關東にては唐もろこしといふ、

〔農業全書 二 五穀〕黍

黍は黄白の二種あり、粘るをもち黍とし、黄にしてねばらざるを粳とす、又赤き黒きもあり、四月始うゆるを上時とし、同じ中旬を中時とし、下旬を下時とす、これつねの法なり、小きびは五六月蒔てもくるしからず、早過れば虫氣する事あり、是も地心は粟に同じ、薄く瘠たる地には宜しからず、種て六十日にして秀で、六十日にして熟す、又云、きびを種る事、三月上旬を上時とし、四月上旬を中時とし、五月上旬を下時とするなり、又椹あかき時黍を種べしとも云り、又黒墳は麥と黍とに宜しとて、性の能黑土に取分よきと知べし、又新に開きたる地を、冬より度々細かにこなしさらし、こゑをうちてからし置たるに、灰ごゑ又は熟糞を肌ごゑにして薄くまき、二三寸生出たる時、中うち芸り、こげき所をば間引て、手入三遍すべし、其外は粟に同じ、其所々により、蒔しは殊に大事の物なり、時分違へば穗に出ぬものなり、若穗に出ても實らぬ事あり、是も地により過分に實ある物なり、

〔齊民要術 二〕黍穄

凡黍穄曰、新開荒爲上、大豆底爲次、穀底爲下、地必欲熟、(再轉乃佳、若春夏耕者、下種後再勞爲良、)一畝用子四升、三月上旬種者爲上時、四月上旬爲中時、五月上旬爲下時、夏種黍穄、與植穀同時、非夏者大率以椹赤爲候、(諺曰、椹厘厘、種黍時、)燥濕候黄場、(始章切)種訖不曳撻、常記十月十一月十二月凍樹日種之、萬不失一、(凍樹者、凝霜封著木

此實は同國鶴崎（鶴崎は此岡より十三里にして海邊なり、細川侯の船に乗りたまふ所なり、）に出して、伊豫國宇和島に送り遣ずなり、彼地當年不作にて、米穀すくなきによりて、かしこへ送らんとて、諸所ゟ鶴崎へ出す、石數凡三千石に及べりといへる故、左ほどの玉蜀黍何れより作り出すと又問ければ、答て、是は此近在の至つて惡地にて、稗などさへ出來がたき土地より作りいだせりといふ、予（○大藏永常）其とき思へらく、東國は土地廣く人すくなくして、手餘りの田畑、ならびに田畑にもならぬほどの地多かるべし、是等の土地に作りて、飢饉の備へともなし、又常に製法して食とせば、大きに助となるべし、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀〕玉蜀黍　ナ○ン○バ○ン○　ナ○ン○バ○ン○キ○ビ○　ナ○ン○バ○キ○ビ○播州　ク○ハ○シ○ン○キ○ビ○同上　ト○ウ○モ○ロ○コ○シ○東國　サ○ツ○マ○キ○ビ○備前　タ○カ○キ○ビ○因州　コ○ウ○ラ○イ○キ○ビ○讃州　ト○ウ○キ○ビ○筑前、加州　ナ○ン○バ○ン○ト○ウ○ノ○キ○ビ○遠州　ク○ハ○シ○キ○ビ○越後　ト○ウ○キ○ミ○美州　キ○ミ○、南部　ハ○チ○ボ○ク○勢州　マ○メ○キ○ビ○越後　タ○マ○キ○ビ○　一名御麥群芳譜　番麥同上　包子米盛京通志　玉米農政全書　玉麥　玉蜀秫共同上　雞頭粟授時通考　珍珠粟　天方粟　西天麥　西番麥　乳粟　遇粟共同上

苗ハトウキビニ似テ短シ、夏葉間ゴトニ苞ヲ生ジ、上ニ紅絲アリ、實熟シテ苞ヲ開ケバ、椶魚（シユロノハナ）ノ如クニシテ大ナリ、粒赤キ者アリ、糯ナリ、孛婁（ハゼ）トナシテ最佳ナリ、色黄ナル者アリ、粳ナリ、色白キ者アリ、攝州尼崎ニテ、シロナンバント云フ、味劣レリ、黄ト紫ト雑ル者アリ、又黄ニシテ大粒ナル者アリ、コレハ苗モ亦長大ナリ、

〔成形圖説五十九穀〕豆黍（此もの、子粒大大豆の如なればいふ、今奥州及北陸の稱呼なり、）珠黍多識編　唐諸越（本朝食鑑○中略）　薩麻黍（是甘藷南瓜のごとく、其始て中國に致せるを以て、本稱（鹿兒島）にては唐黍といふ、今蜀黍を呼て唐黍とせるは誤也、）

蜀黍は本おのづから斯邦一種の物ありしといへり、○中略

此もの三種あり、或云船來のものにて固蠻産に係れり、二月に蒔植て七八月熟ぬ、子の色に紫赤と白黄あり、紫赤なるは黏り、黄白はねばらず、炒折（ハゼ）となすには、紫赤を佳とす、此もの苞より頭鬚

玉蜀黍

〔大和本草附錄一穀〕三尺黍　其莖蜀黍ヨリヒキシ、其高三尺バカリニ不過、莖葉ノ形狀ト實トハ蜀黍ニコトナラズ、味ハオトレリ、

〔多識編三穀〕玉蜀黍、今案多末岐比、異名玉高粱、

〔和爾雅六米穀〕玉蜀黍ナンバンキビ　玉高粱、香麥並同、

〔書言字考節用集六生植〕玉蜀黍タウモロコシ　タマキビ　俗云南蠻黍、一名玉高粱、

〔物類稱呼三生植〕玉蜀黍なんばんきび　畿內にてなんばんきび、又菓子きびと云、伊勢にてはちぼくきびと云、東國にてたうもろこし、遠州にてなんばんたうのきびと云、奧州より越後邊にてまめきびとも、又くはしきびともいふ、奧の南部にてきみといふ、此所にては、常の黍をばもろこしといふ、備前にてさつまきび、因幡にてたかきびといふ、

〔和漢三才圖會百三穀〕玉蜀黍　玉高粱　俗云南蠻稷

本綱、玉蜀黍出於西土、種者罕、其苗葉俱似蜀黍而肥矮、亦似薏苡苗、高三四尺、六七月開花成穗、如秕麥狀、苗心別出一苞、如棕魚形、苞上出白鬚垂垂、久則苞拆子出、顆顆攢簇、子亦大如稷子、黃白色、可炸炒食之、炒拆白花、如炒拆糯穀之狀、甘平　調中開胃、按稷字當作稷、

根葉　治沙石淋痛不可忍、煎湯頻飮、

按玉蜀黍古者未有之、蠻舶將來、因稱南蠻黍、其形狀上所說甚詳、但苞上出鬚、赤黑色長四五寸、似剃煙草、然謂白鬚者異耳、其子八月黃熟、摘取焙食、濡箸以水、攪沙鍋、則粒粒脹拆如梅花樣、味脆美、又不剝苞皮收貯者越年不敗、又有子色甚赤者、

〔農稼業事後編四〕玉蜀黍の辨

先年豐後國岡の城下に遊びしとき、町家にて玉蜀黍(西國にて唐きびといふ、東國にては唐もろこしといふ、畿內にてはなんばんきびといふ、)是なんばんを略しての實を、多く枡もて俵にはかりいる、を見て、其人に問しかば、答ていへらく、

出るめを度々切さるべし、又一種あり、たけひきく、穂の少し下の方より、くきかゞむあり、此黍實多く早熟す、是上種とすべし、又一種玉蜀黍(なんばんきび)と云あり、種る法前に同じ、其粒玉のごとし、菓子にすべし、是も早くうゆるをよしとす、遲ければ風難あり、且實りも少し、是又肥地を好む、瘠地には實ず、根より出るひこばへを去事前に同じ、

〔王氏農書 二十八 穀譜集〕薥黍

薥秫春月種、宜用下地、莖高丈餘、穗大如帚、其粒黑如漆如蛤眼、熟時收刈、成束攢而立之、其子作米可食、餘及牛馬、又可濟荒、其稍莛可作洗帚、稭稈可以織箔、夾籬供爨、無有棄者、亦濟世之一穀、農家不可闕也、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 稷粟〕蜀黍　○トウキビ京　○モロコシキビ東國　○タカキビ四國　○タチギミ津輕　○コキビ肥前　○ホキビ加州　○キミ中國　○キビ越後　○セイタカキビ同上

秫薥 山東通志　蘆稷 品字箋　穄秫 同上　薥黍 撫州府志　瓜龍 群芳譜、根ノ名ナリ、此書誤テ稷ノ附方ニ入、　一名蘆穀 泉州府志

畠ノ旁ニ多ク栽ユ、高サ一丈許、莖粗ク葉長大ニシテ互生ス、夏ニ至リ莖梢ニ穗ヲ出ス、長サ一尺餘、枝ヲ分チ多ク花ヲ生ジ、後實ヲ結ブ、形圓ニシテ皮赤シ、磨シ麪ニシ餅トナシ食フ、一種三尺キビハ、高サ三尺許ニスギズ、三尺モロコシトモ云、又ナガモロコシ、ムラサキモロコシ、ハダカモロコシ、カキハダカ、シヤクナガモロコシ、オホモロコシ、ウルチモロコシ、モチモロコシ、白モロコシ等ノ品類アリ、又甲州豆州ニカギモロコシト呼ブモノアリ、ソノ穗曲リ垂テ鉤ノ如シ、本經逢原ニ、蘆粟穗曲下垂如鉤者良ト云リ、

〔本朝世事談綺 二 生植〕蜀黍

中世中華よりわたる、黍の類也、關東にてはもろこしきびといふ、珍物はじめて渡るに、その名を𛂞らず、よつて唐の字を加へて呼也、唐胡摩唐芥子唐柹などの類也、

本綱、蜀黍不甚經見、而今北方最多、以備缺糧、餘及牛馬、始自蜀故名之、春布種秋收之、宜下地、莖高丈許、狀似蘆荻而內實、葉亦似蘆、穗大如帚、粒大如椒紅黑色、其米性堅實黃赤色、有粘者有不粘者、可以濟荒、可以養畜、稍可作帚、莖可織箔席、編籬供爨、最有利於民者、博物志云、地種蜀黍、年久則多蛇、(蜀國名、今之四川也、)

氣味(甘澀溫)　溫中澀腸胃、其根煮汁服利小便、燒灰酒服治產難有效、

按蜀黍古者無之、始見于食物本草、故和名抄亦不載之、後自中華渡種、乃黍之屬也、仍而稱唐黍、以別于黍稷、凡珍物始來、未知所以其名者、皆加唐字呼之、如唐芥子(番椒)唐胡麻(草麻子)唐柹(無花果)之類是也、而後又南蠻人渡玉蜀黍種、謂之南蠻黍(ナンバンキビ)也、蜀黍磨粉爲餻、食之味厚澀不美、故漬水晒乾、磨粉則味稍輕、

俗傳、蜀黍根高露出於地上、如甚高上、則其歲有風、

〔農業全書　二五穀〕○蜀黍○

是を唐きびとも、又甚高くのびぬる故、高黍(たかきび)とも名付るなり、地の薄く瘠たるには宜しからず、春はやく苗地をこしらへ肥し置、二月たねを薄く蒔、苗七八寸の時移しうゆべし、種る所は少し濕氣ごゝろの地、いか程も深くこゑたるを好むものなり、又やしきの內畠の端々、或下濕の地、五月雨に水あつまりて、他の作り物は水底になり、日數をふるゆへ、作りがたき樣の所などに多く種て、利を得る事ある物なり蜀黍は、色々に用ひ、能多き物なれば、農人の家に必是を作るべしと、唐の書に記せり、莖の高さ一丈もあれば、水難の地に作りてよし、其粒蟹の目のごとく、其穗は薄の尾花の大きなるがごとし、實を取て稈をば簾にあみ、筵にうち、又民家の簷にも用ゆべし、或籬ざかいの籬(まがき)にもたて、其破をふさぎ、米は色々食物に調へ、尤餅にして味よし、殊更性のよき物なり米も稻も皆すたる物なし、但一の難は、大方の地にうゆれば、跡甚瘠るものなり、又根よりわきに

蜀黍

色者也、有唐黍者、卽蜀黍也、糯黍之粒大色赤者、而莖穗亦高大、味亦美也、

〔本朝食鑑華和異同二〕黍

黍與稷一類二種也、粘者爲黍、不粘者爲稷、猶稻之有粳與糯也、此倶在本邦、而稷者稻黍、黍者糯黍也、赤穈、白芑、黑秬、一稃二米秠、又有丹黍米、此亦處處有之、作餅而賞之、

〔大和本草四〕黍モチキビ　チバリアリ、粳キビナリ、餻トス、黍稷ハ一類也、形狀同、黍抹シ煮テ糊トシ、紙ニノベ布テ、閃挫腰痛ニ貼ス、有効、此事本艸ニノセズ、黍稷トモニ俗名コキビト云、

稷ウルシキビ　チバリナキ粳キビナリ、飯トス、チバリアルヲ黍トス、粳ト糯トノ如シ、本艸ニ詳ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀稷〕稷　キビ　コキビ大和本草　イチキビ　ウルシキビ　一名首種爾雅翼　齋

同上　秭稈事物異名　明禾廣西通志　穈子米盛京通志　穄子米同上　入米古今醫統　秭稈康熙字典

黍　コキビ大和本草　モチキビ　一名薌合事物異名　大黄米盛京通志、黄穄大倉州志　秫䅩正字通

キビニ粳ト糯トアリ、稷ハ粳ニシテ粘セザルモノナリ、苗ノ形狀ハ皆同ジ、

キビノ粘スル者ナリ

〔多識編三穀〕蜀黍今案、俗云多宇岐比、異名蜀秫俗名

〔和爾雅六米穀〕蜀黍モロコシキビ　タカキビ　蜀秫、蘆穄、荻粱、蘆穄、荻穄、蘆粟並同、

〔書言字考節用集六生植〕蜀黍タウキビ本草、種始自蜀、故名、　蘆粟同蘆穄、木稷並同、　荻粱同

〔東垣食物本草一穀〕秫薥

秫薥、其穀最長而多、米粒亦大、北地種之、以備缺糧、否則喂牛馬、南人呼爲蘆穄、

〔物類稱呼三生植〕蜀黍たうきび　東國にてもろこしと云、中國にてきみ、伊豫にてたかきび、加賀にてほきび、越後にてせいたかきび、奥州津輕にてたちぎみ、畿内にてたうきびと云、

〔和漢三才圖會百三穀〕蜀黍　蜀秫　蘆穄　蘆粟　木稷　狄粱　高粱俗云唐黍

黍種類

穀三千者是也、本邦之人、以稷爲黍之不黏者、是受華人飯黍爲稷之誤而爲說、不可從也、○下略

〔段注說文解字七上黍〕黍 許云、雨省聲、則篆體當如是、引孔子曰者、其別說也、禾屬而黏者也、九穀攷曰、以禾況黍、謂黍爲禾屬而黏者、非謂禾爲黍屬而不黏者也、禾屬而黏者黍、禾屬而不黏者穄、對文異、散文則通偁黍、謂之禾屬、要之皆非禾也、今山西人無論黏與不黏、統呼之曰穄子、太原以東則呼黏者爲黍子、不黏者爲穄子、黍宜爲酒、爲羞籩之餌餈、爲酏粥、中略穄宜爲飯、禾黍稻穋各有黏不黏二種、按黍爲禾屬者、其米之大小相等也、其采異禾穗下垂如椎而粒聚、黍采略如稻而舒散、以大暑而種、故謂之黍、大衍字也、九穀攷曰、伏生尚書大傳、淮南、劉向說苑皆云、大火中種黍菽、而呂氏春秋則云、日至樹麻與菽、麻正麋之誤、又夏小正、五月初昏大火中、種黍菽糜、糜字因下文誤衍、諸書皆言種黍以夏至、說文獨言以大暑、蓋言種暑之極時、其正時實夏至也、玉裁謂種植有定時、古今所同、非可假借、許書經傳寫妄增一字耳、以暑種故謂之黍、猶二月生八月孰得中和、故謂之禾、皆以疊韻訓釋、从禾雨省聲、舒呂切、五部、

〔段注說文解字禾七上〕稷、齋也、程氏瑤田九穀攷曰、稷齋大名也、黏者爲秫、北方謂之高粱、通謂之秫秫、又謂之蜀黍、高大似蘆、月令首種不入、鄭云、首種謂稷、今以北方諸穀播種先後攷之、高粱最先、管子書曰、日至七十日、陰凍釋而藝稷、百日不藝稷、日至七十日、今之正月也、今南北皆以正月藝高粱、是也、凡經言疏食者稷食也、稷形大、故得疏偁、按程氏九穀攷至爲精覈、學者必讀此而後能正名、其言漢人皆冒粱爲稷、而稷爲秫、秫鄙人能通其語者、士大夫不能舉其字、眞可謂撥雲霧而覩青天矣、五穀之長、略○註从禾畟聲、子力切、○中略稷、古文稷、按見蒼頡古文畟字、

〔日本釋名下米穀〕黍 黃實也、きびのみは黃なり、みとびと通ず、黑きびもあれども正色にあらず、

〔東雅十三穀蔬〕黍キビ 舊事紀に、粟黍は保食神の胸より生しと見え、古事記には大宜津比賣神の二耳より生しと見えたり、アハといひ、キビと云義は不詳、○中略 キビとは、キは黃也、ビは實也、ミといひ、ヒといふは轉語なり、其實の黃なるをいふ、稷と黍との總名也、

〔本朝食鑑一穀〕黍 訓岐美、

釋名、丹黍、源順 秬黍、同上 秫、上同 源順曰、丹黍一名赤黍、和名阿賀木美、秬黍一名黑黍、和名久呂木美、秫一名穫米、一名穄、一名黃米、必大(平野)按秫糯粟之名、與黍稷殊、

集解、黍多種類、本邦所用不過四五種、稻黍者所用少、而味亦不佳、農間作飯粥而食、其狀似粟而低小有毛、結實成枝而殊散、其粒如粟而光滑、色黃白、三四月下種、五六月可收、七八月收者亦有、其長而短者號小黍、此亦稻黍類、味不爲佳、又有爪黑黍者、此亦稻黍之糯也、糯黍者狀與稻黍同、而粒大色赤而粘、作餅及團子而食味美、爲上饌、或曰毛呂古志、此至三四月下種、七八月熟、又有黑黍者、是糯黍之黑

〔倭名類聚抄 十七粟〕丹黍　本草云、丹黍一名赤黍、一名黃黍、(音鼠、和名阿賀木々美、)

秬黍　本草云、秬黍一名黑黍、(秬音巨、和名久呂木々美、)

秫。　爾雅注云、秫(音述)黏粟也、本草云、稷米一名秫、(稷音子力反、和名木美乃毛智、)蘇敬注云、一名穄、(音祭)一名黃米、

〔醫心方 一〕丹黍米(和名阿加支支美)　黍米(和名支美)　稷米(和名支美乃毛知)

〔類聚名義抄 禾七〕稷米(一名粟、秫、キヒノモチ)　秫(音述)　秫(俗キヒノモチ、モチキビ、モチアハ、)　粟秫(キビノモチ)　黍(キビ)

黍粢(俗)　丹黍(アカキ、ヒ)　赤黍(同)　黃黍(同)　秬黍(クロキ、ヒ)　黑黍(同)

〔下學集 下草木〕秬(キビ)(本朝崇德院御宇保延三年、天雨秬、其色黑也、)

〔多識編 三穀〕稷、今案岐美、異名穄、(音祭)粢(音咨)　黍、岐比、今案毛知岐比、

〔和爾雅 六米穀〕稷(コキビ)(穄、粢、黃米、並同、)　黍(モチキビ)　丹黍(アカキビ)(赤黍同)　秬黍(クロキビ)

〔黍稷稻粱辨〕黍有黏不黏二種、黏者爲秫、卽黃米、又稱黃糯、不黏者爲黍、古所謂黍、今亦稱黍、稷亦有黏不黏二種、黏者爲粱、卽黃粱也、不黏者爲稷、卽古所謂粟、後謂之小米、黍稷俱有黏不黏二種、猶稻有糯粳二種也、黍稷稻粱名稱雖異、要之皆不過黏不黏二種耳、而粳獨名稱尤多、有因其形而名之者、又有因色味而名之者、因其地方而名稱不一也、糯亦有大小二樣之異、宜就老農而質之矣、陸稼書三魚堂集、引眞定府志曰、黍貴而稷賤、黍早而稷晚、黍大而稷小、黍散稷穗聚、稷卽粟也、今俗所謂小米者稷也、所謂黃米者黍也、黍有黏有不黏、不黏者飯黍也、粘者釀酒之黍也、(中略)

右辨黎秫一條

黍稷二物、古今失辨、本草一爲謬傳、而人莫曉其誤、蓋黍稷苗同而穗異、黍穗散而稷穗聚、其熟則黍早而稷晚、其食則黍貴而稷賤、家語曰、黍五穀之長也、祭先王以爲上盛、黍者古爲貴人之食、賤者卽專稷爲常飯而已、故鄭康成詩箋云、豐年之時、雖賤者猶食黍、孔穎達正義、少牢特牲士大夫之祭禮、食有黍、明黍是貴、玉藻云、子卯稷食稷羹、爲忌日貶而用稷、是爲賤也、賤者當食稷耳、因按稷卽粟也、諺所謂一

粟雜載

黍名稱

十日、可納外記局之由宣下、

〔延喜式 民部二十三〕交易雜物

丹波國(中略)粟十石(中略)　阿波國(中略)粟廿石(中略)　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式 主稅二十六〕凡雜穀相博粟小豆各二斗當稻三束、大豆一斗當稻一束、自餘如令、

〔東大寺正倉院文書 十〕大倭國天平二年大稅帳

粟壹伯貳拾壹斛參斗

穎稻伍萬漆伯漆拾漆束漆把(中略)

以前、收納大稅穀穎幷神戶租等數、具錄如前謹解、

天平二年十二月廿日　從七位上行大目勳十二等中臣酒人宿禰古麻呂(署名以下略)

〔東大寺正倉院文書 三十七〕紀伊國天平二年大稅帳

紀伊國司解　申天平二年收納大稅幷神稅事

合七郡天平元年定大稅稻穀肆萬伍仟貳伯捌拾漆斛貳斗參升伍合(中略)

粟穀參拾斛伍升

穎稻漆萬捌阡壹伯肆拾捌束壹把陸分

爲穀古穎漆阡玖伯伍拾束

得穀漆伯玖拾伍斛

〔本草和名 米穀十九〕丹黍米一名赤黍米、秬(黑黍也)黃黍、(赤黍米卽)和名阿加岐々美、

黍米又有穄米、(相似而粒大)和名岐美、

稷米、穄(楊玄操音土)菰米一名彫胡、泉粱、烏禾、稗(仁諝音薄懈反、草似穀者也、已上出陶景注)稷一名穄、一名糜(關中名也)一名黃米、已上出蘇敬注粢米(似黍米、人呼爲黏米、出崔禹、)和名岐美乃毛知、

粟飯等饗奉、（○中略）先師申曰、（○中略）御靈會之時、於四條京極奉備粟御飯之由傳承、是蘇民將來之因緣也、

〔日本書紀 二十九 天武〕八年八月庚午、縵造忍勝獻嘉禾、異畝同穎、十二月戊申、由嘉禾、以親王諸王諸臣、及百官人等、給祿各有差、大辟罪以下悉赦之、九年八月丁未法官人貢嘉禾、

〔日本書紀 三十 持統〕六年九月癸丑、伊勢國司獻嘉禾二本、

〔續日本紀 二 文武〕大寶二年十月乙巳、近江國獻嘉禾異畝同穗、

〔續日本紀 六 元明〕和銅六年正月戊辰、伯耆國獻嘉禾（○禾原作瓜、依續日本紀考證說改、）左京職獻稗化爲禾一莖、

〔續日本紀 十 聖武〕神龜四年正月丙子、是日、（○中略）河內國獻嘉禾異畝同穗、

〔日本後紀 二十四 嵯峨〕弘仁五年八月辛酉大和國八島寺有嘉禾、一莖十八穗、

〔文德實錄 三〕仁壽元年八月辛丑、河內國獻嘉禾一莖三穗、

〔菅家文草 七 銘〕省試當時瑞物贊六首（每首十六字已上、自第一至第六依次而賦之、貞觀四年四月十四日試、五月十七日及第、）

數州獻嘉禾第五

嘉禾得地、聖德抽苗、欲知長養、雨露頻饒、

〔三代實錄 十六 清和〕貞觀十一年八月十三日戊戌、備前國獻嘉禾二莖、一莖十九穗、一莖六穗、

〔三代實錄 四十六 陽成〕元慶八年十一月五日壬戌、甲斐國言、嘉禾生管山梨郡石禾鄉正六位上清原眞人當仁宅、其一、十三莖五十穗、其一十二莖三十六穗、

〔三代實錄 四十七 光孝〕仁和元年正月丁巳朔、天皇御大極殿受朝賀、（○中略）先是、（○中略）甲斐國獲嘉禾、是日奏於庭焉、

〔扶桑略記 二十三 裏書 醍醐〕延喜九年九月十七日己酉、上野國獻一莖九穗嘉禾圖、其長五尺、

〔百練抄 五 鳥羽〕保安四年六月七日、諸卿定申諸道勘申太宰府所獻之一莖三穗嘉禾可爲瑞哉否事、

〔延喜式内膳三十九〕供御月料
粟三斗四升五合、〈○中略〉穉米一斗五升
〔延喜式造酒四十〕造御酒糟法
三種糟各五斗〈○中略〉　一種料精粱米五斗
供奉料〈○践祚大嘗祭〉　粱米一石
〔延喜式主膳四十三〕日料
米七升九合八勺四撮、粟子二升五合、　右自大炊寮進之
月料
米糯各一斗一升二合五勺、粟子三斗四升九合九勺、
〔執政所抄十月下〕亥子御餅事〈○中略〉
御強飯一合　〈例折櫃〉
五種　胡麻　大角豆　大豆　小豆　粟

粟種

〔新撰字鏡禾〕秸〈古八反、藁也、又作苦古木反、肥藥役也、阿波保、〉
〔倭訓栞前編二〕あは〈○中略〉　又禾をよめり、〈○中略〉弘仁中に一莖十八穗の嘉禾ありし事は紀略に見ゆ、

粟莖

〔新撰字鏡禾〕秆稈〈公旱反、木莘也、禾莖、阿波加耳、〉
〔伊呂波字類抄安植物附殖物具〕穲〈アハカラ〉
〔日本書紀神代一〕一書曰、〈○中略〉少彥名命、行至熊野之碕、遂適於常世鄕矣、亦曰、至淡島而緣粟莖者、則彈渡而至常世鄕矣、
〔釋日本紀七述義〕備後國風土記曰、〈○中略〉爰武塔神借宿處、惜而不借、兄蘇民將來借奉、卽以粟柄爲座、以

妊娠忽下黃水如膠、秫米黃耆等剉、水煎服之、

白粱米　甘微寒、炊飯香美、除胸膈中虛熱、益氣止吐、續筋骨、心鏡曰、治虛熱、益氣和中、止煩滿、炊飯食、

黃粱米　甘平、益氣和中止洩、去客風頑痺、去當風臥濕、遇冷所中等病、作飲食之、

青粱米　甘微寒、心鏡曰、主胃脾熱中、除渴止痢、利小便、益氣力、補中輕身長年、炊飯食之、衍義云、青白二種、性微涼、不及黃粱甘平、煮汁能解霍亂吐下後渴、

〔成形圖說 五穀十九〕阿波(○中略)

粟は稻米と異ひ、數十年を歷といへども、蟲蝕の憂なく、飢饉を救ひ軍實を峙(タクハフ)、是に過るものなし、是稻に亞ての嘉穀なり、但その飯になしては、他物をまじへざれば可からざる耳、

〔延喜式 四時祭二〕供新嘗料

御飯幷粥米各二斗、粟二斗、

〔延喜式 齋宮五〕供新嘗料

米四斗、粟二斗、

月料(小月物別減廿分之一)

粟十七束八把(並大炊寮毎月舂供)

〔延喜式 大學二十〕釋奠十一座　二座(先聖文宣王 先師顏子)座別(○中略)簠二(稻飯○粱飯)

〔延喜式 民部二十二〕凡供御及中宮東宮季料稻粟糯等、並用省營田所獲(○中略)但粟山城國進之、

〔延喜式 大炊三十五〕六月神今食

粟八束粟四束、

釋奠料(春秋亦同)　稻米粱米各一升四合(並先聖先師二座料)

凡供御稻米粟米舂備、日別送內膳司、(中宮亦同、但東宮送主膳監、)

粟利用

但小粟はむらなく、少厚きに利多し、粟は蒔時分と、地ごしらへよくして、時節よくうへ合すれば、勝れて實多き物なり、誠に一粒萬倍とも云つべき、ならびなき上穀なり、土地よけいある所にては、力を盡して多く作るべし、又云、時節をはかりてうゆるは、物ごとの肝要にて、作人かならず心を用る事なれども、此等のたねの至て細かなる物は、とかくうるほひなくては生せぬ物ゆへ、時分とうるほひを取失ふべからず、又すぐれて肥たる粟畠は、いか程も畦はゞがんぎも廣くし、いかにも薄く間引て、苗の時は牛馬もとをるやうにし、後はさかへ茂りて、きる物をなげかけても、少もたをれぬ程に作るべし、かくのごとく作り立たるには、其實一段に夫婦年中の食物程あるものなり、又苗の少(ちいさ)き時きえたる所に、念を入うへつぎたるよし、或雨中にへらにて和らかにほり取、根のそこねぬやうにうゆれば、痛ずして其まゝ生付物也、

〔播磨風土記 賀古郡〕鴨波里（土中中）昔大部造等始祖古理賣、耕此之野多種粟、故曰粟々里、

〔續日本紀 七 元正〕靈龜元年十月乙卯、詔曰、○中略宜令佰姓兼種麥禾、男夫一人二段、凡粟之爲物、支久不敗、於諸穀中最是精好、宜以此狀遍告天下、盡力耕種、莫失時候、自餘雜穀、任力課之、若有百姓輸粟轉稻者聽之、

〔續日本紀 九 元正〕養老六年七月戊子、詔曰、朕以膺（○膺恐庸誤）虛、紹承鴻業、剋己自勉、未達天心、是以今夏無雨、苗稼不登、宜令天下國司、勸課百姓、種樹晩禾蕎麥、及大小麥、藏置儲積、以備年荒、

〔三代實錄 十四 清和〕貞觀九年三月廿五日乙丑、令大和國禁（○禁原作集、今據一本改）止百姓燒石上神山播蒔禾豆、

〔宜禁本草 乾 五穀〕粟米　鹹微寒、陳者苦、解小麥毒、養腎氣、去脾胃中熱、益氣解虛熱、利二便、煮粥性暖、忌杏仁、陳者壓丹石熱、治反胃、粟米粉丸服、炊飯主消渴口乾、孩子赤丹、研傅之、粟草灰抽錫暈、衍義曰、粟利小便、故益脾胃、

秫米　甘微寒、上寒熱、利大腸、此米最粘、故宜酒、不堪爲飯、治多淫瘡多汁、主漆瘡犬咬凍瘡、杵傅之、治

うゆる地の事、黃白土は粟によろしとあり、黑土赤土も肥たる深きはよけれども、黃白の肥たるが、取分よきものなり、總じて粟は薄く瘠たる地にはよからず、山畠にても平原の畠にても、かたのごとく、肥たる性のよき地ならでは、盛長し難し、黍豆小豆のあとを上とす、麻胡麻の跡は其次なり、蕪靑大根の跡を下とす、是農書の說なり若又野畠などの新しく開きたるも、冬より數返うちこなしさらしをきたるを、春に至りなる程くはしく塊のなき樣にこなし置て、時分を待べし、是もいや地を嫌ふものなり、年ごとに地をかへて作るべし、年貢なしの燒野、或山畠などをあらし置、一二年も休めたる地を委しく拵へ、糞を灰に合せ、うるほひ能に蒔たるは、過分に實りあるものなり、種る時分の事、夏粟は二三月、桃の花始て咲を上時とし、卯月を中、五月を下時とす、秋粟は六月下旬、七夕の比までよし、其年の節により、五七日の遲速はあるべし、同じく種子の分量の事、凡一段に五六合、やせ地は少し多く蒔べし、又春うゆるは少しふかくすべし、もし蒔時分にうるほひなくば、まきたるうへを少し踏付べし、夏は淺くうゆべし、ふまずして其まゝをきても、頓て生る物なり、春はいまだ寒くして生る事遲し、上を蹈ざれば生付がたし、生るといへども大かたは死、夏の氣は熱くして生る事速なり、夏は雨多き故、蹈て後雨にあへば、地かたまりて生じがたし、蹈べからず、又粟は雨の後のしめりけを得て蒔物なれども、小雨はよし、若大雨の後ならば、草の少めだゝんとするを見て犂返し、細かにかきこなしうゆれば、苗草より先に生じて、成長する物なり、若磽地にて糞を用ゆといふとも、新しくつよきを用ゆべからず、必節虫を生ず、灰ごゑ其外よく熟しかれたる糞を用ゆべし、吹込などの所につよきこゑを用れば、虫氣するなり、加樣の所には河の泥を能ほして、糞をうちからしをき、灰を合せて用ゆべし、中うちをば必あらけなくすべからず、かるき鍬にて悉に草を削りをけば、其後芸り間引に手間入ざる物なり、ほぞろへの事、肥磽にはよる事なれども、思はく薄く間引べし、大かた三四寸に一本づゝ立るを中分とするなり、

月下種、五六月刈之、中者四五月下種、七八月刈之、晩者六七月下種、九十月刈之、其値霜而刈者、俗稱霜粟、然據地之肥瘠寒温、而早中晩亦有遲速、稗粟作飯粥者上饌少、而民間之食多、糯粟作餅食者、民間之食少而上饌多、故農家種粟者、惟以糯粟爲最也、

〔大和本草四穀〕粱（オホアハ・サルアハ）粟（コアハ・エノコアハ）、本艸ヲ考ルニ、粱ハ穂長大ニ毛長ク、粒粗キヲ云、粟ハ穂短少ニ芒短ク、粒細ナルヲ云、粱粟通ジ呼テ粟（アハ）ト云、二種共ニ其色五色アリ、時珍曰、古者以粟爲黍稷粱秫之總稱、而今之粟ハ、在古但呼爲粱、後人乃專以粱之細者名粟、粱粟トモニ今國俗ノ稱スル名品數種アリ、其色ト大小ニヨリテ名カハル、夏粟ハ春ノ土用ニウフ、秋粟ハ夏ノ土用ニウフ、粱粟トモニ夏秋ノ二種アリ、本艸曰、早粟ハ皮薄米實、晩粟皮厚米少、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀粟〕粱　オホアハ　シヽクハズ　サルアハ　ヲニアハ　シマアハ　ケアハ　一名薌萁（禮記曲禮）　粱穀米（盛京通志）　穀（群芳譜）

粟ノ中一種穂大ニシテ長毛アル者ナリ、赤毛黒毛ノ品アリテ、野猪モ食フコトアタハズ、故ニシシクハズト云、白粱米ハ色白シ、伊州ニテゴゼンアハ（伊州）ト云、黍トナシ食フ、黄粱米ハ飯トナシテ佳ナリ、

粟　アハ　コアハ　ウルアハ　エノコアハ（大和本草）　一名狗尾粟（青蒲縣志）　飯穀（盛京通志）　穀（群芳譜）　小米（本草蒙筌）

粱粟ノ類甚多クシテ百餘種ニ至ル、粟ハ粱ニ比スレバ、穂稍小サク粒モ細ナリ、故ニコアハト云、エノコアハト呼ブ、

秫　モチアハ　一名粘穀（盛京通志）　小黄米（同上）　稬粟（通州志）

アハハノ粘スル者ナリ、粱粟共ニアリ、黒赤白ノ品アリ

〔農業全書二五穀〕粟

〔古事記 中〕將擊登美毘古之時、歌曰、美都美都斯、久米能古良賀、阿波布爾波、賀美良比登母登、曾泥賀母登、曾泥米都那藝氏、宇知氏志夜麻牟、

〔萬葉集 三譬喩歌〕娘子報佐伯宿禰赤麿贈歌一首

千磐破、神之社四、無有世伐、春日之野邊、粟種益乎、

佐伯宿禰赤麿更贈歌一首

春日野爾、粟種有世伐、待鹿爾、繼而行益乎、社師留鳥、

〔萬葉集 十四東歌〕相聞

安思我良能、波姑禰乃夜麻爾、安波麻吉氏、實登波奈禮留乎、阿波奈久毛安多志、略○中

右十二首 略○十一首 相模國歌

〔萬葉集 十四東歌〕雜歌

左奈都良能、乎可爾安波麻伎、可奈之伎我、古麻波多具等毛、和波曾登毛波自、

粟初見

〔空穗物語 藤原の君〕あはゝ、むぎ、まめ、さゝげ、かくのごとき、ざうやくの物ありとて、せさせ給はず、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、略○中 天照大神復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、顱上生粟、略○中 天熊人悉取持去而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆、爲陸田種子、

〔古事記 上〕速須佐之男命、略○中 殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、略○中 於二耳生粟、略○下

粟種類

〔本朝食鑑 一穀〕粟 和訓阿

釋名、粱米、〔中略〕必大〔平野〕按、源順曰、粟米子也、禾者嘉穀、而穀之總稱、穗在禾上之形、然則禾不獨粟之稱乎、粱者李時珍曰、粟卽粱也、穗大而毛長、粒粗者爲粱、穗小而毛短、粒細者爲粟、今本邦此類多、惟總以粟而名之、

集解、本邦粟類有宇留與糯粟兩種也、兩種別有品種而多、凡有早中晚、有大小、有黃白赤黑、早者二三

ひし也、〇略註我國にしてアハといふものは、彼國にしても、古の時は粟と云ひけり、漢代より後に至りて、始て其實大きくして毛長きものを粱といひ、今の俗にオホアハといふもの是也、實細にして毛短きものを、粟といひしに、今の俗にコアハといふもの是也、後には又皆通じて粟といふ事、我國の如くになりける、此事詳に李東壁が本草に見えし也、さらば倭名鈔に、粟の字讀てアハといふ事はあしからず、是等の委曲を註するに及ばずして、唐韻の註を引き用ひしは然るべからず、後深草院寶治元年十一月、四國の米穀を、宋國に渡す事を停止の事、宣下せられしを、權大納言藤原朝臣頭辨にてありし時に、粟・米と書下されしにより、權中納言藤定嗣卿、これも其時に參議にて、アハノミとは何ぞと云ひて嘲けられし事によりて、たがひの爭ひになりし事の如きも、古より其訓義の詳ならぬが致せし所なるなり、又秫を呼びてキビノモチといひ、粱を呼びてアハノウルシ子といふが如きも、如何あるべき、黍といふは卽稷の粘する物、今俗にモチキビといひ、秫といふは、卽粱と粟との粘する物、今俗にモチアハといふ物也、詳なる事は、李東壁本草に見えたり、

〔倭訓栞前編阿二〕あは　粟をいふ、淡しき義なるべし、字も訓も米のもみの時をいふ、後一種に名く、又禾をよめり、禾は稻黍稷の通名なれども、稷を五穀の長といへるによれる成べし、〇中略和名抄に、粱米をあはのうるしねとよめり、されど大あはなり、又猿あはといふはうる粟、もちらは秫也、霜の、後に莠を霜粟といふ、

〔古事記傳五〕粟は書紀神代卷にも粟田(アハフ)と云、神武卷の大御歌にも阿波布をよみ賜ひて、万葉三卷にも、春日之野邊粟種益乎、古に殊に多く作し物なり、故粟のよく出來る國なる故の名なるべし、和名抄に、唐韻云、粟禾子也、和名阿波とあるは、粟(ゾク)字につきたる義なり、漢國にては、たなつ物を凡て粟と云こともある故なり、されど島國にて粟と云は、一種の名にて、總てにはわたらぬを、禾子也と云注を引ながら、和名阿波とせしは、順の誤なり、古語拾遺に、求二肥饒地一遣二阿波國一云々、こは穀麻を殖むためなれど、肥地ならば粟もよくみのるべし、伯耆風土記に、相見郡郡家之西北有二粟島一、少日子命蒔レ粟、秀實離々云々、故云二粟島一也、これも粟の、島の名となれる思合べし、

食我黍、無食我麥、無食我苗、毛曰、苗嘉穀也、嘉穀謂禾也、生民傳曰、黃嘉穀也、嘉穀亦謂禾、民食莫重於禾、故謂之嘉穀、嘉穀之連稿者曰禾、實曰粟、粟之人曰米、米曰粱、今俗云小米是也、㠯二月始生、八月而熟、得之中和、故謂之禾、依思元賦注、齊民要術訂、和禾疊韵、禾木也、木王而生、今王而死、謂二月生、八月熟也、伏生淮南子劉向所著書皆言、據昔中種穀、呼禾爲穀、思元賦注引此、下有故曰木禾四字、从木、禾木也、故从木、象其穗、各本作从木从𠂹省、𠂹象其穗、九字、淺人增四字、不通、今正、下从木、上筆𠂹者、象其穗、是爲从木而象其穗、禾穗必下垂、淮南子曰、夫子見禾之三變也、滔滔然曰、狐向丘而死、我其首禾乎、高注云、禾穗垂而向根、君子不忘本也、張衡思元賦曰、嘉禾垂穎、而顧本、王氏念孫說、莠與禾絕相似、雖老農不辨、及其吐穗、則禾穗必屈而倒垂、莠穗不垂、可以識別、艸部謂莠揚生、古者造禾字、屈筆下垂以象之、戶戈切、十七部、

〔農政全書 樹藝 二十五〕粱、爾雅云、虋赤苗、芑白苗、郭璞註曰、粱也、穀之良者曰粱、谷之良者曰粱、陶弘景曰、粱即粟類、惟其芽頭色異、爲分別耳、廣志曰、有解粱、貝粱、遼東赤粱、蘇恭曰、粱雖粟類、細論則別、黃粱出蜀漢商浙間、穗大毛長、穀米俱麁、人號竹根黃、白粱殼麁扁長、不似粟圓也、青粱殼穗有毛而粒微青、早熟而收薄、止堪作餳耳、王禎曰、赤白粱、其禾莖葉似粟、粒差大、其穗帶毛芒、牛馬皆不食、與粟同時熟、

粱秫 爾雅曰、粟秫也、犍爲舍人曰、是伯夷叔齊所食首陽草也、廣志曰、秫黏粟、有赤有白者、有胡秫早熟及麥、說文曰、秫稷之黏者、案今世有黃粱穀秫桑根秫、穗天培秫也、

〔日本釋名 米穀下〕粟 大(ヲホ)穗(ホ)也、穗の大なるものなり、おとあと通じ、ほとはと通ず、中を略す、一説に五穀の内にて味淡(アハ)きゆへに名づく、

〔東雅 穀蔬十三〕粟アハ ○中略 舊事紀に、粟黍は保食神の胸より生しと見え、古事記には大宜津比賣神の耳より生しと見えたり、アハといひ、キヒと云義は不詳、按するにアハとはアワ也、ハとワとは通はしてかく事、萬葉抄にも見えたり、アといふは小(ア)也、日本紀釋に、アを小と釋せし是也、ワといふは丸(ワ)也、古語に凡物の圓かなるを呼てワといふなり、古事記萬葉集等に、丸の字讀てワといひし是也、其實の小しきにして圓なるをいふ、粱と粟との總名也、○中略 倭名鈔に唐韻本草崔禹錫食經等を引て、粟は禾子也、アハといふ、○中略 粱は芑粟アハノウルシネ、白粱米一名圓米と註したり、此說のごときは、アハといふもの、一名にして二物なりと見えたり、廣韻に粟は禾子也といひしは、我國にしてアハと云ひしものゝ事をいひしにはあらず、彼國の古にありて、凡穀米の殼あるものを皆稱して粟といひ、また其苗より實に至るまで、皆稱して禾といひければ、粟は禾子とはい

〔易林本節用集草木〕粟アハ　禾同

〔多識編三穀〕粱、今案於保阿和、俗曰散留阿和、　粟阿和、異名秈粟、　秫、今案毛知阿和、異名衆晋秫、爾雅、

糯秫、唐米

〔本朝食鑑二華和異同〕粟

粟粱諸說不同、然粱卽粟也、周禮九穀六穀之名、有粱無粟、可知矣、自漢以後始以大而毛長者爲粱、細而毛短者爲粟、今則通呼爲粟、而粱之名反隱矣、近代亦稱粱大粟小也、惟本邦近世、總以粟而稱之、未聞粱之名而已、

〔黍稷稻粱辨〕禾總名、黍稷稻菽粱皆名爲禾、麻與菽麥則無禾稱、雖然古書稱禾者、皆稱粟也、說文曰、粟禾子也、呂氏春秋審時篇曰、得時之禾、長稠長穗、大本而莖殺、其粟圓而薄糠、其米多沃、而食之强、其次稱得時之黍、又其次稱得時之稻、則初單謂禾者、其爲粟截然可知矣、左氏傳取溫之麥、秋又取成周之禾、春秋書無麥禾、亦皆謂粟也、又粟總稱曰穀、禾穀者雖黍稷稻粱之通稱、中國以粟爲百穀之主、故粟獨有是總稱焉、周禮舍人掌粟入之藏、注、九穀俱藏、以粟爲主、是也、賈思勰曰、穀者總名、非止爲粟也、然今人專以稷稷卽粟也爲穀、望俗名之耳、又農政全書曰、古所謂稷、通稱爲穀、或稱粟、物之廣生而利用者、皆以其公名名之、如古今皆稱稷爲穀也、晉人稱蔓菁爲菜、吳人稱蕈爲蕈、稱陵苕爲草、洛陽稱牡丹爲花、故古謂嘉禾嘉穀者、皆指嘉粟而稱之也、援神契曰、王者德至于地、則嘉禾生、昔者神農作天錫之嘉穀、九穗、堯時得三十五穗、夏時異本同莖、而爲一穗、唐叔得嘉禾、異畝同穎、或曰一株六穗、或曰一莖九穗、非粟則無此異也、故嘉禾嘉穀、又謂之嘉粟見宋書瑞粟、見唐書是古禾穀爲粟之總稱者、更無疑矣、又可并見中國以粟爲常食也、

右辨禾穀爲粟之總稱一條

〔段注說文解字七上禾〕禾嘉穀也、嘉禾疊韵、生民詩曰、大降嘉穀、維穈維芑、穈芑爾雅謂之赤苗白苗、許艸部皆謂之嘉穀、皆謂禾也、公羊何注曰、未秀爲苗、已秀爲禾、魏風無

ぐなる、たなつもの、五くさの中の、をさとしも、たふとむ麥の、かく計、八重穗さかえて、その名さへ、長濱の村に、なり出しは、いまよりをちの、八百萬、よろづよかけて、八十つゞき、君がしらさん、ことをしも、國つみ神の、かしこくも、定めしたまへる、さがにやあるらむ、

反歌

ながはまや八重さかえたる麥のほにとしゆたかなるはども見えけり

粟名稱

〔新撰字鏡禾〕穇力六反、早熟禾、和○世○阿○和、

〔本草和名米穀十九〕靑○粱○米○陶景注曰、粱米皆是粟類也、一名粢粟、出陶景注和名阿○波○乃○與○禰○、

黃○粱○米○、一名竹根黃、

白○粱○米○、一名竹根白竹下恐脫二字和名之○呂○岐○阿○波○、

粟○米○、白粱粟、一名秶米、芑粟、粱之莖白者 穄米音會仙敦米、小冷也、出崔禹和名阿○波○乃○宇○留○之○禰○、

秫○米○楊玄操音述 黍穗、粟秫、秔稉、此三穀之秫稉也和名阿○波○乃○毛○知○、

〔倭名類聚抄粟十七〕粟○ 唐韻云、粟相玉反、字亦作㮚和名阿○波、禾子也、崔禹錫食經云、禾音和是穗名、被含稃未成米也、

粱○米○ 崔禹錫食經云、粱米一名芑粟、一名穄米、粱音梁、芑音起、穄音會、和名阿○波○乃○宇○留○之○禰○、白粱米一名圓米、

〔醫心方一〕靑粱米和名阿波乃與禰 黃粱米和名支○奈○留○支○美○ 白粱米和名之○呂○支○阿○波○ 粟米和名阿波乃宇留之禰 秫米和名阿波乃毛知

〔類聚名義抄禾七〕禾音和、アハ、 穄米アハノウルシネ 〔同米七〕粟思錄反、アハ、和ゾク、 粱米アハノウルシネ 芑粟同上、音起、 穄米同上、音會、 白粱米アハノウルシネ 圓米同

〔伊呂波字類抄安殖物附殖物具〕粟アハ禾子也 稃禾華也 禾同粟穗名、被含稃未成也、 芑粟同 靑粱米陶景注曰、粱米皆是粟類也、 秫粟出陶景注、已上アハノヨネ 粟米 白粱粟 秶米 芑粟粱之莖白者 穄米 仙敦米少冷也、出崔禹、已上アハウルシネ、 秫米楊玄操音 黍稷 粟秫 秔稉此三穀之秫也、已上アハノモチ、

〔日本書紀 欽明 十九〕十二年三月、以麥種一千斛、賜百濟王、

〔東大寺小櫃文書 上〕下綱丁重依

可下麥參佰拾五斛事 正麥三百 車力十五石

右東大寺當年御封米貳佰斛代可下之狀如件、但可取請文――

永承二年七月廿二日

讃岐守藤原朝臣

〔宇治拾遺物語 一〕これも今はむかし、ゐ中のちごのひえの山へのぼりたりけるが、櫻のめでたくさきたりけるに、風のはげしくふきけるをみて、このちごさめ〳〵となきけるをみて、僧のやはらよりて、などかうはなかせ給ふぞ、この花のちるをおしうおぼえさせ給か、櫻ははかなき物にて、かくほどなくうつろひ候なり、されどもさのみぞさふらふとなぐさめければ、櫻のちらんはあながちにいかゞせん、くるしからず、我てゝの作たる麥の花ちりて、實のいらざらんおもふがわびしきといひて、さくりあげてよゝとなきければ、うたてしやな、

〔甲子夜話 四十三〕日光御諦ノ御道傍ノ畑ハ、麥作ノ畦ノナリヤウ、必ズ竪畦ニシテ横畦ナルコトナシ、横ナレバ人潜ニ麥間ニ隱レ居ラルヽユエ、竪畦ニシテ見通シニ成ルヤウニ爲ルコトナリト、或人語レリ、何ツノ比ヨリ斯クスルコト始リシヤ、

〔うけらが花 二篇 長歌 七〕濱田君のしりたまへる石見國長濱のむらに、麥の八重穗といふものなり出たりとて、見せたまへるによりて、ほぎ歌よみてまゐらす、

角さはふ石見のくにの、白浪の濱田のさとの君がよを、長濱の村に、ゆだねまき、おほせし麥の、五月きて、ほに出る見れば、その麥の、くき一もとに、さきくさの、三穗ならび出、たまくしげ、二穗にわかれ、いやさかえ、立さかえけり、千早ぶる、神のみよゝり、天のした、あを人ぐさの、二なき、いのちつ

などにや、蛇は合子のあみかたより出たりとみゆ、常のは大森村の外に、麥わらの手遊び賣所なし、

駒込麥わらの蛇は、寶永の頃、此の處の百姓喜八と云もの是を作りて、祭禮の日市に賣る、一とせ疫病はやりし時、此蛇ある家は免れたりと云ふ、雜司谷麥稈の角兵衞獅子は、高田の四ッ家町に住し、久米と云へる女製し初たり、寛延二年の夏の事なり、其ころ參詣多かりしかば、よく售たりとぞ、

〔易林本節用集（波乾坤）〕麥秋（バクシウ）（四月）

〔日次紀事（四月）〕自此月尾至五月初、農民刈麥、是謂麥秋、民間稱附麥秋、凡農民多食麥、故悅麥秋、

〔倭訓栞（中編二十六牟）〕むぎのあき　野客叢書に、物熟謂之秋、取秋歛之義、故謂四月爲麥秋と見えたり、歌にむぎの秋風などもよめり、

〔本朝無題詩（七旅館附路次）〕著阿惠島述志　釋蓮禪

問泊昨來阿惠島、（泊名也）蒼々遠岸絕無涓、卸船未出風東曉、厨膳始羞日午時、（念誦之間、稍及午、故云、）經雨柳塘花落早、待秋麥壟子生遲、（此島之民不耕田畝、多殖麥、其子熟以仲夏爲秋、故云、）貧而赴洛勿相咲、春色自爲行步資、

〔傍廂（後篇）〕麥秋

麥秋といふは、四五月の頃なり、秋にはあらねど、稻は秋にみのる故に、それになずらへて、麥のみのる頃を秋とはいへるなり、野客叢書、宋子京有皇帝幸南園觀刈麥詩、曰、農扈方還夏、官田首告秋、注、臣謹按物熟謂之秋、取秋歛之義、故謂四月爲麥秋、禮月令にも、麥秋至とあり、朗詠集にも、五月蟬聲送麥秋とあり、夫木集に、おくるてふ蟬のはつ聲聞くよりも今はと麥の秋をしるかな、これらをもてみれば、秋はあかりの約にて、あかりはあからむといふ義なる事うつなし、

〔延喜式（四十二東西市）〕麥廛。。　右五十一廛東市

〔段注說文解字七上〕䅌、麥莖也、(麥莖光澤娟好、故曰䅌、一作𥟂、潘岳射雉賦曰、鷵問鷸葉是、)从禾月聲、(古元切、十四部、)

〔和漢三才圖會百三穀〕稍(音涓)　和名牟岐加良　俗云麥藁

按稍麥莖也、大小麥共中空、白色光澤、有薄籜而裹節、小麥稍厚硬、用可葺屋、亞萱葭稈等、

陳大麥稍、煎濃汁服治小便不通、頻服、

〔源平盛衰記二十六〕祇園女御事

忠盛馬ヨリ飛下、太刀ヲバ捨テ、得タリヤオフトゾ懷タル、手捕ニトラレテ、御悞候ナト云音ヲ聞バ人也、己ハ何者ゾト問エバ、是ハ當社ノ承仕法師ニテ侍ガ、御幸ナラセ給ノ由承候間、社頭ニ御燈進セントテ參也ト答、續松ヲ出シテ見レバ、實ニ七十計ノ法師也、雨降ケレバ、頭ニハ小麥ノ藁ヲ戴、右ノ手ニ、小瓶ヲ持テ、左ノ手ニ土器ニ煨ヲ入テ持テ、煨ヲケサジト吹時ハサト光、光時ハ小麥ノ藁ガ耀合テ、銀ノ針ノ如クニ見エケル也、事ノ樣一々ニ顯テ、サシモ儼恐レツル心ニ、イツノ間ニカ替ケン、今ハ皆咲ツボノ會也ケリ、

〔武江年表五〕寬延二年己巳八月、雜司谷鬼子母神境內に、孝女くめといふもの、麥藁にて作たる角兵衞獅子を賣り始む、

〔嬉遊笑覽六下翫弄〕麥わらの蛇、并唐團扇、江戶砂子駒込富士權現祭日、當所の產唐團扇、麥わらの蛇、五色網、夏の果物と見えたり、六玉川、(六篇)江戶は蛇が出てあつい朔日、江戶二色にも、その畫あり、狂歌にや、水無月のついたつ市の賣ものは外にたぐひのあらぬうちはぢや、江戶塵拾、駒ごみ不二祭、(淺草の不二權現にて、此蛇を賣は近きことゝみゆ、)麥わらの蛇は、寶永のころ、此處の百姓喜八と云もの、ふと案じ付て、これを作りて賣といへり、田のくろに竹など立て、藁盒子にこの蛇のごとく、稻稈にて編たるものを結付たり、おもふに初午稻荷祭に、わら合子作りて、供物を入るなるべし、その合子の編かた、この蛇の口の如し、次でに蛇を作りゆひ付るは、蛇を避る呪ひ

麥奴

〔和爾雅 米穀六〕浮麥(ミナシムギ)

〔重修本草綱目啓蒙 麻麥稻十七〕小麥

小麥ノ未ダ熟セザル者ハ、水ニ入テ沈マズ、コレヲ浮麥ト云フ、俗名ミナシムギ、一名シヒナムギ、シイラムギ、備後

〔倭名類聚抄 麥十七〕麥奴 新錄單要云、麥奴、和名牟岐乃久呂美、

〔類聚名義抄 麥一〕麥奴 クロムギ、一云ムギノクロミ、

〔伊呂波字類抄 无 植物附植物具〕麥奴 ムギノクロミ

〔和爾雅 米穀六〕麥奴(ムギノクロホ)

〔和漢三才圖會 穀百三〕小麥 略○中

麥奴 麥穗將熟時、有黑黴者也 治陽毒溫毒熱發狂發斑大渴

〔重修本草綱目啓蒙 麻麥稻十七〕小麥

麥圃ノ內ニ穗黑シテ、墨ノ如ク粉ニナリタルアリ、クロンボウト云、一名ムギノクロミ、和名抄 ムギノクロボ、クロムギ、佐州 カテツケ、デボ、江州 ベボ、濃州 ホウクロウ、備後 カラスムギ、備前 クロベ 播州 コレヲ麥奴ト云、一名麥黑勃、附方 後略 大麥奴、小麥奴アリ、略○中

增 略○中 麥奴モ小麥中ニ生ズルモノハ、甚ダ稀ニシテ、穗細ク墨ノ如キ粉至テ少シ、稞麥ニ生ズル者尤多クシテ肥大ナリ、小兒猪殃殃(ヤヱムグラ)、或ハ雀舌草(アーノメ)等ヲ採リ、地ニ貼シテ、麥奴ヲ以テ撲テ其形ヲ摸シ戲トス、麥奴丸ニモコレヲ用ユベシ、

稍

〔倭名類聚抄 麥十七〕麥 稍附 略○中 野王按、稍 音消、和名牟岐加良、麥莖也、

〔類聚名義抄 禾七〕稍 音綃、綃俗通、ムギカラ、

〔伊呂波字類抄 無 植物附植物具〕稍 音消、麥莖也、ムギカラ、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年四月丁丑、勅、苅麥爲芻、禁制久矣、今聞、京邑百姓、未秋之前、沽之給急、計其所得、倍於收實、利苟在民、何勞禁制、自今以後、永聽賣買、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十年三月壬辰、禁靑麥食馬、

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷賣買麥芻事

右去天平勝寶三年三月十四日格偁、大小麥寔能助夏乏、愚痴百姓、不慮後欠、頓苅靑芻、徒爲沽失、自今以後、堅固禁斷、若有違犯、必科重罪、又太政官去大同三年七月十三日騰勅符偁、如聞富豪之輩、不顧憲式、無賴之民、尙昧法令、賣麥忘食、積習爲常、不革前失、依法科處、所司容隱、隨狀貶黜、又太政官今年三月十四日下左右京職五畿內符偁、去年不登、百姓食乏、至于夏時、必有飢饉、救飢之儲、不可不備、職國承知、依件禁斷者、今被大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣偁、奉勅、所在之官、忘制無顧、愚昧之民、忍法有犯、既違朝制、忽失民粮、靜論其弊、深乖濟民、又或民寄事生臥、過苅其好、偏計少直、不顧多損、凡是播蒔之時、不圖地實、生臥之日、猶致此費、宜官長自臨蒔時檢按、示以此旨、莫致後損、若有違犯幷播種乖宜者、所由官司、隨事貶考、違犯之人、依法推決、

弘仁十年六月二日

〔太平記十六〕小山田太郞高家刈靑麥事

去年建武二年義貞西國ノ打手ヲ承テ、播磨ニ下著シ給時、兵多シテ粮乏、若軍ニ法ヲ置ズバ、諸卒ノ狼藉不可絕トテ、一粒ヲモ刈採、民屋ノ一ヲモ追捕シタランズルモノヲバ、速ニ可被誅之由ヲ、大札ニ書テ、道ノ辻々ニゾ被立ケル、依之農民耕作ヲ棄ズ、商人賣買ヲ快シケル處ニ、此高家敵陣ノ近隣ニ行テ、靑麥ヲ打刈セテ、乘鞍ニ負セテゾ歸ケル、

〔多識編三〕浮。麥。、今案美。奈。志。牟。岐。、

粟穀麥ノ分アリ、總ジテ蘖米ト云、蘖ニハ多ク麥蘖ヲ用ユ、卽麥芽ナリ、ムギノモヤシト訓ズ、大麥ヲ水ニ浸シ、脹シテ芽ヲ生ジタルヲ云、一夜水ニ浸シ、飯籮ニ入テ能乾テ桶ニ入置キ、毎日一度ヅツ洗乾シ、器ニ入ゴトニ熱クナリテ芽ヲ生ズ、初出ノ白芽ハ根ナリ、又一方ヨリ晩テ出ルハ葉ノ芽ナリ、味甘シ、米ハ味無シ、藥舖皆其根葉ヲ去リ米ノミヲ用ユ、時珍ノ說ニ、去鬚取其中米炒研麪用ト云ニ據ナリ、然レドモ今飴ヲ造ルニハ、根芽共ニ全ク用ユ、

〔延喜式大膳三十三〕造雜物法

糖料、糯米一石、萌小麥二斗、得三斗七升、

〔延喜式造酒四十〕造御酒糟法

三種糟各五斗　一種料、〇中略小麥萌一斗、

初熟麥

〔食物知新穀一〕初熟麥和劑

釋名青稜子アヲザシ和名 取初熟麥青者春食、故名、氣味鹹温無毒、平胃益氣也、

〔重修本草綱目啓蒙穀十七〕小麥

增、〇中略本邦ノ賤民、凶年飢歲ニハ、麥ノ全ク熟セザル時、穗ヲ採リ炒テ石磑ニテ磨シ食フ、其形雀屎ノ如クシテ細シ、コレヲアオザシト呼ブ、卽蘇州府志ノ麥蠶ナリ、曰麥蠶用青麥、炒過去芒揉爲穗、如小青蠶故名ト云、是ナリ、

麥蠶

〔倭訓栞中編阿一〕あをざし　枕草紙に見えたり、抄に青むぎにて調じたる菓子也といへり、大和故事に、青麥を煎て臼にて碾れば、よりたる糸の如し、よて青ざしといふといへり、美濃の雄島のあたりには、今も專らにす、伊豫にてはさ。す。か。といふ、

〔延喜式彈正四十一〕凡禁斷刈大小麥青苗爲馬草、賣買幷桑棗木鞍橋、

〔日本後紀十平城〕大同三年七月癸巳、禁苅麥苗、

春夏用大麥麩、秋冬用小麥麩、篩粉和酥傅之、署月痤疿潰爛不能著席睡臥者、夾褥盛麩縫合藉臥、性涼而軟、誠妙法也、

按麩婦人每用、盛袋洗身、能去脂垢、賤民和飯食之、

〔倭訓栞中編八〕こむぎ○中略　こむぎのかすといふは、倭名抄に麩をよめり、今からこのかすとも いへり、

〔重修本草綱目啓蒙麻麥稻十七〕小麥
コムギノ滓ヲ麥麩ト云、カラコ、一名モミヂ、フスマ、江戸今食用ノ麩ハ、漢名麪筋ト云フ、コレハ麩ト麪トヲ合セフミテ造ル、コノ時ノ水ヲ飛シテ粉ヲ採タルヲ麥粉ト云フ、俗名小粉、即漢名ナリ、發明ニ出、一名小麥粉、本經逢原麪粉、本草彙言方書ニ麥粉ト云フハ、皆小粉ニシテ麪ニ非ズ、

〔段注說文解字五下麥〕麩小麥屑皮也、麩之言膚也、屑小麥則其皮可飤、大麥之皮不可食用、故無名、从麥夫聲、甫無切、五部、　䴸麩或从甫、

〔延喜式六齋院〕人給料、○中略　麩二斗、辛紅彩色夾纈料四疋料別五升

〔延喜式十四縫殿〕黃丹綾一疋、○中略　麩五升、○中略　帛一疋、○中略　麩四升、○中略　羅一疋、○中略　麩二升、

麥蘖

〔和爾雅六米穀〕麥蘖（バクゲ）（ムギノモヤシ）　同麥芽

〔宜禁本草乾五穀〕麥芽（バクゲ）（ムギノモヤシ）　甘溫、消化宿食、破冷氣、去心腹脹滿、溫中下氣、開胃止霍亂、除煩消痰、破癥結、能催生落胎、大麥穀、水漬、候芽生急曝乾、心法云、久食消腎、不可多食戒之、

〔和漢三才圖會百三穀〕麥芽（くげ）　麥蘖　牟岐乃毛也志
本綱、有粟黍穀麥豆諸蘖、皆水浸脹、候生芽曝乾去鬚、取其中米、炒研麪用、其功皆主消導、
麥芽鹹溫　能消導米麪諸果食積、觀造餳（アメ）者用之、可以類推矣、但有積者能消化、無積而久服、則消人元氣也、須同白朮諸藥兼用、則無害也、

〔重修本草綱目啓蒙十七造釀〕蘖米　モヤシ總名　一名牙米康熙字典

に、此字をかけり、和訓にあらず、

〔本朝食鑑穀一〕麥麩訓之也字不

集解、卽麪粉也、綱目謂麥粉也、麪洗觔澄出麪粉、今本邦取麪筋而後、澄取水底泥、曝乾作粉、卽是麪粉也、麩之麪筋者、麪粉少而色不純白、味亦不佳、麪之麪筋者、麪粉多而色白味佳、此作糊作燒餠、俗稱不乃燒、氣味甘酸微凉無毒、然多食難消化、令人泄瀉、或和椒糖末醬而食、最爲下品、糊者用麪粉和水入釜、慢火煉成糊、冷則凍結、人每用之、接紙併紙、作書畫屛障之褙、褙匠最用之、以經年之腐糊爲珍矣、近代好瀉科而治人、製烏龍膏、取効者多、

〔和漢三才圖會穀百三〕麪粉 しやうふ 麥粉本名

本綱、麥粉乃是麪麩、洗觔澄出麪粉、今人漿衣多用之、古方鮮用、爲膏能治一切癰腫如神、用年久麪粉、久炒乾冷定研末、醋調敷之、

按麪粉取麪筋而澄、用底渣泥晒乾者也、再和水爲糊、褙匠家用之、經年者愈佳、

〔倭名類聚抄麥十七〕小麥麩附中略○ 說文云、麩音與扶同、字亦作䴸、和名古。無。岐。乃。加。須。小麥皮屑也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀具〕按今俗名麩曰不。須。萬。以爲澡豆、故又呼洗。粉。又以麩與麪、水中揉洗而成者、名麪筋、古人罕知、今爲素食要物、煑食甚良、陳藏器曰、麩和麪作餠者、卽是、非古人不知也、今俗呼爲麩者、卽麪筋也、其誤與今俗單呼麪條爲麪正同、麪麥末、非麪條也、

〔類聚名義抄麥一〕麩コムギノカス、ムギノカス、麥皮、音扶、

〔伊呂波字類抄无殖物附殖物具〕麩ムギカス、麥皮也、 麩音敷、麥皮也、亦作䴸、ムギカラ、

〔和爾雅米穀六〕麥麩コムギカス同稃

〔和漢三才圖會穀百三〕麩音孚 皴同 俗云古。加。須。又云毛。美。知。

本綱、麩小麥屑皮也、與浮小麥同性、而止汗之功次浮麥、又能治湯火瘡爛傷折瘀血、醋炒署貼之、滅諸瘢痕、

麥粉

易簡、寒食日盛紙袋、懸風處、數十年亦不壞、則熱性皆去而無毒、入藥尤良、中麪毒者、呑漢椒、食蘿葡、皆能解、

〔倭訓栞中編 古 入〕こむぎ〇中略 麪は小麥粉也

〔重修本草綱目啓蒙十七 麻麥稻〕小麥

ムギコ和名鈔 今ハウドンノコト云、一名塵白、行厨集 玉塵、同上 飛雪、名物法言 麥塵、行厨集

〔段注説文解字五下 麥〕麪、麥屑末也、屑字依類篇補、末者屑之、尤細者、齊民要術謂之勃、今人俗語亦云麪勃、勃取蓬勃之意、非白字也、廣雅釋器謂之麪、篇韵皆云、麩麪也、麩即末也、末與麪雙聲、讀與麪爲叠韵、从麥丏聲、彌箭切、十二部、

〔延喜式三十三 大膳〕造雜物法

索餅料、小麥粉一石五斗、〇中略 麥粉料、小麥一石得一石五斗、

〔續修東大寺正倉院文書三十三〕天平六年造佛所作物帳

寶蓋二箇各六角、裏徑九尺一寸、以金銀繪、〇中略 小麥粉四升則染料

〔續修東大寺正倉院文書三十四〕天平六年造佛所作物帳

火爐机四箇各六足、高三尺、〇中略 小麥粉二升則布料

白銅火爐四口各六足、口徑一尺七寸、〇中略 小麥粉一合六勺則布料

香印盤卌枚各徑一尺三寸〇中略 小麥粉一升七合四勺則布料、

〔享祿以來年代記〕慶長二年三月上旬、南蠻商船歸國、太閤命賜白米千石饂飩粉五百石、

〔毛吹草三〕和泉　貝塚麥粉　紀伊　宮崎麥粉

〔多識編三 穀〕麥粉、今案上布、シヤウフ。。

〔和爾雅六 米穀〕麥粉サウフ言粉也

〔日本釋名下 米穀〕小粉サウフ　小むぎの粉を水に入て、其すめるをとりて、水ひしほしたるを云、月令廣義

麪

〔百姓傳記〕十一小麥ハ上食タル故、色々菓子ニナル、味ヒヨキモノナリ、小麥ヲ挽ニシメリヲカケ、石ウスニテコマカニヒキ、トウブルイニテフルヒ粉トナシテ、マンヂウニモソウメンニモ、ソノホカサマ〴〵ノ菓子ニコシラヘ、マタアラキ粉ヲ引カヘシ、ウドンキリムギニ用ユ、粉ニ挽コト三四遍ニ及ビフスマヲトルベシ、此フスマヲウスニ入レ、水少ヅヽ入ツクニ、シバ〳〵トカタマル、マタ桶ニ入テモミ、足ニテフミ麩ヲトルナリ、マタ麩ヲ取タル洗汁ヲタメ、セウフヲ取リ糊ニスルナリ、重寶カギリナシ、

〔百姓嚢〕三田家の食物麥を第一とす、粟又勿論なり、麥は天子も聞しめさるゝ事、和漢例あり、殊に本朝にては猶更なり、四五月の間にや、青ざしといふて、青麥を調じたるを、禁裏へ奉るよし、清少納言が草子に見えたり、禁裏の御園にも、麥を作れるよし、俊頼朝臣の歌に、御園生に麥の秋風そよめきて山ほとゝぎすしのびなくなり、御園生は禁裏の御畠なり、いかさま麥をきこしめす事あれば也、麥は三時草(みとせぐさ)といひて、冬蒔て春長じ、夏熟するゆへ、日數久しく民の勞甚多し、一粒をも徒に捨る事あるは科成べし、民の苦勞おもはざらんや、西行の歌に、賤の女がかたつき麥をほしかねて宵ねやすらん五月雨のころ、かたつき麥とは、一たびつきたるをいふ、二たびつきたるを、もろづき麥といひて、飯に炊て食するなり、土民はかたつき麥をも食すると見えたり、

〔新撰字鏡〕麥䴭麨同、尺紹反、上、无支古、

〔類聚名義抄〕麥一麵俗ムキコ

〔伊呂波字類抄〕無飲食麵ムギコ、亦作麪、麴、麨、

〔和爾雅〕米穀六麪コムギノコ

〔和漢三才圖會〕百三穀麪音面麵同俗云温飩粉

本綱、麪甘温有微毒小麥粉也、性熱、惟第二磨者涼、爲其近麩也、醫方中往往用飛羅麪、取其無石末、而性平

麵　甘温、壅熱動風氣、生食頗利大腸、損脾胃、補虛實、人膚體厚、腸胃強氣力、○中略

穬麥　甘微寒無毒、輕身除熱、久服多力健行、作蘗温、消食和中、是今馬所食、正月種之、名春穬、補中不動風氣、先患冷氣人不相當、

〔延喜式大膳三十三〕年料

索餅料、小麥卅石、御井中宮料各十五斛、○中略　右從十一月一日迄來年十月卅日供御料、○中略

手東索餅料、小麥十七斛七斗、御井中宮各八石八斗五升、○中略　右起三月一日盡八月卅日供御料、其雜器通用上條、

同手東索餅料、小麥十七斛七斗、御井中宮料日供五升、所餘臨時用之、○中略　右起九月一日、盡來年二月卅日、供御料如前、

〔延喜式大膳三十三〕聖神寺季料常住寺准此

佛聖二座別日菜料、○中略　米小麥各七合、

正月最勝王經齋會供養料、○註略　僧別日菓菜料、○中略　小麥六合、甜物薄餅菜料各二合

〔延喜式典藥三十七〕中宮臈月御藥　四味理仲丸、○中略　賦風膏一劑、所須○中略　小麥二兩

雜給料　四味理仲丸廿劑、○中略　升麻膏三劑、所須○中略　小麥十四兩、

凡合藥所須麴料小麥一石、御藥料八斗、雜給料二斗、○中略　每年申省請受、

〔續修東大寺正倉院文書三十三〕造佛所作物帳斷簡

小麥一斛

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、○中略

一僧供　導師一人供料○中略　小麥一斗五升薄餅餻糵餅等料

一所にはよるべく候へども、麥田に可成所をば、少成共見立可申候、以來はれん〱〱麥田に成候得者、百姓之ため大き成徳分に候、一郷麥田を仕立候得者、隣鄉も其心附有之物に候事、○中略

慶安二年丑二月廿六日

〔牧民金鑑十一〕寬政二戌年九月十五日申渡

此度大風雨出水之村々、稻作刈入、籾になし干立方等も別而手間懸り可申候處、百姓家流失潰家に相成、小屋掛等取しつらひ、幷耕地石砂取片付等、其外彼是可及混亂事に候、別而愚昧の百姓共は、右體の變災に迷ひ、且は手も屆兼、當秋麥作仕付旬後レ等にも可相成哉、麥作の義は百姓夫食第一の作物に候處、萬一無仕付、又は旬後レ等に而及不作候樣に而は、風水難之上之義、彌艱難事候間、小前のもの等、麥作仕付手屆兼候分は、近村々相互に助合、麥作仕付無滯樣可致旨、村々江も申渡、精々心附可取計候、右は今般御沙汰も有之候儀に付申渡候間、可得其意候、

戌九月

麥產地

〔毛吹草三〕豐後 麥

〔雍州府志六土產〕麥 麥有大小之異、是亦所々有之、多大宮米店之所賣爲宜、延喜式載山城國交易雜物大麥三石、小麥三十石云云、

〔紀伊續風土記物產二〕小麥本草、本草和名古牟岐、和名鈔末牟岐、 名草郡神宮鄉邊の產上品なり

大麥本草、本草和名布止牟岐、 諸郡皆植る中に、海部名草兩郡沙地の者上品とす、

麥利用

〔宜禁本草乾五穀〕大麥 鹹溫微寒、熱則補益、生則損人、炒食弱脚、主消渴煩熱、益氣調中、補虛壯血脈、益顏色、實五臟、平胃消食療脹、久食髮不白、肥白滑肌、治諸黃、杵苗汁服之、初熟炒食、有火生熱、○中略

小麥 甘微寒、皮涼肉熱、作麪惟第三磨者涼、爲近麩也、除熱止燥渴咽乾、利小便、養肝氣、上漏血唾血、作麴、消穀止痢、作麪溫、不能消熱止煩、其皮爲麩、性寒調中去熱、治暴淋、煎小麥湯飲之、

自餘事條、一依前格、若有乖犯、科違勅罪、

弘仁十一年七月九日

〔續日本後紀八仁明〕承和六年十月丙辰、制、大小兩麥、耕種勞少、而夏月早熟、支急力多、若不刈青苗、令其成熟、貧賤之民、將以療飢、屢下禁制、不聽爲蒭、而累年奢侈之俗、收青苗以飼馬、庶民之愚利得、直以暫用、積習至今、不畏憲法、宜令左右京五畿內諸國不得更然、其百姓不改悛、及所容隱、准大同三年格、隨狀科處、

〔式目追加雜務〕一諸國百姓苅取田稻之後、其跡蒔麥號田麥、領主等徵取件麥之所當云云、租稅之法豈可然哉、自今以後、不可取田麥之所當、宜爲農民之依怙、存此旨、可令下知備後備前兩國御家人等之狀、依仰執達如件、

文永元年四月廿六日　武藏守判

相模守判

因幡前司殿

〔鵤岡事書日記〕一就佐坪一野夏麥事、宮下部可被下之由落居、道料者可爲二連候由之處、如進止衆會者、於國上用違取云々、然者過分之由返答、尤可然之由同心畢、

佐坪書下案

夏麥ニ就、當毛可致其辨處、至于秋致沙汰之條、不可然候、自當年堅夏可運上、有違背百姓者、可有注進焉、○中略

右條々、上使爲其致嚴密催促、可有取沙汰之狀、如件、

應永二十年五月十四日　法印

佐坪政所殿

〔敎令類纂初集八十七〕慶安二己丑年二月廿六日

〔齊民要術一〕雜說

凡種小麥地、以五月內耕一遍、看乾濕轉之、耕三遍爲度、亦秋社後卽種、至春能鋤得兩遍最好、

〔續日本紀七元正〕靈龜元年十月乙卯、詔曰、〇中略今諸國百姓未盡產術、〇產術原作彥術、今據三代格改、唯趣水澤之種、不知陸田之利、或遭澇旱、更無餘穀、秋稼若罷、多致饑饉、此乃非唯百姓懈、固由國司不存敎導、宜令佰姓兼種麥禾、男夫一人二段、〇下略

〔續日本紀九元正〕養老六年七月戊子、詔曰、〇中略宜令天下國司、勸課百姓、種樹晩禾蕎麥及大小麥、藏置儲積、以備年荒、

〔類聚三代格八〕太政官符

　應畿內七道諸國耕種大小麥事

右麥之爲用、在人尤切、救乏之要、莫過於此、是以藤原宮御宇太上天皇〇持統之世、割取官物、播殖天下、比年以來、多斷耕種、至於飢饉艱辛良深、非獨百姓懈緩、實亦國郡罪過、自今以後、催勸百姓、勿令失時、其耕種町段、收獲多少、每年具錄、附計帳使申上、

　養老七年八月廿八日

〔類聚三代格八〕太政官符

　應種大小麥事

右撿太政官去天平神護二年九月十五日格偁、大納言正三位吉備朝臣眞吉備宣、奉勅、麥者繼絕救乏、穀之尤良、宜令天下諸國勸課百姓、種大小麥、卽勤國郡司恪勤者各一人、專當其事、其專當人名、附朝集使申上者、今被大納言正三位藤原朝臣冬嗣宣偁、奉勅、今聞黎民之愚、棄而不顧、至有絕乏、徒苦飢饉、或雖耕種、既失其時、空費功力、還不得實、是則國郡官司、不愼格旨、授時乖方、此而從政、誰謂善吏、月令云、仲秋之月、乃勸種麥、毋或失時、其有失時、行罪無疑、宜自今以後、始自八月、勤令播種、不得失時、

穬麥非良地則不須種、薄地徒勞種、而必不收、凡種穬麥、高下田皆得用、但必須良熟耳、高田借擬禾豆、自可專用下田也、八月中戊社前種者爲上時、擲者畝用子二升半、下戊前爲中時、用子三升、八月末九月初爲下時、用子三升半、或四升、小麥宜下種、歌曰、高田種小麥、稴䅦不成穗、男兒在他鄉、那得不憔悴、八月上戊社前爲上時、擲者用子一升半、中戊前爲中時、用子二升、下戊前爲下時、用子二升半、正月二月、勞而鋤之、三月四月、鋒而更鋤、鋤麥倍收、皮薄麪多、而鋒勞各得、再遍爲良也、今立秋前治訖、立秋後則蟲生、蒿艾簞盛之良、以蒿艾閉窖埋之、亦佳、窖麥法、必須日曝令乾、及熱埋之、多種久居供食者、宜作劁、才凋切麥倒刈薄布、順風放火、火既著、卽以掃帚撲滅、仍打之、如此者、夏蟲不生、然唯可作麥飯及麪用耳、○中略

雜陰陽書曰、大麥生於杏、二百日秀、秀後五十日成、麥生於亥、壯於卯、長於辰、老於巳、死於午、惡於戌、忌於子丑、小麥生於桃、二百一十日秀、秀後六十日成、忌與大麥同、蟲食杏者麥貴、○中略

氾勝之書曰、凡田有六道、麥爲首種、種麥得時、無不善、夏至後七十日可種宿麥、早種則蟲而有節、晩種則穗小而少實、當種麥、若天旱無雨澤、則薄漬麥種、以酢且故反漿幷蠶矢、夜半漬、向晨速投之、令與白露俱下、酢漿令麥耐旱、蠶矢令麥忍寒、麥生黃色、傷於太稠、稠者鋤而稀之、秋鋤以棘柴耬之、以壅麥根、故諺曰、子欲富、黃金覆、黃金覆者、謂秋鋤麥曳柴壅麥根也、至春凍解、棘柴曳之、突絶其乾葉、須麥生復鋤之、到榆莢時注雨止、候土白背復鋤、如此則收必倍、冬雨雪止、以物輒藺麥上、掩其雪、勿令從風飛去、後雪復如此、則麥耐旱多實、春凍解、耕如土種旋麥、麥生根茂盛、莽鋤如宿麥、

氾勝之區麥、種區大小、如中農夫區禾、收區種、凡種一畝用子二升、覆土厚二寸、以足踐之、令種土相親、麥生根成、鋤區間秋草、緣以棘柴律土、壅麥根、秋旱則以桑落時澆之、秋雨澤適勿澆之、麥凍解、棘柴律之、突絶去其枯葉、區間草生鋤之、大男大女治十畝、至五月收區、一畝得百石以上、十畝得千石以上、小麥忌戌、大麥忌子、除日不中種、

崔寔曰、凡種大小麥、得白露節可種、薄田秋分種、中田後十日種、美田唯穬早晩無常、正月可種春麥䅆豆、盡二月止、

ケル時ハ、猶以能モノナリ、只シメリテ加ヘルモノトシレ、○中略

一麥ヲバ禰者ノ子ニマカセ、大豆ヲバ鳩ノ餌ニセヨト云ヘリ、麥ノウスキハ取實スクナシ、貧シキ者ノ子ハ、種ヲオシミ厚クマカズ、禰者ノ子ハトモシキコトヲシラザルニヨリテ、オシゲナク種ヲアツクマクトナリ、

〔農家心得草〕麥を蒔畦拵の事

諸國にて麥を作るを親るに、畦に竪まきあり、横蒔あり、是を横畦竪畦といふ、大和國邊にては、横がんぎ竪がんぎといへり、其外國所にて方言あり、大坂在にて畑に麥を蒔に、貳挺掛といへる犁を用ふ、○中略扨蒔べき畑を打ならし、畦を引べき其左右の端に印を付、繩を引、畦切と云小鍬にて其繩の筋を引、印を付、其印を眞中にとり、此二挺懸を跡ずさりして引ば、二筋一度に溝をなせば、其二筋の溝へ壹人立て、麥種子を蒔下すなり、其跡より壹人蒔たる麥に足にて土をけかけ、其上をふみ付置なり、如此してまけば、常蒔ごとくして蒔より壹反蒔べき所に、三四反も蒔事なり、扨此二筋に蒔とは、一筋に蒔べきを二筋に蒔事なり、此二筋の間七寸、或は七寸五分位の間になれば、麥成長しぬれば、二筋一所になりて、厚く蒔たる畦のごとく見ゆれども、七寸餘あひ明て蒔たるなれば、草とり肥しするにも都合よく、又厚けれども程よく成長するなり、

〔甲陽隨筆二〕郡內領之事

谷村ゟ西方を上郷と云、此村之內、麥作を田の如く水を掛ケ作る、冬水と云は、冬の內麥作へ水を掛ケ、春水と云は、春の內に掛る、麥の出來方大によし、

〔齊民要術二〕大小麥

大小麥、皆須五月六月暵地、不暵地而種者、其收倍薄、崔寔曰、五月一日蕃麥田也、種大小麥、先時逐犂稀種者佳、再倍、省種子而科大、逐犂掩之亦得、然不如作稚耐旱、其山田及剛強之地、則耬下之、其種子宜加五省於下田、凡耬種者、匪直土淺易生、然於鋒鋤亦便、

ば、根くさり出來過る事も有、專ら灰ごへを以て植べし、温氣を好み、底の土をあげて作る事を好て、高くかわきて輕き土に宜しからず、春にもなりて修理の遲は、實りよからず、其上麥穗に出て、實る時分地の堅く引しむる事を好て、根の土乾うつけたるを嫌ふ物也、小麥取わけ念を入種をえらぶべし、種惡しければ出兼るもの也、まじりなく實りよき夏の土用に能干、粃虫くひをよく去べし、是又種二三色有物也、能々土地の相應を撰て作るべし、又風烈しき所には、穗もからもも強く、實の落ざるを撰て作るべし、又云、麥を蒔地は、かりそめにもゑめり氣のつよき時は、耕し蒔べからず、當年地かたまりて、麥の盛長あしきのみならず、來年の稻迄出來よからず、但小麥は少ゑめり氣の時蒔たるは實り吉、又小麥跡田瘠るもの也、田に小麥を作る事は所によりて遠慮すべし、小麥のから田に入は毒なる故也、かぶをも土きはよりつめて刈、耙にてかく時、田に有麥かぶもかきさるべし、總じて小麥は大麥よりこへ少分入、第一灰ごへよし、石川郡にて松任近邊は小麥の上也、

〔百姓囊五〕農人の諺に、夜さむ麥吉といふは、大寒の時分より正月の末二月の初頃まで、寒強く霜よな〱をきて、さのみ雨多からぬをいふなるべし、春早く暖に成ぬれば、麥苗長じすぎて、實入すくなし、初春晴霜多きときは、麥根土中に伏藏して精氣強く、仲春の暖氣に逢て、莖葉長成し、穗粒堅實なるをいへり、

〔百姓傳記十〕ワセ麥種色々アリ、三月穗、ナカボロワセ、六角、ハダカ麥、マタ中手麥種色々アリ、オク麥種猶以樣々有、其數書ツクシガタシ、〇中略

一麥種ヲホトボシ蒔コト秘事ナリ、水カ小便ニ油ヲサシ、種麥ヲソレニテカシ、一日二日宛俵トナシテ置、フクレタルヲマクニ生出ヨシ、ソダチ強ク、實入ヨシ、水一升ノウチヘ、油一二合入、又小便モ入、麥種ニ應ジテ多少有ベシ、麥粒フクレシメリヲ持、蒔ヨクモアリテ生出モ早シ、地ノカワ

しをけば、雪霜に痛まずして、春になりてさかゆる物なり、されども實りは少し、〇中略同種子の分量の事、凡一段の畠、むぎやすは四五升、稻麥は八九升、是先中分なり、田の溝のひろせばと、秋冬と、地の肥瘠と、かれこれ指引して、思はく少薄く蒔て、こやしを多く用ひたるに、實り多しとしるべし、又多ぶかになるほど、少宛厚く蒔べし、種子おほひも早きは薄く、晩き程あつくおほふべし、尤種子おほひむらなく、塊をよくくだきて、細土ばかりにて、たねのよくかくるゝ樣にすべし、蒔にも、種子おほひするにも、跡に心を留めて、だめをさゝざれば、必多少むら有ものなり、少の手間にて、蒔むらあれば、積りては過分の損あり、よく心を用ゆべし、

〔耕稼春秋五〕大麥小麥勸辨

一大麥は秋蒔て夏熟す、四時の氣を受、舊穀の盡る時分出來て、民の食を助けつぎ、新穀の出來るまでの助と成、されば稻に次て五穀の中にて貴き物也、故に聖人是を重んじ春秋にも、稻と麥との損毛を書せたまへり、實に近世靜謐にて、民多くなりぬ、麥作の勤疎ならば食物乏かるべきに、都鄙是を作る事專成故、麥の多き事甚だ古に勝れり、されば今民の養の助となる事、是に續く物なし、實にめでたき穀物也、麥は總じて田ならばしつけなき堅田よし、弱く薄き地は、大麥によからず惡し、其種に色々數多き物なり、若障り有て、末に蒔植るならば、必灰ごゑ馬糞などの能こゑを多く蓄置、肌糞を能致し、種おほひを厚しおけば、雪霜に痛ずして、春になりて榮ゆる物也、眞糞馬ごへ何れも灰ごへはよし、取分小麥に灰を以ておほはざれば寒氣にいたむ物なり、五畿內東海道は麥作大分にして、宜舖町人まで朝夕食とす、北國の麥と違ひ、地宜しく天氣能故か、麥の皮も薄く、春にはやく白むものなり、

一小麥地の拵、其外大麥に替る事なし、大麥よし少し遲く蒔所も有、同刈時も同じ、小麥は大麥田より遲蒔物也、小麥蒔地はさのみ肥たるを好まず、若すぐれて肥たる地に、肌糞を多く用ゆれ

てよこの筋を切べし、來年木綿其外夏物を作る地ならば間を廣く、又麥を作らば少しせばく、尤土地の肥瘠により、肥地はひろく、磽地は麥のかぶしげらぬものなれば、そのこゝろえして筋をきるべし、但筋の底、藥研のそこのごとくにならぬ様に、底廣にきる事肝要なり、底せばければ、たねもこやしも、小筋になりて麥の根一所に生じせりあひて、から細く弱く、風雨にたをれやすく、實りよからず、又がんぎ淺ければ、第一は風寒雪霜に痛みやすく、其上冬は陽氣土中にあるゆへ、麥の根少しにても底に深く入て、暖かなる氣に合て、をのづからはびこる事なれば、夏よりこなして、日によく當りたる細土そこに入て、蒔ときの肌糞とよく和合し、麥の立根是とつれて、底に深くいれば、冬中は上は寒氣にせめられ、葉あかくなりて痛む様なれども、立根は却て底の陽氣にあひ、はびこりて、春に至りて陽氣地上に滿る時、其溫氣を得て、思ひのまゝに盛長し、稈すくやかに強し、又根の土かひ厚ければ、少々の風雨にもたをれず、實りよき事疑ひなし、然るゆへに、麥畦を作り、筋をきる事、深さ三四寸程に、底廣にきるをよしとす、若がんぎのきりやうあしく、麥だね一所にかたまり生じ、一つ穴より多く生出たるは、後の手入なり難し、農人此所に繼に心を用ゆべし、非農人のならひにて、厚くしげきを貪り、間をせばく蒔たるは、中うち培ふ事もなりがたく、うへ物の足もとに、日風のとをる事なきゆへ、日かげ草のごとくにて、實り必うすき物なり、種子を下す時分の事、秋の土用に入てまくを上時とす、土用の終り、十月上旬を中時とし、十月半廿日頃までを下時とす、又八月上の戌の日より小麥を蒔はじめ、それより段々に、大麥をまき、九月下旬十月初めに蒔終るをよしとするなり、何れも所の風氣によるべし、木綿跡、大根跡などは、此限りにはあらず、やむ事を得ざれば、小麥は冬を過ず、大麥は歳を不越と云て、暇なければ小麥も冬にもかゝり、大麥は歳の內は、まきてもくるしからずと云ことなり、さはり有て九十月の後うゆるならば、必灰ごゑ、馬糞などのよきこゑを多く蓄へをき、肌糞をよく用ひ、種子おほひを厚く

營大麥一段、種子一斗五升、總單功十四人半、耕地一遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理一人、畦上作二人、下子半人、刈功二人、擇功五人、搗功二人、小麥亦同

〔本朝食鑑一穀〕大麥

秋土用可蒔、至立冬後十日許尚可蒔、至小雪節前後、雖遲生之麥亦不可蒔、若北邊及山田霜雪早降之地者、雖小雪後亦可蒔也、早者三四月熟、晩者五六月熟、凡農間秋苅稻而後蒔麥、故農之無暇、不劣種稻時、麥田麥隴可深耕、未蒔麥已前、可取盡田草之根、若遺根埋土不腐而復生則損麥、此農夫惰慢不著意之故也、麥者最忌濕、廣田無溝則不可決水、不決水則腐麥、麥田令畦高、而南北可長、南北長則麥生悉向日、是喜暖之故乎、於是農夫有隙、毎可改正於田畦隴畝之長短廣狹也、麥生後以鉅頻鋤畦間、聚土令細土在麥葉上、毎以頻入鉅爲要、江東之民傲慢而怠、京師之民親切而勤、故入鉅亦有淺深多少、惟麥亦可擇種之好惡、擇其好者簸之扇之、反覆者二三次、而後晒日、以不蒸鬱爲要、夏土用最晒乾而佳、此爲上擇、用種投水、去浮者用沈者、此爲中擇、今以上擇爲勝也、蒔麥法有疎撒(アラマキ)、有撮撒(ツマミマキ)、有撚(ヒチリ)撒、有二畦合撒、而可隨宜也、糞田法、麥生糞田者不佳、蒔時糞田則足爲養、糞常不多、故麥生糞田、亦隨時爲宜、惟糞者不宜春宜冬也、大抵麥之數種、以土地相應而可種、強肥瘠土則麥實少、種難生之麥、而強肥土則麥實多、是糞少深耕之故也、種易生之麥、而不肥土則麥實少、是糞疎耕淺之故也、麥之黄熟自根至末而苅者遲、此爲結實十分也、此數件者、農家毎著意而不可忽之矣、

〔農業全書二五穀〕麥

麥は黑墳に宜しとて、黑土の性の強きを好みて、弱く薄き地は大麥によからず、○中略麥地こしらへの事、畠ならば、夏ごしらへを、深く四五遍も耕し、細かにかきこなし、やすめをきて時分を待べし、田ならば、早稻の跡を、うるほひよき内に犂返し、少かはきたる時、耙にてかきくだき、若塊かたく、くだけかぬるをば、土わりにて細かにうちくだき、畦作りし、後の作り物の勝手にまかせて、た

右種は羽倉權九郎江戶役所ニ預ヶ有之、渡方之儀、同人江申達候間、勝手次第請取のもの差出し、尤書面請取候種の內、五升は支配所江蒔付の積り、殘四升は其方役所江預り置、追而猶望の御代官有之、諸方取極り割渡候はゞ、其時々御勘定所江可被相屆候、

西洋麥貳升　三河口太忠　同　蓑笠之助

同　竹內平右衞門　同　山口鐵五郎

右種は羽倉權九郎江戶役所ニ預ヶ置有之、割渡方之儀、同人江申渡候間、勝手次第請取のもの差遣し、且蒔付方之儀、仕法書の通相心得、猶委細の儀は、榊原小兵衞へ可被申談候、

三月

西洋麥仕法書

西洋麥蒔付方之儀、土地之善惡を嫌ひ不申、分而惡地相應いたし候由、一ヶ年貳度の蒔付ニ而、春二月の彼岸ニ種を下し、五ヶ月ニ而多分實法取入ニ成、右取入濟の跡地直ニ切返し、貳度目の種を蒔付、十月末ニ取入ニ成候、且春の種は淺く、秋の種は深く地をうなひ、地下の土切返し、凡地上ゟ六寸計ニ而、床土を能平均し踏付、夫より上土をよくこなし、尤念を入候得者、荒き土ふるひに而ふるひ候位ニもみほごし、床土ゟ地上厚サ四寸位ひにならし、作を切、寒地は春の種地上ゟ壹寸、秋の種は貳寸、暖地は春の種外畑作同樣ニ蒔付、秋の種は壹寸位に種を下し、肥等を用ふるニ不及、貳度蒔切返の節、最初の株能切返し、床土の下に納候事ニ而、若上地の內ニ交り候而者、生立惡敷、又切株取捨候得ば、翌春の實入少く候由の傳に有之候事、

但蒔付生立方の考は、其國柄地味の摸樣ニも寄候儀ニ而、猶農人の工夫を加へ、勘辨も可有之候、

〔延喜式 內膳 三十九〕耕種園圃

麥栽培

西洋麥

ウスクヘギ去テ、麪ニシテムシ食ス、又餅ニ作リテ食ス、荒歲ヲ救フベシ、今正二月ニ初生ノ青葉ヲ以テ、汁ヲツキテ米粉ニ和シ、餅ニ作リムシ食ス、色青翠シテ香味甚佳ナリ、
雀麥味甘、性平、毒ナシ、飢ニ充テ腸ヲ滑ニス、苗ハ味甘、性平、毒ナシ、女人ノ產不出ヲ主ドル、煮テ汁ヲ飮之、

〔和漢三才圖會 百三 穀〕雀麥　燕麥　杜姥草　蘥(香藥)　牛星草　加良須牟岐　和名抄以穬麥爲烏麥者非也　今云茶挽草
本綱、雀麥生故墟野林下、而燕雀所食者、苗葉似小麥而弱、穗細長而疎、每穗分小叉十數箇、子亦細小、春去皮作麪、燕食及作餅食、皆可救荒、
苗(甘平)　治難產或胎死腹中者、胞衣不下者、(煮汁溫服)又治齒䘌、用苦瓠(ヒヤウタンノ)葉(洗淨三十枚)　雀麥苗、(長二寸剪之)　以瓠葉作五包、(包之廣一寸厚五分)以三年酢漬之、至日中以兩包火中炮令熱、納口中、熨齒外邊、(冷更易之)取包置水中、解見即有虫、長三分、(老者黃色、少者白色)多即二三十枚、此方甚妙、
按燕麥田野自生、苗莖似麥而細、其穗疎、其粒長大、如荒歲人食之、似麥而味劣矣、小兒取穗粒載於爪上、則旋回如挽茶磨、故俗呼曰茶挽草、

〔古名錄 十四 野草〕須々无支(本草類編)　漢名燕麥(本草)今名チヤヒキグサ○中略
今案、須々无支ハ、鈴麥(スヾムギ)也、此實下垂シテ鈴鐸ノ如シ、今遠州ニテ燕麥ヲ呼テスヾムギト云、

〔紀伊續風土記 物產 二〕蒒草(本草、海部郡加太莊にてカニグサ、牟婁郡にてマサナグサ、)　海部名草兩郡、及牟婁郡田邊莊の海邊沙地に多く產す、六七月子熟す、食用とすべし、今此草の根を採り筆に製せるものあり、藻鹽草の筆といふ、

〔牧民金鑑 十一〕寛政十二申年三月十九日
西洋麥九升　榊原小兵衛

雀麥

食ス、山東河北人ハ正月ニ種テ春穬ト名ヅク、形狀ハ大麥ト相似タリ、元升(井○向)曰、カラスムギハ種ズシテ麥中ニ自生シテ麥ヲ妨グ、故ニ農人是ヲ引スツ、其莖葉ハ大麥ノ如クニテヤヽ大ナリ、其麥粒ハ小麥粒ノ如シ、本草ノ註ニハ、人種テ食ストイヘリ、故ニ多識篇ニアヲムギト名ヅケテ、カラスムギヲバ雀麥ノ和名ニ付タリ、雀麥ハ下文ニミエタリ、和名ハシヲイト云ベシ、穬麥ハカラスムギナルベシ、詳ニ雀麥ノ下ニ辨ズ、

〔本草和名十草〕雀麥(似麥)一名蘥(余灼反)一名燕麥(本條)一名杜姥草(出二耶論)

〔康頼本草草〕雀麥　味甘平、无毒、和スヽムキ、又云、カラスムキ、一名蘥、一名蘥、似形麥、

〔醫心方一〕雀麥(和名加良須牟支、又藻麥、)

〔伊呂波字類抄加植物附殖物具〕雀麥カラスムキ

〔多識編三穀〕雀麥、可良須牟岐、今俗比牟岐、

〔紀伊續風土記物產二〕雀麥(ジヂンゴ本草、若山にてチャヒキクサ、)

燕麥(ナツノチャヒキムギ)(救荒本草)

〔庖厨備用倭名本草二麥〕雀麥(シヤクバク シチイ)　倭名抄ニ雀麥ナシ、多識篇カラスムギ、今俗ヒムギ、考本草、一名燕麥、故墟野林下ニ生ズ、苗葉小麥ニ似テヨハシ、其實ハ穬麥ニ似テ細シ、苗ハ麥ト同ジ、穗ハ細長クシテ疎也、唐ノ劉夢得所謂菟葵燕麥、動搖春風者也、元升(井○向)曰、此麥ハ自然生ナリ、苗葉ハ小麥ニ似タレドモ細クヨハシ、其實ハ穬麥ニ似タレドモ細カナリ、右ノ說ニミエタル如シ、和名ハシヲイト云、此土ニテハ穬麥雀麥トモニ種ルコトナク、自然ニ生ズ、其ノ穬麥ノ苗葉ハ、麥ヨリ大ナリ、雀麥ノ苗葉ハ麥ヨリ小クヨハシ、此差別アルノミナリ、農人ハ二ツトモニカラスムギトイヒ、シヲイトモイヘリ、シヲイトハ、自然生ノ義ナリ、然レドモ本艸ノ注ニヨレバ、雀麥ハ自然生ナリ、シヲイト云ベシ、穬麥ハ人コレヲ種ル、倭名抄ニヨツテカラスムギト云ベシ、本草注ニ又云、雀麥ハ皮

增、○中略麥ニ大小穬粿ノ別アリト雖ドモ、獨粿麥ノミ、其穗直立ス、故ニ熟セントスル時ニ當テ、霪雨アル時ハ、久シク雨水ヲ抱テ腐敗シ易シ、ソノ他ハ皆穗ヲ垂ル、故ニ霪雨アリト雖ドモ、腐敗ノ患ナシ、然レドモソノ苗勁直ニシテ低ク、培養シ易キユヘ栽ル者多シ、

〔齊民要術二〕大小麥

青稞麥、治打時稍難、唯伏日用碌碡碾、右每十畝用種八斗、與大麥同時熟、好收四十石、石八九斗麵、堪作麨及餅飥、甚美、磨總盡無麩、不働一遍佳、不働亦得、

〔本草和名十九米穀〕穬麥、馬所食者也、以作糵、和名加良須毛岐、

〔倭名類聚抄十七稻穀〕穬麥 新抄本草云、穬麥穬音廣、和名加良須牟岐、以作糵者也、

〔類聚名義抄一麥〕穬麥音廣カラスムギ 〔同七禾〕穬正廣、音礦、カラスムギ 穬俗 穬麥カラスムキ

〔康頼本草米穀〕穬麥 味甘微寒无毒、和加良須无支、百一選方有之、

〔醫心方一〕穬麥和名加良須牟支

〔多識編三穀〕穬麥、今案阿乎牟岐、

〔東雅十三穀蔬〕穬麥カラスムギ 倭名鈔に、穬麥以作糵者也、カラスムギといふと註せり、カラスとは、クロシといふ語の轉せしなり、其實の黑きをいふ也、烏鵲をカラスといふも卽此義也

〔本朝食鑑二華和異同〕大麥

華之大麥、別有穬麥、此大麥中皮厚而青色者也、穬麥有二種、一類小麥而大、一類大麥而小、此本邦在大麥中而不分類也、其粿麥糯麥與本邦同、惟中華不爲民間日用之食耶、又雀麥者、本邦之烏麥也、元吳瑞日用本草、以蕎麥爲烏麥、楊愼丹鉛錄、烏麥爲燕麥、燕麥者雀麥、與本邦烏麥一也、李時珍爲楊氏之誤、則今本邦以誤爲眞乎、

〔庖廚備用倭名本草二麥〕穬麥 倭名抄ニカラスムギ、多識篇今案ニアヲムギ、考本草、西川人ハ種テ

裸麥

〔延喜式 二十四主計〕凡諸國輸調、〇中略一丁〇中略米六斗、壹岐島小麥、□□小豆二斗、大豆四斗、□□

壹岐島〇中略 庸〇中略調、〇中略小麥廿斛二斗、

〔延喜式 三十二大膳〕新嘗祭　宴會雜給

親王以下三位已上并四位參議　人別、〇中略小麥四合、　四位五位并命婦　人別、〇中略小麥二合、

〔東大寺正倉院文書 五〕奉レ造二一丈六尺觀世音菩薩一料雜物等、自二諸司一請來事、

合參拾壹種〇中略　白米一百斛　糯米四斛　小麥五斗　右三種自二大炊司一請〇中略

天平寶字四年六月廿五日　　領今來人成

〔農業全書 二五穀〕麥

種子色々かず多き物なり、はだか麥の內には、米むきやす、京むきやす、赤むきやす、此むきやすと云は、ゐなかのはだか麥のことなり、又は廣島はだかなど云あり、稻麥も色々おほし、所の相應を考へ撰びて作るべし、尤霧雨しげき所にては、毛の短くたはまずして、雨霧を含みて穗の痛む類をば作るべからず、

〔和漢三才圖會 百三穀〕大麥〇中略

本綱〇中略青稞麥、似二大麥一而粒大皮薄、多レ麪無レ麩、〇中略

按〇中略青稞、無木須也穗短穎多而麩薄、收レ之早二於大麥一、粘少味劣、有レ帶二赤黑色一者、無木須也並皮薄舂レ之剝易、可レ得二八斗一、

〔農業餘話 上〕麥

ムケヤスと云ふ麥は、大麥よりは味はひ少し劣れども、搗くにたやすければ、今は多く此ムケヤスを栽る事となれり、其作りかた大麥に同じ、此ものは、中古弘法大師唐土より種を取りて歸朝せりとか言ひ傳ふ、此麥は皮薄くて剝け易ければ、ムケヤスといふなるべし、

〔重修本草綱目啓蒙 十七麻麥稻〕小麥

多不熟、○中略

按小麥種類多、而亦有早中晩之異、有穎穗瘦者(名蜈蚣)、此乃早麥也、無穎穗肥者(名坊主)、乃晩麥也、凡下種十月爲準、與大麥同時、其黃熟苅收時遲於麥十日許矣、諸國皆有之、而讃州丸龜之產爲上、爲饅頭色白、關東及越後甚黏、爲麩筋及索麪佳、肥後爲醬油佳、

古今醫統云、小麥晒乾簸了入缸中或桶櫃、以乾蓼蓋密不生蛾、

〔重修本草綱目啓蒙　十七麻麥稷〕小麥　マムギ(和名鈔)　コムギ(同上)　麥　トシコシグサ(古歌)　ムギ

麥一名布亥(事物異名)　䗃蛁子　芒穀(共ニ同上)　昧(丹鉛錄)　宿麥(爾雅翼)　首種(同上)　𪌉(卓氏藻林)　義麥(類書纂要)

小麥ハ苗大麥ヨリ小ク、穗モ亦小シ、穗ニ四稜六稜ノ別アリ、ソノ芒アル者ヲ、蜈蚣麥(閩書南産志)ト云、芒ナキ者ヲ火燒麥(寧蒲縣志)ト云、和名ボウズムギ、シロボウズ、アカボウズノ品アリ、佐渡ニテハシロボウシ、アカボウシト云、小麥ノ品凡五十餘アリ、小麥ハ飯ニ炊カズ、只磨シテ麵トナス、○中略增、此ヽニ小麥ハ苗大麥ヨリ小ク、穗モ亦小シト雖ドモ、小麥ハ葉狹ク莖細ク勁シテ、其苗大麥ヨリ高キコト二尺許、又小麥ノ品總テ五十餘種ト雖ドモ、コレハ稞麥ヲ混淆スルナリ、稞麥ハ數十品アレドモ、小麥ハ十品ニ盈タズ、○中略一種春蒔テ夏熟スル者アリ、土州及筑前等ニアリ、ハルムギト呼ブ、卽蘇頌春種モ夏便收ト云是ナリ、

〔延喜式　五齋宮〕正月三節料

小麥、胡麻、生栗子各六升、

凡諸國送納調庸、幷請受京庫雜物、積貯寮庫、支配雜用、○中略小麥十石、

〔延喜式　二十三民部〕交易雜物

山城國(中略)小麥卅石○中略　大和國(中略)小麥十一石七升三合○中略　河內國(中略)小麥卅五石○中略　和泉國小麥廿五石　攝津國(中略)小麥卅五石一斗○中略

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

小麥

義夜須、即稞麥なり　糯麥本朝食鑑、大麥の類にして皮なく、稞麥のごとし、飯にも麪糕にも作なり、或云、俗謂朝鮮麥と同種也、　二年艸田家の歌に、しづがふたとせぐさのひだり卷五月の頃はにぎ合にけり、麥の穂は左に捩て胎るが、五月には其穂房のしまり合ことを云也、　三時艸〇百姓囊下略

〔延喜式五齋宮〕凡諸國送納調庸并請受京庫雜物積貯寮庫支配雜用、〇中略大麥一石、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

山城國〇大麥三石中略　大和國〇大麥三石中略　河内國〇大麥三石中略　攝津國〇大麥三石中略　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔本草和名十九米穀〕小麥、女麴、完小麥一名麰子、仁諝音亡侯反黃蒸、唐小麥一名黃衣、已上四名出蘇敬注和名古。牟。岐。

〔倭名類聚抄十七麥〕小麥附麩　周禮注云、九穀者、稷、黍、稻、粱、菽、麻、大豆、小豆、小麥、和名古。牟。岐。一云末。牟。岐。

〔類聚名義抄一麥〕小麥コムギ、一云マムギ、

〔伊呂波字類抄古植物附植物具〕小麥コムギ、マムギ、九穀之一也、

〔易林本節用集古草木〕糩大麥コムギ　麩小麥クソウ

〔倭訓栞中編八古〕こむぎ　小麥也、收獲の時陰雨すれば、化して小蝶となる、述異記小麥爲飛蛾と書り、

〔本朝食鑑一穀〕小麥訓古牟岐

集解、小麥與大麥形色相似、而穗莖小、蒔苅遲與大麥同、其中早熟亦有、早者雖實多、味不美而少粘、遲者雖實少、味美而多粘、此亦數種、名品稍多、不可作飯食、惟作粉可用饅頭溫飩索麪麪筋、及中華蠻國之乾果用之者多、故民間多種小麥、以貨之者、不劣大麥也、

〔和漢三才圖會百三穀〕小麥　來又作秣　迦師錯梵書　古牟岐

本綱、大小麥秋種、冬長、春秀、夏實、具四時中和氣、故爲五穀之貴、地暖處亦可春種、至夏便收、然比秋種者、四氣不足、故有毒、北人種麥漫撒、南人種麥撮撒、北麥皮薄麪多、南麥反此、麥性惡濕、故久雨水潦卽

習はせたきものなり、

〔本草和名十九米穀〕大麥爲五穀 一名倮麥仁諝音果反、無皮麥、 一名麮麥仁諝音莫侯反、已上出陶景注、 一名青科麥、出蘇敬注、 項麥、相似而皮堅難舂、 雀麥相似小於項麥、已上出崔禹、 和名布止牟岐、

〔倭名類聚抄十七麥〕大麥 蘇敬本草注云、大麥一名青科麥、和名布土無岐、一云加知加太、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕按齊民要術云、青稞麥與大麥同時熟、其爲二物甚明、蘇敬謂大麥卽青稞麥、恐非是、

〔類聚名義抄一麥〕大麥フトムギ、一云カチカタ、

〔醫心方一〕大麥和名布止牟支

〔和漢三才圖會百三穀〕大麥 牟麥通作麰字 和名布止牟岐

本綱、大麥略○中有數種、鹹溫微寒作飯食有益、煮粥甚滑、磨麪作醬甚美、俗云大麥醬油是也、小麥多爲醬汁、故市肆大麥醬希有、

穬麥乃大麥中一種、皮厚而青色者、 赤麥、赤色而肥、略○中 糯麥、麥有粘者也、可以釀酒、稞音課、無皮穀、

按大麥有數種、而早者九十月下種、晩者十一月下種、皆四月黃熟、其苅也從立春至百二十日爲旬、故諺曰、麥百日中可蒔、三日中可刈也、性惡濕喜暖、諸國皆有之、以攝州尼崎之產爲上、大抵似小麥、而穗粒長穎少、凡去穎及粗稃、亦麩甚厚、和水少許舂之、日乾又和水舂之四五次、而一斛精麥可得六斗五升、略○中 糯麥用爲餈、此外有數種、

〔重修本草綱目啓蒙十七麻麥稻〕大麥 カチカタ和名鈔 フトムギ同上 オホムギ 一名特麥事物紺珠 飯麥建陽縣志 牙立事物異名 麰爾雅翼ニ同ジ

苗小麥ヨリ大ニシテ、其米ハ專ラ飯ニ炒キ、又麪トナスベシ、其品凡五十餘種アリ、

〔成形圖說十七五穀〕牟義古事記、和名鈔、順按に牟岐大小麥之總名也、

於保牟義延喜式 布登牟義、加知加多、以上和名鈔、或曰、加知加多は搗難の意なり、剝易は搗難に對ての名なるべし、皮麥、稞麥に對ていふ名なり 稞麥、牟

費ス故ニウヘズ味ハ常ノ大麥ノ如シ、

〔倭訓栞後編十六〕むぎ〇中略　大麥に荒麥といふあり、裸麥といふあり、一種紫麥あり、紺屋麥ともいふ、一種ねぢ麥あり、穗の形捻たり、一種つかず麥あり、皮殼脫し易し、一種糯麥あり、粘滑也、西國にて朝鮮むぎといふ、俗にあかはだかともいふ、小麥は白粉と稱するを佳とす、はまむぎは長壽麥也、住吉の濱に多し、

〔成形圖說五十七穀〕牟義〇中略

凡大麥の種類無慮三十餘品あり、穗の直立するあり、垂るあり、芒に亦長短あり、大麥は芒總て長く、其實亦太し、穗房に四角六角等の粒あり、角の多きほど取實も隨て夥し、〇中略

又麥種の中にも實知子(ミシリコ)は、地を蹈ず取實最饒し、凡麥粟の類、土地がらの美勞を妨ず、成實あるを地を蹈ずといふ、又些小麥(チンチクリ)は其實極て細し、小麥に似て味亦よし、又紫麥、紺屋麥ともいふ、禾穗紫色、染屋の紫染に用ふるものとあり、

〔鹽尻六十一〕糯麥和俗アカハダカムギ近世朝鮮より其種を傳へ來るものいとよし、西國の民朝鮮麥といふ、麥切にして味美也、

〔東海道名所記四〕宿川〇藤を出れば、畠に高野麥とて、一種穗のむらさきなる麥のはへてみえければ、男、

藤川や畠の麥に風ふけばたちて音なきむらさきの波

〔昆陽漫錄〕麥

豐後國武田の川中の島に、年々自然と生ずる麥あり、一民取り來りて作るに實のり甚多くして、農民の助になれるによりて、救書懇求して、此麥を得て、官へ稟し、國々へやりて作らせ試みるに、地に應ずる所にては、常の麥とは、格別實多し、地に應ぜざる所は、常の麥に同じと云ふ、よく作り

麥初見

〔日本書紀 神代一〕一書曰、〈○中略〉天照大神、復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、〈○中略〉陰生麥及大豆小豆、天熊人悉取持去而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生、可食而活之也、乃以粟稗麥豆、爲陸田種子、

〔古事記 上〕速須佐之男命、〈○中略〉殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、〈○中略〉於陰生麥、〈○下略〉

麥種類

〔本朝食鑑 一穀〕大麥〈訓於保牟岐〉

釋名〈源順和名、訓布土無岐、一云加知加太、一名青科麥、必大(平野)按、青科未詳、恐是青稞麥乎、今亦種之、俗謂波多加牟岐、〉

集解、麥者農家之所常食、而以今年夏之麥、迄來六七月而食之、年年若斯則不至飢寒、而田夫最可先務者也、麥之種類多品不減稻類、而有早中晩、大抵早者不佳、中晩佳者多、俗稱尋常之麥曰荒麥、無殼者曰稞麥、荒麥有六角、黑、白、日向、三月等名、稞麥有京青赤等名、而不可盡記之、〈○中略〉一種有麥之極小者、俗稱知牟知久利、狀小似小麥而圓肥白色、味亦佳、近代多產于海西地、江東移種希有、然不爲全佳、土地不應之故乎、一種有紺屋麥者、禾穗紫色粒小、味不佳、以其紫色殊他而愛之、紺屋者染藍之家、今紺色出藍、又染青紫紅黃之類、故以斯麥染紫、民間號紺屋麥、一種有餠麥者、卽糯麥也、其狀尋常之麥而粘、其味亦美、造餠亦稍好、彼烏麥者雀麥、不足用之、此類不可勝計焉、

〔大和本草 四穀〕麥　齊民要術曰、聖人於五穀最重麥禾也、典籍便覽曰、麥比他穀、隔歲種、故云、麥秋種、冬長、春秀、夏實、備四時之氣、凡穀新舊不接時、麥最先熟、民食接續、所賴甚重、故春秋獨書無麥、麥ハ五穀ノ中稻ニツギテ最民食ヲ助ク、殊ニ夏ノ末舊穀ノ盡ル時、民ノ飢ヲ救フ、民用ニ甚利アリ、本艸士良曰、大麥爲麪勝於小麥無躁熱、大麥ニ種類多シ、糯モアリ、近年朝鮮ノ種ヲ世間ニツクル、大麥ナレドモ小麥ニモ似タリ、皮ナクシテ如小麥、爲飯爲麪爲糕、麪ヲ打テ切麪溫飩トス、河漏ヲ食フ法ノ如クニス、俱ニ佳シ時珍云、大麥亦有粘者名糯麥、コレ近年朝鮮麥ト云モノナルベシ、爲麪如小麥、莖葉大ナリ、長者麥アリ、一本ヨリ數十莖生ズ、間遠クウヘ、糞ヲ多ク布ベシ、農家ニハ力ト糞ヲ

しは、高き義也と、萬葉集抄に見えたり、キといひしは即芒也、其芒の高きを云ふ也、高しとは猶長しといふが如くなり、倭名鈔に、大麥をばフトムギ、一にカチカタといふ、小麥をばコムギ、一にマムギといふと註せり、フトは即太也、カチは搗也、カタは硬也、これを搗つに硬きを云ふなり、コとは即小也、マとは眞也、古の俗には、小麥をもて眞麥となせしと見えたり、又麥奴はムギノクロミ、稈はムギカラ、麥莖也、麩はコムギノカス、小麥皮屑也と註したり、麥奴とは、大麥にもあれ、小麥にもあれ、穗の熟しなむとする時に、上に黑黴あるものをいふ、クロミとは黑實也、即今俗にクロボといふは是也、

〔倭訓栞後編十六〕むぎ　麥を訓せり、聚芒の義也、〇中略和名抄に大麥をふとむぎ、小麥をこむぎ、穬麥をからすむぎ、蕎麥をくろむぎとよめり、今穬麥をも餙草をも弘法むぎといふ、かたつきむぎ西行の歌に見ゆ、

〔萬葉集十四東歌〕相聞
久敝胡之爾、武藝波武古宇馬能、波都波都爾、安比見之兒良之、安夜爾可奈思母、
或本歌曰、宇麻勢胡之、牟伎波武古麻能、波都波都爾、仁必波太布禮思、古呂之可奈思母、

〔覆醬續集二〕隴麥
麥秋足民望、村落歌擊壤、陸畝分黃雲、野風漲靑浪、杜叟巧作行、甕夫便助犇、誰家收雞鳴、雞鳴麥名也更使醯酒釀、

〔本朝武家根元中〕出陣幷武者押の辨
門出の飯の上に、大麥を三粒をく、麥に勝方といふ名ある故也、

〔倭訓栞中編八〕こぞ　〇中略　こぞ草は、麥をいふといへり、
紅葉ばのちるやちらぬに種まきて卯月さ月にかるはこぞくさ

古事類苑

植物部十三

草二

麥名稱

〔倭名類聚抄 十七 稻穀〕麥 附稍 陶隱居本草注曰、麥 莫革反、和名牟岐、今按大麥小麥之總名也、故別擧之、 五穀之長也、

〔類聚名義抄 一麥〕麦 音脉、ムギ、 麥麥 正

〔伊呂波字類抄 无 殖物 附殖物具〕麥 ムギ 俗作麦 穡 同稻處種麥也

〔下學集 下 草木〕麥 ムギ 玉篇云、俗作麦、

〔易林本節用集 波 草木〕麥 バク ムギ

〔段注說文解字 五下〕麥 芒穀、有芒朿之穀也、稻亦有芒、不偁芒穀者、麥以周初二麥一夆箸也、鄭注大誓引禮說曰、武王赤烏芒穀應、許本禮說、 秋穜厚薶、故謂之麥、薶麥疊韻、夏小正九月樹麥、月令仲秋之月、乃勸種麥、毋或失時、麥以秋種、尚書大傳淮南子說苑皆曰、虛昏中、可以種麥、漢書武帝紀謂之宿麥、 麥、金也、金王而生、火王而死、程氏瑤田曰、素問云、升明之紀、其類火、其藏心、其穀麥、鄭注月令云、麥實有孚甲、屬木、許以時、鄭以形、而素問以功性、故不同耳、 从來、有穗者也、也字今補、有穗猶有芒也、有芒故从來、來象芒朿也、 从夊、夊、思隹切、行遲曳夊夊也、从夊者、象其行來之狀、莫獲切、古音在一部、 凡麥之屬皆从麥、 麰 來麰 逗 麥也 見于傳 从麥牟聲、莫浮切、三部、

〔日本釋名 下 米穀〕麥 他の穀は一度からを去てよし、麥はからを去て後、度々皮をつきむきて後、食とする故にむきと云、

〔東雅 十三 穀蔬〕麥ムギ 舊事紀には、保食神の臍尻に麥豆を生じ、陰下に小豆麥を生せりと見え、古事記には、大宜津比賣神の陰に、麥を生せしと見えたり、ムギといふは、義詳ならず、古語にムと云ひ

方貴賤常食也、上古以來至李唐五季、北方此物至少、平民不得常食也、鄂爾泰授時通考載丘瓊山言曰、宋太宗詔江南之民種諸穀、江北之民種秔稻、又眞宗朝取占城稻種、散諸民間、今世江南之民皆雜蒔諸穀、江北之民、亦兼種秔稻、昔之秔稻惟秋一收、今又有早禾焉、二帝之功利、及民遠矣、然則趙宋以前、北方之王公士民、皆以黍稷供常食、而以稻爲佳品珍膳而已、本草謂稻卽人所常食者、李時珍者產于南方、而不知北方以是爲珍膳也、夫北方則皆以粟爲民命、故稷總稱禾、又稱穀也、卽指粟而已、堯舜時棄爲田正、稱曰后稷者、粟雖下品、以民之常食而命之所賴也、且古五穀不遍祭、以稷該之者、亦此義也、說文以稷爲五穀之長者、其義本于此、近讀張習孔雲谷臥餘、而益知北方以粟麥爲常食、而稻米至少也、曰嘗疑孔子食稻衣錦之言、謂居喪固不御華美、豈能絕粒不食乎、蓋予江南人無貧富貴賤、皆飯粳米、後歷抵北土、始知民間皆飯粟麥、惟貴者方購粳米爲飯、故孔子以稻對錦而言也、且春秋時漕運未通、稻米尤爲難得、由此觀之、則古之中國無稻米、斷然而可知也、宋應星天工開物曰、凡穀無定名、百穀指成數言、五穀則麻菽麥稷黍、獨遺稻者、以著書聖賢起自西北也、此亦道中國之無稻也、可以幷見吾之言有證焉、

右辨中國無稻米一條

牛肉を以て上食とし、其の餘は麥、粟、稗を以てす、人の生命食にあり、吾國の米穀味甘くして淡く、膏油あつて身體を潤す、また酒に造りて美味、他邦米ありとも、日本米の如くならず、酒に造りて夏月腐り、味を變ず、故に燒酒とす、味辛し、糯米亦他になし、支那月餅(エペイ)と云ふ者あり、八月十五夜に造る餅なり、予(○司馬江漢)長崎に遊ぶ時、之を喰するに餅にあらず、今云ふ落鴈の如し、米の粉を熬りてつくねたる物なり、吾國の如く糯米なき事知るべし、又曰く、天竺赤道に近き諸島、サーゴボームと云ふ樹の皮を製して黍の如し、之をサゴ米と云ふ、其の餘麥を以て食とす、吾國の禁にして他邦に船を出ださず、故に他國の事を知る者鮮し、吾等蘭學を以て之を知る、

余江漢曰く、○中略山中米なき地、病者あれば、米を以て藥とす、効驗あり、都會の人常食とす、

〔傍廂後篇〕無病長壽の靈藥

食料の最第一にて、不死の靈藥の長たる物は米なり、人々一日に三度食ふ故に、たゞ飢渴をしのぐ爲のみと思ふは、大なる誤なり、第一は、饑を凌ぎ、氣根を強くし、腎精をまし、力量をそへ、手足を健にし、いきほひ盛なるは米のよき故なり、皇朝人の長壽にて武勇勝れたるも、異國人の短命にて非力なるも、米のよしあし、諸の食料なべての藥品などは、このかたはしにも及ばず、酒菓子すべての物、飯の上にいづることあたはず、何れも十日、廿日、一年、二年なしとて、一命にかゝはらず、米食は半日くはざれば、氣力おとろへ、一日くはざれば、大病の如く、三日くはざれば、死人のごとくなり、いと尊き靈藥にてぞありける、

〔黍稷稻粱辨〕蓋中華之地、江北少稻、故貴賤常食黍稷之雜穀、又或雜之以彫菰薏苡之類、而給食之不及也、江南常食稻米、貴賤共不食麥粟也、古者江南爲中國之外、而其中國之人、賤者不得食稻米、唯天子有稻人稻田使者之官、掌供於祭祀禮食耳、○註略論語曰、食夫稻、衣夫錦、於汝安乎、以稻對錦、且三年不食者、則佳品珍膳而非常食也、○註略朱氏詩集傳曰、稻卽今南方所食稻米也、可見稻者南

稻雜載

運送せしめて、舊所の倉に藏めらる、この時にして事每に、公私となく大小となく、慶祥すべてあまりあり、かの大福米の名のむなしからぬも奇といふべし、〇中略

文政八年七月朔　琴嶺瀧澤興繼謹誌

〔令義解三田〕凡官田應役丁之處、每年宮內省、預准來年所種色目、及町段多少、依式料功、申官支配、謂色目者、稻白黑爲色也、稻名爲目也、

〔令義解八廐牧〕凡廐、〇中略日給細馬、粟一升、稻三升、謂稻者半穅米、故稱升也、豆二升、鹽二勺、中馬、稻若豆二升、鹽一勺、駑馬稻一升、

〔延喜式五齋宮〕凡諸國送納調庸、幷請受京庫雜物、積貯寮庫、支配雜用、〇中略馬秣稻百廿束、太神宮司所充、三時祭別卌束、

〔日本書紀十五顯宗〕二年、是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛馬被野、

〔日本書紀二十四皇極〕元年五月丁丑、熟稻見、

〔日本書紀二十七天智〕三年十二月、是月淡海國言、坂田郡人小竹田史身之猪槽水中、忽然稻生、身取而收、日々到富、栗太郡人磐城村主殷之新婦床席頭端、一宿之間、稻生而穗、其旦垂頴而熟、明日之夜更生一穗、新婦出庭、兩箇鑰匙自天落前、婦取而與殷、殷得始富、

〔扶桑略記五天武〕七年三月、因幡國貢稻一莖中有八千粒、

〔日本書紀二十九天武〕七年九月、忍海造能麻呂獻瑞稻五莖、每莖有枝、由是徒罪以下悉赦之、　八年、是年〇中略因幡國貢瑞稻、每莖有枝、

〔續日本紀一文武〕元年九月丙申、京人大神大網造百足家生嘉稻、

〔三代實錄三淸和〕貞觀元年十月廿八日庚戌、上野國獻嘉禾一莖三十穗、兩岐稻一莖九穗、

〔春波樓筆記〕吾日本、米穀を以て食の第一とす、世界の諸邦此の米かつてなし、五十度外にしては、

簗川へ移され給ひしとき、彼大福米をも簗川へ運送せしめ給ひしに、その米は近きころ迄、もとのまゝにてありけるに、このとき見れば、蟲ばみ朽ちて、米粉の如くになりしもの、既になかばに及びしかば、その朽ちたるを篩ひ袪て、そのまたき米をのみふたゝび瓶に納めさせて、簗川におかせ給ひき、かくて文政元年の冬十一月廿一日、松前家の勘定新役の者、倉庫中なる米穀を展撿することあるにより、大福米の瓶を見て、未だその事をしらず、則これを主公に訴ふ、主君云々と說き示させて、封をきらせて見給ふに、實に篩ひわけしより、十年にあまれども、一粒も損することなく、あまつさへいたく殖えまして、瓶七八分目になりにたるを、章廣朝臣見そなはして、且驚き且悦び、次の年の春のはじめに、その米を幾合か簗川より齎らして、老父君道廣朝臣へ云々と告げ給へば、老侯怡々斜ならず、昔よりして大福米の瓶の封皮をゆくりなく披く事あるときは、吉事ありとか傳へ聞きたり、しかるに吾家舊領にはなれし時、この米過半減少せしに、今又殖えしは、故こそあらめ、賀すべし〳〵と宣ひし、そのよろこびの餘りにや、このころあわたゞしく使者を以て、己が父にその米一包を贈り給はり、この米は箇樣にと、その來歷を示させて、件の瓶に附けおかれし舊記錄、おちもなく寫しとらして給はりければ、家嚴しきりに嘆賞して、かゝれば今より遠からず大吉事あらせ給はん、いにしへもさるためしあり、その事どもは云々と、則上に錄したる天智紀をはじめとして、和漢の故事を抄錄しつゝ、をさ〳〵ことほぎまゐらせし、これよりの後わづかに三稔、文政四年の冬十二月七日に至りて、かのおん家にゆくりなく、こよなき大吉事あり、松前の舊領を元のごとくに返させ給ふ台命を蒙り給ひて、おなじき五年四月十五日に、志州章廣朝臣父子(是より先に嫡男千之助殿任官あり、主計頭にならられたり、)もろともに歸國の御暇を給はりて、同月廿八日に、江戸の邸を發駕あり、既にして五月下旬に、松前の城に著き給へば、君臣上下おしなべて、みなとし來の愁眉を開きて、笑坪に入らずといふものなし、これに依りて大福米をも、又松前へ

言上異端狀
管豐前國京都郡雨米事
副進
彼國解文一枚　同國京都〔○都下恐脫二郡字一〕解文一枚
彌勒寺講師長祐牒狀一枚　雨米一裹〔○中略〕
長德五年正月一日　正六位上行大典酒井宿禰

〔百練抄四一條〕長保元年三月八日、太宰府進二雨米一裹一、令二諸道勘申一、

〔兎園小說七集〕松前大福米

いにしへより仁人義士貞婦孝子の天感によりて、或は米穀或は錢帛の、不慮にその家に涌出せし事、和漢にためし少からねど、正しく國史に載せられしは、書紀天智紀云、三年冬十二月、淡海國言、坂田郡人小竹田身之猪槽水中、自然稻生、〔○中略〕これらは遠く見ぬ世の事にて、いと疑はしく思ひしに、近ごろ松前の藩中に、よくこれと似たる事あり、その由來を傳へ聞くに、寛永十七年春二月廿二日、松前の家臣蠣崎主殿友廣の家に、米數升涌き出でけり、是よりして或は一升或は二升、日々に涌出せずといふことなし、かくてこの年の夏四月下旬に至りて、その事やうやくやみしかば、友廣あやしみ且祝して、大福米と名づけつゝ、主君公廣朝臣に進上して、ことのよしをまうしゝかば、人みな驚嘆せざるはなし、主君すなはちその米數斗を受けとらして、一箇の瓶にこれを納め、又その事を略記せしめて、倉廩中に藏め給ひ、その餘の米は、皆こと〴〵く友廣に取らせ給ひぬ、これより後の世に至り、不慮にその瓶をひらかせて、その米を見給ふに、絕えて蟲ばみ朽つることなく、且遠からずゆくりなき吉事ある事もありけり、かゝりし程に、當主章廣朝臣〔公廣朝臣より八世歟〕家督の後、文化四年春三月廿二日ゆくりなく松前の采地を召しはなされて、奥の伊達郡

〔釋日本紀 八述義〕日向國風土記曰、臼杵郡内知鋪郷、天津彥火瓊瓊杵尊、天降於日向之高千穗二上峯時、天暗冥晝夜不別、人物共通、物也難別、於玆有土蜘蛛、名曰大鉗、小鉗、二人奏言、皇孫尊以御手拔稻千穗爲籾、投散四方、必得開晴、于時如大鉗等所奏、搓千穗稻爲籾投散、卽天開晴、日月照光、因曰高千穗二上峯、後人改號智鋪、

〔延喜式 八祝詞〕大殿祭〇中略屋船久々遲命、是木靈也屋船豐宇氣姬命登、是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世產屋、以辟木束稻置於戸邊、乃以米散屋中之類也、以御名乎波奉稱利氐、皇御孫命乃御世乎、堅磐常磐爾奉護利、〇下略

〔倭訓栞 前編四宇〕うちまき　散米をいふ、大殿祭の祝詞の註に、今世產屋、以辟木束稻置於戸邊、乃以米散屋中といひ、四時祭式の大殿祭條に、御巫等散米、酒、切木綿、殿內四角退出と見えたり、辟木は、屋船久々能遲命、是木靈也にあたる、束稻は、屋船豐宇氣姬是稻靈也にあたる、散米は、新嘗に枉津日神の入來らんを饗和して去らすため也、もと天孫日向高千穗の峯に天降りたまひし時より事起れる事、日向風土記に見えたり、產屋の打撒の事は、紫女日記に見え、客忰の打撒の事は、源氏物語に見えたり、

〔政事要略 二十六年中行事〕同日〇十一月中丑日　宮內省奏御宅田稻數事
同氏〇多米宿禰系圖云、志賀高穴太宮御宇若帶天皇〇成務御世、小長田命以米入大籠、而獻天皇也、因改命宗賜多米連姓、

〔本朝世紀〕長保元年三月七日庚申、午後左大臣、內大臣、著左仗座、召神祇官幷陰陽寮仰云、駿河國言上解文云、日者不字御山燒由、何祟者、卽卜申云、若恠所有兵革疾疫事歟者、此間、太宰府貢上雨米一裹、涌出油一瓶等奏聞、卽上卿覽了、下給辨官文殿已了、其解文曰、
太宰府解　申請官裁事

日依和市之不定、有衆庶之飢饉云々、太不可然、所詮新穀出現之程、任弘安之例、以宣旨一斗宛錢百文可交易者也、今度之此難不可准弘安例、以寛宥之儀如此所被下定也、於違犯之輩者、可有嚴衆議候也、

〔東寺百合古文書 三十二〕米和市事

四石七斗三升七合 小斗定 和市百文別六升充　代七貫八百九十文 三百九十文相違

巳上上使納分同注進分

一代官注進和市事

米四石七斗三升七合 小斗定 和市百文別一斗一升八合歟　代四貫二十九文 三貫八百六十一文相違

巳上米分 〇下略

〔下古京町々所藏古文書〕精撰追加條々

一以八木賣買停止之事 〇中略

永祿十二年三月十六日　彈正忠 朱印

〔集古文書 三十二 下知狀〕天正十二年下知狀 所藏不詳

米之坐事、脇賣於猥者、前々より今以如有來、可加成敗之狀如件、

天正十二年四月七日

上下京 米之座中

〔七十一番歌合 中〕卅五番　左　米賣

山陰や木の下やみのくろ米の月出てこそしらげ初けれ

戀せじと神の御前にぬかづきてさんくの米の打はらふ哉

〇按ズルニ、米賣買ノ事ハ、產業部商業篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

米賣買

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂〇中略尾張粔、〇中略鎭西米等、

〔拾遺和歌集物名七〕おはりこめ

池をはりこめたる水のおほかればいひのくちよりあまるなるべし　すけみ

〔張州府志海東郡二十三〕土產　戸田米　出戸田村、古今以尾張米、爲日本第一、就中戸田米、充邦君供御、故擅其名、

〔一話一言三十一〕諸家深秘錄抄

御當家御代々諸事始之事

一寛永九年ヨリ奥州仙臺ノ米穀始テ江戸ヘ廻ル、故ニ今江戸三分ノ二ハ、奥州米ノ由、其比仙臺ニテハ、米ノ直段金壹兩ニ七石四斗程仕リシト也、但今程ハ金壹兩ニ貳石四斗程ノ由也、

〔本朝世事談綺雜事五〕仙臺米

奥州米江戸入津の始は、寛永九年なりこれ年々おこたらず來ると、諸家深秘錄にみえたり、

〔雲州消息中末〕宮御封米事

右如仰早可下遣之由可仰遣綱丁所、他國米糠粃相交云々、此國〇伊豫之米殊加精好、〇中略

即日　伊豫守藤原

〔延喜式東西市四十二〕米廛、〇中略　右五十一廛東市

米廛〇中略　右卅三廛西市

〔延喜式雜五十〕凡王臣家、及諸商人船、許出入太宰郡内、但不得自此擾勞百姓、及糴米買馬、若有違者、依法科罪、

〔東寺執行日記〕元德二年五月二十日、洛中米穀和市之事、右穀者民之天、國之本也、頃年豐饒之處、近

米產地

增〇中略ヤケゴメト名クル者アリ、城趾ニ多シ、黑色ニシテ焦米ノ如シ、和州信貴山、奥州二本松ノ長者倉、阿州一宮長門守成祐墟、上總萬木ノ墟等ニアリ、漢名黑米ト云、秋燈叢話云、康熙甲子、武昌郡廣福坊堀地得黑米數十斛、堅如石、炒研爲末、治膈證如神、傳爲僞漢陳友諒積粟所、格致鏡原引伽藍記云、西方佛沙伏國有昔尸毘王倉庫、爲火所燒、其粳米焦、然於今猶在、若服一粒、永無瘧患、彼國人民須以爲藥ト云ヘリ、

〔毛吹草三〕山城　山城米　大和　山邊米　河內　石戶米　近江　膳所米　出羽　庄內米　播磨　龍野米　備前　石戶米　伊豫　一本瀨米

〔本朝食鑑穀一〕稻

米之赤白紫烏堅鬆大小香臭不同、而以白堅大爲上、以赤紫烏鬆小爲次、香臭最下品也、故五畿濃尾之米爲本邦第一、其土肥沃豐饒、他國不相及、近紀勢播四國中國九州次之、其中肥前日向海西之南境、地和暖、土潤沃、而米肥白堅大、此亦九州之最、故肥有一年再熟之稻、而其穭漸爲民間之食、亦是不及五畿濃尾之米也、隅薩對馬之米、赤烏小鬆之類而最惡矣、參遠次于尾陽、其米雖堅實而不肥大、駿豆亦次之、自相武至關東諸州、亦不及駿豆、其中陸奥之土地雖豐饒廣遠、而不枯堅、米亦雖白潤肥大而不堅實、然賦稅多以賑江東、故江都米穀之貴賤、悉據奥之豐凶也、丹波丹後但美、若者京師之山北、其土地雖稍美、不及江紀播乎、能賀三越飛信甲、亦北邊山鄙之瘠土、米穀粗惡價亦卑賤也、於茲可知本邦諸州米穀之大槩若斯而已、

〔雍州府志六土產〕米穀　近江丹波播磨之所產爲宜、自所々齎來於京師米店賣之、

〔續古事談二臣節〕宇治殿〇藤原賴通平等院ツクリテ庄園ヨセラレケルトキ、所々ノ米ヲスコシヅヽ、ナガビツノフタニ、スナゴノヤウニ、マキナラベテ、ソノ上ニチヒサキフダヲツクリテタテヽ、ソノ所ノヨネトカキテ、モチテマイリテ、御覽ゼサセケルニ、河內國玉櫛ノ庄ノ米一ニヨカリケリ、

本綱、久入倉陳赤者名陳倉米、有火蒸治成者、有火燒治成者、故名火米、北人多用粟、南人多用秔及秈、年久者性涼、下氣除煩渴、調胃止洩、治霍亂大渴、

按陳倉米用十年以上者、疫痢禁口痢、及止嘔吐、藥中入用、然倉米值四五月濕熱、多蛀蠹穿孔、俗稱宇登、凡陳臭米曰紅、秩同 貯官庫爲兵粮者、浸黃栢汁蒸治之、經數百年亦如新、凡新米爲飯不殖、其味厚美、病人食之消化遲、惟堪爲粥、陳米飯多殖味淡、病人食亦易化、

〔重修本草綱目啓蒙十七造釀〕陳廩米　フルゴメ　ヒネゴメ　一名老米長松附方　老陳米食物本艸　黃倉米附方　廩康熙字典

年久シク倉廩ニ貯ヘ置タル米ナリ、糠ヲ夫ラザル時ハ、數十年モ貯フベシ、久シキ時ハ漸ク黃色ヲ帯ブ、

〔倭名類聚抄十七米〕糄。米。　唐韻云、糄音與篇同、今按俗云燒米、夜木古女、可用糄米二字、燒稻爲米也、孫愐切韻云、糄方典反、新粳燒而舂之得米也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕按説文無糄字、古蓋用扁字、造糄、以新穀未脫秠者煑過、舂之令扁、簸去麤糠也、

〔食物知新一穀〕糄米切韻

釋名、燒米ヤキゴメ和名　孫愐切韻云、糄方典切、新米燒而舂之得米也、制作和漢一也、以名燒米、氣味、甘温無毒、又曰難消

主治、益氣力養精、糄米不載本草、但汪穎曰、新米不益人動風氣云々、蓋糄米乃取未熟者、少炒舂之生食、非善食、不可以食脾胃虛弱及小兒病人、

〔名物六帖補飮膳三〕。燋米ヤケゴメ。

〔重修本草綱目啓蒙十七麻麥稻〕粳

如くなるをいふ也、

〔段注說文解字七上穀〕糳、糲米、一斛舂爲八斗曰糳、(此糲米亦兼粟米稻米言也、詩生民召旻音義、左傳桓二年音義、皆引字林、糳子沃反、糲米一斛舂爲八斗也、與九章算術、毛詩鄭箋皆合、然則許在張揖之後鄭呂之前、斷無乖異、各本八斗譌九斗、轉誤顯然、經傳多假鑿爲糳、)从毇丵省聲、(舊有者字、今依之、篆體減一畫、則各切、古音在二部、)

〔九章算術二〕粟米(以御交質變易)

粟米之法(凡此諸率、相與大通、其特相求、各如本率、可約者約之、別術然也、)　粟率五十(略○中)　糳米二十四

〔九章算術音義〕糳米(音作、精於粺也、凡粟五斗得糳米二斗四升、故粟率二十四、春秋左氏傳曰、粱食不糳、俗作鑿、)

〔倭名類聚抄十七米〕米(略○中)　唐韻云、糈(先結反、漢語抄云、古○米○佐○木、一云阿○良○毛○止、)米麥破也、

〔伊呂波字類抄古飲食〕糈(コメサキ、アラモト、米麥破也、)

〔和爾雅六米穀〕米糈(タタケゴメ、碎米)　糈(コメノスリクス、米屑也)

〔書言字考節用集六服食〕糈(アラモト、米糈、糝糈)

〔和漢三才圖會百三穀〕穀(略○中)

米(略○中)　米麥破者曰糈、(和名古女佐木、一云阿古毛土、俗云小米、)

〔東雅十三穀蔬〕穀モミ　倭名鈔に、(略○中)糈は米麥破也、漢語抄にコメサキ、一にアラモトと註せしは、(中略○)コメサキとは、コメはヨネの轉語にて則米也、サキは裂也、其碎け裂けしを云ふ也、卽今俗に粉米(コゴメ)といふ者是也、アラモトの義は未詳、

〔本草和名十九米穀〕陳○廩○米○(陶景注曰、入倉陳赤者也、)一名粢(稷米在陳廩米條、音咨、)紅米、(解工反、陳者紅臭之米名曰紅米、已上出崔禹、)和名布○留○岐○與○禰、

〔類聚名義抄七米〕紅(音紅、陳臭米、)

〔宜禁本草乾五穀〕陳倉米　軍倉中陳赤者、用釀醋妙、鹹酸温、下氣除煩渴、調胃止泄痢、補中益氣、(熱冷)食卽(熱冷)、衍義曰、陳者性冷、頻食自利、與經所說稍戾、煮亦無膏、

〔和漢三才圖會百三穀〕陳倉米　陳廩米　老米　火米　(俗云大比禰古米)

〔吾妻鏡 六〕文治二年正月廿一日庚子、法皇○後白河今年六十御寶算也、仍可被行御賀之旨、爲被申行之、上絹三百疋、國絹五百疋、麞牙等、○中略所令進上京都也、　六月一日丁未、今年國力凋弊、人民殆泥東作業、二品令憐愍給之餘、仰三浦介、中村庄司等、相模國中爲宗百姓等、給麞牙、人別一斗云云、

〔新撰字鏡 米〕粺 傍卦反、去、與彌志良久、　粳 稉 同、柯彭反、饘、志良介米、

〔真本新撰字鏡 十二諸食物調饌〕䊫米 米志良久　精 柞 粺 □ 糲 晹 䏤 粟 穀 入字米志良久

〔倭名類聚抄 十七米〕粺米　楊氏漢語抄云、粺米 粺音傍卦反、去聲之輕、與把同、和名志良介與禰、 精米也、

〔箋注倭名類聚抄 九稻穀〕按之良介與禰、謂令白米也、今俗呼下白米、之良介、舂米令白之義、新撰字鏡、晹舂也、治米也、志良久、○中略　按九章算術云、糲米三十、粺米二十七、謂舂糲三斗得粺米二斗七升也、五曹算經同、說文、粺毇也、又云、毇米一斛舂爲九斗也、今本說文九斗誤八斗、鄭玄詩箋、糲十粺九、亦謂是也、

〔伊呂波字類抄 志飲食〕粺 シラケヨネ精米　精 同

〔書言字考節用集 六服食〕粺米 シラゲ 順和名、精米也、　精米 同　白米 同

〔九章算術 二〕粟米 以御交質變易

粟米之法 ○註略　粟率五十 ○中略　粺米二十七

〔九章算術音義〕粺米 傍卦切、精於糲也、凡粟五斗得粺米二斗七升、故粟率五十而粺率二十七、詩曰、彼疏斯粺、鄭康成注云、米之率糲十、粺九、糳八、侍御七、

〔倭名類聚抄 十七米〕糳米　唐韻云、糳 臧洛反、與作同、楊氏漢語抄云、糳米萬之良介乃與禰、 精細米也、

〔箋注倭名類聚抄 九稻穀〕按末之良介乃與禰、眞精米也、謂最令白之米也、今俗呼上白米者是也、

〔東雅 十三穀蔬〕穀 モミ　倭名鈔に、○中略漢語抄に、糳米はマシラケノヨネ、精細米也、粺米はシラケヨネ、精米也といふ、烏米一名糲米は、ヒラシラケノヨネといふと註せしは、シラケとは精也、シラとは白也、ケは助詞也、マといふは眞也、精なるをいひ、又次ぐをヒラといふ、ヒラとは猶平等といふが如し、尋常の

ど原作ニなす今據ニ一本ニ改、くれて侍りしをこそは、とかくにし侍しか、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年三月十九日癸卯、今曉三品親王〇宗尊關東御下向也、〇中略午剋著御于野路驛、〇中略

御雜事

米卅石、白米二石、〇宣旨斗定中略　贄殿入物、上白米三斗、宣旨斗、〇中略

入夜著御于鏡宿、佐々木壹岐前司泰綱儲雜事云云、〇中略

御雜事

能米卅石、白米二石、〇宣旨斗定中略　贄殿入物〇上白米下略

〔伊呂波字類抄 志疊字〕麞牙。

〔易林本節用集 志食服〕麞牙シヤウガ米名

〔書言字考節用集 六食服〕麞牙シヤウガ シラゲ 白米似ニ麞牙、故云爾、

〔倭訓栞 後編九〕しやうが〇中略　麞牙は東鑑に見えたり、米の事也といへり、

〔玉造小町子壯衰書〕女答予曰、吾是倡家之子、良室之女一作娘焉、壯時憍慢最甚、衰日愁歎猶深、齡未及二八之員、名殆兼三千之列、〇中略　衣非蟬翼不著、食非麞牙不飡、

〔南畝莠言 上〕よく精たる米を麞牙といふ、今俗にも猿の牙のごとき米などゝいへり、按ずるに、日本紀略花山院寛和元年三月十八日の紀に、施以麞牙百斗、又明月記源平盛衰記等にもみえたり、

〔白氏長慶集 律詩十六〕官舍閑題

職散優閑地、身慵老大時、送春唯有酒、銷日不過棊、祿米麞。士亙切牙。稻、園蔬鴨脚葵、他餐仍晏起、餘暇弄龜兒、龜兒小姪名

〔日本紀略 八花山〕寛和元年三月十八日壬戌、少納言外記等、參會六波羅密寺、修善根、施以麞牙百斗、

〔執政所抄上二月〕根本中堂三番頭事二日被上也

佛供白米十石

件白米御庄年貢也、將又北陸道御封也、年預下家司成下文、出納等兼日舂精遣之、

〔東大寺正倉院文書三十七〕紀伊國天平二年大稅帳

紀伊國司解　申天平二年收納大稅并神稅事

合七郡天平元年定大稅稻穀肆萬伍仟貳伯捌拾柒斛貳斗參升伍合〇中略

雜用捌阡陸拾束

年料白米參伯漆拾壹斛肆斗料漆阡肆伯貳拾捌束

〔東大寺正倉院文書十五〕尾張國天平六年正稅帳

尾張國司解　申收納天平六年〇以下數字虫損

合八郡天平五年定穀貳拾伍萬捌阡肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合〇中略

年料舂白米漆伯肆拾壹斛　充穎稻壹萬肆阡捌伯貳拾束

納大炊寮酒料赤米貳伯伍拾玖斛　充穎稻伍阡壹伯捌拾束

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子行大會事〇中略

一僧供　導師一人供料　白米二斗一斗飯料一斗餠料　粳米一斗八升餠料

〔空穗物語俊蔭〕うばいとつかいいよきてづくりのはりのみゝいとあきらかなるに、しなのゝはつりをいとよきほどにすげて、お〇お原脱、今據一本補、うなのきぬにぬひつくとみ給へし、それだにいかがはべるだに、それにかゝりてこそは、いきめくらひ侍れ、たちぬる月にもおもとの御ことの給かたらはむとて、まかりたりしかば、しろきよね三斗いつます、たち〇たち原作かち、今據一本改、かたなどな〇

已上佛供料乃米等、榎並御庄年貢内也、將又北陸道御封例米諸國御封也、舊年ニ預成下文下知出納等令致其勤也、

〔養和二年記〕養和二年三月十四日甲申、今日三位中將殿御祈料能米五石請取了、飢饉年無懈怠下行之條、偏諸佛諸神御沙汰也、

〔易林本節用集波衣食〕粕(ハク)米(マイ)

〔書言字考節用集六服食〕白米(ハクマイ)又云精米

〔延喜式一四時祭〕鳴雷神祭一座
白米五斗、糯米二斗、大豆小豆各一斗、

春日神四座祭
釀神酒并駈使等食料前祭、請之
黑米四石、○中略白米三斗六升、○中略
右祭料依前件、春二月、冬十一月上申日祭之、○中略物忌一人食、日白米一升二合、鹽一勺二撮、預神部二人、別日白米一升六合、鹽一勺六撮、仕丁二人、常陸國鹿島神封仕丁別日黑米二升、鹽二勺、

〔延喜式十五内藏〕雜染
藍染綾一百疋、○中略白米九斛六斗、命婦以下料黑米七斛二斗、仕丁料
雜作手卅三人　造御櫛手二人、○中略冬日黑米二升、仕丁五十一人、日米二升、

〔延喜式三十六主殿〕供奉年料中宮准之
泔料白米月別二斗

〔北山抄七都省雜事〕請内印雜事
下諸國符充民部省主計主税寮等官人以下食料白米事、

り、卽今俗に黑米といふもの是也、

〔倭訓栞中編二十六毛〕もみよね　倭名抄に糙をよめり、糓米の義、今いふ黑米なりといへり、

〔延曆交替式〕太政官符、應糙諸國古稻事、得民部省解偁、被太政官去延曆五年三月廿八日宣偁、諸國正稅、除論定公廨、幷年中雜用之外、殘穎滿卅萬束、宜返却正稅帳、若不及者、留帳勘申者、諸國不務糙成古稻稍多、交替之日、彼此有煩、爲糙之時、還陳耗損、望請除年中出擧雜用之外、不遺束把、咸皆爲糙者、省宜承知、依件施行、

延曆十一年十一月廿八日

〔易林本節用集乃食服〕能米

〔書言字考節用集六服食〕能米　糓　能米同

〔庭訓往來〕能米、馬大豆、秣、糖藁、○中略或買貸或乞索令進候、

〔庭訓往來抄下〕能米ハ、クロ米ヲ云ナリ、

〔執政所抄上正月〕修正事大治三年正月有被付寺家之事子細沙汰可被問案主爲成歟

四日　阿彌陀堂修正事

佛供料能米六石六斗　同薪直例米六斗六升　件佛供等年預成下文、以見參下所司遣寺家、

八日　法成寺金堂修正七箇夜事

能米三石四斗　佛供料　薪直米三斗四升

乃米拾貳石貳斗五升　七箇夕御湯漬御飯料加去四日阿彌陀御料豆薪直一石二斗五升

乃米拾四石　同唐菓子料夜別一石加固阿彌陀堂定五合

米拾五石八斗　土器直料

十貳石御湯漬土器四千五百重直、二石八斗御明坏二百重直、○中略

〔本草和名 十九米穀〕稻米一名稌米、音土烏米一名䅵、辛昨反一名糲米、音賴、烏米耳、謂舂一斛之糲成八斗之米也、已上四名出崔禹、和名多多與禰、

〔倭名類聚抄 十七米〕糲米　崔禹錫食經云、烏米一名糲米、糲音刺、和名比良之良介乃與禰、烏米謂舂一斛之糲成八斗之米也、

〔箋注倭名類聚抄 九稻穀〕按比良平也、比良之良介、謂令白之最麤也、今俗呼久呂古米、（中略）本草和名引同、烏米下有耳字、按有耳字、無耳字、並不可讀、恐有誤字、八斗之米亦恐八斗之糳米之脫誤、說文、粟重一秳、爲十六斗大半斗、舂爲米一斛曰糲、九章算術曰、粟率五十、糲米三十、烏米之名未聞、

〔九章算術 二〕粟米以御交質變易

粟米之法（略）○註　粟率五十　糲米三十

〔九章算術音義〕糲米盧達切、麤也、凡粟五斗得糲米三斗、故粟率五十而糲率三十、

〔倭名類聚抄 十七〕糙　唐韻云、糙音與造同、漢語抄云、毛美與禰、一云加知之禰、今按本朝式等所謂爲糙者、舂稻成穀之名也、米穀雜也、

〔箋注倭名類聚抄 九稻穀〕按類聚名義抄亦有毛三與禰之訓、新井氏曰、毛美謂未脫皮之稱、未脫皮之穀、漬之令萌、則毛美蓋萌實之義、愚謂毛美與禰、謂採穗得穀也、加知之禰、加知擣也、猶言舂也、言擣穗獲穀也、糙卽米穀雜、則知半脫穀半不脫穀者、以充毛美與禰、加知之禰恐不允、

〔類聚名義抄 七米〕糙音造、モミヨネ、一云カチシ子、

〔伊呂波字類抄 毛飲食〕糙モミカ見于格　糙米モミヨ子、又カチシ子、

〔朱氏談綺 下米穀〕糙米クロコメ

〔東雅 十三穀蔬〕穀モミ（中略）倭名鈔に、糙は米穀雜なり、漢語抄にモミヨ子一にカチシ子といふ、今按ずるに、本朝式等所謂爲糙者舂稻成穀之名也と註せしは、モミとは穀也、ヨ子は米也、米穀相雜れるを云ひしなり、カチシ子とは、カチは擣也、シ子は稻也、稻を舂きて其穀を脫せしな

〔書言字考節用集 六服食〕粒(コメツブ) 字彙米類 米(同マ ネ)

〔東雅 十三穀蔬〕穀(モミ) 倭名鈔に、○中略 粒はヽナツヒ、○中略ヽと見えたり、○中略 イナツヒとは、イナは稲也、ツヒは粒也、

〔和漢三才圖會 百三穀〕穀○中略 米○中略 米顆謂粒 和名伊名豆比 今云古女豆布 官女呼米曰宇知末木

〔易林本節用集 久衣服〕黒米(クロゴメ)

〔延喜式 五齋宮〕年料供物
黒米卅石 供雜酒料

〔延喜式 十四縫殿〕凡染手六人、各日黒米一升五合、

〔延喜式 十六陰陽〕庭火并平野竈神祭 坐内膳司
神座十二前 六前各○中略 糯米鳥穀各二斗

〔延喜式 十七內匠〕凡番上工卅八人、各日黒米二升、

〔延喜式 三十二大膳〕平野夏祭雜給料
駈使履夫單五十人食料、黒米人別日二升、鹽二勺、功直隨時、
賀茂神祭齋院陪從等人給食料
白米三斗、膳部等食料 夫十五人京職所進 黒米一斗八升、夫食料
同祭齋院司別當已下四人食料
夫四人京職所進 黒米四升八合、鹽四勺八撮、醬滓四合、並夫食料

〔北山抄 七都雜事〕申一上雜事○中略
年料米可進黒事 或有被許、申他上、加一合精代勘納、延喜七年宣旨、

〔東雅 十三 穀蔬〕穀モミ 略○中 民間の語に穀をよびて菩薩といふ事あり、此語はもとこれ韓地方言に出しなり、雞林類事に、かの方言白米を漢菩薩といひ、粟を田菩薩といふとしるせり、又俗間に糠味噌といふもの丶、糠と鹽とを和して造れるを、名づけてサヽヂンといふ、是は佛經を書寫するに、菩薩の字畫を省きて、サヽとしるす事あり、さればサヽとは菩薩の義也、ヂンとは塵といふ字の音を以て呼ぶなり、これも米を菩薩といふ事に依れるなり、

〔倭訓栞 前編 保 二十八〕ぼさち 略○中 俗に菜穀を菩薩といへり、遠江天龍川の上にては專ら稱す、

〔玉勝間 十四〕米粒を佛法ぼさつなどいひならへる事

穀物をおろそかにすまじきよしをいふ時に、米粒などを佛法といひ、東國にては菩薩といふ、これ大切にして、おろそかにすまじきよしなれば、然いふ心はいとありがたけれども、佛菩薩より尊き物はなしと心得たる心よりしかいふなれば、言はいとひがごとなり、神とこそいふべけれ、まことに穀はうへもなきものなれば、神とも神と申すべきものなり、

〔鹽尻 七十一〕天竺呼米粒爲舍利、佛舍利亦似米粒、是故曰舍利、秘藏記 舍利者稻穀也、馱都者佛體也、慈恩上生經疏上

〔倭名類聚抄 十七 米〕米 略○中 說文曰、粒 音立、伊奈豆比、米甲也、

〔箋注倭名類聚抄 九 稻穀具〕今俗呼古米都夫、按都比都夫一聲之轉、圓訓都夫良同語、

〔類聚名義抄 七 米〕粒 音立、イナツヒ、ヒツ、俗飯、

〔伊呂波字類抄 伊 飲食〕粒 イナツヒ

〔日本靈異記 序上〕諸樂藥師寺沙門景戒、熟瞰世人也、略○中 欲他分惜己物、甚流頭於粉、粟粒以啖糠、略○中

粒 ヒツ

〔下學集 下 草木〕粒 ツブ

〔撮壤集　稻穀中〕米コメ　八°木°同

〔運歩色葉集　草〕八木ハチボク　米名

〔易林本節用集　衣食波〕八木ハチボク　米也

〔書言字考節用集　服食六〕八木ハチボク　本朝俗謂米爲八木、支那謂松爲十八公之類也、

〔庭訓往來〕兵粮八木、鞍替楯袋、〇中略油單等雜具、心之所及奔走之、兼又定被存知歟、

〔通俗編　識餘三十八〕拆字　晉藝術傳、以肉爲內中人、淸異錄以粥爲雙弓米、今謂米曰八木、茶曰草木中人、乃其類、

〔小右記〕天元五年五月十七日戊申、晩景詣室町、伊與介未出八木百石解文、

〔玉勝間　六〕八木

米を八木といふはふるきこと也、小右記の寬仁萬壽のころのところに、八木十石、八木卅石など見えたり、

〔吾妻鏡　十三〕建久四年十一月廿七日庚寅、永福寺藥師堂供養也、〇中略還御之後卷絹百、染絹百、宿衣一領、八木百石、送文、於近江國可致沙汰云云等被遣僧正旅館、

〔東大寺造立供養記〕同〇建久六年三月十二日、大佛殿供養也、〇中略鎌倉前右大將源朝臣〇賴朝者、當寺大檀越也、從相模國引率數萬軍兵、令企上洛、爲遇此供養也、始則以八木一萬石令助成、〇下略

〔梵舜日記〕天正十一年正月九日、南豐軒牛甫來儀也、因幡勘左衞門女房方ヨリ、妙修十三年佛事トテ、八木壹石、料足壹貫文來也、

〔享保集成絲綸錄　三十四〕享保十四酉年四月

一近年は八木澤山ニ有之付而、米屋共八木買置候而も不苦候、〇中略

右之通、町中可觸知候也、

吾國自神代禁毛血而爲穢物不食、惟以米穀養斯民、故名世根也、今通呼古女、古女即顚命也、又稱菩薩、是乃朝鮮語也、

〔物類稱呼三生植〕米こめ　よね　遠江國天龍の川上にてぼさつと稱す、此所にては米といはずして、ぼさつとのみとなふ、按に諸國より大峯或は羽黒山などへ詣るもの一七日齋す、其内はぼさつと稱して米とは呼すとなん、西國又は朝鮮の方言にも、穀を菩薩と云よし見えぬ、

〔倭訓栞前編九古〕こめ　米をいふ、小實の義成べし、八木といふ事東鑑に見えたり、麝香米あり、光粳米也といへり、

〔倭訓栞前編三十六與〕よね　日本紀倭名抄に米をよめり、かしよねあらひよねなどいふ是也、善米の義なるべし、又こめと横音通せり、

〔日本書紀二十四皇極〕二年十月戊午、蘇我臣入鹿獨謀、將廢上宮王等而立古人大兄爲天皇、于時有童謠曰、伊波能杯儞、古佐屢渠梅野倶、渠梅多儞母、多礙底騰哀羅栖、歌麻之之能烏賦、

〔空穗物語藤原の君〕たちばな一くはむとの給、五月なかの十日比、たちばなこれはなつてなし、この殿のみそのにあり、みそかにいちめとりてまいる、このいちめのはらに、五ばかりにて有は、をゐじておとゞに申、こゝのたちばなをとりてなん、まゐりつると申さんといひつれば、あはこ。め。をつゝみてなんくれたりといふ、

〔空穗物語藏開下〕かくてみちのくにのかみたねみがもとより、せにまんまくたてまつれり、よ。ね。はにしの御くらに三百石つまれたり、おろしてつかはる、くらはよつを三にはよねども、一にはかねなどつまれたり、

〔空穗物語國讓中〕そのくらのまへに、十一けんのひはだや有、それはおさめどのにて、よねよろづの物をおさめたり、

〔續日本紀考證 九稱德〕砥粳 砥當下依紀略作舐、狩谷氏曰、粳疑糠字、史記吳王濞傳、舐糠及米是也、案新撰字鏡云、秔俗作粳、同加衡反、不黏稻也、與禰之宜久、又奴可、則作粳亦通、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年三月十九日癸卯、今曉三品親王〇宗尊關東御下向也、〇中略午剋著御于野路驛、〇中略

御雜事

米卌石、白米二石 宣旨斗定 大豆三石 同斗中略 〇藁八百束、糠十石、

〔倭名類聚抄 十七米〕米 陸詞切韻云、米 莫禮反、和名與禰 穀實也、

〔箋注倭名類聚抄 九稻穀〕按說文、米粟實也、象禾黍之形、粟嘉穀實也、禾嘉穀也、是嘉穀其艸曰禾、其實曰粟、去其秠曰米、轉謂凡穀脫秠亦曰米、非其本訓也、

〔伊呂波字類抄 與飲食〕米 ヨネ 〔同 古飲食〕米 コメ

〔易林本節用集 與草木〕米 ヨネ 〔同 古食服〕米 コメ

〔段注說文解字 七上米〕米粟實也、鹵部曰、粟嘉穀實也、嘉穀者禾黍也、實當作人、粟擧連秠者言之、米則秠中之人、如果實之有人也、果人之字、古書皆作人、金刻本艸尚無作仁者、至明刻乃盡改爲仁、鄭注冢宰職、九穀不言粟、注倉人掌粟入之藏云、九穀盡藏焉、以粟爲主、粟正謂禾黍也、禾者民食之大同、黍者食之所貴、故皆曰嘉穀、其去秠存人曰米、因以爲凡穀人之名、是故禾黍曰米、稻稷麥苽亦曰米、舍人注所謂六米也、六米即膳夫食醫之食用六穀也、賓客之車米筥米、簋米飯米、不外黍粱稻稷四者、凡穀必中有人、而後謂之秀、故秀从禾人、象禾黍之形、大徐作禾實、非是、米謂禾黍、故字象二者之形、四點者聚米也、十其閒者、四米之分也、篆當作四圜點以象形、今作長點、誤矣、莫禮切、十五部、

〔日本釋名 下米穀〕米 こめは小實也、みとめと通す、一說にこもる也、もみの內にこもる也、もとめと通ず、下を略せり、よねはいね也、いとよと通ず、いねのみ也、

〔東雅 十三穀蔬〕穀 モミ〇中略 舊說にヨ子とは、ヨはヨシといふ詞也と見えたり、ネは種也、其嘉種なるを云ひし也、稻をイネといひ、米をヨネといふが如きも轉語なり、又根をネといひ、苗をナヘといふも轉語也、ネといふ言葉を開き呼ぶときはナヘなり、是等の事に依りても、古語の相轉ぜし、また各其義ありし事を知るべし、種をタネと云ひしは、其初田穀の種子を呼びしに起れるに似たり、

〔食物知新 一穀〕粳米 別錄中品

ラといふ、カラとは卽穀皮也、

〔倭訓栞前編二十一奴〕ぬか○中略 糠をよむは脱皮の義なるべし、新撰字鏡に杭もよめり、粉ぬかは粃をよめり、

〔本朝食鑑二華和異同〕糠

糠者諸米之殼、而本邦謂之荒糠、其近米之細者爲米粃、粃者粃薄之義也、又名米皮糠、今本邦稱糠者、皆近米之細糠也、或曰、倹年人多交以豆滓可食、和劑蒸煮以救饑、此本邦民間亦然矣、

〔和漢三才圖會百三穀〕稃すりぬか音孚 糠ぬか糠同 稃俗云須利沼加 糠和名沼賀 小麥稃俗云保字條

按稃籾皮也、今人以礱磨穀取米、其麤皮謂稃、

凡花之房曰柎、麥之皮曰麩、穀之殼曰稃、其字皆音同、稃性温、冬可以防寒、夏以避暑、藏雞卵於稃、久不餒、草木不堪寒者、覆稃於根不凍、

糠糜也、空也、米皮去其內、以空之也、可以養犬馬、如荒歲人亦食之、或煮豆和糠及鹽收藏、名糠末醬、爲賤民日用食、又以糠爲田圃培立、鰮培之右、蓋鰯多出房州總州、運送之大坂、畿內農人用好之、東北地凍、而非糖不可、故畿內之糠、多運送于武陽、關東農人重之、土地之異同然耳、

〔重修本草綱目啓蒙十七造釀〕米粃 コヌカ ヒヌカ 一名細糠稻ノ集解 糖衣白朮ノ條下

モミハ一名フナハリ、スクモ、防州 モスヌカ、南部 漢名礱糠、群芳譜

舂杵頭細糠 米ヲ舂トキ、杵ノ先ニツキタルコヌカナリ、

〔播磨風土記神前郡〕粳岡者、伊和大神與天日桙命二神各發軍相戰、爾時大神之軍、集而舂稻之、其粳聚爲丘、一云掘城處者、品太天皇○應神御俗參度來百濟人等、隨有俗造城居之、又其簸置粳云墓、

〔播磨風土記賀毛郡〕粳岡、右號粳岡者、大汝命令舂稻於下鴨村、散粳飛到於此岡、故曰粳岡、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月庚戌、皇太子○光仁令旨、如聞道鏡師、竊挾舐粳之心、爲日久矣、○下略

秠　　穭糠

〔書言字考節用集服食六〕秕（ミヨサ）　粃（シイナセ）（シイネ）韻會、穀不成也、

〔日本釋名穀五下〕秕　みなしいね也、みなを略す、しいなとも云、ねな相通す、

〔東雅穀蔬十三〕穀（モミ）　倭名鈔に、中略粃はシヒナセ、穀實但有皮而無米也、と註せしは、シヒナセは、猶シネナシといふが如し、其稻實のなきをいふなり、

〔倭名類聚抄稻十七〕秳　唐韻云、秳音活、漢語抄云、乃古利之禰、舂穀不潰者也、

〔箋注倭名類聚抄稻穀具九〕按乃古利之禰、殘米之義、謂舂穀爲米、猶有未脱皮者也、今俗呼阿良、

〔伊呂波字類抄飲食能〕秳（ノコリシネ）舂穀不潰者也、　秎同

〔新撰字鏡禾〕穭空外反、米皮也、糠也、須久毛、

〔倭名類聚抄米十七〕米中略　爾雅注云、糠音康、和名沼賀、米皮也、

〔箋注倭名類聚抄稻穀具九〕按糠訓穀皮、穭訓糠、則知糠亦阿良奴加也、類曰米粃、卽精米上細糠也、李時珍曰、糠諸粟穀之殼也、其近米之細者爲米粃、是可以充古奴加也、

〔類聚名義抄禾七〕穭音會、ヌカ、アラヌカ、　稓スクモヌカ　穅音康、ヌカ、アラ、糠俗、〔同米七〕粳古行反、音庚、アラヌカ、　杭粺二俗　糠

康音康、ヌカ、アラ、或糠、　糩俗糩字、若外反、音會、アラヌカ、

〔伊呂波字類抄飲食古〕糠コヌカ

〔日本靈異記上序〕諸藥藥師寺沙門景戒、熟瞰世人也、中略欲他分惜己物、甚流頭於粉粟粒以喫糠、中略

糠ヌカ

〔和爾雅米穀六〕糠ヌカ米粃、糠並同、米皮也、コヌカ　稃スリヌカ稃、稭、粰並同、アラヌカ

〔書言字考節用集服食六〕穭ハシカ韻會、麁糠也、　穭アラヌカ　稃同爾雅、穀皮、　麤糠同韻會　稃スリヌカ

〔日本釋名米穀下〕糠　米のぬけがら也

〔東雅穀蔬十三〕穀中略　ヌカとはヌク也、ヌクとは脱（ヌク）也、其實の脱けしをいふ也、日本紀には、糠讀てカ

〔續日本紀(二十六／稱德)〕天平神護元年二月庚寅、左右京籾各二千斛、糶於東西市、籾斗百錢、

〔文德實錄(五)〕仁壽三年三月丁巳、以穀倉院籾鹽、給京師患疱瘡者、

〔空穗物語(藤原の君)〕そのつみにおそろしきやまひつきて、ほど〳〵敷いますかる、いちめまつりはらへせさせんとする時にの給、あたら物を、我ためにちりばかりのわざすな、はらへすとも、うちまきによねいるべし、もみにてたねなさばおほく成べし、

芒

〔新撰字鏡(草)〕芒(乃。女。)

〔倭名類聚抄(十七／稻)〕稻(芒穗等附〇中略)　蘆昫切韻云、芒(音與亡同、和名乃木、)禾穗芒也、

〔箋注倭名類聚抄(九／稻穀具)〕乃岐見曾丹集歌、今俗或訛呼乃偈、(〇中略)　說文、芒草端也、按禾芒亦芒之一端、

〔東雅(十三／穀蔬)〕稻イチ(〇中略)　倭名鈔に、(〇中略)芒はノキ、禾穗芒也と注せしは、ノとは直也、キとは凡物の光銳なるを、古語にはキといひ、ケといひけり、

〔倭訓栞(前編二十三／乃)〕のぎ　新撰字鏡に芒をよめり、芒刺をいふ也、のげ　のぎの俗語也

粃

〔倭名類聚抄(十七／稻)〕粃。　野王按、粃(比之反、去聲、和名之比奈。世、)穀實、但有皮而無米也、

〔箋注倭名類聚抄(九／稻穀具)〕今本玉篇、米部無粃字、禾部有秕字云、穀不成也、按左傳若其不具、粃稗也、杜預注、秕穀不成者、顧氏蓋本之、說文、秕不成粟也、又有粊字、云惡米也、周書有粊誓、然則訓穀不成、秕字從禾、不當從米、然慧琳音義引玉篇云、粃穀之不成者也、或作秕、所見玉篇似從米以從禾爲或字、不與今本同、源君所據、或與慧琳同、故其字從米也、

〔類聚名義抄(七／米)〕粃(秕二正、音比之去聲、和名シヒナセ、シヒタ、)

〔伊呂波字類抄(志／飲食)〕粃(シヒナ、シヒナセ、穀室、但有皮而無禾也、)

十斗、是粟米之辨也、又呂氏云、粟穀也、有穀曰粟、無殼曰米、是也、然而單謂粟則兼粟米而言、胡渭禹貢錐指曰、穀者粟米之通稱、粟米對擧、則有殼曰粟、無殼曰米、單言粟則粟亦是米、春秋定五年、歸粟于蔡、僖十三年、秦輸粟于晉、戰國策、張儀言舫船載粟、自汶山浮江以至郢、史記、主父偃言、秦輓粟起負海之郡、以輸北河、計其道里、並阻且長、有殼者難於轉輸、其所謂粟、當卽是米也、論語與粟五秉、孟子移粟河東、亦皆謂無殼者也、或曰、古者稱粟者、乃五穀之總名、西漢以來所稱之粟者、則謂小米也、是皆以今所習而律古而已、非通論也、亦不博考古書之過也、

右辨粟米名義一條

〔令義解三賦役〕凡土毛臨時應用者、○註略　並准當國時價、價用郡稻、(中略)凡官稻之源、出自田租、卽分爲三、一曰大稅、二曰糙穀、三曰郡稻也、

〔續々修東大寺正倉院文書四十六〕糙穀帳

納糙四百六十三石　　養老七年七月九日粟田久治良○以下署名略

〔續修東大寺正倉院文書四十五〕謹啓

合粟壹萬玖伯玖斛廿二斛四斗四升

見定壹萬捌伯捌拾陸斛伍斗陸升

宮裏收納七千六百卅四斛五斗六升外廿九斛

山口庄收納三千二百五十二斛

糙貳仟壹伯玖拾肆斛壹斗參升

宮庄收納一千七百卅一斛一斗三升

櫟本庄收納四百六十三斛

以前、撿定粟糙如前、謹以申聞、謹啓、

天平十年八月十五日

〔和漢三才圖會 百三〕穀 音谷 籾 和字 和名毛美 田物、實也、略而曰毛美、〇中略 按穀 穀同 五穀九穀之總名也、而今唯稉糯稱毛美、凡在田時爲稻、和名以禰 刈稙未脫芒稃者爲穀、和名毛美 今俗作籾字、其禾芒之形、微似劍脊刀鋒、故从乃乎、

〔地方新書〕籾
籾ハ最實ノ義ナリト云、粟モ同ジ、サレド粟ニアハト云訓モアレバ、ソレヲサケ、米甲ニ稜及メアルニツキ、籾ノ字ヲ新造セシト見ユ、賦役令義解ニ、籾ノ字ヲ用タリ、籾、續日本紀、元明天皇紀ニ見ユ、續字彙ニ、金鏡ヲ引テ、唐ノ則天后制スル字ナルベシト云、

〔續字彙補 未集〕籾 女栗切、音尼、見金鏡、

〔塵袋 九〕粟ノ字ヲ米ト云フコトアリ如何
米ヲ粟ト云ヘル事多シ、アハトモ心エラレヌベキ事モアリ、漢朝ニ鷄ヲツクリテ、其クチバシニ、勝ノ字ヲカキテ、クハヘサセテ、サホノサキニ置テ、六人ヲサダメテ、勝ノ字ヲ我サキニトラントアラソハシムルニ、ハヤサホニノボリテ、トリタルモノニハ、米三斛ヲタマハスル事アリ、サヤウニシテ、タマハル米ヲバ鷄粟トナヅケタリ、又漢書曰、大倉之粟腐不可食ト云ヘル注ニ、言積日久、米符赤也云ヘリ、カサクチテ紅梅イロニナリタル也、コレラハ粟ノ字ナレドモ、米ナル心アキラカナリ、臣軌云、務農則田墾、田墾則粟多、粟多則人富ト云ヘリ、是レモ心ハ米ナルベシ、粟ノ一字アハニモ米ニモワタル事如此、コノユヘニ先年ニ鎮西ノ八木ヲ宋朝ニワタス事ヲ、トヾメラレシトキ、顯朝卿、米ヲ粟實トカキタリシヲ、定嗣卿アハノミバ何ゾト、アザケリタリケルヲカヘリキキテ、顯朝卿トガメテ、ハカリナキイサカヒニナリタリトキコエキ、

〔黍稷稻粱辨〕禾者在田之稱、粟有穀之稱、米無穀之稱、晏子之脫粟米、公孫弘脫粟飯、皆謂無穀也、禹貢曰、四百里粟、五百里米、春秋傳曰、甸粟而納之王宮、米而藏之御廩、而九數有粟米之法、粟二十斗、當米

利稻十二萬束

定納官租穀不注

雜塡納穎三千六百九十束〇下略

〔眞本新撰字鏡 二米〕糅〇如救反、雜飯曰糅、 粈腬二上古文

〔倭名類聚抄 十七稻〕穀〇周禮注云、五穀、音谷、和名毛〇美、〇下略

〔類聚名義抄 七米〕粈〇正 モミ 〔同 九殳〕穀 音谷、モミ、

〔伊呂波字類抄 毛飮食〕穀 モミ 粈 同、亦作糘、

〔和爾雅 六米穀〕穀 粟我並同

〔朱子談綺 下米穀〕稻子 モミ

〔九章算術 二〕粟米 以御交質變易

粟米之法〇略 註 粟率五十〇中略 稻六十

〔九章算術音義〕粟米 上相玉切、下莫禮切、粟者禾之米之未舂米者、穀實之無殼粟者、米之率也、諸米不等、以粟爲率、故曰粟米、

〔日本釋名 下米穀〕粟 もゆる實也、もゆるはおひ出るを云、もみをまけばもえ出づ、からを去たる米をまきては生せず、

〔東雅 十三穀蔬〕穀モミ 倭名鈔に穀はモミ、日本紀私記に讀てタナツモノといふと註せり、其義は並に不詳、モミとはモはモエ也、モエとは萌也、ミは實也、其萌芽を發すべき實をいふ也、(中略)穀の字の如きは、五穀といひ、六穀といひ、八穀九穀なども云ひて、百穀といふに至りぬれば、凡穀種みな呼て穀といふべければ、日本紀には、其字讀てタナツモノとはいひけり、亦讀てモミといふが如きは、むれといふ稻實なればいふ事にやあるらん、我國の俗に、糘の字創造りて、モミとよむ事、日向國風土記に其字みえたれば、因り來る所既に久しき如くは見えたり、

〔倭訓栞 前編三十三毛〕もみ〇中略 倭名抄に穀をよめり、最實の義、もはほめていへり、粟もよむべし、

賦役令義解に籾字を用ふ、字書に出たれど其義なし、或は稻子をよめり、又字穀をもいふ、

出擧壹仟伍伯參拾束　利漆伯陸拾伍束　并貳仟貳伯玖拾伍束

遺參仟陸伯玖拾壹束肆把陸分

合定稻穀玖伯壹拾捌斛參斗伍升玖合

穎稻伍仟玖伯捌拾陸束肆把陸分

〔延曆交替式〕太政官符、應正稅本稻依舊擧穎事、撿案內、太政官去年九月十七日下諸國符偁、自今以後、出擧正稅、給穀收穀、立爲恒例者、是則絕租稅耗損之源、改吏民塡備之弊、今被右大臣宣偁、奉勅、如聞、稻有早晚、各任土宜、而盡穎爲穀、種子難辨、宜本者收穎、利者納穀、不絕本穎、廻充種子、其承前之事、總納穎稻、計帳之日、更出令糙、甲乙所進、丙丁代糙、至有欠損、糙者塡之、遂乃富强之人、拱手無勞、貧弱之家、合門受弊、自今以後自糙自進、本稻之外、不得收穎、其用盡舊稻、一依前符、若有過限收穎及遺舊稻者、國郡官司、科違勅罪、損耗贓重者、亦計贓科之、後任國司、阿容受領、與同罪者、諸國承知、依件行之、

延曆十八年五月十七日

〔日本後紀（十四平城）〕大同元年八月乙酉、參議東海道觀察使從三位藤原朝臣葛野麻呂言、延曆十七年格、出擧正稅、給穀收穀、立爲恒例者、而今奉勅、稻有早晚、各任土宜、而盡穎爲穀、種子難辨、宜本者收穎、利者納穀、不絕本穎、廻充種子、本稻之外、不得收穎、若有過限收穎者、國郡官司、科違勅罪者、今或國司等、偏執此格、公廨利稻并年中雜用、皆悉令糙、其收穎穀之意、本爲遠貯、而今日勞糙、明年盡用、徒有民弊、曾无公益、伏望依延曆十一年十一月廿八日格、年中雜用并公廨等稻、不勞爲糙、以省民弊者、許之、

〔朝野群載（二十六諸國公文）〕主稅寮

勘上野國解文事（○中略）

承保三年稅帳（注勘文）

正稅本穎四十萬束

ヲ一升ヲ得ルナリ、此直穎錢一文ナリ、二百五十歩ハ二百五十文、是即チ百疋ナリ、

〔延喜式八祝詞〕祈年祭

御年皇神等能前爾白久、〇中略奧津御年乎、八束穗能伊加志穗爾、皇神等能依左志奉者、初穗乎波千穎八百穎爾奉置氐、甁閉高知甁腹滿雙氐、汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟、

〔江家次第四正月〕定受領功課事

本穎條本穎國司貯積之總名也、正稅公廨雜稻出擧是也、諸國置此三色稻、見主稅式、苅本謂之稻、切穗謂之穎、

〔江次第抄四正月〕本穎條　勘解由勘文第一條載之、本穎者國司貯積之總名也、正稅公廨雜稻出擧事也、諸國置此三色稻、多少見主稅寮式、春以此稻借於人、取其利宛雜用、不失其本也、其本利共至秋返之、本稻者又宛明年種子也、九章云、稻者切本謂之稻、切穗謂之穎、莖ナカラヲバ稻ト云、モミナカラ置ヲバ穎ト云、

〔東大寺正倉院文書十〕大倭國天平二年大稅帳

養老二年撿欠穀壹仟肆伯伍拾玖斛伍斗肆升參合

穎稻參仟參伯貳拾壹束捌把半

養老四年撿欠香山正倉穀壹伯漆拾貳斛漆斗漆升

宇智郡欠穎壹仟貳伯伍拾陸束

養老七年撿欠香山正倉穀貳伯伍拾玖斛漆升

合稻穀捌萬伍仟貳伯陸拾肆斛肆斗漆升伍合

〔東大寺正倉院文書三十四〕隱伎國天平二年正稅帳

周吉郡天平元年見定稻穀玖伯壹拾捌斛參斗伍升玖合

穎稻陸仟壹拾肆束捌把壹分、此中雜用漆伯玖拾參束參把伍分

穎

いろ〳〵にかど田のいなぼふきみだる風におどろくむらすゞめ哉

〔藝藩通志五災祥〕文政六年秋、惠蘇郡高野山組十一村に、兩岐の稻を生ず、村々大抵稻一把に二穗の物、必二三莖あり、寒地惡處かく瑞穗の多く出るは希代の祥なれば、里正等采りて、これを進獻せしを、又社稷の神に納めらる、

〔類聚名義抄三頁〕穎役餅反、穗穎、禾穎、カヒ、

〔伊呂波字類抄加植物附植物具〕穎カヒ稻穎　穎　稃巳上同、穀皮也、稻皮也、

〔段注説文解字七上禾〕穎禾末也、穎之言莖也、頸也、近於采、及實於采者皆是也、大雅實穎實栗、毛曰、穎垂穎也、禹貢鄭注曰、百里賦入總、謂入刈禾也、二百里銍、銍斷去稾也、三百里秸、秸又去穎也、四百里入粟、五百里入米者、遠彌輕也、禮器稾鞂之設、鄭注、穗去實曰鞂、鞂與秸同物、鄭注尚書曰、去穎謂用其也、注禮器曰、去實謂用其穎也、史記曰、錐處囊中、穎脫而出、非特其末見而已、少儀刀卻刃授穎、是則穎在錐、則部於末、在刀則部於刃、在禾則部於采也、渾言之則穎爲禾末、析言之則禾芒乃爲秒、从禾頃聲、余頃切、十一部、詩曰、禾穎穟穟、大雅生民文、今詩作禾役、毛曰、役列也、玉裁按、役者穎之假借字、古文耕合韵之理也、列者梨之假借、禾穗也、此穎通稱言之、下章之穎則專謂垂者、

〔倭訓栞前編六加〕かひ　日本紀に牙字をよめり、芽に同じ、甲の音轉もあり、日本紀の龜鹿火を、古事記に荒甲に作れり、字書にも甲は草木初生の莩子也と見えたり、○中略穎字をよむ義同じ、

〔地方新書〕秇

永永ハ穎ノコト也、永モ穎モ同韻ナレバ、假借シテ、書畫ノ永字ヲ用ユルナルベシ、ナホキニオノ字ヲ假借シ、段ニ反ノ字ヲ用ユルト同ジ、或云、永ハ穎ノ草體ノヘンヲ取リ、永ナルヲ、永トセシナルベシト、イカヾ、○中略

永ハ普通ノ俗書ニ、永樂錢ヨリ起ルトスルハ當ラズ、未ダ永樂ノ年號ナキ時ヨリ永錢ノ號アリ、農政座右ニ、水府藥王院文書ニ、穎錢ト云コトナリ、又鎌倉八幡社人大伴忠雄ガ相模志料ニ、永高ノ永、舊ハ穎ナルベシ、延喜式和名抄等ニ、穎稻又本稻本穎等ノ名アリ、終ニ田畠ノ高ヲ、何貫文ト云名ハノコリシナラント、

一段二百五十歩、一歩二把ヅヽノ稻把ヲ刈リ出シ、此一把ヨリ二升ヅヽノモミヲ出シ、米トシ

〔東雅十三穀蔬〕稲イネ〇中略 倭名鈔に、〇中略 穂はホ、禾穀末也と註せしは、天神此國を呼び給ひて、千秋五百秋長瑞穂國とものたまひし事もあれば、太古の俗に穂を呼びてホと云ひしは、これを最とし秀となしぬる、美稱とこそ見えたれ、最の字讀てホといひ、秀の字讀てホツと云ひしが如き即此義也、

〔倭訓栞前編二十八〕ほ〇中略 穂は火より轉せり、穂の出初る色皆赤し、稲穂を本とす、貫之集に、田まもる家ほある所と見えたり、神代紀に穎をよむも同じ、江次第に苅本謂之稲、切穂謂之穎、本穎國司貯積之總名也と見えたり、

〔倭訓栞中編二〕いなぼ　稲穂の義、神代記に穂一字もよめり、

〔日本書紀二神代〕一書曰、〇中略 天照大神手持寶鏡、授天忍穂耳尊、〇中略 又勅曰、以吾高天原所御齋庭之穂(イナホ)、亦當御於吾兒、

〔日本書紀十五顯宗〕白髪天皇二年十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡、親辨新嘗供物、一云、巡行郡縣、收斂田租也、適會縮見屯倉首縱賞新室、以夜繼晝、〇中略 億計王起儛既了、天皇次起、自整衣帶、爲室壽曰、〇中略 出雲者新墾、新墾之十握稲之穂、於淺甕釀酒、美飲喫哉、〇下略

〔神宮雜例集一〕一供奉始事
大同二年二月十日、大神宮司二宮禰宜等本記十四ヶ條内朝夕御饌條云、皇大神宮倭姫命戴奉天、五十鈴宮爾令入坐々鎭理給時爾大若子命乎大神主止定給天、其女子兄比女乎物忌定給天、宮内爾御饌殿乎造立天、其殿爾爲天、拔穂田稲乎令拔穂拔天、大物忌大字禰奈共爲天、令舂炊供奉始支、

〔夫木和歌抄十二秋田〕建長五年毎日一首中　民部卿爲家
風わたるの田のはつほのうちなびきそよぐにつけて秋ぞしらる、
正治二年七月當座三百歌合　民部卿範光

穗

〔東大寺正倉院文書三十六〕長門國天平九年收納大税目錄帳
合伍郡天平八年定正税穀壹拾貳萬漆伯肆斛伍升貳合〇中略
全稻爲穀玖仟肆伯肆拾參束肆把
得。穀。玖伯肆拾肆斛參斗肆升（束。別。得。一。斗。）

〔大安寺伽藍緣起流記資財帳〕合稻貳佰貳拾萬壹阡陸佰陸束捌把參分半
通分稻一百八十八萬五千七百六十六束八把分半
見一百卌三萬六千四百十六束七把二分
每年未納五十四萬二千八百七十八束八把八分半
朽失無實燋稻六千四百七十一束二把〇中略
天平十九年二月十一日　都維那僧靈仁〇以下署名略

〔東大寺要錄六〕封戶廿一箇二千七百戶〇中略
土佐國百烟〇中略
租稻四千束　代米百廿石（束。別。三。升。）

〔倭名類聚抄十七稻〕稻（〇芒穗等附中略）唐韻云、穗（音遂、和名保。）禾穀末也、

〔類聚名義抄七禾〕穗（音遂ホ）　穗（正遂米）　初穗（ハツホ）

〔伊呂波字類抄保植物附植物具〕穗（ホ禾穀末也）　穟（同）

〔藻鹽草三地儀〕田
ほなみ　ほむけ（ほのむきたる也）　はつほ　いなぼ　いなば（いれかるにおちちりたるほ也、又おちぼひろふなどよめるは、こはちはべのひろふ物也、又人のおちぶるいにもよめるか、）

〔日本釋名下米穀〕穗　尾也、おとほと通ず、穗のかたちけだもの、尾に似たり、

秉

貫錢六百卌五文三束各七十五文、六束各七十文、

〔日本歳時記五〕八月

此月早稻の稈(わら)を收置べし、布をさらし、紅花を用ひ、絹布を染、毒をけす、其外用多し、

〔倭名類聚抄稻十七〕稻〇𥝱穟等附中略 薩珣云、秉音丙、訓以奈太波利、見毛詩也、禾束也、〇薩珣以下十九字原脫、今據一本補、 四聲字苑云、穧在詣反、今按田野人所謂穧稻之穧字、所出未詳、宜用此字歟、刈把數也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕按伊奈太波利、蓋稻手張之義、謂束禾盈握也、〇中略 按說文、秉、禾束也、从又持禾、薩氏蓋依之、〇中略 按稻曰束、見令式、謂所束稻也、當時田野人或從手作捒、用之爲束之之字也、束或作捒、見集韻、新井氏曰、捒字當訓多波奴、〇中略 廣韻、穧、刈禾把數也、與此義同、說文、穧、穫刈也、

〔類聚名義抄七禾〕秉イナタハリ

〔伊呂波字類抄伊植物〕秉イナタハリ、亦作束、 穧同

〔倭訓栞中編二伊〕いなたば 禾把也、又穧をよめり、

〔安齋隨筆前編十一〕穎幾束 倭名類聚鈔國郡部に、穎幾束と見へたり、束の事詳ならず、然れども田令義解に云、段地穫稻五十束、束稻舂得米五升也、於町須得五百束也とあり、束の稻舂て米五升を得るとあれば、いまだ磨らざる時は、一束の稻の米一斗計あるべし、是にて大概一束の分量をしるべし、和名抄に、稻幾束とも穎幾束ともあり、同事なれども、穎字を宜とすべし、又云、右にいまだ磨ざる時は一斗計あるべしと云たるは、モミを磨るを以て云也、舂て得米五升と云も大概を云なるべし、一莖に稻の多少年の熟不熟によつて不同あるべし、されども大概を知るべき也、

〔令義解三田〕凡田長卅步、廣十二步爲段、十段爲町、謂段地穫稻五十束、束稻舂得米五升也、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、〇中略 其三曰、初造戶籍、計帳、班田收授之法、〇中略 凡田長三十步、廣十二步爲段、十段爲町、段租稻二束二把、町租稻二十二束、

〔易林本節用集 和草木〕藁(ワラ)禾莖

〔和爾雅 六米穀〕藁(ワラ)稿、稾、禾稈、禾穰、稲幹並同、　稈心(ワランベ)稭、藍、秸並同、　稭(ワラノハカマ)禾皮曰稭

〔書言字考節用集 六生植〕藁(ワラ)　蒿同　稭同　藁心(ワラシベ)

〔段注說文解字 七上禾〕稾稈也、廣雅左傳注皆云、秆稾也、假借爲ニ矢幹之稾ー、居平聲ニ幹稾之稾、从ㇾ禾高聲、古老切、二部、

〔延喜式 三臨時祭〕畿內堺十處疫神祭○註略
堺別、○中略薦一枚、藁一圍、

〔延喜式 六齋院〕人給料、○中略錢八十九貫七十二文、(中略)六十四文辛紅彩色夾纈絹四疋料藁八圍、直別八文、
三年一請雜物○中略藁卅七圍直、練絹并染ニ紅花ー料、

〔延喜式 十三圖書〕凡年料所ㇾ造紙二萬張廣二尺二寸、長一尺二寸、料、○中略藁五百圍、河內國所ㇾ進

〔延喜式 十四縫殿〕雜染用度
退紅帛一疋、紅花小八兩、酢一合、藁半圍、薪卅斤、緋一絇、紅花小二兩二分、酢三勺、藁小半圍、薪廿斤、

〔延喜式 十五內藏〕御服料
小許春羅二疋、白綾十四疋、○註略色綾六疋、新羅文、用度、○中略藁三千八百十八圍四斤八兩、

〔延喜式 四十九左右兵庫〕凡二季大祓橫刀八口、金裝二口、烏裝六口、其料、○中略伊豫砥二顆、角砥二顆、藁八圍、已上磨刀料

〔延喜式工事解 一〕藁八圍ハ磨刀ノ料ニ非ズ、鍛鍊ノ時燒テ灰トナシ、用テ以テ折疊鍱合スベキノ用ナリ、

〔北山抄 七都省雜事〕請ニ內印ー雜事
下ニ諸國ー符交易進上修理諸司料藁事

〔續修東大寺正倉院文書 三十二〕造佛所作物帳
藁六百卅圍自ニ島宮ー運車九兩

稻莖

〔重修本草綱目啓蒙十七麻麥稻〕粳
增、○中略紀州熊野本宮山中水澤中ニ、自然生ノ者アリ、年々繁茂ス、里俗空海ノ栽ル所ト云フ、然ルニ稻ハ天下ニ普シト雖ドモ、其始ハ皆穭生ナリ、又仙臺城州、伏見稲荷山ニモアリト云、

〔倭訓栞中編伊二〕いなから　古事記にみゆ、稻莖の義成べし、

〔古事記中景行〕於是坐倭后等及御子等諸下到而、作御陵、卽匍匐廻其地之那豆岐田字以音自那下三而、哭爲歌曰、那豆岐能、多能伊那賀良邇、伊那賀良爾、波比母登富呂布、登許呂豆良、

〔古事記傳二十九〕多能伊那賀良邇は、田之稻幹になり、

〔倭訓栞中編伊二〕いなくき　稻を刈たる跡のかぶ也

〔後拾遺和歌集戀十一〕題しらず　藤原顯季朝臣
鳴のふすかり田にたてる稻ぐきのいなとは人のいはずもあらなん

〔新葉和歌集冬六〕題しらず　前中納言爲忠
あさな〳〵霜をく山のをかべなる苅田の面にかゝるいなぐき

藁

〔新撰字鏡禾〕秸古八反、藁也、又作𦯬、古木反、肥藁役也、阿波保、〔同草〕稭莖同和、耳、同、藁可万

〔箋注倭名類聚抄九稻穀具〕按說文、稾稈也、稈禾莖也、禾嘉穀也、玄應音義引倉頡篇云、稾禾稈也、則知禾本謂粟莖、以爲稻莖者轉注、廣雅、稻穰謂之稈、是也、又昭二十七年左傳、楚郞將師令攻郤氏且𦶇之、或取一編菅焉、或取一秉秆焉、王念孫曰、楚於職方屬荊州、其穀宜稻、所謂秆者稻穰也、秆卽稈字、王念孫又曰、今江淮間以稻稈爲席薦、謂稾薦、是稻稈亦稱稾也、

〔類聚名義抄禾七〕稈古旱反、禾莖　秆或並正　稾古活反、禾革、ワラ、　稾正　〔同米七〕稾ワラ

〔伊呂波字類抄和雜物〕稾亦作藳、稾、禾稈也、

〔下學集下草木〕稾ワラ

いへり、爲の反生をもよめり、稂をよむは非也、肥前には一年再熟の稻ありて、稻孫を民間の食用とす、又此草を產帶の中に入るゝ事、又產室の片疊に是を用うるは故實ありといへり、尾州にひうち、越前にひとてといふ、

〔一話一言 三〕ひつぢいね
明の焦周が說楛に云、南海稻經穫再生、名稻孫穗稈、これ今いふひつぢいねなり、按爲說卦傳、其於稼也爲反生、このヒタチはひつぢいねなるべし、

〔重修本草綱目啓蒙 十七麻麥稻〕稉
增、○中略已ニ稻ヲ刈テ後、又苗ヲ生ジテ穗ヲ結コトアリ、諸州ニアリト雖ドモ、暖國ニ非ザレバ、實ヲ結コト甚稀ナリ、土州ニ最多ク、民用ニ利アリ、又九州地方ニモアリト云フ、コレヲヒツヂボト名ク、ヒツヂバエ、又ヒトデ、遠州ヒウチ、尾州マヽハエ、佐渡シトテ、若州シトヽ、同上漢名稻孫、呂氏春秋一名反生、易經再熟稻、農政全書金洲、閩書南產志白香秫、同上

〔古今和歌集 五秋〕題しらず　よみ人しらず
かれる田におふるひつぢのほに出ぬはよを今更に秋はてぬとか

〔後撰和歌集 五秋〕ふたりのおとこにものいひける女の、ひとりにつきにければ、いまひとりがいひつかはしける、　よみ人しらず
あけくらしまもるたのみをからせつゝたもとそほづの身とぞ成ぬる
返し
心もておふる山田のひつぢはきみまもらねどかる人もなし

〔曾根好忠集〕七月中
我宿の門田のわせのひつぢぼをみるにつけてもおやの戀しき

野生曰旅、今之飢民采旅也、皆謂不因播種自生之稻、自生之稻必不稠茂、故訓於路加於比也、其比豆知謂穫後再挺穗者、非自生稻也、開元十九年、楊州奏穭生稻二百一十五頃、再熟稻一千八百頃、其粒與常稻無異、再熟稻可以充比豆知、康熙字典引番禺志云、稻再生曰稻孫、亦是也、

〔後漢書獻帝紀九〕建安元年八月癸卯、是時宮室燒盡、百官披荊棘、依牆壁間、州郡各擁強兵、而委輸不至、群僚飢乏、尚書郎以下、自出採稆、(稆音呂、埤蒼曰、穭自生也、稆與穭同、)或飢死牆壁間、或爲兵士所殺、

〔類聚名義抄三木〕穞稆(オロカオヒ、ヒツチ、)　〔同七禾〕穧(俗秀字、羊酒反、ヒツチ、)　穭(音呂、チロカオヒ、俗云ヒツチ、)

〔八雲御抄三上地儀〕田(中略)　ひつち(万、又生也、)

〔藻鹽草三地儀〕田

ひつち田(又生たる也、かれる田におふる也、)

〔運歩色葉集比〕櫏米(ヒツチ)

〔書言字考節用集六生植〕秼(ヒツチ)(約略、稻再生者、)　穭(同、順和名、刈採之後自生稻曰穭、)

〔日本釋名下飲食〕秼(ヒツチ)　稻の再生して實なるを云、秋田をかり水をおとして後、干土(ヒツチ)より出て、みのるものなればひつちと云、

〔東雅十三穀蔬〕稻イチ(中略)　倭名鈔に、(中略)穭は自生稻也、オロカオヒといふ、俗にはヒッチといふと註せしは、オロカオヒは即自生也、ヒッチとは乾土也、舊説ヒッチは再生也、刈れる田に生ふるなりといひけり、(藻鹽草に)刈たる田の水落しあとの土に生るをいふ也、

〔物類稱呼三生植〕秼ひつぢ(いれかりたる跡に自生す)　尾州にてひうちと云、(是は轉語なり)佐渡にてまゝばえといふ、伊勢白子にて二ばんごと云、越前にてひとてといふ、

〔倭訓栞前編二十五比〕ひつぢ　倭名抄に穭をよめり、自生稻也と注せり、歌にひつぢばともよめり、又しよせともまゝばえともいへり、稻をかりし後に干土より再生するをいふ也、よて稻孫とも

月中節を前に當て植、九月始に苅取、此外種々の名は有といへども、何も皆種子かへりて、國々里々に私に名を付る、農の諺に云、帷子麥に袷稻といふ云心は、麥は帷子を著て蒔稻は袷を著て植よといふ事なれば、早くしてよしとの心也、又云、五月のしろにうへんより、四月の荒に植るにはしかじといへり、しろとは打おこしたる田を、牛馬にてとろりかきたる事也、荒とは打おこしたるまゝをいふ、是上に同じはやくうへよと云心也、

〔耕稼春秋六〕石川郡稻名○中略

晩稻

そよち　黑餅　赤餅　目黑　越後白　撰出し　よぶし　しらか眞手　三九郎　眞手　石割　岡倉　遲岡倉　遲藤四郎　よごれ　出來穗　高尾屋　犬のゑ餅　略越餅五々百共云　みの笠　大眞手　忠縄四ふしと云　ぬぎ黑　こきごろ　大しろ　遲彌六　御坊餅　新保御坊餅　ござれ餅　づら彌六　鹿島白　能と白　大穗

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年八月甲午、勅曰、○中略今年晩稻稍遂亢旱、宜免天下諸國田租之半、寺神之封不在此例、

〔躬恒集〕秋田かる所

み山田のおくての稻をかりほしてまもるかりほにいく夜へぬらし

〔曾根好忠集〕八月中

あしげなるおくての稻をまもるまに萩の盛は過やしぬらん

〔倭名類聚抄十七稻穀〕穭　唐韻云、穭音呂、後漢書穭讀於路○賀於比○、俗云比○豆知、自生稻也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕後漢書獻帝紀注、引埤蒼云、穭自生也、按說文無穭字、古只作旅、後漢書光武紀、嘉穀旅生注云、旅寄也、不因播種而生、故曰旅、今字書作穭、音呂、古字通、漢書天官書注、晉灼曰、禾

穭

秋下、敎定、露むすぶ門田のをしねひたすらに月もるよはゝねられやはする、拾玉（二早苗）小山田のをしねのなへのとりどりにみゆるうゑめのすがたなるかな、長秋詠草（中、田家鶯、）ますらをが秋のをしねをまつがきにまだ春ふかき鳥の聲かな、雲葉集（前内大臣家）もみぢばをそめてしぐるゝ秋山におくてのをしねほしやわぶらん、貞治年中行事歌合、關白良基公不堪田奏、此秋は千町のをしね數そひて作るに堪ぬ坪付もなし、これらの歌いづれもたゞ稻の事によめるをおもふべし、

〔成形圖說 五穀 十六〕宇流志禰（○中略）奥手、（○萬葉集○中略）於志禰、（○略）註 遲稻（オクイネ）、後稻（オクレイネ）、田床（タトコ）（田床は卽地なり、此者久しく田地に在るより呼べり、）晩稻（爾雅翼、本艸時珍云、十月收者爲二晩稻一、又云、諸本艸獨以二晩稻一爲レ粳者非矣、今按に、吾邦古の時に、凡稻の名を奥年となも稱て、晩稻の事に係てしは、稻の最上ものなるがゆゑなり、さらば彼土のむかしも、かくぞありて、晩稻の事を粳とのみせるもありぬべし、時珍却てしりぞけしは、方なるを圓にせしともいふべし、通雅云、東壁專以レ糯爲レ稻、殆泥二穫稻之注一乎、晩稻未二必盡是粳一也、）穉、（禮記、穉稑之種、註先種後熟曰レ穉、詩疏穉作レ重、註同、稺、內則註、穉晉酺、熟而穫レ之曰レ稻、正字通云、卽今晩稻也、是此間の俗謂出來刈也、宜しく穉の字と照し考ふべし、）晩米、（本艸必讀）晩禾、（說文）

奥手は卽奥年なり、奥は後（オクル）と通ふ、其熟の遲をいへり、年は前にいへるがごと、穀の名なれば、猶晩禾とあるにひとしきぞ、さるを奥手は唯晩の義とのみ解は、手といふこと何なるわけをしるべからず、

〔淸良記 六 上〕五穀雜穀其外物作分號類之事（○中略）

晩稻之事

一黑小法師　一黑定法師　一小兒　一大白草　一小とご　一下蜆（エビ）　一大堂後稻

一大ぎんばる　一打稻　一邊土稻　一小ぎんばる　一赤我社（ワレコソ）　一井手口　一小堂後稻

一大ゑはる（○一本作二大ゑはる一、下同）　一小白草　一鹿威（ヲトシ）　一小ゑはる　一晩半毛（ヲソナカラケ）　一赤髭　一小的草

一赤草　一雀稻　一霜稻

右廿四品は晩稻也、其内上十二は晩中稻の次、下十二は一の晩稻也、三月中時分苗代を仕廻、五

ふ題にて、清輔朝臣、をしねかるしづの菅がさ白砂に拂ひもあへずつもる雪哉、とよみて、自判に田は秋こそかる物にてあるを、雪ふらん時はいかゞなど申人ありしかど、それは僻事なり、十月にかる所おほかり、おしねといふは、おそきいねなれば、かきあひてこそ侍れといへり、こは古き證もなく、たゞ清輔朝臣の臆說にいひ出たる事と見ゆ、契冲は此清輔朝臣の說をとりて、ツイの反しなれば、おそいねを約めておしねといへるにて、俊頼朝臣の歌は誤也といへり、こはうけられぬ事也、契冲が說に俊頼朝臣は歌に堪能なるまゝに、ほしいまゝにをしねの詞をつかはれしならんといへるはたがへり、俊頼朝臣よりも先輩なる仲實朝臣の歌にもよめるをば、いかでわすれけん、歌に堪能なればとて、あらぬ詞をよみいづるといふことあるまじきなり、稻をしねといへる詞なき事ならば、ツイの反によりて、おそいねの義となすもことわりあれど、さならでもしねといふ詞あるからは、これのみツイを約めたる詞とはいひがたし、さて事は少しも古きかたにこそよるべきを、清輔朝臣のいへる事をのみ證として、それより前なる仲實俊頼などの歌を誤也とせん事心ゆかず、たとへ後の人のいへる事也とも、正しき證あらばよるべけれど、清輔朝臣の說も、證もなき臆說なるをや、この朝臣は世の人にそむきて、ひがごとをおほくいひけるよし、俊成卿の正治奏狀にも見ゆ、また今ある奥儀抄袋草子にも、あらぬひがごとの多きをおもへば、いかで此朝臣のみより所となすべき、契冲がおそいねの事をよしとおもへるは、ツイの反しなるになづめるもの也、五十音になづむ時は、ことの心をうしなふ事おほし、初學の人心せよ、

廣足按に、稻をしねといふことは、和名抄祭祀具に糈米、(和名久萬之禰)また稻穀部に糙、(加知之禰)秳、(乃古利之禰)秔米(宇流之禰)などもあり、天智紀に稻種(タナシネ)ともよめり、歌には新勅(秋下、家隆)かた岡のもりの梢も色づきぬわさ田のをしね今やからまし、續古(秋下、入道前太政大臣、)しらつゆのおくてのをしね打なびき田中の井どに秋風ぞふく、同(同、雅成親王、)秋の田のをしね色づく今よりやねられぬいほのよさむなるらん、新後

〔言塵集四〕一稲いなくばとは稲の名也、〇中略葉白と云はおくて也、

〔日本釋名米穀下〕晩稲　おくれて出る也、おそく穗にいづる也、ては出也、

〔圓珠庵雜記〕おしねはおそいねといふことを、そいの反しなれば、つゞめていへるなり、おくては奥手にて異名なるべきを、おほくはおくてとよめり、

〔傍廂後篇〕おしねとをしねとは異なり
おしねは晩稲にておくてなり早稲をわせといふ對言なり、をしねは小稲にて、美稱なれば、早稲晩稲共にいへり、新勅撰集、散木集などに、わさ田のをしねとよみしは早稲なり、新撰六帖に、濱田のをしね打ちなびき早刈しはに成りぞしにける、とあるもわせなり、續古今集に、しら露のおくてのをしね云々、新續古今集に、夕霜のおくてのおしね云々とよみしは、おくて即おしねなり、おしねはおくてにて、をしねはわせおくてともにいへり、

〔增補雅言集覽十二遺〕をしね、小稲春海が假字拾要云、をは發語也、をざゝ、をすゝきなどいふをと同じ、稲としねは古へ通はしいへり孝昭天皇の御名を、古事記に御眞津日子訶惠志泥命とあるを、日本紀に觀松彥香殖稲天皇としるされたるは、稲を志泥の假字に用られたる也、又催馬樂に、みしねつくともあり、此外に古人の名に甘稲などいへる類多くありをしねといふ詞は、古き歌には見えず、堀川百首に、仲實朝臣、秋田かるをしねのひたははへたれど稲負鳥の來なくなるかな、また俊頼朝臣、秋かりしむろのをしねをおもひ出て春ぞたなゐにたねをかしける、又同じ朝臣の散木集に、かつしかのわさ田のをしねこぎたれてなきもたゆれどつきぬ涙か、又同じ朝臣の新古今集に入たる歌に、うき身にはやまだのをしねおしこめて世をひたすらにうらみわびぬる、新撰六帖に、光俊朝臣、浦風に濱田のをしねうちなびきはやかりしほになりにけるかな、これらの歌はたゞ稲といふべきを、をしねといへる也、さるを安元二年十月右大臣家歌合に、初雪とい

右十二色は疾中稻にして、いづれも上白米也、早稻の次に出る、

一內藏　一今大塔　一上蜆毛　一小法師　一晚饗膳　一大とご　一半毛ナカラク　一白我社ワレコソ

一清水法師　一定法師　一小けば　一大兒チゴ

右合十二品いづれも上米にて、早稻疾中晚中稻と順々に植、又其ごとく熟する也、雖然上農下農の替り有て、前も後に成事有、三月始に種子を蒔、四月末に植て、八月末に苅取分、

〔耕稼春秋 六〕石川郡稻名〇中略

中稻

ちく　石立彌六　礪波彌六　小崎　小彌六　赤彌六　藤四郎ちく共云　三七餅　稻泉　小白

柏野田　大佛餅彌六餅共云　雀しらず　若狹彌六　大彌六　矢筈彌六　太郎兵衞餅　京はやり

はな打　唐千餅

晚稻

〔曾根好忠集〕七月中

我まもるなかての稻ものきは落てむら〳〵ほさき出にけらしも

〔類聚名義抄 七禾〕晚稻オクテ

〔下學集 下草木〕晚稻ヲクテ

〔易林本節用集 草木〕晚稻ヲシネ

〔書言字考節用集 六生植〕晚粳ヲシネヲクテ 時珍云、粳稻十月收者、晚稻同

〔和爾雅 六米穀〕晚稻ヲクテヲシネ 晚米、糯並同、

〔八雲御抄 三上地儀〕田〇中略 を。し。ね。おそき也　おくておそき田なり

〔藻鹽草 三地儀〕田

をしねおそき也　おくて同上、又云、おくての田と〳〵、

〔萬葉集〈秋相聞〉十〕寄水田
橘乎守部乃五十之門田早稻苅時過去不來跡爲等霜
〔萬葉集〈東歌〉十四〕相聞
爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氐米也母
右四首〈○中略〉〈三首〉下總國歌
〔空穗物語〈物語〉秋二〕かくて宮おとゞくに〳〵よりまいれるきぬ御らむじて、ずまゐのせちに、仁壽殿ふぢつぼの御しやうぞく、いかできようにして奉らむ、〈○中略〉いかにぞ御ほにどもれいのかずさぶらふや、よしのりいふ、御ほにはわせのよねをおほせにつかはせこけむ、ことしはわせのよねいとをそきとしなりといふ、
〔運歩色葉集〈那〉〕中稻
〔書言字考節用集〈生植〉六〕運稻〈八九月收者、時珍云、稉稻〉 中稻〈同〉
〔成形圖説〈五穀〉十六〕宇流志禰〈○中略〉
中手、〈字類抄○中略〉中手稻、〈○略〉註 二番物、〈俗云二番早稻〉 中稻、遲稻、〈以上本草綱目、時珍云、八月收者爲運稻、〉半夏稻、〈蔡邕月令章句、十月稻人君嘗其先熟、故在九月熟者謂之中、按に半夏稻亦中稻の事ぞ、周の十月は今の八月なり、禮記會人懸種稑之種、註、後種先熟曰稑、稑亦作穋、毛詩黍稷重穋、疏上に同じ、周禮亦おなじ、〉
中手は節中年稻にて、手は年の約たるなり、祝詞式に奥手のことを奥津御年とあるにてしるべし、年は勢と通ふがゆゑに、和勢ともいひ、又年稻を約めて志禰ともいへり、
〔清良記〈七上〉〕五穀雜穀其外物作分號類之事〈○中略〉
疾中稻之事
一佛の子　一壹本子　一備前稻　一小備前稻　一畔越　一小畔越　一野鹿　一大白稻
一小白稻　一大下馬　一捬張　一疾饗膳

初にかりて、其跡の田地には蕎麥を蒔、小粈小菜を蒔て、九月末に取て、其跡へ早麥を作り、來年中田晩田をおこし、苗代にする糧料あてがふ、此早稻作る事、百姓の一の德也、此三度の作何もさほど閙敷なき時分々々仕付て、熟しけるも、其ごとくなるによつて、こなし時も女の隙有てよし、末の暇を奪はず、人手のつかゆるなし、如此早稻中田晩田段々順々に作出ざれば、男女鬪敵事只一度にかさなり、手廻しよからず、然れば此早稻は戰場の足輕に似て、將基にては步兵のごとく、百姓の爲のみにもあらず、領主諸士百家の爲なり、米の稀なる時出來て、切目の專度を助け、其外考るに其利不可勝計、

〔耕稼春秋六〕石川郡稻名

早稻

やよ岡　彌六早稻　ちつこ松本共云　日の出　三浦　三納　かけ餅　須の谷　赤早稻

大唐早稻　示野　五々百餅　孫左衞門　雀餅　神子早稻　津輕　盆餅　ついなひき

川原早稻坊主早稻共云　引ずり　彌六餅へちばり共云　羽ひろわさくさ共云　ぼつこり　ぼうず　新保　下林

江戸　遲早稻　早大唐

〔萬葉集秋十雜歌〕詠花

嬢嬬等(ヲトメラガ)、行相乃速稻乎(ユキアヒノワセヲ)、刈時(カルトキニ)、成來下(ナリニケラシモ)、芽子花咲(ハギノハナサク)、

〔袖中抄十九〕ゆきあひのわせ

顯昭云、ゆきあひのわせとは、ところの名をわせに讀つけたる也、万葉歌に、

ゆきあひのさかのふもとにひらけたるさくらのはなを見せんこもがな

此歌にて心えあはするに、前のわせの名も、所につけたるときこゆる也、

〔萬葉集略解十下〕行あひのわせとは、夏と秋と行あふころみのる早稻をいふなるべし、

きあひのわせなとめごに行あひのわせと云り　かつしかわせ下總かつしかといふ所にありと云々

〔日本釋名下米穀〕早稻(ワセ)　はやし也、はとわと通じ、しとせと通ず、やの字を略せり、

〔倭訓栞前編三十七和〕わせ　倭名鈔に、早稻をよめり、爾雅翼に、秈比於秔小、其種甚早、今人爲早稻と見ゆ、わははやの急語、せはしね反也、一說にわせは走る也、はしるをわしるともいふ、早く出る稻を走り穗といひ、凡て早く出る穀菜どもにはしりといへり、歌にはやわせとよめり、

〔成形圖說五穀十六〕字流志爾略○中和世略○註、早手(ハヤテ)手といふ義、中手の所にいへり、早代(ワシロ)匠材集、志呂はせと通へり、早稉本艸、時珍云、六七月收者なり、早稻農暇格物論、閩書云、春種夏熟曰早稻、

早禾農書　穋稻農政全書、種田法、浸處宜種黃穋稻、

〔段注說文解字七上禾〕稙早種也、此謂凡穀皆有早種者、魯頌傳曰、先種曰稙、謂先種先熟也、釋名曰、青徐人謂長婦曰稙長、禾苗先生者曰稙、取名於此也、从禾凡言諸穀、而字从禾者、依嘉穀爲言也、直聲、常職切、一部、詩曰、稙稚尗麥、魯頌閟宮文、按稚當作稺、郭景純注方言曰、稺古稚字、是則晉人皆作稚、故稺稚爲古今字、寫說文者用今字、因襲之耳、稑疾孰也、謂凡穀有如此者、邠風傳曰、先孰曰稑、周禮內宰注、鄭司農云、後種先孰謂之稑、按土宜物性卽同一種、而有不同、故大司徒必辨十有二壤之物、而知其種、司稼掌巡邦野之稼、而辨穜稑之種也、从禾坴聲、力竹切、三部、詩曰、黍稷種稑、邠風七月文、按七月及閟宮皆作重穋、許種下不誤、而誤於稑下、蓋本作重、轉寫易之也、穋稑或从翏、翏聲也、今周禮作稑、毛詩作穋、

〔清良記七上〕五穀雜穀其外物作分號類之事

早稻之類

一古出氣成(フルゲナシ)　一廿日早稻　一四十早稻　一𧝒早稻　一薫早稻　一馬嫁早稻　一黑早稻

一庭たまり　一內たまり　一丹波早稻　一九王子　一畑早稻

右十二品は古來の名也、此外餅太米に早稻有、其外今時者色々の名ありといへども、それは其田地等不相應成により、種子かへり又は惡敷度おそくわれば、色々に變ずる事有り、植前後は此事記ごとくにして、二月彼岸に種子蒔、四月初より同月廿日時分迄に植仕廻、六月末七月の

右籾才覺いたし、蒔附試候樣可被致候事、

戊十一月

湖稻

〔牧民金鑑十一〕明和五子年十月四日申渡書付

各御代官所御預所村々地先海邊附遠淺の場所、幷本田の内に葭、潮入場所、御取箇附無之場所は、以來湖稻籾植付候樣、村々吟味可被遂候、海邊遠淺之場所は、稻苅株江居芥殘寄洲出來、追年地高に相成候得ば、本田御高入にも相成、御益の事に候、既に當子年備前守支配所葛西領村々地先海表江試植付候處、湖稻出來いたし候、右體海邊付、幷潮入の場所吟味いたし、以來植付時節、湖稻籾植付候樣可被致候、

右之趣申渡候樣、松右近將監殿被仰渡候間、得其意、以來無忘却、右體の場所巨細致吟味、植付可相成場所有之候はゞ、凡反別書附御取箇方江可被差出候、以上、

子十月

早稻

〔類聚名義抄七禾〕早稻ワ○セ○　穉音稚ワセノメ子　稑音六オクテ、ワセ、　穋或　稑俗　穛稻不粘、サクリセ、　穱正

穉或　穉俗　種正、ワセ、オクテ、

〔伊呂波字類抄和植物附植物具〕早稻ワセ　稑先熟田種　穛ワセ巳上

〔八雲御抄三上地儀〕田中略　わせ〇はやき也、中略　はやわせ　門田わせ中略〇万　ゆきあひのわせ万、なとめこにゆきあひのわせと云り、　むろのはやわせ

〔下學集下草木〕早稻ワセ

〔書言字考節用集六生植〕早稉ワセ時珍云、稉稻六七月收者、　早稻同

〔藻鹽草三地儀〕田

わせ田さやき也、わがせこがわさ田つくれる秋の田のわさほのほぐみとよめり、　わせこれもはやき也、あるひはむろのはやはせとも云り、　門田わせ　ゆ

〔齊民要術 二〕旱稻

旱稻、用下田白土勝黑土、○略 注 凡下田停水處、燥則堅垎、濕則汙泥、難治而易荒、墝埆而殺種、其春耕者殺種尤甚、故宜五六月暵之、以擬穬麥、麥時水澇、不得納種者、九月中復一轉、至春種稻、萬不失一、(春耕者十不收五、蓋誤人耳、)凡種下田、不問秋夏、候水盡地白、背時速耕、杷勞頻煩令熟、(過燥則堅、過雨則泥、所以宜速耕也、)二月半種稻爲上時、三月爲中時、四月初及半爲下時、漬種如法、裛令開口、耬耩稙種之、(稙種者、省耕而生、科又勝擲者、)即再遍勞、(若歲寒早種、慮時晩、即不漬種、恐芽焦也、)其土黑堅彊之地、種未生前、遇旱者、欲得牛羊及人履踐之、濕則不用一跡入、稻既生、猶欲令人踐壟背、(踐者茂而多實也、)苗長三寸、杷勞而鋤之、鋤惟欲速、(稻苗性弱、不能扇草、故宜數鋤之、)每經一雨、輒欲杷勞、苗高尺許則鋒、大雨無所作、宜冒雨薅之、科大如概者、五六月中霖雨時、拔而栽之、(栽法欲淺、令其根須四散、則滋茂、深而直下者、聚而不科、其苗長者、亦可拔去葉端數寸、勿傷其心也、)入七月不復任栽、(七月百草成、時晩故也、)其高田種者、不求極良、唯須廢地、(過廢地則無草、)亦秋耕杷勞令熟、至春黃場納種、(不宜濕下、)餘法悉與下田同矣、

〔王氏農書 二十七 穀譜集〕旱稻

稻之名一、而水旱之名異、蓋水稻宜近上流、旱稻宜用下田、○中略 今閩中有得占城稻種、高仰處皆宜種之、謂之旱占、其米粒大而且甘、爲旱稻種甚佳、北方水源頗少、惟陸地沾濕處種稻、其耕鋤薅拔一如前法、一種有小香稻者、赤芒白粒、其米如玉、飯之香美、凡祭祀延賓以爲上餽、蓋貴其罕也、

〔經濟要錄 八 百穀〕旱稻ハ俗ニ畠稻ト云フ、此ニモ早中晩及ビ粳モ糯モアリテ、甚多種ナル者ナリ、先年予(○佐藤信淵)遊歷中ニ、諸國ヨリ此畠稻ノ種子ヲ聚メシニ、大平、治部、五十日、熊糯、日陰早稻、堤固(カタメ)、旱糯、霖雨早稻(アメフリワセ)、振袖糯、波濤(ナミクヾリ)、八尺糯等、凡十七種ヲ得テ、此ヲ門人白井忠藏ト云者ニ預テ、此種子ヲ失ザランコトヲ命ゼリ、白井ハ、上總國埴生ノ郡岩川村ノ豪農ナリ、

〔牧民金鑑 十一〕安永七戊年十一月十四日申渡

旱損所江當戌年岡稻植付候處、出來方宜有之候間、右體干損所之村方ニ而、岡稻等無之場所江は、

思ふやうに耕作のなりがたき所、かならずある物なれば、畠稻の作り樣、心あひをよく考へて作り試べき事也、思ひの外相應して、水稻の利分におとらざる事もあるなり

〔大和本草四穀〕占城米　陸田ニウフ、粒大ナリ、民俗ニハ野稻ト云、粳アリ糯アリ、糯米ハ味カロシ、常ノモチ米ハ水ニ久シク浸シテ後ニ蒸ス、俄カニ浸シムシテハ熟セズ、之ハ水ニ浸シテ即時ニムシテ能熟ス、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀稻〕粳

増〇中略集解時珍ノ說ニ、旱稻ト云ハ、ハタケゴメ、一名ボンデン、又テンヂタナニ、タウイネトモ云、一名旱稜、正字通陸稻、六書故陸地ニ栽テ茂盛ス、苗短クシテ小粒ナリ、微ク臭氣アリ、然レドモ味甚ダ甘シ、コレニモ粳糯ノ別アリ、穗ニ芒ナキモノモアリ、惟早中晚ノ別ナシ、陸生ノ品類十餘種アリ、

〔成形圖說十五穀六〕畠稻〇中略

岡稻はむかし皇孫瓊々杵尊、襲の高千穗峯へ天降玉ひし時、深霧にぎさへに晦冥しを、稻穗をもて打撒玉ひしかば、忽に開明なることを得給たりしより、高千穗峯の名は出來けるなり、今其地に陸稻多く生るなどいふこと、日向風土記に載たり、〇中略さて其撒栽られしは陸稻にして、今の世に至るまで、霧島の地には歲々種を下さずして、自生の野稻多しといふことも、紀中の文にしるし、且はその地の民相傳へて、其種をしも霧島稻の名を存しけるは、少緣ならぬ事なるぞかし、今に至るまで西州の農夫は、稻の初穗をもて必霧島神廟に獻を、俗の恒となし來るも、所由あるをしるべし、此吾邦の陸稻世にあらはれし始なるぞ、按に西土のいにしへは、皆陸稻なりき、本艸時珍云、古者惟下種成畦、故祭祀謂稻爲嘉蔬、此陸稻の證なり、夫下種に成畦とあれば、泥濘の中に畦をなすべからざるにてしるべし、又時周頌に、豐年多稌とあるを、稌は稻利下濕と注せり、稻にしては下濕にこそう、るを、かく分ていひしは、水田の稻といふことぞ、

〔農業全書 二 五穀〕畠稻（又旱稻共、又ゐなかにては野稻とも云、）畠稻の種子も色々あり、土地所の考して、利分のまされるを作るべし、稉あり糯あり、其中に占城稻と云は、糯にて米白く、その粒甚ふとく、穗の長さ一尺餘もありて、其から大きに高くして葦のごとし、是畠稻の名物なり、土地にあひたる所にては、おほく作りて過分の利潤を見るべし、凡旱稻を作る地は、水田にしては水乏しく、又畠にして濕氣ありて、兩樣ともに宜しからざる地に是をうゆれば、水稻にも勝れて實ある物なり、肥たる地は尤よし、大かたの土地にても、濕氣ありて、少深く和らかなる地に宜し、糞のしかけ手入、取分ほどらひある物なり、心を盡して作るべし、苗地の事、冬よりくはしくこなし、雪霜にあはせてさらし置たるに、熟糞をうちをきて、籾を水に浸す事、三日にして取あげ、日にあて口の少ひらくを見て、灰ごゑを用ひて、横筋を少深くきり、麥の蒔足ほどに、むらなくまき、土をおほふ事も麥に同じ、若地かはきたらば、うすき水ごゑをそゝぎて、土をおほふべし、猶相つゞきて旱せば、其後も度々水をそゝぐべし、苗二三寸にもなりたる時、畦のたかき所をふみ付べし、但うるほひある時はふみ付べからず、同じく種子を蒔時分の事、二月半より四月まではくるしからず、さて移しうゆる事、甚肥たる地を好むにもあらず、荒しをきたるを、秋より度々耕し、細かにこなしをきて、苗の長さ七八寸なるを待て、がんぎを少ふかく切て、灰ごゑを以て、葱をうゆるごとく、一科に三四本、磽地ならば四五本づゝうゆべし、かぶ殊の外ふとる物なれば、肥地ならば、かたのごとく薄くうゆべし、中うち芸り培ふ事、麥とかはる事なし、中うちの度ごとに色を見て、よく熟したる糞水をうすくしてかくべし、總じて甘味のつよき物なるゆへ、濃糞又はあたらしくつよき糞をば、必用ゆべからず、虫氣する物なり、唐にて毎度旱損する國に、此旱稻のたねを、他國より求め來りて作りてより後、飢饉のうれへを助りたりと、農書に記せり、是占城稻のたねと見えたり、何れの村里にも、田には水乏しく、畠にしては濕氣ありて、

〔散木集註秋〕たもとごは稲名なり、但つねにはちもとごといふを、たもとごともいふにや、此集にもちもとごとかきたるもあれど、末の袖しぼるによせて、たもとごとよめるにもやあらん、五音かよひたれば、ちもとごをたもとごとよみなせるにもや、此人のうたには、其例おほく侍り、

〔古今著聞集飲食十八〕俊頼朝臣秋のすゑつかたに、たなかみといふ所へ罷たりけるに、いねをかけつみたるを、あれはなにといふいねぞととひければ、法師子のいねなりといひける、又あしたに、きのふの法師子のいねにて、御みそうづとて、くはせたりければよみ侍ける、

きのふみし法し子のいねよのほどにみそうづまでになりにけるかな

紫芒稲

〔草木育種後編穀菜下〕紫芒稲(むらさきいね)松江府志　常の稲を植る法の如くなるべし、葉紫黒色なり、勢州にて此葉をとり、紫色の染料に用ゆといふ、又糯米にて芒なきものあり、火焼糯授時通考といふ、又芒あるものを長鬚糯閩上といふ、

岡稲

〔本朝食鑑穀一〕稲

稈圖者曰岡穗(オカボ)、又称岡稲、倶不宜、惟民食可足、

〔清良記七上〕五穀雜穀其外物作分號類之事

畑稲之事

一畑早稲　一野稲　一薄色　一野餅　一毛黒ダウゴ稲ニ似タリ　一毛白白稲ニ似タリ

一畑我社　一畑法師　一畑定法師　一野けは　一野ざらし　一野赤餅

右十二品いづれも白米也、苗にするは、三月初より次第に田稲のごとく、實植は畑を能打起して溝をかき、先へ糞をかけて種子を蒔也、土はおんぢよし、眞土其次、きろは惡し、切々中をけづり、草を引事専也、草に痛む稲なり、

秋の田を吹くる風のかうばしみこや袖のこるにほひなるらん、按に異本に、かうばしき袖のこのとあり、印本は誤れり、又家集如覺法師、

さよ衣たちのゝひだに耳なれて袖のこなたにすがるなく也、按に、さよ衣たち野はひだといはん料の序、及袖の子といはん緣語におけり、ひだは衣のひだに引板(ヒタ)をよせ、袖のこなたは、袖の此方に袖の子と水田(コナタ)をふくめてよせたるなり、○中略ほうしごの稻は、今の俗にボ。ウ。ズ。イ。チ。と呼て、芒なき種類也、曲洧舊聞に、洛下(一作中)稻田亦多、土人以稻之無芒者、爲和尙稻、亦猶浙中人呼師婆粳、其實一也とあるは、同日の談也、曲洧舊聞一卷、新安の朱弁字は少年が撰にて、知不足齋叢書中に收たり、

〔增補雅言集覽〕二十四(曾)そでのこいね　信友云、ほうしごの稻ト云ヘルハ、若狹ニテ稻穗ノ芒ノ無キ一種アルヲ坊主稻ト云ヘリ、信濃ニテモ然イフト國人イヘリ、決テコレナルベシ、サテ袖のこトハ、僧ノ托鉢シ米ヲ乞アリクニ、與フル米ヲ鉢ノ子ト云フヲオモヘバ、古ハ僧ノ托鉢シテ米ヲ受ルトキ、袖ヲヒロゲ鉢ヲ載テ、米ヲ受ルナラヒナリケンヲ、其ヲ袖の子ト云ヒシナルベシ、太平記ノ(參考本卅三二十三丁)ニ、京都兵亂ニイタク荒衰ヘタル狀ヲイヒテ、飢ニノゾミタル人ノ疲レ乞スルコトヲ、道路ニ袖をひろげト云ヒ、今モ袖乞ト云フモ、其唱ノ殘レルニオモヒ合スベシ、又袖の子に引かさねト云ル引トハ、僧ニ布施ヲ配與フルヲ引ト云ヒ、又茶ヲ配與フルヲ引茶ト云フ、又饗應ニ酒杯又肴物ナド客ニ配ルヲ引ト云ヒ、引物トモ云フ、其料ノ杯ヲ引杯ト云ヒ、肴物ヲ引物ト云フナドノ引ニテ、米ヲ引カサネテ得タルサマ也、コノ意ヲエテ、稻ノタフレタルニヨミナセルナリ、

〔散木弃謌集〕三秋秋の田をよめる

山里はいでいこのへるたもとごに風そよめきて袖しぼるなり

穭ノ子稲
法師子稲

釋名香發、和名此米香氣勝他米芬香、故名、筑前州種之、供上膳也、山公醫旨云香稲米味甘軟、其氣香甜、紅者謂之香紅蓮、其熟最早、晩者謂之香稲米云々、今按蘇頌所謂、香粳長白如玉者是也、但不收穀、故不多種也、

氣味、甘温無毒、主治、開胃益氣調中、滑澀補精、惜不能多種耳、(山公醫旨)

〔東垣食物本草一穀〕香稲米

香稲米、味甘軟、其氣甜香可愛、有紅白二種、又一種紅而長者、三粒接之、約長寸許、比他穀收最晩、開胃益中、滑澀補精、惜人不能多種耳、

〔毛吹草三〕筑後　芳米　豐前　芳米

〔散木弃謌集三秋〕いねのたふれたるをみて

おぼつかなたが袖のこにひきかさねほうしごのいねかへしそめけん

〔散木集註秋〕そでのこ、ほうしご、ともに稲名也、

〔松屋筆記七十四〕袖のこほうしごなどいふ稲名

按に、末句(後頼歌)かへしそめけんと有は誤也、顯昭注本にかぶしに作れるをよしとす、顯注云、そでのこ、ほうしご、ともに稲名也、かぶすとは、稲の實の成て傾くをいふ也云々、かぶしは古事記(上巻)八千矛神の御歌に、夜麻登能、比登母登須々岐宇那加夫斯云々、(山本の一本薄の項に引る歌なり)神代紀(下巻十二丁表)に頗傾此云歌矛志云々、天智紀(三年)に垂頴而熟云々、徒然草(百五段)に、かぶしがたちなどはとよしと見えて云々、四季物語(十一月段)にゑぼしうちかたぶきたるかぶしがたちをかしきもの成べし云々なども見ゆ、丹後守爲忠家初度百首に、山田苗代を爲忠、

うち山のすその丶小田の苗代にいくらかまきし袖の子の種、夫木集(秋三)秋田部に、御集花山院御製、

この稻は十數年前に、奥州白河領に鶴のくはへ來ておとし、稻穗なり、これをうゑて種とりて、こゝにもつたはりしを、淺草關氏の園中にうゑてみのりしなり、穗の長さ九寸ばかり、粟粒凡八十五六七、粒の長さ三分五厘、廣さ一分二厘ほどあり、或人のもち米なりといひしほどに、やがてねりて試みしが、至りて淡味なり、これは朝鮮の種なるべしといひあへり、

平田篤胤曰、嚢よはくて用に堪へざれば異國の產なる事明かなりといへり、西教寺曰、鶴は朝鮮よりわたると聞き及べり、さてかくばかり大粒なる米をみし事はあらず、もしは慈恩傳にみえし大人米なるべきかといへり、按するに、慈恩傳にも、大人米は烏豆より大なりとみえたれば、いかゞあらん、高田與淸曰、駿河國に米宮といふあり、いにしへ異國より渡りしとて、烏喰豆よりも大なる米を神體とせり、これ大人米なるべしといへり、

〔大唐西域記八〕摩揭陀國、周五千餘里、城少居人、邑多編戶、地沃壤、滋稼穡、有異稻種、其粒麤大、香味殊越、光色特甚、彼俗謂之供大人米、

〔續高僧傳四上〕唐京師大慈恩寺釋玄弉傳一

山城之北可五里許、至曷羅闍姞利呬城、唐言新王舍也、餘傳所稱者是矣、又北三十餘里至那爛陀寺、唐言施無厭也、贍部洲中寺之最者勿高此矣、○中略弉歷諸國風聲久遠、將造其寺、乘差大德四十人、至莊迎宿、莊卽目連之本村也、明日食後僧二百餘、俗人千餘、擧輿幢蓋香花來迎引入都會、與衆相慰問訖、唱令住寺、○中略寺素立法、通三藏者、員置十人、由來闕一、以弉風問便處其位、日給上饌二十盤、大人米一升、檳榔豆蔻龍腦香乳酥蜜等、淨人四、婆羅一、行乘象輿、三十人從、大人米者秔米也、大如烏豆、飯香百步、惟此國有、

〔和爾雅六米穀〕芳米カバシコ

〔食物知新一穀〕香稻米山公嗜

大人米 コビトジマ

ては食多し、農人の食てよき稲也、第一日損少して虫喰ず、風こぼれにあふ事又餘にすぐれたり、是のみにて其外こなしに手間不入、能事あまた有稲也、右の稲數合九十六色、たれとても不残つくるにはあらざれども、それ〳〵の田地相應の所を用るにより、村々里々にあり、何稲にもかぎらず、數年よく耕糞よくしたる田地に、能時分を積りて作れば實入吉、太米田地をきらはずといへども、よき土には實多し、

〔土佐國水土私考〕土佐國粳米有早中晩之收、各處種類甚多、氣味不能無少異矣、出于幡多郡者呼名晩實最爲下品、一種大唐米、通國呼名太米、蓋此種中古自西土來乎、故得此名、或說以秈米充此物、與本艸所言多胞合之、此物比諸粳則氣味淡薄、故常食而有大益、嘗聞斯地産斯人、則天必生穀食以遂其性命、得之則生、不得則死、然則太米之産於此州、卽此州萬民之天也、世之士夫或謂卑賤之食而愧常食之、其亦不懼天乎、

〔毛吹草　三〕土佐　太米餅（ダイタウモチ）白米ナリ　肥前　白太米（シロダイタウ）　日向　赤太米（アカダイタウ）大隅薩摩三國作之

〔農術鑑正記　上〕大唐稲は、昔は肥前の白大唐、日向の赤大唐とて名物也、今諸國に多く作る、

〔紀伊續風土記　物産二〕秈（タイタウコメ）本草　牟婁郡處々より出づ、方言キアカと呼ぶ者、赤秈米なり、

〔重修本草綱目啓蒙　十七穀麻參稲〕粳、増、一種オホイネト云モノアリ、苗ノ形尋常ノ者ニ同クシテ、高サ八九尺ニモ及ブ、米粒ノ大サ常米ニ倍ス、中粳ナリ、近年種ヲ傳テ處處ニ栽ユ、卽集解時珍ノ說ニ、眞臘有水稲高丈許ト云、又留青日札ニ、供大人米ノ名アリ、曰摩揭陀國有異稲巨粒、號曰供大人米ト云是也、又一種コビトジマト稱スルモノアリ、形狀尋常ノ者ニ似テ、水田ニ培養スルトモ、僅ニ七八寸ニ過ギズ、其實大サ胡麻ノ如シ、近年種ヲ傳テ盆ニ栽テ愛玩ス、

〔兎園小說　十集〕鶴の稲　輪池

磨礱以去稃爲米、如不蒸則舂易碎、是一異也、日向之產爲赤色良、薩摩之產鮮赤色次之、凡赤米能舂去糠、乃白色帶微紅文、爲飯能倍殖不粘、溫時有香氣甚佳、冷則風味踈、而食之易飢、以爲賤民食、又有秈糯、謂之大唐糯、而有赤白二種、共稍粘、

〔食物知新一穀〕秈米綱目

釋名占稻同上　唐芒子(タウバウシ)和名　其種自占城國來、西土多種之、有赤白二種、白者早熟而鮮明、故名秈、和俗從異邦來物、通稱唐、故呼唐芒子、又作大寒米(タウボウレ)、又名占城米(チヤンハコメ)、

〔重修本草綱目啓蒙十七麻麥稻〕秈　タイトウゴメ　トウボシ筑前　トウボウシ加州稱名　一名占米食物本草　粘通雅　秈稻同上

赤白二種アリ、粳糯ノ分アリ、皆性輕クシテ、病人ノ食トナスベシ、柔ナル飯モ、冷ニナレバ硬クナル、コノ種モト舶來ナル故、タイトウゴメト云フ、唐山ノ大冬米ヲ以テコレトスルハ非ナリ、增秈米ハ皆早稻ニシテ晩稻ナシ、赤白ノ二種アリト雖ドモ、白粒ヨリハ赤粒ノ者實多キユヘ、多クハコレヲ栽ユ、肥前蓮池ヨリ來ル者ヲ上品トス、コノ品性輕シト雖ドモ、最下品ニシテ賤民ノ食ナリ、病人食ノベカラズ、唐山ノ大多米ト云ハ、泉州府志閩書等ニ出ヅ、然レドモ大多トアリテ米字ナシ、香煎ニハ稍米ヲ用ユ、其方陳皮茴香各二錢四分、薏苡仁八分、秈米一錢半、夏月一錢二分、山椒八分、右各炒爲細末、加燒白鹽少許、點湯服、以代茶、コレ京都祇園ノ名物ナリ、祇園コガシトモ云フ、

〔淸良記七上〕五穀雜穀其外物作分號類之事

太米之事

一早大唐　一白早大唐　一唐法師　一大唐餅　一小大唐　一晩大唐　一唐穗生(ホイ)　一野大唐

右八品何れも替り有、此内餅は米少して不善、其外は白地を嫌はず、上田には彌能、其上飯にし

香、其香雖佳、亦嫌有鼠氣、故食之者少矣、

〔大和本草四穀〕秈　本艸又占稻ト云、時珍云、秈似粳而粒小、其熟最早、六七月可收、有赤白二色、近世異國ヨリ來ル故、國俗ニ大唐米ト云、西土ノ俗タウボシト云、色赤シテ小粒ナリ、飯ニシテネバリナク、味淡クシテ消化シ易ク性カロシ、痰多ク積滯アル人、飯トシテ食スベシ、又コガシトス、臘水ニ一兩日浸シテ後、日ニサラシ收置、煮テ食スレバ、瀉痢ヲトヾム、又秈ノ陳倉米ヲ藥ヲ丸スル糊トスルニ宜シ、本艸時珍ガ說ニ、陳倉米ニ用之、蒸晒爲之トイヘリ、穀トモニ貯ヘヲクバ、十年二十年ヲヘテモ不腐、味淡キユヘ虫ハマズ、鴫ニカヘバ卵ヲ多クウム、舊穀盡ル時秋早ク熟シ、實ヲ收ル事多ク、米硬クシテ他粳ヨリ飯多シ、故民利之多クックル、民用ニ利アリ、秈ヲワセゴメト訓ズルハ誤ナリ、田ニアルトキ颶風ニアヘバ脫ヤスシ、又白米アリ潔シ、形狀同ジケレドモ、實ヲ收ムル事、赤米ヨリ少シ、故ニ農多クウヘズ、本艸ニ秈其種占城ヨリ閩ニ來ル、赤白二色アリ、粳ト大同小異トイヘリ、凡諸稻其品甚多シ、然其形色性味相似タリ、只秈ノミ諸稻ト不同、今諸州各處皆之ヲウフ、

〔大和本草附錄一穀〕秈　凡異邦ノ南國皆種之爲粳、其價甚賤、每百斤直銀二三匁、今日本ノ諸州アマネク種フ、早ク熟ス、最民用ニ利アリ、性カロクシテ病人可食、久ニ堪フ、モミニテ貯レバ二三十年ヲ保ツ、

〔和漢三才圖會百三穀〕秈(音仙)　占稻　早稻　俗云大唐米　又云野稻。

本綱、秈似粳而粒小、始自閩人得種於占城國、宋眞宗遣使就閩取三萬斛、分給諸道爲種、故今皆有之、高仰處俱可種、其熟最早、六七月可收、有赤白二色、與粳大同小異、

按秈本此天竺之種、而宋時始種于中華、而傳於本朝、故呼曰大唐米、今亦西國多種之、能繁茂而早熟、凡粳米亦有赤白二種、特此米赤者多、白者少、故通稱𥻘(音仙)赤米、苅收畢、糘於鍋、入水少許、蒸煑晒乾

録切、亦胡録切、

〔東雅十三穀蔬〕稻イネ○中略 倭名鈔に、○中略 糯は青稻白米也、漢語抄にミシロイネといふと註せしは、其實の白きをいひしなり、

〔多識編三穀〕秈、今按占城米、異名占稻、綱目 早稻、

〔和爾雅六米穀〕赤米秈、同、所謂大冬米也、

〔倭訓栞後編十一多〕たうぼし 大唐米ともいふ、秈也といへり、ほしは乾の義にや、

〔庖厨備用倭名本草二穀〕秈米 倭名抄ニ秈米ナシ、多識篇ニ和名ナシ、増補日用食性ニ、ヤキゴメトイヘルハ誤レリ、考本草、其種ハ占城國ヨリ來ル、又名占米、粳ニ似テ粒小シト云云、今各處ミナアリ、高仰處ニ倶ニ種ベシ、其熟スルコトハヤシ、六七月ニ收ムベシ、品類モ多シ、赤白二色アリ、粳米ト大同小異、元升○向井曰、此註ヲミレバ、秈米ハ西國ニ多キタイタウナルベシ、タイタウゴメニ赤白二色アリ、其粒ホソク長シ、味ウスクシテ乾キヤスク、飯ニシテネバリナク、性カロクシテ消シヤスシ、凡唐天竺其外異國ヨリ來ル米ハ、ナリ形氣味トモニ、日本ノタイタウゴメノ如シ、故ニ本草ニ云、處々ノ米ハ滋養之功ナシ、恒ニ飢ニ充ルニヨシ、南方ノ火稻ハ人ヲ補益ストイヘリ、此一種タヾ日本ノ白米ニ同ジカルベシ、日本ノ米ハ粒フトクミジカク、味アツクカワキガタク、飯ニシテネバリアリテ性ヲモシ、本草ニ云粳米ナルベシ、朝鮮ノ米ハスコシ似タリ、唐人初メテ日本ニ來ルモノハ、日本ノ米ハ性ツヨシトテ、湯トリ飯ニシテ用フ、彼是案ズルニ、秈米ハ日本ノタイタウ米也、種テ米多ク收ム、民家ノ食糧タスケ多シ、

〔本朝食鑑一穀〕稻 一種有大唐米者、本是移種于中華之種、俗稱唐乾、其稻繁茂而早熟、故處處種之、雨易腐風易墜、粒小色赤、味不佳、然煮飯倍、初民間足食、但憂米性薄而易饑、一種有鼠米者、海西最多、江東亦儘有、味美有

糯

〔延喜式左右兵庫四十九〕凡踐祚大嘗會新造神楯四枚、中略其料、中略糯米六升二合、寫書料、

〔延喜式工事解二〕糯米六升二合、寫書料、

糯米ハ略中註水ニ浸シ磨シテ泥ノ如クナラシメ、煮熟シテ厚糊トナシ、用テ以テ布ヲ黏著スルノ料ナリ、

〔東大寺正倉院文書二十八〕越前國天平四年郡稻帳

（裏書）越前國郡稻帳天平五年潤三月六日史生大初位下阿刀造佐美麻呂

糯米參拾斛料稻陸伯束斛別廿束

足羽郡捌拾束　大野郡肆拾束　江沼郡貳伯捌拾束　加賀郡貳伯束

〔東大寺正倉院文書十五〕尾張國天平六年正稅帳

葉栗郡

天平五年定穀壹萬捌阡陸伯伍拾漆斛捌斗漆升正稅中略○

糯米頴捌拾束

〔建久三年皇大神宮年中行事十二月〕同夜十八日私御饌供進事中略○

抑御飯料、糯米五斗、麴五升、御神田預粂日運進、於酒米者、自御倉奉下也、

〔倭名類聚抄稻穀十七〕糯　唐韻云、糯音○奴、漢○語○抄○云、美○之○呂○乃○以○禰、青稻白米也、

〔箋注倭名類聚抄稻穀九〕按說文有稬、訓稻不黏者、玉篇糯亦稬字、段玉裁曰、稻有至黏之者、稬是也、有次稬者、稉是也、有不黏者、糯是也、稉與糯爲飯、稬以釀酒、爲餌餈、今與古同、然則糯者字流之譌之最不黏者也、唐韻訓青稻白米、未知所據、其義亦不詳、

〔段注說文解字七上禾〕○穬稻不黏者、凡穀皆有黏者、有不黏者、秫則穄之黏者也、穄則黍之不黏者也、稻有不黏者、卽穬是也、今俗通謂不黏者爲秈米、集韻類篇皆云、力音○江○南○呼○穬○爲○秈、亦作秈作酒、按說文玉篇、皆有穬無秈、蓋秈卽穬字、音變而字異耳、廣雅曰、秈稉也、渾言不別也、从禾兼聲、讀若風廉之廉、風廉之廉、疑當同食部作風濂濂力

齋にも重荷にならず、殊に餅になしたるは、臨時に煨燔ば卽食ふべし、又片(ヘギ)餅强(コハ)餅などいふものも、久しきに備ふる供へなり、

〔淸良記六上〕五穀雜穀其外物作分號類之事〈○中略〉

餅稻之部

一盆餅　一京餅　一大坂餅　一鉢合(ハチカウ)餅　一黑鉢合餅　一鷄餅　一鉢割餅

一御座有餅　一香(カウハシ)餅　一千本餅　一二節餅　一赤餅　一柳餅　一靑柳餅

一烏餅　一霜赤餅

右十六品の內上の八大上々の米也、下の八とても、上米なれども、晩稻は田地をとりけるにより、其稻種子かへりて不善、種子を吟味して、上田に植てはみな上米也、餅といふは、何稻も上白米也、此外大米畠稻にも餅あり、

〔延喜式五齋宮〕五月節

糯米一斗五升、大角豆三升、〈中略〉已上供料、糯米五斗、米一石、大角豆一斗五升、已上官人已下料、

〔延喜式十七內匠〕御斗帳一具、〈○中略〉黏料糯米二升、

同宮〈○齋宮〉自伊勢齋宮入京儲料、御輿一具〈並料物單功同野宮〉四尺屛風四帖料、〈○中略〉糯米八升、〈張布料〉

〔延喜式三十二大膳〕鎭魂〈皇后宮東宮亦同〉

大直神一座　座別〈○中略〉糯米三升〈中略〉已上七種神四座菓餅料〉

雜給料　參議已上　人別糯米一升四合、〈○中略〉五位已上卌人　人別糯米七合五勺、〈○中略〉六位已下二百六十人　人別糯米六合七勺

〔延喜式三十五大炊〕凡諸國年料所進糯米、寮官撿挍、勿令他粒雜糅、又雜雜隨到量收訖卽申省、

〔延喜式三十七典藥〕凡合藥所須、〈○中略〉蒸乾黃芩五十斤料、糯米七斗、每年申省請受、

正二月取出、日中晒乾以收之、用時爲末造餅、或先用糯米爲粉研水粘著于盤內以暴寒、至正二月而收之、造餅彌好、凡糯之禾稈最强、爲用優於稻藁也、

〔和漢三才圖會 百三 穀〕糯 音懦 稬 本字 穤 同 古者糯爲稻、今者梗糯通稱稻、 和名毛知乃與禰

本綱、糯其性黏可以釀酒、可以爲粢、可以蒸糕、可以熬餳、可以炒食、其類亦多、其穀殼有紅白二色、或有毛、或無毛、其米亦有紅白二色、赤者酒多糟少、一種有粒白如霜三四分者、

氣味 甘温 痘疹用之、取其解毒、能釀而發之、老人小便數者作粢糕夜食止冷洩、入瀉白散止咳、

但性粘滯難化、小兒病人最宜忌之、久食發癰疽瘡癤、合酒食之醉難醒、久食緩人筋、小猫犬食之、亦脚屈不能行、馬食之足重、

按糯似粳而圓肥、色亦正白、有早中晩、以中稻爲佳、性粘堪爲粢糕及饊、故名粢米(モチコメ)、如釀酒不超歳而味變、故今不釀酒、惟用爲美淋酒耳、諸國皆種之、河州渚播州明石之產爲上、

赤糯者粘少、故種之者稀、又秈之種有糯名之大唐糯、粘少性輕、故病人以爲粢食、

一種有未熟糯 奈末毛知 者、土地不宜處生之、似糯而少粘、似秔而甚粘、故爲粢不美也、堪爲熬餳、又爲美淋酎可也、亦釀酒易敗、豐州小倉、肥前唐津產多是也、備前播磨肥後亦少出之、

〔成形圖說 十六 五穀〕餅米 新撰字鏡

餅乃米、和名鈔 毛知志禰、餅稻なり 稬、音愞、俗作糯 稬、○中略 稌、音徒、爾雅、廣稬稻也、詩豐年多稌、○中略 秫稻、呂氏春秋 晉書陶淵明爲彭澤令、公田悉令種秫稻、妻子固請種粳、乃使一百五十畝種秫、五十畝種粳、爾雅引內則云、菽麥蕡稻黍粱秫惟所欲、七者以稻與秫稱、秫爲糯稻爲粳、粳卽秔、淵明種秫以取酒是也、有此確證可以正本艸之誤、大師古稻粘

毛知とは黏氣ありて、物に附著するの稱なり、黏は根張(ネバル)と訓り、根張しの は引離がたきよしなり、稱も亦おなじ、

〔異制庭訓往來〕二者書寫之故實者、○中略 色紙蒔繪之上墨不著、則入糯粉磨之、

〔成形圖說 十六 五穀〕餅米 ○中略

鏡餅の本は、凡軍陣の粮は、糯米を最上とす、糯になし、餅に作りて、少く食ひても早く飢ゑず、遠に

日日食用ノ米ナリ、早中晩ノ分アリ、ワセヲ早粳ト云、六十餘種アリ、ナカテヲ中粳トモ遲粳トモ云、八十餘種アリ、オクテヲ晩粳ト云、八十種許アリ、

〔延喜式 三十二大膳〕新嘗祭 宴會雜給

親王以下三位已上幷四位參議 人別餠料粳米糯米各八合(中略)

四位五位幷命婦 人別餠料粳米糯米各四合

〔日本書紀 二十九天武〕十年八月丙戌、遣多禰島使人等、貢多禰國圖、其國去京五千餘里、居筑紫南海中、切髮草裳、粳稻(イネ)常豐、一殖(〇殖原作蒩、今據一本改、)兩收、

〔新撰字鏡 米〕粿(毛〇知〇米〇)

〔倭名類聚抄 十七米〕粳 蒼頡篇云、粳(奴亂反、粳米和名毛〇知〇乃〇與〇禰〇)米之黏也、

〔類聚名義抄 七米〕糯(俗通糯字、奴亂反、俗又奴貨反、モチノヨネ、) 粳米(モチヨ子、上奴亂反、) 〔同 七禾〕稬(奴亂反、黏秔、俗奴過反、今糯、) 穤(正)

〔下學集 下草木〕糯(モチ)

〔易林本節用集 毛草木〕糯(モチヒ) 粳(同、稻之黏可爲酒、亦作糯、奴臥切、)

〔和爾雅 六米穀〕糯(モチゴメ) (粳米、稌米、黏米、稻米並同、)

〔東雅 十三穀蔬〕稻 イ子(中略) 倭名鈔に、(中略)粳は米の黏也、モチノヨ子と註せしは、モチとは卽黏するをいひしなり、

〔本朝食鑑 一穀〕糯米(俗作餠米)

釋名粳、(中略)必大(平野)按、粳與糯同字、源順爲奴亂反者未詳、

集解、糯有赤白大小之殊、以大而白爲上、蒔種苅收與稻同、其土地水旱亦相同、其種名稍多有早中晩之別、但以中晩爲勝、諸州俱有、江東山北雖多有、而不及五畿濃尾江勢紀播海西諸州之產、本邦自古作餠作强飯、俱詳各條、未聞釀酒者、但有乾果之造爾、又有寒曝者、糯米浸水盛桶而曝于寒天霜雪、經

〔書言字考節用集 六生植〕秔（ウルシネ、ウルゴメ）　粳同

〔段注說文解字 七上禾〕秔稻屬也、凡言屬者、以屬見別也、言別者、以別見屬也、重其同則言屬、秔爲稻屬是也、重其異則言別、稗爲禾別是也、周禮注曰、州黨族閭比鄕之屬別、介次市亭之屬別小者、屬別並言、分合並見也、稻有至黏者、稬是也、有次黏者、稉是也、有不黏者、稴是也、稉比於稬則爲不黏、比於稴則尙爲黏、稉與稴爲飯、稬以釀酒爲餌餈、今與古同矣、散文稉亦偁稻、對文則別、魏都賦、水澍稉稌、陸蒔稷黍、蜀都賦、黍稷油油、稉稻莫莫、皆稉稻並擧、本艸經秔米稻米殊用、陶貞白乃不能分別、其亦異矣、从禾亢聲、古行切、古音在十部、稉俗秔、更聲也、陸德明曰、稉與粳皆俗秔字、

〔日本釋名 下米穀〕粳（ウルシチ）　うるはしいね也、味よければ也、

〔東雅 十三穀蔬〕稻イネ 中略 粳は一名秔、ウルシネといふと註せしは、ウルと云ひしは潤也、潤の字讀てウルヒといふが如き即是也、倭名鈔に其實の光潤あるを云ひし也、

〔食物知新 一穀〕粳米 別錄中品 發明、凡粳米白色而堅硬、比糯米則不潔白、故名濡（ウルシチ）白米、

〔倭訓栞 後編四宇〕うるしね　粳をいへり、秔も同じ、糯に對しいへばうるけたる義にや、延喜式に稉字を書たれば、秋稼の多きをいふにや、黍粟にいふも同じ、

〔和漢三才圖會 百三穀〕粳 音庚 秔　和名宇流之禰 中略 按、西南地暖而早熟、東北地寒故晩熟、如畿內則中和地以爲正時、中略 凡八九月刈收者卽中稻也、自此早爲早稻、遲爲晩稻、畿內及濃州尾州江州之產爲上、肥後讚州播州次之、加州能州米爲飯多殖、而味劣矣、奧州津輕多肥土、不用糞培而能茂生、稻長四五尺、其米却不美、琉球國米、一年再熟、謂之琉米、南方者然、閩田一歲再熟、至嶺南則三收、又天竺土煖熱、故稻歲四熟云云、　異職國有水稻、高丈許、隨水而長、

〔重修本草綱目啓蒙 十七麻麥稻〕粳　ウルシネ 和名鈔　ウルゴメ　ウルノコメ　ウルチ 江戶　一名大米 盛京通志　散米 事物異名　米一名玉粒 事物異名　扎匣阿木　白粲 共上同　蕭珠 名物法言　長腰 故事成語考

出雲稻四種トハ、赤粳(アカシチ)、赤糯(アカモチ)、黑粳(クロシチ)、黑糯(クロモチ)是ナリ、古志稻二種ハ、沼垂粳、沼垂糯(ヌタリモチ)ナリ、日向四種トハ、白粳、白糯、青粳、青糯是ナリ、笠縫稻二種トハ、鶴喙粳(ツルクヒシチ)、鶴喙糯是ナリ、以上十二種ハ上古ヨリノ稻種ニシテ、今ノ世ニ耕種スル諸稻ノ根元ナリ、

〔耕稼春秋六〕石川郡稻名〇中略

都合八十三色

寶永之頃御郡に作る稻を記、總じて稻の名は所によりて替る故、年々に異名多なる、其故は、一色の内より異風なる粮を撰出し、少宛試に植る百姓有故に品々多し、御領國郡々不殘是を改めば、五百色計は有べきものなり、

〔農術鑑正記上〕穀物小名多く、稻の類百穀に餘るべし、譬ば早稻に、雀しらず、廿日わせ、大つわせ、櫻わせ、もちわせ、くまのわせ、北國わせ、千本、猶數品多、國所にて小名ちがひあり、

〔新撰字鏡禾〕秔〇俗作粳、同加衡反、不黏稻也、與爾志夏久、又奴可、

〔本草和名十九米穀〕粳米楊玄操音古行反、俗秔字也、　粃米音匕、是被含稃穀未熟者曰粃、米粉一名爛米、已上三名出崔禹、　和名宇流之禰

〔倭名類聚抄十七米〕秔米　本草云、粳米一名粃米、粳音庚、粃音匕、和名宇流之禰、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕按本草和名粳米條云、粃米音匕、是被含稃穀未熟者曰粃、米粉一名爛米、已上三名出崔禹、粃米上不云一名、蓋兼擧粳米粃米也、故醫心方粳米條引崔禹云、又有粃米、是被含稃穀未熟者曰粃、是知粃米即秕米、又見其曰又有、可證非粳米之一名、且粃米之出崔氏食經、非出本草也、蓋源君從本草和名載粃米、以其粳米條誤爲秔米之一名、又以爲本草文、並非、又按集韻秕或作粃、秕則知粃是秕字之省、秕於稻穀具載之、訓之比奈世、倍可以證粃米之非秔米別名也、

〔類聚名義抄七禾〕秔音庚、稻、ウルシネ、今粳ハル、　秔正、　稉同　〔同七米〕粳古行反、音庚、アラヌカ、正秔、ウルシネ、　杭粿二俗　粃粃二正、音比之去聲、音ヒ、ウルシネ、　粃ウルシネ　粱音梁、ウルシネ、　粄彩字鈑、ウルシネ、　粳米ウルシネ　粃米同

〔下學集下草木〕粳(ウルシネ)

〔日本書紀天智二十七〕元年正月丁巳、賜百濟佐平鬼室福信矢十萬隻、絲五百斤、綿一千斤、布一千端、韋一千張、稻種三千斛、

〔東大寺正倉院文書十〕大倭國天平二年大税帳

山邊郡

天平元年定、大税穀捌仟捌伯伍拾伍斛貳升捌合、○中略

穎稻貳仟壹伯肆拾肆束、○中略　用貳伯束(赤春米四斛料八十束、小麥一斛直廿束、賀麻伎種稻百束、)

〔倭訓栞中編二〕いなむしろ○中略　後の歌には、稻の筵に似たるをも、稻を筵にしくをも、又稻こくに用うるわら筵をいへり、

〔夫木和歌抄十二秋田〕田のうへの月

夕露のたましくを田のいなむしろかへすほずゑに月ぞやどれる　西行上人

秋田

いなむしろしくや門田の秋風に民のみつぎをいそぐ比かな　中原師光朝臣

稻初見

〔日本書紀神代一〕一書曰、○中略　天照大神復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、○中略　顱中生稻、○中略　天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃○中略　以稻爲水田種子、又因定天邑君、卽以其稻種始殖于天狹田及長田、其秋垂穎八握莫莫然甚快也、

〔古事記上〕食物乞大氣津比賣神、爾大氣都比賣自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、○中略　於二目生稻種、

稻種類

〔草木六部耕種法十二實〕撰稻種秘訣

稻種ハ其品類極テ多ト雖ドモ、古代ハ出雲稻四種、古志稻二種、日向稻四種、笠縫稻二種、都合十二種ノミ、後世ニ至ルニ及テハ濫名頻リ興リ、紛錯混亂殆ド記載スベカラザルニ至レリ、○中略　所謂

天川水陰草ノ秋風ニナビクヲミレバ時ハキニケリ

此水陰草ハ、稻ノ一名ト見タリ、其故ハ、銀河天水ノ惠ニテ、苗代水ノ始ヨリ、稻花成熟ノ時マデ、雨露ノ恩ニ浴スル也、是天漢ノ水陰ノ草ト云心ナリ、

〔萬葉集抄十二〕水かげ草とは、稻の名也といへり、水におふる草なれば、みづかげぐさと云成べし、さてみづかげといひいでんための諷詞に、あまのがはとおけり、そらのいろはみどりなるに、あまのがはのしろきは、しら浪のうかびたるやうにみゆれば、水のかげのうつりてみゆるによそへて、あまのがは水かげぐさとつゞくるなり、

〔藻鹽草三地儀〕田

水かげ草是も夏の田也、あるひはたゞいれの名ともいふ、

〔藏玉和歌集夏〕水。懸。草。　夏田

天智天皇花鳥異名
とくうへて吾田の面に秋まちて水かけ草ぞ苅しほとなる

〔新勅撰和歌集四秋〕七夕後朝の心をよみ侍ける　藤原清輔朝臣

天河水かけ草にをく露やあかぬわかれの涙なるらん

〔藻鹽草三地儀〕田

た。の。み。草。〇いれ也中略　秋。待。草。夏田也、異名也、

〔藏玉和歌集夏〕秋待草　夏田

基俊詠出
水かけて秋まつ草のよな〳〵に露とみゆるはもしほたるかも

〔倭訓栞中編二伊〕い。な。だ。ね。　古事記に稻種と見ゆ、尾張姓の祖に武稻種命あり、

〔出雲風土記飯石郡〕多禰郷、屬郡家、所造天下大神大穴持命、與須久奈比古命、巡行天下時、稻種墮此處、故云種、神龜三年改字多禰、

〔八雲御抄三上地儀〕田○中略　民の草○中略　とみくさ田の花也、○中略　なかひこのいねことしあたらしきいれ也、神に奉るなり、

〔言塵集五〕稲　とみ草　民の草原

〔藻鹽草三地儀〕田

富草あすよりはそとものをだに独ぬれてと草のさなへうへつらんかも、とみとはよまず、これ稲の異名也、○中略　すめらみ草いれ也

〔倭訓栞前編十八〕とみくさ　富草と書り、梁塵抄に稲をいふと見えたり、されば相模家集に、み山なるとみくさの花といひ、詞花集に、

打むれて高倉山につむものはあらたなる世のとみくさのはな、とよめるは、山に意あるにあらず、高倉山は、伊勢外宮の山也、

〔枕草子四〕りんじのまつりのでうがくなどは、いみじうおかし、○中略　夜ふけぬれば、猶あけてかへるをまつに、君だちのこゑにて、あらたにおふるとみ草の花とうたひたるも、此たびはいますこしおかしきに、○下略

〔神樂歌入文下〕閑野

末あめなるひばり、よりこやひばり、とみくさ、とみくさもちて、

抄云、富草は稲を云也、今按にとみ草の事、いろ〳〵云て慥かならぬことなれど、此歌にては御説も似つかはし、

〔詞花和歌集十雜〕後冷泉院御時、大嘗會主基方御屛風に、備中國たかくら山に、あまたの人花つみたるかたかきたるところによめる、　藤原家經朝臣

打むれてたかくら山につむ物はあらたなるよのとみ草のはな

〔詞林采葉抄九〕水陰草　當集第十卷歌云

〔隨意錄 五〕物茂卿云、在レ田曰レ稻、刈穫曰レ禾、去レ藁曰レ粟、去レ殼曰レ米、米而未レ舂曰レ糲、已舂曰レ粱、皆一物也、而稻爲レ糯、粟爲レ秫、粱爲二粟中之一種一、皆後世醫家之說、非二古言一、予謂此說粗也、不レ精二乎古言一也、詩曰、黍稷稻粱、農夫之慶、內則曰、飯黍稷稻粱、白黍黃粱、又曰、稻醴淸糟、粱醴淸糟、以二此等經傳一觀レ之、稻又一種名、而非下唯在レ田之名上、況論語曰、食二夫稻一、衣二夫錦一、明是稻、一種嘉穀、豈以三在レ田與二衣レ錦相對一乃言レ食レ之乎、粱又一種名、非二唯舂之謂一也、其粟及レ米之稱、則固如二其說一也、禾則嘉穀之總名、詩曰、十月納二禾稼一、黍稷重穋、可二以見一焉、黍稷重穋都稱二之禾稼一也、春秋曰、大無二麥禾一、亦凡謂二秋成穀一爲レ禾也、誰非二刈穫之稱一、然穀種之名義、漢晉以降諸說不レ一、

〔傍廂 後篇〕稻穀

稻とは田に生ひ立ちあるをいふ、禾とは刈りて根なきをいふ、粟とは藁を去りたるをいふ、米とは殼を去りたるをいふ、糲とはいまだ舂かざるをいふ、粱とは既に舂きたるをいふ、武家の知行萬石千石などいへるは粟也、殼を去りて米とすれば、萬石は四千石となる、千石は四百石となる、故に千石といへるは、よつ物にて卽千俵なり、

〔古今和歌集 十五 戀〕題しらず　そせい法し

秋の田のいねてふこともかけなくになにをうしとか人のかるらん

〔延喜式 八 祝詞〕祈年祭

御年皇神等能前爾白久、皇神等能依左志奉牟、奧津御年乎、手肱爾水沫畫垂、向股爾泥畫寄氏、取作牟奧津御年乎、八束穗能、伊加志穗爾、皇神等能依左志奉者、初穗乎波、千穎八百穎爾奉置氏、䨀閉高知、䨀腹滿雙氏、汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟、

〔祝詞考 上〕五穀の中に、稻は最末に熟故に、奧といへり、譬ば同じ稻にても、晩なるを奧てといひ、又遲きことをも、萬葉におくてなるといへるが如し、

所也とも見えたり、太古の俗いひつぎし所、其說已に同じからずとは見えたれど、日神其種子をとり得給ひて、天狹田長田に殖しめられしより、世の人始て粒食する事を得しといふに至ては、異なる說ありとも見えず、稲の如きは、保食神の腹より生れしとも、大宜津比賣神の目より生りしともいふなり、名づけてイネといひ、亦轉じてはシネといひし義の如きは不レ詳、(略)○(註)倭名鈔に、按ずるに稲熟に早晩ありて、其名を取る、早稲はワセといふ、晩稲はオクテといふと註せり、ワセといふは、ワはハなり、ハといひワといふは轉語也、ハとは早といふが如し、セとはシネといふ語を合呼びし也、オクテ又はオシネともいふなり、オクといひオシといふ、共に是晩の義也、テといひネといひ、またセといふは、皆轉語にして、シネといふ語を合呼びし也、

〔倭訓栞前編三伊〕いね　稲をいふ、飯根の義なるべし、いなともよむは轉せる也、後漢書に日本宜レ稲と見ゆ、物理論に、稲者溉種之總稱といひ、爾雅翼に、稲米粒如レ霜、性尤宜レ水、一名稌、而有レ黏有レ不レ黏、今人以レ黏爲レ粳、不レ黏爲レ秔とみゆ、粳はもち、秔はうる也、

〔本朝食鑑一穀〕稲(訓二伊禰一)

釋名(中略)必大(平野)按、稲者溉種之總稱也、又言通呼二秔糯二穀一爲レ稲、或謂專指レ糯以爲レ稲也、然本邦自レ古指二秔糯一以爲レ稲也、古者惟有二早晩之分一、今以二早中晩一而分レ之、其稲苅乾之後、經二舂簸一而爲レ米、是粳米而俗稱二宇流之一者也、秔與レ粳同、

集解(中略)○夫稲者本邦古來爲二米之總稱一、而農家別謂下在レ田茂生者爲レ稲、米之不レ脫二稃芒穗稃一爲レ籾、訓二毛美一、此亦農家之通稱也、稲有二早中晩之分一、早稲者熟實少、若雖レ有レ實多稲美者不レ能二久保一、中晩者雖レ遲、實多稲美、就レ中以二晩白米一爲二第一一、作二上饌之食一、

〔本朝食鑑二華和異同〕稲

今本邦處處所レ種謂二大唐米一者、似レ粳而粒小、有二赤白二色一、其熟最早、六七月收レ之、而米亦多、恐是綱目之秈米也乎、

〔箋注倭名類聚抄 稻穀九〕按稻謂黏者、秔謂少不黏者、說文、稻稌也、稌稻也、秔沛國謂稻爲稬、秔稻屬、蜀都賦、黍稷油油、秔稻莫莫、本草陶注云、道家方藥有俱用稻米粳米、此則是兩物、蓋唐韻擧一類二物以釋之、猶言秔稻之稻、非以秔稻二字解稻字也、玉篇秔秔稻也、亦同意、然則唐韻稻則稬下條載之、源君訓稻爲以禰者、蓋非分二物、則宜引漢書東方朔傳注云、稻有芒之穀總稱也、齊民要術、引楊泉物理論云、稻者乃粳之總名也、蘇敬亦曰稻者穬穀通名、匡謬正俗云、所謂稻米者、今秔米耳、然後以稻是有芒之穀、故於後通呼粳稬、總謂之稻、孔子曰食夫稻、周官有稻人之職、漢置稻米使者、此並非指屬稻稬之一色、段玉裁曰、今俗槩謂黏者不黏者未去穅曰稻、稬稻秈稻秔稻、未去穅之稱也、既去穅曰稬米秈米秔米、

〔類聚名義抄 七禾〕稻 音道、イ子、和タウ、　稌稌 音吐、イ子、[illegible]、

〔伊呂波字類抄 伊殖物〕稻 イ子、漢語抄云、美之路乃以禰、青稻白米、　稌　秔 已上同

〔段注說文解字 七上〕稻稌也、今俗槩謂黏者不黏者、未去穅曰稻、稬稻秈稻秔稻、皆未去穅之偁也、既去穅則曰稬米、曰秈米、曰秔米、古謂黏者爲稻、謂黏米爲稻、九穀攷曰、七月詩、十月穫稻、爲此春酒、月令乃命大酋、秫稻必齊、內則禮記、竝有稻醴、左傳進稻醴粱糗、是以稻爲黏者之名、黏者以釀也、內則糝酏用稻米、籩人職之餌餈、注亦以爲用稻米、皆取其黏耳、而食醫之職、牛宜稌、鄭司農說、稌稉也、是又以稉釋稻、稉其不黏者也、孔子曰、食稻、亦不必專指黏者、言職方氏之揚荊諸州、亦但云其穀宜稻、吾是以知稌稻之爲大名也、玉裁謂、稻其渾言之偁、秔與稻對爲析言之偁、稻宜水、故周禮稻人掌稼下地、从禾舀聲、徒皓切、古音在三部、

〔漢書 東方朔傳 六十五〕東方朔、字曼倩、○中略 馳騖禾稼稻秔之地、師古曰、稻有芒之穀總稱也、秔其不黏者也、音庚、

〔日本釋名 米穀 下〕稻 いはいつくし也、ねは苗也、なえの反はね也、いねとはいつくしき苗也、諸穀にすぐれて苗まづいつくしむべし、

〔神代卷藻鹽草 二〕稻ハ命ノ根也、熟田ニ殖ユ、

〔東雅 穀蔬 十三〕稻イネ 舊事紀に、五穀は火神軻遇突智の子、稚皇産靈神の化生せし所也とも、また葦原中國の保食神の化れる所也とも見えたり、古事記には、軻遇突智の姉大宜津比賣神の化れる

一日林良喜老へ被召呼、勝手に罷歸候樣被仰候、白銀三枚頂戴、旅宿本石町四丁目仁兵衞店六郎次郎屆來ル、同七年壬寅四月二十五日桐山太右衞門、下總國千葉郡小金の內瀧臺野にて爲御藥園十五萬坪拜借被仰付、桐山は藥店なり、同年八月二十八日、今度芝新網町に罷在候浪人安部友之進、相州大山より八王子邊藥草御用に被遣候、爲路金五兩、町欠所金の內より下置れ、出雲守樣より年番此方へ仰下らる、

採藥使記は享保五年庚子駒場御藥園御用屋敷の預り、植村左平治政勝採藥の台命を承り、其時より寶曆三年癸酉に至るまで間斷なく、三十餘年採藥の爲に諸國巡行し、人の行ざる處も巡見し、藥物はさらなり、奇事に至まで書紀し、九卷の書として寶曆五年丙子に獻上しぬ、されども藥物搜索は其學問廣く鑒定精細ならざれば益なきことなり、

鬪草

〔倭名類聚抄　四雜藝〕鬪草　荊楚歲時記云、五月五日有鬪百草之戲、〇鬪草、此間云、久佐阿波世、

〔嬉遊笑覽　十二草木〕宗懍荊楚歲時記曰、競採百藥、謂百草以蠲除毒氣、故世有鬪草之戲といへり、〇中略七修類稿に、風俗鬪百草之戲、獨盛於吳、故荊楚記、有端午四民鬪百草之言、未知其始也、昨讀劉禹錫詩曰、若共吳王鬪百草、不如應是欠西施、則知起于吳王與西施也、おもふに禹錫が詩は、唯その國の風俗をもて作れるまでにて、必しも吳王西施が故事あるにはあらじ、〇中略又すまふ取草にて童ども勝負を爭ふ戲あり、〇中略又稻草或は燈草(タヽミノ草)など束ね括り、三寸ばかりに截て立れば下廣がりて立なり、是も前の如く三ッよせて相撲とらすことおなじ、又松の葉の股を互に引かけて切たるを負とするを松葉きりといふ、此等のわざは異なれども鬪草の類なり、

〇按ズルニ、鬪草ノ事ハ、遊戲部物合篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

稻名稱

〔新撰字鏡　十二諸食物調饌〕稲稻(伊古文)

〔倭名類聚抄　十七稻穀類、附芒穗等〕稻　廣志曰、有紫芒稻、赤穢稻、今案、稻熟有早晚、取其名、和名早稻和勢、晩稻於久天、或又處々有之、

凡諸藥多用草、故字从草、今金石木土之劑皆爲藥、而草木根梢、收採惟宜秋末春初、春初則津潤始萌、未克枝葉、秋末則氣汁下降、悉歸本根、諺曰、賣藥者兩眼、用藥者一眼、服藥者無眼、非虛語也、醫不能識藥、惟聽市人、市人又不辨究、皆委採送之家、傳習造作、眞僞好惡並皆莫測、

〔伊呂波字類抄　古飮食〕五○藥○（赤箭　人參　伏苓　石昌蒲　天門冬）

〔拾芥抄　下末飮食〕五藥（赤箭　人參　茯苓　石昌蒲　天門冬　或說　石昌蒲　茯苓　天門冬　人參　懷香）

〔書言字考節用集　六生植〕百○草○（醫家五月五日、采衆草百種、陰乾燒灰、收爲藥物、）

〔和漢三才圖會　九十二本〕百草

本綱、五月五日采百種草、陰乾、燒灰和石灰、爲團煅研、傳金瘡、止血、亦傳犬咬、又治腋臭及瘰癧已破、各有方、

又取百草花、煮汁釀酒服之、治百病、或采百草花、水漬泥封埋百日煎爲丸、卒死者納口中卽活也、按、牝鹿銜草以飴其牡、蜘蛛齧芋以磨其服、虎中毒箭、食清泥而解之、野猪中毒箭、啞薺苨而食、（見朝野食載及五雜組、）蓋三獸之事未見之、蜘蛛之所爲予面見之、犬中馬錢毒、則呑水解之、又蛇見蛞蝓之涎、則避地不到、又犬鼠共好油、而見桐油、則不敢近、（謎紙桐油、犬毛悉脫、）物猶知藥與毒、況於人乎、

〔嬉遊笑覽　十二草木〕江戶にて本草學問する者出來しは、松岡恕庵召れてよりなり、其頃日記享保六年辛丑二月、松岡玄達を京師より呼下され、旅宿小傳馬町三丁目糠屋七兵衞、七月三日御暇にて罷登、路金十兩相渡、壬七月九日京師儒醫松岡玄達、大坂儒醫古林見宜、大坂藥種屋伏見屋市左衞門、平野屋九兵衞、堺藥種屋小西彌左衞門、是ハ二月以來御當地逗留中、旅籠代幷普請入用、本國へ罷歸候路金、野呂玄次、夏井松玄、本賀德運、是ハ御當地逗留の內普請代幷藥○草○見分に被遣候雜用金、都合金高百七拾七兩二分拾一匁七分五厘、同九月二十二日當六月十二日の記有之、勢州松坂駝堂と申仁、紀州豆州へ藥草見分に罷越候樣仰付られ、無恙相勤、此度在所松坂へ歸度奉願、昨二十

薺　繁蔞　芹　菁　御形　須須之呂　佛座

〔大和本草二數目〕人日七種菜

荊楚歲時記云、正月七日以ニ七種菜ニ爲レ羹、今按、歲時記無ニ七種之名品ニ國俗人日ニ所レ用七種ト稱者、芹　薺　鼠麹草（一名佛耳草、倭名母子草、或以爲ニ黄花蒿ニ爲ニ邪蒿ニ者非也、二種正月未レ生レ苗、）　繁蔞　佛座（一名田平子）　菘（蔓菁之類、和俗稱之曰レ菜、在ニ水田ニ稱ニ水菜ニ、又曰ニ浮菜ニ、在ニ陸田ニ稱ニ島菜ニ、於ニ諸國ニ稱ニ京菜ニ、）　羅蔔（大根也）　此七種若菜ノ事、公事根源ニ見エタリ、菘ヲ菁トス

〔拾芥抄下末飲食〕十二種若菜

若菜　菌　莔　蕨　薺　葵　芝　蓬　水蓼　水雲　菘　芹

〔御觸書集覽一〕天保十三寅年四月八日

野菜物等、季節いたらざる內、賣買致間敷旨、前々相觸候趣も有レ之處、近來初物を好ミ候儀增長いたし、殊更料理茶屋等ニ而ハ競合買求、高直之品調理致し候段、不埒之事ニ候、譬バ、きうり、茄子、いんげん、さゝげの類、其外もやし物と唱、雨障子を懸、芥ニ而仕立、或ハ室之內江炭團火を用、養ひ立、年中時候外れに賣出し候段、奢侈を導く基ニ而、賣出し候者共、不埒之至ニ候間、已來もやし初物と唱候野菜物類、決而作り出し申間敷旨、在々江も相觸候條、其旨を存じ堅賣買致間敷候、尤魚鳥之儀ハ、自然之漁獵ニ而賣出し候は格別、人力を費し、多分失脚を懸ケ飼こみ仕立置、世上江高價ニ賣出し候儀ハ、是亦不ニ相成ニ候、若相背候者有レ之においてハ、吟味之上、急度咎可ニ申付ニ候、

右之趣、町中江可ニ觸知ニもの也、

四月

右之通、被ニ仰出ニ候段、從ニ町御奉行所ニ被ニ仰渡ニ候間、町中不レ洩樣早々可ニ相觸ニ候、

寅四月八日　町年寄役所

〔和漢三才圖會九十二本〕藥品

薺草

〔大和本草二飲食〕李笠翁曰、論蔬食之美者、曰清、曰潔、曰芳、曰馥、曰鬆脆而已、又曰至美之物皆利于孤行、言ハ菜ノ可食者四アリ、清トハ天然キレイナル物、山蔬、水草、果蓏ノ類ナリ、潔トハ人力ニテ潔クスル也、園菜ノケガレタル物モ、水ニ一日カ一夜ヨク浸シ、ワラ繩ナドニテヨク洗ヘバ潔クナルヲ云、芳馥ハ香ヨキヲ云、鬆脆トハヤハラカニモロキ物ヲ云、此四ノ者ハ宜食トナリ、是皆脾胃ノ好ム處ナリ、又味ノスグレタル物ハ他物ヲマジエズシテ、只一種煮ルベシ、竹筍松蕈ナドノ類ナリ、又曰、本性酷好之物、可以當藥、言生付テ好メル物ハ不爲害、卻テ藥トナル也、然レドモ過食飲スレバ又必爲害、

〔書言字考節用集十數量〕○五菜 韮、薤、葵、葱、藿、

〔拾芥抄下末飲食〕五菜 醫書說 葵甘 韮酸 藿鹹 薤苦 葱辛

〔大和本草二數目〕五菜 韮 薤 葵 葱 藿

〔伊呂波字類抄古飲食〕○五辛○ 大蒜 慈葱 角葱 蘭葱 興蕖 已上見于僧尼令

〔運歩色葉集古〕五辛 大蒜 葱 薤 蘭葱 興蕖

〔書言字考節用集十數量〕五辛 大蒜 茖葱 韮 葱 蘭葱 興蕖

〔拾芥抄下末飲食〕五辛 大蒜 薤葱 茖葱 蘭葱 興蕖 已上見于僧尼令、又梵網經、多異說云云、

又ヒル　クレノヲモ　キ　ニラ　アサトキ 此可爲草之由、有院宣云云、

〔大和本草二數目〕五辛 又曰五葷、本草蘇頌曰、昔人正月節食五辛、以辟癘氣、謂韮薤葱蒜薑、時珍曰、其辛臭昏神伐性也、

〔書言字考節用集十數目〕道家○五葷○ 韮、蒜、芸薹、胡荽、薤、

〔書言字考節用集十數量〕○七菹○ 韮、菁、茆、葵、芹、蒓、筍、

〔拾芥抄下末飲食〕七○種○菜○

菜蔬

下、（誠本云、五日連雨、九穀登熟、）於是天下百姓、倶稱萬歳、曰至德天皇、

〔日本書紀通證 二十九皇極〕九穀（謂黍稷秫稲麻大小麥也、三農生九穀、卓氏藻林引鶴文、）

〔傍廂 後篇〕九穀

皇極天皇紀に、元年八月、天皇幸南淵河上、跪拜四方、仰天而祈、卽雷大雨、遂雨五日、溥潤天下、（或本云、五日連雨、九穀登熟、）於是天下百姓、倶稱萬歳、曰至德天皇云々、この細注の九穀は、谷川士清が紀の通證に、黍、稷、秫、稲、麻、大麥、小麥、大豆、小豆、これを九穀といふは誤れり、彦麿云、九穀の九は、五の誤字なり、麥は大麥、小麥、蕎麥、穬麥なべて麥の一種なり、粟は丹黍、秬黍、秫、粱米なべて粟の一穀なり、米は黍稷なべて米の一穀なり、豆は大豆、烏豆、豍豆、大角、小豆なべて一穀なり、稗は胡麻、荏、香薬、薑子なべて一穀なり、されば九字は五字の誤なる事うつなし、

〔書言字考節用集 六服食〕雜穀（ザフコク、ザコク）

〔令義解 職員一〕大炊寮

頭一人（掌諸國舂米、雜穀、分給、謂凡諸雜穀者、皆於此寮收領、更分充諸司、假令粟充主水、大豆充大膳之類也、諸司食料事、）

〔儀式 五〕正月八日講最勝王經儀（十四日儀准之）

十四日昧旦、東西二寺盛雜穀於漆器廿二具、列立南榮檻外、（左右各十一具、階上闕而不列、）中山城國以稲廿四荷、（以四東爲一荷、）左右相分列立龍尾道上庭、

〔倭名類聚抄 十七〕菜蔬部（略）○中

葷菜類（略）○中　海菜類（略）○中　水菜類（略）○中　園菜類（略）○中　野菜類（略）○下

〔倭名類聚抄 十七草菜〕葷菜　唐韻云、葷（音軍、今按大小蒜之總名也、）臭菜也、兼名苑注云、草間食曰菜蔬、（在疏二音、和名菜蔬久佐比良、）

〔類聚名義抄 八神〕蔬（正）蔬（俗、音疏、クサヒラ、）　葷（音勳、音鬼介、臭菜、クサナ、）

〔伊呂波字類抄 久植物附植物具〕蔬（クサヒラ、菜可食、正作蔬、）　葷（クサナ、臭菜也、）　蕕（タサナ、臭菜也、）　葺（同）

〔古事記傳九〕稻種、五品の中に、此のみ種と云るは、いかにと云に、まづ下に成種とあるを以見るに、此に生れるは、五品ながら其實なり、然るに餘の四品は、種と云ねど、おのづから實のことなるを、稻は伊禰とのみ云ては、穗に在時の名にして、實とは聞えず、莖ながら生たる如聞えて、まぎらはしければなり、

〔日本書紀崇神五〕七年十一月、疫病始息、國内漸謐、五穀既成百姓饒之、

〔延喜式祝詞八〕龍田風神祭

龍田爾稱辭竟奉皇神乃前爾白久、志貴島爾大八島國知志皇御孫命乃、遠御膳乃長御膳止、赤丹乃穗爾聞食須、五穀物乎始氐、天下乃公民乃作物乎、草乃片葉爾至万氐、不成一年二年爾不在、（○下略）

〔江家次第正月三〕御齋會竟日

南榮作棚居五穀（左右各十一坏、以白布覆之、）

〔執政所抄六月下〕十五日祇薗御幣神馬事（○中略）

五穀四斗五升（各九升）　稻　大豆　小豆　大麥　小麥　已上政所出納備進之、

〔書言字考節用集數量十〕六穀（稻、黍、稷、粱、麥、瓜、）

〔書言字考節用集數量十〕八穀（黍、稷、稻、粱、禾、麻、菽、麥、）

〔大和本草數目二〕八穀　稻、黍、大豆、小豆、大麥、小麥、粟、麻、（小學紺珠）日本紀神代卷ニ、稻麥大豆粟稗ヲ記ス、是上古ヨリ我邦ニ所在也、日本紀欽明天皇十二年、以麥種一千斛賜百濟、可見自上世有此種也、

〔書言字考節用集數量十〕九穀（稷、秫、黍、稻、麻、大豆、小豆、大麥、小麥、）

〔拾芥抄飲食末下〕九穀　稷　稻　黍　米　菽　麻　大豆　小豆　大麥

〔大和本草數目二〕九穀　稷、秫、黍、稻、麻、大小豆、大小麥、（周禮鄭玄註）

〔日本書紀皇極二十四〕元年八月甲申朔、天皇幸南淵河上、跪拜四方、仰天而祈、卽雷大雨、遂雨五日、溥潤天

出臆斷、雖然月令所稱周家之禮也、亦不可廢、則姑從鄭說而可也、東方朔占書、欲知五穀之收否、但看五菓之盛衰、李主小麥、杏主大麥、桃主小豆、栗主稻、棗主禾、占書出於六朝好事者之手、不足取證也、蓋北方無稻種、古之所謂中國與今之中國、延袤大小不同矣、江南則於禹貢周官、在于荒服之例、故周有稻人、漢有稻田使者、別掌稻米之政、而漕運轉輸又甚難焉、是以北方此物至乏、縱有此物、供宗廟禮食耳、不得為常食也、故古者五穀品目不收稻米、至稱六穀則始收之、且彼邦中國無稻米、以麥粟為常食、或雕胡薏苡給其不及也、而江南及我邦以稻為常食、如雕胡薏苡則棄而不顧、我方唯關東之國、唯相州之民常食稗粟、雖然豪富及商賈之類、則亦不供朝夕之膳也、其餘州則貧民以麥為常食、食稗粟者或少矣、此習為常、故後儒以今料古、以我推彼、而云中華則聖賢所出、秀氣所鍾之邦也、其食當出我邦之上、欲羨渇望、欲染指而嘗之、是以反疑古書、欲求其說以實之、毋乃鑿乎、可為浩歎矣、

右辨五穀之名目一條

〔日本書紀 一神代〕一書曰、〈略〉○〈中〉伊弉冊尊為軻遇突智所焦而終矣、其且終之間、臥生土神埴山姬及水神罔象女、即軻遇突智娶埴山姬生稚產靈、此神頭上生蠶與桑、臍中生五穀(イツクサノタナツモノ)、

一書曰、〈略〉○〈中〉是後天照大神、復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化為牛馬、顱上生粟、眉上生蠒、眼中生稗、腹中生稻、陰生麥及大豆小豆、天熊人悉取持去而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆為陸田種子、以稻為水田種子、又因定天邑君、即以其稻種、始殖于天狹田及長田、其秋垂穎八握、莫然甚快也、

〔古事記 上〕速須佐之男命、〈略〉○〈中〉又食物乞大氣津比賣神、爾大氣都比賣、自鼻口及尻種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命立伺其態、為穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆、故是神產巢日御祖命、令取茲成種、

には稻粟小豆麥大豆と見ゆ、

〔拾芥抄下末飲食〕五穀 稻穀 大麥 小麥 大豆 小豆(内法之時常止小豆加胡麻云云) 或麥 黍 米 粟 大豆(近代用此等之由、或光平所令申院也、移徙之時用之、) 止大豆 小豆 加菉豆 胡麻云云(諸家說不同也) 或粳米(甘) 麻(醎) 大豆(醎) 小豆(苦或麥) 黃黍(辛)

〔異制庭訓往來〕五穀之類、黍稗大麥小麥大豆小豆糯粳粟稻之比、非農人而列倉如星、

〔大和本草二穀目〕五穀 禾 麻 粟 麥 豆(素問藏氣法時論曰、五穀爲養、五畜爲益、五菜爲充、五果爲助、月令、以黍稷麻麥豆爲五穀、孟子註、以黍稷菽麥稻爲五穀、楚辭註、以稻稷麥豆麻爲五穀、)

〔農術鑑正記上〕古の五穀は、稻麥粟黍大豆也、庭訓には粳糯早稻晩稻、熱田に植、蕎麥大豆小豆粟麥稗等は、畑山畠に植と記、

今の五穀は稻の類、麥の類、粟黍稗大豆の類、胡麻蕎麥等也、

〔黍稷稻粱辨〕物理論曰、百穀者三穀各二十種爲六十種、蔬菓各二十種共爲百穀、注曰、粱者黍稷之總名、稻者漑種之總名、三穀各二十種爲六十、蔬菓之類、所以助穀之不及也、穀名攷、五穀禾麻粟黍豆也、周禮注、又以麻黍稷麥豆爲五穀、六穀者黍稷稻粱麥苽、八穀者黍稷稻粱禾麻菰麥、九穀者黍稷秫稻麻大小豆大小麥、鄭玄曰、九穀無秫大麥、而有粱苽、右各爲說、其實無考也、(略)○註 五穀之字出于周禮孟子、而無其目、則其實未可得而知也、鄭玄周禮註、五穀之目、則依月令四時所嘗而爲說焉、或除麻而收稻、以爲五穀、或除稷收稻以爲五穀、素問云、五穀爲養、麻麥稻黍豆、配肝心脾肺腎、然古書有五穀之稱、而不擧其目、則今無所適從、按百穀之內、擧五穀而稱之、則配五行而立之目者、或然矣、但其實則無據證已、或難曰、五穀之內、民命之所繫、稻米爲大矣、其餘則稱爲雜穀、而鄭玄之五穀、從月令而除稻米者、何有據子之從之、又何所考、而必其然耶、曰、月令所稱之五穀、則配四時之五行而嘗之、故鄭玄云、麥實有孚甲屬木、黍秀舒散屬火、麻實有文理屬金、菽實孚甲堅合屬水、稷五穀之長屬土、此言牽合附會似

ナリ、茶臼ノメグルモ、蔓艸ノ物ニマトフモ皆左旋ナリ、右ヨリ上リ左ニ落ルハ右旋ナリ、逆ナリ、或ハ茶臼ノ旋ルモ、蔓艸ノ物ニマトフモ皆右旋ト云人アリ、非ナリ、ヨク思フベシ、人力ヲ以テセズシテ、天氣ト茶臼ト、蔓草トノメグリヲ以テ考フベシ、

〔倭名類聚抄十七稻〕穀　周禮注云、五。穀。（昔谷、和名毛美、日本紀私記云、五穀以都々乃太奈豆毛乃、今按五穀、一說云、稷麻豆麥禾也、見禮記月令注、）禾、稷、菽、麥、稻也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕原書（周禮）○疾醫、以五味五穀五藥養其病、注云、五穀麻黍稷麥豆也、與此所引異、按原書職方氏、豫州其穀宜五穀、又云、并州其穀宜五種、注並云、五種黍稷菽麥稻也、其目與此合、然於疾醫云五穀、於職方氏云五種、其注各別、則鄭意五穀五種不同也、源君引周禮注、以黍稷菽麥稻爲五穀者誤、後漢書明帝紀注、引鄭玄注周禮云、五穀、黍稷麥麻米也、亦恐誤、又按大戴禮注漢書注五穀、並與疾醫注同、孟子注、淮南子注、後漢書班彪傳注、皆以黍稷菽麥稻爲五穀、與此合、又史記黃帝紀五種、索隱云、五種即五穀也、顏師古漢書注、亦謂五種即五穀、蓋源君涉是等書而誤也、

〔類聚名義抄九殳〕五穀（イツヽノタナツモノ）

〔伊呂波字類抄古飲食〕穀（コク、亦作穀、五穀、九穀、命穀子午黍、丑亥粟、寅戌稻、卯酉麥、辰申麻、巳未大豆小豆、）　五穀（コヽク）ハ、菽（マメ）黍（キビ）麥（ムギ）稷（アハ）稻イネ也、禾也、亦云稷、麻豆麥（異本云、稻穀、大麥、小麥、大豆、小豆、常用之、）

〔下學集下數量〕五穀（一粟黍類、二稻糯類、三豆類、四麻、五麥、是也、）

〔運歩色葉集古〕五穀（粟黍、豆稻糯、麥麻）

〔倭訓栞前編伊三〕いつくさのたなつもの　神代紀に五穀をよめり、五種の種(タナ)つ物の義なり、五穀を稻粟稗麥豆と定めたまひしは、天照大神の制なり、西土にては、月令素問、周禮注、谷梁傳注、楚辭注、孟子注等、各異ありて一定せず、されど稗は收入ず、孟子にも五穀も、稗にしかずといへり、古事記

右艸類、自艸之一以下至此、凡五百二十八種、○節略

〔和漢三才圖會九十二本〕草類

神農本草經一百六十四種、漢魏唐宋良醫代有增益、除穀菜外、凡得草屬之可供醫藥者六百一十種、分類、曰山、曰芳、曰濕、曰毒、曰蔓、曰水、曰石、曰苔、

〔大和本草一〕論本艸書

本草綱目ニ、品類ヲ分ツニ可疑事多シ、菊、艾、茵、蔯、青蒿、黃花蒿ハ皆香氣アレドモ、芳艸類ニ不載シテ隰艸ニノス、然ドモ此草高燥ノ地ニ宜シ、殊ニ菊及地黃ハ甚隰土ヲ忌ム、隰草ト稱スベカラズ、惡實、欵冬、地膚、蓼、蘘荷ハ、今世俗皆爲佳蔬、良賤所賞也、然ルニ菜類ニ不載之、蕺菜、落葵、苦瓜ハ不可爲菜、然ドモ爲菜類、蘆ハ水草也、溼艸類ニノス、連翹ハ蔓草ナリ、不生于隰地、然ニ隰草ニノス、胡椒ハ蔓草ナリ、然ニ諸木實ト同ク味果類ニノス、故ニ人誤認テ木實トス、常山ト莽艸ハ木ナリ、非草品、載之毒艸、石龍芮止扁ハ、本艸曰無毒、然ルニ毒草類ニ載之、羊蹄ハ非水艸、虎耳草酸醬艸植之令伴石則可也、然非石草、水芹有芳香、水草也、非辛辣之物、然ニ葷辛菜トス、馬勃ハ芝栭ノ類ナリ、然ニ苔類ニ載タリ、水草類ニ海藻、海蘊、海帶、昆布、石帆、水松等ノ海物ヲ載タリ、淡水ニ生ズル草ト雜記ス、河海淡鹹ノ別ナシ、苔類ニ、陟釐、乾苔ノ海物ヲ卷柏、玉柏、屋遊等山陸ノ產物雜記ス、水菜類ニ所載ハ皆海菜ナリ、水草類ノ內、海藻以下數品ト同類ナリ、然ラバ則海艸門一類ニシテノスベキニ不然、海草門ナシ、是亦魚品ニ河海ヲ不分ガ如シ、山海經爾雅等書皆以竹爲艸、又竹ヲ非木非草トシ別爲一類說アリ、然ニ綱目ニ竹ヲ苞木類ニノセタリ、○中略

論物理

蔓草ハ皆左旋ス、順天之左旋也、左旋トハ左ヨリ上リ右ニ落ルヲ云、天道ハ左旋ス、日月星皆同ジ、人ハ北ヲ背ニシ南ニ向ヘバ、左ハ東右ハ西ナリ、日月天行皆東ニノボリ西ニヲツ、是左旋ナリ、順

又四卷に、板蓋之、黑木乃屋根者、山近之、明日取而、持將參來、黑樹取、草毛刈乍、仕目利、勤和氣登、將譽十方不在、又八卷に、波太須珠寸、尾花逆葺、黑木用、造有家者、迄萬代、これらを合て思べし、茅と云一種あるも、屋ふくに主と用る故の名なり、さて野神の御名に負給へる故は、野の主とある物は草にて、草の用は、屋葺ぞ主なりける故草字をやがて加夜とも訓り、上代は大御殿を始て、凡て草もて葺つればなり、

〔和漢三才圖會九十二本〕草類

按凡草始生、曰苗、音妙、和訓奈倍、萌出曰芽、音牙、和訓女、枝葉豐盛曰茂、音懋、和訓之介流、花下柎曰萼、音諤、俗云花乃倍太、含實曰繩、音孕、俗云花乃止知、周禮注曰、艾其繩則實不成、又綴實底曰蔕、瓜蔕、柹蔕、應劭、木實曰果、草實曰蓏、音裸、又有核曰果、無核曰蓏、

時珍曰、天造地化、而草木生焉、剛交于柔而成根荄、柔交于剛而成枝幹、葉萼屬陽、華實屬陰、由是草中有木、木中有草、得氣之粹者爲良、得氣之戾者爲毒、故有五形、金木水火土五氣、香臭臊腥膻五色、青赤黃白黑五味、酸苦甘辛鹹五性、寒熱溫涼平五用、升降浮沈中神農嘗而辨之、黃帝述而著之、

〔書言字考節用集數量十〕三草、麻、藍、紅花、木棉、麻、荏、

〔大和本草二數目〕三草　麻　藍　紅花

〔地方要集錄〕畑方作毛見分三草四木之類、雜穀野菜之類、　三草は麻、木綿、藍なり、ヌメコ、楮、紅花共六草とも云、

〔書言字考節用集數量十〕八草、菖蒲、艾葉、車前、荷葉、蒼耳、忍冬、馬鞭、蘩蔞、

〔大和本草二數目〕八艸　菖蒲　艾葉　茱苡　荷葉　蒼耳　忍冬　馬鞭艸　蘩蔞

〔大和本草〕目錄

艸之一　菜蔬類六十七種　艸之二　藥類七十九種　艸之三　花艸七十三種　園艸十八種　艸之四　蓏類九種

蔓艸三十七種　芳艸十六種　水艸三十六種　海艸二十八種　艸之五　雜艸百三十七種　菌類二十五種

草類別

ひ、オニといひ、小なるをばヒメといひ、似て非なるをばイヌといひ、カラといふが如き、すべてこれ等の例によりて、其義をもとめて、その然るべからざる疑ふべき強て其說をつくるべからず、されば今こゝには唯其釋すべき事あるものをのみ註したる也、其釋を待たずして義おのづから明かなる物をもまた載せず、

〔倭訓栞前編八〕くさ　草をいふ、年ごとに枯腐るものなればいふなるべし、式陸奧國苔野神社あり、說文に苔草也と見ゆ、○中略草は靑きものなるに、詩詞に白草といへるは、胡地ノ草色は白しといへり、種をいふも草より出たり、なぐさみ種、あつかひ種かこち種、わらひ種などいふ是也、

〔古事記傳五〕草は莖多なりと云ること、多きを布佐と云ることこれかれ見えたり、

〔和漢三才圖會九十二本〕名義
以時名者　迎春　半夏　夏枯草　欵冬　忍冬
以人名者　杜仲　王孫　徐長卿　丁公藤　蒲公英　劉寄奴　何首烏　使君子
以物名者　淫羊藿　麋衘草　鹿跑草
以地名者　常山　高良　天竺　迦南
以形名者　虎掌　狗脊　馬鞭　烏喙　鶏尾　鴨蹠　鶴蝨　鼠耳　牛膝
以性名者　益母　狼毒　預知子　王不留行　骨碎補
強名之者　沒藥　景天　三七　無名異　威靈仙　沒石子

〔日本書紀一神代〕生草祖草野姫、亦名野槌、

〔古事記上〕生野神名鹿屋野比賣神、亦名謂野椎神、

〔古事記傳五〕加夜は此卷末に、以鵜羽爲葺草とありて訓葺草云加夜と註せるぞ本義にて、何にもあれ、屋葺む料の草を云名なり、万葉一卷に、吾勢子波、借廬作良須、草無者、小松下乃、草乎苅核、

〔東雅十五草卉〕巻柏イハグミ〇中略倭名鈔草類に見えし物名、上世より云ひつぎしと見えしは解すべからざる多かり、草を呼びてクサといふ義の如きも猶不詳、種字讀てクサといひ、雜字讀てクサグサといふが如きは、悉く訓ぜし所なり、是等の語も草をクサといふによれる所と見えたり、是等の詞によりて、草をクサといふ事あるべしとも思はれず、古の時には、百濟より諸道の博士幷に採藥師等をも番上せしめしとも見えたれば、我國の上世よりいひつぎし所のみにもあらず、韓地の方言をもて呼びし物も相混せざる事を得べからず、石蘚を呼でスクナヒコノクスネといふは、小彥名神之藥根といふが如く、玄參をオシクサといふも、古語拾遺に見えし天押草といふものゝ如し、また烏扇をカラスアフギといひ、慧苡をツシダマといふが如き、是等の名も神代より聞えし事の如くに、古語拾遺には見えけり、されど烏扇をカラスアフギと云ひしは、烏扇の字により、慧苡をツシダマといひしは、其子の珠數の如くなるを云ひしによりしと見えたれば、太古の時にあたりて、かゝる名あるべしとは思はれず、古の名既に亡びたりければ、今呼ぶ所の名によりてしるせし所なるべし、芍藥をエビスグスリといひ、決明をエビスグサといひ、地楡をエビスネといひ、又アヤメタムといふが如き、旋花をハヤヒトグサといひ、大戟をもハヤヒトグサといふが如きは、其始て出でし地方をもて呼ぶに似たり、或は漢名によりて呼ぶ事、忘憂をワスレグサといひ、貝母をハヽクリといひ、白頭翁をオキナグサといふが如き、或は漢音によりて呼ぶ事、芭蕉をバセヲバといひ、薊藿をソクトクといふが如き、皆是漢字傳へし後に名づけいひし所といひたり、又其名同じくして其物は異なるも少からず、旋花大戟共にハヤヒトグサといひ、巻柏石韋共にイハグミといふの類是なり、彼物によりて此名あるも少なからず、蕗をフヽキといふに因りて、欵冬をヤマフヽキといひ、芡をミヅフヽキといひ、惡實をウマフヽキといひ、芹をセリといふに因りて、茈胡をノゼリといひ、當歸をヤマゼリとも、オホゼリともウマゼリとも、葶藶をハマゼリともいふの類此なり、大なるをばムマとい

古事類苑

植物部十二

草一

草ニハ、一年生ノモノト、宿根ノモノトアレドモ、木ノ堅硬ナル枝幹ヲ有シ、年々成長スルモノト自ラ異ナリ、而シテ舊來ノ本草家ハ之ヲ山草、芳草、濕草、毒草、蔓草、水草、石草、雚草等ニ類別シタリ、

種子若シクハ莖、根等ヲ、日常ノ食用ニ供スル爲ニ、特ニ栽培セラルヽモノニハ稻、麥、粟、黍、稗、蕎麥、大豆、小豆、胡麻、大根、蕪菁、牛蒡、茄子、瓜、芋等、其數甚ダ多シ、謂ユル穀類、菜類是ナリ、又花葉ヲ觀賞シ、或ハ藥用ニ供スル爲ニ培養セラレ、採集セラルヽ草本モ亦頗ル多シ、

草總載 名稱

〔倭名類聚抄 二十〕草 附 葛字 孫愐切韻云、草〈音早、和名久佐〉百卉總名也、

〔段注説文解字 一下〕艸 百芔也、〈卉下曰、艸之總名也、是謂二轉注一、二屮三屮一也、引伸爲二艸稿艸具之艸一、〉从二二屮一、〈倉老切、古音在二三部一、俗以レ草爲レ艸、乃別以レ皁爲レ草、〉

凡艸之屬皆从レ艸、

〔類聚名義抄 八 艸〕艸〈音早、百卉揔名、〉 屮〈古〉 卄〈今變作レ此〉 草〈或クサ、ハヤク、ハシメ、フレナリ〉 卉 芔 𦬊〈下二正、音諱、クサ、〉 卉〈同〉 茻〈莫朗〉

〔伊呂波字類抄 久 殖物附殖物具〕草〈クサ 百卉揔名也〉 菨 蕪 菜〈草也〉 毛 芭 艸〈艸イ〉 蔄〈亦クス、カツラ〉 麁 蒼 卉〈已上同 古文作レ芔、百草揔也、〉

〔書言字考節用集 六 生植〕卉〈クサ 本字芔〉 艸〈同〉 草〈同〉 荄〈クサノ子 唐韵、草根也、〉 莛〈クサノクキ 韻瑞、草莖也、〉 莖〈同〉 葤〈同〉 稍〈同〉 桀〈クサバナ〉 草花〈同〉

〔日本釋名 下 草〕草〈クサ〉 くさ〴〵おほき也

柄生枝葉、時農夫之隣人偶有葬事、而到於斯見之、乃大驚而語村長、村長視之亦大怪、告諸官府云、聞之四方來見者多、余偶到於斯見之、則恰如植竹也、里俗之説、奇者祈福驗多焉、賽者日來而不絶於路、墓所遂爲市、依之農夫自補藥貨葬費、而更謂得不虞之福、夫古人有言曰、出於爾者反於爾者也、是亦恩威之所到乎、不可誣也、慶應二年丙寅二月某誌、

と存候內、村方之者承り、追々見候處、外之筍者通例之通り生立有ㇾ之、纔ニ壹尺五六寸之場所江過分ニ生立、殊に先曲り候を不思儀ニ存、右脇を堀見可ㇾ申ト、鍬を以堀候處、石ニあたり候間、脇ゟ壹尺五六寸程堀候得者、丈九寸程の處、差渡七寸五分程有ㇾ之石ニ而彫み候蛇、當月廿四日堀出候旨訴出候、右始末村役人共得と相糺候處、嘉七屋敷之儀、前々よりの屋敷地ニ而、當時者瓦燒場ニ致し、右廻りは灼地ニ而、いつ頃より藪地ニ成候哉、其儀者不ㇾ相分旨申し候、右之品堀出候ニ付、怪敷筋毛頭無ㇾ之旨申立、無ㇾ相違ㇾ相聞候間、右兩品爲ㇾ差出ㇾ見分仕候處、別紙麁繪ニ申上候通りニ而御座候、依ㇾ之御屆申上候、以上、

午〇文化七年五月七日　大貫次右衛門

〔視聽草 二集九〕出世竹

此度武州日光道中草加宿在、足立郡中曾根村農家忠藏ト申者屋敷うちへ、古今まれなる竹の子生ず、是を名付て世人出世竹と唱へける、〇中略當五月中旬、こぞの如く夢の御告にて、稀なる竹の生ずべしとありし處、一兩日の內不思議なるかな、眞竹山江ふしま〳〵に玉の付候竹の子、五拾本餘生じ、ふきのとうのごとく生立にまたがひ、枝葉風流にして、世の常の竹にあらず、名竹誠に權現の御神德、正直一致の身體加護まし〳〵、あら有がたの言の葉を、世の人に知らしめんためにあら〳〵筆に記す、

中曾根村錦山忠藏

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年二月、世々木村燈柄ノ竹枝ヲ生ズルノ記

東都之西有ㇾ邑曰ㇾ世々木村、有ㇾ農夫某者、生質温厚而能憐ㇾ人、嘗有ㇾ窮夫、偶於斯屢行以爲ㇾ業、居歲餘而値ㇾ疾益病、農夫某者閔ㇾ之、尤加ㇾ恩意、且與ㇾ藥、朝夕來而看、寒暖之節久而不ㇾ衰、窮夫每曰、我非ㇾ與ㇾ此人ㇾ有ㇾ親子之恩ㇾ然視ㇾ吾病ㇾ殊加ㇾ恩愛ㇾ而不ㇾ止、吾何以報ㇾ之乎、死亦不ㇾ忘也矣、口不ㇾ絕而死、農夫某者又傷ㇾ之涕泣而葬ㇾ之於我墓所、修ㇾ浮屠之法、送葬用ㇾ竹柄之燈、葬終而樹ㇾ之於埋葬之上、既今玆經ㇾ三年ㇾ而自ㇾ其燈

して、既に生氣備はれり、動搖して早地上に出かゝりたるもあり、いまだ半ば竹にて半蟬に變じかゝりたるもあり、色々ありて其數百千に及べり、初は小僧奴僕なども珍らしがりしが、あまり多きゆゑ、後にはもてはやすともなく、住侍は生類を害せんことを憐れみ、又土に埋み蟬に化せしめられしとや、珍らしさに余も兎角して、二ッ三ッを求得て携へ歸れり、其中に背中より子生ひ出たるも有り、京に歸りて人に語るに、草の根の虫に變ずること多きもの也、竹の蟬に變ずるもある事なりといへり、誠に冬は虫に成り、夏は草になるものも、本草などにも見えぬれば、是等も其類ひにてやあらん、

〔鳩巣文集賦一〕竹化石賦井序

若水稻子之家有竹化石長二寸餘、濶半之厚又半之、色如璧、有一節居中云、三年之前稻子請新井君美與余以求詩、且言曰、竹之化石自古有之、間於稗史小說見之、蓋竹之斷根漂流出沒於端沙之間、不知其幾百年、而日曝風乾受寒暑之變、則其化石者、時或有之、此亦天地間至難得者也、故人以爲溝中之斷、而余以爲天下之奇、雖千金不願易也、〇下略

〔東遊記五〕七不思議

一逆様竹は、むかし親鸞上人此國〇越後へ配流の時、携へ來り給ひし杖を、さかさまに地にさし、我說所の法世に弘らば、此杖の竹再び榮ゆべしといひ置給ひしに、其杖さかさまながらに枝葉しげり、其後其根に生ずる所の竹皆逆様なりしとなり、今は其古跡のみ鳥屋野といふ所に殘れり、

〔視聽草五集九〕靈形竹子生、右根ゟ石蛇堀出候儀ニ付、申上候書付、

私御代官所武州足立郡舍人町之儀者、道尺ゟ赤山往來有之、同村地內右往來際ニ字二ッ橋と申所ニ、百姓嘉七瓦燒立候場所有之、右地內ニ壹反分程之藪有之候處、右藪角壹尺五六寸之所、壹寸廻り、長壹尺ゟ貳三尺位之竹の子、數七十本餘生立候を、右嘉七見候處、不殘先之處曲り有之、如何

雜載

チ檐端ニ架之テ雨滴ヲ受ル具也、俗ニトユダケ、或ハトヒダケトモ云、竿貫樋竹貫トモニ肩ニシテ巡ル、

〔常陸國風土記行方郡〕郡南二十里香澄里、○中略東山有社、榎、槻、椿、椎、竹、箭、麥門冬、往往多生、

〔竹取物語〕今はむかし竹とりの翁といふものありけり、野山にまじりて竹をとりつゝ、萬の事につかひけり、名をばさぬきの宮つことなむいひける、其竹の中に本光る竹なむ一すぢ有けり、あやしがりて寄て見るに、つゝの中ひかりたり、それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり、翁云やう、我朝每夕每にみる竹の中におはするにてしりぬ、子になりたまふべき人なめりとて、手に打入て家にもちて來ぬ、めの女にあづけてやしなはす、うつくしき事限なし、いとおさなければ、こに入てやしなふ、竹とりの竹をとるに、此子を見つけて後に、竹とるにふしを隔て、よごとにこがねある竹を見つくる事、かさなりぬ、かくてをきなやう〳〵ゆたかになり行、

〔翁草四十八〕一元祿年中、駿府の寺に、一夜の内に、庭に假山の如く、地形凸に成る、怪見るに一兩日過れば笋生たり、近隣に藪無きに、希有の事也と沙汰する内に、追日笋成長し大竹と成、目通り凡三尺廻有、前代未聞の事と、諸人群集して是を見る、其後往來の御番衆某是を聞及て、彼寺に立寄見物して、住僧に所望す、住持も此竹故に寺内に人の群るを厭て、幸に伐之て彼士に與ふ、彼士是を携歸、人々に配分して、思ひ〳〵の器物とす、丸盃烟管盆、或は樽杯に製して珍器とす、或人飯器にして翫しを見たりと語れる人有、其大さわたり八九寸有しとぞ、

〔東遊記一〕竹根化蟬
越前府中の南二里に、粟田部といふ所あり、○中略此所に粟生寺といふ寺あり、天台宗にて坂本西敎寺の末寺にて、頗る大寺也、此寺の住持は、余○南谿橘が方外の親友ゆゑ、北遊の時も、廿日計逗留せり、其前年の事なりし由、此寺の北面にある藪を堀開く事ありしに、竹の根こと〳〵に蟬に變化

〔山崎宗鑑手跡連歌式目時代考〕讃岐の高松に宗鑑が一夜庵あり、山崎に庵をむすび、門は設といへども常は鎖せり、かくて藪をかまへけるに、今にあり、宗鑑藪といふ、其竹他に異なれば、諸人これを所望するに、後には藪もまばらに成ければ、手本可レ賣、竹林不レ賣と、門に札を立建たり、

〔竹島雜誌〕他計甚麼、日本風土記また竹島と書は、此島東の方大坂浦にありに大竹藪あり、其竹極めて大なるは、周圍二尺ばかりなるものあり、竹島圖説よつて號る也、

〔三十二番職人歌合〕十二番　右　たけ賣

手あたりのよき枝あらばをるもうし花の園ひのもかり竹めせ

二十八番　右　竹賣

うりかぬるじねんご竹の末の露もとの雫のまうけだになし

〔國花萬葉記山城一〕金銀　竹木　土石

竹　弓竹旗竿は賀茂八幡を用　竹屋町通西　烏丸通五條二丁下　高倉二條下町

〔元祿五年萬買物調方記〕諸工商人所付いろは分

た　京之分　竹屋　竹やほり川のにしひがし　同　ほり川のにしすぢめ、松ばら上ル四丁、　同　高くら二條下ル丁

た　江戸之分　竹屋　三十間ぼり　同　新材木南通　同　北こんや北八丁ぼり　同　新橋竹町　同　京橋竹　同　麴町十丁目　同　四谷御門の外　同　本所一ッぱし　同　淺くさ駒かた堂

た　大坂之分　竹屋　江戸ぼり　同　天滿ほり川　同　長ほり　同　天ま二丁目

〔守貞漫稿六生業〕竿竹賣

衣服ヲ洗ヒ曝ス竹竿ヲ賣ル故ニ、四時賣レ之ト雖ドモ、特ニ夏ヲ專トス、又夏月ハナヒ竹ノ竿ヲモ賣リ、詞ニカタビラサホ〳〵ト云、坐邊ニ掛レ之テ夏衣ノ汗ヲ晒スニ用フ、又樋竹ヲモ賣リ來ル、乃

竹藪

天竹黄ハ竹中ニアル粉ナリ、苦竹淡竹皆アリ、初ハ水ナリ、後漸ク凝テ粉トナル、數品アリ、塊ヲナシ、竹中ニ滿タル・モアリ、碎テ沙ノ如クナルモアリ、細ニシテ粉ノ如モアリ、白色牙色黑褐色ノ等アリ、牙色ニシテ微透ナル者上品ナリ、本草原始ニ、天竺黄通天下市者、形塊如豆大、亦有如指頂大者、有黑色、有牙色、有碧色者味甘、牙色者善、碧色者次之、黑色者下ト云、痘疹金鏡錄ニ、天竺黄點於舌上麻澀者眞ト云、舶來ノ者ハ皆小塊ヲナシタルヲ碎キタルナリ、黑アリ白アリ牙色アリ、皆內ニ炭或ハ灰多ク雜レリ、

〔伊呂波字類抄 大植物附植物雜〕篁タカムラ タケハラ

〔倭訓栞 前編三十四也〕やぶ　新撰字鏡、倭名抄に藪をよめり、彌生の義なるべし、日本紀の歌に、やぶはらとも云へり、仙覺說に、やぶは水つきてあしなど生げれる所をいふ、俗にやはらといふといへり、〇中略說文に、藪は大澤也と注せり、俗に竹やぶのみに心得るは非也、たけやぶは竹簀と見えたり、

〔日本書紀 七景行〕四年二月甲子、天皇幸美濃、左右奏言之、玆國有佳人曰弟媛、容姿端正、八坂入彥皇子之女也、天皇欲得爲妃、幸弟媛之家、弟媛聞乘輿車駕、則隱竹林、〇下略

〔日本書紀 二十一崇峻〕二年〇用明七月、物部守屋大連資人捕鳥部萬(萬名也)將一百人守難波宅、而聞大連滅、騎馬夜逃、向茅渟縣有眞香邑、仍過婦宅而遂匿山、朝廷議曰、萬懷逆心、故隱此山中、早須滅族、可不怠歟、萬衣裳弊垢、形色憔悴、持弓帶劒、獨自出來、有司遣數百衞士圍萬、萬卽驚匿篁藂、以繩繋竹引動、令他惑己所入、衞士等被詐、指搖竹馳言萬在此、萬卽發箭、一無不中、衞士等恐不敢近、萬便弛弓挾腋、向山走去、〇下略

〔出雲風土記 大原郡〕阿用鄕、郡家東南一十三里八十步、古老傳云、昔或人此處山田佃而守之、爾時目一鬼來而食佃人之男、爾時男之父母竹原中隱而居、爾時竹葉動之、爾時所食男云動動(アヨアヨ)、故云阿欲、

り、云フ竹實ヲ以テ製スト、記文ヲ添フ曰、〇中略夏のころより、山谷のみすゞ實をむすぶ事おびただしく、みな人打つどひ、是をひろひあつむるに、日々に兩三俵を得たり、あらかじめ是を數へたらむに、凡五六萬に過し、是まつたく戸隱の惠ならんこと尊ぶべし、

戸隱のみすゞの竹になれる實はふりにし神のめぐみなるらむ　邦守

右竹實をもて製し侍る御菓子なり、則戸隱山の御供を御藏被成候にひとしく御座候間、宜御披露可被下候、以上、

みすゞかる信濃國いもゐの里白雪齋製

信州善光寺西町御菓子所　府野屋清吉

竹茹

〔多識編三竹〕竹茹、和名今按太計乃阿末波太、

〔和漢三才圖會八十五苞木〕竹茹　俗云竹甘膚　可用淡竹、剖去筠取用皮肉間、

氣味甘微寒　治嘔噦、吐血、鼻衄、五痔、膈噎、傷寒、勞復、婦人胎動、小兒熱癇、

按、用竹茹綯糾繩、爲火繩、以爲行人煙草火、獵人爲鳥銃之用、勢州鈴鹿關作之者多、

竹黃

〔和漢三才圖會八十五苞木〕竹黃　竹膏　天竺黃

本綱、竹黃諸竹內所生、如黃土著竹成片者往往得之、今人多燒諸骨及葛粉等雜之、

氣味甘寒　治小兒驚風天弔、去諸風熱、鎭心明目、療金瘡、治中風失音不語、小兒客忤癇疾、

按、天竹黃卽諸竹三四月斫者、經日破裂之、內多有天竹黃、蓋濕熱熾於內、暑熱蒸於外、自生蛀、然乎、未見蟲形、黃粉輕虛者也、藥肆取箣竹外節所、有黃粉、充竹黃、不可用、

一種有竹蛀屎、古竹生蠹者、內肌食盡有小孔、腐爛而生白粉、此與天竹黃一物異品也、瘡瘍膿爛者傅之愈、

〔重修本草綱目啓蒙二十六苞木〕天竹黃　タケミソ　一名空箇玄藥性纂要　鵓路戰娜金光明經

一白土佐竹皮　右同断四貫目ニ付銀拾匁　銀拾貳匁三分　右同断四貫目ニ付　但同断、拾三匁内七分直下ゲ、
一中なし竹皮　右同断銀六匁五分　銀七匁五分　右同断　但同断、八匁内五分直下ゲ、
一葉竹皮　右同断拾貫目ニ付銀拾壹匁五分　銀拾三匁　右同断拾貫目ニ付　但同断、拾四匁内壹匁直下ゲ、

竹實

〔書言字考節用集　六生植〕竹實　形如小麥、以爲荒年之兆、又鸞鳳所食竹實非是、詳本草、　䈽　同　䈰　同　十年枯實、陸佃云、竹六十年一花結實、其竹則枯、見太平御覽、
自然粳　俗字

〔大和本草　九竹〕竹實　國俗自然粳ト云、或曰、阿含經ニイヘル劫初自然粳米ニナゾラヘテ云ニヤ、竹實ナルハ竹疫ナリ、凶年ノ兆シナリ、竹實生ズレバ、竹必枯ル、古昔鸞鳳ノ所食ノ竹實トハ別ナルベシ、

〔和漢三才圖會　八十五苞木〕竹實　䈽　俗云自然穀
本綱、今竹間時見開花、小白如棗花、亦結實如小麥、子無氣味而澁、可爲飯食、謂之竹米、以爲荒年之兆、其竹即死、必非鸞鳳所食者、
一種有生苦竹枝上者、大如鷄子、竹葉層層包之、其味甘勝蜜、有大毒、須以灰汁煮二度、煉訖乃茹食、煉不熟則戟人喉出血、手爪盡脫也、是此一物、恐與竹米之竹實不同、
古今醫統云、竹多年則生米而死、初見一根生米、則截去上梢、近地三尺通去節、灌入犬糞、則餘竹不生米也、
按草實有自然穀者如麥也、竹實相似之、故俗名自然穀乎、天和壬戌之春、紀州熊野及吉野山中竹多結實、其竹高不過四五尺、枝細而皆小篠、其實如小麥、一房數十顆、山人毎家收數十斛、以爲食餌、至翌年春夏、然大賚荒年飢、而後五穀豐饒、米粟價減半、予〇寺島良安亦直見之、然則荒年極當爲豐年之時出乎、

〔甲子夜話　九十〕丙戌ノ晩秋、某氏ヨリ糝糖ヲ贈ル、信州ヨリ出ス所ト、淡綠色ニシテ、育鳳糞ト銘ゼ

〔元祿五年萬買物調方記〕諸工商人所付 いろは分

た 江戸之分

竹のかは　同所○新橋南通

〔天保十三年物價書上 上〕竹皮直段引下ゲ高書上

一大飛包皮百文ニ付 當五月直段百貳拾目、當時引下ケ直段百三拾目、
一中包皮百文ニ付 當五月直段百八拾目、當時引下ケ直段百九拾目、
一小包皮百文ニ付 當五月直段貳百七拾目、當時引下ケ直段三百目、
一同並笠皮百文ニ付 當五月直段貳百七拾目、當時引下ケ直段三百目、
一並枝皮百文ニ付 當五月直段九拾目、當時引下ケ直段百目、
一並大包皮百文ニ付 當五月直段百六拾目、當時引下ケ直段百七拾目、
一相中皮百文ニ付 當五月直段貳百目、當時引下ケ直段貳百貳拾目、
一上葉竹笠皮百文ニ付 當五月直段百八拾目、當時引下ケ直段貳百拾目、
一尺長大枝皮百文ニ付 當五月直段五拾五匁、當時引下ケ直段六拾目、

右竹皮類者、船間ニ而品切多、當時商賣仕直段引下ゲ候方取調、此段申上候、以上、

天保十三寅年八月二十一日　諸色掛り 南傳馬町 名主新右衞門

〔諸色直段引下 貞〕諸色引下ゲ直段書

竹皮類

一本白長竹皮 去子(元治元年)六月書上直段拾貫目ニ付銀三百拾五匁 今般(慶應二年)引下直段拾貫目ニ付 銀四百六拾五匁 但當時直段四百九拾匁内貳拾五匁直下ゲ
一本白脇竹皮 右同斷銀百七拾壹匁 右同斷 銀貳百七拾匁 但同斷、貳百八拾五匁内拾五匁直下ゲ、
一上脇竹皮 右同斷銀五拾四匁 右同斷 銀八拾九匁 但同斷、九拾五匁内六匁直下ゲ、
一はら皮 右同斷六拾八匁 右同斷 銀百八匁 但同斷、百拾五匁内七匁直下ゲ、
一羊カン皮 右同斷銀四拾七匁 右同斷 銀四拾七匁 但同斷、五拾匁内三匁直下ゲ、
一笠皮 右同斷銀三拾三匁 銀三拾貳匁五分 但同斷、三拾五匁内貳匁五分直下ゲ、

しに、太守牛句の謎を以て、其後は永代死刑をまぬかるゝやうに成りしこそ、德行とも申すべけれ、

〔浪花の風〕竹の子は孟宗殊に多く、十月比ゟ出、江戸よりも出は早くして且多し、正月頃江戸の三月頃と大體大さも相對す、暖國故なるべし、味ひも優劣なし、多き故江戸ゟ廉なり、尤五月比は不斷出れども、二三月頃を盛んに賞玩す、續てはちく出れども、是は江戸ゟ少き方なり、眞竹は至て少なし、是近年諸國竹拂底なる故なるべし、

〔寐の須佐美 三〕かたへのもの、それに附て云、ある者筍を食する事、あまりに多くして、面目より下た板の如くになりて、くるしみぬるに、藥をあたへぬれど驗なかりしとき、加賀の國より來りたる扇子うりありしが、これを見て妙方に候、用ひて御覽候へとて、宿にかへり藥を調じて持來り、煎じて二服ばかり喉に入ければ、少しづゝ和して、やゝありてくつろぎぬ、そこにてこれいかなる妙藥にやと問れければ、甘草にて候、加賀にて骨竹を制するに、甘草水に浸しぬれば、しめやかに和らぎ、心のまゝにつかひ候故、存寄たるに候とこたへけり、

〔倭名類聚抄 二十 竹具〕箨　蔣魴切韻云、箨(音擇、和名笋乃宇波加波、)竹上大皮也、

〔箋注倭名類聚抄 十 竹具〕箨本从艸作蘀、說文艸木凡皮葉落陊地爲蘀、轉以笋上大皮落爲箨、俗變艸从竹、再轉爲竹上大皮之名也、

〔倭名類聚抄 二十 竹具〕篾　孫愐切韻云、篾(莫結反、和名竹乃加波、)竹皮也、

〔撮壤集 中〕竹箨(タケノコノカハ)　和名類聚タカンナノカハ

〔和漢三才圖會 八十五 苞木〕箨(音託)　笋皮(太介乃古乃加波)

按、箨可以織履、可以縫笠、又堪裹膠飴、淡竹箨淡赤乾色、苦竹箨黃有黑點潤色、山城嵯峨爲上、丹波次之、若狹豐後又次之、筑前安藝其次也、

覺略〇中

一竹の子　四月節々略〇中

右之品々致商賣候儀、先年月切ニ御定被成候得共、自今以後は此書付之通に、節ニ入候日より可致商賣之、略〇中若右之趣相背者於有之は、急度曲事可申付者也、

五月

〔寛政四年武鑑〕前田大和守利以上州七日市〇　時獻上五月笋

堀田相模守正順下總佐倉〇　時獻上五月笋

土屋但馬守英直常陸土浦〇　時獻上五月笋

〔雨窻閑話〕國府寺筍井島左近が事

一今は昔、播州姫路の太守たるひと、年々筍の生ふる時分、姫路の城下國府寺次郎左衞門といふ富家へ、振舞にゆき給ふ事あり、かの國府寺は、由緒正しきものにて、太閤よりの御朱印頂戴す、境内に大藪有りて、年々筍出づる事夥し、其太守を招請申す事先例なり、また此藪へ入りて筍を盜むもの、必罰せらるゝ事、律令なりとかや、ある時筍の時分、太守の中間年十七八許なる若もの、ひそかに彼やぶに忍び入りて、筍を多く盜み取りけり、此事露顯に及び、吉岡某といふ家老のはからひにて、禁獄のうへ、彼者打首に致しけり、其節吉岡至りて出頭して、肩をならぶる者なし、こゝに其翌年夏、例の筍時分、國府寺次郎左衞門太守を招請し奉るによりて、吉岡もしたがひ行きけり、亭主次郎左衞門罷り出で、いつもの如く、藪の筍を御覽下されかしとて、先へたち案内す、太守見物ましまして、うしろを振廻り、筍はいつもはゆるが、人はと仰せられて、淚をこぼし給ひければ、吉岡ぞつとしたるよし、下劣の小童の命一つといへど忘れ給はで、筍を見給ふにも、かれが死ををしませ給ふ、人君の思召いと有りがたし、凡是までは、大概此筍を盜む咎は、死刑に極まり

〔執政所抄上正月〕二日　臨時客

御料次第　六獻薺汁　根笋。可用意近代否之歟、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕太上天皇山〇花の御名は、ながくくださせ給ひにき、〇中略冷泉院にたかんなたてまつらせ給へるおりは、

よの中にふるかひもなきたけのこはわがへんとしをたてまつるなり、御返し、

としへぬるたけのよはひは返してもこの世をながくなさんとぞ思ふ、かたじけなくおほせられたりと、御集に侍るこそあはれに候へ、まことにさる御心にも、いはひ申さんと、おぼしめしけんかなしさよ、此花山院は風流者にこそおはしましけれ、〇中略あて御ゐあそばしたりしさまにけうあり、〇中略たかんなのかはを、おとこのをよびごとにいれて、めかゝうして、ちごをおどせば、かほあかめてゆゝしうおぢたるかた、又とく人たよりなしの家のうちつくり、法などかゝせさせ給へりしが、いづれも〳〵さぞありけんとのみ、あさましうこそ候ひしか、

〔古事談一王道后宮〕一條院御時、於清涼殿有御酒宴之日、讃岐守高雅朝臣奉仕庖丁、左府〇藤原道長拔竹臺笋、石灰壇ニテ燒テ、シヒ申サレケレバ、度々聞食ケルヲ、高雅朝臣微音ニ、本自方戸ハト云ケリ、

〔親俊日記〕天文十一年五月四日癸丑、清水蓮養坊卷數竹子一束到來之、眞木島里より竹子二束到來之、　十二日辛酉、豐島但馬竹子到來之、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一竹子折事堅停止、若於相背者、萬貫可爲過怠事、見付申上者、右壹貫爲褒美可遣事、〇中略

慶長二年三月廿四日　盛親在判

元親在判

〔享保集成絲綸錄三十六〕貞享三寅年五月

〔國花萬葉記山城一〕雜菜之品　竹笋　眞竹也　醍醐　八幡

〔古事記上〕於是伊邪那岐命見畏而逃還之時、其妹伊邪那美命言令見辱吾、即遣豫母都志許賣以音此六字令追、爾伊邪那岐命中略○刺其右御美豆良之湯津津間櫛引闕而投棄、乃生笋、是拔食之間逃行、

〔古事記傳六〕笋は字鏡に筍笋太加牟奈とあり、後の物に多加字奈とも云り、凡て牟を字と云なす例多し、音便なり、名の意は竹芽ナなり、菜は食に適て喫物の凡の名なり、かゝれば笋も菜にするときの名を、たかむなといひ、たゞには竹子と云故に、歌には竹子とのみよめり、此は拔食とあれば菜なり、

〔出雲風土記秋鹿郡〕都勢野山中略○笋茅等物叢生、

〔續修東大寺正倉院文書別集十九〕奉寫一切經所解　申請用雜物事
合請新錢卅三貫九百九十三文中略○
用一十七貫五百六十文中略○　五十文竹子二束直中略○東別廿五文
以前、起去閏三月一日、盡今月廿九日、請用雜物幷殘等、顯注如件、以解、
寶龜二年五月廿九日　散位正六位上上村主馬養署名以下略○

〔日本靈異記下〕髑髏目穴笋揭脫以祈之示靈表緣第廿七
白壁天皇光仁○世、寶龜九年戊午冬十二月下旬、備後國葦田郡大山里人品知牧人、爲買正月物、向同國深津郡於深津市而往、中路日晚、次葦田郡於葦田竹原所宿之處、有呻音言、痛目矣、牧人聞之、竟夜不寢而踞、明日見之、有一髑髏、笋生目穴而所串之、揭竹解免、自所食餉以饗之言、吾令得福、到市買物、每買如意、疑彼髑髏因祈報恩矣、

〔延喜式三十三大膳〕造雜物法
笋子一圍二升得擇料、鹽九合、搗糟三升、　右釋奠料

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜
日別一斗、中略○笋四把、五六月中宮准此、其東宮雜菜五升中略○笋二把、

トハ、天威ノ畏レ無キニ非ズ、故ニ竹筍ヲ作ルコトハ、江南竹ニ限ルコト、知ルベシ、江南竹ハ俗ニ孟宗竹ト名ルモノ即是ナリ、此竹モ成長セシムルニ至テハ、器物ヲモ造ル者ナレドモ、多クハ玩弄ノ物ト為ル、眞竹ヨリハ性脆ガ故ナリ、又眞竹ノ筍ハ作ラズシテ、五月十三日以後ニ生ズル者ハ採テ食フベシ、凡筍ノ五月十三日以後ニ生ジタルハ、大抵竹ノ用ハ為サザル者ナリ、江南竹ヲ作テ筍ヲ採ニハ、早ク出スヲ妙トス、二月三月ニ出スガ如キハ、人モ亦奇トセザルヲ以テ、農家ノ利潤ヲ為スコト少シ、此物ヲ早ク生ジ、早ク肥太セシムルノ法ハ、荒廢ノ野原ヲ新ニ墾キ、赭腐壚、黒鬆土ノ論ニ拘ズ、先ヅ深三尺幅二尺許ノ長溝ヲ堀リ、朧土ト腐糠（此二物ノ製法ハ、培養秘録ニ詳説アリ、）ト各一石宛ニ馬溺塩（此モ亦秘録中ニ詳ナリ）二斗調合シタル糞土ヲ、其底ニ敷コト一尺二三寸、此糞土ノ上ニ江南竹四五本ヅヽヲ一株ニシテ、繁カラズ遠カラザルヤウニ植並ベ、肥タル眞土ト河底ノ埴泥トヲ交テ、上六七寸許モ覆ヒ、根ノ風ニ動揺セザルヤウニ控抗ヲ打立テ、欄垣ヲ丈夫ニ結置キ、其根覆ノ土ヲバ堅ルコト勿レ、

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之儲、心事難申盡候、○中略御齋之汁者、○中略筍、羅蔔、

〔尺素往來〕茶子者、○中略干竹筍、乾胡盧、

〔食物知新一〕日域諸國名産

菜蔬類　書寫筍子播州　久野筍遠州　四季筍薩州　酸筍京師鹿谷　二月筍因州

〔雍州府志六土産〕竹筍　處々出、凡苦竹之外總謂淡竹、又名雷竹、物號甜竹、倭俗稱牢竹也、淡竹所生之筍、其生也早矣、然其味淡脆、醍醐邊苦竹多、俗稱眞竹、眞竹所生之筍、其形大而味厚、煮食之、籜皮有斑點者為佳、醍醐寺僧蒸之而食之、世稱醍醐蒸筍、是為春末之珍味、蒸之法不去籜皮、連根入大釜、盛水燒大榾柮、蒸之二三日、柔脆至如綿則止、然後磊而截之、合醋醤或煮酒而食之、近世彼寺僧以青竹插之、贈遠方、雖歷數日不朽腐、

紫黑斑者、采收晒乾以爲器用、白者亦用、故民間多采之貨于四方、淡筍籜者皮厚而難敗、苦筍皮薄弱易損爾、

苦筍、氣味、苦甘寒無毒、主治、化痰除熱、下氣利水解酒毒、

淡筍、氣味、甘寒無毒、主治、消痰除熱、婦人驚悸、小兒驚癇俱治、

長間筍、氣味、苦寒無毒、主治、下氣利膈爽胃、然多食動蟲積、令人上氣嘔吐、

發明、諸筍俱雖寒冷無毒、性硬難消、消去後復滑利無益於脾胃、惟其淡甘可愛、最不宜人之理、然則豈可多食哉、

〔重修本草綱目啓蒙（十九柔滑）〕竹筍　タ○カ○ン○ナ○（古名）　カ○ラ○ダ○マ○（古歌）　タ○ケ○ノ○コ○　タ○ン○コ○（上總、房州）　カ○ツ○

ボ○ウ○（防州）　一名竹鼠（事物異名）　龍孫　籜龍　玉板兒　玉板和尙　玉板師　玉嬰兒（共同上）　筍

兒拳（劉南詩稿）　刮腸篦（發明）　子筍（筍譜）　竹牙（同上）　菌（事言要玄）　毛頭（名物法言）　笑（洪熙字典）　筎（同上）　龍

雛（事物紺珠）　籜龍兒　稚子　佛影蔬　楊妃指　犢角馬蹄　邊幼節字脆中　玳瑁簪（以下苦竹筍名）　錦

棚兒（共同上）　錦株子（書言故事）　增一名簋（爾雅）　箭萌（同上）　甘銳侯（淸異錄）　竹篛（筍譜）　稺龍（竹譜）

日華胎（雲笈七籤）　羊角（事物異名）　蒼龍骨　春龍　玉虬　黃犢角　獰龍（共同上）

晉ノ戴凱之ノ竹譜ハ、百川學海ニアリ、宋ノ僧贊寧ノ筍譜ハ說郛ニアリ、淡竹筍ハ早ク生ジ、籜ニ斑ナシ、味蔹ナラズ、苦竹筍ハ後テ生ジ、籜ニ斑アリ、味苦蔹、煠カザレバ食レズ、凡ソ竹ハ八月ニ根横ニ引テ鞭ヲ生ズ、コレヲ行鞭ト云、ソノ鞭頭筍ノ形ヲナスヲ、採リ食フヲムチコト云、一名ハエボウ、（筑前）ケイボウ、（筑後）是ヲ僞筍ト云、又二筍ト云、共筍譜ニ出、又冬月筍ノ土中ニアル者ヲ堀出シ食スルヲ冬筍ト云、食物本草ニ出ヅ、

〔草木六部耕種法（五需幹）〕竹筍ヲ作ル法ハ、獨活芽ヲ作ルト其意大略相似、然レドモ竹ハ能作リテ肥太成長セシムルトキハ、極テ有用ノ多キ材ナルニ、其筍ヲ採食テ僅ニ舌上三寸ノ賞味ト爲スコ

またなるたけのこ

〔古今和歌集雜十八〕物おもひける時、いとけなきこをみてよめる、　凡河内みつね

今更に何おひいづらん竹のこのうきふししげき世とはしらずや

〔赤染衛門集〕筍ををさなき人におこせて

おやのためむかしの人はぬきけるを竹のこによりみるもめづらし

かへし

雪をわけてぬくこそおやのためならめこはさかりなるためとこそきけ

〔源氏物語横笛三十七〕御寺のかたはらちかきはやしに、ぬきいでたるたかうなそのわたりの山にほれるところなどの、山里につけてはあはれなれば奉れ給ふとて、〇下略

〔大上﨟御名之事〕女房ことば

一竹のこ　たけ。

〔本朝食鑑三柔滑〕筍〈訓二太加奈一、今訓二竹乃子一、〉

釋名、筍、〈源順曰、筍字亦作レ笋、必大按、作レ笋者非也、笋者筍皮也、〉

集解、今本邦所レ食之筍者、苦竹淡竹長間竹之筍也、苦竹者俗稱二眞竹一、或稱二唐竹一、古稱二加波多計一、淡竹者俗稱二波竹一、古稱二於保多計一、長間竹者俗稱二奈伊竹一也、淡竹筍者籜有二紫黄黒斑一而美、筍肉亦甘脆碧色、有レ香、大美、江東少、京師多而最肥美、從レ古以二醍醐蒸筍一爲レ珍、然不レ如二采生煮食一、而鞍馬嵯峨及東北山中之産爲二第一一、和河紀攝江丹諸州多出而太美、海西諸州亦淡竹筍多、苦竹筍少、雖二偶有一亦不レ用レ之、江東惟苦筍最多、其味甜苦相交、其中以二甜多苦少一爲レ佳、淡筍希有、當世販レ采者二三月未レ生レ筍時、深掘二竹根一得二小筍一、以二其早一爲二珍貴一價、其味不レ好矣、長間筍者諸州倶有、味尙苦多甜微、不レ耐二多食一也、今洛及畿内醃藏而貢二獻之一者悉是、淡竹筍江東惟雖下以二苦筍一而醃中藏之上、或不レ久或易レ腐、味亦不レ佳、故收造者少矣、凡籜皮

直なり、壁のゑつりは山茅を用ゆ、大ひなる茅ある故に、多くは竹のかはりにこれを用ゆ、他より思ふとは格別にして、又相應にかへ用ゆるもの生ずるも天地の妙なり、それより北方越後、出羽奥州も南部領邊は、人民一生竹を見ざるもの有、太き竹は絕てなし、夫故人家の邊に、南國のごとく竹藪といふものなし、山中に笹あり、是も熊笹にて竹の用に立べきものに非ず、南國にては竹ほど人家の重寶に成るものはなく、一日なくて叶はぬやうに覺ゆれども、斯の如く竹なくてもさのみ不自由なる樣にも見えず、只桶の輪のみ何方にても難儀に見ゆ、津輕秋田邊にては、榎の木の皮の樣に見ゆるものを曲て、樺にてとぢ、桶として用ゆ、又太き木をくりぬきたるも見ゆ、邊土は人民にいとま多きゆへ、丁寧なる細工をしても用は足りぬにや、

〔新撰字鏡 竹〕筍笋(同、息元則元二反、笋也、太加牟奈、)

〔段注說文解字 五上竹〕𥫗竹胎也、(醢人注曰、筍竹萌、按許與鄭稍異、胎言其含苞、萌言其已擢也、吳都賦曰、苞筍抽節、引伸爲竹青皮之偁、尚書云、敷重筍席、禮器如竹箭之有筠、聘義浮筠旁達、皆是其音、爲簀切、今字作筍、)从竹旬聲、(思允切、十二部、今字作笋、)

〔干祿字書 上聲〕笋筍(上通下正)

〔本草和名 十三木〕竹笋(崔禹云、笋一名草笋、出兼要集、生作筍子、)和名多加牟奈、

〔倭名類聚抄 二十竹具〕笋 爾雅注云、筍(音隼、字亦作笋、和名太加無奈、)竹初生也、本草云、竹筍味甘平無毒、燒而服之、

長間笋 兼名苑注云、長間笋(今案和名乃女之)笋青最晚生味大苦也、

〔撮壤集 中竹〕笋(タケノコ タカンナ)(筍同字、和名類聚)龍孫(レウソン、同)

〔書言字考節用集 六生植〕筍(タカンナ タケノコ)笋(同)、籜、䈽、茁(並同、)初篁(同)竹萌(同、爾雅)竹胎(同、說文)竹子(同、本草)竹芽(同)

〔藻鹽草 八草〕笋

から玉、(筍の異名也、藏玉にあり、)たけの子ともよめる也、(今さらに何おひつらむたけのこのうきふししげき世とはしらずや)　たけのふるねのおひかはる、(拾遺、是たかんなをよめり、)　をくれてさせるねたかんな　かきねにおふるたけのこ　雪の

凡年料雜籠料、竹四百八十株、用司園圃竹、

〔後水尾院當時年中行事 下〕一竹簣の類用る事禁忌也、諒闇の時倚廬の御所のしつらひ、ことごくみな竹簣を用るがゆゑなり、

〔狂歌今昔物語 下〕あき人を誹諧師と聞違へし事

江戸のかた邊りに、烟管のらう竹ひさぐ家あり、日毎にあき人ども來りて、らう竹買うけて業ひにぞすなる、○下略

〔山陽遺稿 六〕竹樓記

姫路藩執政河合君、就其室東偏起小樓、材多用竹、曰竹樓、乙酉之秋、余○山陽賴蒙其延請、嘗一登觀、蓋其屋既葺以竹、自椽榱欄楯、又無往非竹、明潔雅素、登者無不肅然也、聞君當國以儉爲政、百弊盡革、居第敝不敢修、而俟時來臨莫以待焉、所以有此樓、而凡其竹材取之國中所生、不足者補充、寛櫺之間、往々用敗弓故箭、曰是亦竹也、其示儉朴非好事、可以見大臣之用心矣、而請余記之、余嘗見宋王元之亦有竹樓而自記之、蓋因其所管州多竹、用代瓦、以價廉工省、而元之亦倣之、則與君之創意爲之、用心有在者異矣、但其取廉省同耳、且彼之用竹獨瓦、故其謂宜急雨宜密雪、宜鼓琴圍棊者、特謂其外之聲也、豈如此樓內外皆竹、快心悅目歟、則所謂瓦之易朽、此不必憂也、然以瓦言之、亦有異焉者、彼游官奔走、不得久居、故望後人嗣葺、得以不朽、如君之世祿、又獲其君、非元之比、雖東西于役莫事處、而私第與公室並存者、奕葉依然、則竹樓之樂可以永享矣、而乃子乃孫嗣葺不絕、屢朽屢葺、國中之竹伐而復生、剡心腹効力用、又猶君之世忠藎也、君之竹樓事有鑒哉、是可以爲記、

〔西遊記 續編 二〕孟宗竹○中略

都て暖國には竹よく生育す、寒國は竹にあしく、信濃の國には竹一本も生せず、甚だ不自由成事なり、桶の輪には竹にあらざれば叶ひがたきゆへ、三河尾張より輪につくりて送り來り、甚だ高

ノ筒竹トシテ、京大坂ノ市店ニ送ル、

湯山竹細工　同郡〇有馬有馬湯元ニアリ、料紙硯匣筒等ノ器用、竹ノ内皮ヲ張テ編竹ヲ以テ、畫紋或ハ詩歌ノ文字隨所好作之、

〔藝備國郡志安藝上土產〕竹籠　竹工元嚴島之人、而今在府治、削竹以編造花籠菓籠筐筥簽飾之類也、

竹器　在今府治、以竹作匙、又製小刀柄、

巨竹　所々有之、爲椽爲柱、又代屋瓦、或作花筒、春末生筍、風味爲尤佳也、

筒幹竹　出于安南郡海上竹島、矢人取之造箭、兵器之內特所爲用也、

〔日本書紀神代二〕一書曰、〇中略以竹刀截其兒臍、其所棄竹刀終成竹林、故號彼地曰竹屋、

一書曰、〇中略彥火火出見尊具言其事、老翁卽取囊中玄櫛投地則化成五百箇竹林、因取其竹作大目麁籠、內火火出見尊於籠中投之于海、

〔新撰姓氏錄左京神別〕竹田川邊連

同命〇大明五世之孫、建刀米命之男、武田折命之後也、仁德天皇御世、大和國十市郡刑坂川之邊、有竹田神社、因以爲氏神、同居住焉、橡竹大美、供御箸竹、因茲賜竹田川邊連、

〔日本書紀繼體十七〕七年九月、勾大兄皇子〇安閑親聘春日皇女、〇中略口唱曰、〇中略歌妃和唱曰、莒母唎矩能、簸都細能、婀娑履、那鵝例俱屢、駄開能、以矩美娜開、餘蘆開濮等陛嗚磨、莒等儞都俱唎、須衞陛嗚磨、府曳儞都俱利、府企儺須、〇下略

〔日本書紀孝德二十五〕白雉四年七月、被遣大唐使人高田根麻呂等、於薩麻之曲竹島之門、合船沒死、唯有五人、繫胸一板、流遇竹島、不知所計、五人之中門部金採竹爲筏、泊于神島、

〔延喜式二十八隼人〕凡應供大嘗會竹器、熬笥七十二口、煠籠七十二口、料竹別六株乾棗餅籠廿四口、口別三株十籠六口、口別五株十預前造備送宮內省、

之穴下、是謂堅通樋、朝市毎屋無不用之、其次半割之代屋瓦、又爲屋椽、其次小者編連之爲床、又貼窻牖、其外竹之爲用也、不可勝數、其中苦竹爲良、凡諸竹陸地黒壤生者多巨大、然竹性柔脆也、生山間石地者、其性堅實而不蠹、近江國園城寺山之產、剛直宜作弓、其細者用爲旗竿、倭俗旗謂農保利、旗竿或上賀茂幷石淸水八幡山生者伐用之、是爲依神力之冥助而得勝利也、凡伐竹自秋八月至冬十月、是謂秋切冬切、他月伐之則速朽腐而不堪用、一種其莖細長而其葉片大也、是稱女竹、又謂忍竹、建是比並而爲垣、又半破之縱橫結束之、爲墻壁之骨、或貼窻間、

〔雍州府志七土產〕竹屋　近世二條京極所々幷四條京極東、以竹造諸品物、第一倣茶人之舊製、而以大竹切插花之筒、又削掬茶之杓、或引切或柄杓悉製之、〇中略

竹具　建仁寺町大佛前、亦以竹造諸品物、竹輿竹床竹椅竹枕竹簾杖杖及菓籠等物無不有、

〔古今要覽稿草木〕竹

用をいふときは、中々に凡草衆木の及ぶ處にあらず、まづ弓材となし、矢料となし、旗竿となし、竹束となし、竹鎗となし、筧となし、棧となし、傘骨となし、扇骨となし、簫笛となし、床簀となし、竹椅となし、編筵となし、書架となし、籠筥となし、柱杖となし、水尊(ハナイケ)となし、水滴となし、杓となし、箸となし、松明となし、火繩となし、筆管烟管となし、釣竿黏竿となし、籠となし、簾となす、その用殊に多くして、さらにその德を君子に比するのみならず、また凡草衆木にも勝れて、實に天下の良材なり、

〔元祿五年萬買物調方記〕諸工商人所付いろは分

た　京之分

竹ざいく　四條寺町ノ東

〔國花萬葉記八駿河〕駿河國中名物出所之部

竹細工府中の町にて作る、花入、硯箱、細ふごいろ〳〵あり、

〔攝陽群談十六名物土產〕木代軸竹　同郡〇能勢木代村ヨリ切出セル筆ノ軸竹也、其曲節アルヲ破魔弓

利用

行、明年筍莖交出とあり、是竹酔日と稱するなり、皆詩料となすべし、又釋梅國が櫻陰腐談に、蒔竹莫如蒔筍、蒔竹則艱焉、移之之勞、種筍則便焉、移之之速、大要筍出上二三寸許、堀地欲廣不傷其根、須留宿土、而移時大飲爲好、無百不一活者、此余所親見、以告竹之愛同予者焉とある、いまだ不試ども序にかいつく、

〔日本書紀七景行〕五十七年九月、造坂手池、卽竹蒔其堤上、

〔吾妻鏡十四〕建久五年二月廿二日甲寅、自三浦澀谷等竹數十本被召寄之、今日被栽南御堂後山麓、將軍家○源頼朝令監臨給、三浦介奉行之云云、

〔有德院殿御實紀附錄十八〕公○德川吉宗殊に林園泉石の觀をもてあそばせ玉ふ事もなく、一草一木の微にいたるまでも、みなものゝ用にたつべきものを、うゑさせ玉へり、そのなかにも竹はわきて實用の物なりとて、年々に數種をうゑられしが、これより先吹上の御庭に、田舍といへる茶亭のありしを、こぼたしめ玉ひ、其あとに眞竹六百株を植させ玉ひしが、享保十年、植木門より半藏門までの、裏山通に移しうゑられ、それよりまた大土手なだれに四百株、また大道通矢來內外の土手にも三百株、一の門內に淡竹三百株、また草加驛よりも大竹六株をうつされ、小なへ竹なども追々植られしに、裏山通の竹年々に繁茂せしかば、この筍をもて日每の厨料にもせられ、又年年材木奉行に下して、材木の用とせられ、折損せしをば園丁等にあたへ、かれらが所德とせしめ玉ひしとなり、

〔白河樂翁公傳〕國產の事に心を用ひ玉ひ、○中略孟宗竹、八幡の竹の根生姜、さつま芋、館たばこの種を求て播しめ、○下略

〔雍州府志六土產〕竹　所々有之、西郊產特大也、其至巨者直破之、其本末留一節、其餘悉刳去其節、橫屋檐、受屋上所滴之雨水、自端末圓穴傳竪通樋、是謂橫通樋、又不破之內刳去其節、建橫通樋雨水落所

中國所生不過淡苦二種、其名目奇異者列之於後條也、宜高平之地、近山阜尤是所宜、下田得水則死、黃白軟土爲良、正月二月中斷取、西南引根幷莖芟去葉、於園內東北角種之、令坑深二尺許覆土厚五寸、竹性愛向西南引、故園東北角種之、數歲之後自當滿園、諺云、東家種竹西家治地、爲滋蔓而來生也、其居東北角者、老竹種不生、不能滋茂、故須取西南引少根也、稻麥糠糞之、二糠各自堪、等不令和雜、不用水澆、澆則淹死、勿令六畜入園、二月食淡竹筍、四月五月食苦筍竹、蒸煮炰酢在人所好、其欲作器者經年乃堪殺、未經年者軟未成也、

〔草木錦葉集 緒〕竹太く作方の傳

竹地植にて太く大竹になさんには、初穴のごとくなる地所低き、黑土の處へ植て吉、年々掃溜の類入れば、地所も自然に高く成、竹も太く出來る也、親竹はいかにも細き新竹吉、太き古竹にては子生せず、上根多くからみたれば、地かたくなる故、上根は掘捨てよし、廐肥掃溜など多く入れば、上根むれて腐るゆへ、掘世話なく別してよし、上根よりは太き子生せず、赤土場所にては、筍ひがらく苦みあり、黑土は上なり、自然に生ずる、ふきも同樣にて赤土場は甚苦し、

〔剪花翁傳 五 雜樹〕竹並小笹　方日向、地半濕、土回塵或芥埃眞土雜も可也、砂は宜しからず、肥油粕酒糟獸魚大小便等、總て强く厚き物よし、又葉芥埃いか程も厚く置べし、株は植んとおもふ筍を立て、其巳後に下枝五七節殘して、末の方を剪止置ば、葉よく繁茂て根もよく殖る也、翌年を經て、又翌年の秋彼岸より冬迄に移し植べし、小竹小笹ともに並び同じ、

〔燕居雜談 二〕栽竹日異名

竹をうゝるに五月十三日をよしとすること諸書に見えて、其日の名をさま〳〵に呼り、宋黃徹が碧溪詩話には、世傳五月十三日爲竹迷日、凡種竹多以五月、杜云、東林竹影薄臘月更須栽、則唐人植竹用季冬月也、又云、平生憩息地必種數竿竹、嘗欲闢小軒、以必插目之とあり、是竹迷日と稱するなり、岳州風土記曰、五月十三日謂之龍生日、栽竹多茂盛とあり、是龍生日と稱するなり、藝苑雌黃に、種竹者多用辰日、又用臘月、惟五月十三日、人謂之竹醉日、又謂之竹迷日、栽竹多茂盛、或陰雨則𥡴

いづれも根の土を厚く廣く掘取、一科を數人にて持ほど大かぶにしてうゆれば、盛長せざる事なし、又菊と竹とは、根ながく上に向ひ出る物なれば、泥を多く添て、廻りよりおほふほどがさかゆる物なり、又云竹を種るに、一人してかぶをうゆれば、十年にしてさかへ、十人して持程のかぶは、一年にしてさかゆるものなり、又太き竹を好みても、かぶ小さければふとからず、小き竹にてもかぶをふとくして、月菴がいへるごとく、根の下に糞を多く入るれば、ほどなくさかへ、大竹となる物なり、又竹を引取事は、籬を隔たる竹林の此方のかきねに、狸か猫を埋み置ば、明年筍多く出る物なり、又東家に竹を種れば、西家に土を種ると云事あり、たとへば隣に竹をうゆれば、一方の屋敷には、其とをりに土を置ば、隣の竹皆土の高き方に、うつるといへり、竹を伐事、三伏の中か、又七八月をよしとす、又臘月きれば、虫喰ず、竹を伐に、三を留、四を去と云事あり、竹は七八年も過れば花を生じ、立枯する物なり、三年竹をば殘し留めて、四年になるを伐べし、是竹林を生立(そだつ)る定法、肝要の事なり、四年にならざるはかならずきるべからず、跡の竹甚いたみて、大き竹林も小さくなる物なり、又竹は山間の物は柔かにしてかたからず、平地の園林は竹老てつよしと云り、山是園の竹は氣つよくさして其性はしかく、常の里なるは氣やはらかにして、ねばりけあるを云なるべし、山のはつよ過るならん、是を桶ゆひにたづねとへば、山林の竹はねばりけ少なくはしかく、平林のはねばり氣ありてやはらかなりと云、竹の性春はうるほひありて枝葉に發し、夏は玄んにおさまり、冬は根に歸る、其故冬竹を伐ば、日數をへて後われさけて性强からず、夏はよけれども竹林痛む物なり、二つながら全き樣にはならざるゆへ、七月末八月を中分とする事なり、又竹をうゆる時、枝を三四段をきて、末を節きはよりそぎ切て、きりたる節に水のたまらぬ樣にすべし、竹皮などにて末を包みたるよし、されども多くうゆるには、なりがたき故かくはするなり、

〔齊民要術五〕種竹

箬竹
栽培

〔箋注倭名類聚抄竹十〕呉都賦劉注引異物志云、射筒竹、細小通長、丈餘亦無節、可以爲射筒、

〔倭名類聚抄竹二十〕箬竹　唐韻云、箘(音窘、字亦作䈣)、竹名也、

〔農業全書諸木九〕竹

竹をうゆる地は、高くして平かなる所、山の麓谷川近き所の、黄白軟の地に宜しとて、尤肥て性よく、沙がちなる和らかなる地、濕氣のもれやすきを好むと知べし、うゆる法、正二月、一かぶに三本も五本も多く立たるを、はちを廣く付て、廻りの根を、よく切る物にて、さけくだけざる樣に切廻し、末をも枝をも少づゝとめて、屋敷内ならば、東北の隅に地を廣くほり、根先の方を西南の方にひかせ直にうへて、土をおほふ事五七寸、風に根のうごかぬ樣に、三方よりませをゆひをくべし、踏付かたむる事なかれ、踏付る事竹をうゆるに甚いむ事なり、尤活付までは切々水をそゝぎ、其後牛馬糞、麥稻のぬかなどをいかほども多く入べし、竹は取分あけ土の浮たるにうへて、盛長早き物なり、又竹はうへてむきより棒にてつきたるはよし、手風に觸、又は手足を洗ひたる汁、女の面など洗ひたるあか汁をかくれば、盛長せずして、却て痛み枯る物なり、又月庵と云古人が竹を栽し法は、溝を深くほり、乾馬糞を泥にませ一尺ばかりもをきて、夏は間をうとく、冬はえげく、三四本を一かぶとして淺くうへ、肥たる土を以ておほひ、泥土をかけ、ませを二通りゆひて、根の土をばきびしくうち堅むべからずと云り、又竹林の南の方の科をほり取、此方にて北の方にうゆれば、根必南にさすゆへ、よくさかゆる物と云り、雨の中か、雨を見かけてうゆべし、若西風の時はうゆべからず、竹にはかぎらず諸木も皆西風にうゆる事は忌物なり、又諺にも竹をうゆるに時なし、雨を得て十分生と、又竹を栽るは五月十三日、是を竹酔日とも、竹迷日とも云て、此日竹をうゆれば、百活うたがひなく、即さかゆる物なり、又必五月にかぎらず、毎月廿日竹をうへて皆活共云り、又正月一日、二月二日、三月三日、是も又よく活る物なり、又辰の日は毎月うゆべしとも云り、

中土に干鰯を雑へ植かへてよし、盆は擂盆の如く上の開きたるものよし、寒を恐る丶事椶竹よりも甚し、冬乾かして枯槁ず、又水多てはわるし、加減肝要なり、むろ入前一度糞水を澆てよし、

〔剪花翁傳三五月開花〕椶櫚竹　花の色赤茶、形ち少し、開花五月中旬、方三分陰、地三分濕、土えらばず肥大便寒中に入べし、分株春彼岸後よし、又秋の土用後芽を鋏分植べし、同種に觀音竹といふあり、長二尺許に過ず、上品とす、育方同じ、

〔古今要覽稿草木〕椶櫚竹　しゅろちく

椶櫚竹は、和漢通名にて、その一名を椶竹、一名桃竹、一名桃枝竹、一名陶竹、一名桃絲竹、一名實竹、一名木竹、一名石竹、一名蒲葵竹、一名古散竹、一名絢竹、一名桃笙といふ、此種に大小の異なるあり、其大なるを俗に大椶櫚竹といひ、漢名を樸竹といふ、葉の狀全く椶櫚に似て少さく、深綠色にして光澤あり、その幹また椶櫚に似て、至て細小にして、高さ四五尺、毛多く節繁く、中心實して頗る實心竹の如し、年を經るものは、梢の葉間に七八寸の穗を抽出て、細小華をつく、狀金粟蘭華に似てや丶粗なり、小なるを俗に琉球椶櫚竹、一名觀音竹といひ、漢名を筋頭といふ、その狀大椶櫚竹に似て至て少さく、高さ僅に一尺許に過ず、葉は淡綠にして薄く、光澤ありて、葉の先すべて下垂するものは、此竹の天棄なり、又一種椶櫚竹あり、漢名を短栖といふ、その葉幹また大椶櫚竹に似て、高さ僅に二尺許に過ざるを異とす、近時別に一種觀音竹といふものあり、其葉厚して大椶櫚竹よりも濶く、色深綠にして、葉先下垂せず、幹最肥大にして毛あり、其幹三五年をふるものは、大椶櫚竹とおなじく、梢の葉間に穗をなし華をつく、狀及己華に似て、はじめ淡黃色にして、後白色に變じ、また根上より每幹おの〳〵筍を抽て、叢生恰も枝の如し、これ尋常の椶櫚竹に異なるところなり、思ふに此種は、杜臺卿の淮賦にいはゆる檳榔竹にてもあるべきにや、

〔倭名類聚抄竹二十〕筒　唐韻云、筒（音同、一音桶、俗用二法筆一、）竹名也、

椶櫚竹
觀音竹

を穿つべき程の細小竅あり、又小野蘭山の見たりしは、徑り一寸餘のものにて、舶來せしは徑を二三寸のものと本草綱目啓蒙いひ、栗本瑞仙院の杉原氏により贈りしといへるも、また蘭山の見しと同じく、その徑一寸許のものなれども、別に圖せしは長さ五寸許の竹にてや・細しすべてこれ一物なり、

〔擁壤集 竹中〕桃竹

〔多識編 竹三〕椶竹、和名今按豆惠太計、俗云須呂太計、

〔和爾雅 草木七〕椶竹一名實竹、俗所謂棕櫚竹也、

〔書言字考節用集 生植六〕椶竹、桃竹、實竹並同、東坡志林、

〔大和本草 竹九〕椶竹　椶竹ニ大小アリ、大ニ二種アリ、一種ハ葉短クツヨシ、小ニシテ不高、一種ハ色淡黑、葉大ニ莖高ク長ジヤスシ、是犬椶櫚竹ト云、ヲトル、又別ニ一種小椶竹アリ甚小也、盆ニ植テ可愛、葉莖與大同、本草曰、一名實竹其葉似椶可爲柱杖、甚寒ヲオソル、暖處ニ宜シ、多春ハ上ニヲホヒヲスベシ、一處ニ叢生ス、其莖杖ニシテ輕ク勁クシテ不折、諸草木ノ內、杖ニ用ルモノ多シ、是ヲ尤ヨシトス、

〔和漢三才圖會 苞木八十五〕椶竹　實竹

本綱、椶竹其葉似椶、可爲柱杖、

按、椶櫚竹來於琉球、葉似椶櫚葉而無枝、高者丈餘、身有黑毛、節不高、喜陰處、惡風日霜雪、年久者開花、亦似椶櫚花、其竹不中空、故雖曰實竹、爲筇弱脆、

觀音竹　椶竹之小者、人植盆玩之、初出琉球觀音山、故名之、

〔草木育種後編 下花卉盆玩并に服器に用あるもの〕虎散竹竹譜詳錄　琉球より觀音竹と名づけ來る、桃竹の一種なり、長大ならず、筍多きを異なりとす、三月の末に暖窖より出し、糞水を澆ぎてよし、暑

ク、

影向竹

〔續江戸砂子　五〕雜樹の部

影向竹　上野中堂の前にあり

往昔比叡山におゐて、八幡春日影向ならせ給ひし所へ、生じたる竹なりといへり、一説に天竺祇園精舍の竹を、震旦の天台山へうつされしを、傳教大師持來り、比叡山中堂の前に植おかれしを、東叡山にうつすともいへり、又説傳教大師の持來り給ふ所の、三國傳來の竹は、比叡山竹林院にありといへり、此影向竹といふは、葉のさき丸く跡先なきやうにて、常の竹葉とは異也、

沈竹

〔古今要覽稿　草木〕沈竹

沈竹は、漢名を蟲竹といひ、その產地は肥前國佐賀に有と(本草一家言)いふ、此種西土に產するものは、毎節蟲を生じて、新蟬のいまだ翼を生せざるものに似たりと(竹譜詳錄)いへ共、本邦に產するものは、其蟲の形飛廉の如しと(本草一家言)いへり、凡西土にては、此竹七閩山中、及び婺州福州等にありといへども、本草にては、たゞ肥前國のみにして、その他これある事を聞す、

實竹

〔古今要覽稿　草木〕實竹

實竹一名實中竹、一名實心竹は、和漢通名にて、舊より陸奥國松前の竹島、(本草綱目啓蒙)及び阿波國一宇山に產するもの、その名殊に高し、○中略陸奥國松島に產するあり、近頃大窪柳太郎、(秋田の藩人、字を天民といひ、號を詩佛、また江山といふ、)その地に遊歷して、二竿を携來りて杖とせしをみるに、一竿は長さ四尺餘、徑り五分許にて、毎節ま竹よりも高くして、その間相去ること三寸許、その枝を生ずるかたは溝渠ありて、常竹よりも至て深くして、下節上より上節下に至る、一竿は長さ五尺許にて、その節間六七寸、或は八寸許なるもありてやゝ太し、いづれも根に近き所の二三節は、常竹と同じくその節間つまりて短し、その根のきり口は、共に充實して心なしといへども、梢上のきり口に至ては、鍼

魚尾竹

〔重修本草綱目啓蒙二十六苞木〕竹
增、○中略ササウヲハ同書○百品考ノ魚尾竹ナリ、飛驒ノ高山、日光ノ赤沼ガ原ニ多シ、枝葉箬ニ似テ山白竹ヨリ大ナリ、幹ノ高サ四五尺、梢ニ七八葉互生シ、節ノ處ニ魚形ノ物ヲ生ズ、或一或二三相對シテ生ズ、巨サ拇指ノ如シ、小筆相重テ末細ク先曲レリ、長サ三四寸許、殆魚形ニ似タリ、故ニ日光土人ノ說ニ、此ササウヲ逆流川ニ飛入テ魚ニ化スト云フ、竹譜ニハ四月老鰭魚ヲ竹ニ貫キシガ、化シテ此竹トナルト云ヘリ、其說相反ス、共ニ謬談ニ屬ス、

シホ竹

〔古今要覽稿草木〕しほ竹
しほ竹は阿波國の名產なり、予○屋代弘賢此頃得しは、幹の長さ三尺許にて、周圍に凹處數縱道ありて、下節上より上節下に至る、その凹處にまた巨細の異なる有て、各おなじからず、節は五節にして、第一節は節間相去る事四寸九分、第二節はその間五寸六分、また第三節四節に至りては六寸六分、或は七寸二分もあり、其節の狀苦竹よりも低くして、頗る淡竹の如し、又竹肉を細査すれば、上下の肉は左右の肉よりも、少しく厚きを以て、たての徑一寸九分、よこの徑一寸七分にして、竹身正圓ならざるものは、此竹の性也、一種山竹といふ物あり、これを前條に比するに、その凹處や淺し、本草家言一此二種は實に本邦の異竹にして、西土廣しといへども、いまだこれ有事をきかず、

棘竹

〔多識編三竹〕棘竹、和名今按牟波羅太計、

〔和漢三才圖會八十五苞木〕棘竹いばらだけ　竻竹竻字未詳、疑竻乎、竻部鰖本字也、
本綱、棘竹、是乃竹別種、芒棘森然大者圍二尺、可以禦盜賊、

トウギンチク

〔重修本草綱目啓蒙二十六苞木〕竹
苗竹ハ、トウヨシ也、蘆葦形狀ニ似テ、甚大ニシテ厚シ、颶風ノ時海濱ニ漂著ス、世人用テ花籠トス、薩州ニハ栽ル者アリ、トウギンチクト呼ブ、其根甚大ナリ、根ノ形似タルニ因テ、猫頭竹事物紺珠ト名

し、其大なる一葉は左に向、二葉の小さきは根上の三葉とその大さ略同じ、その葉の狀、大抵雄竹に似て、雄竹よりは短く、また濶大にして甚薄し、その幹すべて葉のつくかたは扁にして、中に一線路高く起り、葉のつかざるかたは、全く正圓なる事常竹と一樣なり、今人此竹を採、漉を去りて箸とす、甚だ雅趣あり、また此筍は四月の末五月のはじめに生じ、狀茅針に似てやゝ扁たく、其籜紅紫淡黃の兩色相交りて、別に紅紫色の細縱道ある事、全くはちくの如し、

兒篠

〔和漢三才圖會八十五寓木〕篠〇中略

〇兒篠（知古佐佐）高尺許、葉最細長、八九枚生於頂上、有白縱理如線、青白相交甚可愛、本草所謂龍絲竹指此等乎、

〔古今要覽稿草木〕兒篠

兒篠、一名しまざゝ、一名やなぎ葉ざゝは、卽龍須竹の一種なり、その高さ僅に五六寸、或八九寸、その葉細長、頗る根笹に似て、毎葉青白色の細縱道あり、佳麗最愛すべし、故に昔人これを以て庭砌間の石傍、或は小樹下に植へてかざりとす、その小樹下にありて年を經るものは、その樹とその高低をあらそひて、樹もし三尺許なる時は、此さゝもまた三尺許に至る、その三尺許のものは、大低五節にして、梢上に五七葉をつけ、或は一兩枝を生ずるものあり、その枝幹並に細小にして、恰も篠の如し、

龍鬚竹

〔古今要覽稿草木〕龍鬚竹

龍鬚竹、一名龍絲竹は、もと西土より來る、その幹極めて細小にして、鍼の如く、また絲の如し、高さ僅に八九寸、その葉また細小、ほゞ結縷草に似たり、此種は辰州に生ずるよし本草綱目にみえたれば、今あるものも蓋しその地の產なるべし、又一種幹高さ六寸許にて、根旁別に二白須を生じて、其長さ本幹よりも五倍するものあるよし、竹譜詳錄にみえたれども、此種舶來ある事を聞ず、

の五葉或は四葉をつく、狀くまざゝに似てやゝ小なり、此葉も若き時は青色にして、老る時は葉邊一分許變白する事、くまざゝに同じ、また和漢三才圖會に、くまざゝ燒葉ざゝを以て兩種とし、燒葉ざゝはその高さ不過尺といへるは、卽ち此くまざゝの事なるべし、扨くまざゝは、諸國山中極めて多きものにて、江都にも處々これあるがうちに、四谷大木戶の前なる笹寺のもの、其名殊に高し、これは寛永の比御鷹狩の時、この寺に立よらせ給ひしに、そこにこざゝ熊ざゝいと多かりけるをみそなはし給ひて、以來は笹寺とよぶべしと上意ありしよし、江戶砂子にみえたり、今も方一坪程にくまざゝを植置しは、卽その遺跡なりといへり、

〔雍州府志土產六〕竹〇中略　一種篠葉每一枚、葉端周圍細白似刀刃、是謂刃篠、此篠莖短而著土、茶人愛之、種茶亭之前庭、凡洛北山上寒氣甚而霜雪重、故葉端瘁(カシケ)白、土人掘來而鬻京師、

〔和漢三才圖會八十五寓木〕篠〇中略

五枚篠(五末伊佐佐)　高尺餘、葉深青色、似篠竹葉而短、每莖五葉叢生能繁茂、植庭院玩之、所謂越王竹高止尺餘者、此等之類乎、

五枚篠

〔古今要覽稿草木〕五枚篠　おかめざゝ

五枚篠、一名豐後篠、一名おかめざゝは、高さ一尺八九寸より、或は三四尺に至る、その幹極めて細小なりといへ共、每節隆起する事、頗る雄竹の如し、此竹すべて根上二三節より、三枝或は四枝を分ちて、三葉四葉を一叢とし、それより以上は、每節五枝を別ちて、五葉を一叢とす、その枝長さ四五分にして、二節あり、葉は卽其二節上より生じて叢をなすを以て、これを熟視せざる時は、唯葉莖のみにして枝なきが如し、其梢上に至りては、また三枝を生じ、三葉を一叢とする事、なを根上の二三節と同じ、扨根上の三葉節の左側に付て生ずる時は、其次の五葉は必ず節の右側に生じ、二葉は左に向、三葉は右に向ふ、その右に向ふ三葉は、中の一葉大にして、左右の二葉はやゝ小さ

葉ノ大ナルサヽナリ、城州貴船山鞍馬山ノ奥ニ多シ、苗高サ六尺餘、葉濶サ二寸、長サ八寸許リ、端午ニ此葉ヲ用テ粽ヲ包ム、故ニチマキザヽト云、唐山ノ箬葉ハ、至テ長大ナル故、笠ニモ製スト時珍云リ、此ヲ箬笠ト云、本邦ニテハ竹篠ヲ用テ笠ヲ作ル、此モ漢名箬笠ト云、竹篠ニモ箬ノ名アル故ナリ、又高山ノ頂ニ多ク生ズルサヽハ皆高二三尺、葉ハ箬ヨリ小ク、徑リ一寸許、長サ七八寸、老レバ葉邊皆白シ、故ニヤ。キ。バ。ザ。ヽト云、是竹ノ條ニ載スル所ノ山白竹ナリ、

按箬生[二]堤岳平澤[一]似[レ]蘆、故俗呼曰[二]阿之[一]、

〔和漢三才圖會 九十四本 濕草〕箬 音若 篛 與箬同 箬葉 俗云。於。加。阿。之。〇中略

〔古今要覽稿 草木〕くまざゝ　やきばざ

くまざゝ、一名うまざゝ、一名やきばざゝ、一名へりとりざゝは、漢名を箬竹、一名篛竹といふ、其幹矢竹に似て、細小にして高さ凡三四尺、或は六七尺、その三四尺のものは、毎節相さる事三四寸にして、六七尺のものは、それに準じて稍疎なり、その枝はまた矢竹の如く、獨枝にして長し、一幹中四枝或は五枝を生ず、又一幹獨立して絶て枝なきものあれば、その枝却て本幹より太きもあり、すべて一樣ならずといへ共、其葉は梢杪に横出して、頗る傘蓋の如し、毎梢大低六葉にして、下の一葉は甚細小なれども、その餘の五葉は長大にして、長さおの〳〵七寸餘、廣さ二寸許、新葉はすべて青色にして、その正中に黄白色なる一縱道ありて、葉本より葉先に至る、その左右また相並びて、細十線路ありて、ともに二十線路、葉本より葉先に至る事、全く正中の一縱道に同じ、その老葉は、葉の周圍皆三分許變白して、恰も刀劒の燒刃に異ならず、またその葉中に方解石の細小なるものを並べし如くに、かどだちたる斑文をなすものあり、和漢三才圖會に、秋出[二]縱文點[一]、黄白色といへるは、蓋しこれをさしていひしなるべし、一種こ。ぐ。ま。ざ。ゝあり、其高さ六七寸、或は一尺許にて、一幹に兩三枝を生ずるものあれば、また本幹のみにして傍枝なきもありて、その頭おのお

末みづがきの神の御代より、さゝの葉をたぐさにとりて、遊びけらしも、あそびけらしも、

〔和漢三才圖會八十五草木〕篠　筱同　小竹一云佐々和名之乃、
按篠叢生如草、俗用笹字、出處未詳、凡篠有數種、

〔古今要覽稿草木〕さゝ
さゝは小竹の總名にして、漢名を筱といひ、野にあるを野ざゝといひ、籔にあるを根ざゝといひ、箱根山中に生ずるを箱根笹といふ、增補地錦抄今處々の山野及堤坂上に數百歩叢生し、その高さ一二尺、葉は女竹に似てやゝ小さし、一種八丈筱あり、其高さ僅に一尺を過ず、その葉尋常のものと相似たり、今松平越中守大塚の下邸にあり、此種は西土にいはゆる箬篠の類にても有べきにや、又隅田村に鐙摺のさゝあり、その高さ鐙より上に出る事なしと江戸砂子いへり、その他種類なほ多し、

越王竹

〔書言字考節用集六生植〕越王竹キザ多識編

〔重修本草綱目啓蒙十四草〕箬〇中略
又路傍ニ偏ク生ズル小ナル竹アリ、高サ三五寸ニ過ギズ、コレヲチザヽト云、是通雅ニ載スル所ノ千里竹ナリ、

馬篠
燒葉篠

〔和漢三才圖會八十五草木〕篠〇中略
馬篠俗云久末佐佐　葉大一枝六七葉、其大者尺許、廣二寸、至秋出縱文點、黃白色甚美、本草所謂龍公竹葉若芭蕉者、恐此類矣、〇中略
燒葉篠夜木波佐々　高不過尺、葉端周如枯焦、故名之、

〔重修本草綱目啓蒙十四草〕箬　チマキザヽ　クマザヽ　チマガリダケ羽州　一名白蒻葉三才圖會
增一名箬竹葉閩書南產志

瑞籬の神の御代より篠の葉を手草にとりて遊びすらしも、此意成べし、萬葉集には神樂をもよめり、江次第石淸水臨時祭試樂に、舞人呉竹をもて插頭とし、竹文靑摺袍をきるよしいへり、されば神樂に篠を用る其故ある也、天照大神磐窟かくれませし時に、天鈿女命の俳優したまひし、是ぞ神樂の始めなりける、その時以竹葉(ササ)爲手草といふ、舊事紀古事に見えたり、

〔古事記上〕故於是天照大御神見畏、閉天石屋戸而刺許母理(此三字以音)坐也、(中略)天宇受賣命(中略)手草結天香山之小竹葉而、(訓小竹云佐佐)於天之石屋戸伏汙氣(此二字以音)而、踏登杼呂許志(此五字以音)爲神懸、

〔古事記傳八〕小竹葉は佐々婆(ササバ)と訓べし、下卷輕太子の御歌に見ゆ、萬葉十四(九丁)にも佐左葉とよみ、今世にも然云り、さて萬葉集に佐々那美(ササナミ)(下の佐を濁るは誤なり)といふに、神樂聲浪と書る(略て神樂浪とも樂浪ともかけり、和名抄に但馬國氣多郡郷名に、樂前と書て佐々乃久萬とよめるもあり、)は、此の故事に因て、神樂には小竹葉を用ひ、其を打振音の、佐阿佐阿(サアサア)と鳴に就て、人等も同く音を和せて、佐阿佐阿と云ける故なるべし、(神樂の諸物に、さつ〳〵の聲ぞ樂むと云も、松風の颯々と云音より、是に云かけたるなり、)又竹葉の名を佐々と負るも、此音よりぞ出つらむ、(細小の意以て名づけしには非ず、小竹と書る小字は、幹の小きを云るにて別なり、)神樂歌古本殖槻總角大宮湊田などの處に、本方安以佐々々々、末方安以佐々々々と云ことあり、是は佐々佐々と唱たるか、又は佐阿佐阿を如此書るか、何にまれかの小竹葉の音に和せたる聲より出づることなるべし、古語拾遺には、以竹葉飫憩(オケ)木葉爲手草(今多久佐)とありて、飫憩振其葉之謂也と云り、

〔神樂歌〕採物歌　篠

本 此さゝは、いづこのさゝぞ、とねりらが、こしにさがれる、ともをかのさゝ、ともをかのさゝ、

末 さゝわけば、袖こそやれめ、とね川の、いしはふむとも、いざ川原より、いざかはらより、

或説

本 さゝの葉に、雪ふりつもる、冬のよに、豐の遊びを、するがたのしさ、するがたのしさ、

て、土民古より此筍を採て、雪花菜に鹽をまじへて藏し置て食用とす、西土にても、周禮に箈菹雁醢といひ、爾雅に箈箭萌といへるは、即此竹の筍なれば、彼土にても此筍を食用に供せしかば、由て來ること久しき事なり、扨西土にて矢に作れる竹數種ありといへ共、古より會稽に產するものその名高く、即今のすゞたけにして、山居賦にいはゆる箬箭なれば、和漢三才圖會にいはゆる大村の箭竹、葉大於馬篠」といへるに暗合のもの也、蓋し大村の產は、此竹のその所を得て、本根といへ共屈曲せず、矢に作るには至てよろしきものなるべし、されども古より皇朝にて、矢に作りしは尋常の弇箭にして、此箬箭を用ゆる事を聞ず、凡箬箭は諸國山中に極めて多きものなれば、今より後は肥前人の用ひしにならひて、此竹を以て矢に作りなば、その勁强、西土會稽の產にも劣らざる事明らけし、

山篠

〔重修本草綱目啓蒙二十六竹〕〔木〕增○中一種山中路傍ニノスヾト云フ者アリ、高サ二尺許、莖ノ色紫褐ヲ帶ブ、節ゴトニユガミアリテ、正直ナラズ、京都祇園ノ社ノ後ニ、多ク產スルモノハ、山中自生ノ者ヨリ莖高シ、漢名山篠、廣東新語

笹

〔倭頭屋本節用集草木左〕篠サヽ

〔書言字考節用集生植六〕篠サヽ小竹、說文、笹同　翠篠サヽノハ杜律　篠サヽノミ竹實　筱同

〔日本釋名草下〕小竹サヽ　凡小なる物をさゝと云事、まへに云るすが如し、萬葉に小竹とも細竹ともかけり、

〔倭訓栞中編九佐〕さゝ　神代紀に狹々と見えたり、古事記に訓小竹云佐々、萬葉集に小竹細竹をよめり、さゝやかなる竹也、篠は倭名抄にみゆ、笹は倭の俗字也、神功紀の歌にさゝといふを釋に謂樂也と見えたり、神樂さゝのうたに、

につゞけし物也と、こは古意也、さか木の八十玉ぐしに對へる、野すゞの八十玉串は、小竹なるべきもの也、集中の神まつりの歌に、竹玉を繁に貫垂とよめるも、此玉ぐしなるべしと、吾友菅原信幸がいひしはあたれること也、
篶は又のめ竹の類にて、いとちいさくて、色黑き竹なり、それを阿波土佐などの國にては須々と云といへり、東國の山邊にては、笑竹をもまかいふもの、ゝあれど、猶別也、後世の歌に、吉野の嶽にすゞ分てとよめるも、かの野篶也、旅人のすゞのしのや、さいのやなどいへるもおもひ合すべし、

〔倭訓栞前編十二〕すゞ○中略　小竹の類をすゞといふは凉しき意にや、吉野の嶽にすゞ分てとも、大たけのすゞ吹風にとも、すゞの下道ともよめる是也、神代紀に五百箇野薦といへるも此物成べしともいへり、或說に薦は篶の誤り、篶は黑き小竹也とぞ、鈴竹の筍をすゞといひしは、風雅集に、たかむなのほそきを奉られて、是はすゞか竹かいづれと見わきてと見え、古今著聞に、石泉法印鞍馬の別當にて、彼よりすゞを多くまうけたるを、或人の許へ遣すとて、此すゞは鞍馬の福にてさむらふにさればとて又むかでめさるな、筍の皮をむかぬを蜈蚣に寄ていへり、蜈蚣は鞍馬の福といひならへり、

〔古今要覧稿草木〕すゞ　やまだけ　すゞ、一名みすゞ、一名すゞたけ、一名やのたけ、一名やま竹は、漢名を箬篛といひ、筍をすゞだけのこ、漢名を篙、一名篛筋といふ、これは雪國の山に生する小竹にして、信濃に多し、圃草小苑その葉箬に似て、幹高く、本根屈曲すと本草一家言いへり、また加賀越前等に產するものは、その葉箬よりも至て長大にして、葉邊變白せず、幹は矢竹に似て、每節平かにして、高さ一丈許、大さ指の如し、また肥前の大村よりいづるものは、その節間殊に長し、和漢三才圖會即一物なり、歌には大和の吉野、山城の鞍馬、紀伊の熊野等の諸山のもの其名高し、されど太古の時、五百箇野篶と日本書紀いへるは、山生のものにあらず、此筍籜青綠にして、その籜枯るときは色白し、すべて北國地方にては、大竹稀なるを以

䈽竹

篶竹

能と云は、野(ヌ)角(ツヌ)楽(タヌシ)忍(シヌフ)などの類なり、然るに萬葉一に、人麻呂の歌に、四能とあるは、めづらしきことなり、さて志怒(シヌ)とは、細竹を始めて、其外薄葦などにも云て、然(サル)類の物の、幹の總名なるを、萬葉一に、旗須爲寸、四能乎押靡などあるも、薄の幹を云り、志の一薄と云も、たゞ薄のことなり、一種の名には非ず、又葦にも、葦の篠屋など云り、もはら小竹細竹など書は、主とある物に就てなり、同く小竹と書けども、佐々と云は竹に限れる名、志怒は竹には限らず、さて志怒てふ名の意は、なよゝかに靡(シナ)ふよしなり、俗に云しなやかなる意なり、奴と能と那とは、よく通ふ例にて、心も志奴に思ふ、又戀志奴布など云志奴も、心のしなひしをるゝ由なり、思ひしなえてとも多く云ると、合せてさとるべし、されば小竹も其例と同くて、志那比と云意にて、志怒とは云なり、繁るなる繁き意とするは非なり、後世に繁きことを志能賀と云へど、其は古は無きことなり、此の小竹は、細竹にても薄などの類にてもあるべし、

〔日本書紀 九神功〕伐新羅之明年〇元年二月、更遷小竹宮、小竹此云之努、

〔古今要覽稿 草木〕たかしの〇〇〇〇おほしの〇〇〇〇

たかしの一名おほしのは、漢名を䈽竹といふ、即女竹の一種長大なるものなり、近時琉球より其種を傳へて、今薩摩にあり、水戸殿本草者佐藤成裕云、一種の女竹はその大さとい竹の如くにして、極めて高く、枝葉梢杪にのみむらがり生じて、下幹には絕てなし、その葉全く女竹に似て大也、凡此竹長さ百尺なるを以て、行路八九町もこなたより、其梢杪あらはにみゆなどいへる、〔屋代弘賢〕する所のものは、やゝ小なるものなりといへども、これを尋常の女竹に比するに三倍して、頗る吹火筒の如し、されどもその筍の味、甘美なるや否をしらず、また䈽於竹あり、その葉薄して廣し、竹譜即遼者の類なりと物理小識いへるは、これとは別種なり、

〔撮壤集 中竹〕篠(スヾ)

〔饅頭屋本節用集 草木〕篠(スヾ)

〔冠辭考 九美〕みすゞかる　しなぬ

万葉卷二に、水篶(ミスヾ)苅(カル)信濃(シナヌ)乃眞弓(マユミ)云云、こたへ歌にも同じくつゞけたり、今本には篶を薦(コモ)に誤りぬ、　こは眞篶(マスヾ)を苅(カル)野とつゞけたり、荷田大人のいへらくは、水篶は眞すゞ也、水は借字、美と麻とは、ことに通へり、神代紀に、使山雷者、採五百箇眞坂樹八十玉籤、野槌者採五百箇野篶八十玉籤、云々今本は是も篶に誤ぬ、これによるに、すゞてふ小竹(シヌ)をかる野

なるもありて、すべて一樣ならず、凡箪篠の如きは、年を經る時は、一節の間九枝或は十枝を生ずれども、此竹はしからず、その葉長さ七八寸、廣さ四五分にして、每莖六葉を一朶とす、此筍は四五月の比に生じ、青色にして味至て苦し、これは和名抄にいはゆる長間笋にして、此笋また抽出て、忽ちに若竹となる時は、その節上節下並に粉白なる事、小川竹よりも甚し、一種伊豆の大島に產するものを、俗に大。島。竹。といふ、今おほく此竹を以て庭砌の藩籬とす、その竹細長にして節間殊に長し、一說に此種は有德廟の御代の事なるよし、矢竹に代用ゆべきと上意有て、その谿間に植付させ給ひしが、今は多く繁衍せしといへり、又一種箱。根。竹。あり、矢竹よりまた細長にして、枝葉は大略前條と相似て、やゝ細小にして、其葉さらに落がたきによりて、そのまゝにて掃箒となすによろし、其性いたつて柔靭なるをもつて、竹籠を作るもの、多く此竹を用ひ、或は筆管となし、或は烟管となすも、また此竹なるよし、これは嘉興縣志に、いはゆる竹篠にして、延喜式にいはゆる小竹、徑二分長八尺といへるも、此類をさしていひしなるべし、扨此竹を舊より箱根竹といへば、その產地はかならず相模國なるべしとおもひけるも、或人の說に、箱根竹は伊豆國に產せしにて、相模國にはあらずといへり、よつて和漢三才圖會を閱せしに、伊豆國土產箱根竹とありて、相模國の土產には此竹を載ず、これによれば箱根竹は、全く今の淺草海苔のたぐひにて、或人の說妄ならざるべし、

〔古事記中卷景行〕於是化八尋白智鳥、翔天而向濱飛行、(智字以音)爾其后及御子等、於其小。竹。之苅杙、雖足跳破、忘其痛以哭追、此時歌曰、阿佐士怒波良、許斯那豆牟、蘇良波由賀受、阿斯用由久那、

〔古事記傳二十九〕小竹は志怒と訓べし、(上卷には訓小竹云佐々とあれども、此は然は訓まじきなり、)御歌に、志怒とあればなり、書紀神功卷に、小竹此云之努と見え、萬葉一(八丁)にしぬひつと云借字にも、小竹櫃と書、又細竹とも書り、和名抄に篠細竹也、和名之乃、一云佐々、俗用小竹二字謂之佐々とあり、(古は志怒と云るを、後には志

篠

て、其間僅に三寸より三寸五分を過ず、その性柔靱にして折難きによりて、領主堀丹波守の藩にては、皆此竹を以て打毬杖を作れり、

〔新撰字鏡竹〕篻方標反、平、竹也、細竹也、篠也、志乃、又保曾太介、

〔倭名類聚抄竹二十〕篠　蔣魴切韻云、篠先鳥反、和名之乃、一云佐佐、細細竹也、俗用小竹二字謂之佐々、

〔撮壤集竹中〕長間竹シノ・メ竹作和名笋

〔書言字考節用集生植六〕長間竹シノベタケ　百葉竹同　篠シノ　細竹同万葉シノタケ

〔東雅竹樹十六〕竹タケ中略　倭名抄に、中略蔣魴切韻を引て、篠は細々小竹也、シノ一にサヽといふ、俗用小竹字と見えしは、即今サヽといふもの、其種類大あり、シノといふは、シとはサといふ語の轉せしにて即細也、ノとは即竟也、サヽとは即細也、日本紀に小竹讀てシノといふと見えたり、和名抄に俗用と云ひしこと心得られず、シヌといひ、シノといふ、轉語せしにて、義異なるにあらず、

〔倭訓栞前編十一〕しの　日本紀に篠、又小竹、新撰字鏡に篻をよめり、しなふの義成べし、又小蔑の義也といふ、中略

しのゝめ　萬葉集に細竹目と書り、めはむれ反、篠の群竹の義也といへり、

〔和漢三才圖會苞木八十五〕筱竹　長節間竹ナヨタケ俗云奈與太介、兩節間稱與、略言也、　女子竹メナゴダケ柔軟狀似婦女、故名之、

按筱小竹也、和名之乃篠同、俗云之乃布竹高六七尺、周二寸許、其葉深青色、節不隆、其籜白色脆而難脫、節間長、其筍味甚苦硬不可食、其竹節際有白粉、如濕熱甚浸則愈多變黃色、人取充天竹黃、可辨也、其竹民家用爲天井及壁骨菅笠骨、本草蘇頌曰、肉薄間有粉者此竹矣、

〔古今要覽稿草木〕しぬ　しの

しぬ一名しの、一名ほそたけは、漢名を筱といふ、これは延喜式にいはゆる小川竹の、やゝ小なるものにて、今所在極めて多し、その幹深青色にして、高さ七八尺、その枝は五枝なるもあれば、三枝

薫籠大一口口徑二尺二寸、高二尺七寸、料、篭竹五十株、中一口口徑一尺八寸、高二尺、料、篭竹卅株、澁紙簀十枚長各二尺四寸、廣一尺四寸料、篭竹各廿株、茶籠廿枚方二尺料、篭竹各六株、

〔延喜式 三十織部〕凡雜機用度料篭竹河竹各百株、毎年山城國進、又篭六百株大和國進、

〔延喜式 四十造酒〕雜給料○中略篭竹卅株作二匜口及鐏柄一料

篭篣竹

〔古今要覽稿 草木〕篭篣竹

篭篣竹一名澀竹、一名澀勒竹は、今松平越中守大塚の下邸にあり、その高さ大抵五六尺にして、枝幹全く矢竹の如し、葉もまた矢竹に似て、五葉或は四葉を以て一朶とし、その上葉はすべて二葉相對して、毎葉白色の間道あり、又一株の中といへども、間道なくしてその色矢竹と一樣なるも交はれり、此種は往時清人の携來し物なるよし、今その全形を詳にするに、これ即矢竹の一種、その葉間道あるもの也、故に籜おちざる事また矢竹の如し、

通絲竹

〔古今要覽稿 草木〕通絲竹

通絲竹は枝幹並に矢竹に似て、節の平らかなることも、亦矢竹の如し、その葉皆仰出して上に向ひ、下垂する事なきは此竹の性也、その葉の狀矢竹よりも極めて細小にして、長さ一尺許、廣さ三四分を過ぎず、毎莖おほよそ五葉を以て一朶としその五葉のうちにて、上の二葉は對生にして、下の三葉は互生なり、その幹新年のものは籜ありといへ共、年を經れば皆落る事矢竹の如し、此種その根窠盤結して、叢生數十百幹に莖るもの、今松平越中守大塚の下邸にあり、一種仰葉竹あり、その竹前條と一樣にして、毎莖上八九葉或は六七葉つくるを異なりとす、此種今巣鴨の種樹家にあり、

村松竹

〔古今要覽稿 草木〕村松竹

村松竹は越後國村松に產する竹にして、其幹矢竹と一樣なりといへ共、毎節矢竹よりも密にし

〔書言字考節用集生植六〕篠ノダケ文選　箘簬ヤノダケ尙書　箭幹竹類書纂要

〔東雅十六竹〕竹タケ〇中略倭名抄に、〇中略箆はノ、箭竹名也と見えしは、即今俗にノダケとも、ヤノタケとも云ひて箭幹となすもの是也、ノとは古語に直を云ひてノといひけり、

〔和漢三才圖會八十五苞木〕箆竹　箆音毘　箘同　和名乃

按箭箆竹葉大於馬篠、而竹似鳳尾竹、節間長肉最厚硬、用作箭箆甚佳也、出於肥州大村、字書云、箆美竹名、可爲矢者是也、

〔古今要覽稿草木〕の　やだけ

の、一名のたけ、一名やたけ、一名やのたけは、漢名を箘簬、一名笄箭、一名箭幹竹といふ、〇中略天武天皇の御時箭竹二千連を、太宰府に送り下せしも、また畿內の產なるべし、今も年ごとに、大和の芳野より難波の大城へ、此竹二千二百幹を貢するよし、採藥紀行また備中の矢島、及び丹波等にも、此竹を產し、その餘の諸國にも、また極めて多し、今江都にて皆人使用するものは、上總より來るといふ、さて延喜の比は、此竹を以　熬箘煠籠薰籠及び籮茶籠等を作りしものなれども、今竹器を作るには、多く篠竹、或は箱根竹、或は淡苦の二竹を用ひて、此竹を用ゆる事を聞ず、

一種矢竹

一種の矢竹は、今松平越中守大塚の下邸にあり、その高さ大抵五六尺にして、枝幹全く矢竹のごとし、葉も亦矢竹に似て、五葉或は四葉を以て一朶とし、その上葉は、すべて二葉相對して、每葉白色間道あり、また一株のうちといへども、間道なくして、その色矢竹と一様なるもの交はれり、此種は往時淸俗の攜到せしを、長崎より輸せしものなりといひ傳ふ、その他またこれあることをしらず、

〔延喜式二十八隼人〕年料竹器

鞭竹

簢竹

ば、漸々長崎までは、無事にして屆けりといふ、夫より遠方へは、損じて送りがたしとなり、此筍元來常の竹の子よりも、格別和らかなるゆへ、尤損じやすしとなり、孟宗竹の孟宗は、古人の名なり、親の爲に冬筍を得たる事、廿四孝に見へたり、此筍寒中にも出るゆへに、孟宗竹といへり、元來唐土より渡り來れりといふより、薩州にては唐孟宗と呼なり、

〔武江年表 六〕安永八年己亥

薩州侯品川の前邸へ、琉球產の筍を始て植らる、諸人これを珍賞す、世に孟宗筍と稱す

〔塵塚談 下〕孟宗竹近頃文化○頃は江戶に大なる竹藪、諸所に出來たり、明和の比は、皆人珍らしく思ひし竹にて有しなり、四五年以來、筍も太くして一尺四五寸、二尺廻りの大なるが夥しく出て、八百屋每に賣事なり、何地より出るやしらず、薩摩國にては、此筍を紙に漉よしなり、

〔草木育種 下〕江南竹八閩通志又雪竹とも云、本暖國の產なり、今所々に植、春早く筍を生ず、根もとへ籾糠を多く入べし、早く筍を生ず、植移は五月十三日を竹醉日といふ、此日に植ればよく活なり、竹よく實入たる時、枝の所の三分一梢を切たるもよし、

〔安齋隨筆 前編七〕鞭竹　草津の鞭竹は美濃より出る也、本は草津の土產にあらず、

〔倭名類聚抄 竹二十〕簢　唐韻云、簢音昆和名乃○○簳竹名也、

〔箋注倭名類聚抄 竹十〕簢說文作箘、云箘簬也、禹貢云、惟箘簬楛、三邦底貢、楚亂七諫、哀時命、並云、簢簬雜於䕸蒸兮、簢簬卽箘簬也、或單言箘、中山經云、暴山其木多竹箭䉋箘、郭注云、箘亦篠類、中箭、王念孫曰、箘之言圓也、說文云、圜謂之囷、方謂之京、是囷圓聲近義同、箘竹小而圓、故謂之箘也、竹圓謂之箘、故桂之圓如竹者、亦謂之箘、名醫別錄云、箘桂、正圓如竹、按戴凱之竹譜云、簳竹高者不過一丈、節間三尺堅勁中矢江南諸山皆有之、劉逵吳都賦注云、簳竹細小而勁實、可以爲箭、通竿無節、江東諸郡皆有之、又按簳竹古單名簳、詳見征戰具簳條、

ども、孟宗竹は根上第一二節よりして、第三四節は少しく細く、第三四節よりはまた第五六節はやゝ細し、毎節漸々にかくのごとくして、梢上に至る故に、下簏にして上細なるは、即此竹の性也、その根上より六七節の間は、節殊に密にして、すべて節下は粉白なることはちくの如し、その大なるものは、即十七八節以上よりして枝を生ず、小なるものはそれに準て知らる、これも始の一節は獨枝にして、後に雙枝なるもあれば、始の一節は雙枝にして、後に獨枝を生じ、それより以上は、また雙枝なるもあり、葉は全くはちくの葉に似て、はちくよりも極めて繁く、毎枝みな三葉にして、時に二葉なるも交はれり、凡はちくま竹の類の大なるものは節低くして、小なるものは、殊に節高しといへ共、孟宗竹は細大の別なく、すべて本幹節は毎節低くして、枝節は却て鶴膝狀をなして、はちくの枝節よりもやゝ高して、常竹と異なるは、此竹の性なり、扨孟宗竹は舊より皇朝になかりしものにて、正德の比、西土の種をはじめて琉球より傳へしを、薩摩に移し植しが、今は四方にひろまりしより、國史艸木混蟲攷にみえたり、さればそれより以上は、寒竹及び鳳尾竹などの、冬同筍を生ずる物を以て、孟宗竹とは名付しなり、これ即此竹の舊より我にあらざる確證なり、

〔西遊記續編二〕孟宗竹

薩隅の邊に唐孟宗竹といふ竹あり、人家に多し、常の竹よりは薄く、節低く葭に似たり、然れども甚だ太くして、大なるものは二尺廻り以上に至る、花生等に用ひて、甚見事なり、此竹冬筍を生ず、味甚だ美なり、寒中にも平皿一はひの筍を生ずること、他國にはいまだ見ず、京都にも甚だ細く指ばかりなるは、早春に出して料理に用ゆれども、名計り珍らしくて、味は宜しからず、孟宗竹の筍は、大ひにしてしかも和らかに、味夏の筍におとらず、若此筍を京都に送り登さば、希代の珍味なるべけれども、道路三四百里を隔てたれば、其事叶はず、おしむべし、風の透間のなき樣に送れ

〔古今要覽稿 草木〕むらさき竹　胡麻竹
むらさき竹は、今いふ紫竹にして、卽和漢通名なり、その一名を紫君、一名紫苦、一名觀音竹といふ、〇中略俗に胡麻竹といへるは、紫黑色の斑點ありて、別種のやうに見ゆれども、その實は紫竹の年を經て、再びその色を變せし也、今隅田川木母寺のうしろ、及び榎木戸、また河口邊此竹殊に多し、

寒竹

〔大和本草 九竹〕寒竹　多筍生ズ、孟宗竹トモ云、色黑ク細シ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六竹〕竹〇中略
紫ハ紫竹ナリ、和名カンチク、モウサウチク同名アリ人家ニ栽テ籬トス、小竹ナリ、高サ五六尺、甚繁茂ス、冬月筍ヲ生ズ、故ニ孟宗チクト云、〇中略寒竹成熟ノ者ハ、黑色斑ヲナス、大ナル者ハ傘ノ柄ニ用ユ、今別ニ紫竹ト呼ブ者アリ、卽苦竹ノ品類ナリ、生ジタル年ハ綠色ナリ、翌年ヨリ變ジテ紫黑色トナル、コレモ漢名紫竹ト云フ、

〔古今要覽稿 草木〕寒竹　孟宗竹
寒竹一名孟宗竹は、漢名をまた紫竹といふ、その性叢をなして數十百幹に至る、故に人家多く分ち植て藩籬とす、此竹徑り三四分にして、高さは九尺或は一丈許、節極めて繁し、中幹より以上は、大略一尺の間五節にして、それより以下は四節なり、

孟宗竹

〔饅頭屋本節用集 草木〕孟宗竹(マウソウチク)

〔書言字考節用集 六生植〕孟宗竹(マウソウチク)本名苦、寒冬生筍、故云爾、蓋孟宗事實出晉書、

〔古今要覽稿 草木〕孟宗竹　わせたけ
孟宗竹一名唐孟宗一名わせたけは、漢名を狸頭竹、一名猫彈竹、一名猫兒竹といふ、その高さ二丈餘、圍み八九寸にして、每節間はちくより短かし、其節の狀上段至て低く、下邊は稍高し、これを細査すれども、全く下邊のみにて、上段なきが如し、凡諸竹は半體以下、その太さ每節大概同じけれ

ノ別アリ、

〔蠻錄 下〕附考並餘考

從來呼煙筒接頭尾之竹木榦稱辣烏(ラウ)、辣烏蓋羅浮也、羅浮產斑竹、截煙筒多用焉、我方亦巳傳用之、漸爲通稱乎、肥之前后諸國等、於今非用斑竹不稱羅浮竹、其用他物者、稱竿竹(サヲタケ)云、又嘗西川釣淵曰、老撾(ラウ)地屬南印度西隣暹羅國、多產斑竹、大小數種、其小者用爲煙筒、今之辣(ラ)烏(ウ)竹(タケ)卽是也、二說倂記以備他日考爾、

黑竹

〔毛吹草 三〕豐後 キセル竹 虎符有之

〔古今要覽稿 草木〕くろちく

くろ竹は漢名を黑竹一名烏竹といふ、卽和漢通名なり、また一名を鶯竹、或は烏歩竹ともいふ、此竹小野蘭山は播磨にあり〔本草綱目啓蒙〕といひ、谷川士清は薩摩にあり〔和訓栞〕といふ、佐藤成裕曰、薩摩の產はその竹雄竹に似て、幹極めて紫黑色なりと、この種播磨に產するものと、同種なるや否をしらず、今松平越中守大塚の下邸にあるものは、高さをよそ七八尺、枝葉並びに紫竹に似て、其色紫竹よりも極めて黑し、此種は卽漢產のよし、一種觀音竹あり、また黑竹と名づく、その幹細小にして長さ二丈八九尺、狀古藤の如し、〔瀛海勝覽集苑詳註〕また一種烏竹あり、筍をいだす時、その色黑し〔竹譜詳錄〕また絲竹一名黑竹あり〔茅亭客話〕ともに和產これある事をきかず、

紫竹

〔撮壤集 中〕紫(シ)竹

〔饅頭屋本節用集 草木〕紫(シ)竹(チク)

〔和爾雅 七草木〕紫(シ)竹(チク)(ムラサキダケ)

〔大和本草 九竹〕紫手　色紫黑、淡濃紫白相雜レリ、

〔倭訓栞 前編十二〕しちく　紫竹也、續拾遺記に見えたり、

り、しかれども近世になりて、豐後國姥が嵩、後漢三才圖會越前肥後土佐本草綱目啓蒙より出るといへば、全く皇朝になしともいひがたきにや、

篶遲久。沙。古。丹。竹。

篶遲久は斑竹の字音にて和漢通名なり、其一名を花斑竹、一名斑皮竹、一名研竹、一名箭竹ともいふ、これに數種あり、今とらふ竹、一名とら竹、一名まだら竹、一名らう竹、一名沙古丹竹、一名豐後竹、一名玳瑇竹、一名龜甲竹といへるは、其高さ大抵五六尺にして、徑三分餘、毎節相去る事四五寸、枝は中幹より以上に生じ、すべて獨枝にして、その高さ本幹と同じ、或は四枝或は二枝なるもあれども、葉は其梢杪に並びつきて、六葉を以て一朶とす、或は四葉五葉のものは、下の一二葉の枯落しにて、その葉長さ一尺一寸、廣さ二寸八分許、また肥地に植るものは、長さ一尺五寸餘、廣さ三寸二分許に至る、葉の正中には尋常の熊笹と同じく、葉本より葉先に通じて、一縱に道あり、其左右また十二三道の細縱理相並びて、共に葉本より葉先に至る、此種蝦夷地方に產するものは、風雪に襲はれて、本根をのれと彎曲して、狀弓影の如くなれ共、他國に產するものは玄からず、すべて毎節下紫黑色にして斑紋あり、その斑毎幹上節より染出て下節に至る、されども大方は半はにして、一節間すべて紫黑色なるもの少なし、また此竹中幹より以上は、たゞ靑色にして尋常の熊笹と同じく、斑文絶てなし、此種は今小笠原相模守本所柳島の別莊にありて、數百萬幹池邊に叢生し、灑々最愛すべし、又松平越中守大塚の下邸にも多し、〇下略

〔重修本草綱目啓蒙二十六竹木〕竹

斑ハ斑竹ナリ、マダラダケ、トラフダケ、トラダケ薩州、豐後ダケ、ラウダケ、老撾ハ東天竺ノ國ノ名、占城ニ近ク安南ノ西北ニ接ス、其國斑竹數品アリ、最初此竹ニテ烟管ヲ造リ渡ス、故ニ今煙管ニ用ユル細竹ヲ、總ジテラウト云、斑竹ハ皮上ニ黑斑アルヲ云、豐後、越前、肥後、土佐、其餘諸州ニ出、大小

葉おほよそ七八葉を以て一朶とす、我は五葉六葉のものあるは、必ず下葉の枯落しにて、全形にはあらず、其葉面また熊笹の如く、正中に淡黄花なる一縦道ありて、其左右おの〳〵八線路相並て、其に葉本より葉先に至る、此竹小なりといへども、其節間獨枝を生じ、及び籜おちざる事、また熊笹の如し、但毎節下紫黒色なるを異なりとす、此種今松平越中守大塚下邸にあり、既に移し植しより十餘年を經るといへども、其時の儘にて更に生長する事なしといへり、されば此竹は大竹には非ずして、箸の類なる事明らけし、

黄金竹

〔古今要覽稿草木〕黄金竹

黄金竹は漢名を金竹といふ、此種江浙の間に生ずるものは、その狀淡竹の如く、(竹譜詳錄)琉球薩摩等に産するものは、その苦竹に似て小なり、(丹洲圖竹)また安房よりいづるものは、高さ二丈許にて、生竹の時はさまでの黄色にあらずといへども、乾す時は其色鮮黄頗る眞金の如し、(佐藤成裕說)又黄竹一名黄皮竹あり、竹譜詳錄に、黄竹叢生與慈竹一類といひ、晉安海物志に、黄竹節紫色黄とみえたれば、金竹と同種にはあらざるなり、

斑竹

〔倭名類聚抄二十竹〕斑竹　兼名苑云、斑竹一名涙竹、(此間斑竹、音篇運久、)

〔撮壤集中竹〕斑竹(ハンチク)

〔大和本草九竹〕斑竹(トラフタケ)　漳州府志云、節間有斑文、似湘妃涙痕所餘者、今按本邦處々ニアリ、

〔和漢三才圖會八十五苞木〕虎彪竹(とらふだけ)　俗稱

按、虎彪竹出於豐後姥之嶽、筱竹之類而竹黄白色有黒斑文、微似虎皮之紋、故名之、用爲笻、爲煙筒佳、

〔古今要覽稿草木〕とらふだけ

とらふだけは、西土にて斑竹、また涙竹といひしものなり、皇朝にわたりこし始は、延喜前後にもやありけん、源順朝臣倭名鈔をかゝれし時、未だ和名なく、斑竹の音を以て唱へしにてしられた

瑇瑁竹

後國の產なりと丹洲竹圖いひ、また琉球より來りしものなりとも日本草綱目啓蒙いへり、所謂江戶にあるものは、その高さは九尺より一丈許に至り、每節相去る事三四寸にして、いづれの節間にも、上によりて細澀砂ありて、砂紙を摩するが如し、また地上より一二節には、周圍に細小根つらなり生じて、それより以上は每節すべて細小根となるべきもの、皆突起して頗る黍粟の類をならべたるが如く、粒々まばらに付て、その先或は尖りたるもあり、その所より切て二三節をこめて、地中に插置ときは、をのづから黍粟狀の如きもの延び出て、遂に細小根となるといへ共、五月の比の梅雨しきりに降つゞきぬる時にあらざれば、大方は根付難きものなり、扨此枝は根上十二三節にて、始めて獨枝を生じ、それより雙枝三枝となりて梢上に至る、これ新竹の形狀なり、年を經る時は、その枝節よりまた二筍三筍を抽出て、五枝六枝或は七八九枝をも叢生す、その葉の狀矢竹に似て、極めて細く、長さ五寸餘、廣さ五分計にして、葉先最細尖なり、新枝は四葉三葉を一朶とし、舊枝は五葉六葉或は七葉を一朶とす、その葉先に至りては、皆二葉相對して、正に木槵子葉の葉先の如し、此筍秋末より生じ、冬に至りて成長す、その籜すべて紫色なる小斑點ありて、愛すべく味またよし、

〔古今要覽稿草木〕瑇瑁竹

瑇瑁竹は今駿河國藤川の傍なる木島鄕にあり、卽ま竹の一種、斑文ありて最長大なるもの也、○中略或人の其地に至る時、土人此幹を擘て篋となし、蛇籠を作りて藤川に於て洪水を遮ぎりしといへり、かゝる奇竹を以て尋常の用に供するものは最おしむべし、扨此瑇瑁竹は舊より駿河國にのみ產して、その他諸國またこれある事なきを以て、諸家本草絕て此竹を載せず、

玳瑁竹　紫籜竹

玳瑁竹は、漢名を紫籜竹といふ、其高二尺許、葉は熊笹に似て、細小にして長八九寸、廣さ一寸餘、其

方竹

り、味は大抵苦竹荀と相似て食ふべし、また幹葉共に小にして、毎節間三枝を生ずるものあり、その左右の枝は大にして、中枝は至て細小なり、これは尋常の苦竹のたま〳〵三枝を生ずるものあるに同じ、別種にはあらず、又和漢三才圖會に、銀明竹、一名紗地竹あり、その筠色白して溝綠色とみえたり、これは金明竹の、土地によりて其色を變せし物なるべし、一種碧玉間黄金竹あり、これは竹身綠色にして、節間の凹處一道黄色なる物なれど、今甚稀なり、また一種竹身半は青く、半は紫にて、二色相快ずるものを、舊は對青竹といふよし僧贊寧が筍譜にみえたり、本邦には絶て此種ある事をきかず、

高麗竹　すぢ竹

高麗竹一名蘇枋竹、一名筋竹は、漢名を金絲竹、一名白絲竹、一名刷絲竹、一名七紘竹、一名箭竹といふ、その幹節並に女竹に似て、高さ三五尺、大さ小指の如し、毎節相去こと五寸許にて、三枝五枝或は七枝を叢生す、○中略扨此竹わかき時は、通幹艶紅色なる事、頗る蘇枋を以て物を染しが如し、それに五六七行の青線絡ありて、宛も刷絲の如く、老る時はその紅色、をのづから淡黄に變じて、青色また薄し、今種樹家往々これを培養するものあり、其奇麗最愛すべし、往時此竹を薩摩より東都に奉りし事あるよし、これは今ある物は蓋しその遺種なるべし、

〔重修本草綱目啓蒙二十六苞木〕竹

方竹ハシカクダケ、琉球產ナレドモ、今ハ諸國ニ多シ、徑七八分、形四稜ニシテ鋭ナラズ、全身ニ沙(ザラツキ)アリ、根上ノ三五節、四圍ニ小根連リ出テ刺ノ如シ、故ニ斷テ土ニ扦插シテ活シ易シ、用テ杖トス、唐山ニハ大竹ニモ方ナル者アリ、

〔古今要覽稿草木〕四方竹　四角竹

四方竹一名四角竹は、漢名を方竹一名刺竹といふ、今江戸所々にこれあるといへども、もとは肥

按、俗云銀明竹者、筩色白、惟溝中綠色甚美也、槁則綠變一如尋常竹、

一種有金明竹、外黃溝中綠色、

〔重修本草綱目啓蒙二十六竹〕

筋アリ、○中略

增、金銀竹ハ一名キンメイチク本草正偽トモ云フ、漢名對青竹ナリ、竹ノ質黃色ニシテ、溝ノ處綠色ノ

紀州有田郡山ノ保田山中ニ、方言スヂ竹ト呼者ヲ產ス、形メダケニ似テ、質白粉ヲ傳クルガ如ク、

堅ニ青色六七條アリ、コレ七絃竹ナリ、臺灣府志附考ニ、臺海采風圖ヲ引テ曰、七絃竹幹白有青線

紋五六七條、葉與竹同ト云リ、漢名ノ筋竹トハ別ナリ、

〔古今要覽稿草木〕金明竹 金竹

金明竹、一名金竹、一名筋竹、一名しまだけは、漢名を黃金間碧玉竹、一名金鑲碧嵌竹、一名黃金間碧、

一名斑桃枝竹、一名對青竹、一名青黃竹、一名越閃竹、一名界金竹、一名閃竹、一名黃竹、一名間竹とい

ふ、岡村尙謙曰、本所押上村の人家に一叢林あり、高さおほよそ一丈五六尺、圍み二三寸、其幹地上

より四五節を經て、始めて双枝、或は獨枝を生ず、其枝左右細大の異なる、及び其節の隆起頗る苦

竹と一樣なりといへども、枝を生ずる節より以上は、凹處皆青色にして、枝を生せざるかたは黃

色也、されども黃色なる中にも、其青色なる凹處を少しく離れて、別に一行の深青細縱道あり、其

細縱道二行相並ぶものは、青色やゝ薄し、又下節の枝なくして、正圓なる所も青黃色を互にする

事、頗る上幹の如し、其幹を二つにわれば內白、肉は外面の青黃に拘らず、すべて淡青色を帶て常

竹の如く純白ならず、其葉また苦竹に相似たりといへども、葉上に細縱白道二三行雜出し、すべ

て青色ならざるは、苦竹に異なり、此筍また苦竹とおなじく、五月の頃に生じ、その籜青黃紅の數

縱道あり、其狀頗る刷絲の如くにして、紫斑點ある事、又苦竹のごとし、其奇麗最竹幹よりも勝れ

の梢弱くして地にたる、を釣糸竹と同上いふ、扨江都にて、舊より義竹といへるは、多摩川のこなたなる、新田社の境内にあり、その葉並常に尋常の苦竹と一樣なりといへども、その筍叢外に發する事なし、これは□福以南有竹長刺雲慈竹類也と岡部疏いへるに、その趣相似たりといへども、此筍の叢外に發せざるは、植しより數百年を經て、皆人常に其邊を往來して、其地至堅なるを以ての故なるよし、或人いへり、されば此義竹は慈竹類にはあらざるべし、

〔重修本草綱目啓蒙竹木二十六〕竹○中略

慈竹一名義竹ハ、和名ナンキンダケ、竹細シテ高サ六七尺ニ過ズ、其筍叢外ニ出ズ、一名慈姥事物紺珠慈孝竹、同上孝竹、汝南圃史叢竹、揚州府志

寒山竹

〔古今要覽稿草木〕寒山竹

寒山竹は卽篠竹の一種にして、漢名を箏篠一名拂雲箏竹といふ、その質女竹に似て節低く、高さ七八尺大さ小指の如し、毎節相去る事六七寸許にて、其枝は五枝、或は十枝、或は九枝なり、また左右によりて、互に大小の異なるあり、凡女竹の類は、その始皆三枝なるも、年をへて新葉を生ずる比は、その舊枝の節間に、また二小筍を生じて、新舊相交りて五枝とはなれるものなれば、此枝の九枝十枝なるも、それと同じ事なるべし、その枝はすべて女竹よりも、殊に長くして繁し、故に擸帚となすによろし、その葉また女竹よりも細密にして、五葉或は四葉を以て一朶とし、遠くこれを望めば、頗る地膚子草の狀の如し、この種今本所押上村の種樹家にあり、その佗おほくこれあることを志らず、

筋竹

〔大和本草竹九〕黃金碧竹譜ニ出タリ、黃竹ニシテ靑筋アリ、雄竹ナリ、大名竹ニ似テ不同、京都北野草木屋ニモアリ、又一種スヂ竹ト云竹アリ、女竹ノ類ナリ、白キタテ筋アリ、是亦大名竹ト不同、

金明竹　銀明竹

〔和漢三才圖會竹木八十五〕銀明竹きんめいちく　紗地竹

〔和漢三才圖會 八十五 苞木〕鳳尾竹(ほうびちく) 鳳凰竹 俗 孟宗竹 俗

本綱、鳳尾竹葉細三分、

按此俗云鳳凰竹也、筱竹之類、而高不過五六尺、葉細三分許甚茂、竹太如筯及箭篦、而肉厚、今年生者葉亦竹略肥大、舊年者却瘦細、九州平戸多有之、其笋冬月生、故俗呼曰孟宗竹、呉孟宗之母多好筍天感孝也、雪中生筍、取令吃之、此竹雖非其種、唯以冬生好事者名之、此筍最細長、甚苦不可食、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六 苞木〕竹

鳳尾竹ハ花戸ニ誤テ鳳凰竹ト云、一名土用ダケ、同名アリ シユンヤウチク、土州 サンシヤウダケ 播州 小ギンチク、薩州 人家ニ多ク栽ユ、叢生シテ幹細ク、長サ五七尺、葉濶サ二三分、長サ一寸許、排生シテ椏葉或ハ番蕉葉(リウキウソテツノ)如シ、冬ハ葉枯ル莖ハ枯レズ、夏土用中ニ筍ヲ生ズ、故ニ土用ダケト云、泉州府志ニ俗呼觀音竹ト云、

〔大和本草 九 竹〕慈竹 本草曰一名義竹、叢生不散、人栽爲玩、今按是近年所來唐竹歟、或曰南京竹、天寶遺事云、有竹叢密、笋不出外、因號義竹、

〔古今要覽稿 草木〕南京竹 慈竹

南京竹は俗稱なり、漢名を慈竹、一名義竹、一名孝竹、一名叢竹といひ、また一名子母竹、一名兄弟竹、一名慈孝竹、一名慈姥竹、一名孝順竹、一名王祥竹、一名釣絲竹、一名雲蓋ともいふ、これ即鳳尾竹の別種なり、故にその枝幹並に鳳尾竹に似て、毎葉鳳尾竹よりも長し、その高きものは二丈許、竹譜詳錄 低きものは六七尺、本草綱目啓蒙 叢生數十百竿に至り、根窠盤結して他處に引ず、竹譜詳錄 その筍一年に兩出し、夏筍は中より發して涼を母竹に讓り、冬筍は外より發して母竹の寒を護ると 致富全書、遵生八牋 いひ、また數種あり、節間相去る事八九寸なるを籠竹と 物部方略記 いひ、一尺許なるを苦竹と 同上 いふ、そ

花鏡、四季若四季生ㇾ筍、幹節長而圓、取爲樂器、聲中管籥、若生ㇾ山石ㇾ者、音更清亮可ㇾ人、○中略肥後ニアリ、甚寒氣ヲ畏ル、竹質慈竹(ナンシヤウダケ)ノ如ク、節高シ、脆シテ剛勁ナラズ、葉數少シテ大ナリ、方竹葉ニ似テ幅廣ク、深綠色ニシテ小箬葉ノ如シ、四時共ニ筍ヲ生ズ、慈竹ノ筍ノ如シ、近年肥後ヨリ移栽ユ、兩三年ニシテ枯タリ、惜ベシ、

〔古今要覽稿 草木〕臺明竹 青葉笛竹

○臺明竹一名大妙竹、一名大名竹は、古名を青葉笛竹、一名二葉笛竹、或はその二字を略して、たゞ笛竹ともいひ、漢名は四季竹一名四時竹といふ、此竹古より大隅國贈唹郡清水鄕臺明寺山中に產す、○中略予○屋代弘賢が往時本多甲馬より惠まれしを家にひめしは、其竹長節竹に似て、徑一寸許にて、節間相去る事一尺五六寸、其節低きことまた長節竹の如し、今江都に有物は、その高さ一丈五六尺、圍み三寸餘、その根上より二三節はその節密にして、その間相去る事三四寸、それより以上は節疎なることと、八九寸より或は一尺五六寸に至る、また地上の第一二節には、周圍に細小根連なり出て、頗る方竹の如もあり、此竹始めの枝は三枝或は五枝なりといへども、中幹より以上は、すべて七八枝を叢生し、それに筍付て、年を經ておちず、葉は全く長節竹に似て、細長にして、大低八九葉を一朶とす、此筍大隅國に產する物は、四時を期して生出るといへども、江都に移し植るものは、夏月のみ最盛なるは、まさに風土の寒暖によりての事なりといへり、されども今江都にある物は、予がひめ置し竹とは、更に別種の物なりとおもはる、

〔毛吹草 三〕薩摩 大名竹子 四季共ニ有ト云

鳳尾竹

〔和爾雅 七草木〕鳳尾竹(クワンテンタケ) 泉州府志云、俗呼二觀音竹一、

〔大和本草 九竹〕鳳尾竹 俗呼二觀音竹一、泉州府志出、本邦ニモアリ、葉ヒロク、竹小ナリ、綱目ニ所ㇾ謂鳳尾竹、葉細三分、與ㇾ此異、

〔古今要覽稿草木〕業平竹

業平竹一名和合竹、一名なよ竹は、高さ一丈四五尺にして、圍み一寸六七分、その根上第一節より毎節左右互に凹處および小黃芽あり、その凹處は下節より上節下に至るといへども、常竹よりはその幅至てせまくして且淺し、〇中略此竹今本所中の鄕南藏院境內なる業平天神の社側、および龜井戶天神の社前、その外本所中處々に多し、是は董し竹譜詳錄に載る所の、龍尾竹の一種にてもあるべきにや、

簩竹

〔古今要覽稿草木〕小町竹

こまちたけは漢名を簩竹といひ、琉球名を麻手古竹といふ、今本所外手街辨天小路青木曙左衞門庭中にあり、其竹高さ一丈五尺許、徑六七分、節隆起して頗る笻竹の趣ありといへども、笻竹よりは至て低し、その節間相さること、おほよそ一尺餘、毎節三枝を生じ、その枝諸竹より長し、毎枝七八葉、或は十葉、或は十二三葉をつく、その一葉の狀苦竹に似て、極めて大にして、頗る若葉の如く、その葉本すべて細褐毛ある事、又苦竹の如し、此筍諸竹と同じく、四五月の頃に生ずれども、秋に至れば、また根節上再び小筍を抽出て、年を經て枝となる、此竹嶺南に生ずるものは、秋根旁大筍を出し、綿々として絕ずと竹譜詳錄いへ共、本邦のものは然らず、これは風土に寒暖の異なる事あるによりて也、〇下略

大名竹

〔大和本草九竹〕大名竹　倭名ナリ、節間長ク赤黃條アリ、竹柔ニシテ不ㇾ堪ㇾ爲ㇾ器用ㇾ

〔和漢三才圖會八十五苞木〕篠竹〇中略

大妙竹　狀似ㇾ長節竹ㇾ而大、周三寸許、葉亦大也、可ㇾ作ㇾ笛、

〔倭訓栞中編二十二不〕ふえたけ　笛の竹なり、通雅に、有ㇾ雅笛ㇾ有ㇾ羗笛ㇾ注雅羗共以ㇾ美竹ㇾ作、俗呼曰ㇾ笛竹ㇾと見えたり、

〔百品考上〕四季竹　一名四時竹

龜文竹

〔古今要覽稿草木〕龜文竹

龜文竹は、人面竹の類にて、世に稀なるものなり、西土にては崇陽縣寶陀岩に生じて、僅に一本のよし〈秘傳花鏡〉いひ傳ふれども、往時琉球に產せし事ありしも、またゞめづらし、その竹高さ一丈餘、節間矮促にして、節々龜甲紋をなすと〈琉球產物志〉いへり、國產いまだこれある事を聞かず、

暴節竹

〔多識編竹三〕暴節竹、和名今按不志太加太計、

〔古今要覽稿草木〕高節竹〈節竹〉

高節竹一名笻竹、一名暴節竹は、俗名をこぶたけといふ、近頃舶來なしといへ共、六七十年以前には、まれに舶來ありしを、松平播磨守園中に移し植られしが、わづかに三四年を經て、二間四方程にも繁茂せしよし、今は絕てなし

疎節竹

〔古今要覽稿草木〕疎節竹

疎節竹は和漢通名にて、その節間極めて長き竹なれば、笛を造るに至てよし、その節間三尺許なるは笛二管をとり、四尺許なるは三管を取べし、今筑後國柳川にありと〈丹洲圖竹〉いふ、

尺八竹

〔古今要覽稿草木〕尺八節〈無節竹〉

尺八竹は、漢名を通竹、一名通節竹、一名無節竹といふ、〈○中略〉本邦にては備後國に產ずると〈本草啓蒙〉いへり、その他また有ことをきらず、

業平竹

〔和漢三才圖會八十五苞木〕篠竹〈○中略〉

業平竹　似長節竹、而葉似苦竹、業者名之、中將業平之容貌、人以爲女而男也、此竹擬之名乎、

〔重修本草綱目啓蒙二十六苞木〕竹

增、〈○中略〉一種ナリヒラ竹アリ、竹ハ節低クシテ、メダケニ同クシテ、葉ノ形濶ク長ク繁密ナリ、又臺明竹ト書ク時ハ隅州噌唹郡淸水山ノ名竹ニシテ、同音異物ナリ、

鼓山にて、閩中の地名なるも玄るべからず

多般竹〔竹譜詳錄〕

此竹、每節極めて多般、故に名づく、

正誤

和漢三才圖會云、虎揎竹、是暴節竹乎、

按に、暴節竹は俗にこぶ竹といふ、卽鈽竹にして、皇朝にかつてなきもの也、

本草一家言云、鶴膝竹一名佛面竹、一名鷄髓竹、倭名布袋竹、

按に、鶴膝竹と佛面竹とは、もと兩種にて、また布袋竹とも異なり、然るを今三種混同して一ツとなすものは誤れり、又雞髓竹の名は、廣群芳譜にみえたり、これも鶴膝竹の一名にして、布袋竹にあらず、

本草綱目啓蒙云、ホテイ竹ハ漢名人面竹〔本草彙言〕ト云ヘリ、

按に、人面竹は、通雅によるに佛面竹の小なるものなれば、布袋竹とは別種なり、其狀布袋竹は每節擁腫する事人面の如く、或は鶴膝の如くにして、人面竹は兩節の間突起する事人面の如く、また佛面の如きものなれば、もとより一種にはあらざる也、

佛面竹

〔古今要覽稿 草木〕佛面竹 佛肚竹

佛面竹は和漢通名にて、一名を人面竹、一名を鬼面竹、一名を佛肚竹、一名を佛眼竹といひ、また俗名を拉母七孤といふ、下野國茅橋邊の竹林〔丹州竹圖〕及び伊豫國吉田領大乘寺境內にありと〔國史草木昆蟲考〕いへり、其狀大小のたがひありといへ共、すべて地上一二節或は三四節より、左右邪正兩節相對して、大龜甲紋の如く、中間高く起りて、頗る人面のごとく、また佛肚の如し、方于魯が墨譜に、每節間二句一聯の七佛偈を鐫成せしは、卽此竹にて西土にも至て稀なりと〔丹州竹圖〕いへり、

常なれども、稀には擁腫あるもあり、葉ははちくに似てやゝ長大にして繁し、その先二葉相對し、一葉にその下に付て、すべて三葉を一朶とす、姑の枝は、その擁腫をなす密節上よりして並び生じ、或は密節中、及び密節下よりも生ずるものあり、又はじめの枝獨枝なるもあれば、その節に黄芽を含めるもあり、其枝を生ずる方は、竹身互に凹處ありといへ共、其正中少しく高く起りて、其凹處全く兩道なり、此竹高さ八九尺より一丈許に至る、邦人從前此竹を杖とす、その質至て輕して雅趣あり、實に扶老の材なり、此筍狀小なりといへ共味衆筍に勝れたり、されども人多くこれを喫ふ事をしらず、又俗に武田竹とよぶものあり、これは武田信玄存生の時、手づから杖を土にさし込置しが根付しものにて、今に其竹を節の所よりきれば、花菱の紋あらはに見ゆるといひ傳ふ、此竹の產する處は、甲斐國府中の傍なる信玄居城の跡なるよし、今松平越中守の大塚の下邸に、その種を移し植られしを親見するに、全く今の布袋竹なり、別種にはあらず、○中略

釋名

布袋竹(本草一家言、本草綱目啓蒙、)

此竹、節間圓起突出頗る畫にかける布袋和尚の面のごとく、またその腹の如くなるによりて名づく、

琉球竹(大和本草)

此竹、もと琉球より來る、故に此名あり、

虎撐竹(和漢三才圖會、大和本草、本草綱目啓蒙、)

按に、三才圖會に、虎撐竹は俗稱なりといへども、其名義に至りてはいはず、本草一家言に古散竹に作り、廣大和本草には五三竹に作る、此竹の節、或は三或は五、相連れるによりての名なるよし、又古散竹はこれと別物なれば、たゞ音通にてその名を假借せしのみなり、或はコサンは

此竹始め獨枝にして、後に雙枝のもの多し、その雙枝を、必ず左右互に大小の異なる事なり、なを苦竹の如し、葉は大抵淡竹葉に似て、五葉を一朶とす、また三葉のもの、四葉のものあるは、年を經て二葉或は一葉の、をのれと枯落しにて、全形にはあらず、其葉表裏の透りて、淡黄白色の縱道三五行青葉中に間して、兒篠の如く、葉本より葉先に至る、また梢葉に至りては、却て青色にして、縱道なきもあり、此即西土にいはゆる間道竹なりといへ共、邦產たゞ幹水竹の如く、每叢或は十四五葉に至らざるを異なりとす、今松平越中守大塚の下邸に、杢目竹といふものあり、即これと同種なり、又一種その葉大なる事、苦竹と一樣にして、每青葉のうち、たま〳〵左枝に一葉、或は右枝に一葉、その葉の正中或はかたよりて、一行二行の間道あるものあり、これは全く苦竹の變生なり、

〔大和本草 竹九〕琉球竹 又コサン竹ト云、琉球ヨリ來レリ、大サハ如杖鞭、形狀其葉ハ吳竹ノ如シ、節間或近或遠、近者五六分、遠者五六寸、一本ノ內ニテ遠近アル事如此、筑紫有之、

〔和漢三才圖會 八十五 苞木〕暴節竹(こさんちく) 虎擯竹 俗

本綱、暴節竹出蜀中、今之四川 高節磥砢、即筇竹也、

按出於日向佐渡原、有名虎擯竹者、高五六尺、其葉小、自根上一尺許間、有節七八數、磥砢甚奇也、即筇竹良、恨稍瘦細性不勁、是所謂暴節竹乎、磥本作礨、磥砢衆石貌也、磥當作礨、

〔古今要覽稿 草木〕布袋竹 琉球竹

布袋竹、一名琉球竹、一名虎擯竹は、漢名を多般竹といふ、此竹根上より二三節以上は、其節密なること凡五六節、或は八九節、其最密なるは十一二節に至る、其節或は斜、或は正にして、每節擁腫、宛も人面のごとく、或は鶴膝のごとく、或は蟀螬の如く、或は縮頸の鼈の如し、それより以上は節疎にて、節の狀眞竹に似て、上高く下低し、凡密節上より末に至りては、其節下に擁腫なきは此竹の

皆竹を以て作れば、床はさらなり、柱も障子も、薪までも皆竹を用ゆるなり、そこの男女は終日竹の事にのみかゝりて、別に農業を勤むる事もなし、これは古よりの竹村なれば、三度の飯にも竹筍の乾したるを糧とし、小兒の時より疱瘡も至て輕くして、壯健なる事世にたぐひなし、また別に惡病も煩ふ事なければ、醫を賴む事もなしと、それをのみ土人はほこりがほに物語しけり、又筍を製するには、柔き比採て湯に浸し、或は蒸などして、日に乾し、用ふる時に水に浸し、煮て食するに、其味殊によろし、凡半里餘も左右皆竹林にして、其道傍に材木を積みたるが如く、竹を切て積置、或は輪竹にして近國へ出し、また屋材の用に供す、凡かくの如く、竹の夥敷ある所は、世にはまたとあるまじきなり、扨その家居のさまは、皆人々の巧にまかせて面白く作りしものなれば、中々に言葉には述難しといへり、和訓栞に、漢竹豐後より出るといへるは、蓋し此村の事なるにや、本朝俗諺志云、相州西郡の内金子村(さかわより二里半)に、金子市左衛門といふ百姓あり、此籔の竹一尺八寸廻り、六七間の末にて一尺廻り程あり、籔はやう〳〵十間に廿間ばかり、一間に一本づゝあり、めづらしき竹籔なり、此竹所望すれば、最初の契約にて根からはきらず、三尺ばかり上より切て、切口に何か藥をぬり、竹の皮にて幾重も包み、大切にする也、

胡竹

〔撮壤集 中竹〕胡竹

〔倭訓栞 前編古 九〕こちく　八雲御抄に胡竹也と見え、律書樂圖に横笛本出於羌也と見えたり、拾芥抄には吳竹と見えたり、又周禮に孤竹之管、注に竹特生者と見えたれば是にや、後拾遺集に、

いつかまたこちくなるべき鶯のさへづりそめし夜半の笛竹、此方へ來といひかけたる成べし、千載集にもよめり、

翁竹

〔古今要覽稿 草木〕おきな竹

翁竹、一名杢目竹は、漢名を間道竹といふ、其幹節幷に苦竹に似て、高さ一丈餘、圍み四五寸に至る、

かきつけてつかはしける、　　よみ人しらず

うつろはぬなに流れたる河竹のいづれのよにか秋をしるべき

篁竹

〔多識編竹三〕篁竹、和名今按加。和。志。呂。太。計。

〔重修本草綱目啓蒙二十六苞木〕竹

一種竹長ジテ全ク粉アリテ、霜ノ如キ者ヲカ。シ。ロ。ダ。ケ。ト云、是篁竹ニシテ淡竹ノ一種ナリ、

〔古今要覽稿草木〕かはしろ竹　かしろ竹

かはしろたけ一名かしろ竹は、漢名を篁竹一名水白竹といふ、これ即はちくの一種なり、故に其狀すべてはちくと一樣にして、たゞ全身白粉ありて、霜のごときを異なりとす、〇下略

漢竹

〔撮壤集中竹〕漢竹(カン)

〔古今要覽稿草木〕漢竹

漢竹は、和漢通名なり、江村如圭は漢竹伊豫に生じ、以て桶に入るべしと〔本草綱〕いひ、谷川士清は漢竹桶となすべきもの、豐後よりいづると〔和訓栞〕いへり、また相模の金子村に產するものこれと同種なるべし、おもふに此種は、蓋しま竹のその土地に應じてよく生育し、其幹極めて長大にして、圍み二尺餘にいたるものにて、別種にはあるべからず、また竹譜詳錄に、籠葱竹生羅浮山、因名羅浮竹、竹皆十圍といへるも、大略此類なるべしとおもひしに、籠葱竹は、惠陽志に、葉如芭蕉、大長及一丈といひ、番禺志に、籠葱竹、葉大如手、徑二三尺といふ時は、これとは別種なり、扨佐藤成裕壯年の比遊歷せし時、肥後の小國といふ所より、二里ばかり山間の人家なき所を過て、豐後の肥田といふ所に行しに、その間に竹村あり、その名は忘れたれども、すべて其所はいと高き土山にして、其山頭に大竹幾萬幹群り生じて、水田はなく、たゞ畠のみ少しはありといへ共、其畠にも夏の比はおのづから筍を生じて、拔とらざれば忽ちに竹藪となる、かゞ竹の多き處故に、土人の家居は

を生じ、青々として多枯せず、よて川竹と呼なるべし、插花には頗る雅趣あれど、水上がたし、是は食鹽の苦水に、枝葉を強く浸して用ふべし、

〔延喜式五齋宮〕御贖料〇中略小川。竹。廿株

〔延喜式十七內匠〕御輿一具〇中略蓋下棧料川。竹。十株、

〔萬葉集二挽歌〕吉備津采女死時、柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌

秋山(アキヤマノ)下部留(シタヘル)妹(イモ)、奈用竹乃(ナヨタケノ)騰遠依(トヲヨル)子等(コラ)者。〇下略

〔萬葉集抄五〕なゆ竹とは唐竹を云にや、なよ竹といへり、ゆとよと同内相通也、なよ竹のよながきなどもよめり、唐竹にあたれり、よながくして、とをくなみよれば、なゆ竹のとをよることとよそへたり、

〔冠辭考七奈〕なゆたけの　とをよるこら　みことも

卷三に、長歌名湯竹乃(ナユタケノ)十縁(トヲヨル)皇子(ミコ)云々、こはたをやかなる女の妻を、なよゝかなる竹に譬へて冠らせたり、なゆ竹は女竹にて、是を皮竹ともいふことになよゝかにたわめば之かいひ、なゆなよ音通へり且とをよるも、たをやかてふに同じくて、共に音かよへり、古事記に、大名持命を祭る詞打竹之(ウチタケノ)、登々遠々(トヲヽ)登々遠々(トヲヽ)邇、二字をかく書て、訓はとをゝとよむは、古への例也、獻二天之眞魚咋一也ともあり、

〔古今和歌集十物名〕かはたけ。。。　かげのりのおほぎみ

さよふけてなかばたけゆく久かたの月吹きかへせ秋の山風

〔枕草子六〕あはれなる物

川竹の風にふかれたる夕ぐれ

〔後撰和歌集十八雜〕女ともだちのつねにいひかはしけるを、久しくおとづれざりければ、十月ばかりに、あだ人のおもふといひし言のはといふ、ふることをいひつかはしたりければ、竹のは

トスルニ奥竹ニマサレリ、民用多シ、矢篦竹ハ節ヒキク直シ、肉厚ク葉大ナリ、篠竹ノ類也、

〔古今要覽稿草木〕川竹　なよ竹　女竹

がは竹は舊より奥竹臺にむかひて、御溝ちかきかたに植られし竹にて、古歌には奈用竹、或は名湯竹といひ、俗にはない竹、一名をんな竹、一名め竹、一名みかま竹、一名にが竹といひ、漢名もまた苦竹といふ、其幹正圓にして高さ一丈五六尺、あるひは二丈許にして、其節の狀、上節なだらかに隆起して、下節の籜を生せし所と、其間男竹に比すれば、やゝ疎にして、節々相さる事、凡八九寸より或は一尺五六寸に至る、此竹新年のものは、大略三枝にて、二年にいたれば三枝の間、別に二小筍を抽出て、新舊相交りて五枝となり、また新年のものといへども、その中幹より以上は、始より五枝或は稀に六枝を生ずるもあり、葉はすべて細長にして、長さ八寸廣さ六分許にて、或は新枝舊枝によりて、廣狹のことなることありといへども、皆六葉を以て一朶とするは、此竹の性なり、あるひは四葉五葉なるもあるは、その六葉のうちの、をのれと枯落しにて、かならず全形にはあらず、また延喜式に小川竹あり、これは其竹前條よりは細小にて、篠竹よりもやゝ大なるをさしていひしなり、別種にはあらず、扨此竹性濕に耐て、朽腐する事最も遲きによりて、舊より人家宮殿の壁の楨とす、むかし狛光高といへる舞人、興福寺維摩會の時、その寺の垣壁の竹を採て、笛に作りしを助支丸と名付、累代相傳して則房の世まてありしよし、詳に體源抄にみえたり、今俗に女竹をもつて、篠笛草苅笛を作るものは、卽この遺風なるべし、されば廣倭本草に、此竹を以て本草綱目に載る所の笛竹なりといひしも、また意味あり、又筆管竹秋竹あり、ともに竹譜詳錄にみえたり、蓋し女竹の類なるべし、

〔剪花翁傳四八月開花〕川竹　穗八月中旬也、穗も葉も葦にして大きく、莖の圍り二寸計なり、初め小竹の筝の如き芽、三月より生じ、五月末專ら盛なり、又株元より上の方六分目に至まで、毎節に枝

川竹

るはといふに、物もいはでみすをもたげて、そよろとさしいるゝは、くれ。竹。のえだ成けり、おいこのきみにこそといひたるをきゝて、いざやこれ殿上にゆきてかたらんとて、中將新中將六位どもなど有けるはいぬ、頭弁はとまり給ひて、あやしくいぬる物どもかな、おまへの竹ををりて歌よまんとしつるを、しきにまいりて、おなじくは女房などよび出てをといひてきつるを、くれ竹の名をいととくいはれて、いぬるこそおかしけれ、たれがをしへをしりて、人のなべてしるべくもあらぬ事をばいふぞなどのたまへば、竹の名ともしらぬ物を、なまねたしとやおぼしつらんといへば、まことぞえしらじなどの給ふ、まめごとなどいひあはせてゐ給へるに、此君とせうすといふ詩をずして、又あつまりきたれば、殿上にていひきしつるほいもなくてはなど、かへり給ひぬるぞ、いとあやしくこそありつれとの給へば、さる事には何のいらへをかせん、いと中々ならん、殿上にてもいひのゝしりつれば、うへ〈○一條〉もきこしめして、興せさせ給ひつるとかたる、

〔徒然草下〕吳竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし、御溝にちかきは河竹、仁壽殿の方によりて植られたるは吳竹なり、

〔閑窓自語〕同帝〈○櫻町〉被レ爲レ造二竹臺一事
寛政の內裏には、中殿のまへにかは竹くれたけ、かげをならべてたてられしにわたりぬ、

〔倭名類聚抄二十竹〕簹竹　四聲字苑云、簹〈音與レ當同、辨色立成云、苦竹加○波○多○計○本朝式用二河竹二字一、今案宜レ從レ竹作レ簹歟、〉竹名也、

〔攝壤集中竹〕簹竹(カハタケ)

〔大和本草九竹〕女竹。　淡竹苦竹ノ內ニ雌雄アリ、其雌竹ニハアラズ、國俗ニ女竹ト云テ葉モ身モカハレルアリ、大竹トナラズ、皮ヲチズ、故ニ皮竹ト云、又苦(ニガ)竹ト云、筍ノ味苦キ故ナリ、吳竹ノ漢名苦竹ト云トハ別也、吉田兼好ガ曰、吳竹ハ葉細ク皮竹ハ葉廣シト云ヘリ、又小ナルヲバ篠(シノ)竹ト云、女竹ニ二種アリ、節高ト節低トナリ、筍ノ味苦クシテ吳竹ニ甚ヲトル、壁ノ材トシ簀竹ニ用ヒ、魚筍

ぜし筍を採て、これを石灰壇にて燒て奉りしは、淸凉殿にて御酒宴の日なるよしも同書にみえ、また吳竹を以て、木燧及び杵箕等の臺の足に作りし事は延喜式にみえ、人多く庭院に植おきて杖となし、或は格子の櫺子となすよしは、和漢三才圖會にみえたり、今江都にては此竹を以て火に炙り、涯を去て曝し竹となし、作簾家の用にそなへ、或は若竹を採て釣竿となし、其枝は別に縛束して、若竹をその柄とし、以て掃箒とす、其使用多きなり、扨日本紀略に、天下の吳竹悉く枯るといひしは、此竹のみ枯て、その餘の竹は枯る事なき意なれば、本草辨疑に、寬文六年より本朝の竹悉く枯て、皆根を斷つ、淡竹の外はかれずといへるに、その意全く同じければ、いよ〳〵古に吳竹と稱するものは、卽淡竹の類なる事、これにても押はかるべし、

〔儀式〕三踐祚大嘗祭儀中

時剋悠紀主基共發レ自二齋場一詣二大嘗宮一、〇註略其行列也、〇中略次木燧一荷、納二白筥二合一、吳竹爲レ蓋、

〔日本紀略〕嵯峨弘仁四年、此歲天下吳竹實如レ麥、其後枯盡、

〔古今和歌集〕十八雜題しらず　よみ人しらず

よにふれば言の葉のしげき吳竹のうきふしごとに鶯ぞなく

〔扶桑略記〕二十五朱雀延長九年〇承平元年是歲吳竹枯失、

〔後撰和歌集〕二十賀東宮の御前にくれ竹うへさせ給けるに　きよたゞ

君が爲うつしてうゝるくれ竹にちよもこもれる心ちこそすれ

〔古事談〕一王道后宮一條院御時、臨時祭試樂實方中將依二遲參一不レ賜二插頭花一、逐加二舞之間、進二寄竹臺一許、折二吳竹枝一插レ之、優美之由滿座感歎、依レ之試樂插頭、永用二吳竹枝一云云、

〔枕草子〕七五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさぶらひ給ふと、こゑ〴〵していへば、出て見よ、れいならずいふは誰ぞと、おほせらるれば、いで、こはたぞ、をどろ〳〵しきはやかな

〔饅頭屋本節用集草木久〕吳竹（クレタケ）

〔和爾雅草木七〕筸竹（カンチク）（クレタケ）此亦與淡竹同、或云別種也、

〔書言字考節用集生植六〕筸竹（クレタケ）名順和　吳竹同

〔東雅竹樹十六〕竹タケ中略○　倭名抄に、筸竹は漢語抄にいふ吳竹也、クレタケといふと見えしは、即今俗にカンチクといふもの、其字の音をもて呼ぶなり、雪竹を俗に寒竹といふものには異なり、

〔和漢三才圖會苞木八十五〕筸竹　吳竹　和名久禮太計、初來於吳國而名之乎、又有漢竹唐竹等、皆異品也、

文字集略云、筸竹似篁而節茂葉滋者也、吉田兼好云、吳竹葉細河竹葉濶、

按、筸音甘實中竹也、本草無筸竹者、今據倭名抄則淡竹之類、小細黃潤長不過尺、人多植庭院、可以爲杖、或爲格子欄子佳、

〔古今要覽稿草木〕吳竹

吳竹は、古より仁壽殿前の北のかたに植られし竹にて、即淡竹（ハチク）の一種、細小なるもの也、故に今俗またこれをさしてはちくといひ、漢名を筸竹、一名楉竹といふ、その高さ大抵一丈許にて、枝葉極めて繁茂し、其狀頗る淡竹に彷彿たりといへども、每節却て淡竹よりも密にして高し、順朝臣の文字集略を引て、筸は篁に似て、節茂り葉滋きもの也と和名抄いひ、兼好法師、及び一條禪閤の說にも、吳竹はよの常の竹より葉細しと徒然草、樵鳴曉筆、いへるは即これなり、凡吳竹の名は、古今和歌集、竹取物語等にみえたれど、萬葉集にはいまだその名を載ざるによれば、此竹の吳國より來れるは、平城天皇よりはるかに後の事なるべしと思ひしに、日本紀略に、弘仁四年、天下の吳竹ことごとく枯しよしみえたれば、その天皇よりも以前に此種の渡りこしものなるはしるし、されば吳竹臺、河竹臺を作られしも、そのはじめ詳ならずといへども、いと舊くよりの事なるべし、吳竹臺の竹の枝を折て、臨時祭試樂の時に、實方中將の插頭花に伐られし事は、古事談にみえ、その臺に生

筸竹

〔古今要覽稿草木〕まゝたけ。　にが竹
またけ一名にが竹は、漢名を苦竹といひ、筍を甛苦筍といふ、近邊處在、これあるものは、多く細小のものなりといへ共、靑梅棟馬村、及び下總松戶邊に出るものは、肥大にして圍み一尺餘、長さ三四丈に至る、其根上より二三尺の間は、はちくと同じく節密にして、それより以上は、はちくよりも節疎なり、其密なるは每節相去る事凡四五寸にして、その疎なるは一尺より一尺五六寸に至る、其節の合たる貌、本竿も枝節も皆一樣にして、上節高く起りて、下節は極て低し、正にはちくの本竿節は低しといへ共、枝節は却て高きものとは、その狀全く異なり、此種丈高きものは十七八節以上にて、始めて枝を生じ、丈低きものは八九節、その至て細小なるものは、或は四五節より枝を生ず、其始の枝は獨枝にして、其次の一節よりは雙枝なり、また始めより雙枝にして、絕て獨枝なきもあり、すべて一樣ならずといへ共、これははちくと違ひ、根上の數節に一分許の小黃芽ありて、舊年の竹今年に至り、新葉を生ずる比は、其黃芽おのづから抽出て、小靑筍となりて、舊枝の外に別に新枝を出す、その枝はおほく獨枝なり、

〔草木育種下〕苦竹本草　花鏡曰、竹園宜用大麥糠、或稻穩、添河泥壅、又死猫引他人竹、杉林の間へ植こめば、竹長くのび、又雪折も少し、總て竹の根もとへ藁を置ば根腐ものなり、馬糞籾糠は多く入てよし、植替は五月十三日よし、又正月元日二月二日三月三日植てもよし、冬月は惡し、材に用るには八月に切ば竹實して虫少し、

〔古今和歌集十物名〕にがたけ　　しげはる
命とて露をたのむにかたけれぱ物わびしらに鳴のべの虫

〔倭名類聚抄二十竹〕筸竹　文字集略云、筸竹音甘、楊氏漢語抄云、呉竹也、和語云久禮太介、似簟而節茂葉滋者也、

〔撮壤集中竹〕筸竹　呉竹筸竹同和名

苦竹

次の一節は右枝は太く、左枝は細し、毎節相互にかくの如くして梢上に至る、其雙枝よりまた小枝を生じ、小枝よりまた細枝を分ちて、其梢ことにをの〳〵葉をつく、其葉長さ二三寸廣さ二分許にて、其先に葉相對し、三葉は其下につきて、すべて五葉を一朶とす、又三葉のもの、及び二葉相對して其葉細小なるものありといへども、それは全く年を經て、下葉のおのれと枯落しにて、必すその性質にはあらず、またはちくの本竿節は、ま竹より低といへども、枝節は却てま竹よりも高く、其狀頗る鶴膝の如し、扨其枝を生ずるかたは、左にても右にても、節上より竹身に細長なる一道の凹處ありて、枝を生せざるかたは全く正円なり、また其竹身すべて白粉を帶るといへ共、殊に下節の本の周圍は、純白なる事、恰も一分許に截し白紙を、別に貼せしが如し、或人曰、舊より相模國小田原に大竹とよぶものあり、卽淡竹にして、其竿高さ三四丈、圍み八九寸にして先こけず、故に幟竿旗竿の用には、必ずこれを供する也、今は此竹林大久保加賀守御預りにて、漫に採る事を禁ずるを以て、土人或はおとめ竹ともいふといへり、○下略

〔多識編 三竹〕苦竹、和名仁。加。太。計。、今按末。太。計。、

〔和爾雅 七草木〕苦竹（カハタケ）（或作筶竹（マタケ））

〔東雅 十六樹竹〕竹タケ○中略　苦竹は○中略　古にカハタケといひ、卽今俗にマタケといふ是也、

〔倭訓栞 中編二十四〕まだけ　眞竹の義、苦竹をいへり、

〔大和本草 九竹〕苦竹　國俗呉（クレ）竹ト云、又眞竹ト云筍ノ味微苦、ハチクニヲトレリ、筍生ズル事ヲソシ、其大ナル者周尺餘、其籜紫白色斑文アリ、用テ笠トシ履ノ緒トス、其外用多シ、

〔和漢三才圖會 八十五苞木〕竹○中略

苦竹（マタケ）　眞律竹、和名加波多計　本朝式爲二河竹一、其筍籜紫斑味苦辛、其竹色青節間不レ促、大者周一尺六寸、長六七丈、

〔本草和名木十三〕淡竹（陶景注云、竹瀝唯用淡竹、仁諝音徒敢反、崔禹云、有花無實、）一名緑虎、（出雜名苑）和名久。禮。多。介。、

〔倭名類聚抄竹二十〕篠竹　唐韻云、篠竹（徒敢反、上聲之重、楊氏漢語抄云、淡竹於。保。多。介。今按淡宜作篠歟、）竹名也、

〔多識編竹三〕淡竹、和名今按阿。和。多。計。俗云波。知。久。、

〔撮壌集竹中〕篠竹（オホタケ）

〔東雅樹竹十六〕竹タケ（中略）倭名抄に、（中略）淡竹は漢語抄にオホタケといふ、今按淡宜作篠と見えし、オホタケとは大竹也、即今俗にタンチクといふも、其字音をもて呼て、或はこれをハチクといふは、白竹なり、

〔和漢三才圖會竹木八十五〕竹（中略）

淡竹　白竹、（俗云波知久）其筍籜白味淡甘、其竹亦色白、節間促於苦竹、大者四五寸、長二三丈、（此内亦有黒竹）

〔古今要覧稿草木〕お。ほ。た。け。　はちく

おほたけ、一名からたけ、一名あはたけ、一名はちくは、西土にいはゆる淡竹一名水竹也、その高さ凡二三丈、圍み七八寸にして、すべて地上より一二尺の間は節密にて、毎節相去る事二三寸、それより以上は節疎なる事、六七寸より或は八九寸に至る、其節の合たる貌、上節少しく高く起るといへども、下節の籜の脱せし跡よりも稍低し、これを細査する時は、毎節上に細小粒の如き物、横にならび付て、その大さ頗る瞿粟殻子のごとし、これは全く細根となるべき物の、地を離れて發する事、あたはざるを以て、皮中に其きざしを含めるなり、此種太高きものは、地上より十五六節、或は十七八節以上にて、始めて枝を生じ、丈低きものは十一二節、或は七八節以上にても枝を生ずるなり、その始の枝は雙枝にて、其次の一節は獨枝を生じ、又其次の一節より以上は、皆雙枝なるもあれば、又始め獨枝にして、其次の一節よりは直に雙枝となるものあれども、大概は始より雙枝は多くして、獨枝は少なし、凡枝を生じて雙枝なるは、始の一節の左枝は太く、右枝は細く、其

種類

者也、

〔倭訓栞前編十四〕たけ○中略　雄竹をからたけといふ、常の竹也、雌竹をみがこといふ、後まで皮つけり、業平竹は雄竹にて、節は雌竹のごとし、よて名く、箱根竹は細長し、品川竹は川竹の如し、薩摩竹は雌竹の品、兼好竹は竹うるはしく、葉ものびやかなる物也、三ッ股竹は武藏足立郡芝村にあり、實竹あり、よなしとぞ、又節一ッにて段々まきあげたるあり、美濃高須の南かちあひといふ所の八幡の社内に豐竹あり、圍四五寸もあり、寒竹の大なる如し、八月筍を生ず、當摩のまんだらにつきたる軸、一節一丈餘あり、今洛東の禪林寺にあり、こは南廣の簀簹竹なるべし、葉竹は淡竹、眞竹は苦竹、土用竹は鳳尾竹、鳳凰竹ともいふ、筍を生ずる三伏にあり、南京竹は義竹、しゆろ竹は椶竹、金竹は對青竹、島竹は黃金間碧、玉竹、淡竹と呼は秋蘆竹、玳瑇竹、班竹、箭竹の稱は和漢同じ、漢竹可爲桶斛者は豐後より出、黑竹は薩摩にあり、和漢の稱同じ、篛竹如蘆葦といふ者も和漢同じ、布袋竹は佛面竹、觀音竹和漢同じ、四方竹は方竹也、乳兒竹は山白竹、根篠は千里竹か、しろ竹は皮白の義、簟竹也、翁竹あり、葉に島あり、雪竹の類也、夜叉竹あり、北地に出、一節ごとに四方に枝さし出る竹は吉野竹林院にあり、孟宗竹は近年渡來す、對青竹は美濃にあり、一節に兩方に枝さすふたまた竹は天親竹也、紫竹を竿などに忌は、湘浦の故事によれりと埃囊抄にみへたり、

〔古今要覽稿草木〕竹たけ○中略

すべて竹の舊より歌によみ來りしを、おほよそに集めて書しるせしは、八雲御抄を始とす、それより下りては和漢三才圖會大和本草等、をの〳〵その種類を載るといへ共、僅に十餘種なり、本草一家言に至り、頗る增補ありといへども、いまだ穿鑿を遂ざるを以て、大略二十餘種に過ず、そもそも竹は皇朝固有の物といへども、また近時海外より渡りこし物も多し、今を以てこれを見れば、その種類殆百種にも近かるべし、

節

二種には非ず、共にたゞ凡の竹の貌(サマ)なるを、かく二ッに分って云は、古歌に此類多し、

〔倭名類聚抄 二十竹具〕節。野王案、節 音切、和名布之、竹中隔而不通者也、

兩節間 文選笙賦注云、黃帝使伶倫 黃帝二臣、伶倫竹樂人也、汪 斷兩節間而吹之、○兩節間俗云與、故以擧之、

〔撮壤集 中竹〕節(フシ) 同莭

〔饅頭屋本節用集 不草木〕節(フシ) 竹

〔和漢三才圖會 八十五苞木〕節(フシ) 音切

按竹中隔而不通者曰節、和訓布之 兩節間俗云與、竹靑皮曰筠、音云 禮記云、猶竹箭之有筠、筍皮曰籜、

凡竹物之有筋節者也、故筋節字从竹、

〔和爾雅 七草木〕扶竹(フタマタタケ)。○雙竹、天親竹、相思竹並同、

〔和漢三才圖會 八十五苞木〕雙岐竹(ふたまたたけ)

五雜俎云、武夷城高巖寺後有竹、本出土尺許、分兩岐直上、此亦從來未見之種、 五行志云、太平與國寺亦有、

按、攝州天王寺有之、淡竹之二岐者處處亦希有、

葉

〔書言字考節用集 六生植〕箬(タケノハ) 竹葉也。○ 篛 同上

〔和漢三才圖會 八十五苞木〕竹葉 淡竹葉 草有淡竹葉者、同名異物也、

淡竹葉 辛苦寒 除新久風邪之煩熱、止喘促氣勝之上衝、煎湯洗脫肛不收、同根煎洗婦人子宮下脫、

〔播磨風土記 揖保郡〕佐々村、品太天皇 ○應神 巡行之時、猿嚙竹葉而遇之、故曰佐々村、

〔和漢三才圖會 八十五苞木〕百葉竹(ひゃくえふちく)。○。○。

本綱、百葉竹一枝百葉、

按、一枝百葉、竹未知有也否、今苅下枝葉及中心稍頂上一處遺枝葉、則葉甚茂盛、如一枝百葉作成

へるにあらざれば、竹の根もまた小竹根にはあらざるべし、然るを或人の說に、皇朝自然生の竹は、すべて篠類にして、大竹は皆後世外國より持來れるが繁衍せしなりといへり、これは魏志倭人傳に、其竹篠簳桃支といへる文によりて、しかいへるなるべけれども、それは全く我產物の十が一を、おほよそに西土にて書しるせし物なれば、或は我海濱諸島上には、多く篠簳類の小竹を產するを見て、その一偏に拘はりて、さらに國中に大竹ある事をしらず、又は信濃加賀越前越後などの雪國には、古より今に至るまで、絕て大竹あることなし、たゞ熊笹須賽竹の類のみにして、出羽及び陸奧なども、南部領に至りては、生涯竹をみざる者あるよし、續東遊記にみえたり、これによれば皇朝といへども、竹は暖國の產にして、寒國には絕てなきもの、おそらくは西土の人、かかることを傳へ聞て、漫にその說をなせしもしるべからず、

〔古事記 下雄略〕於是若日下部王令奏天皇、背日幸行之事甚恐、故己直參上而仕奉、是以還上坐於宮之時、行立其山之坂上歌曰、○中略 夜麻能賀比爾、多知邪加由流、波毘呂久麻加斯、母登爾波、伊久美陀氣淤斐、須惠幣爾波、多斯美陀氣淤斐、○下略

〔古事記傳 四十一〕伊久美陀氣淤斐は、伊は伊理の理を省けるなり、久美は、師說に○賀茂眞淵久麻加斯の久麻と、ひとしくて、葉の繁ければ隱り竹と云を約めて、久美竹と云なりとあり、(冠辭考さす竹の條に見ゆ、其說の中に、(中略)伊を發語なりと云はれたるもいかゞ、發語に伊と云は、用言に限れり、體言の頭に置る例なし、此の久美は本は用言なれども、久美竹と云ときは、體言なれば、然るときに發語の伊を置ことはなきなり、)又思ふに、物の彼と此と一に相交はる意にもあるべし、(組と云名も、糸を相交へたるよしなり、)されば伊久美竹は、葉の茂くして、彼此相入交り合へるよしなるべし、(俗言にも、事の彼此と繁く雜り合を、入くむと云も同言なり、契沖が、いくみ竹は、竹の名なりといへるはたがへり、一種の竹の名には非ず、たゞしげれるよしなり、)淤斐は生なり、○中略 多斯美陀氣淤斐は、師說に、立繁竹生なりとあり、(冠辭考さす竹の條に見ゆ)立は生立るさまを云るにて、万葉一(二十三丁)に、春山跡、之美佐備立有などもあり、立榮の立も同じ、(契沖がたしみ竹を、竹の名なりと云るは違へり、)さて上の伊久美竹と、此と

に竹小春といへり、

〔古今和歌集雑十八〕題しらず　よみ人しらず

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬべらなり

〔重修本草綱目啓蒙二十六木〕竹　タケ和名抄　コエダグサ古歌　ユウタマグサ　カハタマグサ　チイログサ　チヒログサ　カクバシラ共上同　一名處士事物紺珠　瀟洒侯　瀟碧　青玉　蒼雪　蒼琅　青耀子　蒼庭筠　貞柯　碧玉　明玕　管若虛共上同　抱節君事物異名　此君　妬母草　化龍枝　君子　戸魯孫　青士共上同　賞靜綠綠餅　比封君典籍便覽　寒玉正字通　華草廣東新語

〔古今要覽稿草木〕竹　たけ

竹の物にあらはれしは、天照大御神乃伊都の竹鞆をとりおはしてと古事記にみえたるぞ初なるべき、○中略名用ナヨ竹、名湯竹、細竹、目刺竹、宇惠竹、辟竹、打竹の名は、萬葉集に出、河竹に川竹呉竹斑竹等の稱は、延喜式にみえたり、その河竹に箸竹の字を塡めしは、和名抄に辨色立成を引、呉竹に笄竹の字、また於保多介に淡竹の字を塡めしは同書に楊氏漢語抄を引るを始とす、○中略扨西土の書に、たゞ竹と稱するものは、即大小の通名なるは論なし、我古に竹とのみ稱せしは、全く大なる物にして、篠と稱するものは、即小なるものなり、故に小竹宮小竹祝小竹田の類は、皆その字の如くになるものなれども、竹林、竹屋、竹爲筏類は、すべて大なる物をさしていふ、既に萬葉集に刺竹宇惠竹辟竹の名ありといへども、其竹はかならず名湯竹細目竹をさしていへるにあらず、且刺竹宇惠竹は、原より一種の竹の名にあらざるによれば、名湯竹細目竹の外に、舊より別種の竹の大なるものありし也、されど今世のごとくに、それ〲の漢名を命じて、區別せしものにあらざれば、それをばすべて竹とのみ稱し、或は刺竹宇惠竹など丶歌にはよめるなるべし、また雄略天皇の御製に、木の根の根はふ宮、竹の根の根足宮といへる事みえたり、其木の根は小木根をさしてい

云り、さゝのくまは、たゞさゝの生たる所なり、源氏曰、くれたけのわざとなくかせにこぼれたるにほひといへり、竹にもいふべし、

〔藻鹽草八草〕竹

河竹　くれ竹　谷のくれ竹　むら竹　さゝ竹　いさゝむら(或はいさゝむら竹とも云歟)　ふえ竹　より竹　なよ竹(よながきとよめり)　わか竹　うへ竹　とよ竹(初學)　やはしのしの　からはし(竹名)　ゆさゝ　ちいろの竹　もゝしきの玉のみぎりのみかい竹　われ竹　しのへ竹　の竹　まの竹　とよらの竹　あはら竹　から竹　さゝわくる袖　さゝ枕　さゝのはら(又のゝ字なくても)　さゝの葉をさゝ　をさゝ原(又をさゝかはらかの字ありても)共、谷の竹ふ　いはねのを竹　岩まの竹　たま竹こ竹のはら　あさ篠原　木にもあらず草にもあらぬ竹　いほつゝのたかむら(こをむすひてつりはりもとめして也)　むつかしきさゝのまくら(源氏)　くれ竹のわざとなくかせにこぼれたるにほひといへり(源氏也、雖非薫香物の名につけて句といへり、竹にもいふべしと云々、)　千色草(たけの異名也)　小枝草(同)　河玉草(同、秋風はまとなる松にかよふなり河玉草ななるにといふべき、藏玉、)　夕玉草(のこれはたけ露をかく云也、月にきくゆふ玉くさあれき風に香はいつころね覺とはまし、藏玉、)　竹のふりね　むらさきの竹　にが竹(古今)　竹のさ枝　さゝの葉のさやく　たけのつほえ　葉かへせてとしふる竹のかきうち　篠むすびゑづがかきねのさゝくろめ(六新)　色かへぬ竹のは、ちいろあるかけ(是竹也)　竹のは山

こさゝ生にされたる竹(風竹也、ゆがみたる體也、源氏、)

〔日本釋名草下〕竹(タケ)　高きなり、けとかと通ず、筍は旬日の間に長じて、高き事天にそびゆ、是草の中いと高き物也、

〔東雅樹竹十六〕竹タケ　萬葉集抄に、タとは高き義なりといひけり、ケとは古語に木をケといふが如し、タケとは其生じて高きをいふなり、

〔倭訓栞前編十四〕たけ　略〇中　竹は一旬にして長高きの意也といへり、八月を伐の時とす、群芳譜

古事類苑

植物部十一

竹

竹ハ、タケト云フ、其種類甚ダ多シ、神代既ニ竹ニテ刀及ビ籠ヲ造リ、又筍ヲ食料ニ供セシコトアレバ、以テ竹ノ利用セラレシ事モ甚ダ古キヲ知ルベシ、而シテ竹ハ又弓箭ノ料ト爲シ、或ハ笛、竿、樋、垣籬等ノ材ト爲シ、割リテ席ニ編ミ、簾ヲ製シ、縮ネテ箍ト爲シ、又籜ハ笠ヲ縫ヒ、履ヲ織リ、食品ヲ裹ミ、竹茹ハ綯ヒテ火縄ニ爲ス等、其用途頗ル廣シ、

〔倭名類聚抄二十竹〕竹附篁 四聲字苑云、竹陟六反、和名多計、草也、一云非草非木、兼名苑注云、筸王塞反 竹總名也、孫愐切韻云、篁音皇、和名太加無良、俗云太加波良、竹叢也、

〔段注說文解字五上竹〕竹冬生艸也、云冬生者、謂竹胎生於冬日、枝葉不凋也、云艸者、爾雅竹在釋艸、山海經有云其艸多竹、故謂之冬生艸、戴凱之云、植物之中有艸木竹、猶動品之中、有魚鳥獸也、象形、象兩兩竝生、陟玉切、三部、按廣韻張六切、下巫者箁箬也、恐人未曉下巫之恉、故言之、凡竹之屬皆从竹、

〔撮壤集中竹〕竹タケ 篁タカムラ同、和名タカハラ類聚 筸タケ同 此君シクン 瀟洒侯セウシヤコウ

〔書言字考節用集六生植〕竹タケ 異名石母草、又此君、時珍云、小曰篠、大曰簜、

〔八雲御抄三上草〕竹 かは くれ むら いさゝむら万 さゝ ふえ より なよ わか源氏 うへ万、値也、 とよ初學 まの 万にやはしの玄の から俊抄 いし竹名 ゆさゝ ちひろの いほつゝのたかむらこをむすびてつりはり水し竹なり あなさよけなり、是は竹のはのうへ在古語拾遺、源氏曰 むつかしきさゝのくまをこまひきとむる程もなくと

〔重修本草綱目啓蒙五石〕石炭〔中略〕石炭ノ上品ニシテ器物ニ作ル者、多クハ木タチノ石炭ナリ、木タチノモノハ、別ニ漢名木煤（雲南通志）ト云、雲南通志云、石炭一種狀如樹而有條理者謂木煤、即チ奥州大隈川、及ビ同國棚倉ノ埋木、豫州ヨリ出ル所ノ扶桑木、皆同物ナリ、又阿州麻植郡森藤村ニモ產ス、地ヲ掘ルコト二三尺、或ハ五六尺、其厚サ一尺許ニシテ横行スルコト數十間ニ及ブ、コノ物地中ニテ實ヲ結ブ、黑色ニシテ長サ六七分、徑リ四五分、大抵棗子ノ大ニシテ、豎ニ六稜アリテ、前後尖ル、其質鬆疏ニシテ、櫟炭ノ如シ、奇品ナリ、

〔筆のすさび一〕一異木　讃州金毘羅より二十町許の處、某村に異樹あり、幹枝は桃にして葉は櫻なり、花は梅なり、實もまた桃なりといふ、

〔草木奇品家雅見下〕享保の初年、華舶、一種の奇木を齎し、官府に貢す、奇特の良品也とて、染井の種樹家花家伊兵衞なるものに台命を下し給はり、接木せしめ給ふ、然るに未嘗知奇樹なれば、逡巡して決せざりしが、熟その木の太山楓といふものに似たるを以て、これを官園に移し、砧として以て接立ければ、一樹をかゝず生育して欣榮す、後十二年ひろく世に蕃殖せしめんと、一株を伊兵衞に賜ふ、今其家に存して既數仭に及べりと云、
赤榕椿は、古白花山茶を珍玩せし頃、山茶の中より一種の變葉を生ず、其狀枸骨の如く、大鋸齒あり、依て榕山茶と名付て、今其種世上に往々是あり、元彼家より產すと云、
因に云、此伊兵衞は地錦抄の作者也、されば培やしなひに長じ、今子孫に傳へて此道を盛にせり、

之歲七月辛卯朔甲午、車駕夙自筑紫發、南巡至扶桑國、駐蹕熱田津行宮、是地有一偃木、橫碧海之中、長橋國人謂之曰扶木之長橋、自筑紫國達扶桑之鄕、王公百官蹈之而跨海、時是夷則之初、處暑酷烈、長橋無蔭、非自廚食發、則不可度、陽候蚤藏靈潮如霜、廼方至扶桑、旭日始颺、瑞光遐照、運麟趾於九淵、祥雲遐簇、擁龍駕於遙天、冠蓋紆聯旌旆飄遷、玉勒金鞍、衞護後先、淸道數十里而可一覲焉、國人大歡望幸歌之、歌云、蚤潮斯潔似霜斯烈、扶木長橋願言無熱、萬乘將格百寮自責、扶木長橋願言無斁、天皇乃眷曰、此靈異之物、豈可令百世之下無聞乎、廼下詔募問曰、彼橫碧海中物是何名樹也、冀聞其故之詳焉、來日有一老翁、應募而至、奏曰、彼橫海者此鄕舊物、名曰扶木、或曰扶桑樹、又或曰歷木偃木、歷偃並讀協扶、若万葉頗也、臣聞、鴻荒之世有扶桑樹、柱拄此鄕、扶桑高不知幾許万尋、樹本隆起二十里、所周旋數千國、枝葉垂布三百里方也、是以西州生不值晨光、東州長無視夕照、宵間風扇響振八荒、雲端翠凝光流四表、〇中略國人跨海之筑紫、皆由于此矣、終命之曰扶木長橋其它舊聞極多、臣老矣、不能悉盡焉、天皇大奇之、輙勅史臣紀之、且下制曰、夫扶桑者太初之神物也、靈蹤已改觀、而猶可得而稱焉、自今而後、宜號此國曰扶桑國也、扶桑之名自是後大振、後通爲日本之佳稱、其地今伊豫國也、〇中略客歲余南遊登海上諸岨、以概見扶桑之舊蹤、其山海之間巨巖細石盡有美質、色則玄黃紫赭靑白純雜無軌、余熟視之、僉是木之化石者也、故縱橫木理備存焉、其焦而埋者、今見在伊豫喜多二郡山海數十里、其海潮之中往々有爲礙者、其上潮勢極惡判然不可由焉、海船所畏憚也、

〔桂林漫錄上〕扶桑木

伊豫風土記ニ云、上古有二大木、一曰桂木、一曰臣木、其實曰椹、今桂木ノ朽チ殘リタル者、豫州伊豫郡森村ト云フ地ノ海底ヨリ出ヅ、又同所ニ桂谷ト云フ地有リ、其邊方一里程ノ間ヲ掘レバ古木ヲ得、土人桂木ノ根ナリト云フ、二種共ニ同物ニシテ、卽世ニ稱スル扶桑木ナリ、淸ノ王漁洋ガ香祖筆記ニ、桂板トアル物是ナリ、

圖の如く枝の實を栽れば、根に叉を生じて鬚多し、牛房など叉多きは枝の實なり、藥品にても獨活羌活白芷等、根に叉多きは下品なり、實をとる時心得あるべし、

〔源氏物語寄生四十九〕木がらしのたへがたきまで吹とをしたるに、殘る木ずゑもなくちりおきたるもみぢを、ふみ分けるあとも見えぬをみわたして、とみにもえいで給はず、いと氣色ある深山木に、やどりたるつたの色ぞまだのこりたる、こ。だ。に。などすこしひきとらせ給て、宮へとをぼしくてもたせ給、

やどり木と思ひいでずばこのもとの旅ねもいかにさびしからまし、とひとりごち給をきゝて、あまぎみ、

あれはつるくち木のもとをやどりぎと思ひをきけるほどのかなしさ、あくまでふるめきたれど、ゆへなくはあらぬをぞ、いさゝかのなぐさめにはをぼされける、

〔河海抄宿木十八〕木蔦　つたのたぐひ也

〔愛媛面影伊豫郡四〕扶。桑。木。本郡村離山より堀出す、一種の埋。木。なり、俗相傳上古扶桑と云大樹有けるを、その根年久しく土中に在て朽殘りたるなりと、仍て扶桑木と名く、鐫て印鈕に造るべく、刻みて印籠の帶付と爲べし、木質堅緻色深黑にして光澤あり、最愛玩すべし、

〔扶桑樹傳幷序〕伊豫國沙門明月述

景行天皇西征熊襲、未幾事畢、以其便道巡幸伊豫國、駐蹕熟田津行宮、蓋爲温泉也、此時始見偃樹、異而問之、遂得其實也、又後六百三十餘年舍人親王略載諸日本紀、然當時原文既殘缺、無所取正、則纔存其可讀者、而質諸來世、故今折衷古書所稱、及我鄕散史舊聞、補綴而述扶桑樹傳、維時安永九年歲次庚子九月上絃也、其傳曰、維大日本國人皇立制、第十二主纒向日代宮馭宇天皇登極十八年戊子

鄭樵爾雅ノ註ノ蔦ナリ、

〔和漢三才圖會　八十五　寓木〕桑寄生　久和乃也止里木〇中略

按、嫩樹無寄生、而養蠶之地老桑亦多、故眞者難得、唯隱岐及肥前五島有之、俗以爲中風要藥貴之、

〔本草辨疑　四木〕桑上寄生

古來桑耳ヲ以テ寄生ニ充ツ、故ニ今依御改桑寄生ト不言、サルノコシカケト云ナリ、眞ノ寄生ハ唐ヨリ來テ、木ノ色黄ニ葉細ク長ク、木葉共ニ桑ニシテ脆ク厚ク剉易キ者ナリ、　是亦僞多シ

蘇恭曰、此多生楓槲欅柳水楊等樹上、葉無陰陽、如細柳葉而厚脆、莖粗短子黄色、大如小棗、惟虢州有桑上者、子汁甚黏、核大似小豆、九月始熟、

時珍曰、須自采、或連桑、采者乃可用、世俗多以襍樹上者充之、氣性不同、恐反有害也、

日本ニモ松柳ニ寄生多シ、桑ニ有コトヲ不聞、松柳ニ生ズル者、今唐ヨリ來ル者ト不異、時珍モ桑ヲ連タル者ヲ眞トシ用ル時ハ、今ノ唐桑モ不連、又和ノ松柳ノ生、ニ能似タル物ナレバ、是ヲ眞トハサダメ難シ、唯桑中ヲ自尋求メテ可用、不正者ハ不可用、

〔圓珠庵雜記〕やどり木をほやといふ、和名にみえたり、萬葉にはほよとよめり、和名抄木類、寄生和名夜止里木、一云保夜、萬葉十八、あし引の山のこぬれのほよとりてかざしつくらば千とせほぐとぞ

〔草木育種後編　上〕下種之事

駿州に栫山茶等に生ずる寄生あり、形扁柏に似たり、このもの寄生したるをひのき山茶といふ、寛保年中將翁先生鈴鹿郡高宮村より採り官に奉りし事あり、即此ものなり、一名あやつばきともいふ、灌園先生云、此木の下へ諸の常盤木を栽置ば、實落て自ら寄生を生す、およそ實を撰ぶには、中心の實を上とす、枝に付實は下品なり、

桑上寄生者木精也、(出太清經)和名久波乃岐乃保也、

〔重修本草綱目啓蒙(二十六寓木)〕桑上寄生 クハノヤドリキ 寄生 ヤドリキ(和名抄) ホヤ(同上) ヤドルホヤ(古歌) カラスノウエキ(防州) トビキ(讃州) 桑寄生一名混沌蜈蚣(輟耕録) 寓屑(事物異名) 寓童(同上) 桑生(三因方) 桑木冬兒沙里(村家方) 桑絡(醫學正傳) 桑樹上羊兒藤(同上) 桑上羊兒藤(赤水玄珠) 桑上牛兒藤(肘後方)

桑樹ノヤドリキヲ桑寄生ト云、ヤドリキハ寄生ナリ、其木ノ餘氣ニテ生ズル者ニシテ、諸木共ニアリ、藥ニハ桑上ノ者ヲ用ユ、鳥他木ノ子ヲ食ヒ、糞樹上ニ落テ生ズルヲ寄生ト云ニ非ズ、保昇ノ説ハ誤ナルコト、宗奭辨ズル事明ナリ、寄生ハソレゾレノ木ニ由テ生ズ、故ニ各木ニ因テ葉實ノ形異ナリ、鳥ノ糞中ノ木子樹窠ニ落テ生ズル者モアレドモ、コレハ寄生ニ非ズ、桑寄生ハ隱州ノ產ヲ上品トス、凡ソ蠶ヲ養ハザル暖地ニハ、桑木採斫ノ苦ナキ故、木盛ニ茂リ、木モ古クナリテ、枝間ニ寄生ヲ生ズ、皮中ヨリ幹ヲ出シ、他木ノ枝ヲ插タルガ如シ、枝葉兩對シ、柳葉ノ如ク、躑躅葉ノ如クニシテ厚シ、葉間ニ圓實ヲ結ブ、南天燭子ノ大ノ如シ、熟シテ淡黄色透徹シ內子見ユ、破レバ粘滑ナリ、隱州ノ產ハ、葉他州ノ者ヨリ大ナリ、櫻柳朴梨等ノ寄生、桑上ノ者ト形狀相同ク、乾者節節相離レ、葉葉自ラ落ツ、故ニ今藥家ニ販グ者、多クハ和州芳野ノ櫻寄生ナリ、桑上ノ者ハ枯レテ枝葉共ニ黄色ナリ、他木ノ者ハ綠色ニシテ黄ナラズ、故ニ黄色ニ染テ僞ル者アリ、本草原始ニ、莖葉黄自採者眞ト云、本草彙言ニ、其他木如松楓楡柳櫸槲桃梅等樹上間或亦有寄生、形類相似、氣性不同、服之反有毒ト云、本草滙ニ別樹生者殺人ト云リ、松上樅上ノ者ハ葉柞木葉ニ似テ狹細ニシテ厚ク色深シ、實ハ小豆ノ大ノ如シ、紅熟シテ味甘シ、櫧上ノ者ハヤシヤビシヤクト云、他ノ桑上ニモ生ズ、一名テンバイ、テンノムメ、テンリウバイ(加州) キムメ(土州) シヤウイタドリ(同上) 葉ハ木ヒヨドリジヤウゴノ葉ニ似テ厚シ、花ハ梅花ニ似タリ、實ハ蒼耳實ノ如シ、野州日光山ニ多シ、即

ハナノキ

〔倭訓栞中編二十〕はなのき〇中略　江州愛智郡花澤村に一種の木二株あり、大さ三圍ばかり、是を名けて花の木といふ、秋海棠に似たる花形なり、花色赤し、二月に開く、瑤珞樟也といへり、葉はけやきの如し、

寄生

〔倭名類聚抄木二十〕寄生　本草云、寄生一名寓生、〔寓亦寄也、音遇、和名夜止里木、一云保夜、〕

〔箋注倭名類聚抄十木〕按是名見空物語樓上卷歌源氏物語、本草和名云、和名久波乃岐乃保也、此節桑上字、故單云保夜也、或云保與、萬葉集大伴家持於越中國廳給饗諸郡司等宴歌、夜麻能許奴禮能保與等里天可射之都良久波、新撰字鏡、蔦寄生、保與、小雅頍弁、蔦與女蘿、傳、寄生也、爾雅、寓木宛童、郭注、寄生樹、一名蔦、中山經、龍山上多寓木、郭注、寄生也、正義引陸機疏云、寄生、葉似當廬子如覆盆子、赤黑甜美、本草云、桑上寄生、一名寄屑、一名寓木、一名宛童、陶注、生樹枝間、寄根在皮節之內、葉圓青赤厚澤易折、傍自生枝節、冬夏生、四月花白、五月實赤、大如小豆、蘇云、此多生槲櫸柳水楊楓等樹上、子黃大如小棗子、惟虢州有桑上者、子汁甚黏、核大似小豆、葉無陰陽、如細柳葉而厚、晚莖麁短、寄生實、九月始熟而黃、今稱五月實赤大如小豆、蓋陶未見也、蜀本注云、按諸樹多有寄生、莖葉並相似、葉如橘而厚軟、莖如槐而肥脆、圖經、葉似龍膽而厚闊、莖短似鷄脚作樹形、三月四月花黃赤色、六月七月結實黃綠色、如小豆、以汁稠黏者良也、郝懿行曰、枝葉通莖如樹上著氷、同幹異條、自成叢茂、陶注占斯引李當之云、是樟樹上寄生、樹大銜枝在肌肉、然則寄生之樹群木皆有、今驗楓柳櫟樗隨柯堪寓、奚必桑樟獨擅斯名矣、東方朔云、著樹爲寄生、明凡樹皆有也、時珍曰、寄生高者二三尺、其葉圓而微尖、厚而柔、面青而光澤、背淡紫而有茸、

〔爾雅註疏釋木九〕寓木宛童、註〔寄生樹、一名蔦、〕〔寓魚其切〕疏〔寓木一名宛童、郭云、寄生樹、一名蔦、詩小雅頍弁云、蔦與女蘿、陸機疏云、蔦一名寄生、葉似當廬、子如覆盆、赤黑甜美是也、〕

〔本草和名木十二〕桑上寄生、一名寄屑、一名寓木、〔楊玄操音遇〕一名宛童、一名蔦、一名桑檽、〔出陶景注〕一名附枝、〔出兼名苑〕

柧棱

結ブ、赤色ナリ、漢名未詳、俗ニ伽羅木ト云、是イチイナリト云、西土ニテ山白檀ト云、是椓ノ木ナルベシ、庭ニウフベシ、又楊弓ノ矢ニ作ル、櫧(カシ)ノ類ニイチイト云木アリ、カシノ木ニ相似タリ、實モカシニ似タリ、櫧ノ下ニ詳ニス、櫧ニ似タルイチイ、是ト同名異物ナリ、混同スベカラズ、イチイニ二種アル事ヲ知ルベシ、笏ヲサクト訓ゼシ事、其義未詳、櫟(イチヒ)ノ一名ヲ柞(サク)ト云、イチイノ木ニテ笏ヲ作ルユヘ、誤テ椓ヲ作ナリトシテ、サクト訓ゼシニヤ、櫟ハ横理アリテ笏トスベカラズトイヘドモ、堅緻ナル故、昔ハ櫟ニテモ笏ヲ作リシニヤ、イブカシ、鑿子木(イヌツゲ)ヲモ柞ト云、是ニテモ昔ハ笏ヲ作リシニヤ、櫟鑿子此二木共ニ異名ヲ柞ト云、若古此木ニテサクヲ作リシ故ニサクト云乎、

〔倭名類聚抄 二十木〕柧。棱。　唐韻云、柧棱(柧棱二音、和名曾。波。乃。木。)木也、又四方木也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕按、廣韻云、柧棱柧、又云、楞四方木也、棱上同、又威棱、又柧棱木也、其云棱柧、又云柧棱木也者、西都賦云、上柧棱而棲金爵、說文云柧棱殿堂最高之處也者是、其云四方木者、新木合方者、玄應音義引通俗文云、木四方爲棱、八棱爲柧、是也、源君連柧棱二字訓四方木、又以爲樹木名、並誤、

〔延喜式 十三大舍人〕凡正月上卯日供進御杖、○中略　其杖曾。波。木二束、比比良木棗毛保許桃梅各六束、(已上二株爲束)

〔夫木和歌抄 二十九そはの木〕そはの木　民部卿爲家

ありとても人にすさめぬそばの木のたゞかたそばにすごすべき哉

鳥ノ足

〔大和本草 十二花木〕鳥。ノ。足。　樹山中ニ生ズ、鳥ノ足ハ筑紫ノ方言也、四月開花、花白四出、微帶淡青色、花形頗方、其蘂如婦人乳頭、上有小粒、其葉兩々相對、其花出兩叉之間、又ソ。バ。ノ。木アリ、是ト一物二名乎、樹山中ニ生ズ、葉如櫻樹、四月開花似水仙、有臺群開、其白如雪、順和名抄ニ柧棱トアルハ是レナルカ、

農政全書云、孩兒拳頭（一名莢蒾）其木作小樹、葉似木槿而薄、又似杏葉頗大、薄澀枝葉間開黄花、結子似溲疏、兩兩切並、四四相對、共爲一攅、生則青、熟則赤色、味甘苦、

〔重修本草綱目啓蒙　二十四喬木〕莢蒾　ガマズミ　ズミ紀州　カメガラ伯州　ムシカリ尾州　カザ
メシ羽州　カマトウシ薩州　イタチノケ　タガヘシ　一名孩兒拳頭（救荒本草）　檕檰（通雅）　樸檰
（同上）

山野ニ多シ、小木ニシテ高サ丈許ニ過ズ、葉ハ形圓鋸齒アリ、深緑色ニシテ皺アリ、兩對ス、大サ二寸許、夏月枝梢ニ花ヲ開ク、小ニシテ五瓣白色、數百簇リテ傘ノ如シ、後實ヲ結ブ、大サ赤小豆（アヅキ）ノ如シ、秋後赤ク熟シテ美シ、木皮靭ニシテ折レ難シ、故ニ一名チソト云、チソハ薪ヲ縛スル藤蔓（フヂ）ノコトナリ、コノ木柔靭ニシテ其代リニ用ユベシ、因テ名ク、

増、釋名檕迷ハ繋迷ノ訛ナリ、

一種コチソト云アリ、樹葉共小ニシテ葉微シ長シ、花實ノ形相似タリ、又ヤマデマリアリ、本條ニ相似テ、其花白クシテ飛蝶狀ヲナス、漢名蝴蝶樹（典籍便覽）

山牡丹

〔和漢三才圖會　八十四灌木〕山牡丹（やまぼたん）　名義未考、正字未詳、

按、山牡丹高五七尺、枝婆娑葉不繁、其葉似桑葉而團、亦似粉團花葉而色淺、有鋸齒皺文、夏開小白花、略似南天花、秋結子爲簇、亦如南天子而房短、落葉子尚存、

柀

與曾曾女（ヨソゾメ）（正字未考）　木枝葉皆似山牡丹、而唯其子房小、於山牡丹耳、二物共關東多有、而畿内希有之、

〔倭名類聚抄　二十木〕柀　唐韻云、柀（音永、漢語抄云、佐久木、）　木可爲笏也、

〔大和本草　十二雜木〕柀（サク）　字彙音永、木可爲笏、和名抄曰、柀佐久木、可爲笏也、笏ヲシヤクト訓ズルハ、柀ノ木ヲ以テ作ル故ナルベシ、飛驒國位山ノ一位ノ木ニテ笏ヲ作ルト云、イチイノ木、葉ハ榧ニ似テ小ナリ、正月及五月挾ムベシ、活ク、一説ニ三四月サスベシ、春小白花ヲ開ク、枝葉ノ間ニ秋小實ヲ

珊瑚樹

コガノキ

莢蒾

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕椐 居音 靈壽木 扶老杖 和名閉美、俗云吾。禰。豆。又云藪。粉。團。花。又云以。保。太。

本綱、椐生山谷、其木似竹有節、圓長皮紫、長不過八九尺、圍三四寸、自然有合杖制、不須削理、作杖、令人延年益壽、詩疏云、椐卽樻也、節中腫、卽今靈壽木也、作杖及馬鞭、漢書云、孔光年老、賜靈壽杖者是也、

按、椐丹波山谷有之、高者七八尺、徑寸許、直上如竹、嫩木皮微紫色著葉處有節、其間二三寸、或四五寸、中心有纖孔、經年者堅實而堪爲杖、葉圓尖、有鋸齒皺文、似粉團花葉、三四月開小白花、攅生、亦似粉團花而小疎、以接粉團花枝、詩大雅云、其檉其椐、攘之剔之之椐者卽是也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕靈壽木 一名橫木 彙苑詳說 甘蔗梶 物理小識 盡酢子 同上子名

和產詳ナラズ、木ニコブ多シテ、自然ニ杖トナスベキ形ノ者ナリ、今禪刹ノ什物ニ舶來ノ杖アリ、多ハ刻テ製シタル者ト見ユ、コノ木物理小識ニハ蕉欖木也、凌冬不凋、葉如山薑、葉邊有細刺、枝有大刺ト云、通雅ニハ按今之天台靈壽杖、自然腫節乃藤也ト云、兩說ナリ、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕珊瑚樹(さんごじゅのき) 正字未詳

按、珊瑚樹易長、高一二丈、枝葉甚茂盛、爲庭院之飾、葉長四五寸、微似平地木葉、三四月細小花白色作簇、結子似冬青子而赤、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕古賀乃木(こがのき) 正字未詳

按、古賀木高一二丈、葉似珊瑚樹葉、而背色淡、開小花、淺柹色、結子略作簇、大如櫻桃子、正赤、其木甚堅硬、作鼓之譟檣之栓、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕莢蒾(けふめい) 擊迷 羿先 孩兒拳頭

本綱、莢蒾生山林中、其葉似木槿(ムクゲ)及楡柞、小樹、其子如疏溲(ヤマウツギ)、兩兩相對、而色赤、味甘、皮堪爲索、蓋此檀、楡之類也、

枝葉 甘苦 下氣消穀、煑汁和米作粥、飼小兒甚美、

子如椒粒大、兩々並生、熟則紅味甜、今按ウグヒスノ實兩々並生ス、他ノ果ニ異レリ、救荒本草ニイヘルニ皆ヨク合ヘリ、

〔百品考下〕吉利子樹　和名ヘウタンノキ○中略深山幽谷ニ生ズ、木ノ高サ五六尺、葉ハ桃葉ニ似テ先尖ル、横理左右ニ三四條アリ、其外ハスヂナク薄キ葉ナリ、兩對シテ生ズ、發芽ノトキ葉間ニ細莖ヲ出ス、長サ七八分、小花二輪ヅヽ其末ニ附ク、一節ニ二莖四花ナリ、花ハ五瓣ニシテ、徐長卿ノ花ニ似テ瓣細ク端尖レリ、緑色ニシテ心黄ナリ、後實ヲ結ブ、一莖ニ二粒駢生ス、一ハ大ニシテ一ハ小ナリ、形チ葫蘆ノ如シ、故ニヘウタン木ト云、熟シテ色紅中ニ圓子アリ、色黄ナリ、

繡毬花

〔大和本草十二花木〕繡毬花　花小ニ朶叢簇如毬、色白帶淺碧、一名粉團花、三才圖繪ニ八仙花ニ接故枝生トイヘリ、今案聚八仙ト同類ノ木也、故ツグベシ、春初好地ニ挾メバ活ク、花初テ開ク時白色、歷日色青シ、牡丹ト同時ニヒラク、瑯琊代醉瓊花ハ聚八仙ニ似タリ、聚八仙ヲ可接、瓊花ハ繡毬花ナルベシトイヘリ、

椐

〔倭名類聚抄二十木〕椐　玉篇云、椐音居、一音驅、漢語抄云、閉美、木腫節中爲杖也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕爾雅釋文引樊孫並曰、椐横腫節可作杖、毛詩大雅、其檉其椐、爾雅毛傳皆云、椐、横、郭璞注亦云、腫節可爲杖、北山經虢山其下多桐椐、郭云、椐横、木腫節中杖、顧氏蓋依之、陸璣曰、節中腫似扶老、卽今靈壽是也、今人以爲馬鞭及杖、漢書孔光傳云賜太師靈壽杖、孟康注、扶老杖也、顏師古注、木似竹有枝節、長不過八九尺、圍三四寸、自然有合杖制、不須削治也、本草拾遺云、圓長皮紫、江村氏如圭曰、丹波國有倍美乃岐、一名也末天万利、一名與爾徒、一名宇之乃比多比、葉似繡毬結赤實、木有節、皮色紫赤、有皺、土人以爲牛鼻桊、又爲杖、

〔類聚名義抄三木〕椐音居、一音路、ヘミ、コマツヽラ、ホフシ、又音枝、

那波氏兩存之也、按鴬實蓋依宇久比須乃岐乃美之名塡是字者、非漢名、其阿宇之智、以鴬實字音呼之也、或訛云阿宇須知、見多武峯物語、及和泉式部歌、貝原氏曰、救荒本草吉利子樹、科條高五六尺、葉似野桑葉而小、又似櫻桃葉亦小、枝葉間開五瓣小尖花、碧玉色、其心黃色、結子如椒粒大、兩々並生、熟則紅、味甜、是可充宇具比須、京畿謂宇。須。乃。岐。、伊勢謂之乞食具美、大田氏大州曰、宇具比須、當吉利子樹不穩、宜以救荒本草驢駝布袋充之、驢駝布袋、科條高四五尺、枝梗微帶赤黃色、葉似郁李子葉頗大而光、又似省沽油葉而尖頗齊、其葉對生、開花色白、結子如菉豆大、兩々並生、熟則色紅、味甜、今俗呼朝鮮具美、或呼蛇具美、

〔伊呂波字類抄 宇植物附殖物具〕鴬實（ウクヒスノキノミ）出漢語抄、未詳、

〔台記〕天養二年五月三日戊申、權大納言宗輔送鶯實。。云、自和泉國所尋取之、其色紅、大如恭石、其體圓、其核微小、有三命之甚美、其味甘焉、其味甚妙、其味甚美、足賞翫矣、

〔大和本草 十果木〕吉利子樹（ウクヒス）（ウスノキ）　和名ウグヒスト云、所々山林ニアリ、小木ナリ、源順和名抄十七、鴬實和名宇久比須乃岐乃美、又左府頼長之台記ニモ鴬實ノ事アリ、今按葉ハ山躑躅ニ似テ兩々相對ス、又子安ノ木ノ葉ニ似テウスシ、臘月ヨリ諸木ニ先ダチテ芽ヲ生ズ、正月ニ小花サキ、三月ニ實熟ス、ユスラノ如シテ紅ナリ、味甘シ、ユスラヨリ早クミノル、實モ兩々相對シテ、葉ノ莖ヨリ內ニアリ、葉ノ莖ノ本ヨリ實莖生ズ、異物ナリ、小兒コノンデ食フ無毒、ウグイスノ始テ啼時ニ此花モサク、故ニ名ヅケシニヤ、京畿ニテ臼ノ木ト云、其實ノ形臼ノ如ク上クボメリ、山中處々ニアリ、伊賀ニテハコシキグミト云、グミノ類ニハアラズ、大サハグミト同、本草櫻桃三月末熟ト云、蜀都賦ニ朱櫻春熟スト云ヘドモ、今按四月熟ス、吉利子ハ三月初ヨリ熟ス、木實三月ニミノルハ百果ノ先ガケナリ、秋ハ葉紅ニシテ落ツ、立花ノ下草ニスル物也、救荒本草曰、吉利子樹一名急蘑子科、荒野處有之、科條高五六尺、葉似野桑葉而小、又似櫻桃葉亦小、枝葉間開五瓣小尖花、碧玉色、其心黃色、結

接骨木　肝木　鸎實

疝塊、

〔重修本草綱目啓蒙 灌木 二十五〕接骨木 タ○ヅ○ノ○キ○　キ○タ○ヅ○　ニ○ハ○ト○コ○　ハ○ナ○ノ○キ○土州　ヤ○マ○ト○ウ○シ○ン○肥前　ハ○タ○コ○ノ○キ○加州　シ○ヤ○ク○ヲ○シ○ノ○キ○同上　セ○ン○キ○ヲ○シ○　コ○プ○ノ○キ○南部　ク○サ○ジ○キ○上總　一名纈骨樹 醫學正傳　野黄楊　章漆樹葉 共上同　扦扦活 本經逢原　芊芊活 外科百効全書　木英 英隆 下條

コノ木ノ葉花實皆蒴藋ニ似タリ、故ニ木タヅト云、蒴藋ニ接骨草ノ名アルハ、唐山ニテモ二物名通ゼリ、深山ニハ自生多シ、人家ニモ多ク栽ユ、高サ丈餘、枝條旁ニ茂リ、木ハ子ヂレテ𣏐木ノ如シ、冬ハ葉ナシ、春初嫩芽ノ中ニ蕾ヲ含モノ、形狀觀ベシ、採テ瓶花ニ供ス、既ニ發スルトキハ觀ニタラズ、葉ハ紫藤葉ニ似テ大ニシテ鋸齒アリ、對生ス、枝梢ニ花ヲ開ク、小ニシテ白ク、數百簇リテ傘ノ如シ、後實ヲ結ブ、小豆ノ如シ、秋冬紅熟シ、春ニ至リ猶樹ニ殘レリ、秋深テ葉枯レ落ツ、

〔大和本草 雜木 十二〕肝木カンボク　漢名未詳、葉ハ粗、木槿キンゲニ似テマタアリ、其本叢生ス、ウツギノ如シ、又一株高キモアリ、瘍醫コレヲ用ユ、或八手ノ木ヲ肝木ト云シ、接骨木ヲ肝木トス、皆アヤマリ也、

〔和漢三才圖會 灌木 八十四〕槭木かんぼく　正字未詳

按、槭木高五六尺、葉似蒲萄葉而尖、不皺、四月開花、毎莖七朶五瓣、小白花攅生、似紫陽花、秋結子、插枝活、

氣味甘苦、折傷續筋骨之功、與接骨木同、取莖葉煎服、

〔倭名類聚抄 菓 十七〕鸎實　漢語抄云、鸎實 俗云阿○宇○之○智○一云宇○久○比○須○乃○岐○乃○美○、今按、所出不詳、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕鸎實又見西宮記射禮儀、及台記天養三年條、伊勢廣本宇久比須乃岐乃美、作俗云阿宇之智、那波本兩訓並載、按伊呂波字類抄宇部阿部兩載、然類聚名義抄云、鸎實俗云阿宇之知、異本宇久比須乃美、則知本或作俗云阿宇之知、或作宇久比須乃岐乃美、蓋古本廣本不同、

接骨木

葉團長末尖、四月開二小白花一成レ簇可レ愛、俗云二卯之花一是也、結レ子、狀似二狗椒一、而青黲色不レ熟而自凋、
箱根空木　高丈許、皮白中空不二甚堅一、葉皺似二粉團花葉一、而團尖有二細齒一、深綠色、四月開レ花、單瓣狀如レ盞、
白與レ赤相摻成レ簇、花落而朶尙存、青色寸許似レ莢、箱根山多有レ之故名
唐空木　葉小二於山空木一、花亦不レ美、
三葉空木　葉似二山空木一、而開二四瓣白花一、攢簇每三葉抱レ梗對生、摘レ葉陰乾煎服能治二膈噎一、此樹人家稀、

〔重修本草綱目啓蒙 灌木 二十五〕楊櫨　タニウツギ　ヤマウツギ　サツキバナ越中　ダイハウノキ
同上　ヅクナシバ越後　サヲトメバナ能州　サヲトメウツギ雲州　アカウツギ播州　アカツゲ土州　ケタノキ仙臺　ヘイナイ丹後　ヘイナイウツギ同上　ミヤマカズミ紀州
アカラウジ駿州　ヒキダラ江州　一名牡荊正字通、同名アリ、
山足ニ多シ、小木ニシテ高サ數尺ニ過ギズ、葉ハ土牛膝葉ニ似テ厚ク、邊ニ細齒アリ、毛茸多シ、枝葉兩對ス、四月ニ花ヲ開ク因テ此モウノハンナ、或ハアカウノハナトモ云、江州越前ニテハ此モヒキダラト云、花ハ五瓣、本ハ筒子ニシテ、錦帶花ノ形ノ如ニシテ小ナリ、淺紫紅色、又深紅色ナル者白色ナル者アリ、皆六七寸ノ穗ヲナシテ葉間ニ出、後小莢ヲ結ブ、長サ六七分、熟シテ黑褐色、中ニ細子アリ、
增、一種ハコチウツギト呼モノアリ、高サ六七尺、中空ナリ、冬月落葉シテ春新葉ヲ生ズ、紫繡毬葉ニ似テ潤ク、淡綠色光アリ、邊ニ鋸齒アリ、四五月葉間ニ毬ヲナシテ花ヲ開ク、初メ開ク時ハ白色、翌日紅ニ變ジ、紅白相交リテ美ナリ、一花ノ形タニウツギヨリ大ナリ、漢名錦帶花秘傳花鏡

〔倭名類聚抄 木二十〕接骨木　本草云、接骨木、和名美夜都古木

〔和漢三才圖會 灌木 八十四〕接骨木　續骨木　木蒴藋　和名美夜都古木　俗云爾波止古〇中略
按、接骨木人家藩籬植レ之、三四月開二小白花一、攢生作レ朶、經レ年者結レ子、攢簇赤、俗用二此木一削二小杵一用レ殺二積聚

楊櫨

ノハナトヲシ土州　ハボロリ肥前　ヲランダグコ　一名竹膏三才圖繪　壽庭木群芳譜

木部伏牛花(ヘビノボラズ)ノ集解ノ虎刺ト同物ナリ、山ノ陰地ニ生ズル小木ナリ、高サ五七寸許、年久シキ者ハ二三尺ニ至ル者稀ニアリ、葉ハ枸杞ニ似テ短クシテ尖リアリ、色黒ヲ帶ブ、一葉ゴトニ長刺アリ、春葉間ニ花ヲ開ク、白クシテ長ク、丁香ノ形ノ如シ、後圓實ヲ結ブ、秋冬紅熟ス、春ニ至テ猶アリテ花實紅白相映ズ、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕蕤核　白桵桵與桵同　俗云不鳥止

本綱蕤核樹高五七尺叢生、葉細似狗杞而狹長、花白子附莖生、紫赤色大如五味子、其花實蕤蕤下垂、故謂之桵、莖多細刺、其子入藥用中仁、或合殼用、

按、倭名抄以桵訓太良者非也、太良者楤也、見于後

山谷中有木高三四尺、葉小圓長似黃楊葉、又似枸杞葉而厚、其子九月熟赤色、枝葉間刺多鳥不能來止、故俗呼曰鳥不止、恐此蕤核矣、

〔伊呂波字類抄宇植物附殖物具〕楊櫨(ウツキ)楊盧木イ本　溲疏同　溲䟽仁諝上音　巨骨　杜荆　空䟽已上四名ウツキ、見本草、

〔下學集下草木〕楊盧木(ウツギ)

〔書言字考節用集六生植〕楊櫨(ウツギ)　波流花(ウノハナ)奥義抄　兎花同史館茗話

〔和漢三才圖會八十四灌木〕楊櫨　空疏　和名宇豆木　疏通也、中空能通故名、云卯花者宇豆木花之略也、非寅卯之卯、〇中略

按楊櫨有數種、山空木(ウツキ)、箱根空木、唐空木(タウ)、三葉空木(ミツハ)、共山中有之、人植籬垣者、山空木箱空木也、皆中空、故名空虛木(ウツキ)、凡插之能活、但樹無刺、又無結赤子者、

山宇豆木　高丈許、皮白肌白、肌深青心正白、而中空甚堅、用爲榨槽之楗最佳、或匠人削之爲木釘、其

伏牛花
刺虎

〔萬葉集 譬喩歌七〕寄花
氣緒爾、念有吾乎、山治左能、花爾香君之、移奴良武、

〔新撰六帖 六〕山ちさ　　家良
あし引の山ちさのはな露かけてさける色これ我みはやさん

咲とだにたれかはしらむ白雲の晴せぬやまの山ちさの花　　爲家

〔重修本草綱目啓蒙 灌木 二十五〕伏牛花　ヘビノボラズ　バライズ 淡州　サワイバラ 江州　ホチス
イヽバラ　イヌノシリツキ 共同上　一名鳳油刺 藥性要略大全
水邊ニ生ズル小木ナリ、叢生ス、高サ三四尺、葉互生ス、形石榴葉ニ似テ長ク尖リ毛アリ、一葉ゴト
ニ三長刺アリ、細シテ甚鋭ナリ、若誤テ人ヲ傷ル時ハ肉腐ルト云フ、春新葉生ジテ後、寸許ノ小莖
ヲ出シ、數花開キ下垂ス、五瓣黄色、大サ二三分、瓶花ニ供ス、花戸ノ人誤テコガチエンジユト呼ブ、
後實ヲ結ブ、形赤小豆ノ如シ、熟シテ深紅色、秋深テ葉落ツ、其木皮赤黒色、皮ヲ去レバ深黄色ナリ、
一種野州日光山ノ中禪寺、及駿州富士山ニ生ズルモノハ、高サ丈餘、實モ亦大ナリ、
集解虎刺　證類本草ニ刺虎ニ作ル、綱目雜草ノ部モ同ジ、群芳譜秘傳花鏡ニハ皆虎刺ニ作ル、正
字通品字箋ニハ虎東ニ作ル、一名竹膏、三才圖會壽庭木、群芳譜俗名コトリトマラズ、テクサリイバラ、小
木ナリ、高サ六七寸、或ハ尺許、年久シキ者ハ稀ニ三尺ニ及ブ者アリ、數枝ヲ分チ葉互生ス、葉ハ圓
小ニシテ尖リ、大サ四五分許、葉ゴトニ一刺アリ、ソノ長サ葉ニ齊シ、冬ヲ經テ枯レズ、春月小長白
花ヲ開ク、形丁香ノ如ク、五瓣、後實ヲ結ブ、赤小豆ノ如シ、熟スレバ深紅色、春中花實共ニ存シテ美
ハシ、故ニ唐山ニハ多ク庭ニ栽ヘ賞ス、
〔重修本草綱目啓蒙 雜草 十六〕刺虎　コトリトマラズ　アリドウシ 江戸　チヅミバナ 駿州　チヅミ

賣子木 かはちさの木 和名万葉に山萵苣(チサ)とも、只ちさともよみ、常も、ちさといふ木歟、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕賣子木(ちさのき) 買子木 和名加波知佐乃木、俗云知左乃木、

本綱、賣子木生嶺南山谷中、木高五七尺、徑寸許、春生嫩枝條、葉似柿而尖、長一二寸、倶青緑色、枝稍淡紫色、四五月開碎花、百十枝圍攅作大朶、焦紅色、隨花便生子、如椒目、在花瓣中、黑而光潔、毎株花栽三五大朶爾、

氣味甘微鹹 治折傷血内溜、續絶補骨髓、止痛、枝葉子同功

按賣子木今謂知佐乃木者與此形狀大異、知佐乃木處處山中有、最丹波多之、高者二三丈、徑一二尺、皮粉青白色、老則淺褐色、中心白、其葉似梅嫌木(ムメモドキ)葉而尖、長二寸許、面青背淡、冬凋春生、三四月開花不碎而小白單瓣、似野梅花、而朶稍長垂、不作大朶、但毎二三攅生耳、結實狀如小蓮子、初青後黑、殼堅肉白色、山雀喜食之、其材稠堅堪作楊枝、又作傘之轆轤、伐樹則嫩蘖生於株、易長、採之作箕之緣、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕賣子木 サ〇ン〇ダ〇ン〇ク〇ハ〇 即山丹花ノ擧ニシテ通名ナリ 一名山丹 三才圖會 紅繡毬 滁州府志 紫翠英 野菜博錄 豪客 事物紺珠 山大丹 廣東新語 不夜花 珊瑚毬 珊瑚林 馬纓丹 大紅繡毬 共上同 壽錦 陽春縣志 映山紅 同上

和名鈔ニカハチサノキト訓ジ、多識編ニチシヤノキト訓ズ、皆非ナリ、コノ木和產ナク、暖國ノ產ナリ、今ハ琉球薩州ヨリ來リ世上ニ多シ、甚寒氣ヲ畏ル、故ニ冬土窖ニ藏メザレバ枯レ易シ、木ノ高サ三四尺枝葉對生ス、葉梔子葉ニ似テ淺綠色、初夏土窖ヨリ出セバ、枝梢ゴトニ花アリテ多ク簇ル、形丁香ノ如ク、細筒ノ上四瓣ニ分レ、深紅色、肥タル者ハ數十百簇ル、故ニ紅繡毬ノ名アリ、又赤黃色ナル者アリ、菜ノ部ニ載スル山丹ハヒメユリナリ、又單葉ノ牡丹モ、郭氏ガ種樹書ニ山丹ト云フ、皆同名ナリ、

賣子木

堅ニ稜アリテ高ク出、七稜ヨリ九稜ニ至ルヲ上トスト云、六稜ノ者多シ、生ハ綠色、熟スレバ黃ナリ、外皮薄シテ內ニ紅肉及白子アリ、採テ染家ノ用トシ、黃色ヲ染ム、藥用ニ入ルヽ者ハ山梔子ナリ、山中ノ自生ニシテ、葉實共ニ少ク、木ハ大ニシテ丈餘ニ至ル、一種四季花サク者アリ、一種千葉ノクチナシアリ、コクチナシ　カラクチナシ江戸トモ云、木矮小ニシテ一二尺ニ過ズ、葉最小ク、花ハ小ナラズシテ重瓣ナリ、多ハ實ヲ結バズ、稀ニ實ヲ結ブ者アリ、甚短小ナリ、是ヲ玉樓春八閩通志ト云、一名水梔花同上千葉梔子汝南圃史徽州梔子群芳譜矮樹梔子秘傳花鏡欲留春建陽縣志

釋名薝蔔　此名維摩經ニ出ヅ、西域ノ名花ナリ、此ニ巵子花ノ名トスルハ非ナリ、正字通ニ辨ズルコト詳ナリ、

〔大和本草十二花木〕水梔(コクチナシ)　三才圖會、園史ニ載ス、葉ハ梔ニ同ジ小ナリ、花小ニシテ千葉ナリ、香ヨシ、園史ニハ千葉梔子ト云、正月五月ニサセバヨク活ク、トリ木ニモスル、糞水ヲシバ〱ソヽゲバ盛ナリ、枝ヲ瓶ニサスニハ本ヲ打クダキ、鹽ヲ入レバ花色久シクシボマズト園史ニイヘリ、梅雨ノ中花多クヒラク、生熟共ニ食ス、此樹高二三尺ニスギズ、枝シゲク花多シ、梔花ハ六出ナリ、水梔ハ六出ニシテ三重ナリ、梔子ヲ生ズルコトマレナリ、

〔日本書紀二十九天武〕十年八月丙戌、遣多禰島使人等、貢多禰國圖、其國去京五千餘里、居筑紫南海中、切髮草裳、○中略支子(クチナシ)、莞子(カマ)、及種々海物等多、

〔延喜式三十三大膳〕七寺盂蘭盆供養料、東西寺、佐比寺、八坂寺、野寺、出雲寺、聖神寺、○中略支子一升、

〔新撰字鏡木〕賣子木河○知○左○

〔倭名類聚抄二十木〕賣子木　本草云、賣子木、和名賀波知佐乃木

〔伊呂波字類抄加植物附植物具〕賣子木カハチサノ木見本草

〔和字正濫抄四〕中下のは

フベシ、花早クサキ實ナル、愛スベシ、又民用ニ利アリ、和名クチナシト名ヅケシハ、他果ハカラアル物皆口ヲヒラク、梔子ハ、カラアレドモ口ナシ、故ニ名ヅク、家園及里巷ニウフル者ハ藥ニ勿レ用、只染色ニ用ユ、藥ニハ在レ山者可レ用、故山梔子ト云、黑炒ニシテ末シ酒ニテ服、熱心痛及鼻衄ヲ止ム、又千葉ノ小梔アリ、木梔子ト云、花木ニ著ハス、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕山梔子

按梔子葉似二茶葉一花單者結レ子、出二於播州三木郡一者良、和州山州次レ之、千葉者名二玉樓春一而不レ結レ子、葉似二番椒葉一而厚甚光澤、或抽二一莖一生二大葉一似二茶葉一此一本而異二葉者也、植二庭院一人要均刈不レ長也、福建矮梔之種矣、

〔本草辨疑 四 木〕梔子

藥家ニ色ヨシ、山巵子藥山巵子ト云二品アリ、色吉ト云ハ新ニ色不レ損シテ、染家ニ用ル上品ナリ、藥山梔子ト云フハ、古ク色損ジテ染家ニ不レ用、下品ノ者ヲ服藥ニ充ツ、是ノミニ非ズ、紅花モ色ヨキ新ヲ染家ニ用ヒ、蛀ヒテ色惡ヲ藥ニ用ユ、二ツ共ニ染家ニ用ルハ價高ク、色損ジタルハ價下キ故ナリ、身ヲカザル者ニハ擇テ上品ヲ用ヒ、治レ病延年ノ爲ニスル者ニハ可レ擇捨モノヲ採用ユ、花麗ヲ重ジ身命ヲ輕ンズルコト、眞ニ愚ノ甚哉、

新シテ色不レ黑、七稜ヨリ九稜ニ至ル者ヲ可レ用、七稜九稜ノ者甚希也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕巵子　クチナシ 和名抄　一名染梔子花 群芳譜　大巵子 本草原始　色梔 同上
肥梔 本經逢原　黃梔花 寧波府志　玉甌 事物紺珠　白玉花 名花譜　伏巵子 本草彙言　山巵子一名黃香影子 秘傳花鏡
建梔 本經逢原　楮桃 品字箋　芝止 採取月令　枝子 保赤全書　山枝仁 幼科發揮

人家ニ多ク栽テ花ヲ賞シ、又籬ニ作ル、高サ丈許、葉形長シテ末潤ク、厚硬深綠色、枝葉對生ス、初夏花ヲ開ク、白色六瓣ニシテ厚ク香氣アリ、內ニ黃蘂アリ、後實ヲ結ブ、形椎子ノ如ニシテ長大ナリ、

梔子

〔新撰字鏡 木〕梔（之移反、平、染也、久○知○奈○志○、）　支子（久知奈之）

〔本草和名 十三木〕枝子、一名木丹、一名越桃、（本條）一名慈母、（出神仙服餌方）和名久知奈之、

〔倭名類聚抄 十四染色具〕梔子　唐韻云、梔（音支）子木實可染黃色者也、今按醫家書等用支子二字、（和名久知奈之）

〔箋注倭名類聚抄 六染色具〕按今所傳漢唐諸醫書皆作梔子、而醫心方引之皆作支子、蓋彼所據皇國古傳本與源君所見同、又史漢司馬相如傳注、謝靈運山居賦自注、太平御覽引吳普本草、並作支子、天武十年紀、新撰字鏡、大膳職式目、皆同、○中略　本草和名、新撰字鏡同訓、廣韻無色者也三字、說文、梔黃木可染者、今本說文梔作梔譌、陶弘景曰、以七稜者爲良、經霜乃取之、今皆入染用、圖經云、梔子木高七八尺、葉似李而厚硬、又似樗蒲子、二三月生白花、花皆六出、甚芬香、俗說、卽西域詹匐也、夏秋結實如訶子狀、生靑熟黃、中仁深紅、時珍曰、巵子葉如兎耳、厚而深綠、春榮秋瘁、入夏開花、大如酒盃、白瓣黃蘂、隨卽結實、薄皮細子有鬚、充久知奈之爲允、

〔類聚名義抄 三木〕梔梔（音支　クチナシ）

〔日本釋名 下木〕梔（クチナシ）　木の實のから有て、其内に子をつゝむものは、熟して後、必口を開く、くり、ゑゐ、ざくろ、つばきなど皆ゑかり、此物から有て、熟しても口ひらかず、故に名づく、

〔安齋隨筆 前編八〕梔字（クチナシ）ハジト訓　日本紀ニ天梔弓ヲアマノハジユミト訓ゼリ、梔字クチナシ也、ハジトヨムハ正訓ニアラズ、義訓也、○中略　又和名抄染色具ニ、梔字和名久知奈之（クチナシ）トアリ、梔モ櫨モ黃色ヲ染ル具ナルユヘ、ハヂ弓ニ梔ノ字ヲ借リ用ルナルベシ、舍人親王ノ比、ハジニ櫨ノ字ヲ用ル事イマダ詳カナラザリシ故、黃染ノ義ヲ取テ、梔ノ字ヲ借用セラレシニヤ、梔木ハ弓材ニ非ズ、櫨ハ弓材也、今モ弓ノ側（ソバ）木ニ用之、古ハ丸木弓也、

〔大和本草 十一藥木〕梔　木艸此花皆六出、甚芬香、史記貨殖傳云、巵茜千樹、與千戶侯等、言獲利博也、枝ヲ切テ陰地ニサセバヨク活ク、正月及梅雨ノ時ヨシ、又實ヲマクベシ、長ジヤスシ、コレヲ並木ニウ

檍

一種、楸大葉如桐葉而黑、山中人謂之櫝楸、卽郭所謂虎梓、

○按ズルニ、爾須三毛知乃木ハ女貞ナランヽ宜シク女貞條ヲ參看スベシ、

〔倭名類聚抄 木二十〕檍 說文云、檍(音億、日本紀私記云、阿波木、今案又櫄木一名也、見爾雅注、)梓之屬也、

〔箋注倭名類聚抄 木十〕按、爾雅不載櫄有注字爲是、郭注爾雅、杻檍一名土橿、按西山經、英山多杻橿、郭注云々、又爲以杻橿不同、與此所言異、所引蓋舊注、抑源君所見郭注脫土字、又按一名土橿者、訓杻之檍、非梓屬之檍、○中略 原書木部云、檍杶也、按爾雅云、杻檍、則杶當作杻、蓋篆書形似而訛也、原書又云、櫄樟屬、大者可爲棺槨、小者可爲弓材、二字不同、此當作櫄、而櫄省隸作慧苡、濇作檍、億意並作億、故櫄亦作檍、遂與杻檍字混無別、又考工記云、弓人爲弓、凡取幹之道、柘爲上、檍次之、據說文、當是櫄字、然鄭注引爾雅曰、杻檍、毛詩正義引陸璣疏云、杻或謂之檍、材可爲弓弩幹也、則以杻檍梓屬櫄爲一、段玉裁曰、杻檍卽說文櫄字、經典皆作檍、說文別有檍字者、蓋淺人謂不可闕檍字而增之、非許氏之原文、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕檍(音億) 萬年樹 和名阿波木

說文云、檍梓之屬、二月花白子似杏、葉亦似杏而尖白色、皮正赤、其理多曲少直、材可爲弓弩幹、

〔古事記 上〕伊邪那岐大神詔、○中略 故吾者爲御身之禊而、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐(此三字以音)原而禊祓也、

〔古事記傳 六〕阿波岐原(ハヽ岐を濁るべし、濟はわろし、またヾと添て訓もわろし、)書紀に檍原とかきて、檍此云阿波岐とあり、和名抄に、說文云、檍梓之屬也、日本紀私記云阿波木、今按又櫄木一名也、見爾雅注とあれば、此樹は今世に阿乎木と云物にはあらじ、なほよく尋ぬべし、(檍古今集なる卜部兼直が歌に、あをきがはらとあり、されどこれも古本には、あはきがはらとぞある、)さて是も地名にはあらで、松原檜原柳原作原などの類にて、たゞ此木の多く生たる地を云るなるべし、

梗

本綱、楸卽梓之木赤者也、有行列、莖幹直聳可愛、至上垂條如線、謂之楸線、其木濕時脆、燥則堅良材也、宜作棋枰、其葉大而早脫、故謂之楸、唐時立秋日、京師賣楸葉、婦女兒童剪花戴之、取秋意也、擣楸葉傅瘡腫、煮湯洗膿血、冬取乾葉用之、

農政全書云、楸山谷中多有之、甚高大、其木可作琴瑟、葉類梧桐葉而薄、小葉稍作三角尖叉、開白花味甘、

〔重修本草綱目啓蒙喬木二十四〕楸　ヒ○サ○ギ○和名鈔　キ○モ○ミ○ヂ○古歌　キ○サ○ヽ○ギ○　雷○電○ギ○リ○京　ハ○ブ○テ○コ○ブ○ラ○　カ○ブ○テ○コ○ブ○ラ○　カ○ミ○ナ○リ○サ○ヽ○ゲ○越後　カ○ハ○ラ○サ○ヽ○ゲ○濃州　カ○ハ○ラ○ギ○リ○常州　カ○ハ○ラ○ヒ○サ○ギ○筑前　カ○ハ○ラ○ク○サ○ギ○ナ○石見　カ○ハ○ラ○カ○シ○ハ○勢州　セ○ン○ダ○ン○ギ○リ○南部　ゴ○シ○ン○カ○ウ○肥前　ダ○ラ○ス○ケ○ノ○キ○讃州　將○軍○ボ○ク○筑後　一名線群芳譜

楸又檟ニ作ル、通雅ニ出ヅ、又萩ニ作ル、同上楸ハ梓ト形狀異ナリ、樹直聳シテ上ニ枝條ヲ分ツ、枝葉共ニ兩對ス、春新葉ヲ生ズル時紫黑色、莖モ同色、長ズレバ綠色ニ變ズ、形桐葉ニ似テ、五尖ニシテ鋸齒ナシ、大サ六七寸ヨリ一尺ニ至ル、夏月枝梢ニ穗ヲナシ花ヲ開ク、穗長サ一尺許、花ハ胡麻花ノ如ク、淺黃色ニシテ紫點アリ、後圓莢ヲ結ブ、濶サ二分餘、長サ一尺餘、多ク下垂シテ裙帶豆(ジウハチサヽゲ)ノ如シ、故ニキサヽゲト呼ブ、秋ニ至リ葉落テ、莢ナヲ樹ニアリ、春中皮自ラ裂テ子出ヅ、子ニ絮アリ、絡石(ナイカヅラ)絮ノ如シ、風ニ隨テ飛ビ落テ生ジ易シ、

埤、キサヽギヲ楸ニ充ツル誤ナリ、楸ハアカメガシハナリ、詳ニ梓ノ條ニ見ヘタリ、

〔倭名類聚抄木二十〕梗　四聲字苑云、梗音臾、漢語抄云、須○三○毛○知○乃○木○、爾○鼠梓木也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕按毛詩、北山有梗、爾雅云、梗鼠梓、說文、梗鼠梓木、四聲字苑蓋本於此、爾雅注、郭璞云、楸屬也、今江東有虎梓、南山有梗、陸疏、梗梓屬、今人謂之苦楸、今永昌又謂鼠梓、漢人謂之梗、陸機疏云、其樹葉木理如楸、山楸之異者、今人謂之苦椒、郝懿行云、陸云、山楸之異者、異於榣山榎也、今

兒童剪花載之、取秋意也といへるが如し、

〔萬葉集六雜歌〕山部宿禰赤人作歌二首并短歌〇中略

烏玉之、夜乃深去者、久木生留、淸河原爾、知鳥數鳴、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

浪間從、所見小島之、濱久木、久成奴、君爾不相四手、

〔萬葉集略解十一下〕ひさ木は和名抄楸比佐木と有て、赤めがしはといふもの也といへり、されどそれは桐梓などの類にて、潮風に堪て島などに生べくもあらぬ物也、同じ名にて濱久木は異木にや、後に濱びさしとせるは誤也、上は久しくといはん序のみ、

〔夫木和歌抄二十九楸〕千五百番歌合　従二位家隆卿

ひさ木おふるさほの河原に立千鳥空さへきよき月になく也

〔大和本草十二雜木〕楸樹　救荒本艸曰、樹甚高大、其木可作琴瑟、葉類梧桐葉而薄小、葉稍作三角尖叉開白花、味甘、篤信曰、楸樹山林村落處々有之、ヒサキト云、又カシハトモ云、其葉ハ桐葉ニ似、又梓ニ似タリ、苗及葉ノ莖葉ノ筋赤シ、故ニ赤目柏ト云、葉ノ末三處尖角アリ、皆本艸ニ云ガ如シ、梓ノ實ハ豇豆ノ如ク長莢アリ、楸ノ實ハ長莢ナシ、

〔大和本草十一圖木〕ケラノ木　桐ニ似タル喬木也、アカメガシハノ葉ニ似テ少厚シ、又葉ハ薯蕷ニ似テ末尖リ、又梧桐ニ似タリ、大サモ同ジ、葉ノ莖紅シ、實ハ南天燭ヨリモ大ナリ、冬熟シテ赤シ、一フサニミノル事、南天燭ヨリ多クシテ、其連房大ニ長シ、實ノ內ニ芥子ホドナル黑キ細子多シ、桐ノ類ナリ、又梓ニモ似タリ、本草梓ノ集解曰、又一種鼠梓、一名楰、亦楸屬也、ケラノ木モ此類ナルベシ、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕楸音秋　楸　和名比佐木

抄ノヒサギ是ナリ、楸ノ條ニモ楸卽梓之赤者ト云ヘリ、然ル時ハ時珍ノ說ハ分明ニシテ、蘭山翁ノ說分明ナラザルナリ、秘傳花鏡ニ梓ヲ說クコト尤明ナリ、曰、梓一名木王、林中有梓樹、諸木皆内拱、葉似梧桐、差小而無歧、春開紫白花、如帽極、其爛慢生莢、細如箸、長尺許、冬底葉落莢猶在樹ト云ヘリ、故ニ和刻ノ花鏡ニハキサヽギト訓ズ、然ル時ハ大和本草ノ誤ニハ非ズ、又埤雅ニ、梓爲百木長、故呼梓爲木王、羅願ガ爾雅翼ニ、室屋之間有此木、則餘木皆不震ト云文ニ小異アレドモ、釋名ニモコレヲ引ケリ、震トハ雷ノ落ルコトナリ、左傳僖公十五年ノ杜註ニ、震者雷電擊之ト云是ナリ、國俗キサヽギヲライデンギリ、又カミナリサヽゲト呼テ、庭際ニ栽テ雷ノ難ヲ避ルト云ニ暗合ス、余、謙○梯斷然トシテ梓ヲキサヽギトシ、楸ヲアカメガシハトス、後學舊說ニ泥ムベカラズ、集解、椅ハイヽギリナリ、桐ノ類ニシテ高ク聳ユ、葉ノ形アカメガシハノ葉ニ似テ微シ圓ク、末尖ル、葉ノ莖赤シ、夏月枝梢ニ穗ニ成テ黃白色ノ花ヲ生ズ、花謝シテ後圓實ヲ結ブ、南燭ノ實ヨリ大ニシテ連房長ク下垂ス、秋月落葉ノ後熟シテ深紅色、冬ニ至テ猶樹上ニ在リ甚ダ觀美ナリ、實ノ内ニ芥子ノ大サナル黑子アリ、大和本草ニケラノ木ト云是ナリ、

〔倭名類聚抄二十木〕楸　唐韻云、楸〈音秋、漢語抄云、比佐木、〉木名也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕爾雅、槐小葉曰榎、大而皵楸、郭云、槐當爲楸、老乃皮麁皵者爲楸、○中略　廣韻同、說文、楸、梓也、

〔爾雅註疏九釋木〕梠山榎、註、今之山楸、〈梠音呂、榎音賈、〉疏、〈李巡云、山榎一名梠、郭云、今之山楸、秦風云、終南何有、有條有梅、陸璣疏云、梠今山楸也、亦如下田楸耳、皮葉白色亦白、材理好、宜爲車板、能濕、又可爲棺木、宜陽共北山多有之也、〉

〔倭訓栞中編二十一比〕ひさぎ　和名抄に楸をよめり、万葉集に久木と書り、久しきに堪る義なりといへり、俗にあかめかしはといふ、赤芽柏の義なり、伊勢の俗あかべの木といへり、禁中にて七夕に用ひさせらるゝをもて、御菜葉とも菜盛柏ともいふ、李時珍說に、唐の立秋日、京師賣楸葉、婦女

按、詩鄘風定之方中椅桐梓漆云々、椅卽楸也、正字通椅條詳辨之、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕梓 アヅサ和名抄 アカメガシハ京 アカヾシハ ゴサイバ播州 アカゴサイバ筑前 シハギ阿州 カハラシバ同州 カハラガシ豫州 テウシノキ江州 アカベ同上 メコロビ若州 カヅ播州 ゴシヤバ濃州白川 アカヽヂ同上加茂 カイバ長州 タヅハ泉州 サイモリバ越中 カハラガシハ土州

梓又梓ニ作ル、說文ニ出ヅ、山野ニ自生多シ、大ナル者ハ高サ二丈餘、葉ハ三尖ニシテ鋸齒アリ、大サ三四寸、莖赤ク互生ス、其嫩芽甚赤シテ藜芽ノ如シ、漸ク長ズレバ漸ク綠色ニ變ズ、故ニアカメガシハト呼ブ、夏月枝梢ゴトニ黃白色ノ花簇リ、穗ヲナシテ開ク、後實ヲ結ブ、大サ二三分、外ニ軟刺多シ、秋ニ至テ熟シ自ラ開ク、內ニ黑子アリ、椒目ノ如シ、霜後葉枯ル、梓楸ノ名古ヨリ混淆ス、時珍ノ說モ分明ナラズ、秘傳花鏡ニ梓ノ形狀ヲ書スルモ楸ノコトナリ、故ニ大和本草ニモ梓ヲキサヽギトス、皆非ナリ、通志略ニ、梓與楸自異、生子不生角ト云、是梓ハ圓實ヲ生ジ、長筴ヲ生ゼザルヲ云、コノ文甚明ナリ、宜シク從フベシ、

凡ソ序文ニ上梓ト云ハ上木ノ意ナリ、梓ニ木王ノ一名アル故ニ、木工ヲ梓人ト云、棺ヲ梓官ト云ノ例ナリ、唐山ニテハ梨棗ヲ板材トス、故ニ上梨棗ト云、梨ト棗ト二物ナリ、梨棗ト熟スル時ハ椇ケン椇ナリ、

增、蘭山翁通志略ノ說ニ據テ、梓ヲアカメガシハトシ、楸ヲキサヽギトス、然レドモ齊民要術ニハ、白色有角者爲梓ト云ヘリ、角ハ莢ナリ、是レキサヽギヲ指ス、卽チ正說ナリ、又時珍ノ說ヲ分明ナラズトシ、且秘傳花鏡ニ梓ノ形狀ヲ書スルモ、楸ノコトナリ、故ニ大和本草ニ、梓ヲキサヽギトス、皆非ナリト云ハ大ナル誤ナリ、已ニ時珍ノ說ニ、木理白者爲梓、赤者爲楸ト云、ソノ白者爲梓ト云フハ、卽キサヽギニシテ、和名抄ノアヅサ是ナリ、又赤者爲楸ト云ハ、卽アカメガシハニシテ、和名

五出ニシテ、剪夏羅ノ花ノ如シ、大サ一寸餘、內ハ赭黃色、外ハ淡黃色蘂ノ色モ同ジ、後小莢ヲ結ブ、長サ二寸許ニシテ扁シ、冬ニ至テ葉枯落ツ、

〔剪花翁傳前編三六月開花〕凌霄花 花の色外葩黃中葩赤し、形萱艸に似て倘少し、開花六月下旬より七月中旬迄花あり、方地土肥えらばず、分株春秋兩彼岸よし、

〔倭名類聚抄木二十〕梓 孫愐切韻云、梓(音子、和名阿豆佐、)木名、楸之屬也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕按毛詩、椅桐梓漆、爾雅、椅、梓、說文、梓楸也、楸梓也、互相訓、詩正義引舍人曰、梓一名椅、郭曰、卽楸、然毛傳、椅梓屬、陸璣曰、楸之疏理白色而生子者爲梓、梓實桐皮曰椅、齊民要術云楸椅二木相類、白色有角者名爲梓、似楸有角者名爲角楸、或名子楸、黃色無子者爲柳楸、南山經、虖勺之山多梓枏、注梓山楸也、

〔和漢三才圖會喬木八十三〕梓(音子) 木王 實名豫章(南楨亦名豫章、與此同名、) 和名阿豆佐

本綱、梓宮寺人家園亭亦多植之、爲百木長、屋室有此木、則餘材皆不震、其爲木王可知、其木似桐而葉小、花紫、生角、其角細長如箸、其長近尺、冬後葉落而角猶在樹、其實名豫章、其花葉飼猪能肥大、

有三種、木理白者爲梓、赤者爲楸、梓之美文者爲椅、小者爲榎、

按、梓桐之屬、其花深黃色、古者彫此木爲書版、故有繡梓鋟梓之名、倭版多用櫻木、

〔本草一家言三〕梓楸 梓和名阿都佐、又名阿加米加之和、或御栄葉、或御志耶葉、伊賀鄉名銚子木者是也、楸和名比佐木、又名木豇豆、奧州仙臺鄉名雷電桐者是也、按本草梓楸相混、解者不一、今依稻若水所辨、拆而分別焉、梓有木王之稱、以爲木之上等、猶我邦貴檜爲良材、故周禮梓人、我邦檜工、異域同談、一雙之美材也、其木膚理細膩、白色、秋後生子不結莢、楸歲時記、南方俗、兒女子七月栽楸葉以祝秋至、楸結莢、條直如線、故有楸線之稱、楸之結莢尤可據焉、梓無莢、故未聞有稱梓線者、楸木理粗、色黃也、而本草以皮之精粗分梓楸、或以結莢者爲梓、皆誤、不深考之過也、

紫葳

桐の花むらさきにさきたるはなをおかしきを、葉のひろごりさまうたてあれども、又こと木どもとひとしういふべきにあらず、もろこしにことごとしき名つきたる鳥のこれにしもすむらん心ことなり、ましてことにつくりてさまざまなるねの出くるなどおかしとは、よのつねにいふべくやはある、いみじうこうはめでたけれ、

〔本草和名 十三木〕紫葳（仁諝音威）一名陵苕（仁諝音條）一名茇華（仁諝音補末反）一名陵霄、一名苕、一名陵時、（已上三名出蘇敬注）一名武威、一名瞿麥、一名陵居腹、一名鬼目、一名及華、（已上五名出釋藥性）一名瞿麥根（出雜要訣）華名藁（出釋藥）和名乃。宇。世。宇。一名末。加。也。岐。

〔倭名類聚抄 二十木〕陵苕　本草云、紫葳、一名陵苕、（葳音威、苕音條、和名末加夜木、一云乃宇世宇）蘇敬注云、一名陵霄、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕證類本草引云、此卽陵霄花、又云、又名凌霄、本草和名云、一名凌霄、出蘇敬注、按李時珍云、附木而上、高數丈、故云凌霄、則凌卽凌越之義、呂氏春秋論威篇云、雖江河之險凌之、注、凌越也、東京賦云、凌天地、薛注、凌升也、禮記樂記篇云、五者皆亂、迭相陵、正義云、陵越也、後漢書周黄徐姜申屠傳注云、陵升也、西京賦云、陵重巘、薛注、陵猶升也、是凌陵並訓越也升也、則作陵作凌兩通、然說文云、陵大阜也、凌夂出也、夌越也、三字不同、則越升之字作夌、作陵作凌、並假借也、

〔多識編 二蔓草〕紫葳、和名乃宇世牟、按乃宇世牟加豆羅、

〔重修本草綱目啓蒙 十四蔓草〕紫葳　ノ。セ。ウ。（和名抄）マ。カ。ヤ。キ。（同上）ノ。ウ。ゼ。ン。カ。ヅ。ラ。一名陵霄（通志時）

寄生花（名物法言）　靈霄花（本經逢原）　傍墻花（典籍便覽）　紫藤（松江府志）　凌苕木（藥性奇方）　勢客（事物紺珠）　菱霄花（外科）

（百效全書）　菱華（群芳譜）

人家ニ栽ユ、山野ニモ自生アリ、藤蔓繁茂シ、木ニ纏ヒ高ク登ル、故ニ凌霄ト云フ、年久キモノハ蔓大ニシテ紫藤ノ如シ、多ク木ヲ枯ス、春新葉ヲ生ジ兩對ス、形チ紫藤葉ノ如ニシテ、粗キ鋸齒アリ、深綠色、六七月一尺許ノ枝ヲ出シ、兩對シテ花ヲ開ク、形牽牛花ノ如シ、本ハ筒子ニシテ末ニ圓瓣

生じ、其葉郎墜、一說に此木を以て琴箏を造に、常に鐘磬の聲を聞者を用れば、其音淸麗なりと云ふ、又此木を伐れば、氣條を生じ生長し易し、故に和訓義解に云、きりは切也と、扦插して活す、伐て數日を經るとも枯死せずして新葉を生ず、又其子壁土中に在ること、數十歲を經るとも必生理を失はずして、壁土水氣を得る時は卽生ず、其性歲時を知る者なり、秘傳花鏡云、淸明後桐始華、桐不華歲必大寒と、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四喬木〕桐　ヒトハグサ古歌　キリ　同木和方書　一名花桐埤雅　白鐵樹事物紺珠　榮椰同上　小義淸異錄

コノ木種生ハ、長ズルコト遲シ、切ル時ハ早ク長ズ、故ニキリト名ク、白花桐、紫花桐ノ別アリ、共ニ花ヲ先ニシ葉ヲ後ニス、集解ニ、冬結似子者ト云ハ、冬ヨリ蕾ノ出ルヲ云、二三月ニ至リ花ヲ開ク、形胡麻ノ花ノ如シテ大ニ、長サ一寸餘、長穗ヲナス、色ニ紫白ノ別アリ、花後實ヲ結ブ、黃蜀葵トロヽ實ノ如ニシテ、小扁ニシテ尖アリ、長サ一寸餘、內ニ扁薄小子多シ、下シテ生ジ易シ、花衰ル時新葉ヲ生ズ、大ナル者ハ一尺餘、兩對ス、木ハ用テ箱案ノ類ニ作ル、俗說ニ、女子ヲ生ルニ桐ヲ栽ユレバ、嫁時ニハ大木トナリ、器物ニ作ルベシト云、桐ヲ栽ユルコトヲ忌マズ、唐山ニテハ栽ユルコトヲ忌ム、事林廣記俗云桐大則不利主、屢驗ト云、又廣東新語棟ノ條ニ、村落間凡生女必多植之、以爲嫁時器物ト云、本邦ニテハ、棟ハ刑ニ用ユル故、家ニ栽ユルコトヲ忌ム、是和漢ノ異ナリ、

〔增訂豆州志稿 七土產〕桐　增、各地ヨリ產出ス、白桐紫桐ノ二種アリ、共ニ器具ヲ作ル良材ナリ、

〔林政八書〕山奉行所公事帳 ○中略

一桐木之實熟之時分、撿者、山奉行、筆者相合、員數不洩樣取占め帳當座引合、九月中限、銀藏へ寄せ、代銀差替可賣上事、

〔枕草子 三〕木の花は

白桐

は是を見て、此御弟子様は、枸杞のあへもの好物と見えたり、あへものは澤山に侍り、汁平はのこし給ふてよし、あへものめし給へ、いざかへてまゐらせんとて、つぼのかはりせんとするを、小僧はいなみて、よろしく候といひて辭退するを、老婆は無理につぼを取て、何御遠慮に及ばぬ事とて、あへもの山の如く盛て出しければ、小僧はしく〳〵泣出しけり、和尚咎て何故に泣ぞといふに、枸杞のあへものはきらひにて候へ共、膳につきたるものは何もかも殘さぬやうにたべよと、平日和尚様にしかられ候故、いやなものからさきにたべかゝり候所、今またこのやうによそはれ候といひて泣けるとかや、

〔大和本草十一園木〕白桐　此木切レバ早ク長ズ、故ニキリト云、桐ノ類多シ、梧桐ハ靑ギリ也、白桐ハツチノ桐ナリ、世ニ白桐ヲ多ク用テ器トス、良材ナリ、花淡紫アリ、白キアリ、實ハ桃ニ似テ內ニ薄片多シ、是ヲウフレバ生ズ、時珍云、其材輕虛、色白而有綺文、故俗謂之白桐、女子ノ初生ニ桐ノ子ヲウフレバ、嫁スル時其裝具ノ櫃材トナル、子ヲウヱ枝ヲサスベシ、早ク長ジヤスシ、凡サシ木ハ實ウヘニシカズ、荏桐ハ油ギリ也、海桐ハハリアリ、ハウダラト云、梓モ楸モ皆桐ノ類也、又犬ドリト云モノアリ、其木理朴ノ木ノ如シ、コレ白楊ナリ、是モ器ニ作ルベシ、赬桐ハヒギリ也、花紅ナリ、ケラノ木アリ、實紅ナリ、是皆一類ナリ、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕桐同昔　白桐　黃桐　泡桐　椅桐　榮桐　白花桐　岐利乃木〇中略

按桐木作箏及箱櫃、輕而不蛀、以爲上品、性不黏堅、故不堪爲屋柱而已、最易長、有幼女家可栽之、當嫁之頃、則宜作櫃板云云、凡桐子種者宜剪、孽早茂長、

〔草木性譜人〕桐

處々に多く植、水遠き地に宜し、春花を先にし葉を後にす、其花筒をなし、紫色五瓣蕚茶褐色細毛有て哆羅絨の如し、其葉濶大にして尺餘に及び、綠色毛茸有て粘滑、莖中虛なり、秋に至り蓓蕾を

以地上美瓜比在下之賢者、與朱本義其取義也甚相戾、故其解杞亦殊矣、然則程子所指之杞、卽孟子云杞柳栝棬之杞、而今杞柳是也、和名瘤柳者也、又按、詩四月章、山有蕨薇、濕有杞桋、朱注云、杞枸檵也、是乃今之菜部枸杞也、謂之杞三種者、宜從處而致辨矣、(圭錄)

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕枸杞地骨皮 ヌミグスリ(和名鈔) クコ(同上) 苗一名地仙苗(救荒本草) 地輔 杔盧(共同上) 鎭番草(種杏仙方) 三青蔓(清異錄) 換骨菜(同上) 甜甜芽(通雅) 苦菜(同上) 甜菜頭(事物紺珠) 枸杞菜(典籍便覽) 象柴(抱朴子) 純盧(同上) 普丸(本草精義) 子一名青精子(事物異名) 三尸鎭(藥譜) 石蚊蚋(保命歌括) 靈麗(名物法言) 赤寶(本草滙)・甜菜子(救荒本草)・明眼草子(寧波府志) 雪壓珊瑚(遵生八牋) 根皮一名苦彌(金光明經) 杞根(救荒本草) 却暑(事物異名) 却老枝(典籍便覽) 仙杖(本草滙) 伏塵甑(種杏仙方) 地骨寇(食物本草) 地精(醫學入門) 金山茄根(南寧府志)、二種アリ、一種唐グコハ葉大ニシテ刺少シ、實圓ニシテ大ナリ、紅熟シテ味甘シ、又微長ニシテ尖ル者アリ、並ニ眞ノ枸杞ナリ、一種オニグコ、一名オランダグコ、アマクサグコ、ヤブトウガラシ、(阿州)アマゴシヤウ(筑後) 今人家ニ多ク栽ユ、野ニ自生多シ、葉小ニシテ木ニ刺多シ、實ハ小ク長シテ味苦シ、藥舖ニ貯賣ル者皆コノ品ナリ、是枸棘ニシテ枸杞ニ非ズ、地骨皮泉州堺ヨリ多ク出ス、僞物ナシ、

〔佐渡志 五 物產〕枸杞　通名クコ
刺多キヲ以テ籬トス、又五加アリ、和名ウコギ、方言ニハチヅミサシトイフ、

〔海西漫錄 初編 二〕枸杞和物(クコノアヘモノ)
あるいきすぎたる老婆、寺の和尙をよびて時をす丶めけるに、汁はよせ豆腐にきくらげ、平は椎茸長芋ゆばなどならん、つぼは枸杞のあへものなりけるに、和尙につきて來れる弟子十一二なりけるが、汁平には手をつけずして、先つぼなるあへものうち喰、半にもなりぬと思ふころ、老婆

小刺多ク、大則刺少、倭枸杞亦如此、時珍說ニ、地ニヨリテ其葉厚シ、甘州者其子圓ト云、是ハ唐枸杞ニヨク合ヘリ、或曰、倭枸杞ハ瘦疏ナルベシト云ヘドモ、右ノ本草ノ說ニ據レバ、唐ノ枸杞ニモ二種アリ、倭枸杞モ亦眞枸杞ナルベシ、皆可用、

〔本草綱目譯義三十六灌木〕枸杞地骨皮　通名也　クコト云ハ品類多シ、市中ニアル者ハ、野ニ自然ノハ鬼クコト云モノ也、ヲランダグコ、アマクサクコトモ、是ハ刺多ク葉互生也、葉形イボタニ似テ長シ、初生ノ葉ハ食用ニシ、茶ノ代ニモスル、夏以後葉間ニ三四分ノトウガラシノ花ノ如形也、五瓣紫赤色茶後青巾實巾二分長三四分ホド熟シテ赤クナル、ワレバトウガラシノ如キ實多クアリ、此ヲトリ藥店ニ枸杞ト云賣、味苦シ、下品也、總テ枸杞ノ和名ヌミグスリト和名抄ニアリ、今ハ通名也、ヤブトウガラシ、阿州ヲニクコハ枸棘也、眞ノクコハ唐種計也、漢名甘州枸泥是也、トウクコト云也、形同シテ葉大ク刺少シ、實大ニシテ圓シ、ユスラムメノ如シ、赤シテ見事也、甘キ味アリ、苦ミナシ、又實長ジテ先細クナルアリ、長サ六分計ノトウガラシノ如クナルアリ、皆眞ノ枸杞也、是ヲ藥用ニスルガヨシ、總テ此類ハ茂リ易シ、此根ノ皮ヲ使フ也、卽地骨皮是ハ藥店ニアルハ和產計也、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕枸杞〔略〕〇中　和名沼美久須里　俗云久古〔略〕〇中

按、枸杞〔苟起二音、俗云久古〕、地骨皮、豫州今治之產良、阿州次之、

〔本草一家言三〕杞三種　按詩經所詠稱杞者三矣、蓋名同而物各異也、詩小雅南山有杞、北山有李、朱子集注杞樹如樗、一名狗骨此以杞爲冬青之屬也、易始九五用杞包瓜、本義云、杞大高堅實之木云々、蓋以爲、九五高大堅實之陽、而防六二如瓜易潰之陰之義、而不言高大堅實、是何等木、而予詳味其義卽爲高大堅實、乃狗骨樹而與詩小雅所詠者一物也、彰々矣、又按姤九五程傳杞木高大而葉大、用以包瓜云々、予謂以其葉包瓜者誤矣、蓋編其高大稍作箱篋以包瓜、猶今之但州豐岡柳樞之製歟、程子

〔倭名類聚抄十二木〕枸杞　本草云、枸杞（苟起二音）根下潤黄泉、其精靈多爲犬子、或爲小兒、（和名沼美久須利、俗音久古、）抱朴子云、一名杞櫨、一名却老、（杞櫨二音託盧）

〔箋注倭名類聚抄十木〕按、本草和名引蔣孝苑注、全同、蓋源君誤引、本草和名利作爾、〇中略原書僊藥篇云、象柴一名純盧、是也、或名僊人杖、或云西王母杖、或名天精、或名却老、或名地骨、或名枸杞也、本草和名枸杞條云、一名天精、一名杶盧、一名却老、已上三名出抱朴子、此云一名、與本草和名合、蓋源君從彼引之、而托櫨原書作純盧、本草和名作杶盧、然類聚名義抄作托、與此合、按集韻云、杶櫨、木名、音託、證類本草載崔禹錫引抱朴子、亦作托盧、則作純作杶並誤、表記注、芑枸檵也、（釋文枸本作苟）左傳昭十二年注、杞世所謂枸杞也、（釋文枸本作狗、）爾雅、杞枸檵、郭注、今枸杞也、說文、杞枸杞也、又云、檵枸杞也、毛詩小雅四牡云、集于苞杞、傳、杞枸檵也、正義引義疏云、杞其樹如樗、一名苦杞、春生可作羹茹、微苦、大觀本草引陸機云、一名苦杞、一名地骨、春生、作羹茹、微苦、其莖似莓、子秋熟正赤、圖經云、春生苗、葉如石榴葉、而軟薄堪食、俗呼爲甜菜、其莖幹高三五尺、作叢、六月七月生小紅紫花、隨便結紅實、形微長如棗核、

〔類聚名義抄三木〕杞櫨（二音、託盧、枸杞、一名下ヘニシ、）　椅杞（苟紀二音、ヌミクスリ、俗云クコ、下又似上、又枸杞）

〔大和本草十一藥木〕枸杞　倭漢二種アリ、二種共ニ用ユベシ、唐枸杞最味厚、子ヲ藥ニ用ユルニヨシ、サシテモ子ヲウエテモヨク生ズ、韮ノ如ク連子ウフベシ、ウヘテ末長時刈取コト、韮ヲカルガ如クスベシ、如此スレバ春ヨリ秋マデ其苗タヘズ、葉ヲ生ニテモユビキテホシテモ食スベシ、和漢共ニ味ヨシ、茶ニカヘテ用ユ、本草ニ作飮代茶ト云ヘリ、地ニヨリテ苗長ジテハ虫食ス、早ク刈テ食ベシ、三才圖繪ニ好事ノ家ニ盆ニウエテ、几案ノ間ノ玩トスト云、其實紅ニシテ愛スベシ、其子ヲ肥地ニウヘ、其枝ヲ正八九月ニサス、根皮ヲ地骨皮ト云、凡枸杞子及葉其性佳、輕身益氣明眼目、常服スベシ、明目ノ功スグレタリ、本草時珍發明可考、最良藥ナリ、本草綱目附方金髓膏枸杞酒方可見、頌曰、枸杞六七月生小紅紫花、隨便結紅實、形微長如棗核ト云ハ倭枸杞ナリ、刺アリ、宗奭曰、此物

枸杞

〔大和本草 雜木 十二〕山茶科(リヤウボフ/ハタツマリ) 救荒本艸ニノセタリ、和名レウボフト云、藻鹽草ニ令法(リヤウボフ)ハハタツマリト云木ノ事也、古歌多シトイヘリ、其葉ヨド川ツヽジニ似テ、葉ノサキトガル、木モ枝モヨド川ツヽジニ似テ高シ、凶年ニ飢民葉ヲトリ蒸テ食ス、京都ニモ飢歲ニハウル、又貧民ハ平時モ煮テ、飯ノ上ニヲキ、蒸テ飯ニマゼテ食ス味ヨシ、其葉六七葉枝ノサキニ一所ニ圓ニ連生スル事ツヽジノ如シ、フ。シ。ク。ロ。ト云小木アリ、其葉ヲ取テ凶年ニ食ス、山茶科ト一類ニハ非ズ、山茶科救荒本艸曰、科條高四五尺、枝梗灰白色、葉似皂莢葉而團、又似槐葉亦團、四五葉攢生一處、葉甚稠密、味苦、採嫩葉煠熟、水淘洗淨、油鹽調食、亦可蒸曬乾做茶煮飮、

〔和漢三才圖會 灌木 八十四〕山茶科 俗云利也宇布。名義未詳、○中略

按、山茶科、俗云料蒲是乎、生山野中、丹波多有之、高五七尺、木皮灰白色、密理、其葉似茶及櫻嫩葉而柔、有細鋸齒、五七葉攢生枝耑、形如單瓣菊花樣、二三月小白花開於葉間、不結實、四月摘嫩葉煠食、或和飯、或和豆醬、味甘、能治瀉痢、補脾胃、蓋出處與葉形有小異耳、

〔新撰六帖 六〕はたつもり　家良

里人やわか葉つむらんはたつもりとやまも今は春めきにけり

爲家

忘られぬにかさなる山のはたつもりはたつもり行つみぞかなしき

〔新撰字鏡 草〕枸杞 久。己。

〔本草和名 木 十二〕枸杞 蔣孝琬注云、根下洞黃、其精靈多爲犬子、或爲小兒、一名杞根、一名地骨、一名苟忌、楊玄操音起 一名地輔、一名羊乳、一名却暑、一名仙人杖、一名西王母杖、已上本條 一名天精、一名𣏌盧、一名却老、已上三名出抱朴子 一名家紫、一名却景、一名天淸、已上四名出太淸經 一名𣜌、一名地勦、一名監木、一名地忌、已上出兼名苑 一名都吾 華也 一名去丹 子也、已上出神仙服餌方 和名奴。美。久。須。禰。、

の景天（本草綱目）其莖を採て日乾し、年を經てこれを栽れば復活す、馬齒莧（同上）は採て檐間に懸、日を經て枯萎せず、此二品莖に水銀を含が故なり、

〔重修本草綱目啓蒙（二十四喬木）〕桐（略）○中

集解、頳桐、トウギリ。。。。ヒギリ。。。此ノ木ハ、暖地ノ產ナル故、甚寒ヲ恐ル、因テ冬ハ窖ニ入ル、春ニ至リ、木ヲ數段ニ切リ栽ルモ生ジ易シ、高サ一二尺、葉兩對ス、形圓ニシテ末尖リ、邊ニ鋸齒アリ、大ナルモノハ一尺許リ、夏月莖梢ニ長穗ヲ出シ、枝ヲ分チ、多ク花ヲ開ク、臭梧桐花ニ似テ、瓣蕚共ニ朱ノ如シ、秋ニ至ルマデ長ク開ク、故ニ百日紅（癸辛雜識同名多シ）ト云フ、

〔剪花翁傳（前編三五月開花）〕唐桐　花極緋、英攢簇て房をなせり、開花五月より飛咲して漸々咲出し、七月末迄あり、育方隨意なり、盆栽にして可也、

〔地錦抄附錄三〕延寶年中渡品々

唐桐（今云緋桐）

〔重修本草綱目啓蒙（十三隰草）〕常山（略）○中

集解、頌曰、海州出者葉似楸葉、是海。州。常。山。ニシテクサギナリ、コノ木人家ニ多ク自生ス、高サ丈餘、枝葉繁茂ス、葉ハ圓ニシテ尖リ桐葉ノ如ニシテ小ナリ、兩對ス、斷レバ甚臭氣アリ、夏秋ノ間枝頂ニ花アリ、形頳桐ノ花ニ異ナラズ、瓣ハ五ツニシテ白色、蕚ハ赤色、後ニ圓實ヲ結ブ、大サ南燭子ノ如シ、生ハ綠色、熟ハ碧色、用テ縹ヲ染ベシ、一名臭梧桐（群芳譜）百日紅（同上）豫州ニテクジウト云、仙臺ニテトウノキト云、石州ニテクサギナト云、享保年中ニ蜀漆ノ種渡ル、本邦ノクサギニ異ナラズ、故ニ蜀漆ニハ海州常山ノ苗ヲ用ユベシ、

〔倭訓栞（中編十九波）〕は。た。つ。も。り。　令法をいふ、木の名也といへり、はたつもりとも云、遠州にぎ。や。う。ぶ。、播磨にれ。う。ぼ。といふ、民間葉をむして食の助とす、

頳桐

云、荊、彊也、

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕牡荊　黃荊　小荊　楚　和名奈末江乃木○中略

按、牡荊本朝古者有之今無、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五灌木〕牡荊　ニンジンボク○○○○　一名土欒 通雅　木欒 夢溪筆談　鐵荊條 盛京通志　人

精 外臺祕要實ノ名　金鐘花 藥性要略大全七葉ノ者

モト和產ナシ、享保年中漢種渡リテヨリ世上ニ多シ、其木叢生ス、高サ丈餘、枝葉兩對ス、春新葉ヲ生ズ、三葉一帶後五葉トナリ、參葉ノ形ノ如シ、故ニニンジンボクト名ク、一葉ノ形長ク尖リ鋸齒アリ、香薷葉ニ似タリ、淡綠色、初出ノ者ハ微紫色ヲ帶ブ、新枝ハ方ニシテ綠色、舊枝ハ圓ニシテ褐色ナリ、折レバ中ニ方心アリテ衆木ニ異ナリ、夏ニ入テ枝梢ゴトニ穗ヲナシ花ヲ著ク、枝多シテ長サ尺ニ近シ、花ハヒキヲコシノ花ニ似テウスフヂ色、後實ヲ結ブ、胡麻ノ大サニシテ圓ニ微長ス、熟スレバ黑色、方書ニ謂ユル黃荊子是ナリ、秋後葉枯レ落、春秋枝ヲ折テ扦插スレバ活シ易シ、コノ枝ヲ尺餘ノ長サニ切リ、兩磚上ニ架シ中間火ヲ以燒ク時ハ、兩頭ヨリ汁出ヲ器ヲ以テ承採ルヲ荊瀝ト云、竹瀝ト効ヲ同ス、熱多氣虛、不能食者用竹瀝、寒多氣實、能食者用荊瀝ト發明ニ見ヘタリ、

〔大和本草 十二花木〕頳桐 ヒギリ　倭俗唐桐トモ云、本艸綱目海桐ノ集解ノ末ニ載タリ、高二三尺ニスギズ、夏紅花ヲ開ク、花繁多ニシテサカリ久シ、美ニシテ可愛、寒氣ヲオソル、冬初ヨリオヲヒヲ厚クスベシ、或秋ヨリ木幹ヲ切ルモ可也、來春苗生ジ、其年ノ夏花サク、

〔草木性譜 人〕桐○中略

又頳桐 たうぎり 桐解集 は南國の產にして寒を畏る、多堀出し凍氣を避べし、春其木を伐て植れば即根を生ず、夏朱赤色の花を開く、形狀附錄に圖す、凡桐の一類甚だ強き者なり、此餘性の強き者あり、草木

牡荊

圓シ、熟スレバ胡椒ノ如シ、堅ヘタノ裏ニ白キ處アリ、實ハ黑ミ、ワレバ香ツヨシ、蒔テハヘル也、今藥ニスルハ此也、舶來ナシ、此支ヲ線香マゼテ使也、此葉モトリ抹香ニスル也、夫故濱シキミト名ル也、日本ニ製スル下品ノ線香ハシモクレンノ皮也、シキミノ皮ト蔓荊ノ皮トデ造タル物也、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕蔓荊子　和名波末波非　匍於濱之義乎

本綱、蔓荊子、生水濱、高四五尺、對節生枝葉、類小楝(アフチ)、其枝小弱如蔓、至夏盛茂、〇中略

按、蔓荊子、形狀如上說、但花黃色單瓣、頗似木槿花、與謂作穗者不同、出於紀州者良、播州之產次之、

〔本草一家言 三〕葛荊子　佐渡州方言濱香(ハマゴウ)、土人採葉搗爲末、代抹香用、諸海濱砂地多產之、引蔓繁茂、葉形如胡椒粒、至輕虛、皮上有粉、攢簇一處而生、本草或云、葉似楝葉者、比欒華以其實相似誤充之耳、非蔓荊子也、隨錄

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕蔓荊　ハマハヒ和名鈔　ハマシキミ　ハマカヅラ　ハマゴウ佐渡　ハマツバキ同上　ホウ土州　ホウノキ同上　ハマボウ藝州、同名アリ、　ハマハギ雲州　一名陸績丸輟耕錄　僧法實鄕藥本草

海濱湖邊沙磧中ニ多ク叢生ス、遠ク望バ水楊(カハヤナギ)ノ如シ、高サ四五尺、其本ハ地上ニ延テ藤蔓ノ如シ、土ニ近ヅケバ皆鬚根ヲ生ズ、枝葉兩對ス、葉ノ形圓ニシテ大サ一二寸、面深綠色背ハ白色、風ヲ得テ翻白シ觀ツベク、芬香自ラ至ル、夏月枝梢ゴトニ莖ヲ抽スルコト五寸許、枝ヲ分チ花ヲ開ク、大サ五六分、本ハ筒瓣ニシテ、末ハ五出、深碧色美シ、後圓實ヲ結ブ、胡椒ヨリ大ナリ、熟スレバ黑色下ニ五瓣ノ蒂アリ白色、コノ子皮至テ厚シ、內ニ白仁アリ、是藥用ノ蔓荊子ナリ、此木及葉香氣多シ、故ニ葉ヲ末シテ香トス、又木皮ノ末ヲ莽草(シキミ)葉ノ末、木蘭ノ皮ノ末ニ和シテ、下等ノ線香ニ作ル、

〔倭名類聚抄 二十 木〕荊　唐韻云、荊音京、漢語抄、奈末江乃木、木名也、

〔箋注倭名類聚抄 十 木〕廣韻同、王念孫曰、楚莖堅彊、故謂之荊、荊彊古聲相近、禹貢正義引李巡爾雅注

〔倭名類聚抄木二十〕蔓荊　蘇敬本草注云、蔓荊一名小荊、和名波末波非

〔箋注倭名類聚抄木十〕原書上品蔓荊實條云、小荊實亦等、蘇注云、此荊子、今人呼爲牡荊子者是也、其蔓荊子大、故呼牡荊子爲小荊子、實亦等者、其功用與蔓荊同也、是蘇敬辨蔓荊小荊不同也、故本草和名、蔓荊實條、題小荊、引蘇敬注曰、此牡荊也、則蔓荊小荊不同明矣、疑源君見輔仁連書蔓荊實小荊、誤以爲一名、又以小荊下引蘇敬、再誤爲小荊出蘇注也並非是、〇中略王念孫曰、陶注云、小荊即應是牡荊、牡荊子大於蔓荊子、而反呼爲小荊、恐或以樹形爲言、陶之此說亦未敢決、而以牡荊子大於蔓荊、則得之目驗、非虛言也、蘇敬乃謂、子小而作樹者爲牡荊、以合小荊爲牡荊之說、子大而蔓生者爲蔓荊、以合蔓荊之名、其後本草諸家皆承用之、按藝文類聚引廣志云、赤莖大實者名曰牡荊、陶注牡荊亦云、蔓荊子殊細、正如子麻小、色靑黃、牡荊子如烏豆大、正圓黑、又陶氏登眞隱決云、天監三年、上將合神仙飯、奉勅論牡荊、白荊花白多子、子麁大、歷々疎生、不過三兩、此皆牡荊子、大於蔓荊之明證、蘇敬以爲牡荊子小、蔓荊子大者、舛矣、且蔓荊倘是蔓生則本草當入草部、今乃列之木部上品、明非蔓生之物、本草木部有蜀椒、又有蔓椒、豈得謂蔓椒蔓生哉、蘇敬以蔓生者爲蔓荊、尤爲乖謬也、牡荊蔓荊皆樹生類甚相近、故牡荊亦得稱蔓荊也、牡荊實苦而華獨𦧲、登眞隱決云、蜂多採牡荊、牡荊汁冷而𦧲、又云、餘荊被燒則煙火氣、若牡荊體慢汁實、煙火不入其裏、蓋其性之堅固、有如此者、又可爲履、藝文類聚引廣州記云、白荊堪爲履、是也、

〔本草綱目譯義灌木三十六〕蔓荊　ハマハイ古名ハマカヅラ〇中略

京ニウヘテモ育ツ也、小木高サ五尺計叢生ス、年久キハ丈餘ニモナル、本ノ木ハ地ヲハウテアリ冬葉ナク春葉ヲ生ズ、枝ハ稜アリ、葉兩對丸シテ一寸ホドノ大サ表黑ミアリ、裏白毛少アリ香氣多シ、風吹バ香四方ヘ散ズルモノ也、夏秋ノ間新枝杪ニ花ツク美也、穗ニナリ、穗ニ枝アリ、花ハ牡荊ノ花ノ大ナル也、本ハツヽザキニシテ五ツ分レ、中ヨリシベ出ル瑠璃色也、花後實生ズ、二分餘

玉椿

チ。ズ。ミ。チ。ヤ。ウ。長州　テ。ラ。ツ。バ。キ。播州　ヤ。ブ。ツ。バ。キ。東國　タ。マ。ツ。バ。キ。石見　カ。ハ。ツ。バ。キ。雲州　イ。ヌ。ツ。バ。キ。泉州　タ。ニ。ワ。タ。シ。肥前名アリ同　フ。ユ。ナ。リ。讃州　一名女楨品彙字

庭際ニ多ク栽ヘ或ハ籬トス、葉ハ楊桐葉ニ似テ兩對ス、厚クシテ光アリ、冬凋マズ、夏月枝梢ゴトニ四五寸ノ穗ヲ出シ、枝ヲ分チ白花ヲ開ク、大サ三分許リ、後圓實ヲ結ブ、鼠ノ矢ノ形ノ如シ、熟シテ色黒シ、故ニ俗ニ子ヅミノフン京ト云、雲州ニテハ子ズミノコマクラト云フ、

〔紀伊續風土記物産六上〕女貞本草、和名抄比女都波木、俗に鼠ノ木といふ、古名のものに、前條牟婁郡にてウ。マ。ト。シ。、本草和名醫心方並に美也都古岐、一名多都乃岐と訓ず、此説是なれども、太豆乃木の訓を、女貞の木の下へ入るは誤なり、又和名抄に接骨木を美夜都古比木と訓ず、此二名は接骨木の和名なり、又新撰字鏡に女貞を比女豆波木、又造木とあるは誤なり、又和名抄に接骨木を美夜都古とあるも、二物を混ぜり、〇中略各郡山野に多し、

〔伊豆海島風土記下産物〕ク。サ。ダ。ミ。　女貞ナルカ、夏花咲キ、實ハ九月ニ熟ス、此實ヲ絞ルニ清油タル、忽チ白蠟トナル、夫食急ナルトキハ、麥粉ニ交テ糧トス、常ニハ國エ出シテ穀ト交易ス、又コノ木ノ皮ヲ煎ジテ、島人ノ衣、魚網ナドヲ染ルニ赤色トナリ、最益アル木也、

〔夫木和歌抄二十九ねずもち〕ねずもち　民部卿爲家

かた山のをどろにまじるねずもちのひく人ありとたのむべきよか

〔大和本草十二雜木〕檀　葉似枸杞而大ナリ薄シ、秋冬ヲツ、花ハマユミノ如シ、木長大、是マユミノ別種カ、若水云、葉似黒槐而紅花、

〔地錦抄五〕玉つばき　葉もちのごとくにて丸し、色よし、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕冬青　凍青　俗云末左木　言正青木略、俗用柾字又云、玉。豆。波。木。〇中略

按、冬青其葉冬亦正青、光澤團長而不尖有細鋸齒、夏開小白花、秋結子、生青熟紅、自裂中有白子、插枝易活、堪爲藩籬、長出翹楚、伐揃能茂盛、相傳云、用葉燒灰、酒服治金瘡及竹刺入肉者、但不知食其嫩芽、或用葉染緋色也、然乎否、

ものとぞ見えける、さらば或人の説の如くにやあるらむ、モチとは其木の茂盛りなるをいひしなるべし、花の繁くさきぬるを、もりさくなど萬葉集の歌によみて、又茂の字讀てモチともいふ也、藻鹽草に黐木と玄るして、モチキノキと讀みし歌を引きしは、此樹の事と見えたり、その黐の木としるせしは、此木の皮をもて黏黐となすをいふなるべし、黏黐をモチといふも、樹の名によれるにや、ネズミモチといふものは、倭名抄には四聲字苑を引て、楰鼠梓木也、漢語抄にネズミモチといふと見えたり、古と今と名は同じけれど、さしいふ所異なるも知るべからず、藻鹽草に楰といふものゝ如きは未詳なりと、若水稻子は云ひたりき、

〔倭訓栞中編二十一比〕ひめつばき　新撰字鏡、和名抄に、女貞を訓せり、今てらつばき、又やぶつばき、又ねづみもちの木ともいへり、

〔大和本草十一灌木〕女貞(ネズミモチ)　一名冬青云、女貞、橍(アハキ)ナヽミノ木、此三品皆冬青樹ト云、三品同名異物ニテ各別ノ物ナリ、本草綱目及李時珍食物本草註ヲ考ヘ見ルベシ、本草綱目灌木部、女貞一名冬青、別有冬青、與此同名、今案方書所用冬青、皆女貞ネズミモチ也、世ニ多シ、其木ニ蟲蠟アリ、イボタト云、蠟ニ作ル、白蠟ト云、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕女貞　貞木　冬青　蠟樹　和名太豆乃木　又云比女豆波木　俗云鼠乃久曾、又云狗都波木　又云鼠黐

按女貞木葉似海石榴而無鋸齒、故名姫海石榴、其子團長、初靑熟正黑似鼠屎、鶺鴒喜食之、但葉長不過二寸、其文理不出于端、與他葉異也、而本草曰長四五寸者、和漢之異然乎、又造成白蠟者、未知然乎否、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕女貞　ネズミモチノキ和名抄　ネズモチノキ古歌　ネズミモチ京　ネズミノモチ越前　ネズミノキ備中備前　ネズミギ豫州　ネゾギ阿州　ネズツチヤウ防州

○按ズルニ、美也都古岐、一名多都乃岐ハ、接骨木ノ和名ナリ、宜シク接骨木條ヲ參看スベシ、

〔倭名類聚抄木二十〕女貞　拾遺本草云、女貞一名冬靑、和名太豆乃木、楊氏漢語抄云、比女都波木、冬月靑翠、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十木〕證類本草上品引陳藏器載女貞、又於女貞條中載冬靑、蓋以女貞冬靑相類並擧也、源君以爲一名誤也、○中略本草和名云、女貞、和名美也都古岐、一名多都乃岐、又云、接骨木、和名美也都古岐、蓋輔仁不能詳、併二木同訓也、源君斷訓接骨木爲美夜都古岐、故單訓女貞爲太豆乃岐、然今俗呼接骨木爲木多豆、呼蒴藋爲草多豆、則太豆乃岐、卽美夜都古岐之別名、源君以美也都古岐、太豆乃岐、分爲二木者誤、○中略證類本草引、故以名之、作故名冬靑、郭注東山經楨木云、女貞也、葉冬不凋、

〔伊呂波字類抄太植物附植物體〕女楨貞、タツノキ、ヒメツバキ、女貞、タツノキ、ニハウコギ、

〔塵囊抄六〕ツラ〳〵椿トハ何ゾ　萬葉ニハ列居椿ト書タレバ、生並タル椿ヲ云ニヤ、又本草女貞ト書テ、和名タツノ木、又ハツラツバキトヨメリ、若是ヲ指テ熱ノ義ニソエテ重子詞ニハ申セルニヤ、歌ニハ讀侍リ、

川浪ソ列居椿ツラ〳〵ニ見レトモアカズコセノ春ノハ

コセノ山ツラ〳〵椿ツラ〳〵ニヲモフナワカセコセノ春ノヲ

此女貞ヲ押返テ熱ノ詞ニソフル歟、椿ハ赤キ花ナレバ、並木ノ花開タランハアカラ目モセズ、倩見ツベキニヤ、何レ共定メ難ク侍リ、

〔東雅樹竹十六〕女貞タツノキ○中略　タツノキ、ヒメツバキ等の名をもて呼ぶ物ありもやすらむ、いまだ聞かず、或人の說に、卽今モチノキといふもの、冬靑木也、與女貞同名、又名凍靑といひ、亦一說に女貞はチズミモチといふ是也といふなり、救荒本草に、凍靑樹高丈許、樹如狗骨樹、而極茂盛、葉微窄而頭頗圓不尖、五月開細白花、結子如豆大、紅色などいふ如きは、卽今此にしてモチノキといふ

〔古事記傳二十七〕和名抄に、黄芩、和名比々良木、楊氏漢語抄云、杠谷樹、一名巴戟天、和名上同と見え、（黄芩を當たるは心得ず）字鏡に、巴戟天、比々良木、杠谷樹上同とあり、（或人云、比々良木は、漢名枸骨なり、一名を刪穀と云、此字音を取て、杠谷とは云り、と云り、）

〔續日本紀二文武〕大寶二年正月丙子、造宮職獻杠谷樹長八尋（俗曰比比良木）、四月丁未、從七位下秦忌寸廣庭獻杠谷樹八尋桙根、遣使者奉于伊勢大神宮、

〔夫木和歌抄二十九ひいら木〕ひいら木　民部卿爲家

世中は數ならずともひいら木の色にいでゝはいはじとぞ思ふ

〔延喜式十三大舍人〕凡正月上卯日供進御杖、（中略）頭進奏曰、大舍人寮申正月（能）上卯日（能）御杖仕奉（氏）進（止）申（久）申、勅曰置之、（眞波登申給）以上共稱唯、隨次相轉置案上、畢即退出、其杖曾波木二束、比比良木、棗、毛保許、桃、梅各六束、（已上二株爲束）燒椿十六束、皮椿四束、黑木八束、（已上四株爲束）中宮、比比良木、棗、毛保許、桃、梅各二束、燒椿各五束、（但奉儀見東宮式）

〔紀伊續風土記物產六上〕枸骨（本草、續日本紀比々良木、俗にヒラキ、即雄ヒラキ、）雌比良木（メヒラキ）（葉邊尖刺なきものをいふ）雄比良木（ヲヒラキ）（牟婁郡にてウシホツカウといふ、前條の雌ヒラギと同名にして、枸骨の屬にあらず、葉細長にして薄く邊に刺多し、然れども枸骨葉より軟なり、）右三種、各郡山中に多し、

〔歲時故實大概十二月〕一節分（立春の節の前日なり）今宵門戶に鰯のかしらと柊の枝を插て、邪氣を防ぐの表事とし、（中略）往古は鰯のかしらにも限らずと見えて、貫之が土佐日記に、小家の門の端出繩、鯔のかしら柊などゝ有、但シ柊さす事は、いかなる據にや考へ得ず、

○按ズルニ、節分ノ時、黄芩ノ枝ヲ門戶ニ插ス事ハ、歲時部節分篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

女貞

〔新撰字鏡女〕女貞實（比女豆波木、又造木、）

〔本草和名十二木〕女貞、一名冬生、（出釋藥）一名索盧、（出太清經）一名山節、一名靑員、（已上出兼名苑）和名美也都古岐、一名多都乃岐、

ニ。ノ。メ。ツ。キ。　オ。ニ。シ。バ。防州　チ。ズ。ミ。サ。シ。上總　一名枸骨刺本草綱目　猫刺通雅　猫頭刺　枸橘共同上　猫耳刺鎮江府志　貓兒殘先醒齋筆記　光莁櫪　極木共同上　鼠怕葉何氏集効方　十大功勞葉同上

山中ニ多シ、人家ニモ栽ユ、或ハ籬トス、葉ハ女貞葉(ネズミモチノ)ヨリ小ニシテ厚ク、邊ニ大刻アリ、其尖皆硬刺ナリ、冬ヲ經テ凋マズ、九十月葉間ニ小白花ヲ開ク、香氣アリ、後小圓實ヲ結ブ、熟シテ黑色、ソノ木ハ白色ニシテ細文アリテ象牙ノ如シ、旋シテ器物或ハ畫軸トス、又葉邊ニ尖刺ナキ者アリ、俗ニメヒラギト云フ、故ニ尋常ノ者ヲオニヒラギト云、然レドモ別物ニ非ズ、一樹ノ中ニ刺ナキ葉雜リ生ズ、又別ニメ。ヒ。ラ。ギ。ト呼ブ木アリ、一名ホカノキ、勢州カタザクラ、阿州タモ、播州ハアカノキ、藝州ヒガンボク、但州ウシボツカウ、紀州葉ハ細長ニシテ薄ク邊刺多シ、枸骨ノ類ニ非ズ、漢名詳ナラズ、

增、一種ヒ。ラ。ギ。ナ。ン。テ。ン。ト呼モノアリ、形狀南燭(ナンテン)ニ似テ、葉邊ニ枸骨(ヒラギ)ノ如キ刺ヲ生ズ、其色紫色ヲ帶ブ、南燭ノ條ニモ載ス、枸骨ノ類ナルベシ、

本邦ノ俗ヒラギニ柊ノ字ヲ用ユ、城州下賀茂明神ノ社內ニ、柊ノ社ト稱スルアリ、人皇四十五代聖武天皇天平九年、痘瘡始テ大ニ行ハレ、天下死者甚多シ、藤原淡海公ノ四子共ニコレニ薨ズ、此時上下ノ賀茂ノ社ヘ御祈願アリシニ、柊ノ祠ニ祈ルベキ神託アリ、因テ未ダ痘ヲヤマザル者多ク、コノ祠ニ祈リ、滿願ノ後必ズ一樹ヲ祠前ニ栽ユルニ、悉ク葉邊刺ヲ生ジテ、枸骨ノ如ニ變ズ、今ニ至テ猶此ノ如シ、一異ト謂フベシ、

〔地錦抄五〕柊木(ひいらぎ)　めひらぎは葉にはりなし、鬼ひらぎは葉はり有、

〔古事記中景行〕爾天皇亦頻詔倭建命言向和平東方十二道之荒夫琉神、及摩都樓波奴人等、而副吉備臣等之祖名御鉏友耳建日子而遣之時、給比々羅木之八尋矛(比々羅三字以音)故受命罷行之時、參入伊勢大御神宮拜神朝廷、

くして、ロヒヽラグをもて此名ありしと見えたり、巴戟天をヤマヒヽラギといひしは、又黄芩に依りて此名ありしか、これも味苦きもの也、ロヒヾクといふは、神武の御歌に見えたり、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕狗骨　猫兒刺　俗爲杠谷樹　和名比々良木　俗用柊字、音中柊本椎之名也、按狗骨樹肌白滑堅、以堪爲算珠或象戯碁子、甚美亞於黄楊、其大者作板可旋盆、然性難長、大木希也、續日本紀文武帝大寶二年獻杠谷樹長八尋云云、是等以爲希有之物、其葉四時不凋、厚硬有五稜、如刺、有雌雄、其刺柔者爲雌、九月開小花、碎白色結子小青色、五月熟黒色、似鼠李女貞之輩、而大如小蓮子、

俗聞立春節分夜、插枝葉於門窻、添以海鰛頭、爲追儺用、魍魎怖其尖刺不可敢近之義乎、○中略此云柊葉葉有五角而實黒也、𣏓樹葉無角、而實赤也、如本草說者、似二物相混、不知柊汁亦爲𣏓乎、

〔本草綱目譯義 三十六 灌木〕枸骨　ヒイラギ○中略一種アリ、此ハ、ホカノキカタザクラ、河州是ハ山ニ多シ、此ハ枸骨類ニアラズ、別物也、漢名シレズ、葉細ク長シテ、葉ノ邊ニ多ク刺アリ、葉モウスシ、花穗トナリテツク也、ツイ見レバ、ヒラギニ似タル故、メヒラギト云也、本條ノヒラギノ木ハ、切バ白色ノ小キ象牙ノ如キ紋アリ美也、唐ニテハ此木ノ皮ヨリ、トリモチヲトルト云ヘリ、集解ニ、采其木皮煎膏、謂之粘䵕云々、日本ニテハモチノ木ヨリトル也、粘䵕云ハ、トリモチノコトナリ、

〔本草一家言 二〕狗骨　和名比羅木、○中略有雌雄二種、又一種生於叡山者、似狗骨葉極軟薄有刺、是亦稱姬比羅木、京北大原山洛西嵯峨廣澤西小丘上林樾下小社傍、及高雄山路傍多產之、稻彰信云、按綱目本條、時珍云、四五月著花者是也、如比羅木則十月著花、古人所指狗骨樹是也、二物大體同一類、倶可稱狗骨也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕枸骨　ヒイラギ古名　ヒラギ　ヒイラ土州　オニヒラギ東國　オ

〔新撰字鏡木〕巴戟天〈比々良木、杜谷樹、上同、〉

〔倭名類聚抄木二十〕黄芩 本草云、黄芩〈音琴、和名比々良木、〉楊氏漢語抄云、杜谷樹、〈杜音江、和名上同、〉一云巴戟天、

〔箋注倭名類聚抄木十〕千金翼方、證類本草草部中品載之、説文莶黄莶也、其字从金、後人諧今聲作芩、與毛詩食野之芩之芩字自別、御覽引呉普本草云、二月生赤黄葉、兩々四々相値、莖空中、或方員、高三四尺、四月華紫紅赤、五月實黑、根黄、蘇注云、葉細長兩葉相對、作叢生、亦有獨莖者、圖經、苗高尺餘、莖榦麁如筯、葉從地四面作叢生、類紫草、高一尺許、亦有獨莖者、葉細長四五寸、〇中略本草和名云、黄芩和名比々良岐、一名波比之波、岡本氏曰、皇國古無黄芩、今有之者、享保中求之朝鮮、蕃息者也、古蓋代用刺䕇、刺䕇清熱之功、與黄芩同、其樹纖條柔靡、有刺、今呼目木、有刺故古名比々良岐、纖條柔靡、故或名波比之波、是説覈實可從、巴戟天、產伊豆天城山、高一二尺、枝有刺、根如連球、今俗呼數珠根樹、以其有刺、故古蓋呼比比良岐、〇中略舜水朱氏談綺云、剛穀樹、又作杠谷樹、訓比々良岐、剛穀杠谷未知所本、續日本紀云、大寶二年正月、造宮職獻杠谷樹、長八尋、本注云、俗曰比々良木、四月、秦忌寸廣庭獻杠谷樹八尋桙根、卽古事記景行天皇條云、比々羅木之八尋矛也、杠谷樹字、所出未詳、按比々良岐可以爲桙者、本草拾遺所謂枸骨是也、木肌白似骨、故云枸骨、見證類本草女貞條、其葉有刺、人觸之則疼痛、疼、訓比々良久、故名是木爲比々良岐、疼木之義也、〇中略巴戟天、和名也末比々良岐、見本草和名、按杠谷樹、黄芩、巴戟天、三物皆有刺、故俱以比々良岐名之、雖然其物各異、巴戟天已出草類、宜以黄芩移草類、此獨存杠谷樹、源君合三物爲一者誤、新撰字鏡云、巴戟天比々良木、杠谷樹上同、其誤與漢語抄同、時珍云、莶、謂其色黄也、

〔伊呂波字類抄比植物附殖物具〕黄芩〈ヒヽラキ〉 杜谷樹〈同〉

〔東雅樹竹十六〕杠谷樹ヒヽラギ〇中略 杠谷は剛穀狗骨等と音相近し、楊氏杠谷と注せし、必その本據あるべし、黄芩をヒヽラキといひしは、杠谷樹の名を得しには、其義異なるべし、これは其味苦

梢ニ花ヲ開ク、實ヲ結ブ、濶サ二分、長サ一寸許ノ薄片ナリ、松子ノ形ノ如ニシテ大ナリ、熟スレバ褐色ニシテ、長ク穗ヲナシテ下垂ス、地ニ下シテ生ジ易シ、一種葉小ニシテ鋸齒アリテ、ニガキノ葉ニ似タル者アリ、下品ナリ、一種小葉ノ者ハ鋸齒ナクシテ、紫藤(フヂ)葉ニ似テ短ク、節ニ對シテ生ズ、初夏枝梢ニ長穗ヲナシテ花ヲ開ク、杉楊(シデノ)花ノ如ニシテ瓣細ク白色、後實ヲ結ブ、形同シテ小ナリ、藥ニハ皮ヲ用ユ、舶來ナシ、京師ノ藥舖ニ貨ル者ハ、江州若州丹州ヨリ出ス、皮少許ヲ採テ水中ニ浸セバ、水面青色ニナル者眞ナリ、唐山ノ松煙墨ハ、秦皮汁ヲ用ヒ色ヲ助クルコト、集解ニ說ケリ、本邦ニテ皮ヲ濃煎シ膠トナスヲ木膠ト云、佛經ヲ寫ス墨ニ用ユ、墨工コレヲ貯フ、國ニヨリテコノ木ニモ白蠟ヲ生ズルコト水蠟樹ト同ジ、是モトバシリト云、唐山ニハコレアルコトヲ聞カズ、

〔採藥錄 五〕秦皮　ニガキ

本草所ㇾ說但一種也、味苦故ニ苦樹ノ名アリ、先輩トヂリコヲ以テ秦皮ニ當ルハ非也、味甚不ㇾ苦、苦樹ハ味大ニ苦シ、舶來ノ者ニ異ルコトナシ、秋冬ノ間夫木ノ皮ヲ剝ギ取リ、長サ五六寸許ニ切リ、四五枚ヲ合テ葉ニテ紮定シ、日乾スベシ、

〔草木育種後編 下藥品〕秦皮(とねりこ) 本艸　小葉大葉數種あり、山中より小木をとり植べし、二月又九月の比植かへてよし、和蘭にてエッセン、ボームといふ、皮はキナノ代用としてよし、又材は收澁す、ボック、ホートの代用とすべし、黴毒の藥とすべし、一種日光山にてヲヽシタといふものは、皮を種々器物とす、日光より多く來る、斑ありて雅趣あり、

〔玉勝間 十三〕とねりこの木

とねりこの木といふ木、木の色いと白く、葉は榎の葉にして、大木になる物なり、實は[図]かくの如き形にて、上の方は葉のやうにひらなり、件の木美濃國飯木(ハンノキ)村に多く有て、他村(アダシムラ)には無しと同人○田中道麻呂いへり、飯木村は此人の故鄕なり、多藝郡なり、

〔倭名類聚抄木二十〕石檀　蘇敬本草注云、秦皮、一名石檀、和名止禰利古乃木、一云太無乃木、葉似檀、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄木十〕千金翼方、證類本草中品並云、秦皮一名石檀、知此所引本條之文、源君併引爲蘇注非是、○中略按、伊呂波字類抄云、多宇乃幾、亦有乃字、然本草和名、類聚名義抄、並與舊同、○中略證類本草引云、以葉似檀、故名石檀也、本草和名引云、以葉似檀、故以名之、淮南子假眞訓曰、梣木色青而瘉瞖、高云、梣木苦歷木名也、出於山、剝其皮以水浸之、正青、用洗眼瘉人目中膚瞖、說文、梣青皮木、岑皮聲訛作秦皮耳、

〔大和本草藥木十一〕秦皮　葉ハ椿ニ似テ葉サキトガレリ、又槐葉ニ似テ小ナリ、又薔薇葉ニ似タリ、皮モ葉モ水ニ浸セバ緑汁忽出ヅ、是ヲ用テ赤眼腫ニヌレバヨク治ス、秋冬ハ葉ヲツ、春ハ女郎花ノ如クナル花多クサク、色淡紫ナリ、樹直ニシテ性子バシ、用テ鎗ノ柄トス、樹皮紫黑色ナリ、

〔和漢三才圖會喬木八十三〕秦皮　梣皮　樳木　石檀　樊槻　盆桂　苦樹　苦櫪　和名止禰利古乃木　一云太無乃木

本綱、秦皮其木大都似檀、枝幹皆青綠色、葉細如匙頭、虛大而不光、無花實、皮有白點、而不粗錯、取皮漬水便碧色、書紙看之、皆青色者眞也、似槐根、

秦皮苦微寒濇　厥陰肝少陽膽經藥也、故治目病驚癇、取其平木也、治下痢崩帶、取其收濇也、治目之要藥也、

按秦皮樹丹波山中多有之、

〔重修本草綱目啓蒙喬木二十四〕秦皮　トネリコ和名鈔　トネリコノキ　タムノキ同上　ダゴノキ加州　アヲタゴ木曾　トウネヂコ江州

一名細辛木皮本草必讀　攀雞木事文類聚　苦裏木訓蒙字會　梣

槻雅通

コノ木寒地ニ多シ、葉ハ吳茱萸葉ノ如ニシテ、大ニシテ鋸齒アリ、兩對シテ生ズ、其節黑シ、夏月枝

毛令說、日ニ鶺鴒也、

迎春花

〔重修本草綱目啓蒙 十一隰草〕迎春花　ワウバイ　キンバイ仙臺　ワウシユクバイ佐州　一名黃雀兒八閩通志　金腰帶群芳譜　腰金帶秘傳花鏡　僣客事物紺珠

山野ニ自生ナシ、人家庭際ニ多ク栽ユ、小木ナリ、高サ二三尺、或ハ五七尺、或ハ尺ニ盈ザル者ニモ多ク花ヲ生ズ、枝多シ、老タル者ハ長ク下垂シテ連翹ノ如シ、皆深綠色、二月葉ナクシテ先ヅ花ヲ開ク、六瓣黃色大サ錢ノ如シ、花終テ葉ヲ生ズ、形チ百脈根葉ニ似テ厚シ、亦深綠色、枝上ノ節ゴトニ多ク根鬚ヲ生ズ、切テ扦插スレバ能活ス、此物和名ワウバイ、唐山ニテ黃梅ト云ハ蠟梅ノコトナリ、

〔佐渡志 五物產〕迎春花　方言ワウバイ盆栽トナシテ花ヲ愛スルモノアリ、山野ニ自生ナシ、

〔百品考 下〕探春花　一名黃素馨　和名リウキウワウバイ

盛京通志、探春花、似迎春、春過卽開、　灌園草木識、黃素馨、終年有花、頗似京師黃迎春、亦以花形似素馨得名、殊無香也、

花戶ニ多シ、形狀迎春花(ワウバイ)ニ似テ、深綠色、冬落葉セズ、莖ニ褐色ノスヂアリ、葉ハ三葉或ハ五葉聚付テ、素馨ニモ似タル處アリ、四月枝頭ニ五瓣ノ小黃花聚リ付ク、迎春花ノ付ヤウト異ナリ、筒シベニシテ、先ニテ五ブヽニ分ル、素馨ニ似テ小ナリ、四月盛リニ開ケドモ、其後秋マデ追々ニ少シヅヽ花アルモノナリ、枝ヲ插テ能活ス、探春花ハ棣園福井氏ノ考ナリ、黃素馨ハ灌園岩崎氏ノ考ナリ、共ニ從ベシ、

秦皮

〔本草和名 十三木〕秦皮、一名岑皮、楊玄操作梣字、並士林反、一名石檀、蘇敬注云、以葉似檀、故以名之、一名樊槻皮、仁諝音規、出陶景注、一名苦樹、俗見味苦名爲苦樹、出蘇敬注、一名樊鷄、出仁諝音義、一名昔歷、出雜要訣、一名水檀、叙然葉間當有大水、故以名之、出拾遺、和名止禰利古乃岐、一名多牟岐、

土地ニ合サヘスレバ、糞養(コヤシ)ヲ用ルニモ及バズ、

〔廣益地錦抄 二〕丹(たん)桂(けい)木 秋中　はなも木も木犀にて、花の色柹紅いろ丹のいろなればとて、丹桂といふなり、もくせいを桂ともいへばなり、花ひらく時薫香白花のもくせいよりふかく、匂おとれり、

迎春花

〔和爾雅 七 草木〕迎春(ワウハイ)花

〔大和本草 十二 花木〕迎春(ワウバイ)花　小樹ナリ、然レドモ本艸濕草下ニノス、曰高者二三尺、方莖厚葉、葉如初生小椒葉而無歯、面青背淡云々、所言皆ワウバイト同、他書ニモノセタリ、枝長シ、竹ヲ立テ、カコミ助クベシ、正月ニ黃花ヲヒラク、故ニ迎春花ト名ヅク、花ノカタチ梅ニ似タリ、故ニ國俗ニ黃梅ト云、未土ニウヘザレドモ、枝ノ上ニ早ク根ヲ生ズ、故ニ正二月梅雨ノ時サシテヨク活ス、二月ニ分植ベシ、枝地ニ垂レバ根ヲ出シテ倒ニ生ズ、玄覽東有倒生之木トイヘリ、此木モ亦似タリ、畫譜ニ此花ヲ描ケリ、其花繪ニカキテマサルモノ也、清少納言ガ枕艸紙ニ繪ニカキテマサルモノヲ記セシニ、是ヲノセズ、此時此花木未來故ナルベシ、花史曰、結香花色鵞黃、較瑞香稍長、花開無葉、花謝葉生、枝極柔軟、多以蟠結篤信謂、是亦迎春花ト一物ナルベシ、辛夷花モ迎春花ト云、與此別也、

〔和漢三才圖會 九十四 濕草〕迎(わう)春(はい)花　倭云黃梅

本綱、迎春花人家栽插之、叢生、高者二三尺、方莖厚葉、如初生小椒葉而無歯、面青背淡、對節生小枝三葉、正月初開小花、狀如瑞香花、黃色不結實、

葉 苦澁　腫毒惡瘡 陰乾研末 酒服二三錢出汗便瘥

按、迎春花莖有微稜、節節繁枝、幹勁而不立、如蔓非蔓、傍起竹扶之、正月開小黃花、形似梅花、故呼曰黃梅、遠莖繁、亦如狗黃楊枝葉樣而葉不扁、

畫譜云、迎春花春首開花、放時移栽、土肥則茂、燖牲水灌之則花蕃、二月中旬分種、燖牲者此如用魚鳥洗汁之類也、以湯沃

櫧シノ實ノ如ク、徑リ二分餘、長サ三分餘、秋ニ至リ黑ク熟シ、上ニ白粉アリ、破レバ仁ニ油アリ、採テ小鳥ニ飼フ、木皮白シテ靑ト黑トノ細斑アリ、用テ器物ニ作ル、コノ木ヲ傘ノロクロニ用ユ、故ニ紀州熊野ニテロクロギト云フ、又一種九州ニテチサノキト呼ブ者ハ、喬木類ノ松楊ナリ、

松楊

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕松楊　。チ。シ。ヤ。ノ。キ。筑前、同名アリ、　唐。ピ。ハ。四國　一名梾椋 品字箋

筑紫紀州及ビ四國ニアリ、葉ハ柹ノ葉ニ似テ細鋸齒アリ互生ス、夏月小花ヲ枝梢ニ開キ長穗ヲナス、穗ニ枝多シ、後實ヲ結ブ、形圓ニシテ小ク、椒粒ノ如ク色黑シ、其材堅シテ美理アリ、淺黃色、木ヲ煎ジテ物ヲ染ム、筑前ニテチシヤ染ト云、木皮鱗甲ヲナシ、松樹皮ノ如シ、古ヨリ椋子木ヲムクト訓ズルハ非ナリ、ムクノ木ハ糙葉樹 物理小識 一名加條 漳州府志 ナリ、

木犀

〔大和本草 十一 園木〕木犀　南方艸木狀曰、江南桂八九月開花無子、此木犀也、今案木犀モ桂ノ一種ナリ、岩桂ト云故木犀花ヲ桂花トモ云、其香甚遠クイタル、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕木犀もくせい花　巖桂　毛久世伊　〇中略

莰、木犀葉似海石榴而略長有鋸齒、五六月開小花、香單淡白色、此所謂銀桂矣、未見黃及紅者也、壽其主治、則入透頂香外郎藥而可矣、

畫譜云、木犀葉邊如鋸齒、而紋龘者其花香甚、灌以猪糞花茂、置沙壅之亦可、

〔地錦抄 五〕木犀もくせい　葉はもちのきほど有、秋葉の間にちいさき花ありて、匂らんじやうのごとし、花色白黃、

〔草木六部耕種法 十一 需花〕木犀モクセイハ眞土、赤土皆宜シ、前年ニ厩肥、人馬糞ヲ耕交置テ、二三月此ヲ移シ植ベシ、時々盛養水ヲ澆グトキハ、大ニ繁榮スル者ナリ、山茶ツバキモ木犀モクセイヲ植ルニ同ジ、唯其植ル時ニ根ヲ悉ク切捨ベシ、餘リ根ノ張タルハ、却テ枯ルコト有リ、此者ハ五月頃ニ揷木スルモ、皆能ク活ク、花ヲ盛ニスルニハ、冬中根ニ干鰮及ビ人馬ノ糞ヲ壅イルベシ、茶梅モ山茶ニ同ジ、檉ギヨ柳リウ、八ヤ角ツ金ブ盤等ハ

處にかたまり、梢ごとに咲きて色はから紅のごとし、鐵を末にして、肥しにはするといへり、愛元には見ぬ木なり、

〔一話一言十八〕鐵刀木

鐵刀木出廣東、色紫黑、性堅硬而沈重、東莞人多以作屋、〈增、格古要論に出〉これタガヤサンなるべし、鐵刀木といふ誤歟、

欄木

〔南島志上物產〕木則赤木、其性堅緻、紫紅色、而有白理、蓋欄木之類、本朝式所謂南島所出赤木卽此、〈俗日カシ木〉

〔大和本草十二雜木〕欄木　日本ノ俗クハリント云、木性紫檀ニ似テ紫紅色、花紋アルヲ花欄ト云、中華ノ俗花梨ト云、器ニツクル良材ナリ、此木日本ニナシ、異舶ニノセ來ル、榠樝ヲ國俗クハリント云誤レリ、本草喬木門ニ載ス、

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕欄木　クハリン　一名花貍〈廣東新語〉

欄木ハ和產ナシ、廣東ヨリ舶來ス、其木理緻密ニシテ堅シ、色紫檀ノ如シ、又微紅ヲ帶ル者アリ、木理ニ花紋アルヲ上品トシ、花欄ト云、花紋ナキ者ハ下品ナリ、俗ニコレヲクハリント呼ブハ、卽花欄ノ音轉ナリ、又果類ニクハリント呼ブ者ハ、榠樝ニシテ別物ナリ、榠樝モ木理密ナレドモ、質柔ナル故磨シテ光リナク淡紅色ナリ、

齊墩果

〔重修本草綱目啓蒙二十二夷果〕摩厨子〈中略〉附錄、齊墩果、チサノキ　チシヤノキ〈俗〉　ロクロギ〈紀州〉　ホトヽギス〈同上〉　チナイ〈讃州〉　チナエ〈石州〉　チヤウメ〈江州〉　チヤウメン〈土州〉　エゴ〈江戸〉　サボン〈加州〉　タカノエ〈丹州〉　ジシヤ〈佐渡〉　ボトボトノキ〈越前〉　ザトウノツエ〈同上〉

山野ニ多シ、木ノ高サ丈餘、枝條旁ニハビコル、春新葉ヲ生ズ、形楕(ヒツナリ)ニシテ尖リ、鋸齒ナク互生ス、夏月葉間ニ花ヲ開ク、莖長ク下垂ス、五瓣白色大サ六七分、形柑橘花ニ似テ香氣アリ、後實ヲ結ブ、苦(アカイ)

本の乘となづけられ、わろき連歌をば栗の本の乘となづけられ侍りき、

〔大和本草 雜木 十二〕烏木(コクタン) 國俗紫檀ニ對シテコクタント云、檀木ニハ非ズ、色黒ク堅シ、器ニ作ルベシ、本艸綱目喬木類ニアリ、時珍云、有二間道者一嫩木也、是ワカキニハスヂアル也、此木モ亦日本ニナシ、

〔和漢三才圖會 喬木 八十三〕烏木 烏樠木 烏文木 俗云古久太牟 ○中略

按、烏木出二於雲南廣東一、其性堅實黒色、類二于角一、俗謂二之黒檀一、以爲二白檀紫檀等之類一非也、檀見二于香木下一

〔重修本草綱目啓蒙 喬木 二十四〕烏木 コクタン 一名栗木 正字通 急木 昔鼎 闘木 上共同 角烏 廣東新語

和産ナシ、廣東ヨリ舶來ス、唐山ニハ大泥暹羅占城眞臘ヨリ來ルト云、今器物及箸ニ作ル者是ナリ、木色黒クシテ梯心黒木(クロガキ)ニ似テ質堅シ、俗ニコクタント呼ベドモ、白檀紫檀ノ類ニ非ズ、シロキ筋雜ル者アリ、スヂコクタント云フ、コレハ嫩木ナリト集解ニ云リ、之ヲ間道烏木ト云、中山傳信錄ニ烏木葉如レ桂直上、外與二常木一不レ異、中心木質黒色、然亦有二白理一者ト云、

〔南島志 物産 上〕黒木卽會典所レ謂烏木也、蘇鐵卽琉球錄所レ謂鳳尾蕉、其野生則不レ如二栽在一、

〔書言字考節用集 生植 六〕鐵刀木(タガヤサン)

〔和漢三才圖會 喬木 八十三〕鐵樹 鐵刀木 俗云太加也左牟、桄榔木亦名二鐵樹一、與レ此不レ同、

木本書譜云、鐵樹產二廣中一、色微類レ鐵、其枝丁穿結、甚有二畫意一、又聞有二鐵樹花一、葉密而花紅、想亦一種也、

按、鐵刀木今出二於廣西一、木紫黒密理、爲レ器甚美、貴二重之一、

〔昆陽漫錄〕鐵樹

揖鳴曉筆に、鐵樹 揖鳴曉筆は一條の禪閤の作の曉記のことゝかや と云ふ木を載せたり、今も薩摩の邊にあるにや、その文左の如し、

予九州を徘徊せし時、薩摩にて見侍りし鐵樹といふ木侍り、三四尺より高きはなし、葉も莖も鷄頭花に似て、それよりはからびて、誠の鐵のうち枝の樣なり、花は女郎花などのやうにて、一

名其地曰不實柿、兒到其處問、此地何號、人答以其名、時餘樹有果、兒曰、見今何有實乎、

〔梅園日記 一〕柿木文字

白石先生の記に、かこみ一尺餘も有つらん木の、半よりさけし所に、おのづから天下の字有を、人の見せたるに、是は柿にやといひしかば、かの人驚きて、いかに知給ひぬらん、是はある寺なる澀柿を切て、薪にせんとて割しに、此文字のあらはれしかば、めでたき物なりとて、薪にせで京より來りし也といふ、柿木にはかゝる事有よしを、ふるき書どもに志るし置侍るとあり、按ずるにふるき書とは、今物語に、ひえの山よかはに住ける僧のもとに、小法師の有けるが、坊の前に柿の木有けるを、切てたかんとて、いちのきれをわりたりける中に、くろみの有けるが、文字に似たりけるを、あやしと思ひて、坊主に見せたりければ、南無阿彌陀佛と云文字にて有ける、ふしぎなどもいふばかりなし、沙石集に、蓮養房といふ山寺法師、前栽に柿の木を植て、年來愛しけるが、他界の後、弟子の僧、此木を切て湯木にせんとてわりて見るに、文字の勢二寸ばかりにて、蓮養房と文字あり、黑木の如くして、木の中にわれども〳〵同體にて有けり、谷響集に、客云、拆木中有文字、嘗於勸修寺八幡神祠親見矣、或謂多是柿木也、〇中略 物理小識に、柿木畫皮生文、など見えたるをやいはれつらん、又いと近きは、友なる本間眠雲游淸が鵜鴉集に、文化十一年甲戌の春、伊豫國大洲領宇和川村に、がら〳〵といふ處あり、畑中に大なる柿木有て、作物の障になれば、畑主其柿木を伐て、本の所を斧にて二ツに割たるに文字あり、太王左月右旁は不分明のよし文字は濃藍の色にて、墨もて緣を雙鉤したるが如し云々とあり、又按ずるに、柿ならぬ他の木にも書畫ありし事和漢の書に出たり、

〔玉勝間 九〕柿の本 栗の本

二條良基公のさよのねざめといふ物にいはく、後鳥羽院の御代にはよき連歌の上手をば柿の

柿雜載

〔日本山海名物圖絵〕二美濃釣柿
ころ柿のいまだ熱せぬうちに取て、皮をむき、糸を付て竿にかけ日にほす也、安藝國西條ぎおん坊、其味すぐれたりといへども、美濃つるしよりちいさし、美濃は味はひよきのみにあらず、其形甚だ大なり、ほし上ゲて三寸ばかりの長さなる柿あり、其生の時の大さ思ひやるべし、くし柿ころ柿も皆ころ柿を以て拵ゆる也、串柿は丹波よりおほく出、ころ柿は山城宇治名物也、

〔美濃名細記〕十一産物一蜂屋柿、釣枝柿、（賀茂郡峰屋村産）ホサル、時ニ回リ七八寸、（カウサシト云）重百錢目計、其味格別ニシテ風味輕シ、江戸獻上、始ニ生熟柹、後爲釣柹再獻上、

〔倭名類聚抄〕二十木　黑柹　楊氏漢語抄云、柹心、（久呂加木、俗用黑柹、或說、是柹木心黑處名也、爲近於俗、別以置之、）

〔箋注倭名類聚抄〕十木下總本處下有名字、廣本同、下總本別以置之、作別用黑柹二字也、黑柹見播都式、

〔和漢三才圖會〕八十喬木三黑柹　柹詳于山果類
按黑柹卽山中椑柹木心也、黑色光澤密理堅硬、爲器甚美、以亞鐵刀木烏木、但嫩木則色不光黑、（鐵刀木見于後）

〔新撰姓氏錄〕大和國皇別柹本朝臣
大春日朝臣同祖、天足彥國押人命之後也、敏達天皇御代、依家門有柹樹、爲柹本臣氏、

〔三代實錄〕三清和貞觀元年七月十九日壬申、雷雨震內敎坊柹樹、

〔日本紀略〕一醍醐延喜九年閏八月十五日、此月也、東西兩京桃、櫻、李、柚、柹、藤皆花、或實、

〔宇治拾遺物語〕二むかし延喜の御門の御とき、五條の天神のあたりに、大なる柿の木の實ならぬあり、その木のうへに佛あらはれておはします、〇下略

〔元亨釋書〕五慧解釋皇慶、姓橘氏、黃門侍郞濱相之曾孫、〇中略甫七歲登叡山、近山下有柹樹、絕不結子、俗

本綱、烏柹甘温　火熏乾者也、凡服藥口苦及嘔逆者、食少許卽止、

按、用澀柹剝皮、火熏懸屋間、晒乾之、或不火熏而乾、亦可竝成黑色、未生霜時食之、烏者黑色也、

○醂柹(あはせがき)　醂音覽　藏柹也　俗云阿波世加岐

本綱、醂柹用灰汁澡三四度、令汁盡、著器中、經十餘日卽可食、

按、醂柹今造法用澀柹、浸石灰或蕎麥稭灰汁、二三日取出、食味變甘、最下品也、

〔雍州府志土産六〕○○轉柹(コロ)　宇治土人新秋採澀柹之小者、去皮幷蔕、以藁繫之、陰乾至初冬、外面帶霜色、則其味甚甜、此柹形元小、陰乾後圓成運轉、故俗謂轉柹、茶家盛筥爲方物、贈買茶之人家、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕○○ころ柹、乾たる柹をなべていふに非ず、雍州府志に、宇治にて秋の初めに小き澀柹を採、皮をむき蔕をとり、繩につるし、陰乾にしたるが、圓き故に轉柹といふといへり、

〔鹽尻二〕○○柹脯　俗に云くしがき、ゑだかきの類、

〔甲斐國志産物及製造百二十三〕一柹○中略　○○袋柹　西郡相澤村ノ產物ナリ、松平甲斐守十二月ニ獻上セリ、又餌袋(エブクロ)トモ名ク、是モ乾柹ニテ核ヲ揉ミ出シ去ル故ニ袋ト云、白霜生ジテ甘美ナリ、同郡原七鄕ニ、七種ノ商物ノ内ニ醂柹ト云アリ、澀柹ヲ灰汁ニ浸シ、一夜ニシテ甘味トナレルヲ、荒目ノ圓籠ニ入レ擔シテ發賣ス、此邊ニテハ畠ノ畔ニモ多ク柹樹ヲ植ウ、是モ接頭ニ非ザレバ澀氣去リ難シト云、串柹ハ逸見筋澀澤村邊ニテ製ス、釣柹モ同筋諸村ニ任レドモ、佳品ニハアラズ、熟柹(ウミガキ)ハ皮ヲ削ラズ器中ニ貯ヘ置キ、或ハ藁ニ裹ミ置ケバ熟シテ潰ントス、味殊佳シ、烘柹(ウツミガキ)ハ温灰ニ埋メテ澀氣ヲヌクナリ、木練(コネリ)木醂(キザハシ)ハ妙丹トモ云、始メヨリ澀氣ナシ、御所柹ト云ヲ第一ノ佳品トス、品類多クシテ下品ナルモアリ、一種初ハ澀ク秋霜下リテ朱熟シ、肉中紫點多ク生ズル者アリ、木練中ノ最上品トスベシ、是ヲモ甲州丸ト呼ブ者アリ、椑柹(コシブガキ)ハ形小ナリ、山野ニ生ズル者澀強シ、擣テ柹漆トスベシ、桾櫏(サルガキ)鹿心柹ト云モ、皆此類ヲ云ナルベシ、

天永ク繼テ乾燥スルトキハ、泔水ヲ注ベシ、盛養水(製法上ニ出セリ)ナレバ殊ニ宜シ、斯ノ如シテ四五年間ニ笛竹ノ太ニ至ラバ、卽伐テ紅柹、方柹、醂ニテモ望ム所ノ枝ヲ接穗スベシ、凡ソ柹ハ接木スルトキハ、兩三年ノ間ニ繁榮スルコト甚速ナル者ナリ、凡柹ハ種子ヲ栽テ砧トスルヲ法トス、然レドモ山野ニ生タルヲ掘採リ來テ、砧木ニシタルハ、良木ノ枝ヲ接ト雖ドモ、其實下品ニシテ、生長スルモ埒ノ明ザル者ナリ、

凡ソ柹ハ正月中旬ヨリ二月中旬迄ニ接木スベシ、能ク精密ニ接タルハ、百本ニ一本モ誤ルコト無シ、是レ元來接換シテ繁榮スベキノ性ナルヲ以テナリ、或ハ云柹ハ接木シタル梢ニ、又接木スルコト三度ニ及ブトキハ、其實ニ核無シト、予モ亦未ダ此レヲ試ズ、

橘子ノ條ニ說タルガ如ク、一段ノ畑ニ柹二百本栽テ、一本一千ノ實ヲ結ブトキハ、都合二十万ナリ、

紅柹、方柹、醂柹等ハ、其ノ價大抵橘子ニ同ジ、

〔和漢三才圖會(八十七山果)〕〇烘柹

本綱、此非謂火烘也、卽靑綠之生柹置器中、自紅熟如烘成、澀味盡去、甘如蜜、

白柹　柹餅　柹花　又云釣柹　又云枝柹〇中略

按、白柹用澀柹、連枝曝乾、或繫糸晒乾、初用藁麥稭稻藁包宿乃能生霜、豫州西條之產、甘美柔而如沙饅餅、備州之者次之、濃州及尾州蜂屋之產長三四寸、重三十錢目許、本草所謂牛心柹是乎、

〇胡盧柹〇　一名豆柹、卽乾柹、大如頭指、生淡霜、硬淡甘、〇中略

〇串柹〇　貫竹串乾者也、或貫繩乾之、共下品也、

凡乾柹乃脾肺血分之果也、甘平澁　能收故有健脾澀腸治嗽止血之功、蓋大腸者肺之合、而胃之子也、能治反胃吐食、(乾柹三枚連蒂、搗爛酒服甚效、切勿以他藥雜之、)治臟毒下血、(乾柹燒灰飲服)治產後欬逆、

〇烏柹〇　俗云阿末保之、阿末者屋間也、

- 弟
  - 實名くはしからずとし　わかくして入めつか、
  - さはしがき
    見ざまいやし、心あしきゆへふしづけにし、又は水火のせめを得、後こゝろあぢよし、十月十夜に、世人もちゆるなり、十夜の後よをさけみえず、
  - 筆がき
    心あし、下さまの人もてはやす、
  - さいしん
    生つき心れしぶとし、世の人もちひず、
  - はちや
    あにいまさり世人もてはやす、心よし、
  - ころがき
    宇治三室邊に住
  - さるがき
    なりふり尤よし、見所ある體なれ共、おぢ生干入道わかき折ふしに能似て、人にくちあかさぬ生つき也、
  - くしがき

柿栽培

〔草木六部耕種法十九需實〕柹モ亦能ク作ルトキハ、甚上品ナル果物ニテ、柑類ニ劣ラザル産物ナリ、且其種類モ紅柹、方柹、醂柹、青椑、君遷子等有リ、此ヲ作ル植地ハ、西北高ク東南低クテ、打潤タル肥沃ノ地ニ宜シ、又山下赤壚ハ殊ニ宜ク、海邊沙地等ニハ宜シカラズ、　柹ヲ作法ハ、唯其砧木ヲ生長セシメ、此ヲ伐テ美果ヲ結、良木ノ枝ヲ接換スル者ナルガ故ニ、青椑ニテモ大ニシテ能ク熟シタル柹核ヲ多ク集メ、此ヲ肥良ナル濕地ニ、冬中ヨリ埋テ、上ニ藁菰ヲ覆テ、時々泔水ヲ澆置トキハ、正二月ノ頃、頗芽ヲ出ス者ナリ、此ヲ肥良ノ植地ニ橘子ノ苗ヲ植ル如ク、一段ノ畑ニ二百處許モ穴ヲ掘リ、能ク芽ヲ出シタル種子ヲ、一箇ヅヽ臘土寒中ニ野土ト溲糞ヲ混和シテ翻化サセタル者ナリ、栽法上ニモ出セリ、若此物ノ無キトキハ、人糞ト黒壚トヲ能クモミ合セタルモ宜シ、ト共ニ穴中ニ安置シ、土ヲ六七分モ被テ少シ壓付テ置キ、其莖出テ後晴

めむとて、明くれうちた丶き、からきめうくるを、二郎あはれがり、かのしうとにたいめむして、我かたにてよきにいさめ申さん、しか〳〵とつぶやき、やがてしぶがきに寺道心をこさせ、生干人道と號してゐてかへり、我かまどのうへ、軒の下などに、なはをもつてあら〳〵としめゆはせ、ぶらりとさげたり、月日へて後、今はこ丶ろもなほり、さまも見ぐるしからずとて、二郎ゆるしてけり、生干も道心ふかくおもひとり、こきすみ染にやつれはて、いど味よくありとみえたり、ひたすらむまれかはりたる心ちして、見る人これをあまつしとてもてはやしけり、かたちこそいな物なれ、外には胎藏黑色の相をあらはし、かきの衣のゆかりおもへば、頭巾にたるへたあり、内には金剛の正體をふくむで、かめどもわれぬさねあり、今はむかしのしうと、えにくまず、あたらかはをなむど、くひの八ちたび、紙子しぶかみをもめどもかひなし、此法師がいとこにさはしがきも心いぶりなればとて、ふしづけにしたり、こ丶ろはすこしやさしきかたにもなりつれども、もがさのあときたなければ、法師が父のやうにうへ様へまいることすくなし、さはしが弟筆がきをひころがきさねしげ、しなの丶せんじさるがき、ひろ島のさい上へもんくしつら、太郎がまま子さいしん、是は人丸がまごちやくしなりといふ、その外はみなたこくにあればもらしつ、

人丸けいづ

- 木こねり　これり後に御所がきとめさろ、老後順妙寺に住、出家して日蓮の門に入、ちやうめうじがきと世人たつとぶ
  - 太郎つりがき
  - 次郎木ざはし　心ざまよし
  - 三郎八王子　心すなほならず、ひえの山に學問して、こ丶ろあぢはひよし、
  - 四郎生干入道　生干入道心れふつ丶か者されども、道心の後よくなこなひ、心あぢよくて世にもちゆる事はなはだし、十月五日より眞知堂十夜參詣の人、是をたつとぶ、

子鴨子牛心鹿心之狀、小野氏曰、鹿心柹形如牛心柹最小、俗名爲乃岐毛一名不天加岐、

〔古今和歌集物名十〕やまがきの木

秋はきぬいまやまがきのきり〲すよな〱なかむ風の寒さに　よみ人しらず

〔日本山海名物圖繪二〕大和御所柹

和州御所村より出、柹の極品なり、餘國にも此種ひろまりて多し、御所より出る物、名物なる故に御所柹といふ、

〔紀伊續風土記物産六下〕紫金柹シロガキ喬木にして木皮淡黄色にして内深黄色なり、枝莖に脂膠多くして、外皮に發生して、紫褐色となる、葉は柹に似て對生せり、花實はいまだ見ず、日高郡にて龍モクといふ、救荒本草に載する黄櫨恐くは是なるべし、古說に黄櫨をはぜに充つるは誤なり、

〔柹本氏系圖〕むかしならの御門の御時、かきの本の人丸といふいまぞかりける、歌の道妙にして、院内へもおりふしごとにまいり、朝夕御遊のまじらひをのみし給ふほどに、御所がきとめさせ給ひける、さるべきいとなみもせで、のりをすりていちにうりければ、世の人御所がきのこねりとなむ申ける、子どももあまたもちたり、太郎さねなりは、あかしのうらにてまうけたる子なればかのうらに住けり、はやうまだきに、いと若き比より、びむひげしろくて、京にかへり、父とおなじく君樣御前へもたち出、はか〲しきまじはりをゆるされたり、されぱあまの子なればとてつりがきとぞめされける、木ざはしの次郎は、心ざま父よりはをとりけれども、はらからのうちには、いちはやきみやびするものなり、三郞なりけるは、かたちふつゝにかしてかたくななれば、ひえの山にのぼせ學問させけるが、びんぎのみねに行、みづから八わうじとがうす、その弟あり、しぶ川のなにがしとかや武士のがり入むこしてけり、心すねきしぶりて、世の人の口あかすべきもあらず、やう〱としへて後、しうともてあつかひて、樣々いましめけることの中にうたてしきは、このむこしぶがきを粉にくだき、あぶらをこして、調度つゝ、むつき紙、ちはやぶる紙子をそ

漆柹一名凍柹邵武府志 靑柹農政全書 油柹般山志 集解ノ説ハ、キザワシ也、未ダ熟セズ靑色ナル時ヨリ澀味ナク食フベキヲ云フ、品類多シ、釋名ノ説ハシブカキナリ、コレヲ漆柹ト云、俗名アヲサ、一名アヲソ、此ニ品類多シ、未ダ熟セザル時、搗テ汁ヲ取ヲ柹漆シブト云、一名柹油、古今秘苑 柹膠博聞類纂

〔雍州府志六土產〕澀シブ柹 所々有之、然宇治郡山科七郷特多矣、土人初秋柹未熟時採之、盛籠賣京師、買之者去其蔕、舂杵之、以布囊搾取其油、是謂一番澀、又稱木澀、倭俗毎物第一謂一番、第二謂二番、又不雜他物、隨其自然之體者總謂木、言木訥質樸之謂而其義亦相當、然後以其所搾之渣滓、盛壺或桶入水經二三日、後再杵之、取其油、是謂二番澀、凡柹油之爲用也、染衣服、又塗强紙、張筐筥、倭俗貼紙於諸物、謂張、又以澀糊續綴强紙、或方一丈、或二丈、塗柹油於其兩面、日乾又塗之、如此數遍、是謂澀紙、以是包裹器物、則雖致遠方、無雨濕浸淫之害、凡漆器始以糊貼紙於外面、塗漆於其上、是稱糊地、又塗柹油於紙而張器物、塗漆於其上、是謂澀地、至上品器、則自其始塗漆於布、張其外、而再漆其上、是稱堅地、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕君遷子 シナノガキ サルガキ同名アリ スヾガキ ヒイナガキ若州 ピンボガキ筑前 シンナラガキ越中 シイナラガキ讃州 一名檽棗典籍便覽 牛乳柹救荒本草 牛乳子廣東新語 牛嬭子大明一統志 梬棗子正字通 樹葉共ニ尋常ノ柹ニ異ナラズ、實小ニシテ金棗ノ如ク、十月ニ至テ熟ス、黃色ニシテ味甘シ、皮共ニ乾柹トナスベシ、内ニ核アレドモ甚小ニシテ胡麻ノ如シ、下種スベカラズ、故ニ接テ分ツ、一種實ノ形正圓ニシテ、大サ金豆コキンカンノ如キアリ、マメガキ仙臺トモ、一名ブドウガキ、アマガキ東國 メメガキ佐渡 ヤマガキ大和本草 ヤマシブ同上 コレ丁香柹ナリ、コノ柹ハ枝ニ多ク簇リテ、蒲萄ノ如シ、熟シテ黃色内ニ核多シ、

〔倭名類聚抄十七菓〕鹿心柹 兼名苑注云、鹿心柹和名夜末加岐 柹之小而長也、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕本草綱目引事類合璧云、柹朱果也、大者如楪、八稜稍扁、其次如拳、小或如鷄

接枝、今不乏其用、大和國五所之產爲次、俗稱五所柹、又有安西柹、傳言慈照院義政公在東山東求堂、時安西氏人從之、宅邊有柹、其味甜、到今安西氏裔在淨土寺村、古柹樹猶存矣、今所々接之、又御室柹、形肥大而霜後味至甘、○中略

筆柹 柹頭尖立而似筆尖、故稱之、熟則其色紅而其味甘、洛北村婦盛是於平盆、戴頭上、賣市中、此外八王子、幷佐伊志牟等柹、或以其所產之土地稱之、又以其形狀呼之者、種類多々不及枚擧、

〔鹽尻 四十三〕一洛東淨七本村に百万遍の近傍安西世繼山本中山の四家、民有にて公課なし、是ハ義政慈照院○足利に移り玉ひし時、近仕せし人の裔也とかや、世に云安西柹ハ本安西氏の家に栽し種也と云々、

〔佐渡志 五物產〕柹 和名カキ

所々多クアリ、品類モ亦甚多シ、ナカンヅク栗ノ江ト名ヅクルモノ殊ニ多シ、栗野江村ヨリ出レバナリ、汝南圃史ニイハユル方蔕柹ナリ、又眞光寺村ヨリ出ルモノヲダラリトナヅク、長サ三寸、ヒロサ二寸バカリ、牛心柹トイフモノナリ、レンケ柹トイフモノ、形大ニシテ蔕ノ周リノ肉高ク出テ、圓座シキタル樣ナリ、箸蓋柹トイフモノナルベシ、羽茂郡ニ藤內柹アリ、ツリガキ、クシガキトナシテ、奧州松前ニ送リ交易ストイフ、又方言メヽ柹トイフアリ、ヤマガキトモイフ、實小クシテ數多ク生ナル、猴棗ヲ云ニヤ、交易スルトキイヤシムナリ、

〔周防產物名寄 果〕柹

其種エボシキ子リ トキリトモ 平キ子リ ナツ柹トモ 西條柹 大和ガキ 御所柹トモ、シヤウタイナシトモ、 玉子ガキ トリノコトモ ブリガキ 八王寺 具足トヲシ ギヲン坊 十夜ガキ シブカキ ピンボウガキ シナノガキトモ サ子ナシ 西條ガキ

〔重修本草綱目啓蒙 二十一山果〕椑柹 一名樹頭紅 鎭江府志 赤棠柹 群芳譜

云、蜂谷ハ濃州ノ地名ナリ、此柹尾州ヨリ獻上アリ、又藝州ヨリモ白柹ヲ出ス、西城ガキト云、西城ハ備後ノ地名ナレドモ、藝州ヨリ獻上アリ、西城ガキノ中、至テ大ナルヲ祇園坊ト云、コノ柹ハ又別種ニシテ、彼地ニモ少シト云、他國ニテ祇園坊ト呼ブ者ハ、皆西城ガキナリ、乾柹ノ白粉ヲトリ藥用トス、柹霜ト云、他粉ヲ著テ僞ル者ハ蛀ミ易シ、時珍ノ說ノ烘柹ハ、乾柹ノ青キ者ヲ採リ、皮ヲ去ラズ、稻草ニ包ミ、器ニ入レ置キ熟スルヲ云、故ニツツミガキト呼ブ、又酒樽中ニ入テ熟スルモアリ、故ニタルヌキ(勢州)ト呼ブ、又スボガキ(豐後)ツトガキ(筑前)ノ名アリ、白柹ハツルシガキ、ツリガキ、枝ガキ、ヲシガキ、卽蜂谷ガキ、西城ガキナリ、一名釣柹(部武府志)椑乾(書影)霜柹(行厨集)烏柹ハフスベガキ、一名アマボシ、漆柹ノ皮ヲ去リ、竈上ニツリ置キ黑ク熟スルヲ云、醂柹ハサワシガキ、漆柹ヲ灰汁ニ浸シ、或ハ水ニ浸シ、澀味ヲ去タルヲ云、肉柔ニ爛テ皮硬シ、十月ニ多シ、故ニ京師ニテハ十夜ガキト云、如木鼈子仁ト云ハ、大和ガキノ核ヲ云、他柹ノ核ハ長シテ相似ズ、如棵ト云ハ大和ガキヲ云、八稜稍扁ト云ハ八稜柹(群芳譜)ナリ、俗名八王子ガキ、一名八百屋ガキ、タカノセ、(播州)ヤツミゾガキ、石見形大和ガキヨリ小ク色黃ニシテ、竪ニ八稜アリ、鹿心ハ鹿心柹ナリ、俗名イノキモ、一名フデガキ、石州人丸ノ社ノ旁ニアリテ名產トス、牛心柹ノ形ニシテ最小ナリ、折二錢ハ二錢ニ代ヘ用ユル錢ナリ、三錢ニ代ユルヲ折三ト云、猴棗ハサルガキ一名ヤマガキ、卽漆柹ノ形小ニシテ數多ク簇リ生ズル者ナリ、故ニセンナリガキトモ云、皮ヲ去テ乾柹トナスヲ、コロガキト呼ブ、城州宇治ノ名產ナリ、

柹餻カキヅキ、一名カキイリコ(讃州)カツコ、(筑前)漆柹ノ熟シタルヲ用、糯米粉ヲ雜ヘ、搗テ瓷トスルヲ云、又漆柹ノ未熟ナルニテ製スルハ、蒸シテ搗クト云、

〔雍州府志 六土產〕柹實 柹有雜品、其內以木練爲上、在木則練熟之謂也、多出自嵯峨、然不及頂妙寺柹、日蓮宗頂妙寺始在高倉通北、斯土地宜柹、形色風味異于他產、近世頂妙寺雖遷二條河原、其柹所々

君遷子（㮕棗、牛奶柹、丁香柹、紅藍棗、俗云蒲萄柹、又云猿柹）

本綱、君遷子、其木高丈餘、類柹而葉長、結實小而長、狀如牛奶、熟則紫黑色、中有汁、味甘濇、
一種小圓如指頂、大者名丁香柹、味尤美、
按、君遷子、俗云蒲萄柹也、其實附生葉背朶梗而狀似柹、有蔕大如蒲萄、味澀經霜熟紫黑色稍甘、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一山果〕柹（カキ 和名抄）　一名赤實果（典籍便覽）　凌霜長者（在田錄）　凌霜侯（同上）　珍
椑（事物異名）　火柹　圓花（共ニ同上）　金虬卵（蔬菓爭奇）　蒩虬卵（名物法言）　七奇果（同上）　金液漿（事物紺珠）　火傘（同
上）　歟柹（尺牘雙魚）

品類多シ、和產二百餘種アリ、集解ニ載スル所ハ少シ、蘇頌ノ說ノ紅柹ハゴショガキ、一名コネリ、ガキ、大和ガキ、元來和州五所ト云地ヨリ出ル者名產ナリ、故ニ五所ガキトモ大和ガキトモ云フ、今ハ地名ヲ改テ五瀨ト云、其柹形扁ク大ニシテ、四ツニ筋アリテ四角ニ見ユ、蔕モ四角ナリ、故ニ一名方柹（事物紺珠）方蔕柹（汝南圃史）ト云、此柹核少シ、上品トス、黃柹ハオムロガキ、一名スキトヲリ、（大坂）大サ二寸許ニシテ、竪ニ微シ長ク、熟スレバ皮黃色ニシテ白粉アリ、京師御室ノ地ニ多シ、故ニ名ク、朱柹ハチヨボガキ、一名チヨボイ、チヨツボリ、形小ク一寸許ニシテ色赤シ、一名火珠（鎭江府志）椑柹ハキザハシ、軟棗ハシナノガキ、即君遷子ナリ、共ニ次ニ本條アリ、宗奭ノ說ノ著蓋柹ハエンザガキ、一名シウタガキ（越中）レンゲガキ、形朱柹ヨリ大ニシテ、蔕ノ處肉周リニ出デ、圓座ヲシキタルガ如シ、故ニエンザガキト云、形ニ圓ナルト微長ナルト二種アリ、圓ナル者ハ初ヨリ甘シ、長キ者ハ初澀ク、熟シテ甘シ、牛心柹ハフデガキ、一名フデゴネリ、ヲソゴネリ（紀州）長サ二寸半許、濶サ二寸弱ニシテ、頭尖リテ筆頭ニ似タリ、是キザハシノ內ニテ、靑キ時ヨリ澀味ナク食フベシ、十月ニ出ヅ、蒸餅柹ハヒラゴネリ、是大和ガキノ一種、大ニシテ扁ナル者ナリ、味澀キ者多シ、塔柹ハミノガキ、即漆柹（シブカキ）ノ中、形長大ナル者ニシテ、濃州ノ名產ナリ、皮ヲ去リ乾シテ白柹トナシ、蜂谷（ハチヤ）ガキト

柿種類

柿は種類甚多し、その實の形方あり、圓あり、長あり、扁あり、大あり、小あり皆形により名を異にす、又產するところの地名を以よび、或は人名を以名づけしものあり、その葉霜後鮮紅愛すべし、是も若木は能そむるものなれども、實を多く結びしは、紅葉はえなく、實のらざる年はよく鮮紅なるものなり、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕柿かき 音士 胡國名鐵頭迦 柹本字 柿俗字 柹音肺削木片、 和名加岐 中略

按○凡柿品類甚多、和州五所之產最勝、今畿內皆移種之、體圓扁微帶方、微尖、肉紅色、味甘潤脆、其蔕處縮陷、形異於諸柿、其核小肥圓尖、俗呼名五所柿、或名大和柿、又云木練柿、事類合璧所謂八稜稍扁柿此類乎、畿內之外種之接之、皆不佳、試移種於薩州、甚澀不堪食、但甲州之產亞於和州耳、

○似柿 俗云太利 似五所而肥滿不扁者、味大劣、

○伽羅柿 一名透徹、柿形長圓微尖、肉中如沈香木理、而味脆美、亞於五所柿而上品、

○圓座柿 形大肥圓、附蔕處肉起作瘤者、所謂著蓋チョカツ柿乎、

○筆柿 形小而長、本草所謂鹿心柿 和名夜末加岐 是乎、

○樹練柿 形如鳥卵者、攝津丹波多出之、所謂雞子柿乎、

○田倉柿 形圓大於諸柿、而味澀、以爲醂柿、所謂塔柿乎、中略

○椑柿 漆柿 花椑 烏椑 青椑 綠柿 赤棠椑 俗云之布加木、此木老者心黑堅、俗名黑柿

本綱、椑柿乃柿之小而卑者、大如杏、他柿至熟則黃赤、惟此柿雖熟、亦靑黑色、擣碎浸汁、謂之柹漆、可以染罾扇諸物、不可與蟹同食、

按、柹漆シブ 俗云之布 造法、椑柿一斗去蔕、和水二升五合、碓擣盛桶、經宿搾之、渣亦和水經二日再榨之、其用甚多、染紙爲衣、爲行李裹、染布爲酒搾サカフクロ俗、或和墨塗篔、皆爲水不易朽、或漆塗之下先用柿漆、凡柿漆夏月焦枯難貯、茄子切片可投入、又流柿漆於川上、則鯔鯽大醉浮出、

柿名稱

古事類苑

植物部十

木九

〔本草和名　十七菓〕柿〈仁諝音仕〉鳥柿、鹿心柿〈不可食〉椑〈楊玄操音卑、色青、巳上三名出陶景注〉火柿〈敦毒〉軟熟柿〈解酒毒、出蘇敬注〉稬子〈音而兗反、出崔禹〉柿一名錦葉、一名蜜丸、一名朱實〈以上三名出兼名苑〉和名加岐。

〔倭名類聚抄　十七菓〕柿　說文云、柿〈音市、和名賀岐〉赤實菓也、

〔箋注倭名類聚抄　九菓〕段玉裁曰、言果又言實者、實謂其中也、赤中與外同色、惟柿、李時珍曰、柿高樹大葉、圓而光澤、四月開小花、黃白色、結實青綠色、八九月乃熟、

〔日本釋名　下木〕柿　あかき也、其實も葉もあかき故也、

〔倭訓栞　前編六加〕かき〇中略　柿は實の赤きより名を得たるにや、葉も又紅葉す、伊勢家集に、柿の紅葉に歌をなん書たりけるといへり、爾雅翼に、柿落葉肥大可以臨書とみえたり、花鏡に此を自然箋といへり、

〔夫木和歌抄　二十九柿〕柿　民部卿爲家

秋くれば山の木のはのいかならんそのふのかきはもみぢ去にけり

〔古今要覽稿　草木〕柿

柿のもみぢは伊勢家集にみえしぞはじめなるべき、西土にても柿の霜葉を愛せるよし、酉陽雜俎花鏡等に霜葉可玩と、これ七絕の一なり、柿は實の赤きより名を得たるにや、葉も又紅葉す、和訓

アリ、小穗ヲナス、蕾(ツボミ)ハ粟粒ノ如ク、黃白花開クモノハ、緂木(チヂギ)花ノ如ニシテ小ク、白色後圓實ヲ結ブ、大サ二分許、冬末春初熟ス、白色ニシテ紫ノ縱條多シ、故ニ白ムメモドキト云、葉ハ冬ヲ經テ枯レズ、

氣甚シ、初夏莖梢ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、四瓣、或ハ五六瓣等シカラズ、色黃ニシテ內ニ毛アリ、花後實ヲ結ブ、大戟ノ實ニ似テ大ナリ、

磯松

增、山礬葉ヲ採リ煎ジテ黃汁ヲ取リ布ヲ染ム、又筑前博多ノ人、寬永ノ初年朝鮮人ノ傳ヲ受テ、コノ葉ヲ煎ジテ糯米ヲ染テ糕トシ、四角ニ切テ賣ル、淡黃色ニシテ少ク香アリ、是ヲ食スレバ口中冷テ味美ナリト云、大和本草ニ見ヘタリ、

〔草木六部耕種法十 需花〕磯松モ甚ダ珍奇ナル者ナリ、此者ハ南國暖地ノ海岸ナル岩間ニ自ラ生ズ幹ハ蘇鐵ノ如ク鱗形(ウロコガタ)アリ、細枝ヲ生ジ、其葉ハ石竹ニ似テ圓ク、九月下旬ニ至テ花ヲ開ク、其形狀櫻ノ花ノ如クニシテ黃色ナリ、此者ハ讓リニ移シ植ルトキハ、卽チ枯ル、此レヲ植ル法ハ、白沙ト埴土ヲ等分ニ合セテ、蛤蜊(アサリ)ノ自然汁ニテ適宜(ホドヨ)ク煉リ、此ヲ鉢ニ盛リ、其中ニ植エ、毎日乾燥ザルヤウニ、蛤蜊ノ自然汁ヲ澆ギ掛ルトキハ、半月許ノ間ニハ活著(オヘツク)モノナリ、既ニ活テ新葉ヲ生(フク)ニ至テハ、常用ノ水ヲ澆グモ宜シ、盛養水ヲ淡薄クシテ澆ゲバ、殊ニ能ク繁榮ス、且ツ枝ヲ播ニスルモ活モノナリ、九月ヨリ能ク温養シテ、冬ハ閉藏法ヲ行ヒ、三月ニ至リ塘(ムロ)ヲ出スベシ、

鼠取樹

〔和漢三才圖會八十四 灌木〕鼠取樹(ねずみとり) 俗稱 正字未詳

按、鼠取樹遠州竹林中多有之、高一尺許、如山橘樣而葉似弓弦(ユヅリ)葉、長三四寸、背莖有細刺、觸之人刺入皮膚難脫、不知何因名鼠取乎、蓋摘葉用覆置天井上、則鼠不敢走、若栗棘能避天井鼠之類爾、秋結赤實、大三倍似山橘實、余國此樹未有矣、

杜莖山

〔重修本草綱目啓蒙十三 毒草〕常山（中略）

附錄、杜莖山、ウバガ子モチ、シロダモ、天竺桂ノ一種ト同名 白ムメモドキ、ムメモドキノ白實ノモノト同名 ミカドガシハ、種樹家 カシバラン、同上 ウバガ子サウ、カシラン、勢州 小木ナリ、山足樹下ニ多シ、長三四尺、多ハ山崖ニ生ジ下垂ス、嫩ナル者ハ直上シ生ズ、莖ハ圓ク、葉ハ槠葉ニ似テ柔ナリ、莖葉深綠色、秋葉間ニ花

の用に入る、因て此名あり、いかやうの色に染まるにや聞ん事を冀ふ、如此問ありて答なければ、本邦の山礬の香の有無は詳ならざれども、上にいふ肥後の人朝鮮人の此方のそこめばを見て、これにて染ぬれば、鮮黄なりとて、その敎によりて、今に果子を製して、名產となりぬれば、花の香の有無は、春蘭も西土にては、香の馥郁たるものなれども、本邦の產は香のをとれるがごとくなるべし、山礬は的當の物なるべし、岩崎常正が所寫の山礬を見るに、其葉巵子葉に似て鋸齒あり、時珍の說に、其葉似巵子葉生不對節、光澤堅强略有齒といふに附合せり、その花は二寸許の穗、葉頂に五六條出て、五瓣の小白花を開く、形梅花のごとくにて三分許、一條十五六輪あり、然れども集解に穗をなすとは見へざれども、繁白如雪といひ、又花鏡にも著白花細小繁といへば、數條をなさねば繁とはいはれまじ、又花を開くを本草綱目秘傳花鏡ともに三月開花といへり、花信風には、大寒三候に配せり、また群芳譜の花月令、十二月梅蕊吐山茶麗、水仙凌波茗有花、瑞香郁烈山礬甠發といへるは、小寒一候梅花、二候山茶、三候水仙、大寒一候瑞香、二候蘭花、三候山礬といふにはかなへり、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕山礬　トチシバ筑前　ソメシバ　ヲコシゴメシバ　ハイノキ共同上　ヤマキ豐前　シマクロギ日州　クロバイ肥州　アクシバ　ハナモチ宇治城州　ハナシキミ同上、修學院村、　一名海桐花群芳譜　小白花同上　梅弟名物法言　米囊事物紺珠　九里香物理小識　幽客典籍便覽

山中ニ生ズ、高サ一二丈、枝條婆娑タリ、葉冬ヲ經テ凋マズ、形柃葉ニ似テ濶ク、深綠色ニシテ光リアリ、互生ス、春葉間ニ花ヲ開キ、穗ヲナスコト二寸許、イヌザクラノ花ノ如シ、五瓣白色黃蘂香氣アリ、大サ三分許、

集解、芸香ハクサノカウ、和名抄　ヘンルウダ蠻種ナリ、花戶ニ多シ、扦插シテヨク活ス、葉ハマツカゼグサノ葉ニ似テ、小ク厚ク白色ヲ帶ブ、臭

〔古今要覽稿草木〕そめしば　山礬

とちしば、一名そめしば、一名をしこめしば、一名はいのき、一名やまき、一名しまくろき、一名くはい、一名あくしば、一名なもち、一名はなしきみ、(已上十名本草綱目啓蒙所載)漢名山礬は花信風大寒三候に配し、西土にては梅と共に稱して、梅是兄山礬是弟といひて稱すれども、皇國にてはいまだこの花を稱せず、山礬の名は宋の黄庭堅が名づけし物なり、山谷詩集に、江湖南野中有一種小白花、木高數尺、春開極香、野人號爲鄭花、王荊公嘗欲求此花栽、欲作詩而陋其名、予請名曰山礬、野人采鄭花葉以染黄、不備礬而成色、故名山礬といへども、山礬の名高くして、本草綱目にも山礬を先とす、佐藤成裕曰、肥後の人朝鮮の人に習ひて、この莖葉を燒灰汁となし、糯米を漬る事一宿にして飯となし乾し、餄にてかため、果子とす、其色鮮黄にして美なり、故にこの木を方言あくしばといふ、本草綱目啓蒙あくしばの名あれども、何國の方言ともなし、又栗本瑞仙院の説には、山礬しや〳〵きし云、飯を染るは此葉なり、金黄色となる、是筑前の果子屋のなす所なりといへば、筑前にても製すると見へたり、本草綱目啓蒙には、山礬にて物を染る事は載せず、又松間栗答云、(この書は黒田侯より草木鳥獸等の事を問答せし書にて、八九卷もあり、)蒙贈示大獻不過之、山礬始てこれを覩る、貴邦の土名トチシバ、又ソメシバなる由は兼て聞けり、貴邦に多くありと云によりて、一樹一本を乞奉るに、相州小磯驛小山、及武州神奈川驛の小山にて、先年御覽ありたる由、其地にて探索せば得易かるべし、其木を碇と見おぼへざればなり、今般其枝葉を親く見たるによりて、予は其樹を一覽せばそれと識ん、他人を以捜索せば、其方言も知らるべし、又冬春は形も異なるべし、捜索し難かるべし、唐山にては梅花水仙と幷に賞すと聞けり、花五瓣聚り開、香氣馥郁遠く人を襲ふ、故に七里香の名あり、今聞に本邦に此樹花さけるを近く嗅に香氣なしと、然れば別物乎、國異なるによるにや、貴邦のもの野梅と同時に花ありて、香氣の賞すべきもの有や、花狀の圖幷に其說をきかまほし、礬を不用して染もの

移于此、〇中略

按山礬未詳蓋沈丁花之類也、而曰似梔子類、凡梔子葉有齒與無齒有二種、山礬葉有齒、沈丁花葉似無齒梔子葉、有花四出與大出、色白與淡紫、予有與無之違

〔本草一家言二〕山礬　一名鄭花、一名玉蘂花、一名七里香、一名海桐、和名登知柴、筑前福岡方言也、矮木葉似梫木、色帶黄、春間開小白花、芬芳勝瑞香、采其葉染黄不借礬而成、故黄山谷名山礬、西土之人甚貴重之、然本邦人嘗不識之、撫州府志論唐建昌宮玉蘂花、即此花也、又一種稱梫木者、花葉形狀全同山礬、而有圓葉尖葉之二種、但以花不香為異已、此又山礬下品、而益軒翁大和本艸以瑞香花為山礬者誤矣、

〔本草一家言二〕山礬　唐昌觀玉蘂花記　宋程大昌

唐昌觀玉蘂花長安惟有一株、或詩之曰、一樹瓏鬆玉刻成、則其花葉形似略可想矣、春花盛時傾城來賞、至謂有仙女降焉、元日皆賦詩以實其事、則為時貴重可知矣、曾端伯曰、韋應物帖云、京師重玉蘂花比至江南漫山皆是土人取以供染事、不甚愛惜、則是江南有花瓏鬆而白、其葉可用以染者、真唐昌之玉蘂矣、山谷曰、江南野中有一種小白花、木高數尺、春開極香、野人謂之鄭花、王荊公嫌其名、予請名曰山礬、此花之葉自可染黄、不借礬而成色、故以名、又高齋詩話曰、玉蘂即今瑒花也、予按、瑒雉杏反玉圭名也、瑒鄭音近而呼訛耳、吾鄉又呼鳥朕鄭瑒音亦相近、知一物也、江南凡有山處即有此花、其葉類木犀而花白心黄、三四月間著花、芬香滿野、人家籬援皆斫其枝帶葉束之、稍々受日、葉遂變黄、取以染不藉礬石自成黄色、則魯直之言信矣、至僅高二三尺者、蓋土人不以為材、梢可燃燎烝樵之、不容其長、惟長安以為貴異、故其幹大於他處、非別種也、予家跳之西有山礬一株、高可五七丈、春花盛時、瓏鬆耀日如冬雪、礙積闐一里、人家香風皆滿比、予幸未得弟而歸、則為人所伐矣、乃知唐玉蘂正是人能護養所致、非他處無此之木也、

ミソクサヲ木黎蘆ニ充ツル古説ハ穩ナラズ、ミソクサハ一名ウジクサ、ヲジクサ、ミソナラシ雲州、小木ノ如シ、春新葉ヲ生ズ、形細長ク南天燭葉ニ似テ、三葉一處ニ攅リテ胡枝子(ハギ)葉ノ如ク、黒ミテ光リアリ、此葉能蟲ヲ殺ス、故ニ此葉ヲ末トナシ味噌醬油ノ中ニ入レバ蟲生ゼズ、蟲生ジテ入レバ其蟲死ス、木ノ高サ一二尺、肥地ニ移シ栽ユレバ三四尺ニ至ル、枝多ク繁リ葉互生ス、夏枝ノ末ゴトニ、長穗ノ抽テ枝ヲ分ツ、長サ七八寸、コレニ細カナル花アリ、胡枝子花ノ如ニシテ紅白色、後莢ヲ結ブ、長サ一寸半、濶サ三分許、形扁薄綠色ニシテ毛刺多シテ衣ニ粘著ス、中ニ扁キ豆アリ、冬ニ至テ葉枯ル、漢名詳ナラズ、

綟木

〔重修本草綱目啓蒙 二十四喬木〕綟木　ネヂギ　ネヂノヤ丹後　アカネヂ若州　アカヅネ泉州　ツメアカ　カスギ　カシヲシギ共同上　カシヲズミノキ京　ヌリデ江州　カツヲシミ三才圖會　カスヲシ播州　カズヲシミ薩州　カシヲノキ城州岩倉　ハセワセ同上　カセホセ同州加茂上　サルノサイバシ同上　サルナメシ水戸　サルメラカシ肥前　サルスベリ伊賀　カセウシギ大和本草　カシモドキ備前　カスウギ能州　ヌクヌクノキ　アサメノキ共同上　メシツブノキ京　メシツブノハナ同上　シヤウジノキ越後　ヌリバシ勢州　キツネノヌリバシ江州　ハトノアシ備中　アカメ

山中ニ多シ、小木ニモ花實ヲ生ズ、木大ナレバ、皆子ヂレテ直理ナラズ、新枝ハ赤シテ光リアリ、朱漆ノ如シ、故ニヌリバシト云、春葉ヲ生ズ、形土牛膝(イノコヅチ)葉ノ如シ、互生ス、夏月枝梢ゴトニ穗ヲナシ、下垂スルコト三寸許、花ハ筒子ヲナス、濶サ一分、長サ三分許、白色ニシテ飯粒ノ形ノ如シ、花落テ蔕中ニ小子アリ、秋ニ至リ葉落盡テ、子穗ナヲ殘レリ、コノ枝ヲ炭トナシ、漆塗ノトギ出ニ用ユ、コノ炭ヲカシラズミト云フ、

山礬

〔和漢三才圖會 八十二香木〕山礬(さんばん)　芸香　七里香　柘花　掟花　春桂　瑒花　本草灌木類有之、今改

木藜蘆

薄く切り、眞の木瓜と呼び賣る、僞物ありといへども、樝子の主治云に、功與₂木瓜₁相近とも見えたれば、木瓜の代用となして佳なるべし、又このゑどみをあせびとなせば、山野ともに自生多く、千種の花よりもことかはりたる色にてめづべきなり、又この不時花は六七月開くは、春さく花に異ならざれども、九月の頃開く花は其蕚綠色にて、花の色は春よりも艶なり、衆草のおとろへたる中に、ゑとみの花の一二輪開たる、王安石が萬綠叢中紅一點、動₂人春色不₁₂須₁多といへる句のかなへるは、此不時花に勝れるはなし、尤この句は春のことなれども、秋はさらなり、○下略

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕梫木 アシミ萬葉集 アセボ古今通名 馬醉木上共同 アセミ古歌仙 イワモチ同上薩州 アセビ枕草子土州 アセモ江戸 アセブ播州豊前 エセビ勢州 ヨシミ筑前 ヨシミシバ同上 ヨネバ豊後 アシブ雲州 ヒサヽキ大和本草 ドクシバ讃州 カスクイ備前 ヲナザカモリ丹後 ヲナダカモリ同上 チヤシバ長州 アセボシバ越前 ヨセブ豊前 ゴマヤキシバ藝州 シヤリシヤリ加州城上
山中ニ五六尺ノ小木多シ、年久キ者ハ丈餘ニ至ル、葉形細長ニシテ鋸齒アリ、柃ノ葉ニ似テ薄ク硬シ、互生ス、冬凋マズ、春枝頂ニ花アリ、色白ク緌木花ノ形ノ如シ、穗ノ長三寸許、多ク集リ垂ル、後小子ヲ生ズ、亦緌木ノ子ノ如シ、若シ牛馬コノ葉ヲ食ヘバ醉ヘルガ如シ、故ニ馬醉木ト云、鹿コレヲ食ヘバ不時ニ角解ス、又菜園ニ小長黑蟲ヲ生ズルニ、コノ葉ノ煎汁ヲ冷シテ灌グ時ハ蟲ヲ殺ス、

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕木藜蘆 ハナヒリノキ アクシヨギ加州
東北國ニ多シ、江州ニモアリ、小木ナリ、高サ尺ニ盈ズ、或ハ四五尺、葉ハ形長シテイハナシノ葉ニ似テ、短ク毛ナシ、互生ス、夏ニ至リ穗ヲ出ス、長サ四五寸、小白花ヲ開ク、葉ヲ採リ末トナシ、鼻中ニ入レバ嚔ル故ニ名ク、廁中ニ入ルレバ蟲ヲ殺ス、

〔大和木草十二花木〕馬醉木　葉ハ忍冬ノ葉ニ似タリ、又シキミノハニ似テ細也、味苦ク澀ル、春ノ末青白花開テ下ニサガル、少黄色ヲ帶ブ、微毒アリ、馬此葉ヲクラヘバ死ス、西土ノ俗ハ此木ヲヨシミシバト云、

〔古今要覽稿草木〕あせびあしみ　馬醉木

あしび、一名あしみ、一名馬醉木、萬葉集漢名梫木、處々山中自生多くして、今花戸莽草の代りとなして墳墓に備ふ、花ある時は挿花にも用ふ、これ右の山礬の類にて、花信風大寒三候の山礬と共に稱すべし、松岡玄達の一家言に、一種稱梫木者、花葉形狀全同山礬、而有圓葉尖葉之二種、但以花不香爲異已、此又山礬下品、而益軒翁大和本草、以瑞香花爲山礬者誤矣、また和漢三才圖繪にも、山礬未詳、蓋沈丁花之類也といひて、是となすことなし、玄達の山礬、一種梫木に充しは、これ本草綱目灌木類山礬の條下に梫木を出せり、この梫木にあせみを充るを是とすべし、蘭山も梫木に充たり、あせみの苔は早く冬の中より生じて白し、故にこれを插花とす、その開くは雨水より啓蟄盛なり、此花も穗をなして長さ二三寸垂て開く、その狀丸くして白く先黄なり、其花開く時に、去年の實も落ずして存するもあり、葉は柃に似て細し、其葉の色に黄色を帶て薄きあり、又深綠色なるあり、花は異ならず、又眞淵の說にあせびしとみは木瓜の類にて、脚氣の藥に用て功ありといへり、又下總にては鹽藏して、梅干のごとくに食ふ者多しといへり、しとみは本草綱目山果類木瓜の條下に出す、樝子一名木桃、一名和圓子にして、和名しとみ、一名のぼけ、一名くさぼけ、又こぼけちなしぼけとも呼て、處々山野生せざる事なく多くあるものにて、本草綱目啓蒙にも山野に多し、高一尺許叢生す、廣原の者は三四寸に過ぎず、山中の者は三四尺に至る、枝に刺多し、葉は貼幹海棠に似て小し、春新葉出て後花を開く、形小にして、五瓣重瓣なる者稀なり、大さ八分許、紅黄色、夏秋も不時花あり、花後圓實を結ぶ、夏に至て熟す、大さ一寸許、頭尾共に凹なり、藥舖には橫に

セビ、枕草子土州アセモ、江戸アセブ、播州豊前アセビ、勢州ヨシミ、筑前アシブ、雲州など猶あれど愛に略すあれど、是に非ず、かかれば万葉なるハ樝子にて木瓜も通用し、堀川百首なるは全く樝子をよめりと治定したらむこそよからめ、

〔萬葉集七雜歌〕詠井

安志妣成、榮之君之、穿之井之、石井之水者、雖飲不飽鴨、

〔萬葉集十春雜歌〕詠花

川津鳴、吉野河之、瀧上乃、馬醉之花曾、置末勿勤、

〔萬葉集十春相聞〕問答

春山之、馬醉花之、不惡、公爾波思惠也、所因友好、

〔萬葉集二十〕伊蘇可氣乃、美由流伊氣美豆、氐流麻埿爾、左家流安之婢乃、知良麻久乎思母、

〔新撰六帖六〕あせみ　　家良

よしの川たぎつ岩根の白沙にあせみの花も咲にけらしな

爲家

たきの上のあせみの花のあせ水にながれてくいよつみのむくいを

〔夫木和歌抄二十九あせみ〕あせみ　　光俊朝臣

おそろしやあせみの枝を折たきてみなみにむかひいのるいのりは

〔和漢三才圖會八十四灌木〕馬醉木あせほのき　阿世美　俗云阿世保

按馬醉木生山谷、高者二三丈、小者一二尺、皆枝葉茂盛、其葉狹長、微鋸齒淺綠色、硬而攅生於枝椏、九月出花芽、春開小白花、作房結子、亦作房、一子中細子多、人家庭砌植之、以賞四時不凋、相傳馬食此葉則醉、故名、

〔碩鼠漫筆　一〕馬醉木の說

万葉集卷二(二十六丁左)に、磯之於爾生流馬醉木乎云々、卷八(十五丁左)に山毛世爾咲有馬醉木乃云々、卷十(十右)に、瀧上乃馬醉之花曾云々、又(十四丁右)奧山之馬醉花之云々、又(十七丁右)春山之馬醉花之云々、卷十三(二右)に本邊者馬醉木花開云々と見えたるを、先達の考へにて安之比と點を改めたるは、げに然る事也、さるは卷七(十右)に安志妣成榮之君之云々、卷二十(六十二右)に安之婢乃波奈毛左伎爾家流可母、又(同丁左)佐伎爾保布安之婢乃波奈乎云々、又(同丁左)氐流麻遲爾左家流安之婢乃云々とあるに據てなりけり、偖冠辭考云、花の照にほふ色も、春深く野山にさくなども、茵に似たるさまによめるを思へば、木瓜にぞ有ける、いかにぞなれば、其木瓜は字音にて、こゝの語ならず、東人のしどみと云て馬の毒也とする物ぞ是なる、彼伊波都々自を羊躑躅とするに對へて、安志妣を馬醉木と書るにてもしるべし、偖馬の是を喰へば醉てあしなへと成なるべし、其あしびとも、しどみともいふ語を考ふるに、病に志良太美あり、貝に志多太美、草に毒だみと云、太美は病の事なり、扨其太美と度美と音の通ふに依て、志度美は安志太美の安を略き、(太と度は同音なり)安志妣は安志太美の太を略けるなり、(妣の濁と美の清とは常に通へり)後世の歌に、取つなげ玉田横野の放れ駒つゝじまじりにあしみ花さく、○(中略)散木集註に、今案ずれば、あせみつゝじは共に馬毒なり、万葉集には馬醉木とかきてあせみともよみ、つゝじともよめり、可付何說乎、又ともに毒なればつゝじのをかにあせみさかばかたがたあしければ、かくの如くよめるか(以上)と見ゆれど、馬醉木には總てツヽジの點のみ見えて、アセミの點はふつになき事、既に上件に載たるが如し、但羊躑躅の漢名を思へば、つゝじも實に馬の毒なるべし、偖又アセボをアセミとしたるも、やゝ古き事とおもはる、新撰六帖第六衣笠內大臣の歌に、吉野川瀧つ岩根の白妙にあせみの花も咲にけらしな、とあるを見るべし、されば彼本草啓蒙も亦此誤りを受て、卷三十二(灌木類)に梫木アシミ(萬葉集)アセボ(古今通名)馬醉木(共上同)アセミ(古歌仙)ア

アルラン、萬葉ニハ馬醉木ト書テアセボトヨムト云リ、馬此ノ木ノ葉ヲ食テ醉テ死ケル也、毒ト云ハ此事ヲ云ニヤ、人ニモ定メテ毒ナル歟、但シ未ダ其由ヲ不レ見侍リ、萬葉歌云、取繫、玉田横野、放馬、躑躅枝、馬醉木花開、　此外、銀杏梔子ナンドハ和名ニモ不レ見歟、

〔冠辭考一〕あしびなす　さかえしきみが

万葉巻七に詠井安志妣成、榮之君之、○中略安之妣は巻二十に、中臣清麻呂の山齋にて伊蘇可氣乃、美由流伊氣美豆、氐流麻遲爾、左家流安之婢乃、知良麻久乎思母、巻十に、春山之、馬醉花之不惡、公爾波思惠也、所因友好、この外あしびをめで、手折とも、袖にこきれんともよめり、かくて花の照にほふ色も、春ふかく野山にさくなども、茵に似たるさまによめるを思へば、木瓜にぞ有ける、いかにぞなれば、其もけは字音にて、こゝの語ならず、東人のしどみといひて、且馬の毒也とする物ぞ是なる、かの伊波都々自を羊躑躅とするに對へて、安志妣を馬醉木と書るにてもしるべし、さて馬のこれを喰へば、醉て足なへとなるべし、其あしひとも、しとみともいふ語を考ふるに、病に志良太美あり、且に志多太美、草に毒だみといふ、太美は病の事也、さてその太美と度美と音の通ふに依に、志度美は安志太美の安を略き、太と度は同音也安志妣は安志太美の太を略ける也、妣の濁と、美の清とは常に通へり、後世の歌に、とりつなげ玉田よこ野のはなれこまつゝじまじりにあしみ花さくとよまるゝもこれ歟、又後の俗のあせぼといふものをもて、古へのあしみを思ふは、いと誤也、

〔倭訓栞中編一〕あせみ　新撰六帖に見えたり、あせぼ又あしびとも見ゆ、万葉集の馬醉木是也ともいへり、今いふえせび也、四國にてあせびといひ、豫州浮穴郡にあせび谷あり、西州にてよしみしばといふとぞ、えせびに毒あり、されど馬の醉ものともきこえず、又万葉集によめる形狀にも合がたし、たゞ此木に生たる茸など、必ず人を殺す事は親しく見たる所也、大神宮の禰宜荒木田氏は歲首に是を飾る、繁茂を祝する也、

馬醉木

花となすは、この茵芋なり、其形狀は尙謙の說の如し、又一種綠蕚の種あり、本草綱目啓蒙に見えたり、啓蒙にもれたるは、栗本瑞仙院松問栗答云、みやましきみに似て異なり、箱根山中にあり、此みやましきみの一種、瑞香葉樣物なり、葉は枝端にあり、四葉六葉一所に攅生す、これ本性なり、漢名茵芋此もの一種濶大の物あり、葉の蔕紅色美なり、花實なき時はみやましきみなること的識する者なし、葉紋理なく小皺ありて、瑞香葉に似たり、表深綠にして裏淡しと見えて、圖を載たり、其葉瑞香の葉に似て長大なり、實の赤熟したる枝なり、この瑞香葉の種は蘭山いまだ見ざるにや、啓蒙にのせず、また正二月枝頭に花あり、穗をなすこと二寸計、花の大さ三分五瓣白色と見ゆれども、五瓣にはあらず、尙謙の說の如く、四瓣にして花心は綠色なり、此茵芋山礬馬醉木の三種は、共に白小花を開きて、皆穗をなすなり、その開花も同時なれば、こゝに載れども、古の茵芋につゝじの名あるは、卽赤つゝじにして、今の山躑躅なりや、和名抄に羊躑躅茵芋山榴と次第して、山榴和名阿伊豆々之、山石榴也とあれば、本草綱目山躑躅の一名にして、又紅躑躅とも映山紅ともいへり、これはやまつゝじと呼て、山に自生の種なり、この茵芋につゝじの名あるによりて、寺島良安も、茵芋和名有躑躅之號未詳、今躑躅類中無結實者、また茵芋莽草皆古人治風藥爲妙品、近世罕知といひて詳ならざりしを、今は庭園に植て花は春早く開き、實は秋より染なし、赤紅にしてめづべきものなり、此茵芋の名は古く神農本經より見えて、皇國にても本草和名、和名類聚抄にも見えて、につゝじをかつゝじと銘せしは詳ならざれども、茵芋は今いふみやまきみにして、その開くも山礬馬醉木と同じ、花彙にも冬梢間に五出碎花を著くと、その冬開くといへるは、冬より蕾を生ずれば可なり、又五出とあるは誤寫なり、圖には卽四出に書たり、

〔下學集下草木〕馬醉木(アセボ)馬食此葉則死、故云馬醉木、有和歌云、取繫玉田橫野放駒躑躅馬醉花發云々、

〔塵囊抄六〕アセボト云木ノ毒ナルト云ハ何ゾ、幷其字如何、　此木ハ和名ニモ不載侍歟、定テ本名

茵芋

〔武江產物志遊覽〕躑躅（つゝじ）、石巖（きりしま）、　染井植木屋（立夏より三日頃）　大窪邊　日暮里　上野穴稻荷　音羽護國寺　千手院（千だがや）

〔新撰字鏡木〕茵芋　岡豆々志、又云、伊波豆々自、

〔倭名類聚抄木二十〕茵芋　本草云、茵芋、（因于二音、和名仁豆豆之、一云乎加豆豆之、）

〔和漢三才圖會九十五〕茵芋　茵蕷　莞茛　卑共　和名仁豆々之　一云乎加豆々之

本綱、茵芋雍州絳州華州杭州有之、春生苗、高三四尺、莖赤葉似石榴而短厚、又似石南葉、四月開細白花、五月結實、

莖葉（苦温有毒）　茵芋莽草皆古人治風藥爲妙品、近世罕知、

按茵芋和名有躑躅之號、（未詳）今躑躅類中無結實者、

〔物類品隲三〕茵芋　和名ミヤマシキミ、所在ニアリ、弘景曰、莖葉狀似莽草而細軟、頌曰、春生苗、高三四尺、莖赤葉似石榴而短厚、又似石南葉、四月開細白花、五月結實ト云モノ是ナリ、

〔古今要覽稿草木〕につゝじ　茵芋

につゝじ、一名をかつゝじ（和名抄）みやましきみ、（通名）漢名茵芋も、上に出す山礬馬醉木と同じく、大寒前よりも蕾を生じ、開くは雨水より啓蟄盛をなす、岡村尚謙曰、茵芋爾都都之、（本草和名）乎加都々之、（同上）俗に美也末之岐美、此小木也、高一二尺、葉似莽草、兩兩相對、冬不凋、作穗、開花四瓣白色、後結實、生靑熟赤、大如南天燭子、卽蜀本圖經日華子所註是也、諸國深山幽隱之地有之、其乎加都都之、別是一種、勅號記、茵芋乎加都都之、四月花白、本邦有赤紫白三種、又羊躑躅條云、之呂都都之生深山といへるは、躑躅のつゝじにして、この茵芋とは絕て別なり、茵辛の和名につゝじ、をかつゝじの二說有は、本草和名、和名類聚鈔ともに同して、共に羊躑躅の條下に附して、羊躑躅の和名いはつゝじ、もちつゝじといへば、つゝじの類と思へども、今花信風山礬の類となして、大寒三候より春かけての

映山紅

あらし山（白地にべに入のかすりとび）　二人しづか（うすむらさき中りん）　おそらく（さゞなみのごとし）　したくれない（くれない大りん）

きりかね（さくらいろ中りん）　たかさご（うす紫大りん）　おり入（くれない大りん）　かうやくれない（くれない中りん）

しんくれない（くれない大りん）　八でうくれない（こいくれない大りん）　はつれゆき（うす色大りん花のへり白し）　さつま紅（こいくれない大りん）

大萬葉（くれない大りんまんやう）　せんやう（くれないせんやう中りん）　萬葉（くれないまんやう大りん）　こくれない（くれない小りん）

そこ白（赤大りん花のそこしろし）　はごろも（赤小りん）　しよくかう（白地にべにのかすりいろ〱）　ひろ島しぼり（白に赤とび入大りん）

名月（あかし中りん）　べにしぼり（うす色にとびいり）　赤ちり（くれない中りん）　ゆき平（白小りん）

小紫（むらさき小りん）　ゆふさう（むらさき大りん）　こしな[illegible]（くれない大りんこしみのあり）　なにはしぼり（白に紫とび入大りん）

百萬（あかし大りん）　おいへ紫（紫中りん）　赤り月（あかし大りん）　白り月（白大りん）

とび入（白に赤とび入大りん）　きくきり（あか中りん）　あふみ（白大りん少かすりあり）　かつらぎ（白小りん）

あさぎ（あなおろし中りん）　おもだか（むらさき大りん〇下略）

〔和漢三才圖會九十五毒草〕映山紅（きりしま）　紅躑躅　俗云岐。利。之。末。

草本畫譜云、映山紅生滿山頂、其年豐稔、人競之、

按、本草綱目、山躑躅（山石榴杜鵑花）映山紅（紅躑躅）以爲一物、今別爲二種、凡躑。躅。葉形類桃及柳葉、映。山。紅。葉略帶圓形、杜。鵑。花。葉形比映山紅狹長、三種大異也、

映山紅花類杜鵑花而小、深赤色、單葉、三月開花、能映滿山、故名之、有大小二種、小映山紅開花最繁、藪枝條堪愛、今又有白花者、有單葉八葉千葉之數品、大抵二三尺、高者一二丈、以爲珍、薩摩日向山谷多有之、移種于諸國、彼地有霧島嶽、山頂燒起、且此花映山、故名之、

朝鮮載晉山世稿云、（太明成化年中、當本朝後土御門時）得日本躑躅數盆、及其花開、葉單而花瓣甚大、色類石榴、重跗疊蕚、久而不衰、其與我國色紫而千葉者、姸雖不啻若嫫母與西施也、上嘉賞之、命下上林園分植、外人秘莫能得、後一以種盆、一以種地、以試之、種地者凍死、而盆者無恙、數年之間枝條方盛、（按此杜鵑花或大映山紅之類也）

ゲテカゾフベカラズ、時好ニヨッテ變化百出スル也、山茶花(ツバキ)、菊牡丹、芍藥、百合ナドモシカリ、凡ツツジモ杜鵑花モ、沙ヲイミ、赤土アヅ土ニ宜シ、糞ヲイム、米泔ヲ時々澆ベシ、園史ニ、樹下陰處ニウフレバ青茂ス、豆餅ヲ水ニヒタシ、クサラカシテ、ソヽグベシトイヘリ、正月枝ヲ赤土ニ埋ミテ取木ニスベシ、花史曰、杜鵑花、春初披枝著地、用黃泥覆之、俟生根截斷、來年分栽、杜鵑花ヲサス法モ躑躅ニ同、

〔和漢三才圖會 九十五 毒草〕山躑躅(つつじ)　山石榴　杜鵑花　和名阿伊豆々之、今云左豆木、

本綱、山躑躅、處處山谷有之、高者四五尺、低者一二尺、春生苗葉淺綠色、枝少而花繁、一枝數蕚、二月始開、花如羊躑躅、而帶如石榴花、有紅者紫者五出者千葉者、小兒食其花、味酸無毒、

草木畫譜云、杜鵑花喜陰惡肥、天蚕以河水澆之、樹陰下放置則茂、葉色青翠可觀、有黃白二色、

一種有藤牽牛花、葉似躑躅、而花似山石榴而大、淡紫色、蓋藤者言色、牽牛花言形、

按、山躑躅高者五六尺、其花有白、有赤、有紫、有桃紅、有赤白襍開者、至三百餘種、四月始開、五月爲盛、人呼五月、稱佐豆幾、故名之、凡紀州遠州等山中、躑躅、山鵑花、其大木多、有高一二丈周二尺許者、攝州須磨一谷二谷至權現山、凡三四里許、遠州秋葉山麓乾川兩邊、亦三四里許、躑躅山鵑花甚多、夏月滿山頗如錦、凡正月折枝插地則活、攝州多田鄕圃人常栽之販市、又木株最堅、燒炭以爲圍炭、（圍者茶湯室名、訓曰加久井、）

〔地錦抄 三〕さつきのるひ（木、夏初中、）

松島（白地に赤とびいろいろ大りん）　高ね（うす色赤とびいり大りん）　源氏（うす色大りん花のへり白し）　吉野川（白地に赤とびいり大りん）

まがき（白に赤とび入ふたへ中りん）　かうえよく（とびくれない小りん）　さゞなみ（白地に赤とびさらさ大りん）入　はかた白（雪白りん）大

こふじ（くれない小りん）　にしきゞ（白地に赤とびいり大りん）　ふぢがさね（こふちの入重也）　ゆきくれない（こいくれない入重ひとへ大りん）

小ざらし（くれない小りん）　えほがま（白地にとび入さらさかのこあり）　むさしの（くれない大りん）　こきん（くれないひとへ楽たくさん咲）

山榴

名之、

〔箋注倭名類聚抄（十木）〕證類本草下品引、食之作食其葉、名之作爲名、本草和名與此同、唯無食下之字、陶又云、花苗花鹿葱、古今注云、羊躑躅花黃、羊食之則死、羊見則躑躅分散、故名羊躑躅、其說與陶少異、

〔萬葉集（七雜歌）〕羇旅作

山越而、遠津之濱之、石管自、迄吾來、含而有待、

〔和漢三才圖會（九十五毒草）〕羊躑躅　黃躑躅　老虎花　黃杜鵑　驚羊花　玉枝　羊不食草　鬧羊花

（鬧當作躅字）　俗云蓮華豆々之

本綱、近道諸山皆有之、小樹高二尺、葉似桃葉、三四月開花、黃色似凌霄花、而五出蕊瓣、皆黃而氣味皆惡、

花（辛溫有大毒）　羊食其葉躑躅而死

按、羊躑躅（和名以波豆々之、一云毛知豆々之、）據本草之諸說、則今云蓮華躑躅也、丹波及和州吉野山多有之、其木二三尺、高者五六尺、葉似楊梅葉而薄、有微白毛、三月開花五出、似凌霄花、一莖八九蕚、遠望之如蓮華、故名之、又有赤蓮華者、（蘇頌云、嶺南有深紅色羊躑躅者是矣、）凡躑躅之品類雖多、黃花者惟蓮華躑躅、豆其躑躅之二種也、而藕躑躅、岩躑躅等、亦一類、而花色不黃、

〔倭名類聚抄（二十木）〕山榴　纂名苑云、山榴、（和名阿伊豆豆之）即山石榴也、花與羊躑躅相似矣、

〔大和本草（十二花木）〕杜鵑花　躑躅ト一類別種ナリ、躑躅花落テ後、此花漸開ク、合壁事類ニ杜鵑ナク時始テヒラク、故ニ名ヅクトイヘリ、四五月花開ク、品類尤多シ、瓔珞ツヽジ、山中ニアリ、紫花小ナリ、枝ニ連リサキテ下リ垂ルヽ事、瓔珞ヲ垂ルヽガ如シ、樹ハワキノ杜鵑花ヨリ大ナリ、高一二丈ナルモアリ、冬ハ葉ヲツヽ、四五月ニ花サク、古昔ハ、躑躅杜鵑花ノ類多カラズ、近年其品類甚多ク出、ア

羊躑躅

䄾躑躅（俗稱俗云毛知豆豆之）

按、䄾躑躅葉淺綠色有細毛、枝少花繁、三四月開花、淺紅似桃花色、而一枝數蕚、其花及蕚觸手即黏如䄾、故名之、花形色不美、今人四月八日灌佛用之、或插竹竿供之、未知其據、但當此時甚多、故取其簡易耳、

一種有躑躅、名江戶万葉、似䄾躑躅、其花千葉而色濃、木黏爲異、

一種有岩躑躅（伊波豆豆之）葉花共小、花色深赤、

平戶躑躅（琉球躑躅）

按、平戶九州之地名、本出於琉球、四月開花、單瓣白、最易繁茂、其大者至一二丈、

一種有朝鮮躑躅、高五六尺、葉似樫葉、三四月開花、大如平戶躑躅花、而淡鼠白色潤澤最爲珍、

永來部躑躅

永來部、薩摩之南島也、出於彼土、甚暖、故如雖移種于畿內、怕寒難茂盛、其花赤大、經五六寸許、甚奇、

凡躑躅之種類最多、不下三百種、不能悉記之、

〔地錦抄附錄三〕正保年中以後渡來草木類、（中略）

琉球躑躅

〔佐渡志五物產〕躑躅　和名ツヽシ

山中ニアリ、加茂郡鷲岬村彈野ニハ殊ニ多ク、紅花アリ、白花アリ、黃花モマタ稀ニアリ、（中略）一種北山ノ南ノ崎ニ奇木アリ、樹葉トモニ躑躅ニシテ桃花ヲ著ク、草木ノ諸書ニ於テ見ルトコロナシ、天ノ物ヲ生ズル其測ルベカラザルコト斯ノ如シ

〔新撰字鏡木〕羊躑躅（毛知豆々自）

〔倭名類聚抄二十木〕羊躑躅　陶隱居本草注云、羊躑躅、（擲直二字、和名以波豆豆之、一云毛知豆豆之、）羊誤食之、躑躅而死、故以

大きり島くれない大りん　藤きり島ふぢ色小りん　かわり藤きり藤色中りん　二しゆんきり島きりしまのごとくこしみの有

櫻きり島さくらいろ小りん　めきり島くれない大りん　かこしまきりしまのごとし　べにきり島ほつこりと紅色

八重きり島赤せんやう小りん　中きり島くれない中りん　くちばきり島くちば色中りん　もゝきり島もゝいろ中りん

初きり島こいむらさき小りん　小てうきり島赤小りん　大きり紫こいむらさき大りん　銀だい赤中りん、こしみのあり、

金だい赤中りん、こしみのあり、　せいさん玉子色よりかき色なり、中りん、　ひとしほ紅色大りん、花形ゆりのごとし、　やうきひさくらいろ小りん

こけん萬葉あか八重中りん　やしほ花形白く丸くしてあつまりさく　かうばいくれない中りん　いさはいくれない大りん

しもふりだんもらろふたへ小りん　小ざくらあかし小りん　しやくま赤小りん八重　さんわううす紫中りん

りうきうしろし　ざい花形きりさげてさいのごとくあかし　江戸ざい是もきれさゝり色あかし　たなばた八重ひとへあかし

紫七夕紫大りん八重ひとへ　金しでしべはかりさきてたでのととじ色　ふさ金しで色あかしきりさげ　もちつゝじうす紫ト白ト二色大りん

せいがいはあか小りん　紫せいがいはむらさき小りん　玉や紫こいむらさき大りん　たいたん赤大りんふたへ〇下略

〔花壇綱目下〕躑躅異名の事

せんよ　かも紫　花月　まんよ　くわ山　おち合　しこん　ふさ紅　折入段　やしほ　身をしつめ　せんざん　八はし　明ぼの　金しで　朝がほ　三吉野　そし段　西行　はつ雪　御所紫　花車　對馬紫　せいはく　ざい紅　駿河万よ〇中略

右は躑躅の名なり、此外數多有之、あらましばかりしるし置なり、年々の二月中旬より、三月中旬までにしのぶ土を用、取木指木にする也、同じ木のうちにて、色たて咲出し、少づゝのかわり有て、名をあらため付るなり、

〔和漢三才圖會九十五山草〕豆萓躑躅(まめかうつゝじ)　俗云末女加良豆豆之

按、豆萁躑躅、深山巖石間有之、三四月開花、似美容柳花而黄色、其葉四時不凋、端卷反似豆空莢、故名之、丹波氷上郡之山中有之、

リ、ツヽジノ名トハスル也、或説云、羊ノ性ハ至孝ナレバ、見二此花赤蕚一、母ノ乳ト思テ、躑躅シテ折レ膝ヲ飲レ之、故ニ云レ爾共、此義難二信用一、又本草文ニ違ヘリ、但事廣ケレバ何ナル文ノ説ニカ、陁羅尼集經云、迦羅毘羅樹、唐ニハ云二躑躅一ト云云、花赤キ故ニ映山徑共云也、但順和名ニハ、山榴ヲバアイツヽジト點セリ、和名云羊躑躅、イハツヽジ、一云、モチツヽジ、茵芋、マツヽジ、一云、ナカツヽジ、山榴、アイツヽジ、予以二山石榴一也、花山榴羊躑躅相似云々、

〔大和本草花木十二〕躑躅　大小霧島、其外種類、近年甚多シ、カゾヘツクスベカラズ、各其名アリ、三月花ヲ開ク、山州攝州河州ニ多シ、山ニモ紫ツヽジ、ヨド川ツヽジ、紅ツヽジアリ、本草毒草羊躑躅ノ附錄ニ、山躑躅ヲノセタリ、凡躑躅杜鵑花ハ非レ草、小樹也、故今改爲二木類一、ツヽジハ新ニウフルニハ根ヲヨク洗ヒ、舊土ヲ去、細黄土ニウヘ、日ヲ掩ヒシバ〳〵水ヲソヽグベシ、根下ヲ堅クツクベカラズ、六月ニ新枝ヲ挾ムベシ、舊枝ニツラ子切テ、好土ニ挾シ、日ヲオホヒ、シバ〳〵水ヲカクベシ、細黄土ヨシ、凡躑躅杜鵑花、共ニ糞溺ヲイム、米泔魚汁ヲ時々ソヽグベシ、葉ニ水ヲソヽグベカラズ、根ニソヽグベシ、蓮華ツヽジ、花三月サク、花落テ葉生ズ、花黄ニシテ如二萓艸色一、花ハ重葉也、葉ツ子ノツヽジニ異リ、葉ノ頭圓ク柔ナリ、羊躑躅ハ、モチツヽジト云、黄花三四月ヒラク、高二三尺バカリ、葉ハ桃ニ似タリ、花大毒アリ、アサギツヽジ、葉ハ大ギリシマノ如ク、枝ハ蔓ノ如ク長シ、小木ナリ、花ハ綿花ニ似テ小ナリ、色アサギ也、春花サク、木不レ高、花ヨカラザレドモメヅラシ、大山ノ岩上ナドニアリ、山中ニ紫花ノ春ツヽジ、木ノ高一丈許ナルアリ、ツ子ノツヽジノ花ノ三倍ノ大サアリ、花ウルハシ葉三角ナリ、

〔地錦抄三〕躑躅のるひ木、春中末、

つゝじのるひは、長生花林抄といふ五冊の雙紙に、花形を圖にあらはし、くわしくしるし、前にひろむゆへ、爰に略してわづかにその事を記す、

きりしま くれない、こきり島と云、　とよきり島 くれないにかゝり　紫きり島 こいむらさき　白きり島 雪中りん

躑躅

花ニ似タリ、石南ノ類ニ非ズ、別物ナリ、
〔草木六部耕種法需花十一〕石楠花(シヤクナンゲ)ハ高山ニ繁生スルモノナルヲ以テ、此ヲ植ルニモ其心得ヲ爲スベシ、故ニ糞小便等ノ不淨ナル肥養ヲ用ルハ皆宜カラズ、植地ハ山土野土ノ宜キハ論ズルニモ及バズ、若シ眞土赤土等ニ植ルニハ、白沙ヲ等分ニ耕交(キリマゼ)ヘ、少シク胡麻油糟、鷄糞ヲ肥養ニシテ植ベシ、日光ノ黒髪山ハ、中禪寺ノ華表ヨリ上方絶頂ニ至ルマデ、石楠花極テ多ク、年々四五月花盛ノ頃ハ上リ三里ノ間滿山皆花ニテ、其美麗ナルコト吉野ノ櫻ト伯仲スベシ、富士山及ビ奥州會津萬蔵山、信濃御嶽、紀州金峯山ニモ石楠花多シ、大峯ノ石楠花ハ其葉細長クシテ、挾(ケウ)竹桃ノ葉ニ似タリ、華ノ形色大抵日光ニ同ジ、此ヲ根分スルモ移植ルモ、三月九月ヲ良トス、又枝梢等ヲ切テ玉(タマ)刺(ザシ)ノ法、予○佐藤信淵ガ接木ノ篇ニ詳ナリ術ヲ行フモ能活モノナリ、
〔紀伊續風土記物産六上〕石楠(シヤクナゲ)本草、和名抄佐久奈無佐、貞享本典藥式サクナムクサ、下學集シヤクナンゲ、本草和名に止比瓦乃岐と訓ずるは誤なり、和名抄には二物と混ぜり、辨別すべし、
高野山及日高牟婁兩郡の山中に產す、殊に大臺山に多し、
〔佐渡志物產五〕石南　方言シヤクナケ
深山ニ生ズ、金北山ニ登ル人折來テ證トス、
〔拾遺和歌集物名七〕さくなむさ　　如覺法師
むらさきの色にはさ。く。な。む。さ。しの、草のゆかりと人もこそしれ
〔壒嚢抄六〕躑躅ヲツヽジトヨム、字體草木ニ緣无ハ如何、此間實ニ然リ、本名ハ山榴也、其花赤シテ柘榴(セキリウ)ニ似タル也、是ヲ躑躅(テキチヨク)ト云事ハ、古事ニ依テ也、申サバ異名ナルベシ、千金翼方ト云本草ニ云、羊食此花、躑躅(テキチヨウ)シテ而斃、故ニ云爾ト、文選ニハ躑躅(テキチヨク)ト、タヽズムトヨメリ、注ニハ不安ノ貌ト云、立煩惱姿ナルベシ、或ハフシマロブトヨム、同心也、羊此ノ山榴ノ花ヲ食テ、立煩ヒテ斃死ケルヨ

トベラといふは、其語轉ぜしなるべし、或人の說に、トビラノキといふは、俗相傳ふ、除日に民家の扉に此木の枝をさせば疫鬼を除ふといふ、されば、トビラノ木といふ也、トビラノキといふは、古の聞えし名なれば、古には夫等の俗もやありけむと、今の如きは、除夜にヒ・ラ木又はシキミの葉などを門戸に插む事はあれど、此物を用ゆる事は聞えず、今俗にトベラノキといふもの、本草衍義石楠の註には相合へり、即今東國の山谷之間に生じて、其葉トベラといふものゝ如くにて長大なる、其花の色白きもあり、紅なるもあり、一蕾に數花を開く、甚愛しつべし、其名をシャクナギといふなり、或人それを石楠花なりといふなり、此物俗にトベラノキといふものには梓に異なり、此もの倭名抄にいふ所なり、また倭名抄にいふ所の物、今いふトベラノキならむには此もの古にはいかにやいふらむ、本草圖經に、石南南北の地方によりて、其產する所同じからずと見え、また西陽雜俎には、衡山有三色石楠など見えたれば、かしこにしても其いふところ同じからぬありとは見えたり、

〔本草綱目譯義 三十六灌木〕石南　シヤクナゲ〇中略

此葉ハ冬カレズ、花白新葉出揃ヒテ、古キ葉イツノ間ニカ落テ代ル也、和州大峯山別シテ多シ、參詣ノ人此ヲトリ來ル、ナギノ葉ト云、藥ニハ此葉ヲ使フ、

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕石南　風藥　和名止比良乃木、俗云佐久奈無佐、　今云止比良乃木者非是、出于香木下〇中略

按、石南花、和州葛城、紀州高野、及深山谷山有之、京師近處亦稀有之、東北州絕無之、性惡寒濕也、三四月開花淡紅色、秋結細子、紅色春舊葉未落、新葉生交代也、竊考此非眞石南花、蘇恭所謂欒荊也乎、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五灌木〕石南　シヤクナン　シヤクナゲ　シヤクナンゾウ肥前、古書ニシヤクナン草ノ名アリ、　ヒヤクナン豫州　モウノハナ伊州　卯月バナ勢州　一名冷翠金剛秘耕錄

深山幽谷ニ生ズ、高サ六七尺叢生ス、葉ハ石韋葉ニ似テ厚ク、末廣ク本狹ク、面深綠色、背ニ褐毛アリ、冬ヲ經テ枯レズ、枝梢ゴトニ簇リテ互生ス、四月其上ニ花アリ、形躑躅花ニ似テ大ナリ、五瓣ヨリ七八瓣ニ至リ、齊シカラズ、淡紫色凡ソ數十花簇リ開ク、遠望スレバ淡紫色、牡丹花ノ如シ、故ニ衡嶽志ニ、石枏花有紫碧白三色、花大如牡丹ト云ヘリ、又白花ナル者アリ、白花紅斑ナル者アリ、一種メシヤクナギアリ、葉花共ニ小ナリ、又ヒメシヤクナギアリ、葉至テ小ク花ハヤシ、ボツ、ジノ

膏藥用、又以葉陰乾和油傳小兒頭面草瘡、一種有葉無鋸齒及皺文者、

ミヅキ

〔和漢三才圖會 喬木 八十三〕美豆木(みづき)　正字未詳、或用楲字、亦俗也、

按、美豆木高者二三丈、葉似梅嫌(モトキ)木葉而微厚、多凋、花似藤花而黄色、

一種出於土佐山中、高一二丈、葉似粉團花葉而小、正月開黄花、攢簇下垂、結子赤色、呼名土佐美豆木、

大空

〔和漢三才圖會 灌木 八十四〕大空　獨空

本綱大空生山谷中、小樹其葉似桐葉而不尖、深綠而皺文、其根皮赤色虛軟、山中采作末、苦有小毒、和油塗髮殺蟣虱、極妙、又搗葉篩疏圃中殺虫、

〔重修本草綱目啓蒙 灌木 二十〕大空　詳ナラズ　一名苦虱圖

增、古說ニウツリノ木ニ充ツ、一名オニウツリ、阿州祖谷ヤマギリ、ウツリギ、共一字同上　深山ニ自生ス、枝葉繁茂シテ高サ丈許ニ及ブ、春新葉ヲ生ズ、葉ハ六七寸許ニシテ桐ノ葉ニ似テ五尖アリ、又木芙蓉(フヤウ)ノ葉ニ似テ黒ミアリ、四五月葉間ニ花ヲ生ズ、蕾ノ長サ一寸許、幅一分許ニシテ俯テ生ズ、開ケバ五瓣ノ白花ナリ、コノ花ヲ切レバ瓜ノ香アリ、故ニ名ク、

石南

〔新撰字鏡 木〕石南草　止○志○麻○木、又云比○良○乃○木、

〔倭名類聚抄 木 二十〕石楠草　本草云、石楠草、楠音南、和名止比良乃木、俗云佐久奈無佐、

〔箋注倭名類聚抄 木 十〕千金翼方證類本草下品作石楠、本草和名作石南草、○中略　佐久奈无佐、見拾遺集物名歌、本草作石南、可知石楠之俗字、南字从木、遂與楩楠字混、

〔伊呂波字類抄 止 殖物 附殖物具〕石楠草(トヒラノキ) トヒラノキイ　サクナムサウ

〔下學集 草木 下〕石南(シャクナンゲ)華　唐人詩云、不知青蟬收來雨、清曉石南花亂流、

〔東雅 樹竹 十六〕石楠草トビラノキ　倭名抄に本草を引て、石楠草トビラノキ、俗にサクナムサといふと見えたり、トビラの義不詳、サクナムサは其字の音を呼ぶ也、藻鹽草には、石南草としるして、トベラノキと註せり、トビラといひ、

ラノ誤リナルベシ、コノ木江州丹州阿州等甚多シ、樹ハ白桐ノ如ニシテ大ナリ、木ニ刺多シ、大木ニナレバ肌瘤贅ノ如シ、枝ハ細刺多シ、葉ハ七尖、或ハ九尖ニシテ鋸齒アリ、荳麻(トウゴマ)葉ノ如ニシテ厚シ、大サ一尺許、霜後葉枯ル、コノ木奥州ニテハ、水ニ入ルコト久シケレバ、化シテ石トナル、セノ木ノ化石ト云フ、

山茱萸

〔本草和名十三木〕山茱萸、一名蜀棗、一名鷄足、一名思益、一名魃實楊玄操音目支反、又奇寄反、一名鼠矢出釋藥性和名以多知波之加美、一名加利波乃美、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕山茱萸　通名　一石名棗萬病回春　湯主録驗耕　實棗兒樹救荒本草

古ヨリグミト訓ズルハ非ナリ、享保年中ニ漢種渡リ、今世ニ多ク栽ユ、木ハ高大ナリ、葉ハ土牛膝(イノコヅチ)ノ葉ニ似テ、毛ナク兩對ス、冬ハ葉ナシ、春末ダ葉ノ出ザル時、枝ノ節ゴトニ、小花數多ク簇リ開ク、四出黄色、大サ三分許リ、瓶花ニ用ユ、後實ヲ結ブ、形桃葉珊瑚(アヲキ)ノ實ノ如シ、初緑色秋後熟シテ、赤色、南京種ハ葉形細狹實ニ肉少シ、韓種ハ葉濶圓實ニ肉多シ、和產モ稀ニアリ、葉ハ南京種ヨリ狹ク尖レリ、實最小ク形上大ニ下小ナリ、

增、夢溪筆談云、山茱萸、功在核、其味酸澀、正是其有功處、去核則無功、不知物性也、

コヽニ土牛膝葉ニ似タリト云ハ誤ナリ、クルマミヅキ、一名カサミヅキノ葉ニ能ク似タリ、此實蒔テ三年ヲ經ザレバ生ゼズ、

〔採藥錄五〕山茱萸

種樹家ニ山茱萸ト稱ス、黄花ノ者眞ニ非ズ、漢渡ノ者別ニ一種ノ者、本邦ニ無、

青木

〔和漢三才圖會八十四灌木〕青木(あをき)　正字未詳　俗云阿乎木波

按、其樹叢生、高五七尺、葉似榔葉而厚潤、有大鋸齒、莖太而不勁、四時不凋、俗呼曰青木葉、植庭院賞之、但有潤葉相襍則正黑、如燒焦、四月有小花、紫黯色、形色不堪玩、結子如小棗、秋月赤熟、瘍醫採莖葉入、

八手木

チンプツサウ、同上トモ云、鹿角ヲ解スル時節ニ此芽出ル故ナリ、又鹿コノ芽ヲ食フテ角ヲ解ストモ云、葉展ルトキハ幹頭ニ數條布テ傘ノ如シ、葉ハ枝ヲ分チ、小葉多ク排生シテ楝(センダン)葉ニ似テ、大ニシテ刺多シ、夏月葉間ニ花ヲ開キ下垂ス、其穗枝多ク、小白花數ナシ、後小圓實ヲ結ブ、熟シテ黒色、土當歸ノ實ニ似タリ、一種木ニ刺アリ、葉大ニシテ刺ナク、背ニ毛アル者アリ、メダラ播州ト呼ブ、又一種枝條ヲ生ズル者アリ、メダラノ一種ナリ、楤木中ニ心アリ、棣棠ノ心ニ似テ大ナリ、他木ノ心ヨリ大ナル故ニ酒中花ヲ製ス、

增、一種クマタラ、一名ハリブキト云者アリ、其葉甚ダ大ニシテ一尺許ニ及ブ、加州白山ニ產ス、

〔大和本草 雜木 十二〕八手木(ヤツデノキ) 西州ニ多シ、葉ノ形蓖麻ノ如ク、又カヘデノ葉ノゴトクニシテ、甚大ナルコト盤ノ如ク葉アツシ、トチノ木ノ葉ニモ似タリ、冬不凋落、葉ノ本一ニシテ岐多ク、七八ニワカル、白花ヲ開キ、黒キ實ナル、毒アリト云、鰹ノサシミヲ八手ノ葉ニモリテ食スレバ死スト俗ニイヘリ、其木ノ高五六尺ニ不過、庭ニ栽ル人多シ、然レドモ佳木ニアラズ、筑紫ニハ山林ニモアリ、古來日本ニアル木ナルベシ、京畿ニテ未見之、八手ヲ肝木ト云人アリ非ナリ、肝木ハ別也、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕八手木(やつでのき) 正字未詳、豆天乃木、也

按八手木叢生一朶八葉、形略如軍配團扇、五六月開小白花、作簇上平而亦異常、

ハリギリ

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕海桐 詳ナラズ、一名掩木皮村家方 海東皮同上 增一名瑞桐閩書南產志

海桐皮古渡アリ、今ハ渡ラズ、故ニハリギリノ皮ヲ賣ハ僞物ナリ、ハリギリノ葉ハ至テ大ナリ、海桐ハ葉如掌ト云時ハ相符セズ、ハリギリハ救荒本草ノ刺楸ナリ、一名イヌダラ、和州ボウダラ、紀州オホダラ、藝州タラ、備後ミヤコダラ、土州カツタイギリ、勢州シヾダラ、豫州モミヂ、泉州カウハチ、磐城同州大コハチ、同上セノキ、奥州センノキ、同上アクダラ、常州新校正ニホウト訓ズルハ、ホウダ

〔箋注倭名類聚抄十木〕所引楤白桵郭注文、毛詩、芃々棫樸、傳、棫白桵也、樸枹木也、說文又云、棫白桵也、桵或假蕤、薛綜西京賦注云、棫白桵也、蕤與桵同音、文昌雜錄云、關中有白蕤、芃々叢生、民家多采作薪、與他木異、其烟直上如線高五七丈不絕、棫白桵下、郝氏曰、詩每棫樸並稱、當爲二物、漢書郊祀志有棫陽宮、師古注、又別有五柞宮、柞又無刺、知與棫非一物、又郭云、小木叢生、則非可爲車軸及梳者、與陸說又異矣、通志引陸機疏云、三蒼說、棫卽柞也、其葉繁茂、其木堅韌、有刺、今人以爲梳、亦可以爲車軸、

〔大和本草十二雜木〕總木ダラ　木ニハリ多シ、枝ナシ、其梢ノ上ニ葉生ズ、下ニ生ゼズ、其葉ワカキ時食スベシ、味ヨシ、小木ナリ、高四五尺ニスギズ、本草ニノセタリ、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕楤木音忽　俗云太良乃木　倭名抄以桵訓太良者非也、桵則蕤核見于前、

本綱、楤木高丈餘、直上無枝、莖上有刺、樹頂生葉、謂之鵲不踏、以其多刺而無枝故也、山人折取頭茹食、謂之吻頭、

按、楤山谷有之、頂上生葉、秋凋春生、取嫩葉可煠食、有獨活之香氣、葉間開小白花、成叢隨結子、小而黑色如椒目、其木枝皆有刺、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕楤木證類本草ニ楤根ニ作ル　タラノキ　タロウノキ　ダラ防州　タロノキ　オニグイ豫州　オニノカナボウ勢州　タロノイゲ和州　タロウウド江州　オホトリトマラズ　サルウド　トリトマラズ

鵲不登樹救荒野譜　鳥不立根外科百效全書　一名鳥不宿八閩通志　百鳥不泊保命歌括　赤頭莺　夫人柴上共同

山野ニ多シ、一幹直立シテ枝條ナシ、大ナル者ハ丈餘、小ナル者ハ齊シカラズ、幹ニ刺多シ、故ニトリトマラズト云、春月幹上ニ嫩芽ヲ出ス、形欵冬花フキノタウ如シ、煠熟シ味噌ニ和シテ食フ、味土當歸ウド芽ニ似タリ、故ニコレヲウドメトモ、ウドモドキトモ云、臟器ノ說ノ吻頭是ナリ又ツノヲトシ濃州

アツマリツク、後ニハ枝延ビレバ葉互生ニナルナリ、モ゜チ゜ウ゜コ゜ギ゜ト云大也、刺多ク葉モ大ニシテ三寸ホドアリ、五寸一尺ニナルモアリ、鬼゜ウ゜コ゜ギ゜ト云、食用ニハ下品也、苦味アリ、山゜ウ゜コ゜ギ゜トモ云、花實ハ同ジコト也、藥ニハ此皮ヲ采リ用ユ、藥店ニアルハ和生計也、舶來ナシ、京ヘハ北山ヨリ出ス、前方出スモノハ立惡シヽ、今出スモノハモノハヨシ、鬼ウコギト見ヘタリ、全體ハ根皮ヲ用ル也、

〔和漢三才圖會〕八十四　灌木　五加（略）〇中　和名無古木　今云宇古木（略）〇中

按五加插枝能活、其根爲藥者、阿波丹波之產良、金剛山之者次之、

〔重修本草綱目啓蒙〕二十五　灌木　五加　ムコギ（和名鈔）　ウコギ（ウコハ五加ノ唐音ト大和本草ニ云ヘリ）　一名金玉香草（群芳譜）　八角茶（藥性纂要）　十大功勞（狗骨ト同名）　老鼠刺（上共同）　五茄（抱朴子）　紫棘芽（茹草編）　根皮一名追風（群芳譜）　犲節使（同上）　羽化魁（藥譜）　五葉木皮（江都新志）　白刺顛（汝南圃史）　金鹽母（發明）

人家ニ栽テ籬トスル者多シ、葉ハ五葉一蔕ニシテ鋸齒アリ、形人參ノ葉ニ似テ、深綠色、春嫩葉簇リ生ズ、採テ食トス、ヒメウコギト云、越前ニテハウノメト云、山中自生ノ者ハ、樹大ニシテ葉モ大ナリ、オニウコギト云、石州ニテヤマウコギト云味劣レリ、皆夏月花ヲ簇生ス、小ニシテ白色、實モ亦簇リ生ズ、秋後葉枯レ落ツ、根皮ヲ採リ藥用トス、五加皮ト云フ、京師ニテハ北山ヨリ出ス、往年（タラノキ）楤木ノ皮ヲ以僞ル者アリ、白シテ刺アリ、今出ス者ハ外皮ヲ去テ色黃ナリ、オニウコギノ皮ナリト云、然レドモ庭ニ植ル五加根皮ヲ剝ギ見ルニ、形色大ニ異ナリ、故ニ自收ヲ良トス、

〔採藥錄〕五　五加皮　ウカキノカハ

秋八九月ニ皮ヲ剝テ、長サ五六寸ニ切リ、四五枚ヲ重子、葉ニテ纏ヒ日乾スベシ、藥肆ニ針樣ノ五加皮ト云者ハ、楤木ノ皮ニテ僞ス、不可不辨、

〔倭名類聚抄〕二十　木　桜　爾雅注云、桜（音葼、和名太良）、小木叢生有刺也、

サ一尺二寸、深一尺五寸、右十本枝ヲ穴周圍ニ並樹テ、中ニ牛馬ノ枯骨ニ小石ヲ混タルヲ入ルコト一二寸、其上ニ肥土ヲ入ルコト一二寸、又其上ニ骨ト小石一二寸、肥土一二寸、漸々右ノ如ク衘固入レテ、平地ト同坦ニシ、石榴枝杪ノ僅ニ出ルコト一寸餘、頻ニ水ヲ灌テ常ニ潤シ置トキハ、皆活著テ枝杪成長ス、其ノ長ズルニ從ヒ、根ノ圍ニ骨ト石ヲ取掛テ、其ノ能ク繁榮シタル後ニ分テ移栽ベシ、又其儘ニ成長セシメタルモ、蓊蔚テ美ナル者ナリト云フ、

〔地錦抄附錄三〕享保年中來品

南京柘榴(ナンキンザクロ) 享保九年に來る

大和本草に朝鮮ざくろとあり、夏より冬まで月を追て花さくといへり、西國方には前々より有し由也、武江へは享保九年の比初て來る、小木にて花多く咲實のる、ながめよし、

〔本草和名十二木〕五茄、(陶景注云、或作家字、)一名犲漆、一名犲節、(已上本條)一名五葭、(出釋藥性)一名杜節、一名節花、(已上出兼名苑)一名金鹽母、一名豉母、一名牙古、一名金玉之香草五車星之精、(已上出太清經)一名五行之精、一名五葉、一名截瓜、一名五家、(五葉同本而外五分、故名五家、如五家爲隣比也、已上出神仙服餌方、)五茄者草精也、(出范汪方)和名牟古岐、

〔倭名類聚抄二十木〕五茄 神仙服餌方云、五茄(和名無古木)或茄作家、言同本而五家、如五家爲相鄰也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕本草和名五茄條引云、一名五家、五葉同本而外五分、故名五家、如五家爲隣比也、則知此同本上脫五葉二字、而下脫外五分故名五字、蓋傳寫誤脫、非源君之舊也、按五茄本作五家、通借五加、後从艸、與蓮莖之茄混、

〔書言字考節用集六生植〕五加木(ウコギ)

〔本草綱目譯義三十六灌木〕五加 ウコギ

冬葉ナシ、古クナレバ木大クナル、市中ニアルハ葉小シ、春新葉ヲ采リテ食ス、苦ミナク甘ミアリ、コレハ姫ウコギト云、五葉ツキ黑ミアリ、四五枝一處ニ叢生ス、其間ニ花ツク、人參ノ如ク一處ニ

呼ブ、山東通志ニ果石榴ト云、千葉ナル者ハ實ヲ結バズ、ハナザクロト呼ブ、山東通志ニ花石榴ト云、其花深紅色ナル者ハ常品ナリ、又白色淡紅色黃赤色アリ、唐山ニハ紫花モアリト云、花後實ヲ結ブ、秋ニ至リ熟シ自ラ裂ク、內ニ子アリ、紅色ナル者ハ常品ナリ、色白キ者ヲシロザクロト云、宗奭ノ說ノ水晶石榴ナリ、味甘シテ上品ナリ、一名水精粒、事物紺珠玉榴、泉州府志又紅子ノ者ニモ、甘酸ノ二種アリ、甘キ者ハ核小シ、甘石榴ト云、一名天漿、集解酸キ者ハ核大ナリ、酸石榴ト云、一名柴榴、泉州府志藥ニハ多ク酸石榴皮ヲ用ユ、一種チヤウセンザクロアリ、一名ナンキンザクロ、木ノ高サ尺ニ盈タズシテ花實アリ、肥地ニ栽ユレバ丈許ニ至ル、花色殊ニ赤キ故、火石榴ト云、海石榴モ同物ナリ、コヽニ分テ二ツトスルハ非ナリ、凡ソ榴ハ不時花アリ、火石榴ハ殊ニ多シテ實モ常ニアリ、花實共ニ小シ、單葉千葉共ニアリ、

〔草木六部耕種法十九需實〕石榴ハ栽テ實ヲ採ベキノミナラズ、其若葉ニテ飼タル蠶兒ハ琴三弦ノ糸ヲ製スベシ、其事ハ上需葉編條下ニ說ルガ如シ、石榴ハ種子ヲ蒔ニモ及バズ、揷木一法ニテ能ク繁榮シ、實モ亦數多結者ナリ、此ヲ揷木スル法ハ、春分頃に拇指ノ太ナル枝ヲ利刀ニテ長サ一尺三四寸ニ切リ、切口ヲ炭火ニテ燒キ、此ヲ肥地ニ插テ頻々水ヲ澆グトキハ、四月ニ至テ自然ニ根ヲ生ジ葉モ繁ル、此物ハ氣候第十番ノ產物ナルガ故ニ、寒地ハ秋末ヨリ藁筵ニテ包ミ霜防シ、春分後ニ取リ除クベシ、寒中ニハ根ヲ去ルコト、一尺三四寸ニ、溝ヲ掘リ巡ハシ、濃糞ヲ饒ニ入レ、土ヲ覆ヒ置ベシ、能ク繁テ多子ヲ結ブコト速ナリ、甚ダ繁リタル枝葉ヲバ切リ去ルヲ良トス、若植テ四五年モ實ザルトキハ、其ノ根ニ石ト枯骨ヲ取集メ、枝ニモ此レヲ取掛ルトキハ、必實ヲ結者ナリ、石榴ハ石ニ緣アルコト謂ナキニ非ザレドモ、枯骨ニ緣アルコトハ訝シ、然レドモ此ヲ作ルニ、古來石ト犬馬等ノ枯骨ヲ用ルヲ法トスルナリ、　石榴ヲ揷木スル古法、正月二月其枝笛竹太ナルヲ、長一尺四五寸ヅヽ、ニ十本切リ、各皆其切口ヲ炭火ニテ燒キ、先ヅ肥地ニ穴ヲ穿ルコト濶

蒼云、石榴柰屬也、藝文類聚引陸機與弟雲書云、張騫爲漢使外國十八年、得塗林安石榴也、太平御覽引廣志云、安石榴有甜酸二種、本草圖經云、安石榴、木不甚高大、枝柯附幹、自地便生作叢、種極易息、折其條盤土中便生、花有黃赤二色、實亦有甘酢二種、本草衍義云旋開單葉花、旋結實、實中子紅、孫枝甚多、秋後經雨自坼裂、李時珍曰、榴五月開花、有紅黃白三色、單葉者結實、千葉者不結實、或結亦無子也、案事類合璧云、榴大如盃赤色、有黑斑點皮、中如蜂窠、有黃膜隔之、子形如人齒、淡紅色、

〔大和本草花木十二〕石榴(ザクロ)　花ヒトヘアリ、千葉アリ、銀榴(アマザクロ)アリ、千葉ハ實ナシ、根ヨリ叢生スルヲ分ツ、與化府志曰、銀榴(アマザクロ)結實甘美、又曰百葉榴(センヤフノザクロ)有花無實、酉陽雜俎曰、石榴甜者、謂之天漿、石榴ノ直枝ノ大サ指ノ如ナルヲ長一尺ニ切、下ヲ二寸火ニテヤキ、穴ヲウガチテ挿土、枝ノサキヲ一寸出シ、水ヲシバシバソヽグバ生ヤスシ、朝鮮石榴、ツチノ石榴ノ葉花實ノ如クニシテ小ナリ、夏ヨリ花サキ冬マデ逐月花サキミノル、

〔和漢三才圖會八十七山果〕石榴　安石榴　丹若　金罌(本出於西域、漢張騫使西域、得安石國榴之種以歸、故名安石榴、〇中略)

按、石榴樹初叢出、既長則有大木周二尺餘者、凡花色鮮紅者、莫如楮榴者、鮮紫者無如燕子花者矣、河州河內郡往生院之石榴、大者周過於尺、味最佳、凡柘榴花紅者多、黃白二種希有之、千葉也、黃者亦非正黃、但淡赤帶黃也耳、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕安石榴　イロタマ(古名)　ザクロ　ジヤクロ　一名阿措(酉陽雜俎後集)　石阿措(事物異名)　安榴　寶珠(共二同上)　塗林(書蕉)　百子甕(清異録)　金龐(群芳譜)　紫房　良研(名物法言)　珠實(行厨)　石(集)　朱實　紅膚(事物紺珠)　玳瑁殼　紅瓠囊　綃囊　蚌珠　銀礫　玉房　村客　柴　嬰粟(共同上)　石醋(花暦百詠)　花一名榴花(秘傳花鏡)　火珠(尺牘雙魚)　剪紅綃(名物法言)　紅巾(事物紺珠)　紅裙　丹葩(共同上)

樹ハ高サ丈餘、枝四方ニ廣ク繁リ、木ニ節多シテ、古木ハ異形ニナリテ百日紅ノ如シ、春新葉ヲ生ズ、形細長クシテ兩對ス、梅雨中花ヲ開ク、單葉重葉千葉アリ、單葉ナル者ハ實ヲ結ブ、ミザクロト

石榴

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕百日紅(ひやくじつかう)　怕痒樹　紫微花

按、樹似柘榴木而無皮、葉似夏黃櫨(ナツハゼ)而冬凋落、七月初至九月有花、淺紫紅色映山谷、故名百日紅、隨結子攢簇、不熟而凋、插其枝能活、

猿滑　猴刺脫　俗云左留須倍利

按、樹葉同百日紅、而葉略厚、四時不凋、未見花實、其樹無皮、甚滑而猴猿亦不得登、故呼名猴滑、與百日紅一類二種也、(百日紅冬葉凋有花、猿滑四時不凋無花、)二本同稠堅、酒家用爲榨(シメ)木、

〔夫木和歌抄 二十九 猿滑〕猿滑　民部卿爲家

足引の山のかけぢのさるなめりすべらかにてもよをわたらばや

〔北邊隨筆 二〕猿滑

いま世に猿すべりといふ木は、百日紅といふ、これをば猿なめりとぞいひけらし、夫木集に、猿滑、○歌略とみゆ、しかれども、此末句、すべらかにてもとあるは、さるすべりすべらかとつゞくべき語勢とおぼゆれば、滑といふ字は、もと義をもてかきたりしを、萬葉集に、常滑(トコナメ)などかけるたぐひに見て、後人さかしらに、なめりと書きあやまれるにやとおぼし、

〔本草和名 十七 菓〕安石榴(楊玄操音留)　花名延年花、(花可愛、人多植之、出崔禹、)一名塗林、一名若榴、(已上二名出兼名苑)　和名佐久呂、

〔倭名類聚抄 十七 菓〕石榴　兼名苑云、若榴一名安若榴、(音留、和名佐久呂、今按若正作楉、見四聲字苑、)石榴也、

〔箋注倭名類聚抄 九 果蓏〕按説文無楉榴字、故南都賦借若留字爲之、楉榴字始見廣雅、云楉榴柰也、然南都賦注引廣雅曰、石留若榴也、李善所見廣雅猶不作楉、今本廣雅從木者、蓋後人改寫從俗也、源君據四聲字苑、以楉爲正字、非是、○中略所引蓋兼名苑注文、廣本若榴下有一名安若榴五字、按本草和名云、安石榴一名塗林、一名若榴、已上二名出兼名苑、不載安若榴之名、齊民要術、安石榴引陸機、鄴中記、若榴引抱朴子、石榴引廬山記京口記載之、亦無安若榴之名、恐是安石榴之訛、初學記引埤

をやまだのなはしろぐみの春すぎてわが身の色にいでにける哉

牛グミ

〔大和本草十一藥木〕山茱萸　京都ノ方言ナハシログミト云グミアリ、苗代スル時實熟ス、中華人云、是卽山茱萸也、土地有肥瘦、故日本所有少肉云、葉厚ク堅シ、冬不凋、枝ツヨシ、本草頌曰、山茱萸葉如梅ト云ニ不同イブカシ、實ハ山茱萸ニ似タリ、是誠ニ山茱萸ナリヤ未詳、

〔本草一家言二〕牛具味二種　江州所産者、卽佐渡州所謂蒲澄是也、樹小葉如繡毬(アジサイ)、而薄有文脉、張傘綴子、霜後變紅、小兒食之、味酸甜、又一種牛具味、木質虛軟、似宇津木、而皮厚有毛、葉大狹圓長有毛、七八月間結實、赤色、

馬グミ

〔本草一家言二〕馬具味二種　一種京東一乘寺村宮山有大樹、一株葉厚而圓、似白楊葉、結實狹長、如棗、至秋通紅有白斑點、味酸甜、土人食之、名曰馬具味、然與胡頹子木半夏殊不相類、唯以形味相似而名爾、又江州矢州村所産馬具味、樹稍大、葉全似榎葉、有疎鋸齒、結實大、如胡椒粒、疎貼枝頭、

タンガラ

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕樺木　詳ナラズ

舶來ノタンガラニ充ル、古說穩ナラズ、タンガラハ唐山ヨリ紅樹皮ト名ケ來ル、和ニテタンガラト云、皮ノ厚サ三分許、或ハ四五分、紫赤色、外皮ハ黑色ナレドモ、多ハケヅリ來ル、染用トス、奧州南部ハ褐色及ビ魚網ヲ染ルタンガラト呼ブ木ノ皮アリ、木ヲ仙臺ニテタンガラシバト云、是ト同カラズ、

百日紅

〔大和本草十二花木〕百日紅　紫薇花トモ云、モロコシノ禁中ニ多ク此花ヲウフルヨシ、三才圖繪ニ見エタリ、此木皮ナシ、故ニ和名サルスベリト云、六月ヨリ花開ルコト百日バカリ、其樹ノ本ヲ久シクカケバ、枝皆ウゴク、故ニ本草ニ異名ヲ怕痒樹ト云、蛾(コガネムシ)其ツボミヲクラヘバ花サカズ、又白花アリ、稀也、凡花ノ久シク開ルコト、百日紅ヲ第一トスベシ、次ニ山茶花(ツバキ)、海紅(サヾンクハ)、木瓜(ボケ)、躑躅、杜鵑花ナルベシ、草花ニハ菊、水仙、雞冠花、虎耳艸(キジン)、石竹、櫨特花ナルベシ、

苗代グミ

増、シャシャブ、シャシャビ等ノ名ハ、木半夏ノ名ヲ誤リ混ジタルナリ、

〔古今要覽稿 草木〕ぐみ　もろなり　胡頽子

ぐみもろなり、漢名胡頽子は、冬も葉凋まず、十二月花を開く、又九月末より十月に至りて開くもあり種類多き故遲速あり、花の形狀は筒子のごとくにして、四瓣白色、下に向ひて開く、早くひらきたるは敢て實の形を成すあり、其熟するは苗代の比なり、夫木集に、小山田のなはしろぐみの春すぎてと詠じたるには榶字を用ひ、本草和名には櫻桃、一名朱櫻、胡頽子と見ゆ、佐藤成裕曰、古の櫻桃はゆすらにあらず、櫻桃の一名に含桃の名あり、この含桃は胡頽子なり、鶯所含食といへるはぐみにあらざれば、含食とはいひ難し、櫻桃は大にして含食すべからず、本草和名に櫻桃一名胡頽子となす故あれども未だ證とすべき書を得ず、尤胡頽子釋名に、陶弘景の注に、山茱萸及櫻桃皆言似胡頽子、淩冬不凋と見ゆれども、證となし難し、また救荒本草所載の野櫻桃はぐみなりと蘭山の說なり、尤この野櫻桃は夏ぐみにて、胡頽子集解にいふ木半夏なりといへり、それは葉細く薄くして、季秋には落ず、ぐみの種類本草綱目啓蒙に詳なればこゝに載せず、又山茱萸本草和名和名本草にいたちはじかみ、一名かりはのみとみえたれども、今和漢通名にして、山茱萸といへり、此花早春より開きて、梅と共に稱すれば、是又櫻桃に列すべし、又其實を形様するに、胡頽子は山茱萸に似たりといひ、山茱萸は胡頽子に似たりといへり、又古より茱萸をぐみといひて、九月九日用ゆるも、茱萸袋といへり、この木、享保年中に漢種渡り、今世に多く栽ゆといへるは、漢種なれども、元より皇國自生もありし故なり、

〔佐渡志 五物產〕胡頽子　方言グミ

品類甚多シ、ナワシログミアリ、サワグミアリ、カハラグミアリ、秋グミハ食用ニサワリナシ、

〔夫木和歌抄 二十九榶〕　民部卿爲家

ミ。トラグミ。薩州タハラグミ。肥前タウラグミ。同上カマツカグミ。濃州シヤシヤビ。阿州シヤシヤブノキ。土州ムギシヤシヤブ。讃州サヽビ。同上一名棠聖濟總錄紙錢棠毬

同上　羊奈子通雅

山野ニ自生多シ、高サ六七尺、小枝多ク繁リテ、木瓜類ノ如シ、葉互生ス、形木蓮ノ葉ニ似タリ、又木樨葉ニ似テ鋸齒ナシ、面深綠色、背ハ褐色、或ハ白色、新葉ハ背白シテ、褐色ノ斑點アリ、冬モ葉凋マズ、故ニ多ク庭際ニ栽ユ、十二月葉間ニ花ヲ開ク、二三蕚下垂ス、本ハ筒子ニシテ、末ハ分レテ丁香ノ形ノ如ク、香氣多シ、後實ヲ結ブ、山茱萸ニ似テ小シ、長サ五分許、初ハ綠色、播種插秧ノ時熟ス、色赤シテ雲母色ノ星點アリ、小兒採リ食フ、內ニ長核アリ、山茱萸核ノ如ク、質甚堅シ、破レバ內ニ白綿アリ、一種蔓生ナル者アリ、ヒ。グ。ミ。大和本草ト云、一名ツルグミ土州タウチグミ勢州ナハシログミ紀州ナンシログミ同上藤蔓褐色ニシテ長延ス、葉ハ楊桐ノ葉ニ似テ長ク互生ス、面深綠色、背ハ褐色、花實ハ木本ノ者ト同ジ、コレニ一種圓葉ナル者アリ、讃州ニテト。ラ。グ。ミ。ト云、一種ナ。ツ。グ。ミ。アリ、一名ヘソツキ播州チヽモヽ同上シホグミ勢州ヤマグミ大和本草木ノ高サ丈許、枝條繁茂ス、其枝胡頹子ヨリ柔ナリ、葉ノ形楕長ニシテ、互生ス、面綠色、背ハ淡褐、或ハ白色、春末葉間ニ花ヲ垂ル、胡頹子花ニ似テ小シ、實ハ形圓ニシテ、南燭子ヨリ微大ナリ、胡頹子ニ次テ熟ス、色赤シテ白星點アリ、小兒採リ食フ、是集解ノ木半夏、一名四月子野櫻桃ナリ、一種ア。キ。グ。ミ。アリ、一名グイミ、四國ゴミ、江州カハラグミ同上サワグミ、ダイヅグミ、紀州コメシヤシヤブ、讃州高松シヤシヤブ、同上丸龜シヤシヤビ、阿州アサドリ、播州カサトリ、防州タカリグミ、勢州アサツキ、播州木ノ高サ丈餘、又三四尺ノ小木ニモ花實ヲ生ズ、冬ハ葉ナシ、春新葉ヲ生ズ、木半夏ノ葉ヨリ小ニシテ狹ク、面綠色、背ハ白ク、光リアリテ雲母ノ如シ、枝モ亦同ジ、葉互生ス、春ノ末葉間ニ花ヲ開ク、木半夏ノ花ヨリ小ナリ、秋ニ至テ熟ス、大サ南燭子ノ如シ、赤クシテ白星アリ、小兒採リ食フ、是野櫻桃ノ一種ナリ、

胡頽子

〔本草和名 十七菓〕胡頽子 出馬琬食經 和名久美

〔倭名類聚抄 十七菓〕胡頽子　馬琬食經、養生秘要等云胡頽子、和名久美、一云毛呂奈里、本朝式用諸生子三字、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕本草和名載胡頽子云、出馬琬食經、按本草拾遺云、胡頽子、熟青酢澁、小兒食之當果、生林間、樹高丈餘、葉陰白、冬不凋、冬花春熟、最早諸果、又有一種、大相似、冬凋春實夏熟、人呼爲木半夏、李時珍曰、胡頽卽盧都子也、其樹高六七尺、其枝柔軟如蔓、其葉微似棠梨、長狹而尖、面青背白、俱有細點如星、老則星起如麩、經冬不凋、春前生花朶、如丁香蒂、極細倒垂、正月乃敷白花、結實小長、儼如山茱萸、上亦有細星斑點、生青熟紅、立夏前采食酸濇、核亦如山茱萸、但有八稜、軟而不堅、核內白綿如絲、中有小仁、其木半夏、樹葉花實、及星斑氣味、並與盧都同、但枝強硬、葉微團而有尖、其實圓如櫻桃、而不長爲異耳、立夏後始熟、其核亦八稜、大抵是一類二種也、○中略本草和名載久美之名、不載毛侶奈利之名、○中略延喜宮內省式、備中國例貢御贄、大膳職式、備中國貢進菓子並有諸成、皆不作諸生、此所引或是弘仁貞觀式文、

〔大和本草 十一藥木〕胡頽子（ヒグミ）　本草灌木類ニノセタリ、國俗ヒグミト云、木ノ高サ六七尺、枝柔ナリ、葉ハ梨ニ似テ長ク狹シ、面青ウラ白シ、十二月正月花サク、花形丁香ノ如ク、サガリ垂ル、夏月實熟ス食フベシ、實少ニシテ長シ、星多シ、核ニカド多シ、核軟ニシテ不堅、核ノ內絲ノ如シ、是胡頽子ノ集解、時珍ガ說ニヨクアヘリ、

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕胡頽子 ○中略

按胡頽子、大柢有三種、其葉與實皆有少異耳、一種當春月種苗時、實熟大如小棗者、名苗代胡頽子（ナハシログミ）、一種五月實熟大如棗、而莖長五六寸垂、一種九月實熟小、其大如櫻子而成簇、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五灌木〕胡頽子　諸生子（モロナリ）和名抄　グミ。同上　グイミ。四國　グユミ。阿州　グイ。
ピ。備前　ゴ。イ。ミ。　ゴ。ユ。ミ。　ゴ。ミ。江州　ナ。ハ。シ。ロ。グ。ミ。京　ヤ。マ。グ。ミ。　サ。ツ。キ。グ。ミ。　ハ。ル。グ。

花相似較大耳、詳見蜜蒙花條、

〔大和本草 十一 藥木〕丁香 本草ニ異名ヲ丁子香ト云、故ニ日本ノ俗丁子ト云、母丁子トハ、本草曰、有雌雄、雄顆小、雌者大、如山茱萸、名母丁香、入藥最勝、本草原始曰、擘破有順理而解爲兩、向如雞舌、又一名雞舌香、藥肆ニ煎ジタルカスヲウル事アリ、エラブベシ、久シクナリテ香ウスキハ酒ニヒタセバ香生ズ、夏月丁子ヲ風爐ニカケテ煎ズレバ香滿室、且蚊ヲシリゾク、男子ハ夏月丁香ヲ佩、婦人ハ麝香ヲ帶テ汗臭ノケガレヲ去ルベシ、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕丁子(ちやうじ) 丁香 雞舌香 附、母丁香、丁香皮、

本綱、丁子出崑崙國及交州廣州南番、其樹高丈餘、木類桂、葉似櫟(トチノ)葉、二三月開花、圓細黃色、凌冬不凋、七月成子、其子出枝蕊上如釘、長三四分、紫色、但有雌雄、雄者顆小而名丁香、雌者大如山茱萸、名母丁香、(一名雞舌香) 用雄則須去丁蓋乳子、其樹皮名丁香皮、似桂皮而厚、氣味同丁香、

丁字 (辛熱) 溫脾胃、止霍亂、治五痔及齒䘌虛噦小兒吐瀉、 壯陽療反胃嘔逆、(丁子長於辟金、不可見火、) 香衣辟汗氣、(丁子一兩、山椒六十粒、絹袋盛佩之、) 治痘瘡不光澤、不起發、成脹或瀉、或渴或氣促、表裏俱虛之證、(陳文中用木香散異攻散、倍加丁香官桂、蓋運氣在寒水司天之際、又値嚴冬鬱遏陽氣、故用大辛熱之劑發之者也、若不分氣血虛實寒熱經絡、一槩驟用其殺人也、)

母丁香 (即雌也) 拔去白鬚、孔中用薑汁塗之、即生黑者、

按阿蘭陀咬𠺕吧船到南蠻交易以渡之、外科呼丁子油名加良阿保、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三 香木〕丁香 テウジ。。。 通名 公丁香一名如字香(本草滙) 索瞿者(金光明經梵名)

瘦香嬌(藥譜) 百里馨(種杏仙方) 母丁香一名亭炅獨生(酉陽雜俎) 丁香皮一名支解香(藥譜)

和產ナシ、唐山ニテモ暹羅(シヤムロ)、渤泥(ボルネオ)、蘇門答剌(スモタラ)ヨリ來ルト、東西洋考ニ見ヘタリ、本邦ニモ紅毛ヨリ來ル、美洛居ト云蠻國ニ香山アリ、滿山皆丁香ナリ、雨後溪水ニ隨テ山麓ニ多ク流レ出ルヲ拾ヒ採テ、中國ノ商人ニ賣ルト東西洋考ニ云リ、

フサモドキ

樒、和名志紀美、此樒沈香ノ訛ニ似タリ、古ノ採薬使モ似タル樒ヲ以テ樒ト名ケタル歟、是ナ佛ニ供スル、其所以他日可考、

藏器曰、蜜香生交州、大樹節如沈香樹、形似槐而香、異物志云、其葉如椿、交州記云、樹似沈香無異也、

沈香蜜香一類二種ニシテ、香氣ニ優劣アリト見タリ、

時珍曰、按魏王花木志云、蜜香號千歲樹、根本甚大、伐之四五歲、取不腐者為香、酉陽雜俎云、樹長丈餘、皮青白色、葉似槐而長、花似橘花而大、子黑色大如山茱萸、酸甜可食、

沈香ハ水氣ヲ假テ香ヲナスト云、蜜香ハ斫仆シテ四五歲ノ後不腐敗モノ香ヲナスト云フ、

唐船長崎ヘ伽羅ヲ渡スニ、皆壺ニ水ヲ入テ伽羅ヲ渡シテ持來ル、是ヲ日本人水ヨリ揚テ乾ナリ、伽羅水ニ不漬バ香氣ナキ故ニ、日本マデモ水ニ漬テ來レリ、然レバ則本草ニ云、沈水香ニ無疑モノナリ、沈香ハ水ニ不浸シテ、其マヽ櫃ニ入テ渡之、香氣モ遙ニ劣レリ、是本草ノ蜜香ナルベシ、若又本草ノ沈香ヲ、今ノ通用ノ沈香トセバ、密香ト名クル者ハ、何ヲ指シテ云ベケン哉、

〔重修本草綱目啓蒙〕（二十三香木）蜜香　一名木蜜香（香譜、草部ノ木香モ蜜香ト名クルニ由テ木ノ字ヲ冠ス、）

集解、諸說紛々タリ、古ヨリシキミト訓ズルハ甚誤ナリ、本經逢原ニ、一種曰蜜香、與沈香大抵相類、故綱目釋名、沈水香蜜香二者並稱、但其性直者毋論大小、皆是沈水、若形如木耳者、俗名將軍帽、即是蜜香、其力稍遜、僅能辟惡去邪氣、尸疰、一切不正之氣、而溫脾煖胃納氣歸元之力不如沈香也ト云、是ニ據レバ沈香ト同物ト見ルベシ、

〔本草一家言〕二　芫花　稻若水翁云、和稱紫元之、又攝之大坂花史名藤賽樹、不甚高、春初著細小紫花與櫻花同時花罷出葉、葉如白前、有毛者眞、庸俗或因和名相似而有與紫荆樹混認者、紫荆即田氏荆和名蘇方花、與芫花殊別、又或有以鼠麴草充芫花者、此誤、認黃芫花者、宜細辨之、黃芫花即蕘花、和名三又、先花後葉、與芫花一般、愚按、黃芫花即蜜蒙花之別名、蜜蒙花、和名顏䊩、京北花肆稱黃元之、其花似芫花黃、勢州朝熊山、和州鉢伏山、河州金剛山、相州鎌倉山多產之、其他筑前州又產之、又有大顏䊩、

〔西海紀游上〕沈香の事
大島に沈香の大木あり、文政壬辰の春、百姓深山に入りて木をおろす、日も既にくれしかば、木の葉をあつめて火にたく、其にほひかうだいなりしかば、夜明けて其あつめし木を見るに見なれぬ木なり、これにより殿樣へ御訴へ申候處、さつまよりけんしを遣し、御吟味のところ、沈香に相違なし、段々ふかく山にわけ入り尋ねしに、何と申候事しれず、追々に注進のよし、役掛り御人よりきく、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕返魂香
補遺、長崎官園ニ沈香ト稱スル一樹アリ、ソノ幹周圍一尺許ナルヲ、三尺許ノ處ヨリ伐リ、今旁芽生長シテ丈許ニ及ブト云、弘化二年正月望日友人高井君ヲ訪ヒ、其所藏ノ沈香葉三枚ヲ目擊スルコトヲ得タリ、長サ七寸餘、濶サ三寸五六分、櫟(クヌギ)ノ葉ニ似テ、前後尖リテ中濶シ、沈香ノ集解ニ葉似橘葉、又似椿葉ト云ニハ合ハズ、而シテソノ蔕味辛クシテ香氣アリ、丁香ノ味ニ彷彿タリ、又丁香ノ集解ニ葉似櫟葉ト云ニ合スルニ似タリ、然レドモ未ダ其花實ヲ見ズ、又天保十五年蠻國ヨリ丁香樹ト稱スル者ヲ齎來セシニ、長崎ニテ枯ル惜ムベシ、コレ官園ノ沈香ト稱スル者ト同物ナルカ知ルベカラズ、

〔倭名類聚抄二十木〕櫁　唐韻云、櫁香木也(香蜜漢語抄云之岐美、)

〔箋注倭名類聚抄十木〕下總本櫁作榓、蜜作密、按作榓作密與廣韻合、作櫁與玉篇合、則密蜜兩通、然此引唐韻作榓似是、按、櫁卽蜜香、證類本草上品引陳藏器載之、又千金翼方、證類本草下品有莽草、是櫁莽草、二物不同、而漢語抄以櫁爲之岐美、本草和名以莽草爲之岐美、二家其說不同也、源君兩載櫁莽草、並訓之岐美、非是、

〔本草辨疑四木〕蜜香(ミツカウ)

沈香同、交趾暹羅占城也、凡伽羅脂潤柔靭、味微辛者佳也、不潤或帶白色味微甘者不佳、但其香氣美惡、以言不可論耳、大抵交趾之產最上、暹羅者次之、占城又次之、和州東大寺名香有二種、一名黄熟香、俗云蘭奢待、有重三貫三百目、一名大紅塵、有重四貫六百目、云天竺漸名香、鮮殊大者希也、

〔本草辨疑木四〕沈香(チンカウ)

本綱ニ沈香アリテ伽羅(キャラ)ヲ不載、或曰香國物ナル故ニ中花ニ不知之、故ニ時珍不載之ト依テ疑之、沈香既香國物ニシテ本草ニ出之、其外香國物ニシテ不貴物多載タリ、伽羅ハ中國外香天竺日本皆人ノ所貴重ノ物ナリ、何ゾ本草ニ載ザランヤ、因之考フルニ、本草ニ沈香蜜香ノ二條ヲ出ス、然モ樹ノ形香氣大凡均シテ、沈香ハ價一片萬錢ノ者アリテ、尊貴スル所皆伽羅ナリ、今ノ沈香ハ皆蜜香ノ説ニ合ス、蘇恭曰、木似欅柳樹、皮青色、葉似橘葉、經冬不凋、夏生花白而圓、秋結實似檳榔、大如桑椹、紫而味辛、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕沈香　通名　一名達秀卿輟耕録　惡揭嚕金光明經梵名

和產ナシ、廣東新語ニ日本ヨリ出ト云ハ誤ナリ、蠻船來ノ者唐山ヘ傳ヘシコトナルベシ、唐山ニテモ、南方熱國ナラザレバ生ゼズ、嶺南ノ地ヲ離レ、南ニ瓊州アリ、其內ニ黎ト云地アリ、又黎母トモ云、其民深山中ニ居リ、中國ノ人物ト異ニシテ、男女モ別レ難シト云、コノ地ニ產スル沈香上品ナリ、其木ハ冬青(モチノキ)ノ如シト云、然レドモコノ木全身皆香トナルニ非ズ、香ノ木ニ結スルコト、人ノ癰疽ヲ發スルガ如ク木ノ病ナリ、故ニ香ノ結スル木ハ、必其葉夏ニテモ黄色ヲナシ枯レタルガ如シ、其香ハ或ハ枝幹、或ハ根株ニソノ木ノ脂一處ニ聚リ、凝結シテナル者ナリ、此香ヲ至テ上品トス、唐山ニテコレヲ生結廣東新語ト云、然レドモ此香ハ百ニ一二ナシト云、又木ヲ伐テ三四十年モ捐テヲキタルニ香ヲ結スルアリ、是ヲ死結同上ト云、生結ニ次グ、總テ木古クナラザレバ結セザル者ナリ、又木古クナラズ、數十年ニシテ香ヲ結スルアリ、コレヲ速香同上ト云、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕瑞香〇中略

又黃瑞香アリ、一名結香秘傳花鏡ニ見タリ、和名ミツマタ、ミツエダ、勢州ミマタヤナギ、防州ユヅプサ、参州高サ七八尺、本幹枝叉皆三椏ナリ、花葉時ヲ同セズ、冬ハ葉ナシ、秋ノ末葉落レバ已ニ枝端ゴトニツボミ、一朶ツヽ下垂シ、稈蜂(アカバチ)ノ窠ノ形ノ如シ、春ニ至リテ花ヲ開ク、紫瑞香(チンチヤウゲ)花ヨリ瓣長ク、外白ク內黃ナリ、香氣ナシ、花終テ新葉ヲ生ズ、夾竹桃葉ニ似テ大ニシテ兩頭尖ル、長サ七八寸、枝柔ニシテ結ビテモ折レズ、故ニ結香ト云フ、皮ヲ以テ紙ニ造ル、

〔增訂豆州志稿七土產〕結香(ミツマタ)　枝必三椏、山村種植シテ製紙ノ料トス、增、近年山野ヲ墾拓シテ之ヲ栽培スル者頗ル多ク、皮ヲ剝テ各地ニ輸送ス、

〔大和本草十四木〕ガンヒ　又山カゴト云山楮ナリ、小木也、其木モ皮モ櫻ニ似タリ、葉ハハギニ似テ小也、四月ニ生葉枝長シ、高數尺ニ過ズ、深山ニアリ、花ハハギノ花ニ似テ黃ナリ、夏ノ末ニサク、其皮ヲハギテ楮ノ如クニ煮テ紙ヲスク、恰鳥ノ子紙ノ如ク、堅クシテツヨシ、色スコシ褐色ナリ、虫クハズ、誤字アレバケヅリ取テ、紙不破コト鳥ノ子ノ如シ、

〔增訂豆州志稿七土產〕黃雁皮(キガンヒ)　增、方言黃小雁皮(キコガンヒ)、又山カゴ、本草綱目ニ載ル蕘花ノ一種ニシテ、向陽ノ山野ニ自生ス、其皮ヲ以テ、雁皮紙薄樣紙ヲ製ス、

〔和漢三才圖會八十二香木〕沈香　沈水香　蜜香　阿迦嚧香梵書〇中略

按沈香交趾之產、脂潤柔靭而重爲最上、暹羅之產、色似鶉彪而香亦佳、次之太泥之產、木理相透、狀色美而其香不佳、占城之產白黑襍似鶉彪而香不佳也、近年中華之船亦少將來之、

奇楠(きやら)　奇南　琪楠　奇藍　伽羅(キヤラ)今專稱之也　伽羅者梵語阿伽羅香之略乎〇中略

按伽羅乃香木至寶者、和漢同貴之、然本草綱目不詳辨之何耶、蓋深水香中撰出之、換名稱奇楠奇藍等乎、楠藍字義不可拘、分牝牡亦不然、沈水香卽奇楠也、萬安沈香一片價萬錢者、則可知古者伽羅與沈香不別也、其出處亦與

て漉事と見ゆ、江戸にて賣所のがんぴ紙の下品なるは多く三ッ椏にがんぴを少し合して漉たるもの也、何れ農家にては餘作をして、定作の外に利を得る事をせざれば、立行がたきもの也、右楮と櫨は農家餘作の内にて、利分多き作りものなるべし、

〔廣益國産考八〕三股を畠地に植益ある事三ッまたはかみをすく木也

三股の苗を拵ゆるには、二月の末苗床をこしらへ、糞水を蒔ちらし、日にさらして打ならし、畦をつくり、麥か綿蒔やうにまくべし、　蒔旬は彼岸中より十日位おくれて蒔べし、　たねは前年初夏にとりおさめて土をまぶし、俵に入、乾き地の日あたりよき所へ埋置、蒔候時ほり出し、土をはらひ、二三粒宛三ッの指にてひねり、上の皮をむけば、白く實出る也、是をまくべし、生ざる實はひねるに中黒く腐たる如し、　扨蒔たる實追々生出たるとき、しげき所は間引捨、小便七分に水三分を和して、度々かけて育れば、其年の冬は一尺二三寸、又は貳尺位に伸べし、　寒氣強き所にては覆をすべし、　翌春三月上旬こぎあげ、植場所にやりて本植すべし、　植るには山の裾、又は狭抔の生たるを伐拂ひ植べし、又は山畑などの荒たるを起し植てよし、植付て三年程になれば、凡六七尺にも伸る也、又三尺位に伸ざるもあり、其時は成長したる分其冬拔伐にすべし、　扨伐たるは家に持かへり、四尺位に伐揃へ、末の短きは中に結添、一トだかへ半位の輪に結び、楮同様に蒸て皮をむき、干揚貯ひ置、用ふる時水に浸しけづりて河水にさらし、煎てた〻き紙に漉事は楮紙に同じ事なれば、爰に略して記さず、

此三ッ股は枝三ッづ〻出れば、自稱の道理にて呼なしたる名と見えたり、駿州興津由井邊に作り、紙を漉て利を得るよし、又甲州にても漉ぬるよし、伊豆邊にても作りぬるか、あたみより漉出せる雁緋紙に下直成あるは、楮皮に此三ッ股を交て漉たるものと見ゆ、江戸にて見及べり、また武州玉川にて和唐紙とて漉出すもの、此三ッ股を用ふると見えたり、

き、是を植ゆ、戸毎に紙を製し、江戸及び東西に出して貲益とす、今駿河紙と號して、墨付唐紙に似たるもの卽是也、

白丁花

〔和漢三才圖會八十四灌木〕白丁花俗稱 花白而微有丁香之氣、故俗名之、

按、白丁花小樹、高二三尺、枝莖勁、葉似狗黃楊葉、四月開小白花、大三分許、一種有千葉者、折枝莖寸寸插之能活、叢生、爲墻籬際限、人家檐溜下植之、

〔大和本草十一圖木〕白丁花 小木ナリ、葉花モ小ナリ、筑紫ニテバ。ン。テ。イ。シ。ト云、漢名シレズ、春秋枝ヲサセバ能生ズ、四月ニ小白花ヲヒラク、庭ニウヱ籬トシ、梢ヲ一樣ニヒキク刈トヽノフ、枝繁密ニ花サキテ可愛、實ナシ、陽地ヲ好ム、陰地ニ植レバ不榮無花、又ヲランダ白丁花ト云木アリ、相似タリ、

三椏

〔和漢三才圖會八十四灌木〕三椏木 正字未詳

按三椏木高丈許、枝椏皆三叉而葉似水楊葉、開小黃花作房、

〔廣益國產考五〕楮○中略

駿州由井宿より興津の間さつた峠の山抔に三ッ椏といへるものを植て、倉澤其外にて紙に漉いだすなり、木は餘り大木となる事なし、山に植て三四年目に伐て、楮を蒸やうに桶の蒸籠にてむし皮をむき、楮同樣に干上置水に浸して皮をこそげ、河にて晒むして板の盤の上にてたゝき、紙に漉事は、楮の紙を漉に少しもかはる事なし、 此苗は冬より春にかけ花咲みいりたるを、五月に實の熟せし時取て干揚、春に蒔ば追々芽を出すを、程よく間引綿を仕立るやう致しなば、其十月には壹尺五六寸には伸もの也、夫を翌春山か畑などに植置ば、三四年目には大は火吹竹ぐらゐ、小は手の指ぐらゐに伸たるを、右に云如く伐て苧となし紙に漉事なり、此三ッ椏にて漉たる紙は唐紙に似て堅にもさくる也、武州邊玉川抔にて漉和唐紙は、此三ッ椏を多く楮を少し入

黄瑞香

娑、葉似無齒梔子葉及楊梅葉、春著花、形如丁香、而紫、既開則四出、外淡紫内白、十餘朶攢簇、其香烈如沈香丁香相兼、故俗曰沈丁花、然濕濃不如蘭花之艶、(未見黄色花者、未審、)

〔地錦抄　五〕沈丁花(ぢんてうげ)　木　春　初　中　うす紫の花咲、一所にあつまり咲て、よかもいみじき匂有、葉もゝつこくのごとくにてよし、又花ノ白キも有、

〔重修本草綱目啓蒙　九芳草〕瑞香　ヂ。ン。テ。ウ。ケ。　ヂ。ゴ。セ。ウ。(但州)　ハ。ナ。コ。ン。セ。ウ。　セ。ン。リ。カ。ウ。　一名睡香(五雜組及ビ群芳譜ニ廬山記ヲ引テ曰、一比丘晝寢磐石上、夢中聞花香酷烈、及覺求得之、因名睡香、四方奇之、謂為花中祥瑞、遂名瑞香、)　紫風流(典籍便覽)　蓬萊紫(同上)　殊大(三才圖繪)　殊友(名物法言)　麝囊(秘傳花鏡)　蓬萊花(同上)　紫丁香(草花譜)　錦被堆(名花譜)　露甲(群芳譜)　風流樹(同上)　佳客(事物異名)　世英(尺牘雙魚)　奪香(廣東新語)　花賊(致富奇書)

人家ニ多ク栽ユ、或ハ誤テリンチヤウケト呼ブ、樹高サ三四尺、枝幹繁茂ス、葉細長ニシテ厚ク、冬ヲ經テ凋マズ、春月枝上ニ花アリ、數十アツマリ開ク、ソノ形筒子(ツヽザキ)ニシテ末四瓣ニ分レ、丁香ノ形ノ如シ、大サ四五分、内ハ粉紅、外ハ紫赤ニシテ、香氣烈シ、沈香丁香ニ似タリトテ、俗ニ沈丁花ト呼ブ、實ヲ結バズ、一種葉邊ニ黄暈アルヲ、金邊瑞香ト云、秘傳花鏡ニ出ヅ、一種白花ノモノアリ、深山ニ多ク生ズ、葉長大ニシテ花後實ヲ結ブ、南天燭子ニ似リ、生ハ青ク、熟スレバ紅、味辛シ、故ニ俗ニ誤リテ胡椒ノ木ト云、然レドモ實ニ毒アリ、食スレバ半日許煩悶ス、又一種葉小ク薄ク黄花ヲ開クモノアリ、甲州ニテオ。ニ。シ。バ。リ。ト云、越後ニテナツボウズト呼ブ、コレモ俗ニ胡。椒。ノ。木。ト稱スレドモ皆非ナリ、胡椒ハ蔓生ニシテ和産ナシ、

〔駿國雜志　二十六〕黄瑞香

庵原郡興津山中にあり、以て紙をすくに用ゆ、庵原郡巡村記云、小河内中河内西河内の三村、紙を製する事を初しは、明和年中甲州市川の人某和田島村に來て、製し始む、今は所々にすくといへども、最初の名を全して、和田島紙と云り、楮の皮に非ず、三。椏。木。の皮を用ゆ、近歳多く山畠を開發

〔大和本草 十二花木〕瑞香(ヂンチヤウゲ) 沈丁ハ倭俗ノ名ヅクル所ナリ、本草綱目芳草門ニ瑞香アリ、和俗ノ所謂沈丁花ト相同ジ、凡本草ニ木ヲ草類ニノセ、草ヲ木類ニノセタル事多シ、灌木ノ類所載山礬花、與沈丁花相似不同、但畫譜所載山礬與沈丁花相合、然レバ瑞香山礬ハ一物二名ナルベシ、木ノ高二三尺、葉ハミカンニ似、花ハ丁子ニ似テ、紫白色香遠シ、故ニ七里香トモ云由、中華ノ書ニ見エタリ、園史曰、植ルニ根ヲアラハセバ不榮、濕ヲイミ日ヲオソル、水ヲシゲクソヽグベカラズ、花ヲチテ後小便ヲソヽグ、或ハ衣ヲ洗フ灰汁ヲカクル、又煎茶ヲ根ニソヽゲバ蟲クハズ、正月ニ花ヲヒラク、白花ナル者アリ、稀也、國俗沈丁花ト云アヤマリテリンチヤウト云、梅雨ノ前四月、或ハ梅雨ノ中ニ挾(サシ)バヨク活ク、糞ヲイム、世俗小兒ノ毒也ト云非也、本草ニ瑞香有數種、三(ミツ)マタ、瑞香ノ類ニテ相似タリ、枝ニ三椏アリ、京都北野ニアリ、花丁子、木似山礬(ヂンチヤウ)、十二月花ヲヒラク、ツボミモ沈丁花ニ似タリ、夏ハ葉落テ冬葉生ズ、異木ナリ、北野ニアリ、

〔和漢三才圖會 八十二香木〕瑞香 睡香 五雜組 俗云沈丁花 誤曰里牟知也宇介 本草芳草類有之、今改移于此、

本綱、瑞香南方山中有之、枝幹婆娑、柔條厚葉、四時不凋、冬春之交開花成簇、長三四分、今如丁香狀、有黃白紫三色、其高者三四尺、有數種、有枇杷葉者、楊梅葉者、柯葉者、毬子者、攣枝者、惟攣枝者花紫香烈、其節攣曲如斷折之狀也、枇杷葉者乃結子、其始出於廬山、宋時人家栽之、始著名、其根綿軟而香、味甘鹹

五雜組云、相傳廬山一比丘晝寢山石下、聞異香、覺而尋之、得此花、故名睡香、後好事者以爲祥瑞、改爲瑞香、

古今醫統云、用浣衣灰汁澆瑞香根、去蚯蚓、以漆査壅根、得鷄鵞水澆之、皆盛長、此花惡濕畏日、不可露根、

按、瑞香人家多栽之、疑此山礬之類、此云沈丁花也、春插之能活、一二尺亦開花、高者四五尺、枝幹婆

古ヨリ和產ナシ、寬保年中ニ漢種初テ渡リテ、今世甚多シ扦插シテ活シ易ク、早ク成長スル者故ナリ、春新葉ヲ生ズ、形扁柏(ヒノキ)葉ニ似テ、甚細クシテ扁ナラズ、枝細ク絲ノ如ニシテ多ク下垂ス、夏ニ至リ枝ノ梢ニ花ヲ開ク、穗ノ長サ六七寸、枝ゴトニ碎花簇リテ蓼花ノ如シ、粉紅色、秋ニ至リ再ビ花ヲ開ク、唐山ニテハ一年三次花サク、故ニ三春柳ノ名アリト云、霜後落葉ス、然ルニ爾雅翼ニハ負霜雪不凋ト云ヘリ、按ズルニ檉ニ檉松、檉杉、香檉ノ名アリテ、冬凋サルノ檉アリ、冬凋ノ檉アリ、後人只成語ヲ襲ヒ、概シテ負霜雪不凋ト爲シ、御柳ノ檉モ冬凋マズト云フ、是皆親ク栽試ザルノ說ナリ、證治準繩ニ一名垂絲柳ト云、綱目ニモ此名ヲ入ルヽ、時ハ、疹ヲ治スルノ檉ハ御柳ナルコト知ルベシ、

增本草從新云、西河柳一名赤檉柳、治痧瘮熱毒不能出、外用爲發散、注云、末服四錢治痧瘮不出喘嗽悶亂、沙糖調服、コノ樹本邦ニテモ四月六月七月ト必ズ一年ニ三次ヅヽ花ヲヒラク、但コノ花至細ニシテ蕚蕚開謝共ニ辨ジ難シ、故ニコノ誤アリ、コレニ三川柳ノ名アリ、畿輔通志曰、三川柳細葉赤皮、與他柳迥別、里人取以發痘ト是ナリ、

椅桐

〔類聚名義抄木三〕椅桐上音、倚、キリ、

〔和漢三才圖會灌木八十四〕伊比桐(いひぎり)　本名未詳、葉似桐類而非桐屬、

按、伊比桐高丈許、葉似采盛葉而略長、春開小白花、秋結子、作房如南天子而大正赤、內有黑細子、阿州和州山中有之、移栽庭園甚美也、然人家希見之、

菜盛葉

〔和漢三才圖會喬木八十三〕菜盛葉　五菜菜　正字未詳　俗云左。以。毛。利。波。

按、木葉似桐而小、高一二丈、五月出花穗似麪、六月結實、有毛似麪而攢生、秋黃熟、山人用葉盛食物代器皿、故名菜盛葉、其木不堪材用、鳥銜其子遺屎易生、

葉苦甘　治小兒胎毒草瘡、入五香湯用、又煎葉汁染皂色、

能下氣、（通雅）　五臺山僧侈言沙羅樹靈異、至畫圖鏤版、然如巴陵淮陰安西伊洛臨安白下蛾嵋山、在處有之、閉廣州南海神廟四本特高、今京師臥佛寺二株亦有干霄之勢、顧或著、或不著、草木亦有幸不幸也、（綠水亭雜識）　朱國祚臥佛寺詩、傳聞蘭若春三月、花比春彌陀院多、惆悵芳時來獨後、但聞風葉響娑羅、（石齋集〇中略）　按に沙羅雙樹の事、平家物語、源平盛衰記の初に見えたれば引注すべし、

〔和漢三才圖會　八十三喬木〕娑羅雙樹（さらさうじゆ）

翻譯名義集云、娑羅此云堅固、冬夏不凋、故名堅固、其樹類槲、而皮青白葉甚光潤、四樹特高、其林森聳出於餘林也、故華嚴經音義翻爲高遠佛入涅槃已四方雙樹皆悉垂覆如來、其樹慘然皆悉變白、

按娑羅本名也、雙樹其林也、俗通曰娑羅雙樹、比叡山有之、其花白單瓣、狀似山茶花而易凋、酉陽雜俎云、娑羅樹花如蓮者與此異、（和州長谷寺有一株）

〔日光山志　四〕砂羅樹（さじゆ）　或砂羅雙樹（さらさうじゆ）とも唱へ、常に夏椿といへり、四五月比花さくゆゑにや、されども椿とは大に異なり、山中に多く生せり、

〔平家物語　一〕祇園精舍之事

祇園精舍のかねのこゑ、諸行むゑやうのひゞきあり、ゑやらさうゑゆの花の色、盛者必衰のことはりをあらはす、おごれるもの久しからず、唯春の夜の夢のごとし、たけき人もつゐにはほろびぬ、偏に風のまへのちりにおなじ、

〔昆陽漫錄〕御柳。

五雜俎曰、今閩中有一種柳、其葉如松、而垂長數尺、其幹亦與柳不類、俗名爲御柳、夫詩人之咏御柳不過禁御中柳耳、此則別是一種而强名之者也と、いまの御柳卽是なり、

〔重修本草綱目啓蒙　二十四喬木〕檉柳　御柳（通名）　一名西河柳（圖書）　御柳（肇慶府志）　西湖柳（錢塘秘錄）　菩薩柳（興化府志）、細柳（寧波府志）　春柳（通志略）　赤柳（丹陽縣志）　雨師柳（王會新編）

ツニ裂テ、内子見ハル、其皮厚キ故、甜瓜ヲ四ツニ切リタル形ニ似タリ、大抵集解說ク所ニ近シ、然レドモ的當ニ非ズ、モクコクハ四時常ニ紅葉ヲ雜ユ、故ニ古人西京雜記ノ葉一靑一赤望之斑駁如錦繡ノ文ニ因テ丹靑樹トス、然ドモ述異記ニ上有五色葉、俗謂之五采樹ト云時ハ、丹靑樹ニハ當リガタシ、

金絲桃

〔大和本草 花木 十二〕金絲桃(ビヤウヤナギ) 葉ハ柳ニ似テ末マルシ、花ハ桃ニ似テ黃ナリ、蕊ハ黃ニシテ長ク絲ノ如シ、梅雨ノ中ニ花開ク、葉冬不枯、高二三尺、諸書ニ出タリ、春分ニワカチウヘ、又正月ニサシテモ生ズ、三才圖繪、如桃而心有黃鬚、鋪散花外、若金絲然、亦根下劈開分種、畫譜所言亦同、

〔剪花翁傳 前編三 五月開花〕金絲桃(びやう) 花一重色黃、開花五月、梅天より半月計もあり、方半陰、地半濕、土回込、肥大便寒中に入べし、株九月中に分植べし、擢(さしほ)春ひがんに枝三寸許に剪て、少し斜に插て、卽時に日覆すべし、後に指頭をもて、土の乾濕を歷て試るべし、指形の速にふかく入ものは可也、堅くして、指點なきものは既に乾ける也、此時水を澆ぐべし、後に又乾堅なる時は淡小便を灌ぐべし、寒中には大便を入べし、葉は柳に似て枝は飴色也、葉長くして丸からず、積氣を治するに妙なりといへり、剪花の時は日の出るまでによし、其後は花いたむなり、升水は切口より上に鍼をかけて插をくべし、

沙羅樹

〔大和本草 雜木 十二〕沙羅樹 大坂ナドニアリ、葉ハ榎又柹ニ似テ、花白シ、朝ニ開キユウベニシボム、花大ナリ、夏花サク、是眞ニ沙羅樹ナリ、未詳、潛確類書ニ沙羅樹ヲノセタリ、

〔松屋筆記 六十二〕娑羅樹

日下舊聞二十三の卷郊坰五臥佛寺の條に、娑羅不芘凡草、不止惡禽、酉陽雜俎 娑羅花苞大如拳、葉似枇杷葉、凡二十餘葉、相沓捧苞、類桐花、一簇三十餘朶、經月方謝、茅亭客話 沙羅者、其木葉如海桐、又似楊梅花、紅白色、春夏間開、吳船錄 沙羅、外國之交讓木也、葉似桷皮、如玉蘭、色葱白、最潔、鳥不棲、虫不生子

また倭姫命世記に、佐々牟乃木枝とあるも此か、同書に佐々牟江御船泊給比、其處爾佐々牟江宮造令坐給支と云るは、神名帳に伊勢國多氣郡竹佐々夫江神社とある地なり、是も此木に因れる名にや、

〔出雲風土記 大原郡〕佐世鄉、〇中略古老傳云、須佐能袁命、佐世乃木葉頭刺而踊躍爲時、所刺〇刺恐判誤佐世木葉墮地、故云佐世、

モクコク

〔和漢三才圖會 八十二香木〕水木犀　俗云毛豆古久〇中略
按、水木犀今人家庭園植之、難長、而有大木、小枝多、毎枝梢五七葉最茂、狹長厚、光澤背淡、夏開小白花、其香似木犀花香、結子三四顆作簇、有彩色、自裂中有赤子、種其子亦生、其葉四時不凋、秋有紅葉者、新古相襍亦美、

〔地錦抄 五〕もつこく　もちの木のるい也、赤き實有、

〔本草一家言 三〕丹青樹　和名茂久古久、稻若水云、要乃木、出西京雜記、
成章按、其樹葉靑赤、交錯二木相同、但要木者、枝葉婆々散垂不似車蓋、茂久古久、樹幹直立、枝葉重疊、寄覆幢々如車蓋、予斷以茂久古久爲丹青樹也、
潛確類書曰、西京雜記終南山有樹、二百丈無枝、上枝叢條如車蓋、其葉一青一赤、望之斑駮如錦繡、故名丹青樹、俗謂之五采樹、
典籍便覽、王氏彙苑並曰、丹青樹一名華蓋樹、再審按木穀要木、其葉皆一青一赤、則宜通呼丹青樹可也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四香木〕石爪　詳ナラズ
モクコクニ充ル說近シ、モクコクハ、日州ニテポ。ツ。ポ。ウ。ト云、庭院ニ多ク栽ユ、葉ハ茵芋(ミヤマシキミ)葉ニ似テ潤ク厚シ深綠色ニシテ光リアリ、互生ス、冬ヲ經テ凋マズ、莖赤シ、夏枝梢ニ花ヲ開ク、形瑞香花(ヂンチヤウゲ)ノ如シ、四瓣ニシテ厚シ、色白シ、衰テ黃色ニ變ズ、後實ヲ生ズ、形桃葉珊瑚(アヲキノ)實ノ如シ、熟スレバ自ラ四

烏草樹

國にては小柴といふよし、大倭本草(十二卷)にいへり、その灰汁を取て布を染るに黄色なり、また一種比左々木とて叢生小樹あり、葉比左加木よりも薄く、嫩葉の葉鮮紅にて火のごとし、三種共に形狀相似たれど、香氣なければ、眞の賢木に別て、比賢木とはいへるなるべし、比は疎劣の心にて、曾祖父を比々知々、曾孫を比々古、孫枝孫生を比古枝、比古波江、稂を比豆知などいふも此よしなるべし、上野に刀禰川、比刀禰川、信濃に田井、比田井あり、これも眞の刀禰川、田井より劣れる方に比の字をかうぶらせいへる也、比奈津女、比奈乃國も、都人、都所にむかへて劣の鄙女鄙土をいへり、かゝれば比左加木は眞榊に似たれど、香氣なき劣の木なれば、その名おへりとみゆ、

〔倭名類聚抄 十四 染色具〕柃灰　蘇敬曰、又有柃灰、(柃音靈)燒柃木葉作之、並入染用、今按俗所謂椿灰等是也、

〔新撰字鏡 木〕榴(左世夫)　烏草樹(左之夫)

〔倭名類聚抄 二十 木〕烏草樹　楊氏漢語抄云、烏草樹、(佐之夫乃紀、辨色立成說同、)

〔古事記 下仁徳〕太后(仁徳后磐之媛、○中略、)即不入坐宮而引避其御船、泝於堀江、隨河而上幸山代、此時歌曰、都藝泥布夜、夜麻志呂賀波袁、迦波能煩理、和賀能煩禮婆、迦波能倍邇、淤斐陀氏流、佐斯夫袁、佐斯夫能紀、斯賀斯多邇、淤斐陀氏流、波比呂、由都麻都婆岐、斯賀波那能、氐理伊麻斯、芝賀波能、比呂理伊麻須波、淤富岐美呂迦母、

〔古事記傳 三十六〕佐斯夫袁は(夫字、延佳本に天と作るは、次句なる夫を、舊印本などに天に誤れるを、宜しと心得て、此をもさかしらに改めたるなり、わろし、)烏草樹をなり、袁は余と云むが如し、○中略此樹契冲云、今山里人はさせぼの木と云、柃に似て小き實あり、熟すれば紫の黑みたるやうにて、童などは取て食ふとぞ承る、柃は和名抄に見えて、今俗に毘左々紀と云木なり、出雲風土記に、佐世乃木葉とあるは、此烏草樹にやと云り、或人烏草樹は、今俗にさゝぶの木とも、さやくぶの木とも云と云り、(出雲風土記大原郡佐世郷處に、須佐能袁命佐世乃木葉頭刺而踊躍云云、)

爲手縋、○下略

〔萬葉集 三雜歌〕大伴坂上郎女祭神歌一首幷短歌

久堅之天原從生來神之命、奥山乃賢木之枝爾、白香付、木綿取付而、齋戸乎忌穿居、○下略

〔古今和歌集 二十大歌所〕神あそびのうた　とりもの、うた

霜やたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも

〔倭名類聚抄 二十木〕柃　玉篇云、柃音零、一音冷、漢語抄、比佐加木、似荊可作染灰者也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕今本玉篇云、力丁力井二切、按力丁在平聲十五靑、與音令合、力井在上聲四十靜、冷在上聲四十一迥、其音不同、此以冷音柃恐誤、下總本令作零、廣本同、並與廣韵合、○中略 柃灰見染色具、按、相模俗呼柃爲阿久柴以燒葉入染用也、

〔大和本草 十二雜木〕柃　順和名比佐加木、西土ノ民俗小柴ト云、葉ハサヾン花ニ似テ黑キ實ナル、玉篇曰、柃似荊可作染灰者也、今俗ヒサヽキト云、其灰汁ヲ用テ布ヲ染ム黃色ナリ、本草諸書ニヲヒテ未見之、一種別ニヒサヽキト云小樹アリ、低小叢生、是亦柃ニ似タリ、葉ハ柃ヨリ少薄シ、其嫩葉鮮紅如火、其色甚好可玩色如火、小木故ヒサヽキト云、ヒハ火サヽハ小也、

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕柃 ひさかき ぴいやしやい 音零　和名比佐加木、俗云比佐々木、誤云比佐々古、○中略 倭榊略言乎、

按、柃木高二三尺、葉略似茶葉而狹長、有鋸齒、開花最細小淡白甚臭、隨結實生於葉本椏、毎二顆細小黑色、其木葉爲灰、染家必用之灰汁也、蓋此非榊之屬、山谷巖石間多有之、略似榊而矮、故和名之、

〔松屋叢考 一三樹考〕

今の世神事に用るさかきは、和名抄に柃漢語抄云、比佐加木といへるもの也、これに三種あり、一種は上品にて、葉もつやゝかなり、その狀水木犀に似て、細實結り、初は靑色、熟れば黑色なり、武藏國にて、左加木とも山左加木ともよぶ、一種は下品なり、俗に比左加木とも比左々木ともよぶ、西

なり、左根掘、左根延、小菅、五味子、左百合、佐沼田などは、底の曾にかよふ左にて深きにいへり、眞男鹿、眞寐、佐夜中、狹衣、佐青、狹藍々々、狹丹頰、狹丹塗、酒などは眞なり、眞は宇万の約にて、物を美る詞、眞木眞賢木などの眞これ也、早苗、早蕨などは和左の約にて早きなり、香木なりといふよしは、神樂歌に、佐加幾波乃加乎加久者之美とよみ、その外にもおほかればなり、（清正集に、榊ばの香をとめくれば云々、光經集に、榊葉のかをなつかしみ云々、源氏榊に、さかきばのかをなつかしみ云々、亞槐集一に、まさかきのかをかぐはしみ云々など多く見ゆ、万葉槻の落葉に神樂歌を引て、榊樒のよしを云たれど、未だつくさゞる說なり、）小香木は桂櫁楠樒などの香木にはいへど、櫁にいへる例はたえてなし、（景行紀の志邏迦之餓延、雄略紀の伊都加斯賀母登などの歌を引ていふも、證とするに足らず、）桂の加は香也、都良は圓の略にて、香ありて圓なる實結木なれば香圓木といふなり、橡も圓眞子の通音なるべし、（都夫良は丸きことにいふ古語にて、履中紀に圓此云豆夫羅とみゆ、都夫と訓も同義也、）樒の手加は小香なり、荷蘆茵なども、香きものなれば、然いふ也、多末は玉にて、實の圓なるが玉に似たればいふ、桂の都良も、樒の多万も、共に圓實のよしなり、楠は臭の木也樒の志も久之の約にて、酒を久之といふも久左の通音、藥も須利の切しにて同義也、惡臭に久左之といひ、美香に加保利といふとのみ心得たるは頑なり、加も久左の切にて、古は別なかりしは、屎は久左、厠は薫屋なるを通はしいへるにても知べし、（下學集に、河屋の說を說たれどうけられず、兼輔家集、空穗國ゆづりの下卷、源氏須磨、枕草子春曙抄一、禁秘抄下、類從雜要三、侍中群要四などにみえたるみかはやうども、御厠屋人にて、御厠に奉仕する女官のことなどいへるなり、）かく、桂木犀楠樒廣心樹の類を、なべて實木といへる中にも、神事にはおほく櫁をや用たりけん、（櫁は久須多夫、大多比、白多夫の總名、）多弓八幡謠詞に、うつすや神の跡すぐに、今も道あるまつりごと、あまねしや秀室の木の、をか玉の木の枝に、こがねの鈴を結びつけて、ちはやぶる神あそび、七日七夜の御神拜云々とあるは、太玉串のさまなり、

〔日本書紀 神代一〕中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、（一云、眞經津鏡、）下枝懸青和幣、（和幣、此云尼枳底、）白和幣、相與致其祈禱焉、又猿女君遠祖天鈿女命、則手持茅纒之矟、立於天石窟戶之前、巧作俳優、亦以天香山之眞坂樹爲鬘、以蘿（蘿、此云比舸礙、）

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕榊（俗字） 坂樹（日本紀） 賢木（本朝式） 龍眼木（漢語抄） 和名佐加岐（正字未詳）
按、榊本朝神社必用之木、猶浮屠用木蜜、其木葉似木蜜而葉小、色深青無香、四時不凋、開小白花、結子生青熟紅、

〔松屋叢考 一〕三樹考

今三樹といふは、賢木は桂、楠、櫁、廣心樹などの總名、加豆良乃木は櫁、木犀などの總名、櫁は、天竺桂の類の總名なれば、この三種をとり出て、說を立るがゆゑなり、賢木は、香き常葉木のことにて（常葉木なるよしは、源氏榊に、かはらぬ色をしるべにてと有にても知べし、）桂、楠、櫁、廣心樹などをいへど、ことさらに賢木とて神事に用るは櫁なり（櫁は天竺桂、大多比、白多夫の總名なり、）そは眞木はもと槙、檜、杉などの類を美樹とほめし名なれど、（宇万の約り眞なり）中に、一種槙としも稱は、今の高野槙なるがごとし、（高野槙、坂東には少なれど、北國中國西國には、いと多くて、檜杉などゝ共に山中にまみさび立りといへり、）古事記（上卷）に、天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而、（中略）（神代紀上卷、古語拾遺同、說也、神代紀には、五百箇眞坂樹と書き、拾遺には、五百箇眞賢木と書り、五百津は枝の繁きをいふ、湯津楓の湯津も五百津の約なり、仲哀紀に、五百枝賢木とも見ゆ、百枝槻百枝杜樹の類也、）また（中卷神武の段）神武天皇の御歌に、伊知佐加紀、微能意富祁久袁云々、（神武紀同、伊知は伊都の通音、嚴橿といふにおなじ、その嚴しく立榮えたる貌也、古事記傳十九の卷に、嚴賢木といふは例なくてうけられぬよしいへるは、中々にうけがたし、）神功紀に、撞賢木嚴之御魂云々（撞は齋にて、齋深まはる榊なり、そな嚴の枕詞とす、）などみえ、この外古書に名の顯れたるは、舉に遑あらず、こを賢木、坂樹と書るは假字なり、神樹（万葉四）と書るは、神事に用る木なればなり、榊（日本後紀十六、新撰字鏡、）は神木の合字にて、麻呂を麿、堅魚を鰹に作る類なり、杞（字鏡）は祀木の合字、神祀る木のよしなり、椗（字鏡）は未詳、杜（字鏡）は神の杜にある木の心也、龍眼木（字鏡、和名抄、）はその形容の似たれば借用て書るなり、名義は舊說に榮樹にて、なにゝもあれ、常葉樹の榮立るにいひ、（万葉仙覺抄五の卷、静山隨筆、冠辭考九の卷、古事記傳八の卷、万葉槻の落葉別記、）中にも櫁木の事ならんと（冠辭考九の卷）いへるはうけがたし、今按に賢木は小香木なり、まづ左といふ辭に五の差別あり、小言、小雨、小枝、小躍、小間无、小竹、小々形の錦、細石、小々浪などの左は小き心なり、狹筵、狹疊、さおりの帶などは狹き

榊

づれもわたり五寸をためしとせらるとみえ、隼人司式には、年ごとに茶籠二十枚づゝ造り納るよしなど見ゆれば、其器ものも、はやくこゝに造り出づる事知られたり、

〔權記〕長德元年十月十日、下給出納爲親造茶所請者、今年料造進御茶料物文、

〔海人藻芥〕茶者自上古我朝ニアリ、挽茶節會トテ於内裏被行公事儀式、然葉上僧正入唐之時、重而茶ノ種ヲ被渡、栂尾明惠上人翫之、サレバ本ノ茶ト云ハ栂尾也、非ト云ハ宇治等ノ事也、

〔西宮記臨時五〕所々事

茶園在主殿寮東

〔百寮訓要抄〕典藥寮　もろ〳〵の藥をおさめらるゝ也、此寮は藥園あり、茶園枸杞園あり、

〔本朝文粹山寺十〕晩秋過參州藥王寺有感　慶保胤

參河州碧海郡有一道場、曰藥王寺、行基菩薩昔所建立也、聖跡雖舊風物惟新、前有碧瑠璃之水、後有黃纐纈之林、有草堂、有茅屋、有經藏、有鐘樓、有茶園、有藥圃、○下略

〔田氏家集下〕乞滋十三摘茶

不勞外出好居家、大抵閑人只愛茶、見我銚中魚失眼、聞君園裏茗爲牙、詩行許摘何妨決、使及盈筐可得誇、庭樹近來春欲暮、莫致空腹猶看花、

〔倭名類聚抄祭祀具十三〕龍眼木　楊氏漢語鈔、龍眼木佐加岐、○今按、龍眼者其子名也見本草、日本紀私記云、坂樹刺立爲祭神之木、今按、本朝式用賢木二字、漢語鈔榊字並未詳、

〔大和本草雜木十二〕榊サカキ　本邦ノ寶基本紀曰、一名眞賢木マサカキ、持受自然之正氣、冬夏常青、故衆木之中以賢木號榊木也、今案ニ榊ハ倭字也、日本紀ニ榊ヲサカキト訓ズ、又龍眼木サカキトカケリ、順倭名抄モ同、龍眼肉ノ葉ニ似タル故ニヤ、昔年龍眼木異邦ヨリ來ルヲ見タリシニ、其葉ヨクサカキニ似タリ、此木山中ニ多シ、漢名未詳、本朝神事ニ用之、又別ニ葉モ木モ相似テ不同木アリ、其名未詳、

のをの明惠上人法間のために、建仁寺にましたしくおはせしかば、これを贈り給へる事ありき、そのかみ栂尾にて、いかなるものぞとくすしに尋ねとはれしに、しか〳〵の能おほかれども、わが御國には、をさ〳〵ある事なしとこたへしかば、さはめでたきものよ、おこなひつとむる法師ら、かならずのみてたすけおほかりぬべしとて、其種をかの僧正よりもとめえうして、はじめて栂尾にうゑそめられしよし、上人の傳記にみゆ、このつたへにても其世のおもむきはしられたり、さてのち宇治の里におほしたてしよりなむ、あめのしたにたえてたぐひなきものはいできそめたるなりける、

〔類聚國史三十三帝王十三〕弘仁六年六月壬寅、令畿内幷近江丹波播磨等國殖茶、毎年獻之、

〔日吉社神道秘密記〕一茶木數多有之、石像佛體有之、傳敎大師御建立所、茶實從大唐大師求持玉ヒテ有御歸朝植此處、其後山城國宇治郡栂尾所々植弘給云々、卯月祭禮、未日大政所エ神幸、二宮八王子十禪師三宮御茶調進之、社務當參之役人祝之、爲以淨水、此茶園之奥有大寺、小五月會剩内渡爲於此、

〔木芽說〕頭書日吉社神道秘密記云、○中略かく見ゆれども、此書いと後世のものなるうへ、傳敎大師茶をこの國に植はじめて、宇治とがの尾へも植弘められたりなどいふ事、何の證もなく、甚しきあやまりなれば、論にも及ばず、

〔西宮記三月〕差造茶使事一日

勘承和例云、三月一日差造茶使、稂並雜物、行內藏寮者、使一人、侍醫、校書殿執事一人、共造之、校書殿使摘茶進所、藥殿生以升量請、造法見例文也、

〔延喜式二十八隼人〕年料竹器　茶籠廿枚方二尺料、篔竹各六株、

〔木芽說〕延喜の民部式に、年料の雜物の中に、尾張國長門國は、茶碗廿口を奉るよしにて、そはい

どこれをいみじくよろこばせ給ひて、かづけものなど給はせつ、やがてそのみな月に五の內つ國をはじめて、近江丹波播磨などの國々におほせて、國ごとに茶をうゑしめて、とし〴〵の貢ものにさだめ給へりしよししるされたり、わが御國にてこれを用ふること、こゝにさだかに見えたれば、世の人まづこれを引出て、此時をそのはじめといひ傳ふめり、〇中略かくのみ世を經つゝ、になきものともてはやさんには、かの弘仁のころ植そめられし、國々より、其種ををちこちにもとり傳へて、あめのしたに茂くさかりにおひひろごりぬべきを、さしもあらざりしは、ふるき世には都人こそあれ、ゐなかうどらは、あながちにめで用ふべき物としもしらざりしにこそ、慶滋のやすたねが、三河國あをみの郡なる藥王寺といふてらにまうでて、そこに茶園藥園などあるよしいへるをみれば、まれ〳〵にはさる所も有しならめど、それはたひさしくはさかえざりしなるべし、かのはやうおほやけよりうゑおほさせ給へりし國々にも、此木にかなふ所を得ざりしにや、またとゝのへいとなむわざやいたらざりけむ、ありしみさだめのごとく、とし〴〵のみつぎものゝ數にそなへてはめさずなりぬとおぼえて、延喜式の國々のみつぎのさだめどものの中にはしるされずなむありける、〇中略されればいつしかとその木だちもなごりすくなう枯うせて、つひにはさるもののありとあちはひしれる人だに、世にいとまれになりゆきしなるべし、さばかりおとろへはてけむを、葉上僧正〇榮西明惠上人とて、これもかれもすぐれたる人のおなじ世に出逢れて、ともにこれをこよなきものとめでたふとばれしより、ふたゝび世になべてもてあつかうやうにひろごりて、かくは今の世までにたえせぬものと成こし事、ひとへに此ひじりのいさをによりてなりけり、しかありしはじめは、かの僧正もろこしより此種をおほくもて傳へられて、建久の二とせといふに、筑紫まで歸りつきて、背振山といふ所にこゝろみにうゑそめられしぞ、岩上茶といふものゝはじめなりける、〇中略この僧正いまだみやこにおはしけるとき、栂

口去煩膩、

造茶法 新採揀去老葉及枝梗碎屑、鍋廣二尺四寸、將茶一斤半焙之、候鍋極熱始下茶急炒、火不可緩、待熟方退火、徹入篩中、輕團那數遍、復下鍋中、漸減火焙乾爲度、中爲玄微難以言顯、火候均停、色全美、

〔雍州府志 六土產〕茶 凡本朝賞茶也舊矣、嵯峨天皇時既玩之、中世建仁禪寺開祖千光國師榮西入宋、得茶而歸本朝、治源實朝公之餘薰、明惠上人種茶實於栂尾、其所種之深瀨等園名至今存矣、曾來朝僧淸拙正澄、與夢窻獨芳遊栂尾之詩中、稱栂尾爲茶山宜哉、義滿公適在伏見時、夢羽仙傳受植茗摘鮮之術、始使大內介某植茗於菟道、爾後宇縣有森祝長井氏之人而製茶、其中森川下預公方家之茶事、武衞家之園謂朝日、京極家之園謂祝奥山、至法住寺義澄公特賞之、故命彼等益々精選之、或稱極或稱上揃、或謂別義揃、倭俗每物各比並而撰之、取用其良物總謂揃、近世上林峯順幷竹菴等茶人、自丹波上林鄕遷居於斯所、遂日富榮、凡宇治中十一家茶師、納公方家之茶於壺而獻之、其餘各所製之茶、或一袋或二袋、納十一家所詰之壺內、是謂御通、倭俗不能獨立、而遂隊連屬是謂通、周密納物曰詰、至茶特密極茶十錢目納小紙袋壹雙謂壹袋、故袋壹個稱半、凡小袋二十、則約壹斤而其重二百目也、極極品之謂也、於今茶園所々有之、皆煎藥而用之者也、至抹茶之極品、則宇治之外不堪用、且宇治橋自西第三柱之間於一河中水特淸冷、堪用點茶之湯、又此地山間茶磨石出、彼此茶之事畢矣、凡橋以東宇治郡也、橋以西久世郡也、今製茶之大家多在橋西、然古茶家多在東、故依舊謂宇治茶、

〔木芽說〕茶といふものいとも上津代にはありとも聞えず、いづれのころよりか吾御國にはうゑそめけむ、さだかにしるし傳ふるものなし、類聚國史に、嵯峨のみかどの弘仁といふ年のむとせの夏、近江國にみゆきまし〱て、滋賀韓崎など見そなはし給ふみちのたよりに、ちかきわたりの寺々にわたらせおはしましける時、梵釋寺の永忠大僧都、手づから茶を煮て奉られしに、みか

自中古以來、以碾茶末爲賞美、○中略 其碾末之茶者、以城州宇治之茶爲第一、縣吏上林氏及數十家、樊園摘茶而修治之、以號初昔、後昔、伊昔、鷹爪等名、而誇奇味、先以新產第一者貢獻之、次擇新奇俟公侯諸士之需、每夏月公侯諸士、同遣茶壺于宇治茶市、以藏貯好奇品、而轉輸之京師江都市上、沽碾茶者、悉傳送於宇治以販之、其餘諸州產碾末之茶者全無、惟處處產于煎茶、此亦以宇治之產爲勝、江州之政所、紀州之熊野、駿州之安部、豫州之不動坊、及海西江東所在有之、江都市上所販煎茶者、駿信甲總野奧之產也、近時江東之俗、常煎茶朝飯前先飲者數碗、呼稱朝茶、婦女最爲之、京師海西之俗不然、南都之俗用煎茶煮飯、和以炒大豆黑大豆赤小豆等之類、四方賞之、號奈良茶、今有家家後園種茶采之修造、或寺社園中亦自製茶、俱不爲佳、世以桑葉枸杞葉五加葉忍冬葉之類代茶、此唯備保養、其味不好、又市中采千歲虆葉而製之、代茶呼稱甜茶、是民間兒女之用耳、

〔和漢三才圖會 八十九 味果〕茗 音明 茶 音途 檟 音賈 蔎 音設 荈 音外 漢時、茶字轉途音爲宅加切、今云知也、

本綱茶有野生、有種生、種者用子、其子大如指頂、正圓黑色、其仁入口初甘後苦、二月下種、一坎須百顆、乃生一株、蓋空殼者多故也、畏水與日、最宜坡地蔭處、其木自一二尺至數十尺、木如瓜蘆、葉如巵子、花如白薔薇、實如栟櫚、莖如丁香、根如胡桃、三歲可采、春中採嫩葉、蒸焙去苦木、末之乃可飮、其葉卷者上、舒者次、凡雅州之產爲第一、建州之茶上供御用、凡茶者下爲民生日用之資、上爲朝廷賦稅之助、其利博哉、茶之稅、始于唐德宗、

採茶之候、太早則味不全、遲則神散、以穀雨前四五日爲上、後五日次之、再五日又次之、茶芽紫者爲上、面皺者次之、團葉又次之、先面如篠葉者最下也、徹夜無雲浥露採者爲上、日中採者次之、陰雨中不宜採、產谷中者爲上、竹下次之、爛石中者又次之、黃砂中者又次之、

茶葉 苦甘微寒 入手足厥陰經、治陰證、湯藥內入此、能清頭目、下氣消食、去痰熱、服威靈仙土茯苓者忌茶、

大抵飮茶宜熱、宜少、不飮尤佳、空心飮茶入鹽、直入腎經、且冷脾胃、乃引賊入室也、惟飮食後濃茶漱

〔書言字考節用集〕六生植茶（郭璞云、早采爲茶、晩采爲茗、異名居多、出服食、）茗（見同上）

〔異制庭訓往來〕夫茶之爲茶、始植而後摘之、始植則本、後摘則末也、植之不摘、則豈有磨之服之之茶哉、故桑苧翁之茶經、陸龜蒙之茶記、言之備、異朝名山者、建溪、蒙山、廬山、浮梁、我朝名山者、以栂尾爲第一也、仁和寺、醍醐、宇治、葉室、般若寺、神尾寺、是爲補佐、此外大和寶尾、伊賀八鳥、伊勢河居、駿河清見、武藏河越茶、皆是天下所指言也、

〔本朝食鑑〕四味果茶〇中略

集解、茶有野生種生、其野生者、移栽于好地、培之糞之、而摘葉作茶、其味不爲美、種生者、采收好茶子、而鋤好園地、其地以雜砂之土爲上、九十月之際、鋤地碎土、極細令地上平均、作畦引繩而下種、以茶子二合種于一處、此謂一叢、大抵方一尺五六寸之地一叢相隔者三尺許、使茶子不相揩合爲要、覆之用雜土之砂、厚三寸許、或曰二月下種、使茶子一升分鋪地上、方一尺五六寸、覆土三寸許、輕輕打平土面、倶是削竹作弶形、數箇以設之、亦竹籬構于四方、此預所以拒鳥雀之穿啄也、其苗盈尺之比、初糞于茶根、其糞者、馬糞夏草之類也、發根邊之土入糞、後經一日而覆土、其苗既長經三四年而摘芽、至摘芽之歲用人糞而培養之、先於大磁甕中入人糞、次合水拌勻、又合油滓乾鰯而仍攪之、一日二三次、令之腐熟、經十四五日候熟而用之、其新芽之極上者號白、其次號極結、號別儀結、號極揃、號別儀揃、其號上揃者下品、其最下品者作煎茶也、白芽之茶園、糞之者秋冬至春七八次、臘月最多糞而培養之、極結別儀結之園、糞之者四五次、極揃別儀揃之園、糞之者二三次、上揃煎茶之園、糞之者一次、大抵茶園恐霜餘寒之氣、故編葦蘆作箔、令其緻密而要不漏日影、自節分後四十八日、使箔覆于茶樹上者、如屋簷形、以避霜雪風雨及八十八夜之氣、既過八十八夜而除去覆箔也、摘其白芽者、自節分至後七十八九日爲期、以先其摘芽之大者少許而修治試之、其味佳則次第摘之、凡茶樹似巵子葉、或似巵子之弱葉、花似山茶花之小白葩黃蘂、子大似木患子核、正圓黑色、其仁初甘後苦、而戟人喉不耐食之、古者煮茶而飲、

夏椿

に勝れりといへり、又此樹は海石榴に似て、高きものは一丈許、低きものは二尺を過ずして、よく華さくものなるに、和漢三才圖會に、遠州有山茶花大木、周三尺高三丈餘といひしは、その產地今詳ならず、

〔草木育種後編下　灌木類并冒耕の類〕夏椿　一名しやら、日光にてサルスベリといふ、花夏月開く、五出にして白色なり、實を春月早く蒔て、二三年を過て砧となし、春葉出ぬ前によび接にしてよし、一種豆州天城山に產するサルスベリ、一名赤ぎといふものあり、似て花小なり、この木の枝を江戸の石匠石鑿の柄となす、又材は柱となして雅なり、盆に植たるは糞水を澆ぎてよし、花戸に多し、插花に用ふ、

茶

〔倭名類聚抄十六　水漿〕茶茗　爾雅集注云、茶宅加反、字亦作檟、小樹似支子、其葉可煮爲飮、今呼早採爲茶、晩採爲茗、音酩一名荈、音喘風土記云、荈者茗老葉名也、

〔箋注倭名類聚抄四　水漿〕爾雅釋木釋文云、茶埤蒼作𣘻、廣韻云、𣘻春藏葉、可以爲飮、茶俗、按爾雅釋艸、茶苦菜、詩毛傳、說文並云、茶菜名、是茶字本訓、以茗其味苦、轉謂茗亦爲茶、爾雅釋木云、檟苦茶是也、茶茗字、後人從木作𣘻、以別苦菜之茶、俗又省作茶、𣘻字亦遂廢矣、陸羽茶經云、其字或從艸、或從木、或艸木并從、艸當作茶、出開元文字音義、從木當作𣘻、其字出本艸、艸木并作茶、其字出爾雅、但今本爾雅作茶、不作茶、蓋源君所見爾雅作茶歟、釋木、檟苦茶、郭注略同、陸羽茶經、茶者南方嘉木也、一尺二尺廼至數十尺、其巴山峽川有兩人合抱者、伐而掇之、其樹如瓜盧、葉如梔子、花如白薔薇、實如栟櫚、葉如丁香、根如胡桃、伊勢廣本茶皆作茶、與今本爾雅合、蓋苦菜茶茗同名異物、然茶茗之茶、後省作茶、以別苦菜之茶、源君或從之、今不輕改、集韻、荈、茶葉老者、太平御覽引魏王花木志云、老葉謂之荈、細葉謂之茗、

〔伊呂波字類抄知　植物附植物具〕茶チヤ　亦作檟、小樹似支子、其葉可煮爲飮、今呼早採爲茶、晩採爲茗、一名荈、音舛陳風土記云、荈茗茶老葉名也荈　茗同草名也

リ久シ、家園ニ可ㇾ植、子ヲマケバヨク生ズ、深紅ニ白キ飛入アルハ、葉大ナリ、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕山茶花 左牟佐久波、字之音也、誤如ㇾ曰₂茶山花₁、〇中略

按山茶花其樹葉花實與₂海石榴(ツバキ)₁同而小、其葉如₂茶葉₁、其實圓長形如ㇾ梨而有₂微毛₁、可ㇾ小₂梅大₁、老則裂中有ㇾ核、三四顆搾ㇾ油、多₂於海石榴₁、凡種ㇾ子者必不ㇾ佳、可ㇾ接ㇾ枝、凡山茶花冬爲ㇾ盛、海石榴花春爲ㇾ盛、遠州有₂山茶花大木₁、周三尺餘、高三丈餘、

〔古今要覽稿 草木〕さゞんくは 山茶華

さゞんくははこれ山茶華の字音にして、卽和漢通名なり、その一名を耐冬華、一名海紅華、一名玉茗華、一名茶梅といふ、今多く人家に植るものは、梅の風、口粉紅、根岸江、三國紅さめが井、雪の山、同じくその瓣小なるもの、及び醉西施さんくの房薄紅の大瓣小瓣茶ばななどのたぐひ也、いはゆる根岸紅、三國紅は卽海紅華にて、いはゆる薄紅のものは玉茗華、一名淺紅山茶也、其外數十種ありといへども、漢名のいまだ詳かならざるもの極めて多し、華の形はすべて茶の華に似て、最大にして單瓣のもの多く、重瓣のもの少なし、本邦にては、その花八月の末九月の比より咲そめて、十一月の半に至り、西土にては十月より咲そめて年をへて二月の比までも咲つゞくよし、蓋し風土の異なるによりてなるべし、其葉の狀又茶の葉に似て、大小の異同ありといへども、皆深綠色にして、霜雪を經て凋まざる事、なを茶葉の如し、扨大隅國都の城といふ所にては、家ごとに此樹五六十、或は七八十を植置てその芽ざしを摘て茶に製し、以て日用のたすけとす、その香氣芬芳常の茶よりも勝れるによりて、年若き女の神まうでなどする時は、まるぐけの帶を結び、手巾(テヌグヒ)ひきかぶりて、此茶を製せしを物につゝみて香袋に代用ゆるも、此ものゝ其地に生ずるは至て上品にて、殊に香氣の勝れたるによりてのならはしなるもいとめづらし、且其實を採て油となすに、海石榴よりもその油多く出て、それを以て物をゆびき熟し食ふに、香氣ありて味また麻油

山茶花

増上寺、台德院殿の御廟のうちに榮ゆるものは、(諸國採藥記、圖史艸木昆蟲考、)後にうつしうへさせ給ひしにてもあるべきにや、一説に檜椿は寄生にして、すべて南方暖和の地に生ず、薩摩讃岐及び伊豆などにもまゝこれありといへり、今按にひのき椿の伊勢國及び増上寺等にあるものは、予(○屋代弘賢)いまだ其樹を親見せず、今忍岡の稻荷(俗にこれを穴のいなりといふ)の境内にあるものは、即白玉椿にして、その樹極めて高大なりといへ共、その寄生は多く枝梢にありて、本幹大枝には生せず、其形は朴樹(エノキ)或は桑樹上の寄生とは異にして、扁柏(ヒノキ)に似て扁柏にあらず、海柏(ウミヒバ)に似て海柏にもあらず、別に是一種の寄生よりなると申傳ふるよし、予寛保中夏台命によりて彼地に行、此椿の木御用に付、一丈計の木二本を奉りしを、吹上御庭に植させられしなり、此椿のありし村は、東海道石藥師の驛より一里程江戸の方に來れば其村みゆるなり、

〔本朝奇跡談上〕同國(○伊勢)鈴鹿郡高宮村に檜椿(ひのきつばき)と云名木あり、椿の木より檜の葉出る也、總而此村の椿に、檜の葉交り出る也、弘法大師檜を椿となし給ふと云傳るよし、所の者申傳る也、彼椿有し村は東海道石藥師の驛より壹里程、江戸の方へ來れば高宮村見ゆる、此所に在、

〔壒嚢抄十一〕弘法大師ノ御出家受學等ノ樣如何(○中略)横尾ニ御座シ時、(○中略)檜葉(ヒバ)ヲ以テ御手ヲ摩淨便宜ニアリケル、椿ノ上ニ授蒔テ、誓テ曰ク、我ガ宿願可ㇾ果遂、此葉彼木ニ生付ベシト被ㇾ仰ケルガ、檜葉則椿ノ上ニ生付テ、今ニアリト云々、是ヲ世ニ柴手水(シバテウヅ)ト云也、

〔書言字考節用集六生植〕山茶花(サンザクハ、サザンクハ)(一名海紅、詳ニ三才圖會、活法、)

〔大和本草十二花木〕茶梅(サンシクワ)　山茶ノ類ニテ葉モ花モ小ナリ、白アリ、香ヨシ、山ニモアリ、實ニ油アリ、山ニ多キヲ村民取テ利トス、九月ヨリ花ヒラク、家園ニ植ルニハ淡紅アリ、深紅アリ、紅ヲバ海紅トモ云、共ニ本草ニ不ㇾ載、海紅ハ十月ヨリ二月マデ花アリ、中華ノ書ニ載タリ、冬花稀ナル時開キテ盛

椿雜載

考

〔伊豆海島風土記下産物〕ツバキ　島々ニ多シ、花ハ一重ノ紅ニテ、八月ヨリ咲キ四月迄絕エズ、島人此實ノ油ヲトリテ、薬ヲ煮テ喰フ、又國地ニ出シテ穀ニ変易ス、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年五月癸酉、渤海使史都蒙等歸レ蕃、○中略縁ニ都蒙請一、加ニ附○中略海石榴油一缶一、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進○中略
海石榴油一十斛

〔延喜式二十四主計〕凡中男一人輸作物○中略海石榴(ツバキ)、呉桃、閉美油、各三合、

〔古今要覽稿草木〕つばき○海石榴中略
椿の名たゝる所は、巨勢山はさら也、常磐山、音羽山、神山、鏡山、穴師山、朝日山、三上山、美濃の御山、宮城野等なるよし、

〔倭訓栞中編二十一〕ひ○の○き○つ○ば○き○　山茶花の葉の中に栢葉をまじへたる奇品なり、寄生の品とみえたり、近江伊勢三河などにあり、埃囊抄に、弘法大師槇尾寺に在し時、檜葉をもて御手を摩清めて、そこに在ける椿の上に投繫て誓はく、我宿願遂べくんば、此葉彼木に生著べしと、檜葉忽ち生著て椿になる、今に在、是を世に柴手水(テウヅ)といふと見えたり、今ゑばしといふ里あり、伊勢鈴鹿郡高宮に此品多くあり、鈴鹿山中には、賢木多く生たり、安濃津に多羅葉木瓜柃(ヒサカキ)梅もときにも生せり、

〔古今要覽稿草木〕ひのきつばき　あやつばき
ひのきつばきは、一名をあやつばきといふ、此樹は伊勢國鈴鹿郡つばきの神社の境內、及び同郡高宮村などに多し、卽椿の枝に檜の枝さしまじりて、花は常のつばき也、されども紅白の二種あり、寛保年中台命によりて、彼村より二樹を奉りしを、吹上の御園に植させ給ひしより、今三緣山

椿利用

思フニ、菊ノ椿ノト云モノ人ノ數奇ニヨリテ數多ニナルモノトミエタリ、一々漢名アルベカラズト仰ラル、

〔延喜式 十三 大舍人〕凡正月上卯日供進御杖、〇中略頭進奏曰、大舍人寮申正月能上卯日能御杖仕奉氐進耳止申給波登久申、勅曰置之、屬以上共稱唯、隨次相轉置案上、畢即退出、其杖曾波木二束、比比良木棗毛保許桃梅各六束已上二束爲株、燒椿十六束、皮椿四束、黑木八束已上四束爲株、中宮、比比良木棗毛保許桃梅各二束、燒椿、皮椿各五束、但奉儀見東宮式

〔萬葉集 十二 古今相聞往來歌〕紫者、灰指物曾、海石榴市之、八十街爾、相兒哉誰、

〔萬葉集略解 十二下〕紫は海石榴の灰のあくをさして染る物なるによりて、つば市といはん序とせり、

〔古今要覽稿 草木〕つばき 〇海石榴中略

藥方雜記に、日本山茶花の名目を載て、白玉、唐笠、白妙、高根、白菊、六角、加賀牡丹、渡守、春日野、有川、朝露、亂拍子、薄衣、大江山三國、玉簾、浦山開、荒浪、鳴戸、金水引等の號ありと本草綱目啓蒙見へたり、いはゆる唐笠、白菊、春日野、加州、有川、亂拍子、薄衣、玉簾、荒浪、鳴戸金水引等の名目は、詳に增補地錦抄に載せたれば、古のみならず、近世もまた我邦よりして此種を西土には傳へしなり、此實の油を今の俗には木の實の油といひ、其一名を周防にてはかたし油、長門にてはかたあし、肥前にてはかたいしの油といふ、此油は男女にかぎらず、髮のねばりて櫛の齒の通らざるに少し灌げば、よくさばけて梳けづり易く、又土にそゝげば、よく蟲を殺すと同上云り、今江都にて鬻ぐものは、多く伊豆の八丈島より來る、至て上品にして、あげものゝ料に用ゆる胡麻榧等の諸油にまされり、又此樹を燒て灰となしたるを、俗に山灰といふ、此灰は古より紫をそむる料に入るゝ故に、萬葉集に、紫者灰指物曾海石榴之とよみたり、今あるものはすべて丹波國山邊郡の內より來るといふ、國史艸木昆蟲

又大椿兩八千之春秋、以祝遠大乎松平伊賀太守源忠晴、尤愛此花、雖然夙夜公務不遑築塢灌花、於是取諸方所有品色、及有其名者一百種、圖其形様以爲怡目之慰、丹青煥發四時不凋、與一歳一枯榮者不可同日而語也、嘗聞山陰韋氏之百梅、携李張氏之百菊、播名于中華、未聞百椿之美至于如此也、可謂大平之勝事、好文之嘉徵也、太守之用意誰不歆羨乎、或人曰、繪花者不能繪其香、曰然有說于此、綠苔靑草惟是德馨、而今況於椿花乎、嗚呼色也、香也、念茲在茲、可不勤哉、遂書以應其請焉、

〔古今要覽稿草木〕つばき ○海石榴 ○中略

寬永の頃に至りては、その花に重瓣千瓣赤白間雜の奇花八十種あまり百出するを以て、京師にては、ことゝ好む人、その花をことゝゝくあつめて百椿圖を作り給ひ、扶桑拾葉集江都にては松平伊賀守忠晴公務のひまに諸方にある所の品色及び名たゝるものをもとめて、同じく百椿圖をゑがきたるに、烏丸光廣卿は、それが序をゑがきたるに、それが序つくりたるは林祭酒道春なり、羅山文集それよりまた九十年を經て、享保中には染井の種樹家伊兵衛といふ者の著せし地錦抄に載せしはその數すべて二百二十四種也、今に至りては猶また種類多くいできて、おほよそ四五百種にも及べるは、實に太平の勝事なり、かく本邦にはその種類おほきものなるに、西土にては其種わづかに廿種に過ざるを以て、朱舜水も此邦の花は唐土よりも種類多くして花もまされりと朱氏談綺、東雅いへり、然りといへども近衛家熙公の仰に、種類多きものは一々漢名あるべからず、○中略是によりておもふに、菊や椿などは、人の好みによりて數多になるものとみえたり、一々漢名あるべからずと、

〔槐記〕享保九年閏四月十八日、仰ニ○近衛家熙、中略、後西院ノ御時、山茶ヲ御好アリケレバ、處々ヨリコレヲ獻上ス、珍花ハ手鑑ニシテ、極彩色ニテ片表ニ九ツヽ、花ヲ記サレシニ、年々ニ冊數多ナリケルホドニ、ツイニ五十卷バカリニナレリ、所詮カギリナキコトナリトテ止ヲレタリ、コレニヨリテ

椿觀賞

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕蜀茶　今云加良豆波木　蜀今四川之地、出於此者皆佳、如蜀椒蜀葵皆佳種也、

按、倭有唐海石榴者、樹相似而葉狹長、色淡不澤、葉紋縱横細似甃狀、其花重瓣大而正紅如牡丹、所謂蜀茶是也、但枝朶柔靭、葉亦不多而大木希也、

〔地錦抄附錄 三〕朝鮮椿　花大輪也、蘂厚くしまり、本紅の色よく、唐椿のごとくなり、ひとへにて蘂さゞんくわのごとく、花の內一はいにあり、葉も大く手づよし、花おそ咲、つねの椿落花の後ひらく、花形色あひ極上上、

〔地錦抄附錄 三〕阿蘭陀白椿　花小りん、白やゑなり、はなの中ほどひく〳〵、かさねてひらく、

〔日本書紀 二十九 天武〕十三年三月庚寅、吉野人宇閉直弓貢白海石榴、

〔義演准后日記〕慶長八年二月二十一日、白椿ホリテ將軍ヘ令進之了、

〔淸水物語 上〕此比〇寬永十五年椿の花のはやるやうに付ても、聞もをよばぬ見事なる花あまたあなたこなたより出たり、このむ人ありてはやり候はゞおもしろき物もありなんかし、

〔羅山文集 四十九 序〕百椿圖序 寬永十二年作

夫椿之有名也、稱于莊子、載於本草、倭名謂之都婆岐、或號海石榴、本朝先輩賦白椿云、靈根保壽託南華、花發金仙玉府家、素質宛糚氷雪面、不隨紅艷作山花、山茶花有數種、或花簇如珠、或靑蒂或粉紅、或淡白、所謂寶珠茶花、海石榴茶花、躑躅茶花、一捻紅、千葉紅、千葉白之類、不可勝數也、椿花亦然、倭歌家有玉椿、有白玉椿、有紅椿、有靑椿、有濱椿、有山椿、兵部少輔大伴家持植八峯之椿、發其花於詞林、其後諷人韻士歷代吟賞焉、故賀紫宸則鏡山之玉椿、明照四海之天、祝椽洞則姑射之靈椿、永待千世之春、巨勢春野之霞色見之不飽、音羽山岩之雲根生而有常、以之敬神則勢州有椿宮社、以之勸學則宋帝比木有椿、誠是木部之大年、花中之巨麗者也、頃歲椿花衆品佳色不一、乃知太平之時萬物蕃多矣、況

ナリ、春ニ至テ花ヲ開ク、故ニ晩山茶ト名ク、秘傳花鏡及ビ洛陽花木記ニ出ヅ、京師紙屋川地藏院ニアリ、因テ此等ヲツバキ寺ト云、凡ソ山茶ノ實ヲ搾テ油ヲ採ルヲ木ノ實ノ油ト云、一名カタシアブラ防州カタアシ、長州カタイシノアブラ、肥前髮ヲバリテ梳ノ通ラザルニ少シ濃ケバ、サバケテ梳リ易シ、土ニ濃ゲバ能ク蟲ヲ殺ス、

增、草木藥方雜記曰、日本山茶花、其國名爲椿、不名以山茶也、白者以白玉最、白玉一種花大色白而香、香如我里白百合花之香、開放于二三月、次則唐笠也、白妙也、在高根、則又其次也、至于白菊六角之類、花朶小不取焉、紅者以中爲最、花大而香、加賀牡丹甚佳、花色大紅如牡丹、花瓣邊或有吐露白邊者、次則大紅牡丹、與渡守春日俱妙、雜色最佳者莫如有川、其白上有紅色如雲、朝露其色紅有白點者、亂拍子亦然、有薄衣色、如醉楊妃者有大江山、一本有三四色者有三國、一本乃三色者有玉簾、一本四五色者倘有浦山開荒浪鳴戶關戶金水引者爲上種、有加平牡丹唐絲鏡山唐椿山海牡丹諸種皆其下者、共有五百種、有一種天下奇、開花朶色百樣、其國內亦少不可得者有一種、名五寸ト云、桃桐遺筆曰、日本紀天武天皇十三年三月癸未朔庚寅、吉野人宇閉直弓貢白海石榴トアリ、是ヲ白ツバキト訓ジ、又和名抄ニ、海石榴ヲ豆波木ト訓ズ、共ニ誤ナリ、海石榴ハ朝鮮ザクロナリ、海石榴ヲツバキニ充ルハ、卽山茶花ノ一種、花小ニシテ大サ海石榴ノ花ノ如ク、蔕ハ靑クシテ筒瓣ヲナス、是ヲ俗ニワビスケト名ク、卽海榴茶ナリ、一名海紅花楊升庵文集コノ海榴茶ト海石榴ヲ混ジ誤ルナリト云フ、

唐椿（タウツバキ）　朝鮮椿（テウセンツバキ）　柊椿（ヒイラギツバキ）

〔地錦抄附錄　三〕延寶年中渡品々〇中略

今植るいろ〳〵の花椿は、和朝にて出來たる物か、大和本草に、天武の御時白花の椿を貢す、寬永の初めより紅白ひとへやゑ品々出來す、烏丸光廣卿の百椿圖序に、此比世に品多く出來たりと書りとあり、唐椿は延寶に來る、

テ後移シ植フ、四五年ヲヘテ花サク、サシツギモヨシ、ツバキハ山茶ト云ヲ、日本ニイツノ時ヨリカアヤマリテ、椿ノ字ヲバツバキトヨメリ、順和名抄ニモアヤマツテ椿ヲツバキト訓ズ、ツバキハ椿ニアラズ、椿ハ近年寛文年中カラヨリワタル、香椿ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕山茶　ツバキ　一名曼陀羅（群芳譜）　鶴丹（輟耕録）
本邦ニテ古ヨリ椿ノ字ヲツバキト訓ズルハ、タマツバキノ古訓ヲ誤リタルナリ、其タマツバキト云ハ、今俗ニキヤンチントト呼ブモノニシテ、ツバキノ類ニ非ズ、藥方雜記ニモ、日本山茶花、其國名爲レ椿不レ名、以二山茶一也ト云、其下文ニ山茶ノ名ヲ載スルニ、白玉、唐笠、白妙、高根、白菊、六角、加賀牡丹、渡守、春日、有川、朝露、亂拍子、薄衣、大江山、三國、玉簾、浦山開、荒浪、鳴戸、關戸、金水引等ノ號アリ、朝鮮ニテハ冬花ヲ開ク者ヲ冬柏ト云、春花ヲ開ク者ヲ春柏ト云フコト、養花小録ニ出ヅ、山茶略シテ單ニ茶ト云、其品甚多シ、花史左編、群芳譜、秘傳花鏡等ニ詳ナリ、和產殊ニ多シテ數百種ニ至ル、此條下ニ數種ヲ出ス、寶珠茶ハ俗名タマテバコ、大和本草ニハ、タマシマツバキト云、千葉ニシテ蘂ナシ、中心ノ瓣開カズシテ、寶珠ノ形ノ如シ、凡七十餘瓣アリト、大和本草ニ云リ、紅白ノ二色アリ、海榴茶ハ俗名ワビスケ、又コチヤウトモ云、石榴茶ハ俗名イセツバキ、又レンゲツバキトモ云、下ニアル五瓣大ニシテ、中ニ細瓣多ク簇テ千葉ノ御米ノ花ノ如シ、躑躅茶ハ俗名ヤブツバキ、山中自生ノツバキ、單瓣ニシテ躑躅花ノ形ニ似タルヲ云、山茶中ノ下品ナリ、宮粉茶串珠茶ノ二名、共ニ只粉紅色トノミ云ヒ、形狀ヲ說ズ、故ニ詳ナラズ、一捻紅ハ俗名アメガシタトビイリ、白色ニシテ、指ニテ押タル如キ紅點アルヲ云フ、牡丹ニモ一捻紅アリ、千葉紅ハ俗名ヒグルマ、千葉白ハ俗名シラタマ、南山茶ハ俗名カラツバキ、大和本草ニ南京ツバキト云、葉ノ形尋常ノ山茶葉ヨリ狹長ニシテ厚ク色淺シ、花大サ四五寸、白アリ、紅アリ、間色アリ、一名滇茶（滇州府志）　蜀茶（同上）　鶴頂茶（群芳譜）　別ニ一種チリツバキト呼ブ者アリ、花瓣一片ゴトニ分レ落チ、尋常ノ山茶ノ形全クシテ落ルニ異

初の、み山木白き八重に赤飛入　與一椿赤の万よ咲大輪也　しで椿千よ赤に白の飛入　高尾白き八重に薄色飛入

あられ八重の大輪なり　一せき赤き千重に白飛入　名月白き八重に赤飛入　金杉白き八重に赤飛入

いだてん白き八重也早咲　ほの椿白き八重に赤飛入也　八重しぼり大輪なり　だるま赤き八重の大輪なり

清水しぼり白き八重に赤しぼり　みやこ白き八重に赤飛入　からうい白の大輪なり　さひふ赤き千重に白飛入

八坂飛入白き八重に赤飛入　ぬき白八重咲の大輪なり　しゆしやか白き八重に赤飛入　とつ白き八重に赤飛入

初夜のはた白地うす色の壹早咲　藪椿赤白壹重八重色々有取輪也

右は椿の名なり、此外にも品々あるべし、

〔大和本草十二花木〕山茶（ツバキ）○中略　本草綱目ニ、山茶ニ海榴茶、石榴茶アリ、是ツバキノ品類ナリ、日本ノ古書ニツバキヲ海石榴ト カケルモ由アル事ナリ、酉陽雜俎續集曰、山茶似海石榴、然ラバ山茶ト海石榴ハ別ナリ、凡山茶ハ花ノ盛久シ、葉モ花モ美シ、多クウヘテ愛玩スベシ、ツヽジヲ植レバ枯ヤスシ、山茶ハ枯ヤスカラズ、昔ハ本邦ニ紅ノ單花ノミアリテ、白ツバキモマレナリ、寛永ノ初ヨリヤウヤクツバキノ數多ク出來シニヤ、烏丸光廣卿ノ百椿圖序ニ、此比世ニモテハヤシ品多クイデキタル事ヲカケリ、天武ノ御時ハ古代ナレバ草木ノ奇花マレナルベシ、白ツバキヲメヅラシキ物ニセシハムベナリ、今ハツバキ紅、白、單葉、重葉、千葉、其品多クシテ數ヲシラズ、玉島山茶ハ無蕋多葩、一花ニ凡七十餘片バカリアリ、白アリ、紅アリ、山茶ノ奇品ナリ、又南京山茶アリ、葉長ク葉ノ色常ノツバキニカハレリ、花モ葉モ異ナリ、是亦奇品ナリ、十輪山茶アリ、一樹ノ中紅白數種異品多ク開ク、山茶ハ春植ルニ不宜、五月中旬ニ可植、五六月枝ヲサス、又春モサスベシ、小枝ヲ切テ葉ノウラノ枝ノ末ヲ一寸半許、馬ノ耳ノ如クソギ、切口ヲ二ニワル、ワリタル處根生ズ、冷水ニ浸シ置テ挾ベシ、枝ヲ切テ後暫時モ乾カシムル事ナカレ、赤土ヲ泥トシ、雞卵ヨリ大ニ丸シ、枝ヲ赤土ノ丸ニテ包ミ土ニウフ、挾ムハアシヽ、シバ〳〵水ヲソヽギテ土ヲ乾カシムベカラズ、能活シ

邦俗醫掘採山茶根、以充椿根皮、用甚誤、殊無寸功、與椿樗條可參考、

〔日本書紀 七 景行〕十二年十月、與群臣議之曰、今多動兵衆、以討土蜘蛛、若其畏我兵勢、將隱山野、必爲後愁、則採海石榴樹、作椎爲兵、因簡猛卒、授兵椎、以穿山排草、襲石室土蜘蛛、而破于稻葉川上、悉殺其黨、血流至踝、故時人其作海石榴椎之處、曰海石榴市、亦血流之處曰血田也、

〔萬葉集 一 雜歌〕長皇子御歌
吾妹子乎、早見濱風、倭有、吾松椿、不吹有勿勤、

〔萬葉集 十九〕三日（天平勝寶二年三月）守大伴宿禰家持之館宴歌三首
奥山之、八峯乃海石榴、都婆良可爾、今日者久良佐禰、大夫之徒、

〔花壇綱目 下〕椿珍花異名の事

しら雲（白き八重に赤飛入）
つるがしぼり（地白く紫しぼり也）
國しらず（地薄色の八重に赤飛入）
八幡しぼり（赤き八重の大輪）
ひのした（白き八重の大輪なり）
青こしみの（白の八重咲の大輪）
ほと、ぎす（白き八重に赤飛入）
なぎのみや（白き八重に赤飛入）
清がんじ（白き八重に赤飛入）
光とく寺（赤き千よに白飛入）
大つま白（地薄色の八重に赤飛入）

雨が下（白八重の大輪赤飛入）
の本因坊（千よの赤大輪なり）
松かせ（しぼりの大輪なり）
舟井待（赤き八重のすじ椿なり）
あさ日（白き八重に赤飛入）
大白玉（白き壹重の大輪也）
きぶね（白き八重に赤飛入なり）
妙義院（赤き千重白き飛入）
參國（紫の八重赤飛入はた白）
めい山（白き八重の大輪なり）
京飛入（花こしみの大輪也）

いづも椿（白き八重に赤飛入）
まつかさ（しぼりの大輪なり）
むら雨（白き八重に赤飛入）
國づくし（白き八重に赤飛入、大輪）
八幡飛入（赤き八重に白の飛入）
ほうくわ（白き八重に赤飛入）
大いさはや（赤き一重の大輪飛入）
奈良の都（白き八重に赤飛入）
壬生万よ（白に赤の飛入）
せいわうぼう（薄いろの八重也）
千本飛入（赤き八重に白飛入）

人丸（白の八重大輪なり）
そこつ（白の八重にあか飛入）
と宮（白き八重に赤飛入）
竹生島（白き八重に赤飛入）
大はく（白のうへ重なり大輪）
うぐひす（赤の八重咲大輪なり）
いわた（白の八重大輪なり）
しら菊（白き八重の大輪也）
玉しろ（大輪なり）
ちんくわ（白き八重に赤飛入）
をぐら（白き八重に赤飛入）

のなりといへども、其名の僅に物にあらはれたるは、人皇十二代景行天皇の十二年に、天皇豐後國速見邑の土蜘蛛を討たまひし時、此樹を採て椎に作らせ給ひしを始とす、日本書紀、豐後風土記、○中略本草綱目灌木部に山茶を載たり、我國のものもおほかたは灌木なれど、日向國諸縣郡野尻郷に生るものは皆喬木にして、その幹抱を合するもの多し、是その地勢のしからしむるところ也と國史草木昆蟲考みえたり、扨西土の人物の名を命ずるに、海字を冠するものは、その種必ず海外より傳ふるものをさしていへば、海石榴もそのもとは、本邦或は朝鮮よりして彼土に傳へしものなるによりて、遂に海字を冠せし也、

按に、本草綱目海紅の釋名に、李德裕が花木記を引て、凡花木名海者、皆從海外來、如海棠之類是也、又李白詩注云、海紅乃花名出新羅國甚多、則海棠之自海外有據矣、と見えたるにて、その義おのづから明かなり、

さて海石榴に椿字をあてしは、莊子に上古有大椿者、以八千歲爲秋といへる寓言あるによりて、此海石榴樹もその樹數百年を經るといへども、さらに枯凋の患なく、その壽の久延なる事頗る大椿のたぐひなるによりて、遂にその名を假借せし也、しかのみならず此實の油は、西土にいはゆる不老不死の藥廿一種のうちの一種なれば、本草和名引崔禹錫食經光仁天皇の寶龜八年に、渤海使史都蒙の請へるによりて、海石榴油一缶をおくられしも、續日本紀故ある事なるべし、この油の不老不死の藥なるも、其もとは其樹のよはひ久延なるによりて、其說の起りし者なるべければ、歌に八千代の椿、或は八千年の椿、或は葉替ぬ、或は色變ぬなど讀るも、強に莊子の寓言にのみ縋りて、しかよみしにはあるべからず、

〔本草一家言　三〕山茶　和名津波幾、形色不一、品類至百餘種、其單瓣重瓣十瓣各色、名稱各有花鏡花史等書、分其名題疏、其色狀可併考、具列于左、一種茶梅花見于花史等書、和俗以之呼山茶者非也、倭

〔萬葉集略解 一〕つら〳〵椿は、多く生つらなりたるをいふ、卷廿、〇萬葉やつをの椿つら〳〵にともよめり、つら〳〵はつらね〳〵、ねもごろなるをいふ、〇中略紀に此木の油をとりて、から國へ贈られし事も見ゆれば、多く植おかれしなるべし、

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕海石榴　椿俗字 中略 〇

按、海石榴即山茶花(さゝんくわ)之一類也、樹葉花實似山茶花而大、其實狀圓似無花果(イチジユク)而老枯則殼四裂、中子如海松子(カラマツ)、剝皮取仁搾取油、謂木實油、塗刀劍則不生鏽、以拭漆器則出艶、塗髮亦艶美、然髮不澀、和麻油爲髮油佳、但千瓣者不結實、其蕚厚大艶美、亞于牡丹芍藥、惟恨其萎甚醜、其落亦脆耳、單瓣赤者名山椿、此乃本源也、白紅粉紅絞紅或白相半、八重千瓣之數種不枚擧、自秋生蕾春開花、冬開者名早開、人以賞之、凡伐椿直木、煖火則皮能剝肌滑也、僧家以爲杖、

〔秉燭譚 四〕海石榴ノコト

椿ヲツバキト訓ズルハ、本ヨリアヤマレリ、莊子ニ大椿ノコトアレドモ、後世ソノ花ヲ稱スルコトヲキカズ、近年平井德建氏ナド本草ヲ撿シテ云、山茶花ト云モノ即チ日本ノツバキナリト、ソノ後物產ノ說詳ニシテ、山茶花タルコト愈明ナリ、又日本ニテイフサヽンカハ、唐ニテハ茶梅ト云、海紅トモ云、唐ノ時分ニハツバキヲ海石榴ト云、皮日休ナド詩アリ、天武帝ノ十三年ニ、吉野人宇閉直弓ト云人、白海石榴ヲ貢スト云コト、日本紀ニアラハレリ、シロツバキト點アリ、又古海石榴市ト云所アリ、ツバキ市ト訓ズ、シカレバ日本ニテ古ハ唐ノ時ノ名ヲウケテ、ツバキヲ海石榴トイヘルニヤ、宋以來ノ書、並ニ當代ノ人ハ曾テコノ沙汰ナシ、

〔古今要覽稿 草木〕つばき　海石榴

つばきは、漢名を海石榴といひ、或は石字を省きて海榴ともいへり、この二名は蓋し唐人の命せしところにして、明人に至りては其種を誤りて、專ら山茶と稱へたり、凡つばきは本邦固有のも

椿名稱

〔新撰字鏡 木〕椿 杶 櫄 三同、勅屯反、豆波木、

〔倭名類聚抄 二十 木〕椿 唐韻云、椿 勅倫反、和名豆波木、木名也、楊氏漢語抄云、海石榴 和名上同、本朝式等用之、

〔箋注倭名類聚抄 十 木〕按唐韻所謂椿、即本草所載椿木也、證類本草椿木樗木並載、引唐本注云、二樹形相似、樗木疎椿木實爲別、是也、椿或作杶櫄、尙書云杶榦栝柏、正義引陸璣毛詩義疏云、杶樗、栲漆、相似如一、中山經云、成侯之山其上多櫄木、郭璞注云櫄木似樗樹材中車轅、是椿者樗木之類、非豆波岐、其豆波岐用椿字、皇國所製會意字、蓋是木、以初春開華、故其字從木從春、與草類萩字從草從秋同意、非以椿樗字爲之也、新撰字鏡以其字偶同、誤云椿杶櫄三同勅屯反、豆波木、輔仁亦誤以都波岐訓本草椿木、源君襲其誤、引唐韻皆非是、○中略 按酉陽雜俎云、山茶似海石榴、山茶即茶梅、今俗呼左々无花者、則海石榴爲豆波岐、爲允、今人以山茶爲即豆波岐、恐非、○中略 海石榴見內藏寮、民部省、主計寮、主殿寮、大藏省等式、

〔伊呂波字類抄 都植物 附植物具〕椿 ツハキ 海石榴 同 椿木葉 樗木 蘇敬注云、二樹相似、樗木疎、椿木實也、已上二名ツハキ、見本草、

〔萬葉集 一 雜歌〕大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊國時歌
巨勢山乃(コセヤマノ)、列列椿(ツラツラツバキ)、都良都良爾(ツラツラニ)、見乍思奈(ミツツオモフナ)、許湍乃春野乎(コセノハルヌヲ)、

似テ長ク尖テ薄シ深綠色、夏月梢頭ニ枝叉ヲ分テ花ヲ開ク、五出黃色、一花ノ下ゴトニ各一葉アリ、圓小ニシテ白シ、霜後土窖中ニ藏ム、冬ヲ經テ凋ズ、增、釋名時珍ノ説ニ、馬蓼亦名二天蓼一ト云ハ誤ナリ、馬蓼ニハ大蓼ノ名アレドモ、天蓼ノ名ナシ、天蓼ハ菾草ノ一名ナリ、

〔佐渡志物産五〕木天蓼　和名マタヽビ　方言ワタヽヒ
深山ニ生ズル蔓艸ナリ、賤民採テ菜トシ、又糧トス、

按、藤天蓼、備中、伊豫、遠州、和州、丹波山中多有之、今人家亦植之、其蔓蒼黑葉似柘及櫻桃葉而皺、三四月開小白花、狀似梅花而小、結實、但有雌雄、雌者實狀如五倍子而青色、雄者實狀如棗、人採其嫩葉、合酸未醬食之、猫常喜食之、如視此樹、則抓穿根食皮、爲之枯、凡病猫食天蓼子起也、人亦鹽漬食之、

〔重修本草綱目啓蒙 灌木二十五〕木天蓼 ワタヽビ 和名鈔 マタヽビ コツラ 越前 ハンザウノキ 播州 ナツムメ 一名蓬萊金蓮枝 博物野乘

深山ニ生ズ、蔓草ナリ、長ク木上ニ延ク、年久シキ者ハ藤大ニナリテ木ノ如シ、故ニ藤天蓼トモ木天蓼トモ云、葉ノ形楕ニシテ尖リ、細鋸齒アリテ、ツルムメモドキノ葉ニ似タリ、互生ス、冬ハ葉ナシ、春ノ嫩葉ヲ生ニテ醋味噌ヲ加ヘテ食フ、味辛シ、五月半夏生ノ時、梢葉ノ面潔白ニ變ジ、背ハ否ラズ、遠望スレバ雪ノ如ク花ノ如シ、其下ニ至レバ白ヲ見ズ、葉背ハ變ゼザル故ナリ、同時ニ葉間ゴトニ一花ヲ生ズ、五瓣白色綠蘂皆下ニ向フテ開ク、形梅花ニ似タリ、故ニナツムメト云、好事者葉ヲ去テ瓶花ニ供ス、後實ヲ結ブ、形細長ニシテ榧實ノ如ク、内ニ細子多シ、蘇恭ノ説ニ、子如棗許中瓢似茄子ト云ヒ、藏器ノ説ニ如棗ト云者是ナリ、コノ實味辛辣生食シ、或ハ乾貯或ハ醃食ス、又花既ニ開キタル者、ソレナリニ泡テ實ノ如クナリタルアリ、五瓣ニシテ葎草實ノ小ナルガ如シ、是即其病ニシテ蟲ノ巢ナリ、切レバ内實ノ色白ク蘿蔔ヲ切タルガ如シ、内ニ蟲卵少シアリ、蘇頌ノ説ニ子作毬形似檾子ト云者是ナリ、其味亦辛辣ナリ、今藥舖ニ販グ者ハコノ品ノミニシテ、棗形ノ者ナシ、棗形ノ者ハ内ニ子アリテ眞實實ナリ、藥ニハ是ヲ用ユベシ、然ルニ蘇恭ノ説ニ子無定形ト云ヒ、大和本草ニ二色ノ實生ズル故、マタヽビト訓ズト云、藏器ノ説ニ如棗者ヲ藤天蓼トシ、蘇頌ノ説ニ五瓣ノモノヲ木天蓼トストイフ、皆非ナリ、

小天蓼ハ暖地ノ產ニシテ小木ナリ、種樹家ニ多シ、俗ニ崑崙花ト呼ブ、枝葉對生ス、葉ハ梔子葉ニ

知、依本草和名、新撰字鏡、苣同訓、古久波之名、輔仁不載、醫心方有之、按古久波又見宇治拾遺物語、三中口傳、今陸奧南部亦呼古久波、呼之良久知、紀伊呼之良久知、又呼古久波、薩摩呼碁豆加字、卽古久波之轉、

〔大和本草 果木 十〕獼猴桃(ヤマナシ) 常ニ山梨ト云ハ、梨ノ山ニアル小キヲ云、ソレニハアラズ、藤カヅラノ如ク大ナルカヅラナリ、大木ニハヒ付テノボル、葉ハ梨ノ葉ニ似テ大サモ同ジ、實ノ大サ棗ニ倍ス、大小アリ、實ノ形棗ニ似タリ、實ノ皮ハ梨實ニ能似テ色モ似タリ、少青色ナリ、實ノ内ニ白キ心アリ、細ナルサネ、心ノマハリニ多クツケリ、其サネハ芥子(カラシ)ノ如シ、實ハ冬ニイタリテ熟ス、味甘シ、食スベシ、小兒好ンデ食フ、味ハ梨葡萄無花果ナドニ似タリ、莖ノ皮ハチバリアリ、紙ニスクベシ、本草三十三卷ニ載之可考、

〔紀伊續風土記 物産 五〕獼猴桃(ヤマナシ)（本草、本草和名之頁久知、醫心方和名抄並巳久波、按ずるにシ○ラ○ク○チ○チ○コ○ク○ハ、倶に今牟婁郡にても此名を呼ぶ、又コ○タ○チ○カ○と○い○ふ、藤蔓甚繁茂す、葉梨葉に似て長く互生す、夏月葉間に白花を開く、形梅花に似たり、後實を結ぶ、形棗に似て長さ一寸許、濶さ六七分下垂し、冬に至りて熟す、綠色にして褐色の斑點あり、肉は綠色にして味甘く、小兒採り食ふ、内に細子あり、下種して生じ易し、）牟婁郡山中に多く產す、

〔倭名類聚抄 木 二十〕木天蓼 那（那一本作刪）繁論云、木天蓼、（和名和太々非）

〔箋注倭名類聚抄 木 十〕現在書目錄云、刪繁論十卷、謝士泰撰、今無傳本、隋書有刪繁方十三卷、謝士泰撰、舊唐書作十二卷、新唐書同、泰作太、蓋卽是書、本草和名云、木天蓼、一名比鬼根、出刪繁論、按本草木部下品載木天蓼、是木天蓼出本草、比鬼根之名出刪繁論也、此恐源君誤引、

〔和漢三才圖會 灌木 八十四〕藤天蓼 今云末○太○々○比○ 有三種、中其木天蓼、小天蓼之二品、不多有、本綱藤天蓼、生江南淮南山中、作藤蔓、葉似拓(ヤマクハ)花白、子如棗許、無定形、中瓤似茄子、味辛、噉之以當蓮蓼(ハシカミタデ)、

枝葉（辛溫 有小毒） 治癥結積聚風勞虛冷、

子（苦辛 微熱） 治賊風口面喎斜氣塊女子虛勞、

梧（典籍便覽）　桊郭（名物法言）　子一名玉粒（尺牘雙魚）

木直聳シテ梢上ニ枝條分レ、樹皮綠色ニシテ痟美ハシ、葉大サ一尺許、兩岐或四岐アリテ鋸齒ナシ、夏月枝梢ニ長穗ヲ出ス、枝ヲ分チ花ヲ開ク、形楝花ノ如シ、五瓣黃白色、大サ小錢ノ如シ、實ハ枝ノ梢ニ五ツヽ並ビ著ク、形蘿藦角（ガガイモノサヤ）ノ如ニシテ疣瘩（イボ）ナシ、長サ二寸餘、圓ニシテ尖ル、是ヲ桊鄂ト云、熟スル時ハ、自ラ一方裂テ船ノ形ノ如シ、圓子其邊ニ著ク、四子ナレバ、左右ニ各二子アリ、三子ナレバ、一子二子左右ニアリ、實ハ大サ三分許、熟スレバ淡褐色、皮ニ皺アリ、是梧桐子ナリ、炒テ食フベシ、又煮食フベシ、丸藥ニ梧子ノ大ノ如シト云ハ是ノ子ナリ、唐畫ノ鳳ニハ、必梧桐ヲ畫ク、和畫ニ白桐ヲ畫クハ非ナリ、

〔萬葉集（五雜歌）〕大伴淡等謹狀梧桐日本琴一面（對馬結石山孫枝○下略）

〔北邊隨筆（一）〕梧桐

齊民要術曰、梧桐山石間生者、爲樂器則鳴、これ必さることわりなるべしとおぼゆるは、今の世にも、弓につくる竹は嵯峨におふるをのみもちふるたぐひ多し、そこなるこそ、よにすぐれたれど、もとよりえらむやは、えかしりたらん人の心もちひこそ、いとおもひやらるれ、

〔續日本後紀（二淳和）〕天長十年十一月戊辰、御豐樂院、終日宴樂、悠紀主基共立標、其標悠紀則山上栽梧桐、兩鳳集其上、從其樹中起五雲、雲上懸悠紀近江四字、○下略

〔倭名類聚抄（十七菓）〕獼猴桃　七卷食經云、獼猴桃、（和名之良久知、一云古久波、）

〔箋注倭名類聚抄（九果蓏）〕本草和名亦引七卷食經載之、證類本草引陳藏器食療載之、又引開寶本草云、獼猴桃生山谷、藤生著樹、葉圓有毛、其形似鷄卵大、其皮褐色、經霜始甘美可食、本草衍義云、十月爛熟、色淡綠、生則極酸、子繁細、其色如芥子、枝條柔弱、高二三丈、多附木而生、淺山傍道側有存者、深山則多爲猴所食、按獼猴桃見北山抄大饗條裏書、三中口傳、厨事類記、下總本有和名二字、之良久

蘢乃子攅簇、有黄赤二色、有古。牟。茲。之。大極高大、葉五尖而薄青黄色、有光潤、天台山多有之、詩集傳所謂山楸是也、餘詳見于陳翥桐譜、

郢。桐。出梧桐附錄、生谷、葉似青桐而有椏、木皮亦似桐、若水云、京北貴布禰山中、有一種似桐而有椏者、恐是歟、

〔本草辨疑 四木〕梧桐

諸書ニ、丸量ヲ梧桐子ノ大サト云コト、今人不知之、唯桐ノコトナリト心得テ疑之、桐ノ子ノ大ハ銀杏ノ如シ、是ヲ五七十粒ハ難用、又仁ノ大ハ、胡麻ノ如ク扁小ナリ、倘疑フ、上焦ノ用薬ハ小圓ニシ、下焦ノ用薬ハ大圓ニスル、是定例ナリ、然ルニ地黄丸下部ノ薬ニシテ此旨ニ不合ト云フ、是皆本綱ヲ熟讀セザル故ナリ、

時珍、其子ノ大如胡椒ト、又胡椒ノ下ニ、大如梧桐、互ニ引之、

日本所所ニ多シ、葉ハ桐ニ似テ木皮青ク、花ハ栗ニ似テ、細クサガリテ莢ヲ生ズ、長三寸許リ、五片アリ、一片掌ヲツボメタルヤウニテ、其縁ニ圓子五ツ六ツナリテ色赤ク、皮皺ミテ、大サモ皺モ能胡椒ニ似タル者ナリ、和名梧桐キリトモアヲニヨロリトモ云ナリ、子ヲ和ボダイジトモ云フ、ボダイジニ似テ小ナル故也、

〔草木性譜 人〕桐 中略

梧桐 本草綱目 も亦歳時を知れり、遁甲書云、梧桐可知日月正閏、生十二葉、一邊有六葉、從下數一葉、爲一月、至上十二葉、有閏十三葉、視葉小、則知閏何月也、又云、梧桐立秋之日一葉先墜と、今處々庭際に植春葉を生ず、兩岐或は四岐を成す、夏數花を開く、五瓣淡黄色、花後莢を結ぶ、熟すれば裂開し下垂す、一片の狀粗匙頭の如し、其一片の左右に、一と二と或は二子を生ず、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕梧桐 アヲギリ アヤギリ アヲニヨロリ 一名青梧桐 物理小識 碧

〔大和本草 十一 圖木〕梧桐（アヲギリ）　其皮青シ、故又青桐ト云、古人詩歌ニ詠ゼシハコレナリ、佳木ナリ、園庭ニ多ク植ベシ、世ニ白桐ハ多ク、梧桐ハ稀ナリ、夏花サキ、秋ミノル、實ノ殼ワレテ開ク、實ハ殼ニ付テ不落、實ヲ炒テ食フベシ、實ヲウヘテ生長シヤスシ、種樹書曰、九月收子、二三月作畦種之、初生ノ冬、雪霜風寒ヲフセグベシ、中華ニ梧桐ヲ以テ琴瑟ニ作リ器材トス、器ニ作リテ白桐ニマサレリ、四國ヨリ出ヅ、或隱岐ヨリ多出ヅ、故ニシマキリト云、一説ニ初磯嶽ノ島ヨリ出、故ニ名クト云、未知何是、其實胡椒ノ大ノ如シ、凡醫方ニ丸藥桐子ノ大ノ如シト云ハ、此實ノ大サナリ、又胡椒ノ大サニ丸スベシ、二物ノ大サ同、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕梧桐　櫬（音親）　五同桐（以字音呼）　一名青（アヲギリ）如猴狸（中略）○

按、梧桐其子大如胡椒正圓、故諸書謂丸藥大可如梧桐子者是也、

或書云、推古帝時、參河國山有神代桐木、長四十九丈、太三十二尋、枝過半枯、中有虛洞、本有洞口龍住、時發雲霧、依曰桐生山、（又云霧降山）

〔本草一家言 三〕梧桐　梧和名阿遠桐、又俗呼阿遠仁與呂利是也、一名青桐、一名岡桐、一名泡桐、一名梧桐、其木嫩者皮青、老者皮褐色、古人以青桐為非梧桐者、不知嫩老變皮色之過也、葉似桐而堅、無毛結橐鄂、鄂邊綴子、圓小、有皺文、如胡椒粒、自古丸藥、以梧桐子為準、不可不知也、其葉三尖者結子、五七尖者不結實、但雌雄之別耳、桐即幾理、有白桐紫桐二種、就花而言也、香氣芬郁、其木堪製作諸箱器具、其實結房中有櫰、片々如戎葵子與梧桐不甚似、桐類有數種、赬桐赤花不結實性畏寒、寸切插地能活同于梧桐、又有罌子桐、一名油洞、江州多植之、搾實作油、和名五色、以塗物、謂之知耶牟奴利、其油名桐油、今人以製雨衣傘、荏油為桐油者大誤、又有海桐、一名刺桐、救荒本草名刺楸、和名保字多良、又波利桐、又赬桐、葉似梧桐而幹枝皆有刺、有臭梧桐、即本草一種常山、今俗呼臭木是也、又有島桐、木理美膩以為作器之上材、或曰、即本草椅桐、未知的否、有伊々桐、一名計良之木、秋深結子、纍々如南燭子、及七

〔倭名類聚抄 木二十〕梧桐 陶隱居本草注云、桐有四種、青桐、音同 梧桐、上音吾 崗桐、椅桐、椅音猗、和名皆木里、梧桐者色白、有子者、今案俗訛呼爲青桐、是也、二音讓土、椅桐者白桐也、三月花紫、亦堪作琴瑟者是也、

〔箋注倭名類聚抄 木十〕證類本草下品引云、桐樹有四種、青桐、葉皮青、似梧而無子、梧桐色白、葉似青桐而有子、子肥亦可食、白桐與崗桐無異、惟有花子爾、花二月舒黃紫色、禮云、桐始華者也、崗桐無子、是作琴瑟者云々、白桐堪作琴瑟、一名椅桐、人家多植之、本草和名云、青桐、莖皮青、无子、梧桐色白有子、崗桐无子、作琴瑟者、白桐、三月花紫、禮云、桐始華者也、亦堪作琴瑟者、此所引節文、按桐始華在月令季春、證類本草作二月誤也、按有青白二種、青者梧桐、爾雅櫬梧、說文梧桐木一曰櫬、是也、有子可食、醫家作丸、云梧桐子大者謂此也、齊民要術云、實而皮青者爲梧桐、本草衍義、梧桐結實可食、李時珍曰、樹似桐而皮青不皵、其木無節直生、理細而性緊、葉似桐而稍小、光澤有尖、其花細蘂墜下如䔒、其莢二三寸許、五片合成、老則裂開如箕、謂之橐鄂、其子綴於橐鄂上、多者五六、少或二三子、大如胡椒、其皮皺是今俗呼阿乎伎利者也、梧桐之無子者謂之青桐、李說同、白者椅桐、爾雅說文並云、榮桐木、是也、一名白桐、三月開紫花、月令季春桐始華謂此、又有白花者、故陶云、開黃紫花、寇云、開白花、李時珍云、葉大徑尺、最易生長、皮色粗白、其木輕虛、不生蟲蛀、爲器物屋柱甚良、二月開花、如牽牛花而白色、結實大如巨棗、長寸餘、殼內有子片、輕虛如楡莢葵實之狀、老則殼裂、隨風飄揚、今俗單呼歧利、其不結實者、謂之岡桐、椅桐岡桐皆可作琴瑟、此陶所言四種也、圖經云、椅卽梧桐、今江南人作油者、卽岡桐、有子大于梧子、按、椅可作琴瑟、梧桐不中作琴瑟則非椅卽梧桐、又作油者、本草拾遺罌子桐、非岡桐、本草衍義謂之荏桐、齊民要術、華而不實者爲白桐、本草衍義云白桐、開白花、不結實、無花者爲岡桐、不中作琴、按、花而不實者、白桐之一種、所謂岡桐、無花不中作琴、云青桐非岡桐、李時珍云、白桐開花白色、其花紫者名岡桐、以其花白紫分白桐岡桐、然其言無所徵證、竟屬臆斷、是等諸說皆不足依據也谷川氏云、桐木、數伐之則却榮、故名、

ハマボウ

信錄ニ、中心蘂高出、花瓣外一寸許、如燭承盤狀、故一名照殿紅ト云、其蘂ニ黃粉多ク著テ、蜀葵花及木槿ノ蘂ノ如シ、故ニ集解ニ、上綴金屑ト云、朝ニ開キ暮ニ落ツ、後實ヲ結ブ、下種スベシ生ジ易シ、又枝ヲ扦插スベシ、大紅ニシテ千葉ナル者アリ、八閩通志ニ鶴頂ト云、汝南圃史ニ又小牡丹ト云、又黃色ナル者アリ、黃赤色ナル者アリ、福州府志ニ佛桑淡黃者俗名金木蘭ト云フ、薩州山川ノ湊ハ極暖ノ地ナリ、土人扶桑ヲ以テ籬トナスモノアリ、花時觀ルベシト云フ、

增、扶桑ハ慶長十九年、始テ琉球ヨリ來ルコト、忠家(〇忠家恐家忠誤)日記ニ見ヘタリ、近年花戸ニ紅白相交ル者アリ、ヤグラザキアリ、又カズサキノモノアリ、花小ナリ又一輪ザキト云モノアリ、花大ニシテ二三輪許モ開ク、共ニ插シテ能ク活ス、

〔白石子筆語上〕枕中方の槵も似よりたる事候、舊事紀の神名にも、又日本紀に古今の人名にも槵と稱し候有之候、日本紀には槵は此に武矩と注せられて、すなはちムクエノキと申すもの、某庭上に有之候もの、先日被仰候殿樹の事にて候、これはいかにも大木有之ものにて候、エノキと一類にして、二種のものにて候、以上、

〔地錦抄附錄三〕寬文年中渡品々

〇〇扶桑花　琉球より來る由、寒氣をおそれ各枯る、中絕して又享保八年に來る、　佛桑花共

〔百品考下〕右納　和名ハマボウ

中山傳信錄、右納樹高三四丈、葉似白桐、夏季開花、如中國秋葵、黃瓣檀心、暖地ノ海邊ニ自生多シ又花戸ニモ多栽ウ、樹ノ高サ丈餘、樹ハ木槿ニ似テ、葉ハ烏桕ノ形ニシテ厚シ、又白楊ニモ能似タリ、邊ニ細鋸齒アリ、背ニ微白毛アリ、夏葉間毎ニ五瓣ノ黃花ヲ開ク、底濃紫色ニシテ秋葵ノ花ニ似テ小ナリ、朝ニ開テ夕ニ落ルコト木槿ニ同ジ、花後實ヲ結ブ、又木槿ニ同ジ、

扶桑

ルナリ、桂海虞衡志、及物理小識、遵生八牋、秘傳花鏡ニハ、皆花晨開正白、午後微紅、夜深紅ト云、凡芙蓉花ハ朝ニ開キタニ萎ム者ナレバ、四書ノ説ヲ以テ優ナリトスベシ、冬ニ至レバ枝葉共ニ枯ル、此木皮ヲ以テ紙ヲ抄クヲ小皮紙ト云コト、天工開物ニ出、又皮ヲ採リ線トナシ、織テ網衣トナシ、暑月ニ服シテ汗臭ナシト、物理小識秘傳花鏡ニ見ヘタリ、又池塘有芙蓉則獺不敢來ト秘傳花鏡ニ見ヘタリ、

〔草木六部耕種法十一需花〕木芙蓉ハ眞土ノ肥タルニ、馬糞人糞油糟等ヲ能ク耕交テ植ベシ、春分ニ枝ヲ斜ニ切テ揷スレバ、其年ノ中ニ花開クモノナリ、時々其根ニ盛養水ヲ澆トキハ、大ニ能ク繁榮ス、花ニ紅白アリ、且單ナルモ重瓣ナルモ有リ、又日々ニ花ノ謝ルモアリ、或單ニモ八重ニモ、花ノ三四日經久モアリ、又重瓣ニテ開タル初日ハ白花ニテ、二日目ニハ淡紅トナリ、三日目ニハ本紅ト爲ル者アリ、此ヲ醉芙蓉トモ添色芙蓉トモ名ク、珍花ト稱スベシ、挾竹桃頳桐等ヲ作ルモ大抵此ニ同ジ、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕扶桑　佛桑花通名　琉球ムクゲ　一名照殿紅圖書　福桑廣東新語　那提槿草花譜　菩薩榕那中山傳信錄

和產ナシ、琉球ノ產ナリ、中山傳信錄ニ、五雅統注ヲ引テ、山丹扶桑同出日本、始入中國ト云ハ誤ナリ、唐山ニハ八閩廣州ニ多シ、今ハ年々多ク薩州ヨリ來ル、甚寒ヲ畏ル、初冬ヨリ土窖中ニ入、初夏ニ至テ出ス、葉ハ桑葉ニ似テ糙澀ナラズ、深綠色互生ス、青蔕紫蔕ノ二種アリ、六月葉間ニ花ヲ開ク、唐山ニテハ自二月開、至中冬歇ト云、故ニ八閩通志ニハ、四時常開ト云、傳信錄ニハ四時皆花ト云、單葉アリ、千葉アリ、單葉ナル者ハ五瓣ニシテ木槿花ノ如シ、大サ三寸許、其蔕長シ、瓣ハ深紅色ニシテ光リアリ、花中ニ一ノ長紅蘂アリテ高ク出ヅ、其端五ツニ分レテ燭臺ノ形ノ如シ、故ニ傳

千葉ノモアリ、フチ赤シテ千葉モアリ、千葉ハ花二日モ持ツモノ也ドレモ實熟シテ苗枯ル也、集解ニ川廣有漆色拒霜花開白色、次日稍紅、明日則深紅ト云者ハ、三月比ニ花アル如ニ云テアルトモ此ハ時珍ノ説ハ誤也、漆色拒霜ハ嶺南ノ產、故ニ時珍モ不見シテ書レシモノト見タリ、一日ノ内ニダン〳〵カワルモノ也、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕木芙容 フ○ヨ○ウ○ キ○ハ○チ○ス○ 一名天英尺牘雙魚 錦城錦城名物法言 秋華花暦百詠 醉客事物紺珠 文官秘傳花鏡 青露葉證治準繩、葉名、

モト芙蓉ハ蓮花ノ名ナリ、コノ木ノ花蓮花ニ似タル故ニ、一名木蓮、因テ木芙蓉ト云、略シテ芙蓉トモ云詩句等ニテ荷花ト混ジテ分レ難シ、故ニ後世ハ荷花ヲ水芙蓉、事物異名草芙蓉同上ト云、品字箋ニ、古詩、芙蓉看欲醉、此木芙蓉開于江岸者、涉江采芙蓉、乃芙蓉之生池沼者、卽荷花之謂也ト云、人家庭院ニ多ク栽ユ、春宿根ヨリ數條叢生シ、高サ五六尺、或丈許ニ至リ葉互生ス、大サ五七寸、五七尖アリテ鋸齒アリ、肥タル者ハ九尖トナル、附方ニ九尖拒霜葉ノ字アリ、七月葉間ニ花ヲ開キ、十月ニ至テ止ム、故ニ拒霜ノ名アリ、菊花モ遲ク開ク故ニ、亦コノ名アリ、花ハ木槿ムクゲ花ニ似タリ、蘂モ亦相似タリ、單葉千葉アリ、淺紅アリ、白アリ、白クシテ端淺紅ナル者アリ、一枝ニ紅白雜リ開ク者アリ、二○色○芙○蓉○ト云、單葉ナル者ハ朝ニ開キ夕ニ萎ム、千葉ナル者ハ日ヲ經テ萎マズ、又一種一蕚上ニ七花開ク者アリ、和俗七○面○芙○蓉○ト云フ、物理小識ニ四面ノ者ノ語アリ、又一種朝開ク時ハ白色漸ク紅色ニ變ジ夜ニ至テ深紅色トナル者アリ、添色拒霜ト云フ、嶺南ノ產ナリ、一名添色芙蓉、桂海虞衡志 文官花、群芳譜 弄色芙蓉、輿雅俱覽 醉芙蓉秘傳花鏡 三醉芙蓉潛確類書 群芳譜ニ王敬美ノ説ヲ引テ、一日三換者曰三醉ト云ヘリ、又廣東新語ニ將紅曰初醉、淺紅曰二醉、暮而深紅爲三醉、故亦曰酒芙蓉ト云ヘリ、時珍ノ説ニ、添色拒霜花初開白色、次日稍紅、又明日則深紅、先後相間如數色ト云時ハ、花開キテ三日アルナリ、本草彙言ニハ、花朝開其色白薄暮稍紅、次日又深紅矣ト云時ハ、花開キテ二日ア

花又多シ、秋深テ蕾ヲ結ビ花ヲ開ク、大サ七八分ニシテ紅色ナリ、冬月土窖中ニ收ザレバ育セズ、扦插スレバ能活ス、又尋常ノ木槿ニ淺黃ツマベニツマムラサキ、又斑入アリ、共ニ八重單葉アリ、

〔剪花翁傳前編三五月開花〕木槿むくげ 花一重色白、開花五月上旬也、方日向、地二分濕、土えらばず、肥大便塞中に入べし、淡小便花前に澆ぐべし、移搖共に春彼岸よし、搖又梅天つゆもよし、此時は葉を取捨て扦さすべし、插花には水上がたし、切口を能燒、逆水して冷濕の地に臥せ、薄筵をぬらし覆ひ、暫して水器に扦おくべし、

〔大和本草花木十二〕木芙蓉 花單葉千葉紅白アリ、紅ニシテ千葉ナルハ牡丹芍藥ノ如シ、最美ナリ、サシテヨク生長ス、八九月ニ花サク、花久キニ堪フ、霜ニアヒテシボマズ、故ニ異名ヲ拒霜ト云、芙蓉ハ蓮花也、是ハ木芙蓉ト云、世俗ハ木芙蓉トイハズ芙蓉ト云、本草時珍說ニ淸凉膏ヲノセタリ、可考、妙藥也

〔和漢三才圖會八十四灌木〕木芙蓉 地芙蓉 木蓮 華木 桃木 拒霜 只云不也字〇中略

按木芙蓉其樹葉花實皆似木槿而大、艶美、七月開花桃紅色、或純白或紅白相半、有單瓣有千瓣、皆朝開暮萎、每枝數朶、更開逐日盛、其花落結實、亦如木槿、輕虛有薄皮、裏細子大如蕎麥、冬葉盡落、而實殼尚不零、拒霜之名義據此乎、自裂子墮處能生、插枝亦易活、然本草所謂花耐寒不落不結實之文未審、

〔本草綱目譯義三十六灌木〕木芙蓉 フヨウ〇中略

蓮花ヲ水芙蓉ト云分ル也、品字箋古詩、芙蓉看欲醉、此木芙蓉開于江岸、涉江采芙蓉、乃芙蓉之生池沼者即荷花之謂也云云、此本條ハ庭ニ多クウユ、木立ナレドモ一年立也、春舊根ヨリ叢生ス、高サ七八尺四五尺計、葉互生也、葉モ大ニシテ八寸ホドニナル、七ツホド尖アリ、アラキ居止アリ、ヘチマノ葉ノ如キ形也、秋花ツク、蜀葵花ノ如クシテ大ナリ、單ノモノ五瓣ニシテ瓣本ハ白シ、邊ハウス紅也、蕋モ木槿葵ノ如シテ同ジ、此モ朝開ク、落ル後實木槿ト同ジコト也、又白キアリ、白シテ

る櫬は卽蕣の假借にして、もとその正文のまゝに蕣といふべきを、風土の異なる邦にては、それをよむ聲親の如くにいひなせしより、遂に櫬字を假借して、その方聲に塡し也、その櫬字は說文に棺也从木親聲、また春秋傳を引て士輿櫬といへるによるに、櫬と蕣とはその義絕て異なるに、ても、その假借なるは明らけし、しかれば椵といひ、櫬といへるは、もとこれ別種なるといへ共、ともに同類なるによりて、爾雅にはその二種を、すべて木菫とはいひしにて、たゞその二名をわかつのみの事にてはあるべからず、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕木槿 アサガホ(萬葉集) ユウカゲグサ(古歌) シノヽメグサ(同上) ムクゲ(京、木槿音轉) キハチス(和名抄、奥州) ハチス(東國) キバチ(奥州、常州) モクゲ(佐州、雲州) モツキ(越州、常州) カキツバキ(奥州) ボンデンクハ(薩州) ボテンクハ(九州) 一名瘧子花(群芳譜) 蕣英 日給之花(共同上) 日給(通雅) 舜華(同上) 愛老(正字通) 洽容(同上) 裏梅花(桂海虞衡志) 麗木(事物紺珠) 時客(同上) 蕣英(名物法言) 朝菌(典籍便覽) 朝華(事物異名) 朝生暮落(通志略) 及(同上) 奔籬(廣州府志) 無窮花(郷藥本草) 牛不換(藥性奇方)

人家或ハ園野ニコレヲ栽テ藩籬トス、枝條繁茂ス、其花蜀葵花ニ似テ少シ、夏秋ノ間ニ開ク、朝ニ開キ夕ニ斂ル、故朝開暮落花ト云、古歌ニアサガホト詠ゼリ、單葉ニシテ淡紫標色ナル者ハ尋常ノ者ナリ、千葉ナル者アリ、紫碧色ニシテ千葉ナル者アリ、白花ニシテ單葉或ハ千葉ナル者アリ、皆蕣根深紅色ナリ、深紅花ニシテ千葉ナル者アリ、花史左編ニ、大紅千葉槿ト云、木皮根皮ヲ藥用トス、川槿皮是ナリ、川中ノ者上品ナレドモ、土槿皮モ亦用ユベシト、本經逢原ニ云リ、増、一種ハマボウト云モノアリ、海邊ニ產ス、春新葉ヲ生ズ、葉ノ形圓ニシテ白楊ノ如シ、花モ尋常ノモノヨリ大ニシテ黃色ナリ、花戸ニモコレヲ栽ユ、別ニ漢名黃槿(李文饒文集)別ニ、ボンデン花ト稱スル者アリ、近年花戸ニ傳ヘ栽ユ、春新葉ヲ互生ス、葉ノ形木槿ニ似テ薄ク、

本草衍義には、朝開暮斂といへり、然るを文字集略(和名類聚抄引)には、朝生夕落といひ、爾雅の郭注にも、既に朝生夕隕といへるは、楚詞にいはゆる秋菊落英といひし落字の意なるべし、また一種俗に木はちす、一名ふようといふものあり、その漢名を木芙蓉、一名地芙蓉、一名木蓮、一名拒霜、一名華木、一名桃木、一名天英、一名錦城一名秋華、一名醉客、一名文官といふ、此花また淺紅白色、及び千葉單葉の數種ありてその花の艶なるは木菫よりもまされり、また一枝ごとに紅白相雜りて開くものを二色芙蓉といひ、又一萼上に七華開くものを七面芙蓉といひ、又一種朝に開く時は、白色漸くにして紅色に變じ、夜に至りて深紅色となるものあり、漢名を添色拒霜、一名、添色芙蓉、一名文宮花、一名弄名芙蓉、一名醉芙蓉、一名三醉芙蓉といふ、もとこれ嶺南の産なりといへり、(二色芙蓉以下本草綱目啓蒙)扱爾雅に椵木槿櫬木槿といへるを、郭注に別二名也といひしより、諸家皆その說に因循し、遂にその二名を以て異稱同質となすといへ共、今つら〳〵考るに、椵といひ櫬といへるは、もとこれ同類別種にて、椵の木菫は蓋し今の木芙蓉にして、櫬の木菫は即いまのむくげなるべし、これは說文に椵木可作牀几、从木叚聲、讀若賈とみえたるに、即集注本草に、人蓡讃を引て、三椏五葉、背陽向陰、欲來求我、椵(音賈)樹相尋といへる椵と一物にして、爾雅にいはゆる椵木槿といひし椵は、人蓡讃にいはゆる椵と、その葉大小の異なる事ありといへ共、そのかたち全く相似たるによりて、その名を得しにて、古は木芙蓉をさして、また椵木ともいひしなるべし、木芙蓉は本草綱目に、其葉大如桐、有五尖及七尖者とみへ、又秘傳花鏡には、葉似梧桐大有尖とみへたり、これはまた集注本草に、椵樹葉似桐甚大、又本草蒙筌にも、椵樹類梧桐葉而大といへるに暗合なれば、其義はおしはかりてしるべし、又救荒本草に、椵樹生輝縣大行山々谷間、樹甚高大、其木細膩可為卓器、枝叉對生、葉似木槿葉而長大微薄、色頗深綠、皆作五花椏叉、邊有鋸齒とみえたる、周定王のいはゆる木槿も、また爾雅にいはゆる椵木菫の木菫にして、蕣木槿の木槿にてはあるべからず、又いはゆ

ノ村野ニノコレルナリ、

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕木槿　朝開暮落花　花奴玉蒸　椴　藩籬草　櫬　蕣　日及　俗云無久計、木槿字音訛、○中略

按、木槿花有數品、單葉而大者名舜英以賞之、總木槿花朝開日中亦不萎、及暮凋落、翌日不再開、寔此槿花一日之榮也、然其花僅一瞬、故名蕣之説者非也、詩云、有女同車顏如蕣華者、稱其艶美耳、又摘葉水少和挼之甚黏、用傳牝痔痛者良、

盛短、旋花、金錢花、壺盧、白粉草、牽牛花、黃蜀癸、茉莉、木芙蓉、扶桑、娑羅樹、棗花皆然、而銀杏花一開卽落、比此等花則木槿可謂耐久者矣、自古相誤稱朝顏矣、眞朝顏、牽牛花相譌矣

舜英　白槿單葉、其花大似木芙蓉、枝葉無異、或採白槿花摘去葉、假用海石榴枝葉、儼如眞海石榴花美、又能止瀉痢、用花陰乾煎服、或以淡未醬汁煮啜、

〔古今要覽稿 草木〕きはちす　あさがほ　むくげ　木菫

きはちす、一名ねむり、一名ほこ、一名ほこのから、一名あさがほ、一名夕かげぐさ、一名鏡ぐさ、一名ゑのゝめぐさ、一名むくげ、一名もくげ、一名もつき、一名きはち、一名かきつはき、一名ほんてん花、一名ほてん花は、漢名を蕣、一名蕣華、一名蕣英、一名蕣木、一名麗木、一名木菫、一名櫬、一名日及、一名王蒸、一名日給、一名地蓮、一名朝生暮落花、一名花奴、一名朝華、一名朝菌、一名朝生、一名治容、一名愛老、一名疵子花、一名無窮花木、一名藩籬艸、一名奔籬、一名籬槿、一名牛不換といふ、此種は和漢共に人家及び園圃にうへて、多く藩籬となすものにして、葉の狀扶桑に似て淡靑色、末尖りて極叉なし、その花は仲夏より開そめて季秋に至る、形頗る木芙蓉に似て、小にしてその色淡紫のもの常に多し、又白色、或粉紅、或は深紅、或は千葉、或は單葉の數種ありといへ共、すべてあしたに開そめて夕に萎み、さらにちり落る事なれば、此華の性なるが故に、漢書東方朔傳に、木菫夕死朝榮といへり、

名、一種千葉者、色似粉紅牡丹、俗呼爲纏絲牡丹、其根白色大如筯、不結子、是可以充今俗呼比流加保者、則蕣舜二物迥別、

〔下學集 下草木〕槿花 韻府云、槿有黄白者、一名曰及、字書曰、槿者蕣也、毛詩有女同車、其顔如蕣花、愚謂、蕣朝榮夕衰花也、故毛詩倭訓呼蕣曰朝顔、亦不妨也、由是日本俗以爲與槿蕣共牽牛花上、蓋以倭訓共同也、是大誤也、宋人詩曰、槿華籬下點秋事、早有牽牛上竹來、以此詩意見則槿蕣與牽牛各別也、牽牛花本之名藤生、花狀如豇豆矣、因田野人牽牛易藥得名焉、又或故人詩曰、君子芳桂性春濃秋更繁、小人槿花心、朝在夕不存、云々、

〔書言字考節用集 六生植〕木槿 本草、人家多種植爲籬障、故云籬草、 槿花 同 蕣 同 日及 時珍云、木槿花朝開暮落、故名日及、曰槿、曰蕣、猶僅榮一瞬之義、

〔大和本草 十二花木〕木槿 ムクゲハ、モクキンノ轉語ナリ、花ノ下品也トイヘドモ好花モ亦アリ、今世紅白單葉千葉重葉其種類多シ、有大紅千葉者、白千葉者、此二種ヨシ、萬葉歌ニ、朝顔朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮、此歌ヲ以見レバ、朝良ハ卽槿花也、非牽牛子也明矣牽牛子ハ、古今集ニ、ケニゴシトヨメリ、又和名抄ニハ、牽牛ヲアサガホト訓ゼリ、然レバ木槿花ヲモ牽牛花ヲモ、アサガホトイヘルナルベシ、一名ニシテ二物ナリ、凡倭漢トモニ一名二物多シ、花モ實モ木芙蓉ニ似タリ、正月ニ挾シ、壓水ヲソヽゲバ能活ス、

〔本草一家言 二〕木槿 和名朝顔、萬葉與牽牛花同名、蓋以其花不久榮取義也、猶漢言日及朝開暮落之類也、俗名武久計、花有數色、重瓣、紅花者名朱槿、詩名蕣華花、凡下不堪觀者名籬槿、入藥用、白花者味噌汁煮治痢疾、崩漏帶下避疫、又剝皮漉紙、勝于楮、

〔蒹葭閑話 下〕木槿

木槿ヲムクゲ、牽牛子ヲケンゴシト訓ズルハ、皆音ニヨリテ訓トス、二物ミナアサガホト呼ブナリ、今ハ牽牛子バカリヲアサガホト稱スル故ニ、槿花ヲアサガホトスルハ誤リノヤウニ思ヘリ、今モ村野ノ人、木槿ヲアサガホト云フ、禮失シテコレヲ野ニ求ム猶信ナリ、又野人木槿ヲハチストモ呼ブ、按ズルニ、源順和名抄ニ云ク、文章集略云、蕣和名木波知須地蓮花、朝生、暮落者也、コレマタ古語

木槿

〔採藥錄五〕膽八樹　ハボンノキ
西土及豆州ニ多シ、子ノ狀棗ノ如シ、核中ノ脂ヲ取リ、瘍家膏藥ニ用ユ、之ヲボルトガルノ油ト云、平賀氏、豆州ノ產ヲ蘭人ニ見ス、彼人ボリトガル也ト云ヘリ、又俗ニ續隨子ノ油ヲ名テボルトガルト云ハ非ナリ、然ドモ此ハボンノ木ハ、紅毛ニテモ眞ニ非ズ、此ハ野生ナリ、常ニ食用ハ實尤モ大ナリ、桃ニ苦桃ト甚ダ好キ桃トアルガ如シ、此ボルトガルハ、ヲレーフボームト云、コロイトブツクト云書ニ詳也、

〔倭名類聚抄蓮二十〕蕣　文字集略云、蕣(音舜、和名木波知須)地蓮花、朝生夕落者也、

〔箋注倭名類聚抄蓮十〕按、說文云、蕣木槿、朝華暮落者、詩曰、顏如舜華、又云舜艸也、楚謂之葍、秦謂之藑、蔓地連華、二字不同、按本草衍義、木槿如小葵花、淡紅色、五葉成一花、朝開暮斂、湖南北人家多種植爲籬障、李時珍曰、槿小木也、可種可插、其木如李、其葉末尖而無椏齒、其花小而豔、或白或粉紅、有單葉千葉者、五月始開、故逸書月令云、仲夏之月木槿榮是也、結實輕虛、大如指頭、秋深自裂、其中子如楡莢泡桐馬兜鈴之仁、種之易生、訓岐波知順爲允、而詩鄭風今本作顏如舜華、毛傳舜木槿也、借舜爲蕣、文字集略遂混蕣舜爲一字、其云地蓮華者、當是蔓地連華之誤脫、可釋舜字、云朝生夕落者、可釋蕣字、呂氏仲夏紀木堇榮、注、木堇朝榮暮落、雜家謂之朝生、一名蕣、詩云、顏如蕣華、是也、岡村氏曰、舜楚謂之葍者、本草所謂施花也、旋卽舜假借也、蘇敬云、此卽生平澤、旋葍是也、施葍亦卽舜葍、舜葍或單呼或累呼並通、救荒本草云、葍子根、幽薊間謂之燕葍根者、亦卽是今俗呼比流加保、蘇又云、其根似筋、故一名筋根、蜀本云、旋葍花根也、蔓生、葉似署預而多狹長、花紅白色、根無毛節、本草衍義、旋花蔓生、今河北京西關陝田野中甚多、最難鋤艾、治之又生、世又謂之鼓子花、言其形肖也、四五月開花、亦有多葉者、其根寸截置土中、頻灌漑、方渉旬苗已生、李時珍云、旋花田野塍塹皆生、逐節蔓延、葉如菠菜葉而小、至秋開花、如白牽牛之花、粉紅色、其花不爲瓣狀、如軍中所吹鼓子、故有旋花鼓子之

テ、錦繡ノ如シ、ソノ子大サ蓮子ノ如ク、圓ニシテ微ク肉ヲ外ニシ、核ヲ内ニス、核内仁アリ、之ヲ絞リテ油トス、

普之按、膽八樹子油、阿蘭陀ヨリ來ル、之ヲホルトガルノ油ト云、普之ガ父登、嘗テ阿蘭陀人ハアルト云者ニ就テ、之ヲ正シテ、ソノ的ヲ得タリ、蓋シ昔人此樹ノ本邦ニ存スルコトヲ知ラズ、常ニソノ油ヲ蕃舶ニ仰グコト、數百年來、今尙ホ然リ、若シ苟モ之ヲ製シテ施用セバ、以來急ヲ蕃舶ニ告ゲズシテ藥用足ラン乎、又傳聞、豆州熱海地方ニモ、亦此樹アリ、但人呼デハボソト云、又ヘボソト云ト、

本邦固ニ此樹多ク有レ之、安ンゾ舶來ヲ俟ツコトヲ爲ン、

〔遠西名物考〕蘭オリハア羅オレア此樹ノ羅甸名

按ニ、阿利襪ハ、西洋諸地ニ產スル一種喬木ノ實ナリ、土人是ヲ搾リテ油ヲ取リ藥用及ビ飮膳燈油ニ供シ、又四方ニ貨ス、和蘭ニテ此油ヲオレイフ、オーリイト名ク、左ニ擧ル阿利襪油ナリ、舶來アリ、俗間藥舖ホルトガルノ油ト呼ブ、平賀鳩溪ノ物類品隲、並ニ小野蘭山翁ノ本草啓蒙ニ、時珍ガ綱目篤耨香ノ附錄ニ出ル膽八香ヲ以テ阿利襪油ニ充、又胆八樹ヲ以テ阿利襪樹ニ充ツ、又膽八樹ヲ以テ、本邦豆州等ニ產スルハボソト云ヘル樹ニ充ツ、物類品隲ニ言、紀伊方言ヅクノ木、本草啓蒙ニ云、此樹本邦暖地ニ多シ、俗名ヅクノキ紀州シラキ九州ハボソ豆州ト云々、今豆州產ノハボソヲ以テ阿利襪樹ノ說ニ較考スレバ、其樹葉花實ノ形容大抵相似タレドモ但阿利襪樹ノ葉ハ對生シ、且ツ紅色トナラズハボソ葉互生シ、又葉落ルトキ皆鮮紅色トナル、又壬午ノ春、駿州及ビ豆州ノハボソノ熟實、並ニ未熟ノ者ヲ多ク得テ、數々搾ニ入レ搾リ試ルニ、唯澀味ノ稀味出ルノミニテ、油出ルコトナシ、是レニ火ヲ點シ或ハ煎熬シ試ルニ、絕テ油氣ナシ、然ラバハボソハ阿利襪樹ニ非ルカ、

膽八樹

〔佐渡志五物產〕枳椇　方言ケンポンナシ
山中所々ニアリ、相川ニテハ中尾山ニアリ、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕篤耨香〇中略
附錄、膽八香、　ホルトガルノ油
波爾杜瓦爾(ホルトガル)ハ蠻國ノ名ナリ、紅毛人コノ地ヨリ采リ來ル、故ニポルトガルノ油ト云、コノ樹本邦暖地ニ多シ、喬木ナリ、寒地ニ移シ栽ルモ育シ易シ、俗名ヅクノキ紀州シラキ九州モウガシ薩州バボソ豆州シイトギ阿州葉ハ楊梅葉ニ似テ薄ク、長サ三寸許リ、鋸齒粗ク互生ス四季ニ葉換ル、其落ントスル時色赤シ、故ニ年中紅葉相雜ル、夏葉間ニ枝叉ヲ出シ花ヲ開ク、黃色ニシテ粉ノ如ク、竹柏ノ花ニ似タリ、後實ヲ結ブ、長サ六七分、兩頭尖リ、榧實ニ比スレバ微シ狹小、外皮ハ熟スト雖ドモ綠色ナリ、內ニ厚核アリ、核中ニ仁アリ、是ヲ搾リテ油ヲ采ル、卽ホルトガルノ油ナリ、蠻名ヲトリ油メレイイヒ、蠻產ハ實大ナリ、和產ハ小ナリ、近來續隨子ノ油ヲ以テ僞リ賣ルモノアリ、麻油ノ如ニシテ色白シ、眞物ハ凝リテ色黃ナリ、混ズベカラズ、

〔伊豆諸島巡回記〕膽八樹　タンハチジユ
三宅島　島中ニ自然生多シ、方言チギノキト云フ、伊豆村滿願寺ノ山中ニ大木アリ、其實ヲ採リテ食フ者アリ、其材ハ以テ薪トス、
神津島　島中ニ多シ、大木稀ナリ、其材ハ薪トス、新島モ亦同ジ、
豆州諸島物產圖說ニ依レバ、之ヲホルトガルト記ス、卽チ之ヲ阿利襪(オリーフ)ト同一視セリ、是レ誤認スルニ似タリ、故ニ其全文ヲ寫錄シ併セテ之ガ異種ナルコトヲ辨ズ、其說ニ曰ク、ホルトガル八丈島山中處々有之、土名チギノキ、本草ニ所謂膽八樹是乎、ソノ樹冬青ニ類シテ、身幹端直、其葉尖長ニシテ、淡綠色、多ヲ經テ凋マズ、春夏新葉發スレバ、舊葉間々鮮紅ナリ、之ヲ望メバ丹青斑駁ニシ

枳椇

〔延喜式大舍人十三〕凡正月上卯日供二進御杖一、〈中略〉其杖曾波木二束、比比良木、棗、毛保許、桃梅、各六束、〈已上二株爲二一束一〉〈中略〉○中宮比比良木、棗、毛保許、桃梅、各二束、燒椿、皮椿、各五束、〈但本儀見二東宮式一〉

〔大和本草果木十〕枳椇(ケンポノナシ)　實ハ鳥ノ足ノ如クマガレリ、葉榎ノ葉ノ如シ、大木ニミノル、小樹ニハミノラズ、實ハ味甘シ、食スルニ堪タリ、酒ヲヨク消ス、酒ヲカモスニ、此木酒中ニ入レバ酒化シテ水トナル、此木ヲ柱トスレバ、屋中ノ酒薄クナル本草ニ見エタリ、丹溪酒病ノ久ク難レ治、煎藥ノ中ニ加二其實一而服レ之愈、

〔重修本草綱目啓蒙果二十二夷〕枳椇　○ケ○ン○ポ○ナ○シ京　○ケ○ン○ポ○ノ○ナ○シ　○ケ○ン○ポ○ガ○ナ○シ筑前　○テ○ン○ポ○ガ○ナ○シ同上秋月　○ケ○ン○ポ○コ○ナ○シ肥前　○テ○ン○ポ○コ同上　○テ○ン○ポ○ナ○シ越前　○ア○マ○カ○ゼ南部　○ケ○イ○ピ播州　○ケ○ン○プ木曾　○テ○ン○ポ○ウ○ナ○シ仙臺　○テ○ン○ガ○ポ○ウ同上、木ノ名、一名接骨木輿籍便覽、同名アリ、金鉤梨　鷄栒子　槏構共同上　兼勾八閩通志　皆拱子同上　白實古今注　爛瓜醫學大要　蜜屈立同上　木屈律群芳譜　蜜六曲薛己醫按　拱子事物紺珠　枸木通雅　厲漢指頭物理小識　枴棗救荒本草　枳柜叢苑詳註　曲枝果正字通　金鉤樹本經逢原　枳句埤雅　石李禮記註　白石李康熙字典　金鷄瓜食物本草會纂　枝矩子證治準繩

山野ニ多シ、木大ニシテ高ク聳ユ、春新葉ヲ生ズ、形圓大ニシテ微長端ニ尖リアリ、周邊ニ鋸齒アリ、紋脈加條(ムク)葉ノ如シ、大サ三四寸ニシテ毛アリ、又變ジテ岐ヲナス者アリ、皆互生ス、夏枝梢ニ細花ヲ生ジ、後實ヲ結ブ、小枝五ツニ分レ、肉其上ニ纏フテ手指ノ如シ、故癩漢指頭ト云、十月ニ至テ熟ス、黑茶褐色味至テ甘シ、其上ニ圓子ヲ生ズ、形蔓荊子ノ如シ、內ニ核アリ、圓扁ニシテ酸棗仁ノ如シ、茶褐色ニシテ光リアリ、地ニ下シテ生ジ易シ、

〔紀伊續風土記物產五〕枳椇(ケンホナシ)本草
在田郡山保田莊邊より多く出す

仁（味酸性收）熱用療膽虛不得眠、煩渴虛汗之證、生用療熱好眠、皆足厥陰少陽藥也、（正如麻黃發汗、其根節止汗也、）

本經不言用仁、而今天下皆用仁、（畢防已）

棗栽培

〔草木六部耕種法（十九實）〕棗（ナツメ）ハ實栽ニ宜シカラズシテ搢木（ツギキ）ニ宜シ、此レヲ搢ニハ、二月中其ノ枝ノ壯ニシテ拇指ノ太サナルヲ一尺二三寸ニ切リ、切リ口ヲ炭ノ火ニテ燒キ、少シ潤ヒアル地ニ插入コト五六寸、根邊ヲ少シク蹈ミ付置クトキハ、三四十日ノ間ニ活著テ、芽葉ノ生ズル者ナリ、乃チ草ヲ耘テ培養ヒ成長セシムベシ、能ク延ル者ニテ、其ノ年ノ中ニ五六尺ニモ至ル、若シ移シ栽ンコトヲ欲セバ、翌年ノ二月中ニ移スベシ、寒中根邊ニ糞ヲ入ルトキハ、四五年ノ中ニ實結者ナリ、八月其ノ實ヲ採ルベシ、

〔古今著聞集（十九草木）〕貞信公（○藤原忠平）なつめをあひしてまいりけり、式部卿親王の家によきなつめの木ありけり、其木をおろし枝にせられて、手づから身づから花山院の北對のにしの妻戶の庭前にうへ給ひけり、是によりて其木左右なき名木にていまだ有、花山院太政大臣の三位の中將の時、法性寺殿攝政にて、六條坊門烏丸の御亭より土御門內裏へまいらせ給ふには、近衞東洞院は便路なれば、もつとも此大路をこそとをらせ給ふべきに、いかにもよけさせ給ひけり、をのづから此大路をすぎさせ給とては、東洞院にしの四足をばすぎて、その棟門のまへにては御車のすだれをおろされ、前驅以下を馬よりおろされけり、人あやしみて其子細を尋申ければ、ときの攝政三位中將をうやまふにあらず、亭に貞信公のまさしく手づからうへ給へる名木あり、かれに禮を致也、此事京極大殿つぶさにしめし給旨分明也とぞ仰られける、

棗雜載

〔日本後紀（二十一嵯峨）〕弘仁元年九月乙丑、公卿奏言、謹案、（○中略）去大同二年八月十九日下彈正臺例云、雜石腰帶、畫飾大刀、及素木鞍橋、獨射狩韋鹿猼䗶皮等、一切禁斷者、（○中略）伏望、（○中略）鞍橋者除桑棗之外、不論素漆、隨心通用、庶隨民便、豪得其所、並許之、

作一名棫棗實、此疑脫實字、原書作大棗中味酸者是、本草和名同、爾雅說文並云、棫酸棗、棫棗出孟子、引見爾雅注及玉篇、今本孟子作棫棘誤、說文又云、樲酸小棗、郝懿行曰、樲與棫聲相轉也、蘇注又云、樹大如大棗、實無常形、開寶本草云、酸棗小而圓、其核中仁微扁、大棗仁大而長、不類也、本草圖經云、其木心赤色、莖葉俱靑、花似棗花、八月結實、紫紅色、陳藏器曰、嵩陽子曰、余家于滑臺、今酸棗縣卽滑之屬邑也、其地名酸棗焉、其樹高數丈、徑圍一二尺、木理極細堅而且重、其樹皮亦細文似蛇鱗、其棗圓小而味酸、其核微圓、其仁稍長、色赤如丹、本草衍義云、嵩陽子此說未盡、殊不知小則爲棘、大則爲酸棗、平地易長、居崖塹則難生、故棘多生崖塹上、久不樵則成幹、人方呼爲酸棗、更不言棘、其實一本以其不甚爲世所須及礙塞行路、故成大木者少、多爲人樵去、然此物纔及三尺、便開花結實、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕酸棗　サネブト和名抄　サネブトナツメ　トウザクロ和州　カラナツメ藝州　一名棘典籍便覽　山大棗村家方　猩猩果雲南通志　仁一名調睡參軍藥譜

享保年中ニ漢種渡リテ諸國ニ栽ユ、又新渡ノ核ヲ下シテモ生ジ易シ、樹葉花皆常ノ棗ニ異ナラズ、只實ノ形圓ニシテ味酸ク、食フニ堪ヘズ、秋後赤ク熟スルニ至レバ食フベシ、其核大ニシテ常棗ニ異ナリ、核甚堅シ、打砕ケバ內ニ仁アリ、形圓ニシテ扁シ、是藥用ノ酸棗仁ナリ、然レドモ仁ナキ者多シ、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕酸棗仁（さんそうにん）　棫　山棗

本綱、酸棗仁天下皆有之、似棗大而皮細、其木心赤色、莖葉俱靑、花似棗花、八月結實、紫紅色似棗而圓小味酸、其核中仁形微扁味甘、此物纔及三尺、便開花結子、但科小者氣味薄、木大者氣味厚、今陝西山野所出者亦好、

凡平地則易長大、居崖塹則難生、而其不長大者名白棘、故白棘多生崖塹土、及至長成、其刺亦少、

實味酸性收　主肝病寒熱結氣酸痺久洩臍下滿痛之證、

名朝鮮夏芽、其實比常棗、則極肥大、肉味甚甜美、本末尖如錐、此最好種、唯難多得、其餘有實長者圓者小者皆味不美、一種實圓扁而酸者、名酸棗、採仁入藥用、漢土諸書云、棗有十四品、所謂轆轤棗、羊矢棗之類是也、和邦倶未聞產之、（隨筆）

〔重修本草綱目啓蒙二十五果一〕棗　ナツメ　一名赤心（行厨集）　赤心君子（事物異名）　赤厘（同上、蒙古名）　紅皺（事物紺珠）　木蜜　百益紅　聖花兒（共同上）　雞心（物名法言）　琥珀精（種杏仙方小紅棗名）　樹一名九卿（物名法言）

棗ハ芽ヲ出スコト他木ヨリ遲ク、夏ニ入テ新葉始メテ出、故ニナツメト訓ズ、唐山ニハ品類多シ、元ノ柳貫ガ打棗譜ニ、七十三品ヲ載ス、和產ハ數種ニ過ズ、凡ソ棗ハ北地ノ產ヲ上トス、今人家ニ多ク栽ル者ハ、南棗ニシテ下品ナリ、一種細腰ナルヲ、クヽリナツメト云、是轆轤棗ナリ、一種形圓ニシテ金柑ノ形ノ如ナルヲ、マルナツメト云、是羊矢棗ナリ、藥用ノ大棗ハ朝鮮ナツメナリ、漢種アリ、葉實共ニ南棗ヨリ大ナリ、是洗大棗ナリ、一名鷄子棗（常熟縣志）洗棗（留雅疏）實ノ形肥テ本大ニ末小ナリ、又一種長サ一寸餘ニシテ、兩頭尖ル者アリ、丹波ノ保津ヨリ出ス、方書ニ黑棗ノ名アリ、物理小識ニ、紅棗樹上熟而晒乾者也、黑棗蒸熟而晒乾者也ト云リ、凡ソ棗樹ハ枝ニ刺アリ、刺ヲ白棘ト云、別ニ本條アリ、其木外白ク內赤クシテ堅シ、故ニ唐山ニテハ板木ニ用ユ、因テ序文ニ、上梨棗ト云ハ、梨木棗木ニ刻ヲ云、又梨棗ト熟スレバ、枳椇（ケンホナシ）ノ一名ナリ、酸棗モ棗ノ品類ナレドモ、食用セザル故ニ、別ニ灌木類ニ條ヲ出ス、

〔本草和名十七菓〕大棗、一名乾棗、一名美棗、一名良棗（已上本條）猗棗（出猗氏縣、故以名之）和名於保奈都女、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年二月九日癸丑、信濃國例貢梨子、大棗、奧桃子、雉腊（ホシトリ）別貢梨子大棗等貢獻之期、元不立制、太政官議定例貢每年十月、別貢十一月、（○貢以下四字、原脫、今據一本補、）原爲期、立爲恒例、

〔倭名類聚抄十七菓〕棗（○酸棗附）（○中略）　蘇敬注云、酸棗、一名樲棗、（上音貳、和名佐禰布止、）大棗之中味酸者也、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕按佐禰布止、謂核之大也、（○中略）原書木部上品云、此即樲棗實也、本草和名亦

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕原書上品同、說文、棗羊棗也、从二重朿一、棘小棗叢生者、从二並朿一、埤雅云、大曰レ棗小曰レ棘、酸棗也、棗性高、故重レ朿、棘性低、故並レ朿、朿音次、棗棘皆有レ刺、鍼會意也、李時珍曰、棗木赤心有レ刺、四月生二小葉一、尖觥光澤、五月開二小白花一、白色微青、藝文類聚引二東方朔傳一、朿朿爲レ棗、○中略本草和名云、大棗和名於保奈都女、生棗和名奈末奈都女、新撰字鏡、樼訓二奈豆女一、梀字同訓、新井氏曰、奈都米夏芽也、是木至二夏初一生レ芽、與二諸木之春生一レ芽不レ同故名、

〔塵袋 二〕梨ヲ大谷ト云ハ總名歟、子細如何、

廣志曰、沈陽北芒山有二張公夏梨一、海內唯有二一樹一ト云ヘリ、張公ト云人、北芒山大公ト云フ所ニ居タリケリ、其所ニアリケル夏ナシノ勝レタリケルヨリ云ハジメテ梨ノ名トス、外ニモ又モナキ梨ナリケリ、周文王弱枝棗オナジコト也、今ハナツメノ異名トス、李朱仲ト云フニハ二說アルベシ、一ニハ周文王スモヽウヘテモチ玉ケル、ソノ名ヲ朱仲ト云フ、一ニハ房陵ト云フ人アリ、ソノ人ノ家ニ標李ト云フスモヽアリケリ、コレヲ朱仲トモ云フ、朱仲ハヌシノ名也、標李ト云フハ、スモモノイロハナダイロナルナリ、カキヲ烏椑云フハ上林苑ニ此カキアリケリ、イロクロカリケルニヤ、

〔本草和名 十三木〕白○棘○、一名棘鍼、一名棘刺、一名棗樹針、出二陶景注一白棘赤棘、出二蘇敬注一白棗一名白輔、出二雜要訣一和名奈○都○女○乃○波○利○、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五灌木〕白棘 ナツメノキノハリ 一名棘鍼鉤子 附方 倒鉤棘鍼 倒鉤棘 曲頭棘刺 共同上

木小ナル時ハ刺多シ、大ニナレバ刺少シ、故ニ木ノ小ナル時ニ採ル、

增、本條ハ酸棗ノ刺ナリ、尋常ノ棗ノ刺ニハ非ズ、酸棗ノ集解ニ詳ナリ、

〔本草一家言 三〕棗 和名夏芽(ナツメ)此物生レ芽最遲、入二四月一纔生、如二兎目一、故名、夏牙有二數種一、入レ藥專用二大棗一、和

棗名稱

落子尙在枝、又云其實附枝如穗、人采其嫩者取汁、刷染綠色、

鼠李子（苦涼微毒）　治痘瘡黑陷及出不快、或觸穢氣黑陷、古昔無知之者、惟（錢乙小兒直訣）必勝膏用之、鼠李子黑熟者入砂盆、擂爛生絹捩汁、用石器熬成膏收、貯令透風、每服一皂子大煎桃膠湯、化下如人行二十里、再進一服、其瘡自然紅活、入麝香少許尤妙、（如無生者以乾者為末水熬成膏也）

皮（苦微寒）　治大人口中疳瘡發育、萬不失一、鼠李根薔薇根各細切濃煎（去滓）盛銅器、重湯煎待稠瓷器收貯、每少含嚥必瘥、（忌醬醋油膩熱麪及肉）　如發育以帛塗貼之神効、

按、鼠李（俗云棗志木布）高五六尺、葉似柃葉而略團薄、枝柔垂、四月開小花、每葉間有花淺紫色、結實紫色、秋落葉、後其子如穗、遠視之則似萩花、此與本草鼠李註相當也、但所圖之形狀略異、故別出圖、

〔本草綱目譯義（三十六灌木）〕鼠李　クロムメモドキ

此モ小木也、山中ニ多シ、幽谷ニハナシ、山道バタニアリ、ボケノ木ノ如ク枝コモル者也、冬葉ナシ、春新葉イヅ、葉ノ長サ七八分圓五分ホド也、細キ居上アリ、又小キモアリ兩對ス、刺少シアリ、新葉生ジテ葉間ニ花ツキ、小キ五瓣也、實ハ梅モドキホドノ大サ少シ大ナルモノアリ、初ハ綠色、後黑クナル、秋葉落實計ツクハ可見モノナリ、梅モドキニ似テ實黑キ故、クロムメモドキト云也、

〔重修本草綱目啓蒙（二十五灌木）〕鼠李　ク。ロ。ム。メ。モ。ド。キ。グ。ソ。ク。（播州）　ト。リ。ト。マ。ラ。ズ。（能州、同名アリ、）　一名

牛筋子（救荒本草）　牛諸子（秘書百問）　烏岡子（同上）、綠子（本經逢原）　鼡子（本草逢原）

淺山ニ多シ、小木ナリ、高サ五六尺、枝繁茂シテ小蘗ノ如シ、葉ハ楕ニシテ長サ六七分、細齒アリ、枝葉對生ス、夏月葉間ニ小花ヲ開キ、圓實ヲ結ブ、南燭子ヨリ小シ、熟シテ黑色、

〔本草和名（十七菓）〕生棗一名咸杏、一名白棘、一名蕲牙、一名鷄心、一名赤心、一名靑花、一名鶉枝、一名玉門、一名金蒂（已上十名出兼名苑）一名盛陽之靈芝（出大清經）和名奈。末。奈。都。女。

〔倭名類聚抄（十七菓蓏附）〕棗　本草云、大棗一名美棗、（音早、字亦作棗、和名奈。豆。女。○下略）

ニ紋理アレドモ分明ナラズ、茶褐色、是白暴スル者ナリ、破レバ内空シテ、正中ニ一核アリテ枇杷核ノ如シ、核ニ少ク肉ヅケリ、味モ茘枝ニ異ナラズ、長崎ニハ沙糖漬蜜漬モアリ、是ハ殻内ニ肉滿リ、生ナル者ヲ漬タル故ナリ、本邦ニテモ薩州ノ南邊山川ニ栽ユル者、大木多シテ實ヲ結ブ、葉ハ無患子(ムクロジ)ノ葉ノ如ニシテ小ク厚シ、五葉七葉アリ、實ハ南天燭(ナンテン)穗ノ如ク、五六十モ一朶ニツキ下垂ス、中山花木圖ニ見ヘタリ、一種古ヨリ龍眼ト呼ビ傳ヘ栽ユル者アリ、葉苦櫧(アカガシ)葉ノ如ニシテ、長サ七八寸、鋸齒ナクシテ厚シ、葉間ニ實ヲ結ブ、形龍眼ノ如クナレドモ、皮薄ク熟セズシテ落ツ、是大明ガシナリ、櫧ノ類ニシテ龍眼ニ非ズ、龍眼唐山ニハ大小數品アリト云、今舶來モ大小アリ、閩書南產志ニ、大者名二龍眼一、次名二人眼一、小者名二鬼眼一、俗不二識別一、總謂二龍眼一ト云、泉州府志ニ、最大者呼二虎眼一、最小者呼二鬼眼一、龍眼是其中者、今人不二復識別一、總呼二龍眼一ト云、此二說ヲ合スレバ大ヲ虎眼トシ、中ヲ龍眼トシ、次ヲ人眼トシ、小ヲ鬼眼トスルナリ、

增、近年江戸巣鴨ノ種樹家ニコレヲ栽ユ、天保十五年攝州池田東山ノ種樹家コレヲ得テ、濃州ノ好事家ニ賣ル、故ニ未ダ京師ニ來ラズ、

方書ニ桂圓ト云ハ、桂州圓眼ノ略ナリ、又肉バカリナルモノアリ、肉龍眼一名ムキ龍眼ト呼モノアリ、僞造ニハ非ザレドモ下品ナリ、

附方、歸脾湯今人用ユル所ノ方ト異ナリ、蒹葭堂所藏ノ本草綱目ニハ、木世肅自筆ニテコレヲ詳ニス、文長キヲ以テ載セズ、甲賀通元ノ醫方紀原ヲ參攷スベシ、

鼠李

〔書言字考節用集 生植六〕鼠李(サモモ)〇楮李、山李、烏巢子、牛皂子、並同、麥李(同、順和名、麥秀時熟故名、)

〔和漢三才圖會 灌木八十四〕鼠李(むらさきしきぶ)　山李子　楮李　烏巢子　牛李　烏桂子　皂李　鼠梓　椑(音卑)

苦楸亦名二鼠梓一、與レ此不レ同、

本綱、鼠李生二道路邊一、木高七八尺、葉如レ李、但狹而不レ澤、其子於二枝上一四邊生、生時靑、熟則紫黑色、至二秋葉

チイ、其葉ホヽノ木ニ似テマタアリ、龍眼ノ葉ハカシノ葉ニ似テマタナシ、二樹南國ニ宜シ、北國ニ宜カラズ、中華ニモ嶺南ノ暖地ニアリ、其餘ノ處無之、荔枝百果ノ内ニテ味尤スグレタリト、張九齡荔枝賦ニシルセリ、大木ニハ實百斛ニ至ル、五六月盛熟スル時、其土人其下ニ燕會シテ賞之、極量取啖ト本草ニ記セリ、龍眼ハ荔枝過テ後七月熟ス、一枝ニ五六十顆一處ニアツマリミノル事蒲萄ノ如シト、事類合璧ニシルセリ、一名亞荔枝ト云荔枝ニツグト也、薩摩ニ荔枝龍眼ノ木モトヨリ山ニアリト云、中華ニモ山龍眼トテ野生アリト、本艸ニイヘリ、泉州境、肥州長崎等處々ニアリト云、皆實ヲ此地ニウエシ也、カラトモニウフベシ、其實自然ニヲチテ生ズルヲ以シルベシ、但實ヲウヘテ生ジガタク、生ジテモ長ジガタク實ノリガタシ、長ゼズシテ枯ル、土地異ナレバ也、本草約言龍眼功與人參並ブトイヘリ、荔枝ハ龍眼ヨリ味スグレタレドモ、藥ニ不用、核(サネ)ハマレニ用ユル事アリ、龍眼ハ歸脾湯及心神復元湯ニ用ユ其外用事マレ也、藥酒ニ用ル事アリ、藥ニモ果ニモ新渡ノ近キヲ可用、藥ニ用ルニハ、カラヲ去日ニホシ收ヲクベシ、或肉ヲ取、蜜ニツケ置ベシ、砂糖ニツケルモ亦可也、如此スレバ久シキニ堪フ、カラトモニヲキテ久シケレバ必カビテ用不立、

〔和漢三才圖會 八十八夷果〕龍眼肉(りうがんにく)　龍目　亞荔枝　圓眼　益智　燕卵　荔枝奴　驪珠　蜜脾　鮫淚　川彈子 ○中略

按龍眼肉自廣東廣西福建多來、皆其肉正黑也、但生者白焙熟如此乎、多種其核、適有活生者而未有可結子木、五雜俎云、凡荔枝龍眼核種者多不活、即活亦須二十年始合抱結子、故按佳種之枝、簡歲卽成實

〔重修本草綱目啓蒙 二十二夷果〕龍眼　通名　一名魁圓 行厨集　桂水圓 群芳譜　海珠叢 同上　荔奴 事物異名　益智子　比目 共同上　益志 本草蒙筌　繡荔 廣東新語　驪珠 饌食譜 白集者

龍眼モ南國ノ產ニシテ、八閩廣東ニ多シ、北地ニハ育セズ、形荔枝ヨリ小ク、正圓ニシテ六七分、皮

龍眼

液（行厨集）　細枝（同上）　江家緑（蔬果爭奇）　側生（事物異名）　頳虬珠　十八娘　紅皺　絳衣仙子　福果（共同上）　紺殼（名物法言）　朱栫（同上）　大荔（廣東新語）　紫囊（尺牘雙魚）　頳蛇珠（事物紺珠）　燕支顆　坦衣　火實　天垢子　皺玉　脆玉　天漿　甘露水　海山仙人（共同上）　儷枝（北戸錄）　荔芰（飲食集）　飣坐眞人（群芳譜）

皺皮（康熙字典）　瓊珠（蔬食白曝者譜）　樹一名將軍樹（群芳譜）　殼一名荔梔殼（保赤全書）

和産ナシ、舶來多シ、コレハ嶺南八閩ノ産ニシテ、北地ニハナシ、龍眼荔枝共ニ寒ヲ畏レドモ、荔枝ハ殊ニ甚シ、百果ノ長ナレドモ、日ヲ經レバ色味共ニ變ズ、集解ニ若離本枝一日而色變、二日而味變ト云、故ニ其樹ヨリ採リ、直ニ食ハザレバ、正味ナキナリ、形小鷄卵ノ如ニシテ、外皮ニ嫩松毬(マツカサ)ノ如キ細紋アリテ色赤シ、今本邦ニ來ル者ハ皆白曝(シラボシ)ニスル者ナリ、曝ザレバ遠ニ寄スベカラザル故ナリ、頌ノ説ニ、福唐歳貢白曝荔枝ト云是ナリ、皮ノ厚サ龍眼ニ同ジ、肉核ノ狀モ同ジ、蔡襄ガ荔枝譜ニ、上中下三等ヲ詳ニ載ス、閩中ノ荔枝ハ閩書南產志ニ詳ナリ、荔枝譜ヨリ品類多シ、今本邦ニ渡ル白曝荔枝ハ皮茶褐色、破レバ內空シテ、正中ニ一核アリテ、少ク肉ヅケリ、栗殼色(クリイロ)ニシテ光アリ、形味共ニ龍眼ニ同シテ、微ク大ナリ、又核細長シテ肉多キ者モ雜レリ、是集解ノ焦核荔枝ニシテ上品ナリ、廣志ニ荔枝之最珍者也ト云リ、本草彙箋ニ荔枝殼燒解穢種痘宜求ト云、增閩書南產志數種ヲ載ス其名著キ者三十二品アリ、秘傳花鏡ニ七十五種ヲ載ス、近年舶來アリ、江戸巢鴨ノ種樹家ニアレドモ、未ダ京師ニ來ラズ、ソノ名考フベカラズ、

〔夢溪筆談　二十四雜誌〕閩中荔枝核有小如丁香者、多肉而甘、土人亦能爲之、取荔枝木、去其宗根、仍火燔令焦、復種之、以大石抵其根、但令傍根得生、其核乃小、種之不復牙、正如六畜去勢則多肉而不復有子耳、

〔本草和名　十三木〕龍眼一名益智、（蘇敬曰、此非龍眼也、）一名龍目、一名比目、（出疏文）和名佐加岐乃美、

〔大和本草　十果木〕荔枝(リチイ)　龍眼　此二木、其小ナルハ根共ニカラヨリワタルコトアリ、荔枝ハ唐音リ

荔枝

も似たる事あるなり、胡地の俗しかりと見えけり、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕木欒子　欒華　和名無久禮邇之　俗云無久呂之〇中略

按木欒子〇無患子之一類〇異種　別有菩提樹者、葉似椋、又似桑葉、而厚、面深翠背淺青、三四月將花、時別出莖、生新葉、以蔽其莖、黃青色、微似菠薐草葉、抽於其半腹、莖稍開花四五朶、黃色而小、甚香芬、花散結實、中子如豌豆、成簇一房二十粒許、淡黑色、用爲數珠、蓋葉與子之樣大奇、

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕欒華　センダン葉ノボダイジユノハナ　木名　ムクレニシノキ和名鈔　センダンノ葉ノボダイジユ　ドジヤウキ丹波　樹一名欒木通雅　欒樹正字通　木欒樹數本草

ボダイジユ同名アリ、コノ木ハ葉形棟葉(センダンノ)ニ似テ大ナル故、センダン葉ノボダイジユト呼ブ、漢名ニ菩提樹ト云者ハ、葉ノ形桑葉ニ似タリ、別物ナリ、欒樹ハ世ニモクゲンジト呼テ、河州道明寺ノ名產ナリ、然レドモモクゲンジハ、木槵子ノ轉音ナレバ、此木ニ名クルハ非ナリ、道明寺ハ河內國志紀郡ニアリ、三十四代垂〇垂推誤古天皇ノ勅願ニテ、聖德太子ノ開基ト云、其土地ヲ土師(ハジノ)里ト云、土師ノ連八島ト云人ニ命ジテ此寺ヲ建立セラル、コノ時ニ五部ノ大乘經ヲ埋メタル上ニ、欒樹自然ニ生ズルト緣起ニ云リ、コノ種ヲ諸國ノ寺ニ栽タル者多シ、今ハ丹波ノ山中ニ自生アリ、春新葉ヲ生ズ、棟葉ヨリ大ニシテ毛アリ、夏枝梢ニ穗ヲナシ、枝ヲ分テ花ヲ開ク、五瓣下ノ一方ニ偏ヨリ開キ、半邊蓮(カラクサノ)花ニ似テ大ナリ、黃色ニシテ心ハ紅色ナリ、後實ヲ結ブ、酸漿(ホウヅキノカハ)鈴子ニ似テ、微小ニシテ扁シ、秋ニ至リ熟スレバ皮自ラ開キ、內ニ二三子アリ、形正圓ニシテ大サ二分餘、色黑シテ至テ堅シ、穴ヲ穿チ數殊ニ作ル、又子ヲ下シテ生ジ易シ、霜後葉枯レ落ツ、藥ニハ花ヲ用ユ、故ニ此ニハ欒華ト云、

〔重修本草綱目啓蒙二十二夷果〕荔枝　通名　リチアン唐音　リツイ南京　リチイ共同上福州　一名甘

增、凡ソ胡桃椿及漆等ハ皆無患子ト葉ノ形相類シテ、左右兩對シテ正中ニ心葉アリ、唯無患子ノミ心葉ナシ、心葉ハ俗ニトマリ葉ト云フ、

〔地錦抄附錄三〕元祿年中來品々（略○中）一木欒子（モクゲンジ）

〔倭名類聚抄二十木〕欒　蘇敬本草注云、欒（魯官反、漢語抄云、木欒子、無久禮邇之乃木、）其子堪爲數珠者也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕今俗謂呼如木現自、說文、欒木似欄、欄今之楝字、（略○中）證類本草下品引、無其字、子下有若干字、者下有是字、

〔伊呂波字類抄无植物附植物具〕欒（ムクレンジノキ、）其子堪爲數珠也、　欒華（蘇敬注云、堪爲數珠者也、ムクレンジ、見本草、）〔同毛植物附植物具〕欒（モクレンジ）

〔和字正濫抄五〕中下に濁るし

木欒子　むくれにじのき　和名に蘇敬本草注を引ていはく、欒其子堪爲數珠者也、和名を思へば、わらはべの愛する、むくろじといふ物は、むくれんじの轉訛歟、これを數珠にすべき事、經軌の中には見えざれども、なしぬべき物なり、木槵子の事にやと見ゆれど、欒と槵と同じといはず、音もかはれば初の義なるべし、

〔東雅十六樹竹〕欒ムクレンジノキ（略○中）兒女の戲具に羽子（ハコ）とも胡鬼子（コギ）ともいひて、木欒子に鳥羽を植し物を、打揚ぐる板を羽子板とも胡鬼（コキ）板ともいふ也、舊說には春初に羽子つきぬれば、夏に至て蚊にさゝる事なきまじなひなりといふ事あり、胡鬼子の名あるが如きその謂ありぬべき事なり、崔豹古今注に、無患子の事をしるして、昔有神巫、能符劾百鬼、得鬼則以此木爲棒、棒殺之、世人相傳、以此木爲器用、以厭鬼魅、故號曰無患と見えたり、我國にも其事を傳へて、胡鬼子といふものを作り出せしに、無患、木欒其子の相似たれば、覓に木欒子を用ゆる事になりしなるべし、すべて此國にして荊楚之俗を傳へし事少からず、胡鬼子の如きは、卽今此に來れる喎蘭陀人の兒戲に

〔本草一家言三〕無槵子　一名菩提子、亦名鬼見愁、和名無垢路之、殼皮名奢盆、人染用、和爾雅以此爲菩提樹者訛也、綱目本條云、武當山中所出鬼見愁、形如刀豆者、即肥前州盆山島所產響珠是也、亦以穿數珠云、欒華、和爾雅訓津部非也、此梅津大梅山長福寺洛西南邑東山安井觀勝寺洛東六條東本願寺、黃檗山万福寺山城宇治山科吉祥山安祥寺洛之東邑栽之、葉如棟葉、黃花簇生如槐而大、結包頗如酸漿、中有實如蔓荊子、圓黑堅硬、又名菩提子、又別有菩提子、即今寺院所栽者、本草不載之、唯輿籍便覽、天台山外志栽之、葉似桑葉而實向其下而垂、比欒華稍小、曾閱禪客佛書中有菩提子經一卷、藏經中收之、貫其子爲念珠、其殼皮治瘡毒難拔、根者爲末、以四物湯煎汁送下一二服、即見効、其木皮名西木皮、此木本出於西天竺、故名、有薏苡亦名菩提子、見于草部、有金剛樹、又名菩提子、

〔重修本草綱目啓蒙二十四香木〕無患子　ムクロジ　ムクロウジ筑前備前　ムクロンジ越後江戸　ムク江戸　モクゲジ佐渡　クロモジ同上　ツヾ奧州豐州　ツブ京　一名墨圓子圖書　菩珠子南寧府志　槵子正字通　樹一名菩提樹秘傳花鏡同名アリ　槵木事物紺珠　木梡龍眼ノ條下

山野ニ多シ、葉ハ紫藤葉ニ似テ長大、山胡桃葉ヨリ狹クシテ鋸齒ナシ、薄シテ硬ク互生ス、夏月枝梢ゴトニ長穗ヲナシ枝ヲ分チ小花ヲ開ク、黃白色、後圓實ヲ結ブ、大サ六七分、熟スレバ外ニ皺アリテ油煠ノ形色ノ如シ、皮ヲ去レバ內ニ圓子アリ、色深黑ニシテ甚硬シ、打破レバ殼甚厚シテ中ニ白仁アリ、ソノ外皮ヲ俗ニシヤボント呼ビ、油汚ノ衣ヲ洗フニ用ユ、コノ子唐山ニテハ貫テ念珠トス、未ダ熟セザル者ハ褐色ヲ帶ブ、俗ニキンカンムク備前ト云、物理小識ニ銅槵ト云、已ニ熟シテ色黑キ者ヲ通雅ニ鐵槵ト云、中略○又一種琉球ノシロツブト呼ブ者アリ、形無患子ニ似テ輕ク硬シ、色ハ白シテ光リアリ、或ハ微青ヲ帶ビ、或ハ微黃ヲ帶ル者アリ、穴ヲ穿テ壓口標子トス、是ヲ佩レバ魑魅ヲ避クト云ヒ傳フ、琉球八重山ノ產ナリ故ニ八重山木龍トモ云、

〔紀伊續風土記物産六下〕七葉樹（鎭江府志、和名抄ニ、栩また杼の二字を止知と訓するは誤なり、）

各郡山中に産す、中にも牟婁日高兩郡の山中には、至りて大樹ありて板となし、其木理美なり、諸器に製して田邊より多く四方へ售り出す、

〔佐渡志物産五〕栗　和名クリ

大中小ノ三品アリ、民家ニ益多シ、栃ノ子ハ民家ニタスケアリ、漢名天師栗ナルベシト、蘭山翁カタラレタリ、深山ニ多クアリ、加茂郡ノ山民穀ヲサリ米粉ニ雜ヘ、搗テ餅トス、味苦シ、山家ノ食ナリ、木ハ机箱ニ作ルベシ、

〔伊呂波字類抄モ植物附植物具〕木槵子（モクエンシ、可用念珠、木名、）

〔塵袋二〕日向國韓槵生村所アリトカキク、コノ所ニ木槵子ノ木ノ生タリケル歟如何、槵生トカケルハ木槵ノ樹ノオヒタルニハ非ズ、栗ノオヒタル心ナリ、コノ所ニ小栗オホシ、昔聟陸武別ト云ケル人、韓國ニワタリ、此ノ栗ヲトリテカヘリテウヘタリ、此ノ故ニ槵生村トハ云ナリ、風土記云、俗語謂栗爲區兒、然則韓槵生村云、蓋云韓栗林歟ト云ヘリ、槵字通兩物歟、順ガ和名ニハ欒ノ字ヲムクレンジトヨメリ、漢和抄ニハ木欒子トカケリ、ソノ外又木蓮子トカケルモアリ、訓ノヨミハイタヒトヨメリ、（見崔禹食經云々）本草折傷木トカケリ、コレハ木ニマツイツクトツラノ名也、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕無患子　桓　欒䕯　木患子　肥珠子　菩提子　鬼見愁　油珠子（○中略）

按無患子（俗云無久呂之、今俗云豆布、）其樹膚似山茶花木、葉似椿及漆葉、凡一椏十二葉對生、開小白花、其子殼黃、皺蔕下二小子、及中黑核之形色、皆如上所說、其黑核頂有微白毛、俗呼名豆布、其小者爲念珠、大者童女用代錢、或鑿一孔、植小羽、以小板鼓上之、則顚頏以爲遊戲、稱之羽子、正月弄之也、取鬼見愁之義乎、其子皮煎汁洗衣、能去垢、又漬水以管吹、則泡脹起以爲戲、（俗云審盆）無久呂之、卽木欒子略也、誤爲無患子之名乎、

橡

香もありげにきこゆ、處女卷に、まつりのころは云々、齋院はつれ〴〵とながめたまふ、おまへなるかつらの下風なつかしきにつけても、わかき人々は、思出ることどもあるなど云々、これも楓と聞えたり、然るに此記に乎加都良にあてたる楓字をも書たるは、たゞ加都良に用ひたる字を借れるのみなり、古は言だに同じければ、拘らぬは常なり、其楓は香木と云べき物に非ず、漢籍には香楓ともあれど、御國の乎加都良には、香なきこと、右に云るが如し、又古書に楓字を書るは、楓香木とあるは、桂と二にも見るべけれど、楓字かける處も、香木とある處も、事のさま全同物と聞えて、二には非ず、又書紀に杜木と書るは、古杜字をあてたる由は、心得がたけれど、字鏡に杜毛利又佐加木とあるを思ふに、かの今云多夫の木は、殊にみづみづしく、いとよく榮ゆる木なれば、上代に是をも榮樹(サカキ)と用ひ、又榊社などにも、殊に多くありけむ故に、やがて毛利にも此字を用ひしなるべし、万葉十卷に、志眞加志にも、白杜樹とかける加志をも、古は榮樹と用ひたり、此彼を合せて思ふに、杜木と書るも女加都良の方なりけり、

〔新撰字鏡〕木 橡詳兩反、木實、止知、

〔倭名類聚抄〕十七菓 杼 爾雅集注云、栩音羽、又香羽反、一名杼音杵、又當旅反、與芧同、和名止知、莊子狙公賦杼是、

〔類聚名義抄〕三木 橡音象ツルハミトチ　杼音杵、又芧、トチ、又芧、　杤トチ十千義歟　栩羽兩二音、杼栩、トチ、カシノキ、

〔撮壤集〕中木 橡トチ　杼トチ同

〔饅頭屋本節用集〕土草木 杼トチ

〔重修本草綱目啓蒙〕二十五果一 天師栗　トチノミ　弘法大師タハズノクリ同州　木一名七葉樹鎭江府志　婆羅樹同上

トチノキハ深山ニ多シ、葉形大ニシテ長ク、商州厚朴(ホホノキ)葉ノ如ニシテ、細齒アル者七葉並ビテ械樹(カヘデ)ノ葉ノ如ナルヲ、一葉トス、冬ハ葉ナシ、春新葉ヲ生ジ、四月枝梢ニ花ヲ開キ穗ヲナス、長サ五六寸、花ハ五瓣、大サ四五分、淡紅色實ハ山茶(ツバキ)ノ實ノ如シ、秋ニ至テ熟ス、外皮厚サ二分許、茶褐色、熟スレバ自ラ三ツニ裂テ落ツ、內ニ子一顆アリ圓扁ニシテ中グリノ如シ、色モ栗殼ノ如シ、山民澁ヲ去リ米粉ニ雜ヘ搗テ餅トス、トチモチト云、木ハ机箱等ニ造ルニ用ユ、良材ナリ、間道(ヒヾスヂ)アリテ美ハシ、俗ニ一寸十チヾミヲ上品トス、薪トナシテ火勢强シト云、

云り、さて貝原氏が云、楓(タカツラ)は其葉まことに白楊(ハコヤナギ)に似て、兩々相對ぶ、賀茂祭に用るかつら是なり、筑紫にてもかつらぎと云、其葉かへでより大にて、花はさゝげの花の如くにて、三四月に開、形狀はからの書に云る楓に似たれども、紅葉せず、香も無しと云り、今考るに、賀茂祭に葵と共に用ふる加都良は、信に香もなく紅せず、漢の楓には當らず、次に桂は今昔物語に、天暦御時もろこしより參來(マウデキ)ける、長秀と云僧ありけり、五條西ノ洞院なる處に桂宮と申すは、其門前に大なる桂木ありける故になむ名けゝる、彼長秀もと醫師なりけるが、其木を見て、桂心は此國にも候ひけりとて、其枝を伐取せ、桂心を取て藥につかひけるに、漢のにはまさりけりとあり、此加都良今も有て、今も有とは桂宮なるを云には非ず、此御國にあるをいふなり、全(サハラ)漢籍に云るに同じ、御肉桂と呼ぶなり然れば古より有りし物にて、源氏物語などに加都良と云るも此屬なり、但漢籍に云桂は、御國には稀らにこそあれ、古書に加都良を云る趣に何處にも〳〵偏く有し物とぞ聞ゆる、故思ふに、今世に多夫(タブ)と云木あり、何處にも多き物にて、處によりて陀母とも陀靡とも數肉桂とも云、貝原氏云、たぶの木桂の類にて二種あり、一種は白たぶと云、葉は桂に似て香すくなし、冬赤實なる、一種にくすたぶと云、葉白たぶの如くにて、殊によく桂に似たり、此葉も桂葉と同じく、本より分れたる縱理三條あり、實は冬熟して黑し、香も桂にやゝ似て味も辛し、右二種共に大木ありといへり、其狀見分難きまで桂に似たり、かゝれば古に加都良と云しは、なべて此多夫の木にて、其中にはたま〳〵彼桂宮は在しが如き、眞の桂のまじりけるをも一に呼しなるべし、さて右の如くなれば、楓(タカツラ)と桂(メカツラ)とは、近き類の木には非ず甚異なるを、和名抄に同類の如く、牝牡を分て出せるは、元より同類には非れども、名の同くて、混はしき故に、中昔にかりに牝牡と分ち云しなるべし、されど其は殊に分て云ときのことにてこそあれ、常にはたゞ二ながら加都良とのみぞ云けむ、故和名抄の外には、牝牡の名見えたることなし、さて此記などにあるは、楓か桂かと云に、此記に香とも書、字鏡にも楿と見え、又古事中昔の書までに人の門又庭などにも在しこと、又彼桂宮のなどを思ふに、桂(メカツラ)の方なるべし、但し源氏物語花散里卷に、さゝやかなる家の、こだちなどよしばめるに云々、大きなるかつらの木のおひ風に、祭のころおぼし出られて云々、これは楓ときこえたるに、

云、楓樹似白楊、葉圓而岐、有脂而香、今之楓香是、案本草唐本註云、樹高大、葉三角、商洛之間多有之是也、又山海南荒經云、有宋山者、木生山上、名楓木、楓木蚩尤所棄其桎梏、是謂楓木、註云卽今楓香樹也、

〔萬葉集 七 譬喩歌〕寄木
向岡之、若楓木、下枝取、花待伊間爾、嘆鶴鴨、

〔大和本草 十二 雜木〕楓　江陰縣志曰、似白楊葉厚枝弱善搖、故字從風、霜後色赤、合璧事類、楓葉圓而岐分三角、今案和名ニ楓ヲオガツラト訓ズ、ソノ葉マコトニ白楊ニ似テ兩々相對ス、賀茂ノ祭ニ用ルカツラ是ナリ、又筑紫ニテモカツラギト云、葉カヘデヨリ大キナリ、花ハサヽゲノ花ノゴトク三四月開ク、形狀ハ似タレドモ、カラノ書ニイヘルヤウニ、オカツラハ紅葉セズ香ナシ、是眞ニ楓ナリヤ未詳、朝鮮ニハ楓アリ、香アリト云、桂ヲ順和名ニ、メガツラト訓ズ、オガツラニ對ス、楓ヲカヘデト訓ズルハアヤマレリ、カヘデハ槭樹也、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕楓 楓香　攝欇 爾雅　和名乎加豆良 俗以爲蝦手樹者非也○中略
按、倭名抄云、楓 和名乎加豆良 有脂而香、攝一名 桂 和名女加豆良 以爲楓、與桂如雌雄矣、然未知其據也、又本草綱目齊木下有大風子、恐此大楓子重出者乎、

〔古事記 上〕故爾鳴女自天降到、居天若日子之門湯津楓上而、言委曲如天神之詔命、

〔古事記傳 十三〕湯津楓、湯津は五百箇にて、其由は傳五の七十一葉湯津石村の處に委く云り、此は枝の繁きを云、○中略　楓は下海神宮段には湯津香木と書て、訓香木云加都良と見え、書紀には此を其雉飛降、止於天稚彥門前所植湯津杜木之抄、杜木此云可豆羅とあり、又杜樹と作る處もあり 万葉七 三十五丁 に向岡之、若楓木、下枝取、花待伊間爾、嘆鶴鴨、字鏡に㮋加豆良とあるは香木を一にしたる字なり、さて和名抄に楓和名乎加豆良、桂和名女加豆良、常には加都良には、桂字をのみ用ひて、楓字は後世に加閉手に用ふ、されど楓は加閉手にはあらず、まづ楓は、爾雅郭璞註に、樹似白楊葉圓岐、有脂而香、今之香楓是也と云、又他の漢籍ともによく紅葉する物と

考れば、日本の紅葉にも異種數百種あるがごとく、彼國にてもいろ〳〵の楓あるべし、別に召れしは唐土にての最上の品なるべし、然れども唯詠めに興ずるには、日本の楓遙に勝れり、我國のをこそ愛すべし、又或說に日本には楓なし、されば日本にては唯紅葉、或は機樹鷄冠木(けいくわんぼく)など、稱すべし、楓とは稱すべからずといへるも僻說なり、日本にいふ處のものは、楓の外なるものにはあらず、唯楓の同類異種なれば、紅葉を楓と稱して當らずとはいふべからず、又余が霧島山の奥に入し時、種々の奇樹異草數々見し中に、彼楓に甚だよく似たるもの有りき、余元來本草物產の學に疎ければ、當否はしらず、しばらくしるして後の博識者をまつ、

〔倭名類聚抄木二十〕楓　兼名苑云、楓一名欇、〈風攝二音、和名乎加豆良〉爾雅云、有脂而香謂之楓、

〔箋注倭名類聚抄木十〕按爾雅云、楓欇々、說文云、楓一名𣡌、上林賦注、張揖曰、楓欇也、蓋或復言𣡌々、或單言𣡌也、兼名苑蓋本說文也、又云、楓木也、厚葉弱枝、善搖、說文云、𣡌木葉搖白也、徐音之涉切、蓋以木葉動名𣡌也、廣韻云、𣡌、樹葉動貌、叱涉切、音謵、廣韻又有欇字、云虎櫐、書涉切、音攝、又時攝切、音涉、是𣡌欇二字不同、而後人楓𣡌字移木在傍、與虎櫐之欇混無別、故爾雅云、欇虎櫐、又云、楓欇々、陸德明欇虎櫐音云、郭音涉、楓攝々音云之涉反、二字其形雖同、其音自異、此以攝音欇者誤、下總本有和名二字、按、乎加豆良與香要抄合、本草和名唯云、和名加都良、〈○中略〉按原書釋木云、楓欇々、郭注、與此略同而少異、所引蓋舊注、則爾雅下似脫注字、而廣韻引爾雅云、楓有脂而香、不云注、郭注爾雅楓欇々云、楓樹似白楊、葉圓而岐、有脂而香、今之楓香是與此少異、所引或舊注、依郭注楓下恐脫香字、王念孫曰、欇々動貌也、欇之言攝也、韓子外儲說右篇曰、搖木者、一一攝其葉、則勞而不徧、左右拊其本、而葉徧搖矣、攝與搖皆動也、楓之言風也、廣雅曰、風動也、史記司馬相如傳索隱引舍人注曰、楓爲樹、厚葉弱莖、大風則鳴、故曰楓、是楓與欇々皆以動名之也、

〔爾雅註疏九釋木〕楓攝欇〈註楓樹似白楊、葉圓而岐、有脂而香、今之楓香是、攝音聶〉〈疏說文云、楓木厚葉弱枝善搖、一名欇欇、郭〉

中のものとは少し異れり、葉に長みなく鋸齒深く、葉莖短くして枝梢に紅色を帶、鷄冠木に彷彿たり、尤地錦抄に載るところの圖は、葉莖短く葉にはゞあり、若木の時はまかるものならん、實生などの小木は、僅に五分に滿ざる葉も生じ、又若木のいきほひよき枝には、三寸にあまる葉あり、大葉と小葉のものは、同木とは見えざるものなり、小樹は殊によくそむ、地錦抄にいふごとく、色色に染なして美觀なるものなり、佐藤成裕曰、唐かへでは、本邦にも自生のものあり、丹波邊の山中には大木ありといへり、又大和本草に小カヘデといふものあり、其葉形唐かへでに似たり、是和產の者をいふなるべし、又西遊記續篇に、霧島山の奥に入し時、種々の奇樹異草數々見し中に、唐楓に甚よく似たるものを見し事をいへり、花彙にはこの唐かへでを以、異の楓樹とせしは非なり、唐かへでは、物理小識云、箕峯有㆑楓、開㆓雨岐紅花㆒、其葉莖亦紅といへるもの、即唐カヘデなるべシ、楓といへば、其葉三尖なる事は知べし、實の毬をなさゞるをもつてかくいひしならん、實を花といひしは誤なり、

〔西遊記續編五〕楓樹

唐土の楓の事は、過し年唐土へ仰遣されて三本渡れりとぞ、其中一本は枯て、今日本に唯貳本のみ有りとなり、余〇橘南谿も其樹の葉とて見し事のありけるが、大さ拳の如く、三ッ叉にて殊に厚し、實は楓球とて栗のいがに似たり、秋ふかくなれば其葉黃色に變せり、日本の紅葉とは大に異なり、日本のごとく艶美なるものにはあらず、又頃日我友關谷氏、長崎の御藥園の楓樹の種なりとて、二本需得携へ登りて、余が家園に植しに、葉の形は三ッまたにて、初のものに似たれど、其木の小き故にや、葉薄くして小さく、唯三つ股といふばかりなり、此國の紅葉に甚だ相似たり、其實をとへば、此國のごとく蜻蜓の小なるがごとしといふ、されば球にはあらず、たゞ此國の紅葉と同類異種といふべし、されど關谷氏が携へ登りしも、唐土より將來の木に逢ふ事は非ず、是を以て

ヲ以テ名ク、是救荒本草ノ槭樹ノ類ナルベシ、又花戸ニ漢種ノ楓ト稱スル者アリ、小葉三尖ニシテ兩對ス、嫩葉老葉皆紅、是唐カイデニシテ、眞ノ楓樹ニ非ズ、

〔鹽尻十一〕楓樹圖　楓木は郭璞云、白楊に似て葉圓にして岐あり、時有て香しと云へり、又字書には樹木高大にして葉三角なりと云、我國古書にハカツラと和訓す、中世以來カヘデの紅葉に此字を用ゆるは似たるを以てにや、予東都にて楓木を見し、紅葉可愛、かしはの如く岐とがらず見ゆれども、大かた一物と覺えはべる、

實按、楓木の說共に非なり、此時代には總じて產物にうとし、よつて楓木を見たる事なし、いふ所は黃櫨なり、和訓はぢもみぢといふは、せうし也、こゑちかし、誤りてはせといふ、もみぢは見事なれ共楓木にてはなし、今楓樹は喬木にて、東都染井村植木屋伊兵衞方に、享保の大君より拜領の楓樹あり、鷄冠木は黃櫨と別木なり、染井村にある事を知らしむるものなり、又按紅葉は色つく葉の總名なり、

〔古今要覽稿草木〕唐楓

唐楓地錦抄　又からもみぢ花彙と稱するもの、今染井の花戸伊兵衞が園中に存せり、甚大樹にしてその高さ七八丈に及べり、享保十二丁未九月二十二日拜領唐楓といふ札を建たり、其來由を問ふに、御用にて唐土より持渡りしを、嚴命にて其比の伊兵衞深山かへでに五本接しが、殘らず成木して御庭にうつし植させ給ひて、唐土より渡りしもと木を給はりしといへり、伊兵衞家說その葉三尖にして幅せまく、長みありて對生す、實を結ぶ事鷄冠木の實に似て股せまく、鷄冠木の實より少し大にして、數多く付てたれさがれり、地錦抄に秋の紅葉本色あざやかに洗朱のごとく、又は薄紅黃色さま〳〵まじりて、染るといへども、あまりに大木となりし故か、多くは黃色に染てちれり、唐かへて今處々に多くあれども、皆この孫木なるべし、玄かれどもその形狀伊兵衞が園

唐楓

山道の名殘いとさむきにとて、北野の森にさばしやすらひて、いぬの時ばかりにやどりにかへりぬ、

遣一帖漫書連。愚毫述。幽情、誠供。一粲而巳　藤重季

〔武江產物志遊観〕紅葉　海安寺品川　東海寺品川　正灯寺淺草　日暮里青雲寺　上野山中　根津權現山　瀧の川辨天　夕日山紅葉目黒明王院　眞間の紅葉眞間弘法寺　高尾の紅葉山谷　土手の四方寺　高田穴八幡　隅田川秋葉

〔江戸名所圖會十四〕補陀山海晏寺、○中略楓樹江戸丹楓の名勝にして、一奇觀たり、晚秋の頃は、滿庭錦繡を晒すが如く、海越の山々は、紅の葉分に見えはたり、蒼海夕日に映じては、又紅を灑が如く、書院僧房も其色にかゞやき、此地遊賞の人醉色ならざるはなし、江戸砂子に、蛇腹紅葉、千貫紅葉、花紅葉、淺黄紅葉、弥棒紅葉、猩々紅葉など云ありと云々、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕楓香脂　楓樹ノヤニ　一名楓乳藥性要略大全　楓脂　雲香共同上　芸香

本草原始　楓香附方　樹一名紅樹名花譜　色木訓蒙字會　茶條樹同上　祢落山東通志

楓樹和產ナシ、和名抄ニヲガツラト訓ジ、又ムマカイデト訓ズ、皆非ナリ、享保年中ニ漢種渡リ、東都及日光山ニアリ、樹直上シテ大木トナル、葉大ナル者ハ四五寸、三尖ニシテ鋸齒アリテ、地錦葉ノ如シ、秋ニ至レバ黃色ニシテ落ツ、唐山ニハ、紅葉ノ者アリテ、丹楓ヲ詠ズル詩多シ、本邦ノカイデノ如ク、品類多シト見ユ、コノ木ヨリ出ル脂ヲ楓香脂ト云、形松脂ノ如ニシテ、色白ク光澤アリ、故ニ松脂ノ色白キ者ヲ以テ僞ルト、本草彙言ニ云リ、舶來ナシ、一名白膠香ト云、唯白膠トノミ云時ハ鹿角膠ナリ、夏小花ヲ開キ後實ヲ結ブ、楓林ト云、又針線包大倉州志ト云、大サ龍眼ノ如ク、圓ニシテ軟刺アリ、蓖麻(トウゴマ)毬(イガ)ニ似タリ、食用ニ堪ヘズ、惟焚作香ト秘傳花鏡ニ云リ、痘瘡ノ時焚テ外ノ惡臭ヲ避クルコト、保赤全書ニ出ヅ、本邦ノモミヂハ、本名カイデ、或ハカヘデ共云、葉形蛙手ニ似タル

も思ひし事なれど、ことしげきにまぎれて、うち過侍れば、まだ分もみぬ山水の音にのみきゝてやみなんもくちをしく、ことしばかりはと思ひ立て入もて行まゝに、山深き所なれど、世に名高ければ、聞つきてつどひけるにや、おもひしよりは人めしげく、おのがどちこゝかしこ、この木下岩がくれをしめて春の風ならねど、樽の前に酔をすゝめ、打ゑみつゝ、心とけてめでくらすもおほかりけり、とある寺の門前にはし打渡し、岩にくだくる波の木のまゆく山川のあたり、みな楓のみなれば、見渡すかぎりそめつくして、陰けむ袖も下行水も、色はづるばかりなれば、

名もしるき、千入の梢ことしまでこざりし色をしむ比哉、かの寺を地蔵院といふ、此方丈の庭よりこそ猶奥深き谷の紅葉も見え侍れなど、しれる人のいひければ、さらばそれこそはとたづねよりてみ侍るに、山かさなれる谷の底に、岩波しろきながれをとめて、生つゞきたる紅葉を見おろしたるは、錦にもやはと思ひ侍り、しるべにつきてくる人もあれど、寺院の庭なればこゝにやすらふ袖もなくて、人まおほくすこししづかなる木の本なれば、さゝへなど取ちらして、歸る方もしらずめであへり、

そめてかくおのづからにも山水の名にながれたる谷の埋木〇一首略栂。の。尾。の。も。み。ぢ。も、世にこそしられね、よの所にはまさり侍り、ほど近ければ此ついでにもやと、人々いひけるにそゝのかされて、ひつじはるかに過ぬれば、出行に分こし程に見たりし橋のもとの紅葉の、日影に映せる夕ばへのけしき、さらぬだにある木ずゑに又一しほの色をそへて、見すてがたき木のもとになん、つたなきことなればかきおかんも面ぶせなれど、かたくまどの外に出すべきにもあらず、かくやうのこともありと、としへて後おもひ出んためばかりなれば、おちちらん時のあざけりはおもひながらに、入興のあまりにかきつけ侍る、

さればこそ山の名てらす紅葉哉〇中略

倭楓亦楓之一種、而有雌雄之別歟、然則楷乃蜀土之郷名耳、

〔年々隨筆一〕もみぢはかへで、猶みどりなるに、たゞ一しほ、今ぞ染つらんとおぼしくて、つや〳〵と匂へる二藍の色めでたく、いとこくひいろに染なしたるもをかし、今の世には、もみぢといふ名をおのがものにぞえたる、すぐせいと尊しかし、

〔年々隨筆二〕もみぢはかへで。。。といふ、返す〳〵めでたし、

〔剪花翁傳前編一二月開花〕嫩機樹　數種、卽若芽紅葉、二月中旬、方日向、地二分濕、土回塵、肥大便寒中に入べし、移秋彼岸後より十一月頃までよし、毛氈、縮緬、定家、山、靑海、綠靑海、いづれも芽出し至て赤く、葉滿開て後靑く、秋淡く照也、毛氈殊にあかし、靑海は葉七瓣にて、色亦深くして長くうすろがず、野村、色紫にて秋も同じ色なり、紙に摺寫せば紫いとうつくし、一行寺、芽出しの時は少し赤し、開き滿てば靑し、秋は拔群照也、都て芽出しの枝は水上がたし、是は枝木を水に入んとおもふ程の長を鋸目を入て、汲立の水にて逆水して、水器に生置ば勢ひよく水を上る也、もし日を經るものは、切口をよく燒きて、此切口を切捨、木通の末を水に和し、其中に漬置て後插べし、

〔大和名所圖會三平群郡〕龍田川　廣瀨郡より流れ、勢野を經て、立野の西龜瀨に至り、阿州に入、立野にて漕運の津とす、舟は上み初瀨川を加幡村に通ひ、又寺川を今里に通ふ、高瀨舟といふ、或書曰、龍田の町を西へ出れば川あり、是龍田川也、此川を平群谷といふ、生駒嶽の麓より出る川なり、立野の西に紅。葉。川。とて小溝あり、是を龍田川といふはあやまり也、

〔古今和歌集五秋〕題志らず　よみ人しらず

龍田川紅葉みだれてながるめりわたらば錦中やたえなん

〔今古殘葉二十六〕高雄山に紅葉を見る記　高松重季卿

享保乙卯のとし神無月はじめつかた、高雄山の紅葉この比さかりときゝてまかりにし、とし比

按、本草綱目楓葉有岐三角、至霜後葉丹可愛、則雞冠木亦楓之屬乎、然楓花白色實大如鴨卵、則與雞冠木花實逈異也、猶朝鮮松子大而異常、

雞冠木有數種、高者二三丈、葉有尖岐、如蝦蟇手、大抵七八岐、或九岐、又有十三葉者、謂之十二重、三四月嫩葉紅色映滿山、五六月復青葉、深秋其葉黃落、經歲者則五月開小黃花、狀如飛蛾、梢頭結實、中子如牛蒡子、和州龍田、雍州高雄山最多、至秋葉丹赫耀、天下賞美之、凡草木秋乃紅葉者多有之、而蝦手樹葉爲勝、故只稱紅葉、卽蝦手葉也、猶只稱花則櫻花也、花與紅葉左右之、以悅人目者也、然於中華此二物似闕也、

〔大和本草圖十一木〕機樹(カヘデ)　本邦楓ノ字ヲアヤマリテカヘデトヨム、順和名ニハ鷄冠木ヲカヘデトヨメリ、カヘルデトモ云、其葉カヘルノ手ニ似タリ、秋冬霜ヲ經テ紅葉ウルハシ、高尾貴船笠取ナドノ諸山ニ多シ、立田紅葉ハ、カヘデノ一樹ノ紅葉ニ非ズ、諸木ノ紅葉ナリシト云、立田ニ今ハ紅葉スクナシ、凡カヘデハ今其品類二十餘種アリ、就中ヤシホ野村猩々朝日ナドウルハシ、九葉カヘデアリ、葉秋ハ紅黃ナリ、三四月ニ小白花ヲ開ク、常ノカヘデト葉カハレリ、ツチノ小カヘデハ其岐五六アリ、是ハ九ニ岐(ワカ)ル、小カヘデノ葉ヨリ大ナリ、京都淸閑寺高倉院ノ御陵ノ上ニ生ズル是ナリ、又大カヘデアリ、葉形小カヘデニ似タリ、葉大ナリ、葉ノ橫五寸バカリアリ、大カヘデモ九葉、カイデモ小カイデモ、矢ノ根ノ鴈股ノ如クナル實アリテ、其本ニ子アリ、

〔本草一家言三〕榿　一名機　明楊升庵云、機木名、卽榿也、蜀都尤多、和名訶惠底、又名紅葉、紅葉凡諸木秋紅之通稱也、先輩云、和人以楓字訓嘉惠天非也、楓結子似杉實成毬、皮間生莢極芳香、其色白色、故名白膠香、我邦稱楓者花實成片々、中有子片、如蜻蜓翅、其子如胡麻、不芳香、無液粘、不應于白膠之名、杜子美榿林障日吟風葉、杜詩集注、蜀西都榿樹極多、土人折爲薪者、與楓樹形狀相合云、近年獻漢土楓樹數株、或親目擊之、其樹形葉與和楓不甚異、其葉三尖或五尖、但極厚耳、未識有膠否、以此觀之、

雞冠木

州　クロクサギ播州　ゴマノキ肥州　一名惡木名物法言　臭椿群芳譜　鬼目證類本草　武目事物異名

婆娑羅樹天中記　樝通雅

處々山中ニ多シ、形狀構及ビ接骨木ノ如ク、枝條四布ス、椿ノ如クニ聳直ナラズ、葉ハ接骨木葉ニ似テ枝アリ、葉ノ莖赤シ、葉ニ臭氣アリ、夏月枝梢ニ細花簇リ開ク、廣木花ニ似テ黄白色、後實ヲ結ブ、南天燭子ヨリ大ニシテ、扁ク微尖アリ、秋ニ至テ色赤ク美シ、自ラ二ツニ開テ、小圓子二三顆殼ニ附ク、椒目ノ大ニシテ黑ク光リアリ、霜後葉枯ル、　椿樗二木共ニ雌雄アリテ花實アル者ナリ、然ルニ禹錫ノ說ニ、未見椿上有莢者、然世俗不辨椿樗之異、故呼樗莢爲椿莢爾ト云ハ、唐山ニモ椿ノ實ヲ結ブ者稀ナル故誤ルナルベシ、既ニ連翹ノ條ニ、似椿實未開者ト云時ハ、椿ニ實アルコト知ルベシ、　藥用ノ椿根皮舶來ノ者ハ、皮厚シテ淡褐色内ニ布紋アリ、藥舖ニ眞ノ椿根皮ト呼ブ者ハ、皮薄シテ褐色布紋ナシ、是山茶根皮ナリ、用ユルニ堪ベズ、舊ト椿ニタマツバキノ古訓アル故ニ、山茶花ヲ椿ト書キ來ルニ因テ誤ル、キヤンチンノ根皮ヲ眞物トスベシ、

〔倭名類聚抄〕二十木　雞冠木　楊氏漢語抄云、雞冠木、賀○倍○天○乃○木○、辨色立成云、雞頭樹、加比留提乃木、今案是一木名也、

〔箋注倭名類聚抄〕十木　伊勢廣本雞皆作鷄、同、下總本加倍天上有和名二字、恐非是、廣本亦無、有加倍天之紅葉見後撰集哀傷部戒仙法師歌小序、

〔新撰六帖〕六　かえで　家良

日にそへて末葉さしそふわかゝえでまぐるゝ秋もまたれざりけり

爲家

秋の色に名のみかえでと降ぬれどあへずぞ染る露も時雨も

〔和漢三才圖會〕八十二香木　雞冠木　万葉雞頭樹　蝦蟇手木　和名賀倍天乃木　一云加比留提乃木、俗通稱毛美知、

サハダチ

樗

す、小枝多く葉繁りて生ず、その葉まゆみに似て細小也、霜後紅葉甚鮮紅にして愛すべきものなり、故に紅葉木と呼、諸木のうち此もみぢ甚遲く染るものなり、十月末より少しづゝ色づき、十一月末紅葉鮮麗いふばかりなし、落葉は極月にいたる、其ながめ甚長し、春は早春より葉を生ず、全く葉なきは僅にふた月すぎざるものなり、

〔古今要覽稿草木〕さはだち

さはだち植樹家にて紫檀の木といふ、是またまゆみの一種にして、その葉長大深緑色にして、常盤木のごとし、霜後鮮麗に紅葉することにしきぎまゆみにまされり、花實はまゆみつりはなのごとし、

〔大和本草十一雜木〕樗(カラスザンセウ) 此木世ニ知人マレナリ、葉ハヌルデニ似テ長大ナリ臭シ、其樹節多ク、ユガミマガリテ材トナラズ、故ニ古書ニ惡木也ト云、小キ時多刺、長大ナレバ無刺、此木日本ニ元來有之、京都ニアリ、又北州ニモアリト云、近年カラヨリ來レル香椿ニヨク似タリ、同類ナリ、花アリ實アリ、鳥コノンデ其實ヲハム、日本人樗ト椿トヲシラズシテ、先年朝鮮人來リシ時、二木イヅレノ木ゾト問シニ、朝鮮人モシラズシテ、アヤマリ僞テ佗ノ木ヲ樗ナリト答ヘシト云、樗ヲアフチト訓ズルハ誤ナリ、アフチハ楝(センダン)ナリ、

〔採藥使記中豆州〕重康曰、豆州三浦三崎ノ山中ヨリ樗木ヲ出ス、土人コレヲカラス山椒ト云フ、光生按ズルニ、樗ヲ和邦ニテヲヽチト訓ズ、アヤマリナリ、樗ハ椿ノ一類ニテ、椿ヨリ枝曲折シテ生ズ、葉ニ惡シキ香アリ、畿内ニテキツネノチャン袋ト云フ、

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕椿樗〇中略

樗　ゴンズイ　キツネノチャブクロ　スヾメノチャブクロ　ムメボシノキ　ツミノソノキ泉州　ハゼナ土州　クロハゼ同上　ダンギナ紀州　ハナヽ　ダンキリ共ニ同上　タンギ勢

〔大和本草 十二 雜木〕マユミ　葉ハ橘ニ似テ厚ク、四時不凋、高キ事六尺ニ不過、枝多シ、挾ミテ籬トスベシ、能繁茂ス、實熟スレバ開ク內ニ紅子アリ、マサキト云、マサキノカヅラハ此蔓生也、葉モ實モ同ジ、檀紙ハ昔奧州ヨリ出ヅ、故ニミチノクニ紙ト云、今ノ俗引合ト云、倭紙ノ上品ナリ、故或曰マユミノ木ノ皮ニテ製ス、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 香木〕檀　詳ナラズ
古ヨリ檀ヲマユミト訓ズル　非ナリ、マユミハ衞矛ナリ、藏器ノ說、葉如檀高五六尺云云、此レハコバンノキナリ、一名ハギノキ、キハギ、深山幽谷ニ生ズ、小木ナリ、高サ丈ニ盈タズ、葉ハ水蠟樹ノ葉ニ似テ短ク互生ス、春新葉ノ間ニ小紫花ヲ開ク、五瓣ニシテ槭樹花ノ如シ、後小圓實ヲ結ブ、熟スレバ赤シ、是一種ノ檀ナリ、

〔古事記 中 應神〕爾掛出其骨〇大山守命之時、弟王〇宇遲能和紀郞子歌曰、知波夜比登、宇遲能和多理邇、和多理是邇、多氏流、阿豆佐由美、麻由美、伊岐良牟登、許許呂波母閉杼、伊斗良牟登、許許呂波母閉杼、母登幣波、岐美袁淤母比傳、須惠幣波、伊毛袁淤母比傳、伊良那祁久、曾許爾淤母比傳、加那志祁久、許許爾淤母比傳、伊岐良受曾久流、阿豆佐由美、麻由美、故其大山守命之骨者葬于那良山也、

〔古事記傳 三十三〕麻由美は　三言一句　檀木なり、和名抄に、唐韻云、檀木名也、和名萬由三とあり、弓に作るに良き材なるを以て、眞弓の木とは云なり、色白き故に白檀とも云り、さて此は此樹の河邊に生立るを見賜へるまゝに、卽其を以て大山守ノ命を譬へて、よみ賜へるなり、

〔萬葉集 七 譬喩歌〕寄弓
南淵之、細川山、立檀、弓束級、人二不所知、

〔古今要覽稿 草木〕紅葉木　ひめまゆみ
紅葉木、又ひめまゆみともいへり、卽まゆみの一種にして灌木なり、大なるものは五六尺にすぎ

紅葉木

檀

〔地錦抄五〕錦木(ニシキ)木 木は四角など有、赤き實梅もどきのごとし、葉もいみじく紅葉する、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕衞矛 クソマユミ(和名鈔) カハクマツヾラ(同上) ニシキヾ マユミ ヤハズニシキヾ ヤバニシキヾ(雲州) 一名件帯檜(採取月令)

山中ニ生ズ、人家ニモ栽ユ、高サ丈許、枝葉對生ス、葉ハ楕ニシテ尖リ、長サ一寸許、濶サ五六分、細鋸齒アリ、春新葉間ニ小枝叉ヲ分チ花ヲ開ク四瓣、大サ三分許、淡綠色、後實ヲ結ブ、形扁クシテ尖リ、長サ二分餘、秋ニ至リ熟シテ、微紅自ラ裂テ紅肉ヲ現ス、肉中一白子アリ、冬ノ初、葉紅或ハ紫ニ染テ落ツ、其色美ハシ、因テニシキヾト呼ブ、枝幹ニ褐羽アリテ相對ス、濶サ二三分、羽ヲ採テ藥用トス、鬼箭羽ト云、コノ羽アル者眞ノ衞矛ナリ、故ニヤハズニシキヾト呼ビ、以テ他ノ羽ナキ者ニ分ツ、コノ外數種アリ、呉普ノ說ニ葉如桃ト云ハ、桃葉衞矛ナリ、俗名ヤマニシキヾ(雲州) マサキ(江戸) ヲトコニシキヾ(越中) マミナ(土州) マスギ(勢州) 此木路傍ニ多シ、葉形長大ニシテ桃葉ノ如ク、細鋸齒アリ、深綠對生ス、春葉間ニ花ヲ開ク、形眞ノ衞矛ニ同ジ、只枝叉微長ニシテ下垂ス、實圓ニシテ大サ三四分、秋ニ至リ熟シテ皮色微紅、自ラ四ツニ裂ケ、分レテ紅肉ヲ現ス、美觀ナリ、俗名タマテバコ、サルノヂウバコ(濃州) ミコノスヾ(丹州) イチゴマス(播州) 此木枝間ニ羽ナク、只白條アリ、蘇頌ノ說ニ、葉似山茶ト云ハ、山茶葉衞矛ナリ、俗名マルバノニシキヾ、葉ノ形圓大ニシテ長サ三四寸、山茶(ツバキ)葉ニ似テ薄シ、實ハ桃葉衞矛ニ同シテ大ナリ枝幹ニ羽ナシ、一種コマユミハ、葉花實眞ノ衞矛ニ同シテ、幹ニ羽ナシ、一名マイビ(藤州) マイメ(同上) 一種紫花ノマユミハ、葉桃葉衞矛ヨリ短小、コマユミヨリ大ナリ、枝條下垂ス、羽ナシ、春葉間ニ淡紫花ヲ開ク、コノ外品類多シ、

〔倭名類聚抄二十木〕檀 唐韻云、檀(音彈、和名萬由三、) 木名也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕說文、檀檀木也、鄭風毛傳、疆刃之木、刃今靭字、

〔伊呂波字類抄末植物附植物具〕檀(マユミ)

其矢不ㇾ使ㇾ不ㇾ調、故名ㇾ羽爲ㇾ衞、考工記、矢人設ㇾ羽、夾而搖ㇾ之、以眡ㇾ其豐殺之節ㇾ也、鄭注云、今人以ㇾ指夾ㇾ矢儛衞是也、王念孫曰、羽衞聲之轉、衞之言聽也、廣雅、獵羽也、羽謂ㇾ之聽ㇾ箭羽謂ㇾ之衞ㇾ聲義同矣、

〔伊呂波字類抄 久 殖物附殖物具〕衞矛(クソマユミ カハクマツヽラ)

〔塵嚢抄 六〕錦木(ニシキ)トハ何ゾ　昔ヨリ様々ニ云タル事ナレバ、一定難ㇾ知ケレ共、常ニ宜シトスル説二ツ侍リ、一ハ陸奥夷(ミチノクノエビス)共ハ女ヲ迎ヘントテ、文ヲ遣事ハ无テ、一尺許ナル木ヲ採テ、其ノ女ノ家門ニ立ルニ、合ントト思フ男ノ立ル木ヲ聽テ取入也、不ㇾ合思者ノ立ル木ヲバ不ㇾ取入、強テ立副程ニ、千束ヲ限トシテ眞志アリトテ、其時取入テ契ト云リ、或ハ千束ニ成テモ不ㇾ取入バ思絶ヌ共云リ、千束ニ成レバ必ズ可ㇾ合様ニ聞ル歌侍レバ千束ガ限歟、

錦木ハ千束ニ成ヌ今コソハ人ニシラレヌ子ヤノ中見メ

錦木ノ數ハ千束ニ成ヌランイツカミタチノ内ハ見ルベキ

是ハ和語抄ニ侍リ、前ノ歌ト同ジ體也、又匡房卿歌ニ、

思カ子今日立初ル錦木ノ千束モマタキアフ由モガナ

又千束ニ過テモ猶立ル由アル歌、藤原永實、

イタヅラニ千束朽ヌル錦木ヲナヲコリズマニ思立哉

亦一ハ錦木トハ灰ノ木也、其木ヲ灰ニ燒テ灰ニサセバ、萬ノ物色能成也、仍テ灰ノ木ヲ錦木ト云ト云云、物ノ色ニ合シテ祝テ、此木ヲ一尺許ニ切テ、思女ノ門ニ立ル也、故ニ錦木ヲ立ルト云也、其趣如ㇾ前、亦一枚立木ヲ、爭カツカトハ云ントト云義侍共、束鮒ト云ハ一拳アルヲ云ト申セバ、數ノ木ヲ結合セズ共、一拳アラン枚木ヲモ、一束ト可ㇾ云ト見タリ、俊頼ノ無名抄ニモ始ノ説ノ如書テ、猶鉾(ホコ)ノ竿様ニ、斑ニ採テ立レバ錦木ト云ト侍テ、奥ニ至テ實ニハサモセヌトカヤ、錦木ト云ニ付テ申セルニヤト書シテ侍リ、奥義抄ニ灰ノ木ニテ錦糸ヲ染レバ云爾ト侍リ、

濱木蓮

衞矛

其葉長廣、其色光潤、諸國書寫莫不采用ト、又コノ葉ヲ堅ニ細ク切リ、席ニ織タルヲアンペラト云、東西洋考ニ貝多葉簟ト云是レナリ、又和名ニ多羅葉ト呼デ、寺院ニ栽ユル大木アリ、葉ハ桃葉珊瑚(アラキ)葉ノ如ク、鋸齒細クシテ厚ク堅シ、木刺ヲ以テコノ葉ニ字ヲ書スレバ、色黑クナル、又火ニテ炒レバ黑斑ヲナス、故ニテンツキノキト云、一名カタツケバ(豐州)是モ唐山ニテ貝多葉ト云コト通雅ニ出ヅ、本名ハ娑羅樹ニシテ、七葉樹ト同名ナリ、

〔三寶院文書〕猶此使僧可申上候、已上、

其後者久々御見舞不申上候、仍卒爾成申上事共ニ候へ共、御門跡樣へ、たらよふの木、どなたからやらん進上申候之由承候、左樣ニ御座候はゞ、我等申請度候、不苦候者被仰上候て可被下候、可然樣ニ奉憑候、〇中略

後二月十二日(慶長十五年) 養源院 成□花押

三寶院樣御内大藏卿殿御床下

〔大和本草十二雜木〕濱木蓮 其葉ユヅリハニ似テ莖赤カラズ、葉ノ大サモユヅリハノ如シ、葉アツクシテ冬モシボマズ、葉ノサキトガル、細花ヲヒラク、木ノ高一丈許アリ、又多羅葉ニ似テ葉短シ、實モタラヨフニ似テ冬紅ナリ、俗ノ一名大モチ木ト云、

〔本草和名十三木〕衞矛(楊玄操音作、甄立言作余音、)一名鬼箭(陶景注云、莖有三羽狀、如箭羽、俗呼爲鬼箭、)一名衞與、一名神箭、(出釋藥性)一名三羽、一名鬼針、(已上出兼名苑)和名加波久末都々良、一名久曾末由美乃加波、

〔倭名類聚抄二十木〕衞矛 本草云、衞矛(和名久曾末由美、一云加波久末豆々良、)

〔箋注倭名類聚抄十木〕御覽引吳普本草云、鬼箭、葉如桃如羽、陶云、其莖有三羽、狀如箭羽、俗皆呼爲鬼箭、箭羽名衞、故鬼箭又名衞矛、釋名云、矢旁曰羽、如鳥羽也、齊人曰衞、所以導衞矢也、士喪禮記、猴矢一乘、骨鏃短衞、鄭注云、凡爲矢五分、笴長而羽其一、疏云、謂之衞者、以其無羽則不平正、羽所以防衞

樹ナルベシ、此木ノ皮ヲハギテ、トリモチニスルナリ、十大功勞ニ同ジ、此木古來吾邦ニアリシニヤ、處々山林ニアリ、多羅木ト云モノハ別ナリ、又一種西土ニテ、大。モ。チ。ノ。木。ト云モノ、タラ葉ニ似タリ、是タラ葉ノ別種也、冬モ葉不脫、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕楨多羅　貝多

字彙云、楨多出交趾及西域、葉可書也、

翻譯名義集云、多羅舊名貝多、此翻岸、形如此方椶櫚、直而且高、極高長八九十尺、華如黃木子、或云、高七仞、七尺曰仞 是則樹高四十九尺、

西域記云、南印度建那補羅國北不遠有多羅樹林三十餘里、其葉長廣、其色光潤、諸國書寫莫不采用、

多羅葉

按、多羅葉木青白色、高者二三丈、葉似海石榴而長大、四五月開小白花、六月結子、大如小豆而青色、冬熟則赤黑色作簇、戲採其葉、以小火燼暫按於葉上、則其痕爲環、其文倍於火之大、是亦楨多羅之類乎、今多人家庭園栽之、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二 夷果〕椰子○中略

樹頭酒　貝多羅樹ノ實ヨリ出ル酒ナリ、貝多羅ハ此ノ註ニ貝樹ト云者ナリ、蠻國ノ產ニシテ和產ナシ、紅毛人ゟ　葉ヲ持來ルコトアリ、全キ者ハ長サ四五尺、濶サ五六寸ニシテ勁ク厚シ、二ツニ折レテ萬年青ノ葉ノ形ノ如シ、淡褐色ニシテ光アリ、葉背中心ニ一ツノ縱道アリテ高ク出、ソノ形方ニシテ圓ナラズ、此葉ヲ濶サ二寸許、長サ一尺七寸ニ切リタルモノ稀ニ持渡ル、全葉ハ甚稀ナリ、コノ葉ニ蠻字ヲ淺クホリタル者アリ、卽緬人取其葉寫書ト云フ者ナリ、又渤泥國ノ人書ヲ寫シ、或ハ器物トスルコト、明ノ宋學士全集ニ出、皆紙ナキ故代用ユルナリ、昔天竺ニテ佛經ヲコノ葉ニ寫スト云、翻譯名義集ニ、西域記ヲ引テ曰、南印建那補羅國北不遠有多羅樹林三十餘里、

本綱柞山中有之、高者丈餘、葉小而有細齒、光滑而韌、其木及葉丫皆有針刺、經冬不凋、五月開碎白花、不結子、其木心理皆白色、堅忍可爲鑿柄、故名之、又今作梳者是也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五灌木〕柞木　イヌツゲ　ヤドメ加州越州　ヨメガサラ　ケヅラ江州　カシラケヅリ　カシラケヅラ共同上　ガニノス播州　コメゴメ紀州、同名多シ、　ハマツゲ筑前　ピンカヾリ同上　ピンカヾ佐州　ピンカヽズ信州　ピンカラズ三才圖會　メハリギ土州　カシラツカミ同上　子ジノキ　一名直脚黃楊江陰縣志　柘木本草新編　鑿木子本草述

山中ニ自生多シ、小葉細長厚シテ細鋸齒アリ、深綠色互生ス、此木枝條繁茂シテ冬枯レズ、故ニ人家庭院ニ多ク栽ユ、旅家殊ニ多植ユ、夏月葉間ニ小白花ヲ開キ、圓子ヲ結ブ、熟シテ色黑シ、又實ヲ結バザル者アリ江戸ニテオホツゲト云、又一種枝ニ刺アルモノアリ、凡ソ作木ハ山中ニ小木多シ、大ナル者ハ稀ナリ、材堅シテ色白シ、大ナルモノハ板木ニ用ユ、ツゲバント云、櫛ニ造ル、ツゲノ櫛ト云、或ハ印材トス、一種小葉ノ者アリ、コツゲト云、葉長一二分、江戸ニテヤドメト呼ブ、庭ニ栽ルニハコレヲ上品トス、一種尾張ツゲアリ、一名カラツゲ、大和本草アサマツゲ、勢州コノ木勢州朝熊山ニ自生多シ、人家ニモ多ク栽ユ、木ノ高サ五七尺、播州深山ニハ丈餘ナル者アリ、枝條繁茂スルコト作木ニ同ジ、然レドモ柔軟ニシテ對生ス、葉モ亦對生ス、鋸齒ナクシテ柔厚末尖ラズ、コレヲ錦熟黃楊ト云、江陰縣志ニ出ヅ、

〔大和本草 十一圖木〕多羅葉　葉大ニ長クシテアツシ、實ハ赤クシテ多ク所々アツマレリ、又雄木アリ、無實、四時葉アリ、天竺ノ貝多羅葉ニ佛經ヲカク由、西域ノ書ニ見エタリ、此葉ナルベシ、昔或古寺ノ重物ニ、貝多羅葉ナリトテ在シヲ見タリシガ、此葉ノ形ニシテ猶大ナル物ナリキ、西域記ニ貝多羅樹、果熟シテ卽赤シ、如大石榴、人多食之トイヘリ、然レバ此地ニアルト不同、此木ノ葉ノウラニ竹木ノ刺ヲ以テ文字ヲカクニ、其アト黑クシテ、恰墨ニテ書クガ如シ、然レバ又此木眞ニ多羅

梅嫌

艸類纂必讀曰、鵜竿捕鳥者、

〔地錦抄五〕梅嫌（むめもどき）木　小つぶなる赤き實、木もたわむほどつきて見事成物也、立花に、京梅嫌と云てつかふ、是に三種あり、實の大つぶは大梅嫌といふ、又實うす白き有、白梅嫌といふ、

〔和漢三才圖會灌木八十四〕梅嫌木　正字未詳、俗云牟女毛止岐、

按、梅嫌木、葉圓尖有微小鋸齒、似野梅葉而小、冬凋春芽生、五月開小白花、略似南天花、結子、初青色、十月葉落子紅熟、添枝幹多美、鵯鳥喜食之、

柞木

〔倭名類聚抄木二十〕柞　四聲字苑云、柞（音酢、一音昨、和名由之、○漢語抄云、波々曾、）木名、堪作梳也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕按由之今俗所用造梳、而柞木亦可以作梳、故以柞木充由之、然柞木生南方、葉細、出嘉祐本草、引見證類本草、又毛詩作棫、箋、柞櫟也、即黄楊木之一名、宜訓都計、非由之、按爾雅、栩杼、郭注云、柞樹、毛詩、肅々鴇羽、集于苞栩、正義引陸璣疏云、今作櫟也、水經注元和郡縣志、並引周處風土記云、吳越之間、名柞爲櫟、皆以柞爲栩杼之別名、今俗呼久奴歧者、是也、蓋與作梳之柞同名異物、江村氏如圭曰、栩和名保々曾保々曾、即波々曾之一轉、則知漢語抄作訓波々曾者柞櫟之柞、非作梳之柞、源君以其名同混爲一、誤也、鄭樵注爾雅栩杼云、作木今人以爲梳、亦混二木爲一、其誤與源君同也、說文、柞木也、恐非作梳之柞、由之今俗謂由須、關東謂之伊須、字鏡、櫓訓波々曾、今俗謂保字曾、○中略　按柞有二、一則堪爲梳者、源君訓由之是也、一則毛詩作棫、鄭箋、柞櫟也、

〔伊呂波字類抄由植物附植物具〕柞（ユシ、ハソ）

〔倭訓栞前編由三十五〕ゆし　倭名抄に柞をよめり、延喜式に、御梳皆用由志木と見ゆ、字書には、柞堪作梳といへり、今俗くしのきといふ也、或は鐸木也といへり、土佐に今もゆしといふ、即ひよんの木也、

〔和漢三才圖會灌木八十四〕柞（くしのき）（音酢）　鑿子木　和名由之（橡櫟亦名柞、同名異種也）

櫻實ノ形ノ如シ、一種メブクラアリ、一名クロキ、城州鞍馬アブラキ、紀州モクサンゴ、土州葉ハ小ニシテ赤シ、紀州ニハ大木アリ、皮ヲ剝テ火把トス、故ニアブラキト呼ブ、一種モチノキアリ、庭際ニ多ク栽ユ、大木ナリ、大和本草ニナヽミノキト云フ、葉ハ狹クシテ、石瓜葉ニ似テ厚シ、冬凋マズ、汝南圃史ノ細葉冬青ナリ、一種クロガ子モチハ、葉モチノキノ葉ヨリ潤シテ微薄シ、一種大坂モチハ葉大ナリ、一種江戸モチハ、葉大坂モチヨリ大ニシテ、長サ三寸許、實モ亦大ナリ、一種トリモチノキハ、クロガ子モチノ葉ニ似テ色淺シ、木皮ヲ搗テトリモチヲ取ルナリ、モチハ枸骨ノ條ニ粘黐ト云、當ニ粘黐ニ作ルベシ、鴻苞集ニ黐膠ト云フ、又黐ト云、一種オホモチノキアリ、葉大ニシテ大葉楠ノ如シ、コノ外ニ黐膠ヲ取ル木尙多シ、

增、一種トリモチノキト呼モノアリ、葉ノ形冬青ヨリ長ク、三寸餘ニ及ブ、葉ノ半ヨリ末ニ粗キ淺鋸齒アリ、葉蔕ノ背ヨリ心脈ニ至テ紅色ヲ帶ブ、葉枝頂ニ排生スルコト車輪ノ如シ、近年此木ヨリ粘黐ヲ取ル、是他木ヨリ多シト云、

〔地錦抄五〕柊精　葉黑みありて、冬見事、實は秋赤し、

大坂もち　つねのもちより葉大きし、

鳥取もち　葉大坂もちのごとく、木の皮にねばりあり、

いさはいもち　つねのもちのごとくにて、葉に白きさらさとび入あり、

〔大和本草圖十一〕細葉冬青　是亦冬青樹云、其葉女貞ニ似テ深青、其實南天燭ノ如ク紅也、實モ葉モ木立モウルハシ、佳木也、庭ニウヘテ觀賞スベシ、園史曰、一種名細葉冬青、枝葉細軟葉短、小時種傍籬下、篤信曰、是ナヽミノ木ナリ、籬ニシテ梢ヲ切レバ、キビシクシゲリテカベノゴトシ、合壁事類ニ、樹身大合抱トイヘルハ、ナヽミナルベシ、ナヽミニ大木アリ、アハキ子ズミモチニハ大木ナシ、ナヽミニ二種アリ、一種ハ十大功勞葉ナリ、其皮ヲタヽキテトリモチトシ鳥ヲトル、若水曰、出于本

黒鐵黐(クロガネモチ)　似江戸黐而葉略扁、其子不甚輝、

〔本草一家言　二〕冬青　女貞　古人或合以爲一、或分以爲二、又或以實之赤黒分之、紛紜錯雜無歸一之論、愚按冬青其種最多、不必拘一本、其能耐冬後凋、與松柏競綠、且遐年多壽者皆名以冬青、茂知乃木(モチノキ)、黒金茂知、江戸茂知、大坂茂知、靈椿、鼠乃糞藪椿、與瀕茶同名皆冬青也、葉有大小濶狹之異、皆可以取其汁煎爲黐膏、一種似冬青、稍軟弱者卽爲女貞、又冬青樹也、凡古人物之小且軟弱者、皆冠以女字、猶女萎、女蘿、女菀之類、此物入藥最少、唯張景岳左右歸九方中有加女貞實耳、今據李時珍所說及稻若水翁所傳分之、江戸茂知、紅實者爲冬青、藪椿、鼠乃糞、黒實者爲女貞、但鼠乃糞、其實堅實枯痩、氣味薄劣、殊無滋潤、不堪藥用、其稱藪椿者、樹葉全似山茶(ツバキ)花、葉厚滑無鋸齒、花至細瑣、不堪看、結實有尖圓二種、俱至熟甚甜美、極多滋潤、又榊其枝似藪椿、白花形似知佐乃木實、黒味甘、是亦女貞也、共皆可以和補劑、此爲上好、女貞又一種、蠻舶載來者、實大如乾棗、大坂古林見宜家藏之、近世久不將來、歟、但未目擊、則不可決言其眞僞也、又汪訒庵有冬青女貞一物之說、頗與予意合、〇下略

〔重修本草綱目啓蒙　二十五灌木〕冬青(モチノキ)　一名萬年枝事物異名　萬年樹群芳譜　萬歲樹事物紺珠　萬
歲枝正字通　萬年木　杻木　櫁　土櫁共同上　櫁典籍便覽　冬生同上　冬鶴汝南圃史　長生叢苑詳註　凍
生本草精義　牛筋木爾雅鄭樵註

モチニハ種類多シ、皆赤實ヲ結ブ、冬青ハ其總名ナリ、廣器ノ說ニ其葉堪染緋ト云フハ、フクラモチナリ、フクラモチハ、一名フクラシバノキ、土州フクランジヤウ、和州フクランジヨ、フクラソウ、勢州フクラジ、播州フクラジヨ、泉州ズイゴ、同上サヽゴ、城州大ソヨゴ、尾州ソヨギ、東國ゴマイリ、紀州悲山防州

木高サ丈餘葉互生ス、女貞(ネズミモチ)ノ葉ヨリ濶シテ厚ク光アリ、横ニ巨皺アリテ平ナラズ、冬ヲ經テ凋マズ、夏月葉間ニ小白花ヲ開クコト二三蕚、其蒂長シ、後圓實ヲ結ブ、初ハ綠色、熟スレバ赤色ニシテ、

篤耨香

シテ薫陸ニ非ズ、唐山ヨリモコノ品ヲ渡ス故ナリ、凡ソ舶來乳香中沙石多ク雜ル、コノ石ヲトリ藥用トス、乳香石ト云コト百一選方ニ出ヅ、乳香ノ上品ヲ藥舖ニテチクピト云、又玉乳香トモ云、其透明ナルヲ貴ブ、故ニ明乳香(附カ)黃明乳香、白乳香(共ニ同上)ト云、

增、コヽニ說ク如ク、藥舖ニテ下品ノ琥珀ヲ、誤テ薰陸ト稱シ賣ル故ニ、薰陸ノ異物ハ乳香中ニテ、紫黑色ノ者ヲ擇ビ用ユベシ、近世醫家多クハ藥舖ノ稱呼ヲ是トス、故ニ再コヽニ贅ス、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕篤耨(とくちよくかう)香

本綱、篤耨香出眞臘國、樹之脂也、樹如松形、其香老則溢出、色白而透明者、名白篤耨、盛夏不融、香氣清遠、土人取後、夏月以火炙樹、令脂液再溢、至冬乃凝、復收之、其香夏融冬結、以瓠瓢盛置陰涼處、乃得不融、雜以樹皮者則色黑、名黑篤耨、爲下品、主治面皯䵟、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三 香木〕篤耨香　一名篤耨(通雅)　篤䅊香(同上)

詳ナラズ、蠻產ナリ、紅毛ヨリ來ルテレメンテイナニ充ル說近シ、一說ニテレメンテイナハ杉脂ナリト云、肆人モ杉脂ニ香ヲ添テ僞造ス、皆非ナリ、眞ノテレメンテイナハ苦味多シ、決シテ杉脂ニ非ズ、杉脂ハ蠻名ゴム(蘭)ミイフレス杉ト云、テレメンテイナハ凝結シテ琥珀ノ如シ、茶褐色微紅ヲ帶ブ、時珍ノ說ニ、以瓠瓢盛ト云ハ、篤耨香ヲ盛リ置シ葫蘆(ヒヤウタン)ナリ、是ヲ破リ焚テ香トナスヲ篤耨瓢ト云コト、東西洋考ニ見ヘタリ、

冬青

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕黐樹　黐(音癡)　黐膠所以黏鳥者　俗云止利毛知　其樹有數種

按黐樹在深山、葉大而不結子者爲黐佳、(結子者爲黐少、其色赤黑、)木葉似女貞(イヌツバキ)而薄光澤、雖四時不凋、只二三分落葉、四五月開細白花、結子正圓、熟紅色大如大豆、而攢生、剝其木皮浸水、爛舂之、漉於流水去皮渣、則如黐筋而甚稠粘、人用粘鳥雀、謂之黐膠、(止利毛知)紀州熊野多出之、

江戸黐　葉狹長添枝茂、如楊梅之葉樣、四時不凋、栽庭園佳、其子同于眞黐、而數多抱莖攢生、(又名朝鮮黐)

薰陸香
乳香

ヲフシノキト呼ブ、五倍子ハ蟲ノ部ニ本條アリ、夏ニ至リ枝梢ゴトニ一尺許ノ穗ヲ生ズ、枝叉多シテ細白花ヲ開ク、數百千簇リテ漆ノ花ニ似タリ、後實ヲ結ビ下垂ス、實ノ形圓扁ニシテ漆ノ實ヨリ小ナリ、外ニ白粉アリ、味鹹シ、故ニ木鹽天鹽ノ名アリ、皮ヲ去レバ扁子アリ、酸棗仁ニ似テ茶褐色甚堅シ下、種シテ生ジ易シ、是鹽麩子ナリ、

〔草木性譜人〕蚊母樹(中略)蟲窠を生ずる者一二種を左に揭く(中略)

○腐木○(本草綱目鹽麩子集解)山野に生ず、其葉形漆に似て、莖に小葉あり、夏白花を開き、細子(鹽麩子)を結ぶ、秋に至り葉中に實の如き者を生ず、其中空虛、(五倍子)蟲有り、羽化して出づ、

〔和漢三才圖會香木八十二〕乳香　馬尾香　摩勒香　多伽羅香(佛書)　天澤香　梵語末須良以加、又云、末須天木須、(中略)

按、乳香樹雖似古松、而花實有無未詳、或謂波斯國松樹、亦非也、然乳香形色氣味與松脂不遠也、且薰陸香乳香本是爲一物、而氣色各別、功用則稍異、故立各條、

薰陸香(中略)

按今多乳香用唐藥、薰陸用倭藥、而倭薰陸出於奥州南部山中、堀地取之、松津液乎、盛夏則鎔融蚊蟻粘著者多、只合香家多用之、入藥用者希也、

〔重修本草綱目啓蒙香木二十三〕薰陸香、乳香、　薰陸一名雲華沉腴(酉陽雜俎)　䆖香(香譜)　乳香一名明玉珍(事物異名)　滴乳(集解)　的乳(本草蒙筌)

舶來多シ、薰陸乳香元來一物ナリ、薰陸ハ木ヨリ出ル脂久シクナリテ、松脂ノ形ノ如ク紫黑色ナル者ヲ云、乳香ハ其脂木ヨリ新ニ出テ、形圓ニシテ婦人乳頭ノ如ニシテ、淡黃色ナルヲ云、舶來乳香ノ內ニ薰陸多シ、今藥舖ニ薰陸ト稱シ賣ル者ハ、皆奥州ヨリ出ル琥珀ノ下品、黑色ヲ帶ル者ニ

角シタル膠白膠ト名クル事アリ、牛ノ皮ニテニクルヲバ阿膠ト云フ、白膠木白膠香ニカワノ白膠ミナカハレリ、

〔倭訓栞前編二十一〕ぬで　倭名抄に白膠木をよめり、ぬるでの略也、

〔日本書紀崇峻二十一〕二年七月○中略　是時厩戸皇子束髮於額、○註略　而隨軍後、自料度曰、將無見敗、非願難成、乃散取白膠木、白膠木此云農利埿疾作四天王像、置於頂髮、而發誓言、今若使我勝敵、必當奉爲護世四王起立寺塔、○下略

〔軍用記五〕軍陣に勝軍木を用る事、日本紀、元亨釋書に見えたり、昔聖德太子守屋の大連と戰ひ給ひし時、ぬるでの木を削りて、四天王の像をきざみて、頂の上において戰ひ給ひければ、太子軍に勝たまひしによりて攝州四天王寺を建立し給ひし也、其吉例を以て、ぬるでの木を勝軍木とも勝木とも名付て、是を軍陣のとき用る也、勝軍木本名白膠木(はくきやう)と云、ぬるでともぬりでともいふ木也、

〔重修本草綱目啓蒙二十二味〕鹽麩子　フシノキノミ　フシノキ以下木名　ヌルデ　ヌデ濃州　ヌリダ備前　ユリデ佐渡　ノデノキ尾州上總　カツキ　カツギ　カツノキ奥州　カチノキ　勝軍木　サイハイノキ　アカベソ城州醍醐　ゴマギ津輕　ヲツカドノキ信州　ヤマハゼ土州　メウルシ江戶　一名膚木子藥性奇方　樹鹽丹鉛續錄　烏鹽華夷考　浮木子外臺秘要　鹽酷子廣東新語　小血竭百一選方　主木本草證類　木一名構木集解　鹽敷樹物理小識　鹽膚木正字通

コノ木山野ニ自生多シ、丈餘ノ高ニシテ喬木ニ非ズ、枝條四ニ繁リ春新葉ヲ生ズ、形漆葉ニ似テ濶シテ粗齒アリ兩對ス、一葉ノ內節ゴトニ直葉アリテ漆葉ニ異ナリ、夏已後ハ葉ゴトニ泡(フクレ)ヲ生ジテ、其中ニ蟲アリ、秋ニ至リ早ク紅葉シテ落ツ、ヌルデモミヂト云、山中ニ生ズル者ハ、樹枝或ハ葉ノ莖、或ハ葉背ニ一寸許ノ袋ノ如キ者ヲ生ズ、其形圓扁長短一ナラズ、初青ク後茶褐色トナル、是蟲ノ巢ニシテ藥用ノ五倍子ナリ、俗名キブシ、末トナスヲフシノコト云、コノ者ヲ生ズル故、木

〔箋注倭名類聚抄十木〕按本草和名云、椿木葉樗木、和名都波岐、不訓沼天、與此所引不同、唯訓樗鷄以爲奴天乃岐乃牟之、○中略 福井本樗作㯭、按說文云、樗木也、以其皮裹松脂、讀若華、或从蒦、徐音乎化切、又云、㯭木也、徐音丑居切、玉篇云、檴、胡覇胡郭二切、木名、樗同上、㯭惡木也、敕於切、廣韻亦略同、是樗㯭二字不同、而樗卽樺字之正、非惡木、福井本似是、然毛詩云、采荼薪樗、又云、蔽芾其樗、毛傳並云、樗惡木也、釋文並云、敕書反、五經文字亦作樗、莊子云、吾有大樹、人謂之樗、釋文云、敕魚反、史記云、樗里子、索隱云、樗木名也、音攄、急就章云、桐梓樅榎楡椿樗、顏師古注云、樗似椿而木虛惡、爾雅云、栲山樗、釋文云、丑於反、廣雅云、樗鳩樗、鷄也、本草亦作樗木樗鷄、皆以樗爲惡木、段玉裁曰、說文㯭樗二篆互譌、毛詩音義、爾雅音義、五經文字可證也、假令許書與今互異、則陸氏張氏當辨明之、如穜種之例矣、若是說以今本說文玉篇廣韻爲誤、不知陸詞從雩抑從虖也、龍龕手鑑云、樗正㯭、今混爲一字、非是、○中略 按白膠木卽楓樹、本草云、楓香脂一名白膠香、是也、而楓香脂在上品、樗木在下品、其不同可知也、又崇峻紀云、白膠木、此云農利涅、與辨色立成略同、蓋與以樗木爲奴天、其說不同也、源君以其所訓同、混爲一條者誤、又按香要抄載侍醫惟宗俊通注進啓云、白膠香者絕而及數十年、見知其體者尙不候、況於其香乎、但樗木和名奴天之木、以件木汁用彼代、以其體相似也、是亦可以見白膠與樗不同也、

〔類聚名義抄木三〕白膠木ヌテ　樗俗 勅魚反　㯭今　樗正　樗ヌルテノキ　欅香欅、キサ、未詳、ヌテ、

〔伊呂波字類抄奴植物附植物具〕㯭ヌルテ、不材木也、惡木也　白膠木　樗俗之樗也、ヌテ、ヌルテ、

〔塵袋二〕白膠木ト云フハ何レノ木ゾ、白膠香同物歟、　白膠木ト云フハ字類抄和名等ノ訓ニハヌルデト云フ木ナリ、ヌデトモ云フ、ツネニハサルデト云ニヤ、順ガ和名ニハ欅ノ字ヌルデトヨマセタリ、辨色立成ト云フヲ引テ白膠木トス、白膠香ト云フハヌルデニアラズ、大日經持誦不同第一云、白膠香是娑羅樹汁ナリト云ヘリ、白膠ノ二字同ジケレドモ、木ト香トニ不同アルニヤ、鹿ノ

中ノ三法ヲ用タルノミニテ、漆園成就シテ今世ニ至テハ漆園ノ境内ヲ潤澤スルコト、分國四郡ノ米穀ヨリモ大ナリ、若夫レ土地ヲ有モノ、五法悉行ハヾ、漆園植山楮林桑田等夥シク繁榮スルコトナルベシ、〈漆ヲ作ノ法、蘖芽〈ヒコバエ〉ヲ多生ズル培養ノ法等ハ、皆六部耕作ノ法ニ詳カニ此ヲ説キ置メリ、〉會津例ハ土用後ニ内撿シ、十月中旬ニ撿視スル法、及ビ村々主保〈ナヌシ〉ノ宅ニテ蠟ヲ製セシムル法等、制度ノ宜キヲ得タリ、植蠟等ノ制度モ亦宜ク此ニ則〈ノツ〉トルベシ、實ニ上下ノ利益ナリ、所謂ル會津藩ノ制度ハ、漆木ヲバ御用木ト稱シテ、何村ニハ幾千本、何鄕ニハ幾万本ト精キ記錄有テ、〈其内幾百本ハ百姓何右衛門ガ植タル木ニ、幾十本ハ百姓何右衛門ガ植タル木ト、悉ク漆木ニ預リ人アリ、〉毎年季秋漆子撿見ノ前ニ、村々ノ主保里長〈ムラヲサ〉等百姓ヲ帥テ、其村内ノ漆木子ヲ内撿シ、先漆木ニ番附ヲ定メ、一番ノ漆木ノ實ハ、或ハ五斗或ハ三斗、又二番ノ木ハ、六斗或ハ八斗ナド、木板ニ書テ根ニ立置クナリ、其後漆園吏コレヲ巡見シ、一村ノ内ニテ一本ヅヽヲ撰テ其子ヲ量リ、閲實シテ以テ其村ノ總高ヲ決定ス、〈若シ内撿三斗ト記シタルガ、量テ二斗アルトキハ、一村ノ漆ノ子皆此例ニテ、總高ノ三分一ヲ減少シテ上納ス、万一内撿ヨリ吟味ノ木ノ子多キトキハ、亦此例ニテ總高ニ増シテ上納ス、〉而テ其子ヲ漆預ノ百姓ニ預ケヲキ、其石高ニ從テ蠟ニ製シテ上納セシム、〈漆子一升ニ付キ蠟二十匁宛ヲ納ム、精ナバ其預リ人ニ賜ル、即チコレ古來ヨリ會津ノ定法ナリ、〉蠟ヲ搾ニハ百姓順番ヲ立テ、主保ノ宅ニテ此レヲ製ス、〈國君ヨリ蠟搾ノ諸具、及ビ蠟ヲ製スル廐舍ヲモ建置テ、百姓ニ假リシ、其年ノ極月上旬マデニ製シテ上納スルヲ定法トス、〉此會津ノ良制度ナリ、〈此等ノ事、予ガ詳カナル筆記アルヲ以テ、茲ニハ此ヲ略ス、〉又蠟搾粕ハ馬ヲ飼ノ妙物タリ、始ハ燒〈タキ〉物ニシタル者ナレドモ、我家ニテハ甚此ヲ實トス、

〔紀伊續風土記 物產六上〕波世〈ハゼ〉、一名波邇之〈ハニシ〉、〈和名抄、古より櫨或は黃櫨の字を用ふるは誤なり、〉

各郡皆あり、中にも日高郡南部莊、牟婁郡田邊莊より多く出す、

夏黃櫨

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕夏黃櫨〈なつはぜ〉　正字未詳

按、夏黃櫨木、高二三尺、似波世漆葉而小、秋紅葉可愛、結子色赤黑、山人食之、味酸甘、

白膠木

〔倭名類聚抄 二十 木〕樗　陸詞切韻云、樗〈勅居反、○和名本草云、○沼天、〉惡木也、辨色立成云、白膠木、〈和名上同〉

地ハ、能ク其百姓ヲ撫御シ、法令ヲ懸到ニシ、変易ヲ明白ニシテ、多ク出サシムルトキハ、國益ノ大ナルニ論ナシ、然レドモ愚老〇佐藤信淵熟々永久ノ利ヲ考ルニ、黄櫨ヲ作ルノ利ハ、漆木ヲ植ルノ長久ナルニ如ズ、何ントナレバ黄櫨ハ種子ヲマキ苗ヲ仕立ルニ、五六年モ過ザレバ實ヲ結ブコト能ハズ、既ニ實ヲ結ブコトニ爲リテモ、僅十四五年ノ間ヲ實ノ結ベキ盛トシテ、其盛ナル時ト雖ドモ、年々一木ニテ五斗ニ及ブ者ハ有ルコト鮮シ、且實結初(ミノリハジメ)シヨリ二十餘年モ過ルトキハ、其實漸々ニ減リ、三十餘年ニ及ビタル櫨木ハ、唯其枝葉ノミ頻リニ繁茂テ實ヲ結ブコト益々減テ、近傍田畠ノ作物ノ障害ヲ爲スヲ以テ、此ヲ伐テ接穗スルヨリ外ニ致方アルコト無シ、又漆樹ハ苗地ヲ調置テ、法ノ如ク種子ヲ蒔テ、翌年ニ至テ牡苗(ヲナヘ)ヲバ畠ニ移シ植、牡苗ヲバ三年目ニ畠ニ移植ベシ、且牡漆ハ實結ザル者ナルヲ以テ、漆液ヲ掐採(カキトル)ノ料トナスベシ、又牝(メ)漆ノ移植タルヲバ培養ヲ懸到ニスレバ、三四年ニ實結初メ、年ヲ經ルニ從ヒ、其實次第ニ多ク爲テ、二十年モ過ルトキハ、一本ニ八九斗一石ニモ及ブモノ有リ、四五十年ヲ經タル木ハ、二石モ三石モ實結者アリテ、何百年ヲ經歷ト雖ドモ、益々肥大繁榮シテ實ヲ結ブコト極テ多、會津國ノ漆園ニハ牛馬ヲ覆ホドナル大木夥シク有リ、凡ソ漆園ヲ取立ルハ、養生掐(カキ)ノ法ヲ行テ、液ヲ採モノ故ニ、實ヨリ蠟ヲ搾ベキノミナラズ、掐取漆汁モ年々少カラザルヲ以テ、此亦一箇ノ國産ヲ增加ルナリ、且漆園ヲ取立ヲ漆樹ヲ早ク成長シ、實ヲ早ク結バシムルノ術アリ、蘖芽(ヒコバエ)ヲ苗ニシテ植立ルトキハ、三年目ヨリ實ヲ結ビ、培養ノ法ヲ精密ニ行フトキハ、十餘年ノ間ニハ五三斗ノ實ヲ得ルニ至ル、唯此蘖芽(ヒコバエ)ヲ植タルハ老木ニ爲ルコト早ク、四十年ニモ及ブトキハ、伐去テ若木ヲ植替ザルコトヲ得ズ、然レドモ速ニ漆園ヲ成就スルニハ、此術ヲモ亦錯(マジヘ)行フニ宜シ、且漆園植林(ハジヤシ)等ヲ開發スルニハ、五箇ノ良法アリ、此法ヲ施行フトキハ、百姓皆勇進ミテ此ヲ作ルガ故ニ、暫時ノ間ニ其業成就ス、所謂ル五良法トハ、法令ヲ密ニシ、厚賞ヲ與ヘ、懶惰ヲ罰シ、階級ヲ賜リ、罪科ヲ贖シム、即是ナリ、會津國ハ此

へければ、國中再び植弘めしにより、國中の蠟燭鬢付國産にて賄ひ、餘分の生蠟、領主より御買上となり、大坂へ積登せ、御藏物として、一ヶ年の賣高凡五千貫目餘宛有よし承る、或は生蠟にて七八十万斤づゝ、每歲積登る國あり、是に准じ九州中國四國紀伊抔より多く作出せり、

〔薩藩經緯記〕下貴國〇薩摩ハ黄櫨甚多ク、蠟ヲ搾テ他國ニ輸スモ亦極夥シ、熟按ニ、初メ日本ニハ紅葉櫨ノミ有テ、蠟櫨ハ無カリシヲ、今ヲ距コト百六十年許前、延寶元癸丑ノ年、當藩ニ異國人來テ種子ヲ與ヘ、櫻島小川ノ地ニ植サセ、蠟ヲ搾ルコトヲ敎シヨリ、漸ク諸國ニ弘リ、今ハ江戶ノ都下モ、赤羽根、牛込、阿武等ノ地ニ植ルコトヽハ成レリ、ヨク作ルトキハ數多ノ蠟出テ、信ニ國家ノ寶ナリ、且此物ハ氣候ノ温ナルヲ好ム者ニテ、第十五番以下ナル冷地ニ作ルトキハ、培養ノ術ヲ盡スニ非レバ實ヲ結ブコト少シ、故ニ櫨ヲ作ル國々多シト雖ドモ、當國ノヨク成熟スルニ如ク者ナシ、當國ハ培養ヲ勞セズトモ、甚ヨク生長シテ實ノ生コトモ、蠟ノ出ルコトモ多キヲ以テナリ、然レドモ當國ノ百姓ハ、櫨ヲ作テ實ヲ採ルコトヲ嫌フ者多シ、何ントナレバ櫨ヲ作テ實ヲ採テ、此ヲ賣ルト雖ドモ、買上ノ直段甚下直ニシテ、骨折損ナルヲ嫌ナリ、又此ヲ貴ク買上テ蠟ヲ搾ルトキハ、大坂表ノ仕切時價、他國ノ蠟ヨリ格外ニ賤ヲ以テ、櫨蠟局ノ損毛多キコト有リ、貴國ノ蠟ハ性合モ宜ケレドモ、他國ノ惡蠟ヨリモ大坂ノ仕切恒ニ賤ク、大坂ノ町人共奸計ヲ行テ、貴藩ノ官人ヲ愚弄シ、年々大利ヲ貪ルコト、下ニ詳ニ論ズ、故ニ他國ニテハ追々ニ此木ヲ植エ立テ、培養ニ骨ヲ折テ生長セシムル事ナル、貴藩ノ百性ハ此ヲ邪魔ニシテ、或ハ此ヲ伐採テ薪ニシ、或ハ實ノ成タルヲモ採ズシテ、徒ニ腐ラシムルコト多シ、歎息スベキノ事ナリケル、太夫此等ノ事ヲ熟察シテ、大坂廩倉ノ改革スレバ、國産ノ出ルコト漸々減ズルノ患アラン、又奥羽關東北越等諸州ハ、漆樹子ヨリ蠟ヲ搾ル、漆蠟モ上品ナル者ナリ、漢土ニテハ漆子ヨリ蠟ヲ搾ルコトヲ知ラザルガ故ニ、本草ヲ始テ諸ノ物産書ニ、絕テ漆樹子ニ蠟多キヲ論ジタルコト見エズ、唯櫨ヲ植テ蠟ヲ搾ヲ專務トス、貴藩ノ如ク櫨ニ合應ノ土

樹なれば植べしと、小前の農家へ談合せられしかど、一圓承知せざりしを、後年の宜しき事を申聞せ、おして空地野山、或は山畑井路の兩端抔に植て、木數を家別に割付、手入肥し等自身見廻り、一子の如くせはせられしが、僅十年にみたざる内に、村入用を辨へ、十七八年にして總村御年貢の半を、櫨實の賣得にてつくのひたると、予(〇大藏永常)が父なるものに、半藏物語りせられしと聞ぬ、いわゆる魏の西門豹、旱魃にくるしむ所ありければ、河水を引て十二の小川を掘穿ち、是を助けしめんとするに、民大いに田地のつひゆる事を煩苦せしかども、西門豹おもへらく、川を穿つの費はわづかにして、不作して、諸州の費る事は大いなりとて、つひに其川を成就して、百歳の後には其德を美談せられしとなん、又同郡山田村といへる小村あり、善藏といえる農事に心を用ける老農あり、享保七年の比、肥前の國に往て、櫨の仕立樣其德やうを習ひ、苗を求め來りて下畑に植ければ、近村の人迄も笑けるに、此人少しもかまはず、敎への通に育しが、追々木も繁茂し實もなりて、少しづゝの得分を見ける比(享保十七年壬子)の秋、山陽南海西海蝗付て大ゐに飢饉しければ、その時笑ひし人々も家を捨て諸國にさまよひ、喰を乞たりしとなん、其年は櫨至て實登りよく、數千斤をとりて是を賣、其價を以て米にかへり、飢饉をまぬかれしにより、殊に櫨は窮民を助るの大益ある事を感じ、壹人の子あれどもゆづるべき家督の減なければ、櫨を植る程の寶なしとて、櫨を仕立る事どもを草稿となし、窮民夜光の玉と號、一子常次へ讓られけり、又九州或國には國主より櫨を植べしと一同領内へ仰渡され、丘松山抔を伐りてうゑ立られしかど、そのころは接木する事をしらず、實蒔のなりにて植付たりしが、元より雌木雄木の分別をしらざれば、實小さく肉薄くして、仕立に引たらずして、利分なきものとて伐捨て、既に止なんとせしに、接木に利方ある事を仕覺得し者得て、唐櫨(櫨の大實なるを都て唐櫨と稱す、琉球より來る故、唐はじと云ならはせし物なるべし、)實太く仁小く肉厚きを撰び、其穗を接取植弘しに、實蒔なりと違ひ、盛長も早く、一本も實生らざる木なく、利分大に見

ニ多ク栽ユ、葉ニ鋸齒ナクシテ漆葉ヨリ長シ是モ亦漆ノ一種ナリ、黄櫨ハ救荒本草ニ圖アリ、葉圓木黄、枝莖色紫赤、葉似杏葉而圓、大木可染黄ト云時ハ、ハゼノ類ニ非ズ、

増、實ヨリ蠟ヲ取ル、ハゼニ品類多シ、實ニ大小アリ、實大ナル者ハ蠟ヲ得ルコト多ク、小ナル者ハ少シ、筑前松山ニ多ク作ル、松山種ト云、上品ナリ、

本邦ニテ櫨ヲハゼト呼ブ、琉球國志略ニ、櫨一名油樹子可搾油ト云ハ、卽ハゼノコトナリ、琉球ニハ和語ヲ通用スル故ナリ、

〔廣益國産考八〕松山を急に仕立る心得〇中略

九州或國諸侯の藩中に山奉行を勤る正田何某といへる人あり、〇中略櫨木の有りけるに、登らざる木ありければ、筑後國は、みな接木にして植ぬれば、登らざる木なしといへる事を聞及び、態と筑後の國へ人を遣し、接人を兩人雇ひ、是を有來れる櫨の登らざるをみな接木し、尙接方を習はせ仕立ける儘、其所に用る蠟は、他國より買入ざるやうになりて、國益となりたり、

〔農家益後篇乾〕總論

櫨、生蠟は何程一時に大坂へ入津きたりとも、價の高下は大ちかひなきものにして、捌口の早きものなれば、當時此櫨にまさるものあらじ、浪花にては蠟問屋仲間三十軒あり、各壹軒にて年中に金何万兩の商ひする事とぞ、さも有べき事か、日本のうち、凡七八歩通は櫨を作らざる國なれば、其所へは皆大坂より積送る事也、其外晒蠟屋五十軒、櫨を潰して生蠟に絞る、絞り屋五拾軒、中買百軒荷著問屋と唱る仲間三十軒、廻著問屋と號る仲間三十軒有りて、唐物に續いで大いなる商ひ高のものにして、廣大の事也、斯廣きものを辨へず、己が髮にぬり燭に燈し、常に其香にむせびながら、櫨は毒木抔と誤るは何事ぞや、玆に郡村の益となりし事を一二擧べし、豊後の國日田郡に川内村といえる小村あり、其村の庄官半藏といへる人、凡五十年以前櫨は一村を助るの益

の如くにて見わけがたし、葉をならべて見れば、うるしは廣く櫨は少し狹きが如し、然れ共秋の末に至れば、櫨の葉は黄色になり、其後赤みさして、黄赤交りたる色に成、(是をはじ色といふ、鎧のおどしもにはじ匂ひと云これなり、)終には紅になるなり、是をはじもみぢといふ、歌にもよめり、又此木を染草に用る故に、和名類聚抄にも染色具に出せり、心の黄なるところを取て、古は染草にして黄色に染たり、天子の御袍に黄櫨染といふは、この染草を用るなり、又この實より蠟をとる、是最上品也、凡蠟をとるには、琉球ハジといふもの實大にしてよしと云、此琉球ハジも紅葉うるはしきものなり、葉は常のよりまるくゆたかなるもの也、

〔大和本草 十二 雜木〕黄櫨 漆ヌルデノ類也、其材作弓、其葉秋紅ナリ、平原ノ地ニモ能紅也、多ク植テ可愛賞、其實蠟燭ニ作ル、民ウヘテ利トス、植ル法其實ヲツトニ包ミ水中ニ浸ス事三七日、稻子ヲヒタスガ如シ、取出テウフベシ、後生ズルマデ七日ホドハ糞水ヲソヽグベシ、糞水ハ糞一桶ニ水二桶ヲ合スベシ、救荒本草ニ、回々醋ト云木アリ、是ハジノ木カ、琉球ハジノ木アリ、實ハ常ノハジヨリ大ナリ、大豆ホドアリ、小木ノ時ヨリ實ノル、多クウヘテ可爲蠟燭、民ノ利トナル、其葉秋冬紅ナリ、可觀賞、大木トナリテハ實彌多クナル、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕黄櫨 和名波邇之 俗云波時乃木 ○中略

按、黄櫨以染黄色、天子御袍稱黄櫨染是也、染帛上用砥水、略染則爲黑茶色、其葉小淺靑色莖微赤、三四月開小白花、結細子、至秋紅葉、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕黄櫨 詳ナラズ

櫨ノ字和名抄ニハニシト訓ズ、又黄櫨モハニシト訓ズ、皆非ナリ、ハニシハハジナリ、今ハハゼト呼ブ、卽漆ノ一種ナリ、故ハゼウルシ、一名ヤマウルシト云、山中ニ甚多シ、葉ハ漆葉ニ似テ粗キ鋸齒アリ、秋月早ク紅葉シ甚美シ、ハゼモミジト云、又一種實ヨリ蠟ヲ採ル者ヲモハゼト呼ビ、諸國

黃櫨

〔佐渡志物產五〕漆　通名ウルシ
山村ニ多シ、雜太郡小倉村ノ名產ナリ、船ヲ作ルニ用テ甚佳ト云、同郡小川村ノ產ハ膚木葉ニ似ヲ漆工ノ好マザル所ナリ、

〔草木六部耕種法九需葉〕赭黑繭(クリカハイロノマユ)ノ野蠶ハ、上野下野越後奧州等ニ有リ、此ノ蝟蟗(クムシ)ノ形狀モ毛多ク、暗靑色ナルモ、淡黑色ナルモ有リ、此蟲ハ極テ漆樹葉ヲ好ムガ故ニ、會津國ニテハ此蟲夥シク滋息シテ、漆樹葉ヲ喰ヒ、一段ヤ二段ノ漆園ヲバ、一夜ノ中ニ其葉ヲ喰盡シテ、終ニ其木ヲ枯ヲ以テ、會津侯コレヲ患テ、毎年夏中ニハ度々數万ノ人夫ヲ起シテ、其野蠶ヲ退治セシム、然レドモ此ヲ殺盡スコト能ハズ、年々數多ノ漆樹ヲ枯ス、是故ニ會津ノ患トスル所ハ此野蠶ナリ、

〔倭名類聚抄染色具十四〕黃櫨　文選注云、櫨落胡反、和名波邇之、今之黃櫨木也、

〔箋注倭名類聚抄染色具六〕南都賦楓柙櫨櫪、李善注引郭璞上林賦注云、櫨棗櫨、又上林賦華楓枰櫨、李善曰、已見南都賦、並不載此文、按漢書司馬相如傳載上林賦、顏師古注云、櫨今黃櫨木也、疑源君引之、誤以爲文選注也、按黃櫨木不詳、

〔伊呂波字類抄波殖物附殖物具〕櫨ハニシ 黃櫨ハシ

〔古今要覽稿草木〕はじ紅葉
はじ紅葉おほく歌によめり、文選注の櫨は、今の黃櫨木なり和名類聚抄といひ、又漆ぬるでの類なり大和本草ともみゆ、その葉漆に似て長く先尖り、霜後鮮紅に染て甚美觀なり、餘木の紅葉よりも葉の表深紅にして、裏は黃色にきは立てみゆるなり、その材を以て弓につくること、神代より所見あり、天之波士弓古事記天梔弓日本書紀とも書り、たゞし梔も櫨も皇朝のはじにはあたらずと本草綱目啓蒙いへり、今世にても弓を作るに、かならず此木を以て側木とするなり、然れどもはじといはずして、はせといへるより、別木にやとおもへる人もあり、この木はうるしの木に似て、身木も葉もうるし

合貳千四百拾五本　猪苗代　合五萬五百八拾貳本　小川庄

總合貳拾六萬千貳百四拾八本六分壹厘　役漆文役敷

右漆貳千六百拾貳盃四合八勺六才　但壹本ニ付壹勺ツヽ、壹盃ニ付貳百五拾目宛

右蠟目壹萬千貳百三拾三貫六百九拾目　但木壹本ニ付四拾三匁之內貳拾壹匁御年貢蠟

拾四匁大買蠟八匁小買蠟

右是者加藤式部少輔家來仕上候以帳面如斯相究候、以上、

寛永二十年未八月二日　井伊半左衛門 印判居

佐野主馬 印判居

保科民部殿

遠山伊右衛門殿

當時有漆木役

一貳拾六萬五千三百五拾六本六分三厘　此漆貳千六百五拾壹盃八合三勺貳才餘

外ニ壹盃七合三勺京錢納拾箇村ニ而百七拾三本四分

此蠟壹万千貳百六拾貫百六拾貳匁貳分三厘

是者御郡中大小買蠟御免之村も有之、且御郡中之內猪苗代者、壹本役九匁宛、又京錢納之村、其外先部御代御引渡之帳面書落之村、御直山漆木野漆木、寛文八年所附被仰付、其外致増加、此委キ御帳面者、御納戸ニ有之、其寫時々之漆木方上役印符ニ而、蠟漆木役所ニ有、容易ニ役人見中間敷旨、御奉行所ゟ被仰付候事、

〔日光山志三〕漆園　是は小倉山の續き鳴澤川といふを越て、其上なる原野の地なる邊をいふ、漆を植付られしかど、原野の續きゆゑ、年々野火の爲に多く枯うせたり、

玉井忠兵衛殿

古川庄三郎殿

漆藏帳面之末書

右之通、如此帳面每年可被請取候、重而改出シ有之候ハヽ、書付越可申候、以上、

巳十二月朔日　　守岡主馬

山田九兵衛殿

原田五助殿

一寛永十六卯年、加藤式部少輔樣御代、木數御改貳拾万三千百九本三分九厘と成、

一輪之內蠟ゑばり釜本らうのはかり御藏のうつしをいたし置、掛させ可申候、斤量ニ而一切うけまじく候事、

一蠟をゆがき候者は、釜中ニ而ゆがき可申候事、

一漆之木二番かきいたすまじく候、幷每年うるしの直損可申事、

右之通、在々百姓共ニ可申付候、相背者於有之者、曲事ニ可申付也、

寛永十九年午十一月廿三日　　守岡主馬

輪之內村々肝煎中

〔蠟漆舊記乾〕蠟漆御引渡御前帳上書

一會津若松城附蠟漆之帳

如此有之御帳面之內、郡分之村別有之候得共略ス、

合壹萬九千七百四拾本七分　大沼郡　　合拾壹萬三千三百四本四厘　山ノ郡

合七萬三千八百拾九本七厘　稻川郡　　合三百八拾七本八分　川沼郡

金壹分ニ貳貫目直、
但年々小買ニ御買上蠟目、木役平均ニシテ、壹本之足リ八匁ニ當ル故也、如此定役被仰付候上ハ、直段高直ニ被成下度段達し、御吟味之上、左候ハヾ木實不生之年ハ、金納ニ可相納と定、

〔上杉編年文書三十二〕掟〇中略
一漆の木者皆枯候共、又若木何ほど出來候とも、本役の外指引被成間敷候間、木なへをもそだてべき事、
以上
右條々鋼下肝煎百姓等に堅爲申聞、一在所へ一ツ宛書寫し可相渡者也、
慶長九年閏八月二日　山城守〇直江兼續

〔蠟漆舊記乾〕慶長十九年寅十月中、蒲生飛驒守樣御代、漆木役定ル事、
一上々之木　三拾本ニ而　百本役　一上之木　五拾本ニ而　百本役　一中之木　百本ニ而　百本役　一下之木　百三十本ニ而　百本役　一下々之木　百六十本ニ而　百本役
〆五段
慶長十九年寅十月十九日　岡村五左衞門
竹村何右衞門
寛永五辰年ゟ同二十年迄加藤左馬之助樣御代之内、同六巳年役漆木又法、
一漆木高サ壹丈ゟ役漆壹夕ト有リ、但御年貢蠟御取立帳之末、
右之通、此如帳面毎年可被請取候、但改出シ有之候ハヾ、書付越可申候以上、
巳十月朔日　守岡主馬

合四箇條事〈○中略〉

一漆菓事

右同前〈○太政官今年閏六月八日下五畿内七道諸國符〉符偁、漆菓之樹、觸用亦切、事須蕃茂並勿伐損、其菓實者復宜相共者、夫桑漆二色、依例載朝集帳、一戸三百根已上宜任戸内、若有剩餘亦相共之、但宅邊側近、元來加功栽栗爲林者、准上條、量貴賤許之、務從折中、〈○中略〉

大同元年八月二十五日

〔蠟漆舊記坤〕漆木役木御定之次第

一寶徳年中、蘆名盛信公御代より、慶長三戊年迄、百姓共支配仕、御用之蠟漆有之時分は、相場を以御買上ニ成候、

但蒲生秀行公御代也、此砌者在々所々ニ地下野士給人多有之、百姓方より取立、品々無格不同也、〈寶徳元年巳年より慶長三戊年迄百六拾年ニ成、寶徳元年より寛永二十癸未年迄二百三五年ニ成、慶長三年より寛永二十年迄四十五年ニ成、寶徳元年より明和七年迄三百二十二年、〉

一慶長四亥年六月、上杉中納言景勝公御代、會津四郡拾九万八千六百貳拾四本七分八厘といふは、目通り四尺廻りを言、上杉公御代は、漆役、壹本より木實壹升五合宛御取上、其外百姓勝手次第に絞り取賣買、然共買人無之、及難儀、公儀へ致訴訟、金壹分ニ蠟六貫八百目迄賣上候、同慶長六年丑五月、役木壹本より向後御年貢蠟貳拾壹匁宛可相納定、

但壹升五合を爲絞、數年を平均貳拾壹匁足りニ當故を以、地下ニ而爲絞蠟ニ而御取立之由、例年貳拾壹匁納候付、餘り蠟有之候間、小買ニ御買上被下度段奉願候、其砌小川庄蒲原郡之蠟直段を、拾ヶ年平均銀拾五匁ニ蠟六貫四百目と定、併壹本ニ付何匁と言無定、餘り蠟有之分は不殘賣上候由、寛永八未年、加藤左馬助様御代、始小買蠟目直段共ニ定り、役木壹本ニ付蠟八匁

モ知ベカラズ、是以テ立置ノミ、牡木ヲ悉拔棄テ、其跡ニ水糞ヲ饒ニ澆ベシ、翌年ニ生ズル苗ハ皆牝木ナリ、草ヲ耘培養ヲ懇ニシテ成長セシメ、一尺三四寸ニ及ビタルヲ植地ニ移シ栽ウベシ、植地ハ熟畑(ジユクハタ)ノ軟膨(ボヤカシ)タルニ宜シ、路傍ノ行木等或ハ田畠ノ周圍ナドヲ軟膨テ栽ベシ、水邊ニ植タルハ、成長スルコト殊ニ速カナリ、或ハ山野中ニ栽ト雖ドモ、牛馬ノ力ヲ用テ能ク其土ヲ犂返、草茅木ノ枝葉等ヲ耕錯(キリマゼ)テ、其植ル處ヲ濶深二尺許ヅヽ地ヲ軟膨テ植ルトキハ、早ク成長シテ實ヲ結コト多シ、此ヲ栽ニハ正月中旬ヨリ三月中旬マデノ間ト、八月下旬ヨリ十月初ヲ以テ良トス、雨後ノ濕アルニ栽ベシ、五六寸ノ穴ヲ掘リ、根ノ土ノ附タルヲ栽テ、上ニ肥土ヲ少シ高キ程ニ覆ヒ、押付テ置トキハ、日アラズシテ能活著(イキツク)者ナリ、　漆樹ハ植付テ他ノ草ヲ耘リ心ヲ用テ培養フトキハ、移栽テ五年目ニハ花ヲ見セ、六年目ニハ實ヲ一升モ結、七年目ニハ二升ニモ及、八年目ハ三升餘、九年目四五升、十年目ニハ六七升ニ至、十五年ニハ一斗二三升、二十年目ニハ二斗以上三十年目ニハ三斗餘、四十年目ハ四五斗、五十年目ニハ五六斗ノ實ヲ得ルニ至ル、此レ漆木ハ長壽ナル者ニテ、年ヲ經ルニ從ヒ、實結コト愈多ガ故ニ、會津ニハ百年ヲ越テ、年々一石以上ノ實ヲ生ズル大木有リ、

〔日本山海名物圖繪三〕漆製法
漆の木に、鎌にて切目をつくれば、其切目より汁ふき出るを、竹べらにてこそげ取也、こそげ入るうつは物は、茶の濃きせんじ汁を入、ぐるみの油を加へて、其上へ漆をこそげいるれば、漆やけずしてよしといへり、凡漆を取には至てほそき木は汁なし、又格別の老木もわろし、和州吉野紀州熊野、うるしの名所也、其外諸國より出、うるしの木の實は取て蠟にする也、

〔令義解三賦役〕凡調絹絁〇註略絲綿布、並隨鄕土所出、〇中略正丁一人、〇中略漆三勺、金漆三勺、

〔類聚三代格十六〕太政官符

うるしを芳野にてうゆる法、先苗を仕立るは、秋子を取て俵に入、ぬれゑんなど、つねに水つかふ邊りにをき、俵の上より水をそゝぎ、泔水をも時々かけて、古筵こもなどをおほひ置ば、春になりて水青みて、芽立の見ゆる時、苗地を冬より耕しこなし熟し、糞をも多くうちさらし置たるを、畦作り、菜園のごとくしかきならし、種子をむらなくばらりとまきて、肥土を以ておほふ事、樹の厚き棚をかき、日おほひをし、旱せば水をそゝぎ、草はありとももとらずして、一年は其まゝをき、二年の後、根の土ながら堀取移しうゆるなり、

〔草木六部耕種法二十需實〕漆樹ハ諸農書ニ、唯其膠液ヲ搯採ノ法ノミヲ説テ、絶テ實ヲ採コトヲ論ジタル者ナシ、且漢土人ノ有識多キヲ以テ、尚漆木子ニ蠟有ルコトヲ知ラズ、故ニ本草ヲ始メトシテ、種々物産書地志等ノ多キコト倒牛折軸ス、然レドモ漆子ニ蠟多キノ説ハ、未曾見及ザルナリ、蓋コレ有ン、愚老○佐藤信淵ハ未コレヲ見ズ、抑漆樹ハ第十六番ノ氣候ヲ得テ、其實能豊熟ス、故第十番以上ノ温暖地ニハ豊熟セシメ易カラズ、然ドモ山間北陰ノ地ニ栽バ、亦能豊熟ス、又二十番ノ寒國ハ必山南ノ陽地ニ栽ヲ良トス、　此ヲ植ルノ法ハ、十二月上旬ニ、其實ヲ臼ニテ擣、外売ト蠟氣トヲ剝テ其核ヲ採、半切桶ニ入テ微温水ヲ灌ギ、叮嚀ニ洗テ其蠟氣ヲ除去、五七日モ此ノ如クシテ蠟氣ノ無ニ至リ、此ヲ葉囤ニ入、土中ニ埋メ、上ニ菰筵類ヲ被セ、度々水ヲ澆テ温養シ置コト、黄櫨ノ種子ヲ養ニ全ク同ジ、翌年ノ三月上旬マデニ、豫テ苗地ヲ調理、此ヲ蒔、亦黄櫨ノ子ニ異ナルコト無シ、　蒔キ付タル年ノ九十月、苗延テ葉落タル頃ニ、片手ニテ其苗ヲ引抜テ見ルニ、能引抜ル苗ヲバ悉抜棄ベシ、其中ニ横根ノ淺ク十方ニ蔓テ、容易抜ザル苗アラバ、此ヲバ抜棄ズニ立テ置ベシ、凡漆木苗今年蒔テ今年中ニ生ジタルハ、大抵皆牡木ナル者ナリ、牡木ハ實ヲ結ザルヲ以テ栽テ益ナシ、故ニ皆抜棄ベシ、天地自然ノ性ニテ、牡木牡草ハ其根直ニ深ク延下リ、牝木牝草ハ其根横ニ淺ク蔓滋ヲ以テ、其抜易ハ直根ナル故ナリ、其抜難ハ横根ノ蔓タルヲ以テ、或ハ牝木ナル

離、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 香木〕漆 ウルシ 乾漆一名續命筒 輟耕錄

漆、秘傳花鏡ニ桼ニ作ル、同字ナリ、山中ニ自生多シ、葉ハ膚木(フシノキ)葉ニ似テ鋸齒ナシ、香椿葉ヨリ短ク數少シ、秋ニ至レバ面紅色、背黃色ニ染テ落ツ、花ハ夏枝梢ニ長穗ヲナシ枝ヲ分チ、黃白小花ヲ開ク、膚木花ニ似タリ、後實ヲ結ブ、圓扁大サ一分餘、多ク下垂ス、熟スレバ外皮淺黃褐色、此實ヨリ採ル蠟ヲウルシ蠟ト云、ハゼ蠟ヨリ上品ナリ、唐山ニテ木實ヨリ蠟ヲ採ルハ烏臼(ナンキンハゼ)ナリ、漆ヨリ採ルコトナシ、ハゼハ葉漆葉ヨリ長大ニシテ、實モ大ナリ、今諸國ニ多ク栽エ蠟ヲ採ル、一種琉球ハゼハ葉小ニシテ南天燭葉ノ如シ、實ハハゼノ實ヨリ大ナリ、コノ二種皆漆ノ類ナリ、

漆樹ノ皮ニ鋸メヲ附ヲケバ、油脂出ルヲ刮リ採者、卽物ヲヌル漆ナリ、唐山ニテハ竹管ヲ皮中ニサシ入ヲキ、油脂流レ出ルヲ採ルト云、本邦ト採法異ナリ、奧州羽州野州ヨリ出ルヲセシメ漆ト云、力强シテ上品ナリ、物ヲ績ニ用ユ、日州ヨリ出ルハ小細工ニ用ユ、和州芳野ヨリ出ルハ力弱シ、朱漆ニ用ユ、越前ヨリ出ルハ下品ナリ、唐山ノ漆モ下品ニシテ、舶來ノ漆器甚ダ損ジ易シ、故ニ本邦ノ漆器ヲ賞スルコト、遵生八牋ニ見ヘタリ、東西洋考ノ日本ノ條ニ、一統志ヲ引テ曰、以漆制器甚工緻、兩山墨談曰、泥金畫漆之法、古亦無有、宣德時遣漆工、至倭國傳其法以歸ト云フ、藥ニハ乾漆ヲ用ユ、是ハ漆ヲ桶ニ入置タル者、久シクシテ桶ノ邊ニツキ乾キタルヲ採ル、是ヲヤケルト云、其形穴多アリテ蜂巢ノ如シ、色黑シテ輕シ、是眞物ナリ、弘景ノ說ニ、漆桶中自然乾者、狀如蜂房孔孔隔者爲佳ト云リ、今藥舖ニ岩乾漆ト呼ブ者ハ、堅重ニシテ孔穴ナク硬炭ノ如シ、是石ノ部ノ石炭ナリ、漆類ニ非ズ、然レドモ和方書ニ乾漆ト云フハ、多皆コノ石炭ナリ、漆樹材トナシテ堅シ、其心黃色ニシテ美シ、能ク水ニ堪ユル故、手水鉢ノ臺ニ用ユ、

〔農業全書 四七 木〕漆

古事類苑

植物部八

木七

〔倭名類聚抄 十五 膠漆具〕漆 野王案曰、漆（音七、字○流○之、）木汁可以塗物也、

〔倭名類聚抄 二十 木〕金漆樹 楊氏漢語抄云、金漆樹、（許師阿夫良能紀）

〔伊呂波字類抄 宇 植物附殖物具〕桼（ウルシ）（木汁可以髹器物也、俗用漆非也、漆者水名、作桼、俗作漆、餘倣此、）本朝事始云、倭武皇子遊於宇陀阿貴山之時、以手牽折木枝、其木汁黒美染于皇子之手、愛皇子召舎人床石足尼曰、此木汁塗干而可獻之、床石塗干而獻之皇子、大悦取其木汁、而塗翫好之物、以床石足尼任於漆部官、

〔夫木和歌抄 二十九 漆〕漆　　民部卿爲家

くれなひのをのが身ににぬうるしの木ぬるとまぐれに何かはるらん

〔大和本草 四十 木〕漆 植之利民用、其用有四、其汁可髹器、其乾者可爲藥、乾漆是也、其實可爲燭、其木心黄、可爲器、○中略 ハジ、ヌルデ、椿亦漆樹之類也、故其生汁亦發小瘡、漆自吉野熊野諸山出、又中夏ヨリ多ク來販ク、爲彩色者吉野產爲良、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕漆 桼（本字） 和名宇留之 髹物色潤（ウルハシ）美之略也 木蠟（キラフ）（漆子也）○中略

按漆樹陸奥出羽下野處處、關東之產稱世之女（セシメ）漆、爲最上、日向米良之產次之、眞黒塗及小細工家可用之、和州吉野漆者、朱及黝（ウルミ）朱必可用、中國西國北國皆有之、而越前之產最下、凡入藥可用唐乾漆、髹物、唐漆不佳也、凡木器磁器破者、以漆接繼之、則不可離、如欲復離之者、蕎麥稈灰汁中投漬其器、則可

增コヽニ花ナシト云ハ誤ナリ、夏月葉間ニ碎小白花ヲ簇生ス、然レドモ實ハ結バズ、

〔增訂豆州志稿 七土産〕黃楊(ツゲ)　增、海島ヨリ產出ス、三倉島ヲ最トシ、三宅島之ニ次グ、利島ヨリモ產出スレドモ多カラズ、材質堅緻ニシテ、印章櫛等ヲ作ル、良材ナリ、一ケ年產出代金三倉島凡六千圓、三宅島五千圓、

〔夫木和歌抄 二十九〕つげ　民部卿爲家

たづのめがかしらけづらす朝夕につげのをぐしやとるまなからん

〔本草綱目譯義 三十六灌木〕柞木　コメ／＼江州中略○此一種ニマツゲト云アリ、眞ノツゲノ意也、カラツゲ、アサマツゲ、ヲワリツゲ、コレモ花戸ニアル也、市中ニモアリ、京師近邊ノ山中ニハ自生ナシ、勢州朝熊山ニ自生多シ、故ニアサマツゲト云、京ヘモ取寄テ植、是ハ柞木ト異ニシテ、枝甚軟ニシテ葉兩對シテ形漸短シ、居止ナシ、別シテ光澤深シ、庭際ニ栽テ甚美シ、冬不枯大木ニ不成、五六尺ニ過ズ、江陽縣志

〔一話一言 二〕あさまつげ

勢州朝熊に一種の黃楊(ツゲ)あり、照葉よろし、外に移せば色かはるといへり、是亦同人○伊勢屋金二郎のはなし也、

〔大和本草 十一 園木〕黄楊　ツゲハ山木ナリ、人家ノ園中ニ多栽フ、枝ヲ挾メバ活ヤスシ、此木長ジガタシ、梳ニ作リ印ニ刻ム、皆本草所言ト同、良材ナリ、又琵琶ノ撥ニ作ル、正月五月挾ムベシ、此木ノ葉蟲好ンデ食フ、捕ベシ、梅雨ノ内ハ葉ノ色黄ニナル、枯テ變ズルニハ非ズ、柞ハイヌツゲナリ、雜木ニ記ス、唐黄楊葉少長シ、枝繁多ニシテ細長シ、庭ニウヘテ愛スベシ、又挾テヨク生茂ス、園ノ籬トスベシ、正月五月ニ挾ムベシ、九月ニモ亦挾ムベシ、一名尾張ツゲトモ云、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕黄楊木　和名豆介〇中略

按黄楊木葉似槐葉而小、又似白丁花木葉而四時不凋、無花實、其木心色黄白材堅、刻印作櫛、或爲象戲棊子佳、琉球及屋久之產最良、豆州之者次之、

〔草木性譜 人〕黄楊木（ひめつげ）

極て小木、處々庭際に植、其肌堅く、細枝繁密、小葉四時深青、夏新條長ずること一寸に過ぎず、花實なし、歲潤に遇ば繁茂せず、分栽揷插すといへども活しがたし、花鏡云、至閏年反縮一寸と、縮に非ず長せざるなり、一種錦熟黄楊（江陰縣志）と云ふ者は、其葉圓く淺綠、春花を生ず、瓣なく蕊而已、實を結ばず、又くさつげと云ふ、細葉にして花實を生ずる者あり、是錦熟黄楊の一種なり、此二品倶に歲閏に遇ば長せず、分栽揷插すとも活し易からず、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕黄楊木　ヒメツゲ　ニハツゲ　クサツゲ（同名アリ）　一名樿（品字箋）　萬年青（雲南通志、同名アリ）　知命樹（同情偶寄）

コノ書ニハ作梳刻印コトヲ云リ、故ニ古來ツゲト訓ズ、非ナリ、梳ニ作リ印ニ刻スル者ハ柞木ナリ、撫州府志五雜俎等ノ說ニ從ヒヒメツゲトスベシ、ヒメツゲハ小木ナリ、高サ僅ニ一二尺、數十年ヲ經ルト雖ドモ高クナラズ、故ニ人家或ハ寺院簷下ニ多ク栽ユ、枝葉對生シ、葉ハ錦塾黄楊ノ葉ニ似テ小ク、長サ二分許、深綠色冬凋ズ、花實ナシ、

ヲ去ルヲ巴豆霜ト云、略シテ巴霜トモ云、瓜蔞仁霜杏仁霜ノ例ナリ、本邦ニテハ黒燒ノコトヲ霜ト云ニ因リ、巴霜ニ巴豆ノ黒燒ヲ用ユルハ誤ナリ、

增、薩州曾土考纂疏云、寛政二庚戌歳、中山歳貢船致巴豆於薩摩云、是福建連江縣之種、乃移植大隅佐多邑、其枝葉類臭梧桐、夏抽穗開小黃花、秋結實、中山吳繼志質問本草附錄云、巴豆樹高一二丈葉形似烟草而小、長三四寸濶二寸許、有縱理不甚厚、四月梢頭出穗開細花淡黃色、六月結實作房、生青、熟黃、老則房自分、折中貯三四子、狀若海松子、而色黃、殼薄下之易、生新者最峻下人、藥宜擇陳者、天保十年ノ比、京師ノ物產會ニテ高サ二尺許ノモノヲ目擊ス、今攝州池田ノ種樹家ニモアリ、

シラキ

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕婆羅得　詳ナラズ

シラキニ充ル古說ハ穩ナラズ、シラキハ烏臼ノ一種トスル說ヲ優レリトス、シラキ江州ハ一名シロキ新校正コクドノクハシ、木タンポヽ、アカ子ヂ、カウジラキ紀州アブラミ城州貴船アブラキ江州シロハダ讃州イハハゼ丹後モエギ土州チンクハ仙臺此木山中ニ多シ、高サ丈餘、葉ハ柹葉ニ似テ斷レバ白汁出、故ニ木タンポヽノ名アリ、夏初葉間ニ三四寸ノ長穗ヲ出ス、栗穗ノ狀ノ如ク、黃白色、穗ノ本ニ實ヲ結ブ、形續隨子ニ似テ大ナリ、ソノ莖長ク下垂ス、實ゴトニ三四子アリ、大サ三分許、正圓ニシテ黑白斑文アリ、仁ヲ搾テ油ヲ取リ、自鳴鐘ニ用ユベシ、秋ニ至リ紅葉美シクシテ落ツ、

黃楊

〔倭名類聚抄 二十 木〕黃楊　兼名苑注云、黃楊和名豆介色黃白、材堅者也、

〔伊呂波字類抄 ツ部 植物 附植物具〕黃楊ツゲ

〔倭訓栞 前編 十六 都部〕つげ○中略　黃楊は今姬つげといふ、草つげとも庭つげともいへり、尾張つげは、錦塾黃楊也、矢どめと稱するは、直脚黃楊也、犬つげは奴柘又作木也といへり、美濃にてけづらともいふ、白つげあり、葉青白く大きし、

の紅葉の艶なるをいふなるべし、楓を以霜葉の總稱とする事、本邦にて木々の彩をさして紅葉といふをかへでの一名とするがごとし、その形狀は本草啓蒙に委しく辨じたり、尤烏臼に葡萄臼、鷹爪臼の二種ある事、群芳譜に見えたれども、啓蒙には辨せず、或人曰、今本邦に渡りしは葡萄臼なりといへり、

〔本草一家言 三〕烏臼　肥前佐賀鄕名琉球波世、近來自西土將來于長崎、土人搾油及製蠟、故名蠟木、又稱加牟氏羅、木葉似加津羅、而圓扁結實、攢簇數子、似梧桐子、往昔投化客陳元贇以山漆充烏臼、謬妄之說也、

巴豆

〔和漢三才圖會 八十三喬木〕巴豆(はづ)　巴菽　剛子　老陽子

本綱巴豆本出巴蜀(巴蜀今四川也)、而形如菽豆、故名之、今嘉州眉州戎州皆有之、木高一二丈、葉如櫻桃而厚大、初生青色、後漸黃赤、至十二月葉漸凋、二月復漸生、四月舊葉落盡、新葉齊生、卽花發成穗微黃色、五六月結實作房、生青至八月熟而黃、漸自落、一房有二瓣、一瓣乙子、或三子、子仍有殼、用之去殼、似大風子殼、而脆薄子及仁皆似海松子、其緊小者是雌、有稜及兩頭尖者是雄、雄者峻利、雌者稍緩也、

戎州之巴豆、殼上有縱文、隱起如線、一道至兩三道、呼爲金線巴豆、最爲上等、他處亦稀有、

巴豆(辛溫有毒)　若急治爲水穀道路之劑、去皮心膜油生用、若緩治爲消堅磨積之劑、炒去烟令紫黑色可熟用(生則猛熟則緩)、斬關奪門之將、無胃中寒積者不可輕用、

又云、雖可以通腸之藥、可以止瀉、世所不知也、(能吐能下能止能行、是可升可降之藥也、)反牽牛子、(中巴豆毒者用冷水黃連汁大豆汁、則解之、)

〔重修本草綱目啓蒙 二十四喬木〕巴豆　一名草兵(輟耕錄)　江子(壽世保元)

和產ナシ、近年薩州ニ來ル、葉ノ形シラキノ葉ニ似テ短シ、實ハ舶來多シテ僞物ナシ、外殼白蔻殼ニ似テ微長、內ニ二三子アリ、子ハ豆ノ形ニ似テ長シ、藥ニハ皮ヲ去リ仁ヲ用ユ、仁中ニ芽アリ、コレヲ心ト云、集解ニ去心皮ト云心ハ、人ヲ吐スル故ナリ、コノ仁ヲ硏リツブシ紙ニ挾ミ、壓シテ油

烏臼ハ漢種ナリ、今諸國ニ栽ル者多シ、ソノ葉形圓ニ扁クシテ尖リアリ、數多ク互生ス、嫩ナルハ色紅、長ズレバ色綠、枝葉甚繁密ニシテ、日光ヲ透サズ、納涼ニ宜シ、故ニ依鵶臼影ト云、夏月枝梢ゴトニ花穗ヲ生ズ、長サ三四寸、黃白色ニシテ栗穗ノ如シ、穗ノ本ニ實ヲ生ズ、形圓微扁ニシテ三道アリテ、續隨子ノ如シ、初ハ綠色、熟スレバ黑褐色、コレヲ破レバ三子アリ、大サ豆ノ如シ、外ニ白粉アリテ核ヲ包ム、唐山ニテハコノ白粉ヲ採リ、製シテ蠟トス、烏臼蠟ト云、唐山ニテ漆及ハゼノ實ヨリ蠟ヲ採ルコトナク、烏臼實ヨリ採ノミナリ、其蠟蟲白蠟ヨリ柔ニシテ上品トス、是ヲ皮油〈品字箋〉ト云、白粉ノ內ニ硬核アリ、ソノ內ニ仁アリ、仁ヨリ採ル油ヲ淸油〈物理小識〉木油〈南寧府志〉ト云、食用ニ堪ヘズ、惟燈油トナシ、傘ニ用テヨク水ヲ防グト云フ、コノ蠟及ビ油ヲ採ル法、天工開物ニ詳ナリ、秋ニ至リ落葉ノトキ、紅紫ニシテ美シ、故ニナンキンハゼト云、

增、蘭山翁今諸國ニ栽ユル者多シト云ハ穩ナラズ、此木本邦ノ地ニ應ゼザルニヤ、稀ニコレヲ栽ユル者アリト雖ドモ、ソノ實輕虛ニシテ、內ニ核ナキユヘ蒔テ生ゼズ、又壓條、接換、扦插共ニ活セズ、故ニ一根ヲ得ルモ容易ナラズ、余〈○棉謙〉近年コレヲ殖スノ妙法ヲ得タリ、其法春月大サ筆管以上ノ根ヲ堀リ、地上ニ出スコト一寸許ニシテ、コレヲ栽ユベシ、速ニ芽ヲ發シテ生長ス、奇術ト謂フベシ、

〔古今要覽稿 草木〕烏臼木

烏臼木とうはせ、なんきんはせ、〈本草啓蒙〉この木秋の末紅葉鮮麗にして、ながめあるものなり、近年異邦より來る〈大和本草〉といへば、古はなきものにて、和歌に詠るものにもあらざれど、其紅葉賞すべきものなり、烏臼は本邦のかへでなどよりも早く染はじむるものにて、九月初より色づくもの也、陸放翁が詩に、烏臼微丹菊漸開といへる句によく附合せり、西土にては楓につゞきて、烏臼の霜葉を愛せり、花鏡に秋晚葉紅可ㇾ觀、亦秋色之不ㇾ可ㇾ少者といへり、また宗袁聚謂、烏臼紅爲丹楓とぞ

烏臼

云、又藥舖ニテ、此實ヲ和ノ雷丸ト云ハ誤ナリ、雷丸ハ、竹根ノ旁土中ニ生ズル者ニシテ、竹苓トモ云、萬木類ニ詳ナリ、〇中略

附錄、椰桐、詳ナラズ

增附錄、椰桐ハコンヂノキナルベシ、山中ニ自生アリ、高サ一丈許、ソノ幹直上シテ樹皮綠色ナルコト梧桐ノ如シ、注ニ狀似青桐ト云是ナリ、葉互生ス、大サ三四寸、ウリノ木ノ葉ニ似テ厚ク、五尖ニシテ微シク皺アリ、夏月葉間ニ細蒂ヲ垂ル丶コト一二寸、青白花ヲ開ク、花後槭樹莢ノ如キ小扁莢ヲ綴ル、内ニ小子アリ、秋月落葉ノ後、ソノ莢猶枝間ニ垂ル、

〔近江國輿地志九十九土產〕油桐(あぶらぎり)　あぶらみといふ是なり、當國處々これあれども、殊に海津の出す處甚多し、油をしぼるに、其功荏の油におとらず、志賀郡松本村の山に、多油桐を種て油をとる、是を荏桐とも、罌子桐とも云者なり、たまを剋するものは非なるべし、其形狀桐に似て、其實大毒なり、本草に、鼠の咬たる處に此油をぬればよしといへり、亦此油にからし油三分一合せ、口なし入、灯油にして光よく、ながくともるものなりといへり、亦雨衣にぬりて無類なり、今桐油がつはといへば、荏の油にてつくれども、元此油にて製する者ゆへ、桐油の名あり、亦是を漆に加へ、黑物を塗船をぬる、西土の人船にちやんをかくると云は此物なるべし、西國にてあぶらせんと呼、所により油木とも云、亦虎子桐ともいへり、貝原氏、波羅得と云木を近江にうゑて、民用をたすく、白木とも云ものなりと、日本本草に志るされたれど、近江に專らうゑて、民用を助くるものは油桐なり、平住氏が唐土訓蒙圖彙に曰、波羅得を白木といふ、江州にうゆるとする說は非なり、今江州にあるものは、卽罌子桐なり、波羅木を本草に考ふるに、白木にあらずと云、

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕烏臼木　トウハゼ　ナンキンハゼ　一名丁臼大倉州志　榕品字箋　柏大倉州志俗字　美麝蓬窻續錄　桕油樹萬病回春　木子長沙府志、獼猴桃ト同名、

罌子桐

過ギズ、單ニ栽ユル者ハ高サ二三丈ニ至ル、其皮杜仲ニ似タレドモ、皮薄ク色白シ、絲アレドモヨハクシテ、舶來ノ者ニ異ナリ、葉ハ形橢ニシテ鋸齒アリ、質厚シテ光リアリ、深綠色ニシテ對生ス、冬ヲ經テ凋マズ、春新葉ヲ生ジ、葉ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、形衛矛花ニ似タリ、後圓實ヲ結ブ、大サ南天燭子ノ如シ、初ハ綠色秋ニ至リ熟シテ淡紫色、自ラ四ツニ裂テ赤肉見ハル、肉中ニ核アリ、桃葉衛矛實ニ似ダリ、花戸ニハ金邊ナル者アリ、葉中黃斑ナル者アリ、又一種小葉ナル者アリ、樹モ亦小ナリ、一種蔓生ノ者アリ、ツルマサキト云、是扶芳藤ナリ、蔓草ノ部ニ出ス、

〔大和本草雜木十二〕罌子桐　又、荏桐トモ、油桐トモ云、ダマト訓ズルハ非也、桐ニ似タリ、其實大毒アリ、不可食、實ニ油多シ、民用ヲタスク、此油ヲヌリテ青漆ノ如ニスル法アリ、本艸ニ鼠ノ咬タル處此油ヲヌル、又曰、喉痺ニ水ニ和シテノドニ入テ探吐スベシ、或ハ子ヲスリクダキテ、ノドニ吹入テ吐スベシ皆有毒ヲ以テ病ヲ治ス、

〔和漢三才圖會喬木八十三〕油桐　罌子桐　虎子桐　荏油桐　阿布良岐利　又云太末〇中略

按油桐、江州濃州多種之搾油、大津油家販之、其功同荏油、煉成代漆用、名桐油漆、可以塗五色、常漆不能塗白色也、又加松脂、塗船槽、不水漏、名知也牟塗、

〔重修本草綱目啓蒙喬木二十四〕罌子桐　アブラギリ　アブラギ播州　アブラノキ江州　ドクリウノキ勢州　ドクヰ同上　ダマ三才圖會　ウバ土州　ドクエノキ駿州　一名膏桐通雅

江州若州ニ多ク栽テ子ヲ採リ油トス、木ノ形狀白桐ノ如シ、葉ハ三尖、或ハ五七尖ニシテ、鋸齒ナクシテ、草綿及刺楸葉ノ如シ、大サ一尺許、實ハ大サ八九分、圓ニシテ扁ク、續隨子ノ如ニシテ大ナリ、竪ニ三四條アリ、是ヲ破レバ、三條ノ者ハ三隔アリ、四條ノ者ハ四隔アリ、隔ゴトニ各一子アリ、大サ四五分ニシテ圓ナリ、大風子ト相似タリ、故ニ大風子ニ雜ヘ賣ル、宜ク撰ブベシ、コノ實大毒アリアブラミ江州　コロビ同上　ダイグハン播州ト云、油ヲドクノアブラ勢州　近江アブラ藥舖ト

注誤、○中略證類本草引云、狀如厚朴、折之多白絲爲佳、本草和名引無爲佳二字、與此同、然陶云、折之多白絲爲佳者、謂折之少白絲者非佳、多白絲者卽佳、則是二字不可刪節、古今注、杜仲、皮中有絲、折之則見也、蜀本圖經、樹高數丈、葉似辛夷、圖經、江南人謂之櫋、初生葉嫩時可食、謂之櫋芽、木可作履、益脚、

〔伊呂波字類抄　波植物附植物具〕杜仲　ハヒマユミ

〔和漢三才圖會　八十三喬木〕杜仲　思仲　思仙　木綿　櫋　和名波比末由美　昔有杜仲者、服此得道、因名之、思仲思仙皆由此義、○中略

按、杜仲本朝古有之、今亦有稱杜仲者、皮相似而無絲、入藥來於中華者佳、

〔本草一家言　二〕杜仲　倭名正木、嫩者少綿、老者多綿、凡有四種、今人家垣籬所植者、眞杜仲也、又有野生葉薄者、又有蔓生者、稱蔓正木、神書歌書所云正木葛是也、又有白葉正木、泉涌寺悲田院有之、春初葉邊紫赤面白色、至夏悉變白、冬復帶紫赤、雖奇品不耐賞、花鋪亦間有之、正木他州鄕閭呼眞弓誤也矣、眞弓乃衞矛之倭名、而非杜仲、近世襲誤以衞矛皮充杜仲、宜辨別、衞矛皮亦有絮帛似杜仲、可自採擇、

〔重修本草綱目啓蒙　二十四喬木〕杜仲　詳ナラズ　一名王絲皮藥譜　王孫友同上　亂絲種杏仙方　棉花本草彙言　鬼仙木本事方、鬼ハ思ノ誤リナルベシ、

舶來多シ、皮ノ厚サ三四分、又五六分ナルモアリ、褐色ニシテ外ハ白色ヲ帶ブ、橫ニ折レバ細キ白絲多ク出テ、絲綿ノ如ニシテ斷レ難シ、古ヨリマサキヲ杜仲ニ充ツ、故ニ和名抄ニモハヒマユミト訓ズレドモ、眞物ニ非ズ、杜仲ノ類ナリ、マユミハモト衞矛ニシキヾナレドモ、國ニヨリテマサキヲモ、マユミト呼ブ、卽方言ナリ、一名フユシバ、トコナツ、紀州イソクロギ、肥前アヲキ、豫州松山ハマツバキ、同上吉田シタワレ、上總クロギ、西國タマツバキ、仙臺常州テラツバキ、但州庭ニ栽テ籬トスル者ハ六七尺ニ

上書耳、當改作桂、不與石楠相預、凡入藥宜用石楠葉、味苦澀、和方煎湯治腹痛、積聚甚效、鄙俚往々代茗、澀味粗類眞茶、石楠花葉有少毒、殊不入藥用、讓葉亦有三四種、莖有赤青之分、葉有大小濶狹之別、其功用同、又日本艸引魏王花木志云、南方石楠野生、著實如燕覆子者、蓋指藤詔子而言、以其葉狀稍似而誤混、殊是別物、宜斷而分出、圭錄

〔重修本草綱目啓蒙香木二十三〕楠　コ。ガ。子。ノ。ハ。古歌　ヲ。ヤ。コ。グ。サ。同上　ユ。ヅ。リ。ハ。　ワ。カ。バ。阿州　ツ。ル。シ。バ。肥前　ツ。ル。ノ。ハ。肥後　一名交讓木事物異名　道木正字通　讓木同上

楠ニ數品アリ、南寧府志ニ、楠有細葉大葉、金釵香紫臭糞黃楠ト云、時珍ノ說ニ、葉如牛耳ト云ハ、大。葉。楠。ニシテユヅリハナリ、新陳相換ルノ義ヲ以テユヅリハト名ク、一說ニ丹州弓削山ニ多ク生ズル故、弓弦葉ノ義ニ因テ名クト云、唐山ニモ讓木ノ名アル時ハ、讓ルノ義ニトル者是ナルベシ、葉形長ク厚ク蔕赤シ、夏小白花ヲ開ク、柚ノ花ニ似タリ、淺黑實ヲ結ブ、紀州熊野ニハ嫩葉ヲ採リ食フ、セウグハツナト呼ブ、俚語諸木嫩葉ノ食フベキ者ヲ皆ナト呼ブ、又江州竹生島ヨリ嫩葉ヲ乾シテ貢上ス、其名產ナリ、ソノ器ニ楪綵ト銘ス、楪ハユヅリハノ和語ナリ、一種葉蔕赤カラザル者アリ、イ。ヌ。ユ。ヅ。リ。ハ。ト呼ブ、又一種小葉ニシテ、石南葉ノ如キ者アリ、ヒ。メ。ユ。ヅ。リ。ハ。ト云、紀州一名ヒ。メ。ヅ。ル。同上

〔閑窻瑣談四〕春盤○中略

杠葉は腹中のこなれあしく支るによし、酒の熱を醒して胸中の苦しきを治す、この外藥にあはしていろ〳〵に川ゆ、

〔新撰字鏡草〕杜仲波比万由美、又云屎万由美、

〔倭名類聚抄木二十〕杜仲　陶隱居本草注云、杜仲一名木綿、杜音度、和名波比末由美、折之多白絲者也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕千金翼方、證類本草上品云、杜仲一名木綿、是木綿之名出本條也、源君引爲陶

杜仲

苞及漢朝ニハ旗飾スル也、

〔萬葉集十四東歌〕譬喩歌

安杼毛敝可、阿自久麻夜末乃、由豆流波乃、布敷麻留等伎爾、可是布可受可母、

〔新撰六帖六〕ゆづる葉　家良

ゆづるはのときはの色もうづもれぬあしくま山に雪のふれゝば

爲家

春ごとに色もかはらぬゆづるはのゆづるときはも君がためとよ

〔大和本草十一園木〕ユヅリ葉　春新葉生ト、ノヒテ、後舊葉ヲツ、故ニユヅリハト名ヅク、又和名親子草ト云、コヽヲ以倭俗歳首ノ賀具トス、古歌ニモヨメリ、葉ノ莖赤、秋ニイタリテ、黑實ヲムスブ、葉ノ莖青キアリ、犬ユヅリハト云、又別ニユヅリハニ似テ冬葉アル木アリ、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕讓葉木　弓絃葉万葉　楪俗字　枕草紙云、由豆利葉、

按木高五七尺、樹葉茂盛、略似珊瑚葉而大、色稍淺、葉莖赤、開小白花、似柚柑花、結子淺黑色、大如小豆、中有仁、新葉既生、舊葉落、如父子相讓、故俗呼曰讓葉、都鄙正月鏡餈及門戶之飾用、亦取相續義、

〔本草一家言二〕楠　有二種、石楠、石楠花是也、本艸併合爲一、無的識之論、予爲之分析云、石楠花、即倭呼石楠花者是也、蓋本艸集解中所說似枇杷葉、或一苞十數花、見葉不見花、或以石葦充之者、衡岳志所謂石枏花、有紫碧白三色、花大如牡丹、亦有無花者、皆指此物而言也、曾聞京北鷹峯產一種、花葉大抵與石楠花相彷彿、但結赤實、狀如無漏子、此亦石楠花中之一種也、石楠即倭呼讓葉者是也、本艸中所說似莽草、凌冬不凋、或呼風藥、又變茶充茗而飲者、皆指此物而言也、博考之群書云、郭璞曰、爾雅梅枏條、引陸機之說云、葉大如牛耳者、亦即是也、枏楠同、杜子美枏木爲秋風被傷歌極言楠狀、可併考、林羅山集中、除夜賦有杠穀樹、訓爲讓葉、不知何據、杜字日本紀神代卷訓爲加津良、即與桂同、蓋省桂之

于呉食二茱萸條、和俗以山茶充椿、以山茶根充椿根皮者其誤也甚矣、辨見于山茶花條下、又按本草本條、以莊子楚南有大椿、以八千歲爲春秋之椿與常椿混淆爲一物者誤矣、非特漢人誤焉、我邦和歌者流、又襲用而不察也久、有諸書曰靈椿曰大椿者、有三十年而實、三年而花之說、稻若水曾云、非實有三年而花實、但以其花實耐久爲言而已、卽今世間多有之、呼毛智乃木者是也、與椿樗之椿迥別、其樹尤多壽、故莊子借以寓言、蓋云楚南則非、其常椿自可知焉、是亦不可不辨、因附著于茲、

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕椿樗

椿　タマツバキ古名河州　キヤンチン京　ヒヤンチン　チヤンチン共同上　チヤン播州　ライデンボク丹波常州　ナンジヤノキ常州　カミナリノキ野州　クモヤブリ同上　ユミギ土州　シロバゼ同上　ヒヨケノキ防州　ヒンボク同上　テンツバキ江州　ホウチン能州

一名香椿群芳譜　莊木名物法言　櫄類書纂要

椿樗ハ二物ニシテ、形狀モ大ニ異ナリ、連出シテ一條トスル者ハ誤ナリ、椿ハ本邦ニ舊ヨリ多キ者ナレドモ、昔人識ラズシテ、唐山ヨリ種ヲ取ヨセ、黃葉山ニ栽ベシト云、木ハ高ク聳ヘ梢ニ多ク枝ヲ分チ繁茂ス、春新葉ヲ生ズ、形漆葉ニ似テ長シテ數多シ、香椿ト稱スレドモ、香氣ハナクシテ臭氣アリ、雌雄アリ、雄ナル者多シテ、雌ナル者ハ少シ、雌ナル者ハ長穗ヲナシ、枝ヲ分テ多ク實ヲ結ブ、形連翹ニ似テ圓長ナリ、秋ニ至リ熟スレバ、自ラ堅ニ裂テ中子風ニ隨ヒ飛ビ落ツ、子ノ形松子ニ似テ小ナリ、莢ノ形長ク鳳眼ニ似タル故鳳眼草ト云、

〔地錦抄附錄三〕元祿年中來品々〇中略

椿樹(チンジユ)今云きやんちん

〔採藥使記中常州〕重康曰、常州ノ板子ト云フ所ヨリ椿木ヲ出ス、土人呼テナンジヤノ木ト云フ、

ユヅリ葉

〔壒嚢抄六〕正月ニ用ルシダユヅリ葉ナンド云文字如何

是モ慥ナル本說ハ不見侍共、齒朶ト書、ヨハイノヱダト書ル祝心歟、杠ヲユヅリハトヨム、杠ハ古

中略

按、椿葉似漆而初生、二三年者末分枝椏、至秋莖葉皆落盡、如立一棒、其莖脱處有窪痕、春梢生葉、樹隨長而莖葉亦隨分、經四五年者生枝椏、最易長、葉香採嫩葉啖之、相傳黄檗禪師始將來之、呼曰香椿、(ヒヤンチユン)倭名抄椿(和名豆波木)爲海石榴之訓、樗(和名沼天)爲五倍子樹之訓者並非也、凡香椿及漆葉横理透背鮮明、頗似樞葉而小、兩々繁對生、(香椿折枝有香氣、放臘汁食、漆木折枝有汁、粘人生漆瘡、)

〔大和本草十一雜木〕椿　葉ハ漆ノ樹ニ似タリ、樗ハ古來本邦ニ有之、椿ハ無之、此木近年木幡萬福寺自中華來寺僧以葉加之羹上、而助香氣、近年ハ傳ヘ植テ處々ニ多シ、其葉附枝兩々相對上下有葉、樗ノ葉ノ如シ、葉濶サ二寸長五寸計、葉正中之筋赤、食之有香氣、花ナク實ナシ、其幹直ナリ、椿根皮爲藥、其根ヨリ苗ヲ多ク生ジテ甚繁生ス、長ジヤスクシゲリヤスシ、數年ノ内大木トナル、廣地ニ多クウヘテ薪材トスベシ、若葉ヲツミテ湯ビキテアブリ煎ジテ茶トシ、或ハホシ、末シテ茶ニ點ズ、香味ヨシ、此事國史ニ出タリ、莊子曰、上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋、此木削レバ木理美シ、器材トスベシ、本邦古來椿ヲツバキトヨミアヤマレリ、順和名抄ニモ、椿ヲ誤テツバキト訓ズ、ツバキハ山茶ナリ、椿ニアラズ、凡漆、椿、樗、鹽麩木、黄櫨、其葉皆相似タリ、椿モ人ニヨリコレニ觸テ小瘡ヲ生ズ漆ノゴトシ、本草ニ椿樗一條ニノセテ不分、看之者可分別、

〔本草一家言三〕椿　樗　本一物、椿是雄木、樗是雌木、故雄者不結實、雌者結實、於是所謂植椿七年而可辨者可證焉、古人惟分爲二名而已、及考後世諸家本草、斷爲二物者誤矣、然椿之與樗其形狀有少別焉、椿似漆葉差狹長而尖、頗似秦椒葉、而長大有紋脉、葉々排生、莖赤、嗅之極臭、漢人呼爲香椿是也、唐山僧細剉其葉點之羹頭、猶本邦用嫩椒葉之屬也、樗卽結實鳳眼、黑如椒目、及熟包裂綴于四邊、與梧桐子稾鄂様一般、漢人呼爲臭樗是也、山州山科大宅村有之、土人呼狐。茶。袋。其狀與諸家本草所說相符、稻若水斷以充之、但比椿葉稍圓而不尖爲異耳、貝原損軒翁以俗稱烏山椒充之、殊不相與辨見

香椿

葉ノ秦皮葉ニ似タリ、兩葉各三四葉相對シテ、心葉ト共ニ七葉、或ハ九葉ヲ全葉トス、近年多ク實ヲ結ブ、全ク舶來ノモノニ異ナラズ、東都ノ一醫コレヲ得テ家園ニ種ユ、亦實ヲ結ブコト舶上ノ品ニ同ジ、然ルニ其葉官園ノモノヨリ微シ狹ク、一葉ノ形白菓樹ノ葉ニ似テ微シ短シ、天保十五甲辰歲、ソノ實ヲ東都ヨリ京師ニ傳ヘ種ユ、初生ノ葉ハ兩邊ニ鋸齒アリテ、和產ノ楝ニ異ナラズ、此樹年ヲ經レバ、漸ク葉ニ鋸齒ナク成ルト云フ、藥舖ニ大和種ト呼モノ眞ノ苦楝子ナリ、城州鷹ケ峯ノ官園ニ一樹アリ、ソノ形圓クシテ苦シ、常ノ楝實ハ長ミアリテ甘シ、又本邦古ハ楝ノ木ヲ以テ梟首ノ桁トス、故ニ首ヲアフチニサラスト云、又俗ニセンダンノ艾ニテ燒クト云、因テ凶事ノ用ニ供シテ吉事ニハ用ヒズ、唐山ニテハ然ラズ、廣東新語ニ、苦楝最易レ生、村落間、凡生レ女必多植レ之、以爲二嫁時器物一ト云ヘリ、

〔枕草子三〕木の花は

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとおかし、かれはなにさまことにさきて、かならず五月五日にあふもおかし、

〔安齋隨筆前編三〕一獄門ノ樗木　古き書共に、首を斬て獄門の木に掛けると云事あり、樗の木を用るは誤也、和名抄に、楝、阿布智とあり、此訓古し、樗はむかし此方になき木なれば、獄門に植べき事有べからず獄門に植しアフチハ楝の字也、何故獄門に楝を植しぞと云理は、何の書にも所見なければ詳に知れず、無證の推量の說は無益なれ共、愚私に推量するに、國言に血に穢るゝを血にあへるとも、あへ血とも云に付けて、血にアヘル意にて、楝の名のアフチといふを以て、斬首を掛ん爲に、此樹を獄門の前に植へたる歟、〇下略

〇按ズルニ、楝樹ニ梟首スル事ハ、法律部上編死刑篇ニ詳ナリ、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕椿同杶　虎目樹　大眼樹　今云知〇也〇牟〇知〇牟〇唐音之誤也　樗臭椿也、和名沼天、　栲山樗也〇

按楝其子入藥、中華四川之產佳、故名川楝子、如川芎川烏頭之類亦然、其材微赤色有模、比於桐堅、比於欅軟、可以旋箱、此樹易生易長、故多栽塘堤、

〔本草一家言　三〕楝　苦楝　和名阿不知、和名唐梅檀、上總州海上鄉名、今藥家稱大和種、綱目以楝附苦楝之下、爲一物、蓋其誤、與柏附側柏之條同矣、楝和名阿婦知、俗稱之也、久世武多武、俗略稱世武多武、此木朽腐、而其骨節膠液凝結有香氣、似奇楠香、故有瑞羅香美名、其實非梅檀、稱苦楝、則其子味尤苦者、今藥家稱大和種者是也、其實比常楝、則其狀圓扁味甚苦、熟則黃色、纍々如鈴、故有金鈴子之名、入藥劑用苦者不用甘者、且如金鈴子者、甜苦二物之通名也、凡如赤梅檀黃栂白栂紫栂之諸香出於西域諸蕃、雖西土又無之、況於本邦乎、宜删去梅檀稱、上總州海上村所產者、實圓味苦、木皮細膩不麁、色靑、本草所謂靑皮楝是也、如常楝皮色赤褐、本草赤皮楝也、土人製木履者用、不入藥用、

〔重修本草綱目啓蒙　二十四喬木〕楝　アフチ古名　クモミグサ古歌　センダンノキ　一名欄通雅

水磨櫛櫳輟耕錄　山楝子常山條下　楝樹子附錄方攀　楝實外臺祕要　楝木子同上　土楝樹子先醒齋筆記　楝

樹果外科正宗　石茱萸修治花落ノ子　花一名曉客事物紺珠　川楝子一名仁棗輟耕錄　川鈴子醫學入門　川苦楝醫學正傳

春月新葉ヲ生ズ、形南天燭葉ノ如ニシテ、鋸齒光澤アリ、初夏枝梢ゴトニ長穗ヲナシ、多ク枝ヲ分テ花ヲ開ク、五瓣ニシテ錢ノ大ノ如シ、淡紫色、木ニ雌雄アリ、雌ナル者ハ後實ヲ結ブ、形圓ニシテ微長、大サ四五分、初綠色、秋ニ至リ熟シ黃色ニシテ下垂ス、一種圓實ナル者アリ、コノ二品共ニ山楝子ナリ、藥ニ入用ユル者ハ川楝子ナリ、和產詳ナラズ、舶來多シ、乾實ノ大サ六七分ニシテ形圓ナリ、味苦シ、故ニ苦楝子トモ云、山楝子ハ甘ヲ帶テ純苦ナラズ、釋名ニハ苦楝ト金鈴子トヲ一物トス、輟耕錄及儒門事親ニハ、金鈴子ト川楝子トヲ二物トス、

增、川楝子ハ長崎官園ニ一樹アリ、春月新葉ヲ生ズ、大抵楝葉ノ如ナレドモ、葉邊鋸齒ナクシテ、大

センダンと云義不詳、また旃檀をも俗に呼びてセンダンといふ、これも二物にして一名なる也、

〔倭訓栞中編一阿〕あふち　倭名抄に棟をよめり、萬葉集に相市之花と見ゆ、今俗せんだんといふは焼て香氣あるをもて、和の赤旃檀と勅名を賜はりしによるといふ、華嚴經に旃檀一銖を焼ば、小千世界に薫ずと見ゆ、諺に旃檀は二葉より香はしといふも是也、枕草紙にあふちの花いとをかし、かれ花に咲て必五月五日にあふもをかしと見えたり、名義是成べし、とき反ち也、其時にあふをいふ、韻會に、今人作粽、幷戴棟葉、五色絲皆汨羅遺俗といへり、今も田舍には端午に軒にさすともいへり、歲時記に、凡一年中花信風二十四番、始于梅花、終于楝花といへり、楝のすそごは表薄色裏青色也といへり、藤原明衡の詩に、樗花菖葉自回辰と見え、萬葉集にも樗をよめるはあらずといへり、此字をよめるも、本草に五月五日、俗人取樗葉佩之避惡氣といふによれり、樞をよむは樗を惡木なりと注せるによれる倭字也、新撰字鏡には、樋もよめり、松岡翁の説に、楝と苦楝とは別也、苦楝は近年和州より出たりとぞ、今黄楝樹といふ物にや、

〔萬葉集五雜歌〕伊毛何美斯阿布知乃波那波、和利奴倍斯、知何那久那美多、伊摩陀飛那久爾、

〔萬葉集十夏雜歌〕詠花

吾妹子爾、相市乃花波、落不過、今咲有如、有與奴香聞、

〔大和本草藥木十一〕楝　和名ヲアフチト云、近俗センダント云、旃檀ニハ非ズ、其子ヲ苦楝子ト云、金鈴子トモ云フ、藥ニ用ユ、中華ニテ川ノ國ヨリ出ルヲ良トス、川楝子ト云、時珍云、楝ハ長ズル事甚速ナリ、三五年即可作椽ト云、其葉倭方ニ用テ虫積霍亂ノ藥トス、中華ノ方書ニハ未見、此方、只疝氣ノ陰囊ニ入テ痛ムニ用ル事ヲ時珍イヘリ、日本古來罪人ヲ梟首スルニ此木ヲ用ユヘニ佗材ニ不用、罪人ノ首ヲ楝ノ木ニカケシ事、源平盛衰記等ニモ見ヘタリ、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕楝あふち俗云せんだん　香楝　苦楝　實名金鈴子　俗云雲見艸○中略

又清商生實ヲ長崎ヘ持來ル者アリ、形榧實ノ如ニシテ肥潤ナリ、長サ一寸餘、皮ハ綠色、熟スルニ至リテモ色變ゼズ、故ニ靑果ノ名アリ、能魚毒ヲ解シ、骨哽ヲ治ス、核ハ六稜ニシテ厚ク硬シ、破レバ三孔アリテ、各細長仁アリ、故ニ新鮮ナルヲ下種スレバ、一核ニシテ三苗ヲ生ズ、初メ生ズル葉ハ細葉ノ胡枝子葉ノ如キ者兩對ス、其上ニ出ル葉ハ加條ノ葉ノ如ク、細鋸齒アリ、互生ス、樹已ニ長ズルモノハ、變ジテ鋸齒ナク、無患子ノ葉ノ形ノ如ニシテ短ク厚シ、枝梢ニ花ヲ開キ實ヲ結ブ、然レドモ寒地ニテハ枯レ易シ、長崎崇福寺及ビ薩州ニハ實ヲ結ブ者アリ、自生ハ本邦ニナシ、核ヲ採リ、咽喉腫痛骨哽ヲ治ス、今靑果膏トテ、ラクガンノ形ノ如ク、錢許ノ大ニ製シ舶來ス、淡綠色或ハ淡黃色、ヨク魚毒骨哽及ビ傷食ヲ治ス、

〔八僊卓燕式記〕小菜八品〇中略

橄欖　福州ヨリ產ス、木ノ實ナリ、此ヲ生ニテ醬油ニ漬出ス、此實鹽漬又ハ生ニテモ長崎ヘ多來ル、橄欖ノ樹、長崎崇福寺內竹林院ニアリ、年々實ヲ生ズ、他邦ニ植レドモ生長シガタシ、

楝

〔本草和名木十四〕楝實仁諝音義作楝、音錬、和名阿布知乃美

〔倭名類聚抄木二十〕楝　玉篇云、楝音錬、本草云、阿布智、其子如榴類、白而黏、可以浣衣者也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕本草和名木部下云、楝實、仁諝音義作楝、音錬、和名阿布知乃美、〇中略　說文、楝木也、郭注中山經云、楝木名、子如指頭、白而黏、可以浣衣也、顧氏蓋依之、今玉篇木部作木名、子可以浣衣、係後人刪節、

〔伊呂波字類抄阿植物附植物具〕楝音錬、アフチ、其實如指頭、白而黏、可以浣衣者也、　樗　楝實アフチノミ

〔東雅樹竹十六〕楝アフチ　萬葉集に相布之花とゑるしてアフチと讀みけり、倭名抄に玉篇を引て其子可以浣衣者也、和名本草に、アフチといふと注したり、アフチの義不詳、楝は卽苦楝、其子は金鈴子といふ、俗にセンダンといふ是也、近俗樗の字讀てアフチといふは、此物をいひしなるべし、俗に

橄欖

其自漢來者質堅色黃、陶隱居所謂出宜都建平細實黃者呼爲雞骨常山是也、又海州常山出蘇頌圖經、葉似楸葉、七八月間著花紅白色、花後結實碧色、似麥門冬實、和名臭木、卽桐條臭梧桐是也、和方用以截瘧有效、又有茗葉常山、出蘇恭唐本艸高者不過四五尺、葉似茗狹長、滑澤氣又極臭、洛北矢背大原邑多產之、鄕名小臭木、本艸有葉對生文、而小臭木葉不相對爲異、然諸草木多有對生偏生二種、如黃精及貫衆之類不可必拘對生也、又有天台土常山、出蘇頌圖經詳其形狀、則今之木甘茶是也、木甘茶、莪花師呼額草、花碧色、葉甘味極甜、八閩通志云、常山俗名甜葉、又指此也、又有紅花者、莪師名紅額艸、比木甘茶葉味淡薄、又有阿慈佐矣、卽花譜所謂繡毬花也、和醫相傳、又能截瘧、以上三物、俱是土常山宜通用、

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕常山　蜀漆

コクサギ　ノダサ城州但馬　クサギ羽州　ジヤウザン同上

ヘミノチヤ越前　トモメ藝州　トウメウ備前播州　チヤビシヤギ阿州　センズイ熊野

常山　一名翻冒木輟耕錄　苗一名漆柴雖經集註

常山ハ根ノ名、蜀漆ハ苗ノ名、諸州深山皆多シ、小木ニシテ草ノ類ニ非ズ、高五六尺、或二三尺、又丈餘ナル者アリ、形梔子葉ニ似テ薄ク大也、又辛夷ニ似テ光リアリ、切レバ臭氣甚シ、三月葉間ニ一二寸許ノ穗ヲ出シ花ヲ簇生ス、大サ三分許、四瓣淡黃色ナリ、是茗葉ノ常山ニシテ眞物ナリ、藥家ニ舶來ノ常山アリ、同物ニシテ卽雞骨常山ナリ、形細キヲ雞骨ト云、升麻沈香ニ雞骨ノ名アリ、義又同ジ、今ハクサギノ小木ノ根ヲ黃色ニ染メ乾シテ、常山トナシウル者ハ非ナリ、又ヤマアヂサイノ根ヲ黃色ニ染テ、僞リ賣ル者アリ、只コクサギノ根ヲ眞トスベシ、

○按ズルニ、海州常山、土常山ハ別ニ各、其條アリ、

〔重修本草綱目啓蒙二十夷果〕橄欖　通名　一名翠顥行厨集　靑子同上　回甘子事物異名　訶梨子　南威　次斯共同上　味諫通雅　橄棪同上　威擘典籍便覽　橄梠北戸錄　忠臣事物紺珠　堊果同上

暖地ノ產ニシテ、嶺南地方ニ多クシテ、大木トナルト云、實ヲ鹽藏スル者舶來多シ、又蜜漬モ渡ル、

スル說ハ非ナリ、

〔新撰字鏡 木〕蜀漆山宇豆伎乃苗

〔本草和名 草十〕蜀漆葉　恒山苗也、一名恒山𦨭、出釋藥性和名久佐岐一名也末宇都岐乃波、

〔倭名類聚抄 木二十〕蜀漆附恒山　新抄本草云、蜀漆和名久佐木、一云夜末宇豆木乃禰、恒山苗也、恒山、和名宇久比須乃以比禰、一云久佐木乃禰、

〔箋注倭名類聚抄 木十〕本草和名草部下、蜀漆下有葉字、禰作波、按本草無葉字、而本條云、五月採葉陰乾、是入藥用葉、御覽引吳普云、蜀漆葉一名恒山、則知本草本有葉字、無者係宋人所刪、輔仁所見唐本、故有葉字、與吳普合、本草和名載云、蜀漆葉、訓爲也末宇都岐乃波、而此引無葉字者、似源君以非藥用所刪去、則和名乃波二字、亦宜纂節而改作乃禰、非是、其恒山苗也四字、亦本條之文、非輔仁注語、源君引新抄本草載之非是、千金翼方、證類本草、作常山苗也、蓋宋人避眞宗諱所更改也、吳普云、如漆葉與藍菁相似、又引范子計然云、蜀漆出蜀郡、廣雅、恒山、蜀桼也、桼正字、漆假借字、王念孫曰、葉曰恒山、苗曰蜀桼、其實一物也、蜀本草圖經、乃謂常山葉名蜀漆、本草衍義、又謂常山爲蜀漆根、皆誤矣、○中略　本草和名作和名久佐岐、一名宇久比須乃以比禰、此乃禰二字亦恐衍、漢書地理志、武陵郡佷山、孟康曰、音恒、出藥草恒山、

〔東雅 樹竹十六〕蜀漆クサキ○中略　或人の說に、此木中心空疏(ウツボ)なれば、ウツギといふといへり、萬葉集に、卯花(ウノハナ)と字の花など見えて、卽今卯の花といふものは、其もの丶花をいふなり、卯花の義は、前の月名の註に見えたり、蜀漆をば東璧本草に草部に錄したり、此にいふものと異なりと見えたり、こゝにいふクサギは、臭桐または臭梧桐などいふ物也、臭桐は外科百効全書に見え、臭梧桐は群芳譜に見えたり、

〔本草一家言 二〕常山　蜀漆　根爲常山、葉爲蜀漆、種類最多、皆係于木屬、本艸誤收入草部、今移于此、

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕蘗木　キハダ（木皮黄色ナル故ニキハダト名ク）　一名山屠（輟耕錄）　暖木（訓蒙字會）　根黄（發明）

附方　增一名黄皮（活幼全書）

寒國ノ深山ニ生ズ、葉ハ呉茱萸葉ニ似テ薄ク、又漆葉ニ似タリ、斷レバ臭氣アリ、皆兩對シテ生ズ、夏月ニ枝上ニ細黄花ヲ開ク、雌雄アリ、雌ナル者ハ實ヲ結ブ、形北五味子ノ如ニシテ、縱ニ五稜アリ、熟スレバ色黒ク味苦シ、俗ニ四國米（シコノヘイ）ト云、殺蟲ノ藥トス、蘗木皮藥舗ノ者ハ、京師エハ北山ヨリ出ス、享保年中朝鮮ノ蘗木來リ官園ニアリ、今ハ大木トナル、形狀ハ和產ニ異ナラズ、只葉色潤ヒアリテ美シ、唐山ニテモ朝鮮ノ產ヲ上トス、皮ヲ採リ藥用トス、本草原始ニ、川黄蘗肉厚而色黄、山黄蘗肉薄而色淡ト云リ、今京師藥舗賣ル所亦二品アリ、木曾山中ヨリ出スヲ美濃皮ト稱シ、上品トス、是川黄蘗也、藥用染料共ニ良トス、江州葛川ヨリ出ス者ヲ北山ト稱ス、藥用染料共ニ下品トス、是山黄蘗ナリ、

增、黄蘗ノ實ヲ藥用トスルコト諸本草ニ載セズ、和方書ニ用テ蟲ヲ殺シ、腹痛ヲ治シ、疳疾勞瘵ノ藥トス、コレヲ四國米（シコノヘイ）ト云フ、其形五味子ニ似テ、黒色ニシテ味苦シ朝鮮ニハ鷹ノ藥トス、鷹鶻方ニ、若喘急、濱藥實槌碎裹飼ト云ヘリ、大和本草ニシコノヘイハ蠻語ナルベシト云ハ誤ナリ、

一種ニナギキト云アリ、近山ニ自生多シ、小木ナリ、全葉ノ形香椿（ヒヤンチン）ニ似テ、一葉ノ形楝（センダン）葉ノ如シ、黄色ヲ帶テ葉蔕赤シ、葉苦シテ黄蘗ノ如ク、葉形モ相似タリ、故ニ大和本草ニ黄蘗秦皮苦木ノ三物ハ葉相似テ辨ジ難シト云ヘリ、卽チ救荒本草ノ黄楝樹ナリ、曰葉似初生椿樹葉而極小又似楝葉色微帶黄、開花紫赤色、結子如豌豆、大生青熟亦紫赤也、葉味微苦ト云ニ能ク合ヘリ、

又大峯山ノダラスケハ、黄蘗粉一味ヲ水ニテ煎ジツメタルモノナリ、

檀桓

キハダノ木ノ根旁ニ生ズル塊ニシテ、茯苓ノ如キ者ナリ、舶來ナシ、和產モ詳ナラズ、蘗木ノ根ト

蘗木

名呉椒、木葉似椿而細、葉頭圓且厚有紋、嗅之似食茱萸氣、結子五六十顆、攢簇一處、其子細小、生靑熟赤、狀似山椒、而本出于呉地、故名呉茱萸、我邦處々有之、山城梅宮傍多有之、故號其地曰呉茱萸林、家園移來、或插捍皆活、但雖結子、爲梅雨所壞腐、不至赤熟而落、亦一恨也、勢州津所產者、結子赤熟色好、宜投藥劑、食茱萸一名欓、一名欓子、一名艾子、詳見楊升庵集、和名鴉山椒、四方山中間有之、葉似呉茱萸葉而薄尖、氣臭、子比山椒甚大、烏好集食、損軒大和本草、以爲欓者非也、殊非欓類、詳辨于椿欓條、山茱萸卽久美之一種也、久美有三種、本草所謂胡頹子、木半夏、及山茱萸也、山茱萸子似胡頹子形長色赤、核軟而頭尾尖、葉圓且薄、攝之大坂傳植漢渡種子、生活、予親目擊之、此卽眞山茱萸也、其他未見野生者、宜繁植漢種以供藥劑、稻若水云、本草云、山茱萸核有毒、醫家忘而去之、一日讀沈括夢溪筆談曰、山茱萸之功在于核、今醫去之者不知其所以也、宜從沈活之說可併核用、與其言瓜蔞仁去核用、獨王肯堂準繩云、瓜蔞仁、帶核、不用無功、

〔新撰字鏡　木〕黃蘗（支○波○太○）

〔本草和名　木十二〕蘗木（楊玄操音補麥反）一名檀桓、（根名、陶景注云、是子蘗、又一種也、）子蘗、一名山石榴、一名小蘗刺蘗、（蘇敬注云、此非小蘗）檀桓一名蘗○蘗恐蘗誤根、一名棹楨、一名檀無根、一名檗木、（出釋藥性）一名黃木、（出兼名苑）和名岐波多、

〔倭名類聚抄　十四染色具〕蘗　兼名苑云、黃蘗（補麥反）一名黃木（和名岐波太）

〔箋注倭名類聚抄　六染色具〕按說文、檗黃木、兼名苑蓋本之、蜀本圖經云、黃蘗樹高數丈、葉似呉茱萸、亦如紫椿、皮黃、其根如松下茯苓皮、緊厚二三分、鮮黃者上、圖經云、葉經多不凋、皮外白裏深黃色、充岐波太爲允、○中略按依例岐波太三字、當在補麥反下、

〔伊呂波字類抄　岐植物附植物具〕蘗（キハタ、傳厄二反、補麥一名黃木、）　蘗木（楊玄操音補麥反）

〔和漢三才圖會　八十三喬木〕黃蘗　黃栢（俗稱）　蘗木　和名岐波太　今專曰黃栢○中略

按黃栢藥用外可以染黃色、日向加賀之產最良、和州吉野奥州會津之產次之、

テ培育スル者ハ子ノ蔕巨クシテ、漢産ノ細蔕ナルニ異ナリ、最トモ辨別シ易シ、

〔採藥錄五〕呉茱萸

今處々栽ル者卽漢種也、秋子ノ熟タルヲ取リ、其儘陰乾スベシ、舶來ノ者ニ比スルニ、稍小ニシテ味少シ、小異アルノミ、

〔紀伊續風土記物産五〕呉茱萸本草、本草和名ニ加良波之加美、和名抄加波々之加美、新撰字鏡ニ古留須伊、康頼本草ニ伊太知支、牟婁郡にてハビテコブナ、牟婁郡山中所々に産す、又漢種朝鮮種等人家稀に栽う、

食茱萸本草、本草和名於保多良、牟婁郡大島にてチダラ、又男タラ、牟婁郡三前郷大島に産す

〔本草和名十三木〕食茱萸崔禹云、功能與呉茱萸同、一名藙出馬琬和名於保多良乃美、

〔倭名類聚抄二十木〕食茱萸　馬琬食經云、食茱萸、和名於保太良

〔箋注倭名類聚抄十木〕按、本草和名云、食茱萸、崔禹云、云々、又云、一名藙、出馬琬、是可證馬氏食經載食茱萸也、○中略按、藙是呉茱萸之別名、見本草經、輔仁所引、恐誤、

〔重修本草綱目啓蒙二十二味〕食茱萸　オホタラ和名抄　カラスノサンシヤウ　タトダマ紀州　ヤマホウ勢州　オホザンシヤウ城州大悲山　クマザンシヤウ伯州

山谷或ハ深林中ニアリ、木ノ高サ二三丈、枝條繁茂ス、木ニ尖刺多クシテ楤木ニ似タリ、春新葉ヲ生ズ、山胡桃葉ニ似テ、狹長鋸齒アリテ刺多シ、凡ソ一葉ニ三十餘ノ小葉排生ス、夏枝梢ニ花ヲ開ク、數百簇リテ崖椒ノ花ノ如シ、實モ亦相似タリ、內ニ圓子アリ、椒目ノ如シ、本邦ニテハ食用セズ、鳥鴉集リ食フ、故ニカラスノサンシヤウト呼ブ、一種花アリテ實ナキ者アリ、是ヲハナブシト呼ブ、枝ニ刺ナク葉形モ微ク異ニシテ、鋸齒細ナリ、

〔本草一家言三〕呉茱萸　食茱萸　山茱萸、雖名同物各異也、和邦訓茱萸爲久美、故不識者誤解三種以久美之屬、非也、予分析之、山茱萸宜訓爲久美、其佗呉食二茱萸、皆椒屬也、殊非久美屬也、呉茱萸一

〔本草和名 十三木〕呉茱萸、一名藙(仁諝音毅) 一名欓子(仁諝音欽、出陶景注) 一名摋(出養性要集) 一名艾子(蜀人名之、是藙字訛也、出稽疑) 和名加良波之加美、

〔倭名類聚抄 二十木〕呉茱萸 本草云、呉茱萸、(朱臾二音、和名加波々之加美、)

〔箋注倭名類聚抄 十木〕千金翼方、證類本草中品載之、○中略 本草和名云、呉茱萸和名加良波之加美、秦椒和名加波々之加美、源君所訓、恐誤、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二味〕呉茱萸 カハハジカミ(和名抄) 今ハ通名 ハブテコブラ(紀州若山) ハビラコブラ(紀州熊野) 一名九日三官(輟耕録) 辟邪翁(典籍便覧) 插筵(名物法言) 呉椴(名医類案) 呉萸(集験良方) 藥茱萸(正字通)

典籍便覧ニ、凡蒲荀花椒(サンシヤウ)呉茱萸皆招蛇ト云時ハ、紀州雲州ニテハブテコブラト呼ブ者ハ非ナリ、ハブテコブラハ蠻國ヨリ來リテ、蛇毒ヲ解スル者故ナリ、享保年中ニ漢種渡ル、木ノ高サ丈餘、枝旁ニハビコリ、又根旁ニ蘖(ヒコバエ)條叢生ス、分チ栽ユベシ、本根ヲ移セバ枯レ易シ、春新葉ヲ生ズ、形漆(ウルシ)葉ニ似テ大ニシテ斂少シ厚シテ深緑色短毛アリテ臭シ、皆對生シテ秦皮ノ葉ノ如シ、夏月枝梢ゴトニ花ヲ開ク數百簇リテ崖椒(イヌザンシヤウ)ノ如シ、黄白色後實ヲ結ブ、大サ二分餘、扁シテ五稜アリ、紫赤色ニシテ刺ナシ、稀ニ黒子アリ、椒目(サンシヤウノクチ)ノ如シ、此木諸國ニ自生アリ、長州防州紀州殊ニ多シ、一種粒小ナル者アリ、今舶來ノ者粒小シ、時珍ノ説一種粒大、一種粒小、小者入藥爲勝ト云、粒大ナル者ハ臭氣甚シテ、湯ニ泡セザレバ服シ難シ、頌ノ説ニ、粒小者是呉茱萸粒大者是食茱萸ト云フ、或説ヲ擧グルハ非ナリ、

増、集解、桓景隨費長房云云、五雜組云、九日佩茱萸、登高飲菊花酒、相傳以爲費長房教桓景避災之術、余按戚夫人侍兒賈佩蘭言在宮中、九月九日食蓬餌、飲菊花酒、則漢初已有之矣、不始於桓景也、

舶來ノ呉茱萸ハ小粒ナリ、故ニ奸商輩ノ呉茱萸中ノ小粒ナル者ヲ混ジテ售ル、然レドモ本邦ニ

用二甖間一結レ子、青綠色、皮皺、曝乾、味與二樹椒一同、

冬山椒

〔和漢三才圖會 八十九 味果〕冬山椒（ふゆさんせう） 俗稱

本綱、蘇頌曰、秦椒初秋生レ花、末結レ實、九月十月采レ之、

按有二冬山椒者一、其葉大而冬實熟者、此秦椒之別種也、人以爲レ珍、然不レ如二夏山椒氣味佳者一、時珍未レ見レ之乎、蘇頌之說以爲レ不レ然者非也、

椿山椒

〔和漢三才圖會 八十九 味果〕椿山椒（うさんせう）

本綱、蘇頌曰、東海諸島上有レ椒、枝葉皆相似、子長而不レ圓、甚香、其味似二橘皮一、島上麞鹿食二其葉一、其肉自然作二椒橘香一、

按俗稱二椿山椒一者是也、處處希有レ之、枝葉子皆相似、而其香氣似二柚橘之類一、不レ上品、但其子長而不レ圓者少異而已、

崖椒

〔和漢三才圖會 八十九 味果〕崖椒（のさんせう　いぬさんせう） 野椒 俗此亦名二犬山椒一

本綱、崖椒葉大二於蜀椒一、不二甚香一、而子灰色不レ黑無光、野人用炒二雞鴨一食、　椒紅 辛熱　治二肺氣上喘兼欬嗽一

按崖椒生二原野一、其樹刺葉實皆類二川椒一、但葉稍大、色深綠不レ潤、開二細花一結レ子、大如二綠豆（ブントウ）一而攢生、末二紅熟一而開レ口、味苦微有二椒氣一、其目黑而不二光澤一、此亦名二犬山椒一、凡物與二其似一而賤劣者皆稱レ犬、稱レ鳥、犬豆、犬綠豆、鵝豌豆之類也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二 味果〕崖椒　イヌザンシヤウ

山野ニ自生多シ、葉ハ尋常ノ山椒ノ葉ヨリ狹長ニシテ尖リ、數多シテ木ニ刺多シ、二三尺ノ小木ニモ花實アリ、大ナル者ハ高サ丈餘ニ至ル、夏月枝梢ニ小花數百簇リ開キ傘ノ如シ、後實ヲ結ブ形常椒ニ同ジ、葉實共ニ臭氣アリテ、食用ニ堪ヘズ、樹皮ハ和方ニ用ユ、隱名千葉皮ト云、

蔓椒

居氏以神武天皇御歌波之加美爲薑者、未攷皇國古無是菜也、〈○中略〉證類本草木部下品引唐本注、不載此所引文、引陶隱居云、出蜀都、本草和名同、蓋源君誤引、亦當作都、

〔重修本草綱目啓蒙　二十二味〕蜀椒　ナルハジカミ〈和名抄〉　フサハジカミ〈同上〉　アサクラザンシヤウ　一名峡椒〈事林廣記〉

唐山ニテハ蜀ノ國ノ山椒ヲ上品トス、故ニ蜀椒ト云フ、本邦ニテハ、アサクラザンシヤウヲ上品トス、蜀ノ國ノ種ニハ非ザレドモ、蜀椒ノ名ヲ借リ用ユ、コノ品元但州朝倉ヨリ出ル故、アサクラザンシヤウト云フ、今ハ丹波ニ多ク傳ヘ種テ、其地ノ名產トナレリ、攝州有馬ニモ多ク栽ユ、故ニ常椒ヲヒンシヤウ、或ハビンシヤウト呼ビ、下品トス、今藥家ニハ朝倉ザンシヤウノ子ヲ去リ、殼ノミヲ賣ル、葉ハ常椒ヨリ大ニシテ、木ニ刺ナシ、實ハ常椒ヲ三ツ合セタル大サニシテ、辛味多ク、香氣多シ、コノ木早ク枯レ易シ、故ニ多ク接換ス、

〔本草一家言　三〕蜀椒無刺辨

西土書謂、上好山椒爲蜀椒、蜀產最爲辛辣故也、卽和稱朝倉者是也、或疑本草言、蜀椒有刺、今朝倉之產無刺、不合本草文、是拘其末忘其本、西土所以貴蜀椒者、以其味辛辣異於他產也、我東華之山椒無如於朝倉產、此與貴蜀椒之意相符合、其刺之有無、棄而不論而可、又按竹中通庵古今養生錄云、薩州有無目山椒、

〔倭名類聚抄　二十木〕蔓椒　本草云、蔓椒、〈和名、以多知波之加美、一云保曾木、〉

〔箋注倭名類聚抄　十木〕千金翼方、證類本草下品載之、下總本有和名二字、字鏡、椒訓曾保木、

〔重修本草綱目啓蒙　二十二味〕蔓椒　イタチハジカミ〈和名抄〉　ホソギ〈同上〉

和產詳ナラズ、崖椒ノ類ニシテ、藤蔓ノ如クナルト見ユ、一種嶺南ニハ蔓生ノ椒アルコト、正字通ニ見ヘタリ、曰ク、廣東椒蔓生者、冬月取椒藤置土坎中、用稻草覆之、次年春發坎取藤節有萌芽者種

蜀椒

者、皮厚而其味爲劣、

〔佐渡志 物産 五〕秦椒　サンシヤウ

山野ニ多シ、雄ヲ花サンシヤウト云、雌ヲ實サンシヤウト云、延喜式ニコノ國ヨリ貢スル所ノ藥品ノウチ蜀椒見ヘタリ、今ノサンシヤウノコトニヤ、一種崖椒方言イヌサンシヤウハ食用ニタヘズ、

〔紀伊續風土記 物産 五〕秦椒(サンシヤウ)本草、本草和名、加波々之加美、醫心方古布之波之加美、京本延喜式クレハシカミ、新撰字鏡鹿椒、又伊太知椒、本草和名和名抄ニ蘡椒の名とす、延喜式典藥式に、紀伊國秦椒三升とあり、今諸郡に皆あり、中にも那賀在田兩郡の山中より多く出す、

竹葉椒(フユサンシヤウ)本草、牟婁郡にて不斷山椒、　各郡山中に自生多し

蜀椒(アサクラサンシヤウ)本草、本草和名ニ布佐波之加美、又奈留波之加美、　延喜典藥式に、紀伊國蜀椒五升とあり、今各郡皆產すれども、秦椒の如く多くはなし、

崖椒(イヌザンシヤウ)本草　山胡椒(ヤマカウバシ)本草　右二種各郡山野に多し

〔倭名類聚抄 十六 薑蒜〕蜀椒　蘇敬本草注云、蜀椒音蕉、和名奈留波之加美、一云、不佐波之加美、生蜀郡、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 四 鹽梅〕本草和名云、和名布佐波之加美、不載奈留波之加美之名、今俗通呼山椒、按椒古單呼波之加美、蓋波之加美良之省、波之者、謂蘗花也、今俗轉呼波勢留、如熬稻粟令米蘗花、名曰波勢、是也、加美良者、韮之古名、韮條辨之、椒子熟則罅坼蘗花而核出、其皮味辛辣、與韮比、故名波之加美良、省云波之加美也、神武天皇御歌所云宇惠之波士加美久知比比久、即謂椒也、又鯢魚訓波之加美宇乎者、以是魚有椒氣也、是可以證單言波之加美者之爲椒也、後韮自唐國至、其辛與椒相埒、故名久禮乃波之加美、即吳椒之義、是菜爲人家常用、遂專波之加美之名、不復呼久禮之名、於是別呼椒爲奈留波之加美、又爲不佐波之加美、其云奈留者、謂結實、云不佐者、爲房離離之謂也、本

雄サン椒ナリ、一種フ。ユ。ザ。ン。シ。ヤ。ウ。アリ、紀州ニテフ。ダ。ン。ザ。ン。シ。ヤ。ウ。ト呼ブ、山中ニ自生アリ、木大ナル者丈餘ニ至ル、又數尺ナル者モ實ヲ結ブ、竹葉ノ如キ葉五七箇ツク者一葉ナリ、常椒ノ葉形ニ異ナリ、樹葉共ニ扁大ナル刺多シ、夏實ヲ結ブ、味辛シテ微臭アリ、冬ヲ經テ落ズ、コレ蘇頌ノ説ノ竹葉椒ナリ、土州ノユ。ザ。ン。椒。コノ物ト形狀異ナラズ、四月嫩實ヲ採リ筍ニ加ヘ食フ、柚ノ氣アリ、故ニユザンシヤウト云フ、亦竹葉椒ナリ、

〔草木六部耕種法 十九 需實〕山椒(サンセウ)ハ丹波但馬兩國ノ產ヲ極良ノ上品トス、俗ニ淺倉山椒ト稱スル者是ナリ、此ヲ作ルニハ、宜ク此兩國及作州津山產ノ種子ヲ植ベシ、他國ノ山椒トハ、其枝葉ノ形狀モ格別ニ異ナリ、　此ヲ植ルニハ、眞土ノ肥地ヲ精細ニ耕シ、饒ニ糞苴ヲ耙錯(キリマゼ)ヘ、良種子ノ自ラ口ヲ開タルヲ密閉(キラモラサ)ズ貯ヘ置テ、春分後ニ晴天ナラバ苗地ニ水銃ヲ用テ輕ク水ヲ灑ギ、麻子(アサノミ)ヲ蒔ガ如ク疎ニ蒔付テ、上ニ臘土ヲ一寸許摻テ少シ押シ付ケ置キ、時々水ヲ灑テ恒ニ畦ヲ乾燥セシムルコト無レ、生ヒ出テ其苗六七寸ニ成長セシ時ニ、豫テ植地ヲ調理置テ、雨降ル日ニ移栽ベシ、籠ヲ用テ根ノ土ノ附タルヲ、一坪一本ヅヽ植ルヲ法トス、此物ハ人ノ手風ニ觸コトヲ嫌フ、能ク心ヲ用フベシ、活著テ後、時々草ヲ耘リ成長セシメテ、寒中ハ根本ニ小便(セウベン)甕(ミカ)〈甕チ圃ニ入テ、久シク此レナ小便所ニ浸シ置タル者〉ナリ、一升ヅヽモ盛置ベシ、此ノ如クスルトキハ寒氣ニモ傷マズ、勢能ク繁衍シテ、四五年ノ中ニ實ヲ結ブニ至ル、　山椒漬製法ハ、其實未熟ニシテ軟ナル時ニ採リ、一夜清水ニ浸漬テ其苦味ヲ去リ、籮ニ揚テ水氣ヲ瀉(タラ)シ、其後樽ニ納テ煮鹽汁ニ漬ルナリ、其以後ニテモ半黃熟シタル梅子ヲ錯交トキハ、兩方共ニ其味甚美ナリ、

〔雍州府志 六 土產〕山椒實　出自但馬國朝倉者爲佳、京師富小路賣之、

山椒皮　洛北鞍馬土人、山椒木不擇大小、各三寸許切之、入大釜煮之、而後剝其皮、以葭條插之賣市中、買者去串再浸水、以刀斷龜皮、細剉漬醬汁而食之、或精藏亦可也、今細剉日乾贈遠方、又出自丹波

毎用取出以後亦如此、否則變色味、

〔本草一家言　三〕秦椒竹葉椒之辨

秦椒諸家方書多載之、我邦醫不照綱目諸説、合蔓椒與蜀椒爲一物、漫以朝倉充之、此原因考索之麁、味審讀秦椒本條、與蜀椒之生熟不同時、葉又長大、形味稍異、葉不相似、本條云、秦椒十月熟、實極大、是分明、今之稱多山椒者是也、葉狹長稠密、故有竹葉椒之名、西土書、陳淏子花鏡、范弘與籍便覽、以竹葉椒爲番椒之別名者誤矣、是蜀椒秦椒之辨也、用者從方擇用而可、

崖椒蔓椒之辨

崖椒蔓椒、本是一物、非崖椒之外別有蔓椒也、崖椒和稱犬山椒者是也、好生於廣原崖坡之上、此物係於野生、稱野椒久可也、崖字做野義爲妙、如此辨別、而蜀椒秦椒崖椒三物判然明白矣、其崖椒折枝插扦崖坡之上、垂條如蔓蒙于崖畔、故又呼爲蔓椒、本草誤爲二條分出之、張自烈正字通辨之最詳、須參考焉、

〔重修本草綱目啓蒙　二十二〕秦椒　サンシヤウ　一名房椒(書叙指南)　中椒(同上)　青椒(八閩通志)　含丸使者(清異録)　土椒(蜀椒ノ條下)

サンシヤウハ通名ナリ、莽草(しきみ)ノ附方ニ山椒皮ノ字アリ、鷹鶻方ニ山椒津ノ字アリ、自生ハ山ノ幽谷ニ生ズ、葉ハ小葉ノ野薔薇(のいばら)葉ニ似テ、鋸齒粗クシテ長シ、春嫩芽ヲ採テ食料ニ入ル、コレヲキノメト云、木ニ雌雄アリ、雄ナル者ハ花アリテ實ヲ結バズ、コレヲハナザンシヤウト云、雌ナル者ハ實ヲ結ブ、コレヲミザンシヤウト呼ブ、京師ニテハ鞍馬山ヲ上品トス、諸州ニ皆名産アリ、木皮ヲ細ク刻ミ食用トナスヲカラカハト云、鞍馬山ヨリ多ク出ス、皆雄木ノ皮ヲ採ルト云、野州日光山ノ産辛味多シテ優レリ、謂ユル山椒皮ナリ、其實嫩熟共ニ食用ニ供ス、熟スル者ハ皮ノ色赤シ、コレヲ點紅椒ト云フ、一種唐山椒アリ、葉ハ常椒ヨリ微大ナリ、其實中黒子ナクシテ香氣優レリ、赤

ケ。ツ。グ。イ。（備前）　一名鐵籬塞（訛當）

俗ニ誤テ枳殼ト呼ビ、籓籬ニ作ル者ナリ、木高サ丈餘冬ハ葉ナシ、春新葉ヲ生ズ、三葉一蒂胡枝子ノ葉ニ似テ小ク厚ク、深綠色ニシテ光アリ、木ニ刺多キ故籬ニ作ル、春末枝梢ニ枝ヲ分チ、花ヲ開ク、白色五瓣大サ寸ニ近シ、後實ヲ結ブ、小ナル者ヲ採テ枳實ニ僞ル皮ハ厚ケレドモ、外色綠ニシテ毛アリ、秋ニ至テ熟スレバ色黄ナリ、肌細ニシテ皮薄ク、切リテハ枳殼ニ僞リ難シ、故ニ皮ノミヲ乾テ和ノ枳殼ト呼ブ、今漢種ノ枸橘アリ、形狀和産ニ異ナラズ、葉實ノ形微ク大ナリ、

〔紀伊續風土記（物産六上）〕枸橘（本草、本草和名加良多知、）

俗に誤りて枳殼と呼び、人家に多く栽ゑて籓籬に作る者なり、

〔和漢三才圖會（八十九味果）〕秦椒　花椒　大椒　椴（音毀大椒）　椒株梂（並同）　茲消切音焦、今俗作梂非也、名山椒、

按秦椒乃常名山椒者也、以蘇恭之説可爲當、山谷多有之也、樹高五六尺、不直、其葉似槐葉而青綠色對生、尖有了、冬凋落、其枝多刺、三月生嫩芽、謂之木芽、入羹及酒中、有佳香、四月開細花、青白色、五月結實、攅生青色、謂之青山椒、味辛香佳、藏鹽水越年辛味不變也、六月熟、黄紅色、採大者曝乾純赤開口、謂之椒紅、藏之包黒反古紙、則味不變、備前瓷坩亦可也然越年者辛味失苦生、殊小顆者名平椒、唯青時可食、乾之不佳、往昔所謂秦之地、乃今陝西也、

椒樹皮　剝木去麁皮、曝乾販之、用時浸水、刮去內白肌、鹽漬或以醬油煮乾食之、味辛鹹微香美、僧家最賞之、山城鞍馬山之產、皮薄味勝、丹波但馬及遠州山中、野州二荒山皆多出之、

食椒噎、甚者不能言悶亂、（急令開口吹入人息於咽則安、或爐灰少許舐則佳、涼水亦可、○中略）

椒菹法

按淹山椒、六月用半熟者、一升鹽三合、和藏餅器、入水二升、上安小木板、而用小石略壓之、使椒不浮漂、

水戸ノ心越禪師ハ唐僧ナリシニ、江戸ノ藥舖ニテ剉タル枳實ヲ見テ曰、吾邦ニテハ穰ヲ帶テ製シタルヲ枳實トシ、穰ヲ去タルヲ枳殼トス、コレ枳殼ノ製ニシテ、枳實ニハ非ズト云ヘリ、此說蘇恭ノ說ニ合ヘリ、

〔紀伊續風土記物產六上〕枳本草、本草和名、醫心方、新撰字鏡、延喜式、並に加良多知と訓ずるは誤なり、

享保年中、漢土より種子を來す、今官園に多し、人家にも稀に栽う、

〔萬葉集十六有由緣幷雜歌〕忌部首詠數種物歌一首名忘失也

枳棘原苅除曾氣、倉將立、屎遠麻禮、櫛造刀自、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年五月十四日丁亥、是日始置守韓橘者二人、以山城國徭丁充之、

〔大和本草十二雜木〕枸橘　本草、一名臭橘多刺、人家多收種爲藩籬、今案和名カラタチト云物ナリ、葉細ナリ、其木ハリ多キ故、人家ウヘテ籬トシ盜ニ備フ、是ヲジヤケツイバラト訓ズルハ誤レリ、ジヤケツハ雲實ナリ、枸橘ノ實ノ形ハ、蜜橘ノ如クニシテ臭ク酸シ不可食、筑紫ニテゲズト云、昔ヨリ國俗アヤマリテ、是ヲ枳殼枳實トシテ藥ニ用ユ非也、世醫習而不察ナリ、本艸ヲヨク考ヘテ其是非ヲ知ベシ、眞枳實枳殼年々カラヨリ多クワタル可用、日本ノ臭橘ハ不可用、枳殼モ日本ニアリトイフ、臭橘ヲ垣根ニウエテ盜賊ヲフセグベシ、熟シタル實ヲ取、皮ヲ去、ナカゴ共ニ土中ニウヘ、日ヲ掩ヒ、又ワラアクタヲ上ニ置ベシ、生ジヤスシ、生ジテ後ワラヲ去ベシ、上ノ日ヲホヒハ、先其マヽ置ベシ、少長スル時ホリテ垣ニウユルニ、間五寸ヅヽ置テシゲクウフベシ、如此ナラザレバキビシカラズ、ナカゴヲ去リ、核ヲトリテウフレバ生ジガタシ、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕枸橘　臭橘　俗云介須

按枸橘卽枳之種類、而樹葉實與枳無異、但實小堅靑綠色深、於枳充之小枳實大非也、故及贅言、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕枸橘　カラタチ　ゲズ筑前豐後　ジヤキチ讃州　ジヤキツ同州　ジヤ

皮售之、不可不辨、

蘇頌曰、枳如橘而小高五七尺葉如橙多刺、春生白花至秋成實、七八月采者爲實、九十月采者爲殼、近道所出者、俗呼枸橘不堪用、

樹葉花實皆同一ニシテ、二種アルコトヲ說、日本ニモ二木アリ、垣ニスルカラタチハ木葉實皆常ノカラタチヨリハ小ナリ、是則時珍說ノ枸橘ナルコト疑ナシ、眞ノカラタチハ、木葉實共ニ大ニシテ同類別種也、

【重修本草綱目啓蒙二十五灌木】枳（舊說ニ　音杞）キ。コ。ク。ノ。キ。　一名醜橙樹（訓蒙字會）　實一名槌胸霹靂（事物異名）

殼一名洞庭奴隷（輟耕錄）　商殼（嶺南衛生方）

カラタチト訓ズルハ非ナリ、カラタチハ次ノ條ノ枸橘ナリ、枳ハ和産ナシ、今ハ韓種多シ、樹葉共ニ柑（カン）ニ似テ、木ニ刺多シ、夏月白花ヲ開ク、亦柑花ニ似タリ、實ハ柑ヨリ肌細クシテ皮厚シ、小ナル時採タルヲ枳實ト云、最早ク採タルハ至テ小シ、コレヲ鵞眼枳實ト、本草原始ニ云リ、和名ニ茶ノ實樣ト云、僞物多シ、皮ノ色黑シテ、内ニ穰數多キ者佳ナリ、其皮色綠ニシテ、毛アリテ、内ノ穰數少キ者ハ枸橘ノ小ナルヲ乾タル者ナリ、又朱欒（ヂヤガタラユ）及橘柚（カウジユ）ノ小ナルヲ乾タルモノアリ、宜シク擇ブベシ、秋ニ至リテ採リ乾タルヲ枳殼ト云、舶來數品アリ、古渡ノ中藥舖ニテ一萬ノ樣ト呼ビシ者、眞物ナレドモ、今ハナシ、ソノ穰形小ク數多クシテ十二三アリ、今モ新渡ノ中ヨリ撰ビ出セバ、此品アリ、新渡ハ皆大小混雜多シ、ソノ穰形大ニシテ數少ク、只六七アル者ハ臭橙（カブス）ナリ、又藥舖ニテ朝鮮枳殼ト呼ブ者ハ、回青橙（ダイダイ）ノ小ナル者ヲ用テ、コレヲ作ル、今切ダイダイト云、又薩州山川ヨリ出ス、枳殼ハ先年ハ皆漢種ナレドモ、今ハ臭橙多シ、肥後ヨリ出ス者モ皆臭橙ナリ、

增、傷寒論集註梔子厚朴湯注云、實乃結實之通稱、無分大小、宋開寶以小者爲實、大者爲殼、而後人則言殼寬而實速、殼高而實下、此皆不明經旨、以訛傳訛耳、コノ說ニ從テ、枳殼枳實ハ通用シテ可ナリ、

也、緣香緣、和名加布智、

〔箋注倭名類聚抄十木〕千金翼方、證類本草下品載之、本草和名不載和名、按千金翼方、證類本草中品有枳實、本草和名云、和名加良多知、新撰字鏡、枳訓加良立花、源君以枳椇爲加良太知、誤也、〇中略今本〇玉篇木部作似橘也、說文、枳木似橘、按、此宜訓加良太知、〇中略本草和名、果部云、构櫞似橘也、出七卷食經、此所引即是、按皇國十月射場始、以构櫞爲賭、見江家次第、蓋是物則构櫞亦與枳不同、源君收在于此、非是、又按諸字書、构椇別字、又不通用、唯禮記曲禮內則椇、古今注本草謂之枳椇、毛詩南山有臺傳作枳枸、〇中略玉篇引埤蒼云、櫞果名、似橘、玄應音義引廣志云、构櫞似橘而大如飯筮、可以浣濯澠葛紵也、今出番禺以南、縷切蜜漬、爲糝食之甚佳、

〔大和本草十一藥木〕枳實、枳殼、　本草ニ枳實ノ葉如柑ト云、臭橘ノ葉ト不同、又臭橘ヲ僞テ枳實トシテ賣ル不堪用トイヘリ、中華ニモ如此、日本ニ古來誤テ臭橘ヲ枳實トス、中華ヨリ來ル枳實枳殼ヲ可用、但中夏ヨリ來ル二物多クハ混雜セリ、小ニシテ肉厚キヲ枳實トシ、大ニシテ肉薄キヲ枳殼トス、水ニヒタシ瓤ト核トヲ去、アラク切ヘギテ麩ヲ加、炒テ麩ノ黑ク焦ル丶時取アゲテ、麩ヲ去テ後剉ミ、細ニスベシ、枳實枳殼同ジ、陳久ナルヲ用ベシ、中夏ヨリ來ルニモ臭橘アリ、可擇、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕枳實〇中略

按枳殼樹其刺一二寸多有之、栽藩籬以防盜害、七八月摘其實爲枳實、九十月徐大者爲枳殼、於本朝亦植蜜柑於奥州、變成枳殼一異也、其他諸國橘枳共有、而多接柑橘類於枳、故以柑橘核種之生枳者多矣、枳實枳殼多出備前、

〔本草辨疑四木〕枳

所々ニ多キ者ナリ、記スニ不及二種アリ、時珍曰枸橘處々有之、樹葉並與橘同、但幹多刺、二月開白花、靑蕊不香、結實、大如彈丸、形如枳實、而殼薄不香、人家多收種爲藩籬、亦或收小實僞充枳實及靑橘

柑故名之、此柚柑或是、按由加字、漢名未詳、〇中略 釋木、櫠、椵、郭注云、柚屬也、此所引卽是、按邢昺曰、櫠一名椵、是爾雅以椵釋櫠也、源君二字連讀誤、郭注又云、子大如盂、皮厚二三寸、中似枳、食之少味、桂海虞衡志云、廣南臭柚、大如瓜可食、其皮甚厚、染墨打碑、可代氈刷、且不損紙、郝懿行曰、卽郭所說也、李時珍曰、柚之大者謂之朱欒、最大者謂之香欒、爾雅謂之櫠、又曰椵、又曰柚、其實有大小二種、小者如柑如橙、大者如瓜如升、有圍及尺餘者、亦橙之類也、今人呼爲朱欒、形色圓正、都類柑橙、但皮厚而粗、其味甘、其氣臭、其瓣堅而酸惡不可食、其花甚香、小野氏曰、可以充今俗呼爲坐盆者、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕櫠椵(ゆかう) 鐳柚 香欒 臭柚 和名柚柑(ユカウ) 俗云左牟須

本綱、柚大者謂朱欒、最大者謂香欒、爾雅謂之櫠椵、

按櫠椵柚屬也、其樹葉花皆與柚無異、實形色亦似柚而最大、芬馥如乳柑(クチンホウ)、其瓣味如橙而苦微酸、蓋此兼柚柑橙之三也、和名抄謂柚柑、亦相兼之義乎、

〔廣益國產考 八〕蜜柑を仕立る事

三州遠州にてゆかうといへるを作り出す也、是は柑子に似て別種也、味ひ少し劣れり、肌は蜜柑と柑子の間にて、色艶は柑子の方に似て、蜜柑柑子に先立色付なれば、早く作り出して蜜柑の出ざる前、三都に出しなば利を得べしと思はる、柑子は味ひも美にして品よく、色は少し黃を帶て皮うすく、見事にして肌よろし、品は蜜柑に勝れども、味ひは少し劣れり、此外種々あれども、國產とならざるは出さず、國の潤ともなるべきは蜜柑にしかじと見えたり、

〔新撰字鏡 木〕枳 居紙思紫二反、木實也、久知奈志、又加巳立花、

〔本草和名 十三木〕枳實 仁諝音居帋反、又音紙、 一名枳殼、出蘇敬注 一名玫實、玉篇 英 一名時枳、五月採者名時枳、巳上出雜要訣、 和名加良多知、

〔倭名類聚抄 二十木〕枳椇 本草云、枳椇、只矩二音、和名加巳太知、玉篇云、枳似橘而屈曲者也、七卷食經云、枸櫞、枸卽椇字

櫠椵

柚脯（ゆばし）俗云ゆびし

柚乾也、造法用真柚、穿去瓣核、用未醤汁、溲糯粉、合胡麻椎椒等、充空柚、覆蓋用淡醤油煮、熟攤于板、以板徐々壓之、晒乾收之、

〔草木性譜 人〕柚

處々に植、其樹刺あり、葉冬を經て凋まず、深緑色、本に小葉あり、春新條を生じ葉を發す、夏に至て葉間に五瓣の白花を開く、香氣あり、後果を結ぶ、初青色、冬に至り熟して黄色狀大なり、又還柚（はなゆ）廣東新語は果の狀小なり、その新條を生ずる時、偶葉形整はずして白粉を傅（つ）き、病の如なるものあり、其末より漸々に蟲に化し、終に葉莖を離る、狀烏蠋（いもむし）の如し、惡臭を發す、秋に至り鳳子蝶（あげはのてふ）三才圖會に化し去る、此餘柑橘橙の類にも蟲を生ず、又樹根竹根の土中に於て春蟬の形をなし、夏に至り終に生を得て土中より出づ、其土上に出ざるもの、頭上より蕈の如きものを生ず、蟬花本草綱目と云ふ、凡化生の中に類を以て化するは理なり、類にあらずして化するものあり、陳麥蝶となり、竹葉溪蟹となるの類は理外なり、是皆造化の奇功、これを論じ窮べからず、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一 山果〕柚　ユ和名抄　ユウへ　ユズ筑前雲州　イズ雲州　ホンユ阿州　モチユ同

上　カウトウ中國　一名大橘大倉州志

柚ハ諸國ニ多シ、寒國ニモ育シ、冬間食用トス、色黄白皮厚シテ肌粗シ、一種ハナユアリ、樹小ク實ハ柑ノ大サニシテ、皮ニ疙瘩（イボ）多シ、樹ニアリテ久シク落ザル故、トコユ或ハジヤウユトモ云、色青キ時、皮ヲヘギテ酒食ノ香氣ヲ助ク、又花ヲモ用ユ、故ニハナユノ名アリ、實熟スル者ハ食用トセズ、是廣東新語ノ還柚ナリ、時珍ノ説ニ、小者如柑如橙ト云ハ常ノ柚ナリ、

〔倭名類聚抄 十七 菓〕櫠椵　爾雅注云、櫠椵殿加二音、漢語抄云柚柑、柚屬也、

〔箋注倭名類聚抄 九 果蓏〕本草和名引崔禹、載櫠子、在橙條、別無和名、今俗呼由加字者、其實似柚、又似

〔大和本草 十果木〕柚　山中寒村ニモ宜シ、橘柑ニ異レリ、一種國俗ニ花柚ト云物アリ、其實小ニシテ多クミノル、花ヲ酒ニウカベ羹ニ加フ、故名ヅク、味大柚ニヲトレドモ亦可賞、海邊砂土最繁茂シヤスシ、大繭ト云物アリ、柚ノ類ナリ、皮アツシ、蜜橘ヨリ大也、皮ノ肌柚ヨリ細ニ味酸シ、京都ノ邊鄙ニアリ、味不美、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕柚 又香橙　櫾 同柚　條　壺柑　臭橙　朱欒 和名由字、如字、　蜜筩　俗云花柚

本綱、柚樹葉皆似橙、其實 味酸寒 有大小二種、小者如柑如橙、今人呼其黄而小者爲蜜筩、大者如瓜如升、有圍及尺餘者、其大者謂之朱欒、亦取團欒之象、其形色正圓都類柑橙、但皮厚而粗、其味 甘辛 其氣臭、其瓣堅而酸惡不可食、其花甚香、凡柚狀如卣、故名壺、江南閩中最多有之、渡淮而北、化而爲枳、

橙　橘　晩熟耐久　皺　香　苦
乃　屬故　皮厚而　味　而辛
柚　柑　早黄難留　粗　臭　甘

柚實消食、解酒毒、治姙婦不思食口淡、　柚皮下氣消食快膈化痰、散憤懣之氣、

按、柚樹高丈許、枝多刺、葉比于橙長而不扁、本段葉亦狹小、四月開小白花、結實、九月熟、深黄色有臭香、而其香好人多、其皮厚粗皺味苦深、冬熟乃帶甘味、切片入鱠膾、芳芬特佳、俗謂之眞柚、朱欒是也　山中多而人家希有、

小柚 俗云花柚 乃蜜筩也、葉略薄小花亦小、其實八月熟、正黄色而小、其皮皺脹起醜、其瓣甚苦不可食、惟其花最芬馥、摘投於酒釃中、或採蕾及未黄者皮切片入、亦香美、勝於眞柚也、

凡柚汁誤注於布帛、則藍及茶褐色物消爲白地、

柚未醬

用眞柚、穿出瓣爲空殼、用瓣去核、和未醬及胡麻胡桃栗蕈等、復盛空柚、置炭火上燒之、煮沸食爲僧家嘉肴、

トコナリ

柚

なきにやと、或人はいはれき、

〔本草一家言三〕登古奈理　回青橙一種也、四時不變皮色、極赤、入夏則色變回青、味稍甘、如回青橙、按廣州記云、盧。橘。夏。熟。疑。是。歟、今俗稱夏密柑者、形小而色最赤、是又盧橘一種、小者宜。以。登。古。奈。理。充。盧。橘。

〔倭名類聚抄十七菓〕柚　爾雅集注云、柚音由、又以異反、一名櫾、音條、和名由、似橙而酢、出江南矣、音義柚或作櫾、山海經字相通、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕說文、柚、條也、似橙而酢、爾雅亦云、柚條、此從木俗字、○中略釋木郭注、作似橙實酢生江南、禹貢、揚州其包橘柚錫貢、傳云、小曰橘、大曰柚、太平御覽引風土記曰、柚、大橘、赤黃而酸也、本草蘇注云、柚皮厚味甘、不如橘皮味辛而苦、其肉亦如橘有甘有酸、酸者名胡柑、本草圖經曰、閩中嶺外江南皆有柚、比橘黃白色而大、襄唐間柚色青黃而實小、皆味酢皮厚、李時珍曰、柚樹葉皆似橙、其實有大小二種、又曰、橙乃橘屬、故其皮皺厚而香、味苦而辛、柚乃柑屬、故其皮粗厚而臭、味甘而辛、如此分柚與橙、橘自明矣、○中略中山經、荊山多橘櫾、注、櫾似橘而大也、皮厚味酸、綸山多柤栗橘櫾、銅山其木多穀柞柤栗橘櫾、葛山其木多柤栗橘櫾、賈超之山多柤栗橘櫾、洞庭之山多柤棃橘櫾、按說文、柚條也、似橙而酢、櫾崑崙河隅之長木也、二字不同、山海經以櫾爲柚者假借也、故源君云字相通、列子湯問篇亦云、吳楚之國有大木焉、其名爲櫾、碧樹而冬青、實丹而味酸、食其皮汁、已憤厥之疾、又按西山經、槐江之山西望大澤、其陰多榣木、注、榣木大木、晉語、榣木不生花、韋注亦云、榣木大木也、是說文櫾字省系、與訓樹動榣字混也、山海經以下亦蓋音義文、而陸氏無載、疑舊音也、孫炎、郭璞、曹憲、江灌、並有爾雅音、今皆無傳本、

〔爾雅註疏九釋木〕柚條、註似橙實酢、生江南、疏柚一名條、郭云、似橙實酢、生江南、禹貢、揚州云、厥包橘柚、孔安國云、小曰橘、大曰柚、呂氏春秋云、果之美者有雲夢之柚、本草唐本註云、柚皮厚味甘不如橘皮味辛而苦、其肉亦如橘、有甘有酸、酸者名胡甘、今俗人或謂橙爲柚非也、

シテ味酢シ、春ノ末黄色トナル、故ニ紀州有田郡湯淺ニテ、ハルミカント云、夏ニ至レバ其皮微シ黒色ヲ帶テ、煤ヲツケタルガ如シ、故ニ盧橘ト云、香味甘美ナリ、有田郡處々ニ多ク產ス、又村瀨乾德ガ南海包譜ニ曰、盧橘是柑類也、而曰之橘、猶金柑有金橘之名、不嫌同類互呼也、

〔牛馬問 四〕菅氏が曰、盧橘とは何物ぞ、予(○新井白蛾)が曰、此物種類多し、同名異種なるものも有、先は本草の金橘といふものにして、世俗金柑といふ是なり、菅氏が曰、枇杷にあらずや、予が曰、文選の註誤て枇杷とすること、綱目釋名に詳に辨有、往て見るべし、然るに祕傳花鏡に、枇杷一名盧といふは、選註を誤襲なるべし、菅氏が曰、左からば戴叔倫が湘南の詩、盧橘花開楓葉衰の句解すべからず、予が曰、此詩盧橘楓葉と一時に有を以て、諸說紛々たり、可解不可解ものは詩を解の要也、又さら〳〵と句意を輕く見るべし、叔倫、湘南に在て、東方の京に歸らん事をおもへども得ず、故に時去水流れて住まる事なきを歎せし也、よっていふ、我此湘南に來て、此水邊に遊びしは、盧橘の花の開く比なりしに、今來て見れば、早楓葉の衰の時節也、如此月日は過るに、我は都にかへらざる事やと解す、何の理屈に苦しまむ、菅氏唖、

〔閑田耕筆 三〕戴叔倫が盧橘花開楓葉衰といふ詩の三體詩に見えたる註に、廣州記書云、盧橘皮厚氣色大如柑酢、夏熟、土人呼爲壺橘、又增註、盧橘卽枇杷也とあり又正字通橘條を見るに、曰或云、金橘盧橘也、蘇軾誤以盧橘爲枇杷、陶九成始疑之、以廣州之壺橘爲盧橘とあり、白香山の律詩に、盧橘實低山雨重、棕櫚葉戰水風凉、とある對句をもてみれば、是も夏熟するものとす、然るに和歌者流にて、盧橘の題は唯橘をよむこと流例にて、花を主とし、右の義には恆はず、たゞし其中堀河院初度百首、神祇伯顯仲卿の歌に、吾園の花橘の花みれば金の鈴をならす也けり、といへるは、夏熟の說にあへり、又永德百首に、此ころは實さへ花さへ同じえに並べて見つる軒の橘、といふは、珍らしきよみやうとはいへど、世の常の橘柚〔花落る時やがて少き實生れば不審

金柑

〔和漢三才圖會 八十七山果〕金柑 金橘　盧橘　夏橘　山橘　給客橙 盧者酒器名、形肖、故爲盧橘、然文選注以枇杷爲盧橘誤也、
本綱、其樹似橘不甚高大、五月開白花結實、秋冬黃熟、大者經寸、小者如指頭、形長而皮堅、肌理細瑩、生
則深綠色、熟乃黃如金、氣味酸甘溫芬香可愛、入膾醋、尤加香美、藏綠豆中、可經時不變、蓋橘性熱、豆性涼
也、
山金柑、一名金豆山金橘 高尺許、實如櫻桃、內止一核、卽金柑之異種者也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一山果〕金橘 ヒメタチバナ キンカン通名 一名小木奴事物異名 洞庭異種同上、 羊矢橘圖書 雞橘北戶錄 瑞金奴秘傳花鏡ハ柑ノ一名トス群芳譜ニ 金丸行厨集 珠顆事物紺珠 彈柑松江府志 羅浮柑同上

小木ニシテ多ク實ヲ結ブ、葉ハ柑ニ似テ小シ、五月ニ白花ヲ開キ實ヲ結ブ、冬熟シ春ニ至ル、大サ五分許ニシテ正圓ナリ、皮共ニ生食シ、又煮テ食フ、一種形長シテ棗ノ如キ者アリ、是ヲ金棗花曆百詠ト云、一名牛嬭柑秘傳花鏡 牛嬭金柑汝南圃史 本經逢原ニ金橘形如彈丸、金柑形如牛奶ト云ハ誤ナリ、集解、山金柑ハ一種形小ナル金柑ヲ云、

盧橘

〔重修本草綱目啓蒙 二十一山果〕橘〇中略

增〇中略 桃洞遺筆ニ云、盧橘ハ往昔ヨリ、枇杷或ハ金橘ノコトヽス、並ニ誤ナリ、宋ノ王十朋ガ會稽三賦ノ註ニ曰、上林賦曰、盧橘夏熟、黃柑橙榛、盧黑色也、盧橘出建安、有爲枇杷之說者、既言盧橘夏熟又言枇杷燃柹、豈用之重複邪、廣州記、盧橘皮厚大如甘酢、多至夏熟、土人呼爲壺橘、則非枇杷矣、明ノ楊升庵文集ニ曰、上林賦盧橘夏熟、注不言何物、近注唐詩三體者、特爲枇杷、世皆宗其說、然予觀上林賦、又有枇杷燃柹文、不應重出也、偶閱吳錄云、朱光祿爲建安郡守、中庭有橘、冬月樹上覆裹之、至明年夏色變靑黑、味絕美、此卽盧橘、盧黑也、此說近、是コレニテ枇杷又金橘ニアラザルコトヲ知ベシ、盧橘ハ一名壺橘、見上 夏橘、金橘條下 給客橙魏王花木志 和名ナツミカント云、形乳柑ニ似テ圓ク、冬月尙綠ニ

〔和漢三才圖會八十七山果〕佛手柑　枸櫞　香櫞　不之由加牟○中略

按、凡柑橘柚之類皆怕寒、佛手柑特甚、而其樹如値寒則枯、或雖不枯不實、冬月則用稃、蔽根畫則可受陽也、其樹似柚有刺、葉全不似柚柑之葉、而稍大、淡青色筋理顯然、略似多羅葉而不尖、四五月生新葉時、嫩葉褐色以爲異、三才圖會之佛手柑圖、葉形尖、本草時珍亦謂尖長者、未審、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕枸櫞　マ。ル。ブ。シ。ユ。カ。ン。　一名黃淡子北戶錄外ニ說多シ　佛手柑一名飛穰通雅　佛指香櫞八閩通志　佛爪香圓　花柑上同　佛手櫞高州府志

枸櫞ト佛手柑ト二物ナリ、共ニ暖地ノ產ニシテ、寒國ニハ育シ難シ、佛手柑ハ冬月窖ニ入養フトイヘドモ實ヲ結バズ、香櫞ハ實ヲ結ビ易シ、二種共ニ葉ハ木樨葉ニ似テ、鋸齒ナク香氣アリ、柑橘橙柚ノ類ハ、皆葉ノ本ニ小葉アリ、此二種ハ小葉ナク互生ス、樹ニ刺アリ、枸櫞ノ實ハ柚ニ似テ、微長肌細ニシテ香氣多シ、熟シテ黃色內ハ白色ニシテ穰核共ニナク、蘿蔔ヲ切ルガ如シ、橫ニ薄ク切リ、沙糖ニ漬タルヲ佛手柑漬ト云、秋櫞春櫞ノ二品アルコト般山志ニ見タリ、佛手柑ハ俗ニ手ブシユカント呼ブ、實ノ形長大ナリ、肌粗シテ柚ノ如シ、熟シテ黃色香氣多シ、本ノ方ハ圓ニシテ柚ノ如シ、半ヨリ末ハ細ク分レテ、人ノ指ヲ列ヌルガ如ク、十餘指アリ、初ハ指ノ末內ニ曲リ、後ニハ直シ、切レバ內ノ色白シテ穰核ナシ、廣東新語ニ、其狀如人手、有五指者曰五指柑、有十指者曰十指柑、亦曰佛手柑、有單拳有合掌、不一ト云、本經逢原ニハ枸櫞ヲ柑櫞ニ作リ二物トス、一說ナリ、

〔草木性譜人〕枸櫞

和產なし、漢種を傳へ盆種とし養ふ、其性頗る寒を畏る、夏花を開き果を結び、秋後熟して黃色香氣あり、果中穰核なし、これを截るに蘿蔔の如し、一種佛手柑枸櫞釋名も亦穰核なし、凡果中に核なきは、分生繼續の理を失ふ、若接換揷插せざれば、種の盡るに至らむ、萬卉の常性に異なる者なり、柑橘橙柚の類は、皆葉の本に小葉有り、此二品小葉なく、聊其萌ある而已、

他州ニモアリ、ザンボニ數種アリ、一種上スコシ光ル、味アシ、、上スコシクボキアリ、味ヨシ、一種肉赤シ食フベシ、一種橙子ヨリ甚大ニシテ顆アリ、色黄ニシテ味良、實下リ垂ル事諸果ニ異リ、一種クビアリテ橙子ノ大サナルアリ、味酸ク惡シ、又一種顆ナク圓クシテ、橙子ノ大サナルアリ、肉アツクナカコ小ナリ可食、又味酸クシテ不食モアリ、猶形味大小異ナルアリ、小ナルハ俗ニジャガタラミカント云、皆是朱欒ナリ、葉ハ皆橙柑ニ似タリ、枝有刺、或無刺、其實世人乾作器、納茶香烟草、

〔重修本草綱目啓蒙（二十一 山果）〕柚（○中略）時珍ノ說ニ、小者如柑如橙ト云ハ常ノ柚ナリ、大者如瓜如升ト云フハザボンナリ、筑前ニテザンボト云、土州ニテジヤボト云、京師ニテジヤガタラミカント云、此ハジヤガタラ柚ノ誤ナリ、大サ甜瓜ノ如ク、形榠樝ノ如シ、本狹ク末廣シ、色黃白肌粗ク柚ノ如シ、皮ノ厚サ六七分ニシテ色白シ、穰モ白シテ皮共ニ至テ苦シ、穰中ノ長粒味酸シ、沙糖ヲ加テ菓トス、是朱欒ナリ、一種香欒アリ、コレモ九州ニテザンボト云、一名ザンボウ、（豫州）トウクネンボ、（日州）寒地ニハ育シ難シ、四國九州ニ多シ、形圓扁大サ六七寸、肌細ニ黃色ニシテ微綠ヲ帶ブ、香氣多シ、皮厚サ六七分ニシテ白シ、穰ニ紫色ト白色トノ二種アリ、紫色ナルヲ上品トス、粒ノ味甘シ、筑前ニテ內ムラサキト云、白色ナル者ハ粒味酸ク下品ナリ、此外形狀異ナル者數品アリ、總テザボント呼ブ、

佛手柑

〔書言字考節用集（六 生植）〕佛手柑（俗用枸櫞字者誤矣）

〔本朝食鑑（四 山菓）〕佛手柑

集解、手柑者本邦古來無有、近世移植於華、故海西諸州希有、江東亦間有植之者、樹類橙柚而葉尖長、枝間有刺、生實如人之合掌、而有指狀、故名佛手乎、色生綠熟黃皮厚似柚、最光滑甚香、肉厚核細、味不耐食、惟作蜜糖煎漬、以收藏之而果食、爾今種類不多、故未試氣味主治、預據李氏綱目、可以證之也、

朱欒

ニナル故ダイダイト名クト云、因テ漢名回青橙ト云、八閩通志ニ出ヅ、九州ニテハ春ニ至リテ穣ヲ搾リテ酢ノ代トス、又一種カブスト云アリ、今ダイダイト呼ブ者、多ハコノカブスナリ、形狀ハダイダイニ異ナラズ、只蒂一種ニシテ重ナラズコレ秘傳花鏡ニ謂ユル臭橙ニシテ、時珍ノ說ニ一種臭氣ト云者ナリ、此モ皮苦ク食用ニ堪ヘズ、蚊ヲ熏ルニ用ユ、故ニカブスト呼ブ、今ハコノ未熟、小ナル者ヲ乾シテ枳殼トナシ賣ル、

〔傍廂前篇〕九年母

神代より日向の小門の橘今もありて、いと大きくして、味の美なる事、橘柑中の最第一なり、後世にいたりて、蜜柑、柑子、金柑、柚、橙、枳殼などつぎ〳〵にわたり來ぬれど、上古の橘の片はしにも及ばず、そが中に九年母といへるは、垂仁天皇の御代に、田道間守といふ人を、常世の國につかはされて、時じくのかぐのこのみをとりよせ給ひしを、後世九年母といへる故は、御記の九十年春二月庚子朔、天皇命田道間守、遣常世國、令求非時香菓、今いふ橘これなりとありて、九十九年云々、明年春三月辛未朔壬午、田道間守至自常世國、則賚物也、非時香菓云々とある、九十年より九十九年の明年まで、十一年なるをつかはされし年と、かへりし年とを略きて、中九年なれば、九年母といふなるべし、母とはこの菓を乳柑といへれば、母と號けしならん、又九年を久年ともかけるは、橙をば代々といへるに同じ祝言なるべし、

〔大和本草十果木〕朱欒(ザンボ) 本草ニ朱欒ハ柚ノ釋名ニ載テ別ニ條ヲ不立、橘譜曰、朱欒顆圓實、皮麤瓣堅、味酸惡不可食、其大有至尺三四寸圍者、摘之置几案間、久則其臭如蘭、今按是ザンボナリ、本草時珍云、柚大者謂之朱欒、最大者謂之香欒、朱欒類近年本邦ニモ多シ、柑橙屬ナリ、大ナルヲザンボト云、葉ハ柑ニ似タリ、實ハ橙ニ似テ、其大サハ圍一尺五寸ニイタル、皮黃ニ肉厚シテ香シ、色黃白ナリ、鹽豉ニ藏ムベシ、ナカコハ酸クシテ不可食、是本邦ニ所在ノ諸果ノ內最大ナル者ナリ、長崎ニ多シ、

九年母

〔閑窻瑣談 四〕春盤(くひつみ)〇中略

橙は氣味酸く寒毒なし、腸胃の悪き氣を去り、食を消し、胸の煩悶をなをし、宿酒に用ひて忽ちに醒す、

〔書言字考節用集 六生植〕乳柑(クネボ)(今按、花鏡所謂香橼是乎、)久年母(久又作九)

〔大和本草 十果木〕柑(クチンボ/カウジ) 俗ニ九年母ト云、名義未詳、木蜜橘ヨリ長ジヤスク、早クミノル、虚冷ノ人不可食、性寒、續日本紀九、聖武帝神龜二年播磨直弟兄初賫甘子従唐國来、佐味虫麻呂先殖其種結子トイヘリ、橘柑モト異國ヨリ來ル、夏蜜橘アリ、柑ヨリ小ニ、蜜橘ヨリ大ナリ、皮色青シ、夏ニ至テ熟ス、實モ皮モ味モ柑ニ似タリ、柑類ナリ、蜜橘ヨリ皮厚ク味淡シ、橘類ニ非ズ、廣州記曰、羅浮山橘夏熟ス、實大如柿、コレ本邦ノ夏蜜柑歟、リマント云物アリ、柑ノ類ナリ、味不好、只切テ酒ノ肴トス、大サハ柑ノ如、味酸シ、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕乳柑(くねんぼ)　木加　俗云九年母〇中略

按乳柑俗云九年母也、而未知所以其名、蓋橘柑並總名、而各有其種類、惟曰橘者乃斥蜜柑、曰柑者是九年母也、雖有八種而所有于本朝者不多、蓋九年母形狀皆如上説、但葉似橙而長、有淺粗刻耳、

〔重修本草綱目啓蒙 二十山果〕橙　クネンボ　香橙一名蜜橙(秘傳花鏡)　天春(事物異名)　江南珍味(同上)　讙霜(事物紺珠)　金橙(行厨集)　壓橘(同上)　棖(群芳譜)　臭橙一名蟹橙(秘傳花鏡)

橙ニ香橙臭橙回青橙ノ分アリ、本條ハ香橙(群芳譜)ヲ指ス、今ノクチンボナリ、其形大サ柚ノ如シ、皮ノ厚サモ同ジ、肌細ニシテ熟スルコト遲シ、正月ニ皮共ニ食用ス、唐山ニテハ皮ヲ用テ魚鱠中ニ入ル、故ニ金齏玉鱠ノ語アリ、本邦ニテ古ヨリ橙ヲダイダイト訓ズレドモ、ダイダイハ皮ニ臭氣アリテ味苦ク食用ニ堪ヘズ、ソノ形ハクチンボヨリ大ニシテ、皮肌細クシテ、其蔕二重ナル故、俗ニダイダイト云、又冬熟シテ黄色ニ變ジ、春ニ至レバ綠色ニ回リ、幾年モ如此年ヲ經テ落ズ、形大

〔和漢三才圖會 八十七山果〕橙　金毬　鵠殼　和名安倍太知波奈（俗云加布須、又云太伊太伊、）

本綱、橙木高枝葉不甚類橘、亦有刺、其葉有兩刻缺、如兩段、其實大者如盌、頗似柚、經霜早熟、色黃皮厚蹙皺如沸馥郁、

橙　橘　晩熟耐久

柚　乃柑屬之大者　早黃難留

橙皮、（苦辛温）可以熏衣、可以芼鮮、可以和葅醢、可以爲醬虀、可以蜜煎、可以糖製、（名之橙丁）可以蜜制、（名之橙膏）嗅之則香食之則美、誠佳果也、今止以爲果、宿酒未解者食之速醒、

按橙樹大者高丈餘許、周過於尺、嫩時有刺、老則無刺、其葉圓大似乳柑而短、背色淡、五月開小白花、（橘柑橙柚花皆相似而小白花）凡歷八年者結實也、形圓其氣苦臭、霜後黃熟、其瓣苦微酸不堪食、至春色濃耐久、皃復變青、新舊不可辨、故俗呼名代代、雖不啾而以爲歲始嘉祝果、乾枯者經年不敗皮硬褐色、用爲佩腰之具、

春月摘之破瓣、漸汁乾粒粒離如覆盆子、和沙糖食之、至夏月則瓣中汁自枯竭、每核皆生芽白根、食之亦佳、未離枝果中生芽者異物也、

凡用橙皮熏烟甚辛臭、香能避蚊、仍名加不須、蚊熏之訓下略也、又乾橙皮用爲倭方疝氣藥也、然本草謂消痰下氣利膈寬中解酒之功、不謂爲肝膽疝氣藥、而倭知其効驗亦妙也、不唯橙、如萍蓬草治折傷、無花果解魚毒、青鵐解諸毒、或番椒治小鳥之病、山漆治金魚之病之類不勝計、誰人始試之耶、

唐橙、（加不須）加（其加不須）葉似橙而微長、其實正黃色、皮厚理蜜而形長圓、味酸微苦、

按此乃眞橙也、近年希有之、尋常稱橙者、乃本草所謂有一種氣臭者是也、凡橙葉本有刻缺爲段、如見果蔕、乳柑柚、温州橘、樝榠之類、皆然也、

蜜柑柑子包橘金柑之類、葉微窄而無段狹長、

開寶本草云、橙子其樹亦似橘而葉大、其形圓大於橘而香、皮厚而皺、八月熟、李時珍曰、橙其實似柚而香、葉有兩刻缺如兩段、亦有一種氣臭者、柚乃柑屬之大者、早黃難留、橙乃橘屬之大者、晩熟堪久、事類合璧云、橙樹高、枝葉不甚類橘、亦有刺、其實大者如盌、頗似朱欒、經霜早熟色黃、皮厚蹙衄如沸、香氣馥郁、嗅之則香、食之則美、是可充今俗呼九年母者、群芳譜謂之香橙、李時珍所云氣臭者、今俗呼馱以馱以、秘傳花鏡之臭橙是也、

〔書言字考節用集 六生植〕枸櫞 矩圓二香、出俱舍論、　香橙 同　橙 金毬、鵠殼、並同、橘之屬、　橙　橙

〔壒嚢抄 六〕アヘタチバナトハ何ノ木ゾ

爾雅云、橙ハ宅耕反、和名安倍太知波奈、似柚而小者也、柚者似橙而酢、出江南矣ト云云、萬葉ニハ安倍橘ト書ケリ、萬葉ノ七卷ニ此歌侍リ、

ワノシカニ相ハデ久ク馬下ノ阿倍橘ノコケヲフルマデ、又或醫書ニ云、橙訓ハアヘタチバナ也、橘皮ニハ不用也、然者橘皮取ントテ、橙ヲ取ハ愚ナル事也ト云リ、アヘトアマタノ訓有歟、

〔萬葉集 十一 古今相聞往來歌〕寄物陳思

吾妹子、不相久、馬下乃、阿倍橘乃、蘿生左右、

〔萬葉集略解 十一下〕あべ橘は甘橘にて、是即今有橘の事なるべしと翁 賀茂眞淵 いはれき、されど和名抄に、爾雅云、橙 安倍太知波奈 似柚小也とあり、暫是によるべし、こけは日陰にて、奥山の木に生るものにて、橘など樣の里の木には生ざれど、年久しき事の譬にいへり、

〔新撰六帖 六〕安。倍。た。ち。ば。な。　家良

いかなればあべ橘の匂ふ香にうすきたもとも涼しかるらん　爲家

名にしおふあべたちばなの花ならば冬の衣の袖の香やせん

鐵炮洲

日高屋五郎兵衛

紀井國屋久兵衛

長島屋喜兵衛

右は蜜柑茶船にて賣場へ瀬取參候世話、其外船手筋用事請込、右三人之者は常々紀州御屋敷へ出入致し御用達申候、

〔本草一家言三〕土佐蜜柑　產土佐國、其形扁、皮色紋理至如包橘、味極甘如柑少有橙氣、又大如包橘、大如蜜羅柑、形圓色赤、味酸至春少甘、

〔奴師勞之〕長崎は暖國にて、すべて柑類よろし、橙など九年母の味ひありてよろし、豐後梅に星なくして大なり、蜜柑の味よろし、

〔西遊雜記五〕八代〇肥後は古き所にて、市中凡五千餘軒の地也、然れ共邊鄙の町ゆへに、諸品自由ならず、さて此在々に於て、名產と云蜜柑の木を見るに、紀州の蜜柑とは異にして大樹也、大ひなるは二十疊も有、夫にても若々敷、見事なる蜜柑のおびたゞしくなる事也、紀州にては若木ならでは見事の大なる蜜柑の實のらざる故に、古木は切捨て、次第々々につぎほをして、若木計を植る事なるに、此所にては古木の大樹ならでは、見事なる蜜柑實のらずと云々、地の利其地のよしあしによつて異なれば、經濟の心あらん人は地の善惡を見、地によく生せる物を下民に植させ、地の利を殘りなくとりて、後世の助けとなし度もの也

〔本草和名十七菓〕橙似柚而小、出七卷食經、櫞子小溫也、出崔禹、和名阿倍多知波奈、

〔本草和名十七菓〕枸櫞上香俱禹反、下尸全反、枸櫞似橘也、出七卷食經、和名加布知、

〔倭名類聚抄十七菓〕橙　七卷食經云、橙宅耕反、和名安倍太知波奈、似柚而小者也、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕和名依輔仁、安倍太知波奈未詳、〇中略本草和名引、無者也二字、說文、橙、橘屬、

田口村一組　井ノ口長田一組　船坂村一組　庄村一組　垣倉村一組
金屋村一組　中野村一組　歓喜寺村一組　湯淺一組
小以貮拾七組有田郡組株

右之外海士休組貮組近年致相對、都合貮拾九組、當時有田にて相立申候、近年江戸廻り蜜柑籠高拾六七万より貮拾七八万にて御座候、廿四五年以前に引合せ候得ば、籠數半減に相成、組數六組増申候、

一江戸問屋の儀も古來の問屋殘金出來致し候節は、定の通り取上ゲ、新問屋に改替候に付、段々替り申候得共、古來格式の通相堅め、證文等取替し致し申候、尤近年は江戸廻り籠數過半に減じ申に付、問屋株九軒の內、貮軒は休み株に致し、只今問屋七軒に致し、蜜柑代請取金定員直段六拾五匁替にて賣拂申候、當時問屋幷組々定付左之通、

田口組瀧ヶ原組星尾組庄組　神田須田町　萬屋庄左衛門
下中島組山田原組東村組丹生組上中島組海士越組　同所　丁子屋佐次右衛門
瀧ヶ原組南村組歓喜寺組藤並組　室町　鳥屋太郎右衛門
瀧元組千田組次谷組上中島組金屋組　同町　尼崎屋清左衛門
下中島組新瀧組中番組中野組海士越組　堀江町　星野屋吉十郎
道組西村組井ノ口組垣倉組大谷組　糀町　山本屋九左衛門
船坂組辻堂組湯淺組下中島組　堀江町　福島屋忠八

右之通、定附に致し候、

一江戸蜜柑船宿三軒左之通

右之通、年々上納仕候、

一元祿十一寅年、蜜柑組株郡中へ行渡り不申候に付、不睦、御改の上、新規に四株被仰付、其節蜜柑江戸廻り、凡貳拾五万より三拾二三万籠程御座候、寅年より正德元卯年迄拾四ヶ年の間、都合貳拾三組相立申候、

一二十三年前正德二辰年、組株不足の村々より奉願候に付、御吟味の上、新規に三株被仰付、其節の江戸廻蜜柑籠數、凡三十五万籠より五拾万籠に及び申候、

一同四午年、歡喜寺村より新規株奉願候處、此上組株增候ては、〆り方幷諸事差支候儀多難儀致し候段、蜜柑方より願上候處、委細御吟味の上、御聞屆被成下、歡喜寺組壹組御免の砌、新組株御停止の證文被下置候趣、

一有田郡蜜柑組株の儀、新規增候ては障りに相成候儀多有之候に付、自今新蜜柑組出來不致樣致度旨、蜜柑組仲間一統に願出の趣遂吟味候處、無據品に付奉行へ相達、自今新株出來不申筈に相究め候者也、

正德四年午十二月　　伊藤又左衞門印
　　　　　　　　　　小笠原彥左衞門印

有田郡蜜柑組
貳拾六組荷親中

右歡喜寺組を入、有田郡蜜柑組株都合貳拾七組左之通、

山田原一組	下中島村一組	瀧村二組	道村一組	瀧ヶ原村二組
東村一組	南村一組	辻堂村一組	千田村一組	星尾村一組
西村一組	中番村一組	藤並村一組	上中島村二組	次谷村一組

升屋十兵衞　兩替町　多田屋佐右衞門　兩替町　新山屋次郎兵衞　中橋　島﨑屋
七郎右衞門　堀江町　荻原長兵衞　室町　島屋太郎右衞門

右之者共問屋に相究め、仲買も人數を定、以後心儘に仲買入不ㇾ申筈にて、仲買を右九軒の問屋へ分ち定付に致し、有田蜜柑組海士郡四組、此外猥りに組株相立不ㇾ申勿論、問屋を外にて取立不ㇾ申筈、蜜柑金定直段六十六匁五分に請取申筈に相究め、蜜柑方より問屋宛てに究め通り證文を遣し、仲買よりは蜜柑猥り成買方致し間敷とヶ條を立、代金其年の荷物賣仕廻次第皆濟可ㇾ仕候共、不埒致候はゞ、仲買株幷家財取上候樣にと、其問屋付の仲買共に連判の證文爲ㇾ致、右證文を問屋に取置、仲買共よりヶ樣ノ證文取置候上は、蜜柑賣方ヶ條書定之通り、疎略不ㇾ致荷物賣仕廻し日より十五日目に賣子爲ㇾ登可ㇾ申候共、違變有ㇾ之候はゞ、問屋株御取上ゲ可ㇾ被ㇾ成と、問屋幷請人の證文を蜜柑方へ請取、〆り方急度相究候て、右之趣御會所へ御斷申上候て歸國致し度、御暇乞申上候道中人馬御先觸被ㇾ下、紀州樣御家中同樣に被ㇾ成下ㇾ難ㇾ有奉ㇾ存歸國致し申候、

一夫より〆り方宜相成、其上滯金問屋仲買共より償出し、蜜柑直段も段々宜敷相成申候、此時初て問屋仲買共へ證文取始申候、問屋仲買へ證文爲ㇾ致候儀は、江戸表外商買に無ㇾ之事に御座候、夫より元祿十丑年迄十一ヶ年の間、組株十九組にて江戸廻し致申候、

一三十七年以前、元祿十一寅年始て蜜柑御口銀上納仕候、
江戸廻り一籠ニ付　壹分宛　近國廻り一籠ニ付　八厘宛

一夫より正德四午年、新金銀御吹替にて、御通用の品に付半減に相成申候、
江戸廻り一籠ニ付　五厘宛　近國廻り一籠ニ付　四厘宛

一元文三年、文字金銀に御吹替御通用に付、
江戸廻り一籠ニ付　七厘五毛宛　近國廻り一籠ニ付　六厘宛

所々にて十四五軒も相立、蜜柑賣拂候故、江戸表一面に蜜柑引散し相見へ候に付、直段次第に下直に相成、仲買共〆り方無之、我一荷物多取捌き致候を能き事に心得、直段に不構賣さがし申に付、賣代金も滯殘金に相成、蜜柑送り候百姓共難儀仕、組株も多潰れ申に付、其節の荷親共寄合相談致し候は、蜜柑生物の荷物遙に江戸へ積送り、仲買共申合、下直に買取候迚、國元にて申計り致し方も無之、勿論江戸より積出し外の津浦へ廻し見申程の日間も待不申、腐り早き水物に候へば、只今迄の通、外荷物同樣江戸廻し致候ては、蜜柑捨り申道理に御座候間、江戸問屋仲買對談の上、万端格式を相立問屋仲買にも落付せ、永々家業に成候趣に取組、蜜柑賣買致し候得ば、品に寄殘金等も償出し可申哉、無左候ても以後猥り成買方得不致、仕切金も滯り申間敷候間、相談に遣し可申と申合、四十八年以前貞享四卯年、蜜柑方總代石垣の庄垣倉村にて、神保市右衛門并仲間の內一兩人付添、江戸表へ罷下到著致し候て、御屋敷へ參り、御會所へ右の趣意御斷申上候て、問屋仲買共へ、右の趣對談致候處、問屋仲買共申候には、近年の通、江戸表方々にて、一ヶ年代りの樣に問屋仲買を拵、蜜柑賣散し候ては、蜜柑手馴れ不申者も仲買に相成、〆りも無之賣さがし候に付、次第に直段下直に相成、代金も滯り、殘金に相成申候、其段は年々手馴候仲買共も供に引潰され申道理にて、力に不及事に候、如此〆りにては數拾万籠の荷物、中々金銀には相成申間敷候、紀州の樣成蜜柑何國よりも出不申候得ば、〆り方さへ出來候得ば直段能成り、第一紀州御國為と申、且は我々も家業に相成可申候、右〆り方と申は、蜜柑方万端格式を立、組數猥りに無之樣に致し、御當地問屋仲買も株付に致し、永々家業に相成候樣に拵候て御國と江戸表と物每一致に相成候道理に取組候はゞ、此上蜜柑多く參り候共、賣さがし申間敷候、左候はゞ滯り金も我々割賦の上償出し可申と、尤成る工面に付、相談相極め、其節の宜敷問屋左之通、

京橋　堺屋藤右衛門　京橋　萬屋滿右衛門　堀江町　野口太郎兵衛　瀨戸物町

第に蜜柑の木多く植廣げ、有田郡川筋の村々海士郡へも行渡り、慶長の末には籠數も餘程出申候由、其後南龍院様〇徳川賴宣御入國被爲遊候て、有田蜜柑御用被仰付候に付、土地宜敷場所にて相撰奉差上候處、殊の外見事にて風味能候間、御意に入候て、右蜜柑年貢地に出來候に付、代銀御下げ被成下難有奉存候、夫に付有田蜜柑繁昌爲致候様にと被仰出候由にて、上々様の御苦勞の上彌繁昌致し、蜜柑籠數萬籠出候様に相成申候、夫より年々御獻上御回も差上申候、

一右蜜柑繁昌致候に付、村々摸寄々々に組株を立、爰元にて頭取肝煮候者を荷親と名付、江戸下り蜜柑支配致し候者を賣子と申、江戸廻し致候所に、七十九年以前明暦二年は組株拾組相立、蜜柑籠數五萬籠程年内に段々積送り、問屋七軒にて賣拂申候處、翌年酉正月十八日江戸表大火事にて問屋仲賣類燒に逢、賣代金の内九百四拾兩餘相渡不申、支配の賣子共、夏の比迄致催促候得共埒明き不申、無是非殘金に致し罷登申候、爰元にて荷親ども寄合相談致し候には、多の金子捨りに相成候義も差當り難儀、其上生物の蜜柑遠國へ積送り買取に逢候ては、末々の爲不宜候間、仲間内より江戸表へ罷下り、何分金子請取候様に御屋敷様へ御訴訟可申上と、有田郡より三人、海士郡より壹人、江戸表へ罷下り候て、御屋敷御會所へ御斷申上、御評定所迄罷出、紀州蜜柑賣代金相渡り不申候間、濟方被仰付被下候様にと奉願上候處、問屋共御吟味の上、蜜柑代金急度皆濟致候様にと被爲仰出被下、滯金九百四拾兩餘無相違請取候段、偏に御國御威光の餘り難有奉存候、明暦三酉十月總代四人歸國仕候、其節揚場賣場所は、紀州様御聲掛を以、御公儀御地面御拜借被成下、江戸橋廣小路鎌倉川岸壹石橋の川岸等にて賣買仕候、夫より于今至迄、右場所年々御拜借致賣買仕候、

一其後蜜柑年々多出來致候て、組株村々にて百姓存寄次第に拵候故、貳拾組より三拾組に及び、當年相立候組も明年潰れ、去年無之組も當年相立候様に相成、江戸問屋の儀も面々勝手次第に、

增、一種雲州蜜柑ト稱スル者、味殊ニ美ナリ、

〔日本山海名物圖繪二〕江戶四日市ノ蜜柑市

江戶の市中に賣は、おほく駿。河。より出、紀州みかんも大坂より舟廻しにて下る也江戶四日市の廣小路に、籠入のみかん山のごとくに高くつみて、毎日々々賣買の商人群集す、江戶は日本第一の都會にて繁昌のつなれば、京大坂にまさりて賑はへり、

〔紀州柑橘類蕃殖來歷〕來歷傳記

有。田。郡。蜜。柑。の儀は、享保十九寅年より百六拾年程以前天正二甲戌年中、同郡內宮原組糸我庄中番村伊藤仙右衞門と申者、肥後國八代と申所より蜜柑小木を求來り、始て宮原糸我の庄內に植継候處、蜜柑土地に應じ、風味無ㇾ比類、色香菓の形ち他國に勝れ候に付、次第に村々へ植廣げ申候、百三拾年以前慶長の始には、保田の庄田殿の庄內へも、一ヶ村に五拾本七拾本程ツヽ生立候由、夫より年々相增、籠數も出候に付、其比大坂堺伏見等へ小船にて積送り申候右の所々へも山城の國より蜜柑出候得共、有田の蜜柑格別勝れ申に付、直段高直に賣れ申候由、其後百年以前寛永十一戊年、初て瀧が原村藤兵衞と申者、蜜柑籠數四百籠計荷物に相認、江戶廻し致し、右藤兵衞江戶表へ到著致し、所々承合、京橋新山屋仁左衞門と申御水菓子屋を問屋に賴み、橘類取扱致し候仲買共を集め蜜柑賣候處、江戶表へは伊豆駿河三河上總の國々より蜜柑出候得共、有田の蜜柑にくらべ候ては中々似寄不ㇾ申候に付、江戶にて流布致候はヾ、紀州蜜柑の風味は甘露に酸き味を兼、黃金の色に紅を交へ、菓の形は地方圓の圖を備へ、異國に越したる和國の珍菓不ㇾ可ㇾ有ㇾ此上ㇾ と、貴賤擧て賞愛致し、金子一圓を以て蜜柑一籠半の直段に賣拂歸國致し候由、右の様子蜜柑持の百姓共承り、其翌年は右の藤兵衞を賴一所に江戶廻し致呉候様にと申に付、自他の蜜柑凡二千籠計集め積送り、前年の通の場所にて、一籠に付金子二分程づヽに賣拂罷登り候由、夫より次

蜜柑產地

去リテ其畑ヲ清淨スルヲ良トス、然レバ種子ヲ蒔タル春ヨリ接木スルニ至リテ、大抵五年許年月ヲ費スコトヽ知ベシ、假令バ其砧木ニ美味極良ナル橘子ヲ接テ、一段ノ地ニ二百本植付ケ、培養ヲ懇到ニシ、糞苴ヲ精細ニシテ、成長セシムルトキハ、三年目ニハ頗繁茂テ、中ニハ初花ヲ發スル者アリ、四年目ニハ或六箇七箇實ヲ結ニ至ル、是ヨリ以後ハ其勢漸々盛ニ爲テ、五年目ニハ四五十モ實ヲ結ビ、六年目ハ一百許リ、七年目ハ二百、八年目三百、九年目七八百、十年目ニハ一千餘ノ實ヲ結ニ至ル、一本ノ木ニ一千ノ實ヲ結ブトキハ、一段二百本ノ實大約二十万、コレヲ五段作テ一千本ナルトキハ、其橘子都合一百万ニテ、此ヲ一果銀二釐ヅヽニ需ト雖ドモ、一百万ノ價銀二十貫匁(金三百三十三兩一歩銀五匁ナリ)ニテ、史記貨殖傳ニ、江南千樹之橘與千戶侯等其富ト云ヘルハ即チ是ナリ、

〔笈埃隨筆八〕雜說八十ケ條

嘉栗曰、大坂御城代中屋敷に蜜柑の大樹有、大閤と東照宮と御兩所手づから植給ふと言傳ふ、

〔和漢三才圖會八十七山果〕橘(居密反)中略

紀州有田郡蜜柑、肥大皮厚、著樹處少脹如乳甘美、而其陳皮最勝矣、大者徑二寸餘、一郡皆植蜜柑、蓋此與中華越地相同、薩州櫻島、豫州松山之產味美、駿州之產次之、肥後八代之產、形小皮薄、瓣皮亦薄、而味美也、又有異品者、

〔雍州府志六土產〕橘　凡橘類倭俗總稱柑類、蜜柑、柑子、白柑子、雲州橘、九年母、橙等、雜品悉在京師、凡柑類南方海濱產者、風味甘美也、京師所賣多出自木津河邊鐵司、鐵司地在山腹背北向南、故一切柑類、幷至米穀、其味爲宜、是因土地和煖者乎、按鐵司地古鐵司之領地乎、

〔增訂豆州志稿七土產〕蜜柑　河內、木負ヨリ西、久料ニ至ル數村、及伊豆山、伊東邊ヨリ產出ス、昔時ハ六七箇貢ス、

ベシ、芽ヲ出シテ後旱トキハ、時々泔水ヲ灑ギ、九月ヨリ低棚ヲ架テ、上ニ槀莚等ヲ被セ霜雪ヲ避ギ、春暖至テ此ヲ除キ去リ、其苗ノ厚キ所ヲ間引テ、四寸隔バカリニシ、一尺以上ニ及ビタル時ニ、春分以前植地ヲ調置テ移シ植ベシ、植地ハ眞土ノ肥沃タル山畑等ニ宜シ、若埴土粘椲ハ軟沙ヲ加ヘテ調和シ、其植タル後ニ根ノ傍一尺許ノ處ニ穴ヲ二三處掘テ、糞苴ヲ入レテ上ヲ覆ヒ置クベシ、若シ木ニ蟲ヲ生ズルコト有ラバ、銅線ニテ刺殺シ、或艾葉ニ硫黃ヲ和シテ灸ヲ燒ヘ、若孔ヲ生ジタルハ、硫黃ト埴土トヲ和シテ其孔ヲ塞ギ、或ハ杉木ヲ釘ニ削テ、其孔ヲ打塞グモ、亦能ク蟲ヲ絕ス者ナリ、且又寒中或春分頃ニハ、根邊ヲ鍬ニテ耕耙シ、種々ノ糞養ヲ用ヒ、干魚ハ殊ニ宜シ、斯ノ如クシテ六七年モ培養スルトキハ、實ヲ結ブニ至ル、然レドモ菓樹ノ實植ニテ佳實ヲ多ク結ブ者ハ稀ナリ、若其實善良ナラザルヲバ、速ニ伐リテ砧木ト爲シ、美味上品ナル佳實ヲ結ブ、良木ノ枝ヲ接木スベシ、多年ナラズシテ美味上品ナル佳果ヲ夥シク結ブノ良木ト爲ル者ナリ、〇中略柑類ノ果樹ハ何レモ寒氣ニ傷ムコト甚キヲ以テ、氣候第十番以下ノ國土ハ、西北ノ方高クシテ風寒至ラズ、山南等溫暖ナル場所ヲ撰ミテ栽ベシ、故ニ第十番以下ノ土地ハ、稚木ノ中ハ九月ヨリ棚ヲ構キ、霜雪ヲ除テ寒氣ヲ防ギ、溫メ養フベシ、大木ト成テ棚ヲ構コト能ハザルハ、槀蓏等ニテ緩裕ニ其幹ヲ圍繞ミ、且根ニ穬ヲ集メ置テ此ヲ溫メ、春分過テ取リ除クベシ、又其寒ヲ防グ棚及ビ槀蓏僞等ヲ去テ、後十餘日ノ中ニ根ヲ去ルコト一尺許ヲ、鍬子ヲ以テ土ヲ穿耙シ、糞汁或干鰯汁等ヲ澆テ、其上ニ土ヲ覆ヒ置クベシ、此ノ如クスルトキハ橘子、柑子、其他柑子、橙子等、何レノ柑類ニテモ、皆夥シク果實ノ豐熟スル者ナリ、唯其氣候第十三番ヨリ以下ナル寒冷强キ國土ニテ、冬ハ雪積ル土地ニハ柑類ヲ作ルコト莫レ、勞而無功ナリ、

今夫柑類ノ種子ヲ蒔キ、其苗ヲ爲立テ、三年目ニ此ヲ植地ニ栽エ移シ、其能ク成長スル勢ノ、雄壯ニシテ繁衍肥太スル者ヲ撰ビ、笛竹ノ太ニ至レバ卽チ伐テ砧ト爲シ、美果、良木ノ枝ヲ接換シ、其他衰弱ナル栽木ヲバ悉ク拔キ

にもなるべし、夫をこき揚わけて、一本宛別畑に畦を拵へ、熟糞をかけ日に乾し切かへして、其所へ壹本づゝ貳寸程づゝ間置並べ植、水をかけ日覆ひをすべし、尤少し日ももれ雨ももるゝ如く、うすき薦を覆ひ家根にすべし、八月には覆を取べし然すれば九十月頃には四五寸に伸べし、夫を霜月にはこぎ揚、横にかため、なゝめに植、藁にて直に霜覆ひして、其冬置、翌春三月取出し、又畦を綿作のやうにいたし、それへ間八九寸置ならべ植、其年の夏の土用迄に、二度肥すれば、煙管のらを竹、筆の軸位には成長するもの也、其冬は其儘霜覆ひして、翌春の接木の臺とする也、扨翌春二月末三月上旬、枳殼の木の芽青くなりたる時、下にある圖のごとく○圖略伸たる枳殼を土際貳寸程のこし鋸にてみな切べし、

〔廣益國產考一〕國產となるべき品々の事○中略房州上總の南海手の山畑に蜜柑をうゑ、田には土佐の國のごとく、二度稻を植たらんには、是又大ひなる國益ならんと年來思へども、其所の人は地力を盡したる心もちにて、別に利かたはなきもののときはめゐる也、右に論ずるごとく、東漸の常理なれば、數百年の後にはひらくる時節もあるなるべし、

〔草木六部耕種法十九需實〕柑類ハ其種類頗多シ、先橘子、柑、枸櫞、包橘、柚子、橙、金橘、朱欒、紅柚、瓜哇柑等、皆悉熱帶ノ地ニ產スルノ物ニテ、第十三番以下氣候寒冷ナル國土ニ植ルトキハ、大抵皆其實ヲ需ヲ作ト雖ドモ、成熟スルコト能ハズ、廼ニ成熟スルコト能ハザルノミナランヤ、必變化シテ枳トナルコト多シ、故ニ樹藝ヲ業トスル者ハ、作物ニ應合スル氣候ノ番數ヲ知ラザレバ、或ハ勞シテ功ナキコト有リ、皇國モ西海、山陽、南海東海諸州ハ、其培養ヲ懇到ニスルトキハ、柑類成熟スルコトヲ得ベシ、其他諸州ハ此ヲ植ベカラズ、　凡柑類ノ種子ヲ植ニハ正月中旬ニ軟沙或墳土肥良ナル畑ニ、一歩二條ナル畦ヲ作リ、善種ヲ撰テ疎ク散蒔ニシテ土ヲ四五分覆ヒ、鍬ニテ壓付置ク

紅蜜柑色赤、本草所謂朱橘是乎夏。蜜。柑五月黄熟、本草所謂黄橘是乎早。無。核。蜜。柑希有之、温州橘其葉似柚葉而略少、其實乃蜜柑、皮厚實絶酸芳芬、用其汁和魚膾佳、蓋温州乃浙江之南柑橘名處、猶紀州、疑移栽其樹者也、俗爲雲州橘者無據唐。蜜。柑。大而皮厚實味不美、所謂塌橘此乎、

〔笈埃隨筆 八〕雜説八十ケ條

蜜柑に李嬬人といふあり、味ひ甚美にして種なし、故に此名を呼ぶ、筑後柳川にあり、適予〇石井磧而是を得て继木として貯ふ、嘉栗曰、予姉𡣽なる人、室町押小路下る町に有しが、其庭に種なしの蜜柑の大樹ありし家を、他へ讓る折から移し植たれば枯たり、最惜かりし、寶曆末の頃なりけり、

〔廣益國産考 八〕蜜柑を仕立る事

前にも云ごとく、何國にても苗を求めなば、攝津より調給ふべし、同じ蜜柑の内にも大小あり、中蜜柑を植べし、紀州も多し、中蜜柑を作ると見えたり、大は大平(おほひら)といひ、中より一かさ大きく、味ひも中に勝りけれども、實と皮の間透て永く持ず、春暖には早く損ずる也、大蜜柑といへるは又別種也、李夫人は西國には種子なし、蜜柑といへるはすこしもかはらねども、李夫人に勝りて味ひ美にして更に核なし、李夫人は美味の内少し酢氣あり、一菓のうちに一ツ二ツ核有事あり、此外相似たる大蜜柑あれども味ひ劣れり、此種子なしは至て美味にして品よく、皮も九年房と同じく食るゝ也、多く植て國産とすべきとならば、紀州にて作る中蜜柑と大平(おほひら)と西國より出る種子なしとを澤山植べし、其外九年母を少々作るべし、必直段下直なりとて、みだりに苗を求むべからず、

蜜柑の苗を仕立るには、先攝津の東野より遠方ならば、二年物の上接苗を調植べし、二三日路にて居所にては、四年物位の成長したるを調べし、先此苗木を拾四五本植べし、最初に枳殼の實を取、三四寸間ヲ置、實を丸ながら並べ植べし、五月時分に一ツの實より貳三十本程芽を出し、二寸餘

蜜柑種類

後豐之產、雖形小而味甘美、是海西之珍也、土州有柑、狀大皮薄、有臭氣、二三月最好、然味不爲美、此俗稱宇樹橘者乎、卽臭柚也、紀駿之土民覓其最大者、於初實時、有一株數百顆、先取未黃數十顆而遺留、一株三五十顆、則隨熟逾大、一顆如盃椀、色紅味極美、故價十倍焉、然不如得實甚多、實多則運轉于江都及諸國、以貨之、或采皮曝乾、作橘皮以販之、俱有大利爾、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕柑　ミカン　一名洞庭長者（事物異名）　平帶　穣侯（共同上）　金嚢（行厨集）　瑞金奴（群芳譜）　瑞聖奴（事物紺珠）　金輪藏　洞庭霜　甘心氏　木蜜（同名アリ）　水晶毬　金苞　青華　朱實　楚梅（共同上）

柑ハミカン類ノ總名ナリ、品類多シ、皆暖地ノ產ニシテ、寒國ニハ育シ難シ、紀州ノ產ヲ上品トス、其獻上ノ柑ハ有田ノ產ナリ、京師ニテハ好柑ヲ、何レニテモ皆紀伊國ミカント僞リ呼ベドモ、眞ノ紀伊國ミカンハ、有田ノ產ノミニシテ、卽集解ノ乳柑ナリ、形大ニシテ柚ノ如ク、皮モ常柑ヨリ厚シテ肌粗ナリ、皮內ノ白脈少クシテ、皮ト穣ト自ラ分離ス、味甘シテ酸味少シ、核少ク全ク核ナキ者モアリ、凡ソ上品ノ柑橘ハ核ナシ、核多キ者ハ下品ナリ、形微扁ニシテ大ナル故、中心孔アリテ箸ヲ容ルベシ、又蔕ノツク處、皮高ク起リテツマミアリ、饅頭柑ノ形ナリ、乳柑一名佛蘇柑（八閩通志）生枝柑ハ詳ナラズ、枝ニ久シク留置ルヽヲ云、海紅柑ハジヤガタラミカン、大サ三四寸或ハ二寸餘、皮赤ク厚ク、肌細ニシテ穣甘シ、暖地ニ非ザレバ育セズ、今世ニ朱欒（ザボン）ヲジヤガタラミカント呼ブ者ハ非ナリ、洞庭柑甜柑共ニ詳ナラズ、木柑ハ汁ノ少キヲ云、下品ノ稱ナリ、一名乾柑（汝南圃史）朱柑ハベニミカン、皮赤クシテ美ハシケレドモ、味酸クシテ食フベカラズ、四國九州ニ多シ、一名猪肝、（汝南圃史）支柑（同上）饅頭柑ハ蔕ノツクトコロニツマミアルヲ云、下品ノ小柑ニモ此形アリ、總ジテ饅頭柑ト云、黃淡子ハ詳ナラズ、枸櫞ノ一名トスル說モアリ、又塌橘ノ一名トスル說モアリ、

〔和漢三才圖會八十七山果〕橘（みかん）（居密反）　橘　蜜柑（俗）　和名太知波奈（中略）○

蜜柑名稱

橘ハ今ノ蜜柑ナリ、大柑子ハ今ノ柑子ナリ、小柑子ハ今ノ橘ナリ、或小柑子ヲ今ノ金柑トス、按ズルニ金柑ハ盧橘ニテ今ノ夏蜜柑ナリ、又三代實錄仁和二年正月廿九日、太宰府例貢小柑子、以十一月三十日以前爲貢進之期、先是不立期限、故今定之トアリテ、其盧橘ナラザルコト知ベシ、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年正月廿九日己酉、太宰府例貢小柑子、以十一月三十日以前爲貢進之期、先是不立斯限、故今定之、

〔饅頭屋本節用集美草木〕蜜柑(ミツカン)

〔倭訓栞中編二十五美〕みかん　蜜橘の字を用ひ來れり、蜜橘其味甘と群芳譜に見えたり、朱橘也といへり、紅みかん、核なしみかん、夏みかん、贊みかん等の品類多し、もと蜜に漬し糖に藏むるによきをもて名けしにや、又柑も甘美の義によりし字なれば、其滋味をもて呼る名にして、周處が風土記に乳柑といへる義なるべし、

〔本朝食鑑四山菓〕蜜柑(ミカン)

釋名橘　香菓日本紀　昔草(ムカシ)藏玉　庭古草(ニハフル)同上　山橘藻鹽中略〇集解蜜柑卽橘也、南國多產、樹高丈餘、枝多生刺、其葉尖厚、光面綠色、大寸餘、長二寸許、大抵此類略相似、四五月開小白花、甚香可愛、結實、至冬黃熟、經日變紅、此亦甚馥、大者如盃、外皮厚皺、裂之發煙、此卽橘皮也、皮中包瓣、瓣中有核、其瓣所每食、多時甘者少、酸者多、至春微酸者少、而全甘者多、其瓣瘦液減者尙甘美也、花實俱芳芬、故本邦古來賞詠之、垂仁帝時田道間守采于常世國、來以奉獻之、常世者雖蓬萊之稱、恐是華韓地乎、斯時橘實初入本邦、後聖武帝天平中賜橘姓於葛城王、王者左大臣橘諸兄也、帝詠歌而祝之、在中將詠昔人之袖香者、假田道之事以詠花、歌人以花爲五月令、而興芳趣也、今蜜柑之大者、以紀陽之產爲勝、駿陽次之、倶南國和煖之地、北方及强寒之地生者少、若偶生亦味酸苦不甘、狀亦極小、江都自冬初至春三四月生蜜柑、尙有此、駿甲多產之故乎、京師過正月全無、後肥八代及

ケレバ、木ホドナク枯ニケレドモ、人チカラモヲヨバズ、君モオホセラルヽ事ナシ、

〔高祖遺文録二十四〕三澤鈔(録内十九巻二十紙、啓蒙二十八巻五十一紙)柑子(カウジ)一百、コブ(昆布)、ノリ(海苔)、ヲゴ(於胡)等ノ生ノ物、ハルバル(遠々)ト、ワザワザ(態々)山中ヘヲクリ給テ候、ナラビ(並)ニウツブサノ尼ゴゼンノ、御コソ一一デ(小袖)給候了、

〔徒然草上〕神無月の比、くるす野といふ所を過て、ある山里にたづね入事侍しに、はるかなる苔のほそ道をふみ分て、心ぼそく住なしたる庵あり、木葉にうづもるゝかけひの雫ならでは露をとなふものなし、あか棚に菊もみぢなど折ちらしたる、さすがにすむ人のあればなるべし、かくてもあられけるよと哀に見るほどに、かなたの庭におほきなる柑子の木の枝もたはゝになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそすこしことさめて、此木なからましかばとおぼえしか、

〔壒嚢抄一〕柑類ヲ俗家不植ト云何因縁ゾ、凡ソ雖有此説、慥ナル本文ヲ不見、是於本朝事歟、柑類九種アリト云、是一菓所含也、古人説云、大柑子、梧桐、芭蕉、紫荊、欵冬等其處不佳、是皆人間珍重物也ケル故ニ、有過分徴云々、如聖敎云、人間作法依正二報難備者也、所以依報増スル時正法還滅ス、仍過差事不可好者也、其大柑子橘柚等九種香菓種始テ來シ時、國主幷持來使者共亡シキ、故其種尚不利也ト云也、譬ヘバ人皇第十一代垂仁天皇辛酉歳、但馬毛理ヲ遣常世國令求香菓給フ、而ルニ朝使不歸前、庚午歳天皇崩御成、卽大和國添下郡菅原伏見中陵葬シ奉ル、爰但馬毛理景行天皇卽位元年辛未歳、常世國ヨリ還テ、九種ノ香菓捧獻陵滸泣曰、受命渡海往還間經十ケ年、今已向陵雖經奏聞、更無勅答御音、臣獨生何益有トテ叫哭自死ス、群臣感志爲其墓陵傍作ト云リ、如此求之主人使者共死シテ菓子今傳ハル、柑子其旹タリ、此故殊ニ俗家植ル事ヲ忌ト云云、根本一菓中九種ノ種子ヲ含メリト云リ、

〔錦所談二〕橘、大柑子、小柑子、

〔本草和名 十七菓〕柑子（孟詵曰、得霜後即美、故名甘子、出崔禹） 一名李衡木奴（李衡人名、出孟詵也） 一名金實、一名平蹄（已上二名出兼名苑） 和名加牟之、

〔倭名類聚抄 十七菓〕柑子 馬琬食經云、柑子（上音甘、和名加無之、）

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕醫心方載柑子、亦引馬琬、上林賦云、黃甘橙楱郭璞曰、黃甘、橘屬、而味精、開寶本草云、其樹若橘樹、其形似橘而圓大、皮色生青熟黃赤、未經霜時尤酸、霜後甚甜、故名柑子、李時珍曰柑其樹無異於橘、但刺少耳、柑皮比橘色黃而稍厚、理稍粗而味不苦、橘可久留、柑易腐敗、柑樹畏冰雪、橘樹略可、此柑橘之異也、今俗呼蜜柑、亦是一種也、

〔倭名類聚抄 十七菓具〕李衡 馬琬食經云、李衡（和名加無之乃佐禰） 柑子人名也、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏具〕按李時珍曰、漢李衡種柑于武陵洲上、號爲木奴焉、則知李衡木奴、是柑之一名、其李衡漢人姓名、故本草和名云、李衡人名、此引馬琬以李衡爲柑子人名、誤甚、馬氏之書、必不如是、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕柑子 柑子（和名加無之、俗云加宇之、） 黃柑（今按）

按柑子乃柑類之總名也、今單稱柑子者、乃陳藏器之所謂黃柑是也、然詳考形狀、今柑子乃橘之屬（カンノ）也、

其樹似橘、葉亦似橘而短、實似蜜柑而小、皮薄純黃味酸苦、

一種有白和（シロワ）柑子、出於遠州白和村、故名之、大如蜜柑而味亦稍美、

〔僧綱補任 上元明〕和銅三年（庚戌）三月辛酉日始遷都、從難波宮移御奈良京、〇中略 入唐學問僧道顯始柑子木植之、

〔續古事談 一王道〕此御時〇堀河或人內裏へ、柑子ノ木ヲマイラセタリケルヲ、ナニガシノツボニウヘテ、愛セサセ給ケレバ、藏人瀧口ナド集リテ、木ヲカラサジトテ、家ヲツクリオホヘリケルヲ、爲隆參テ此ヲ見テ、アレハ何事ゾ、サル事ヤハアルベキトテ、御クラノ小舍人ヲ召テ、散々ニコボタセ

高僅二寸餘而花發者、殖于土器進之、

〔日本紀略 四 村上〕天德三年十二月七日丁丑、南殿坤角新移栽橘樹一本、高一丈二尺、件樹彈正尹親王東三條家樹也、依勅定奉之、右近將監以下掘之、

〔禁秘御抄 上〕草木

同殿〇南 橘

遷都以前人家樹也、康保二年正月廿七日、仰左右近府被移、

〔枕草子 三〕木の花は

四月のつごもり、五月のついたちなどの比ほひ、橘のこくあをきに、花のいとしろく咲たるに、雨のふりたるつとめてなどはよになく心あるさまにおかし、花の中よりみのこがねのたまとみえて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたるさくらにもをとらず、郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更にいふべきにもあらず、

〔玉勝間 六〕南殿の御階の櫻橘

橘樹者、本自所生託也、遷都以前、此地橘大夫家之跡也云々、南殿樹事、番記錄云、村上御宇、天德三年十二月七日、南殿坤角、新移栽橘樹一本、高一丈二尺、件樹、彈正尹親王東三條家樹也、依勅定奉之、右近將監已下掘之、或記云、遷都之時、彼樹在所、稱橘大夫者家後園也、件後園有橘、卽南殿前、以賞翫、其後回祿之後、被栽彼東三條樹云々、小一條左大臣記云、橘本主、秦保國也、と見えたり、今度燒亡とあるは、天德三年の燒亡のこと也、大槐秘抄云、南殿の橘の木は、此京に、いまだ內裏たてられ候はざりけるさき、人の家の候けるが木にて候ければ、きられずしてなん候ける、殿上人は、南殿のおほゆかにて、枝ながらたちばなくひなどしけりと申候は、それはまことにや候けん、木は一定のふる木になんさぶらひける、

婆那波、本都延波、登理章賀良斯、〇下略

〔古事記傳三十二〕波那多知婆那波は花橘者なり、書紀には下の波字なし、橘の事は玉垣宮段に委云り、(傳の二十五の末)萬葉十二(二十一丁)に、香細寸花橘乎、十九(十六丁)に、花橘乃香吉、二十(二十七丁)に、多知波奈乃之多布久可是乃、可具波志伎、

〔日本書紀〕二十四(皇極)三年七月、東國不盡河邊人大生部多勸祭虫於村里之人、〇中略此虫者常生於橘樹、或生於曼椒、(曼椒此云裒曾紀)其長四寸餘、其大如頭指許、其色綠而有黑點、其貌全似養蠶、

〔日本書紀〕二十七(天智)十年正月、是月、以大錦下授佐平余自信、沙宅紹明、(法官大輔)以小錦下授鬼室集斯、(學職頭)以大山下授達率谷那晉首、(閑兵法)木素貴子、(閑兵法)憶禮福留、(閑兵法)荅㶱春初、(閑兵法)㶱日比子贊波羅金羅金須、(解藥)鬼室集信、(解藥)以小山上授達率德頂上、(解藥)吉大尙、(解藥)許率母、(明五經)角福牟、(閑於陰陽)以小山下授餘達率等五十餘人、也、童謠云、多致播那播、於能我曳多曳多、那例々騰母、陀麻爾農矩騰岐、於野兒弘儞農俱、

〔常陸風土記〕(行方郡)郡東國社、此號縣祇、〇中略其地昔有水之澤、今遇霖雨、廳庭濕潦、郡側居邑橘樹生之、

〔萬葉集〕六(雜歌)冬十一月、(天平八年)左大臣葛城王等賜姓橘氏之時、御製歌一首、
橘花者、實左倍花左倍、其葉左倍、枝爾霜雖降、益常葉之樹、

〔萬葉集〕十九爲家婦贈在京尊母所誂作歌一首幷短歌
霍公鳥、來喧五月爾、笑爾保布、花橘乃、香吉、於夜能御言、朝暮爾、不聞日麻禰久、〇下略

〔日本後紀〕十七(平城)大同三年六月甲子、禁中有一株橘樹、彫枯經日、生意既盡、忽生花葉、楚楚可愛、因茲右近衞府奉獻宴飮、賜物有差、

〔續日本後紀〕八(仁明)承和六年五月壬辰、河內國阿衒〇阿字志紀郡志紀鄕百姓志紀松取宅中所生橘樹、其

ヲ去リテ渡ルモアリ、和産ノ陳皮ハ皆柑皮ニシテ眞物ニアラズ、

〔古事記 中垂仁〕天皇以三宅連等之祖名多遲麻毛理、遣常世國、令求登岐士玖能迦玖能木實、自登下八字以音故多遲麻毛理遂到其國、採其木實、以縵八縵矛八矛、將來之間、天皇既崩、爾多遲麻毛理分縵四縵矛四矛、獻于大后、以縵四縵矛四矛、獻置天皇之御陵戸而、擎其木實、叫哭以白、常世國之登岐士玖能迦玖能木實持參上侍、遂叫哭死也、其登岐士玖能迦玖能木實者、是今橘者也、○又見日本書紀

〔古事記傳 二十五〕此に縵と云るは、蔭橘子と云物、矛と云るは矛橘子と云物なり、其は内膳式に橘子四蔭、また橘子二十四蔭、桙橘子十枝、また橘子四蔭、桙橘子十枝、また橘子三十六蔭、桙橘子十五枝、擬橘子一斗、また橘子四十五蔭、擬橘子二斗二升五合、齋宮式にも橘子十蔭などある是なり、これには、たゞ橘子若干蔭とあるを、今おして蔭橘子と云ゆゑは、桙橘子と並べ云る其桙橘子は、正しく此の矛八矛とあるに當るを、其に對へて若干蔭と云るなれば、其もとは蔭橘子と云しことゝ、此と相照して知べし、然るを式のころは、若干蔭といへば、蔭橘子に限れる故に、蔭をば略きて、たゞ橘子とし云るなり、桙橘子はそのころは若干矛とは云ざりし故に、舊のまゝに桙橘子といひしなり、其は各一種の橘の名には非ず、同じき橘ながら、採ざまの異あるなり、其狀はいかなりけむ詳ならねど、今其名に就て按ふに、蔭橘子とは枝ながら折採て、葉も付ながらなるを云なるべし、凡て葉ある樹をば常に蔭と云へばなり、大神宮式、麻績等機殿祭料雜物中に、麻三十蔓圍二尺爲蔓とあり、此蔓もカゲと訓べし、さて凡て麻の量は、若干斤と云る例なるに、たゞ此にのみ蔓とあるはゆゑあるべし、思に此も葉をも著ながら用る故にかく云か、其用るさまを知られば定めがたけれど、是は麻績の祭なれば、麻を用ること、他祭などゝは異なるべき由もあれば、葉つきたるまゝを用ることもあるべきなり、若し然らば、此の蔭橘子と同じ心ばへなり、思ひ合すべし、桙橘子とは、やゝ長く折たる枝の葉をば皆除き去て、實而已著たるを云なるべし、其は其狀上代の矛の形に似たることぞありけむ、たとひ甚く似ずとも、さる狀の物は矛と云つべし、さて桙橘子と云は、落たるを拾取たる意の名にて、枝も葉も付ざるを云なるべし、故此は若干升とあるなり、さて蔭橘子矛橘子を此にはたゞ縵又矛とのみ云て、橘子と云ざるは、上に既に登岐士玖能迦玖能木實と云、採其木實とも云れば、更に又其名をば云ぬぞ雅語の例なる、

〔古事記 中應神〕天皇聞看豐明之日、於髮長比賣令握大御酒柏、賜其太子、○中略爾御歌曰、○中略波那多知

ハ、皆コノ朱橘ナリ、汝南圃史ニ藥橘ト云、琉球ニテハ桔餅（キツパン）ト云、本邦ニテモ製ス、朱橘一名染血、（汝南）（圃史）鱔血塘南（同上）綠。橘。ハ青色ノ時ヨリ食フニ堪ユ、朝鮮ヨリ來ル、和ニテアヲミカント呼ベドモ、柑ノ類ニ非ズ、乳。橘。ハ詳ナラズ、一名漳橘（橘錄）塌。橘。ハ大ニシテ扁キヲ云ジ、和產詳ナラズ、包。橘。ハ今春盤ニ用ユルカウジナリ、形柑ヨリ小ク、皮薄ク、淺黄色、肌細ニシテ光リアリ、縱ニヒダアリテ、稜ノ數外ヨリ見ルベシ、是カウジ中ノ下品ナリ、綿。橘。ハ詳ナラズ、沙。橘。ハ橘錄ニ云、取細而甘美之稱、或曰、種之沙洲之上、地虛而宜於橘、故其味特珍、然邦人稱物之小而甘美者、必曰沙、如沙瓜、沙蜜、沙糖之類、特方言耳ト、コノ品和產詳ナラザレドモ、形小ニシテ味甘美ナル者ハ沙橘ト云フベシ、油。橘。ハ詳ナラズ、大和本草ニタチバナトスルハ非ナリ、早。黄。橘。ハワセノカウジ、早ク熟スル者ヲ云フ、一名早紅橘、（汝南圃史）凍。橘。ハヲクテノカウジ、穿。心。橘。ハ凡ソカウジ及ミカンノ扁大ナル者、皮ヲ去レバ中心ニ穴ノ透リタルヲ穿心ト云、汝南圃史ニ、匾橘、一名穿心橘ト云、匾橘ハ卽チ塌橘ナリ、此說從フベシ、穿心橘ヲ橘錄ニハ軟條穿心、一名女兒橘ト云、荔。枝。橘。ハ、皮ニイボ多ヲ云、カサミカン、カサ柚ト呼ブ例ニシテ、下品ノカウジナリ、コノ外品類多シ、皮ヲ藥用トス、青皮陳皮共ニ橘皮ナリ、今柑皮ヲ代用ユルハ非ナリ、柑皮ハ別ニ主治アリ、千金方ニ甘皮ト云ハ柑皮ナリ、藥舖ニカウジノ青キ皮ヲ乾タルヲ橘皮ト云、コレ眞ノ青橘皮ナリ、コノ中ニ枸橘ノ皮ヲ雜ユルアリ、擇ブベシ、橘ノ熟シテ皮ノ色黄ニナリタルヲ陳皮トス、是眞ノ黄橘皮ナリ、又紅皮トモ云フ、皆陳久ナルヲ良トス、故ニ陳皮ト名ク、朱橘ノ皮ヲ良トスレドモ此品稀ナル故、黄橘ノ皮ヲ用ユ、是モ多カラザル故、包橘ノ皮ヲ代用ユルモ佳ナリ、陳皮ノ白ヲ去ヲ橘紅ト云フ、舶來ノ青皮陳皮共ニ僞雜多シ、宜シク擇ブベシ、柑柚橙ノ皮雜レリ、古渡ノ青皮ニ四ツニ切テ乾タルアリ、附方ニ謂ユル四花青皮ナリ、一名蓮花青皮、（本經逢原）又古渡ニハ、化州老井ト楷書ノ印ヲシタルモアリ、化州ノ朱橘ハ名產ニシテ、橘皮トナシ貴ルコト、廣東新語ニ出ヅ、幼幼集成ニ化橘香ノ名アリ、又青皮陳皮共ニ自

又別所謂柑者、書禹貢、其貢者橘柚、漢唐注疏家皆曰、小者爲橘、大者爲柚、宜因此可辨橘柑之二物、其曰柑者、但是橘之味甜美者、故名柑橘之外、人別非有柑、故韓氏橘譜、橘美者橘柑之二字通用朱橘曰、朱柑香橘稱香柑、其他諸書橘柑字通用、則知柑者上好之稱、今所謂柑子者、據韓氏說則不必論大小、酸甜總稱包橘可也、不知柑之稱昉于何時、蓋漢以來之稱而上古無之、可知非有二種、元錄

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕橘　カク日本紀　ムカシグサ古歌　ニハコグサ　カクダモノ共同上　タチバナ和名抄　カウジ　一名湘水夫人事物異名　洞庭仙子同上　洞庭佳味輟耕錄　洞庭霜書言故事　洞庭霜熟故事白眉　洞庭顆同上　霜朱行厨集　璐精同上　黃金丸蔬果爭奇　宜春果事物紺珠　金衣　金衣大丞相　星垂　陸吉共同上　玉局花曆百詠　樹一名青霧名物法言　讓木[illegible]　青皮一名劇骨香輟耕錄　陳皮一名貴老輟耕錄

今タチバナト呼デ庭際ニ栽ヘ、或ハ春盤ニ用ユル者ハ、別ニ一種ニシテ、古ヘ呼ブトコロノタチバナニ非ズシテ、八閩通志ノ猴橘也、形金柑ヨリ微大ニシテ、皮ノ皺粗ク柑(キンカン)ノ如シ、本草或ハ醫書ニ橘ト云フ者ハ、皆カウジ類ノ總名ナリ、柑ハミカン類ノ總名ナリ、橘ト柑ト種自ラ別ナリ、本邦國史類ニ柑子ト云ハ、ミカンノコトナリ、橘ヲカウジト呼ブハ、今ノ俗名ニシテ、古名ノ柑子ニ非ズ、中略○橘ハ和漢共ニ品類多シ、和產アリテ漢名詳ナラザルアリ、漢名アリテ和產詳ナラザルアリ、凡ソカウジ類ハ皮薄クシテ、柑皮ヨリ皺細也、黃橘ハシロカウジ一名シラワカウジ、橘類ノ上品ニシテ、遠州白輪一ニ白和ニ作ルヨリ出ス、名產ナリ、形柑ヨリ大ニシテ皮薄ク、淡黃色ニシテ光リアリ、味甘クシテ柑ノ如シ、城州玉水ニモアリ、京師ニ栽ユレバ形味共ニ變ズ、寒ヲ畏ル故ナリ、朱橘小而色赤云云ハアカカウジ、柑ノ大サニシテ皮ノ色赤ク美シ、一種漢種九州ニ多シ、形大ニシテ柚ノ如シ、皮ノ肌ハ柑ヨリ密ニシテ、皮厚ク熟シテ色赤シ、穰味甘シ、核甚少ク全クナキ者アリ、方言トウミカント呼ベドモ、ミカン類ニ非ズ、京師ニ栽ユル者ハ形小ニ變ズ、今舶來ノミカンブケ

橘温州ノ者爲上事ヲイヘリ、凡中華ノ書ニ所記ノ品類ト、本邦所在ト同キアリ不同アリ、橘類ナド各有無異同アリ、包橘、橘ヨリ小也、皮ウスク瓤ノヘダテ上ヨリ見ユ、皮ニ光アリ、熟シテ後色黄ニシテ味甘シ、本草ニ見エタリ、又大カウジト云物アリ、古人柑ヲカウジト訓ズ今包橘ヲカウジト稱スルハ誤ナリ、タチバナハ橘ノ本名ナルヲ、他果ニ名付ルガ如シ、タチバナト云物、カウジニ似テ小也、金橘ヨリ微大也、是本草所謂油橘カ、未詳、皮薄ク味スシ、上少クボメリ、橘類最下品ナリ、タチバナハ橘ノ本名ナルヲ、此果ニ名付ルハアヤマリナリ、紅橘アリ、カラヨリ來レルミカンニ形似タリ、其色ミカンヨリ紅ナリ、本草朱橘ト云ナルベシ、又綠橘アリ、味甘シ、サナシミカン、大サハ常ノミカンニ同ジ、味ヨシ、山州長池、又紀州ニモアリト云、

〔和漢三才圖會　八十七山果〕包橘　太知波奈

本綱、載宋韓彥直橘譜云、橘有十四品之内、包橘外薄内盈、其脉瓣隔皮可數、

按太知波奈者、橘類之總名、而今稱之者、乃包橘也、其樹葉花無異于蜜柑、其實皮薄小而似金柑之大者、瓣形自脹于外可數、恐田道間守所得來橘此矣、於今歲始嘉祝必用之果也、又甘美而盛所用之橘乃蜜柑也、

凡包橘葉似金橘葉而略柔也、

〔本草一家言　三〕橘　稱紀國蜜柑者、是上好橘也、不可以柑子皮爲陳皮、柑子皮者、直是柑皮時珍論以橘皮之緊漫分之云、緊者是橘、漫者是蜜柑、然詳其文、柑子之氣味絕非可代橘皮者、先輩云、韓彥直橘譜、載橘包橘二種而曰、其橘者白輪柑子是也、曰其包橘者今稱單稱柑子者、味酸而不佳、唯用飾春盤者是也、愚讀韓氏橘譜、反覆求之、無以白輪柑子爲橘、以眞柑子爲包橘之明文、白輪柑子、俱似以二物爲包橘、唯包橘中甜酸二種耳、柑子白輪、俱是包橘而非眞橘可知矣、予以今所稱柑子者、決爲包橘、此屢因古人之說而以正、時珍橘柑之辨如此、愚意別有說、請述之、夫橘柑二字求其來由、在昔無橘之外、

陳皮浮而升入脾肺氣分
青皮沈而降入肝膽
二物一體一用（物理之自然也）

〔大和本草十果木〕橘（タチバナ／ミカン） タチバナト訓ズ、ミカンナリ、其花ヲ花タチバナト古歌ニヨメリ、南方溫煖ノ地、及海邊沙地ニ宜シ、故紀州駿州肥後八代皆名產也、共ニ南土ナリ、紀州ノ產最佳、北土及山中寒冽ノ地ニ宜カラズ、故本邦ニテ北州無之、朝鮮亦然、本草ニ實ヲウヘタルハ氣味尤マサルト云ヘリ、諸木皆接木（ツギキ）ヨリ實ウヘノ木、實ノ味ヨク材ニ用ニモヨシ、中華ヨリ來ル陳皮ハ大ニシテ性ヨシ、年々多ク來レリ、日本ノ陳皮ニ性大ニマサレリ、可用、今ノ世醫多クハ是ヲ不用ハ何ゾヤ、陳皮ヲ君藥ニ用ル方ニ、和陳皮ヲ用レバ效ナシト云、入和中理胃藥則留白、入下氣消痰藥則去白、本草曰、陳皮性能瀉能補、其功在諸藥之上、凡青皮陳皮枳實枳殼ハ、其採時ノ早晚ト、實ノ老嫩ヲ以分ツ、嫩キハ性酷シクシテ下ヲ治ス、老ハ性緩ニシテ治高、去白ニハヌル湯ニ鹽ヲ入、陳皮ヲヒタシ、洗ヒ筋トウラノ白膜ヲ去刻用ユ、是本草ノ說ナリ、白膜ヲウスクコソゲ去ベシ、橘ヲ十一月ヨリ兩ヲサクテカゴニ入、或ワラニアラク包テ日ニホス、カベニソヒテ掛レバ易腐、春月ヨク干タル時、器ニ納ヲキ、咳痰久ク愈ザルニ、刻ミテ生薑ヲ加ヘ煎ジ用、甚驗アリ、其氣味好シ、痰ヲ除キ咳ヲ止メ、肺ヲ潤シ開胸、香氣アリ、果トシ食シテモ味ヨシ、能ホシタルハ久ニ堪ヘテ損ゼズ、老人虛冷ノ人ハ生果ヲ食セズシテ是ヲ食フベシ、核トモニ用、白和カウジ、遠州白和村ニアリ、故名ヅク、其皮ウスク色黃ニシテ味ヨシ、不酸、ミカンヨリ大也、是眞橘ナルベシ、與本草合ヘリ、其味ミカンニマサレリ、又一種ヨク白輪カウジニ似タル橘アリ、是亦ミカンヨリ大ニシテ味亦ヨシ、中華ノ橘ナリトテ西土ニアリ、溫州橘其葉蜜橘ニ似テ薄小ナリ、其實ノ肌蜜橘ニ似タリ、大亦同ミカンヨリ厚シ、味モ亦似蜜橘、皮ノ裏如柑、蜜橘ヨリ薄シ、皮ノ味ハミカンニヲトレリ、其色ミカンヨリ赤シ、二三月ニ至リテ味彌ヨシ、土佐州ヨリ出ヅ、コレヲ日本ニテ溫州橘ト稱ス、本草ニ橘譜ヲ引テ、柑

有、而不如甘皮小冷療氣、本草和名云、橘柚一名橘皮、甘皮小冷、出陶景注、則知橘皮本條所載甘皮出陶注、二物不同、輔仁並擧之也、源君以甘皮爲橘皮一名非是、按甘皮卽柑皮、證類本草作其皮誤、

〔本草辨疑四菓〕陳皮

時珍曰、橘柚柑三者、相類而不同、橘實小、其辦味微酢其皮薄而紅、味辛而苦、(和ノ蜜柑ニ合)柑大于橘、其辦味甘、其皮稍厚而黃、味辛而甘、(此物和無比)柚大小皆如橙、其瓣味酢、其皮稍厚而黃、味甘而不甚辛、(此和柚與同)如此分之、卽不誤矣、

〔和漢三才圖會八十七山果〕陳皮　橘皮　紅皮　(陳者陳久之義、日久者爲佳、故名之、)

本綱、古橘柚作一條、後世以柚皮爲橘皮者誤也、此乃六陳之一、天下日用所須也、以廣中來者爲勝、江西者次之、今人多以乳柑皮亂之、不可不擇也、

橘皮	紋細	色紅而薄	內多筋脈	味苦辛	性溫
柑皮	紋粗	色黃而厚	內多白膜	味辛甘	性冷

柚皮最厚而虛、紋更粗、色黃內多膜無筋、味甘多辛少、性冷、

但以此別之、卽不差矣、(然多柑皮相雜也、柑皮雖可用、柚皮則不可用、)

陳皮(苦辛溫)爲脾肺二經氣分藥、寬膈降氣、消痰飲、極有殊功、同補藥則補、同瀉藥則瀉、同升藥則升、同降藥則降、隨所配、(入和中理胃藥則留白、入下氣消痰藥則去白、)凡橘皮下氣消痰、其肉生痰聚飲、表裏之異如此、凡物皆然、

青皮

本綱、青皮乃橘皮之未黃而青色者、薄而光、其氣芳烈、今人多以小柑小柚小橙僞爲之、不可不愼辨之、

氣味(苦辛溫)　肝膽二經氣分藥、人多怒有滯氣、脇下有鬱積、或小腹疝疼用之、以行其氣、如無滯氣則損眞氣、

古無用青皮者、至宋時醫家始用之、小兒消積多用青皮、最能發汗、有汗者不可用、

へることあるなり、さて或說に、昔の橘は今の蜜柑なり、今世に別に橘とてある物には非ずと云、又或說には、昔の橘卽今も橘と云物なり、蜜柑は後に渡來つる物なるを、味の勝れる故に、世に多く弘まり、橘は劣れる故にけをされて、おのづから罕になれるなりと云り、此二ついづれよりけむ定めがたし、今思ふに、今世に橘と云物は罕にありて、其實柑子よりなほ小くて、味も蜜柑とは遠に劣れり、然るに古橘はさばかり賞て、世に多かりし物なれば、是にはあらで、蜜柑こそ其なるべけれ、藥の橘皮にも、昔より蜜柑の皮を用るなり、今橘と云物の別にあるは、昔の橘をばいつのほどよりか蜜柑とのみ云から、後に別なる一種を橘と名けたるならむ、其今橘と云物は、延喜式伊勢物語などに、小柑子と云る物是なるべしと思はる、然れば始の說宜しかるべきか、又思ふに、若昔の橘今の蜜柑のことならば、昔のまゝに今までも多知婆那とこそ云來るべきことなれ、蜜柑と云名に變るべき由なし、然れば蜜柑は後に渡來つる物なるが、其始て渡りたる時に、味の美きまゝに蜜柑とは呼初しならむかとも思はるれば、後の說も理ありて聞ゆ、又思ふに、美加牟と云名は、和名抄に、據根柚屬也、漢語抄云、橘柑とある、此柚柑を說りて云るを、後に蜜柑とは香なせろかともおぼゆ、凡て橘柑柚の三は、漢國にてもまがひ、又其種類も多ければ、漢名には依ても決めがたく、又古今の異もいとまぎらはしきなり、又或說には、昔の橘は今云柑子なり、今云蜜柑は昔の柑子なりと云り、然れども柑子は、今も柑子と云物とこそ聞えたれ、

〔日本書紀垂仁六〕九十年二月庚子朔、天皇命田道間守、遣常世國、令求非時香菓、トキジクノカグノミ香菓、此云箇俱能未、今謂橘是也、

○又見古事記

〔本草和名木十二〕橘柚、一名橘皮甘皮、小冷、出陶景注、胡甘、柚酸者也、出蘇敬注、甘一名金實、一名平蹄、已上出兼名苑、橘一名金衣、一名黃、已上二名出兼名苑、

〔倭名類聚抄薑蒜十六〕橘皮　本草注云、橘皮一名甘皮、和名太知波奈乃加波、一云木加波、

〔箋注倭名類聚抄四薑蒜〕新修本草木部上品云、橘柚一名橘皮、陶蘇注皆不載一名甘皮、但陶注云、以東橘爲好、西江亦有而不如、甘皮小冷、療氣、本草倭名云、橘柚一名橘皮甘皮小冷、出陶景注、源君以甘皮爲橘皮一名者、誤會本草和名、兼舉本條橘皮陶注甘皮也、證類本草引陶注、甘皮誤其皮、文義遂不可通、橘甘皮、柑子、俱見菓部、○中略輔仁不載和名、按岐加波見厨事類記、蓋黃皮之義、

〔倭名類聚抄菓具十七〕甘皮　本草云、橘皮一名甘皮、和名木加波、其色黃之義也、

〔箋注倭名類聚抄九菓具〕原書木部上品云、橘柚一名橘皮、無甘皮之名、陶注云、以東橘爲好、西江亦

ろ名なり、實のことをよめる歌にも、花橘とよめり、萬葉の六には橘花とさへ書り、さるは此持來たる實を種として蒔しが生出て、初て花の咲たる時に、多遲麻花と呼初しが、遂に名とはなれるならむ、師說(賀茂眞淵)には、將來たる人の名を以て、田道間名と後に呼しなり、されば古は知を濁りてぞ唱へけむ、今も上總人南部人などは知を濁て云なり、又婆と麻と清濁通ふは常なりとあり、此說持來し人の名に因れるは然ることなれども、終の那を名とせられたるはいかゞ、其は此名を釋く言にこそさもいはめ、直に名と云ことな、名に負すべきには非ず、彼任那國と云例などいはゞ一に云がたし、又古は知を濁て唱へけむどあるもわたらず、此記又萬葉などに假字に書る、みな清音の知を用ひて、濁音の字を用ひたることなし、今の上總人などの濁るは東の訛にこそあれ、多遲麻毛理の名に因らば、まことに知は濁るべきことなれども、次なる婆を濁る故に、濁の重なるは聞苦しければ、おのづから知をば清音に唱へ來しなるべし、明宮段大御歌に、迦具波斯波那多知婆那とよませ賜へり、古は花をも實をも、殊に賞し物にて、萬葉卷々に歌ども甚多き中に、六三十三丁に、橘花者、實左倍花左倍、其葉左倍、枝爾霜雖降、益常葉之樹、十八十二丁に、等許余物能、己能多知婆奈能、伊夜氐里爾、和期大皇波、伊麻毛見流其登、とこよものとは、常世國より來つる物と云なり、又二十七丁可氣麻久母、安夜爾加之古思、皇神祖能、可見能大御世爾、田道間守、常世爾和多利、夜保許毛知、麻爲泥許之登吉、時自久能、香久乃菓子乎、可之古久母、能許之多麻敝禮、國毛勢爾、於非多知左加延、中略神乃御代欲理、與呂之奈倍、此橘乎、等伎自久能、可久能木實等、名附家良之母、橘の事、おほかた此歌に備れり、古今集に、五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする、此昔の人を、多遲麻毛理のことゝする註は非なり、續紀十二、和銅元年、縣犬養宿禰三千代に橘姓を賜ふ勅、橘者菓子之長上人所好、柯凌霜雪而繁茂、葉經寒暑而不彫、與珠玉共競光、交金銀以逾美云々とあり、與珠玉の上に實字脫たるか、武藏國に橘樹郡ありて、橘樹郷多知波奈御宅郷美也介と並在り、由緣あることなるべし、又姓氏錄に橘守と云姓ありて、三宅連同祖とあるは、公の橘樹を守る者を掌れる氏なるべし、此も初の由緣を以て、多遲麻毛理の子孫に任し給へるなり、師說に、此氏をもタヂマモリと訓べしと云れつるはかなはず、此は彼人の名に關かることには非ず、たゞ橘を守りし由にこそあれ、若此氏と彼人の名とを一にしていはゞ、彼人の名は橘を守し由なりとこそ云べけれ、然れども彼名は但馬國に由れることにて、橘に因れるにはあらぬをや、萬葉十五十一丁に、橘乎守部乃五十戸之とよめるも、古此樹を殊に守し事の有しから、守部里の枕詞とせるなり、又思ふに、こはたゞ守と云名に、云かけたるのみにはあらで、此里部古に橘を守る者の住る故に、守部と負るにもあるべし、其はいづれにまれ、冠辭考の說は、いさゝか違

莢(カチ)葉ニ似テ莖弱ク、草本ノ如シ、又唐山ニテ一名赤小豆トモ呼ブ故、誤テ神麯ニ用ル者アルコト本草必讀ニ云ヘリ、今新渡神麯ニ完粒ノ入タルアリ、

〔倭名類聚抄 菓十七〕橘 兼名苑云、橘(居蜜反)一名金衣、○和名太○知○波○奈○

〔箋注倭名類聚抄 果蓏九〕說文、橘、橘果、出江南、本草圖經云、木高一二丈、葉與枳無辨、刺出於莖間、夏初生白花、六月七月而成實、至冬而黃熟、乃可噉、本草綱目引事類合璧云、橘樹高丈許、枝多生刺、其葉兩頭尖、綠色光面、大寸餘、長二寸許、四月著小白花甚香、結實至冬黃熟、如盃、包中有瓣、瓣中有核也、○中略本草和名不載和名、按垂仁天皇時、遣三宅連始祖田道間守於常世國、求得香果橘子也、見古事記日本書紀、太知波奈、當是田道間花之急呼、李時珍曰、橘柚柑三者、相類而不同、橘實小、其瓣味微酢、其皮薄而紅、味辛而苦、柑大于橘、其瓣味甘、其皮稍厚而黃、味辛而甘、柚大小皆如橙、其瓣味酢、其皮最厚而黃、味甘而不甚辛、皇國諸家從是說、以遠江白和所產紅柑子為橘、愚按○狩谷之謂、古有橘無柑、柑甘於橘、故名甘子、是橘不如柑之甘美可知也、然則今呼太知波奈者即橘、呼加宇自者即柑子、又蜜柑者、柑子之最甘如蜜者也、

〔倭訓栞 前編十四〕たちばな　橘を訓せり、今禁庭南殿の橘、八幡にて橘のもろ木とよめるも現在せり、衆樹は遍照僧正の孫也、石清水の坂にて祠前の橘ほとんど枯んとするを見て、

千早ぶる神のみまへのたちばなももろ木も共においにける哉、其後橘も再び榮え、衆樹も屢ば遷りて、參議までに至ると大鏡に見ゆ、春盤に用る物是也、田道間等が絶域より採來りたる事、日本紀に見えたり、よて田道花といふにや、其裔橘守を氏とせり、此種初て本邦に來るをもて、名を擅にせるにや、橘類にては最下品也、此種は綿橘といへるもの也といへり、

〔古事記傳 二十五〕橘は和名抄に、橘和名太知波奈(タチバナ)とあり、此名は將來つる人の名に因て多遲麻花(タヂマバナ)と云なるべし、但し此物は花よりも實を主とすれば、花を以て名けむことはいかゞとも云べけれど、名のさまを思ふに、なほ婆那(ハナ)は、花とこそ聞ゆれ、花橘とも云、是も花を賞て云

相思子

ハウバナト呼ブ、花大サ四分許、形豆ノ花ノ如ク數多ク簇リツク、其生ズルトコロ常處ナシ、或ハ木身ニ生ジ、或ハ枝叉ノ間ニ生ズ、他木ノ枝梢ニ花ヲ開クニ異ナリ、花後扁莢ヲ結ビテ下垂ス、合歡(ネムノ)木ノ莢ノ如シ長サ二寸餘、濶サ四五分、内ニ小扁豆アリ、落テ生ジ易シ、花後新枝葉ヲ生ズ、葉形圓ニシテ一尖一劍アリテ光澤アリ互生ス、大サ三四寸、秋後凋落ス、樹皮ヲ採テ藥トス、紫荊皮ナリ、本經逢原ニ紫金皮ト云フ、舶來ノ者ハ至テ厚ク、黑褐色味甘シ僞ナリ、和產ハ皮薄シ、本草拾遺ノ紫珠ヲコノ條ニ入テ一物トスルハ非ナリ、紫珠ハコムラサキナリ、一名ミムラサキ播州コゴメノ木、尾州同名アリ山中ニ生ズ、小木ニシテ枝葉兩對ス、葉ハ衞矛(ニシキヾ)及水蠟樹(イボタ)ノ葉ニ似テ鋸齒アリ、夏月葉間ニ五瓣ノ小紫花簇リ開キ、後圓實ヲ結ブ、大サ一分許、初ハ綠色、秋冬ニ至テ熟シテ紫色ナリ、葉凋落シテ後愈觀ルニ堪タリ、山野自生ノ者ハ實少シ、花戶ニテ培養スル者ハ實多シ、一種大葉ナル者アリ、葉ハ桃ノ葉及蠟梅ノ葉ニ似テ鋸齒アリ、高サ丈餘、枝條叢生ス、花實紫珠ニ同ジ、コレヲヤマムラサキト云、一名ムラサキシキミ、紫式部、タマムラサキ、コメウツギ、紀州コメ〳〵ノ木、越後是救荒本草女兒茶ナリ、此ニ一種白實ナル者アリ、ヤマシロト云、花色モ白ク實最數多シ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四喬木〕相思子 ○トウアヅキ○ナンバンアヅキ○テンジクサヽゲ 薩州 一名美人豆 花暦百詠 赤小豆 同上、紅豆ト同名 相槵子 秘傳花鏡 樹一名相槵木 正字通 紅鬪木 事物紺珠 雞翅木 物理小識

古ハ京師ニ一樹アレドモ今ハナシ、其葉槐ノ葉ヨリハ小ク、合歡(ネムノ)葉ヨリ大ナリシト云ヒ傳フ、コノ實ハ赤小豆ノ形ニシテ、半ハ黑ク半ハ赤シ、古渡ハ黑赤鮮ニシテ美シ、其後別ニ渡ラズ、只龍腦中ニ雜ヘ來ルノミ、コノ物及ビ海紅豆ヲ龍腦中ニ入レ置バ、龍腦耗セズト云フ故ナリ、其色黑、赤分明ナラザルモノ多シ、至テ下品ナルモノハ全ク黑褐色ニシテ、黑キトコロナシ、ソノ質至テ堅シ、故ニ唐山ニテハ鑲嵌(ザウガン)ニ用ユ、近年新渡アリ、ソノ色甚美ハシ、下種シテ生ズルモノアリ、葉ハ皂(サイ)

紫荊

倭有蘇方木、樹皮濃白色、葉似菝葜葉而薄有光、但葉莖長、三月有花、淡紫攢生、大可麥粒、結莢狀似紫藤子而小、中有細子、春種子生、然未見大木、故不知其汁染物否、今所圖據本草必讀之繪、此與倭蘇方不遠、但本草綱目所言花實異而已、疑倭曰蘇方者卽紫荊也、(詳于灌木類紫荊下)

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕蘇方木　スハウ(和名鈔)　スハウギ(今名)　一名多邦(明一統志)　紅木(東西洋考)
巴勝居(同上、呂宋方言、)　蘇枋(南方草木狀)　櫯木(品字箋)
和產ナシ、舶來多シ、大泥(ダニ)、蘇門答剌(スモタラ)、瓜哇(ジヤワ)、暹羅(シヤムロ)、占城(チヤンパ)、眞臘(カボチヤ)等ノ蠻國ノ產ナリ、此木外皮白シ、然レドモ皆皮ヲ去リ來ル、古渡ノ者色深シ、今渡ル者ハ皆色淺シテ下品ナリ、楊弓ヲ造ルニコノ木ヲ用ユ、ソノカヅリクズヲ水ニテ濃煎シ、物ヲ染ル時ハ、紫色ニ近シ、故ニ紫色ノ假トス、之ヲ烏紅(正字通)ト云フ、白礬ヲ加ヘ染ムル時ハ色紅ナリ、故ニ紅色ノ假トス、然レドモ紅色ニテ染ムル者ニ比スレバ微黯ナリ、之ヲ木紅(本草彙言)ト云フ、

〔大和本草 十二 花木〕紫荊(スハウギ)　春時紫小花多ク叢開ク、花ハ毒アリ不可食、花落テ葉生ズ、根ノ側ナル苗ヲ分チウフベシ、若水曰、和俗所謂スハウギ也、本艸ノ說ヨク合ヘリ、今別ニ俗ノ紫荊樹ト稱スル小木アリ、紫色ノ小花ヲ開クハ紫荊樹ニ非ズ、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕紫荊　紫珠　皮名肉紅又云內消　俗云蘇方木(中略)
按紫荊木、皮濃白色、葉微團光澤、似菝葜(チヤツケフイバラノハ)葉而莖長、三月有花淡紫、略攢大可麥粒甚繁、其實結莢似紫藤莢而小、中有細子、春種子生、植于庭弄之、俗呼曰蘇方木、非眞蘇方、葉實大異、(蘇方見于喬木類)

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕紫荊　スハウ　スハウバナ　ハナズハウ(讚州)　ハナムラサキ(越後)　一名滿條紅(群芳譜)　矮荷(古今醫統)　火蛾(正字通)　紅內消(外科啓玄、同名多シ、)　牛頭藤(藥性要略大全)　欒荊(通雅、同名アリ、)　百日紅木(華夷花木雜考)
人家ニ多ク栽ユ、木ノ高サ丈餘、春月先ヅ花ヲ開ク、蘇木ノ煎汁ニテ染タル烏紅色ノ如シ、故ニス

紫檀

華土ヨリ渡ル物ト同クシテ稍大ヒナリ、

〔倭名類聚抄 二十木〕紫檀　内典云、旃檀黒者謂之紫檀、兼名苑云、一名紫栴、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕所引蓋法華經玄賛文、詳引見上條、○中略、旃檀、本草和名引同、按、古今注云、紫栴木出扶南、色紫亦謂之紫檀、兼名苑蓋本於此、蘇敬注紫眞檀云、此物出崑崙盤々國也、雖不生中華、人間遍有之也、釋氏呼爲旃檀、番人訛爲眞檀、然則本草紫眞檀、卽紫旃檀也、

〔大和本草 十一藥木〕檀香○中略　今日本ニ紫檀ト云樹アリ、其葉ハ粗本艸ニイヘルガ如シ、アックシテ四時不凋、荔枝樹ノ異國ヨリワタリシヲ見シニヨク似タリ、其花方一寸許、六七葉ニワカル、白色、花ノ心ハ紫ナリ、皮青色ナル事モ本艸ニ云ガ如シ、

〔續昆陽漫錄〕紫檀木、桐木、松木價、

工程做法曰、紫檀木每觔舊例銀三錢、今核定銀二錢四分、見方一尺、桐木舊例銀一兩、今核定銀九錢、松木徑二尺二寸、長三丈五尺、舊例銀九十六兩、今核定黃松銀八十六兩四錢、紅松銀七十六兩八錢、これにてみれば、西土の木價の貴きこと知るべし、官へ買の價なれども、これを以て推せば、民間の木價も賤しからずとみえたり、

蘇枋

〔倭名類聚抄 二十木〕蘇○枋○　蘇敬本草注云、蘇枋(唐韻作放、音與方同、俗云須○房○)人用染色者也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕按、鑑眞和尙東征傳作蘇芳、則古人或作芳、蓋連蘇字從草者、非借用芬芳字也、然廣韻從木作枋、此引唐韻、則作枋似是、那波本作放亦誤、下總本枋作方、與千金翼方證類本草下品及醫心方合、爲是、然染色具引本草注作枋、今不徑改、○中略　千金翼方、證類本草、方下有木字、醫心方同、證類本草引唐本注、人上有此字、無也字、

〔和漢三才圖會 八十三喬木〕蘇方木(すはう)　蘇木　和名須房○中略

按蘇方、暹羅、咬嵧吧、交趾、東京、六甲、東埔寨等之南方多將來之、煎汁染帛及紙、絳色次于紅花、

春新葉ヲ生ズ、採テ食用ニ供ス、形合歡(ネム)葉ニ似テ、大ニ槐葉ヨリ小ナリ、枝ニ刺多シ、樹幹ニ生ズル刺ハ、長サ三四寸餘ニシテ枝アリ、是藥用ノ皂角刺ナリ、夏ニ至リ葉間ニ細穗ヲ垂ル、栗花ヨリ細小ナリ、黄白色、後莢ヲ結ブ、濶サ寸許、長サ一尺餘、皆ユガミ曲リテ正直ナラズ、形薄シテ褐色、內ニ豆アリ、黄豆ヨリ小ニシテ扁シ、褐色ニシテ光アリ、是長皂莢(蘇頌)ニシテ、陶蘇ノ謂ユル尺二ナル者ナリ、是ヲ長尺皂角、(附方)大圓皂、(萬代家抄)滿尺皂角、(證治準繩)長板莢(醫壘秘錄)大皂(茶條)ト云、猪牙皂莢ハ舶來アリ、和產ナシ、長サ二三寸、濶サ三四分、微シ曲テ猪牙ノ形ノ如シ、黑褐色略シテ牙皂莢、或ハ牙皂共云、舶來ノ皂莢ハ、長サ六七寸ニシテ厚ク、正直ニシテ曲ラズ、是蘇恭ノ說ニ、長六七寸圓厚ト云ヒ、時珍ノ說ニ長而肥厚多脂而粘ト云者ナリ、然レドモ今ハ渡ラザル故甚稀ナリ、和產モナシ、木ヲ皂樹ト云、莢ヲ皂莢、或ハ皂角ト云、子ヲ皂角子ト云、刺ヲ皂角刺ト云、今藥舖ニ子刺音同キ故ニ、分テ刺ヲ皂角利ト云ハ誤ナリ、

附錄鬼。皂。莢。　詳ナラズ

增、集解、蘇恭ノ說ニ、長六七寸圓厚ト云、時珍ノ說ニ、長而肥厚多脂而粘ト云モノ、江戶瀧園岩崎氏ノ園中ニ一樹アリ、天保五年ノ比、京師山本氏ヘソノ莢ヲ肥皂莢ナリト稱シテ送ラル、此樹京師堀川二條街ノ儒士松永氏ノ庭際ニアリ、此家松永昌三ヨリ連綿タル舊家ナレバ、幾年ノ古木ナルヤ知ルベカラズ、然ルニ蘭山先生ハコレヲ目擊セザリシト見ユ、天保八丁酉年、吾友高井正芳君始テコレヲ得テ、遂ニソノ肥皂莢ニ非ズシテ、蘇恭時珍ノ說ク所ノ者ナルコトヲ知ル、

〔吾妻鏡十一〕建久元年九月十八日己巳、又飯富源太宗季、(改宗長)作獻簇、○中略又居蛇結文於膘宛、其風情殊珍重也、芳御感之餘、向後重端可爲此儀、次蛇結丸可爲宗季手文之由被仰含云云、

○按ズルニ、蛇結ハ皂莢ノ訛言ニテ、西海子ハ更ニ其音ノ轉ゼシナラン、

〔採藥使記上奧州〕照任曰、奧州津輕城下ヘ入ル二三里前ニ皂莢(サイカシ)ノ林アリ、猪牙(チヨク)皂莢(ソウキヤウ)ナリ、其實ノ形今

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕合歡 合昏 夜合 青裳 萌葛 烏賴樹 尸利灑樹 佛經 和名禰布里乃木 又云加宇加乃木 ○中略

按合歡木處處山谷有之、和州多武峯最多、其葉夜合如睡、下略稱禰布乃木、又有睡草、秋開花、葉花狀與木同 晩眠、

〔佐渡志 五 物產〕合歡 和名ネブ 方言カウカノ木 山野自生多シ、高二三丈ニ繁茂ス、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕皂莢 皂肉 烏犀 雞栖子 懸力 俗云左以加之 皂角子之訛也 ○中略

按皂莢、江州攝州之產良、信州者次之、皂角子之子與刺同音、故藥肆呼刺稱吏、

肥皂莢（ひさうけふ）

本綱、肥皂莢生高山中、其樹高大、葉如檀及皂莢葉、五六月開白花、結莢長三四寸、狀如雲實之莢、肥厚多肉、內有黑子數顆、大如指頭、不正圓、其色如漆而甚堅、中有白仁如栗、煨熟可食、十月采莢、氣味、辛溫微毒 治風濕下痢便血瘡癬腫毒、相感志言、肥皂莢水死金魚、辟馬蝗、麩見之則不就、亦物性然耳、

〔本草辨疑 四 木〕皂莢（サウケフ）

唐アリ、是猪牙（チヨゲ）皂莢ナリ、和ハ肥皂莢ナルベシ、脂アリト見ユ、又唐ノ中ニ猪牙ヨリ肥タル者アリ、

唐ハ二種共ニ脂ナク見ユルナリ、

時珍曰、樹高大、葉如槐、華瘦長而尖、枝間多刺、夏開細黃花、結實有三種、一種小如猪牙、一種長而肥厚、多脂而粘、肥皂ナルベシ 一種長而瘦薄、枯燥不粘、和者多脂 以多脂者爲佳、其樹多刺難上、采時以篾箍其樹一夜自落、亦一異也、有不結實者、樹鑿一孔、入生鐵三五斤、泥封之、卽結莢、 弘景曰、長尺二者良、○下略

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕皂莢 西海子 古名 サイカシ サイカチ サイカイジユ 筑前 サ アカアシ 石州 一名玄房 仲長統 錄耕 板皂樹 說嵩 走葉木 月令採取 注葉方 村家 栢荓䓃 山東通志

芽名 根皮一名木乳 附方

右折攀合歡花幷茅花贈也

大伴家持贈和歌二首○中略

吾妹子之、形見乃合歡木者、花耳爾、咲而蓋、實爾不成鴨、

中納言家持

〔夫木和歌抄二十九 合歡木〕題不知

わきもこがかたみのかうかはなのみにさきてけたしも身にならぬかも

〔塵袋二〕カウカノ木ハ、エンズノ木ト云フコトハザアリ、マコトニ同木歟、萬葉集ニ、紀女郎ガ大伴家持ニヲクル歌云、○中略家持返歌云、○中略此歌ヲオモフニ紀女郎ガヲクル歌ニハネブトヨミ、家持ガ返歌ニハカウカトヨメリ、合歡木ノ異名ナルベシ、但槐トネブトハ同類ナリ、葉コマカニシテ其ニヨルヌルモノナリ、サレバカヨハシテ云フ歟、カウカトハ合歡トヨムベキヲ、略シテカウカト云ヒナセル歟、

〔物類品隲三 草〕南藤○中略

庚辰歳、予讃侯ノ命ヲ奉ジテ藥ヲ封内ニ採、一日阿野郡川東村深山中ニ至ル、土人合歡木ヲ指テカウカノ木ト呼ブ、按ズルニ古今六帖合歡ヲカウカト訓ズ、合歡古名ネムリノキ、カウカハ合歡ノ略語ニシテ中古ノ稱ナリ、今都會ノ地ニテハ、カウカトハ稱セズ、然ニ却テ田舍深山中ノ人、此名ヲ呼コトヲ知レリ、蓋シ風藤モ亦然ルナラン、

〔夫木和歌抄二十九 ねぶの木〕

あきといへば長き夜あかすねぶの木もねられぬ程にすめる月哉

民部卿爲家

〔大和本草十一 園木〕合歡 和名ネブノ木、藻鹽草ニカフカノ木トモ云、カフクハンノ略語ナルベシ、夜ハ其葉合ユヘネブリノキト云、故ニ中華ニハ夜合葉ト稱ス、稽康ガ養生論ニ、合歡蠲忿トイヘリ、博物志合歡樹之階庭使之不怒、

此國ニ產スルトコロハカ°ハ°ラ°エ°ン°ジ°ユナリ、又山中自生ニカマズミアリ、莢蓬ナリ、秋月實ヲ結テ、南天燭ノ實ヨリ大ニ觀ツベキモノナリ、山家ノ小兒、熟スルヲ待テ採食フ、

〔悠管抄三〕仲哀のきさきには、神功皇后をぞ立給ける、この皇后は、〇中略應神天皇をはらみ給ひて、仲哀の御をしへによりて、仲哀うせ給て後、立ばしなむまれ給そとて、女の御身にて、男のすがたをつくりて、新羅高麗百濟のみつの國をうちとり給て後、つくしにかへりて、う°み°の°宮°の°槐°にとりすがりて、應神天皇をばうみ奉り給ける、

〔孝經樓漫筆四〕槐安產の藥
子母秘錄に槐枝東方にさしたる枝をとり、產婦の手に握らしむれば、產し易し、日華子に槐實五七粒を呑ば產下す、催の良藥なり、

〔新撰字鏡木〕合歡木（禰°夫°利°）

〔本草和名木十三〕合歡又有萱草、一名鹿葱、（出陶景注）合歡一名合昏、（出蘇敬注）一名戎、（出釋疑）一名茸樹、一名棫（已上二名出本草拾遺）一名芃蘋、一名百合、一名鐲忩（已上出兼名苑）和名禰°布°利°乃°岐°、

〔倭名類聚抄木二十〕合歡木　唐韻云、棔（音昏、和名禰布里乃木、辨色立成云睡樹）合歡木、其葉朝舒暮斂者也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕廣韻云、棔合棔、木名、朝舒夕斂、按、合歡見本草經、及嵇康養生論、初學記引爾雅郭注守宮槐葉晝聶宵炕云、江東有樹與此相反、俗因名爲合昏、證類本草注云、名曰合歡、或曰合昏、則此作合歡、廣韻作合棔、並通、此木下恐脫名字、此有其葉二字者似勝、

〔伊呂波字類抄禰植物附植物具〕合歡木（ネフリノキ）　睡樹　合棔（已上同、上音合、下音昏）　合歡　萱草　鹿昏（出陶景註）
合昏（出蘇敬註）

〔萬葉集八春相聞〕紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首〇中略
晝者咲、夜者戀宿、合歡木花、君耳將見哉、和氣佐倍爾見代、

三寸、粘滑中有數子、小子異槐莢有約、其實粒數自見、木皮青黑、故有黑槐名、山崖處々多產之、京北御菩薩地東崖山麓極多、

〔重修本草綱目啓蒙　二十四香木〕槐　ヱ○ニ○ス○（和名鈔）　キ○フ○ヂ○（古名）　ヱ○ン○ジ○ュ○　ヱ○ン○ジ○　コ○ヱ○ン○ジ○ュ○

一名鬼木（事物異名）　良木（同上）　錦心士（事物紺珠）　聲音木　穢腹部（共同上、木心黃色ナル故ニ名ク、）　槐龍（花名譜）　屯雲（名物法言）　綠掘（同上）　玉樹（通雅）

槐ハ樹直上シテ聳ユ、又一種聳ヘズシテ四方ニ繁ル者アリ、盤槐（秘傳花鏡）ト云、並ニ葉大サ五七分、形圓或ハ微楕ニシテ、苦參葉ニ似タリ、深綠色、春新葉ヲ生ズル時微白毛アリ、煠キ熟シ食用シ、或晒乾シ、茶ニ代ユルコト本草彙言ニ載ス、夏月枝梢ニ長穗ヲ發シ、枝ヲ分チ花ヲ開ク、形隨軍茶（ハギ）花ノ如シ、白色是槐花ナリ、藥用染用皆蕾ヲ採ル、未ダ開カザル時ハ色黃ナリ、唐山ニテハ布帛及ビ紙ヲ黃色ニ染ルニ用ユ、本邦ニテハ青茅（カリヤス）ヲ用ユル故槐花ヲ用ズ、蕾ヲ槐米（本草新編）槐花米（古今醫統）槐座子（本草方）ト云フ、花後莢ヲ結ブ、長サ二寸餘、濶サ三分許、連珠ヲナシテ苦參莢ノ如シ、內ニ小扁豆アリ、是槐實ナリ、一名槐角子、（藥性奇方）槐豆、（本草原始）槐落淡、（何氏集效方）鬼木串、（綠樞耕錄）長生子、（王會新編）

集解、樓槐○ハイ○ヌ○エ○ン○ジ○ユ○、オ○ホ○エ○ン○ジ○ユ○山野ニ自生多シ、葉形大ニシテ、紫藤葉ノ如ニシテ、厚シテ白色ヲ帶ブ、夏穗ヲナシ花ヲ開ク、黃色ナリ、

凡ソ槐及樓槐ノ葉、夜合晝開クコト、合歡葉ノ如シ、一種葉夜合ザル者アリ、守○宮○槐○ト云、葉ハ常槐ニ同ジ、一名紫槐、（群芳譜）

槐膠　舶來アリ色黑シ、槐樹ノ脂ナリ、

〔地錦抄　五〕槐（ゑんじゅ）　大ゑんじゆは葉あらし、小ゑんじゆは葉こまかに、木めよくくろし、夏木冬落葉、

〔佐渡志　五物產〕槐　方言エンジユ

古事類苑

植物部七

木六

〔倭名類聚抄木二十〕槐 爾雅集注云、葉小而青曰槐、音廻、和名惠爾須、葉大而黑曰櫰、音懷、一音瓌、葉晝合夜開、謂之守宮槐、

〔箋注倭名類聚抄木十〕按釋文二音並有、然據廣韻、音瓌字別義、則釋文載二音者恐非是、○中略 釋木、櫰槐大葉而黑槐晝聶夜炕、郭注云、槐樹葉大色黑者名爲櫰、釋木又云、守宮槐、葉晝日聶合而夜炕布者、名爲守宮槐、字句少異、此所引蓋舊注也、藝文類聚引莊子云、槐之生也、入季春五日而兎目、十日鼠耳、

〔伊呂波字類抄惠植物附植物具〕槐エンス

〔和漢三才圖會八十三喬木〕槐ゑんじゆ音回 櫰音懷 和名惠爾須 槐黄中懷其美、故三公位之、倭三公者、左大臣右大臣、內大臣也、○中略

按、槐插枝能生易長、有雌雄、而雄者開花無子、並其材堅實、樫文美、可以作器盒、古今醫統云、人家庭院門逕宜栽之、脩剪圓齊、不數年長盛如蓋、夏中綠陰可愛、滿院清芬也、

〔本草一家言二〕槐 和名惠牟蒸由、エンジユ 木皮青色、葉排生而極細圓、面深綠、背白色、嗅之有豆氣、四五月開黄花、漢邦登科場當是之時、故諺云、槐花黄時擧子忙、葉及實膠共入藥用、槐膠本草載之、和名不多用、

黑槐 和名、犬惠牟蒸由、似槐葉狹長、而末圓、似胡枝及雲實、葉花比眞槐大且黄色、似豆花、結莢長二

按、扇骨木高二三丈、葉似海石榴葉而狹小、有細鋸齒、面滑、四月開小白花、結細子、作簇、八九月赤熟、其木最堅硬、堪爲扇骨、故名、

扶移

扇骨木

地三分濕、土蘆雜、肥淡小便八月に澆ぐべし、又冬月より寒中にも澆ぐべし、花はやく咲也、分株十一月より寒中迄よし、春は剪得ても葉萎凋なり、是は切口を叩き挫き、酢をもてよく煮るべし、

〔本草一家言三〕扶移　按本草云、柳類也、其葉似白楊而狹長有毛、面青背白、二三月開白花、細小不堪觀、春風一觸、花葉動搖、遠望如翻白、似偏其反而之狀、故陸機輩以此充詩唐棣、倭呼志天乃木、一名志手柳、者是也、又一種圓葉似梨、面青背白、又柳類也、本草呼爲白楊、倭名箱柳、枝葉軟弱、微風自搖、故似有以白楊爲扶移之說、其白楊亦扶移之屬、宜二種併爲扶移也、與唐棣全不相預、注家依其花葉之動搖翻白而妄生臆度、同襲不正、使唐棣有名而無實、可勝嘆乎、餘見于海棠條、主錄

〔本草一家言二〕志天乃木　樹葉似楊梅葉而狹、又似登美良葉、而極繁密不結實、其木枝入土經久則化石、似石灰而極堅、有識者壺井某語予曰、或惠此石一塊、試使工製硯、質堅片々飛落、不終彫琢、北山岩屋山中多產之、賣炭翁採其枝葉充炭包蓋用、

〔重修本草綱目啓蒙二十四喬木〕扶移　シデノキ　シデヤナギ　シデザクラ　シデヤグラ　ヤグラ　パナザイフリ　ヤマムロ濃州　ウチモヂリ能州　シワキ播州　チヂノキ　アカチヂ丹後　ミズミザクラ同上　ナマヘ讃州　一名杉柳古今注　蒲杉同上、以上ノ二名、水楊ノ釋名ニ誤リ入ル、　扶楊附方

山中ニ多シ、葉ハ櫻ノ葉ニ似テ小ク互生ス、初出ル時白毛アリ、三月新葉長ジテ後枝ノ梢ニ穗ヲナシ、枝ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣ニシテ細長ク、數十花簇リ開ク、白花ノ者多シ、紅花ノ者ハ少シ、花後圓實ヲ結ブ、大サ三分許、霜後葉落ツ、

〔佐渡志五物產〕扶移　方言シテノ木

羽茂郡新保柳澤邊ニ多シ、化シテ石トナルトイフ、又松楊ハ方言デシヤノキ、加茂郡ニセリノキ、ブナノキ、デコノキアリ、大同小異ナリ、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕扇骨木（かなめのき）　正字未詳、俗又以要字訓加奈女

赤花とゑるせしものは實のれるよしなれど、花若金黄、一葉一蕋、生甚延蔓とも、金碗喜木ともいへるかたは、實を結ぶさたなし、さて棣棠に三種ありて、一種白赤花開て子をむすぶものは、中國にたえてきこえず、金黄花といへるは、これすなはち八重山吹、金碗喜木は一重山吹になんありける、かゝれば山吹に實なれるは、いと〳〵めづらかなることゝいふべし、因にいふ、和漢朗詠欵冬の詩に、清愼公の點著雌黄天有意、欵冬誤綻暮春風と作られしを、集註二の巻にたすけて解たれど、こは和名抄草類部にも、欵冬一名虎鬚、和名夜末不々木、一云夜末布木、萬葉集云山吹花など混雜てゑるして、そのころ訓のおなじきがゆゑに、おもひひがめし也、これよりやゝふるき本草倭名には、欵冬を九の巻草部中に、和名也末布々岐、一名於保波とて出し、新撰字鏡には椛の字を、木部に山不支と訓て載たり、萬葉集にも假名に書き、または山吹山振などとも書たれど、欵冬と書るは一所もなし、されぱいとあがれる世には、草屬の欵冬を木屬の棣棠とは字をあやまらざりし也、亦按に欵冬は也末不々木と五言にいひ、棣棠は山不支と四言にいふべき例也、ふゞきといへる語意は、已に余○高田與清が著せし棣梁集の自注に釋たれば、こゝに贅せず、

〔常山紀談　一〕太田左衛門大夫持資は、上杉宣政の長臣也、鷹狩に出て雨に遭、ある小屋に入て簑をからんといふに、わかき女の何とも物をばいはずして、山ぶきの花一枝折て出しければ、花を求るに非ずとて、怒て歸りしに、是を聞し人の、それは七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲しきといふ古歌のこゝろなるべしといふ、持資おどろきて、それより歌に志をよせけり、

〔武江產物志　遊覽〕棣棠花　金性寺押上俗ニ山吹寺といふ　蒲田新梅屋敷中ノ和中散

〔剪花翁傳　前編二、三月開花〕八重山吹　花の色黄蘤一重山吹より少さし、開化三月上旬、方東南向三分陰、

〔萬葉集 十 春雜歌〕詠花
花咲而、實者不成登裳、長氣所念鴨、山振之花、
〔萬葉集 十九〕從京師贈來歌一首
山吹之、花執持而、都禮毛奈久、可禮爾之妹乎、之努比都流可毛、
右四月五日、從留女之女郎所送也
詠山振花歌一首幷短歌
宇都世美波、戀乎繁美登、春麻氣氏、念繁波、引攀而、折毛不折毛、毎見情奈疑牟等、繁山之、谿敝爾生流、山振乎、屋戸爾引植而、朝露爾、仁保敝流花乎、毎見、念者不止、戀志繁母、江家
反歌
山吹乎、屋戸爾植氏波、見其等爾、念者不止、戀己曾益禮、
〔後拾遺和歌集 雜十九〕小倉の家にすみ侍けるころ、雨のふりける日、みのかる人の侍りければ、山ぶきの技ををりて、とらせてはべりけり、こゝろも得で、まかりすぎて、又の日山吹のこゝろもえざりしよし、いひにおこせて侍けりる返事に、いひつかはしける、
中務卿兼明親王
なゝへ八重花はさけども山ぶきのみのひとつだになきぞかなしき
〔擁書漫筆 四〕いにしへより、山吹は實なきものとせしに、この二十年ばかりほどは、諸國に實のれるがおほしとて、このごろも小谷鳩谷がもとより、押花にしておこせたり、西蕃にも群芳譜果部卷之一に、棣棠、栘也、似白楊、江東呼爲夫栘、一名郁李、一名鬱梅、一名雀梅、一名車下李、其花反而後合、凡木之花先合而後開、惟此花先開而後合、花正白亦或赤、花蕚上承下覆、有親愛之義、故以喩兄弟、周公所爲賦常棣也、子如櫻桃、六月熟可食、仁可入藥、○中略 など見えて、群芳譜に花正白或

古事記載其事、作於後手布伎都都、可以證、故呼山振爲夜末布岐也、其作山吹者、訓同而假借耳、雖欵冬山振其訓同、然其語原不同、混爲一者誤、源君以欵冬爲山吹、故不取補仁於保波之名也、又按淸愼公詩云、黠著雌黃天有意、欵冬誤綻暮春風、孜本草圖經引傅咸欵冬賦序云、余嘗逐禽登于北山、于時仲冬之月也、冰凌盈谷、積雪被崖、顧見欵冬、煒然始敷華艶、水經注引述征記云、洛水至歲末凝厲、則欵冬茂悅曾冰之中、本草云、欵冬花、十一月採花陰乾、藝文類聚引吳普本草云、欵冬十二月花黃白、證類本草引日華子云、十一十二月雪中出花、諸書所言略同、今目驗卽然、未有欵冬至暮春乃開花者、以欵冬爲山吹也、其誤非防源君、

〔大和本草花木十二〕棣棠　國史及允齋花譜ニ、其形狀詳也、疑モナキ山吹ナレバ、コヽニ詳ニ記サズ、遵生八歲ニモノセタリ、名花譜ニ、ワカ枝ヲ折テ挾メバ生トイヘリ、八重ノ花尤賞スベシ、日ヲヲソル、日本ニ昔ヨリ此花ヲ賞シ、古歌ニ多クヨメリ、山州井手ノ山吹尤名アリ、今ハナシ、又ヒトヱアリ、山中ニ生ズ、金碗喜水ト瀵名ヲ稱ス、又白花ノヒトヱアリ、黃花ニヲトル、是ハ棣棠ト一類ニ非ズ、實アリ、花ハ似タリ、順和名欵冬ヲヤマブキト訓ジ、朗詠集ニモ欵冬ヲヤマブキトス、皆アヤマレリ、萬葉ニハ山吹トカケリ、酴醿ヲヤマブキト訓ズルモ亦非ナリ、酴醿ハゴヤヲキ也、

〔牛馬問二〕或人の曰、前問に依て、山吹の事をおもひ出たり、朗詠集、欵冬を山吹と誤り訓すること久し、近世酴醿をやまぶきの正字とす、此文字なるや、答て曰、欵冬もとより山ぶきにあらず、酴醿も又やまぶきにあらず、此物本草綱目に不載、事物紺珠といふ書に出、先輩多く此物をやまぶきと誤る、是は和名トキンイバラといふものなり、或人又曰、しからば山ぶきの文字は如何曰棣棠花なり、是又同名にして異物あり、混ずべからず、

〔萬葉集相聞二〕十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首〇中略

山振之、立儀足山、淸水、酌爾雖行、道之白鳴、

ニ萎ム、又重葉ナル者アリ、又淡紅花ナルモノアリ、並ニ花謝シテ蔕漸大ニナリ、形石榴花ノ蔕ノ如シ、長サ八九分刺多シ、是藥用ノ金櫻子ナリ、稀ニ舶來アリ、今種植家ニ唐種ノ金櫻子ト呼ブモノハ、別ノ一種ニシテ眞物ニ非ズ、ソノ葉細小ニシテ、花椒(サンシヤウ)ノ葉ニ似タリ、故ニサンシヤウイバラト云フ、夏月花ヲ開ク、大サ三寸許リ、千瓣ニシテ必一缺アリ、故ニイザヨイイバラト云フ、色ハ淡紅、或ハ白色、實ノ形正圓ニシテ、大サ八九分、刺多シ、罌形ヲ爲サズ、駿州甲州ニ自生多シ、

ハマモクコク

〔大和本草雜木十二〕水木犀(ハマモクコク)　葉モ木モヨクモクコクニ似タリ、又木犀ニモ似タリ、海濱ニ生ズ、平陸ニモウフ、四月花アツマリ開ク、其花ノ香スコシ木犀ニ似タリ、高濂艸花譜ニハ、水木犀ヲ爲草本、二月分栽トイヘリ、

下毛

〔大和本草花木十二〕下毛　小木ナリ叢生ス、臘月ニ早ク萌生ス、四月開花、一處ニ多クアツマリヒラク、サカリ久シ、眞紅アリ、淡紅アリ、眞紅尤美ナリ、愛スベシ、又白花アリ、春秋枝ヲ切テ挿ムベシ、ヨク活ス、老枝ヲ冬切ベシ、嫩枝生長シ、明年ノ夏、花ヒラキテ最ウルハシ、舊枝ヨリマサレリ、葉ハスヾカケニ似タリ、漢名未詳、拾遺集ナド古歌ニモヨメリ、草下ッ毛アリ、花相似タリ、又山下ッ毛アリ、小木也、

ラウザイバラ

〔大和本草花木十二〕ラウザイバラ　紅夷ヨリ來ルト云、花大ニ葉小也、山椒ノ葉ニ似タリ、枝條曲節多クシテ不舒、挿テ活ク、有刺、是又薔薇之類而花葉較異者也、四月開花至秋、又牡丹イバラト云、花頗牡丹ニ似タリ、又箱根イバラ、此單葉ナリ、

棣棠

〔新撰字鏡木〕椎(山○不○支○)

〔箋注倭名類聚抄十草〕載一訓夜末布岐、蓋略訓布布岐、或省云布岐、故槖吾之訓夜末布布岐、亦省云夜末布岐也、其訓偶與萬葉集所謂山吹花合、遂誤以欵冬爲山吹也、而山吹萬葉集多作山振、蓋是草生山谷、其枝柔軟隨風振搖、故名山振、振字古訓布岐布久、神代紀云、背揮此云志理幣提爾布屢、

後佐藤一見が新傳秘書を見るに、山櫻桃はサクラ、野櫻桃はユスラなりと清人いへるよし、黄葉僊の詩にも、東來初見櫻桃花と賦せり、

〔草木六部耕種法 十九 需實〕櫻桃(ユスラ)ハ多ク作リテ産業ト爲スベキ物ニハ非ズ、然レドモ百果ノ最初ニ熟シテ珍シキ物ナルヲ以テ、此ヲ作ルモ農事ノ一端ナリ、故ニ此物ハ活垣ニスルヲ良トス、花ハ紅紫二色有テ愛スベク、實ハ三月熟スルヲ、鹽漬ニシテ肴ト爲スベク、又蜜煮ニシテ乾葡萄ノ如ク製スレバ、久シク貯ベキノ美菓ナリ、其實ハ龍葵(ホウヅキ)ノ大ニシテ、核ハ齒ニ脆ク珍賞スベシ、

〔採藥使記 中 奥州〕照任曰、奥州南部ノ内川目村ヨリ櫻桃ヲ出ス、卽チ獻上ス、
光生按ズルニ、櫻桃ハ國々ニアリテ珍シキ品ニアラズトイヘドモ、當國ノ産ハ各別ニ勝レタルカ知ラズ、

笑靨花

〔書言字考節用集 六 生植〕笑靨花(コゴメザクラ) 遵生八牋

〔大和本草 十二 花木〕笑靨花(コヾメ)　花鏡及遵生八牋ニ見エタリ、花細ニシテ豆ノゴトシ、花ノ頭少クボシ、故笑靨ト名ヅク、花シゲクシテ白キコト雪ノゴトシ、葉マルクシテ實ナシ、根ヨリムラガリ生ズ、花鏡曰、二月中旬分ウフベシ、活ヤスシ、糞ニ宜シ、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕楄花(こごめばな)　正字未詳 俗稱古々女波奈
按、楄花小樹叢生、高三四尺、葉狹長、薄有縱理、二三月開白花、大可錢、如茶蘼、故俗呼名小米花、又似胡羅蔔花而圓匾小者也、

金櫻子

〔重修本草綱目啓蒙 二十五 灌木〕金櫻子　ナニハイバラ　ナツヽバキ 同名アリ　リキウイバラ 筑前　チヤウセンイバラ　一名鷄陀雨 醫宗粹言　南絡刺子 藥性奇方　卣櫻 藥性要略大全　糖礶 通雅　刺瓨 通雅
藤本ナリ、葉ハ胡枝子(ハギ)ノ葉ニ似テ、厚滑深緑色互生ス、蔓ニ刺多シ、夏月葉間ゴトニ花ヲ開ク、五瓣白色、大サ三寸許、山茶(ツバキ)花狀ノ如シ、故ニナツヽバキト云、蘂ハ小ニシテ黄色香氣多シ、朝ニ開キ夕

〔和漢三才圖會八十七山果〕櫻桃（ゆすらうめ）　鶯桃　含桃　荆桃　和名抄云鶏實宇久比須乃岐乃美　俗云由須良梅○中略

按櫻桃樹、高四五尺、葉大可レ搦レ指、圓末尖有二細齒一、微似二木天蓼葉一而厚皺、其子半熟時、大可二大豆一而有二溝及毛一、狀與レ桃無レ異、既赤熟則大可二小金柑一、脱レ毛如レ李亦似レ梅、味甘、其花小二分許、白色帶二微赤一、但謂レ如レ雪者不レ然、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕櫻桃　ユ゜ス゜ラ゜ム゜メ゜　ユ゜ス゜ラ゜ゴ゜　ユ゜ス゜ラ゜京　ユ゜リ゜サ゜ン゜大和　一名朱桃事物異名　石蜜　麥英　麥甘共上同　朱英秘傳花鏡　梅桃八閩通志　玉桃上同　牛桃事物紺珠　朱星　瓊液共上同　英桃群芳譜　丹砂顆藏葉爭奇　楔桃汝南圃史　朱茱證類本草　伊士个叱鄕藥本草

庭際ニ栽テ花ヲ賞ス、自生ナシ、二三尺ノ小木ニテモ花實アリ、大ナル者ハ丈許ニ至リ、枝條繁茂ス、春末葉ノ未ダ出ザル先ニ蕾ヲ生ズ、淡紅色ニシテ、彼岸ザクラノ蕾ノ如シ、葉ノ出ル時花盛ニ開ク、色白ク形梅花ノ如クニシテ小ナリ、蕚ハ櫻花ノ蕚ノ如シ、葉モ櫻葉ニ似テ短ク、皺紋鋸齒及ビ微毛アリ、實ハ五月ニ至テ葉間ニ紅熟ス、形正圓大サ四分許、郁李ノ子ニ似テ微シ早ク熟ス、味酸シ、小兒採リ食フ、内ニ小核アリ、下シテ生ジ易シ、三年ヲ經テ花實ヲ生ズ、秋ニ至テ葉枯レ落ツ、唐山ニハ品類多コト集解ニ云リ、和産ハ然ラズ、

〔一話一言三〕櫻棠花○圖略

櫻とばかりいへば櫻桃にて、ユスラの事也、文選詩、山櫻發レ欲レ燃なども、山ざくらの事にはあらず、櫻、桃の事也、羅山集仁齋集などにも、櫻をもて海棠とせり、尤垂絲海棠は此方のシダレザクラとみゆれども、海棠と櫻とは大に異なり、今沈南蘋が畫に櫻棠といへるものあり、正しく此方のサクラなるべし、按ずるに、中華に古此樹なくして近頃此樹あり、因て櫻棠と名づけて、海棠の一種とせる歟もしるべからず、明の宋景濂日東曲に、賞レ櫻日本盛二於唐一、如レ被二牡丹兼一レ海棠一といへば、日本にてサクラを櫻といふ事、華人もしる所なるべし、文云、垂枝海棠近來種樹家にあり、シダレザクラにあらず、

ウハミヅ

〔百品考下〕車下李　一名赤棣樹一名庭梅〇中略又ニハウメニ似テ葉稍大ニシテ、花千葉ナルモノアリ、ニハザクラト云、白花ノ者ヲ漢名喜梅ト云、紅梅ノ者ヲ玉梅ト云、又錦帶トモ云、共ニ多葉郁李ト云、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕郁李〇中略一種ニハザクラハ、苗ニハムメヨリ大ナリ、高サ四五尺叢生ス、葉モ亦長大ナリ、同時ニ葉ニ先テ花ヲ開ク、千瓣白色ニシテ、棣棠花ニ似テ微小、實ヲ結バズ、是多葉郁李ナリ、一名千葉郁李洛陽花木記玉帶同上喜梅汝南圃史玉蝶同上、同名アリ、熹梅農圃六書一種桃紅色ニシテ千葉ナルヲ錦帶通雅ト云フ、一名玉梅汝南圃史又一種紅白二色ナル者アリ、

〔書言字考節用集六生植〕麥櫻(ウハミヅ)本名山櫻桃、本草、實大如櫻、多毛、四月采、

〔草木六部耕種法十一需花〕櫻ト梅トハ種類ノ極メテ多キ者ナリ、共ニ百餘種ヅヽ有リ〇中略上溝櫻ハ枝ヨリ長キ穂ヲ生ジ、其花白クシテ櫻桃(ニハムメ)ノ如シ、花後ニ實ヲ結テ、大五味子(サネカヅラノミ)ニ似タリ、此ヲ鹽藏(シホヅケ)ニシタルハ頗ル佳味ナリ、

〔鋸屑譚〕洛東祇園有樺、和名かば、又云香庭櫻(かはざくら)、又南殿櫻、又犬櫻、其實鹽藏して以媒於酒、芳香可愛、謂之表水(うはみづ)、後水尾帝勅名也、

櫻桃

〔書言字考節用集六生植〕繫梅(ユスラ)未詳櫻桃同俗用此字、謬矣、

〔大和本草十果木〕櫻桃(ユスラ)　本草宗奭曰、形肖桃、頌曰、其木多陰、先百果熟、小而紅者謂之櫻株、極大者有若彈丸、核細而肉厚、尤難得、又曰、三月末四月初熟、時珍曰樹不甚高、春初開白花、繁英如雪、葉圓有尖、及細齒、結子一枝數十顆、又榛條下曰、葉如初生櫻桃葉、今按ユスラノ葉ノ初生ヨリ榛ノ葉ニ似タリ、篤信右ノ二說ヲ以考ルニ、本邦ニ所在ユスラト云小樹ニ能合ヘリ、事類合璧大如拇指トアルハ、土地ニヨリ、種ニヨリテ大小アルベシ、

ニシテ大サ四五分、初ハ緑色、五月ニ至リ熟シテ色赤ク食フベシ、又魚膾中ニ入テ飾トス、實中ニ核アリ、核中ニ褐色ノ薄皮アリ、ソノ中ノ白仁ヲ採リ藥用ニ入ル、舶來ノ者ハ大小雜レリ、其大ナル者ハ李ノ仁ナリ、故ニ和産ヲ用テ佳ナリ、本草原始ニ、眞ナル者ハ粒小ク、僞ル者ハ顆大ナルコトヲ云ヘリ、

〔草木六部耕種法〕十九菓實 櫻桃(ユスラ)○中略 又一種俗ニ庭梅(ニハムメ)ト稱スル者有リ、櫻桃ト同種ノ物ニシテ、花實更ニ櫻桃ヨリモ小ナリ、一名山櫻桃ト呼ブ、

〔佐渡志〕五物産 郁李　方言コムメ

庭上ニ多ク植ユ、小木也、白花紅實觀ツベシ、クラフベシ、

多葉郁李

〔庖厨備用倭名本草〕六山果 櫻桃(アウタウ/ユスラ)　倭名抄ニニソサクラ一名朱櫻、多識篇モニワザクラ、考本草一名鸎桃(アウトウ)、一名含桃(カンタウ)、禮記ニ仲春天子以二含桃一薦二宗廟一即此也、其木多陰ナリ、百果ニ先テ熟ス、故古人多ハ珍貴ス、其實熟スル時、深紅色ノモノヲ朱櫻ト云、紫色ニシテ皮裏ニ細黃點アルヲ紫櫻ト云、味最甘美ナリ、又正黃明ナルヲ蠟梅ト云、小ニシテ紅ナルヲ櫻珠ト云、味皆及バズ、極テ大ナルハ彈丸ノ如シ、核細シテ肉厚シ、尤得ガタシ、李時珍曰、櫻桃樹甚ダ高カラズ、春初ニ白花ヲ開ク、繁英ニシテ雪ノ如シ、其葉ハ團ニシテ尖アリ、細齒アリ、子ヲムスブコト一枝ニ數十顆、三月熟スル時ヨク守ルベシ、シカセザレバ鳥皆食シテノコリナシ、鹽ニカクシテ蜜ニ煎ジテ皆ヨシ、或ハ蜜ト同ジクツキテ糕ニシテ食ス、元升曰、西國民間ニ或ハユスラトモイヘリ、櫻桃味甘性熱濇毒ナシ、中ヲ調ヘ脾氣ヲマシ、顏色ヲ美ニシテ、洩精水穀痢ヲトヾム、　食禁　多食スレバ熱ヲ發ス、病アル人ハ食スベカラズ、病立ドコロニ發ス、且死スルモノモアリ、小兒多食スレバ吐血シテ死スルモノモアリ、古ヘ小兒兄弟每日多食シテ、長ハ肺痿ヲ發シ、幼ハ肺癰ヲ發シテ相繼デ死タリ、儒門事親ニ此ヲ載タリ、

郁李

〔日本紀略一醍醐〕昌泰二年六月四日丙寅、東宮有藤花、又監物局枇。杷。花不發而有子生、或熟或青、小於常子、人皆食之、

〔松屋筆記五十一〕枇杷は接木を佳とす

孔氏談苑一の巻枇杷の條に、枇杷須接、乃爲佳果、一接核小如丁香荔枝、再接遂無核也とあり、接木の歌は夫木抄に見えたり、

〔佐渡志五物産〕枇杷　和名ビハ

三郡トモニアリ、國ナカトイフアタリ最多シ、

〔和漢三才圖會八十七山果〕庭梅（正字未詳、灌木類也、然以櫻桃之類、故附于此、）

按庭梅叢生高三四尺、三月開花、形似梅而小、白色帶紅色、蘂黃而甚繁、艶美也、花落葉生狹長似庭櫻葉、結子小於櫻桃、生青、熟赤、味酸甘、

〔百品考下〕車下李　一名赤棣樹一名庭梅一名赤郁子　和名ニハウメ（中略）

花戸ニ多シ、樹ノ高サ二三尺、一根叢生シテ、葉ハ李ニ似テ至テ小ニシテ、邊ニ鋸齒アリ、葉硬シ、多葉郁李ニ似テ幅セバク黑ミアリ、春イマダ葉ノ長ゼザル前ニ花アリ、五瓣淡白色、大サ四五分、瓣ノ邊淡紅色ニシテ觀美ナリ、又白花モアリ、後實ヲ結ブ、大サ櫻桃ヨリ小ナリ、熟シテ色赤ク食フベシ、中ニ核アリ、至小ナリ、本草ニ郁李ト同物トスルハ非ナリ、通雅ノ説ヲ正トス、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕郁。李。　ニ。ハ。ム。メ。　コ。ム。メ。（播州、梅ト同名）清　一名雀李（本經逢原）　御園李（八閩通志）

棣李（三才圖會）　棠李（事物異名）　脆櫻桃（物理小識）　權黎兒（救荒本草）　馬檳花（嘉興縣志）　英梅（津州府志）　國大李（本草衍義）

甌李（説嵩）　仁一名隱上座（藥譜）　千金藤（醫事正傳）　山梅子（鄭樵本草）

庭際ニ多ク栽ユ、小木ナリ、高サ二三尺、枝條叢生ス、春新葉ヲ生ズ、李葉ニ似テ小ク互生ス、未ダ長ゼザル時、葉間ニ花ヲ開ク、五瓣大サ四分許、白花紅邊甚美シ、又白花ナル者アリ、後實ヲ結ブ、形圓

兄（清異錄）炎果（事物異名）俗客（事物紺珠）夏果　金珠　上林（共同上）花一名負雪（名物法言）葉一名無憂扇（輟耕錄）

木久シキヲ經ザレバ實ヲ結バズ、故ニ俗ニ栽シ人死セザレバ實ヲ結バズト云、葉冬ヲ經テ枯レズ、形長大ニシテ大槲（ハヽツノ）葉ノ如ニシテ、鋸齒細クシテ厚ク、背ニ褐毛アリ、藥ニハ毛ヲ去リ用ユ、冬月枝梢ゴトニ二三寸ノ穗ヲ出シ、小白花ヲ簇生ス、採テ瓶花ニ供ス、唐山ニテハコノ花ヲ款冬花ニ僞ルト云、唐山ニ款冬少キ故ナリ、花後實ヲ結ブ、五月ニ至テ熟ス、正圓大サ金柑ノ如ク、熟シテ黃白色微毛アリ、唐山ニハ白色ノ者アリト般山志ニ云ヘリ、皆一枝ニ二三十簇リテ葡萄ノ如シ、肉少ク核大ナリ、核ノ形龍眼核ノ如ク、栗殼色二核ノ者多ク、獨核ノ者ハ少シ、獨核ノモノヲ金蜜罐（般山志）ト云フ、唐山ニハ無核ノ者アリ、集解ニ無核者名焦子ト云、再ビ接換スル時ハ、無核ニナルコト秘傳花鏡ニ云リ、接ガズシテ自然ト肉多ク、核小ニシテ山椒ノ大サナルヲ椒子枇杷ト名クト、汝南圃史ニ云リ、上品ナリ、枇杷ハ和漢共ニ夏熟ス、中山ニテハ正月ニ熟ス、傳信錄ニ、枇杷與中國無異、形略長如棗、元旦食新爲百果先ト云、此核和ノ方書ニ巴實ト名ク、一核ノ者ヲ用ユ、ソノ形正圓ナリ、唐山ニテハ圓核ヲ用テ、ツリヤヒ人形ノオモリトス、故ニ核ヲ、定風珠（花曆百詠）ト名ク、ツリヤヒ人形一名ミヅクミ人形、ヤノスケ、（京）ハリヤヒ人形（伊州）ト云、此外方言多シ、

〔草木六部耕種法十九實需〕枇杷ハ百菓ニ先テ成熟シ、味亦甚ダ美ナリ、此物實栽ノ儘ニテモ能ク結實リ、且地嫌スルコトモ無キヲ以テ、何レノ地ニ栽ルモ能ク豐熟シ、最上品ナル果物ナリ、都會ノ近傍諸邑ハ數多此ヲ栽立ベシ、殊ニ此物ヲ栽立ツルハ、甚ダ無造作ナル者ナリ

〔三代實錄四十三陽成〕元慶七年五月三日戊辰、天皇御豐樂殿賜宴、渤海客徒親王已下參議已上侍殿上、五位已上侍顯陽堂、大使已下二十人侍承歡堂、（中略）○妓女百三十八人、遞出舞、酒及數杯、別賜御餘枇杷子一銀椀、大使已下起座拜受、

枇杷

ヲ用ユ、一種喬木ニナル者アリ、高サ二三丈、或ハ叢生シテ二丈許ナルモアリ、是ヲオホサンザシト呼ブ、葉大ニシテ形梨ノ葉ノ如ク、七岐九岐ニシテ鋸齒アリ互生ス、枝梢ニ花ヲ開ク、形山楂ノ花ニ同クシテ、數十百簇リテ傘狀ヲナス、實形モ山楂子ニ同クシテ熟シテ赤シ、又黄色ナル者アリ、是羊朹子ナリ、

〔採藥錄五〕山査子

處々藥園ニ栽ル者、漢種也、八九月ニ子ノ半熟タル時取リ、板ニテ押シ平メ、內ノ核ト肉ヲ去リ、其儘日乾スベシ、藥力ハ舶來ニ劣レリ、是レ土地ノ使然ル所ナリ、

〔倭名類聚抄果十七〕枇杷 唐韻云、枇杷、琵琶二音、此間云味把、菓木冬花而夏實也、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕本草和名枇杷葉、和名比波、新撰字鏡杷訓比波乃木、比波又見古今集物名歌、○中略廣韻無而字、實作熟説文、枇、枇杷木也、上林賦注、張揖曰、枇杷似斛樹長葉、子如杏、蜀本圖經云、樹高丈餘、葉大如驢耳、背有黃毛、子梂生、如小李、黃色、味甘酸、核大如小栗、皮肉薄、冬花春實、四月五月熟、凌冬不凋、本草圖經云、其木陰婆娑可愛、冬開白花、至三四月而成實、其實作梂如黃梅、皮肉甚薄、味甘、本草衍義云、枇杷葉以其形如枇杷、故名之、按寇氏云、形如枇杷者、謂形如琵琶也、

〔和漢三才圖會八十七山果〕枇杷 びわ 葉形似琵琶、故名枇杷、云今觀葉不如言、○中略

按枇杷木黏堅堪爲杖棒、其子七八顆作梂生、初則黃帶青、熟則正黃、亦有淡白色者不爲佳、此異予本草之說、一核者核圓太有二三或五六抱合者、全無核者爲希珍、其一核之核能解毒、被蟲螫而腫痛者刮核傅之、

倭方有枇杷葉湯、 治食傷及霍亂以爲妙

枇杷葉肉桂、藿香、莪朮、吳茱萸、木香、甘草 各等分、或有異同、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕枇杷 ビハ和名抄 ビヤ本草類編選 コフクベ同上 一名蠟兒典籍便覽 蠟

山樝子

光生按ズルニ、楂梓ハ番名マロメロト云テ、榠樝ノ一類ナリ、

〔書言字考節用集 六生植〕山樝(ヤマズミ)時珍云、樹高數尺、葉有五尖、實有赤黃二色、肥者如小林檎、 山樝(サルナシ)

〔和漢三才圖會 八十七山果〕山樝子(さんざし) 赤瓜子 鼠樝 山裏果 猴樝 棠梂子 茅樝 杭子 羊梂

槃梅

本綱、山樝子生山中、而味似樝子、故名之、世俗作山査者誤矣、査(音樝)乃水中浮木與樝字何關、有二種而功相同、

一種小者、樹高數尺、葉有五尖、椏間有刺、三月開五出小白花、實有赤黃二色、肥者如小林檎、小者如指頭、九月熟、小兒采而賣之、閩人取熟者、去皮核擣和糖蜜、作爲樝糕、以充果物、其核狀如牽牛子(アサカホノミ)、黑色甚堅、

一種大者、樹高丈餘、花葉皆同、但實稍大、而色黃綠、皮澁肉虛爲異爾、初甚酸澀、經霜乃可食、

氣味(酸冷) 消食積、補脾、治小腸疝氣產後兒枕痛、

唐本草雖有赤瓜、後人不知即此也、自朱丹溪始著山樝之功、而後遂爲要藥、能尅化飲食、若胃中無食積、脾虛不能運化、不思食者多服之、則反尅伐脾胃也、煮老雞硬肉、入山樝子數顆、即易爛、則消肉積之功可推、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一山果〕山樝 サンザシ(通名) 閏月ムメ(今樹家ハ種呼バズ) 一名山果子(醫學正傳) 山栗紅果(古今醫統) 山栗果(同上) 猴梨(赤保全書) 柹楂子(百一選方) 糖毬兒(同上) 糖毬子(本草蒙筌) 映山紅果(救荒本草) 棠毬子(本經逢原) 地乙梨(採取月令) 山棠梂(附方)

小木ニシテ高サ四五尺叢生ス、枝又多ク繁リテ刺アリ、春新葉ヲ互生ス、長サ一寸許、五岐七岐ニシテ鋸齒アリ、枝梢ニ白花簇生ス、梅花ノ形ニ似テ瓣皆上ニ向フ、後實ヲ結ブ、形林檎ニ似テ大サ六七分許、秋ニ至リ熟シテ赤シ、又黃色ナル者アリ、內ニ核アリ、牽牛子ノ如シ、藥ニハ核ヲ去リ肉

朱舜水ノ說ニモ、木瓜ニ大小アリテ同ジカラヌ由見エタリ、本草衍義ニモ、木瓜ノ條ニ、西洛ノ大木瓜ト云モノヲ出シテ、コノ物ハ藥ニ入ニ甚功アリトシルセリ、今我國ニテモ此物ヲ以テ藥トシテ甚功アリト云ヘリ、カラボケト云モノ、木瓜ノ大ナルモノニテ、卽番名ハマルメロト云モノ、大ナルナリ、

ボケト云モノハ樝子也　シドメ、クサボケト云モノハ蔓子土伏子ノ類也　クハリント云モノハ榠樝也　又一種クハリント云テ、リンゴノ類ニテ菴羅果ト云モノニ似タリ、

此外ニ山樝子ト云モノアリ、是ハ三四十年前ニ生シ得シヨリ、始テ我國ニモ出來タリ、此物樝子ニ對シテ山樝子トイヘバ、是モ又木瓜ノ類也、唯榲桲ト云モノハ、我國ニアリヤナシヤ未ダサダカナラズ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一 山果〕榲桲　マルメロ　マルメル　マルメイラ　オニメロ　マルムメ 南部　マルメ 同上　ボウカイ 仙臺　ボウカイナシ 同上

東北ニ多シテ西南ニハ少シ、故ニ大和本草ニマルメロノ形狀ヲ說クコト異ニシテ榲桲ニ充ラザルコトヲ云リ、木ノ形林檎ニ似テ、枝多ク廣ガリ、節ニ瘤アリ、春新葉ヲ生ズ、林檎葉ニ似テ潤ク白毛アリ互生ス、新枝ノ梢ニ花アリ、大サ一寸許、五瓣水紅色、又白色ノ者アリ、後實ヲ結ブ、榠樝(クワリン)ニ似テ圓ナリ、秋ニ至テ熟ス、黃色微綠香氣アレドモ、榠樝ヨリ少シ味酸澀、賣藥ノ榲桲圓ニハ榠樝ヲ雜ユル者多シ、

〔本朝世事談綺 二 生植〕榲桲(まるめろ)

寬永のころ蠻國より渡、此實林檎のごとし、

南蠻人沙糖を以てこれを煮、加世伊太(かせいた)とよぶ、よく痰嗽を治す、

〔採藥使記 中 常州〕照任曰、常州佐野天ミヤウヨリ榲桲ノ木ヲ出ス、卽チ獻上ス、

〔和漢三才圖會八十七山果〕榲桲　俗云末留女呂、蠻語乎、○中略

按榲桲、近頃蠻人將ニ來于長崎一、而今畿內處處有レ之、其樹花實皆合ニ本草註一、但葉大ニ於林檎一、而圓薄柔、其實不レ如ニ林檎多結一也、蠻人用ニ沙磄蜜一煮ニ食之一、呼名ニ加世伊太一、云能治ニ痰嗽一、

〔鹽尻三十三〕一栂梨とて、瓜のごとく、いろ黃にして味不レ好菓也、(梨の類に非ず、木瓜の一種也、)或は是を榲桲(マルメル)とよむと云、又花梨牟なりといふ、案ずるに、榠樝也、されば栂をトガと訓じツガと呼、又過をトガとよむ、此木の實香味不レ佳の故に、毒とも藥ともいふ者なく、過ちもなく、譽もなし、　世俗つゝなしとは、痴にして心つきなき者をいふ也、是をまたとてなしと云は鄕談の訛也、

〔白石雜考五木瓜考〕榲桲　倭名抄ニ此物ヲ載セズ　多識編曰、和名或云利牟幾牟、一云今南蠻云末留米留是也、　貝原篤信曰、榲桲マルメル、　稻若水曰、榲桲マルメラ、

右諸說悉ニアヤマレルニ似タリ、多識編ニハリンキントモ、又ハマルメルトモシルセリ、一定ノ說ニアラズ、是未ダ此物ヲ詳ニセザル證也、篤信若水共ニマルメルト云シモ心得ラレズ、(リンキンハ沙果ト云モノ也、下ニ詳ニ見ユ、マルメルハ木瓜ノ番名ナリ、)又今世ニリンキント云モノヲ指テ榲桲トナス、コレ多識編ノ訛ヲ傳ヘタル也、但此アヤマリハ異朝ニモ似タルコト侍リ、李珣ガ南海藥錄ニ、閩中謂ニ林檎一爲ニ榲桲一ト云、コレヲ本草綱目ニハ、遠征記ヲ引テ、林檎佳美、榲桲微大而狀醜有レ毛、トアレバ、林檎榲桲蓋相似而二物アル由ヲ辨ジタリ、サレバ榲桲ハ林檎ヨリ大ニシテ毛アル者也、今世ニ云リンキント云モノハ、リンゴヨリ猶小ニシテ、シカモ毛モナシ、榲桲ノリンキンニ非ルコト、尤明ニ侍ルニヤ、異朝ニモ榲桲ト云モノハ北土ニハアレド、江南ニハ甚稀也ト見エシ、サレバ李時珍モ未ダ榲桲ヲバ見ザリシヤウニ、本草綱目ニハシルセリ、サラバ我國ニモ此物ハアラザルモ知ルベカラズ、

右諸家ノ說ヲ併セ考ヘテ、自ノ淺陋ナルヲ省ズ、ミダリニコレラノ物ヲ辨ジ決センニハ、

マルメロト云モノハ木瓜(モクハ)也　カラボケト云モノハ大木瓜(ダイモクハ)也

榅桲

榠樝也(重帶アルヲ木瓜トシ、重帶ナキヲ榠樝ト云、コレヲ見テ二ノ物ヲワキマフベシト也、サレバ此物ハ木瓜ノ類ナルコトハ一定ナリ、)

開寶本草曰、菴羅果若₌林檎₋而極大、(一種クハリント云モノ、リンゴノゴトシ、)

大明一統志曰、菴羅果俗名₌香蓋₋、(香トイヘバ香アルナリ、一種クハリント云モノハ殊ニ香シ、)乃果中極品(一種クハリント云モノ、アザゴトニ美ナルモノアリ、)種出₌西域₋、亦奈類也、(一種クハリント云モノ、始メ番人ノ我國ニ傳ヘシニヤ、モシサアランニハ、西域ヨリイデシ種ナルベシ、)

〔重修本草綱目啓蒙(二十一 山果)〕榠樝　クハリン　キボケ

市中ニ多ク植ユ、高サ一二丈、木大ニナレバ皮一二寸ゴトニ、鱗ノ如クナリテ落ツ、ソノアト數色アリテ美ハシ、冬ハ葉ナシ、春新葉生ジ、三月ノ末ニ花ヲ開ク、葉ハ林檎ノ葉ニ似テ長大ナリ、細鋸齒アリテ、質堅シテ互生ス、花ハ五瓣淡紅色、實ノ形甜瓜ノ如ニシテ小ク、末ノ方潤シ、秋ニ至リ熟シテ、淡黄色香氣多シ、味酸澀食シ難シ、蜜糖ヲ以テ製シテ菓トス、カセイタト云、藥舖ニハ堅ニ四ツニ切リ乾テ、木瓜ニ充テ賣ルハ非ナリ、舶來木瓜中ニモ、此小ナル者ヲ竪ニ二ツニ切リ雑ユル者アリ、宜ク撰ブベシ、クハリンニ同名アリ、唐木ノクハリンハ花櫚ノ唐音ニシテ喬木類ノ櫚木ナリ、

〔書言字考節用集(六 生植)〕榅桲(榠樝之屬、本草、性温氣馥、故名、)

〔倭訓栞(中編 二十四 末)〕まるめろ　榅桲をいへり、まるめいらともいふ、その實まろし、よて名くるか、或は蠻語なりといへり、砂糖漬を香圓といふ、

〔大和本草(十 果木)〕マルメル　樹モ花モ海棠ニ似テ、葉ハ梨ニ似タリ、花淡紅色、實ハボケニ似タリ、本草ニ榅桲(ウンボツ)アリ、或曰、是マルメルナルベシト云、然ドモ本草ニ、榅桲ハ味尤甘、其氣芬馥、又曰、花白綠色、本草ノ數說花白ク香アル事ヲイヘリ、マルメルハ花淡紅、花モ實モ無₌香、實味澀酸不₌可₌食、然レバ榅桲ニ非ズ、榅桲ハ日本ニ無₌之、マルメルハ蠻語ナルベシ、是蠻國ヨリ來リテ中華ニハ無₌之乎、花ハ頗ヨシ、實ヲ用テカセイタニ作ル、

ル、

〔和漢三才圖會八十七山果〕榠樝（くわりん） 蠻樝 瘙樝 木李 木梨 俗云久波利、木李、瓜梨字乎、別有外圖花櫚木、與此不同、○中略

按榠樝可壓可種、嫩時有刺、大者高一二丈、葉似海棠而大、有細鋸齒、春葉稀間開五出淡紅花、秋結實、團長五寸許、如小瓜、黃青色、味酸而木（ジカ〳〵セリ）、冬熟則帶微甘、絞汁和生薑汁及砂糖煉、名瓜梨膏、云治痰嗽、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕華櫚木（くわりん） 俗作花梨誤矣○中略

按華櫚木來於南蠻、其木理似欅而帶紫光色、作板及器美也、今以榠樝呼花梨（クワリン）、且疑思華櫚木誤之甚者也、

〔白石雜考五木瓜考〕榠樝 倭名抄ニ此物ヲ載セズ 多識編曰、和名今按、加羅保計、異名木李、木梨、蠻樝、瘙榠、 貝原篤信曰、榠樝クハリン、 稻若水曰、榠樝クハリン、

右諸說ヲ併セ考ルニ、多識編ニカラボケト呼コト然ルベカラズ、篤信若水共ニ、モツクハチカラボケトイヒシハサモアルベシ、篤信若水共ニクハリント云シハ、今ノ俗ニ呼トコロノマヽニ呼シモノ也、サレド今世ニクハリント云者二種アリ、一種ハ諸ノ本草ニ見エシ、榠樝ノ如クニシテ、其實梨子ノ如ク其味酸シ澀レリ、サレバ木梨ナド云異名モ有シナルベシ、某昔此種ヲ求得テ植タリ、其木葉共リンゴノ如シ、程ナク火ニ燒失ヒシカバ、花實ヲマサシクバ見ズ、一種ハ又木ダチ葉ノ形、共ニ梨ノ如クニシテ、其木皮ニ白點アリテ、劈チ見ルニ木理少ク赤ク、其花海棠ニ似テ、其艶ナル事ハ猶甚シ、其實リンゴニ似テ、大サ拳ノ如シ、漿多ク味長ク、香キ事皆梨子ヨリモマサレリ、コレラ二種ノ中、篤信若水イヅレヲ以カ榠樝トハサシ名付ケン、榠樝一ニ木梨ト云ヒ、又其氣味酸平也ト、本草綱目ニ見エタレバ、篤信若水ガ指シ名付シ所、梨子ノ如クシテ、其味酸キ者ヲ云ヘルナルベシ、今一種リンゴニ似タル物ハ、開寶本草、本草綱目、通雅等ニ見エシ、菴羅果ニテゾアルベキ、今試ニ異朝ノ書ニ見エシ榠樝菴羅果ノ注ヲ下ニ注ス、

圖經本草曰、榠樝、但比木瓜大而黃色、辨之惟在蔕間、別有重蔕如乳者爲木瓜、木瓜ノ下ニ詳ニ見ユ無此則

シドメト云モノハ、雷公炮炙論ニ見エシ、木瓜ノ類ニ、蔓子土伏子ナド云物ト覺エ侍リ、今試ニ樝子蔓子等ノ事、異朝ノ書ニ見エシ所ヲコヽニ注ス、

本草綱目曰、樝子乃木瓜之酸澀者、(今世ニボケト云モノ、木ノ高サ六七尺、其花紅白ニシテ、其實木瓜ニ似テ小ク、其味酸クシブルモノナリ、)炮炙論木瓜條曰、有蔓子絕小、味絕澁不堪用、有土伏子味絕苦澁不堪、(按ズルニ蔓子トイヘバ、其性ヨク蔓リテ子ヲムスブモノニヤ、土伏子トイヘバ土ニ伏シテ子ヲムスブモノニヤ、何レモ木瓜ノルイニシテ、其實甚小ニシテ、其味酸ク濇リテ用ルニ堪ルモノナリ、サラバ今イフシドメト云モノニヨクカナヒ侍ル歟、)

〔和漢三才圖會 八十七山果〕樝子(こはけ)(音渣)　木桃　和圓子(俗云小木瓜)　寒樝子(カンコボケ)(○中略)

按樹似海棠而叢生有刺、葉亦似海棠而厚、末圓、三月開花、紅色結子、似林檎而圓、熟則黃、味木(ジカ)而酸澀、用之克木瓜、相傳此花爲咒咀佛供、故尋常不賞、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一山果〕樝子　ボ○ケ○　ク○サ○ボ○ケ○　ノ○ボ○ケ○　コ○ボ○ケ○　シ○ド○ミ○奥州　チ○ク○ム○メ○肥前　ヂ○ナ○シ○常州

山野ニ多シ、高サ一尺許叢生ス、廣原ノ者ハ、三四寸ニ過ギズ、山中ノ者ハ三四尺ニ至ル、枝ニ刺多シ、葉ハ貼幹海棠ニ似テ小シ、春新葉出テ後花ヲ開ク、形小ニシテ五瓣重瓣ナル者ハ稀ナリ、大サ八分許紅黄色夏秋モ不時花(カヘリバナ)アリ、花後圓實ヲ結ブ、夏ニ至テ熟ス、大サ一寸許、頭尾共ニ凹ナリ、藥舖ニハ橫ニ薄ク切リ、眞ノ木瓜ト呼ビ賣ル僞物ナリ、一種白花ノ者ハ自生ナシ、花家ニシロボケト呼ブ、

榠樝

〔書言字考節用集 六生植〕榠樝(カラボケ)、蠻樝(バンサ)、木梨、並同、時珍云、木瓜之大而黃色無重蔕者、置衣箱中殺蠹虫、　榠樝(タウボケ)　唐木瓜(俗字)

〔大和本草 十果木〕榠樝(クハリン)(メイサ)　俗ニクハリント云、京畿ニ多シ、梨ノ類木瓜ニ似タリ、大木アリ、花ハ林檎、又海棠ニ似タリ、海棠ニヲクレテ開ク、實ハ秋冬熟ス、大サハ瓜ノ如シ、香氣アリ、味シブシ、不堪食、性ハ木瓜ト同ジ、柹ノ未熟ナル百バカリアル內ニ、榠樝ヲ一ッ入ヲケバ、柹ヨク熟スト古書ニイヘリ、花梨(クハリン)ハ木理ノ美ナルカラ木ナリ、櫚木トモ云、是トハ別ナリ、本草喬木類ニノセタリ、中夏ヨリ來

ヨリ短クシテ鼻ナシ、藥舖ニ舶來ノ木瓜アリ、一寸半許ノ長サニシテ、縱ニ二ツニ切ル、形狀漢種ト同ジ、眞物ナリ、眞ノ木瓜ト呼ブ者ハ大サ八分許リナルヲ、厚サ二三分ニ横ニ切リ乾タル者ナリ、此ハクサボケノ實ニシテ樝子ナリ、眞ニ非ズ、又二寸許ノ長サナル實ヲ、竪ニ四ツニ切リテ乾タルアリ是榠樝ニシテ亦眞ニ非ズ、

增、古ヘヨリ木瓜ヲボケト訓ズボケハ木瓜ノ音轉ナリ、本邦ノ俗久ク坐シテ麻痺轉筋スル時ボケボケト呼ブ時ハ、速ニ治スト云ヒ傳フ、卽發明ニ、弘景曰、木瓜最療轉筋、如轉筋時、但呼其名、及書上作木瓜字皆愈、此理亦不可解ト云ニ符合ス、コレ木瓜ニボケノ訓アルヲ以テナリ、

〔書言字考節用集 六生植〕樝子 一名木桃 樝子 木桃、和圓子、並同、時珍云、木瓜之短小而味酢澁者、 樝子

〔白石雜考 五木瓜考〕樝子 倭名抄ニ此物ヲ載セズ 多識編曰、和名今按古保計、異名木桃、和圓子、

貝原篤信曰、樝子ボケ、 稻若水曰、木桃ボケ、

右諸說ヲ併セ考ルニ、樝子ハ今俗ニボケト云モノ也、篤信若水等ノ說モ、今ノ俗ノ呼トコロニ從ヘル也、多識編ニコボケト云シハ、本草綱目ノ說ニ、樝子ハ木瓜ヨリ小シキナル者也ト云ニヨリテ名付シナルベシ、某按ズルニ、今世ニボケト云モノ異朝ノ諸書ニ見エシ樝子ノ注ニヨク叶ヘリ、篤信若水等ノ說據アリト云ベシ、又一種草間ニ紅白花ヲ開テ、其實木瓜ノ小キナル酸ク澀ル者ヲ、俗ニシドメトモ、ボケトモ、又ハクサボケトモ云也、此物ハ卽樝子木ノ年每ニ、草ト共ニ苅レテ、其木長ズルコト叶ハデ、草間ニテ花ヲ開キ實ヲ結ブ者也トモ云フ、但ボケト云モノハ其實多カラズ、シドメト云者ノ實ヲ結ブ事尤多シ、サレバモト是一類ニシテ、別種ナルニヤ、アル人シドメト云モノハ、欄地錦ト云モノ也トイヘトモ、心得ラレズ常熟縣志ノ中草木ノ條ニ、欄地錦ハ花絳色、朶如海棠、四時皆有花、獨盛於春ト見エタリ、其木ノ朶海棠ノ如クトアランニハ、木高キモノ也、今ノシドメノ如クニハアラズ、且ハ又花ノ事ノミ見エテ、實ヲ結ト云コトハ見エズ、思フニ

〔本草一家言三〕木瓜　綱目時珍說、以花之脫處有鼻者爲木瓜、無者爲榠樝、又就榠樝中分出木李木桃云、木李似李、木桃似桃、何分疏之甚乎、宜因爾雅爲斷、按爾雅云、楙木瓜、郭注云、實如小瓜、酢可食也、其佗鄭樵邢昺等古今釋爾雅者、未曾言花之脫處有鼻無鼻之別、意時珍之臆度耳、其榠樝蓋俗稱非正名也、況其木李木桃殊非木瓜之類乎、此三名本出于詩經、如木瓜固是楙木、如木李木桃則直是桃李、非別有木李木桃者也、　毎章變物名而反復吟詠耳、醫家疏于六經、誤讀以爲木瓜之三種也、顧夢麟詩經說約辨之、尤審宜併按、

〔本草辨疑四菓〕木瓜(モククワ)

藥舖ニ、ボクヲ用ユ、誤リナリ、

蒙筌云、枝大者可作策杖、木乾者堪造桶盆、(和ノボケ木甚小)時珍曰、可種可接、可以枝壓、其葉光而厚、其實如小瓜而有鼻、津潤味不木者爲木瓜、(今所渡ノ者如此說、又和ノカラボケコレト同、○中略)　コヽニ四種ヲ擧今和ニ二種アリ、通用ノボケハ甚小ニシテ、諸註ニ不合、カラボケト云モノ形小瓜ニ似テボケヨリモ大ナリ、諸註ニ能合ス、然ドモコレヲ眞トスル人希ナリ、ボケハ小ニシテ木瓜ノ文字ニ不應、カラボケハ形チ瓜ニ似テ長ク、木瓜ノ文字ニ相叶ヘリ、

和ノボケハ不可用、唐ヲ可用、若ナクンバ和ノカラボケヲ可用、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕木瓜　通名、一名鐵脚梨(花鏡秘傳)

眞ノ木瓜ハ享保年中ニ渡ル、木大ニシテ一丈ニ過グ、葉ノ形長大ニシテ桃葉ノ如シ、春未ダ葉ヲ生ゼザル時花ヲ開ク、海棠ボケニ似テ色鮮美、花後實ヲ結ブ長サ二寸餘、其末凹ニシテ内ニ鼻アリ、石榴(ザクロノ)尖ノ如シ、常ノカラボケニハ鼻ナシ、カラボケハヒボケ、海棠ボケノ總名ナリ、花ノ色紅ナルヲヒボケト云、卽貼幹海棠ナリ、花紅白雜リ、海棠ノ花ノ如キ者ヲカイドウボケト云、卽木瓜ノ一種ナリ、此ニ雌雄アリ、雄ナル者ハ實ヲ結バズ、雌ナル者ハ實ヲ結ベドモ多カラズ、形眞ノ木瓜

眞木瓜(マコトノ)ヲ以テモケト云シナルベシ、サレド今ノ俗樝子(サシ)ト云物ヲヨビテ、ボケト云フ、若シ此ナラハシ、昔ヨリノ事ナランニハ、順朝臣ノ云シ所モ、樝子ヲモテ、モケト云シモ知レズ、又今俗ニ木瓜ヲ以テカラボケト云コトハ、世人樝子ヲモテ、ボケトイヘバ、ソレニワカツベキ爲ニ、カクハイヘルナルベシ、モケト云ハ、スナハチ木瓜ノ二字、呉音ヲ以テヨビシ也、ソノ後俗ニボケト云シモ、木ノ字ヲ漢音ニヨビカヘテ、瓜ノ字ヲバ、アリシマヽニ呉音ヲ用ヒシモノ也、ソレヲ又醫家ニモツクウト云ハ、二字又呉漢ノ音ヲ交ヘヨビシ也、モツクロノ倭名ナ、モケトモボケトモ云トノミ心エンハヨカラジ、サレド今カラボケト云物ハ、異朝ニ所謂木瓜ノ大ナル物ニテアル也、本草衍義ニ、大木瓜ト云ハコレナルベシ、近キ比ホヒ大明ノ人朱舜瑜ニ木瓜ノ事ヲ問シニ、今俗ニマルメロトイフモノヲ指テ木瓜也トハ云キ、マルメロト云ハ番語ニテアル也、此モノ昔ヨリ我國ニアリシヲ、番人ノ見テ、ナノガクニニテヨブトコロヲモテ、カク呼シニヤ、又番人ノモテ來シヨリ、此國ニハアルモノニヤ、未ダツマビラカナラズ、此人格物ノ君子ニテ、大明ノ代ノ末ノ亂ヲ避テ、番國ニノガレ、其後我朝ニ來リトヾマレリ、サレバ獨異朝ノ事ニ委キノミニアラズ、番國ノ事ヲモヨク知レル人也、其說アヤマルベカラズ、且ハ今異朝ノ諸書ヲ考フルニ、マルメロト云モノハ、彼國ノ書ニ見エシ、木瓜ノ注ニ違フ所ナシ、サラバ我朝ノ諸儒マルメロノ外ニ、カラボケト云モノヲモテ、眞木瓜トノミ思ヘルハアヤマレルナルベシ、

〔大和本草 花木 十二〕木瓜(ボケ)　ボケハモククハノ轉語ナリ、本邦ノボケ數種アリ、寒木瓜(ボケ)花小ニシテ紅ナリ、帶二黃色一有レ實、淀木瓜、花紅ニシテ美シ無レ實、白木瓜、葉初生時色鮮綠、長春木瓜、一月ヨリ花開春夏有レ花、唯秋無レ花、十二月正月花尤ヨシ、花紅ナリ、カラボケ、花初白ク中比淡紅後ニ深紅、八重ボケアリ、草ボケ、高一二尺、野ニ多シ、花赤色木ニ刺(ハリ)アリ、果小シ、武藏野ニシドミト云、草木瓜アリ、其實ノ大サ肥後梅ホドアリ、土民其醋ヲ用ユ、榠樝ニ葉モ實モ同ジクシテ甚小也種木ノ形梨ニ似タリ、高大ナルハ丈許、大抵六七尺、刺アリトイヘドモマレナリ、其實木瓜ヨリ頗大ナリ、又一種花大ニ紅白二色アリ、實モ右二種ヨリ大ナリ、刺多シ、山州鷹峯ニアリ、猶品類多シ、不レ可二窮盡一、凡木瓜ノ花盛久シ、可レ愛、木瓜ノスヲ鰻鱺ニカクレバ甚大ニナル、木瓜トウナギト同食スベカラズ、

木瓜

〔剪花翁傳 前編二 三月開花〕海棠　花の色淡赤、開花三月上旬、方日向、地二分濕、土回塵、肥大便寒中入べし、移秋彼岸より寒前までよし、一種すゞしといふあり、蕚長く風揺して、櫻の蕚の如し、接いづれも春彼岸切接にすべし、

〔地錦抄 三〕海棠るい 木春末

海棠 花形さくらのごとく色あり　杜子美 花形つれのかいだうのごとくつるはしき色あり、木ちいさきより花さくなり、　實海棠 花形まへに同、實なるよし、

〔佐渡志 五物産〕海紅　通名カイトウ

所々國中ニアリ、垂絲海棠ハ稀ナリ、

〔倭名類聚抄 二十木〕木瓜　爾雅注云、木瓜一名楙、音茂、和名木草木瓜、毛介、其實如小瓜也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕按毛介即木瓜之音轉、今俗呼語計、○中略 釋木云、楙木瓜、郭曰、實如小瓜、酢可食、所引亦蓋舊注、○中略 毛詩木瓜傳、楙木也、可食之木、齊民要術引詩義疏曰、楙葉似奈、實如小瓜、上黄似著粉香、吹嗅者截著熱灰中、令萎蔫、淨洗、以苦酒豉汁蜜度之、可案酒、密封藏百日、食之甚益人、水經江水注、故陵村谿、即永谷也、地多木瓜樹、有子大如䉶、白黄實甚芬香、爾雅之所謂楙也、按説文楙木盛也、爲木瓜一名者、蓋假借、

〔書言字考節用集 六生植〕木瓜 ボケ 博物志、味酢善療轉筋、如轉筋時、但呼楙名、及書上木瓜字皆愈、

〔倭訓栞 前編毛 三十三〕もけ　倭名抄に木瓜をよめり、音也、今いふ唐ぼけ是也、

〔白石雜考 五木瓜考〕木瓜

多識編 林道春撰ト云　木瓜和名毛介、又云保計、異名楙、　貝原篤信 筑前ノ人 曰、木瓜カラボケ、一名楙、　稻若水 加賀ノ人 曰、木瓜今云カラボケ、　舜水朱魯璵 大明ノ人、本朝ニ來レリ、水戸西山公ノ師ナリ、 曰、木瓜モルメロ有大小不同、又有長而頭尖者、

右本朝諸家ノ説ヲアハヤ考ルニ、源順朝臣ノ説ハ、即異朝ノ木瓜ノ注ニ同ジケレバ、本朝ノ昔ハ

ズ、前ニ記セリ、本艸ニ海棠子ヲマケバ花遲シ、梨ト木瓜ニ接ゲバ早茂ス、海棠ハ梨ノ類ナリ、

〔本草一家言 三〕海棠　按本草、凡以海命名者、皆自海外來之種也、余以不能無疑、恐斷謬論、蓋於海棠之種而觀之、海之命義未詳、以宜海邊之地得名歟、夫古人以洛陽牡丹西蜀海棠為一雙美觀、蓋西蜀雖僻地而接中國、不可謂之海外殊俗、其他如川海棠、杜海棠、浙江海棠、亦其本地固所產、自古皆有之也久矣、非其自海外來者甚明也、凡天下之花富麗曄艷無如海棠者、然則詩所詠云棠棣唐棣者、指此種類而言、注疏家往々爲之注、或曰扶移、或曰車下李、或曰金棠棣、何不思之甚也、如已上數種細瑣微末、詩人謂之鄂不韡韡、偏其反而可乎、注家爲誤也著明矣、本邦稱櫻花者、先輩嘗曰、海棠譜中所謂垂絲海棠即是、以汝南圃史等書解、金棠棣曰金棠棣、花狀如垂絲、海棠之說考之、則垂絲海棠爲今櫻花、尤可證矣、金棠棣即山吹是也、唐山僧指絲櫻花爲垂絲海棠者誤也、垂絲其花英軟弱、如絲開放即垂下、非以枝條軟弱命名也、如絲櫻花、洛陽花木記有軟條海棠是也、海棠譜有帚子海棠、乃垂絲海棠之特生者、猶小翹大翹之異、但雌雄之別而已、餘見于櫻譜可參考、(主鎌、)重葉海棠偏指爲八重櫻者非、筑前州福岡有呼八重海棠者、卽海棠之重葉而非櫻卽是也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一 山果〕海紅　カイドウ(通名)　一名花仙(典籍便覽桂花同名)　花中神仙(海棠譜)　神仙　川紅(共同上)　名友(事物紺珠)　書客　睡餘妃子(共同上)　睡妃(名物法言)　醉春(尺牘雙魚)　花貴妃(事物異名)　海棠果(雲南通志)　暖紅(撿書隨筆)　蓮花海棠(梅譜、重葉ノ名、)　花命婦(事物紺珠、千葉ノ名、)　花戚里(同上、同上、)

今漢種多シ、春新葉ヲ生ズ、林檎葉ニ似テ微ク長シ、數葉叢生ス、先ニ出ル者ハ綠色、後ニ出ル者ハ淡紫色ヲ帶テ、櫻樹ノ葉ノ如シ、其中ニ數花ヲ開ク、大サ七八分、梅花ノ瓣ヨリ微ク長シ、蕾ノ時ハ全ク赤クシテ朱ノ如シ、開ク時ハ半紅半白、內ハ粉紅色ニシテ、淡紫蘂有テ金屑ヲ點ズ、萼莖共ニヒガンザクラノ如シ、花戸ニテ色ノ淡シキ者ヲ杜子美海棠ト云ヒ、色深キ者ヲ南京海棠ト呼ビ上品トス、花後實ヲ結ブ、形山査子ノ如クシテ味酸シ秋ニ至リ黃熟スレバ酸味ナシ、

海棠

一二丈、葉ハ林檎ニ似タリ又二岐三岐アリテ、山査子葉ノ如キモノ交レリ、花ハ海棠ニ似テ色白ク、稍後レテ開ク、後實ヲ結ブ、海棠ヨリ微大ナリ、霜降ル比實熟ス、色黄ナリ、味海棠ニ劣ル、又粉紅花ヲ開モノアリ、古來ヤブリンゴヲ以テ棠梨ニ充ツ謬ナリ、ヤブリンゴハ葉山楂ニ似テ、三岐五岐ノモノ多シ、春花ヲ開ク、一處ニ多ク聚開ク、五瓣白花ニシテ李花ヨリ小ナリ、又紅花アリ、實ハ小ニシテ營實ノ大サナリ、熟シテ澀ク堅ク食フベカラズ、果部ニ入ルベキモノニアラズ、

〔本草一家言　三〕甘棠　按本草棠梨條云、樹似梨而小、葉似蒼朮葉、亦有團者、三叉者葉邊皆有鋸齒、二月開白花、結實、如小楝子大云云、此俗小林檎者是也、賀越地方名堅梨、花有赤白二色、群書有白者杜赤者棠之說、此之故也、其實至小、似林檎而味澀、不可充果食、惟稱賞其花而已、予讀詩甘棠篇、謂其呼小林檎者非甘棠也明矣、蓋林檎之名本於王羲之十七帖中、來檎帖、林檎、棠子、著實甕盛爲可之說、自義之帖以上、未見有林檎之名也、於是始覺、林檎來禽爲甘棠之俗名、同斷、付林檎等名而揭甘、棠之名云、林檎有數種、其實皆味甜美、正合于甘棠之名義、圭錄

〔書言字考節用集　六生植〕海棠　正日海棠梨、本名海紅、事文、花中神仙、一名不香花、又云花貴妃、

〔和漢三才圖會　八十七山果〕海棠梨、　海紅　凡花木名海者皆從海外來也、略○中
按海棠花亞於櫻艷美也、今又有二葉海棠者、其木小而能開花、白色帶紅、但黄花及垂絲海棠未曾有也、蓋中華則以海棠爲花之第一、詩人最賞之、然杜子美詩集無海棠詩者、其母名海棠也、貴州鎭遠府之產最美、

〔大和本草　十二花木〕海棠　唐ノ賈耽ガ百花譜ニ、花中ノ神仙ト稱シ、又華夏ノ人花中ノ名友ト云、彭淵材ハ海棠ニ香ナキヲ恨ム、眞海棠ハ二三月ニ花開ク、實ノ大比林檎小、其形モ味モ恰如林檎可食、八月ニ至リ遲ク熟ス、眞海棠ハカラヨリ來ル山海棠ハ本邦處々ノ山ニモトヨリアリ、中華ヨリ來ルハ南京ト浙江トノ二種アリ、日本ニテ絲櫻ト云物、唐人ハ垂絲海棠ト云、海棠ノ類ニハアラ

棠梨

ニハ昔ヨリ林檎ノ中ニ混ジテ別チイハザリシヲ、近キ代ニ及テ別チ名付シモノナリ、

〔重修本草綱目啓蒙山果二十一〕柰（ナ。イ。和名抄　リ。ン。キ。ン。ア。カ。リ。ン。ゴ。ベ。ニ。リ。ン。ゴ。加州　ベ。ニ。コ。同上　リ。ン。キ。羽州）一名梣（品字箋）頻婆（三才圖會）平波（典籍便覽）苹婆（汝南圃史）蘋蒲（同上）貧婆（花曆）

百詠　沙果子樹（救荒本草）嘉實（行厨集）浮朱（同上）聯珠果（事物紺珠）相思果（同上）火刺實（物理小識）苕蓮（通雅）花紅（汝南圃史、救荒本草、三才圖會、事物異名、物理小識、本經逢原等ニハ、林檎ノ一名トス、）

林檎ノ種類ニシテ寒國ニ生ズ、故ニ加信奥羽ニ多シ、他處ニ移シ栽ユルモ活ズ、形狀林檎ニ似テ葉細長シ、花ハ林檎ニ同ジ、熟シテ內外共ニ深紅ニシテ柔軟ナリ、薄ク切リ日乾シ、遠ニ寄セ、菓ニ充ツ、實ノ形林檎ト同キアリ、又小クシテ微長ナルモアリ、皆熟シテ全ク鮮紅ナリ、林檎ノ熟シテ半紅ナルニ異ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙山果二十一〕棠梨（コ。リ。ン。ゴ。　ヤ。マ。ナ。シ。　ヤ。ブ。リ。ン。ゴ。　カ。ラ。ツ。ポ。ウ。仙州）一名加冬梨（閩書南產志）杜梨（典籍便覽）

山中ニ多シ、高サ一二丈、又小木ニテモ花實アリ、春新葉ヲ生ズル時花ヲ開ク、白色五瓣林檎（リンゴ）ノ花ニ似テ小シ、多ク簇リ生ズ、花後實ヲ結ブ、形櫻實ニ似タリ、秋ニ至テ紅熟ス、葉モ林檎葉ニ似テ白毛アリ、又三叉ニシテ牽牛（アサガホノ）葉ノ如ナルモアリ、又五岐ニシテ、山査ノ葉ノ如クナルモアリ、又七岐ナルモアリ、皆一枝ノ中ニ變葉多ク雜レリ、秋深テ葉落ツ、甲州ニハ小木小葉ニシテ、黃實ヲ結ブ者アリ、方言ズミ、一種花淡紅色ナル者アリ、カ。タ。ナ。シ。北國ト云、一名コ。ナ。シ。飛州亦山中ニ生ズ、實ハ大ニシテ山査子ノ形ノ如シ、是ヲ紅梨棠（天台山方外志）ト云、一名山海棠（同上）山梨紅（訓蒙字會）日光山中ニハ深紅色ナル棠梨アリ、

〔百品考下〕棠梨　一名野梨一名加冬梨　和名コリンゴ〇中略北國ニ自生アリ、花戶ニ多栽テ海棠林檎ヲ接グダイ木ニ用ユ故ニカイダウダイト云、木ノ高サ

下ニ見ユ、若水ガ海棠ノ實ヲリンキント云シハ、アヤマレルナルベシ、海棠ノ實ト、リンキント同ウカラザルコトハ、辨ズルニ及バズ、舜水朱氏ハ異朝ノ人ニテ、我國ニ來リ留リ、我國ノ物ヲ見テリンゴ、リンキンノ二種ヲワカチ云ヒシ所ナレバ疑フベカラズ、但舜水ノ所謂花紅沙果、イヅレモ諸ノ本草ニハ見エズ、世ノ人專ニ李時珍ガ本草綱目ヲノミ據トシテ、カヽル物ノ名狀ヲ辨フル事ナルニ花紅沙果ノ名其中ニ見エザレバ疑フ所モアリナン、サラバ花紅沙果ノ名、異朝ノ書ニ出シモノ一二引出シテ、其疑ヲ定ムベシ、余庭壁ガ事物異名ト云モノニ、花紅ハ林檎トモ來禽トモ云由見エタリ、舜水ノ云シ知タ、花紅部我朝ノリンゴタルコトウタガフベカラズ、又方以智ガ通雅ト云モノニ、日給ハ沙果也、味甘シト見エタリ、サラバ沙果ハ日給ノ一名タリ、日給ト云モノ王義之ガ帖ニ見エタレド、其形ハサダカナラズ、シカハアレド其帖ニ來禽日給トナラベ云ヒタレバ、林檎ノ類也トハ見エシ、李時珍ガ本草綱目ニ、柰ノ條ノ下、ワヅカニ日給ノコトヲシルシテ、王義之ガ云シ所ハ、柰ヲ指テ日給トスルニ似タリトシルセリ、サラバ時珍モ林檎ノ類トハ思ヘルナリ、通雅ニ、林檎ハ柰ノ一種トモイヘリ、サレド時珍モ未ダ日給ヲヨク知ラザルニ似タリ、篤信ガ柰ヲリキント注セシハ、時珍ガ此説ニヨレルニヤ、據ナシト云ベカラズ、サレド時珍ガ説モ、日給スナハチ柰也トハイハズ、又食性本草ニ、柰ニ三種アリ、大ニシテ長キ者ヲ柰トス、圓ナル者ヲ林檎トス、コレラハ夏熟スル也、小キナル者ヲ梣トス、秋熟ス、一名ヲ楸子ト云由ミエタレバ、柰ハリンゴヨリ大クシテ長キ者也、今世ニリンキント云モノ、リンゴヨリノ猶小シキニシテマドカナレバ、柰ヲ指テリンキント云シモオボツカナシ、只舜水ノ説ノ如クニ、沙果一ニ日給ト云モノヲリンキント心得シニハシカザルベシ、シカジ只舜水ノワカチ云シマヽニ、花紅一名林檎ト云モノヲリンゴトシ、沙果一名日給ト云モノヲリンキント心得ンニハ、又按ズルニ、今世ニリンキント云モノ、リンゴニ似テ小シク、秋ニ至テ熟スル者ナレバ、食性本草ニ見エシ梣一名楸子ト云者ニ似タリ、サレドモ舜水ノ説ニ、沙果又梣ト云由モ見エザレバ覺束ナシ、ヨク知レル人ニタヅヌベキモノカ、

右諸説ヲ併セ考テ、ミダリニ是ヲ辨ジ決メンニハ、

リンゴ花紅一ニ林檎ト云モノ也　此物本朝異國、共ニ果ノ佳美ナル者トセリ、

リンキン沙果一ニ日給ト云モノ也　此物異朝ニハ、昔ヨリ果ノ佳美ナル物トセシメド、我國

㮈相類附錄、且擧其一名也、按爾雅、棪橀其、郭注、棪實似柰赤、可食、說文、棪遬其也、南山經堂庭之山多棪木、郭注、棪別作速、其子似柰而赤、可食、今本速作連誤、衆名苑云、棪一名橀者、蓋本此等書也、明橀是棪之一名、非㮈之別名、本草和名又云㮈一名椼、出衆名苑廣雅、橏、椼樝、柰也、衆名苑蓋本之源君引云、橏一名椼者誤混、恐非衆名苑原文、王念孫曰、齊民要術、種柰林檎篇引廣雅、橏、椼、樝、柰也、撿廣雅、楉榴柰也、在栟櫚機也下、株榕也上、是果名也、橏、椼樝、㮈也、在隸栴也下、楧欂落也上、此皆言木之形狀、不得雜以果名、則此句當爲死木、集韻、㮈乃計切、木立死也、㮈之言歺也、廣雅歺死也、玉篇、橏木瘤也、則橏爲瘣木、木病尰無枝葉、謂之橏、因而死木亦謂之橏、橏之言殄也、鄭注周官稻人云、殄病也、絕也、椼之言奄也、白虎通義云、奄、奄然亡也、樝之言丘也、賈逵說九丘云、九州亡國之戒也、孟康注漢書楚元王傳云、西方謂亡女壻爲丘壻、皆死之義也、依此說、則衆名苑以椼爲果名㮈一名者誤也、

○中略本草和名引無二字、○柰也二字蓋是衆名苑注文、

〔書言字考節用集 六生植〕柰カラナシ 林檎之別種

〔和漢三才圖會 八十七山果〕柰からなし 音耐 頻婆梵言

本綱、柰江南雖有、而北國最豐、作脯食之、若寒小藏有與林檎一類二種、樹實皆似林檎而大、有赤白青三色、白者爲素柰、赤者爲丹柰、一名朱柰、青者爲綠柰、皆夏熟、又有冬柰、冬熟子帶碧色、涼州有之

〔白石雜考 五木瓜考〕リンキン 倭名抄ニ此物ヲ載セズ 多識編ニ此物ヲ出サズ、榲桲ノ下ニ、或ハ利牟幾牟トシルセリ、 貝原篤信曰、柰リキン、㮈同ジ、 稻若水曰、リンキンハ海棠ノ實、卽海棠梨也、 舜水朱魯璵曰、沙果ハリンキン、

右諸說ヲ考ルニ、倭名抄ニリンキンノコト見エザルハ、順朝臣ノ比ホヒニハ、此物只リウゴウノ類ニ混ジテ、別チ名付ルニ及バザリシナルベシ、多識編ニ此物ヲ出サヾルハ、本草綱目ニ此物ヲ載セザルガ故ナルベシ、篤信ガ柰ヲ指テリキント云シコト、似タルコトハ似タリ リキン、リンキン相同ジ、委ク

本邦ニテハ只一種ノミ、木ハ丈餘ニ至リ、枝柔ニシテ廣ク繁茂ス、春新葉出テ後三月花ヲ開ク、葉ハ形橢ニシテ細鋸齒アリ、花ハ五瓣ニシテ大サ一寸許、數蕚簇リ開ク、白色或ハ淡紫ヲ帶ブ、花後實ヲ結ブ、大サ一寸許、正圓ニシテ綠色光リアリ、六月ニ熟ス、其頭半紅色トナル、內ニ黑子アリ、梨核ノ如シ、

〔剪花翁傳（前編二 三月開花）〕林檎　花の色淡赤、開花三月上旬、花葉ともに海棠に似たれど、よく約りて力あり、育方海棠に同じ、

〔甲斐國志（百二十三 產物及製造）〕一林檎（和名利 字古字）方言リンゴ、古府中ニ產スル者味美ナリ、台德廟賜平岩主計頭御報書（櫻林保 格所藏）りんご一籠到來云云、六月十二日トアリ、其頃モ名品ト爲シテ獻上セシナルベシ、松平甲斐守ノ時ハ七月ノ獻上物ナリ、宗瑞ガ甲山行ニ、瑞的者（江戶人）送別ノ發句アリ、道すがら目にも脩べし花林檎ト、他州ノ人モ名品タルコトヲ知レリ、

〔佐渡志（五 物產）〕林檎　方言リンゴ

州ノ東南ニ多シ、加茂郡夷湊ヨリ舟ニツミテ越後ヘ買去ル也、

〔本草和名（十七 菓）〕柰（仁諝 作奈）又有林檎（相似 而小）杌子（狀如 小梨）棎子（亦似柰色赤、音餘冉 反、已上二名出崔禹）一名楗（音連、出兼名苑）榇一名樳、一名掩（已上二名 出兼名苑）和名奈以、一名布奈江、

〔倭名類聚抄（十七 菓）〕柰子　本草云、柰子（上音內、字亦作奈、和名 奈以、一云加良奈之、）兼名苑云、楗（音連）一名掩（音掩）柰也、

〔箋注倭名類聚抄（九 果蓏）〕原書下品載柰、無子字、本草和名同、千金翼方證類本草作奈、亦無子字、子字疑係源君所增、說文、奈柰果也、按陶注柰云、有林檎相似而小、則知柰似林檎而大也、陳士良曰、大長者爲柰、圓物林檎、夏熟、李時珍曰、柰與林檎、一類二種也、樹實皆似林檎而大、玉篇柰柰同上、廣韻、奈本亦作柰、（○中略）本草和名云、和名奈以、一名布奈江、加良奈之與新撰字鏡同、今俗呼阿加利无與、謂其花紅於林檎也、（○中略）本草和名柰條引崔禹、載棎子、云似柰色赤、又引兼名苑云、一名楗、是以棎與

り、長崎りんごあり、實小なり、花はよし、りんご　林檎の音轉なるべし、又東國にて林檎の音を呼ものは柰なりといへり、りんごより少し長し、又小なり、赤りんごともいふ、

〔和漢三才圖會八十七山果〕林檎りんご　文林郎果、　來禽和名利宇古今云利牟五　初從河中浮來、有文林郎拾得種之、因以爲名云云、○中略

按、林檎花葉類海棠、花蕾紅色、開則白帶微紅、似海棠花而小、其實有窪溝如縄痕、徐熟半青半紅、味淡甘微酸脆美、今病人口中凋乾好吃之、如實熱消渇者不害、虛熱煩渇者、生冷物不宜食、

〔白石雜考五木瓜考〕林檎リンキン　多識編曰和名利牟古宇、俗云利牟古、異名來禽、文林郎果、貝原篤信曰、林檎リンゴ、　稻若水曰、林檎リンゴ、　舜水朱魯璵曰、花紅リンゴ、

右本朝諸家ノ説ヲ考ルニ、我朝ノ昔リウゴウト云シモノ、今ハリンゴト云也、リウゴウ、即林檎二字ノ音ヲ以テ和名トハセルナリ、コノ例尤秘訣ニテアルナリ、芭蕉ヲバセヲト云ヒ、紫苑ヲシヲント云モ同ジ例也、リンゴト云モ、スナハチ林檎二字ノ音ヲモテヨビシナリ、古ニリウゴウト云ヒ、今ハリンゴト云モノ、共ニ林檎二字ノ音ナレバ、リウコウ、リンゴ、リンキン、其名異ナルニ似タレドモ、同ク一物ニテ、木瓜ヲモケトモボケトモ、モタカウトモ云ヘドモ、モトコレ一物ナルガゴトシ、舜水ノ所謂花紅ニ、亦林檎ノ一名ナレバ、皆是異ナル物ニハ非ズ、然ルニ近世リンゴノ外ニ、俗ニリンキント云モノ出來シヨリ、夫ヲワカチシルスベキ爲ニ、多識編ニヨリテ、榲桲ノ字ヲ以テ、リンキントナス、尤アヤマレリトゾ云ベキ、是リンキント云物ノ事ヲ詳ニセザルニヨリテナルベシ、リンキンノコトハ下ニ注シヌ、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕林檎　リウゴウ和名抄　リンゴ　アヲリンゴ加州　一名花紅本經逢原、物理小識、汝南圃史救荒本草ニハ柰ノ一名トス　青李事物異名　林家果同上　文林通雅　文林果花暦百詠　文官果同上　蜜果群芳譜　冷金丹同上　淋漓名物法言　水精團事物紺珠　金彈丸同上　聯珠果廣群芳譜、事物紺珠ニハ柰ノ一名トス　月臨花同上花ノ名　靚客事物紺珠同上　金櫻子金櫻子條下核ノ名

唐山ニハ品類多シ、汝南圃史ニモ蜜林檎、花紅林檎、水林檎、金林檎、操林檎、轉身林檎ノ六種ヲ載ス、

林檎

旁ニ一株アリ、是ハ鎌足公ノ御子定慧和尚如唐ノ時、鎌足公ノ薨去ヲ聞玉ヒ、五臺山ニ登リ、此種ヲ採リ、十三重ノ塔ニ用ユル材木トヲ攜テ、歸朝アリテ栽ラレシナリ、寶暦癸酉ノ年ニ至マデ千八十年ナリ、原木ハ山谷中ニアリ、今廟旁ノ者ハ榠樝ニ接タルナリト云、形狀榠樝ト同ジ、葉ノ形モ異ナラズ、三月ノ末淡紅花ヲ開ク、又榠樝ト同ジ、實ハ榠樝ヨリ小ニシテ香味微シク異ナリ、內ニ黑核アリ、地ニ下シテ生ジ易シ、亦枝ヲ壓スルモ可ナリ、故ニ今花家ニ多シ、俗ニ實ヲ用テ痰及腸症ノ藥トス、漢名詳ナラズ、世ニ安蘭ノ音菴羅ニ近キ故ニ誤リ混ズルナリ、

〔扶桑略記醍醐二十三〕延喜十五年三月八日、相應傳云、相應和尚對本尊前、祈念可示往生之所、夢中明王捧和尚、令坐須彌山頂磐石之上、見十方淨土都率極樂、如見掌中菴羅菓、卽告曰、略○下

〔本草和名十七菓〕林檎一名黑琴出七卷食經

〔倭名類聚抄十七菓〕林檎　本草云、林檎音禽、和名利宇古宇、與柰相似而小者也、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕按利宇古宇、卽林檎音轉、非倭名、故輔仁不載是名、今俗呼利无與、又呼阿乎利无與、○中略所引文、原書不載、按椋條陶注云、有林檎、相似而小、此所引蓋陶注也、王羲之帖、有櫻桃來禽日給滕、何書故實云、來禽、言味甘來衆禽也、俗作林檎、蜀都賦劉逵注、林檎、果名也、林檎實似赤柰而小、味如梨、開寶本草云、林檎其樹似柰樹、其形圓如柰、六月七月熟、陳士良曰、大長者爲柰、圓者林檎、略○下

〔書言字考節用集六生植〕林檎リンゴウ一名來禽

〔塵袋二〕林檎ヲバ字ノ如ハヨマズシテ、リウコウト云コトアル如何、順ガ和名ニハ林檎トカキテ、リウゴウトヨメリ、今ハ林ノ字リウトマデハ云ハネドモ、檎ヲバ尙ゴウト云人モアルナリ、ソノヨシナキニハアラズ、

〔倭訓栞中編二十八利〕りうごう　和名抄に林檎をよめり、今はりんごといふ、音をもて訓とするな

一名兒梨〔典籍便覽〕　牛嬭梨〔藥性纂要〕

京師ニテハ市中ニ栽エズ、八瀨大原邊ノ民家ニ多シ、木高大ニシテ梨樹ニ異ナラズ、葉モ形同シテ枝ニ刺アリ、春未ダ葉ヲ生ゼザル巳前ニ、白花ヲ開クコト梨花ト同ジ、實ハ桃實ヨリ小ニシテ、冬ニ至テ熟シ、食フベシ、夫ヨリ巳前ハ煠セザレバ食ハレズ、京師ニテハ中元ノ佛供トス、ソノ木ニ文理アリテ羅ノ如シ、

〔夫木和歌抄 二十九梨〕弘長四年毎日一首中　民部卿爲家

山なしの花ちら雪ふるさとの庭こそさらに冬ごもりけれ

〔新撰六帖 六〕山なし　家良

足曳の山なしの花咲しよりたなびく雲のおもかげぞたつ

きゝわたる面影みえて春雨の枝にかゝれる山なしの花　爲家

〔書言字考節用集 六生植〕菴羅菓(アリノミ)〔一名香蓋、本草、梨之屬、大日經疏、菴摩(エンモ)羅果、形如冰園夏梨云々、出世繼大鏡〕

〔倭訓栞 中編一阿〕あんらん　菴羅果をいふ、大和塔ノ峯の廟側に一株あり、五臺山の種といひ傳へり、皮片々自らへげ落て、其痕五色斑爛たり、三月に花さく、五出粉紅秋に至り、實熟す、凡て榠樝の類也、實の形は梨子の如し、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕菴羅果(てんちくなし)　菴摩羅迦果　香蓋　此種未ㇾ有ㇾ於此

本綱、菴羅果出西域、梨及柰之類也、葉似茶葉、實似梨、五六月熟、色黃、七夕前後巳堪ㇾ噉、味甘溫、果中極品、多食亦無害、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一山果〕菴羅果　一名王城〔事物紺珠〕　菴羅迦果〔花暦百詠〕　羅迦果〔食物本草〕

和産詳ナラズ、世ニ安蘭樹ヲ以テコレニ充ルハ穩ナラズ、安蘭樹ハ和州多武峯大織冠ノ御廟ノ

鹿梨

〔續日本後紀 十二 仁明〕承和九年十月丁丑、文章博士從三位菅原朝臣清公薨、〇中略 六年〇承和 正月敍從三位、老病羸弱、行歩多艱、勅聽乘牛車到南大庭梨樹底、斯乃稽古之力、非備求所致、

〔倭訓栞 前編 十九 那〕なし　伊勢飯野郡に一株の古木ありてならずなしといふ、よて嫁娶などの時、その樹下を避て通行せずといへり、枝葉甚梨に似てちひさし、山なしなるべし、實も梨にて丸く、至て小也、ならぬにはあらず、叡山の西坂に不實の柿ある事、元亨釋書に見ゆ、

〔倭名類聚抄 十七 菓〕樆子　陸詞切韻云、樆 音離、和名夜末奈之、 山梨也、

〔箋注倭名類聚抄 九 果蓏〕今俗亦呼夜末奈之、又呼以奴奈之、又呼阿利乃美、〇中略 廣韻同、玉篇亦云、樆山梨也、按爾雅釋木、梨山樆、謂梨生山中者名樆、篇韻蓋依之、說文無樆字、借用離字、子虛賦、檗離朱楊、注引張揖云、離、山梨也、爾雅釋文云、梨字亦作梸、按晨風詩云、隰有樹檖、毛傳、檖赤羅也、正義引爾雅郭注云、今楊檖也、實似梨而小酢可食、陸璣疏云、檖一名赤羅、一名山梨、今人謂之楊檖、實如梨、但小耳、一名鹿梨、一名鼠梨、今人亦種之、極有脆美者、亦如梨之美者、本草圖經云、江寧府信州出一種小梨、名鹿梨、葉如茶、根如小拇指、李時珍曰、山梨野梨也、梨大如杏、可食、其木文細密、赤者文急、白者文緩、

〔書言字考節用集 六 生植〕鹿梨ヤマナシ、陽檖、鼠李、野李、並同、山梨、毛詩

〔和漢三才圖會 八十七 山果〕鹿梨ありのみ やまなし　鼠梨　山梨　陽檖　赤羅 詩曰、隰有樹檖者是也、　俗云阿利乃美

本綱鹿梨乃野梨也、大如杏、味酸 氣寒、 其木文細密如羅、赤者文急、白者文緩、

按、鹿梨枝有刺、其子如大棗、味酸澁不堪食、但爲聖靈祭果耳、故名聖靈梨、

〔本草一家言 三〕欙木　和名阿利乃實アリノミ

典籍便覽曰、色白紋理黃花紋龜亦可愛、謂之倭羅、不花者多、有一等稍堅、理直而細、謂之革欙、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一 山果〕鹿梨　ヤマナシ〇和名抄 〇アリノミ〇京 〇イヌナシ〇濃州 〇ユデナシ〇雲州

スルトモ實小ク味ヒ美ナラズト知ベシ、又接木スルニハ、其梨子ノ笛竹程ニ太リタルヲ引切リ、正月中其芽ノ少出ントスル時ニ、望ム所ノ梨木ノ南向ナル枝ノ、勢ヒ壯ナル梢ヲ切テ接ベシ、南枝ニ非ザレバ實結コト遲者ナリ、又揷木スルニハ、二月中旬頃南向ノ勢壯ナル枝ヲ一尺五六寸ニ切リ採テ、其本末ヲ剕ギ、上下ノ剕口ヲ炭火ニテ燒キ、豫テ糞養シ置タル植地ヲ掘テ、適宜ク此ヲ栽エ、細ナル肥土ヲ上ニ覆ヒ、蹈付テ遮陽ヲ致シ、燥クトキハ、泔水ニテ少シ潤シ置ベシ、此ノ如クスルトキハ、幾本揷ト雖ドモ皆能ク活者ナリ、總テ此物ヲ作テ上品ナル實ヲ多結シメンコトヲ需メバ、寒中其根ヲ去ルコト一尺餘ヲ鍬ニテ耕シ、干鰯汁(即干鰯一斗ヲ粉ニシテ水三斗ヲ合セ、數日調和シタルヲ云フ、)ヲ澆テ土ヲ覆置クベシ利潤ヲ得ルコト多キ糞養ナリ、

〔廣益國產考〕八梨を多く作りて利を得る事〇中略木植するには、先其土地の地味をよく見立べし、予〇大藏永常先年美濃の國大垣の在、梨を作りし所に參りし事あり、其邊は餘り上地にてはなく、黑土がちにてありしと覺ゆ、都て木は山によく育つ性分なれば、あまり上地ならざる山土の方能生育すると見えたれば、作物のとれかたすくなき地面を撰び仕立べし、然し風當強く北請の地、又は日蔭抔は忌べし、南請の風すきよき所を見立べし、植るには貳間宛間置植べし、植付たるとしは、此ごとく〇圖略竹にて鳥居の如くして、其中に繩もてゆるく括付置べし、其翌年は六七尺にも伸べし、三年目には地より七尺高さに竹にて棚をかき枝を四方へくばるべし、

〔日本書紀〕三十持統七年三月丙午、詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁等草木、以助五穀、

〔續日本紀〕一文武四年三月己未、道照和尙物化、〇中略初孝德天皇白雉四年、隨使入唐、適遇玄弉三藏、師受業焉、三藏特愛、令住同房、謂曰、吾昔往西域、在路飢之、無村可乞、忽有一沙門、手持梨子、與吾食之、吾自啖後、氣力日健、今汝是持梨沙門也、〇下略

梨栽培

多し、中にもあわ雪、あをなし等は、わせにて味よし、

〔甲斐國志産物及製造百二十三〕青梨子　延喜式云、諸國貢進菓子、甲斐國青梨子五擔、又例貢御贄ノ品ニモ載タリ、本州第一ノ名品ニシテ、四方ニ聞タリ、州中所在民戸園林ヨリ産スル物ナレドモ、今運上永ヲ納ル村多シ、山梨郡勝沼村ノ産爲最上、岩崎村及北山筋長塚五箇村ノ産次之ト云、消梨本草ニ云、香水梨、鵝梨、肥前高來郡空閑御前梨、今云雪梨子、鵝梨所産種子故名之、ノ類數品有リ、皆青梨ニハ不若ナリ、其形中豐シテ上下消殺、如麥粒、大ナル物重百匁ニ餘ル、削皮皎潔如霜、麗液指間ニ滴ル、甘美不可言、古歌ニ、

夫木集、かひにて山なしの花をみて、　能因法師

甲斐がねに咲にけらしなあし引の山なしをかの山なしの花

松平甲斐守領國ノ時八月獻上之、今モ府中落鎮ヨリ獻ズル恆例ナリ、

〔佐渡志物産五〕梨　和名ナシ

家國マタハ圖中ニ栽ユ、水梨アリ、青梨アリ、松尾狐コロシハ俗間ノ方言ナルベシ、

〔武江産物志遊觀〕梨　隅田村　下總八幡市川向　生麥村川崎

〔草木六部耕種法實十九〕梨ハ種植ヲ成長セシメタルモ宜ク、接木、擂木ニスルモ皆宜シ、種類亦甚多ク、世ニ古河梨子、禪師、楊貴妃ナド稱スル者アリ、皆上品ナリ、又青梨子ニ、極大ニシテ味甘美ナル有リ、子植スルニハ實大ニシテ味美ナル上品ノ種子ヲ採リ、此ヲ直ニ苗地ニ疎ク隔テ蒔キ、細土ヲ七八分許覆テ、少シ押付置ベシ、翌春芽ヲ出タラバ、時々泔水ヲ澆テ成長セシメ、明年別ニ植地ヲ調理置テ、其苗ヲ一本ヅヽ、間ヲ六尺隔ニ植テ、時々泔水或薄キ水糞ヲ灌ギ成長セシムベシ、夏中能ク太リタルヲ、冬ニ至リテ葉落タル時ニ、利刀ヲ以テ土際ヨリ二寸許遺シ、伐採テ其切口ヲ炭火ヲ吹キ燒テ置トキハ、翌春根ヨリ新芽ヲ生ジテ、勢能ク成長シ、二年ヲ經ルノ間ニハ、必實ヲ結ビ、漸々良木ト成ル者ナリ凡實植ノ梨子ハ、此法ヲ行ハザレバ繁榮スルコト能ハズ、假令繁榮

圓梨、卽青梨之種類而大、皮薄、色青帶微褐、多漿甘美、肥前空閑梨、微赤色、極大、其味亞於圓梨、其外數品不枚擧、凡梨冬月毎枝曲撓縛而常不解、則能結實、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕梨　ナシ　アリノミ阿州、京都ニテハ、鹿梨チアリノミト云、一名青田菓典籍便覽　百菓珍　玄圃實共同上　阿馬異名事物　百果宗　飣坐珍　山樆　鳳棲共同上　阿里馬事物紺珠　瓊實珍寶同上　快雪名物法言　含消同上　百損黄清異録　圓果救荒記　玉實雙槐尺牘　雪液行厨集　珍實同上　梨兒訓蒙字會上・離品字箋　花一名千株雪典籍便覽　玉容名物法言　香雪同上　清艶事物紺珠　瀛洲玉雨　濃香共同

春末ダ葉ヲ生ゼザル已前ニ、桃ニ次テ花ヲ開ク、白色五瓣莖長シテ簇リ生ズ、花衰テ新葉ヲ生ズ、形圓尖ニシテ厚ク、細鋸齒アリ互生ス、唐山ニハ其品多コト集解ニ載ス、和產ハ數品アリ、一種空閑ナシハ形圓ク、皮ニ微赤ヲ帶ブ、佳味ナレドモ水少シ、是乳梨ナリ、事林廣記ニ、赤皮梨子ノ名アリ、一種水ナシハ形空閑ナシト同シテ、佳味ニシテ、水多シ、是水梨ナリ、一種アヲナシアリ、形微長ク、皮ノ色青ク味佳シ、是レ青梨ナリ、他梨ヨリ早ク熟ス、故ニ酉陽雜俎ノ夏梨ナリト大和本草ニ云リ、一種大場ナシハ雲州ノ名產ナリ、形圓大ニシテ水多ク香アリ、稍小クシテ肉多シ、皮ノ色黃ヲ帶テ微透ス、越後及ビ勢州ニテマツヲナシト云、是レ香水梨ナリ、一種牛面ナシハ越後新潟ノ產ナリ、形至テ大ナル故名ク、又丹後田邊ニ一升ナシアリ、一顆ニ水一升アリト云、豫章漫抄ニ斤九梨ノ名アリ、一膠ノ重サ一斤九兩十二錢五百アルヲ云、此類ナルベシ、

〔草木育種下果〕梨本草　甲斐相模下總等にて多作、砂まぢりたる眞土よし、根の土玄まりたるがよき故に、小砂利を突込處もあり、寒中人糞又酒粕等根廻を掘て入べし、高五六尺に棚を拵へ、枝を結付てよし、又花咲たる時一房の內、實の大なるを一ッ二ッ殘て、跡を摘捨たるもよし、梨も種類

をきかへし露ばかりなるなしなれど千代ありのみと人はいふ也

〔山家集下〕れいならぬ人の、大事なりけるが、四月になしの花の咲たりけるをみて、なしのほしきよしをねがひけるに、もしやと人に尋ければ、かれたるかしはにつゝみしが、なしをたゞひとつつかはして、これはかりなど申たる返ごとに、

花の折かしはにつゝむ志なのなしはひとつなれどもありのみとみゆ

〔續狂言記一〕連歌毘沙門

初アト扨いつものごとく年籠いたさふ、アトよふござろ、ゆるりと御ざれ、少まどろみませよ、〇中略　初アトいや別の事でもござらぬ、夜前は多門天より御ふくを被下てござる、アトそれはめでたいことでござる、何を被下たぞ、アト梨ありのみを被下てござる〇中略　シテ是はざれごと志や、是はなんばのほことい ふて、さびるほこではおりない、さらばはいぶんをしてやらふ、色いでいでありのみわらんとて、なんばのほこをとりなをし、まん中にをしあて、さつくり、扨も〳〵かたわれもなふよふわれた、さあとれ、汝もとれ、あまり見事なありのみで酢だまりが出來た、是は多門天が德分にしてたべう、

〔書言字考節用集六生植〕空閑梨（コガナシ、本名鵝梨、今按、肥前高來郡空閑所產、故名、）　甘棠（アマナシ、出爾雅）　杜棠（詩毛）　消梨（ソツナシ、本草、所謂香水梨也、）

〔和漢三才圖會八十七山果〕梨（音離）　快果　果宗　玉乳　蜜父　和名奈之〇中略

梨種類
梨產地

按梨雖爲山果、而人家近煙處能結子、性不怕寒、故北國最多、奧州津輕、羽州秋田之產、倍於他國者、而大、其大者周一尺四五寸、俗呼名犬殺、（狗有于樹下梨落所擊死、故名、）

紅瓶子（ヘイシ）梨、似瓶子形、而色赤、其肉白如雪、江州觀音寺梨、色微赤、不甚大、而漿多甘美如消於口中、山城松尾梨、狀類觀音寺、而褐色甘脆如雪、但漿少耳、

水梨、狀似青梨、而褐色帶青、味極甜美、有微香、多漿、

〔倭訓栞前編十九〕なし○中略　梨を訓せるは奈子の音を謬用うといへど、中酸の義にてこそ、磐梨郡を倭名鈔にもいはなすとよめり、水なしは消梨也、又青なしあり、共に賞すべし、觀音寺松尾ともによろし、堅なしは棠梨也、こりんごともいふ、あまなしは加多梨也、又島なしあり、實少さく赤し、日本紀に木梨あり、今も一種とす、本草榠樝の一名に見えたり、攝州に紫花梨あり、本草にも見ゆ、美濃山中に姫なしあり、形圓くてちひさし、冬に至り食べし、新撰六帖に夏梨あり、秋をもまたぬとよみたれば、夏より熟するなるべし、酉陽雜俎に曹州出夏梨と見えたり、

〔枕草子三〕木の花は

なしの花よにすさまじくあやしき物にして、めにちかくはかなき文つけなどにせず、あいきやうおくれたる人のかほなど見ては、たとひにいふもげに其いろよりしてあいなく見ゆるを、もろこしにかぎりなき物にて、文にもつくるなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしにをかしきにほひこそ心もとなくつきためれ、やうきひ、みかどの御使ひにあひてなきけるかほににせて、梨花一枝春雨をおびたりなどいひたるは、おぼろけならじとおもふに、猶いみじうめでたき事はたぐひあらじとおぼえたり、

〔新撰六帖六〕なし　家良

年ふれどかはらずながらつれなしのあらぬ物にも身こそ成ぬれ

爲家

いたづらにおふのうらなし年をへて身は數ならず成まさりつゝ

〔圓珠庵雜記〕なし、ありのみ、○中略

事物異名云、梨阿里馬、

〔相模集〕さかりすぎてくちたるなしを、おさなき人の許にやるとて、たゞならじとて、

梨名稱

食スレバ味栗ノ如シ、紅毛ヨリ來ル痰ノ藥ニズートボートヽ云アリ、其方巴旦杏鳳尾草(トラノオ)ヲ用、甘草ノ濃煎汁ニテ製スルト云、俗ニ誤テズドウボウトト呼ブ、又別ニアメンドウト云アリ、小木ニシテ花實ヲ多ク生ズ、是レ壽星桃ナリ、巴旦杏ノ類ニ非ズ、又花家ニ漢種ノ巴旦杏ト呼ブ者アリ、李類ニシテ眞ニ非ズ、

増、本草綱目會誌云、按ニ巴旦ハ國ノ名、爪哇(ジヤワ)國ニ屬シテ咬𠺕吧(ジヤガタラ)ニ近シ、今多ク出ル者咬𠺕吧(ジヤガタラ)、波斯(ハルシヤ)ノ產ナリ、阿蘭陀將來ノ方ニ、膈噎ヲ治スルニ、巴旦杏仁、小鳳尾草、氷砂糖、各等分、水煎服ス、

〔庖廚備用倭名本草六五果〕巴旦杏(ハタンキヤウ/アタンタウ)〇中略 巴旦杏、味甘氣平溫毒ナシ、欬ヲトヾメ、氣ヲ下シ、心腹ノ迷悶ヲ消ス、

〔本草一家言三〕巴旦杏 出于本草、番藥也、漢土和邦共無之、一名扁桃、其實酢不堪食、其核扁大、去核用仁、今所渡者敗朽腐爛者尤多、宜擇用、然近世和邦稱阿女牟登宇者、其木矮短長葉、稠密攢聚、稍頭花色不異于常桃、其實稀少、俗醫以此物爲巴旦杏誤也、卽陳氏花鏡王氏彙苑所載壽星桃也、與扁桃絕不同、不入藥用、

〔本草和名十七果〕梨(楊玄操音力之反) 𣘸子(味酸甘、音市廉反) 樆子(亦似梨而小酸、音胴醉反) 𣚽子(生山中、已上三名出崔禹) 一名紫實、一名紫條、一名縹蔕、一名六俗、一名含須、(已上五種出兼名苑) 和名奈之。

〔倭名類聚抄十七果〕梨子 唐韻云、梨(力脂反、和名奈之、) 果名、兼名苑云、梨子一名含消、

〔箋注倭名類聚抄九果〕按說文、棃果名、孫氏依之、李時珍曰、棃樹高二三丈、尖葉光膩有細齒、二月開白色、如雪六出、〇中略 本草和名引作含須、按洛陽伽藍記云、城南報德寺有含消梨重十斤、齊民要術引三秦記曰、漢武東園一名御宿、有大梨如斗、落地卽收取著、以布囊盛之、名曰含消、藝文類聚初學記、並引三秦記云、漢武帝園有大棃、名曰含消棃、兼名苑蓋本於是等書、則知作含須者誤、

〔鹽尻六〕梨をなしと讀は、和語にあらず、奈子をかりて訓とせり、

水ヲ漑テ潤ストキハ夥シク實結者ナリ、

〔草木育種 下 果〕杏(あんず) 本草　桃砧又李砧に接べし、樹はぶんご梅によく似たり、花單にて紅し、又八重もあり、接樣移樹肥皆梅と同じ、

〔庖厨備用倭名本草 六 五 果〕杏 ○中略　杏實味酸氣熱小毒アリ、曝シ脯ニシテ食ス、冷熱毒ヲサル心之果ナリ、心病ニハヨロシク食スベシ、生ニテ多食スレバ筋骨ヲソコナフ、梅ニ類スルハ味スシ、桃ニ類スルハ味アマシ、杏仁ハ藥ニ入テ功オホシ、核枝葉根皆藥ノ用アリ、

食禁　多食スベカラズ、瘡癤ヲ生ジ、膈熱シ、宿疾ヲ動シ、目クラミ鬚眉オチ、痰熱ヲ生ジ、精神ヲクラマス、

〔新撰六帖 六〕から桃　爲家

もろこしのよしの、山に咲もせでをのが名ゝらぬから桃のはな

〔夫木和歌抄 二十九 杏〕　衣笠内大臣

いかにしてにほひそめけんひのもとのわがくにならぬからも、の花

巴旦杏

〔書言字考節用集 六 生植〕巴旦杏(アメンダウ) 八擔杏、忽鹿麻、並同、見本草、又出加、壽星桃(同) 又云婆淡杏、出酉陽雜俎、

〔和漢三才圖會 八十 五 果〕巴旦杏　八擔杏　忽鹿麻　阿女牟止宇 ○中略

按巴旦者國名、呱哇國之屬、而近于咬𠺕吧(ジャガタラ)、今多出者咬𠺕吧波斯之產、而阿蘭陀將來之、今有俗謂阿女牟止宇者、乃桃之類、出於西王母桃之下、此與巴旦杏大異、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 五 果〕巴旦杏　アメンドウ　アメンドウス　一名杏榛 汝南圃史 八丹杏 同上

八達杏仁 八達生

和產ナシ、紅毛人持來ル、杏核ナリ、其仁ヲ採リ藥トシ果トス、巴爾齊亞(ハルシヤ)國咬𠺕吧(ジャガタラ)國ヨリ出ヅ、尋常ノ杏核ヨリ大ニシテ黄色、其紋細ニシテ堅シ、其形大小長短均シカラズ、仁ハ杏仁ヨリ大ナリ、生

入最淺シ、故ニ石ヲタカク根ニヲクベシ、根堅ク花盛ニシテ果ヲ結ブ、此事畫譜等中華ノ書ニ出タリ、實ヲウフベシ、或曰桃ノ木ニ杏枝ヲツダベシ、杏ニ數種アリ、實ニ大小アリ、味ニ甘酸アリ、

〔重修本草綱目啓蒙二十五果〕杏　カラモヽ和名鈔　アンヅ　一名孔壇仁實事物異名　南郡金胦　上林文實　魯壇眞味　漢苑遺文　董林勝果　草金丹共ニ同上　文杏行厨集　星精同上　紅玉名物法言　杏兒訓蒙字會　花一名花友事物紺珠　艶客同上　碎錦行厨集　麗色尺牘雙魚　江錦同上　倚雲客花鳥爭奇　出墻燒林名物法言　仁一名德兒輟耕錄　老陰子獨參方、老陽子ハ巴豆ノ一名ナリ

古名カラモヽ、今カラモヽト呼ブ者ハ壽星桃ナリ、今ハアンズト云、卽唐音杏子ノ音ノ轉ナリ、杏樹ハ梅樹ニ似タリ、紅梅ニ次テ花ヲ開ク、鴬梅(ブンゴムメ)花ノ形ト同シテ大ナリ、花後葉ヲ生ズ、圓尖ニシテ細鋸齒アリ、梅葉ヨリ大ナリ、其花單ナル者ハ實ヲ結ブコト多シ、千瓣ナル者ハ實ヲ結バズ、是ヲハナアンヅト云、時珍ノ說ニ、有千葉者不結實ト云ヘリ、ソノ實ハ梅實ニ似テ大ナリ、シロアンヅト呼ブ者ヲ上品トス、形大ニシテ黃白色味美ナリ、宗奭ノ說ニ、又有白杏ト云是ナリ、又モチアンヅアリ、形大ニシテ黃赤色味甘シ、頌宗奭ノ說ノ金杏ナリ、又スアンヅアリ、時珍ノ說ノ梅杏ナリ、味酸シ故ニ梅ト云、○中略

埴、アンヅハ唐音アンツウノ路ナリ、又シロアンヅニ同名アリ、白花ノモノモシロアンヅト呼ブ、○中略　又汝南圃史云、其仁有毒、須煮令極熟、以中心無自爲度ト云ヘリ、

〔草木六部耕種法十九實需〕杏子(アンズ)、亦核ヲ植タル儘ニテ成長シタルハ、實小ク味苦シ、宜ク苗ヲ爲立テ、移シ植テ接木スベシ、其法梅ニ異ナルコト無シ、且此ノ物ハ、梅、桃、李等ヲ砧木ニシテ接ベシ、桃ヲ砧トシテ接タルハ、實大ニシテ色深紅、其味甘ク、殊ニ上品ナル美果ナリ、杏子ハ壽木ニテ百年ヲ經ルト雖ドモ、能ク實ノ結者ナリ、然レドモ成長シタル木ハ移シ植ウベカラズ、大抵繁生スルコト無ク枯死者ナリ、又此物ハ正月木ノ下ヲ大槌ニテ打チ、二三月根ヲ去ルコト、二三間隔テ畦ヲ作リ、

して、生にて食ふに美味あり、かの人常の果とす、又杏核の兩面を磨して、小孔を明て笛となし、雉子をとるに用て、雉子笛といふとぞ、杏花は五辨淡紅にして、か丶へて開き、滿開はせざるなり、又八重なるは滿開す、大和本草に、一種花紅にして、八重なるあり、花大なり、單花に後れて開く事十餘日、俗名ニ六代、其木ひき丶時花を見るによし、〇中略此花開かんとする時甚美し、今六代と呼花玄れず、今八重あんず、花あんずといふは大輪なれども、淡紅にして紅とはいひ難し、𦗟尤紅なり、その背の蕚の邊は鮮紅なれば、蕾より半開の裏は美なり、されば昔六代と呼し種となしても佳なり、又もちむめあんずむめ、怡顏齋梅品すあんず通稱と呼種は、其花あんずと一樣にて、實の味酸なる故にいふ、怡顏齋味酸からすといひ、韵勝園梅譜にも、實の甘きこと杏のことしとあるは誤なり、杏の類多く有といへども、皆實の形狀にて名を異にせり、又花戸にてあんずだちと稱する梅多し、三國一酒中花と呼、梅杏に接ツガざれば活せず、岩崎常正曰、つらゆきと呼梅實は、核肉を離れて、杏のごとしといへり、又杏條下に巴旦杏あり、アメンドウ、アメンドウス、又アメンテルともいふ、和産なし、又アメンドウと云あり、是は壽星桃なりと、本草綱目啓蒙に見えたれども、壽星桃はアメンドウスといふ桃なり、スモ丶ノアメントウは牛心李なり、

〔大和本草果木十〕杏カラモ、アンズ　其花紅梅ニヲクレ、桃ニ先ダツ、花ウルハシク、子ハ果トシテ食シ、其内ノ仁ハ藥トシ、又食品ニ加フ、香味良、世俗ニ杏子唐音ヲヨンデアンヅト云、仁ニアンニントト云、和名カラモ丶、杏子ヲホシテ果トスルモヨシ、一種花紅ニシテ八重ナルアリ、花大ナリ、單花ニ後レテ開ク事十餘日、俗名六代、其木ヒキ丶時花ヲ見ルニヨシ、長ジテハ切ベシ、此木高キヲ切レバ又早ク榮ヘ長ズ、故ニヒキキニ花サクヲ見ルタメ、高キヲ切ナリ、菊ニモ六代アリ、是モ長ジテ切ベシ、平氏ノ重盛ノ孫六代年長ジテ切レシナリ、此花初開カントスル時甚美シ、花衰謝スル時アシ丶、實ヲ結ブ事稀也、李惟熙曰、桃杏雙仁者殺ㇾ人、其花六出失ニ其常ㇾ故也、時珍云、索麪豆粉近ニ杏仁ㇾ則爛、杏ハ根

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕原書果部下品載杏核云、一名杏子、此所引卽是、本草和名亦云、杏核一名杏子、本條、千金翼方證類本草題杏核仁、不載一名、蓋誤脫、非蘇敬之舊也、傷寒論有桂枝加厚朴杏子湯、說文、杏、杏果也、李時珍曰、諸杏葉皆圓而有尖、二月開紅花、亦有千葉者、不結實、和名依輔仁、加良毛々乃波奈、見古今集物名歌、今俗呼安无受、又今俗呼加良毛々者、謂壽星桃、與此不同、

〔伊呂波字類抄加植物附植物具〕杏カラモヽ、

〔書言字考節用集六生植〕杏(カラモヽ)、出安 巴旦杏、同上 杏子(アンズ)一名甜梅、出加、 杏仁(アンニン)

〔古今和歌集十物名〕からもゝの花　ふかやぶ

あふからもゝのはなほこそかなしけれわかれむことをかねて思へば

〔和漢三才圖會八十五果〕杏(音荇)　甜梅　和名加良毛々、俗云阿夬須、杏何梗切音衡、然今呼如姜音、〇中略

按杏山林及家園皆有之、信州最多、而出杏仁販他邦、凡桃仁扁長有皺、梅仁圓而尖、杏仁大於梅仁而圓微皺、三物宜辨之、

〔古今要覽稿草木〕からもゝ、　あんず　杏

からもゝ、あんず、漢名杏は、花信風雨水二候に配し、梅と艶を共にす、杏は皇國固有の種にあらざれども、本草和名、和名本草、和名類聚抄等にからもゝとよみ、古今集物名深養父の歌に、逢からもものはなをこそ悲しけれ、又新撰六帖にも、からもゝの歌五首あり、今はからもゝといはず、あんずと呼て、何國にも植て花をめで、實は果となし、仁も藥とし、欬嗽欬逆狗毒を解、其外功多し、花も婦人子なき者、二月丁亥の日、杏花と桃花を取陰乾して、戊子の日井華水にて服すといひ、又粉滓面䵟にも、杏花桃花を用(共本草綱目附法)といへり、和漢三才圖會には、信州最多而出杏仁といへども、今は伊豫國殊に多く出すといへり、又杏仁を取るに、其皮肉を劃たるを乾し果となし、煮ても食ふといへり、本草綱目集解、宗奭の說に、生杏可晒脯作乾果食之といへり、今西土より渡るは、仁大に

〔延喜式 内膳 三十九〕供奉雜菜 ○中略 李子二升 五六月 ○中略 中宮准レ此、其東宮雜菜、○中略 柹子李子各一升、

〔萬葉集 十九〕天平勝寶二年三月一日之暮、眺二矚春苑桃李花一作歌二首 ○中略

吾園之、李花可、庭爾落、波太禮能未、遺有可母、

〔夫木和歌抄 二十九 李〕六帖題　　民部卿爲家

きえがての雪と見るまで山がつのかきほのすもゝ花咲にけり

均亭李

〔百品考 下〕均亭李　和名トガリスモヽ

本草綱目、李時珍曰、一種均亭李、紫而肥大、味甘如レ蜜、　格致鏡原、均亭李、紫色極肥大、味甘如レ蜜、南方之李、此實爲レ最、

花戸誤テ巴旦杏ト稱ス、花葉常李ニ同シテ、實熟スルコト遲シ、形チ杏ニ似テ先尖リ、大サ小梨ノ如シ、畫ケル西王母ノ桃ニ似タリ、初ハ深綠色ニシテ光アリ、熟シテ紫色ナリ、上ニ粉ヲ塗タルガ如シ、紫蒲萄ノ熟シタル色ニ似タリ、味至テ甘ク漿多シ、果中ノ美味ナリ、核常李ニ同ジ、

嘉慶李

〔百品考 下〕嘉慶李　和名ウラベニスモヽ

汝南圃史、嘉慶李、外青内紅、核小味甘、

薩摩ヨリ種ヲ傳フ、誤テ漢種ノ郁李トスル者アリ、樹葉常李ニ似テ小ク、花ハ稍小シ、實ハ八月ニ熟ス、大サ常李ノ如ク圓シテ、溝道至テ深シ、故ニ麥李ニ充ル説アリ、然ドモ麥李ハ麥ト同熟スト云文ニ合ハズ、熟シテ外皮青ク内紅ニシテ胭脂ニテ染タルガ如シ、久シキヲ經レバ皮モ紅色ナリ、核常李ト同ジ、

杏

〔本草和名 十七 菓〕杏核　一名杏子、本條 棚子、味醶 出崔禹 一名黃吉、蓬萊杏、已上二名出兼名苑 和名加良毛々、

〔倭名類聚抄 十七 菓〕杏子　本草云、杏子、上音荇、和名加良毛々、

唐山ニテハ桃李ト熟シテ共ニ花ヲ賞ス、本邦ニテハ桃林多ケレドモ李ハ少シ、其木形桃ニ似タリ、葉モ亦相似テ小ク鋸歯細ナリ、多葉郁李(ニハザクラ)ノ葉ノ如ニシテ互生ス、花ハ桃ニ次テ開ク、形梅ノ花ニ似テ微シ小ク多ク簇リ、潔白愛スベシ、花謝シテ葉ヲ生ズ、其實梅ヨリ小ク、正圓ニシテ林檎ノ如シ、六月ニ熟ス、色赤シテ光アリ、集解ニ、駁ハ乃赤李ト云、及時珍ノ説ニ胭脂ト云者是ナリ、又青李アリ、俗名アヲスモヽ、實色ニ因テ名ク、時珍ノ説ノ青皮李是ナリ、又江州ニ熟シテ皮ノ色白キ者アリ、シロモヽト呼ブ、秘傳花鏡ノ白李是ナリ、又一種熟シテ黄色ナル者アリ、淡種ノ者ハ實形大ナリ、時珍ノ御黄李是ナリ、

〔草木六部耕種法 十九需實〕李(スモヽ)ハ核ヲ栽タルヲ、其儘成長セシモ宜シ、唯其實大ニ甘美ナル種子ヲ撰ベシ、此ヲ植法、核子ヲ九月ノ初メヨリ肥タル土中ニ埋置テ、翌春芽少シ出タルヲ、肥地ニ畦ヲ作リ、五寸ヅヽ間ヲ隔テ、一粒ヅヽ植エ、土七八分ヅヽ覆ヒ押付置キ、苗延タラバ時々泔水ヲ澆テ長ゼシメ、翌年正月中二間ヅヽ隔テ、一本ヅヽ移栽ベシ此物ハ、耕耙タル熟地ヲバ甚嫌フ者ナルガ故ニ、畑間カ野地等ニ直ニ栽ヲ良トス、但根邊ノ蘖ヲ転ベシ、四五年間ニ繁衍シテ實ヲ結ニ至ル、正月元日或十五日ニ、石瓦等縄ニテ括リ、木ノ股ニ掛置トキハ、夥シク實ノ結者ナリ、

〔庖厨備用倭名本草 六果五〕李〇中略　李實味苦酸氣微温毒ナシ、骨節ノ間ノ勞熱ヲサル、肝病ヨロシク食スベシ、曝シタルヲ食スレバ、痼熱ヲサリ、中ヲ調フ、多食スベカラズ、熱ヲ發ス、又外科ノ用多シ、

食禁　水ニ臨デ食スレバ痰瘧ヲ發ス、水ニ沈マザルハ毒アリ食スベカラズ、　合食禁　雀肉

蜜　右合食スレバ五藏ヲ損ス

〔延喜式 三十三大膳〕七月廿五日節料〇中略

李子〇参議以上四合、五位已上三合、

李

どは、實と云れど、實のことになりて、梨の實柹の實とは云ず、されば桃も其類とせば、實をもただ毛々と云べし、和名抄にも菓類に收て、桃子和名毛々と注し、其外も梨子栗子椎子などい出せり、然れども桃は花を賞る木なり、又こゝの様を思ふに、坂本なる毛々とのみいひては、其木のことゝ聞ゆれば、なほ美と訓べきにこそ、

〔日本書紀二十二推古〕二十四年正月、桃李實之、

〔慶長日件錄〕慶長十二年五月十九日、雲沃、御方御所へ參、早桃進上之、

〔半日閑話五〕安藝國に佐東新庄と云村有、佐東は北、新庄は南也、其境に桃の木有、佐東の方の枝になる實は苦く、新庄の枝になる實はあまし、

〔增訂豆州志稿七土產〕桃　增、田京、湯ヶ島ノ二村、及初島等ヨリ產出スルヲ最トス、延喜式貢物ニ桃仁アリ

〔新撰字鏡木〕李　良士反、使也、須毛々、

〔倭名類聚抄十七菓〕李子　兼名苑云、李、音里一名黃吉、和名須毛々

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕本草和名李核人條、引兼名苑、擧四名、不及黃吉、杏核條云、一名黃吉、蓬萊杏、已上二名出兼名苑、按齊民要術種梅杏條、引廣志曰、鄴中有赤杏、有黃杏、又引西京雜記曰、蓬萊杏、是仙人所食杏也、兼名苑蓋本之、黃吉卽黃杏之譌、輔仁所見兼名苑、旣誤作黃吉、然猶爲杏子一名、源君襲之、又誤爲李子一名也、說文、李、李果也、李時珍曰、李綠葉白花、樹能耐久、其種近百、○中略須毛々依輔仁、新撰字鏡同訓、新井氏曰、酸桃之義、

〔伊呂波字類抄須殖物附殖物具〕李スモヽノ子

〔古今和歌集十物名〕すもゝの花

いまいくか春しなければうぐひすもものはながめて思ふべら也、　貫之

〔重修本草綱目啓蒙二十五果一〕李　スモヽ和名抄　スムメ播州　一名木子汝南圃史　朱實事物異名　朱仲實

房陵子　韓終子共ニ同上　鼠精厨行集　玉華同上　李兒蒙訓字會　寠之群芳譜　青李一名青玉名物法言

青綺典籍便覽　青房同上　碧實事物異名　碧翠事物紺珠　花一名碧雪名物法言　仙李厨行集　九標同上

桃名所

其ノ實小シテ味苦ク、大ニ他ノ果木ニ異ナリ、

〔大和本草 果木 十〕桃○中略 上野下野ノ桃花、及李花甚ウルハシ、唐ニテ桃李花ヲ賞スル事ムベナリ、近年伏見ノ桃花盛ナル時、一處ニサキ連レル事、吉野ノ櫻ヨリ多シ、遠處ヨリ見ル尤ヨシ、凡桃久シケレバ花スクナク、實不レ好、秋ノ比切テ若立ヲ二本立テヨシ、花實共ニヨシ、梅杏李ノ枝ヲ桃ニ接ゲバ長ジヤスシ、

〔武江產物志 遊觀〕桃 桃園 四ツ谷、中野、中里、立春より七十日頃、 大師河原 立春より六十日餘り 隅田川堤 築比地 葛飾郡

〔一話一言 十六〕駒原桃花

三月十五日、河原西川の兩氏にいざなはれて、駒場御用やしき後藤氏をとふ、後藤氏の案内にて駒が原のうち、植木屋長七といへるもの、近比あらたに植し桃林をみる、門のさし入の地をはらひきよめて、しだれ桃を兩行にうゆ、左は六十八本、右は四十本ばかり、白桃櫻などもまじれり、しだれ桃は、深紅の色にして蘂白く、つくり花をみるごとし、相模しだれといふ種なりとぞ、庭のうちにも數十本つぎ穗してかこひ置り、斑入の五葉松あり、芝山あり、池あり、門のさし入より兩行の桃をみれば、さながらきぬがさをはりたてたらんがごとし、かへりに松の間をあゆみて、蕨、土筆、白頭翁花などつみかへれり、

きぬがさをはるかとばかりみちとせの桃の林やさしてゆくらん、この夕雨もよひしてくもりしが、亥の時比やどりにかへるまでふらざりしも幸なりき、

桃雜載

〔古事記 上〕爾伊邪那岐命○中略 到黃泉比良 此二字以音 坂之坂本時、取在其坂本桃子三箇、待擊者悉逃返也、○豫母都志許賣及八雷神 爾伊邪那岐命告桃子、汝如助吾、於葦原中國所有宇都志岐 此四字以音 青人草之落苦瀨而患惚時、可助告、賜名號意富加牟豆美命、自意至美以音

〔古事記傳 六〕桃子はモヽノミと訓べし、凡ての木草に、花をもて名るもあり、實をもて名るもあり、幹をもて名るもある中に、實を以名けたる梨栗柿な

〔和漢三才圖會八十六五果〕阿面桃 正字未詳、用巴旦杏一名阿女半止字、今人以此桃爲同名者、不知其據也、

按阿面桃樹高不過四五尺、矮勁葉亦厚、深緑色、花小單葉、粘枝繁重開、淡紅色、三月花落生葉、其實百千攢生、時摘去其繁者、一朶纔有四五顆、則甚大、冬熟肉軟而甘、能離核、其核眞紅色、種之易生、翌年高尺餘而開花、未見其大木、蓋此與西王母桃一類二種也、

〔草木六部耕種法十九菓實〕桃亦種類多ク、花ヲモ賞玩スル者ニテ、花ニハ白、緋、紅、淡紅、千葉、一葉數十品ノ雅名有リ、其事ハ上ノ需花編ノ條下ニ詳ナリ、此編ハ唯其實ヲ需ルノ業ナルヲ以テ、實ヲ肥大甘美ニスルノ作法ヲ精説スルノミ、絶テ花ニ拘ルコト無シ、世ニ西王母ト稱スル桃アリテ、花穠實大ニ、味亦美シ、此ヲ第一ノ上品トス、又鎧透ト呼者アリ、此レモ亦上品ナリ、今夫江戸近邊ニハ、越谷、松伏等諸邑夥シク桃ヲ作リ、頗百姓ヲ利潤ス、京大坂間ニテハ、伏見ノ佐桃、五月桃、大臼桃、此三種上品ナリ、凡桃ヲ作ルニハ實大ニ味美キ核ヲ多ク取集メテ種子ト爲ベシ、必ズシモ名ニ拘ルコト勿レ、 桃ハ實植ニ宜シク、其ノ苗ヲ生長セシムルトキハ、三四年ノ間ニ必花ヲ開キ實ノ生者ニテ、接木スルニモ及バズ、能ク繁榮ス、故ニ果樹中ニ於テ作法最無造作ナリ、然レドモ脂膠ノ甚多キ者ナルヲ以テ、成長シテ四五年ヲ經ルトキハ、必起線鉋ノ細者ヲ用テ、堅ニ其ノ皮ヲ傷ベシ、然セザルトキハ、其膠ニ搾ラレテ其木衰弱シ、或ハ枯死ルコト有リ、又桃ハ實結初テ八九年間ハ、漸々多ク實ヲ結ブモノナレドモ、其後ハ次第ニ實小ナリテ、品モ下リ、結コトモ減ズル者ナルガ故ニ、年々實ヲ栽テ絶ザルヤウニシ、老木ノ宜シカラザルハ追々伐リ去テ、林ヲ新ニスルヲ良トス、 植地ハ必シモ肥良ヲ撰ニ及バズ、砂地、壤土、墳土モ宜シ、粘糯ノ强キ土ニハ宜シカラズ、新墾ノ畑ニハ合ハズシテ、熟畠ハ惡地ニテモ能ク應合ス、此レヲ植ル法ハ、能ク熟シタル大桃ヲ肉ナガラ埋置トキハ、翌春芽ヲ出ス者ナリ、苗六七寸ニ延タルハ移植ルモ害ナシ、又其儘ニ成長セシムルモ宜シ、根邊ノ土ヲ高シテ堅ク踏付テ置ベシ、糞苴ヲ用ルコトヲ禁ズ、糞養ズルトキハ、

〔倭名類聚抄 十七菓〕李桃。　辨色立成云、李桃、(都波木毛々)

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕本草綱目引種樹書云、李接桃則爲李桃、廣群芳譜云、李桃形圓色青、肉不粘核、其皮光澤如李、一名光桃、按、豆波岐毛々、其實光澤似海石榴子、故名、今俗謂呼豆婆伊毛々、

〔書言字考節用集 六生植〕油桃(ツバキモヽ、ヅバイモヽ、本草、小於衆桃、光如塗油者、)李桃(同、順和名)椿桃(同、俗字)

〔塵袋 二〕李桃トカキテ、ツバイモヽトヨム、李ニツハイト云ヨミアル歟、スモヽハヽモナキモノナレバ李桃トカケリ、スモヽト云コト、重點ハヅラハシキ歟、而椿子ニモニタレバ、和語ツバイモヽト云ナルベシ、李ノ字ニツバイノヨミアルベカラザル歟、

〔倭名類聚抄 十七菓〕冬桃。　傳云桃賦云、亦有冬桃、冷侔氷霜、和神適意、恣口所嘗、(今按、冬桃、俗所謂霜桃是、)

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕按西京雜記云、霜桃霜下可食、則霜桃非國俗所名、今俗呼不由毛々、又寒毛々、○中略 藝文類聚初學記引並同、爾雅、旄、冬桃、郭注、子冬熟、說文、楙冬桃、則知爾雅作旄假借、桂海虞衡志云、冬桃、狀如棗、軟爛甘酸、冬月熟、李時珍曰、冬桃、一名西王母桃、一名仙人桃、卽昆侖桃、形如括蔞、表裏微赤、得霜始熟者卽是、郝懿行曰、今冬桃有十一月熟者、形如常桃、青若膽、

〔新撰字鏡 木〕榁。(佐。桃。)

〔倭名類聚抄 十七菓〕麥李　陶隱居本草云、麥李(佐毛々、漢語抄云、)麥秀時熟、故以名之、兼名苑注云、青房(今按、卽麥李也)五月熟李也、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕本草和名、麥李在李核人條、別無和名、新撰字鏡、榁訓佐桃、本居氏曰、古謂農事爲佐、五月農事起、故云佐月、愚按五月云佐都岐、麥李以五月熟、故名佐毛々、今俗呼佐毛々者、本。草。綱。目。所。云。五。月。早。桃。是。也。與此名同實異、○中略 新修本草李條載、無故以名之四字、本草和名同、爾雅痤椄慮李郭注、今之麥李、齊民要術引廣志云、赤李麥李、細小有溝道、○下略

〔書言字考節用集 六生植〕鼠李(楮李、山李、烏巢子、牛皂子、並同、)麥李(同、順和名、麥秀時熟故名、)

淺ヲ云、別物ナリ、源平桃ハ單葉千葉垂枝ノ品アリ、此二色ノ字、食物本草ニハ單葉ニ作ル、其實有ㇾ紅桃、緋桃、碧桃、緗桃、白桃、烏桃、金桃、銀桃、胭脂桃ㇾト、紅桃緋桃碧桃ハ、皆花ノ色ニシテ實ノ色ニ非ズ、コヽニ混入スルハ非ナリ、紅桃ハ常ノ桃ナリ、又櫻色ナルヲ秘傳花鏡ニ美人桃ト云、緋桃ハ花ノ色深赤ナルヲ云、和漢通名ナリ、單葉千葉ノ品アリ、一名蘇州桃、(遵生八牋)蘇桃、(秘傳花鏡)又絳桃アリ、緋桃ヨリハ色淺シ、碧桃ハ白花ノ者ヲ云、又實ノ色白キヲ碧桃ト云説アレドモ宜シカラズ、緗桃ハ淡黄色ナル者ヲ云、白桃ハ重出、烏桃ハ實ノ色黒キ者ヲ云、金桃ハ本邦ニアリト云ヘドモ詳ナラズ、銀桃ハ實初緑色熟シテ色白シ、花大ニシテ白色緑萼、コレヲシロモヽト云、一名リンゴモヽ、胭脂桃ハ熟シテ色赤キヲ云、有ㇾ綿桃、油桃、御桃、方桃、匾桃、偏核桃ㇾト、綿桃ハ詳ナラズ、油桃ハズワイモヽ、御桃以下和産詳ナラズ、五月早桃、サモヽ、一名五月モヽ、ナツモヽ、實早ク熟ス、十月冬桃ハ即崑崙桃ナリ、十月ニ熟シテ肉モ色赤キヲ云、冬モヽナリ、一名カンモヽ、偏核桃ハ實ノ形扁ナル者ヲ云、奇品ナリ、其餘皆奇品ニシテ、和産詳ナラズ、秘傳花鏡花史左編等ニ、桃ノ品類ヲ載スルコト多シ、ジダレモモアリ、單葉千葉紅白數品アリ、漢名詳ナラズ、典籍便覽ノ垂絲桃ニ充ル説ハ穩ナラズ、垂絲桃ハ花ノ時絲ノ出ルヲ云、枝ノ下垂スルニ非ズ、カラモモアリ一名江戸モヽ、アメンドウ、西王母、(同名アリ)小木ニシテ五寸或ハ一尺許ナルニモ花實アリ、大ナルハ三四尺ノ高サニ至ル、花多ク簇リ生ジ、千葉單葉紅色白色及ビ二色アリ、葉ノ形細長クシテ多ク繁ル、是壽星桃(汝南圃史)ナリ、一名道州桃、(同上)矮桃、(秘傳花鏡)人面桃、(八閩通志)キクモモアリ、高サ丈餘、花瓣狹細ニシテ、十二三並ビテ單葉菊花ノ如シ、初ハ淺紅色、後ハ白色、紅心ナリ、尋常ノ桃ヨリ後テ開ク、花戸ニテ源氏車ト呼ブ、廣東新語ニ菊桃ノ名アリ、一種菊モヽ、瓣潤クシテ尖リ、重葉ニシテ菊花ノ形ノ如ク、淺紅色ナリ、ホウキモモアリ、高サ一尺許ニシテ花實アリ、花小ク千葉ニシテ、紅白雜リテ、多葉郁李(ニハザクラ)ノ如シ、枝多シテ掃箒ノ形ノ如シ、圃ニ栽ユレバ丈餘ノ高サニ至ル、中山傳信錄ニ箒桃ノ名アレドモ註ナシ、

しだれ桃白赤あり、中輪也、　風車赤の豊重、中輪也、　せいおうぼう千ようす色、中輪也、　きとう千ようの大輪なり、

右は桃の名なり、此外にもあるべきなり、

〔谷響集二〕日本金桃

又曰、客○日本金桃何書所載、答、梁任昉述異記云、磅礴山去扶桑五萬里、日所不及、其地甚寒、有桃樹千圍、萬年一實、一説日本國有金桃、其實重一斤、

〔重修本草綱目啓蒙二十一五果〕桃　モヽ和名抄　ミチヨグサ古歌　ミキフルグサ同上　一名仙木行厨集　仙卿尺牘雙魚　禰孫歹事物異名、蒙古ノ名、　花一名鎖恨客花鳥爭奇　紅雲事物紺珠　天采客同上　天采典籍便覽　靚晨粧名物法言　鎖恨花事物紺珠千葉ノ名　助嬌花名花譜同上　實一名蕡實行厨集　膽之名物法言　蟠實事物紺珠　千年桃同上　五木精同上　仁一名脱核嬰兒輟耕録、　脱核兒事物異名

桃ノ品類多シ、凡ソ多ハ早ク實ノリ早ク老ス、俗諺ニ桃栗三年柿八年ト云、汝南圃史ニ、頭白可種桃ト云、又桃三李四梅子十二ト云諺アリ、實生ヨリ二年ヲ經テ花實アリ、故ニ時珍早花早結實ト云、然レドモ木早ク老ス、故十年ハ保チ難シ、因テ五年ニ刃ヲ以皮ヲ切リ脂ヲ出ス時ハ、數年ヲ延ブト云リ、子生ヨリ三年ニシテ、花實アルハ尋常ノ桃ナリ、土州紀州ニハ一歳桃アリ、子生ノ年花ヲ開キ、翌年ヨリ實ヲ結ブ、其枝叢シ生テ喬木トナラズ、凡ソ桃ハ春花サキ、實秋熟ス、桃ノ色赤クシテ光リ、毛ナキ者ヲズワイモヽト云、山茶(ツバキ)實ノ形色ニ似タル故ニ名ク、宗奭ノ説ノ油桃ナリ、色赤カラザルヲ、アヲズワイ江州ト云、是レ光桃汝南圃史ナリ、一名李桃同上又ケモヽアリ、花大ニシテ色淺シ、實モ亦大ニシテ杏ノ如シ、外皮ニ毛茸アリ、是毛桃ナリ、熟スレバ核自ラ離ル、之ヲ離核ト云、離レザル者ハ粘核ト云、下品ナリ、時珍ノ説ニ、其花有紅紫白千葉二色之殊ト、紅ハ尋常ノ桃花ヲ云、紫ハ和產ナシ、白ハシロモヽ、千葉ハ重子多キヲ云、二色ハ花色紅白雜ルヲ云、俗ニ源平桃ト呼ブ、秘傳花鏡ニハ日月桃ト云、洛陽花木記ニハ、二色桃ト云、群芳譜ノ二色桃ハ、千葉ニシテ色ノ

て、草帯のごとし、花よくあつまりさく、見事、又もゝいろの八重もあり、是はさきわけよりわるし、

火桃　なるほどくれない、八重又緋桃とも書、

大坂桃　是を今世間にてあめんだうといふ葉ほそ長く、木しかみて花もゝいろ大りん、

源平桃　白赤さきわけ、八重ひとへあり、

白桃　白八重ひとへあり

紅桃（こうとう）　火桃より色うすし、八重ひとへ有、

しだれ桃　もゝいろ八重一重有、大りん、木やなぎのごとくしだるゝ、

ずばい　火桃の一重なり、色よし、

さきわけ　源平桃の事か

紅しだれ　しだれもゝの色少あかき物なり

長せいも　くわしくしらず

よろいたうし　花もゝいろ、ひとへくりん、桃すぐれて大きし、

李（すもも）　花形白小りん、八重ひとへあり、

にがもゝ　もゝいろひとへ、八重、白きも有、いつまでもにがし、

さもゝ　からもゝのごとし

楊桃、　もゝのるいにはあらず、實むらさきいろ、

からもゝ　白小りんもゝちいさし、

夏もゝ　もゝいろひとへ大りん、花は春咲、もゝの色づく事はやし、

〔花壇綱目　下〕桃珍花異名の事

南京もゝ（壹重、葉は柳のごとし、）　一重もゝ（白赤あり、中輪大輪也、）　も上もゝ（桃の中にての大輪、赤白の咲分なり、）　さもゝ（うす色の壹重なり）

裂テ自ラ仁出ヅ、然レドモ氣味却テ惡シ、頤ハ用ル時ニ臨テ碎キ用レバ、其功力尤モ速ナリ、

〔倭名類聚抄十七菓具〕桃脂　神仙服餌方云、桃脂一名桃膠、(和名毛々乃夜爾)

〔箋注倭名類聚抄九果蓏具〕神仙服餌方無傳本、本草和名桃核條云、桃膠一名桃脂、出神仙服餌方、此所引卽是、

〔和漢三才圖會八十六五果〕桃(音陶)〇中略

桃肉(辛酸甘熱微毒)　多食令人膨脹及生癰癤、有損無益、服白朮蒼朮人忌食之、

桃仁(苦甘平)　味厚沈而陰、陰中之陽、手足厥陰血分藥也、其功有四、治熱入血室也、一泄腹中滯血也、二除皮膚血熱燥痒也、三行皮膚凝聚之血也、四故通月水、通潤大便、消心下堅硬、(香附子爲之使)

〔倭訓栞前編三十三毛〕もゝ〇中略　近世種類多し、〇中略　さねはなれを解核といへり、毛桃漢名同じ、萬葉集にも見ゆ、にがもゝともいふ、緋桃も漢名なり、冬桃あり、花は單へ也、博玄が冬桃賦あり、酉陽雜俎に西王母桃と名く、我方にて西王母と呼ものは壽星桃也、一花兩實の者をめをとももといふ、群芳譜に鴛鴦桃といへり、紅白相交るを源平桃といふ、旗の色によれり、群芳譜に日月桃といふ、玄だり桃あり、八重一重あり、藻鹽艸に夏桃あり、一歲桃あり實を殖て尙年に花咲り、西王母に似たり、はゝき桃と稱するは地膚のごとし、菊咲と稱するは花菊のごとし、

〔地錦抄三〕桃のるひ(木春中)

西王母　もゝいろ、八重、大りん、木一尺ほどになれば、花さく事おびたゞし、花は一所に二ッづゝなる物なり、花落ルまで葉出ずして、落花後葉出、六七月時分、葉のさきに又花さく事あり、

一歲桃(いっさいもゝ)　花形せいわうぼ似て、たねを植て其年の實生に、花咲ゆへ、一才もゝといふとぞ、

あめんだう　葉ほそく長く、やなぎのごとく、今は中絕してなし、

帚桃　春末花白と、もゝいろさきわけにて、なかほどにりん、八重なり、木立(だち)本よりほそく、多ク出

〔倭訓栞 前編 三十三 毛〕もゝ〇中略 桃は燃實の義なるべし、緋をもゝいろと云は、花に据たり、後拾遺集に、みちよへてなりける物をなどてかはもゝとしもはた名づけ初けん、三千歳の故事は西王母より起る、八重桃、毛桃、姫桃などよめり、〇中略 倭名抄陸奥の郡名に桃生をもむのふとよめり、さればヌもむの轉にや、實に細毛あり、採て去べし、以黍雪桃の意にやともいへり、〇中略 後撰に物いはばとはまし物を桃の花とよめるは、桃李不言下自成蹊といへる故事によめり、三月三日に桃花を用うるは本草に据也、須磨兵庫邊には家ごとの軒に柳と桃を交へ插り、桃の鬼を避る事は、神代紀に見えて本草にも、桃符桃橛を表出せり、

〔萬葉集 七 譬喩歌〕寄木

向峯爾、立有桃樹、成哉等、人曾耳言爲、汝情勤、

〔拾遺和歌集 七 物名〕もゝ　すけみ

心ざしふかき時にはそこのもゝかつきいでぬるものにぞありける

〔鹽尻 五十四〕一孔子家語に、果屬有六、而桃爲下、祭祀に不用といへり、不審、漢唐には桃を五果の一ッにして、ことに目出度ものとす、いかにして祭祀に用ひざる哉、夫桃は鬼を避るもの故、鬼神に薦めざるか、書して以て識者をまつ、

〔倭名類聚抄 十七 菓具〕桃奴　本草云、桃人一名桃奴、和名毛々乃佐禰

〔箋注倭名類聚抄 九 果蓏具〕原書下品桃核條、有桃梟云、一名桃奴、按桃梟是實著樹不落實中者、今俗謂木守、卽是、本草和名並擧桃核桃梟一名桃奴、源君誤認以桃奴爲桃人一名、非也、

〔採藥錄 五〕桃仁

種類尤多シ、一種野桃ト云者、俗ニ苦桃ト云、能ク熟タル時採リ收メ、地中ニ埋メ、肉ヲ腐リ盡シテ取出シ、洗淨シ、打碎キ仁ヲトリ、日乾スベシ、又土中ニ埋メ置キ、春ニ至テ掘出シ、日乾スレバ自ヲ

をきはめていひおとされたるを、門人橘常樹といへるが、ひとりごとのやうにいへるやう、翁の文詞、大よそ人の趣にさまかはりて、めづらしう思ひめぐらされたるはさることながら、梅の文をかゝむとて、梅をおとしめ難ぜられたるは、梅のため面ふせぞかし、たとひさる事にもせよ、其ものをむねとして、文かき歌よまんには、わがともがらのうひまなびの身にのりとし、まねばん事いかゞあらんといへり、げに常樹がことばもことわり、さる事とおぼゆかし、

〔南島志 下物産〕果則龍茘、○中略 石榴橘柿、但無梅杏桃李之類、近時有梅移自此間者、唯著花而不結子、

〔隨意錄 五〕梅賞花者、二漢以上未之有見焉、經傳言梅皆稱實耳、其賞花之詩、無先於范曄何遜、又賞花之事、無先於趙師雄、然則其賞花、蓋六朝而來、與桃李棠棣皆見賞乎風雅、而梅花獨不取乎古者何也、

〔明月記〕建仁二年三月十五日、近日櫻梅花之盛也、今年花甚遲、梅及二月晦開、遲梅近日猶盛也、

〔古今著聞集 十九草木〕ある貴所より仰をうけ給て、梅をあまたうへける折ふし、隆祐朝臣白河の花すでにちり侍也、たゞ今見にまかり侍にといざなひければ、けふかゝる事にかゝりて、えなんともなふまじきよし申ければ、をしかへしよみつかはしける、

うつしうゝる花は千とせの物なればちる木のもとをいそげとぞ思ふ、返し聞侍しを、わすれ侍にけり、

桃名稱

〔本草和名 十七菓〕桃核、桃梟（仁諝音古堯反）一名桃奴、（實著樹不落、實中者、）桃蠹（食桃樹虫也）、山龍桃（出陶景注）一名緗核、一名勾鼻、一名金城、一名綺葉、（已上四名出兼名苑）一名金桃（出漢武內傳）一名僻側膠、（桃膠也）一名木核蓏（花也、已上出墨子五行記）桃膠一名桃脂、一名桃膏、一名桃魄、一名桃靈、一名桃精、一名桃父母、（已上出神仙服餌方）和名毛々、

〔倭名類聚抄 十七菓〕桃子　漢武內傳云、西王母桃、三千年一生實、（西王母者仙人名也、桃音陶、和名毛々、楊氏漢語抄云、錦桃、）

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕漢武內傳一卷、舊題漢班固撰、原書西王母桃、作母曰此桃、說文、桃桃果也、

〔書言字考節用集 六生植〕桃（モヽ、一名仙菓花、又有紅、白、源平等之稱、）桃仁（モヽノサネ、又云桃奴）

梅雜載

津城、距梅溪殆二日程、久願游而未能也、庚寅二月十八日、與宮崎子達子、淵子、山下直介、如伊州、遂往游焉、上野人服部文稼、深井士發等爲導、美濃梁公圖、及其妻張氏、遠江福田半香亦來會、未下出城門、行一里餘、爲白樫、山谷間已多梅花、漸入佳境、又半里弱、爲石打、又行未一里、尾山在目、爲之躍然、至則遍地皆花、余初恐違花期、見之心降入憩三學院、約宿而出往觀一目千本、梅溪之賞始於是矣、

記二

一目千本、尾山八谷之一也、花最饒、故有此名、蓋比芳野櫻谷云、余與同人出院、下前崖、覺山水與梅花皆已佳絶、任意而行、至一大谷、文稼識而言之、徑詰曲而上、花夾之、步出其間、如穿白雲而行、數百步達巔、下顧彌望皜然與谿山相輝映、余嘗遊芳野、觀其一目千本、有此盛而無此勝、又嘗觀嵐山櫻花、有此勝而無此盛也、更求之西土、以梅花名者、抗之孤山、境蓋幽、花則寥々、蘇之鄧尉花頗多、地則熱鬧唯羅浮梅花村、對岐峯、臨寒溪、而花尤饒、庶幾可比我梅溪歟、日已欲昏、花隱淡煙中、千樹依約不見其所極、暗香蓊葧襲人、聞溪聲益近且大、至咫尺不辨色、而後去、（○中略）

文政庚寅仲春　　伊勢拙堂居士齋藤謙

〔武江產物志（遊觀）〕梅　本所梅屋敷（龜戸寺島、立春より三十四五日目に開く、）　臥龍梅（龜戸、同時、）　杉田の梅（神奈川、立春より廿五日頃開、）　蒲田梅（大森、立春より三十日位、）　龍戸天神境内　難波梅（淺草自性院）　箙の梅（はしば法源寺）　鶯宿梅（高田南藏院）　御殿址の梅（高田南藏院）　茅野の梅（增上寺山內）　榮の梅（牛込宗參寺）

〔泊洦筆記〕一ある時、縣居翁の家に文會ありて、梅の詞を人々にもつくらせ、翁もつくられたりけるに、翁の文きはめて梅をそしりて、梅はから國よりつたはれるものにして、いとふるくは歌にもよめることなく、寧樂朝に至りて、大伴卿家に人々をつどへて、梅の花の宴せられし三十餘首のうた、萬葉に見えたるがはじめなり枝さしこわ〳〵しく、冬のうちより、我はがほに咲き出でてかしこがりたるさま、櫻のわが皇國におひそめて、にほひやかなるには、いたく〳〵おとれりと、口

梅名所

りと、今は其地中より出し幹ひともと〳〵にわかれて數株となれり、其地中へはひし枝は皆朽たり、

〔佐渡志 四古蹟〕苺梅

加茂郡梅津村眞法院ニアリ、花ハ薄紅ニシテ、初メ延文頃枯テノチ年ヲ隔テ、又若木生出シヨリ、今ニイタルマデ、或ハ朽ルトイヘドモ、其根ヨリ必ズ蘖生アリ、尋常ニ替リ、若木トイヘドモ苺深ク、其苺ノ中ニ花籠レル故ニ、名ヲ苺梅トイヘリ、昔ハ梅昌寺トイヘル禪院此梅ヲ守リシガ、文祿ノ水ノ災ニ寺流レケレバ、後マタ此患アラムコトヲ恐レテ梅ヲ捨置テ、同ジ村ノ内隔レル方ニ移リヌ、年經テノチ、心アル僧一寺ヲ建テ、眞法院ト名ヅク、永ク此木ヲ守ルトイヘリ、

〔松屋筆記 百十五〕梅の大木

日向國高岡の香積寺に月知梅とて、八町四方に枝さしひろごりたる梅樹あり、世に珍しき大樹なるよし、佐藤平三郎かたりき、

〔月瀨記勝 乾〕梅谿遊記一

何地無梅、何鄕無山水、唯和州梅溪、花挾山水而奇、山水得花而麗、爲天下絶勝、然地在州之東陬、頗幽僻、舊罕造觀者、名不甚顯、顯自我伊人始云、溪傍種梅爲業者凡十村、曰石打、曰尾山、曰長引、曰桃野、曰月瀨、曰嵩、曰獺瀨、曰廣瀨、屬和州、曰白樫、白治田、屬伊州、在我上野城南三里許、〈當今里法〉我藩封疆除全伊半勢外、又有城和之田五萬石、環梅溪而處、而種梅之村多屬他封、獨和之廣瀨嵩村、伊之白樫治田、爲我治下而已、然按舊志、月瀨諸村多屬伊、伊人道戰國之際、豪強相奪、此地始屬和、今審其地勢、近上野城、山脈相通、理固應然、故和人之來常少、而四五十年來、伊人每常往觀焉、溪之勝於是乎顯矣、十村之梅不知幾萬株、然不盡臨谿、臨谿者最爲清絶、谿發源於和之宇陀、歷伊之名張、而到於此、廣殆百步、尾山在其北岸、嵩、月瀨、桃野、在其南岸、危峯層巖、簇々錯立其間、梅爲之經、而松爲之緯、水竹點綴之、余往

世俗にいひつたへたる、梅はとぶ櫻はかるゝよの中に何とて松はつれなかるらんといふ歌、源平盛衰記には、菅原大臣、東風ふかばといふ御歌をよみ給ひしかば、紅梅つくしへ飛行ければ、同じ御所にならびて有ける櫻の、御言の葉にかゝらざることを恨みて、一夜が中に枯にけるを、源順が歌に、梅はとび櫻はかれぬ菅原や深くぞ賴む神のちかひを、とよみけるよし云るしたり、此歌をつくりかへたるにやあらむ、されど此順がといふも、本末かけあはず、いと〳〵つたなき歌也、

〔筱埃隨筆五〕難。波。梅。

難波の梅といふも、一木とす梅からず、岸の姫松磯訓松などいふが如し、百濟王仁、梅によそへて、仁德帝を諷諫し奉りし和歌より名譽たり、さるに弘安禮節に曰、難波の別當、源判官殿へ花の制札申請るに、辨慶に仰付らる、其札に、江南梅花折一枝者可處嚴科者也と認ければ、義經御覽じ、花を折もの心なくては折らじ、餘りに强き文言なりとて、江南梅花折一枝可切一指也と直されしと云々、此制札今は須磨寺に有て、若木の櫻の制札とす、心得ず也

此花江南所無也、於一枝折盜之輩は、任天永紅葉之例伐一枝者可剪一指者也、

壽永二年二月

〔古今要覽稿草木〕臥。龍。梅。

臥龍梅は龜井戸梅やしきに植る所、古木にして世のしる所なり、まゝその種を植るものあり、正月末より開く、花は單瓣淸白中輪にして、上花也、蕚黃綠にて紅色を帶たり、その香馥郁として數步にかほれり、又一種淡江のものあり、花形白色のものと異ならず、されど淸白の方を眞の臥龍とすべしと春田久啓勝園梅譜韵いへり、淡紅は卽白花より變せしものなるべし、諸書に淡紅の說見えず、その木の形枝の末、地中に入て幹となり、枝と成てはひわたる故、臥龍梅と黃門光國卿名付給へ

〔秋里隨筆 下〕宰府奇梅

抑宰府天滿神とあがめ奉るは、菅原道眞卿の靈をまつる事は、衆人よくしる所にして、利生あらたにまし〳〵けれぱ、近國はさらなり、遠つくにより歩をはこびけること、年々歳々とこしなへなり、然に明和の頃、東社屋根葺更(かへ)のさたにおよびけるが、神木の楳樹繁茂して、二三枝本社の破風に垂けり、よつて枝をおろさずしては、葺かゆる事かたかるべしと評定し、其朝社人枝を伐らすべしと出來りけるに、不思議なるかな、かの破風にたれたる枝悉くふりかはりて葺更のさはりを除けるとなん、是まさに菅神愛樹を惜給ふ所ならむと、諸人奇異のおもひをなしけるとかや、又當社より梅守と號(なづけ)白き絹をもてかの梅を封じ、朱をもて表に天滿神の文字をしるし出す事なり、さればそのとし〳〵此守を受る諸人の數に應じ、實をむすぶとかや、これらも神の示し玉ふ所ならずや、

〔謠曲〕老松

ワキ 聞及びたるとび梅。。。とは何れの木を申候ぞ、ツレ 荒事も愚や我等は唯、紅梅殿と社あがめ申候へ、ワキ 實々紅梅殿共申べきぞや、忝くも御詠歌により、今神木と成給へば、あがめても猶あきたらず社候へ、

〔拾玉藻 一〕飛梅 中略

元來菅家ノ思ヒ人三人有リ、一人ヲバ櫻戸殿ト云、一人ヲバ紅梅殿ト云、一人ヲバ老松殿トゾ申シタリ、中略今安樂寺ニアル所ノ飛梅ト云ハ、紅梅殿ノ御墓ノシルシノ樹ナリト云、櫻戸御前ハ御臺所ニシテ、紅梅殿老松殿ハ妾ナリト云、紅梅殿ノ屋敷跡ハ、今ノ西洞院高辻ニテ、今菅大臣ト云神社ノ鄰リノ趾ナリト云フ、

〔玉勝間 九〕梅はとぶといふ歌

〔三代實錄 清和二十六〕貞觀十六年八月廿四日庚辰、大風雨折樹發屋、紫宸殿前櫻、東宮紅梅、侍從局大梨等樹木有名皆吹倒、

〔禁秘御抄 上〕草木

同(○南殿)

南殿梅(在瀧口南砌)

天德四年十二月十八日栽紅梅於中殿艮角、康保二年十二月廿五(○五一本作九)日御記曰、式部大輔直幹獻梅一株、即栽仁壽殿東北庭、以前日所栽小紅梅移栽清涼殿東北庭、此梅去月四日所栽仁壽殿木也、

仁壽殿艮角梅(自延喜御時有之、又天曆御時被栽直幹家梅也、○中略)

梅壺西白梅、東紅梅之由、在清少納言記、(○中略)

梅

綾綺殿前、應和二年藏人所雜色等栽紅梅於昭陽舍南庭、又栽東庭、左馬頭有年ガ家梅ナリ、

〔古今著聞集 十九草木〕菅家、太宰府におぼしめしたちける比、

こちふかばにほひをこせよ梅のはなあるじなしとて春なわすれそ、とよみをき給ひて、みやこをいでゝ、つくしにうつり給ひてのち、かの紅梅殿の梅の片えだ飛(○飛以下十六字原脫、今據一本補、)まゐりておひつきにけり、或時かの梅にむかひ給ひて、

ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことをとはまし、とながめさせ給ひたりければ、かの木、

先久於故宅　廢籬於久年　麋鹿於住所　無主又有花

かく申たりけるこそ、あさましともあはれともこゝろもことばもおよばね、

スベシ、其法ハ下ノ接木編ノ條下ニ詳ナリ、　實ヲ需テ接木スルニハ其實大ニシテ肉肥タルヲ撰ブニ利アリ、紅梅、臘梅、碧梅等ハ實小シ、宜シク白梅、靑梢、豐後等、其實大ニ肉肥タル木ノ枝ヲ接ベシ、然レドモ歳暮ヨリ早春ノ間ニ花ヲ賣ノ利、亦少カラザル事ナレバ、此等ノ勘辨モ有ベシ、故ニ野梅ト雖ドモ、花美ク實味苦カラザル者ハ、植テ人世ノ用ヲ利スベシ、又信濃梅アリ、其實小シテ龍葵子ノ如ク、鹽梅ニ製スレバ核齒ニ脆ク、嚙碎テ賞味スベシ、且又梅ハ地嫌スルコト少ク、異土擬土共ニ栽ベク、山中海邊ノ土地ト雖ドモ、培養ヲ懇ニスルトキハ、皆能ク繁榮ス、然レドモ寒糞ヲ用ヒザルトキハ、花發實結ト雖ドモ皆徒ニ早ク落チテ、用フベキノ時マデハ留著ザル者ナリ、故ニ寒中ニハ其根ヲ去ルコト一尺餘ヲ隔テ、地ニ穴ヲ掘リ、人糞或活物肉、干鰯汁等ノ肥養ヲ澆ニ用テ、上ニ土ヲ覆ヒ置クベシ、

〔庖厨備用倭名本草六五果〕梅○中略　梅實味酸性平毒ナシ、生ニテ食スレバ渴ヲトヾム多食スレバ齒ヲ損シ筋ヲ破リ、脾胃ムシバミ膈上ノ痰熱ヲ發ス、

合食禁　黄精ヲ服スル人ハ膈ヲ食スベカラズ、梅ヲ食シテ齒イタム人ハクルミヲカミテヨシ、

〔和漢三才圖會八十六五果〕梅音枚　楳古　和名宇女今云牟女　烏梅布須倍牟女　白梅牟女保之○中略

按烏梅出於備後三原者良、山城之產次之、白梅俗云梅脯也、豐後之產肥大肉厚味美、用其肉卷擦疽治、燒末入咽喉及牙齒藥、又用生梅百箇　黒沙糖半斤煮爲膏、治人息切及馬喘

〔大和本草十二花木〕梅○中略　梅子梅雨ノ時熟ス、白梅ヲ製スル法、熟梅一升鹽三合入、ヲシヲカケ、十日バカリ置テ數日日ニ干シ、カハキタル時、紫蘇ノ葉ニ包ミ壷ニ入ヲクベシ、干スゴシタルハ味アシヽ、本草ニ白梅ニ青梅ヲ用ユ、今皆黄梅ヲ用ユ、凡白梅ノ能多シ、人家不可闕之物也、梅醬ニ砂糖ヲ加ヘ製ス、酒毒ヲ解シ止渴、烏梅能收斂スレドモ、脾胃生發ノ氣ヲ妨グ、不可多用、藥性解曰、風寒初起瘧痢未久者、不可驟以此收歛也、

る平面の小石なき所にうすき藁筵を敷、夫に入、一ならびに重ならぬやうして干べし、此干筵厚きは梅に色付ず、薄筵は地氣を通ず故歟、色ほんのりと赤みさして艶よし、能天氣ならば二日程にて宜しけれども、日勢ぬるきの時は三四日も干べし、扨其干揚たるを、すぐに樽に詰、四方に細繩をかけ、諸方へ送るべし、　又小田原名物の紫蘇卷梅は、右の如く青漬にしたるを、紫蘇にて卷也、扨紫蘇の仕立やうは、丸葉の兩面を蒔育べし、縮面は悪し、七月盆後頃、能成長したるゑそをこきあげ、葉をむしりて重ね、鹽押にして、十日計置、葉の和らかなる頃、右青鹽漬の梅の水をゑたみ捨、紫蘇の葉一枚づゝを卷て、先ぐりに、壺か、桶に詰べし、然して一ヶ月程置ば、青漬の梅十分紫蘇汁に漬たる如く見事に染る也、小田原漬は決して紫蘇汁につくる事なし、是名物也、　爰に江戸本庄龜井戸に梅屋敷とて有、此所の梅は地をはひて龍の形ちあれば、臥龍梅とて一種の名木也、寛政文化の頃東都に誹諧を樂む一老人あり、隅田川の邊りに地面を求め草庵をむすび、其四方に梅の木の一二尺廻りにもあまれるを、三百六十本調へ植置けるに、新梅屋敷と稱し、春は男女群集せり、其老人（予〇大藏永常）に語りて曰、吾風流に梅を植しにあらず、壹本の木に梅の生る事銀四匁ならしにはあるべし、吾が一日の暮し方銀四匁にて足り、さるに依て一年の日數に植たりとなん、梅も能作れば壹本にて錢貳貫文位取上るもの也、依て梅を植、右記す如く梅干として都會に出しひさぐべし、又我住る屋敷内に無用の樹を植んより、五六本づゝにても植置なば、五六人暮しの鹽代は取もの也、

〔草木六部耕種法（十九需實）〕梅ハ花ヲ賞玩スルコト極ナ篤シ、其事需花編ニ既ニ詳セリ、實ヲ需テ此物ヲ作ニハ、接木スルヲ良トス、核栽ヲ成長セシメタルハ、實結コトノ遲ノミナラズ、其實肉ノ肥大ナラザルコト多シ、宜ク先其核ヲ栽テ苗ヲ爲立テ、苗一尺以上ニ及ビタルヲ、植地ニ移シ植エ、培養シテ早ク成長セシメ、其幹笛竹（フエタケ）ノ太ニ至リ、乃チ伐テ砧木ト爲シ、極良ナル梅ヲ撰ビ、其ノ梢ヲ接木

梅栽培
梅利用

類總て春を待ずして開くもの皆早梅也、されど梅譜に重陽日親折之といふ說あれば、是八朔梅の類にも有べし、

〔古今要覽稿草木〕八朔梅

八朔梅は八月朔日ごろよりさきそめて、冬至にいたり多くひらく、故にしか名付しなり、西國にては寒紅梅といふ大和本草といへり、何人のいつ頃よりいひ出し名にや、そのはじめをしらず、花房正矩園中百種梅の中に、古巣といへるは、八月頃よりさき、八重なりといへば、今いふ處の八朔梅ならんに、その名をあげざれば、當時いまだ知人まれなりしにや、和漢三才圖會にものせず、松岡玄達は八月より二月にいたる一名からくれなゐといふといひ、梅品春田久啓は八朔ころより一二輪さきそめて初春にいたると昭勝圖梅譜いへり、また一種八九月頃と初春と二度さく花に八朔といへるあり、

〔廣益國產考八〕梅を植て農家之益とする事

諸國に梅を植置、詠とするは、實をとるにあらず、梅の艶しきを賞翫するのみなり、又實を賞し梅干とするは、珍花を撰ばず、實大粒にして肉厚く、核ちひさきを植る事也、いつの頃よりか、大坂近邊に治左衞門と云梅は、花薄紅の八重にして艶はしく、紅梅の八幡といへるもの、開口に同じくいと見事也、大坂に便宜よき所は、註文して取寄植給ふべし、池田郡の部といへるは、植木を作りて諸國にひさぐを業とする一村也、扨此梅は梅干として出さゞれば益にはなるべからず、浪花にては是を何千石といへる程、干して小き樽に詰、江戸へ送る事夥し、近頃遠州相良にて大坂の通に小樽詰にして送るに、一廉益を得るよし、　扨此梅干に製し樣あり、梅の熟し過たるは潰れて費となれば、少し赤味さして堅き時とりて、酒の古樽に梅壹斗に鹽三升のわりに漬、おもしをしつかり置、六月土用中におもしをとり、水をしたみ干べし、干樣は、ほし場に砂ばこりの來らざ

〔世事百談〕梅に鶯

梅に鶯をよめること、和歌には常のことなり、鶯宿梅の故事、拾遺和歌集に見えたるより、猶さらなべて世人も鶯といへば、梅はかならずあるべきものとしもおもへり、いとふるくも、萬葉集にも、鶯には多く梅をよみ合せたり、詩にも葛野王の春日翫鶯五言に、素梅開素靨、嬌鶯弄嬌聲といふ句あり、唐土にはいはぬこと、のみおもへるに、王維の早春行の詩に、紫梅發初遍、黄鳥歌猶澀といへるとぞ鶯梅を對する據ともすべし、

〔書言字考節用集〕（六生植）未開紅（ミカイコウ）（紅梅一名）

〔佐渡志〕（四古蹟）未開紅

コノ梅雜太郡竹田村大運寺ニアリ、昔ハ薄紅ニテ開ケテ後ハ尋常ノ梅ナリ、天正ノ頃、高阪彈正ガ姪、春日總次郎トイフモノ、此國ニ遁レ來テ、大運寺ノ羅漢堂ニ寓居シテ、此所ニテナクナリケルガ、鉢植ヲ携來テコヽニ植シトイフナリ、總次郎ハ癰瘂ヲ煩ヒテ世ヲ早クセシトイヘリ、

〔書言字考節用集〕（六生植）豐後梅（ブンゴウメ）（豐後大分郡用内所産、支那所謂鶴頂梅是矣、）　消梅（コヽメ）（本朝俗、鶴梅、鶯豐後梅、消梅、鶯信濃梅、凡諸品知此者居多、蓋斥州縣別大小所以暗令知美惡也、）　梜（同）　燕梅（同）（西京雜記）

〔和漢三才圖會〕（八十六五果）梅（中略）

消梅、實圓鬆脆、多液無滓、惟可生噉、不入煎造、（中略）杏梅（今云豐後梅乎）花色淡紅、實扁而斑、味全似杏、（中略）

豐後梅（大花白帶淡紅色八重、其子最大、此所謂杏梅、鶴頂梅之類乎、）

〔書言字考節用集〕（六生植）寒梅（カンバイ）（又云早梅）

〔古今要覽稿〕（草木）はやざき（大雪梅）

はやざき（怡顏齋梅品）寒梅（地錦抄）今はやざき寒梅と呼花なし、大雪梅と稱せり、（中略）怡顏齋が梅品に早梅とすれ共、是は西土の梅譜に本づきての說也、皇國にて早梅と稱するは、八朔梅、冬至梅、寒梅の

四月十六日重遊此園看芍藥花、岡田氏云、丁梅は、享保六年紀州丁ヨボロ村より御取よせありし梅なる故に、丁ヨボロ梅といひしを訛りて、養老梅と云しとなん、紀伊國海士郡紀州御領丁ヨボロ村、今はヤウラウ村と云、

簸の梅白く重れあつし　鶯宿梅白八重小りん、匂ひふかし、　加賀梅白く一重にして花形梅鉢の紋の如し、實もよし、　せんぎ梅白一重、加賀梅實に似てなし、　蘇芳紅八重　座論紅一重　更紗白に紅文あり

〔書言字考節用集六生植〕紅梅コウバイ

〔拾遺和歌集七物名〕紅梅　よみ人しらず

うぐひすのすつくるえだを折りつればこうばいかでかうまむとすらん

〔玉勝間十四〕紅梅の假字

紅梅の假字、字音をしるす時には、こうばいと書べけれど、つねにはこをばいと書べし、拾遺集物名の歌に、これを子をばいかでか生むとすらむとよめるを、此時かりに宇ウを乎ヲに通はしてよめるものと心得るはたがへり、こはもとより、常にもこをばいといひもし書もせし也、古今集物名に、芭蕉を心ばせをばとよめると同じ例也、又和名抄に、柀子阿アヲ乎ヲ之シと見え、他の書にもあをといへる、此たぐひみな宇ウの韻を乎ヲとなほして、やがて訓にしたるにて、燈心の美ミ、錢ゼニ、蘭ラニなどの爾の類なり、

〔書言字考節用集六生植〕鶯宿梅アウシユクバイ紅梅一名、村上帝朝、因二西京紀貫之女詠歌一故事、見二世繼大鏡一、

〔拾遺和歌集九雜〕内より、人の家に侍ける紅梅をほらせ給けるに、うぐひすのすくひて侍ければ、家のあるじの女、〇紀貫之女まづかくそうせさせ侍ける、

勅なればいともかしこしうぐひすの宿はととはゞいかゞこたへん

かくそうせさせければ、ほらずなりにけり、

トモ云、誤ナリ、桃洞遺筆ニ廣東新語ヲ引テ、五行配當ノ說ニ由テ、水先梅ト書モ鑿說ナリ、又阿州板野郡德命村千光寺ノ梅ハ、天下第一ノ名木ナリ故ニ此寺ヲ梅ノ坊ト云、其枝地ニ著テ根ヲ下シ横行ス、廣サ二間許リ、長サ十五間許リ、上ニ細條ヲ束子、架ヲ結テ堤ノ如シ、花ヲ綴ルコト甚多ク尤觀美ナリ、白花千瓣、其香氣殊ニ勝レタリ、俗ニ八重梅ト呼ブ、實モ亦大ナリ、此樹數百年ノ古木ナリ、即范成大ガ臥譜ニ、古梅會稽特多、去城二十里有臥梅、相傳唐時物也、謂梅龍偃蹇十餘丈ト云是ナリ、大和本草ニ、臥梅ハ別種ニ非ズト云ハ誤ナリ、邦俗白花ニシテ香氣勝レタルヲ好文木ト稱ス、唐山ニテハ唯梅ヲ好文木ト稱ス、晉ノ起居注ニ見ヘタリ、曰晉武好文則梅開、廢學則梅不開、故梅云好文木也、又墨梅ト呼モノアリ、花戸ニ誤テ黑梅ト云、花深紫色ニシテ微紅ヲ帶ブ、八重ノ大輪ナリ、萼黑色ヲ帶ブ、滿開セズシテ落易シ、又王敬美梅疏云、鶴頂梅種圃中取果、不足登几案也、熟而可食、曰鶴頂梅、時梅鶴頂最佳、以其紅大如鶴頂、コレ輿花府志ニ實大者爲鶯梅ト即同物ナリ、和産ハ豐後肥後ヨリ出ヅ、故ニ豐後梅又肥後梅トモ名ク、甚大ニシテ二寸餘ニ及ブ、然レドモ實ヲ結ブコト甚ダ希ニシテ熟セズ落易シ、又一種トキハバイト云アリ、枝赤褐色ニシテ軟ナリ、故ニ花戸ニテシダレ梅ニ作ル、葉粗クシテ深キ鋸齒アリテ、榔楡ノ葉ノ如シ、花ハ紅梅ト同ジ、香氣モ紅梅ニ異ナラズ、八重ニシテ淡紅色、又單葉ノ者アリ、コレ楡葉梅ナリ、畿輔通志云、楡葉梅、葉似楡、花開如紅梅、故名、嫩枝頗柔、可以編籬ト是ナリ、百品考ニ見ヘタリ、

〔一話一言十六〕白山梅○中略

白山のみその、梅のか心にしみわすれがたく、同月○二月十七日ふたゝびゆきてみる、老杜がかさねて何將軍の山林にあそびし心地す、今日は豚兒をもぐしたれば、案内のものにとひて梅の種類をわかち、矢立とりいでゝ書つく、芥川氏のかたは梅の種類多し、

丁梅（養老梅ともいふよし、案内のものゝいふ、うす紅、花も實もよし、もとは此種のみありしが、後に多くの種をうへしとぞ、）

梅ト云、梅譜ニ直脚梅ト云、又詩ノ題及句中ニ江梅ト云ハ江邊ノ梅ヲ云、花史左編ニ出ヅ、消梅ハコムメ、シナノムメ、樹葉ハ尋常ノ梅ニ異ナラズ、花ハ單ニシテ白ク、下ニ向フテ開ク、實ノ形正圓ニシテ小ク、金柑ノ如シ、二三十一枝ニ簇リ垂ル、梅雨中ニ早ク熟ス、核ヲ併テ食フ、綠蕚梅ハアヲジク、花戸ニハ誤リテ玉蕚梅ト呼ブ、ソノ花蕚綠色嫩枝モ綠色、尋常ノ梅ノ蕚枝共ニ赤色ナルニ異ナリ、花ノ色ハ白クシテ單梅千葉アリ、一名平樂香、（事物紺珠）重葉梅ハ、ザロンムメ、實ザロン、花ザロン、ノ二種アリ、重葉梅ハ實ザロンナリ、一花ノ蔕中ヨリ三四實ヲ生ズルヲ云、一名品字梅、（泉南雑志）三品梅、（莉園同春）大抵三實ノ者多シ、俗ニスヾナリト呼ブ、又一種ヤツムメ、一名ヤツブサムメト云アリ、越後八梅ト云地、親鸞上人ノ墓所ノ旁ニアリ、越後七不思議ノ一ツナリ、一蔕ノ内八實ヲ結ブ、長ズルニ及テ落ル者多ク、熟スル者只二三實ナリ、其未熟ノ時觀ツベキ者ナリ、京師本願寺ニモ此樹アリ、花ハ單瓣白色ナリ、紅梅ハ通名ナリ、蕾ノ時モ開キタル時モ同ク紅色ナルヲ云、今世ニ紅梅ト云ハ、蕾ノ時赤クシテ開ケバ變ジテ色淺シ、是未開紅（俗名）ナリ、花家ニテハ誓願寺ムメト云、紅梅ノ品類數多シ、杏梅ハアンズムメ、一名モチムメ、單葉ニシテ色淺ク杏花ニ似タリ、凡ソ梅ハ味酸キ者ナレドモ、此梅ハ酸味ナク杏ニ似タリ、故ニ名ク、又杏ノ味酸者ヲ梅杏ト云、鴛鴦梅ハハナザロン、花一所ニ簇リ開ク者ヲ云、苦楝樓梅云云トハ黑梅ノコトナリ、花ニ黑ミアルヲ云、汝南圃史ニ、或云、接苦楝樹上則成墨梅、然詢之老圃、獨宜紅梅、餘俱不然ト云、烏梅ハフスベムメ、熏シテ乾スナリ、市ニ煤ヲ塗タル者アリ宜シカラズ、一名巣烟九助（諸菓）白梅ハムメボシ、紫蘇ノ葉或ハ牽牛花ヲ入、色ヲ赤クスルコトアリ、是ヲ紅梅（北戸録）ト云、梅子ニテ製スル食品多シ、汝南圃史ニ詳ナリ、〇中略

増、六瓣白花ノ者ヲ水仙梅、又六瓣梅トモ云、花ノ形尤大ニシテ、其香勝レタリ、花六瓣ナルヲ以テ水仙梅ト名ク、又其香氣水仙ニ似タリトシ、或ハ初白色ニシテ後淡紅ヲ帶ブ、故ニ醉仙梅ト名ク

梅アリ、花一處ニ多ク開ク、實モ同ジ、同處ニ多ク開キ、實ノリテ座ヲアラソフニ似タリ、花ハ小ニシテ八重ナリ、香ヨシ、梅譜ニ重葉梅結實多雙ト云是ナルベシ、八月梅、秋ミノル上州ニアリ、ジダレ梅、其枝如柳其花單アリ重葉アリ、

〔重修本草綱目啓蒙〕二十一五果梅　ムメ（萬葉集）　ウメ（和名鈔）　コノハナ（以下古歌ノ名）　ハナ　ニホヒグサ　カゼマチグサ　カザミグサ　カバヘグサ　ミドリノハナ　カトリグサ　ハツナグサ　ツゲグサ　イヒナシノハナ　花一名百花魁（故事白眉）　花魁（典籍便覽）　世外佳人　鶴膝枝　清友　清客（共同上）　官長（事物異名）　羅浮仙子（同上）　羅浮仙（名物法言）　索笑客（花鳥爭奇）　東閣（尺牘雙魚）　氷梅（花曆百詠）　梅伯華（事物紺珠）　氷姿　玉骨　大庾公　自知春　香雪（共同上）　氷肌（留靑新集）　實一名雪華（行厨集）　含酸（同上）　梅果（典籍便覽）　梅梅（通雅）　蠟果（事物紺珠）　含酸子（同上）　嘉實（書言故事）　止渴（同上）　乾蘋（名物法言）

古ヘ單ニハナト云ハ梅花ナリ、後世ハ櫻花ヲハナト云ト、八雲御抄ニ見ヘタリ、唐山ニテハ牡丹ヲ單ニ花ト云、梅ニ品類多シ、文長先生ノ梅品六十種ヲ載ス、後世新花年ゴトニ出テ、今ハ三百餘品ニ至ル、梅譜ハ百川學海ニアリ、コヽニ引クトコロハ其略ナリ、梅ハ正月ニ花ヲ開クヲ常トス、冬月花ヲ開クモノハ早ザキナリ、漢名早梅（梅譜）八朔梅、冬至梅モ、皆早梅ニシテ多ハ紅色ナリ、單葉ノ白梅モアリ、又實ノ早ク熟スルモ早梅ト云群芳譜ニ出ヅ略〇中凡ソ單瓣ノ梅ハ皆五出ナリ、又六瓣ナルモアリ、コレニ紅白二種アリ、紅ナルヲ花戸ニテ退場ノ梅ト云、形小ニシテ尖リ、瓣ゴトニ離レテ連ナラズ、故ニ名ク、又圓瓣ナルモノアリ、之ヲ西行ムメト云、皆六瓣梅ナリ、孝豐縣志ニ出、又軒端ノムメアリ、今京都誓願寺和泉式新墓上ニアルハ小川ムメニシテ、眞木ハ相國寺中林光院、及誓願寺方丈庭中ニアリ、千葉ニシテ小ク、心凹ニシテ外瓣紅ク、内ハ白ク紅點アリ、江梅ハノムメ原野ニ自ラ生ズル單葉ノムメナリ、白色ニシテ香氣アリ、花ニ大小アリ、汝南圃史ニ野

常陸座論（紅、壹重、中輪也、）　とび梅（赤の中輪なり）　未開紅（中輪なり）　ひばい（中輪なり）

匂ひ梅（白の八重、中輪、）

右は梅の名なり、此外にも色々あるべし

〔大和本草花木十二〕梅　萬葉集ニムメノ花、又ウメノハナトモ訓ズ、梅花ハ獨天下ノ花ニ先ダッテ開ク故、百花魁ト云、花兄トス、其香色形容亦百花ニスグレタリ、故花中第一トス、圃ニハ必先ヅ梅ヲウフベシ、近年ハ種類多シテ雖不可擧計、白梅紅梅單葉重葉、此四類ノ外ニ出ズ、范成大梅譜所載梅品多シ、日本ニモ其品數不少、白キ單葉ノ香アルヲ第一ノ好品トス、野ニアッテ未經栽接者江梅ト云、又名直脚梅、或謂之野梅、紅譜ニ云ヘリ、江梅尤香多シ、梅ヲ好文木ト云事、晉ノ起居注ニ見エタリ、日本ノ俗ニ好文木ト稱スルハ、白梅ノ香スグレタル一種アリ、古今倭漢梅ヲ題詠セシ詩歌アゲテカゾヘガタシ、淺香山ハ紅梅ノ單葉ナリ早梅ナリ、紅白梅ハ江戸桃ノ如ク、紅白一枝ノ内ニワカル、八朔紅梅ハ八朔ノ比ヨリ開ク、花小ニシテ八重ナリ、西土ニテコレヲ寒紅梅ト云、冬至ニ至テ多クヒラク、梅ノサキガケナリ、畿内ノ寒紅梅ハ西土ニテ淺香山ト云、九月ヨリヒラク八重ナリ、但九月ニ開クハ狂(アダ)花ナルベシ、臘月ニ開クヲ正時トス、故寒紅梅ト名付ク、凡他ノ紅梅ハ白梅ニヲクレテサク、此二種ハ白梅ニ先ダチヒラク、鶯梅ハ輿化志云、實大者爲鶯梅、日本ニテ豐後肥後ヨリ出、故ニ豐後梅トモ、肥後梅トモ云、コレ梅ノ尤大ナル也、消梅ハ梅ノ尤小ナル也、鶯梅ト大小相對ス、消梅ハ梅志及范至能梅譜ニ出タリ、其花皆下ニ向フ、甲斐信濃ヨリ出ヅ、故ニ信濃梅トモ甲州梅トモ云、未開紅ハ花未開時色紅ナリ、開テ後色淡シ、照水梅圖史ニノセタリ、日本ニモアリ、八重ノ梅花ナリ、香アリ、花皆下ニ向フ故ニ名ク、衆梅ヨリ花ヲソシ、又近比黃梅アリ異品ナリ、綠萼梅近年中華ヨリ來ル、梅譜曰、凡梅花跗蔕皆絳紫色、惟綠萼梅純綠、枝梗亦青、特爲清高、王世懋ガ花疏ニ爲梅之極品、花小ニシテ盡開カズ、花萼青ク香ヨシ枝青シ、座論ト俗名ヲ稱スル

梅種類

ひ、又たゝべと急ていふことゝもなりしなるべし、かくておもへば源氏君のかのたゝらめの花のごと云々と歌ひ給へる後に、またかの姫君のもとにおはしてかへるさに、二條院へ紫君のもとにおはして、例の姫君の鼻の色につけたるたはぶれごととして立いで給ふところの詞に、はしがくしのもとの紅梅いととくさく花にていろつきにけり、くれなゐのはなぞあやなくうとまる、梅の立枝はなつかしけれど、いでやとあひなくうちうめかれ給ふとみえたるも、さきにたたらめの花の色と歌ひたまひしに、この紅梅をみて歌よみし給へる趣の、ひゞきあひてぞきこゆるかし、〇下略

〔花壇綱目下〕梅珍花異名の事

一重の白梅 梅の内、にくの中輪、
八重の白梅 中輪大輪あり
咲分の紅白 八重、壹重、中輪大輪有、
とうじ梅 早咲の中輪なり
おうしゆく梅 中輪大輪あり
本りうし 八重うす色、中輪、
ゆすら梅 小輪なり
しだれ梅 中輪なり
軒端梅 中輪なり
讃岐紅梅 一重の中輪
松浦梅 紅、八重、中輪、
かうだひ寺 黄色、茶、如㆑針、

うす色 中輪なり
大梅 黄の大輪也
黄梅 壹重早咲也
寶座論 八重のうす白色、中輪、
やくら梅 中輪大輪あり
南京梅 黄の中輪、匂ひ高し、
難波梅 うす色の中輪大輪あり
難波紅 八重の中輪なり
越中梅 白の中輪なり
物ぐるひ 中輪なり
花香實 薄色、八重、の中輪也
ぬき白 中輪なり

一重の紅梅 梅の内、にくの中輪、
八重の紅梅 色のこひうす、中輪、大輪有、
早咲の紅白 八重、壹重、中輪有、
みかいかう 中輪大輪あり
まやかう梅 中輪大輪あり
ゑい山紅梅 中輪大輪あり
とらの尾 中輪なり
南禪寺 紅中輪なり
出雲紅梅 一重の中輪
加賀紅梅 八重の中輪
備中紅梅 八重の中輪なり
からむめ 大輪なり

淺黄梅 中輪なり
小梅 白の中輪也
花座論 八重のうす色、中輪、
天りう寺 八重の紅梅なり
はな紙 匂ひあり、實あり、中輪、
すわう梅 中輪なり
難波白 八重の中輪なり
豐後梅 白の一重、中輪なり、
大筑紫 大輪、實も大なり、
輪紫梅 白少うす色、葉のりん、茶あり、中輪、
楊貴妃 薄色小輪なり
桃梅 白一重、中輪也、實如㆑桃、

むめの花といへるを書誤れるなるべしとあるは、いみじきひがごとなり、新撰字鏡に、莘太々良女と見え、内膳式には多々良比賣花と見え、後の書どもには、たゝらべともあり、風俗歌花鳥に引給へるとして、注されたるたゝうめはたゝらめなるべしと説はれたる、まことに然ることなり、但シタとリとはいとよく似て、つれ書誤る字なれば、さかしらに改たらむと、おしはかりさだむべきにはあらざるべし、されど字鏡に太々良女、式に多々良比賣とみえ、後の書どもにたゝらべといへるもの、いかなるものとも注されず、おのれ其ものさねをしらざれば、さらに考ふるに、まづかのたゝらめの花の色のことうたひたまへるは、政事要略六十七に載たる衛門府風俗歌に、多々良女乃花乃如、加以禰利好牟夜滅紫乃色好牟夜と見えたる歌をうたひ給へる下こゝろは、かの常陸の君の鼻のあかきにそへ給へるにて、下文の命婦が詞に、さむき霜あさにかいねりこのめる色あひや見えつらむ、寒き朝、鼻の赤らむさまをふくみていへるなり、御つゝしり歌のいとをかしきといへるに相照へて、其こゝろばえみえきこえたれば、多々良女の花は紅色なること著し、○中略紫草の分量を三等に減じて、淺く染る法なれば、薄紅に似たる色なるべし、多々良女の花にならべて歌へるをおもへば、その花の色に似て淺きなるべし、さはいへど、其多々良女、いかなるものなるにかと、こゝろにかゝりつるに、此比源順朝臣歌集の古本の寫をみるに、此は富士谷成章が歌仙家集の板本の中に見えたり田の條里の形に、歌四十五首を廻らしよむべく書と、のへられつる中の歌に、をり〳〵にほふたゝべのうめなればをしめどかひな花のにほひや、とみえたり、○註略たゝべは、たゝらめの急りたるにて、紅梅のことなるべし、○註略そは内膳式にみえたる多々良比賣も同物にて、漬年料雜菜の條、漬春菜料の中に、多々良比賣花搗三斗料塩三斗と載られたるこれなるべし、さてその多々良比賣花とあるは、紅梅の花にて、搗とはそを搗とりて鹽漬にして奉る料なるべし、○中略さるをうちまかせて紅梅の一名のごとくに呼ことゝもなりて、たゝらめともい

爲家

我せこにまづ告やらん梅の花あかぬ匂ひをきてもみるがに

〔書言字考節用集 六生植〕好文木（カウブンボク）梅一名、晉武帝好レ文、四時隨レ之開レ花、廢レ學則不レ開、故名、見二起居註一、

〔臥雲日件錄〕寶德四年壬申二月六日、晚間、等阿來報、少納言來尋、未レ知レ誰、某迎レ之、則大外記蓋遷二少納言一也、又及二天神之事一、名レ梅曰二好文木一、有二本據一否、或曰、天神詩有レ之、又曰、白樂天來二日本一、與二住吉大明神一相逢、樂天作レ詩、有二白雲如レ帶繞二山腰一之句一、蓋俗說未レ見二所出一、

〔三養雜記 四〕好文木（かうぶんぼく）

梅を好文木といふことは軒端梅の謠曲にありて、人の知ことなれども、唐土の書にはたえて見えざることなり、臥雲日件錄にも見えたれば、ふるく故事とすることゝおもはれたり、さてその來所は、謠古抄に、好文木、晉起居注云、哀帝讀レ書、則四時隨レ之開レ華、故好文木と云なり、また東見記に、梅云二好文木一、故事在二晉起居注一、晉武好レ文則梅開、廢レ學則梅不レ開云々とあり、武帝哀帝いづれか是なりや、說郛などにも、起居注はくさ〴〵收めたれど、好文木の事は見えず、

〔源氏物語湖月抄 六末摘花〕花 政事要略衞門府風俗歌云、多々良女の花の如、加以禰利好牟夜、滅紫色好牟夜、たゞらめの花は、たゞむめの花といへることをあやまれるなるべし、宗祇云、うたひものには、たゞらめの花といふを、たゞ梅の花とかへて源はのたまへり、かひねりとは色紅也、末つむの鼻の色の赤きをいはんため也、

〔比古婆衣 三〕たゝらめの花

玉の小櫛に、件のたゝうめ花のとあるを論ひて、これはたゝらめの花のと有しを、此名きゝなれぬ故に、らをうの誤ならむと思ひて、さかしらに改めつるなるべし、たゝらめを梅とかへてうたふべきよしもなきうへに、たゝといふことも穩ならざるをや、注にたゝらめの花といふは、たゝ

梅　うめ　和名に、萬葉第五に家持の父大納言旅人卿太宰帥なりし時、家に三十二人集會して、梅の歌をよみ、追加の歌もあるに、三十首は烏梅とかけり、是やがて梅の呉音を轉じて假名に用たり、此時は只音にて、字に付て梅の義有に非ず、やなぎを楊奈疑と書るに同じ、其外は宇米、汙米、宇梅、有米、于梅などかけり、牟梅とかける歌一首あれども異本には宇梅とあれば、他に例するに然るべし、第八第十第十七より廿迄にもおほけれど、餘りなれば出さず、古今集物名に、うめを題にて、あなうめにつねなるべくも見えぬかなこひしかるべき香はにほひつゝ、順家集にも、西四條宮源中納言のもとにて、うもじを給はりてとて、梅津川このくれよりぞながれてのうれしきせゞは見えむみなそこ、かやうにむかしは皆うめとのみ書けるを、中頃より音便の無に近ければにやあらん、むめとのみ書て、今の世はうめとかく人なし、然ども昔をしたふ人は、かようはして書べき也、

〔南留別志〕〔二〕一梅をうめ、馬をうまといふ、皆音なり、うは發聲なり、日本紀の中に、梅をめのかな、馬をまのかなに用ひたるも、此いはれなり、

〔楓園隨筆〕〔下〕梅の假字

梅の假字、万葉集にてはまさしくうめなれど、古今集貫之主の自筆の本といふに、むめとあれば、古今集已後の假字には、むと書方よろしとて用る人あり、おのれいまだ其自筆の本といふものは見ざれども、古今集物名に、梅あなうめにつねなるべくも見えぬかなこひしかるべき香はにほひつゝとあり、これはあな憂といひかけたれば、貫之主もうの方を用られたりと見ゆ、これも高穎說也、

〔新撰六帖〕〔六〕むめ　家良

日數まつ春ををそしと白雪の下より匂ふ梅のはつ花

北有危岑、尖嵩直上、曰仙波嵩、其頂蒼翠鬱茂、常噭々清猿鳴、

〔豐前志企救郡三〕嵐山

嵐山は德力山を云ふ、此處の川を櫻川とも云ふ、蒲生川の川上なり、むかし細川幽齋こゝの景色の京の嵐山に似たればとて、其臣中村某に命じて、嵐山の櫻を根こじにこじて移し植ゑさせ給ひきとかや、細川幽齋の歌、

豐國の嵐の山の麓川岩こす波は櫻なりけり

梅名稱

〔倭名類聚抄果蓏十七〕梅　爾雅注云、梅莫杯反、和名宇女、似杏而酢者也、

〔箋注倭名類聚抄果蓏九〕下總本有和名二字、无女作宇女、廣本同、本草和名云、和名牟女、與舊合、按其讀當合口呼、合口呼則宇女无女、其音同也、或曰、皇國古無梅、故古事記、日本書紀皆無是物、後自西土致之、然則宇女是以梅字音爲名也、○中略釋木、梅枏、郭注今本作似杏實酢、按說文、梅枏也、詩秦風陳風毛傳同、秦風正義、孫炎曰、荊州曰梅、揚州曰枏、樊光曰、荊州曰梅、揚州曰枏、益州曰赤楩、似豫樟無子也、陸機疏云、梅樹皮葉似豫樟、豫樟葉大如牛耳、一頭尖、赤心、華赤黃、子青不可食、大三四葉一藂、木理細緻於豫樟、然則爾雅梅又名枏、卽本書木類所載楠是也、說文又云、某酸果也、某或借梅字爲之、召南摽有梅、曹風其子在梅、小雅四月侯栗侯梅、書說命爾惟鹽梅、夏小正煮梅、昭廿年左傳醯醢鹽梅、中山經靈山其木多桃李梅杏、陸機疏云、梅杏類也、樹葉似杏、葉有長尖、先衆木而花、其實酢、曝乾爲脯、入羹臛虀中、又含之可以香口、是可以訓无女、後通以梅爲酸果字、某字廢矣、故郭璞誤以似杏而酢注釋木之梅、其實爾雅無酸果之梅也、

〔爾雅註疏九釋木〕梅枏、註、似杏實酢、枏而占切、疏孫炎云、荊州曰梅、揚州曰枏、郭云似杏實酢、詩秦風終南云、有條有梅、陸機云、梅樹皮葉似豫樟、葉大如牛耳、一頭尖、赤心、華赤黃、子青不可食、枏葉大可三四葉一藂、木理細緻於豫樟、子赤者材堅、子白者材脆是也、

〔和字正濫要略五〕むとうと通ずる類

まびらかなることは、成島道筑信遍に仰せて、山上にたてられし碑文に記せり、此碑石もかねて熊野山の石を引て吹上の御庭におかれしを用らる、さて此神の傳をも信遍につくらしめらる、又山の麓に瀧野川といへる、左右の岸に棣棠をあまた植、山上には櫻に交へて松數十株をうゑしめ、山より西の田づらには菜をつくらしめられしかば、櫻の咲ころ木間よりのぞめば、菜の花こがねをまきたるやうに見えて、其景色いはむ方なし、これ府内近きほとりに、名勝を開き玉ふべしとの御事とぞ、一說に享保のはじめまでは、毎春花の時、貴賤みな寛永寺にまゐり遊興せしほどに、まく打まはし酒くみて、らうがはしかりければ、祖廟近きほとりにて、もしや猥りなる擧動あらんこと恐れなきにあらず、是府内に遊樂の地乏しきゆゑなりとて、飛鳥山を開かれしに、諸人それよりこゝにつどひあつまり、寛永寺はありしに比すれば、大にものしづかになりしとなり、

〔江戶名所圖會十一〕金井橋　多磨川の上水堀兩岸の芝塘にあり、金井村に架す、故に名とす、水源小川村より新橋の東北千川上水の掛口の所にて凡一里あまり、兩岸ことごとく櫻にして、左右の兩岸九村に跨る、また架す所の橋大小七ヶ所あり、何れも其地名によりて唱ふ、いはゆる金井橋の類なり、此水流の西の方羽村より北に播れて江戶に至るまで、直流凡十里あり、是を玉川上水と號す、承應の頃始て此水流を大江戶に引給ふといへり、此地の櫻は、享保年間或云元文二年丁巳郡官川崎某、台命を奉じ、和州吉野山および常州櫻川等の地より櫻の苗を殖らるゝ所にして、其數凡一萬餘株ありしとぞ、今存する所の古木一圍にあまるものまゝあり、延享の頃までは、年々に官府よりこれを殖つがせ給ひしとなり、今は其數大に減て凡三百株あまりあり、立春より五十四五日目の頃開初て、六十日目を滿開の期とす、七十日目の頃に至りては落花す、最其年の寒暖によりて少しの遲速はありといへども、大方は違はず、就中金井橋の邊は佳境にして、爛熳たる盛には兩岸の櫻、玉川の流れを夾んで、一目千里實に前後盡る際をしらず、こゝに遊べばさながら白雲の中にあるが如く、蓬壺の仙臺に至るかとあやしまる、最奇觀たる故に、近年都下の騷人韻士遠を厭はずしてこゝに來り遊賞す、

〔伊豫古蹟志四周布郡〕千。原。邑。夾岸有櫻樹、其中無雜樹、名。曰。矢。野。櫻。、或曰櫻三里、斯地巖峭嶺祠土性疎惡、故峯崅爲雨善崩毀也、郡尹矢野五郎右衛門曰、櫻柢能盤滋焉、貞享四年命植八千二百四十株、路

地上に花氈を敷が如く、一時の壯觀たり、

〔守國公御傳記五〕江戸本所深川出水ノ時、動モスレバ屋宇迄沒シ、溺死等モ少カラザレバ、公(○松平定信)建議シテ高キ臺ヲ三ケ所ニ作リ、中洲(永代橋ト大川橋ノ間也)ヲ取拂ヒ水患ヲ免ルヽ事ヲ得タリ、享保頃墨水ノ堤ニ植玉ヒシ櫻ノ殘少クナリシヲ、有司ニ命ジテ植續セ玉フ、今ハ雪トモ雲トモナリテ、都下ノ人隅田川ノ櫻トテ、盛ニ賞スルハ是也、

〔江戸名所圖會十五〕飛鳥山　數萬歩に越たる芝生の丘山にして、春花秋草夏涼冬雪眺あるの勝地なり、始元亨年中、豐島左衞門、飛鳥祠を移す、(祭神事代主命なり)因て飛鳥山の號あり、寛永年中、王子權現御造營の時、此山上にある飛鳥祠を遷して、權現の社頭に鎭座なしけり、其後元文の頃、台命によつて、櫻樹數千株を植させらる、内には遊觀の便とし、外には芻蕘の爲にす、年を越て花木林となる、爾しより騷人墨客は句を摘章を尋ぬ、牧童樵夫は秣を刈、薪をとる、殊にきさらきやよひの頃は櫻花爛熳として尋常の觀にあらず、熊野の古式に春は花を以て祀るといへるに相合するもの歟、

〔有德院殿御實紀附錄十六〕吹上の御庭に櫻楓の苗多く叢生したるを御覽ありて、小納戸松平專助當恒(後伊賀守)に、よくやしなふべしと命せられしにより、別に花欄を設け、懇につちかひ水すゝぎけるに、いくほどなく其苗五六尺ばかりになりしかば、廣尾隅田川のほとり、又は飛鳥山に植られし、其中にも飛鳥山は享保五年九月より植はじめて、凡櫻二百七十株、楓百本、松百本植られしに、櫻はわきて年を逐て枝葉しげり、花の時は燦爛として美觀をなせり、其地は小十人のなにがしが采邑なりしを、外にうつされ、元文二年二月十日、山をば王子權現の祠僧金輪寺宥衞にたまはりて、永く社頭に寄附せらる、もとの祠は紀伊國熊野權現をうつしたるゆゑに、公(○德川吉宗)御發祥の地の鎭守を、はやくよりいはひそめしことをおぼしめされ、かくはなされしなるべし、其つ

梅に似てはなはだ紅し、葉も樹の皮もまつたく櫻に異なることなし、此種東山泉涌寺悲田院にあり、然れども花いまだ貼す、是暖國の木、京地のさむき地へうつしたる故、木長せざるものなり、京師の緋植とは別種なり、予悲田院に述て目擊、

〔義演准后日記〕慶長十年正月二十日、櫻木百本程植之、當寺醍醐花名所之故也、凡毎年植了、上古ハ櫻會トテ花盛ニ大法會被執行之、建武已來歟、退轉無念々々、

〔山城名勝志葛野郡十〕嵐山在大井川南、法輪寺西、

〔雍州府志山川一〕葛野郡

嵐山　在大井川之西、俗言龜山院摸和州嵐山、植千本櫻於山上、今又處々殘、

〔新千載和歌集春二〕題しらず　後宇多院御製

あらし山これもよし野やうつすらん櫻にかゝる瀧のしら糸

〔大和本草花木十二〕櫻中略吉野ノ櫻ハ古來今ニ至テ多シ、山谷ニ滿リ、麓ヨリ咲初テ、奥ノ院ノ峯ニ至リ、中道ト左右ノ谷ヤウヤク咲ツヾク、其間一月アリ、盛ナル時目ヲ驚カス、東西ノ谷々、數里ノ間櫻多シ、他處ノ花ヨリウルハシ、如此美觀恐クハ華夏蠻貊共ニアルベカラズ、其花立春ヨリ六十五日ヲ盛トス、寒温ニヨリテ少遲速アリ、皆單花ナリ、八重ハナシ、八重櫻ハ奈良ヨリヲコレリ、

〔拾遺和歌集春一〕題しらず　よみ人しらず

芳野山きえせぬ雪と見えつるはみねつゞきさく櫻なりけり

〔江戸名所圖會十九〕隅田河堤　深堀橋にはじまり熊谷に至る行程、凡拾六里、是を熊谷堤と云、天正二年、小田原北條氏これを築たりといへり、御當家にいたり、官府の命ありて三園稻荷の邊より、木母寺の際迄、堤の左右へ桃櫻柳の三樹を殖させられければ、二月の末より彌生の末まで、紅紫翠白枝を交へ、さながら錦繡を晒すが如く、幽艷賞するに堪たりまた菫菜(すみれ)、碎米薺(げゞばな)盛りの頃は、

初春の初花櫻めづらしき都の梅のさかりにぞ見る

猶此外に、都鄙の詩人歌人俳人など見る人ごとに吟詠して賞翫す、予が彼國に遊びしは四月の頃なりしかば、花の時におくれて見ざりき、殘り多き事なり、彼國の人に此櫻の由來を聞くに、むかし山越の里に老人有けるが、年殊に老て其上重き病にふし、頼みすくなくなりけるに、只此谷の櫻に先立て、花をも見ずして死になん事のみをなげきて、今一たび花を見て死しなば、浮世に思ひのこす事もあらじなと、せちに聞へければ、其子かなしみなげきて、此櫻の本に行て、何とぞ我父の死し給はざる前に、花を咲せ給はれと、誠の心をつくして天地にいのり願ひけるに、其孝心鬼神もかんじ給ひけん、一夜の間に花咲亂れ、あたかも三月の頃の如くなりけり、此祈りける日、正月十六日なりければ、其後は今の世にいたるまでも、猶正月十六日に咲けるなりとぞ、其由來も正しかりぬ、又伊勢國白子といふに、子安の觀音とて名高き寺あり、其寺内に不。斷。櫻。とて常に花咲ける櫻あり、是は都近ければ古今ともに其名高く、歌人俳人もつとも吟詠多し、只三月は殊に花多く、其餘は花すくなし、冬などは纔に尋求めて見付る程なり、然れども常に其はなたへせずして咲る事、世にたぐゐなき名木なり、又薩州には崎島とて冬の內より咲る櫻あり、予が遊びし年は殊に暖なりしゆゑにや、寒中に櫻多く咲たれば珍敷て、所の人にたずねけるに、崎。島。櫻。とていつもかくのごとしといふ、正月はじめには異盛なり、彼國は人家に多くうへてめづらしからず、崎島とは琉球の領分にて、琉球より南の方二三百里へだたれるよし、誠に南國なればかくもあるべし、此さくらも都近くへ移しうへば、必かく早くは開まじ、

〔古今要覽稿草木〕薩。摩。緋。櫻。

怡顏齋櫻品云、薩摩に緋櫻といふものあり、名はおなじく、花形大に異なり、薩州鹿兒島より琉球へゆくみちに、みちのゑまといふ所にあり、はなは正月上元に最盛なり、冬より芽生ず、花重瓣、紅

ト又類ヒナク、尋常ノ櫻ニハ似ルベクモアラズ、傳ヘイヘラク、昔シ順德上皇極テ櫻ヲ愛サセタマヒ、遷幸ノノチ人シテ都ヨリ數種ノ花ヲメサレ、泉ノ御所ノ南ニゾ栽サセラレケル、其中ニ此一種ノミ水土ニ合ザリケレバ、重テ御ミヅカラ所ヲ撰バセタマヒ、更ニウツシテ栽置セタマヒケルトナリ、中ゴロマデハ世ニ移ル老木ニテヤアリケム、越後ノ國ノ古キ童謠ニモ、佐渡ノ三岬ノ御所櫻、枝ハ越後ニトウタヒヌ、何レノ頃カ枯ルコト二タビニ及ビテ、今ハ其蘖生ナリトイフ、（海潮寺緣起トイフ物ニハ、怪シキコトノミ記シテ、實說ニ據ニ其末ニ出セリ、今コヽニ記ス所ハ、加茂郡井内村ノ神職木岡某トイフモノヽ家ノ舊記ニシタガフ、）

〔閑窻瑣談三〕母。櫻。

紀州野中村に秀衡の母櫻といふ名木あり、奥州の旅客は何れも此櫻を尋來るといふ、其由來は委しく知れず、高さ八九間の木なり、

〔西遊記二〕十。六。日。櫻。

伊豫國松山の城下の北に、山越といふ所あり、此處に十六日櫻とて、毎年正月十六日には、此さくら滿開して見事なり、松山より花見とて貴賤群集す、寒氣面をそぎ、餘雪梢を封ずる頃に、此さくらのみ色香めでたく咲出れば、遠近の人ともにもてはやして、殊に其名高し、過し年先太守より和歌の御師範京都の冷泉家へ、此花を贈り給ひし事あり、其時冷泉殿より御返事の御和歌あり、

十六日ざくらといふ花を、頃しも睦月半のたよりに折こせしを、末の四日に都に來りつきて、

色もうるはしく、驚くばかりの初花櫻の花になん、賞翫の餘、

きゑのこる、雪かと見れば、年々の、む月半に、さくといふ、初花櫻、はつ春の、柳の木のめ、それもまだ、色別そむる、ころにはや、若葉催し、ほころぶを、散さぬ風の、たよりもて、心有人の、見せばやと、折こせはこそ、けふ見そめつれ、

返歌

面の碑をたつ、弘安の兵火に燒れて霜樹たちまちかれぬと見へしが、年かへりてひこばへさらに花をふくみ、枝葉なをもとの如はんもす、亦天正のころ野火の爲に、伽藍は一時の烏有となるを、祝融のおしむによりてか、此木はつゝがなりけり、享保のはじめに至て、四百餘歲の舊樹をのづから雨露の惠を辭すといへども、又ひこばへ弘安の往古の如し、今に至て佐殿の俤をとゞめ、源家に南山の壽を獻ず、寬永年中春日の御局、尾州千代姬君樣、當山御再營の時、此花率りしより、いまなを兩御殿へさゝぐるの外、一枝をだにおる事をゆるさず、佐殿と申は、河內守源賴信公の御子、八幡太郞義家公には御伯父君なると也、

文化十一甲戌年三月　圓照寺現住隆晃代

〔武江產物志遊觀〕櫻　上野山王社前ひとへのひがん櫻、立春より六十五日ごろよりひらく、　同淸水觀音堂後　同山門の前　同大佛堂前　同慈眼堂　同寒松院　同護國院ひがんゑだれ　同谷中門淸水門內寺院ひがんゑだれ　同車阪ひとへ　絲櫻增上寺　傳通院大黑社內　谷中善照寺ひがんゑだれ　根岸西藏院ひがんゑだれ　根津權現　養福寺日暮里　谷中七面境內ひがんゑだれ　乘圓寺鳴子村ひがんゑだれ　長谷寺麻布　光林寺麻布　麻布廣尾木下屋敷　右衞門櫻大久保柏木村　雲井櫻傳通院寮舍　駒込神明前ひとへひがん　文箱櫻市ヶ谷火ノばん丁　芳野櫻上野　犬櫻上野　秋色櫻淸水御供所　感應寺谷中　瑞林寺谷中　飛鳥山八重、立春より七十日頃、　隅田川同上　王子權現　根津權現　御殿山品川　小金井玉川上水邊、立春より六十日餘、　廣福寺玉川　千手院千だがや　深川元八幡　大井の櫻品川來復寺常蓮寺にあり、立春より七十七八日頃、　鹽竈高田明神　金王櫻靑山教覺院　兼平櫻小日向　延命櫻品川來福寺　泰山府君三田　千本櫻淺草　淺黃櫻感應寺長命寺　歌仙櫻深川八幡　百枝櫻谷中妙林寺　九品櫻田ばた六あみだ　母衣(ほろ)櫻西ヶ原　八重垣神田明神　十月櫻王子權現

〔佐渡志四古蹟〕御。所。櫻。

羽茂郡小木村海潮寺ニアリ、花ハウス紅ノフタヘナルガ、殊ニ葩大キヤカニシテ、其香ノ深キコ

深草の野邊の櫻し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ

〔書言字考節用集 六生植〕雲珠櫻(ウズサクラ)城州鞍馬名木、見ニ藻鹽一

〔大和本草 十二花木〕櫻〇中略 鞍馬ノ山ノ雲珠(ウズ)櫻トハ藻鹽草ニウズハ、カザリ鞍ノ具ナリ、ウス櫻トヨメルモ、クラマノ山ニソヘタルナリトイヘリ、ウス櫻トテ別ニ櫻アルニハアラズ、順和名ニ雲珠爲飾未詳、和名宇須、

〔還魂紙料 上〕秋色櫻

俳諧をもつて其名を知られたる秋色は、江戸小網町菓子屋の女なり、幼名を阿秋といふ、十三歳のとき上野の花見にまかりて、清水堂の邊、井の端にありて、大般若といふ櫻を見て、井のはたの櫻あぶなし酒の醉と口ずさみぬ、玄かりしよりその櫻を秋色櫻といひけるよしは諸書に載て、たれ〳〵も知るところなり、其剡の老樹は枯たれど、今も其跡に糸櫻を植て秋色櫻といふ、觀音堂の辰巳にて、側に井あり、井は御供所とかいふ所の板垣の裏なり、昔は此垣無かりし故、かゝる發句をなしたるなるべしと思ひをりしが、つら〳〵考れば此説おぼつかなし、

〔古今要覽稿 草木〕右衞門櫻

武藏國豊島郡柏木村に立所なり、楊貴妃の變種とおもはるれども、莖の下にむかふを異なりとす、

右衞門櫻之由來

抑このさくらは、長元年中ゑもんの佐源賴季朝臣勳功の賞に此地を給らせ給ひ、こゝに御館をいとなみ住せ給ひし比、家門繁榮の兆を見せよと、御手づからひとへのさくらをうへさせられしに、その花八重をまじへて咲出けり、是よりして深く此樹をめでさせ給ひ、春ごとに花の宴遊をぞ催されける、其後百六十餘歳をへて、江戸民部大輔賴介、當寺再興のみぎりゐかきをなし、一

すべきよし、延喜御記さだめられしより、この櫻かるれば近衞大將これをうふる事讃譽ことゝはなりしなるべし、かく度々の火にやけし櫻にて、八重なりし時も、一重なりし時も有しなるべし、然るを兼好法師は必一重なるべきよしいひたり、世に南殿といふは、もとこの左近の櫻なるが故に、しか名付しといひ傳へたれば、八重なりし時も有しなるべし、こゝに載たるはいづれの御時の櫻にや、定かならざれども、その一重なりし折にうつしたりし種なるべし、次に出せるもをなじく、この櫻の種なり、うつし植たりし人の心のまゝに、紫宸殿左近櫻、平安左近櫻と名付たるのみにして、をなじく左近の櫻なり、たゞうつし植られし折によりて、その樹はおなじからざるべし、また或人曰、嵯峨清凉寺地藏堂の前に櫻あり、この櫻を平。安。櫻。と呼べり、時平公の植られし櫻なりと云、又貞信公のうへられし木なりともいへり、しかれば此花を寫せしもの歟、その花を見ざれば決しがたし、佐藤成裕平三郎、水戸殿御家人、曰、この平安左近櫻と稱するもの往々あり、人の珍重せしところ、古への絕品にしていやしからず、南都へ移し植れば、猶大にして一朶七八莖にいたる北地に植れば花小なりといへども色尤よし、

〔今昔物語二十四〕敦忠中納言南殿櫻讀和歌語第三十二

今昔、小野宮ノ大キ大臣左大臣ニテ御座ケル時、三月ノ中旬ノ比、公事ニ依テ内ニ參リ給テ、陣ノ座ニ御座ケルニ、上達部二三人許參リ會テ候ハレケルニ、南殿ノ御前ノ櫻ノ器ノ大キニ神サビテ艶ヌガ、枝モ庭マデ差覆テ、繁ク栄テ、庭ニ隙无ク散リ積テ、風ニ吹キ被立ツヽ、水ノ浪ナドノ樣ニ見エケル、

〔書言字考節用集六生植〕墨染櫻（スミゾメザクラ）城州深草

〔古今和歌集十六哀傷〕ほりかはのおほいまうちぎみ、身まかりにける時に、ふか草の山におさめてけるのちによみける。〇中略

かむつけのみねを

櫻名木

眉作らせ、鐵黑なり、供奉の人々、我も〳〵と美麗を盡し、わかやかなる出立なれば、見物群集せり、廿七日紀州六田の橋を打渡り、市の坂に至て下らせ給へば新宅有、大和中納言秀俊卿より立させ給へる御茶屋にて侍るよし申ければ、則立寄せ給ふ、饗膳など上られければ、御心よげにす、みまいらせられ、それより千本の櫻花園櫻田ゐたの山、かくれがの松など御覽有て、秀吉公かくぞ詠じ給ふ、〇下略

〔書言字考節用集 六生植〕南殿櫻ナンデンノサクラ ナデン 在紫宸殿巽角、詳禁秘抄、河海拾芥、

〔江談抄 一公事〕紫宸殿南庭橘櫻兩樹事

內裏紫宸殿南庭櫻橘樹者、舊跡也、件橘樹地者昔遷都以前、橘本大夫宅也、枝條不改、及天德之末云云、又秦川勝舊宅者、但是或人說也、

〔古今著聞集 十九草木〕南殿の櫻は村上の御時、式部卿重明親王の家の櫻勾ひ異なりとて、うつしうへられけるとぞ、其後たび〳〵の炎上にやけにければ、又あらぬ木をぞうゑかへられける、代々の御門、此はなを賞せさせ給ひて、花の宴を行なはる、承久に右馬權頭賴茂朝臣うたれし時、又やけにけり、やがて造內裏ありしに、この櫻のたね大監物源光行が家にうつしうへたるよし聞へて、めしてうへられけるとぞ、いづれの時のたねにてか有けん、おぼつかなし、其櫻もいく程なくてやけぬれば、今はあとだにもなし、くちおしきこと也、

〔古今要覽稿 草木〕紫宸殿左近櫻

左近の櫻といふは、紫宸殿の前東方にあり、平安城草創の時よりの樹といへば、禁秘抄 桓武天皇の御時より有しなるべし、天德の火にやけたるは草創よりの樹にや、其後康保元年十一月植られしは、そのとしに枯たり、その二年正月植られたるは、三月花實せさせ給ひしといひ、その後度々燒て、堀川院の御時に植られし樹、順德院の御時までは殘りしとなり、同上 左近衛大將櫻の東に列

丑三月十七日辰剋、頼經將軍三崎の磯山御遊覽のため出御し給ふ、相州武州をはじめ御共する、かの前司御船をもよほし、海上にて管絃詠歌あり、佐原三郎左衞門尉遊女を相ともなひ、一葉にさほさし、さんかうする事、玄かも興あらずと云事なし、およそ山陰のけいすう、海山の眺望、比類有べからずとほめさせ給ひ、同十九日に還御也、同二年庚寅三月十九日、將軍家三崎磯山の花ざかり御遊覽のため、武州六浦の津より御舟にめされ、海上にて管絃あり、若宮の兒童等を召れ、船中にて詩歌を詠じ、連歌をつらね給ふ、相州武州以下參らる、よつて領主駿河前司ことなる御まうけ、善盡し美つくさずと云事なし、

〔太閤記十六〕醍醐の花見

夫惟白髮は貴賤を不分、月は雲を不除、花は風を不厭、死は時を期せぬ習目前なり、いざ此春は北政所〇豐臣秀吉妻に醍醐の花を見せしめ、環堵の室を出でやらぬ女共にも、いみじき春に合せ、胸のかすみをはらし、一榮一樂に世を忘させんと思ひ寄しなり、いかゞ有べきと、德善院玄以に仰談せられし時、尤宜しき御催にておはしまさんと申上しかば、御氣色なり、さらば其のあらましを、はやく政所へ告侍りて、あまたの日數を樂しましめんとて、尼幸藏主をもつて仰せられしかば、三月十五日〇慶長三年醍醐の花見を催され候はん、政所殿も見物あるべきよし申候へと宣ふにより、則幸藏主まいり侍りてかくと申上しかば、一入めづらしき事なるべしと、御うれしさのあまりに御文をもつて仰上らる、

〔駒井日記〕文祿三年二月廿九日、吉野、一大閤樣御假屋形ニ而御歌之御會有之、　二月晦日、吉野、御花有之、　三月朔日、吉野、御能有之、　三月二日、從吉野大閤樣高野に御參詣、

〔太閤記十六〕吉野花御見物の事

文祿三年甲午二月廿五日、吉野の花御覽あるべきとて、大坂を立出させ給ふ、秀吉公例の作り髭に

けり、洲濱にたて丶もて參けり、其後滿座和歌を奉べき由、勅定有て、人々つかうまつりけり、(爲範記に見へたり)

〔源平盛衰記〕二清盛息女事

抑此成範卿トハ、故少納言入道信西三男也、櫻町中納言ト申事ハ、優ニ情深キ人ニテ、吉野山ヲ思出シテ、櫻ヲ愛シ給ヒケリ、室ノ八島ヨリ歸上後、町ノ四方ニ吉野ノ櫻ヲ移植、其中ニ屋ヲ立テ住給ケレバ、見人此町ヲバ、樋口町櫻町ト申ケリ、又ハ此中納言、櫻ノ名殘ヲ惜テ、立行春ヲ悲ミ、又コン春ヲ待ワビ給シカバ、異名ニ櫻待中納言トモイヘリ、殊ニ執シ思ハレケル櫻アリ、七日ニ咲散事ヲ歎テ、春ゴトニ花ノ命ヲ惜テ、泰山府君ヲ祭ラレケル上ヘ、天照大神ニ祈申サセ給ケレバ、三七日ノ齡ヲ延タリケリ、サレバ角ゾ思ツヾケ給ヒケル、

千早振現人神(アラヒトガミ)ノカミタレバ花モ齡ハノビニケルカナ、ト人ノ祈實アリケレバ、神ノ靈驗アラタニシテ、七日中ニ咲散花ナレ共、三七日マデ遺アリ、君モ御感有テ、花ノ本ニハ此人ヲゾスベキトテ、勅書櫻町ノ中納言トゾ仰ケル、(下略)

〔續古今和歌集〕二春 龜山の仙洞に、吉野山の櫻をあまたうつしうゑ侍し花のさけるを見て、

太上天皇

春ごとに思ひやられし三吉野の花はけふこそ宿に咲けれ

〔北條五代記〕十三浦三崎實藏山舊跡の事

扨又三崎の前海城ヶ島に、春は櫻花咲みだれ、面白き磯山の氣色たぐひなかりけり、是によく賴家公花の時分は三崎へ毎年著御、正治元年も出御し給ひぬ、實朝將軍三崎の櫻花御見物有べしとて、建曆二年壬申三月九日、尼みだい所をともなはしめ、三崎へ入御し給ふ、建保三年三月、同五年九月、安貞三年二月廿一日、同四月十七日、詩歌管絃の御遊さらに盡しがたし、扨又寬喜元年己

時櫻花落于御盞、天皇異之、則召物部長眞膽連、詔之曰、是花也非時而來、其何處之花矣、汝自可求、於是長眞膽連獨尋花、獲于掖上室山而獻之、天皇歡其希有、卽爲宮名、故謂磐余稚櫻宮、其此之緣也、

〔日本書紀十三允恭〕八年二月、幸于藤原、密察衣通姬之消息、是夕衣通郎姬戀天皇而獨居、〇中略明旦天皇見井傍櫻華而歌之曰、波那具波辭、佐區羅能梅涅、許等梅涅麼、波椰區波梅涅孺、和我梅豆留古羅、皇后聞之且大恨也、

〔日本紀略四村上〕康保二年三月五日丙子、諸卿著陣座、翫南殿前新移櫻樹、有詠歌盃酒絃管之興、少內記大江昌言記小序、權大納言師尹朝臣以下於仗座翫之、右近將監尾張安居奉仕律呂舞、

〔古今著聞集十九草木〕宇治殿、四條大納言公任卿と、春秋の花いづれかすぐれたると論せさせ給ひけり、春はさくらをもて第一とす、秋は菊をもて第一とすと、宇治殿仰られければ、大納言梅の候はんうへは、さくら第一にてはいかゞ候べきと申されければ、梅と櫻との論に成て、自餘の花のさたは、つぎになりにけり、大納言認をなして、つよく論じ申されずながら、猶春のあけぼのに、紅梅の艶なるいろすてられがたしと申されける、優にぞ侍ける、江記に見えたり、

長元元年十二月廿二日、昭陽舍のさくらを一本、淸涼殿ひがしきたの庭にうつしうゑられけるに、殿上人どもおりたちてふみいためけり、いと興ある事也、むかしはかやうにあちこちほりわたし、又はじめてもうゑられける、ちか比はかぎりある木の外は、うへらるゝ事もなきにや、

長治二年後二月二十日あまりの比、內の女房殿上人せう〳〵花を見侍りけるに廿三日に一枝ををりて奉るべきよし、天氣ありけれ共、日くれて奉らざりけり、其うらみ有とて、次の日左右をわかちて花を合られけり、左方の人々櫻の枝を折て、ゑもん陣の後にうつしたてゝ、五枝をえらびてもて參けり、備後介有賢朝臣、柏子取て櫻人をうたひけり、管絃をもつけ侍けり、此花を泉の御所にうつしうへて、つり殿にて御遊有けり、右方花をそかりければ、上達部五人をつかはされ

觀賞

〔櫻之辨〕倭國にて專ら花とは櫻をいふなり、櫻を詠ずる歌數も忘らず、此花神代よりありけるにや、大山祇の女始て天上より櫻の木に降れりけるとて、木花開耶姬と申侍る、皇代履仲天皇禁池の御舟遊に、櫻花の散て御盃に入しを賞して、內裏を若櫻の宮と名付玉ふ、平城天皇櫻花の御製、昔在幽巖下、花光照四方、忽逢攀折客、含笑亘三陽、送氣時多少、垂陰綠短長、如何此一物、擅美九春場と宣へり、凌雲集に出たり、嵯峨天皇弘仁三年二月に、神泉苑に御幸ありて、花を御覽じ詩を作らしめ玉ふ、これ花の宴の濫觴なりとぞ、文德天皇仁壽元年に、藤原の良房の館に御幸ありて、櫻花を御覽じ詩歌の御遊あり、宇多天皇寬平七年、神泉苑の櫻を御覽じて、菅丞相供奉なりしかば、かくもてはやし、業平歌に、

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心は長閑からまし、といへり、

〔茅窻漫錄 中〕木花櫻 中略〇

本より櫻は此邦第一の花にて、漢土にも賞美せり、義楚六帖に、日本國都城南五百餘里、金峯山頂上有金剛藏王菩薩、第一靈異、山有松檜名花軟草、といふ、金峯山は神名式に見えたる大和國吉野郡金峯神社にて、今は金精明神といふ名花は、今の吉野櫻なり、宋景濂が櫻詩に、賞櫻日本盛於唐、如牡丹兼海棠恐是趙昌所難畫、春風纔起雪吹香と作れり、趙昌所難畫といふは、枕草紙に繪に書きて劣る物といふにおなじ、神代木の花櫻より王仁が難波津の詠に入り、歷代帝王の花宴を開き、詩歌墨客の賞美するところ、實に日本第一の木の花なる事しるべし、

〔昆陽漫錄 一〕花

鶴林玉露に云く、洛陽の人謂牡丹為花、成都の人謂海棠為花、尊貴之也と、我國の人は櫻をいひて花となす、これも賞翫するによりてなり、人情はいづくもたがひあらざるなり、

〔日本書紀 十二 履中〕三年十一月辛未、天皇泛兩枝船于磐余市磯池、與皇妃各分乘而遊宴、膳臣余磯獻酒、

設ケ周圍ニモ葭莚等ヲ以テ圍ヲ爲シ、能ク活テ芽ノ生長スルニ從テ、漸々ニ土ト圍トヲ取リ除クトキハ、皆能ク活テ繁榮スル者ナリ、

〔駒井日記〕文祿四年四月朔日辰、一京總堀枯竹之事、民法〈江〇民部法印前田玄以〉爲二御屆一可二申遣一旨書狀之案、

一爲二御意一令二啓達一候、仍伏見向島櫻植木之義被二仰出一候、然者櫻被レ爲レ植候剋、木ころびゆがみ候はぬ樣にらちを可レ被レ爲レ結之思食候、左候得者、木竹過分に入可レ申體に候、京總廻土居之內に枯竹餘多見申候迚、くさり可レ申間、右之枯竹被レ爲二取成一次第可レ被二仰付一と被二思召一候、土居枯竹之義も、少成共靑之有レ之竹を被レ爲レ置、悉枯迚くさり果候分可レ被二御沙汰一と思召候、如何可レ有レ之候哉、爲二上意一申入候、恐惶謹言、

四月朔日　駒井

民法樣人々御中

一櫻木之事に付而西美濃之事

一東ハ久瀨川、北者赤坂、南ハ玄つゝやをさかひ可レ付由、右之村數百計有レ之由、右之內五里四方程も可レ有レ之由、次ときたるハ江州近くに候へ共、山中故江州〈江〉海道無レ之由、

一伏見御屋敷之儀、土居こわし候事、最前普請衆可二申付一由御意候通、奉行中へ申遣、〈〇中略〉

一伏見向島櫻木之儀ニ付而、民法より先剋返事、

一伏見向島櫻植木之かこひとして、京之總廻之土居之枯竹被レ爲レ伐旨令二存知一候、何も境を極、其勝手之所ニハ預ケ置せられ候間、撿使を出伐せ、運上可レ申候哉、但以上使可レ被二仰付一候哉、御諚次第之旨可レ預二御取成一候、恐々謹言、

四月朔日　民部卿法印

駒井中務少輔殿御返報

まげりて、春の花よりにぎやかにて、猶ながめよし、秋若芽出て花さく、山櫻に接木してよくつくものなり、

普賢象

〔書言字考節用集 六生植〕普賢象(フゲンザウ)櫻、花間出葉故名、蓋普賢薩埵所駕白象、齒鼻相列、所見似之、花鼻葉齒和訓相通、

〔般若熙百首〕謝人惠櫻花詩幷叙　横川

櫻之於我國也、不曰櫻而曰花、如洛之牡丹、蜀之海棠、蓋所以貴之也、普賢堂者、天下第一也、世傳鎌倉有堂、普賢安之、其地有櫻、俗謂之普賢堂、或曰普賢象、和訓鼻與花音同、花之白且大者如菩薩所乘白象之鼻也、兩說孰是、平安城之西有此櫻、實名花也、万年之距此地也里許、近而近、每到春時、携客出遊、何可一日無此花耶、自丁亥之亂、東西鴻溝、不見普賢堂者、七八九年于今矣、距步之間、雖花如敵、音春負公乎、公負音春乎、不可得而知也、今茲甲午、西人乞降、軍退解圍、不亦悅乎、今日有客惠櫻花者、所謂普賢堂也、予與花一睽、知十年之舊、吁異哉、不啻生逢大平日、而得見此花、幸之又幸也、感喜有餘、作詩謝之云、下略〇

櫻栽培

〔草木六部耕種法 十一花需〕櫻ト梅トハ種類ノ極メテ多キ者ナリ、共ニ百餘種ヅヽ有リ、然レドモ梅ハ實ヲ主トシテ作ル者ハ多ク、花ヲ主トシテ作ル者ハ少シ、故ニ梅ノコトハ下ノ需實篇ニ詳ニスベシ、櫻ハ實ヨリ花ヲ賞スル者ナレバ、茲ニ其作法ヲ論ゼン、凡ソ櫻類ハ高燥ノ土ヲ好ミ、濕潤ノ處ニ宜カラズ、移植ルニハ二月十月ヲ良トス、冬至頃ニ根周圍(マハリ)ニ、馬糞カ屍肥ノ粉ヲ入ルベシ、隔年ニ花ノ過タル頃ニ、鎌ヲ以テ處々ノ皮ヲ剝ベシ、如斯スレバ其創ヨリ肉ヲ生ジテ、木モ能ク肥リ、花モ甚ダ盛ニナル者ナリ、中略〇凡ソ櫻ハ實ヲ蒔モ能生ジ、根分スルモ、揷木スルモ、能ク活モノナレドモ、名花ノ枝ヲ採テ接木スルヨリ便良ナルハ無シ、彼岸櫻寒緋櫻絲櫻ハ、八重櫻ヲ砧(ダイ)ニシテ接グベシ、八重櫻ハ山櫻ヲ砧ニシテ接ベシ、花師(ハナヤ)山師(ニハツクリ)等ノ櫻ヲ作テ接木スルヲ觀ルニ、圃ニ數多ノ砧木ヲ並テ、皆此ニ接ギ土ヲ覆テ、接梢少出シ、其圍ノ四方ニ杭ヲ立テ卑キ棚ヲ造リ、雨覆ヲ

はなをだいにてうたよめとおほせごとありければ、　伊勢大輔
いにしへのならのみやこの八重櫻けふ九重ににほひぬる哉
〔大和本草十二花木〕櫻○中略八重櫻、ヲソキヲ泰山府君ト云ハ、盛衰記曰、昔櫻町ノ中納言成範卿、此花ノサカリ短キヲナゲキテ、櫻ノタメニ泰山府君ノ祭ヲ行ハレシヨリ此名アリト云、又鹽カマト云遲櫻アリ、ハマデ見事ナリト云意ナルベシ、
〔書言字考節用集六生植〕不斷櫻(フダンザクラ)在勢州奄藝郡白子邑、
〔櫻品〕不斷櫻
一名若木櫻、一名節會櫻、一名十六日櫻、按節會櫻、一名十六日櫻、伊豫松山大須社前にあり、正月十五日に必開、單瓣小花也、近來枯たり、他邑に種ありしを接て又繁茂すと云、此櫻藝州廣島にもあり、播州明石の邊にては不斷櫻と名く、皆一物也、其花似彼岸櫻及婆櫻、叢生す、上元の前後必著花、四時不斷、故に土人呼不斷櫻、按に此乃宋の陸游老學菴筆記に、所謂小桃紅是也、與鳳仙花同名而物異也、熊谷櫻も此種類也、歐陽公梅宛陵王文恭集皆有小桃者、歐陽詩曰、雪裏花開人未識、摘來相顧共驚疑、便須索酒花前醉、初見今年第一枝、初但謂桃花有一種早開者耳、及游成都始識所謂小桃者、上元前後即著花、狀如垂絲海棠、曾子固雜識曰、正月二日開天章閣賞小桃、正謂此也、出宋陸游老學庵筆記曾聞、伊勢白子觀音寺の庭に櫻あり、四季著花、名不斷櫻、訪問彼地方之人、與須磨及藝州者一物也、楊升菴丹鉛總錄、陸游老學菴筆記所載正指此物、小桃紅とも出せり、非桃花種類、實櫻中一品而小華者也、
〔地錦抄附錄三〕若木不斷櫻(わかぎふだんざくら)　源氏若木櫻の實生にて、かはりて出來たり、はるより秋まで花咲なり、枝ほそく瘦形にて、葉もちいさくまほらしく、尺にたらずして花多くさく、小鉢に植てながめよし、春は山櫻より少しはやく咲、花ひとへ小りんなり、又五六月ごろに若芽出て、さきに花多く

〔源氏物語野分二十八〕春のあけぼの、霞のまよりおもしろきかば櫻の、さきみだれたるをみるこゝちす、

〔河海抄野分十一〕かはさくら中略〇かは櫻とは、花の色うす紅にて、ことさら艶なる花也、和名には朱櫻とかけり、古今にかにはざくらとあるこれなり、

〔古今要覽稿草木〕弘賢曰、カニバザクラのニを省きて、カバザクラといひしなり、倭名鈔櫻桃一名朱櫻ハ、ヽカ、一云ニハザクラと注したれば、カバザクラの證にひきしは誤なり、契冲がいひしは無稽なり、和名鈔に輔仁の本草和名を引たるに、本書にカの字あれば、和名鈔今の本脱字なり、河海抄引用の本にはカの字在しならん、さて本艸和名に櫻桃の一名あまた有てハ、ヽカノミ、カニハザクラノミとよみて、草の部に收たり、然るを倭名鈔には木部にうつして、ノミの二字を省きたり、櫻桃はユスラムメにて、サクラにはあらずとおもはるれども、櫻字をサクラとよみしうへは、カバザクラは花の色赤ければ、朱櫻の字をかり用たるにて、こゝのカバザクラ、かしこの櫻桃なりといふにはあらず、

〇按ズルニ、樺及ビ櫻桃ノ事ハ、別ニ其條有リ、宜シク參看スベシ、

淺黄櫻

〔北邊隨筆一〕淺黄櫻　長明四季物語といふものに、御社のあたり、みあれ山の櫻は、あさ黄なるもありて云々とあり、今の世淺黄櫻といふ物これなるべし、これよりふるきものには、いまだみおよばず、されどこの四季物語うけがたきものなれば、かへりて後にや、

八重櫻

〔書言字考節用集六生植〕八隔櫻(ヤヘザクラ)万葉

〔詞花和歌集一春〕一條院の御時、ならの八重櫻を人の奉りけるを、そのおり御前に侍りければ、その

〔箋注倭名類聚抄十木〕原書果部上品有櫻桃、不載一名、陶注云、此即今朱櫻、則知朱櫻之名出陶注也、蜀都賦云、朱櫻春熟、御覽引吳普本草云、櫻桃味甘云々、一名朱櫻、是陶氏所本、按爾雅、楔荊桃、郭注今櫻桃、月令仲夏之月、天子乃以雛嘗黍、羞以含桃、先薦寢廟、鄭注云、含桃今之櫻桃也、呂氏仲夏紀高注云、含桃鸎桃也、鸎鳥所含、故言含桃、○中略本草和名云、波々迦乃美、一名迦爾波佐久良乃美、蓋藥用櫻桃子、故訓爾、源君所擧非特其實、故雖依輔仁所訓、然刪乃美字也、各本脫邇波上加字、按加邇波佐久良、古今集物名和歌所詠者即是、此蓋偶脫也、今依本草和名、増正、源氏物語野分卷所云、加波佐久良、即加邇波佐久良之急呼也、河海抄引本書朱櫻釋之、似彼所見有加字、然袖中抄、類聚名義抄並訓爾波左久良、伊呂波字類抄收仁部、埃囊抄以庭櫻訓朱櫻、則脫來亦已久、按迦爾波佐久良、今俗呼赤加婆、當以山櫻桃充之、櫻桃今呼由須良宇米者是也、源君以櫻桃爲加邇波佐久良者非是、又按波々迦、蓋今俗呼白加婆者、非加邇波佐久良之一名、輔仁以其名同混同也、說詳木具樺條、

〔伊呂波字類抄仁植物附植物具〕朱櫻ニハサクラ　櫻桃同

〔書言字考節用集六生植〕櫻桃ニハザクラ、カニハ（時珍云、木不甚高、春初開白花、繁英如雪、）　含桃同（見本草、活法、）（鶯桃荊桃並同、）　玉帶花同　樺カバザクラ、カハ（其皮曰暖皮、堪爲燭、又工匠所用者、）　朱櫻同、カニハサクラ（万葉、河海、）

〔大和本草十二花木〕櫻○中略カバサクラハ一重櫻也ト徹書記イヘリ、或曰ヒトヱ櫻ノウス紅ナルヲ云、古今集ニ、カニハザクラト云ハ是也、

〔古今和歌集十物名〕かにはざくら　つらゆき

かづけども浪のなかにはさぐられて風吹ごとにうきしづむ玉

〔空穗物語吹上之下〕宮より東はうみなり、そのうみづらに、きしにそひておほひなる松に藤かゝりて、廿ぢやうばかりなみたちたり、それにつきてかばざくらひとなみなみたちたり、

乃さかて櫻なり、

〔義演准后日記〕慶長十年二月四日、女御女三宮九條殿豐光寺圓光寺備前後室、初櫻枝送進之、但ミツテ花アサ出了未開ガミ彼岸八重櫻タマガト云也ヘ悉開了、一重彼岸櫻半分開了、廿日、大樹へ櫻花一枝進上之、廿四日、大樹若君へ花枝折一合進上之、御あちやノ方へ同前、山下ノ花最中、

南殿櫻

〔古今要覽稿草木〕南殿櫻

南殿櫻或は南天と書し、又奈天と書す、その名づけしゆへをしらず、花瓣或は數葉千葉淡紅甚艶麗にして、一種の花なり、紅葉奈天、色奈天、爪紅奈天、菊奈天、奥州奈天、大奈天等數種あり、葉の色も亦數品なり、

〔書言字考節用集生植六〕櫨ヒサクラ　樺同木

火櫻

〔塵嚢抄六〕火櫻トハ何ナル花ゾ　此名、歌ニハ讀テ侍レ共、未釋セル文ヲ不見侍、櫻ノ名、都ニハ多クアルト云リ、顯昭ガ義ニハ火櫻ト云物更ニナシ、蘘荑フイト書テ、ヒキサクラトヨム、若是ヲ略シテ云カ、紅櫻クレナヒヲ赤ニ付テ云カト申セリ、朱櫻シユワウト書テ庭櫻トヨム、色モスワウ色也、若是等ヲモ申ニヤ、櫻色トハ白ヲ云詞也、赤ヲバ實色ヲ云カナンド古シヨリ申侍リ、其歌ハ、

アヅサ弓春ノ山邊ニケフリタチモユトモ見エヌ火櫻ノ花

〔新撰六帖六〕ひざくら

みよし野の草葉ももゆる春の日に今さかりなるひざくらの花　家良

春をやくひかりはおなじ梢にも分て名にたつひざくらの花　爲家

朱櫻

〔本草和名十七菓〕櫻桃、一名朱櫻胡頽子、淩冬不凋一名朱桃、一名麥英、一名楔、本草反點一名荊桃、已上四名出釋藥性様子、味酸、出崔禹一名含桃、一名荊桃、一名麥桃、已上三名出兼名苑和名波々加乃美、一名加爾波佐久良乃美、

〔倭名類聚抄二十木〕朱櫻　本草云、櫻桃一名朱櫻、和名波々加一云邇波佐久良、

熊谷櫻

僧偶絲櫻をさして垂絲と云しより、習而不察、不知絲櫻は軟條にして非垂枝、據女南圃史、地棠花(やまぶき)の條に、垂絲海棠似棠棣花とあるときは、今の櫻中の江戸桐谷伊勢等をさすこと分明なり、畢竟今の櫻は海棠の一種にして非櫻、そは卽ち櫻桃にして、今のゆすら梅なり、垂枝と類自別なり、又按に垂枝海棠二種あり、同名別物なり、一種は古來所稱絲櫻、一種は今のさくら是なり、按に行厨集花木門に垂枝海棠の條曰、吐絲向下、花似地棠花とあり、今のさくら皆莖長下に垂、吐絲は枝のえたゝるゝ事にあらず、海棠譜及圓機活法にいへる垂絲海棠とは今の絲櫻なり、行厨集にいへる諸櫻のことたること分明なり、近世大德寺の覺印問之唐僧、曰垂絲海棠は諸櫻の通稱なり、重葉の垂絲は八重櫻の事なりと、唐僧の話なりといへり、是行厨集の說と合せり、敬義の櫻の辨にも、誤て以櫻桃日本の櫻とせり、不知櫻卽櫻花而本より非佐久良、櫻の名日本所私名而非漢土之櫻也、

〔義演准后日記〕慶長十年二月廿五日、秀賴公へ伊勢櫻一枝、初蕨進上之、馬場幷中谷ノ花最中、今夕見物、驚目了、歸路ニ芹寺絲櫻見物、泉水ノ伊勢櫻三分一咲、　廿七日、寺澤志摩守、龍藏寺信濃守、東條紀伊入道爲見物來、

〔大和本草 十二 花木〕櫻〇中略

熊谷櫻　高サ尺ニ不過シテ花サク、長シテ四五尺ニ過ズ、彼岸櫻ニ先立テ八重ノ好花ヒラク、枝ノカタチハ櫻ニ似テ彼岸櫻ニハ似ズ、櫻ノサキガケ也、別種ナリ、花色白クシテ少紅ヲ帶タリ、

〔櫻品〕熊谷櫻

彼岸櫻の八重也、開事最早し、故に名花の先登といふ義なり、昔源平攝州一谷の合戰、熊谷次郎直實爲先登、以て此に比す、花小にして色赤し、或曰千葉のものあり、千葉難波櫻に似たり、此非熊谷、乃藝花家に所謂楊貴妃也、似緋櫻而小也、又單瓣大輪、似芝山櫻而色帶紅暈者呼熊谷、是亦非也、此

よく似二李花一、此に單瓣白色中輪なるを殿櫻と名く、

〔大和本草花木十二〕櫻〇中略

ウバ櫻モ彼岸櫻ノ類ナリ、彼岸櫻ノ次ニ開ク、是モ花開ク時葉ナキ故、ウバ櫻ト名ヅク、

婆櫻

〔櫻品〕婆櫻

彼岸櫻と一般、但無葉を以て名く、葉と齒と和音通ず、見二活所翁櫻譜一、

絲櫻

〔書言字考節用集生植六〕糸櫻（イトザクラ）

〔大和本草花木十二〕垂絲海棠（イトザクラ）　樹與二彼岸櫻一同、枝長ク絲ノ如クニシテ下リ垂ル、花美ハシ、彼岸櫻ヨリ花ヤヽ遲シ、イトザクラ唐ヨリモ來ル、唐人コレヲ垂絲海棠ト云、合璧事類海棠花說曰、一種柔枝長蔕者、顏色淺紅、垂二英向一レ下、謂二之垂絲海棠一、與二海棠一大不レ類、蓋强名爾、コレイトザクラ也、本草時珍ガ說、海紅集解ニ出タリ、事言要言ニ沈立海棠記ヲ引ケルモ與レ此同、海棠ニ非レドモ、花似タル故ニ垂絲海棠ト名ヅク、樹ノ形狀モ花ノ容モ彼岸櫻ト同、イトザクラヲ櫻ニツゲバサカヘズ、彼岸櫻ニツゲバ榮フ、同氣ノ故也、王世懋ガ花疏ニハ、垂絲以二櫻桃木一接グトイヘリ、ユスラノ木ニツグベシトナリ、彼岸櫻ト垂絲海棠ノ別ハ、シダリ柳ト常ノ柳ノ如シ、ウバ櫻トイトザクラハ一時ニ開ク、

〔櫻品〕絲櫻

彼岸櫻と花全同、但枝軟嫋々如二柳枝一、往昔黃檗の唐僧に訪問せしに、垂絲海棠なりといへり、按垂絲海棠の名出二于海棠譜一、按洛陽花木記に、垂枝一名楔條といへり、今の絲櫻の形狀に合せり、然れども二如亭群芳譜垂絲海棠の下に、西府海棠を出す、莖枝やゝ堅といへり、然れども西府海棠は今の櫻に似たり、垂枝といふも枝の垂るゝにはあらずして、苞の中より絲を吐出して、其先に花の垂るゝをいふと見えたり、然れば垂絲は今の櫻の總名にして、ひとり絲櫻を指すにあらず、唐

〔萬葉集八春雜歌〕山部宿禰赤人歌四首〇三首略
足比奇乃、山櫻花、日並而、如是開有者、甚戀目夜裳、

〔古今要覽稿草木〕嵐山櫻。。
嵐山櫻、もと嵐山の種なるを以て名を得しものなり、其花單瓣白色、すこし淺紅を帶、一莖二三花にすぎず、卽山櫻の一種なり、嵐山の櫻は龜山院芳野の山櫻を移し植させられしといへば、よしの、花と同じかるべきに、今存せるさくらは、芳野の花とは異なり、風土によりてかはれるもの歟、古植千本櫻於嵐山雍州府志といへども、今現存するはさほど多からずといへり、

彼岸櫻

〔大和本草花木十二〕櫻〇中略
彼岸櫻。。　其花櫻花ヨリ小ニシテ、櫻ニ先立テ早ク開クコト旬餘日、花開ク時葉未生、櫻ヨリ小樹ナリ、花モ小也、櫻ノ類也、

〔櫻品〕彼岸櫻
開最早、先於諸櫻、二月春分節開花、俗呼彼岸櫻、按此乃海棠譜所載、帝子海棠是也、枝頭叢生如地膚枝葉、
小櫻。。卽彼岸櫻、或兒櫻、
花譜又曰、彼岸櫻、本名は小櫻、俗に彼岸櫻と云、河内國獅々の窟には彼岸櫻多し、同國の伊駒山の西鷲尾山の寺に八重多し、
達〇松岡玄達按ずるに、世に云鷲尾は自此寺出る故名なる歟、又武士の甲冑小櫻威あり、此花色にかたどる歟、

兒櫻

〔櫻品〕兒櫻。。
山櫻の中の一種、單の小輪白色疎花者呼兒櫻、洛陽仁和寺二王門下東側に一株あり、小花にして

あり、又著花疎密大小の別あり、葉の初出に青紅のかはるあり、吉野といふあり、花密なり、大抵山櫻といふは花疎なり、○下略

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕山櫻桃　ヤマザクラ　一名楔子急就篇

山ニ自生アル故、ヤマザクラト呼ブ、市中ニ種テ花ヲ賞ス、諸櫻ヨリ早ク開ク、單葉ニシテ落易シ、數少キヲヤマザクラト云、花多ク簇リ開ヲヨシノザクラト云、花小ナルヲチゴザクラト云、共ニ花後實ヲ結ブ、形正圓三分許長莖下垂ス、初メ綠色熟シテ赤色、或ハ黑色、兒童サクラボントト呼ブ、木皮和方ニ多ク用ユ、藥舖ニサクラノ皮ト云、樺皮トハ別ナリ、凡ソ樺櫻ノ類、皮ノ條理横ニシテ、他木皮ノ條理堅ナルニ異ナリ、山櫻桃ヲ大和本草ニ、ニハザクラト訓ズルハ非ナリ、ニハザクラハ多葉郁李、又千葉郁李ト云、又本經逢原ニ、櫻桃一種小者名山櫻桃ト云ハ非ナリ、集解ニモ數說アリ、時珍ノ說ニ、葉長尖不團ト云ヲ以テ、ヤマザクラトスベシ、唐山ニテハ櫻ヲ櫻桃ニ混ズルコト多シ、名花譜ニ說ク所ノ櫻桃ノ形狀ハ、全ク櫻ノコトナリ、コノ外考證多シ、櫻ハ明ノ宋景濂ノ詩アリ、

〔玉勝間六〕花のさだめ

花はさくら、櫻は山櫻の葉あかくてりてほそきが、まばらにまじりて、花しげく咲たるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず、葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり、大かた山ざくらといふ中にもしな〴〵の有て、こまかに見れば、一木ごとにいさゝかかはれるところ有て、またく同じきはなきやうなり、又今の世に桐がやつ八重一重などいふも、やうかはりていとめでたし、すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず、松も何もあをやかにしげりたるこなたに咲るは、色はえてことに見ゆ、空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花ともおぼえぬまでなん、朝日はさらなり夕ばえも、

山櫻

糸くゝり中輪なり　はちす中輪なり　大山木中輪大輪有　八重一重中輪大輪有

右は櫻の名なり、此ほかにもあるべし、

〔圓珠庵雜記〕花さくらにふたつあり、さくら花といふべきを、打ちかくしいへると、又紅のさくらをいへるは、さくらの中に一種の名なり、紅の薄花櫻などよめるもこれなり、六帖にさくらにつづけて、花櫻の題を出だし、又躬恒、つらゆきなどの集にもよめり、

菅家萬葉、あさみどり野べの霞はつゝめどもこぼれて匂ふ花櫻かな、重之集、花櫻つもれる庭に風ふけば舟もかよはぬ浪ぞたちける、古今春下、うつせみのよにもにたるか花櫻咲くとみしまにかつちりにけり、

〔頭書〕眞淵云、六帖には同じ事をも少しいひそへたる語あるは、別に擧げたるも多ければ、こゝに引くは中々わろし、

〔松屋筆記十三〕冬櫻

江戸谷中三浦坂の上なる寺に、毎年十月花盛なる櫻あり、年によりて十一月まで、花葉ともに盛なることあり、

〔一話一言二十四〕忍岡南塋乘抄

寛文十一年辛亥三月三日快晴、後園群櫻其中有香者名鐘山、又一株號本然、俗所謂櫻色者是也、

〔佐渡志五物産〕櫻　通名サクラ

數品アリ、羽茂郡ニハ八種菊ノ花ニ似タルモノアリ、土人深ク珍トス、他ニウツセバ枯ルトイヒ傳フ、

〔櫻品〕山櫻。。

凡山中に多、單辧にして色白く早く開くもの、通じて山櫻と呼ぶ、其中品類亦多し、花色紅の二種

右衛門櫻少色有、しべ長く少くさがる、　ふげんざう色有、八重、花中より葉一枚づゝ出るよし、
丸山色あり、よくくゝりて長くさがる、　たいさんぼく色有、くゝり長さがる、
こんわう櫻深谷金王丸が植云、櫻の種か、色は白、一重、大りん、　ちもと色有、せんやう、小りん、
ぢしゆ色有、大りん、くくりてさがる、　にはざくら白紫の二種有、兩種せんやう、小りん、
なら櫻いにしへのならの八重ざくらか　しほがま色あり、せんやう、大りん、底ほどくゝりてさがる、
ぼたん櫻色有、大りん、八重、くゝりさがる、　ひよとりむらさき、せんやう、大りん、くゝりて長くさがる、
うば櫻色有、八重、大りん、也、落花し葉なし、
ちござくら　いぬざくら　ひたちころ　はちす　きりん　うすいろ　ひざくら　おそざく
ら　いとざくら　いとくり　くまがへ　ありあけ　しやう〳〵　さこん葉中に有よし　まさむね
ほうりん寺

〔花壇綱目下〕櫻珍花異名の事

山ざくら壹重なり、櫻の中にての中輪なり、　ひがん櫻うす色白、中輪なり、　きりが八白八重壹重、大輪なり、　いと櫻中輪なり
江戸櫻中輪大輪あり　うす色壹重の中輪なり　浅黄櫻中輪なり　ちもと小輪なり
伊勢櫻中輪なり　匂ひ櫻中輪なり　こんわう中輪なり　うば櫻中輪大輪あり
衛門櫻八重の大輪也　あり明小輪中輪あり　わしの尾中輪なり　霧が谷小輪中輪あり
楊貴妃中輪なり　猩々小輪中輪あり　鹽がま中輪なり　南殿薄赤色有、中輪也、
いわいし薄赤色の大輪也　正宗中輪なり　てまり中りんなり　爪紅赤色の小輪
熊がへ中りんなり　せき山小りんなり　普賢像中りんなり　ひ櫻中輪大輪あり
仁和寺中輪大輪あり　虎の尾中輪大輪あり　奈良櫻八重壹重、中輪、　よし野中輪、八重壹重、
車がへし中輪大輪あり　法輪寺大輪なり　きりん櫻中輪大輪あり　さかて櫻中りんなり

櫻種類

反歌

去年之春、相有之君爾、戀爾手師、櫻花者、迎來良之母、

右二首若宮年魚麻呂

〔草木六部耕種法十一櫻花〕櫻ト梅トハ種類ノ極メテ多キ者ナリ、其ニ百餘種ヅヽ有リ、〇中略且ツ櫻品中ニ於テ、古來ヨリ其名高キ者ハ、彼岸櫻、寒緋櫻、香櫻、月白櫻、樺櫻、下垂櫻、紅絲櫻、上瑞櫻、八重櫻、熊谷櫻、流黃櫻、常盤櫻、犬櫻等ナリ、彼岸櫻ハ花單ニシテ小ク、下垂ナルヲ絲櫻ト云フ、寒緋櫻モ花ハ單ニテ紅キ色ナリ、此二種ハ花開コト最早シ、八重ハ花開クコト遲シ、熊谷櫻ハ八重ナレドモ花早シ、八重櫻ノ花ノ最モ遲ク開ヲ泰山府君ト名ク、犬櫻モ二種アリ、其一ハ單ナル山櫻ナリ、其二ハ彼岸櫻ノ如クニシテ、其花ノ種ヲ抽ルコト上瑞櫻ニ似タリ、花瓣ノ細ナルコト毛ノ如キ者ナリ、

〔地錦抄三〕櫻のるい　木春中末　櫻は、葉くいり花蘂長くさがりて咲をよしとす、尤うるわしき色ありて、

吉野　中りん、ひとへ、山櫻共いふ、吉野より出るたれは花多く咲て見事也、古今序に、春のあした、ふじの山のさくらは人丸が心にはもいるこのみなんおぼえける、

なでん　うすむらさき、八重くいりてさがる、

楊貴妃　うるわしき色あり、大りん、八重、よほどさがる、

ちやうちん　八重、大りん、くいりて長くさがる、

小手鞠　色有、小りん、

わしの尾　よほど色あり、大りん、くいりてさがる、

とらの尾　色あり、大りん、くくり長くさがる、

しだれ　少色有、ひとへ、小りん、木はおほく柳のごとくしだるゝ也、

大しだれ　花形、つれのしだれ也、木しだるゝ事おふふうなり、

奥州なでん　なでんより木形よく、木ちいさくして咲ゆへ、櫻の枯には是なつぐ、

きりがやつ　八重、ひとへ有、大りん、さがる、

大手鞠　色あり、ずいぶんくいりさがる、

大ちやうちん　右之花形成ほど大りん

らいてう　うすむらさき、八重、よくくいりさがる、

淺黃　水あさぎ色、八重とひとへあり、

ひがん　うすあか色、ひとへ、小りん、二月時正の時分花咲、秋のひがんにも自然花咲事有、

色よししだれ　花形色よし

賞スルニコレヲ第一トス、櫻花ノ品甚多シ、アゲテカゾヘガタシ、單アリ、八重アリ、八重ニシテ赤ヲ帶ルアリ、緋櫻ト云、青ヲ帶ルアリ、アサギ櫻ト云、香有リ、

〔東雅十六樹竹〕櫻サクラ〇中略 むかし朱舜水に、こゝの櫻花の事を問ひしに、櫻桃は此にいふサクラにあらず、唐山にしても、もし此にいふサクラあらむには、梨花海棠の如き數ふるにたらじと答へられしと、我師也し人は語りき、琉球、喝蘭陀等の國人のいひし所は、前の楓樹の下に見えたり、朝鮮に此物ありやなしやの事を、對州の人に問ひしに、かしこにある館中に、こゝの楊貴妃といふ櫻を移し植て、其花の開きし時に、王城の人の來り見しに問ひたりけるに、かしこにもある也、其樹名をば椺。といふ也といひしと答へたり、正德聘使の時に、其學士の稻若水に對へし所を見れば、彼國にも此物はなき也、さきに椺の字をもて對へしとといふは、椺亦作柰ものをいひしと見えたり、

〔松屋筆記六十五〕櫻

同書〇秋夜談に、客問テ云ク、西土ニハ櫻ナク、朝鮮ニハ櫻アリト云信ナルニヤ、答テ云ク、西土ノ書ニハ櫻ミヘズ、去ル戊辰ノ年朝鮮人ニ尋シニ、櫻アリテホンナモト云ト云ヘリ、

〔頭註〕櫻ノ始ハ御鎮座傳記ニ見ゆ、櫻ヲ花ト云フ、梅花无盡藏六ノ十五丁ゥ、

〔萬葉集三雜歌〕鴨君足人香具山歌一首幷短歌

天降付、天之芳來山、霞立、春爾至婆、松風爾、池浪立而、櫻花、木晩茂爾、奥邊波、鴨妻喚、邊津方爾、味村左和伎、百礒城之、大宮人乃、退出而、遊船爾波、梶棹毛、無而不樂毛、己具人奈四二、

〔萬葉集八春雜歌〕櫻花歌一首幷短歌

嬢嬬等之、頭插乃多米爾、遊士之、蘰之多米等、敷座流、國乃波多氐爾、開爾鷄類、櫻花能、丹穗日波母安奈何、

此外にも櫻樹を祭りて、木花開耶姫とするは、駿河の富士淺間もおなじ、一宮紀に見えたり、神名式に、甲斐國山梨郡金櫻神社、在二金峯山一三代實錄に、貞觀七年十二月廿日丁卯、令下甲斐國於二山梨郡一致上レ祭淺間明神上とあるも、皆伊勢朝明郡布自神社、櫻神社と同じく、一體一神なり、此櫻樹木花開耶姫を王仁はよみたるなり、故に萬葉集第二十に、

櫻花今盛りなり難波の海おしてる宮にきこしめすなへ

是は王仁が難波津に開耶木花の歌をふくみてよみたるなり、○中略櫻は此邦山野自然生の樹にて、木花開耶の轉音なり、サクヤサクラ一說に咲簇(サキムラガル)の訓ともいふ、キムノ反ク最初花を名付けて賞美せり、○下略

〔玉勝間 四〕櫻を花といふ事

たゞ花といひて櫻のことにするは、古今集のころまでは聞えぬ事なり、契冲ほうしが餘材抄に、くはしくいへるがごとし、源氏物語若葉上の卷に、梅の事をいふとて、花のさかりになるべく見ばやといへる事あり、これらはまさしく櫻を分て花といへり、

〔大和本草 花木十二〕櫻　文選沈休文早發二定山一詩、山櫻發欲レ然、註果木名、花朱色如レ火欲レ然也、王荊公詩曰、山櫻抱二石映一二松枝一、司馬温公ノ詩ニ曰、紅櫻零落杏花開、是中華ニ櫻ト云ハ朱花ナリ、日本ノ櫻ト云物ハ中華ニ無レ之由、延寶年中長崎ニ來リシ何清甫イヘリ、若アラバ中華ノ書ニ記シ、詩文ニ述作シ、賞詠スベキニ、此樹ナキト云ハ實說ナルベシ、朝鮮ニハアリ、昔年朝鮮ヨリ漂來ル舟ノ篷桁ニシタルヲ見ルニ、疑ヒモナキ本邦ノサクラ也、奈木ト云ヘリ、其花ヲ問シニ、朝鮮ノ客答テ、二三月淡紅白花ヲ開ク愛スベシトイヘリ、中華ニハ梓ヲ以書ヲ刻ム、日本ニハ櫻ヲ用ユ、木堅クシテ良材ナリ、凡土宜ニヨリテ品物有無アリ、是自然之理ナリ、不レ可レ疑、此木百年ノ壽ナシ、處々ニ刀ニテ皮ヲタテニワルベシ、榮ヘテ命長シ、日本ニ昔ハ梅ヲ花ト云、中世以來櫻ヲ花ト云、日本ニテ花ヲ

ちてうるはしきは櫻に及ものなし、よて後世にいたりては、花とのみいへば櫻の專稱ともなれるなり、貫之歌に、

櫻よりまさる花なき花なればあだし草木は物ならなくに、清少納言も繪にかきておとる物といひ、宋景濂は、恐是趙昌所ㇾ難ㇾ畫と作れり、西土萬國にも此種絶てなしといへり、

〔古事記傳十六〕木花之佐久夜毘賣、上に大山津見神之女、木花知流比賣と云もあり、名意、木花は字の意の如し、佐久夜は、開光映(サキハヤ)の伎波を切めて加なるを、通はして久と云なり、(若子(ワカゴ)を和久碁と云類なり)さて光映(ハエ)を波夜と云は、上なる下照比賣の歌に、阿那陀麻波夜とある波夜の如し、(○註略)かくて萬の木花の中に、櫻ぞ勝れて美き故に、殊に開光映(サキハヤ)てふ名を負て、佐久良とは云り、夜と良とは横通音なり、(小兒のいまだ舌のえよくもめぐらぬほどの言には、良理流禮呂も夜伊由延余と云て、櫻をも佐久夜と云、これおのづから通ふ音なればなり、○中略)されば此御名も、何の花とはなく、たゞ木花の咲光映ながら、卽主と櫻花に因て然云なるべし、やゝ後には、木花と云て卽櫻にせるもあり、古今集序の歌に、難波津に咲や木花とある是なり、(これも何の花となく、たゞ木花ともすべけれど、然にはあらず、又梅花とするは由なし、そは冬隱今は春べとゝ云語を、あしく心得て、おしあてに定めたるひがごとなり、○中略)又萬葉八(廿丁)に、藤原朝臣廣嗣、櫻花贈ニ娘子一歌に、此花乃云々、和歌(コタヘタル)にも此花乃云々とよめる、是は贈る花を指て、(字の如く)此花と云る物ながら、櫻を木花と云から、其を彙たりげに聞ゆるなり、さていよゝ後には、たゞ花といへば、もはら櫻のことゝなれり、(それもおのづから上代の意に叶へり)

〔茅窻漫錄中〕木花櫻

木。花。は古今集序細注よりして、千載以來梅花の名と成れり、されども其起りを考索するに、梅花にあらず、櫻花なり、木花開耶姫五字は、神代紀下一書第二に、妾是大山祇神之子、名神吾田鹿葦津姫、亦名木花開耶姫とあるを權輿とす、(文木華ともあり)木花は櫻樹にて、鎭座傳記に、伊勢朝熊神社以ニ櫻樹一爲ニ木花開耶姫靈一(サクラ、サクヤ音通ず、見ニ延經之注一)此朝熊社、櫻宮ともいふ、西行の歌あり、(○中略)

古事類苑

植物部六

木五

櫻名稱

〔倭名類聚抄 二十木〕櫻　文字集略云、櫻（烏莖反、和名佐久良、）子大如柏、端有赤白黑者也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕本居氏曰、佐久良、開光映之轉、謂是花開有光映勝他木也、也良通韻、○中略　玉篇、櫻、含桃也、上林賦、櫻桃也、又有梒字云、今謂之櫻桃也、亦作含、廣韻亦云、櫻、含桃、然則櫻卽櫻桃、櫻桃以鸎所含得名、故非櫻桃外別有單呼櫻者、源君分條兩載、非是、按加婆佐久良、當是山櫻桃、佐久良亦山櫻桃之一種、但濃華艶麗、非加婆佐久良之比、是樹西土所無、故無別漢名之可充也、

〔書言字考節用集 六生植〕櫻（サクラ）（支那以牡丹爲花王、日本以櫻爲花王、故國俗止呼稱花者櫻而已、又本朝賞櫻、植與于殿中、帝稱櫻宮、）

〔倭訓栞 前編十〕さくら　櫻をかりてよめり、沈休文詩に、山櫻發欲然、註に果木名、朱色如火然也と見え、王荊公詩に、山櫻抱石映松枝、司馬温公詩に、紅櫻零落杏花開と見えたるは別品なるべし、神代紀に、木ノ花開耶姬ありて、伊勢朝熊の神社に、櫻樹を其靈とせし事、古記に見えて、櫻ノ宮とも稱せり、西行の歌あり、神名秘書の苔虫神も、櫻大刀自の神體形石に坐り、苔生たるをいへり、恩圓上人文永十年の記に、小朝熊の宮の坤の方隅にそびえたる巖ありて、其上に櫻木あり、高さ三尺ばかり、此木往古已來かれず、是櫻大刀自命の神體也と見え、一宮記に駿河の淺間も木花開耶姬とす、富士も同じ、伊勢朝明郡に布自神社、櫻神社相並び、甲斐國の金櫻神社もまた此神を祭れり、さればさくらは開耶の轉せるなりといへり、或は咲簇るの訓義とす、きむ反く也、花木の中にも、開み

傳く、頂に兩刺あり、秋後兩裂すれば二子あり、麥粒の如し、至て堅硬、是其雌一種花實なき者あり、是其雄なり、又一種其葉稍圓く木の形狀尋常の者に異ならずして、枝條に全く圓實の如き者生ず、其色初淺綠、後褐色、其中空虛、亦蟲を生ず、卽蟲窠なり、綱目蟲部附錄に、嶺南有₂蚊子木₁と云ふ者なり、

〔地錦抄五〕榅　もちの木の葉のちいさきもの也

蚊母樹

按、海桐工匠以旋箱僞白桐、然木理縱文微似椹木理、劣於白桐矣、壹譜云、海桐花細白如丁香、而嗅味甚惡、遠觀可也、據此則花色白、蓋有赤白二種乎、

〔本草一家言二〕海桐花　凡稱海桐花者三種、和名扉木。俗呼登邊羅者扉之傳誤也、益軒云、古人除夜挾門戶上、後世以狗骨樹代之、葉似楊梅及丹靑樹、葉背有魚子紋、花白色碎細氣甚臭、結實似小枇杷及金橘子、而纍々攅枝頭、遠觀可愛、熟則折裂而見赤實如杜仲及南藤實、又一種刺。桐、名桐山礬、又名海桐、三物同名也、宜辨別、

〔大和本草雜木十二〕蚊子樹（ヒヨンノキ）　ヒヨンノ木又ユスノ木ト云、其實蚊ノヤドリト云、內ムナシ、長一二寸、西土ノ俗猿瓢ト云、別ニ實アリテ種子トナル、其木色アカク堅硬ナリ、薪トスベシ、葉ハ冬靑樹（トリモチノキ）、又シキミノ葉、山茶（ツバキ）ノ葉ニ似テ小ナリ、大木ヲ用テワリテ屋材トス、久ニ堪フ、

〔和漢三才圖會灌木八十四〕瓢樹（ひよんのき）　正字未詳　俗云比與牟乃木、其木名伊須、

按、其木葉並似女貞（ネヅミモチ）而厚、狹長、色微淡、三四月開細小花、深赤色、結實大如豆、自裂中子細小黑色、別其葉面如子者脹出、中有小蟲、化出殼、自孔口吹去塵埃、爲空虛、大者如桃李、其文理如檳榔子、人用收胡椒秦椒等末、以代匏瓢、故俗曰瓢木、或小兒戯吹之爲笛、駿州多有之、祭禮吹此笛供奉于神輿、四國九州多有之、斫木爲薪、木心白微赤、日乾者全赤、堅硬爲薪之上品、

一種　有唐比與無。乃。木。者。、花葉無異、但葉小耳、

〔草木性譜人〕蚊母樹（ひよんのき）　附　蚊子木（まるばのきひよん）

山中の產なり、庭除に植れば、火災の時風を發し火を防ぐ、其葉四時靑翠、夏新葉を生じ、葉中に瘿の如き者發し、中より小蟲羽化して散出す、又花あらずして枝條に實の如き者を生ず、卽古度子（ひよん）の花果附錄　無　初綠色、後褐色其中空虛、其殼薄して甚だ堅硬、赤蟲を生じ、羽化して散出す、いんのこと云ふ、是蟲窠なり、又偶夏葉間に朶を發し、紅色の花簇生す、花後實を結ぶ甚だ堅硬、褐色の粉を

海桐

箱器、又屈以爲釵、又一種花如櫻桃而白色單瓣、三月開花、京北岩屋山雲畑村野蹊多生之、呼加世宇津木、又一種細葉花狀如盞、有黃紅白三色、呼古米宇津木、或古米ロ宇津木、結子有六稜、如梔子、呼古義乃子、可烹食、古米宇津木之名見淸少納言枕草紙、一種有稱三葉宇津木、其葉三四葉生于一處、莖皮赤、有毛、多涎液、採其汁灑帋製作奉書、救荒本草所謂省沽油是也、以上皆荊屬、就中山宇津木、波奈多禮宇都木、多液堪用、其他少液、

〔大和本草 十二花木〕空木（ウツギ） 四月ニ白花ヲ開ク、卯ノ花ト云、觀賞スベシ、古歌ニ多ク詠ゼリ、歌人コレヲ雪ニ比セリ、水ヲ好ム、漢名未詳、唐詩ニハ此花ヲ不詠、其葉ハ兩々相對ス、長枝多シ、實ハ胡椒ニ似タリ、其樹高四五尺ニスギズ、其木中（ナカ）空虛也、故ニウツ木ト云、其木理細膩ナリ、用之器トシ、木釘トス、花ノ千葉ナルモノアリ、順和名抄ニ、溲疏ヲ宇豆木ト訓ズ非ナリ、本草ノ說ニ不合、本草別ニ楊櫨アリ、一名空疏、坊間ノ刊本ニウツキト訓ズ、然ドモ本草ニ其子爲莢（サヤ）トアリ、ウツキニハ莢ナシ、此訓亦非ナリ、又谷空木アリ、木ハ空木ノ如ク、葉ハ苧ニ似テ花淡紅ナリ、木空虛ナラズ、空木ノ性不知、其皮ヲ去テ青キ皮、癬瘡ノ藥ニ合ス、○中略山ウツ木　四月花ヲ開ク、十姉妹ト相似テ不同、小木ナリ、花紅白ナリ、京畿ノ俗ハコレヲモ卯ノ花ト云、古歌ニ詠ゼシ卯ノ花ニハ非ズ、京都近邊ノ山ニ多シ、牡荊ノ類ナルベシ、

〔枕草子 三〕木の花は

うの花はしなをとりてなにとなけれど、さく比のおかしう、郭公の陰にかくるらんと思ふに、いとおかし、まつりのかへさに、むらさきの、わたりちかきあやしの家ども、おどろなるかきねなどに、いとしろう咲たるこそおかしけれ、あをいろのうへにしろきひとへがさねかづきたる、青くちばなどにかよひていとおかし、

〔和漢三才圖會 八十三喬木〕海桐（たうぎり）　刺桐　今云島桐、○中略

疏、一名楊櫨、則知是名出陶注也、

〔和漢三才圖會八十四灌木〕溲疏　俗云朝鮮枸杞○中略
按朝鮮枸杞、枝葉花皆似枸杞、而子亦如枸杞、略大、八九月熟赤色、樹有刺而中空、山中則高丈許者亦有、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕溲疏　シホミグサ古歌　ハツミグサ　カキミグサ　ユキミグサ
ミチモトメグサ　ナツユキグサ　ウノハナ上共同　ウツギ和名抄　ウツゲ土州　ハメキ薩州
クチウツキ松前　ヒキダラ江州　シロウノハナ
山麓ニ多シ、人家ニモ多ク栽ユ、小木ナリ、高六七尺枝葉對生ス、葉ハ形狹長ニシテ三四寸、邊ニ細齒アリ、四月ニ花ヲ開ク、白色五瓣穗ヲナスコト五六寸、卯月ニ開ク、故ニウノハナト云、又千葉ナル者アリ、又土州ニハ深紅花ナル者アリト云、並ニ花後實ヲ結ブ、形蔓荊子ノ如ニシテ、小ク色黑シ、藥舖ニテ君仙子ト云、木ハ內空シテ堅シ、梓人刮テ釘トス、一種小葉小花ナル者ヲヒメウツギト云、一名朝鮮ウツギ、一種短葉ニシテ花梅花ノ形ニ似タル者ヲムメウツギト云、コノ外品類甚多シ、
増、一種フスマウツギト呼モノアリ、高三四尺春新葉ヲ對生ス、ウツギノ葉ヨリ潤クシテ縱ニ三道アリ、花ハ尋常ノモノヨリ遲ク、四瓣ニシテ五六分穗ニ成テ長シ、

〔本草一家言二〕荊　和名宇津木、凡荊類有數種、和邦絕無識者、用荊瀝者闕如也、按有白荊、有紫荊、有黃荊、就花而命名焉、白荊卽今卯之花是也、其實名君仙子、和方用之有波奈多禮宇津木、卽卯之花嫩條下垂者、黃荊有二種、一種名山宇津木是也、花譜所謂海仙花、又名鬢邊嬌者也、先輩誤、充壼葉花非也、一種莖赤有線稜不圓不方、葉似蓖麻葉排生、出穗二三寸、開細紅花、俗名葉幹之木、江州磨針山有白花者、土人呼虎尾、卽詩榛楛濟々之楛是也、詩疏云、楛似荊而赤、莖似蓍、陸機云、上黨人織以爲斗筥

音にて額の字なるべし、神社の額に似たるよりの名歟、

〔剪花翁傳 前編三 四月開花〕紫陽花　三種、色紅白藍、開花四月中旬、形梨花のごとき英數十箇群簇て、徑三寸餘の房となる、開けば徑四五寸ばかりになる也、又八九寸許になるもあれども、插花にはとらず、方日向、地土えらばず、肥大便寒中入べし、春彼岸より淡小便三五度そゝぐべし、挿春彼岸よし、移正月中、升水の方は切口を燒べし、同種に斑入葉あり、

〔萬葉集 二十〕同月十一日、左大臣橘卿宴右大辨丹比國人眞人之宅歌三首
安治佐爲能、夜敝佐久其等久、夜都與爾乎、伊麻世和我勢故、美都都思努波牟、
右一首、左大臣寄味狹藍花詠也、

〔散木弃謌集 二 夏〕殿下にて夏夜の月をよめる
あぢさゐの花のよひらにもる月を影もさながらおる身ともがな

土常山

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕常山 〇中略
土常山ハアマチヤ、別ニ絞股藍アルユヘ、木アマチヤトモ云、一名甜葉、延平府志 三百頭牛藥、甘草發明 城州ノ宇治田原ニ園ヲナシテ栽ユ、諸州深山ニモ亦多シ、木ノ高サ二三尺、葉土牛膝葉ニ似テ狹ク鋸歯アリ、葉ノ末紫色ヲ帶ビ兩對ス、五月枝ノ梢ゴトニ花アリ、形蝴蝶花ニ似タリ、碎小瓣ノ花內ニ攢簇シ、外ニ四瓣ノ大花トリマキ開ク數色アリ、外碧ニシテ內白キ者、內外碧色ナル者、外白ク內淺紫ナル者、外碧ニシテ內淡紫ナル者、內外白キ者、內外淡紅ナル者アリ、葉ヲ採リ蒸シ、揉テ青汁ヲ去リ飲トス甚甘シ、今四月灌佛ニ供スル者コレナリ、又一種形同シテ葉甘カラザル者アリ、コガクト云、土常山ノ一種ナリ、大和本草ニキアマチヤノ一名トスルハ非ナリ、

溲疏

〔倭名類聚抄 二十 木〕溲疏　本草云、溲疏一名楊櫨、溲音所流反、和名宇豆木、
〔箋注倭名類聚抄 十 木〕千金翼方、證類本草下品有溲疏、不載楊櫨之名、證類本草引陶隱居云、李云、溲

可ㇾ愛、郡守白公曰二紫陽花一と見えたり、歌に、よひらのはなとよめるは、花の四枚にさくをいふ也、唐あぢさゐあり、其樹たち葉もうつぎに似たり、尖あぢさゐともいふ、花の形による也、六月に咲り、草あぢさゐあり、秋花さくべにかたに似たり、よて草類ともいふ、

〔和字正濫抄二〕中下のゐ

紫陽花　あづさゐ　和名かくのごとし、万葉には味狹藍とかきて、つねのごとく、あぢさゐとよめり、六帖も同じ、味はほむる詞、狹藍はさあゐといふべきを、あを略していふ、たゞあゐなり、あぢさゐの花は青ければ、かくはなづくるなり、万葉に、玉きぬのさゐ〳〵沈みとよめるも、たび〳〵藍に入る丶なり、

〔大和本草花草七〕紫陽花(アヅサイ/アヂサイ)　韻語陽秋曰、有二山花一、色紫、氣香、穠麗可ㇾ愛、人莫ㇾ知二其名一、白樂天標二其名一曰二紫陽一、紀ㇾ之以ㇾ詩、其花テマリ花ノ如シ、淡碧色ナリ、其莖ハ木ノ如ニシテ、高サ二三尺ニスギズ、叢生ス、花ハ日ヲオソル、古歌ニアヂサイトヨメリ、順和名抄ニハアツサイト訓ズ、或曰、是常山ナリト、非也、常山ハ別物ナリ、又花ヒトヱナルアリ、山林ニアリ、枝ヲサシテモ活ク、

〔難波江七〕紫陽花

萬葉集卷廿、(四十六オ)安治佐爲能、夜敝佐久と有るを、六帖草の部にのせたり、さて萬葉集卷四、(五十七オ)事不問、木尚味狹藍と有り、これはたしかに木とよめり、(但此歌一首の意解かぬれば、六帖にのせぬにや、六帖の比には歌はきこゆれど、草とさだめたるからは、木尚とあれば、のせぬにや、)和名抄廿卷本には、草部に紫陽花と題して、白氏文集を引證としたり、十卷本にはのせず、近日の本草藥名備考和訓抄には、木部に入て、花鏡を引て八仙花と有り、又物品識名にも、木部に遵生八牋を引て、聚八仙と有り、本草にはみえず、新撰字鏡に、草部、蓮(止毛久佐、又安知左井、)と有れど、蓮の字を安治左爲にあてたる據、おのれ(○閲保事)本いまだしらず、物產家にとはまほし、又一種ガクといふあり、アヂサヰノ種類なるべし、漢名詳ならず、中世よりがくの花と歌によめり、字

など、所によりてさま〳〵に稱よし、大倭本草（十二の巻）物類稱呼、（三の巻）倭漢三才圖會（八十二の巻）本草啓蒙（卅の巻）に見ゆ、伊豆國にては古我多比（コガタビ）とよびて、葉は舶來肉桂に似て、末小尖り、表裏共に色つやゝかなり、實は紫葛（タマツヅラ）の實（紫葛關東にてエビといふ）より小し大きくて、三四五顆房をなして結り、初は青色熟れば濃紫色なり、中に天瓜核（タマヅサノサネ）の貌なる核あるよし、門人藤井昌榮（伊豆三島神主）いへり、さて多万乃木とは、實の圓にて玉に似たる故の名也、陀母（ダモ）、多夫（タブ）、多菩（タボ）は通音也、久須陀毛（クスダモ）は香玉（カグタマ）にて、香きよしなり、玉久左（タマクサ）、玉我良（タマガラ）、加良陀毛（カラダモ）なども玉のよしある名なり、古我多比（コガタビ）も小香玉の通音にて、古（コ）と小（コ）と通ふすしは、余巳に佐野渡の注釋にいひたり、又此木の一種に、葉末尖らず、裏に白毛ありて、實胡頽子（ナハシログミ）ばかりなるが、十顆或は二三十顆附合て結り、初は青色、熟れば赤きものあり、白陀母（シロダモ）、白多夫（シロタブ）、裏白（ウラシロ）、都豆乃木（ツヅノキ）、油木（アブラノキ）、須々便（スズベ）、伊白都豆（イシロツヅ）、乎支乃三乃木（ヲキノミノキ）、阿加多比（アカタビ）などよぶ、乎支乃三乃木といふは、小香（カ）の實の木の心也、阿加多比は赤玉の通音にて、實の赤ければ也、白陀母、白多夫、白都豆、裏白などは、葉裏の白色によれるなり、又大多比（オホタビ）とて葉いとおほきく、裏小白くて古我多比よりも大なる實二顆許房をなして結り、初青色、熟後濃紫色なるがあり、古我多比より下品、白多夫よりは上品のよし、藤井昌榮いへり、大多比といふは、葉も實も大なるによれる名也、かく一種にて形狀異なるは、松に男松、女松、姫松、榲に白榲赤榲などあるがごとし、

〔佐渡志（五物産）〕月桂　方言ダモ

實ヲムスブコト、南天燭ヨリ大ナリ、

〔新撰字鏡（草）〕蓧（止毛久佐、又安知左井、）

〔倭名類聚抄（二十草）〕紫陽花　白氏文集律詩云、紫陽花（和名阿豆佐爲）

〔倭訓栞（中編一阿）〕あぢさゐ　新撰字鏡に見ゆ、万葉集に味狹藍とかける味はほむる詞、狹藍は花の色をいふ也、倭名抄には紫陽花あづさゐとみゆ、白氏文集を引り、南部新書に、招賢寺僧植（山）桂、香紫

月桂

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕月桂　クロツヾ　アサカイ因州
天竺桂ノ實ナリ、コノ實ヨリ採ル蠟ヲ、アサダ蠟阿州ト云、又コガ蠟防州ツヾ蠟肥前ト云蠟燭ニ造リ燃セバ臭氣アリ、集解ノ說甚妄ナリ、凡ソ物ノ子ヲ雨ラスコト、古今其例多シ、○下略

〔本草一家言二〕月桂　○○○和名駝毛、唐人題靈隱寺詩、有桂子月中落、天香雲外飄句、詩家皆云、中秋月夜風起、則滿山降桂子、如雨、古今以爲奇異事、然日本諸州亦多產之、加州一山寺、毎年八月月夜降桂子、寄來其實、視之白黑相雜、試蒔種、則至易生、乃駝毛也、又紀州紀三井寺、備前州某邑修驗道者塚上稱昆蘭樹者、實形如櫧子及甜櫧實、八月熟、谷風一起則其實飄散、隕於雲外、又伊賀州出者、葉薄似青楊樹、有疎鋸齒、京路四邊產者有二種、實赤者曰赤津桂、黑者曰黑津桂、一名胡賀、一名樟面當、葉似菌桂而背白、俱八月實熟、隨風而零、皆是月桂之種、非他物也、又有月季花、一名月桂紅、一名月繼花、和名四季茨、花鏡和書或因有月繼之名、誤爲月桂混之、殊非種類也、玄隨編

〔松屋叢考一〕三樹考○中略
櫁　古今ノ物名に友則
みよしの丶吉野の瀧にうかび出るあわをか玉のきゆとみゆらん友則家集にも載て異同あり同墨滅歌に、勝臣、
かけりてもなにをかたまのきてもみんからはほのほとなりにしものを、などよみて、俗に多万乃木とよぶ、古今榮雅抄十の卷に、櫁の字を書れしも、靈木の合字なり、漢名は丹陽木酉陽雜俎とも、天竺桂本草綱目とも、山桂同上とも、大樹繁花同上とも、月桂同上ともいふ、舶來の肉桂よりも下品、楠にも似たれど、それよりは上品なり、藪肉桂、松浦肉桂、佛多良之、油柴、米牟止宇太母、油太母、陀万、陀母、多夫、久須、多夫、多菁、久須陀母、玉久左、玉我良、加良陀母、久須米牟止宇、古我乃木、安左加比、阿左陀、黑阿佐太牟圖、黑都豆乃木、鹽陀万、黑陀万、古我比乃木、多都乃木、都豆乃木、波奈我、油盜乃木

ノ者ニ同、

〔重修本草綱目啓蒙 香木二十三〕天竺桂 ヤ°ブ°ニ°ツ°ケ°イ° 松°浦°ニ°ツ°ケ°イ° ホ°ト°ケ°タ°ラ°シ° ダ°モ° ダ°

マ°タ°マ°タ°ブ°筑前 ク°ス°タ°ブ°同上 メ°ボ°加州 ク°ネ°ダ°モ° ア°ブ°ラ°ダ°モ° ア°ブ°ラ°シ°バ°

メ°ン°ド°ダ°モ°勢州 タ°マ°ク°サ°讃州 タ°マ°ガ°ラ°同上 ク°ス°メ°ン°ド°ウ° カ°ラ°ダ°モ°同名アリ コ°ガ°ノ°

キ°播州 ア°サ°カ°イ°因州 ア°サ°ダ°阿州 ク°ロ°ア°サ°ダ° ム°ヅ°共上同 タ°ロ°ツ°ベ°ノ°キ°肥前 シ°ホ°

ダ°マ°上総 ク°ロ°ダ°マ°豆州 コ°ガ°イ°ノ°キ°長州 一名丹陽木西陽雑組

山中ニ自生多シ、甚大木アリ、葉ノ形桂葉ト同ジ、只三縦道末マデ通ラズ、横脈(ヨコスヂ)アリ、香氣少シテ莽(シキ)草(ミ)氣アリ、圓葉狹葉濶葉數品アリ、コノ樹皮ヲ採リ松浦桂心ト稱ス、肥前ノ松浦ヨリ出ス故ナリ、味澀ク最下品ナリ、近年根皮ヲ出ス、コレヲ眞ノ根皮ト云、微シク辛味アリテ樹皮ニ優ルト雖ドモ、藥用ニ堪ズ、實ハ櫧(カシ)實(ノミ)ノ如ニシテ、三四粒朶ヲナシテ下垂ス、熟シテ黑色、上ニ白粉ヲ生ズ、外家ニ用ユ、クロツヾト云、又一種葉背ニ白毛アル者アリ、臭氣多シ、至テ下品ナリ、コレヲシ°ロ°ダ°モ°ト云、一名シロタブ、筑前ウラジロ、奥州ツヾノキ、アブラキ、薩州ス、ベイ、同上シロツヾ、肥前ヲキノミノキ、豐前實ハ形圓ニシテ無患子(ムクロジ)ノ如シ、熟シテ色赤シ、搾リテ油トスルヲ、ヲキノミノアブラ豐前ト云、

増、一種カ°ラ°ダ°モ°ト呼モノアリ、ソノ形桂ニ似テ、葉豚櫧ト同クシテ强ハシ、大木ニ成ザレバ花實ヲ生ゼズ、花ハ至テ小ニシテ淡靑色、實ハ白ダモニ同ジ、紀州ニテヲホドノキト云、實ヲ搾リ油ヲ取ルベシ、

又近年天竺桂ノ厚皮ヲ取リ、厚朴ニ僞ル、是ヲタヲ皮ト呼ブ、ソノ形古渡ノ厚朴ノ如シ、唯微シク白キ筋アルヲ異トス、宜ク擇ビ用ユベシ、

〔紀伊續風土記 物産六上〕天竺桂(ダモ) 本草、俗名ヤブ肉桂、葉背に白色あるを白ダモといひ、花開きて赤色の者を赤花のダモといふ、 各郡山中に產す

七八年目に木の根の片側半分土を掘、根を伐とり、藥種屋へ賣、又三年も立て片側半分取て賣よし、聞及べり、隨分此肉桂は作りて大利を得たるよし承りぬ、併し御年貢のかろき地の穀物の出來ざる地に作るべきものなるべし、

〔今昔物語二十四〕震旦僧長秀來此朝被仕醫師語第十

今昔、天暦ノ御時ニ震旦ヨリ渡タル僧有ケリ、名ヲバ長秀トナム云ケル、本醫師ニテナム有ケレバ、鎭西ニ來ケルガ居付テ不返マシカリケレバ、京ニ召上テ醫師ニテナム被仕ケル、本止事无キ僧ニテ有ケレバ、梵釋寺ノ供僧ニ被成テ公家ニ被召仕ケリ、然テ年來ヲ經ル間ニ、五條ト西ノ洞院トニ□ノ宮ト申ス人御マス、其宮ノ前ニ大キナル桂ノ木ノ有ケレバ、桂ノ宮トゾ人云ケル、長秀其宮ニ參テ物申シ居ル程ニ、此ノ桂ノ木ノ末ヲ見上テ云ク、桂心ト云フ藥ハ此國ニモ候ケレド、人ノ否不見知(知原脱、今據一本補、)ズコソ候ケレ、彼レ取リ候ハムトテ童子ヲ木ニ登セテ、然々ノ枝ヲ切下セト云ヘバ、童子登テ長秀ガ云フニ隨テ切下シタルヲ、長秀寄テ刀ヲ以テ桂心有ル所ヲ切取テ宮ニ來ケリ、少シヲバ申シ給ハリテ藥ニ仕ケルニ、唐ノ桂心ニハ增テ賢カリケレバ、長秀ガ云ケルハ、桂心ハ此國ニモ有ケル物ヲ、見知ル醫師ノ无カリケレバ、事極メテ口惜キ事也トナム云ケル、(○云ケル三字原脱、今據一本補、)然レバ桂心ハ此國ニモ有ケルヲ、見知レル人ノ无クテ不取ナルベシ、長秀遂ニ人ニ敎フル事无クテ止ニケリ、長秀止事无キ醫師ニテナム有ケル、然レバ長秀藥ヲ造テ公ニ奉タリケリ、其方于今有トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔伊豆海島風土記中〕大島、(○中略)享保の頃、肉桂の苗渡させし、これを植育てしに、二本は枯て一本生育ち、今三尋あまり廻り二尺ばかりにて、枝葉とも榮へてあり、

〔採藥錄五木〕肉桂

今薩州ニ多ク栽ユ、卽東京ノ種ナリ、寒ヲ畏ル故、他處ニ不長、秋八九月ニ皮ヲ取リ陰乾ス、味舶來

巖桂一名花仙事物異名 仙客典籍便覽 仙友同上 山友事物紺珠 天闕淸香 巖山圭木同上 狀元花名物法言
天香尺牘雙魚 七里香圖書 鳳尾共同上 九里香汝南圃史 金粟品字箋 檜花通議

〔地錦抄 五〕桂心 につけいとは葉形各別なり、香味も異有、

〔廣益國產考 七〕肉桂を仕立る事

肉桂を仕立るには、先實の生を調、一粒づゝ實をむくべし、指にてむきては爪はれ痛めば、木綿切につゝみてむくべし、扨先砂眞土の肥地を畦つくりして、綿より少しうすく蒔べし、蒔肥しは綿と同様にてよし、貳寸計り生出たる時、根を貳寸程よけて油糟を粉にして施べし、三寸にも伸なばしげりたる處は間引、別畑に間二寸程置、植かへ日覆すべし、然して土用前に干鰯か綿實かすにても施べし、然すれば十月頃には七八寸一尺にも伸べし、霜月始頃みなこぎあげ、別畑に畦をつくり、斜にしげく植て霜覆ひをすべし、

春三月上旬にこきあげ、畦に二行に間四五寸置植て、初年の通りに肥しを施し育れば、三四尺に伸べし、其年暖國ならば、上に霜覆するにおよばず、寒國ならば初年の通り覆ひをすべし、然して翌春本植すべし、

植場所は遠方にすべからず、我家に近き所の藪抔起して植れば成長早し、幾年も置ものなれば、隨分不毛の地を開きて植べし、

植る地面は、一圓に畑のごとくならして、一間半程間置植べし、木の成長せざるうちは、いろいろのものは作れども、植たる木の根は四尺四方には何にても作るべからず、作れば必其木成長せずしてかじけるもの也、 本植して、肥しは餘り行屆かぬものなれども、年々ごもくやうのものを根に入、又厩ごえ埋れば生立よろし、 是を掘事は、七八年十年位にて根よりほり、楊枝を伐、皮をむき桂枝とし、木の皮は肉桂とし、根皮は取分藥種屋に賣べし、

辛味少シテ澀味ヲ帶ブ、桂ハ熱地ノ產ニシテ、東京交趾皆南方ナリ、嶺南桂州ハコノ木アルニ因テ名ク、移シテ嶺北ニ栽ユレバ、氣味殊ニ辛辣少シ、藥ニ入ルニ堪ヘズト、頌ノ說ニ云リ、漢種ヲ本邦ニ栽テ、味ノ變ズルコト宜ナリ、九州四國ニハ和產ノ桂アリ、其形狀香味皆漢種ニ同ジ、今天竺桂ノ根皮ヲ采リ賣ル者アリ、香味共ニ良ナリ、然レドモ本草ニ根皮ヲ用ユルコト見ヘズ、

増、凡ソ桂ヲ擇ブニ、ソノ產ニ拘ラズ、紫色ニシテ辛甘、コレヲ嚼デ粘氣ナキ者ヲ上品トス、又皮厚キ者ハ味薄ク、皮薄キ者ハ味辛シ、故ニ扁樣(ヒラ)或ハ草樣(ワラヂ)ノ二品ヲ用ユベシ、然ルニ扁桂枝ハ舶來ノ桂枝中ヨリ擇ビ出セドモ、草桂枝ハ元來薩摩產物ト稱シタル者ニシテ、天保ノ末ヨリ肆中ニ出サズ、故ニ今ワラヂト呼モノハ、舶來中ノ細長キモノヲ擇タルナリ、又天保十年ノコロヨリ、形色共ニ上品ノ桂枝ニ同クシテ、辨別シ難キモノヲ多ク混入ス、其味澀シ、コレ天竺桂(ダモノキ)ノ皮ナリ、

箇桂

交趾ノ肉桂ナリ、皆枝皮ニシテ薄ク、二三重卷ク者ナリ、故ニ卷肉桂ト云、味甚辛シ、ワリ交趾ト呼ブ者ハ大サ五分許、二ツワリニシテ內ニ脂アリ、今ハ眞ノ東京ナシ、故ニ交趾ヲ上品トスレドモ、此品モ久シク渡ラズ、古渡ハ甚稀ナリ、故ニ藥舖ニ廣南ノ內形相似テ辛味アル者ヲ撰ビ出シテ、交趾肉桂ト名ケ賣ル、古ハ藥舖ニ卷肉桂ヲ誤テ官桂ト云、本經逢原ニ筒桂俗名官桂ト云ノ誤リニ因ルナリ、別ニ草(ワラヂ)肉桂ト呼ブアリ、交趾ノクズナリ、今ハ廣南ノ中ヨリ撰ビ出ス、

集解、時珍ノ說ニ、叢生巖嶺間謂之巖桂、俗呼爲木犀ト云ハ、今庭際ニ栽ユル所ノ木犀ナリ、俗名ダモ(天竺桂ト同名)トモ云、唐山ニテ詩ニ詠ズル桂花ニシテ、藥用ノ桂ノ類ニ非ズ、葉ハ木蓮(イタビ)ニ似テ堅ク細鋸齒アリ、冬凋マズ、秋ニ至テ葉間ニ小花ヲ開ク色白シ、又黃赤色ノ者アリ、其香遠ク聞テ瑞香ノ花ノ如シ、唐山ニハ數品アリ、春花サク者ヲ春桂(物理小識)ト云、四季花サク者ヲ四季桂(花鏡秘傳)ト云、毎月花サク者ヲ月桂(同上)ト云、又紅花ノ者ヲ丹桂(汝南圃史)ト云、一名紅桂(同上)

日本ニ肉桂ノ木ト云者所々ニ有之、葉ハシキミニ似テ、桂ノ香モ味モ少シアル者ナリ、松浦ト同種ナリヤ未見松浦樹、故ニ難決、

薬性賦註解曰、其在下最厚者曰肉桂、在下有入腎之理、屬火、有入發之義、去其麁皮、爲桂心、入心脾肺四經、其在中次厚者曰官桂、入肝脾二經、其在上薄者曰薄桂、在上而走肩臂亦居上、故宜入之、其在嫩枝四發者曰桂枝、四發有發散之義、且氣味俱輕主表、

此註最可也、肉桂官桂薄桂桂枝桂心、於一樹之上有異名、主能亦各別、如今倭薬舖以別種者名之非也、

〔重修本草綱目啓蒙　二十三香木〕桂　牡桂　ニツケイノキ　一名尉陀生薬譜　尉佗圭輟耕録　咄者金光明經

桂ノ字ヲ和名抄ニメガツラト訓ズ、カツラト訓ズルハ、桂ノ字ノ古訓ナリ、今城州加茂祭ニ用ヲルヽ所ノカツラノキトハ別ナリ、コレハ古名オガツラニシテ、漢名詳ナラズ、桂古ハ東京ヲ上品トス、其味甚辛甘ニシテ香氣烈シ、長サ一尺許、細クワリテ木皮ニテツナゲリ、故ニトマキ肉桂ト呼ブ、コノ品今絶テナシ、交趾ノ肉桂ハ辛味多ケレドモチバリアリ、故ニ古ハ上品トセズ、東京ノ次トス、今薬舖ニ東京ト呼ブ者ハ皆下品ニシテ、本經逢原ニ謂ユル板桂ナルベシ、今ハ上品ノ東京ナキ故、交趾ヲ上品トス、然レドモ交趾ノ眞物久シク渡ラズ、古渡モ甚稀ナリ、故ニ今薬舖ニ廣南ノ内ヨリ味辛キ者ヲ撰ビ出シテ、交趾ト名ケ賣ル、其肉桂折桂枝、扁ヒラ桂枝、草ワラ桂枝等ト名クル者モ、皆廣南中ヨリ撰ビ分ツ者アリ、又紅毛肉桂アリ、形狹クシテ長サ二三尺、粗皮ナクシテ赭黄色、厚キ者ハ味辛ク、薄キ者ハ味淡シ、他桂ノ味ト相反ス、コノ者上品ナレドモ今少シ、新渡ノ桂ハ皆皮厚シテ、味淡シク下品ナリ、方書ニ肉桂桂心官桂桂枝等ノ名アリ、中略○當ニ本草滙ノ説ニ從ヒ、桂枝ト柳桂トヲ分ツベシ、其柳桂ハ草桂枝ナリ、享保年中南京種來リ、今諸州官園ニ甚多ク繁茂ス、コノ種京師花戸ニモ多シ、葉形細長ニシテ三縦道葉ノ末マデ通リタルヲ上トス、下品ノ者ハ葉ノ末ニ枝筋アリテ三縦道通ラズ、其木四時新葉ヲ生ジテ繁茂シ易シ、コノ皮香氣ハアレドモ、

以₂卷者₁爲₂菌桂₁、〔是和俗曰₂官桂₁〕半卷及板者爲₂牡桂₁、〔通用肉桂也、頌説少異、〕卽自明白、

弘景曰、經云、桂葉如₂栢葉₁、澤黑皮黃心赤、時珍曰、栢葉之桂乃服食家所₂云、非₂此治病之桂₁也、

以上、菌桂牡桂栢葉桂アリ、頌ハ筒桂肉桂桂心官桂板桂ノ名ヲ擧、

考筒桂ハ和ニ云官桂嚼ンデ舌滑ナル者也、肉桂桂心官桂ハ一樹也、板桂ト云ハ和ノ松浦桂心ナルベシ、〔未₂知₁木樣₁、故難₂決、〕

菌桂ヲ官桂ニ用コトナカレ、主能異ナリ、只肉桂ノ味能者ヲ可₂用、桂心ニ松浦桂心ヲ用コトナカレ、味ナクシテ只香氣許リ似タル者也、

時珍曰、桂此卽肉桂也、厚而辛烈、去₂粗皮₁用、其去₂內外皮₁者卽爲₂桂心₁、

雷公曰、去₂上粗皮幷內薄皮₁、取₂心中味辛者₁用、

二公ノ所說誤リ也、諸桂皆內ノ薄皮一片許、辛シテ心中モ麁皮モ味ナキ者ナリ、是只心ノ字ニ心ヲ付テ、內外ヲ去テ中ヲ取ト云フ、此心ハ木理ニ近キヲ云也、此誤リヲ承テ脩治集要ニモ、內外ノ皮ヲ去ト云ナリ、

蒙筌云、近₂木黃肉₁、但去₂外甲錯麁皮₁、　集要刮₂去麁厚近₁裏者爲₂桂心₁、

此說可ナリ、木ニ近處ノ內ノ方ノ甚辛ヲ桂心トシテ可₂用、松浦桂心ハ用ルコトナカレ、大ニ誤リ也、但日本ニテ配合シタル方ニ、桂心肉桂雙ベ用ルコトアリ、ソレニハ松浦桂心ヲ可₂用、本朝誤リ來シコト年既ニ尙シ、松浦桂ニテクミ合タル方ナレバ也、唐書ノ方ニハ必肉桂ノ辛ヲ擇デ、內ノ薄皮一片ヲ可₂用、松浦ヲ用ルコトナカレ、

桂枝ハワラ桂枝ト云者ヲ用ルコトナカレ、別種ニシテ眞ニ非ズ、疑クハ菌桂ノ枝ナルベシ、藥家ニ官桂ト云者ナリ、唯常ノ肉桂ノ中ニ、枝ノ皮ト云ベキ者アリ、是レ眞ナリ、

尺桂官桂肉桂桂心薄桂、皆一種ニシテ、肉桂ノ辛甘一木ノ上ニテ數名アルナリ、

又按桂有三種、單稱桂者、卽栢葉桂也、又有菌桂、辨于前、又有牡桂、別是一物也、已上是三種也、又按桂有雌雄、雌木味不辛、雄木味辛、入藥用乃肉桂也、雖其木狀葉形品々不同、然氣味芳香辛烈可入藥者、通謂之肉桂、猶大小茴香、形狀甚殊、而氣味全同、故通言茴香也、然則栢葉桂、菌桂、牡桂、宜總桂而已、

〔本草辨疑四木〕桂

今藥舖ニ四種アリ、肉桂、官桂、東京肉桂、桂心ナリ、桂枝ニ二品アリ、只ノ桂枝トワラ桂枝トナリ、是官桂ト一種也、

東京ト云ハ最上ナリ、味甚辛甘、長尺許アリテ細ク裁テ木皮ニテツナギタル者也、悉ク味良、次ハ肉桂ナリ、又尺桂共云フ、味能ケレ共、半分ハ古クナリテ不辛、

官桂ト云ハ、麁皮薄ク細ク卷テ竹ニ似タリ、味辛ク舌滑カナル者、肉桂トハ別種ノ者ナリ、是ヲ官桂ト名クルコトハ、藥舖ノ誤リナリ、本名ニ非ズ、元官桂ト云ハ、上等供官ノ桂トテ、天子ノ倉ニ納ル上上ノ桂ナリ、然ルヲ書ニ官桂トアル故ニ、庸醫別物ト心得テ、藥家ニ尋求ム、藥家モ又不知之、形味ノカハリタル故ニ、コレヲ假名ケテ官桂トス、正之人亦ナキ故ニ、彌僞リガ眞トナリテ、通ジテ官桂トナル也、ワラ桂枝ハ此ノ官桂ノ枝ヲ打ヒシギタル者ナリ、味モ粘モ同コトナリ、常ノ桂枝ハ肉桂ノ枝ノ皮ナリ、

桂心ト云者ハ和物ニシテ、松浦桂心ト云者ナリ、眞ノ桂心ニアラザレドモ、是モ庸醫外ノ物ト心得テ藥舖ニ求ム、藥舖又不知之シテ、僞誤テ桂心ニ充ツ、如斯ノ類甚多シ、蘇頌曰、舊說菌桂正圓如竹、有二三重者、則今ノ筒桂也、(私云、是和云官桂者、)牡桂皮落色黃少脂肉者、則今之官桂也、桂是半卷多脂者、則今之板桂也、

時珍曰桂有數種、如今參訪牡桂葉長如枇杷葉、堅硬有毛及鋸齒、其花白色、其皮多脂、(私云、是今所渡之通用肉桂也、)菌桂葉如柹葉、而尖狹光淨有三縱文、而無鋸齒、其花有黃有白、其皮薄而卷、今商人所貨、皆此二桂、但

肉桂　菌桂

按本朝有單字桂者、其葉圓小似萩葉、而木心赤堅而易斫、用作碁枰、(名赤木)或爲木屐齒良、尾州奥州及阿波土佐多出之、蓋不似柏檜葉、別此一種乎、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕肉桂(にっけい) 梫(香譜) 牡桂 ○中略

按本草肉桂之類、諸説有異同、今以時珍之説爲據、而肉桂官桂以爲二物者非也、但官桂最上之肉桂、則今東京肉桂、以可也也、東京(即安南國交趾之別國也)之產、肉厚、長尺許、纖裁以木皮縛之、甚辣、風味佳、不粘舌也、交趾之產次之、(東京肉桂多、桂枝少、交趾桂枝多、肉桂少、)廣西潯州亦次之、咬𠺕吧、暹羅之產粘于舌、近年中華船亦有肉桂、皆不及於東京、今藥肆名官桂者、皮如桂心皮、而略有艶潤、而不甚辣、自此一種、與時珍之説不合、

桂心

蒙筌云、去外甲錯鹿皮、近木黃肉曰桂心、(或謂去内外皮者非也)

按、肉桂桂心本一物也、然今藥肆所販桂心多用倭桂、出於薩州川内(センダイ)、肉桂單名桂心用之、皮厚香氣甚、自唐來桂心、香少、蓋無肉與心之差別誤來而已、

氣味(苦辛) 治九種心痛腹内冷氣痛、不可忍止下痢、通月閉及胞衣不下、治癰疽痘瘡、内托化膿、

菌桂(きんけい) 筒桂 小桂 本草必讀有菌桂之圖、與牡桂相反誤也、今改正之、○中略

按菌桂處處植之、呼曰肉桂木、其形狀如上説、但葉匾本末狹尖綠澤而背色淡、摘其葉經半時、則縱文變赤黑色、既黃枯者枝葉根皆辛温、香氣甚、

〔本草一家言 二〕桂 按綱目有板桂、筒桂、官桂之別、皆藥品之別、而藥舖之稱呼也、非別有種、蓋諸桂之通稱也、然綱目官筒板三名、分屬各條者誤矣、其厚皮如板者、通呼板桂、其薄皮卷曲如筒者、通呼筒桂、倭藥舖呼厚皮者板桂、而呼薄皮者筒桂也、蓋板桂是本幹皮、筒桂是枝梢皮、如今山椒皮之類也、官桂供官府上好桂也、官桂中亦有板筒之別、然今所渡筒桂、藥舖呼卷肉桂者、別是一種、下品桂中之筒桂也、曰筒、曰板、猶條芩、片芩、穿眼大黃、牛舌大黃、馬蹄大黃之類是也、(圭齋)

とへかしな玉ぐしの葉にみがくれて鵙の草ぐきめぢならずとも、〇註略、太玉串の榊の葉かげに、鵙の草隱せしやうに深(み)がくれてをれば、そなたより見おこす目路(メヂ)の間には、吾不在(ワレアラズ)とも尋問來かしとの心也、此歌によめるも、神宮にもてはやす玉くしの木にて、櫁なるべし、下總國香取郡神崎神社に、ナンジヤモンジヤといふ木あり、(何ぞや物ぞの訛なり)これも櫁(アカダマ)の一種也、また日向國高千穗峯にをかだまの木とよぶものあり、伊勢、丹波などにもありといへり、〇註略、常葉の香木にて、赤實房をなせば、小香玉(アカダマ)といふ名おへるはむべなれど、さる少(マレ)なるものをのみとり出て、神事にもちふべくもあらねば、久須多夫(クスタブ)、大多比(オホタビ)、白多夫(シロタブ)など、すべて櫁(アカダマ)といへること疑べからず、

高千穗の、をか玉の木は、から國の廣心樹のよし岩崎氏說なり、

〔夫木和歌抄 桂二十九〕柿本影供百首　後九條內大臣

山人も月をちぎりの秋よりやかつらの花のころもうつらん

〔紀伊續風土記 物產六下〕加都良(カツラ)(古事記、萬葉集カツラノキ、新撰字鏡楮、書紀に杜の字を用ひ、本草和名に楓の字を用ふ、並に非なり、又和名抄桂を女加豆加耳、楓を加豆耳と訓じ、雌雄に分ちしはうけがたし、葉は白楊に似て薄く、縱道ありて、邊に鋸齒あり、葉の莖長し、三四日葉間に豆花の如き花を開き、後に角を結ぶ、秋に至り葉色黃に變す、)牟婁郡山中所々に產す、又那賀郡麻生津莊西脇村の桂谷は、此樹を產するをもて名づく、此谷二に分れ、其間二町許、西の谷にあるを雄カヅラといふ、古は大樹なりしが、枯れて、今あるものは、一窠三株にして、三株合して周五丈餘もあり、東の谷にあるを雌カヅラといふ、これも今三株にして、合して周三丈餘あり、皆末にて數十幹に分る、土人いふ、此木を採り歸る者は、己が家火災ありとて、枯枝落葉も採るものなし、故に天年を保ちて、此の如く大樹となるといふ、加茂葵祭に用ふるもの是なり、

〔和漢三才圖會 香木八十二〕桂　桂(和名加豆耳)　肉桂之桂名二女加豆良一

本綱、桂葉如二柏葉一澤黑、皮黃、心赤、謂二之單字桂一、不二藥入用一、

行曰、牡桂卽爾雅木桂、牡木音相近也、

〔日本書紀 神代 二〕一云、以無目堅間爲浮木、以細繩繫著火火出見尊而沈之、所謂堅間是今之竹籠也、于時海底自有可怜小汀、乃尋汀而進、忽到海神豐玉彥之宮、其宮也、城闕崇華、樓臺壯麗、門外有井、井傍有杜樹、乃就樹下立之、

〔釋日本紀 八 述義〕湯津杜木

私記曰、惟良大夫問云、杜當作桂字之誤歟、師說不詳、

〔松屋叢考 一〕三樹考

桂は、和名抄に、兼名苑云、楓一名欇、和名乎加豆良云々、また兼名苑云、桂一名梫、和名女加豆良云々、字鏡に、楁加豆良云々、（楁は香木の合字也）本草倭名に、楓樹一名欇、一名格拒、已上出兼名苑、和名加都良云々、古事記（上巻）に鳴女自天降到、居天若日子之門湯津楓上云々、（神代紀上巻には、湯津杜木之杪云々、杜木此云可豆邏、云々、また一書に湯津杜樹之杪、など書たり、）また鹽椎神の火遠理命に敎ていへるに、其綿津見神之宮者也、到其神御門者、傍之井上有湯津香木云々、訓香木云加都良云々、卽登其香木以坐云々、（神代紀下巻には、井上有一湯津杜樹、枝葉扶疏と書たり、）万葉（七の巻）に、向岡之若楓木下枝取花待伊間爾嘆鶴鴨、源氏物語花散里に、かつらの木の追風にまつりのころおぼしいでられて云々、○中略下學集（草木門）に、木犀桂也云々など、物におほくみえて、此中に櫨を女加豆良、木犀を乎加豆良とわけていへり、櫨は實を結べば女にたとへ、木犀は花のみ咲て實なきゆゑに男にたとへしなるべし、いにしへ賀茂祭のはこの木犀なるを、中比よりあやまりて、白楊の類の木を用れど、こはかほりもなく、また風なつかしきものならず、○註略又大嘗會に用る榊を玉串といふも、榊は例の櫨にもあれ、木犀にもあれ、楠にもあれ、樒にもあれ、常葉にて香き木をいへど、そが中ことさらに玉串には丹陽木を用るゆゑの稱ともすべし、俊賴朝臣の齋宮內侍にあひぐして伊勢に侍りける時、六條修理大夫のもとへおくれる歌に、

植て、秋月糞汁澆ぎてよし、冬根廻り芥を置入てよし、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三香木〕釣樟 詳ナラズ

クロモジニ充ル古説ハ穏ナラズ、クロモジハ一名クロモンジヤ豆州クロモンシ、大和トリキ越後トリシバ仙臺マツフサ南部クロトリギ野州チシヤ信州ピシヤ同上チソ越前フグキ雲州山中ニ多シ、小木ナリ、高サ六七尺、木皮淡綠ニシテ黒斑アリ、香氣多シ、皮ヲ連テ牙杖ヤウジニ製シ賣ル、葉ハ細長クシテ堅ク、柯樹シオノ葉ニ似タリ、春初未ダ葉生ゼザル先ニ、花ヲ開ク三五簇生ス、淡黄色五辨ニシテ小シ、後實ヲ結ブ、大サ南天燭子ノ如シ、秋ニ至リ熟シテ黒シ、又一種大葉ノ者アリ、又圓葉ノ者アリ、倶ニ漢名詳ナラズ、

山胡椒

〔重修本草綱目啓蒙 二十二味〕畢澄茄 中略○

附錄山胡椒 ヤマカウバシ サルスベリ トツナギ トリツケノキ トリツケシバ ヤブケヤキ泉州 ヤブゴシヤウ大坂 タマノキ播州 タンバ薩州

山野ニ多シ、小木ナリ、葉ハ細長ニシテ尖リ、厚クシテ互生ス、夏葉間ニ小花ヲ開キ、後實ヲ結ブ、形落霜紅ウメモドキノ實ノ如ニシテ、熟スレバ色黒ク味辛シ、ソノ形味倶ニ畢澄茄ニ似タリ、木ヲ折レバ香氣アリ、

桂

〔倭名類聚抄 二十木〕桂 兼名苑云、桂一名梫、音侵、和名女加豆良、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕按爾雅云、梫木桂、說文梫桂也、兼名苑蓋本於此、說文又云、桂江南木、中略○按女加豆良、香要抄同、本草和名不載和名、爾雅郭注云、今江東呼桂厚皮者爲木桂、樹葉似枇杷而大、白華、華而不著子、叢生巖嶺、枝葉冬夏常青、間無雜木、南山經、招搖之山多桂、郭曰、桂葉似枇杷、長二尺餘、廣數寸、味辛、白花、叢生山峯、冬夏常青、間無雜木、南方草木狀云、桂生合浦交趾、生必高山之巓、冬夏常青、其類自爲林、更無雜樹、有三種、皮赤者爲丹桂、葉如柿者爲菌桂、葉似枇杷者爲牡桂、郝懿

黒モジ

バナハ、一名ハタウコン、トモギ、ツラフリ、播州シロモジ、加州ノソバ、讃州クロヂシヤ、信州山中ニ自生多シ、冬ハ葉ナシ、春初先花ヲ開ク、山茱萸ノ花ニ似テ色淺シ、葉ハ大サ三寸許圓ニシテ三尖アリ、藏器ノ說ニ高サ丈餘、一葉三椏ト云時ハ、是モ亦烏藥ノ一種ナリ、天台ノ烏藥ニ非ズ、根ノ形モ連珠ヲナサズ、又圓葉ノ者アリ、

〔草木育種後編 下藥品〕烏藥 本艸 享保中、唐山より、台州產と衡州產と二種を來す、衡州產は琉球にていふハマバシガラキといふ、夏月莖を插して活すべし、冬土窖へ入べし、少し暖なる處にては地に栽、こもにて雪霜を避れば枯槁ず、台州のものは紀州にていふカメバといふもの也、是は園に植てよし、寒を恐れず、又和產烏藥あり、享保年中將翁先生官園に上る、卽本艸陳藏器說處のもの也、是卽和蘭にいふサツサプラスなり、

〔採藥錄 五木〕烏藥

東都官園ニ漢種アリ、今往々栽ユ、秋八九月ニ掘採リ、洗淨シ日乾スベシ、舶來ノ者ニ比レバ稍堅シ、舶來ニ二品アリ、圓ナルヲクヽリト云、長ヲ棒樣ト云、官園ノ者ハ此棒樣ナリ、

〔大和本草 十二 雜木〕黑モジ 山中ニ生ズ、葉ハ漆ニ似テ又榎ニ似タリ、葉ニ大小ノ異アリ、冬ハ葉落ツ、皮黑クシテ香氣アリ、故ニ是ヲ用テ牙杖(ヤウヂ)トス、皮ヲツケ用ユ、又ホヤウジト名ヅク、又其枝ヲ籬トス、雅致ヲ助ク、二月ニ小黃花一所ニ多クアツマリ開ク、秋實ノル、榎ノ實ノ大ノ如シ、肉ニ油アリ、タブノ木ニ似タリ、

〔廣益地錦抄 一〕黑(くろ)もじ 木 春中 花は黃色にて、一所にあつまり咲、見るにたらず、實秋くろくちいさくむすぶ、みるかいなし、木の皮くろくして香氣あり、やうじにけずりて用、牙のくすりなりとぞ、

〔草木育種後編 下 園類井胃腸の類〕烏樟(くろもじ) 本草 花戶にて玉まんさくといふ、早春の切花に用ふ、園中

烏藥

尖長ニシテ、葉蔕赤色ヲ帶ビ、葉中ノ氣豚ニ及ブ、葉背粉紅、枝葉共ニ樟ニ比スレバ淡綠色ナリ、釋名時珍ノ說ニ、樟有大小二種、紫淡二色ト、其小ニシテ淡ナル者、又蘭山翁、樟ノ條ニ、中心赤黑ナラザル者ヲイヌグス、一名シロ゜グ゜ス゜ト云ト、是ナリ、但樟木ノ氣アレドモ、樟腦ヲ取ベキ者ニアラズ、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕烏藥(うやく) 旁其 鰟魮 矮樟 其氣似樟故名○中略

按、烏藥能雖治烏獸之穴、而烏藥之烏非鵶烏之烏、以烏褐色名之耳、凡堅而直者不佳、俗稱久久利者良、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三 香木〕烏藥 通名 一名比目沈香 輟耕錄 矮脚樟 物理小識 子一名雪裏紅 物理小識

旁毘子 說略

漢渡二品アリ、棒樣トク丶リ樣トナリ、ク丶リ樣ト呼ブ者ハ、根形天門冬ノ如ク大ニシテ、兩頭尖リ中間豐ナリ、是集解ニ、形如連珠ト云者ナリ、新根ニシテ藥用ニ上品トス、又木根ノ形ノ如クニシテ、連珠ヲナサヾル者アリ、是ヲ棒樣ト呼ブ、舊根ニシテ藥用ニ良ナラズ、唐山ニテ天台烏藥ヲ名產トス、略シテ台烏ト云、他所ノ產ハ土烏藥ト云、享保年中漢種二品渡ル、天台烏藥ト衡州烏藥トナリ、傳ヘ栽テ今花戶ニ多シ、天台ノ烏藥ハ木ノ高サ八九尺、多ク叢生ス、一二尺ノ小木モ能ク花ヲ生ズ、葉ハ圓ニシテ尖リ大サ一寸餘、三縱道アリテ桂葉ノ如シ、互生ス、三月葉間ニ花ヲ開ク、淡黃色、大サ二分許、後圓子ヲ結ブ、秋ニ至リ熟シテ赤色、大サ南天燭子(ナンテン)ノ如シ、後ニ漸ク黑色ニ變ズ、地ニ下シテ生ジ易シ、油ヲ搾リ燈ニ用ユベシ、臭氣アリ、此根和州ノ宇多城州ノ八幡ニ多ク栽テ四方ニ貨ス、新鮮ニシテ佳ナリ、衡州ノ烏藥ハ形狀同シテ、叢生セズシテ高ク聳ユ、其根堅硬ニシテ香氣少シ、下品ナリ、近來肥後ヨリ和產ヲ出ス、薩州ニテイ゜ソ゜ヤ゜マ゜ダ゜ケ゜ト云、琉球ニテハ゜マ゜バ゜シ゜ガ゜ラ゜キト云、葉ノ形細長三寸許、三縱道アリテ甚ダ桂葉ニ似タリ、深綠色、春葉間ニ小花ヲ開ク、天台ノ烏藥ニ似タリ、古說ニハウコンバナヲ以テ天台烏藥トス、然レドモ漢種ニ異ナリ、ウコン

釣樟

キ者アリ、是樟腦ナリ、能々可擇、

方書ニ片腦トアルヲ樟腦ト心得ル人アリ、大ニ誤リナリ、龍腦ノ中ニ梅花片氷片トテ、極品ノ龍腦アリ、ソレヲ略シテ片腦トモ書ス、庸醫不知之シテ別ニ片腦ト云者アリト心得テ、藥家ニ求之、藥家又不知シテ樟腦ノ燒返ヲ假リ名テ片腦トナシテ賣之、其ノ價賤ガ故ニ又、不改之シテ用ル人多シ、愚ノ甚哉、

〔和漢三才圖會 香木八十二〕龍腦香　羯婆羅香　片腦　冰片　梅花腦　菁名婆律香○中略

按龍腦色白似雲母片而透明者、名梅花腦、爲上品、細小色不鮮明、且黑者樸、名美止利、爲下品、不入藥用、合香家用之、如水濡者、不透明、或無稜者、乃以樟腦樸僞者也、宜辨之、

樟腦再燒者名反腦、與片腦字同聲、故誤以爲一物、甚非也、凡抹龍腦安于槍上、以槍篦按之則能細末成、

〔本草和名 木十四〕釣樟根皮楊玄操音上丁叫反、下音章、一名烏樟、又有地菘、一名劉憊草、仁諝音呼麥反、陶景注云、音劉悵採用之耳、故名苑作劉悵上音招、下音爲獲反、和名奈美久奴岐、

〔倭名類聚抄 木二十〕釣樟　本草云、釣樟一名烏樟、音章、和名久沼木、

〔箋注倭名類聚抄 木十〕千金翼方、證類本草下品有釣樟、不載一名、證類本草引陶隱居云、亦呼作烏樟、本草和名云、一名烏樟、失著出典、源君引爲本草正文、非是、本草和名云、釣樟、和名奈美久奴岐、按下載擧樹、訓久奴岐、本草和名、擧樹訓之良久奴岐、一云奈美久奴岐、然源君於擧樹條、又引日本紀私記歷木、則擧樹之訓、不從輔仁也、此單訓久奴岐、則與擧樹複、疑脫奈美二字也、

〔重修本草綱目啓蒙 香木二十三〕釣樟　詳ナラズ

クロモジニ充ル古説ハ穩ナラズ○中略

增、釣樟ハイヌグスナルベシ、山中樹間ニ自生多シ、小木ニシテ高サ僅ニ丈許ニ過ギズ、樟葉ヨリ

成塊也、錬樟腦法、用銅盆以陳壁土爲粉糝之、却糝樟腦一重、又糝壁土、如此四五重、以薄荷安土上、再用一盆覆之、黄泥封固、於火上款々炙之、須以意度之、不可太過不及、勿令走氣、候冷取出時則腦皆升于上盆、如此升兩三次、可充片腦、

是ヲ龍腦ニ交テ渡ス者アリ、又日本ニモ誤テ氷片腦トスル也、不可不細辨、

〔日本山海名物圖繪三〕樟腦製法

くすの木と云もの二品あり、樟は木の心赤黑く香つよし、楠は香すくなし、木の心赤黑からず、是には大木多し、くさりては岩と成也、樟腦は樟の根をはつり取て、其こけらを釜にて煎する也、小屋の内に二十四釜をかけ、二通にする也、一通に十二釜づゝせなか合せにして、間三尺ばかりあけ、其間を往來するやうにこしらゆる也、釜のふたは鉢也、釜と鉢との間を土にぬりて、いきの出ざるやうにする也、其ふたへたまりたる露、則樟腦なり、

〔採藥錄木五〕樟腦

薩州隅州ニ多ク出ス、一種ニシテ腦ノ有ト無アリ、先ヅ大樹ノ根木ヲ斧ニテ薄ク屑トシテ試ル、腦アレバ斧ニテ盡ク屑トシ、木甑ニ入レ蒸也、木甑ノ上ニ瓦ノ蓋ヲ載セ、蓋ノ下ニ白ク霜ノ如ク著ク、之ヲ掃キ取リ壺中ニ收ム、若シ風ヲ見セシムル時ハ化シテ巳ニ盡、

〔渡邊幸庵對話〕一生腦は楠の脂也、夫を燒たるもの也、龍腦は生腦を七度燒にしたるを片腦といふ、是龍腦也、燒樣天目を蓋にして燒、其湯氣上の天目に付たるは片腦也、

〔本草辨疑木四〕龍(リウ)腦(ノウ)

今所渡ノ者二種アリ、梅花ト云ハ白ク透明シテ雲母片ニ似タリ、上品ナリ、ミドリト云ハ、胡麻鹽ヲ見ニ似テ、黑者交リ色ウルミテ細ナリ、下ナリ、香具ニ用ベシ、服藥ニハ不可用、又一種樟腦ヲ交ヘタル者アリ、ヌレタルヤウニシテ、色ウルミ白シ、眞ハカラ／＼ト乾テ白シ、又カドナクシテ圓

寄生あり、幹は椌になりて、大きなる洞のごとし、人三十六人居並ぶと云、めづらしき大樹なり、其外七八抱の楠數あり、

〔和漢三才圖會八十二香木〕樟腦（しやうなう）　留腦○中略

按、樟腦出於日向薩摩大隅、深山中採老楠木、以圓刃銛斫取、盛土鍋、上亦蓋鍋蒸炙之、腦升著于上、如霜乃此樟腦也、此物能殺蟲、凡藥種易蛀物、四月晒乾用、樟腦包紙納其箱櫃中、封口、則雖極暑不蠧也、其藥使時隔紙焙、則樟腦氣去、如忌火藥、包紙置于濕地、亦樟腦去、以無臭香氣為度、蓋雖樟腦今皆楠腦也、未知和漢有異乎否

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕樟腦　通名　一名朝腦本草原始　潮腦藥性要略大全　樟冰醫宗雅言　獐冰外科正宗、獐ハ樟ノ誤ナルベシ、

樟樹ノ脂膏ヲ煎ジトル者ナリ、其法ハ集解ノ説ト異ナリ、先ヅ地ヲ掘テ長竈ヲ築キ、數鍋ヲ並ベ架シ、各水ヲ入、上ニ木甑ヲ置キ、樟ノ生木ヲ伐リ、枝ト皮トヲ去リ割テ小薄片ト為シ、甑中ニ入レ、木薪ヲ燒テ蒸過シ、上ニ沙盆ヲ蓋ヒ火候足リ沙盆冷ルニ至リテ、盆内ニ樟腦ノ結スルヲ拂ヒ取ル、皆クスノ木ノ心赤黒色ニシテ脂アルモノヲ用ユ、心白クシテ脂ナキモノハ蒸シテ腦ナシ、増、峒山小原先生ノ話ニ、コヽニ樟ノ生木ヲ伐リ、枝ト皮ヲ去テ樟腦ヲ取ルト雖ドモ、根ヲ用ユルヲ最上トス、コレヲ取ルニハ、鍋十一宛ヲ二行ニ並ベ、一人ニテ同時ニ火ヲ焚クベシト云ヘリ、樟腦ハ細末ト為シ難キモノナリ、樟腦ヲ紙上ニ薄ク盛リ、上ヨリ紙ヲアテヽ、其上ヨリ鈷鉧（ヒノシ）ヲカクレバ卽細末トナル、且ツ臭氣脱シテ、極テ上好ノ品トナル、然レドモ甚ダ耗ルナリ、

〔本草辨疑四木〕樟腦

時珍曰、狀似龍腦、白色如雪、人亦多以亂片腦、不可不辨、胡演升鍊方云、煎樟腦法、用樟木新者、切片以井水浸三日三夜、入鍋煎之、柳木頻攪、待汁減半、柳木上有白霜、卽濾去滓、傾汁入瓦盆内、經宿、自然結

其葉合抱ナル者アリ、

〔太平記三〕主上御夢事附楠事

主上〇後醍醐思食煩セ給テ、少御マドロミ有ケル御夢ニ、所ハ紫宸殿庭前ト覺ヘタル地ニ、大ナル常盤木アリ、綠ノ陰茂テ南ヘ指タル枝殊ニ榮ヘ蔓レリ、其下ニ三公百官位ニ依テ列坐ス、南ヘ向タル上座ニ、御坐疊ヲ高ク敷、未坐シタル人ハナシ、主上御夢心地ニ誰ヲ設ケン爲ノ座席ヤラント、怪ク思食テ立セ給タル處ニ、鬢結タル童子二人忽然トシテ來テ、主上御前ニ跪キ、泪ヲ袖ニ掛テ一天下間ニ暫モ御身ヲ可被隱所ナシ、但シアノ樹陰ニ南ヘ向ヘル座席アリ、是御爲ニ設タル玉扆ニテ候ヘバ、暫ク此ニ御座候ヘト申テ、童子ハ遙ノ天ニ上リ去ヌト、御覽ジテ、御夢ハヤガテ覺ニケリ、主上是ハ天ノ朕ニ告ル所ノ夢也ト思食テ、文字ニ付テ御料簡アルニ、木ニ南ト書タルハ楠ト云字也、其陰ニ南ニ向テ坐セヨト、二人童子敎ヘツルハ、朕再ビ南面ノ德ヲ治テ、天下ノ士ヲ朝セシメンズル處ヲ、日光月光ノ被示ケルヨト、自ラ御夢ヲ被合テ、憑敷コソ被思食ケレ、夜明ケレバ當寺衆徒成就房律師ヲ被召、若此邊ニ楠ト被云武士ヤ有ト御尋有ケレバ、近キ傍リニ左樣名字付タル者アリトモ未承及候、河內國金剛山ノ西ニコソ楠多門兵衞正成トテ、弓矢取テ名ヲ得タル者ハ候ナレ、是ハ敏達天皇四代孫、井手左大臣橘諸兄公ノ後胤タリトイヘドモ、民間ニ下テ年久シ、其母若カリシ時、志貴毘沙門ニ百日詣テ、夢想ヲ感ジテ設タル子ニテ候トテ、稚名ヲ多門トハ申候也トゾ答ヘ申ケル、

〔鹽尻四十二〕一同所〇上總國長柄郡田倉村大木の楠あり、廻り三丈九尺餘、日本一の楠の大木といふ、巡禮など見て、如此大木は他國になしといふ、

〔本朝俗諺志三〕大楠木

豆州熱海の鎮守、來宮大明神の神木は楠也、周り十一抱半あり、至極の老木にて、梢は朽て種々の

樟葉有三尖、釣樟葉狹長、本草載天台烏藥、其根連珠氣極辛香、今藥肆稱括烏藥者是上品、樟有大葉小葉二種、根味次烏藥、若無烏藥、則樟釣樟二根亦可代用、功能大抵相同、

按俗楠字訓久須乃木非也、楠自是別物、楠本作枏、杜子美枏堂前所栽枏與樟別物也、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕樟　クスノキ和名鈔　クス　一名枏品字箋　香樟通雅

大木アリ、葉ハ天竺桂ダモノキノ葉ニ似テ短ク、樟腦ノ氣アリ、互生シテ冬凋マズ、春新葉ヲ生ジテ、後舊葉落ツ、夏月小花ヲ開ク白色微黃、後小圓實ヲ結ブ、秋ニ至リ熟ジテ黑シ、用テ蠟ヲ採ル、コノ木中心赤黑色ニシテ、香氣强キ者眞ノ樟ナリ、コレヲ煎ジテ樟腦ヲ採ルベシ、中心赤黑色ナラザル者ハイヌクスト呼ブ、一名シロクス、豆州樟樹老タル者ハ木理美シ、コレヲ玉モクト云、又老樹火ヲ生ジ自ラ燒ク、物理小識ニ、豫章老則出火、自焚不宜近家室ト云、先年城州八幡社外ノ老樟自ラ燒タリ、是腦アル故ナリ、

〔牛馬問二〕楠ナンの字、クスノキと訓ずるは誤り也、クスノキは樟の字也、

〔伊豆海島風土記下産物〕マタミ　樟ナルベシ、國地ノ玉クスト云ニ似テ木大ナリ、性モ楠ニ等シク、板ニシテ船ヲ造ルニ久シクタモツ、皮ヲ煎ジテ衣ヲ染ルニ、トビ色トナル、八丈貢絹ノカバ色ト云ハ、此ヲ以テ染ル、首夏ニ花咲、實ハ六月ニ熟ス、此實ヲ搗末シテ麥粉ニ交エ、土人糧トス、本草ニ樟ハ楠ニ似テ夏細白花開ク、船ニ造ルトアリ、

〔增訂豆州志稿七土產〕樟クス、楠クス、　樟ハ氣甚芬烈以テ樟腦ヲ製ス可シ、一種嫩芽鮮紅ナルハ腦殊ニ多シ、楠ニ二三ノ種類アリ、增、共ニ久ク水濕ニ堪ルヲ以テ船材ト爲シ、又老樹ヲ以テ器具ヲ製ス、本草啓蒙ニ曰ク、豆州樟樹老タル者ハ木理美ニシテ、之ヲ玉モクト云ト、州中樟楠ノ古樹多シ、然レドモ數百千年ヲ經タルハ樹幹朽腐シテ、其中空ヲ爲ス、宇佐美村春日祠域ノ樟ハ、空處八席ヲ敷ク可シ、延寶中幕府此地ノ樟ヲ伐チ阿アタケ武丸ノ船材ト爲ス、今

名豫章、因木爲名也、西山經云、底陽之山、多櫻枏豫章、莊子山木篇、並稱枏梓豫章、郭注西山經云、豫章大木、似楸葉、冬夏青、生七年而後復可知也、陸機疏云、豫樟葉大如牛耳、一頭尖赤心、華赤黃、子青不可食、枏葉大、可三四葉一叢、木理細緻於豫樟、子赤者材堅、子白者材脆、子虛賦、彙擧楩枏豫章、是枏豫樟二木不同、本草和名、楠材訓久須乃岐、日本紀、櫲樟讀久須、其說不同也、源君併引、非是、

〔類聚名義抄 三木〕櫲樟 豫章二音、クスノキ、上タスノキ、マキ、

〔大和本草 十一雜木〕樟腦 樟ト楠ト一類二物也、國俗クスノ木ト云物二品アリ、一品ハ香ツヨク、木心黑赤樟腦ヲ煎ス、是樟ナリ、一品ハイヌグスト云香少シ、木心色赤黑ナラズ、是楠ナリ、楠ニハ大木アル由本艸ニイヘリ、今所々楠ノ木多シ、佗木ニ楠ホド大ナルハナシ、楠ノ根ニ米泔ヲソヽゲバ必枯ル、文海披砂曰、建事ノ都司ニ有五代時樟木、其竅中可設數席トイヘリ、大木ハ傍朽空シキアリ、日本ニモ如此大木アリ、

〔和漢三才圖會 八十二香木〕楠 音南 枏 相同 久須乃木 〇中略

按、楠葉似櫧葉而光澤、背淡白、邊略反卷、莖微赤、五月開細白花帶黃、其子如豆大、而青色、本細似細口梨形、其木堅實耐水、以造舶、其根株經歲者變爲石、

樟 俗云太布 〇中略

按、樟木似楠而木理路麁、堪水土也、不如楠之强、其葉似楠而狹長厚、背有微毛、有赤樟烏樟之二種、黑樟乃釣樟也、赤者實亦赤、黑者實亦黑、但烏樟葉則無毛、

〔本草一家言 二〕樟 烏藥 釣樟 三物種類相類、大者謂之樟、和名久須、小者謂之烏藥、和名鬱金花(ウコンバナ)、又稱畑鬱金、關東人呼爲白文字、故釣樟之條有矮樟之名、是樟木之矮小者、釣樟和名黑文字是也、根有直根連珠之二種、樟和名久須之木、釋神代卷磐樟船者云、久須者臭木義非也、樟是香木而非臭物、久須者不朽之略訓、此木歷數百年而不朽腐、又能化石、故有久須之稱、葉圓而木理有章故也、烏藥似

楠樟

如ク、長サ寸餘、內ニ數子アリ、形雲實ニ似テ長ク、褐色甚硬シ、一種檀香梅享保年中ニ渡ル、卽蠟梅中ノ上品ナリ、唐蠟梅ト呼ブ、今ハ世上ニ多栽ユ、直ニ檀香梅ト稱ス、葉ハ九英梅ヨリ短ク厚ク、小柹葉ノ如シ、花ハ大ニシテ色深黃、瓣圓ニシテ梅花瓣ノ如シ、內ノ小紫瓣最モ美ハシ、香モ亦多シ、花正開セズ、常ニ半含ニシテ下ニ向フ、故ニ又磬口梅ト呼ブ、今世ニ檀香梅ト稱シ栽ユル者ハ、多ハ荷花梅ニシテ眞物ニ非ズ、卽檀香梅ノ一種下品ナリ、荷花梅ハ瓣狹ク尖リテ九英梅ト同ジ、其色深黃ニシテ正開ス、檀香梅ノ瓣圓ニシテ半含ナルニ異ナリ、秘傳花鏡ニ、惟圓瓣深黃、形似白梅、雖盛開如半含者名磬口、最爲世珍、若瓶供一枝、香可盈室、狗英亦香、而形色不及、近日圓瓣者如荷花而微有尖、僅免狗英者ト云、此ノ文ニテ檀香梅ト荷花梅分別ヲ知ルベシ、又時珍磬口梅檀香梅ヲ分テ二ツトスルノ誤ヲ知ルベシ、

〔地錦抄附錄三〕正保年中以後渡來草木類略〇中

南京梅(ナンキンウメ)今云臘梅

〔新撰字鏡木〕楡力屯反、似樟、樣、久〇須〇乃〇木〇　樟諸良反、樣、久須乃木、

〔本草和名十四木〕楠材楊玄操音南　和名久須乃岐

〔倭名類聚抄二十木〕楠　唐韻云、楠音南、字亦作枏、和名本草、久須乃木、木名也、櫲樟、櫲樟二音、日本紀私記上同、木名、生而七年始知矣、

〔箋注倭名類聚抄十木〕按本草云、楠材、陶隱居云、削作柹、煮服之、是藥服用材、故本草云楠材、輔仁曰、和名久須乃岐、以訓楠材也、源君單舉楠字、宜只訓久須、然字鏡楡樟並訓久須乃木、略〇中說文、枏梅也、梅枏也、今本說文枏也下、有可食二字、後人增竄不可從、南山經、虖勺之山多梓枏、注、枏大木、葉似桑、今作楠、略〇中廣韻不載櫲字、樟字注云、豫樟木名、無生而以下七字、則此所引似非唐韻文、或櫲樟上脫出典、按漢書司馬相如傳注、服虔曰、豫章大木也、生七年乃可知、與所引文略同、按證類本草中品引陳藏器云、枏木高大、葉如桑、出南方山中、下品釣樟條又引陳藏器云、樟材、江東舸船、多是樟木、縣

蠟梅なんきんむめ、からむめ、たうむめ、らんむめ等の名あれども、今は通名なり、この花、月令廣義、玉梅、臘梅、水仙、山茶これを雪中四友といへり、蠟梅は花信風に漏たれども、その花臘冬より開き、香の馥郁たる事も梅にをとらず、實に大寒三候に配し、立春の花梅と共にめづべきものなり、

〔日本樂府〕我國風氣人物何必減西土、恨余詞鄙俚率薄、不足齒漢兒、然人苟耐讀、蓋頭至尾、於治亂之機竅、名教之是非、或可以小喩大、客曰、然則是摸擬李尤耶、余哂不答、見硏傍銅瓶插蠟梅、指問客曰、渠香色固讓棋矣、然天地所置、日月所照、各含一造化、乃曰汝擬梅也、渠當肯否、曰不肯、

戊子(文政十一年)嘉平月二十八日　山陽外史賴襄識

〔草木育種後編下 蘭類并冒稱の類〕蠟梅(らうばい)(梅譜) 黃梅(花鏡) 元漢種なり、俗に南京うめといふ、磬口のものを漢種といひ、狗英梅を和產といふ、花小なり、冬月花を開き梅と時を同うす、故に梅の名あり、秋月より糞水を根の廻りへ澆ぎてよし、插花に用ふ、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕蠟梅　ナンキンムメ　カラムメ　トウムメ　ランムメ　今通名

一名奇友(事物紺珠)　九英梅(汝南圃史)　狗蠅花(汝南圃史)　狗英(花史左編)　狗纓(群芳譜)

蠟梅ノ說一ナラズ、時珍ノ說ハ因其與梅同時香又相近色似蜜蠟故得此名ト云、群芳譜ニハ人言臘時開、故以臘名非也、爲色正似黃蠟耳ト云、又似女工撚蠟所成故名ト云、彙苑詳註ニ來眞蠟國ト云、コノ木ハ百九代後水尾帝ノ時、朝鮮ヨリ來ルト云傳フ、故ニ俗ニカラムメ等ノ名アレドモ、今ニ至テハ皆蠟梅ト稱ス、ソノ木叢生ス、高キ者ハ丈餘、低キ者ハ數葉對生ス、葉ノ形狹長ニシテ尖リ、長サ四五寸、肌糙澀ニシテ加條(ムク)葉ノ如シ、唐山ニテハミガキモノニ用ユルコト、物理小識ニ見ヘタリ、冬月梅ト同時ニ花ヲ開ク、皆下ニ向フ、綠蕚瓣ハ細長シテ尖リ、黃白色ニシテ光リアリ、蠟花ノ如シ、故ニ狗蠅梅ト名ク、狗蠅ノ色ニ似タルナリ、瓣ハ九出ナリ、故ニ又九英梅ト名ク、花中ニ蘂ナシ、小瓣九出シ、紫黑色ナリ、コノ花開ク時ハ其香一室ニ盈ツ、花謝シテ稀ニ實ヲ結ブ、大サ指ノ

〔閑窻瑣談 四〕樒(しきみ)の功能
世の人樒の枝葉は佛事にのみ用ゆるものにて、忌々しき様に嫌ふて不吉の物とす、大ひなる心得たがへなるべし、樒は昔歌にもよまれたり、萬葉集に、曾根の好忠
　愛宕山樒が原は雪つもり花つむ人の跡だにもなし、樒は愛宕の名木なり、亦樒は、其香清淨にて、神佛に備へ、不淨を除く、墓原に樒をさし置ば、獸怖れて墓をあばき人の戸を破る事あたはず、夫故に墓所に備へ獸を除く用心とす、山近き田畑にて猪猿の類が畑物を取ざる様に、多く樒を植、又は掘て置、芋などに樒の枝を折て蓋とし置ば、獸來りて取事能はずといふ、猶功能多し、眼病の熱を醒すには、墓所の水に落て腐たる樒の露を眼に付れば、忽ち平愈す、樒の葉を煎じ用ひてもよし、

深山樒

〔和漢三才圖會 香木八十二〕深山樒　正字未詳
按深山樒樹葉似樒而葉不皺、其香略似山礬花香、四月開細白花、秋結子、赤色、似仙靈子、採葉陰乾爲藥、　氣味辛苦微　治疝氣腰脚痛、甘草小入煎服、

蠟梅

〔書言字考節用集 六生植〕蠟梅(ラフバイ)一名黃梅、活法、本非梅類、以其與梅同時、香又相近、色酷似蜜蠟、故名、
〔大和本草 花木十二〕蠟梅　本草灌木ニ載ス、近年中夏ヨリワタル、臘月ニ小黃花ヲ開ク、蘭ノ香ニ似タリ、中華ノ書ニ多ク記シ詩ニモ詠ゼリ、花ノ容ハ不好、葉ハ柿ニ似テ柿ノ葉ヨリ小ニシテ長シ、葉ニ少シイラアリ、其高二三尺四五尺ニスギズ、大阪ニテハカラ梅ト云、又蘭梅ト云、梅ノ類ニハアラズ、根ニ香氣アリ、味辛辣也、如木香ト云、中華ノ本ノ名ハ、黃梅、後世稱蠟梅ト云ヘリ、
〔和漢三才圖會 灌木八十四〕蠟梅　黃梅花　俗云南京梅
按蠟梅、花六出、單葉、似小梅花而黃色、其枝柔靭、遠見則彷彿倭連翹、但連翹花四出而盞形爾、
〔古今要覽稿 草木〕蠟梅

〔箋注倭名類聚抄　十〕下總本之歧美作安世美、按本草和名木部下云、莽草和名之歧美乃木、則作安世美、非是、蓋上文樒訓之歧美、故後人改此之歧美爲安世美、以避重複也、恐非源君之舊、○中略中山經云、朝歌之山有草焉、名曰莽草、可以毒魚、此所引卽是、

〔萬葉集　二十〕二十三日(天平勝寶八歲十一月)集於式部少掾大伴宿禰池主之宅飮宴歌
於久夜麻能、之伎美我波奈能其等也、之久之久伎美爾、故非和多利奈無、

〔夫木和歌抄　二十九樒〕六帖題しきみ　衣笠內大臣
しきみつむ竹のはなこのはかなさもまことのみちにいらざらめやは

〔大和本草　十二雜木〕莽草　是シキミノ木也、國俗抹香トシテ佛前ニタク、皮モ葉モ用ユ、本草毒艸部ニモ莽草ヲシキミト訓ズ、可以毒魚者也トイヘリ、毒木ナリ、其實ヲ食ヘバ死ス、シキミトハアシキミ也、有毒故名ヅク、小兒ヲ戒メテ食ハシムベカラズ、又樒ノ字日本ニシキミトヨム、順和名ニモ亦シキミト訓ズ、莽艸ト別物ナリヤイブカシ、シキミノ葉ヲコクセンジタル溫湯ヲ以、腫物風溼皮膚ニ滯ルヲ洗フ、有蟲、小瘡ヲ洗フ、甚驗アリ、有毒故也、又蛀牙、腫痛ニ、濃煎、湯熱含、吐之漱口勿嚥、

〔和漢三才圖會　八十二香木〕木蜜　蜜香　沒香　多香木　阿𧯤　樒(音密、唐韻云香木也、)　和名之木美　又枳根
木亦名木蜜、與此不同、○中略
接志木美、武藏、伊豆、淡路、丹波、播磨多有之、折枝供佛、葉似冬青、而淺青色、此與本草所言(木蜜葉似槐而長、沈香葉似冬青)稍異、摘葉略有椒氣、六月開細白花、結實、青白色、如天蓼子、熟則裂破、有中子五六顆、大如豆而潤滑、味甘、人食之、多食則醉、恐可有小毒、山雀喜食之、呼枝葉稱花、採皮及葉乾末焚香、名之抹香、浮圖一日不可闕之、辟氣尸注惡氣之功宜哉、登愛宕山人必求樒歸、其葉不著水者枯亦不落、如雷震非常時燒於竈、亦有據、

莽草

がたのしき、とよめるもおなじ、本草綱目香木類に載せたる梓是なり、此木冬は葉落ちて、春新葉を生ず、大三四寸、形三尖にして、細鋸齒あり、嫩葉は全く赤くして桼に似たり、長じて靑色に變ず、故に赤芽柏の名あり、夏の頃枝の末毎に花を發く、黃白色叢生して傘を張る、花後小實を結ぶ、大さ南天燭子のごとく軟刺あり、初靑く後茶褐色にして枯る、其實熟すれば、四つに發けて、中の子椒目のごとく色黑し、西國にては、今も此葉を採りて、御祭葉と名づけ、神供を盛るなり、されども此をがたまの木は、古今傳授といふ事になりて、種々の說あり、一決せず、一說には門松の下に立つる木ををがたまの木といふもあり、又岡靈(ヲカタマ)の木といふもあり、定家卿の說に、鳥柴をいふともあり、貞德自筆の和歌實樹には、宗祇の切紙を難じて、三箇ならで古今集の奧儀は、歌序の中に多き事なりといへり、又後奈良院享祿元年十一月十六日、古今御傳授逍遙院申さるゝと、御湯殿の記に見えたり、又外に一種日向國小戶窟の邊より出だすをがたまの木あり、是は通雅に見えたる楊桐(サカキ)の種類にて、神代に用ひたるかしはとは、大に異なるやうに覺ゆ、先年日向より予〇茅原定が門に來りし書生、一枝を贈る、寫眞しおけり、〇略圖

〔紀伊續風土記物産六下〕岡玉乃木(ヲカタマノキ)古今集、樹大なるは丈餘、葉互生して、大さ竪三寸、幅一寸半許、本細く末濶く、鋸齒なく邊脈反る、正月の末、葉の本より小枝出て穗をなし、開花は白色、瓣莘荑花の細小なるが如く、花中紫色あり、一花毎に實を結び、纍々として神樂の鈴の如く、秋深く實の皮裂て、中に赤仁三四顆づゝあり、殆海桐の實に類す、日向高千穗嶺にあるヲガタマノ木は此木にあらず、前條のガウマルなり、牟婁郡那智山、及名草郡日前宮國造家庭中、其餘人家處々に稀にあり、

〔古今和歌集物名十〕をかたまの木

みよしのゝ吉野の瀧にうかびいづるあはをかたまのきゆとみつらん　とものり

〔本草和名木十四〕莽草陶景注云、字或作㒳、音罔、一名旃巳楊玄操音甫反一名春草、和名之岐美乃木、

〔倭名類聚抄木二十〕莽草　山海經注云、莽草和名本草云、之木美、可以毒魚者也、

はといふ、仁德紀分注に、葉此云箇始婆とあり、鏡葉(カヾミハ)は神代紀岩窟章の故事をとれり、柏葉にひもろぎを盛りて、神を祝ひをがむなり、萬葉集第十一に、

神並にひもろぎたて・齋へども人の心は守りあへぬも、同十二に、

はふり等がいはふ三諸の十寸鏡(マスカヾミ)かけてぞしのぶ見る人なしに、此玉柏の木、卽ち神の御魂を祭りをがむ木なり、顯昭曰、祭神時以柏葉為葉盤盛飯菜、按ずるに、今人酒肴を臺に盛るに、青き木の葉などを鋪くも、神代よりの遺風なり、其柏葉を後世葉守の神といふは、盛と守と同訓なる故なり、大和物語に、

柏木に葉守の神のましけるをしらでぞ折りし祟りなさるな、此歌、淸正集にも載せたり、後撰集には、上句ならの葉の葉守の神とあり、新古今に、藤原基俊、

玉柏しげりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで、枕草紙木といへる部柏木いとをかし、葉守の神のますらむとかしこしと書けり、此事漢土にも聞ゆると見えて、北史倭國傳に、俗無盤俎、藉以槲葉、槲葉はかしの葉なり又此柏葉より事起りて、神武紀の葉盤(ヒラデ)八枚(ヤツ)、仁德紀の御綱葉(ミヅナカシハ)、持統紀の柏手(カシハデ)及び拍八開手(ヤヒラデ)、打天枚手(ヒラデ)、大嘗會柏殿も、皆々此より出づるなり、大嘗會柏殿は、兼良公の大嘗會和字抄に委しく見ゆ、坂井衆政が著はせる三貫柏二巻に、御綱柏又三葉柏、又三角柏、俗に御祭葉、又俗に葉盛葉、木は桐に似て枝多し、莖赤くして又芽赤し、故に赤芽柏ともいふ、藻鹽草に、伊勢の御裳川の岸に生ふる柏なり、是をとりて神供をもそなへ、又占をもするなり、

占をする事、是も神名帳秘書に出で、年の豐凶をしるよし、夫木集の歌、祭主輔親の歌、禰宜氏良、寂阿小侍從、神祇伯資茂俊頼などの詠、諸書に多く載せたれども、是にあづからざれば載せず、

古事記に、大后為將豐樂而於採御綱柏幸行木國といひ、應神記に、聞看豐明之日、於髮長比賣令握大御酒柏とあるも、皆此柏にて、承和大嘗會悠紀方歌に、蓑山に繁(シヾ)に生ひたる玉柏豐の明に逢ふ

をかたまの木は日向國にある樹の名なり、葉のさまは榊などのやうにて、表青く裏白みあり、實は數十顆、房をなして一顆づゝ殼われて、赤き子のあらはるゝこと、辛夷の實のごとし、樹に香氣あり、漢名いまだ詳ならず、

〔茅窻漫錄 中〕ヲガ玉木

古今集物名に出でたるをがたまの木は古今傳授にて、往古より秘說とせり、傳授に御賀玉木と唱へ來れり、それには譯のある事なり、をがたまの木は榊なりといふより、御賀玉と書き傳へり、是は度會社家の據とする神名帳秘書に、輿玉社无寶殿、以賢木爲神殿也といひ、對馬の藤齋延が說に、諸神本懷といふ書を引きて、八神殿不安御體、唯用賢木也といふにより、御賀玉輿玉とおなじ假名に用ひ來れり、輿玉社は伊勢にて猿田彥太神を祭るといへど、社壇のみにて社はなし、二見浦立石の邊に輿玉石といふもあり、されどもをがたま御賀玉の假名相違へり、御は大、御など略して於と書くときは、御の假名にて、をがたまと書くときは、御の假字にあらず、故に御賀玉輿玉より牽强して、榊なりといふも妄說なり、一說にをがたまは招魂の義にて、伊勢神宮の禰宜の實ををがたまといふ、キタノ反カ此等は似よりたる說にて招は古事記に遠岐、日本紀に招禱とよみて、をがみなり、因て考ふるに、をがたまの木は、をがみたまの木なり天武紀に、招魂みたまふりとよめり、神を祭る時、御魂をがむ木なり、日本紀に設齋二字、又齋字をがみとよめり、齋むとき用ふる木は、玉柏なり、日本紀覓宴の歌に、

玉柏をがたまの木の鏡葉に神のひもろぎそなへつるかな、此歌をがたまの明證にて、延喜天慶の頃まで傳へ來りし事と見ゆ、此邦上古は、凡べて飲餜の類、皆柏葉を以て器とす、柏をかしはと訓ずるは堅葉の義にあらず、食鋪葉の省言なり、萬葉集第二、家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる、柏葉のみならず、凡べて木葉をかし

ヲガタマノ木

唐厚朴ニ僞ル、然レドモ其味惡ク、且ツ堅ニ白キ筋アリ、意ヲ注テ辨別スベシ、コレ天竺桂皮ニシテ厚朴ノ類ニアラズ、今藥舖ニ薩州甑島ノ厚朴ト稱スルモノアリ、舶來ノ厚朴ニ代用スベシ、又萬病回春ニ白子朴ノ名アリ古來ヨリ詳ナラズ、コレ厚朴ナルベシ、白子ノ二字ヲ一字トスレバ、厚ノ字ニ近シ、傳寫ノ誤ナリ、

〔牛馬問〕一 和のホウノキといふて、秤の覆ひ、刀の鞘に用ゆる木は、漢土に於て見證なし、此木と梅干とは大毒なり、此木の上に置たる梅干を食ふべからず、必ず死すといふ、本朝の俗醫、此ホウノキを以て、唐の厚朴と心え、和の厚朴と號し、藥用する事、大なる僻事也、厚朴は和産なし、ホウノキは漢土なし、故に文字なし、ホウノキは冬に至りて葉落、厚朴は冬不凋、たま〳〵其木の似たるのみ、藥用には必ず唐なるものを撰て服すべし、總じて和産なきもの、近年唐種にして和産するもの多し、又可ㇾ知、

〔剪花翁傳〕前編二 三月開花 厚朴 俗にほうの木といふ、花八重一重、色白形木蓮花に似たり、開花三月中旬、葉先出で後花咲なり、是山生のもの故に、育方隨意にすべし、丹波路に多く產す、

〔採藥錄〕五 木 厚朴 ホウノキ

春秋皮ヲ取リ日乾スベシ、舶來ハ檞皮ニ似タリ、本邦ニモ一種深山ニ生ズル者、葉稍小ニシテ皮檞ノ如シ、

〔榮花物語〕三十 鶴林 またこのほどに、あさましうあはれなりつる事は、侍從大納言○藤原行成の同じ日よりあやしうれいならぬかせにやとて、朴をまゐりゆゆてなどして、心み給ひけれど、いとくるしうのみおぼされければ、いかなるにかと覺し、殿のうちも、よろづに御いのりもさはぎけるに、四日○萬壽四年十二月のよさり、との丶御まへ○藤原道長のおはらせ給ひしおりにこそ、うせ給にけれ、

〔古今要覽稿〕草木 をがたまの木

察、欲概與参芪歸朮等品同以一物決之、宜哉、其遂無歸一之論也、樹皮樸棗重厚者、皆名以厚朴、何物泥一物乎、又有單稱朴樹者、詩之國風云、隰有六駮、駮與朴通、以其樹皮龜梔朴棗謂之朴、其皮上生白斑點者曰駮、駮猶駮馬之駮、文字雖異、而其實一物也、又物理小識謂之奚盃樹、和名恵乃木、此即喩之一種也、俗用榎字者非也、榎則榎、楚之榎與榎通別物也、註家或有誤連六駮爲樹名者、猶指關睢爲鳥名、以遊龍爲荘艸之類、六駮者猶言六株、駮樹舉其株數之辭也、與其朴樹相似而皮色赤紫、重厚者通謂之厚朴、保宇乃木皮色赤褐、質重厚可以充厚朴、況本邦古今諸名家通用有効驗乎、如彼加條木皮、則群書之未經見者、何以偏鄙兎園之僻談而足據以決眞乎、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕厚朴　詳ナラズ　一名淡伯 輟耕錄　榛樹皮 本草彙要　厚薄 證類本草

舶來ニ數品アリ、皮厚ク紫褐色ニシテ潤ヒ、味苦辛ナルヲ撰ブベシ、是紫油厚朴ナリ、皮薄ク味苦甘ナル者ハ、山厚朴ニシテ下品ナリ、本草原始ニ、肉厚色紫油潤者佳、故俗呼紫油厚朴、山厚朴、肉薄而色淡不堪用ト云リ、コノ外數品アリ、皆眞ニ非ズ、和名抄ニ厚朴ヲホヽノカハト訓ズ、故ニ今モホウノ木ノ皮ヲ、和ノ厚朴トスレドモ非ナリ、舶來ニモコノ皮ヲ雜ユ、然レドモホウノ皮ハ味酸シテ苦辛ナラズ、時珍ノ説ニ五六月開細花ト云時ハ、ホウノキノ花大サ尺ニ近キ者ト異ナリ、又葉如槲葉ト云時ハ、ホウノ木ノ葉ノ長サ尺餘ナルニ異ナリ、

附錄、浮爛羅勒、　ホヽガシハノキ 和名抄　ホウノキ深山ニ多シ、大木ナリ、葉ハ槲(ハヽソ)葉ノ如ニシテ鋸齒ナク、長サ一尺餘、枝梢ニ簇リ互生ス、夏月上ニ一花ヲ開ク、形玉蘭花ニ似テ、大サ尺ニ近シテ香氣多シ、花中ニ紫心アリ、又玉蘭ニ似テ大ナリ、花謝シテ心中紅子ヲ吐シ、萬年青子ノ如シ、年久シキ者ハ樹皮厚シテ、舶來ノ厚朴ニ似タリ、然レドモ酸味アリテ嘔ヲ發シ易シ、故ニ用ユル者、炒炙ス、即商州厚朴ニシテ眞ニ非ズ、

增、近年藥肆ニタフ皮ト稱スルモノヲ售ル、甚厚ク紫色ニシテ、舶來上品ノ者ニ似タリ、故ニ奸商

厚朴

すがにや、

〔本草和名 木十三〕厚朴、一名厚皮、一名赤朴、樹名㯉(楊玄操音乃帶反、又作榛、音津、)子名逐折、一名重皮、(出釋藥性、)和名保々加之波乃岐、

〔倭名類聚抄 木二十〕厚朴(附重皮)　本草云、厚朴一名厚皮、(楊氏漢語抄云、厚木、保保加之波乃木、)釋藥性云、重皮、(和名保々乃加波)厚朴皮名也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕本草和名厚朴條云、一名重皮、出釋藥性、無厚朴皮名也五字、及保々乃可波之訓、保々乃加波、疑源君所訓、厚朴皮名也、亦源君之解釋、非釋藥性舊文、按、說文云、朴木皮也、蓋其樹名榛、見本草、其皮厚重、故名其樹曰厚朴、或云厚皮、或曰重皮、廣雅云、重皮厚朴也、是也、此以厚朴爲木名、以重皮爲皮名、非是、陳藏器餘、浮爛羅勒、生康國、似厚朴也、

〔伊呂波字類抄 保植物附植物具〕厚朴ホヽカシハ

〔和漢三才圖會 八十三喬木〕厚朴(かうぼく)　烈朴　赤朴　厚皮　重皮　樹名榛、子名逐折、　和名保々加之波乃木　今云保々乃木　○中略

按厚朴葉大者近尺、似槲葉而無刻齒、淺綠色、冬凋春生嫩葉、夏開花、狀似牡丹花而淺紫色、大一尺許、隨結實似冬青子、而熟則殼自裂、裏赤中子黑、老木皮有鱗皺、剝入藥用、膚白理密微帶黃、作刀劍鞘或韲等奩蓋、其葉四季不凋者、花紅細者、並不當、

〔本草一家言 二〕厚朴　有三種、自漢來者爲眞正、應于本艸赤朴榛朴之名、和產者保部乃木、轉訓木音爲保部是也、此物又可用、又近世先輩據河澗府志所述、以加條木皮爲眞厚朴、卽諸書所謂槠葉樹、和名女無垢乃木、(愚)竊謂、如加條木皮、乃河澗一府之鄉藥、而非天下通套之厚朴、猶海州人以老翁花爲漏蘆、朝鮮俗認葳蕤稱防己之類、不可輕易信用也、凡本艸之例、有專指一物者、人參黃芪當歸白朮甘艸川芎等之品是也、如彼厚朴苦竹薏苡覆盆之類、則非指一物、故雖諸說各不同、而其用乃一也、世醫不

コブシハ山中ニ自生アリ、其木高大枝條繁密、枝梢ゴトニ夏ヨリ蕾ヲ生ズ、形筆頭ノ如シ、秋冬ヲ經、葉巳ニ落テ後漸ク大ナリ、白色微褐ノ毛アリテ小桃ノ如シ、故ニ釋名ニ木筆ノ名アリ、二三月ニ至テ、未ダ葉アラズシテ先ヅ花ヲ開ク、木蘭花ニ似テ小ク、六瓣白色ニシテ紅條アリ、一種淺紅色ナル者アリ、ムラサキコブシト云、花史左編ノ紅石犇、本草彙言ノ紫蘭ナリ、時珍ノ説ニ、有白色者人呼爲玉蘭ト云ハ、和俗白木蓮ト呼ブ者ナリ、一名ヲホコボシ丹波イトマキザクラ南部、卽辛夷ノ一種ナリ、樹ノ高サ二三丈、仲春花ヲ開ク、大サ木蘭花ノ如シ、形モ相似テコブシヨリ大ナリ、香氣多シ、色白シテ微緑ヲ帶ブ、花謝シテ後新葉ヲ生ズ、辛夷品類皆然リ、一種シデコブシアリ、一名ヒメコブシ、木ノ高サ二三尺、或ハ丈許ニ至ル、枝條繁密同時ニ花ヲ開ク、大サ三寸許、細瓣長サ二寸許ニシテ十二三瓣アリ、色白シテ一ツノ淡紫條アリ、瓣ゴトニ曲リ亂ル、故ニシデコブシト呼ブ、又白花ノ者紫紅花ノ者アリ、

〔剪花翁傳前編正月開花〕辛夷（こぶし）　花八重ともいふべきなれ、色淡紅、開花早きは正月末より三月まで咲也、方日向、地二分濕、土撰ばず、肥大便寒中入べし、接木蓮華砧に春彼岸寄接にすべし、移（うゑかへ）秋彼岸より、水は自然に升ることもあり、もし上ざるときは、切口を割て蜀椒を三四箇木の大小に應じ挾み、水器（いけがめ）に入おき、水上て後插花にすべし、

四手辛夷（しでこぶし）　花の色淡紅、形四手のごとく、下に垂れ咲也、開花正月末なり、育方水升の方、共に辛夷に並び同じ、

〔夫木和歌抄二十九こぶし〕

うちたえて手をにぎりたるこぶしの木心せばさをなげく比哉　民部卿爲家

〔催馬樂〕呂　妹與我　一段、拍子十、

いもとわれと、妹とわれと、いるさの山の、山あらゝぎ、手なふれそや、かをかをすがにや、かをまさ

蘭ニシテ木蘭ノ類ニ非ズ、辛夷ノ下ニ詳ナリ、

釋名、杜蘭ハ石斛ト同名、林蘭ハ、石斛及梔子ト同名、木蓮ハ、木芙蓉及蔓草ノ木蓮ト同名、

〔新撰字鏡 木〕辛夷 山阿良々木 〔同 草〕辛夷 山蘭、形如桃子小時、又云比岐佐久良、亦云志太奈加、

〔本草和名 十二 木〕辛夷一名辛矧、楊玄操音尸軫反 一名侯桃、一名房木、一名侯新、出雜要訣 和名也末阿良良岐、

〔倭名類聚抄 十六 草木〕辛夷 崔禹錫食經云、辛夷 和名夜末阿良々木、一云古不之波之加美、 其子可噉之、

〔箋注倭名類聚抄 四 鹽梅〕本草和名云、和名也末阿良良岐、新撰字鏡又云、辛夷、山蘭、又云、辛夷、山阿良良木、又夷、山阿良良支、薑不載古不之波之加美之名、夜万阿良良岐、又見催馬樂妹與我、按辛夷、其樹生山中、味辛如蘭蕙草、故名夜万阿良良岐、其花未發似人拳、味辛如椒、故名古不之波之加美、後俗省呼古不之、見古今著聞集、今俗亦然、○中略 本草陶注云、辛夷形如桃子小時、氣辛香、蘇注云、其樹大連合抱、高數仞、葉大於柹葉、所在皆有、蜀本圖經云、似柹葉而狹長、正月二月花似著毛小桃、色白而帶紫、花落而無子、

〔大和本草 十二 花木〕辛夷 葉ハ柹ノ葉ニ似タリ、大木アリ、其花イマダヒラカザル時、ツボミ筆ノ如シ、故ニ木筆ト云、二月ニ白花ヒラク、外紫ニ内白シ、玉蘭ニ似タリ、玉蘭ノ枝ヲ辛夷ノ臺ニツゲバ能活ス、葉ハ花ノ後ニ生ズ、南國ハ春ニ先ダツテ花ヒラク、故迎春花ト云、實ハ其形桃ノ如クナリ、ウスキ苞アリテ、其内ニ子多クツヽメリ、半ハ苞ノ外ニ出、其實紅ニシテ相思子ノ如シ、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕辛夷 辛雉 侯桃 房木 迎春 木筆 俗云古不之 幣辛夷 之天古不之 ○中略

按辛夷處處人家亦栽之、賞其花美、一種有白花八重者、婆娑如幣、俗呼曰幣辛夷、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三 香木〕辛夷 ヤマアラヽギ 和名抄 コブシ 同上 コブシハジカミ 同上 コブシ コボウシ 越前 コボシ 丹波 一名猪心花 秘傳花鏡 望春 同上 報春花 寧波府志 朝天木蓮花 藥性要略大全 朝天蓮 同上 侯木 野菜博錄 流夷 蘇民韻轉 新雉 同上 玉甌 花曆百詠 辛彝 江南通志

處々に植、春時枝頭每に背濃紫色面白色の一花、新葉と倶に開く、狀蓮華の如し、蕋あり香氣を發す、七瓣八瓣あり、實を結ばず、凡萬花陽に隨て開く、然るに此花悉く陰に隨ふ、蓋し陰木なるべし、秋時蓓蕾を生ず、悉く陰に隨ふ、狀筆頭の如し、秋後其葉墜、又玉蘭は花を先にし葉を後にす、木蘭より早く開花し、八瓣或は九瓣、面背純白色、狀木蘭の如し、蕋あり亦香氣を發す、實を結ぶ、其色紅紫鱗甲あり、頂に濃紫色の皮有て、雨裂すれば中に子あり、朱色なり、其全形蟲の朱丸を啣たるが如し、甚熟しがたく、夏中に落る者多し、其花亦悉く陰に隨ふ、秋時枝頭每に蓓蕾を生じ、即陰に隨ふ、秋後其葉墜、又一種瓣下紫色にして、木蘭と倶に開花する者あり、是皆接換して能活す、其性全く木蘭に似たりといへども、舊說辛夷の一種とす、然れども玉蘭の花陰に向は、木蘭の性なり、辛荑の花は陰に向はず、玉蘭を以て辛荑の一種とするは穩ならず、本草綱目辛荑集解云、時珍曰、有白色者、人呼爲玉蘭と而已ありて、其形狀を釋せず、甚疎漏なり、此說は辛夷中の白花なる者にして、今云ふ玉蘭に非ず、疑らくは同名異品ならむ、玉蘭は木蘭の一種なり、物理小識云、玉蘭即木蘭、大理府志木蓮花樹高大花如蓮、有青黃紅白四種、白香山言忠州有木蓮花、王元美謂即玉蘭、智按るに、玉蘭春初開、木蓮四月花、蓋亦有別と、辛夷は花を先にし葉を後にす、玉蘭は辛夷の如し、故に辛夷の一種とす、然れども櫻に花を先にし、葉を後にするあり、是を以てこれを推ときは、則花葉の先後を以て一槩に別種とするは非なるに似たり、術後の君子の明辨を俟つのみ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三 香木〕木蘭　モクレンゲ　シモクレン　一名生庭 名物法言　女郎花 桂樓記

庭院ニ多ク栽ユ、叢生ス、木高サ八九尺、葉大ニシテ柹葉ノ如ク末廣シ、長サ七八寸光澤アリ、春新葉ヲ互生シ、初夏枝上ゴトニ一花ヲ開ク、七八瓣、形蓮花ノ如ク、瓣狹クシテ、外ハ深紫色、内ハ白色微紫、香氣アリテ瑞香ノ如シ、中ニ寸許ノ心アリ、形筆頭ノ如ク、紫刺亂布ス、汝南圖史ニ、如小浮屠ト云、周邊ニ黃蕋アリ、唐山ニハ白花黃花モアリト云、本邦ニハナシ、今世ニ白木蓮ト呼ブ者ハ、玉

柊(ひらぎ)のごとくなるものあり、いづれも插花に用ふる也、此幹を撓めむすぶ、方紙を枝に卷て水を浸し火にかけて燒ば、自由に曲るといふ、傳は大概同じけれど、其傳のごとくしてならざることあり、是は理のみを知て、其わざに拙きゆゑなり、此紙を卷を雜巾に換て卷べし、又水に浸すを、沸湯を澆ぎて、火に炙るべし、さて火氣通るまで炙て、一時には曲りがたしいまだ和らがざる所はよく炙て徐々に撓る也、急速にすれば彈ける也、さて曲結て冷水に入るれば反ることなし、是燒刃を入るにひとし、幹は二年物三年物よし、是傳也、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕狗骨(ひらぎ)南天(なつてん) 俗稱

按、近頃自賀州山中出異樹、其木身皮枝狀似南天燭、葉亦不甚厚、有南天葉樣而有五尖刺、兩兩相對、一朶十二三葉、三月開小黃花、夏結實、似狗骨子(ヒラキノミ)而黑色、乃狗骨與南天相半者、

〔本草和名 十 木〕木蘭、一名林蘭、一名杜蘭、出大宰、

〔倭名類聚抄 二十 木〕木蘭 本草云、木蘭一名林蘭、私名毛○久良邇

〔大和本草 十二 花木〕玉蘭花(モクレンゲ) 圖史遵生八牋花史等ニ詳ニ記セリ、花紫白ノ二種アリ、國俗紫ヲ木蓮ト云、花色アシヽ、白ヲ白木蓮ト云、白花ヲ爲好、

老學庵筆記ニ記セル木蓮ハ、與之不同、

酉陽雜俎續編曰、木蓮、花葉似辛夷、花類蓮花、色相傍、 今案ニ、辛夷ト相類ス、故ニ相接ベシ、多ツボミヲ作リ三月ニ開ク、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕木蘭 木蓮 杜蘭 林蘭 黃心 和名毛久良邇 ○中略

按木蘭出於和州大峯者花如山茶花(ツバキノ)、六月開有紫白二種、未見紅黃者也、

畫譜云、木蘭花未開者、澆以糞水則花大而香、其瓣擇沈精潔、拖麵油煎食、

〔草木性譜 人〕木蘭(もくらん)(もくれん) 附 玉蘭(はくもくれん)

リ、トウナツテン。土州ヒラキマメ。京ヒイラナツテン。土州此花ハ常ノ南燭トチガヒ長クホニナリ、大豆ノ花ノ如ク黄色ナリ此ハ漢シレズ、常ノナツテンモ國ニヨリ大木アル也、美濃山中ニモ床柱トナルホドノ大木アリト云、土地山中ニモアルト云、間ニ額ナドニナルアリ、巾二尺計モアルト云、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕南燭　ナンテン。ナツテン。京ランテン。上總三葉和方書一名闌天竹八種畫譜南天竹通雅天竹同上南天竺秘傳花鏡大椿同上黑飯樹古今秘苑烏飯子先醒齋筆記南竺枝子同上烏飯葉藥性奇方烏葉本經逢原烏草類書纂要天燭本草撮要南天燭日茅山志惟那木之王同上南草木夢溪筆談南燭大觀本草楊桐草石南發明

人家ニ多ク栽ユ、葉ハ楝葉ニ似テ鋸齒ナク、冬ヲ經テ枯レズ、五月枝頭ニ長穗ヲ出シ、多ク枝ヲ分テ花ヲ開ク、五出ニシテ白色黄藥、後圓實ヲ結ブ、熟シテ色赤シ、春ニ至リ猶アリ、一種白實ナル者アリ、一種淡紫實ナル者アリ、フヂナンテント云、凡ソコノ木多ク叢生ス、一叢百餘株ナル者アリ、南土ニハ柱トナスベク、扁額トナスベキ者アリ、花戸ニ一種ヒラキナツテント呼ブ者アリ、一名ヒイラナンテン、土州唐ナンテン、勢州此木元ト加州ヨリ出、葉ニ大刻アリテ枸骨木ノ如シ、花ハ穗ヲナシ黄色、形豆花ノ如シ、是別種ニシテ、南燭ノ類ニ非ズ、漢名詳ナラズ、增、一種チヾミ南天アリ、葉小ニシテ縮ミアリ、又イカダ南天ハ葉ノ蔕扁シ、細葉ノ南天アリ、葉極テ小ナリ、ツル南天ハ莖細ク葉細ク柔ナリ、又葉ニ斑ノ入タルアリ、コレニ黄斑白斑アリ、又黄實ノモノアリ、深紫色ノモノアリ、

〔剪花翁傳前編三五月開花〕南燭　花白也、花莖小枝ありて、小英群攢て一房をなせり、開花五月、方半陰、地三分濕、土回塵、肥えらばず、分株、移ともいつにてもよし、揷春ひがんにすべし、接同節寄接也、實は十月に熟す、赤あり、白あり、また一種筏葉といふあり、葉の莖三本づゝ並びて、筏に似たり、又葉の

誤ノ説當レリ、

〔和漢三才圖會 八十四灌木〕南天燭　南燭草木　南燭　惟那木　男續　猴菽草　牛筋　烏飯草　染菽　墨飯草　楊桐 ○中略

按南天燭 俗云南天 畫譜名闌天竹、其葉儼似竹、生子成穗、紅如丹砂、經久不脫、植之庭中、可避火災、甚驗、亦可入藥室供食、

原生山中、故性惡濕、養之茶煎滓或注米泔水亦可也、種子能生、其子朱赤色、剝皮內白如大豆、肉爲二片、未見紫色內有細子者、近頃出子白南燭以爲珍、凡用南燭葉、布於饋飯、以檜葉布於饅頭饋之、皆以無毒也、凡此樹雖難長、而山陽地有大木、作州土州之山有長二丈餘太周一尺二三寸者、作枕、俗謂部耶枕、部耶枕事、見中華卷、以希有之物稱之耳、遠州一宮滿山皆南天實盛甚美、

〔南留別志 二〕一なんてんは南天燭なり、田舍の人、なんでんぢくといふ、又らんてんといふ人あり、八種畫譜に、闌天竹といへり、からもやまとも、らとなとは通ふなるべし、

〔本草綱目譯義 三十六灌木〕南燭　ナツテン、ナンテンノ轉也、　ナピアン　ランテン上總　三葉和方書

是ハ人家ニ多シ、小木多シ叢生ス、年久シケレドモ餘大ナラズ、間ニハ本大ク也、末ノ分リタルアリ、コレハ至テ少也、田舍ニハ高サ丈餘ニナリ、百本ホドモ叢生スルアリ、少ナリ、ドレモ杪ニ葉出テ本ヘ不出、葉センダンノ形ニ似タリ、○中略八九寸計花多クツク、開テ三分ホドノ大サ五瓣也、花後實生ズ、圓ニシテ大サ三分計、熟シテ赤クナルハ一通リノ者也、熟シテ白クナルアリ、藤色モアリ、フヂ色ニナルモノハブチナツテント云、白クナルモノハ白ナツテント云、ドレモワレバ白キタネアリ、實バヘ出來易シ、此外ニヒラギナツテント云アリ、葉鋸齒アリテ、ヒラギノ葉ノ如シ、本加賀ノ山中ヨリ出ヅ、今ハ花戶ニ多シ、藤ノ葉ノ如ク葉ニ枝ナシ、葉長シ居止アリ、居止ノ先刺ニナル也、是ハナツテンニ非ラネドモ、葉ノ出ヤウナツテンニ似タル故、ナツテント名ヅケシナ

小蘗

南天燭

ヲ結ブ、細長クシテ鍼ノ如シ、コレ汝南圃史ノ金雞樹ナリト云、参攷スベシ、

〔本草和名木十四〕小蘗　一名山石留

〔和漢三才圖會香木八十八〕小蘗（ことのへい いぬきはだ）　子蘗　山石榴　金櫻子、杜鵑花並名山石榴、同名異物也、○中略

按、小蘗葉似柹而狹長、其子大如豆、生青、熟淡紫色、中有三子、黑色、似山椒子、甘苦辛　名志古乃倍伊、用洗眼良、樹皮可以染黃、僞充黃栢、不可不辨、其材爲板旋箱、

〔重修本草綱目啓蒙香木二十四〕小蘗　メギ　ヨロヒドウシ　メグイ雲州　ゴガチエンジユ紀州　ニツケイイバラ能州　コトリスハラズ勢州

山中ニ多シ、高サ五六尺、枝多ク繁茂ス細刺多シ、葉ハ枸杞葉ニ似テ、短ク肌美シ皆對生ス、一種圓葉ノ者アリ、共ニ春新葉生ジテ後花ヲ開ク白色、大サ二分許、葉間ニ下垂ス、花後實ヲ結ブ、形赤小豆ノ如ク、秋冬熟シテ赤シ、春ニ至レバ黑色ニ變ズ、木皮白色、粗皮ヲ削リ去レバ鮮黃色ナリ、故ニ古ハ黃芩ニ僞リシコトアリ、唐山ニテハ染料ニ用ユルコト集解ニ見ヘタリ、又コノ木ヲ以テ箸トナス時ハ、口臭ヲ去ルト云、和方ニ洗眼ノ藥トス、故ニ目木（メギ）ト云、根モ亦鮮黃色ナリ、

〔下學集草木下〕南天。又云南天燭、見本草、亦名南燭、其實赤如燭火、故云爾、愛日本俗云南天竺何哉、本草不見此三字、只云二字而已、愚推之、天竺國有東西南北中之五、蓋俗欲云南天二字、語言順下而逆呼南天竺乎、可據本說也、

〔易林本節用集草木〕南天（ナンテン）南木（モク）香（カウ）

〔書言字考節用集生植六〕南天（ナンテン）本草、本名南燭、俗謂之南天。天燭、木而似草、凡有八名、

〔壒嚢抄六〕常ニ南天竺ト云木ヲ、只南天ト云ベシト云人有如何、　誠多分南天竺ト云共、本草ニハ南天草木ト云、亦ハ南燭ト云ゾ、其實赤シテ如燭火、故ニ云爾也ト、然共南天竺トハ不云、若俗語歟、

〔大和本草木十一〕南天燭　本草灌木類ニノセタリ、移シ植ルニ易活、移シタル年花ツボミヲ盡折去ベシ、不然木衰フ、肥壤ノ地ニ植ヘ、時々糞ヲ施セバ、葉ヘ美ハシク實多シ、綱目ニ載タル沈括ガ筆

白椢黃椢赤椢ハ是也、與若棟條須參看、〈臨錄〉

〔重修本草綱目啓蒙〕〈二十三　香木〉檀香　ビヤクダン〈通名〉　白檀一名白銀香〈廣東新語〉　欓檀〈通雅〉　旃檀娜〈金光明經梵名〉　黃檀一名黃英石〈藥譜石ノ字、事物異名ニ香ニ作リ、輟耕錄ニ古ニ作ル、〉　紫檀一名紫栴木〈古今註〉　紫榆〈廣東新語〉
蘇頌檀香有數種、黃白紫之異ト云、大抵三品アリ、檀香ト云フ時ハ總名ナリ、藥ニ入ル者ハ黃檀白檀ナリ、白檀ハ和產ナシ、舶來ニ數品アリ、黃色ナルヲマメノコデノ白檀ト呼ビ、油色ナルヲアブラキト呼ビ、俱ニ上品トス、是黃檀ナリ、內黃ニシテ外白キ者アリ、白キ者ハシラタト呼ビ、下品トシ、佛前ノ燒香ニ用ユ、又本邦ニテ白檀ノ木ト呼ブ者二品アリ、一ハ樹葉樅ニ類ス、俗ニキヤラ木ト呼ブ、漢名詳ナラズ、一ハ扁柏ニ類シテ、幹必左繞ス、木理白檀ニ似テ、微シク香氣アリ、故ニ俗ニビヤクダンノキト呼ブ、然レドモ其類ニ非ズ、是事物紺珠ノ左紐柏ナリ、紫檀ハ舶來甚多シ、紫色ニシテ香氣ナシ、木ノ嫩老ニヨリテ色ニ淺深アリ、白檀類ニ非ズ、檀ノ名ニヨリテコヽニ混ジ入ル、

ツクバネ

〔重修本草綱目啓蒙〕〈二十三　夷果〉都念子　詳ナラズ〈○中略〉
古ヘヨリツクバ子ニ充ル說アレドモ穩ナラズ、ツクバ子ハ一名コギノコ、タカラマン、〈天台山〉コギノキ、ハゴノキ、〈仙臺〉諸州高山ニ多シ、葉ハ水蠟樹葉ニ似テ、末尖リ兩對ス、夏月枝梢ニ花ヲ開ク、四瓣大サ三分許、淡綠色、後實ヲ結ブ、黃豆ノ大サノ如シ、上ニ四ツノ細長葉ツキテ、正月女兒玩ブ所ノハゴノ形ノ如シ、故ニツクバ子ト名ク、鹽藏シ貯テ食用トス、味榧實ノ如シ、常州筑波山ノ名產ナリ、北國ニハ肥長ニシテ榧實ノ如キ者アリ、漢名詳ナラズ、
增、一種コツクバ子ト云モノアリ、近山ニ自生多シ、小木ナリ、葉ニ鋸齒アリテ、カウヤバウキノ葉ニ似テ兩兩相對ス、葉邊微シク紫色ヲ帶ブ、四五月葉間ニ花ヲ開ク、本ハ筒子ニシテ、末四瓣ニ分ル、胡麻ノ花ノ如シ、白色ニシテ黃斑點アリ、又黃花ノ者アリ、紅花ノ者アリ、共ニ花後蒂中ニ小子

作旃丹、並一聲之轉、而皆是假借漢字音近者對譯也、從木作栴、俗字耳其檀字亦假音、非樹檀伐檀之檀也、

〔倭名類聚抄 木二十〕白檀 內典云、栴檀白者謂之白檀、

〔箋注倭名類聚抄 木十〕所引法華經玄贊文、詳引見上條、檀○按嘉祐引陳藏器云、白檀、樹如檀、出海南、

〔古事談 二臣節〕四條宮女房大貳局、栴檀ハ唐土ニモ有ト云、他之女房達、皆天竺之物也、不然云々、此事相論之間、伊房卿宮司之時、被尋之處、天竺ニ有之云々、大貳局猶論之、仍經信大納言許遣尋之處、同伊房之說、女房達彌令指南、然而大貳局者猶不信伏之間、重令問實成卿之處、答云、唐土ニモ有也、赤。栴。檀。ハ天竺ニ有之、餘紫。檀。白。檀。等皆唐土之物也云々、仍大貳局終勝了、于時件女房云、此事者參河前司秀綱ガ申シヲ傳承之也、赤栴檀ハ本體也、紫檀ハ栴檀之黑也、白檀ハ栴檀之白也、沈香者栴檀之沈也、薰陸ハ栴檀ノシル也ト云々、

〔和漢三才圖會 八十二香木〕檀香(たんかう) 旃檀 眞檀 白檀(ヒヤクタン) 紫檀(シタン) 黃檀 赤旃檀(シヤクセンタン)、 雲南人呼紫檀爲蒔沈香、卽赤旃檀

本綱、旃檀不生中華、江淮所生、木亦其類、而但不香爾、出廣東雲南及占城眞臘瓜哇渤泥(ボルネヲ)暹羅(シヤム)三佛齋回回等國、今嶺南諸地亦皆有之、有黃白紫之異、樹葉皆似荔枝、皮青色而滑澤、其皮實而色黃者爲黃。檀、皮潔而色白者爲白檀、皮腐而色紫者爲紫檀、其木並堅重清香、而白檀尤良、紫檀新者色紅、舊者色紫、有蟹爪文、新者以水浸之可染物、皆俱可作帶胯扇骨等物、

白檀 辛溫 氣分藥、故能理衞氣、而調脾肺、 紫檀 鹹寒 血分藥、故能和營氣、而消腫毒、治金瘡、

〔本草一家言 二〕檀 有二種、一則西土之檀、屬堅木、一則諸番之檀、屬香木、又和邦眞弓木爲檀木之檀也、西土用以爲車材、伐檀之詩、又云、坎々伐檀是也、和名堅木、此木諸州希有、唯北地賀越間有、葉似合歡木、質堅靭作器不破裂、先輩點詩經檀字、訓眞弓者誤也、其誤已久、乔有柤乔、以眞弓木皮製之、中鷹乔、大鷹乔是也、此非檀木皮、卽本草衞矛樹皮、和名眞弓、此又有二種、詳于衞矛條、又香木之檀有紫柤

成就すとて、請狀を認、奉公人と成、同十七日菩提樹の實ふると云、善光寺如來の奇瑞とかや、(按水草ノ
實也、鳥の糞に交りて有之也、風來山人菩提樹の辨を作る、)

〔山城名勝志 十四 愛宕〕建仁寺(號東山、五山第三、在四條南、大和大路東五條北、○中略)　菩提樹(今在護國院)

〔駿國雜志 二十六〕菩提樹

有渡郡久能御山御寶塔の後にあり、參拜の者此實を拾て守りとす、

〔紀伊續風土記 物産六下〕菩提(ボダイジュ)樹(翻譯名義集)

もと漢種なり、元亨釋書の榮西傳に、建久元年天台山の菩提樹を本邦へ渡し、筑前糟屋郡香椎の神祠に初てうゑし事見えたり、其後諸州に種を傳へて、今本國寺院に多し、

ヘラノ木

〔大和本草 十二 雜木〕ヘラノ木　葉ハ椋ノ木、桑及木槿ニ似タリ、長ゼントスル時早ク其株ヲ切レバ、一根ヨリ多ク叢生ス、小ナル時不切、一株長ズレバ大木トナル、椴ノ木ノ叢生アリ喬木アルガ如シ、其皮ヲ剝テ麻ヲ製スル如ニシテ繩トス、農夫是ヲ以馬具ニ作ル、又農夫皮ヲ以腰蓑ニックル、又コレヲ以ムシロヲヲル綵トス、本艸喬木類ニ莢蒾アリ、葉似木槿小、樹皮堪爲索トイヘリ、疑ラクハ是ナルベシ、葉ノ間ヨリ菩提子ノ如ナル薄葉生ジテ、其薄葉ノ半ヨリ實ナルコト恰如菩提子、奇物ナリ、

檀香

〔倭名類聚抄 二十 木〕栴檀　唐韻云、栴檀(仙壇二音、俗云善短、)香木也、內典云、赤者謂之牛頭栴檀、

〔箋注倭名類聚抄 十 木〕廣韻同、山田本旃作栴、下總本作栴、按龍龕手鑑、栴俗作栴、其形略似、按栴檀古借旃字、蓋梵語對譯也、从木俗字詳見於下、然此引唐韻、則從木爲是、○中略　法華經玄贊云、旃檀者、赤謂牛頭旃檀、黑謂紫檀之屬、白謂白檀之屬、此所引蓋是、○中略　香要抄引玄贊亦從木、恐皆非是、按慧琳音義云、白檀、唐蘭反、香木名也、白赤俱香、赤者爲上、梵云贊那曩、古譯云栴檀香、是也、法華音訓云、旃檀那、謂牛頭旃檀等、古作旃丹、切韻作栴、非也、是知旃檀梵語、無其字、或作贊那曩、或作旃檀那、或

山住萬年寺、經五ヶ年以種歸當寺也、歸朝之時、得彼樹葉而種於香椎宮、(建久元年也)傳彼樹以種當寺也、榮西上人書云、今大和尙者、予幼少之時、兄弟二人投以爲師、今暫別也、此菩提樹來我朝之最初也、

〔濟北集 七原 記銘〕菩提苗記

乙丑夏六月、京師水、三聖雲堂後淵大激岸崩、主事者斬庭樹、爲橛株而防之、殿前有菩提樹、爲材而並刑焉、予時在圓通閣之喟歎而言、道樹爭受株材之厄乎、丙寅冬十月移焉之殿墀、撫枿痕而悲、丁卯春三月辛亥、市枿痕苗數牙、衆僧怪見菩提苗也、相謂云、此樹植此庭者數十歲、秋果滿地、未見春牙、況隔年而生尤可怪、豈菩提樹不終否乎、傳聞印度又爾、暴主虐截復能萌出、和竺異域、果實同根、今茲苗牙不亦韙乎、卽來室請記、予曰、姑待之、夫陽和之覃植物也、雖枯朽或能發萌、所謂褪花菌耳皆是也、異時源暑蒸之、燋陽暵之、斯脃萌脩褪菌、若又經盾日受衰嘅、外凋內貞、保幹養根、我記未晩耳矣、已而予畢書雲事而間坐、儕之者立側言之云、覺苗之誌時乎哉、予曰姫魚語女、物若容思慕、何物適此樹、蠹世嘗於此下殪邪寇、獲正悟、後代對此樹如對調御、吾黨之人、縱欠培洒焉、加斬伐乎、甚矣哉、叔運之蕩昧也、又此樹竺土猶不多有、況葱外乎、自從師子國主金壇移盛始出梵壤也、劉宋之初、求那跋陁羅携來、李唐中葉道邃師介于台嶠、趙宋淳熙之間、明庵游銀地、分移一枝、以爲傳法之信、自來布濩四海矣、嗚呼未入涗嗅之前、東方之國豈易覩哉、金壇之設可思矣、今充寰區、故或厄橛株乎、凡人貴寡賤多、不察所由、良可痛乎哉、或曰、其物不以多而賤、修多羅曰、微塵量恒沙數佛、雖多不爲賤、今夫卉木中與佛同號者只此一株耳、塵沙之數多多益貴、何賤之有、今之橛厄者猶靈鷲之逆石也、金軀自若也、然則此苗佗日扶疏覆蔭祖庭、可跂而需耳矣、系之以詩三章、章三句、

蔽芾覺樹、勿剪勿捨、婆伽所坐、蔽芾覺樹、勿剪勿憩、明庵所移、蔽芾覺樹、勿剪勿毀、虎關所記、嘉曆二年多至後一日、住持某書、

〔半日閑話 三〕 安永七年閏七月頃、野島地藏、湯島天神にて開帳有、地藏尊江奉公人となれば、諸願

後には地に垂り、根梢地に入て樹となり、又細根下垂して頗怪狀をなす、其枝の書たる根を悉離せば、幹に輪囷の形あり、小兒其細根を紐となし弄ぶ、四五尺より長きものは數丈に至る廣東新語に榕鬚といふ、其枝霖雨中に插みてよく活す、其幹大なるは中空により、下質脆くして材とならず、又此樹に生ずる菌をオホキタケといふ、形香蕈に似て白褐色、味美にして毒なし、薩摩にて方言アカウといひて、海邊處々に產すといふ、本國にては海部郡衣奈莊より、日高郡三尾莊比井御埼までの間、海邊所々にあり、其餘他州に產する事を聞かず、漢土にても北地には產せず、唐の劉恂の嶺表錄異に榕樹桂廣容南府郭之內多栽此樹、葉如冬青、秋冬不凋、枝既繁、葉又粟細、而根鬚繚繞、枝幹屈盤、上生軟條、如藤垂下、漸及地、藤梢入土、根節成一大樹、三五處有根者、又横枝著鄰樹、則連理、南人以爲常、不謂之瑞木、といひ、又品字箋に、榕惟生閩中、福州尤盛、故號榕城といひ、嶺南雜記に、榕樹閩廣最多、他省則無、故紅梅驛以北無榕といへり、皇國にても京攝の間に稀に苗を盆種して珍玩するものあれども、大樹となりがたし、

〔伊呂波字類抄〕保殖物附殖物具 菩提樹(ボダイ)

〔大和本草〕十二雜木 菩提樹〇中略 凡念珠ニ作ル物ヲ世俗皆菩提樹ト稱ス、故ニ世俗ノ菩提子ト稱スル物多シ、モクレンジモボダイシト云、無患子、薏苡モ同、何レモ菩提樹ニハ非ズ、菩提樹ノ葉ハ木犀ノ葉ニ似タリ、葉ノウラニ莖アリテ、ソレニ實ナル、常ノ木ニ異ナリ、京都泉涌寺六角堂同寺町、又叡山西塔ニアリ、元亨釋書ニ、千光國師榮西入宋ノ時、宋ヨリ菩提樹ノタ子ヲワタシテ、筑前香椎神宮ノ側ニウヱシ事アリ、報恩寺ト云寺ニアリシト云、此寺ハ千光國師モロコシヨリ歸リテ初テ建シ寺也、今ハ寺モ菩提樹モナシ、畿內ニアルハ昔此寺ノ木ノ實ヲ傳ヘ植シニヤ、翻譯名義曰、菩提樹佛生其下、成等正覺、因而謂之菩提樹、冬夏不凋、光鮮不變トイヘリ、潛確類書九十九、異木ノ類ニ、菩提樹ヲ載タリ、曰末結蕊、先乃別抽一葉、長指半許、潤兩指乃結蕊于葉下、今案本邦ニアルモ亦カクノ如シ、

〔東大寺造立供養記〕抑傳西天之道樹、移東土之庭前、殖鯖木之古跡、期龍花之三會、古人傳云、宋求那跋陀羅三藏、至廣府立戒壇種菩提樹、其後瑯琊道邃和尙傳之、以種天台山也、日本榮西上人往天台

〔和漢三才圖會　八十三喬木〕榕音容○中略

按此木不載葉花實之形、故不知有於本朝否也、蓋莊子所言不才木、則樗栲也、樗之類見于前

〔草木育種後編　下花卉盆玩并に器に用あるもの〕榕樹南方草木狀　俗にあこう薩州方言　枕香木江戸花戸とも
いふ、和蘭にてインデヤンスヘーケボーム、印度亞無花果ノ義又ウヲルトルボーム、根樹ノ義薩州より來る大樹なれど、江戸
にては盆玩にするのみ、夏より秋まで莖幹へ三度計り實を生ず、形ち天仙果に似たり、夏の初よ
り暑中迄に、枝を管にきり插してよし中のひなたにてよし、葉を生じかたまりて、糞汁を澆ぐべ
し、冬は窖に入てよし、一種琉球にてかずまるといふものあり、葉女貞に似て光澤あり、實葉の間
結ぶ事あこうに異なりとす、暖國にて枝間より根を下垂し、又幹となるといふ、冬日暖窖に入て
よし、暑月枝を管にきり插して活す、魚腥水豆肥糞水度々澆ぎて生長し易し、薩州大しまより來
る砂糖の樽に此材あり、用て器に製して頗る雅なり、二種皆花なくして實を結ぶ、無花果の一種
なり、

喜住部○阿　按に、榕樹即佛家にいふ菩提樹にして一名貝多羅なり、慈恩傳云、菩提樹即畢鉢羅樹
也、法顯傳曰、貝多樹下、是過去當來諸佛成道處、華嚴探玄記曰、畢鉢羅樹此曰榕樹、在嶺南、亦有此
類、又菩薩樹といふ、八紘譯史曰、菩薩樹不花而實、人不可食、其枝下垂附地、生根若柱、歲久結成巨
材、人蔭其下無異屋宇、至有容千人者、以爲佛宇、又多羅樹あり、即椰子の類にて、葉を寫經の料に
充るもの也、又貝多羅花ありて、讀脩臺灣府志に見ゆ、ともに別物也、予本艸講義に譯す、故にこ
こに略す、

〔紀伊續風土記　物産六下〕榕南方草木狀　一名倒生木通雅、日高郡にてオホヤノ木、此樹大なるもの高さ數十丈、周圍數抱、冬月葉枯ずして、三月頃新葉生じ、
舊葉脫す、形冬青葉に似て潤く、天仙果葉に似て厚く、紋脈異なり、七月の頃花なくして、無花果の如く、木幹及孫枝處を定めずして實結ぶ、形も亦無花果の如くにして小く、初青く熟して赤
し、土人採りて食用とす、方言ヤカノミといふ、樹經年のもの、梢及枝上より長細根下垂して、次の條に著き、其著たる枝より又長細根下垂して、又次の枝に著き、此の如くすること幾數にして、

字ヲ補フベシ、然レドモ全文ニハアラズ、又コヽニ、廣東新語ヲ引テ、波羅樹ヲ婆羅樹ニ作ルハ誤ナリ、

一種アコウト呼モノアリ、アコギトモ云、暖國ニ自生アリ、葉ノ形冬靑ニ似テ濶大ニシテ厚ク缺刻ナシ、夏月枝間ニ花ナクシテ實ヲ結ブ、大サ無患子(ムクロジ)ノ如クシテ內ニ細子アリ、枝上ニ根ヲ生ジ、下垂シテ土中ニ入ル、コレ廣東新語ノ榕ナリ、コノ樹甚寒氣ヲ畏ル、然レドモ扦シテ能ク活ス、倒ニ插スモ亦活ス、故ニ廣東新語ニ、以枝爲根、復以根爲枝、一名倒生樹ト云、阿州小松島浦辨天山ニ多シ、

〔草木性譜 人〕榕樹(あこう)

南土の產にして寒を畏る、冬暖室に藏むべし、其葉深綠光澤あり、冬凋落す、夏枝頭より新葉を生じ、卽其枝長ず、夏中稀に花あらずして、枝條に數果を發すること忽然たり、其色初靑綠白點あり、深秋に至て熟すれば、紅紫色黃點、果中紫色にして、空虛肉なく全く無花果の如し、枝を折ば白汁出づ、搓插して能活す、偶根上より根を生ず、然れども其土にあらざれば、多く生ずることを得ず、只一二根而巳、又がつまる漢名未詳は卽其一種にして、南國の產、頗る寒を畏る、其性榕樹に相似たり、夏花あらずして枝條に果を生ずること忽然たり、形榕樹の果の如し、搓插して能活す、根上及び枝間より根を生ず、榕の根より生じ易きといへども、其土にあらざれば長じがたし、

〔本草一家言 二〕榕　薩州鹿子島有之、鄉名阿古、其樹經久則極高大、葉似讓葉而濶大厚、滑無鋸齒、其枝下垂著地、卽生根、蓋數十株、相連絡而成林、伐其根盤、沃以米泔水、淹以草薦、日久而生菌、呼阿古不奈波奈波、蓋諸菌通稱也、日乾以寄遠爲珍、與香蕈松蕈並稱爲菌中上品、其樹西北方土絕無之、故世識者希矣、南方所產者會移植之北方、皆不活、地氣寒暖使然也、柳柳州詩、榕葉滿庭鶯亂啼、注云、榕城以產榕得名、蓋雖漢土地方亦不偏有、

波羅蜜

五分、初ハ綠色熟シテ赤シ、小兒採リ食フ、破レバ内ニ細子アリ、木饅頭ノ如シ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二 夷果〕波羅蜜　一名刀生果（廣東新語）　婆羅樹　優鉢曇（上共同）　無花果（正字通同名アリ）

嶺南及海南ノ國ニアリ、廣東新語ニ詳ナリ、曰ク生五六年至徑尺、削去其杪、以銀鍼釘履即結實、其實不以花成、實乃花、然常不作花、故佛氏以優鉢曇花爲難得、毎樹多至數十實、自根而幹而枝條皆有實、纍纍疣贅、若不實則以刀斫樹皮、有白乳湧出、凝而不流則實、一斫一實、十斫十實、故一名刀生果、其以乳而實者乳血也、猶人以母之血孕育而成形也、其根或行旁舍則實潛結地中、熟而地裂、聞香始知、較枝幹所生者尤美、此所謂無花之果也ト、又曰、波羅熟以盛夏、大如斗、重至三四十斤ト、此實至テ甘味ナリ、花暦百詠ニ、梵語謂至甘爲波羅蜜ト云リ、

增、波羅蜜ハガツマルナルベシ、卽廣東新語ニ波羅樹ト云是ナリ、ガツマルハ今種樹家ニ傳ヘ栽ユ、葉ノ形山茶葉ニ似テ、鋸齒ナク厚ク、深綠色ニシテ光澤アリ互生ス、冬モ落葉セズ、夏月葉間ニ莖ニ附テ花ナクシテ實ヲ結ブ、ソノ形天仙果ノ如シ、暖國ノ產ユヘ甚寒氣ヲ畏ル、故ニ本邦ニテハ纔ニ盆種スルノミ、稀ニ實ヲ結ブト雖ドモ、小クシテ形色臭味、共ニ全ク具ハラズ、冬月土窖ノ中ニ藏セザレバ育シ難シ、然レドモ春夏ノ間扦插ニスレバ能ク活ス、元來此樹甚大木ニシテ、榕ノ類ナリ、廣東新語ニ、榕樹大十圍、又云枝柯長至數丈、又桄榔長五六丈、蒲桃高二三丈ト云ヘドモ、本邦ニテハ此類悉ク盆種ニ過ギズ、類推シテガツマルノ大木ナルヲ知ベシ、然ルニ波羅蜜ヲ、廣東新語ニハ重至三四十斤ト云、時珍ハ顆重五六斤ト云、且ツ文ニ異同アリ、參錯シテソノ要ヲ察スベシ、凡ソ草木花有テ後實ヲ結ブ、是天地ノ常理ナリ、故ニ花ナクシテ實ヲ結ブ者ハ、數種アルベキモノニ非ズ、又蘭山翁引ク所ノ廣東新語ノ文ハ甚略文ナリ、ソノ生五六年ノ上ニ、波羅樹卽佛氏所稱、波羅蜜亦曰優鉢曇、高三四丈、葉如頻婆而光潤ノ二十七字ヲ補フベシ、無花之果也ノ下ニ、廣南無花之果、若古度子、若獼猴桃、若楊搖子、凡有三四種、以波羅蜜爲大、蓋果之胎生者ノ三十五

花ヲ開ク、形分明ナラザル故無花果ト云、又古ヘイチジクト云フハ、天仙果ノコトナリト、大和本草ニ見ヘタリ、

〔佐渡志物産五〕無花果 イチジク

小木ナリ、家園ニ植テ熟スルヲ採テ痢病ノ藥トス、大和本草ニ古ヘイチジクト云ハ、天仙果ノコトナリト云ヘリ、

〔和漢三才圖會果類八十八〕天仙果(いぬびわ) 俗云、犬枇杷、又云唐(カラ)枇杷、或云計(ケ)耳(ラ)、見灌木類讓葉下、

按天仙果、和州山中有之、多凋春生、葉似讓葉而青末尖、六七月無花結實、一枏二三顆、狀似枇杷而小、初青熟赤紫色、內滿白細子、小兒喜食、俗名犬枇杷、

〔大和本草雜木十二〕イチヂク 無花果ヲモイチヂクト云、ソレニハ非ズ、葉ハ木犀ニ似テウスク冬ヲツ、其實無花果ヨリ小ナレドモ能似タリ、秋冬ニ至テ熟スレバ、內ニ細子多ク、肉アリテ恰無花果ノ如シ味甘シ、小兒好ンデ食ス、實青キ時ワレバ白汁アリ、村落林木ノアル處ニアリ、村民其葉ヲトリ、飯上ニ置蒸テ食ス、味ヨシ、無花果ハ近世ワタル、イチヂクニ似タル故ニ、其名ヲカリテ無花果ヲモイチヂクト云、

〔重修本草綱目啓蒙果二十二〕無花果 略○中 天仙果 イ○チ○ジ○ク○ イ○ヌ○ビ○ハ○ エ○ノ○ビ○ハ○ エ○ノ○ビ○和州 ヨ○ノ○ン○バ○同上 カ○キ○ノ○ホ○ウ○ヅ○キ○勢州 チ○ヽ○タ○ツ○ポ○同上 サ○ル○ガ○キ○駿州 コ○ダ○ラ○薩州 カ○ク○ロ○ウ○シ○ノ○ヒ○タ○ヒ○防州 マ○メ○ギ○讃州 マ○メ○ヅ○タ○ マ○メ○ギ○シ○バ○ イ○ヌ○ホ○ウ○ヅ○キ○共同上 イ○タ○ブ○土州 イ○タ○ツ○ポ○ウ○大坂 ヤ○マ○ビ○ハ○肥前 チ○ヽ○ブ○筑後 イ○シ○ヅ○ク○同上 イ○ヌ○ト○ウ○ガ○キ○藝州 ウ○シ○ノ○シ○タ○豐前 サ○ル○ノ○シ○リ○濃州 カ○ラ○ス○ノ○ビ○ハ○同上

種樹家ニコレヲ龍○眼○ト呼ブ、甚ダ非ナリ、諸州ニ多シ、小木ナリ、民家ニ栽テ籬トス、插テ活シ易シ、葉ハ辛夷(コブシ)ノ葉ニ似テ厚ク互生ス、切レバ白汁出、夏月葉間ニ實ヲ生ズ、形無花果(イチジク)ニ同ジ、只大サ四

天仙果

無花果

〔大和本草 十果木〕無花果(イチヂク)(タウカキ) 寛永年中、西南洋ノ種ヲ得テ長崎ニウフ、今諸國ニ有之、葉ハ桐ニ似タリ、花ナクシテ實アリ、異物ナリ、實ハ龍眼ノ大ニテ殼ナシ、皆肉ナリ、味甘シ可食、葉ニモ實ニモ白汁アリ如乳汁、實ノ内ニ細子アリ、枝ヲ挾メバ能生ズ、又日本ニモトヨリイチヂクト云物別ニアリ、後ニアラハス、イチヂクニ似タル故ニ、無花果ヲモイチヂクト云、救荒本草ニ、無花果ノ葉ノ煎湯治心痛甚效アリ、此事本草ニハ不載、

〔和漢三才圖會 八十八 夷果〕無花果(たうがき)(いちぢゆく) 映日果　阿駔優曇鉢　俗云一熟、又云唐柹、〇中略

按無花果其實似柹而本窄、俗曰唐柹、一月而熟、故名一熟、其樹雖似枇杷不然、枝柯婆娑、葉似蓖麻而小、背色淡潤、文理隆明、人識治五痔、不知治魚毒、如食魚酔遍身赤腫發熱者立愈、無葉時用枝亦可也、有二種、

一種其實初青、熟則紫黑色、内白有脂、虛軟如絲屑、中無子、味淡甘不美、謂之黑一熟、

一種初青、熟則白色帶微紫色、内淡赤、虛軟如絲屑、中有軟小子、味甘美、謂之白一熟、二種共八月熟、

涅槃經曰、佛出世難如優曇花、蓋譬無花果之開花、猶白烏馬角之類、俗傳、優曇花者一千年一開花、甚妄誕也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二 夷果〕無花果　イチジク　トウガキ 筑前　ウドンゲ 加州　一名映日紅 典籍便覽　仙桃 三才圖會　青桃 同上　密果 群芳譜

元來漢種ナレドモ揷テ活シ易キ者故、今市中ニ多シ、高サ丈許、葉ハ楮ノ花ニ似テ厚ク、椏少シテザラツキアリ、此ヲ斷テバ白汁出ヅ、春生ジ、夏盛ニシテ冬落ツ、五月葉間ニ實ヲ生ズ、形正圓ニシテ木饅頭(イタビ)ニ似タリ、大サ一寸許、初緑色熟シテ紫色、殊至テ甘シ、内ニ白色ノ細子アリ、大サ罌粟米ノ如シ、青實ヲ採リ枇壟ニ瘢食ス、俗ニ五痔ヲ療スト云、又一種熟スルニ至テ紫ナラズ、仍青キ者アリ、藝州ニテシロイチジクト云、無花果ハ花ナクシテ實ヲ結ブ故ニ名ク、然レドモ春月細小白

楮トトノ分別、集解ノ説明白ナラズ、宜シク通雅ノ説ニ従フベシ、構ハカヂ(和名鈔)カヂノキ、カミノキ、又カウゾトモ云フ、木高サ丈餘、枝條婆娑タリ、葉大ニシテ尺ニ近シ、五ツニ分レテ葡萄ノ葉ノ如ニシテ澀毛アリ、故ニ花穀葉(附方)トモ、五花構葉(同上)トモ云、周邊ニ鋸齒アリ對生ス、又圓葉ニシテ岐ナキ者アリ、又一樹ノ内ニ兩形ノ葉雜リ生ズル者アリ、倶ニ木ニ雌雄アリ、雌ナル者ハ實ヲ結ブ、蛇苺(ヘビイチゴ)ノ實ノ形ノ如クニシテ、大サ一寸許、熟スレバ外ノ小子色赤シ、子ゴトニ各一核アリ、是構子ナリ、雄ナル者ハ夏月葉間ニ花穗ヲ生ジ、下垂スルコト一寸許、黄白色ニシテ栗ノ花穗ノ如クニシテ短シ、楮ハ諸國ニ多ク栽ヘ、皮ヲ用テ紙ニ抄ク、木小ク五六尺ノ高サニシテ叢生ス、葉モ小ニシテ四五寸ニ過ギズ、花實ハ構ニ同クシテ小ナリ、舶來ニ楮實子アリ、藥舖ニ誤テ猪實子ト書ス、卽楮ノ子ナリ、構子ハ形微シク大ナレドモ通用スベシ、一種ヒメカウゾアリ、一名ヤコソ(豫州)カヂノキ(同上)ヒヲ(備後)タフ(紀州)イヌカウゾ(城州)ヤブカウジ(江州)山中ニ自生多シ、木ノ高サ丈許、葉ハ狹長ニシテ柔毛アリ、皮ヲ用テ粗紙ニ作ル、是モ亦楮穀ノ類ナリ、

增、構ニマカヂ、ウシカヂ、白カヂノ三種アリ、マカヂハ皮厚ク軟ニシテ上品ナレドモ、コレヲ製スルニ紙少ナシ、ウシカヂハ木至テ大ニシテ、皮粗ニシテ厚ク堅シ、下品ナリ、白カヂハウシカヂニ似テ莖青シ、コレモ上品ニ非ザレドモ、コレヲ製スルニ紙多シ、故ニ多クコレヲ用ユ、

〔元亨釋書(十五方應)〕釋開成、光仁帝子、桓武之兄也、〇中略天平神護元年正月一日、潜出宮入勝尾山、〇中略二月十五日仲算二師經行山中適見、〇中略二師發願寫大般若經、啓白日黑雲俄起、雷落地、二師以其地爲靈所、規置般若、今最勝峯是也、人又夢黃牛行道其地、二公乃種楮於此地、山張羅網、不令鳥下、傍設欄楯、亦拒獸踐、已而紙成、以書事訖、成而去、〇下略

〇按ズルニ、楮ヲカウゾト訓ズル説ハ、載セテ文學部紙篇穀紙麻紙條、及ビ宗敎部經篇寫經料紙條ニ在リ、宜シク參看スベシ、

是より攝州木部にて仕立、九州中國四國邊江送る所の種類、

一赤楮（あかかうぞ）（木肌赤く、木立細く、葉もほそく、切こみなく、皮もうすし、）

一黒楮（大體おぶちに似て、葉の切こみ深く、長く伸、正味多し、平地に植てよろし、）

一眞楮（石州にては專ら用ふるよし、一名つゞらかけといへり、）

一高楮（たかそといへり、紙性少しあしけれども、木至て長く伸るなり、たれをとりて薄木なれば、分根して苗をこしらふるにおよばず、）

此外にも種類あり

餘の國々にて下紙に漉交る品あるべし、筑後にては藁を細かにきざみ打て、楮に交て漉たるを豐年紙とかいへり、又江戸にて艾を交て漉たるを見、筑前にて竹の子の伸て、頓て葉生せんとするところを細かにたゝきて、楮を少し入漉たるを見し事あり、如此楮に交て漉ぬれば、木の皮抔に下紙に漉交る品あるべし、

〔駿國雜志　二十六〕楮

富士郡上井出村にあり、當村及所々是を植て紙を製せり、凡此木、かち苧、高苧等の種類あり、茲に植る所は眞楮苧（マカゾ）也、又三股を以て製るにも、眞楮苧を入ざれば、すく事あたはず、毎年十月より三月下旬まで漉べし、（楮、三股共、伐て蒸剝る也、）夏紙は漉かず、（稀に漉事あり）是を製るに初祝（ハツイワヒ）後祝（シマイ）等さま〴〵の祝事あり、すべて此紙を漉には、根だも（黄蜀葵を云、多く畑に作て用る也、）蔓だも（山黄蜀葵を云、自然に生るを用る也、）こがだも（こがの木の葉を云）の三汁を加へて漉べし、又眞楮苧を加ふるの多少に依て紙の強柔あり、凡紙は板にはる方を表とす、當國所々是を製すといへども、十文字端きらず等の厚紙を製するは、安部郡藁科の奥のみ、或云寒所は生紙を出し、暖地は生紙を製する事難し、是上地の水に依れる處也云々、

〔重修本草綱目啓蒙　二十五灌木〕楮　カウゾ　コゾノキ　カゴ（豐前丹後）　カヂノハ（豫州）　一名扁穀（通雅）

構（品字箋）　楮實一名任（古今注）　穀樹子（本經逢原）　構一名楮桃樹（救荒本草）　穀桑（通雅）

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕楮 穀音 構同 穀桑 和名加知、俗云加宇會、

按、楮皮今多造紙、又織布、往昔稱木綿、訓由布、是也、今亦祭祀人被木綿繦者、象上古之衣服乎、

〔廣益國產考 五〕楮かうぞ。かご。又かぞ。ともいへり

楮は畑の堺山畑抔の片下りの所へ作りて、土留となるものにて、年々植かゆるものにあらず、其伐株より芽を生じ、秋に至りて成長し、麥蒔比は薬もてくゝりあげて蒔事なれば、格別作りものの妨やまにならずして益に成もの也、西國邊の山添の村にて、田畑五十石高も持たる百姓にては、楮の皮の乾あげたるを、百把位は收納するなり、一把五目 壹把の價拾五匁と見ても、銀壹貫五百目也、平地の村にても畑の四面に植て、利を得るもの也、此楮に種類多くありて勝劣あり、苗の勝れたるを撰び植べし、

楮之種類 此種類九州にて植る所の名也、國所によりてかはるべし、

一おぶち 上 木肌赤黒く皮厚し、脂氣多く和らかなり、葉の切目黒ひをより深く、木長く伸わきへたれ、製して極白し、又正味多し、此木は暖なる地に植べし、

一丸葉 中 木肌紫黒く皮うすし、脂氣少くして和らか也、葉丸きによりて丸葉といへり、正味少し、併製しては上紙に宜し、正くみすくなきによりて、おぶちよりおとりたりといへども、紙に漉てよろし、

一白梶 木肌白し、脂氣なく丸片葉ありて、丸葉目高の間なり、製するにはこはし、

一目高めだか 下 丸葉のつぎなり、立伸たる小芽高き故、目高と云、皮うすく葉の切目淺く、片葉は切目あり、片葉は丸葉なり、紙に製してかたし、正味よし、

一黒へをくろへを 下 木肌白く、皮うす紫に見へ厚く脂氣うすく、皮こはし、製して白し、又和らかなり、紙に漉て少しすき黑し、へをの名は竈のへチより出たる名なるべし、

一白へをしろへを 下 木肌白く、脂氣薄し、葉は目高に同じ、

一青へを　一なまづを

山楮やまかうぞと唱、下品なる紙に交漉種類、

一白くち　一やまず 是は山に立楮にて、年久しきものは壹尺廻り位なる木あり、葉は丸し、山楮といふ、

一むくび 是も山に生立楮にて、葉丸く蔦かづらなり、　一桑の皮

此暮、柘之左枝乃、流來者、梁者不打而、不取香聞將有、

〔新撰字鏡 木〕穀

〔本草和名 木十二〕柠實、仁諝音勅呂反 一名穀實、穀紙一名楮紙、出陶景注 角星之精、出太清經 和名加知乃岐、

〔倭名類聚抄 木二十〕穀 玉篇云、楮 都古反 穀木也、唐韻云穀 音穀、和名加知、木名也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕今本玉篇云楮丑呂切、在八語、穀 徹母、都古反、在十姥、端母、音韻皆不同、此所引音恐誤、○中略 南山經、招搖之山、郭注、穀楮也、皮作紙、說文、楮、穀也、穀、楮也、小雅鶴鳴陸疏、今江南人以其皮擣爲紙、謂之穀皮紙、絜白光輝、

〔紀伊續風土記 物產六上〕構 本草、本草和名ニ加知乃岐、和名抄ニ加知、 各郡所在ニ多シ

〔倭訓栞 前編六加〕かち ○中略 新撰字鏡に、穀また楮をかぢと訓せり、日本紀に擬もよめり、七夕に歌かくは、此木の葉也、後拾遺集に、

天河とわたる舟のかぢの葉におもふ事をも書つくるかな、神世に穀を種て木綿を造り、天棚機姬神に神衣を織しめさせられたる事、舊事紀に見えたり、織女の故事をもて、此木の葉を用る也、一條禪閤の息竹内良鎭の歌に、

昔誰きゝあやまりて星のためかぢの七葉をとりそなへけん、とよめるは、神世の故事を究められざるにや、

〔農業全書 七四木〕楮

楮には其種色々あり、其内先葉に切こみ深くあるを楮と云、切めなきを構と云と、字書には見えたり、今專ら作るは黑ひやうとて、皮薄紫に見えて、葉に切めありて、皮の肌へ厚く、和らかにして白し、又おぶちとて、葉の切め黑ひやうより深く、木の色青黑く、枝ながくのび、わきにたれて葉の色青きあり、是も皮厚く肌へいさぎよく白し、此二色紙に宜し、

〔伊呂波字類抄都植物附植物具〕柘ツミ 桒柘蚕所食

〔本草一家言二〕桑柘〇中略柘、和名山桑、又名谷桑、葉似桑而厚、又似菩提樹、葉以飼蠶、和名山繭一名山桑、古人連稱桑柘者是也、唐詩桑柘影斜秋社散、是也、又有單稱柘者、和名犬津氣、又有奴柘、又黃楊之一種、又有白丁花、是又奴柘之類也、隨錄

〔和漢三才圖會灌木八十四〕桑〇中略按、柘阿州土州山中有之、以爲弓木、黃色、

農政全書云、柘木堅勁皮紋細密、上多白點、枝條多有刺、葉比桑葉甚小而薄、色頗黃淡、葉稍皆三叉、其椹亦飼蠶、又有綿柘、刺少葉似柿葉微小、枝葉間結實、狀似楮桃而小、熟則亦有紅蘂、味甘酸、

〔重修本草綱目啓蒙灌木二十五〕柘　ツミ和名鈔　ヤマグハ　ノグハ大和本草　イヌグハアリ同名　一名白柘皮外臺秘要

柘ノ字、藥性要略大全ニ桜ニ作ル、山中ニ生ズ、葉ハ常桑ヨリ大ニシテ厚ク、長ク糙澁多シ、椹モ桑ニ同クシテ粘滑ナリ、木ハ常桑ヨリ黃色淺シ、

增、樹皮ヲ取リスミ皮ト名ケ、茶黃色ヲ染ム、色鮮ナリ、コレモ紙ニ漉クベシ、桑穰紙ニ同ジ、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十、奉造聖像卌軀、〇中略副之長歌奉獻、其長歌詞曰、〇中略帝之御世、萬代爾重飾氐、奉令榮度、柘之枝乃、由求波、佛許禮多志、聖而已、驗波伊萬世、〇下略

〔萬葉集三雜歌〕仙柘枝歌三首

霰零、吉志美我高嶺乎、險跡、草取可奈和、妹手乎取、

右一首、或云、吉野人味稻與柘枝仙媛歌也、但見柘枝傳、無有此歌、

柘

滿、毎年巡撿、實錄申之、如遣使勘會、與實不同者、國司必加貶責、郡司解却見任者、然猶積習生常、猉法無悛、望請下知當道、交替分付、若不塡數者、拘留解由、以懲不殖者、而今國司催殖無便之狀、亦同辭家之條者、〇中略

弘仁八年十二月二十五日

〔日本書紀神代一〕一書曰、〇中略軻遇突智娶埴山姬、生稚產靈、此神頭上生蠶與桑、

〔萬葉集七譬喩歌〕寄木

足乳根乃、母之其業、桑尙、願者衣爾、著常云物乎、

〔夫木和歌抄二十九桑〕延喜十二年賀御屛風　貫之

ことしおひのにゐくはまゆのから衣ちよをかけてぞいはひそめつる

〔八丈島漂流記〕延享二年

桑の木を植る事、山畑又は居屋敷の近邊へ、如何程も澤山に植る也、蚕を飼ふ事は、御國に替る事なし、

〔本草和名十三木〕赤鷄桑桑葉小者也、出徐恭論、栗椹天精也、出太清經一名扶桑丹出七卷食經桑者箕星之精也出太清經和名久。波。乃。美。

〔新撰字鏡木〕柘之石反、字樣同柗也、豆○美○乃○木、

〔倭名類聚抄二十木〕柘　毛詩注云、桑柘音射、漢語抄云、豆美、蠶所食也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕所引文、毛傳鄭箋並不載、按蠶絲具引禮記注云、桑柘蠶所食也、所引蓋月令注文、則此作毛詩注、恐誤、說文、柘、桑也、段云、當作柘柘桑也、柘桑、桑之屬、古書並言二者、則曰桑柘、單言一者、則曰桑曰柘、柘亦曰柘桑、如淮南注烏號云、柘桑其木堅勁、烏跱其上、是也、桑柘相似而別、見胡氏通鑑釋文辨誤、

澤出ツ、

〔令義解 田 三〕凡課桑漆、上戸桑三百根、漆一百根以上、〇註略中戸桑二百根、漆七十根以上、下戸桑一百根、漆卌根以上、五年種畢、〇註略郷土不宜、及狹郷者不必滿數、

〔令義解 賦役 三〕凡田有水旱蟲霜、不熟之處、國司檢實、具錄申官、〇註略十分損五分以上免租、損七分免租調、損八分以上課役俱免、〇註略若桑麻損盡(謂一戶全損、即雖不全損、不堪輸者、亦是、其桑麻者、不相須也、)者、各免調、(謂若無課而有役者、即免役、其桑麻所輸、絁布不同、故稱各也、)

〔類聚三代格 八〕太政官符

應催殖桑漆事

右東海道觀察使從三位行式部卿藤原朝臣葛野麻呂奏狀偁、桑漆之課具載令條、易殖易生、養乃成林、至于採用、公私由之、然國郡官司不務催殖、既致闕乏、〇中略望請下知當道、交替分附、若不填數者、拘留解由、以懲不填、其貶責解任一依先格者、右大臣宣、奉勅、依奏、自餘諸道亦同准此、

大同二年正月廿日

〔類聚三代格 一〕太政官符

應多氣度會兩郡雜務預大神宮司事〇中略

一應催殖桑漆二十一万八千七百九十六根

多氣郡十四万七千三百六根　桑十三万六千五百三十三根〇中略

度會郡七万一千四百九十根　桑五万八千四百五十根〇中略

右同前解〇中略偁、案太政官去大同二年正月廿日符偁、當道觀察使參議從三位行式部卿藤原朝臣葛野麻呂奏偁、桑漆之課具載令條、至于採用、公私由之、然國郡官司不務催殖、謹案天平二年五月六日格偁、諸國所進桑漆等帳、或國隨舊案、但改年紀、或虛作增減、與實不同、自今以後、嚴加捉搦、依令殖

外作りて利なき所多し、

〔本草一家言 三〕桑柘　桑和名久葉、損軒貝原○日本釋名云、久巴者食葉也、用以飼蠶之義、愚謂非也、久波者胡葉也、久胡相通、胡者飼子之略稱、蚕業之謂也、桑之族類、詳擧于農桑輯要中、葉圓者名白桑、和名眞桑、又有岐者名鷄桑、和名芹桑、葉狀雖異、功用則同、又有女桑一種、則種子之所生、言其狀稱小也、又有插扦者、俱名女桑、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五灌木〕桑　クハ和名抄　一名商庭樹名物法言　蠶食同上　神木事物紺珠　椹一名人精醫學入門同名アリ　桑實名物法言　葚正字通　黮同上　桑白皮一名延年卷雪輟耕錄

桑ハ田野ニ多ク栽ヘ、葉ヲ以テ蠶ニ飼フ、蠶食フ葉ノ意ニテ、クハト訓ズト大和本草ニ云リ、大抵二種ニ別ツ、其葉圓尖ニシテ鋸齒アル者ヲ白桑ト云、一名魯桑、康濟譜和名マグハ、マルグハ、モチグハ、土州此品葉厚ク汁多シテ、蠶ニ飼フニ良トス、其岐アリテ薄キ者ヲ雞桑ト云フ、一名花桑、主治註雞脚桑、事林廣記荊桑康濟譜和名ヤマグハ、サヽグハ、土州セリグハ、アザミグハ、奥州此品藥用ニ良トス、二種共ニ春葉ニ先テ花ヲ生ズ、穗ヲナシテ楮ノ穗ニ似タリ、後實ヲ結ブ、桑椹ト云、形藨ニ似テ長シ、初ハ青ク後赤ク、熟スレバ黑シ、和名クハノミ、クハイチゴ、クハコ、奥州ツマメ、濃州増、藥用ノ桑白皮ハ地上ニ出ザル者ヲ採リ、其マヽ用ユルヲ佳トス、皮ヲ去リ白ク晒シタル者ハ、性力已ニ脫シ、且多ク楤木ノ根皮ヲ用ユト云、又桑白皮ヲ用テ紙ヲ漉クヲ桑穰紙ト云、天工開物ニ見ヘタリ、

今器物ニ造ル桑ハ、江州ヨリ出ヅルヲ最上トス、其次ヲ作州、但州、丹後、若州、丹波、日向ト次第ス、江州ノ產ハ、肌理天巧多ク、舶來ノ者ヨリ美ハシ、然レドモ舶來ノ者ハ、著色セズシテ自ラ紫褐色ナリ、又日向ノ產ハ極テ下品ニシテ、肌ニ白ミ多ケレドモ、マサ目至テ細シ、著色ノ法ハ石灰ヲ水ニテ解キ、是ヲ塗テ日ニ乾シ、草帚ニテ脫去シ、木賊ニテ琢キ、又加條葉ニテ磨キ、油布ニテ拭ヘバ光

桑

古事類苑

植物部五

木四

〔倭名類聚抄 二十 木〕桑　玉篇云、桑〈音莊、字亦作桒、和名久波、〉蠶所食也、

〔箋注倭名類聚抄 十 木〕按説文桑蠶所食葉木、顧氏盖本之、則此誤脫葉字也、

〔伊呂波字類抄 久 植物附植物具〕桒（クハ）〈正作桑〉　葚〈葚イ〉（クハノミ）　椹　桒實〈同已上〉

〔日本釋名 下 木〕桑（クハ）　くはくう也、はは葉也、かいこのくふ葉なり、

〔倭訓栞 前編 八 久〕くは〈○中略〉　桑は蚕のくらふ葉なれば蚕葉（ハ）と名くるなり、くとこと通ず、こはかひこ也、まぐは、白桑也、ひめぐは、女桑也、子（い）を椹といふ、くはいちご也、桑耳はくはたけ也、山桑の名漢も同じ、檿也といへり、新撰字鏡に、桔梗をからくはとよめるは心得がたし、

〔農業全書 七 四木〕桑

桑は四木の一つにて取分貴き物なり、凡て人世の重き物は衣食に過る事なし、しかれば五穀に次て必うゆべき物なり、古は人家ごとにやしき廻りに桑うへて、應じ〳〵に糸綿を取て、衣服の儲としたりと見えたり、殊に一度うへをきては、女功ばかりにて、農事の妨ともさのみはならず、草木こそ多き中に、靑葉より糸綿の出る事、實に奇妙の靈木なり、近來木綿を廣く作りて、其しるし速かにして、下賤のために便りよきを專らとして、名所の外は桑のしたて疎かになりたると見えたり、されど木綿も又土地所によりて、をしなべて作る物にあらず、山中雨霧のふかき所、其

相傳曰、源空上人生日、幡降二下於此樹一、因名二誕生木一、彼宗派之輩貴二重其念珠一、其木有二作州久米郡一

〔本朝俗諺志 一〕與州笹山社

伊與土佐の界山上に、笹山權現の社あり、此神は火難を遁れしめんとの誓願なり、ふかく信ずれば火賊の難なし、むかし土佐の國の山下正木村と云所の土民、藪岡助之丞と云もの、年久しき家にて、豐饒の百姓也、先祖助之丞、夢中に熊野權現影向まし〳〵、此山に跡を垂玉ひて、火難盜難の災ひを除しめんとの靈夢をかふむり夢さめて見れば、うしろの椋の木に光明赫奕たり、則これを神木とあがめ、社を造立し、笹山權現と稱す、

〔古事記 上〕其父大神者、思二已死訖一、出二立其野一、爾持二其矢一以奉之時、率二入家一而、喚二入八田間大室一而、令レ取二其頭之虱一、故爾見二其頭一者、呉公多在、於是其妻以二牟久木實與二赤土一授二其夫一、〇大國主神 故咋二破其木實一、含二赤土一唾出者、其大神以二爲咋二破呉公一唾出一而、於レ心思愛而寢、

ニ用ユ、良材ナリ、マケヤキ、ツキ、ゲヤキ、イヌケヤキ、イシゲヤキノ品アリ、欅一名欅柳、又杞柳ニモ
欅柳ノ名アリ、故ニ集解ニ二物ヲ混ジ注ス、宗奭ノ下材也、不堪為器ト云ルハ、杞柳ニシテ欅ニ非
ズ、杞柳ハコブヤナギナリ、

椋

〔新撰字鏡 木〕村 此尋反、牟久乃木、 椹 式稔反、平、牟久乃木、桑實、又

〔本草和名 木 十三〕椋子木 仁諝音力將反 一名棶 力材反 出爾雅 和名牟久乃岐、

〔倭名類聚抄 木 二十〕椋 爾雅注云、椋一名即棶、椋音良、棶音來、和名牟久、

〔箋注倭名類聚抄 木 十〕按釋木云、椋即棶、而此所引非郭、蓋舊注也、按說文、椋即來、爾雅从木俗字、○中略
字鏡村椹牟久乃木、太平御覽引舊注云、椋有髓熊折而乳之、椋葉見細工具、椋子見果蓏類、

〔倭名類聚抄 菓 十七〕椋子 爾雅注云、椋音良 一名即棶、音來、和名本草無久、

〔箋注倭名類聚抄 果蓏 九〕所引釋木、椋即來、郭注、今椋材中車輞、此所引郭氏注不載之、蓋釋木舊注也、
說文、椋即來也、此從木作棶、俗字、○中略 按本草和名云、椋子木、和名牟久乃岐、源君蓋依之、牟久木實
見古事記手間山段、小童採食牟久、見著聞集、按椋子木未詳、无久蓋朴樹之類、物理小識糙葉樹當
是、木類椋條詳之、椋又見木類、

〔日本書紀 天武 二十九〕十年四月庚戌、次田倉人椹足 椹此云武規 石勝○中略 幷十四人賜姓曰連、

〔大和本草 雜木 十二〕椋子樹 (ムク) 其葉山吹ニ似タリ、葉ニイラアリ、用テ木竹骨角ヲミガク、木賊ノ如シ、實
ノ大サ棟子ヨリ小ナリ、十月ニ熟シテ、色黑ク味甘シ可食、本艸喬木部有松楊、異名椋木、葉如梨ト
云、又似柹トモ云、皆相似タリ、

〔和漢三才圖會 喬木 八十三〕椋 (むくの木) 音涼 松楊 棶 和名無久 ○中略
按椋樹似欅而微白色、其材堅重、用為搾酒木及枴杖、其葉似櫧葉而薄圓、有鋸齒、枯亦堅、以葉面可摩
琢象牙鹿角及木器、勝於木賊、其子黑色而圓、如龍眼肉去皮者也、小兒喜食之、本草謂似柹葉者非也、

欅

けふみればゆみきる程に成にけりうへし岡べのつきのかたえだ

〔古今著聞集（十九草木）〕經信卿、太宰帥に任じて下向の時、八月十五日夜に筑前國筵田驛につきたりけるに、天はれ月あきらかなるに、館の前に大き成槻ありけり、枝葉ひろくさしおほひて、月をへだてければ、人をめしあつめて、たちまちに其木を切はらはせて、月にむかひて夜もすがら琵琶をかきならして心をすまして、天あけぬればたゝれにけり、かゝるすき人も今はなき世なりけり、

〔饅頭屋本節用集（計草木）〕樫（ケヤキ）

〔書言字考節用集（六生植）〕槻（ケヤキ）

〔大和本草（十二雜木）〕欅（ケヤキ）　槻ト一類ナリ、處々ニ多シ、箱ニ作リ案ニ作ルコトヲ本草ニ時珍イヘリ、良材ナリ、日本ニモ多ク用之、冬ハ葉ヲツ、

〔和漢三才圖會（八十三喬木）〕欅（音柜）　欅柳　鬼柳　今云介夜木　和名抄訓久奴木者非也、〇中略

按欅生深山中、形狀如上說、其大者十五六丈、其材帶紅紫色、肌理堅實、而凡堂城之柱皆用之、經歳不蛀、或作盌、漆髹爲飲食器最上品、作案几及階梯之板皆佳也、但不宜水濕耳、出於四國西國處處、日向之產爲良、陶弘景曰、皮似槐而葉如櫟槲者、卽久奴木矣、源順據此以欅爲久奴木訛也、以有三種、眞欅、石欅、槻欅也、其材有少異

〔本草一家言（三）〕欅　和名計也幾、欅柳和名古不也奈幾、綱目本條、擧欅柳、而缺單字之欅條、二物混合、其辨不明、故讀者不知的稱、予（〇松岡玄達）詳讀本條、集解前後解處判然、是二物單稱欅、則計也幾、稱欅柳、則古不也奈幾、因欅與柜依音同、古人誤混爲一、孟子所謂杞柳、集註云、杞柳柜柳也、杜子美謂柜柳枝長皆指古不也奈幾也、二物往々易惑、故予表出之、（元藤）

〔重修本草綱目啓蒙（二十喬木四）〕欅　ケヤキ　一名欅楡（通雅）

ケヤキ俗ニモ欅ノ字ヲ用ユ、大木ナリ、春新葉ヲ生ズ、櫻ノ葉ニ似テ鋸齒大ナリ、木ハ殿柱箱案等

作レ槻訛、故槻亦作レ槻、

〔書言字考節用集 六生植〕槻

〔大和本草 十二雜木〕槻　江陰縣志曰、槻質堅而勁、多レ葉、繁陰、人家門巷多樹レ之、葉モ木理モケヤキニ似タリ、葉ヲ見テハ別チガタシ、只其木理ヲ見テワカツ、一類別物ナリ、葉ハブナノ木ニモ似タリ、古ハ槻ニテモ弓ヲ作レリ、槻弓ト云、字彙云、槻木名、堪レ作レ弓材、

〔日本書紀 二十四皇極〕三年正月乙亥朔、以二中臣鎌子連一拜二神祇伯一、〇中略爲レ人忠正、有二匡濟心一、〇中略便附二心於中大兄一、疎然未レ獲レ展二其幽抱一、偶預二中大兄於法興寺槻。樹之下打毱之侶一、〇下略

〔日本書紀 二十五孝德〕四年〇皇極六月乙卯、天皇皇祖母尊皇太子、於二大槻樹之下一召二集群臣一盟、〇下略

大化五年三月戊辰、蘇我臣日向日向字身刺譖二倉山田大臣於皇太子一、〇中略大臣長子興志、先レ是在レ倭謂二山田之家一營二造其寺一、今忽聞三父逃二來之事一、迎二於今來大槻。一近前行入レ寺、

〔日本書紀 二十六齊明〕二年、是歲於二飛鳥岡本一更定二宮地一、時高麗百濟新羅並遣レ使進レ調、爲張二紺幕於此宮地一而饗焉、遂起二宮室一、天皇乃遷、號曰二後飛鳥岡本宮一、於二田身嶺一冠以二周垣一田身山名、此云大務復於二嶺上兩槻。邊一起レ觀、號爲二兩槻宮一、

〔常陸風土記 行方郡〕郡家南門有二一大槻一、其北枝自垂觸レ地、還聳二空中一、

〔續日本後紀 十七仁明〕承和十四年六月丙申、大風發レ屋折レ木、雨亦降、入レ夜彌猛、　甲寅、霖雨止息、先レ是左相撲司、伐二葛野郡家前槻樹一作二大鼓一、有レ祟、由レ是奉二幣及鼓於松尾大神一以祈謝、

〔萬葉集 二挽歌〕柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首幷短歌

打蟬等、念之時爾、一云、宇都曾臣等念之、取持而、吾二人見之、趍出之、堤爾立有、槻木之、己知碁智乃枝之、春葉之、茂之如久、念有之、妹者雖有、憑有之、兒等爾者雖有、世間乎、背之不得者、蜻火之、燎流荒野爾、〇下略

〔夫木和歌抄 二十九槻〕十題百首木　前中納言定家卿

西戎ヲ引卒シテ、不破關マデ責給ケリ、天武危クテ見エ給ケルニ、傍ニ大ナル榎木アリ二ニワレテ、天武ヲ天河ニ奉隱テ後ニ王子ヲ亡シテ、天武位ニツキ給ヘリ、

〔地方凡例錄六〕一壹里塚始之事

上古は一里之法不定、里ゟ里迄を一里と云しと也、依而間數には悉く長短有り、中華は六丁を以一里トス、本朝も是に效ひ、六丁を一里と定たる由、雖申傳、時代不詳、其遺風に而今も奥州は六丁一里之所多シ、多賀城坪之石碑之里數も六丁を以一里とス、中比人皇百七代正親町院之御宇、天正年中、三拾六町を以一里と定らる、一歩六尺、一段六間、一町六拾間、一里六百間、此坪數六々を伸て三十六丁一里と極りたる由、其頃一里每に塚を築しめ、印之木を植させらる、時、松杉を可植哉と、時之武將信長公江伺しに、松杉は類ひ多ければ、餘之木を可植と有しを、役人榎と聞違ひ、榎を可植由村々江申付シにより、今一里塚の木、都而榎なる由、世事談に見ゆれ共、一里三拾六丁に定りたるは、信長公代にも有べけれ共、一里塚始り、國々江築立、榎を植たるは、台德院樣○德川秀忠御治世、慶長十七壬子年、大久保石見守奉行として、從江戸諸國江道中筋一里塚を築せらる、下掛り江戸町年寄樽屋藤左衛門、奈良屋市右衛門兩人江被爲命、同年二月初旬始之、五月下旬迄に諸國一里塚悉成就す、仍而塚上に印の木を植ては如何と、石見守伺シ處、一段可然との嚴命に付、何木を可植哉と重而伺シに、よい木を植よとの命を、石見守、榎と聞違ひ、都て榎を植たる由、或書にも見へ、又樽屋奈良屋掛りたる事は、有德院樣○德川吉宗御代、御府內、其外國々諸事御糺明之砌、享保十乙巳年八月、町奉行中山出雲守、大岡越前守江町年寄共由緒書差出たる內に、一里塚成就之上、拜領物等迄有、委くは江都官鑰秘鑑に詳なり、

〔倭名類聚抄木二十〕槻 唐韻云、槻音規、和名豆木乃木、木名、堪作弓也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕下總本槻作槻、伊勢廣本同、按干祿字書云、䂓規上俗下正、五經文字云、規從夫、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕榎 音價　榎　和名衣　榎楸共桐之屬見于前一、今云、衣乃木可謂欅之屬一

按榎木山林多有之、封壃植之、高者五六丈、可合抱、其葉似欅而團大微光澤、嫩葉可茹、四月著小花、蒼色狀如雀屎、附生葉面、不開而凋落、故視之者鮮、枝梢結子大如豆、生靑熟褐色味甘、小兒食之、有早晩二種、椋鳥鶍鳥喜食之、

〔草木性譜 人〕蚊母樹〇中略

蟲窠を生ずる者一二種左に揭ぐ〇中略

朴樹(えのき)註雅 山野及び處々に多し、其葉春生ず、夏花を生じ實を結ぶ、其葉中に麥粒の如き者、又葉面縮もの有り、是蟲窠なり、此餘枝條葉中の胞腫する者、或は花の化したる者に蟲を生ずる有り、これを略す、

〔萬葉集 十六 有由緣井雜歌〕吾門(ワガカドノ)之、榎實(エノミ)毛利(モリ)喫(ハム)、百千鳥(モヽチドリ)、千鳥者(チドリハ)雖來(クレド)、君曾(キミゾ)不來座(キマサヌ)、

〔夫木和歌抄 二十九 榎〕　民部卿爲家

川ばたの岸のえの木の葉をしげみ道行人のやどらぬはなし

〔今昔物語 十四〕備前國盲人知前世持法花語第十九

今昔、備前ノ國ニ有ケル人、年シ十二歲ニシテ二ノ目盲ヌ、父母此レヲ歎キ悲ムデ、佛神ニ祈請スト云ヘドモ其ノ驗无シ、藥ヲ以テ療治スト云ヘドモ不叶ズ、然レバ比叡ノ山ノ根本中堂ニ將參テ、盲人ヲ籠メテ心ヲ至テ此ノ事ヲ祈請ス、二七日ヲ過テ盲人ノ夢ニ、氣高キ氣色ノ人來テ告テ云ク、汝ヂ宿因ニ依テ此ノ盲目ノ身ヲ得タリ、此ノ生ニハ眼ヲ不可得ズ、汝ヂ前生ニ毒蛇ノ身ヲ受テ、信濃ノ國ノ桑田寺ノ戌亥ノ角ノ榎ノ木ノ中ニ有リキ、〇下略

〔源平盛衰記 二十一〕聖德太子椋木附天武天皇榎木事

天武天皇ハ、大伴王子ニ被襲、吉野ノ奥ヨリ山傳シテ、伊賀伊勢ヲ通リ、美濃國ニ御座ケルニ、王子

旅所ニ一樹アリ、臭氣四方ヲ熏ズル故ニ伐リシト云、又巨羽アル榆樹ハ巳ニ前條ニ辨ズ、

〔新撰字鏡木〕棆（即丁反、舟有窓、衣乃木、）林衣乃木

〔倭名類聚抄二十木〕榎　爾雅注云、榎一名稻、（上音古雅反、字亦作檟、下音瑁、和名衣、）

〔箋注倭名類聚抄十木〕爾雅釋文云、榎、舍人本又作檟、說文、檟、楸也、或假借夏字、樂記、夏楚二物、鄭注、夏稻也、俗从木遂作榎字也、毛詩、有條有梅、傳、條稻也、正義引陸機疏云、稻、今山楸也、亦如下田楸耳、皮葉白色、亦白材理好、宜爲車板、能溼、又可爲棺木、○中略　釋木云、稻山榎、郭曰、今之山楸、與此不同、毛詩正義引李巡云、山榎一名稻、此所引蓋是、源君所見本誤脫山字也、下總本有和名二字、衣下有乃木二字、與類聚名義抄、伊呂波字類抄合、字鏡、棆衣乃木、釋木云、槐小葉曰榎、郭曰、槐當爲楸、楸細葉者爲榎、爾雅又云、大而皵楸、小而皵榎、郭曰、老乃皮粗皵爲楸、小而皮粗皵者爲榎、

〔爾雅註疏九釋木〕槐小葉曰榎、註（槐當爲楸、楸細葉者爲榎、）大而皵楸、註（老乃皮粗皵者爲楸、）小而皵榎、註（小而皮粗皵者爲榎、左傳云使擇美榎、）疏（別楸榎之名也、楸之小葉者名榎、樊光云、大者老也、皵者皮也、謂樹老而皮粗皵者爲楸、小少也、樹小而皮粗皵者爲榎、註云、左傳曰、使擇美榎者、案襄二年夏齊姜薨、初穆姜使擇美榎、以自爲櫬與頌琴、季文子取以葬、是其事也、）

〔本草和名十二木〕槐實、槐耳（槐樹菌也）一名槐耳匿鷄（鄗槐樹檽也、出錄驗方、）槐一名守宮（出雜名苑）虛星之精（出大淸經）和名惠乃美、

〔書言字考節用集六生植〕榎（エノキ）榎（同）

〔大和本草十二雜木〕榎（エ）　本草ニハ楸ノ葉小ナルヲ榎トス、今案ニエノ木ハ楸ノ類ニアラズ、然ラバ本邦ニテ榎ヲエトスルハアヤマリナルベシ、萬葉及順和名抄ニ榎字エト訓ズ、出處未詳、葉ハ桑ニ似テ筋多シ、冬葉ヲツ、葉ハヨク漆瘡ヲ治ス、新漆器ニ榎葉ヲ入レバ毒氣去ル、實ハ胡椒ノ大サホドアリ、秋熟シテ黃ナリ味甘シ、小兒コノンデ食ス、エノ木ハ燒テ烟スクナク能モユ、故タキ火ニ用ユ、煎湯ヲ浴ス、中風ノ症及痿痺ヲ治ス、倭俗試知ル處ナリ、

棒ヲカツチト云、已ニ燧火ノ條ニ辨ズ、又一種花戸ニテ鐵刀木ト呼者アリ、春新葉ヲ生ズ、加條(ムク)ノ葉ニ似テ、鋸齒粗ク皺文アリテ互生ス、コレニ一種枝幹共ニ巨羽ヲ生ズル者アリ、共ニニレノ類ナリ、

〔倭名類聚抄 二十木〕蕪荑 本草云、蕪荑一名殿瑭、殿堂二音、和名比木佐久美、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕千金翼方、證類本草中品同、那波本腕作堂、按本草和名云、楊玄操音上殿下腕、俗作殿堂音非、則腕堂兩通、然源君不宜以彼所非音音之、則作腕爲是、類聚名義抄亦作腕、○中略本草和名云、一名、也爾禮乃美、按本草上品有楡皮、本草和名云、和名也爾禮、楡蕪荑雖同類、非全一物、故源君不從之也、爾雅、無姑其實夷、郭注、無姑姑楡也、生山中、葉圓而厚、剝取皮、合漬之、其味辛香所謂蕪夷、本草、蕪夷一名無姑、主去三蟲、陶云、狀如楡莢、氣臭如狆、以作醬食之、氣膻者良、本草圖經云、大抵楡類而差小、王念孫曰、然則無姑自有二種、一種莢氣辛香、郭注爾雅所言是也、一種莢臭、本草所言者是也、而莢臭者獨有殺蟲之用、秋官壺涿氏、除水蟲以枯楡、或是其臭者歟、

〔伊呂波字類抄 比植物附植物具〕蕪荑 ヒキザクラ

〔和漢三才圖會 八十三喬木〕蕪荑仁(よいにん) 莁荑 無姑 殿瑭 和名比木佐久良 ○中略

按、蕪荑、本朝古有而今無之、今亦出於播丹二州山中、然以不分明、令停止之、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四喬木〕蕪荑 ヒキザクラ 和名鈔 ニガニレ 一名棒楡 通雅

蕪荑ハ舶來多シ、僞物ナシ、古ハ和產モアレドモ今ハナシ、楡ノ類ニシテ葉ニ臭氣多ト云ヒ傳フ、釋名ニ爾雅ノ莁荑ヲ引テ一物トス、蕪荑ト音近キ故ナリ、然レドモ莁荑ハ釋草ニアリテ木ニ非ズ、正字通ニモ其誤ヲ辨ゼリ、莁荑ハ和產詳ナラズ、唐荆川右編ニ、蕪荑枝葉有芒刺如箭羽ト云ヘリ、野州信州ニハ枝ニ巨羽アル楡樹アリ、然レドモ未ダソノ實ヲ見ズ、

增、蕪荑ノ下ニ別錄中品トアルハ誤ナリ、已ニ本經ニ見ヘタリ、往年京師油小路八條南稻荷ノ御

榔楡

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕楡 ヤ○ニ○レ○和名鈔 ニ○レ○今名 チ○リ○越前 チ○レ○木曾 一名椐楡大倉州志 零 群芳譜 榉桂樹同上 鑽天楡通雅 羨祖清異録 攪牛樹函史

春○ニ○レ○秋○ニ○レ○ノ二種アリ、春ニレハ春先花サキ、實ヲ生ジテ後新葉ヲ生ズ、實ハ圓ク薄ク、大サ三分許、內ニ小扁子アリ、是ヲ楡莢トモ、楡錢トモ云、葉ハ櫻葉ニ似テ短ク互生ス、コノ木寒地ニ生ズ、南國ニハ產セズ、木ノ粗皮ヲ去リ、白皮ヲ採リ藥用トス、楡白皮ト云、又食料ニモ入ル、本邦ニテモ上古ハ用ヒシコト延式ニ見タリ、唐山ニテハコノ木ニ生ズル菌ヲ食料ニ上品トス、之ヲ楡肉ト云、又楡耳ト云、

〔紀伊續風土記 物產六上〕楡ニレ本草、本草和名也邇禮、醫心方以佰仁禮、康頼本草當爾禮、貞享本延喜典藥式紀伊條にヲニレと訓ず、式考異に加也假字每ニ混誤、然於ニ其義一則有下不レ可レ改者上、此加字亦猶ニ家雞之加一といへり、楡に二種あり、春ニレハ漢名白楡本草といふ、東北の國に多く、南國に產せず、秋ニレは漢名榔楡本草といふ、本國各郡山野に甚多し、典藥式に、紀伊國楡皮九斤とあるは、此榔楡皮なるべし、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕榔楡 ア○キ○ニ○レ○ イ○タ○チ○ハ○ゼ○コ○大和 イ○ヌ○ケ○ヤ○キ○阿州、同名アリ、 チ○レ○ノ○キ○同上 カ○ハ○ラ○ケ○ヤ○キ○丹波 一名榿通雅 郎楡 梜楡共ニ同上 野楡汝南圃史

水邊ニ多ク生ズ、大木ナリ、葉ノ形楕ニシテ尖リ、邊ニ鋸齒アリ互生ス、葉ニ沙アル者ヲ刺楡ト云、沙ナキ者ヲ綿楡ト云、皆榔楡ナリ、八月葉間ゴトニ花ヲ開ク、黃白色ナリ、後莢ヲ結ブ、楡錢ノ形ニ異ナラズ、熟スレバ早ク落チ散ズ、冬ニ至レバ葉ミナ凋落ス、

增、一種蝦夷ノ產ニア○ツ○ト云モノアリ、誤テア○ツ○シ○トモ呼ブ、春月新葉ヲ生ズ、形榛ハシバミノ葉ニ似テ長サ三四寸、本ハ狹クシテ一寸許、末ハ廣ク二寸餘、葉頭ニ岐アリテ矢筈ノ如ク互生ス、コノ木大木トナル、蝦夷人コノ皮ヲ剝テ紡績シテ布トス、コレヲアツシト呼ブ、夷人ノ常服ナリ、又蝦夷ニテハ此木ヲ以テ小キ盤ヲ作リ、中ヲ凹シテ同木ノ棒ヲ以テ摩テ火ヲ取ル、ソノ盤ヲシヨツポト云、

〔倭名類聚抄二十木〕楡　爾雅注云、楡之皮色白名枌、上音臾、下音汾、和名夜仁禮、

〔箋注倭名類聚抄十木〕釋木、楡白枌、郭注、枌楡先生葉、却著莢、皮色白、非此所引、郝懿行曰、楡有赤白二種、赤楡先著莢後生葉、白楡先生葉後著莢、以爲異、白楡皮白、剝其麁皺、中更滑白、按毛詩正義引孫炎云、楡白者名枌、此所引卽是、○中略廣本汾作汾與廣韻合、屬奉母、枌屬敷母、清濁不同、作汾似是、下總本作分、與枌同音、

〔伊呂波字類抄也植物附植物具〕楡ヤニレ　楡皮　零楡　還楡出七卷食經、已上同ヤニレ

〔饅頭屋本節用集仁草木〕楡ニレ

〔書言字考節用集六生植〕楡ニレノキ　枌同

〔萬葉集十六有由縁井雜歌〕忍照八、難波乃小江爾、○中略足引乃、此片山乃、毛武爾禮乎、五百枝波伎垂、天光夜、日乃異爾干、佐比豆留夜、辛碓爾春、庭立、碓子爾春、忍光八、難波乃小江乃、始垂乎、辛久垂來氐、陶人乃、所作瓶乎、今日往、明日取持來、吾目良爾、鹽漆給時、賞毛時賞毛、

右歌一首、爲蟹述痛作之也、

〔萬葉集略解十六〕もむにれ字鏡、樅毛牟乃木和名抄、及字鏡楡夜仁禮と有、是をにれとのみもいへり、樅に似たる楡をいふべし、内膳式楡皮一千枚枚別長一尺五寸、廣四寸、搗得粉二石、枚別二合右楡皮年中雜御菜幷羹等料云々など見ゆるをおもへば、いにしへ此木の皮を剝て日にほして、臼につき粉にして食しものとし、供御にも用ひられしと見えたり、日の異にほしの異は借字にて、日の氣也、さひつるや枕ことば、からうすに春は、いにしへ右楡に蟹を搗交て醢にせし也、

〔和漢三才圖會八十三喬木〕楡音兪にれ　零楡　枌白楡　和名夜仁禮、有數種　莢楡　白楡　刺楡　榔楡○中略

楡木葉皺有刻歯、而小不潤、多蝕、三四月開花、細小淡赤、生莢、莢長不過五六分、中有細子、其材堅重、同于櫙木、

楡

り、昔ハ此ノ大キナル木ナム有ケル、此レ希有ノ事也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔大扶桑國考　下〕柞は常にはハヽソと訓む字なるを、撰者〈○今昔物語撰者〉はクリの木に用たるなり、其は、その木の在りし所を栗田郡と云にて知べし、古事記傳に、近江國栗田郡に語り傳へて云く、古に栗の大木ありて、其枝數十里にはびこれり、故栗本と云ふ、今も地を掘れば栗の實また枝など有り、またスクモと云て、里人の薪に用ふる物ありて、土中より掘出す、是も其栗の葉なりと云へり、此ノ類の語り傳へ、なほ國々に往々あり、

〔類聚符宣抄　三〕太宰府解　申請官裁事

言上八幡宇佐宮恠異狀

西門外腋御幣殿東方柞木俄枯事

件木茂盛大樹也、而俄以枯了、一葉無青、今月十三日申時所見及也者、

同月十七日辰時鵄一雙集南樓上者

右得豐前國去三月二十日解狀偁、得彼宮今月十七日移文今日到來偁、御宮物恠、注其日時、移送如件、早欲被言上於大府者、今隨移文到來、不移時剋言上如件、望請府裁、早被言上於官者、言上如件、仍注事狀謹解、

萬壽三年三月二十三日　　正六位上行大典豐國宿禰公職〈○下略〉

帥〈闕〉

〔新撰字鏡　木〕楡〈是珠、庾珠二反、白枌也、爾禮、〉

〔本草和名　木十二〕楡皮、一名零楡、一名還楡、〈出七卷食經〉和名也爾禮、

〔本草和名　木十三〕蕪荑、一名無姑、一名㬸蘠〈楊玄操音上殿下服、仁諝音義作㬸蘠、上音殺、下音牆、俗作殿堂、音非、〉一名敳蘆〈出蘇敬注〉一名敳滿、一名莖蘠〈出雜要訣〉一名白菁〈巨娩反、出爾雅注〉和名比岐佐久良、一名也爾禮乃美、

本綱、柞乃爲橡櫟之異名、(灌木類亦有柞木、可以作梳木也、)

按、柞檞枹之屬、高者二三丈、葉似枹而狹尖婆娑、秋紅葉冬黄落、五月有花、似枹花、而長一二寸、實亦似枹子、(苦澁)不堪食、木心白色、亦似檞、但檞木理粗堅而割易、柞木理細堅而割難、以爲異、不充材、惟可爲薪及炭、

詩小雅曰、維柞之枝、其葉蓬々、又云折其柞薪、曹氏注云、柞堅忍之木、新葉將生、故葉乃落、附著甚固、

凡櫧鉤栗椎者一類、而其葉皆冬亦不落、新舊交代也、栗櫟檞枹柞樵者一類、而其葉冬凋落、然曹氏謂柞葉新舊相交者未審、

〔本草一家言 二〕柞木　柞櫟　柞乃二木之通名、單稱柞、則黄楊木中之柞也、俗名犬ツゲ、又尾張ツゲ也、婦人方中所收柞木飲子所用者是也、此物有數種、一云黄楊、二云錦埊黄楊、三云直脚黄楊、大體功用相彷彿、宜通用連稱、柞棫柞株之柞、則今之波々楚乃木、一名楢、俗鈍栗、攝州池田邑人、用以燒炭、謂之池田炭、乃櫟炭也、詩經云栩云棫云柞云櫟皆一物也、但有大葉小葉之異耳、大葉大實者名鈍栗、小葉小實者名波々楚、或通呼嘉志杷之木、其實總名之像、一名櫟、和或以橡訓兜智非也、兜智乃七葉樹、稻若水翁本艸別集詳載之、宜併按、又藝州廣島呼大葉櫟曰山鈍栗、小葉者單稱鈍栗、

〔今昔物語 三十一〕近江國栗太郡伐大柞語第三十七

今昔、近江國栗太ノ郡ニ、大キナル柞ノ樹生タリケリ、其ノ圍五百尋也、然レバ其ノ木ノ高サ枝ヲ差タル程ヲ思ヒ可遣シ、其ノ影朝ニハ丹波ノ國ニ差シ、夕ニハ伊勢ノ國ニ差ス、霹靂スル時ニモ不動ズ、大風吹ク時ニモ不搖ズ、而ル間其ノ國ノ志賀栗太甲賀三郡ノ百姓、此ノ木ノ陰ヲ覆テ日不當ザル故ニ、田畠ヲ作得ル事无シ、此ニ依テ其ノ郡々ノ百姓等、天皇ニ此ノ由ヲ奏ス、天皇卽チ掃守ノ宿禰□□等ヲ遣テ、百姓ノ申スニ隨テ此ノ樹ヲ伐リ倒シテケリ、然レバ其ノ樹伐リ倒シテ後、百姓田畠ヲ作ルニ豐饒ナル事ヲ得タリケリ、彼ノ奏シタル百姓ノ子孫、于今其ノ郡々ニ有

柞

ナリ、又一種栗カシハ栗ノ葉ニ似テ厚大ナリ、實ハ小ナラノ實ニ似タリ、

〔草木性譜人〕蚊母樹○中略

蟲窠を生ずる者一二種左に揭ぐ、

枹こなら本草綱目啓蒙集解　近山に生ず、小木にして三四尺に過ず、其葉春生ず、槲に似たり、葉間に花を生じ實を結ぶ、花實倶に櫧の如し、夏中葉間或は枝條に毛毬の如き者を生ず、ならがうと云ふ、初青翠、後褐色、中に全く仁の如き者有て、其心中に一蟲あり、冬羽化して出づ、狀繩の如し、故にはひのきとも云ふ、

〔新撰字鏡木〕楢尺紹反、波々曾、

〔撮壤集中木〕柞ハウツ和名類聚

〔饅頭屋本節用集波草木〕柞ハウツ

〔倭訓栞中編二十波〕はゝそ　和名抄に柞をよめり、越前にはうさといふ、詩疏に秦人謂柞爲櫟といふによれり、新撰字鏡に楢をよみ、今小なら、いしなら、西國にならこうといふ、又栩をよめり、はゝそがしはともいへり、歌にはゝそのもみぢなどよめり、万葉集に柞を直に母の事に取なしたる歌あり、又はゝそ葉の母とつゞけるは語の同じければなり、柞杜は相樂郡の祝園をいふ、

〔萬葉集十九〕慕振勇子之名歌一首幷短歌

知智之實乃、父能美許等、波播蘇葉乃、母能美己等、於保呂可爾、情盡而、念良牟、其子奈禮夜母、○下略

〔新撰六帖六〕はゝそ

さほ山の柞のもみぢしぐれねど色に出べきときはしりけり　家良

みねつゞく外山のすその柞原秋にはあへずうすもみぢせり　爲家

〔和漢三才圖會八十七山果〕柞はゝそ 作音　俗云波々曾　又俗稱保於曾、大和有名柞圖地

推てしるべし、又一種從前コナラと稱するものあり、これは萬葉集に櫟柴を以ナラシバと訓ずるものにして、卽鎭江府志に云、物落樹高二三尺、葉如槲而叢生するもの是なり、されど本艸家者流これをのみ物落樹とのみ心得しは、疎漏の至りといふべし、又一種水奈良あり、其葉奈良よりはまた薄くして、黄葉は尋常のものよりよろしとす、扨魏志倭人傳出眞珠靑玉、其山有丹、其木楓香猶豫樟下略と見えたり、かゝれば楢を以て一木の名とする事、その由來ひさし、又說文に楢は柔木也といへるは、和名抄唐韻を引ものと相反す、よろしく硏窮すべし、

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕寄物陳思
御獵爲、雁羽之小野之、櫟柴之、奈禮波不益、戀社益、

〔大和本草十二雜木〕楢 四種アリ、一種ハ大ナラ也、クヌギト云、葉栗ノ如シ、秋冬葉枯テ不落、四五月花開ク、栗ノ花ニ似タリ、實ハ椎ノ如ク大也、其苞半ヲツヽム、實ヲ粉ニシ餅トシテ食フ、飢ヲ助ク、木ハ頗高シ、屋材トシ炭トス、攝州池田炭ハ一倉ト云里ニテ、此木ニテヤク、池田ニテ賣ル、其皮粗シ、國俗此皮ヲ乾シ、忍冬ト等分ニ合セテ煎服ス、腫物ヲ治ス、又煎ジテ布ヲ染ム、茶褐色ナリ、一種小ナラト云、小木ナリ、材木トスベカラズ、實ナル苞アリテ半ヲツヽム、實ハマテバシイニ似タリ、ドングリト云、又實ニ非ズシテ別ニ毬ノ如ナル物ナル、其大如梅實、西土ノ俗ナラカウト云、コレヲ煎ジテ黑色ノ下地ヲ染ル、此木ヲ薪トス、葉ハクヌギニ似タリ、小葉ナリ、本艸ニ見エタリ、順和名抄ニ擧樹ヲクヌキト訓ズ、又曰、日本紀私記云、歷木、今案此二說出處未詳、ナラカシハ是亦ナラノ木ノ一種ナリ、葉ハクヌキニ似テ大ナリ、末廣シ、周ノ端ニ大ナル剡缺アリテ岐多シ、木理モ皮モクヌギニ似テ粗ク堅シ、高サ一丈餘材木トナラズ、冬ハ葉落ツ、三月花開テ栗ノ花ノ如シ、秋實ヲ結ブ短シ、其蒂ハ苞ニアラズ、實ノ味不美、凶飢ニハ可食、參州山中ト云處ノ猿ガ馬場ト云小里ニ、カシハモチトテ、此木ノ葉ニモチヲ包ミウル、此木ハ栢ニアラズ、栢ハ別木ナリ、此木ト同名異物

ふみやとよめるも、平城の宮をさして申せるなり云々、日本紀和名抄に楢を訓せり、新撰字鏡に柞又椎又櫪をよみ、萬葉集に榛櫟などをよめり、葉の廣く平らかなれば名とせるにや、よてならのはかしは、ならのひろはなどよめるなり、またならしばともよめり云々、楢は和歌に多く詠ずるものなり、其霜葉も又詠せり、藻鹽草にならのはかしは紅葉してといへり、岡村尚謙曰、奈良は和名鈔引唐韻、楢堅木也、注音秋、又引漢語抄、和名奈良とあり、新撰字鏡には柞櫪櫔椎の四字を、倶に奈良乃木と訓せり、楢を以て波々曾とす、まさに和名抄と異なり、今案に奈良楢奈流也、良流五音相通す、此葉變黄の時なほ枝梢に附著して不落、其葉風を得て鳴動する故に、ならとは名付し物ならん、又流波の反良にて、奈良は卽なる葉のよし、友人是観はいへり、扨夫木集に、風の音は楢の落葉に吹初てゆふしめなびく加茂の神山、後拾遺に、榊とる卯月になれば神山のならのは柏もとつ葉もなし、とよめるは、冬月落葉するにはあらず、新葉まさに生せんとして、故葉卽落るをいふ、また此木は黄葉にして紅葉はせぬものなり、されど夫木集に、そめわたすしぐれふりての紅の八鹽の丘の楢のはもみぢ、とよめるは、たゞ八鹽を八入にとりなして、紅の字を冠辭に用ひられしにて、その實は奈良の葉の變紅せしにはあらじかし、凡奈良の葉は槲より稍小くして、鋸歯最尖れり、大和本艸にいふ、大奈良は卽これをさしていふ、一種木良の木あり、其木高さ二三丈餘にいたる、葉前條の物より至て小にして且薄し、其葉經霜黄色に變じ、深冬にいたれば皆落脱して、枝上に附著する事絶てなし、僅に古いはゆる古奈良は蓋し是なるべし、これを漢名物落樹といふ、（鎮江府志 救作物）その名、證類本艸、肉蓯蓉條、日華子の説にみえたり、今按に、物落は、けだし此葉變黄脱落の貌をさしていふ、從前諸家皆鎮江府志に眩し、物落樹を以、矮低のものとす、しかれども肉蓯蓉、生物落樹下、並上塹上といふ時は、其樹必矮低の小樹にあらざる事しるべし、故に蘇公も西人の説を引て、蓯蓉大木間及土塹垣中多生すともいへり、かゝれば物落の大樹たる事は、其義

〔饅頭屋本節用集 奈草木〕楢木(ナラノキ)
〔書言字考節用集 六生植〕楢(ナラノキ) 柞(コナラカシ)(コナラノキ) 鉤栗(コナヲ)
〔圓珠庵雜記〕ならとかしはと同じものなり
新撰六帖、さほ山のならのかしは木またはへのもとつはしげみもみぢしにけり、
〔白石子筆語 下〕一讀二倭人歌一の事、古人讀レ之意趣と、後俗の解し候て、物に名づけ候意と、をのづから別れし事のやうに、かねて存寄たる事に候、其故は仙覺等の説にも、ナラの葉と申すは、ナラ〳〵としたる葉と見え候、此ナラ〳〵と申すことぞ、古語の柔かなる貌を申す所と見え候歟、次にカシワと見つけ候葉の事、かねても申述候ごとく、古上世より以來こなたの俗、食物を盛り、食物を蓋ひ候て用ひ候には、必らず葉を用ひ候、キナラノヒロハルとも申候て、柔にして大きな葉をば、殊に用に中れるものとし、必しもその木の葉とさしさだめたるものとはなしに、なにともあれ、膳に用ゆべきものをば、カシワと申したる事にて候、此事ふかくも心得わかちがたき事にや、三綱葉などの事も、とやかくと申す事にて、伊勢の神供に用ひられ候ものは、よのつねにかはり候事と申す歟、葉字讀てカシ・ワと申すにても、事はわかれ候べく候、尊兄御發明の黄雞の義と同じかるべく候、玄かるを後人カシワといふものを、必らず其一物ある事と心得るよりして、事はむづかしくなり候歟、但しむかしおほやけにして、膳職の用ひる所は槲葉にかぎり候事と見え候、生なる干たるなど貢し諸國の例など式に見え候き、○下略
〔和漢三才圖會 八十七山果〕楢(なら) 音秋　和名奈良、俗云古奈良、
按、楢樹高丈許、葉花實如二槲柞之輩一、秋月紅葉時人以賞レ之、
〔古今要覽稿 草木〕奈良
奈良は倭訓栞に云、奈良を日本紀に平とみえたり、よて平城ともいへるなり、ならの葉の名にお

橅　　　　　　　　槢

ノ名アリ、本邦ニテモ古ハ衣服ヲ染ム、ツルバミ色ト云、今モ播州ニテ鐵漿ヲ加ヘ皂色ヲ染ムト云、宗奭ノ說ニ、木堅而不堪充材、亦木之性也、爲炭則他木皆不及ト、本邦ニテモ炭ニヤキテ上品トス、池田炭ト呼ブ、攝州市倉ニテ炭ニ燒キ、池田ニ送リ四方ニ貨ス、故ニ池田炭ト云、是櫟炭ナリ、樹皮ヲ藥用トス、和方書ニ土骨皮ト云、一名樋皮、國皮、苦門皮、幽樟皮、

增、古ハクヌギヲ槲木ニ充ツ、非ナリ、松岡師モ始ハコノ說ニ從シカドモ、後ニ改ラレタリ、一本堂藥選ニハクヌギヲ樸樕トス、誤ナリ、樸樕ハ槲ノ釋名ニ出ヅ、用藥須知後編ノ說ニ從フベシ、

〔和漢三才圖會山果八十七〕橅ぶな音譔　撫與橅同、俗用之而字義不當　附奈乃木

按、橅阿波土佐紀州勢州江州深山多有之、人家栽者希也、俗云橿有八種、橅亦其一也、葉似橿葉而圓小、冬凋落、橿葉冬亦不落花似空疏ウツギ花形而小白色、最不美、結實有稜、略似蕎麥形而大褐色、熬食之、中子香白美也、其木膚白無樸モクメ、柔脆不堪材用、唯斫成作紀州黑江椀、江州多賀杓子爾、最下品也、

〔本草一家言二〕武奈　蓋櫧栗類、或茅栗屬也、若水以爲杬子、卽是、其葉似栗而極小、春初茅赤、春深還靑、其實似海松子而三稜、如蕎麥子、色赤褐、皮薄帶殼、豆油烹熟、入菜料味美、又搾油入用、朽木谷及日光山多產、此木土人伐采旋作食器盂鉢、或製杓子賣之、京北山中亦有之、其餘越前由乃不峠ユノヲ亦多、近江州亦有之、

〔新撰字鏡木〕椎　直龜反、椎、纔、奈○良○乃○木○

〔倭名類聚抄木二十〕槢　唐韻云、槢音秋、漢語抄云奈良、堅木也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕廣韻云、音鰌、在上聲二十九篠、音秋、與集韻合、在平聲十八尤、然此引唐韻、則云音秋、非是、○中略　廣韻、赤木名、與此不同、中山經、帤山其木多槢杻、郭注、槢剛木也、中車材、說文、槢柔木也、工官以爲耎輪、段玉裁曰、耎輪者、安車之輪也、蓋此木堅韌、故柔剛異稱、而同實耳、

〔撮壤集中木〕槢ナラ　和名類聚

者可作杜棟、小者可爲薪炭、他木皆不及、其實之殼煮汁可染皂也、若曾經雨水者、其色淡、其嫩葉可煎飲代茶也、

橡子苦微温 止瀉痢、厚腸胃、浸水淘去澀味、蒸極熟食之、

按栩葉大者可七八寸、有蹙縮、實大於栗、其梂裹半亦奇也、木心亦有蹙縮、𣜘(モクメ)美而膚濃、用作飯盌及箱案之類、不減於欅也、

凡櫧栩櫟之屬、皆有梂、其狀似飯盌之蓋盞、殊櫟之梂大而包半、故立櫟梂之名、然倭名抄以櫟爲甜(イチ)櫧(ビ)之訓者訛焉、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕橡實　ツ○ル○バ○ミ○和名抄　ド○ン○グ○リ○　シ○ダ○ミ○奥州　ジ○ダ○ン○ボ○ウ○上野　ジ○ダ○ン○グ○リ○信州以上實ノ名　ク○ヌ○ギ○　ク○ロ○ギ○　ク○ニ○ギ○豫州　ウ○ツ○ナ○同上　マ○キ○備中　ジ○ザ○イ○但州　ジ○ザ○イ○ガ○シ○但州　ウ○バ○ボ○ウ○上總以上木ノ名　一名橡栗通雅　櫟斗同上　黄栗物理小識　皂栗品字箋　斗子本草　杼斗證類本草　加邑可乙木實鄕藥本草　殼一名橡碗品字箋　橡椀兒訓蒙字會　橡斗子殼

附方　樹一名諸葛木本草彙編　橡櫪樹訓蒙字會　鉢羅樹盛京通志　五顧樹潛確類書　橡通雅　梠同上　枕品字箋　赤櫃木證類本草

山野ニ自生多シ、栽テ早ク長ズル者故、荒廢ノ地ニ多ク栽ユ、久シキヲ經ル者ハ、高サ二三丈ニシテ栗樹ニ似タリ、葉細長邊ニ刺アリテ、甚栗葉ニ似タリ、雌雄アリ、メクヌギハ葉形正シカラズ、或ハ多クユガミ、或ハ葉ノ末廣シ、オクヌギハ形正シクシテ栗葉ニ混ジ易シ、皆秋冬ニ至リ葉枯テ落ズ、春ニ至リ新葉ヲ生ジ、夏ノ初葉間ニ花ヲ生ズ、栗穗ニ似タリ、雌ハ枝梢ニ實ヲ結ブ、形圓尖ニシテ獨顆栗子(ヒトツミノクリ)ノ如シ、秋ニ至リ熟シテ黄褐色、大サ六七分、本ニ梂彙(イガ)アリテ其半截ヲ包、其刺粗ク柔ニシテ人ヲ刺サズ、俗ニシヤクシト云、一名ヨメノゴキ江戸　コメノゴキ勢州　ナラガマ越後　ヨメノガウシ上野　卽附方ニ謂ユル橡斗子殼ナリ、唐山ニテハコノ殼ヲ以テ皂色(クロチヤ)ヲ染ム、故ニ皂斗

栩、柔也、柔栩也、讀若杼、杼機之持緯者、柔杼二字不同、後人混用無別、毛詩唐風、鴇羽集于苞栩、陸機疏云、今柞櫟也、徐州人謂櫟爲杼、或謂之爲栩、其子爲皂、或言皁斗、其殼爲汁、可以染皁、今京洛及河內多言杼汁、謂櫟爲杼、五方通語也、杼一作芧、莊子齊物論、狙公賦芧、司馬彪曰、芧橡子也、郝懿行曰、今柞樹華葉俱以栗、四五月開華黃色、實圓銳、磨粉及烝食、可禦饑年、嫩葉可代茗飮、其木裏理、故匠石以爲不材之木、而作薪炭則皆不及也、按釋文云、芧音昌汝反、與此云音杵合、屬昌母、釋文又云、施音佇、與此云與芧同合、雖俱是舌音、然芧字屬濁音澄母、而當字屬淸音端母、則此云當旅反、恐誤、又按廣韻云、杼橡也神與切、昌汝神與、一聲之轉耳、廣韻又云、杼、說文曰、機之持緯者、直呂切、音佇、是栩杼杼軸二音不同、施氏以佇音栩杼之杼、恐誤、〇中略新撰字鏡、橡同訓、度知見空物語俊蔭卷、拾遺集物名歌、按栩杼卽櫟、今俗呼久奴木者、上文櫟子條詳之、以充度知不允、李時珍曰、天師栗似栗而味美、惟獨房若橡爲異耳、小野氏曰、木一名七葉樹、又名娑羅樹、見鎭江府志、是可以充度知、所引莊子齊物論文、原書作芧、

〔伊呂波字類抄 止植物附植物具〕杼トチ　栩　杤　橡　栟トチ已上

〔書言字考節用集 六生植〕橡トチ和州土俗謂之兒手柏、見藻鹽、　栩同音許　櫟梂同　芧同又作杼　櫔和俗所用　皂斗トチノミ又云橡斗　無食子ドングリ大明一統志、木如栟、實如茅栗、　圍栗同俗字

〔萬葉集 七譬喩歌〕寄衣

橡衣人者、事無跡、曰師時從、欲服所念、（ツルバミノキヌキルヒトハコトナシトイヒシトキヨリキマホシクオモホユ）

〔和漢三才圖會 八十七山果〕橡とち同櫟　皂斗　櫟梂　柞子作音　杼同芧　栩許音　和名止知、俗用杤字、

本綱有二種、一種不結實、其木心赤、名之曰棫、〇結實者曰栩、〇其實爲橡、盛實之房爲梂カヤ音求二者樹小則聳枝、大則偃蹇、其葉如櫧葉、而文理皆斜勾、四五月開花如栗花、黃色結實、如茘枝核而有尖、其蔕有年、包其半、截其仁如老蓮肉、山人儉歲拾采以爲飯、或擣浸取粉食、其木高二三丈、堅實而重、有斑文點點、大

風の土記に椋とあるも、書紀の歴木と傳の異なるにはあらで、たゞ記者の當たる漢名の異なるにこそ、萬葉十二に、度會大河邊、若歴木、吾久在者、妹戀鴨、此は旅の歌にて、吾此旅の日數の久くなりなば、家なる妹が、吾を戀しく思むかとなり、此上句は吾久と詞を疊む料の序なれば、歴木は必比佐岐なること著ければなり、木には此をもクヌギと訓たれど、まては若と吾と調の疊なるのみにて、久に絲なし、此歌は久と云こと主たるを思ふべし、又同四に佐保河の涯之官能小歴木莫刈焉云々、此歴木をばシバと訓る、まことに然訓べし、こは何木にまれ柴なるを云なり、故小字を加へて知せたり、然れども其なる歴木としも書る意は、一種の木を思へるなるべけれど、何木とも知がたし、河岸に多かる木なるべし、比佐木は同六にも久木生留淸河原などもあれば、何邊も由あり、今も川邊などにもよくある木なり、和名抄に唐韻云櫪木名也、漢語抄云比佐木とあり、かゝれば此記書紀などの歴木も、比佐岐ならむも知がたけれど、姑ク書紀の訓に依る、

〔新編常陸國誌 六十一 土產〕作

山野所々ニアリ、以テ薪トス、風土記行方郡條云、當麻鄕野之土塉、然生紫草、有香島香取二神子之社、其周山野櫟柞栗柴往々成林、猪猴狼多住云々、又有波都武之野、野北海邊有香島香取之神子之社、土塉、櫟柞楡叫一二所生云々、按ニ和名抄草木之部ニハ、柞ヲ由之トヨミ、又漢語抄ヲ引テ波々曾ト訓ゼリ、新撰字鏡ニハ奈良乃木又志比トヨメリ、和名抄ノ鄕名ニ筑前糟屋郡ニ柞原鄕アリテ、久波良トヨメリ、今ハ久原村ト云、コレクニハラノ約ナルコト知ベシ、然レバ草木部ニクヌキノ訓ナケレドモ、當時其訓アリシコト論ヲマタズ、且風土記ノ文ニヨリテ、當麻ノ地邊ヲ捡スルニ、ナラクヌキノ類多クアリ、波々曾ト云モノナシ、然ル時ハ風土記ノ作ハ、クヌキナルコト明ナリ、人多ク燒木ニ用ユ、

〔新撰字鏡 木〕橡 詳兩反、木實、止知、

〔本草和名 十四木〕橡實 辭兩反 一名杼斗 仁諝音食汝反 和名都。留。波。美。乃。美。

〔倭名類聚抄 十七菓〕杼 爾雅集注云、栩 音羽、又香羽反、一名杼、音佇、又當旅反、與字同、和名止知、莊子云、狙公賦杼是、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕爾雅釋木、栩、杼、郭注、柞樹、嘉祐本草引孫炎曰、栩一名杼、此所引卽是、按說文、

〔日本書紀景行七〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、百寮蹈其樹往來、時人歌曰、阿佐志毛能、瀰槪能佐烏麼志、魔幣菟者彌、伊和哆羅秀暮、彌開能佐烏麼志、爰天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉、則隱杵島山、當夕日暉、覆阿蘇山也、天皇曰、是樹者神木、故是國宜號御木國、

〔古事記仲哀中〕於是息長帶日賣命、於倭還上之時、因疑人心、一具喪船、御子載其喪船、先令言漏之、御子即崩、如此幸之時、香坂王、忍熊王聞而、思將待取、進出於斗賀野、爲宇氣比獦也、爾香坂王騰坐歷木而是、大怒猪出、堀其歷木、即咋食其香坂王、其弟忍熊王不畏其態、興軍待向之時、赴喪船將攻空船、爾自其喪船下軍相戰、

〔古事記傳三十一〕歷木は、書紀景行ノ卷に、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有𣗳木、長九百七十丈焉云々、天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹歷木也云々、天皇曰、是樹者神木、故是國宜號御木國とありて、公望私記曰、按筑後國風土記曰、三毛郡云々、昔者楝木一株生於郡家南、其高九百七十丈云々、櫟木與楝木、名稱各異、故記之、(楝字は櫟を寫誤れるか)仁德卷に、當荒陵松林之南邊、忽生兩歷木、挾路而末合、これら久奴木と訓り、(或人景行天皇此木に依て、其地を御木國と名けられたれば、久奴岐は國木の意なるべしと云るは非なり、)かくて和名抄には、本草云、釣木一名烏樟、和名久沼木、また本草云、擧樹和名久沼木、日本紀私記云、歷木(釣樟と擧樹と、共に久沼木と記しながら、別に出せるは名同くて異物か、はた別に出せるは誤か、)字鏡には櫪櫟同久沼木とあり、古書どもに歷木と書るは櫪の意にて、例の偏を省けるなるべし、(漢ぶみにも櫪を通はして歷と作ることあり、又櫪と櫟とも通はし書る例もあり、されど同物には非ず、)さて久奴岐は、今も久奴岐とも、久能岐とも云木なり、(契沖くぬぎは、今もくのぎと云て、つるばみのなる木なりと云り、橡を久奴木の實とせるは違へり、そは和名抄にも、橡櫟實也とあるに依れるなれど、橡は伊知比の實なり、久奴木の實には非ず、伊知比を櫟と書り、此字に依て混ふべからず、)されど此記書紀の歷木は久奴木に當て書りや非ずや、決め難き故あり、(玉垣宮段なる、葉廣熊白檮の下、傳廿五の廿葉にも云る如く、凡て魚鳥草木などの名の漢字は、古は人の心々に當て書つれば、彼此と異なること多ければ、漢名に依ては定めがたし、されば此歷木も櫪とは聞ゆれど、其は何樹にあてたりや慥ならずか

〔古今要覽稿草木〕久沼木

久沼木は霜後黄色に染なして落葉せざるものなり、されども年久しき老木は落葉せり、又その木の雌雄にて、落葉するとせざるとの別ありといへり、東雅に云、歴木クヌキ、昔景行天皇筑紫の道の國に幸有て、御木の高田の行宮におはしませし時に、僵樹長九百七十丈ありて、皆人其樹を踏てゆきかふ、其樹の名を問はせ給ひしに、獨の老夫有て、是は歴木なり、いまだ僵れざりしさきには、朝日には杵島の山を隱し、夕日には阿蘇山を覆ひたりきと申せしかば、其地御木國となづけ給ひしと日本紀にみえて、その事また筑後國風土記にも見えたり、和名抄に本草を引て、皐樹クヌキ、日本紀の歴木なりと注し、また釣樟一名烏樟をもタヌキといふと注せり、これ二物にして一名なりとみえたり、一説に釣樟をばナミクヌキといふと見えたり、蘇頌草にクヌキの義不詳云云、岡村尚謙曰、久沼木は和名抄引本草皐樹、和名久沼木、日本紀私記云歴木とあり、今按に歴木の下、疑くは細注を脱するに似たり、例を以これを推す時は、和名上同の四字あるべし、その意けだし本艸の皐樹と、日本紀の歴木とは、和名同してその異木のやうなるをいふ、○中略和名抄所引日本私記の久沼木卽此樹をさす、爾沼五音相通、卽國木の義也、その皐樹を久沼木と訓ずる物は、今もその木を久沼木とも、久乃木ともいふ物にして沼乃五音相通、蓋久利乃木の省呼なり、こはこの木の葉細長にして、全く栗葉に似たる故に名づく其義國木とは絕て異なり、これに葉の落ると不落との二種あり、萬葉集にいはゆる和可歴木は、蓋し假借にして、卽今の皐樹也、又後世の歌書に久沼木を釣樟と書るは、和名抄に釣樟、和名久沼木といひしによれど、これも假借にして本字にはあらじかし、又新抄本草に、皐樹、和名之良久奴岐、一名奈美久奴岐と訓せり、之良久奴岐、今何物たる事をしらず、蓋久奴岐の皮の白色なるをさしていふ、その奈良久奴岐また釣樟と同名云々、くぬきは漢名甚多くして諸說あり、本草綱目に橡は實を以本條とす、

時珍曰、槲有二種、一種叢生、小者名枹、(音孚)一種高者名大葉櫟、樹葉俱似栗、長大粗厚、冬月凋落、三四月開花、亦如栗、八九月結實、似橡子而稍短小、其蔕亦有斗、其實僵澀味惡、荒歳人亦食之、其澀理粗不及橡木、　木皮、俗名赤龍皮、

此說皆ドングリ也、主能モ瘡氣ニヨシ、然レバ赤龍皮ヲ久奴木ト訓ジテ、ドングリノ木皮ヲ可用也、

〔草木性譜人〕蚊母樹(附)蚊子木櫟木(くぬき)○(中略)

櫟木は山中に多し、其葉春生じ、粗栗葉に似て鋸齒あり、夏葉間に花を生ず、櫧花に似たり、別に實を結ぶ、實の本に窠桕有て、其半を裹む、亦櫧子(かしのみ)に似て大なり、夏中葉面葉背の脈道に、全く實の如き者を生ず、初至て微小、後胡頽子の如く、深紅色白點あり、葉背の者は其色淺く、日光を受れば其色深し、是蟲窠なり、中空虛、秋に至り心中に仁の如き者有て、其中に一蟲あり、冬羽化して出づ、

〔和漢三才圖會八十七山果〕槲實(くぬぎ/どんぐり)　櫟橿子　俗云止牟久利　(其木曰久奴木、日本紀用櫪木字、)(和名抄以擧樹飼櫟訓久奴木、並誤也、)

本綱、槲山林有之、木高丈餘、有二種、一種叢生、小者名枹、(カシハ)一種高者名大葉櫟、樹葉俱似栗、長大粗厚、冬月凋落、三四月開花、亦如栗花、八九月結實、似橡子而稍短小、其蔕亦有斗、其實若澀味惡荒歳、人亦食之、其木理粗不及橡木、雖堅而不堪充材、止宜作柴爲炭、

赤龍皮　槲木皮(クヌキノ)(苦澀)　煎服除蟲及漏、止赤白痢腸風下血、煎湯洗惡瘡、

按槲(今云久奴木)　其實(今云止牟久利)　一物二名、或云二物有少異、枹(今云加之波)　灌木、而大葉婆娑者、本草及和名抄皆相混註之、今立各條解之、

槲(クヌキノ)木葉似櫧(カシノ)子木、而葉至深秋黃落、其子似栗而小圓、故俗呼名團栗、蔕有斗(苦澀味惡)不可食、其樹皮赤色粗厚、名赤龍皮者是也、倭方與忍冬藤同、煎用能治癰疔、其木不堪爲柱材、止宜爲薪爲炭、攝州池田炭多槲(クヌキ)也、

按、鈎栗葉比檞子路薄硬有鋸齒、子形似椎子而有縱理、(檞子味苦、鈎栗味甜、)凡樫、鈎栗椎子三物梂相似、(如小梂、俗呼名供器、)

〔萬葉集十六有由緣并雜歌〕乞食者詠二首
足引乃、此片山爾、二立、伊智比何本爾、梓弓、八多婆佐彌、比米加夫良、八多婆左彌、宍待跡、吾居時爾、〇下略

〔夫木和歌抄二十九櫟〕貞應二年百首木　民部卿爲家
おほ井河まぐる、秋のいちゐだに山やあらしの色をかすらん

〔新撰字鏡木〕櫪櫟(同、閭激反、馬櫪、久奴木、又久比是、)

〔本草和名十四木〕擧樹皮　和名之良久奴岐、一名奈久美奴岐、　櫸若葉　和名加之波岐　一名久奴岐、

〔倭名類聚抄二十木〕擧樹　本草云、擧樹、(和名久沼木、)日本紀私記云、歴木、

〔箋注倭名類聚抄十木〕千金翼方、證類本草下品作櫸樹、本草和名作擧樹、與此同、疑從木者宋人所增、〇中略本草和名云、和名之良久奴岐、一云奈美久奴岐、〇中略歴木見景行十八年及仁德五十八年紀、按歴木俗作櫪、新撰字鏡云、櫪櫟同、久奴木、本書菓蓏類所載櫟子、卽是、又證類本草載陳藏器餘櫟木皮在中品、則與擧樹不同可見也、源君混爲一誤、南都賦、楓柙櫨櫪、注、櫪與櫟同、

〔撮壤集中木〕桁　鈎樟(同和名類聚)　擧樹(同)

〔書言字考節用集六生植〕櫸(同上)　棆(同)　櫚(同)　鈎樟(同)　歴木(同)

〔本草辨疑五和藥〕久奴木
ドングリノ皮トモ、又木ハドングリヲ、實ノナラザル木ノ皮ヲ用トモ云、
櫸、多識クヌキ、今按ニ、ゲヤキ、此和名非ナリ

を用う、又此木の瘦中の鬆脆なるものをもて、火口に用う、日本紀、古事記、万葉集、新撰字鏡、和名抄皆同じ、又赤櫧をも日本紀に訓せり、されど甜櫧也といへり、いちひかしのみをくひものにせし事、閑居友に見えたり、かしは苦櫧也、類聚國史に櫟原野見ゆ、山城愛宕郡にあり、今市原村といふ、葛野郡櫟谷神社式に見ゆ、上山田村の北櫟谷にませり、爲家卿

　大井川ゐぐるゝ秋のいちひだに山や嵐の色をかすらん

允恭紀に食于櫟井上、古事記に壹比韋臣あり、字鏡にまた杞又枸を訓せり、されば枸杞をもてむかしはいちひに充たるにや、和名抄に櫟梂いちひのかさと見えたり、

〔大和本草雜木十二〕櫟(イチヒ)　時珍云、有二種、一種不結實者、其名曰棫、一種結實者、其名曰栩、其實爲橡、其葉如櫧葉而文理皆斜勾、四五月開花、如栗花黃色、結實如荔枝核而有尖、其蔕有斗包、其半截、其仁如老蓮肉、山人儉歲采以爲飯、今案イチヒノ木ハ櫧ニ似テ同類異物ナリ葉ハカシノ葉ニ似テ、白カシヨリ薄ク大ナリ、其木二三丈、實モ櫧ニ似タリ、實ヲ橡實ト云、凶年ニ飢ヲ助ク、皆本艸所言ノ如シ、木ハ用テ器ニ作リ、屋材トスル事櫧ニ同ジ、舟ノ櫓ヲ作ルニ多クハ用之、順和名櫟子和名以知比、大於椎子者也、時珍云、櫟柞木也、實名橡斗ト、順和名ハヽソ、今案ハヽソカシハモカシノ木ノ類ナリ、ハヽソトイチヒト同物乎未詳、奈良ノ西北祝(ハフリ)園ニハヽソノ森アリ、方書ニ鑿子木(イヌツゲ)ヲモ作(ナラ)ト云ハ非ナルヨシ本草ニイヘリ、橡實ハイチヒノ實ナリ、トチト訓ズルハ非也、槲(クヌギ)、櫧(カシ)、櫟(イチ)、橡(イチヒノミ)此四字ヲ分辨スベシ、世俗往々爲難辨、誤稱者多矣、槲(クヌギ)ハ別物ナリ、櫧ト一類ニ非ズ、櫧トマテバシイト櫟ト、此三物ハ一類ナリ、橡ハ櫟ノ實ナリ、栩(ナラ)ノ木ヲモ一位ノ木ト云前ニ記セリ、同名異物ナリ、笏ニ作ルモノ也、櫟ト別物ナリ、

〔和漢三才圖會山果八十七〕鉤。栗。　甜櫧子　鉤櫧　巢鉤子　以○知○比○和名抄櫟訓以知比者非也、櫟者橡也、

本綱、鉤栗即櫧子之甜者、其狀如櫟、又謂之鉤生櫧、江南山谷、木大數圍、冬月不凋、其子似栗而圓小、

與櫟同、見李善南都賦注、按説文、櫟木也、又云、梂櫟實、大戴禮曾子制言篇、聚橡栗藜藿而食之、呂氏春秋恃君覽、冬日則食橡栗、高注、橡皀斗也、其狀似栗、本草圖經云、橡實、櫟木子也、詩正義引陸疏云、徐州人謂櫟爲杼、或謂爲栩、圖經又云、木高二三丈、三四月開黄花、八九月結實、其實爲皀斗、是今俗呼久奴岐者、其子古名都流波美、本草和名、橡實和名都留波美乃美、是也、今俗呼土无具利、又自无太无善字者也、又按中山經、前山其木多櫧、郭曰、似柞、子可食、冬夏生、作屋柱難腐、是可以充伊知比、

〔倭名類聚抄(菓具十七)〕櫟。梂。　爾雅云、櫟其實梂、(音求、和名以知比乃加佐、)孫炎曰、莱之自裹者也、

〔箋注倭名類聚抄(菓具九)〕按、釋木、櫟其實梂、又云、茉椒醜菉、説文木部云、梂櫟實、艸部云、菉椒茉實裹如裘、並與爾雅同、椒茉萸也、茉茉菉也、茉菉古語、卽詩椒聊、本草所謂蜀椒秦椒也、言椒茉實裹如裘者、謂茱萸椒子離々房生、其狀如裘故名菉也、郭注云、菉萸子聚生爲房貌、今江東亦呼菉、是也、郭又注梂云、有菉彙自裹、郭意、櫟柞櫟也、柞櫟實爲斗、故云有彙自裹、以別房生之菉也、然菉梂並以求爲聲、聲同則義通、菉之房生無異義、則可知梂亦房生也、而櫟實曰梂者、櫟有二、一則柞櫟、一則木蓼、陸機疏云、秦人謂柞櫟爲櫟、河内人謂木蓼爲櫟是也、柞櫟卽波々曾、其子爲斗、木蓼本草木天蓼、卽和多々比、其子爲房如椒、然則其實名梂之櫟、謂木蓼、非柞櫟也、孫郭以爲柞櫟實者非、是柞櫟之實曰樣、其臺曰草斗、又曰樣斗、説文、草斗、櫟實也、一曰象斗、象斗、樣斗之假借、後俗從木作橡、説文、又云、樣栩實也、栩柔也、其草一曰樣、柔栩也、是草斗當充波々曾乃加佐、其斗狀與伊知比同、故以孫炎所釋櫟實、爲伊知比乃加佐也、然伊知比可充石櫧、非櫟、詳見上文、

〔書言字考節用集(生植六)〕櫧(イチヰ本草、知栗葉、結實如櫟子、外有小苞、)櫟(同、順和名)

〔和字正濫抄(二)〕ひ

櫟　いちひ　古事記　万葉　和名　いちゐと書べからず

〔倭訓栞(中編伊二)〕いちひ　櫧を訓せり、最火(イチヒ)の義、薪となすによし、よて外宮の御饌を炊くに櫟のみ

〔紀伊續風土記 物産六下〕御綱柏（古事記仁徳紀、御綱葉、止由氣宮儀式帳、御角柏、類聚國史、三角柏、丹生明神告門、三津柏、丹生明神系、美津乃加志波、延喜酒造司式、三津野柏、寂阿法師百首歌、長ガシハ、拾玉集、三角長柏、釋日本紀引筑紫風土記、御津柏、袖中抄、シツヽノカシハ、又三綱柏、又三葉柏、○中略）古事記傳に、御綱（ツナ）、三津野（ミツノ）、御角（ミツノ）みな同じことなり、右は凡て都怒（ツヌ）都能（ツノ）都那（ツナ）は、通はしいへる例なり、此柏は葉三岐にて、先尖りたれば、三角の意なるべしといへり、按ずるに、此木古書には形狀をいはず、中古より今に至りて諸說紛々として的當の說なし、今牟婁郡潮崎莊潮御崎には、御綱柏といふ者あり、高さ丈許、其葉大さ五寸許、五尖にして、中尖大にして、左右の四尖は小なり、周邊鋸齒ありて厚く、莖葉共に澀毛あり、四五月の間、五瓣小白花聚り開き、後頳桐の如き實を結ぶ、忠肅が柏傳餘考に、原御史維庸卿の說を載せて圖するもの是なり、然れども此葉十月に至り凋落す、眞物にあらず、今和泉、紀伊、伊勢、志摩、其餘南方の海邊に產する一種の樹あり、俗に三手柏（ミツデカシハ）といふものゝ屬にして、樹高大になりて、葉至りて厚く硬く、滑澤あり、葉面深綠色にして背淡し、大さ三四寸許、形三手柏の如く、缺刻深からず、圓くして微に三尖あり、故に圓三手（マルミツデ）といふ、夏月の頃、小白花聚まり開き、秋に至て黑實を結ぶ、此葉四時凋落せず、葉心凹みやすく、物に盛によし、これ眞の三角柏なるべし、潮御崎にも此木處々にあり、土人は是を三角柏と呼もしてミヅキ（名義詳ならず）といふ、これは傳聞く、元祿の頃、京師の人、此所に來り、初めてこれを見出し、妄りに三角柏に充てしより、土人却て眞の三角柏をしらざるなり、辨別すべし、

〔新撰字鏡 木〕櫟（正音來的反、木名、借舒灼反、鄙也、又餘灼反、地名、一比乃木、）

〔倭名類聚抄 十七菓〕櫟子　崔禹錫食經云、櫟子（上音歷、和名以知比、）相似而大於椎子者也、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕本草和名、櫪子在椎子條、別無和名、新撰字鏡萬葉集同訓、用明紀赤檮此云伊知比、古事記景行段亦用赤檮字、○中略本草和名椎子條云、又有櫪子、相似而大於椎、出崔禹、按櫪

外宮儀式帳にも同く見えたり、御綱三津野御角みな同じことなり、古は凡て都怒都能都那は、通はし云る例なり、此柏は葉三岐にてさき尖りたれば、三角の意の名なるべし、（荒木田經雅云、今大神宮祭に用る三角柏は、俗に三柏と云物なり、葉厚くして潤澤あり、常葉なり、俗に大名柏と云、葉に似て、岐三にて鋒皆尖れり、外宮にては、今赤芽柏なし、三角柏として用ふれども、十二月祭にも、六月九月と同く用る事なるに、赤芽の柏は冬は、葉なければ用ひがたし、古の三角柏に非ずと云り、又伊勢の或書に、捧に三節祭に、御遊の柏は、酒を、年中行事には女官に柏を持しめ、今一人の女官榊葉にて柏上に置くと見えたり、今は杓にて榊葉の上に置て、柏を用ること絶たり、名高き柏なれば再實ありたき事なり、志摩國土貢より、今なほ忌物を貢す、其中に三角柏あり、葉の形穀の葉に似たりと云り、是を見れば柏を用る事、中ごろ絶たりしに、今は又用るは、其後再興ありしなるべし、然れば今用る物古のに合へりや、いかゝ態ならず、土貢と云處より絶ず貢るは、何れの柏ならむ、なほよく尋ぬべし、谷川氏云、伊勢神宮にて三角柏と云は、犬朴の木なり、大和國にては見手柏と云と云り、是は赤芽柏のことにや、赤芽柏は俗にあかべとも云木なり、）新千載集戀二に、御裳濯川を云處に、齋宮とゞまり賜ひて御祓し賜ふに、女房を立隱れつゝ見るに、三角柏と云柏をおこせて、此は何とか云と云りければ、申し遣しける、祭主輔親、吾妹子が御裳濯川の岸に生る君を見つの、柏とを知れ、（四の句、他書に引るには、みな君をみつゝのとあり、新千載集には直して入られたるにや、）續古今集戀四に、小侍從、思ひあまり三角柏に問事の沈むに浮は涙なりけり、（鴨長明が伊勢記云、此國に三角柏と云物あり、小侍從が歌に、神風や三角柏にとふことの沈むにうくは涙なりけりとよめり、これにて占ふ事あるにや、年ごろおぼつかなく思ふことを、此度人々に尋ぬれば、え聞及ばぬよしをのみいふ、いかなることにか、此柏輔親卿集に、みもすそ川の岸に生るとよみ侍るは、其わたりにあるかとて尋ぬれば、昔やありけむ、今世には志摩國の內に、とくの島と云處にあり、木の上にかづらのやうにて生たるをのぼりて、きりをろす時、ひらに伏て落たるを取ず、堅さまに落たるばかりをとる、其落やうにぞ問事のありとかや云傳へたる、是は神宮四度の御祭の時必入物なり、御前の御遊はてゝ、四の御門の腹にとくらのこと云おほみわを設く、社のつかさ、此三角柏を各一葉づゝ持てよれば、其上に此みわをそゝぐ、ことさら是を腰にさして出るなり、長柏とも云にや、寂阿法師百首歌の中に、思ふ事とくの御島の長柏長くぞ頼む廣きめぐみを、と云り、かやうに聞けど、未其すがたを見ず、此日或人の許より贈れり、柏のやうにて廣さ三四寸、長さ三尺ばかり、まことに常の木草の葉には似ずとあり、三尺とは枝を云るか、葉の長さならば三寸を寫誤れるにや、袖中抄に、わぎもこが御裳すそ川の岸にあふる人を見つゝの柏となふれ顯昭云、輔親集云、齋宮の九月祭に詣て歸る夜、みもすそ川に寄宮とゞまりおはしますほどに、女房とまりて三角柏と云柏をおこせて、是は何とか云といへれば、詠ずる歌なり、中納言俊忠卿の家にて、戀十首の中に、逢事を占ふと云る題を、俊頼詠云、神風や三角柏に事問て立を眞袖に包みてぞくる、私云、或人云、伊勢大神宮にみつの柏を取て占ふ事あり、投るに立は叶ひ、立ぬは叶はぬなり、此故に逢ことを占ふに立はあふべければ、取て袖には包みて[illegible]ぶなり、云々、三角と云るは三葉柏かとあり、）

タリ、枝梢ニ生ズ、別ニ栗毬ノ如キ者枝間ニ生ズ、或ハ單生或ハ簇生、其刺柔ニシテ人ヲ刺サズ、初メ緑色、秋ニ至テ茶褐色、是蟲ノ巣ニシテ實ニ非ズ、破レバ内ニ堅キ核アリ、緑色ノ時コノ核ヲ破レバ内ニ一ツノ小長白蟲アリ、褐色ノ時破レバ一ツノ小蜂アリ、此巣ヲオホヂノフグリト云、（同名アリ）一名シバフグリ、（播州）サルノモモ、（同上）カラスノフグリ、（石州）ナラゴウ（筑前）此ノ巣ヲ採リ煎ジテ黑色ノシタ染トス、コノ木ハ集解ニ謂ユル枹ナリ、一名物落樹、（内藤蓉ノ集解）字落葉、（鎮江府志）

〔牛馬問　一〕或人の曰、五月椶（チマキ）をつゝむかしはといふものも、此種類（〇柏の類）歟、答て曰否、それは槲の類にて、大葉櫟（レキ）といふ有、和名ナラガシワといふものゝ事歟、

〔佐渡志（五物産）〕槲　方言カシハギ

山中ニ多シ、葉ノ大サ四寸バカリ、長サ六七寸、花ハ栗ニ似タリ、實ヲ結ブモノアリトイヘドモ、ココニハ稀ナリ、

〔古事記（下仁徳）〕大后爲將豐樂而、於採御。綱。柏。幸行木國之間、天皇婚八田若郎君女、於是大后御綱柏積盈御船還幸之時、所駈使於水取司吉備國兒島之仕丁、是退己國、於難波之大渡遇所後倉人女之船、乃語云、天皇者皆婚八田若郎女而、晝夜戲遊、若大后不聞看此事乎、靜遊幸行、爾其倉人女聞此語言、即追近御船、白之狀具如仕丁之言、於是大后大恨怒、載其御船之御綱柏者、悉投棄於海、故號其地謂御津前也、

〔古事記傳　三十六〕御綱柏（ミツナカシハ）、造酒司式大嘗祭供奉料に、三津野柏（ミツノカシハ）二十把、（日八把）長女柏（ナガメ）四十八把（日十六把）とあり、（二十把は二十四把なるべし、四字脱たるなり、）同東宮料にも如此あり、大嘗祭式に、酒柏の事所々見えたり、大神宮儀式帳六月祭條に、云々即大神宮司諸司官人等更發、第五重參入就坐、即倭儛仕奉、先大神宮司、次禰宜、次大内人、次齋宮主神司諸司官人等（其儀畢、人別直會酒、采女二人侍、御角柏盛人別給、）云々、また九月祭條にも、云々其直會酒波、采女二人第四御門東方侍氐、御角柏盛氐人別捧給、（此事大神宮式にも見えて、其にはたゞ柏とあり、）

の玉祭にのみ、荷葉に食物もることのこれり、御綱柏、厚朴、葉びろ柏、靑柏、兒手柏、あから柏、あかめ柏、もも柏などの名これにおこれり、かゞみ葉はかゞみ餅の類にて、葉の形の圓鏡に似たるゆゑの名とはじめはおもひつれど、さにはあらじ、これは葉のつやゝかなるを、明鏡のてりかゞやくにたとへし美稱なり、

（欄外）播磨國所進など有も、膳所の用也、今は七月

〔和漢三才圖會八十七山果〕枹音字　大葉櫟　樸樕　槲樕　今云加之波〇中略

本綱、槲有二二種一、一種叢生小者名枹、一種高者名二大葉櫟一、一名樸樕、樸樕者婆娑蓬然之貌、俗稱二衣物不レ整者一爲二樸樕一、此樹偃蹇、其葉芃芃搖動故也、

按上件之說混雜未レ審、今名二加之波一者、樹似二槲而叢生、無二高大者一、性不レ堅皮易レ剝、中心白微空、但爲レ薪耳、其葉婆娑厚潤、本窄中濶、末不レ尖、有二大刻缺一、不レ潤以可レ裹レ粽、至レ冬凋落、花似二栗花一而短、凡一寸許、其實似二橡子一而最小、苦澀不レ堪レ食、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕槲實　ハヽソノミ　ハヽソ今ホウソト呼ブ、以下木ノ名、　ナラ　ホソ和州　ホウ

同上　ホウソガシハ　カシハ　モチガシハ　カシハギ佐渡　マキロ雲州　ゴウゴウシバ備前

樹一名靑杠楓字會訓蒙　所里眞木本草郷藥

喬木ナリ、葉ハ櫟ヨリ長大、徑リ三寸餘、長サ六七寸末廣シテ尖リ、厚シテ粗キ鋸齒アリ、互生ス、端午ニ糕ヲ兩葉ニハサミテ、カシハモチト云、春新葉生ジテ後花穗ヲ出ス、栗ノ花ノ如ク小シ、枝梢ニ實ヲ生ズ、形苦櫧アカガシノ實ニ似テ大ナリ、蔕モ相似タリ、木ハ大ナレドモ材用ニ堪ズ、惟薪トナシテ上品ナリ、樹皮ノ藥用トス、赤龍皮ト云コト下ニ出ヅ、世醫クヌギノ皮ヲ赤龍皮トスルハ非ナリ、一種オホボウソアリ、葉ノ長サ一尺餘、商州厚朴ホノキ葉ニ似テ大鋸齒アリ、一種コボウソアリ、葉ノ長サ三寸許、其實長サ八九分、俗ニナガガシト呼ブ、一種コナラアリ、筑前ニテゴウボウシバト云、山中ニ多シ、高サ一二尺ニ過ギズ、葉ハコボウソニ同ジ、夏ノ初メ新葉ヲ生ジテ花アリ、實ハ櫧子カシノニ似

與槲之、載在下品同、千金翼方、證類本草同、本草和名云、栢實和名比乃美、一云加倍乃美、則槲柏非同物明矣、皇國古書訓柏爲加之波、蓋其說不同也、源君混槲柏爲一條、非是、又按柏經典相承作栢、見五經文字、然上文引兼名苑栢音百、訓加倍、果蓏部引本草栢實、亦音百、訓加閉、此引唐韻作柏、音帛、訓可之波、蓋源君誤以柏栢爲別字也、今俗承其誤、以爲二字不同非是、古事記、日本紀、延喜式、大神宮儀式帳、其他諸書、皆以柏訓加之波、

〔饅頭屋本節用集　草木加〕柏(カシハ)

〔書言字考節用集　生植六〕槲(カシハ)(本草、爾雅所謂樸樕也、)　大葉櫟(同上)　柏(同、本朝俗用此字、雖來舊矣、)

〔古事記　下仁德〕天皇聞看豐明之日、於髮長比賣令握大御酒柏(オホミキノカシハ)、賜其太子、○

〔古事記傳　三十二〕加之波(カシハ)と云は、もと一樹の名には非ず、何樹にまれ、飲食に用る葉を云り、故書紀仁德卷に、葉字を書て此云箇始婆とあり、然るに又某賀志波(ナニガシハ)と名負たる樹も、古より彼此とあるは、あるが中に常によく用ひたるどもを、然は名けたるなり、(古書どもに、加志波に柏字を用ひたるは、いかなる故にかあらむ、和名抄には槲字を出して、和名加之波とあり、此は何の木を云るにかあらむ、おぼつかなし、若は今世にもはら加志波と云木あるそれにや、)凡て上代には飲食の具に、多く葉を用ひしことにて、(後にも万葉二に、家有者、笥爾盛飯乎、草枕、旅爾之有者、椎之葉爾盛などもあり、)飯を炊くにも甑に葉を敷もし、覆ひもして、炊きつるから、炊葉の意にて加志波とは云るなり、比羅傳(ヒラデ)と云器も、書紀に葉盤と書れたる如く、葉以て造れる物なり、又膳夫(カシハデ)と云も、飲食の葉を執あつかふからの名なり、伊勢物語に海松を高坏に盛て、柏をおほひて出しけるとある類も、古のさまの遺れるなり、

〔松屋叢考　一〕三樹考

柏(カシハ)は炊葉にて、上古は甑に葉を敷て飯を蒸たるより然いひ、食物を盛もし、食物の上にもおほひ、下にも敷たるなど、みな柏といへり、(延喜四時祭式上に、槲一俵、また柏九十把、齋宮式に干槲三俵、弓絃葉一荷、大膳式下に青槲、衛葉(ハヲスハ)、大和、河內、攝津等國所進、干

ウバメガシ

〔大和本草十二雜木〕ウ。バ。シ。バ。　其葉小ニ、枝ノ兩方ニシゲリ付テ相連レリ、兩々相對セズ、葉ノ形茶ノ葉ニ似テ細ナリ、サキマルクシテトガラズ、葉アツク、冬モシボマズ、花ハヒサヽキノ如ク小也、見ルニタラズ、高數尺ニ不過、枝葉シゲル、海邊ノ山野ニ多シ、

〔重修本草綱目啓蒙二十五灌木〕山礬略○中古說ニウバシバニ充ツ誤ナリ、ウバシバハ一名ウハメガシ、アクシバ又ウバメ、ウマメトモ云、卽夫木和歌抄爲家卿ノ歌ニ、冬來レバ霜ヲ戴クウバメノ木老ノ姿ヤイトヾ見ユランヽト云是ナリ、海邊ニ多ク生ズ、櫧ノ類ナリ、葉厚ク長サ一寸許、楕(ヒツナリ)ニシテ鋸齒アリ對生ス、冬凋マズ、花ハ棫(アヲボ)木ノ如ク、又櫧(カシ)ノ花ニ似テ黃穗ヲナシ、後ニ櫧ノ如キ實ヲ結ブ、小兒採テ火ニ煨シテ食フ、本性堅剛ナリ、故ニ船ノ櫓艣ニ用ユ、又薪トシテ上品ナリ、此レヲ煎ジテ五倍子ニ代ヘ用テ、婦人ノ齒ヲ染ム、發芽ニアカメアヲメノ二種アリ、庭際ニ栽ユルニハアカメヲ良トス、是ヲ桃洞遺筆ニ竹窻閑話ヲ引テ、救荒本草ノ石岡橡ニ充ツ、

鈎櫧

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕鉤。栗。　シ。ラ。カ。シ。　一名巢栗事物紺珠

前條ノ集解ニ謂ユル鉤櫧ナリ、其葉ノ形狹小ニシテ柯(シイノ)葉ノ如ク鋸齒アリ、實ハ血櫧ヨリ微大ニシテ苦味少クシテ食フベシ、材ハ白色ニシテ血櫧ヨリ强シ、又數品アリ、

槲

〔倭名類聚抄二十木〕槲　本草云、槲音斛和名加之波、唐韻云、柏音帛、和名上同、木名也、

〔箋注倭名類聚抄十木〕千金翼方、證類本草下品載之、○中略　源君以釣樟及擧樹爲久奴歧、故此不取是名、本居氏曰、加志波、本盛飮食樹葉之總稱、非一本之名、仁德紀、葉此云箇始婆、是也、古事記御綱柏、造酒司式長目柏、万葉集保寶我之波、催馬樂太万加之波、皆飮食之用、槲葉亦飮食必用之物、故專其名也、凡上世飮食具多用葉、其炊飯甑或敷葉、或以葉蔽之、故名炊葉、省呼加之波也、○中略　按、廣韻、柏博陌切、屬鞾母、帛傍陌切、屬並母、淸濁不同、此以帛音柏、恐誤、○中略　按栢實新修本草上品載之、不

櫧ハカタギノ總名ナリ、苦櫧ハ方言赤カシ、鉤櫧ハ方言白カシナリトイヘリ、

〔紀伊續風土記物產五〕櫧本草、總名、日本紀に橿を加之と訓ずるは非なり、
○血櫧本草　鉤櫧シラカシ本草、枕草紙　○鐵櫧本草　○石櫧郡武府志、一名イチカシ、和名抄櫟を以知比と訓ずるは誤なり、　○青櫧　○細葉櫧
○大明櫧俗に誤て龍眼といふ者なり　○刺檜清俗、夫木鈔ニウバメノ木、

右八種各郡人家に多く、又山中にもあり、

〔林政八書〕山奉行所規模帳○中略

一唐船梶本木は、必かしの木にて相調申候、其餘之木を用候儀不能成事候、然ば御本殿御普請之時、從跡々かしの木相用、又砂糖車も、右木にて相調申候故、當時梶本木可成程之木は、國頭方へ僅有之、御用筈合候哉心遣仕候、依之御普請御材木之儀、別木を見合候處、九ケ間切山によすの木有之、御普請に相用、相應之木候間、向後かしの木、よすの木は、大小共伐取儀堅禁止申付候、尤砂糖車之儀は、短木にても可相濟候間、かしの木よすの木共、壹丈以下之木より見合取調候樣可申渡事、
附、かしの木、よすの木、私用に付て伐取候はゞ、大小共一本に、付科錢百貫文申付、五拾貫文は披露申出候者へ相渡、五拾貫文は山仕立料に可申付事、○中略

一樫木種子は、潤ひ無構蒔入、土壹分程覆ひ候て、日覆致すべく候、土厚く覆ひ候得ば、結句萌出衆申候、將又旱打續候節、折々水を掛け見合次第、水墍薄く相用ひ可然候、尤苗萌揃日に當候ても、不痛時分日覆可取除候、

一樫木種子、五六月熟見合、もり取、則ち水に入、浮出候等除け、沈み候分取揚可蒔入候、尤種子取集其儘召置候は、早速虫入瘦り多相成物候間、卽ち細か成土を些と混交し可置候、
附右苗種子蒔入候て、翌年十二月より、次春迄翠り出ざる內植付可然候、

○按ズルニ、右ハ琉球ノ林政ヲ記セル書ナリ、

也、俗云樫木（中略）

按苦櫧子（俗云加之、堅字訓中略也、）其木堅剛、故今俗多用樫字、（猶以堅字為加豆於上也）其花狀如栗花而短、黃褐色長一寸許、有白樫赤樫之二種、而白樫葉稍小、背淡白木理細密、以堪為秤衡槍柄及棒杖等、出於肥前天草者最佳、

赤樫以為櫓櫂車軸及鋤柄等、日向之產理密而佳、薩州之產次之、

〔重修本草綱目啓蒙（二十一山果）〕櫧子　カシノミ　セウダメ（志州）　カシノキ（以下樹名）　カタギ　一名

圓櫧（物理小識）　櫧栗（本草彙箋）　臺櫧（泉州府志櫧ノ俗字）

櫧ハ總名ナリ、品類多シ、皆木ノ性堅シ、故ニスベテカタギト呼ブ、庭際ニ栽テボウガシト呼ブ者ハ皆血櫧ナリ、俗ニアカガシト云、葉ハ形橢ニシテ厚ク、粗キ鋸齒アリ、互生シ冬枯レズ、又短葉狹葉ノ數品アリ、皆葉間ニ花ヲ生ジ穗ヲナス、長サ二寸許、黃白色栗花ノ痺タルガ如シ、實ハ別ニ枝梢ニ生ズ、形圓尖ニシテ小ク、初ハ青ク堅條多シ、熟スレバ黃褐色、又大小數品アリ、味苦澁ニシテ食フニ堪ヘズ、木材色赤シ、故ニ血櫧ト云、一種シラカシアリ、其材色白シ、卽次ノ條ノ鉤栗ナリ、

〔日本書紀（六垂仁）〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜姬命、託于倭姬命、（中略）一云、天皇以倭姬命為御杖、貢奉於天照大神、是以倭姬命以天照大神、鎭坐於磯城嚴橿之本而祠之、

〔古事記（下雄略）〕赤猪子仰待天皇之命、既經八十歲、於是赤猪子、（中略）參出貢獻、（中略）天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚愛悲、心裏欲婚、憚其極老、不得成婚、而賜御歌、其歌曰、美母呂能、伊都加斯賀母登、加斯賀母登、由由斯伎加母、加志波良袁登賣、

〔萬葉集（十冬雜歌）〕足引、山道不知、白杜杙、枝母等乎乎爾、雪落者、　或云、枝毛多和多和、

右柹本朝臣人麿之歌集出也、但一首、　或本云、三方沙彌作、

〔佐渡志（五物產）〕櫧

櫧

薩摩椎　末天葉椎　右二種、那賀在田兩郡に多し、

俵椎(實の形俵に似たり)　高野山に產す

〔倭名類聚抄 二十木〕櫧○唐韻云、櫧(音諸、和名加之、)萬年木也、爾雅集注云、一名杻、一名檍(杻音紐、今案、又杻械之杻、見刑罰具、)

〔箋注倭名類聚抄 十木〕按釋木云、杻檍、故舍人云、杻一名檍、則上一名二字似衍、廣韻云、櫧一名橿、又毛詩正義引陸璣疏云、杻檍也、今官園種之、正名曰萬歲、取名於億萬々歲之名、與唐韻萬年木謂櫧同、則櫧卽杻檍也、故源君併引之也、然西山經云、英山多杻橿、郭曰、杻似棣而細葉、一名土橿、橿木中車材、以杻橿爲不同、與此異、陸璣疏云、杻檍也、葉似杏而尖、白色、皮正赤、爲木多曲少直、枝葉茂好、二月中葉疏華如棣而細蘂、正白、蓋樹今官園種之、正名曰萬歲、(中略)○說文、櫧枋也、枋枋木、可作車、山海經注、櫧中車材、考工記注、今世轂用雜榆、輻以檀、牙以櫧、按杻檍之杻从子丑之丑、篆文作[illegible]、杻械之杻从手足之手、篆文作[illegible]、其體頗似、故隸書混杽械之杽、亦作杻、其實非同字也、宜正、

〔饅頭屋本節用集 草木 加〕樫　橿

〔書言字考節用集 六生植〕橿(一名万年木)　櫧(古事記)　樫(同)

〔大和本草 十二雜木〕櫧　カシノキ又カタギト云、本艸山果門ニ出タリ、其木赤白二種アリ、材トシテ屋ヲ作ル、鎗眉尖刀ノ柄、又鍬犂鎌ナドノ柄ニ作リ、舟ノ櫓ニ作ル、凡器物ニ作ルニ堅クシテ久キニ堪フル良材ナリ、實ハ椎ニ似テ大ナリ、飢ヲ助ク、白○櫧○ハ木色白ク、木ノ性ネバクシテツヨシ、鎗ノ柄ニ用ユ、其外器ノ柄ニヨシ最良材ナリ、葉細ナリ、實ノ味赤カシニマサル、赤○櫧○ハ白カシヨリ葉大ナリ、木色赤シ木ノ性裂ヤスクヲレヤスシ、白カシニヲトル、然レドモ是亦器ニ作ルニヨシ、白カシノ實ハ甘ク味マサル、赤カシノ實ハシブシ味ヲトル、材實トモニ白カシヨシ、白カシノ實ヲ多ク空地ニ蒔ベシ、民用ニ利アリ、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕櫧木(かしのき)　苦櫧子　加之乃美　櫧(音江、和名抄訓加之、)　唐韻此名萬年木　字彙云鋤柄

伊豆諸島頗ル椎子ヲ出ス、又肥前國松浦郡ニハ白椎有テ、其味甚美ナリ、且又此者ハ穀食ノ不足ヲ助ケ、凶荒ノ飢餓ヲ救フ者ニテ、啻ニ菓子ト爲スベキノミニアラズ、宜ク多ク栽ベシ、植ル法ハ、十月頃、實ヲ肥土ニ混合シテ、藁菰ニ包ミ、地中ニ埋メ、時々泔水ヲ澆置テ、翌年二月中旬ニ苗地ヲ畦作シ、三寸隔ニ一粒ヅヽ蒔テ、上ニ八九分土ヲ覆ヒ、遮陽ヲ造リ、時々薄キ水糞ヲ澆テ、苗ヲ成長セシメ、三年目ノ春移シ栽ベシ、

〔萬葉集 二挽歌〕有間皇子自傷結松枝歌二首(○中略)

家有者、笥爾盛飯乎、草枕、旅爾之有者、椎之葉爾盛、

〔新撰六帖 六〕しゐ

むかつをのしゐのこやての世にふれば人の心にあひたがはめや　家良

いつのまにたれ種まきて片岡のむかひの峯に茂る椎柴　爲家

〔源平盛衰記 十六〕三位入道歌等附昇殿事

源三位入道ハ(○源頼政、中略、)四位ノ殿上人ニテ、久世ニ仕エ奉ケルニ述懷仕テ、

上ルベキタヨリナケレバ木ノ本ニ椎ヲ拾テ世ヲ渡ル哉、ト申タリケルニ依テ、七十五ニテ三位ヲ被免テ後、先途既ニ遂ヌトテ、出家シテ、源三位入道トモイハレケリ、

〔佐渡志 五物產〕柯樹　方言シイノキ

山中ニ多シ、大木ナリ、加茂郡水津村ノ邊ニコトニ多シ、濶葉ナルモノ、大葉ナルモノアリ、實ハ椎ノ實ヨリ小サシ、小兒炒食スルニ味ヒ良ナリ、同郡椎泊村ヨリ出ルモノ名產トス、

〔紀伊續風土記 物產五〕椎子(本草、本草和名ニ之比、)

各郡山中皆あり、在田郡山保田莊邊より多く出す、又樹皮は那賀郡野上莊邊より出づ、魚網を染るに用ふ、

〔和漢三才圖會 八十七山果〕椎子（音堆） 鐵櫧 和名之比 椎字音爲和名

本綱、椎子似鉤栗而圓黑、木亦黑、子味甜、謂之鐵櫧、

按椎木葉似樫而鋸齒細強、冬亦葉不落、其子長尖似筆頭、紫褐色仁白色作兩片、味甘、丹後伯耆之產佳、參州之產圓短、此合本草所謂似鉤栗而圓黑者、凡椎木心似白樫（シラカシ）而粗理微黑、似樫易蛀、不堪爲屋柱、唯用織長木爲椽之用、（俗云椎丸太）

椎木皮（俗云加之波木）用染魚網、

〔重修本草綱目啓蒙 二十五喬木〕柯。樹。 シヒ シヒノキ 一名珠樹（泉州府志） 株樹（閩書） 科樹（同上） 木奴樹（漳州府志） 柯枝樹（肘後方） 實 一名珠子（泉州府志） 株子（閩書） 椎子 錐（共同上） 柯子（漳州府志）

山中ニ多シ、大木ナリ、葉ハ櫧（カシノ）葉ヨリ狹長ニシテ薄ク硬シ、面深綠色、背ハ褐色ニシテ光リアリ、又濶葉ナル者大葉ナル者アリ、一種サツマシヒハ、葉長大ニシテ桃葉珊瑚（アヲキノ）葉ノ如シ、共ニ冬ヲ經テ枯レズ、椎子ハ櫧子ヨリ小ニシテ、外ニ粗皮アリテ全タコレヲ包ム、櫧子ノ椀形ナルニ異ナリ、小兒炒リ食フ、味ヒ良ナリ、又形長キ者アリ、サツマシヒハ長サ一寸餘ニシテ、榧實（カヤノミ）ヨリ長大ナリ、

增、木奴二字集解ニ入ル、ハ誤ナリ、宜ク釋名ノ下ニ移シ入ルベシ、

此條集解ニ形狀ヲ說カズ、先輩何レノ書ニ據テシヒノキ充ツニヤ詳ナラズ、故ニ左ニ一二ノ考證ヲ擧グ、泉州府志云、江東人呼柯樹爲珠樹、因呼其子爲珠子、閩人呼爲椎者、音近而譌耳、閩書南產志云、椎科子也、曾師建記作錐、謂之末銳於錐、此擬其形似錐末言、宋志以錐作椎、蓋從木也、按椎古槌字、戰國策、史記、凡槌皆作椎、獨新編百香篇海云、椎直追切、樹名、似山桂、不言其有子也、今按、此果是科樹所生、江東人呼科樹爲株樹、因呼其子爲株子、閩人呼爲椎者、聲相近矣、興化郡北一里許有地、曰椎林荒歲特養貧民頼之、又閩書標註云、科字泉州府志、本草綱目、並作柯字、

〔草木六部耕種法 十九需實〕椎（シヒ）ハ赤白二種有リ、第十番ノ氣候ニ合スル木ナルヲ以テ、暖國ハ殊ニ宜シ、

〔本草和名 菓十七〕椎子、又有櫪子、相似而大於椎、出崔禹、和名之比、
〔倭名類聚抄 菓十七〕椎子　本草云、椎子、上音直追反、和名之比、
〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕原書不載椎子、本草和名載椎子、云出崔禹、蓋源君誤引、按閩書南産志云、椎科子也、曾師建記作錐、謂之末鋭於錐、此擬其形似錐末言、宋志以錐作椎、蓋從木也、則知椎子之椎、從木從錐省、後世會意字、其音當與錐同職追反、與柊椶之椎音直進反、其字不同、此所音誤、○中略 和名依輔仁、神武紀云、椎此云辭毘、欽明紀椎子、萬葉集椎、皆同訓、新撰字鏡作檑楕、亦並同訓、
〔伊呂波字類抄 志植物附植物具〕椎シヒノミ　椎子シヒ見本草
〔和字正濫抄 二〕しひ
椎　しひ　日本紀、古事記、万葉、和名一同なり、しゐとかくは誤なり、兼輔卿家集にも、十干を隱題によまれたる中に、丙(ヒノエ)をしひのえはと隱されたり、古事記に、應神天皇の御歌には、しひひとよませたまへり、
〔和字正濫要略〕椎　しひ　和名に之比、日本紀に椎此云辭毗、古事記宣化天皇段に、火穗(ホノホ)王者、志比陀君之祖といへるを、日本紀には椎田とあり、又古事記應神天皇の御歌に、志比比斯那須伊知比(イチヒ)韋(ヰ)能、これ椎のごとくなる櫟とつゞけさせ給へるなり、志比比とは、久比を倭建尊の久毗比とよませ給へるがごとし、古語なるべし、那須とは如五月蠅を日本紀にさばへなすとよめるなすに同じ、萬葉第十四に、四比乃故夜提、又思比乃佐要太、延喜式第七大嘗會式云、柱將椎枝古語所謂志比乃和惠、兼輔卿家集に、十干を隱題によまれたる中に、ひのえをよめる歌、はし鷹のとがへる山のしひのえはときはにかれぬ中を頼まん、又、上の香椎の宮をさまざまに書る異名假名たがひに證據也、俗にしゐとのみ書きなれ、俗書にこれを執する故に、見及ぶにまかせてしげきをいとはず、證を引也、見む人心あるべし、

栗種類

椎

ハ租アリ、就中三日市場村ハ古時伊丹播磨守ノ治所ヲ建シ處ナリ、領内ノ村ヲ併セ呼テ十組ト云、（古武鑑等作鎌美）毎年開市商人競集リテ定栗價、今尚例トス、三日市爲第一、小原爲第二、他村ハ次第ニ低折ス、大抵甲金拾兩ニ三拾俵（但シ壹俵ハ三升枡貳斗入リ）ヨリ四拾俵ナリ、打栗ハ蒸シテ去皮、載木盤上下ニ竹皮ヲ藉テ、以小槌打平ラメ、薄ク圓ナラシム、大如小兒掌、乾シテ聚十枚爲把、十把爲一筐、五把爲半筐、或ハ衆大ナル筐アリ、以售四方、本州ノ名產トス、味甜美ナリ、今モ例年十一月、府中落儀ヨリ獻之、搗栗（カチグリ）ハ灰汁ニ浸スコト一夕、（燒早稻藁爲灰）日乾シテ搗テ去皮、其形全面不毀ヲ善トス、方言滋味久（ジミク）利ト云、栗ノ種類甚多シ、大ナルハ味劣レリ、山中ニ生ズル茅栗（シバグリ）ト云ハ、細小ニシテ不充用、

〔毛吹草三〕近江　栗本（クリモトノ）スクモ（栗ノ葉ナリ、土ノ下ニ埋レテ木ノ如クカタマレリ、當所ニハ薪ニ用之、又香爐ノ灰ニ宜ト云、）

〔日本書紀九神功〕元年三月庚子、武內宿禰出精兵而追之、適遇于逢坂以破、故號其處曰逢坂也、軍衆走之及于狹狹浪栗林、而多斬、於是血流溢栗林、故惡是事、至于今、其栗林之菓不進御所也、

〔徒然草上〕因幡國に何の入道とかやいふものゝむすめ、かたちよしと聞て、人あまたいひわたりけれども、此むすめたゞ栗をのみくひて、更によねのたぐひをくはざりければ、かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらずとて、おやゆるさゞりけり、

〔常陸風土記行方郡〕提賀里、（中略）北在香取神子之社、社周山野地沃、草木椎栗竹茅之類多生、　男高里、（中略）有栗家池、爲其栗大、以爲池名、　麻生里、（中略）周里有山、椎栗槻櫟生、猪猴栖住、　當麻鄉、（中略）有香取二神子之社、其周山野櫟柞栗柴往々成林、猪猨多住、

〔筆のすさび四〕一栗の大樹　備後の安田といふ所に、栗のしだれたるあり、遠く見れば、垂絲櫻のごとし、高さは一丈許にて、はたはり二畝許もあり、栗毬多くつきて見事なりきとて、外姪淺右衞門、此頃圖して歸り示す、

〔新撰字鏡木〕柞（正音子落反、櫟也、除草曰芟、除木曰柞、奈良乃木、又志比、）　櫧（志比）　栯（志比乃木、又志比之、）

〔和漢三才圖會八十五果六〕搗栗（かちくり）　搗（音刀）與擣同、　俗云加知久利、又云地美、
本綱云、栗腎之果、補腎之物、於五果屬水、水凉之年則栗不熟、類相應也、以袋盛生栗懸乾、每旦喫十餘顆可也、蓋風乾之栗勝於日暴、而火煨油炒勝於煮蒸、若頻食至飽反致傷脾矣、
搗栗造法、用老栗連殼晒乾、稍皺時搗臼去殼及扶（シブカハ）皮、則肉黃白色堅味甜美、或浸熱湯及煨灰、待軟食亦佳、或食時用一二顆、握於掌、稍温則柔、爲乾果之珍物也、以爲嘉祝之果、蓋取勝軍利之義、武家特重之、

古今醫統云、取霜後老栗子、日晒乾、以新罈先入炒過凉沙、將栗裝入一層、沙一層、栗約九分滿、以沙蓋上、用箬一層蓋之、竹片十文字按定、覆罈口於地上、以黃土封之、逐漸取用、不得近酒、可留至夏也、
栗子炒而不爆法、　炒時拏一枚在手中、不爆、勿令人知、
又法、只以一枚咬破、蘸香油同衆栗入鍋炒之、皆不爆、銀杏亦然、　又法、五雜俎云、栗子於眉上擦三過則燒之不爆、　又燒栗斫外皮燒之則不爆、此捷法也、

〔新編常陸國誌六十一土產〕栗　久利
國內所トシテナキ所ナシ、大小二種アリ、人家ノ園裏ニ植ルモノハ大木ニシテ、實モ亦大ナリ、味至テ美ナリ、（甚大ナルモノヲ丹波ノテ、打栗ト云、土人云、其種モト丹波ヨリ出ツ、昔時人栗下ニアリ、實落テ其人ニ中ル、人斃ル、因テ名トスト云、）其材堅クシテ、朽ズ、以テ屋ヲ葺ノ板トス、最ヨシ、山ニアルモノハ高サ七八尺ニ超ルモノナシ、コレヲ柴栗ト云、實モ亦小ナリ、然レドモ味ハ大ナルモノニコヘタリ、其材用ルニ足ラズ、又一種アリ、茨城郡稻田村ニアルモノハ、年中三度實ヲ結ブ、俗コレヲ三度栗ト云、他ノ地ニモタマ〳〵コノ類アリ、就中稻田村ニアルモノ、世ノヨク知ル處ナリ、農家或ハ其實ヲ粉トシテ餠ニヌリテ食ス、コレヲクリ子ト云、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕一栗　州中所在皆アリト雖モ、栗原筋最饒シテ、且佳ナルニハ不及、栗林ニ

栗利用

〔和漢三才圖會八十五果六〕栗○中略

凡栗材埋土不朽也、勝於楠槙之輩、然木不甚大、不堪爲板、唯爲墻塀之柱佳耳、

〔廣益國產考六〕栗丸太(くりまるた)

國々にて杉檜松槻等の材は多く仕立れども、栗材を出す事少きやう覺ゆる也、此栗材すくなきゆゑ、杉丸太、松丸太抔多く用ふる也、雨かゝり或は溝などに栗を用ひなば、つよくたもつ事、杉松よりも强かるべしと思ふ計にてぞ過しける、江戶抔にては、別て屋敷方の板塀溝などを見るに、杉丸太を打貫き伏、塀の扣柱に杉松など見及べり、是は栗材すくなく高直なるゆゑなるべし、江戶にては諸侯方の御下屋敷抔には、雜物ばかりを作付ありし所見及ぶ事多し、其時々に斯る所にこそ、杉と栗材を仕立給はゞ、諸屋敷の溝々計にても栗丸太を用ひ給はゞ、如何計の御費を省給ひなんと、人にも語りし事あり、又或下屋敷に參りし事ありて見及び侍るに、多く南瓜(はうふら、上方にてなんきん、江戶にてたうなす、或國にてはかぼちやといへり、)(四國にてぼうぶら、)などを作り、皆百姓に任せ置給へり、是等には杉と栗檜などつくり給はゞ、材木を貯置給ふ道理にて、急用の時伐用ひ給はゞ、如何計の御德用ならんと思へり、○下略

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年正月二十日丁酉、先是常陸國鹿島神宮司○中略又言、鹿島太神宮總六箇院、二十年間一加修造、○中略伏見造宮材木多用栗樹、此樹易栽、而復早長、宮邊閑地、且栽栗樹五千七百株、榲樹二十四万株、望請付神宮司、令加殖兼齋守、太政官處分、並依請、

〔和漢三才圖會八十五果六〕栗○中略

栗實、鹹溫　作粉食勝於菱芡、但飼孩兒令齒不生、小兒不可多食、生則難化、熟則滯氣生蟲、但日中曝乾者下氣補益、

〔撮壤集下菓子〕杬(カチクリ)和名類聚○搗栗(カチクリ)同○

山風に峯のさゝくりはら〳〵と庭におちゝるおほはらの里

〔大和本草果木十〕栗〇中略 國俗澤栗ト云ハ、木曾山中澤邊ニ多シ、葉實常ノ栗ニカハラズ、木理常ノ栗ヨリヨシ、器材トス、其實小ナリ、大木多シ、

栗栽培

〔草木六部耕種法實十九〕栗モ亦桃ト同ク、實ヲ結コト速ナル者ナリ、此物ハ實植ノ儘ニテ成長セシムルモ宜ク、苗小キトキニ移シ栽タルモ宜ク、又實小者ハ伐リテ砧ト爲シ、大栗ノ枝ヲ接タルモ宜ク、或山野ニ自然生ノ柴栗ヲ移シ栽テ、接木シタルモ亦宜シ、何レ栽タルモ接タルモ二三年ヲ經ルトキハ、必實結者ナリ、若實ヲ結ザルヲバ、下枝モ梢モ六七分許、斷捨テ置クトキハ、新ニ梢モ枝モ生ジテ、必能ク實ノ結者ナリ、 種子ヲ植法ハ、大栗ノ三子ナル中子ヲ撰集メテ、木ヨリ落タルヲ風ニ當ズ蘘葉ニ包ミ、此ヲ熱土ノ中ニ埋メ、土ヲ覆フコト一尺四五寸、上ニ蘘菰ノ類ヲ二三枚モ被テ養置キ、翌年ノ春分後ニ至ルトキハ、少シク芽ヲ出ス者ナリ、乃チ其實ノ尖タル方ヲ下ニシテ、深サ三寸弱ニ植付ベシ、若シ遠國ヨリ種子ヲ取寄ルトキハ、桶箱等ノ中ニ軟沙ヲ以テ活テ持運ベシ、嚴シク風日ニ當ルコトヲ嫌フ、抑栗木ハ實ハ勿論成長シタル木ト雖ドモ、兎角人ノ手風ヲ嫌フ者ニテ、能ク實ノ結ル大木モ、數々人ノ手ヲ以テ撫摩トキハ、實ヲ結ザルニ至ルト云フ、 植地ハ砂錯ノ壤土ヲ好ム、赤色ノ壤土ハ殊ニ宜シ、栗ハ寒國ノ雪積ル土地ニモ能ク豐熟スル者ナレドモ、南向ノ陽氣ナル處ニ應合シ、陰地ニハ適合セズ、北向ノ肥地ニ栽タルハ、一旦繁榮スルコト有リト雖ドモ、久シカラズシテ虫ヲ生ジ、皆必倒ルニ至ル、丹波國ハ大概赤壤赤壚多ク、大栗古今名產ナリ、然レドモ一盛能ク實結テ木ニ蟲ヲ生ジ幹中ヲ喰透、衰弱テ實ヲ結バザルコト多シ、故ニ虫ヲ殺ス法有リ、即十月中旬頃ニ、枯草ヲ以テ厚ク栗樹ノ幹ヲ包ミ、下ニモ頗木葉ヲ聚テ火ヲ放チ、此ヲ燒ク、此ノ如クスルトキハ、火煙蟲穴ニ入リ、腐朽タルモ燒焦レテ虫ハ悉ク死シ、其木却テ稚復リ、能ク實結者ナリ、栗ノ虫ヲ去ルハ此法最モ便ナリ、

是鷁栗之形狀、又按此引崔氏食經、本草和名云、出兼名苑、不同、今詳文義、引崔氏似是、云出兼名苑者、疑傳寫偶誤、非輔仁之舊也、杬子鷁栗二名、他書未見、按大雅皇矣詩云、其灌其栵、釋文引舍人云、江淮之間呼小栗爲栭栗、爾雅、栵栭、郭注、樹似槲樕而庳小、子如細栗可食、今江東亦呼栭栗、詩正義引陸疏云、葉如榆也、木理堅靭而赤、可爲車轅、今人謂之芝檽也、廣韻云楚呼爲茅栗、蜀本圖經云、茅栗似板栗而細、其樹雖小、然葉與諸栗不殊、惟春生夏花秋實冬枯爲異耳、李時珍曰、小如指頂者爲茅栗、是亦可以充佐々久利也、今俗呼之波久利、又奴加久利、又毛美智久利、又按茅栗當作芧栗、

〔夢溪筆談三辨證〕江南有小栗、謂之茅栗、茅音草茅之茅以予觀之、此正所謂芧也、則莊子所謂狙公賦芧者芧音序此文相近之誤也、

〔雍州府志六土產〕茅栗（シバグリ）　鞍馬幷矢背大原土人、九月初旬中三日間各有遊樂之日、斯時村中新婦各入山林採茅栗、或稱芝栗、其形小而內實、去其外皮、湯煮之、盛是於布囊、新婦戴頭上、賣京師、而聚所賣之錢、是充新婦一年中之費用、又一種有大者、風味形狀比丹波之產則爲劣、不脫其毛毬、謂伊賀栗、倭俗毛毬謂伊賀、湯煮去外皮、碎其實而餝之、糝餠而食之、是謂栗粉餠、斯製法西洞院餠店、幷本阿彌辻子所有爲勝矣、延喜式載、山城國貢平栗子、此栗類乎、

〔大和本草十果木〕栗〇中略　栭栗（サヽクリ）、サヽトハ小ナルヲ云、小栗ナリ、又シハグリト云、爾雅註、江東呼小栗爲栭栗、崔禹錫食經ニハ杬子ト云ヘリ、春初山ヲヤケバ栗ノ木モヤクル、其春苗ヲ生ジ、其秋實ノル、地ニヨリテ山野ニ偏ク生ズ、貧民ハ其實ヲ多トリテ粮トス、筑紫ニ多シ、庭訓往來ニ宰府ノ栗ト云是ナリ、蘇恭ガ茅栗細如橡子ト云シモシバグリナルベシ、

〔增訂豆州志稿七土產〕茅栗（サヽクリ）　增、栗ノ一種ニシテ、木ノ高サ數尺ニ過ギズ、子亦小ク味甘美アリ、田方郡舟洞山中ニ多シ、或者云、筑紫ニ宰府栗ト呼ル者アリ、土俗ハ三度栗ト云、實ノ大サ指頭ノ如シ、三度栗ト云ト雖、實ハ二度結實スルノミ、卽是ナリ、

〔夫木和歌抄二十九栗〕西行上人高野よりといひて侍ける返歌中、さゝくり、　寂然法師

房彙中ニ惟一顆アルアリ、一ツグリト云、一名ヒヨングリ(雲州)ドングリ(同上、同名アリ、)ヒヤウヒヤウグリ、江戸ヒヨヒヨグリ(同上)其形正圓ナリ、藥用ニ入ル、附方ニ獨顆栗子獨殼大栗ト云、江州ニ一毬ニ七顆アルアリ、ハコグリト云、毬ノ形四稜ニシテ潤シ、栗ノ形至テ大ナルヲ丹波グリト云、一名料理グリ、オホグリ、テヽウチグリ、テヽウチグリニ數說アリ、一ハテンデニ採ルト云意ト云、一ハニギリテ手中ニ滿ルノ意ニテ、手內栗(テウチグリ)ト名クト云、フ、此ハ丹波ノ名產ニシテ、柏原侯ヨリ獻上アリ、一ハ時珍ノ說、其苞自裂而子墮ノ意ヲ取リテ出テ落(ダ)グリト名クト云、丹波グリハ形大ニシテ料理ニ用ユルニ堪タレドモ、味ハ劣レリ、是レ板栗ナリ、一名魁栗(山東通志)又七八分ノ大サナルヲ中グリト云、是山栗ナリ、又シバグリアリ、一名サヽグリ、(和名抄)ヌカグリ、モミヂグリ、木高サ五六尺ニ過ズシテ簇生ス、房彙モ小ナリ、其中ニ一顆或ハ二三顆アリ、形小ナレドモ味優レリ、是茅栗也、一名榛(爾雅)圓椺栗(同上)榛栗(鎭江府志)又越後ニハ三度グリアリ、大和本草ニヤマグリト云、石州ニテカンハラグリト云、茅栗ノ類ニシテ、年中ニ三度實ノルト云、越後ノミナラズ、石州、豫州、土州、上野、下野ニモアリト云、

〔和漢三才圖會 八十五果 六〕栗(中略)按、栗花五月梅雨中落、故俗書墮栗花爲梅雨之訓、凡栗花長而其子圓、虹豆花短而子長、不因於物花形也、丹波船井郡和知之產甚大、(俗云父打栗)所謂板栗是乎、上野下野越後及紀州熊野山中有山栗、小扁一歲再三結子、其樹不大木、所謂茅栗是乎、

〔倭名類聚抄 十七菓〕杭子 崔禹錫食經云、杭子(上音元)一名𪈓栗、(和名佐佐久利、)栗相似而細小者也、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕本草和名杭子𪈓栗在栗條、別無和名、佐々久利、見夫木集寂然歌、爲忠後百首、按佐々謂細小、與佐々浪之佐々同、(中略)本草和名栗條云、杭子𪈓栗、相似而細小、已上二名出兼名苑、按、彼不云一名、蓋以杭子𪈓栗相類並擧也、源君以𪈓栗爲杭子一名、恐誤、其云相似而細小者、

〔倭訓栞中編六 久〕くり　栗子名つくるは、色の黑きをいふにや、○中略大和の山田村の山に柏の木に栗子のなるありといふ、新猿樂記に丹波栗と見ゆ、今もまた大栗を出せり、庭訓往來に宰府の栗といへり、今も多し、七。度。栗。は伊豫に出て、年に七度みのるといふ、三。度。栗。といふは、年に三度みのる、常陸茨城郡稻田村、又野州及越後にあり、

〔倭名類聚抄十七 菓具〕栗。扶。本草云、栗扶、和名久利乃之不、今案其味澀之義也、

〔箋注倭名類聚抄九 果蓏具〕原書上品有栗、不載栗扶、蘇注云、其皮名扶、此所引蓋是、○中略今俗呼澀皮、

〔倭名類聚抄十七 菓具〕栗。刺。附罅發　神異經云、北方有栗、徑三尺二寸、刺長一尺、栗刺、俗云久利乃以加、文選蜀都賦云、榛栗罅發、罅音呼亞反、罅發師說惠女利、李善曰、栗皮拆罅而發也、

〔箋注倭名類聚抄九 果蓏具〕原書云、東北荒中有木、高四十丈、葉長五尺、廣三尺、名曰栗、其實徑三尺二寸、無刺長一尺之文、太平御覽引同、源君所見本蓋不同也、○中略久利乃伊賀見枕冊子、谷川氏曰、筑紫俗呼伊偈、然則當是射毛之義、或曰、伊賀嚴也、言其有刺可畏也、○中略原書○文選注榛作樼、注云、榛與樼同、按、榛栗之罅坼、猶人之破顔、故訓惠牟、○中略所引劉逵注文、此引爲李善注、誤、

〔重修本草綱目啓蒙二十 五果一〕栗　クリ 和名抄、皮色黑シ故ニ名ク、　一名蓬實 事物異名　汝水霜苞　天台道果　華林異果 共同上　河東飯 清異錄　君州果 名物法言　嘉卉果 同上　員栗 尺牘雙魚　咽玉漿 事物紺珠　吃栗 說嵩

増一名撰之 禮記　茅栗一名杬子 崔禹錫食經

凡ソ栗ハ冬葉枯レ春新葉ヲ生ジ、梅雨中ニ至テ葉間ニ花アリ、穗ヲナス、長サ三寸許、至小ノ黃白色ナル者多ク著テ下垂ス、山胡桃ノ花ヨリ短小ナリ、後房彙(イガ)ヲ生ズ、形圓扁ニシテ刺アリ、季秋ニ至リ房彙自ラ裂テ出テ落ル者ヲ上品トス、房彙ヲ開テ採リ出シタルハ蛀ツキ易シ、房彙ノ內子二顆アルアリ、三顆アルアリ、三顆ノ者ハ其中子多ハ皮ノミニシテ肉ナシ、コレヲ栗楔ト云、俗ニ栗ノシヤクシト呼ブ、一名クリノヲバ、セナカアテ、加州肉アル者ハ藥用トシ、又下種ニ宜シト云、又

木三

栗名稱

〔新撰字鏡 木〕栗、桌、㮚、（三形作、力質反、久利、）

〔本草和名 十七 菓〕栗皮名扶、杭子鼲栗（相似而細小、已上二名出兼名苑、）一名撰子、一名掩子、（已上二名出兼名苑、）和名久利

〔倭名類聚抄 十七 菓〕栗子 兼名苑云、栗（力質反）一名撰子、（和名久利）

〔箋注倭名類聚抄 九 果蓏〕按久利、以栗子色黒名之、〇中略 按撰子之名未見所出、蜀本圖經云、栗樹高二三丈、葉似櫟、花青黄色、似胡桃花、實大者如拳、小如桃李、又有板栗佳栗、二樹皆大、本草圖經云、實有房彙、若拳、中子三五、小者如桃李、中子惟一二、將熟則罅拆子出、陳士良食性本草云、栗有數種、其性一類、三顆一毬、其中者栗楔也、李時珍引事類合璧云、栗木苞生、多刺如蝟毛、毎枝不下四五箇、苞有青黄赤三種、中子或單或雙、或三或四、其殼生黄熟紫、殼內有膜裹仁、九月霜降乃熟、其花作條、大如筯頭、長四五寸、中心扁子爲栗楔、

〔倭訓栞 前編 八〕くり〇中略 栗子を名くるは色の黒きをいふにや、又くりは稜角をいふ、よて三稜草をみくりと訓ず、石をいふも同意也、日向風土記には、俗謂栗爲區兒と見えたり、延喜式に搗栗子、扁栗子、燥栗子、削栗子等の目あり、扁栗子は今の打栗なるべし、類聚雜要に搔栗あり、九月九日に栗をくふ事は、照朝樂事に見え、栗扶、くりのゐぶ、栗刺、くりのいが、和名鈔に見えたり、扶は本草に扶に作る、ゐぶかは也、栗刺は本草に毛毬と見えたり、俗に杓子と稱するは栗楔也といへり、

するなり、萩も萩が花ずりと云ことある故に、顯昭は誤られたり、榛は全く芽子(ハギ)に非ず、よく萬葉を見て辨ふべしと云るが如し、但し云ざままぎらはしきことあり、草のはぎと云るは萩のこと、木のはぎと云るは波理のことなり、是混らはし、其故に草なると木なると二種ありて、顯昭が榛と云るは、木なる萩のことにて、榛を其に當たるは誤なれども、契沖なほ此を波岐と訓て、木のはぎと云るは、かの木なる萩のことの如くにも聞えてまぎらはしきなり、榛と書るは、波理の木にして、萩には非ず、但し波理をも波岐とも云しことは有しか知らず、若波岐とも云しことあらば、契沖が云るごとく波理木の略なるべし、そはいかにまれ、萬葉に榛と書るは波理なり、たとひ波岐とは訓とも、萩のことには非ず、又萬葉なる榛を、波岐とは訓べきに非ず、凡て萬葉によめる榛と芽子とは、歌のさま異にして、よく分れたり、榛は衣に摺ることのみよみて、花をよめることなく、芽子はむねと花をよめり、然るを師の萬葉考別記に、榛をも花咲芽子と一なりと云れたるは誤なり、一卷に引馬野爾仁保布榛原入亂、衣爾保波勢とあるも、色よくにほへる波理の木原に入突りて、衣を摺れと云ことなり、三卷に、往左來左君社見良目とあるも、榛木を見むと云にはあらず、眞野之榛原の凡て地を見むと云るなり、此上なる歌に、猪名野者見せつ、角野(ツヌノ)松原何時しか見せむとある類なり、榛を萩の花のことゝ勿思ひまがへそ、十四卷に、伊可保呂乃、蘇比乃波里波良、波良和我吉奴爾、都伎與良之母與云々、一卷に狹野榛能、衣爾著成、此二首など、衣に著と云る趣向聞きを以ても、榛は波理と訓べきことを知べし、さて又榛字をサに从て蓁(ハリ)とも書るに就て、なほ萩ならむかと疑ふ人もあるべけれども、蓁は榛と字の通ふを以て通はし書るのみ也、

〔增訂豆州志稿 七土産〕山榛木(サマハンノキ) 增、赤楊(ハンノキ)ノ一種、州俗榧砂木(ヤシヤノキ)ト云ヒ、其實ヲやしやぶしト呼ビテ染料トス、天城山及ビ其他山村ヨリ產出ス、

〔駿國雜志 二十六〕夜乃附子

有渡郡安古村にあり、當所の產をよしとす、有渡郡巡村記云、紺播曰、久能の夜乃は染色淺しといへども、染あげこはからず、色上品也云云、卽此所の夜乃を云成べし、按るに夜乃は榿(ハン)木(或云波牟乃木)の木の實也、

だはりの木の紅葉を見ず、ほりえの濱つとに、水の秋や深くあるらん陰ㄙづむ岸のはりはら紅葉ㄙにけり、と濱臣のよみしもあれば、いやましにはりの霜葉を尋ぬれど、今に見ず、或人榎戸の鷲大明神へ行道にて、はんの木の麗はしく染しを見しといへり、されば十一月の事にて、何れの紅葉もちりし後なり、是は元木をきりて新枝の生せしものなるべし、やしやふしは近邊にては鴻臺邊より多く植るもの也、是は田のはたには植ざるものにて、多く山野にあり、又八王子邊多く自生ありと云り、又日光にてフシと云ものは、葉細く桃葉に似て細鋸齒あり、此實にて婦人齒を染といふ、又メハリの木と云は、やしやふしに似て、小にして先くぼめり、是はやしやふしより葉厚ぐしてこはし、此二種共にやしやふしはりの木の實も用て佳なり、やしやふしは元來本邦に生せしものなるべし、又佐藤成祐曰、古渡りの大黃に穿眼大黃と呼ものあり、藥舖にてうがち大黃と呼、卽はんの木にて差て渡せり、切て見れば大黃の內に枝のごりあるものありと云へり、是にてもはりの木の西土に多くある事はㄙられたり、

〔日本書紀三神武〕四年二月甲申、立靈畤於鳥見山中、其地號曰小野榛原下小野榛原、用祭皇祖天神焉、

〔古事記下雄略〕又一時天皇登幸葛城之山上、爾大猪出、卽天皇以鳴鏑射其猪之時、其猪怒而宇多岐依來（宇多岐三字以音）故天皇畏其宇多岐、登坐榛上、爾歌曰、夜須美斯志、和賀意富岐美能、阿蘇婆志斯、志斯能、夜美斯志能、宇多岐加斯古美、和賀爾宜、能煩理斯、阿理袁能、波理能紀能延陀、

〔古事記傳四十二〕榛は（諸本に榛と作るは誤なり、今は眞福寺本延佳本に依れり、）此は波理能紀と訓べし、（たゞ波理とのみ訓むはわろし、）今俗に波牟能木と云物なり、萬葉の歌に榛とあるも是なり、（皆波理と訓べし、波岐と訓て萩と心得たるは誤なり、）契冲云、顯昭萩と榛とを一に云れど、萬葉に草のはぎをば、芽とも芽子とも書り、木のはぎに榛字を書り、榛ははりなり、はぎと云は、はり木と云べきを、りもじを略せるなり、俗にははんの木と云、日本紀に蓁摺衣などあり、萬葉に衣を染とよめること多し、今も田舍などには、榛を植置て、染具と

〔書言字考節用集 六生植〕檀(ハリノキ)万葉用榛字 橎同

〔鹽尻 五十四〕一檀(トウ)ハ、俗に云はんの木なり、

〔大和本草 十二雜木〕檀(ハリノキ ハンノキ) 宋宋祁益部方物略記曰、民家蒔之、不三年材可倍常、薪之疾種亟取、里人以爲利、杜子美覓檀栽詩曰、飽聞檀木三年大、東坡詩檀木三年行可樵、檀ノ葉ハ榛ニ似タリ、山州江州ニ多シ、田ノアゼニウヘテ薪トス、長ジヤスシ、喬木トナル、枝ヲ切レバ田ノ妨トナラズ、實ヲウフベシ、又早ク其幹ヲ切レバ、一根ヨリ多ク叢生シ、荊ノ如ナルアリ、多クウヘテ可爲薪、一株立テ高大ナル木ト幹ヲ切テ、叢生シテ小ナルトハ別樹ノ如クナレドモ一物ナリ、別木ニ非ズ、只早ク切リテ叢生スルト、不切シテ一株長ジテ高大ニナルトノ異ナリ、ヘラノ木ニ大小アルモ亦如此、ヒキヽハ其木ヨク榛ニ似タリ、故ニ日本紀神武紀ニ榛原トカキテ、ハリハラト訓ズ、東鑑ニ榛谷(ハンガエ)トヨム、其實ハ榛(ハシバミ)ニアラズ食フベカラズ、

〔和漢三才圖會 八十三喬木〕波牟乃木(はんのき) 正字不詳

按波牟乃木生山中、高者二三丈、葉似栗而輭、花亦似栗花而褐色、實似杉實、其木肌心白色、見日則變赤、今染家用梅木煎汁、中投此木屑、經宿以染赤色、

〔古今要覽稿 草木〕はりの木 榿

はりの木、今處々に多く栽て薪となす、此木生長の早きによりて、田畑路傍ともにあり、直立にして繁茂す、又一種やしやふしも、はりの同類にして、葉圓大にして實も又大なり、此實染家に用ゆ、花は共に秋より生じて、開くは嚴冬より立春盛なり、はりの木を榿となし、詩を引て證とし、其形狀摸樣ともに詳なる事は、大和本草を始とす、又蘭山は古今注の赤楊なりといへり、其文に霜降葉赤とあるに、少し的當し難し、尤風土によりての違ひあるべし、楓は紅葉の最なるものなれ共、本邦にては大樹に至りても、黄色に染るのみ、予秋にいたれば種々の霜葉をあつめ見れども、未

榿

〔古今要覽稿草木〕はしばみ榛

はしばみ、灌木にして、大なる物とても、七八尺より長きはなし、一株より叢生して繁茂す、花は未秋葉の落ざる時より萌して、極月の頃五六分になりたる時より插花に用、是もながはしばみは花も長じ、其にひらくは啓蟄より春分にいたりて、鮮黄にして、潤にいたつて褐色にいたる、後葉を生ず、是も其芽は深紅にして、長ずれば青し、此葉節多くして皺の如し、故にはしばみといへり、たれさがる花も多くあれども、是は花實時を同ふせず、實を結ぶものは元より花をなさず、五六月の頃小なる苞を生じて、七八月に至て熟す、近郷にては下總小金つゞきの山野に自生するものは十果皆實のりて、空殼なるは稀なりといへり、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕榛　ハシバミ和名抄　一名蓁栗通雅　任城果名物法言　女贄同上　得眼佛圖記

榛又樺ニ作リ櫬ニ作ル、共ニ通雅ニ出、此木庭院ニ多ク栽ユ、東北ノ山野ニハ自生多シ、高サ丈許、冬ハ葉ナクシテ、小穗ヲ節ゴトニ兩兩下垂ス、形蓽撥ノ如ク、長サ一寸許、濶サ二分許、淺褐色ニシテ赤楊(ハリノキノ)蕾ニモ似タリ、春ニ至リ開ク時ハ、形長大ニシテ黄色ナク、花謝シ、三月ニ新葉ヲ出ス、形圓ニシテ五ノ短尖アリ、周邊ニ鋸齒アリ、皺紋多シ、故ニハシバミト呼ブ、大サ三四寸互生ス、山中ノ自生ハ葉中ニ紫斑アリ、實ハ新枝ノ梢ニ生ズ、大サ茅栗(シバグリ)ノ如ニシテ圓尖淡白色、下ハ薄葉ヲ以テ包ム、蕚ハ大ニシテ實ハ小シ、殼ヲ去レバ内ニ白仁アリ、生食スレバ味栗ノ如シ、然レドモ仁ナキ者多シ、故ニ十榛九空ト云、一種ナ。ガ。ハ。シ。バ。ミ。ハ山中ニ生ズ、葉狹長實形長ク榧實ニ類ス、凡ソ榛ハ寒國ヲ上トス、奥州羽州ニ多シ、數品アリ、良ナル者ハ皮薄ク仁多シ、唐山ニハ新羅ノ產ヲ上トス、今韓種ノ榛アリ、

〔饅頭屋本節用集波草木〕榿(ハリノキ)

リテ器トシ、烟草入ニ用フ、圓アリ、方アリ、六角八角ニモ造リ、長モ平モ皆大小アリ、工產ノ一品トス、是ニハ多ク山櫻、彼岸櫻ノ樹ヲ用フレドモ、何レノ櫻ニテモ可ナリト云、

〔本草和名 十七 菓〕榛子 出七巻食經 和名波之波美

〔倭名類聚抄 十七 菓〕榛子 唐韻云、榛 亲之輕音、字亦作樼、食經和名波之波美、榛栗也、

〔箋注倭名類聚抄 九 果蓏〕按、本草和名載榛子、云出七卷食經、和名依輔仁、新撰字鏡同訓、波之波美、又見拾遺集物名歌、新井氏曰、萬葉集榛訓波利、又謂小木爲柴、如椎柴櫟柴是也、然則波之波美、榛柴實之義、○中略 廣韻同、毛詩、樹之榛栗、陸機疏云、榛栗屬、其子小似柹子、表皮黑、味如栗、西山經、上申之山、下多榛楛、注、榛子似栗而小味美、左思招隱詩注、引高誘淮南注云、小栗小棘曰榛、太平御覽引陸機詩義疏云、榛栗屬有兩種、其一種、大小皮葉皆如栗、其子小、形如杼子、味亦如栗、所謂樹之榛栗者也、其一種、枝莖如木蓼、生高丈餘、作胡桃味、遼代上黨皆饒、開寶本草云、榛子樹高丈許、子如小栗、軍行食之當糧、本草圖經云、桂陽有榛、叢生、實大如杏子中仁、皮子形色與栗無異也、但差小耳、李時珍曰、榛樹低小如荊、叢生、冬末開花、如櫟花、成條下垂、長二三寸、二月生葉、如初生櫻桃、葉多皺文而有細齒及尖、其實作苞、三五相粘、一苞一實、實如櫟實、下壯上銳、生青熟褐、其殼厚而堅、其仁白而圓、大如杏仁、亦有皮尖、然多空者、按說文、榛木也、毛詩邶風、山有榛、傳云、榛木也、小雅、營營青蠅、止于榛、傳云、榛所以爲藩也、毛傳於邶風曰木也、與說文合、於小雅曰所以爲藩、雖其木未詳、決非辛栗、邶風正義、引陸機爲栗屬、誤也、說文又云、亲實如小栗、是亲栗字、而周禮籩人禮記曲禮內則、左傳莊二十四年、毛詩鄘風曹風、皆假借作榛、榛行而亲廢、

〔撮壤集 中 木〕榛 ハシバミ

〔饅頭屋本節用集 波 草木〕榛 ハシバミ

〔書言字考節用集 六 生植〕榛 ハシバミ 說文、實如小栗、

仁波、今櫻皮有之と見え、萬葉六丁十八に、櫻皮纏作流舟とよみ、古今集物名に、迦爾婆櫻あり、源氏物語などに、加婆櫻といふもこれなり、これらを合て思に、此木の本名は波々迦にて、迦爾婆は皮名なり、加婆は、加爾婆の約りたるなり、さて皮を専ら用るから迦爾婆櫻と木の名にもなれるなり、かゝれば和名抄に、邇波佐久良とあるは、今本加字の脱たること著し、古今集かにばざくらの註に、朱櫻とかけりと、顯昭が云るよくかなへり、然るを契冲が和名抄を引て、これを誤なりと云るは、返てひがことなり、さて此に此木を取は、皮を燃して彼鹿の肩骨を灼む料なり、

○按ズルニ、朱櫻ヲ神占ニ用キル事ハ、神祇部太占篇龜甲篇ニ載ス、

〔採藥使記中奥州〕照任曰、奥州藪川ト云フ所ヨリ樺木ヲ出ス、土人是レヲシラカバト云フ、又御姫ガ嶽ト云フ所ヨリモ多ク出ス、

光生按ズルニ、今和邦ニカバト云フハ、櫻ノ一種ニテ所々ニアリ、シカレドモ本草ノ樺木ノ説ニ合ズ、甲州又信州飯田ナドニ多ク生ズ、土人カンバノ木ト云フ、此木ノ皮ヲ煎ジ、万ノ腫物ニ用ユルニ甚ダ妙アリトテ、甲州ノ人專ラ云傳フ、德本ノ家方ナル由、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕一樺和名加波又加仁波　本草釋名ニ樺木作樺、玉篇云、樺木皮名、可以爲炬者也、和名鈔木具類ニ載セタリ、加波トハ皮ノ訓ナルベシ、或云茶褐色ト云ハ、因此皮色呼ナラント、德本ノ藥方ニ樺皮散アリ、云華者モ蓋以此皮製ト云、樺爲樹名者非ナリ、先儒ノ説紛々一ナラズ、本州ニ所用ハ雨中ノ炬火トシ、鸕鷀漁爲川漁者ノ燭トスルハ、河内領ノ諸山ニ多シ、櫻類ニシテ喬木也、花モ所觀ナシ、凡ソ櫻ノ皮ハ外ハ横ニ理アリ、内皮ハ縱ナリ、此樹モ同ジ、故カバ櫻、又カッパノ木ト呼ベリ、剝外皮爲炬ベシ、葺屋ニハ皮ヲ薄ク剝ギ葺テ、其上ニ小石ヲ並ベ置クナリ、能ク久キニ耐フ、信州ニテカンバノ木、又白ハリトモ云ハ、榛(ハリノキ)(ハンノキ)ノ一種ニテ、毎年外皮自ラ剝ル木ナリ、皮色ハ外白シ、葺屋ニ良品ナリ、本州ノ川浦武川ノ諸山及ビ信州ニ多シ、赤杉檜ノ皮ニテモ屋ヲ葺ケリ、樺(カバ)ドウラン　櫻ノ樹ヲ伐リ水ニ浸スコト度アリ、隨大小頭(ヅンギリ)切シテ丸ナガラ皮ヲ抜キ、蓋及ビ底ヲ

取ルベシ、皮ヲ剝ギ去レバ其樹愈長ズ、其皮外ノ粗皮ヲ去ル時ハ、幾重ニモ薄クヘゲ、淺褐紅ニシテ白斑アリ、土人採テ色紙短策ニ作リ、或ハ書ノ表紙トナシ、又笠ニ作リ、或ハ物ヲ包裹シ竹簿ニ代ユ、又コノ皮能クモユル者故ニ、雨中ノ炬火ニ作リ、或ハ鵜飼ヲ使テ魚ヲ捕ル時ノ火把トス、故ニ信州ニテウダイマツト云、皮ニ脂多キ故、水中ニ入リテモ火滅セズ、又甲州德本ノ無盡藏ニ樺皮ヲ多ク用ユ、故ニ今世ニ用ユル者多シ、此ヲ燒バ臭氣アリ、故ニクサヤクヲト呼ブ無盡藏ニ樺ヲ隱シテ華ニ作ル、通雅ニモ樺ヲ華ニ作リ、又樓ニ作ルコトヲ云ヘリ、カバノ品類多シ、今茲ニ略ス、

〔草木育種後編 下藥品〕樺 本艸 俗にシラカバといふ、深山に生ず、和蘭ベルケン、ボームといふ、前編巳に其有用の事をいふ、皮は松明となすべし、放翁の雨中の詩に、樺炬如椽點不明といふ、われ中土にても炬となす、雨中にもよく燃る事知るべし、又春月芽を生ずるの比、木に穴を明ケ、竹の管をさし、これに壜を付て置ば、自然と津液を滲溜て、壜中にたまるものを藥用とすべし、內服して小便を利し、血中の汚液を除て、木材葉皮皆水に煎じ服すれば、汚血を驅る事液と効同じ、或は葉を炒(いりこ)末となし、水を加へて灰汁とし、顚頤に摘れは髭を生ず、又栖(きのこ)は血止の藥とすべし、痔血などに外敷(つけ)てよし、山の黑き地にて、外の草木の生せざる處にても生長す、故に山野ともに植てよし、山中にて實生をとり、其年の秋に分け植べし、根へ木の葉馬屎等を入てよし、

〔古事記 上〕召天兒屋命布刀玉命(布刀二字以音、下效此、)而、(中略)取天香山之天波波迦(此三字以音、木名、)而、令占合麻迦那波而、(自麻以下四字以音)

〔古事記傳 八〕波々迦、今本はみな婆々迦と作(カ)れども、言の首を濁る例なければ、必波字なるべし、故今は舊事紀に波々と作るに從つ、(此餘にも波と婆とは、互に寫し誤れる所多し、後世平假字の書どもには、多く波和加と書り、此も口にはさもよむべし、)和名抄に、朱櫻波々加、一云邇波佐久良、又木具部に、樺木皮名可以爲炬者也、和名加波、又云加

恐是卽樺皮、甲斐州所産皮剛堅、但此柔爛此其異而已、

〔大和本草 雜木 十二〕樺（カバ） 本草綱目喬木類ニノセタリ、本邦ニテハ甲州ニ多シ、皮ハ雨中ノタイマツニヨシ、本草ニモ皮堪爲燭トアリ、白樂天、東坡、樺燭ノ詩アリ、國史補云、以樺燭擁馬、謂之火城、樺皮ヲタイマツニスル也、今試ムルニ能モユルモノ也、又書畫ノ紙ヲフルクスルニ是ニテフスブベシ、本草ニモカクノ如ク云リ、治癰瘍諸病、樺ヲカバザクラト訓ズルハ非也、カバザクラハ一重櫻ヲ云、樺ト櫻ト大ニ異也、非同物、

〔和漢三才圖會 喬木 八十三〕樺（音話） 檴 和名加波 又云加仁波 ○中略

按、樺本草未詳何木皮、不言其花葉實也、而刀靶之靶乃鞘歟、鞍弓鐙之鐙乃鐙歟、本朝稱樺者、山中單花櫻皮也、

〔本草一家言 三〕樺 和名加波櫻、又名加牟波乃木、又名南殿櫻、又名宇加美曾木、有赤白二種、信州上田鄕名、赤者呼赤加牟波、白者呼白加牟波、加牟波加波之音轉也、用其樹皮飾弓劍、又供軍中炬火、用過風雨火不滅、但烟甚濃、故姦商薰新書畫以僞造古物、又和方用樹皮治瘡腫惡毒、勝于諸藥、其効不勝述、甲斐老醫德本家方有樺皮散、用赤皮樺、詳見于德本所著梅花無盡藏中、圭鈴

〔重修本草綱目啓蒙 喬木 二十四〕樺木 カバノキ（信州） クサザクラ カンバ ウダイマツ（共同上） シラカバ（奥州） ホンゴウザクラ ヤチラシ（共同上） 一名樺皮木（物理小識） 樺桃（秉元詳註） 鶴樺皮（明一統志）

信州甲州ニ多シ、凡ソ東北國ニ多シテ、西南ノ國ニハ無シ、移シ栽ユルモ枯レ易シ、葉ハ桑葉ニ似テ、圓ナラズシテ尖リ鋸齒アリ互生ス、春新葉出テ後葉間ニ穗ヲ出ス、長サ一寸餘、四月ニ至テ細花ヲ開キ穗ヲ成ス、白色、後實ヲ結ブ、冬ニ至テ熟ス、實ハ小薄片多ク重リ、濶四五分、長サ一寸許、下垂ス、片ゴトニ小子アリ、落テ生ジ易シ、葉ハ霜後ニ落ツ、樹皮白シテ黑斑アリ、好事者全皮ヲ用テ承塵トス、皮ニ横理アリテ櫻皮ニ同ジ、他木皮ノ縦理ナルニ異ナリ、故ニ竪ニ切テ全皮ヲ横ニ剝

肬贅、故呼曰贅柳、木理濃美、可以作牙杖、

杞柳

〔和漢三才圖會 八十三喬木〕杞柳(きりう)〇中略

按杞柳每夏採氣條三四尺者、剝去皮作篋、白色光澤、名柳行李、壓于物不損、旅行必用之器也、多出於藝州、嫩木時剝皮、故大木希也、其皮縛金瘡甚佳、

樺

〔倭名類聚抄 二十木具〕樺　玉篇云、樺(戸花胡化二反、和名加。波。、又云、加。仁。波、今櫻皮有之、)木皮名、可以爲炬者也、

〔箋注倭名類聚抄 十木具〕按證類本草引開寶本草云、樺木皮堪爲燭者、木似山桃、則知樺是木名、其皮堪爲燭者、非呼木皮可爲燭者爲樺、源君於木具擧之、云今櫻皮有之者、誤以樺爲迦邇波佐久良皮也、迦邇波佐久良皮可充絨纏之用、不可以爲燭、樺木皮可爲燭、不可以充絨纏之用、蓋樺古名波々加、古事記所謂天香山之天婆波迦、臨時祭式御卜料波婆加木皮、齋宮寮式波々可五枚、皆是也、一名迦邇波、迦邇波波蓋木皮之名、樺木皮以充鹿卜之用、以其易燃也、故專迦邇波之名、迦邇波佐久良是櫻之屬、其皮以充絨纏之用、故亦得迦邇波之名、輔仁誤以波々加爲迦邇波佐久良之一名、遂以混殽、今世龜卜亦誤用迦邇波佐久良波、說文構、木也、以其皮裹松脂、讀若華、又載樺云、或從蒦、徐鍇曰、此即今人書樺字、今人以其皮卷之、然以爲燭、裹松脂、亦所以爲燭也、讀若華、故或假華爲樗、上林賦、華楓枰櫨、張揖曰、華皮可以爲索、莊子讓王篇、原憲華冠縰履、釋文、華冠、以華木皮爲冠、後俗从木作樺也、郭曰、可以爲杯器素、毛詩無浸穫薪、鄭箋、穫落木名也、正義引某氏曰、可作杯圈、皮韌繞物不解、陸機疏云、今椰榆也、其葉如榆、其皮堅韌剝之長數尺、可爲絙索、又可爲甑帶、其材可爲杯器、

〔伊呂波字類抄 加植物附植物具〕樺(カハ、木名、皮可以爲炬也、今櫻皮也、)

〔饅頭屋本節用集 加草木〕樺櫻(カバサクラ)

〔書言字考節用集 六生植〕樺(カバザクラ)(其皮曰暖皮、堪爲燭、又工匠所用者、)朱櫻(カニハサクラ)(同、万葉、河澤)

〔本草一家言 二〕暖皮。。　產于信州木曾山中、一名山癩(ヤマカツタイ)、一名漢木(カンボク)、治血症殊効、土人採用多得驗信云、

〔大和本草雜木十二〕白楊(ハコヤナギ/イヌギリ)　本草喬木部ニアリ、京都四條邊コレヲ牙杖(ヤウジ)ニケヅリウル、又扇宮ニモコレヲ用ユ、故ニハコ柳ト云、葉ハ梨ノゴトシ、又桐ニ似テ小ナリ、實ハ椋ノ實ホドアリ、冬熟シテ紅ナリ、洛外處々ニアリ、筑紫ニテハ、犬桐ト云、葉桐ニ似タレバナリ、又木理柳ニ似タリ、故ニ葉ハ柳ニ似ズトイヘドモ、中華ニテハ白楊ト云、京都ニテハハコヤナギト云、

〔和漢三才圖會喬木八十三〕白楊　獨搖　俗云丸葉乃夜奈岐(中略)

按白楊爲牙杖、名丸葉楊枝、性靭於柳、然治牙齒痛之功以柳爲勝、京師大佛得長壽院棟梁木、卽出於紀州熊野、楊長六十六間、凡四十三丈餘蓋此白楊乎、

〔重修本草綱目啓蒙喬木二十四〕白楊　ハコヤナギ　ハコヤ新校正　ハコヤツ江州　マルバヤナギ同名　アリ　ヲカヤナギ　イヌギリ筑紫　イヌヤナギ同上　ツラブリ播州　ヨメフリ信州尾州　ユヤナギ播州　イヤナギ藝州　一名天蜈蚣秘方集驗　沙瑟木郷藥本草

山野ニ自生多シ、葉ノ形圓ニシテ末尖リ、邊ニ鋸齒アリテ厚ク、面深綠色、背ニ白毛アリ、春未ダ新葉生ゼズシテ先花ヲ發ス、水楊ノ穗ヨリ長大ナリ、此木色白ク箱宮ノ材トス、故ニハコヤナギト呼ブ、又牙杖(ヤウジ)ニ作ル、

增、一種デロト呼モノアリ、卽蝦夷產ノ白楊ナリ、近年コレヲ傳ヘ栽ユ、此樹甚ダ長ジ易シ扦插シテ三年ヲ經レバ、高サ丈餘ニ及ブ、其葉尤濶大ニシテ厚ク、背ニ毛茸アリ、コノ木數年ヲ歷レバ必ズ大木トナルベシ、

雪柳

〔大和本草花木十二〕雪柳　莖葉如楊柳而細小ナリ、枝多叢生ス、高二三尺許無實、根下ノ苗ヲ可分栽、二月單ノ細白花ヲ多ク開ク、如雪可愛、又有淡紅者、葉ハ冬黃落ス、漢名未知、

賛柳

〔和漢三才圖會喬木八十三〕賛柳(こぶやなぎ)　正字未詳

按賛柳生山谷叢生、高五六尺、葉似白楊葉而花穗與柳無異、其木枝皆有縱脹起、剝皮如堆文、亦似人

浴湯之法有水楊湯、爲密齋痘疹心法注曰、水楊卽忍冬藤也者誤矣、一種、費啓泰救偏瑣言、水楊異說、同名別物、今山中野外、濕洳之處好多生、七八月有花、與桔梗同時、莖葉似桔梗、花紫碧根似白薇、山人稱澤桔梗、卽救荒本艸山桔梗是也、又三才圖會所載浮薔、俗呼澤桔梗、與此不同、瑣言說開列于左、以弘異聞、

淸費啓泰救偏瑣言云、此柳生於水灘、四月間纔有其柳不生旁枝、長者三尺許、粗者如細條、其葉較垂、楊葉倘厚帶有白意、至五月葉下開細之紫花者是也、此名水楊柳、非忍冬藤、亦非等閒柳樹也、須預風乾得用、其性最能活血脈、利筋骨、大人有患拘攣手不能提、足不能步者、用酒煎服、不能酒者水煎、其効有靈氣、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕水楊 カハヤナギ エノコロヤナギ コロコロヤナギ サルヤナギ 勢州 チコヤナギ 同上 フデヤナギ 備前 ミドリヤナギ ユヤナギ 奥州同名アリ トウトウヤナギ 伯州 カハチコ 石州 一名水柳 群芳譜 花一名花萍 名物法言 飛雪 同上 狂客 事物紺珠

水邊ニ多ク生ズ、高サ二三尺、或ハ五六尺、葉ハ桃葉ノ如ニシテ厚ク、面深綠色、背ハ白シ互生ス、冬ニ至テ落ツ、春未ダ葉ノ出ザル先ニ花穗ヲ發ス、形筆頭ノ如ク、長サ一寸許、絮多シテ狗尾草(ヱノコログサ)穗ノ如シ、白色ニシテ光リアリ、故ニヱノコロヤナギノ名アリ、花穗ヲチコダマ 越前 コブシ 同上 チコノコ 若州 ト云、後實熟シテソノ絮風ニ隨ヒ散ジ飛ビ、白茅(ツバナ)絮ノ如シ、コノ絮ヲ採リ硯下ニ襯スレバ冬凍ラズ、之ヲ文房春風膏硯ト名ク、ト、物類相感志ニ見ヘタリ、

〔佐渡志 五物産〕水楊 方言チコヤナギ

水邊ニ多ク生ズ、小木ナリ、マタイヤナギ、ハコヤナギアリ、カハラヤナギハ大木ナリ、

白楊

〔饅頭屋本節用集 波草木〕病木(ハコヤナギ)

〔書言字考節用集 六生植〕白楊(ハコヤナギ)

水楊

借到彼湫、凡繫乎一萩以一草柱、擲散洲中、柳枝亦然、其不知幾千百、人又不知爲其事、到明年萩與柳生洲中、欝々葱々、爾來刈之爲薪也、湫廣可方五百里、故一年受用、殆乎三百貫之資云、寺用有餘、故州中養于薪者、亦刈之、率三分一以供寺、于今如此云々、又曰、人傳開山乃高野大師再來、故雙桂贊、有高山起定歸禪派、熱社施田護法門之句、蓋熱田明神有施田之異、下句謂之也、予曰栽萩柳之計、如石曼卿種桃而用破草柱、頗陶侃拾竹頭之屑之意乎、

〔閑窻自語〕當家植柳事

寶永の火までは、當家(柳原)○中筋の敷地、東面五十間ばかりもありしに、東のかたの築地のほとりに、いと大きなる柳ありて、梨木町におほひ、葉のしげる比は、日をももらさで、おのづからひるもをぐらく、よるは蜘の火のあかりおりするとて、子どもなどおそれけるとぞ、同じ七月二日の大風に、東のかたにたをれぬ、十丈にもあまれる木なりければ、枝はやがて京極通におよぶとなむ、さて當家には、室町のかみ柳原に梅寮どの(すけあきらの卿)里第をたてられしゆかりとて、居所をかふるにも、かならず柳をうゝるよし、曾祖一位殿仰せられきとなん、今の第(なかすじ)にも、やなぎ數株あり、去年(寛政四年)岡崎に新第をつくらしめしにも、柳をうゑおかしめぬ、

〔武江產物志(遊觀)〕柳　印(しるし)の柳(やなぎ)(隅田川)　魅灑柳(うなりやなぎ)(麻布善福寺)　夫婦柳(兩國の南)　見歸り柳(吉原)

〔本草和名(十四木)〕水楊葉　和名加波也奈岐

〔倭名類聚抄(二十木)〕水楊　本草云、水楊(和名加波夜奈木)

〔箋注倭名類聚抄(十木)〕千金翼方、證類本草下品載水楊葉、○(中略)古今注、水楊蒲楊也、枝勁細、任矢用、證類本草今注云、水楊、葉圓闊而赤、枝條短硬、多生水岸傍、樹與楊柳相似、既生水岸、故名水楊也、

〔書言字考節用集(六生植)〕檉(カハヤナギ)(爾雅河柳也、郭璞云、今河旁赤莖小楊也、)　赤楊(同)　河柳(同本草)

〔本草一家言(三)〕水楊　保赤全書云、生水邊、細葉紅梗、枝上有負果、有白鬚散出、俗稱狗子柳者也、痘疹

語成實、彌僭正不堪極感之氣也、

〔東關紀行〕ほむの川原にうち出たれば、よもの望かすかにして、山なく岡なく、秦甸の一千餘里を見わたしたらんこゝちして、草土ともに蒼茫たり、月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ、茂れるさゝ原の中に、あまたふみわけたる道ありて、行末もまよひぬべきに、古武藏の前司道のたよりの輩に仰て、植をかれたる柳も、いまだ陰とたのむまではなけれども、かつ〴〵まづ道のしるべとなれるもあはれなり、もろこしの召公奭は、周の武王の弟也、成王の三公として、燕と云國をつかさどりき、陝のにしのかたを治し時、ひとつの甘棠のもとをしめて、政をおこなふ時、つかさ人よりはじめて、もろ〳〵の民にいたるまで、そのもとをうしなはずあまねく又人の患をことはり、おもき罪をもなだめけり、國民擧りて其德政を忍ぶ故に、召公去にし跡までも、皮木を敬て敢てきらず、うたをなんつくりけり、後三條天皇、東宮にておはしましけるに、學士實政任國に赴く時、州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも、忘るゝことなかれ、をほくの年の風月の遊びといふ御製をたまはせたりけるも、此こゝろにや有けん、いみじくかたじけなし、かの前の司も此召公の跡を追て、人をはぐゝみ物を憐むあまり、道のほとり往還の陰までも、思ひよりて植をかれたる柳なれば、これを見む輩、皆かの召公を忍びけん國の民のごとくにおしみそだてゝ、行すゑのかげとたのまむこと、その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ、

植置しぬしなき跡の柳はら猶その陰を人やたのまん

〔臥雲日件錄〕寶德四年〈○享德元年〉十一月十一日、天英來、〈○中略〉予又問曰、妙興開山有鞋故事、昔年赴關東時、聞諸道塗、故不載于入東錄、曷曰、州中養于薪柴、妙興開山嘗於去寺可三里買大洲、入不知其故、州中飢饉歲、師勅里中兒童曰、持破草鞋拾于路傍者來、則當與錢、諸兒各從命來者必如約、如此者殆乎一歲、破草鞋積如山、師於是命寺之力僕刈萩來、切根可盈握、又命折柳枝來、切之亦如萩長、然后從諸

むかつて、其柳のうち二本をほりて參うち、からすのすくひたりし木をむねと堀てけり、鳥は此事をかねてさとりけるにこそ、此木一條殿にうつされたりけるが、二本ながらかれにけり、それに本所に今一本殘りたるも、同かれにける、おぼつかなき事也、友木かるればかるゝ事にや、ちかく滋野井の柳を一本他所へうつしうへたりけるにも、此定にのこりの木ゆへなくかれたりけるとぞ、

〔眞俗交談記〕神泉苑廻池十町內、令京職栽柳、町別七株云々、必栽柳事、其由如何、爲長云、栽柳事、本文非一、柳者陽樹也、與春方池畔要栽柳云々、文 神泉苑池龍神勸請所也、故有其便者歟、錦繡記唐云、靑龍降種化爲柳云々、然間被栽柳也云々、資實云、金谷廣典云、无水所栽柳、然後歷三年引水源云々、神泉自元飽水、水龍王德也、龍王移他所之時、此池隨而水可无云々、取意 雖爲龍緣木、柳不可勝龍、龍去水柳共枯竭、然者无用歟、栽柳事、自此之外尙有深意哉、凡五龍神時、水龍者方冬、柳者春木也、木龍不隨水歟、龍柳者方木龍、今神泉龍王、水龍也如何、爲長答曰、今雖有其謂、始終論之、可一値者也、五龍時、靑龍掌木、黑龍掌水、神泉苑龍王者水龍也、柳者靑龍種木也、水龍木龍雖各別、木水是一也、其故五龍有相尅相生義、水生木云々、然者木龍水龍全非外配、資實云、以相生義、水龍池邊栽木龍柳事尤可爾老歟、五季配物錄唐本云、木以水爲命、春水王氣移木、冬木氣還水云々、文 又左氏云、山有水見木知云云、水與木其氣可同也、企淺難事、爲聞深意也、就栽柳猶有深義哉、爲長小禮不答、資實對親經又以問、无答、資實云、嵯峨親王御記云、神泉苑栽柳事、叡慮被思食深旨者也、善女龍王勸請事、弘法炎旱御祈之時也、天皇與弘法有御深約曰、治國先以民、育民先以穀、育穀先以雨露、穀者木德也、朕木德、及于國土事、依師加持、此池龍神移留事、併師法水故也、然以柳栽此岸、可當木德指掌者也云々、爾僧正、神泉御修法之時、竊取件柳枝、爲散杖、此事內々伺叡慮云々、記錄被載之、是僧正定被辨存舊事故歟、爰成寶僧正暫守資實面、爲粧淚浮臉、作奇異思、其時予彼資實當時隨保壽院僧正、深仰密敎、无貳心之由

シ、俗ニ絮柳ト云フ、コヽニ柳華一名柳絮ト云ハ非ナリ、花ハ黄色ナリ、紙ハ子ニ著テ生ズ、食物本草ニ、柳華初發時黄蘂是也、若其飛絮乃是華後所結之實矣ト云リ、

〔本草一家言三〕楊　柳　楊和名圓葉梁木、葉似桃葉、枝硬而揚起故名也、柳和名細葉梁木、葉如竹葉、枝弱而垂流故也、一種有軟條者、名垂糸柳、一名蜀柳、一名御柳、和名下垂梁木、又有水柳、葉似楊葉、赤莖、故又名赤莖楊、一名蒲柳、和名河梁木、一名拘子柳、此物春初著花、茸毛銀白色、形頗如小狗子、故名、又有白楊、葉如棠梨而圓厚、背白、隨風動搖、古人所謂扶移是也、一種有紙手乃木、似白楊而葉細尖背白、此白楊之細葉者、又有杞柳、一名柜柳、孟子曰以杞柳作桮棬是也、和名贄柳、和邦以製剔牙枝、爲上好品、又有西河柳、非柳類、但以其態度相似而名、詳見于本條、又有熊梁木、莖青紫色細膩光滑、葉似桑葉及伊津幾葉、葉圓而長、初著花、成穗黄色、好事士挾瓶賞之、名爲豆柳、漢名未詳、玄隨錄

隨云楊柳一物雌雄之異耳、猶大連翹、小連翹、帚子海棠、軟條海棠之類是也、

〔筆のすさび三〕一柳に數種ある事　予菅茶山が塾に柳三種あり、一は京の下河原に摘星樓とて、六如上人の房の庭にありし柳の枝をさせるなり、もと絮綿多かりしが、水土によればにや、今はすくなし、一は蘇州府の種とて、長崎の德見茂四郎より送り來る、一は蜀柳とて、荒木爲五郎より得たり、此柳は西洞院風月入道殿、主上より賜はりしをわかちて平松宗致に給ふ、宗致備中松山人ゆゑ、故郷へもわかち植ゑたるなりといふ、荒木は松山人なり、予と善し、蜀柳は近頃枯れたり

〔古今著聞集十九草木〕二品時賢卿の綾小路壬生の家に、鞠のかゝりに、柳三本有けり、其内戌亥のすみの木に、鳥すをくひ侍けるを、いかゞおもひけん、其からす其すをはこびて、むかひの桃の木につくりてけり、人々あやしみあへりけるほどに、一兩日を經て、關白殿より柳をめされたりけり、二品其時他所にいられたりける程成ければ、御つかひにむかつて、御敎書を付たりければ、すみやかにむかひて、いづれにてもはからひてほりて參るべきよしいひければ、御つかひかのていに

〔萬葉集 十四 東歌〕相聞
古非思家婆、伎麻世和我勢古、可伎都楊疑、宇禮都美可良思、和禮多知麻多牟、

〔催馬樂〕律　大路 二段、拍子廿八、各十四、第二反、猶有空拍子、藤家五拍子
おほ於ちに、そひてのぼれる、あをやぎが花や、あをやぎがはなや、
二段 あをやぎが、しなひを見れば、今さかりなりや、今さかりなりや、

〔大和本草 十一 園木〕柳　數品アリ、楊柳ハ通稱ナリ、取ワキテハ、シタリヤナギヲ云、凡柳ハ水濕ヲ好ム、他木ニ異リ、插テ生活シ易ク、長ジヤスシ、柳ヲ多ク植レバ薪乏シカラズ、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕柳　小楊　楊柳　和名之太里柳　今唯云夜奈木　釋氏呼曰尼倶律陀木、
○中略
按、柳極易生易長、陶朱公所謂種柳千株、可足柴炭者是也、凡煉膏藥用柳木箆、或作爼板及蒸甑、亦皆以無毒也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕柳　ハルスヽキ 古歌　ネミヅグサ　カゼナグサ　カゼミグサ　カハゾヒグサ　カハタカグサ　カハタグサ 共同上　シダリヤナギ 和名抄　シダレヤナギ　一名　綠卿 事物紺珠　漏春和尚 同上　關車孫 事物異名棗古ノ名　梔烟 名物法言　絲 群芳譜　義孫 清異錄　天棘 通志略
楊柳二字共ニヤナギト訓ズ、柳ハ枝ノ下垂スルヲ云、楊ハ下垂セザルヲ云、白楊、水楊、杉楊、松楊皆楊ノ類ナリ、然レドモ後世ハ楊柳ト熟シテ柳ノコトトシ、詩文ニ用ユルコト、隋煬帝ヨリ始ルコト、開河記ニ見ヘタリ、柳ノ水邊ニ多ク生ズル常ノシダレヤナギナリ、一名コシダレ、メヤナギ、ホソバヤナギ、是宮柳 秘傳花鏡ナリ、一種オホシダレト呼ブアリ、葉濶サ一寸餘、長サ七八寸、大木ニナレバ枝垂ルヽコト二三丈ニ至ル、是垂柳 秘傳花鏡ナリ、凡ソ柳ハ春未ダ葉ノ出ザル先ニ花アリ、六分許、穗ヲナシテ黄色ナリ、彼實ヲ結テ少シ絮アリ、是柳絮ナリ、然レドモ和産ハ絮甚少シ、漢種ハ絮多

〔本草和名木十四〕柳華一名柳絮、一名水楊、出陶景注、蘇敬云非、一名小楊、一名榫立、一名樂涉、已上三名出兼名苑、一名高飛、一名獨搖、微風大搖、出古今注、和名之多利也奈岐、

〔倭名類聚抄木二十〕柳　兼名苑云、柳一名小楊、柳音力久反、和名之太里夜奈木、崔豹古今注云、一名獨搖、微風大搖、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄木十〕按說文云、柳小楊也、兼名苑蓋本於此、那波本桺作柳、按說文云、桺从木丣聲、丣、古文酉、五經文字云、桺柳、上說文、下經典相承隸省、又按柳字、其傍與寅卯之卯隸、作卯者無別、丣或作夘、故柳亦作柳、○中略原書○古今注草木條云、杉楊、圓葉弱蔕、微風大搖、一名高飛、一名獨搖、與此所引字句小異、按杉楊、爾雅所謂唐棣移是也、郭注云、似白楊、江東呼夫移、證類本草引陳藏器云、扶移木生江南山谷、樹大十數圍、無風葉動、華反而後合、詩云、棠棣之華、偏其反、而鄭注、棠棣移也、亦名移楊、李時珍曰、移乃白楊同類、故得楊名、是可以充、今俗呼之傳乃岐、或呼爾禮左久良者、則明楊移楊不同、源君混之者誤、按說文、移棠棣也、文選甘泉賦注引爾雅、作棠棣移也、藝文類聚引詩何彼穠矣棠棣之華、皆與說文合、然棠棣棣、字相似、易混殽、故經典借唐爲棠、以分別之、

〔倭訓栞前編三十四〕やなぎ　楊柳をいふ、梁木なるべし、水邊に多き木也、又箭の木の義、古へ此木もて箭とせし事、西土の書にも見えたり、柳のかづら物に見えたり、和名抄に楊をやなぎ、柳をしたりやなぎとも見ゆ、群芳譜に垂柳の名あり、水楊をかはやなぎとよめり、丸葉やなぎとも、えのころやなぎともいふ、新撰字鏡に櫝をゆやなぎとよめり、はこやなぎ也、美葉やなぎとよぶは金絲桃也、金絲梅とよぶもの、類也、致富奇書に見えたり、こぶやなぎは栀柳也、又まりやなぎと稱するあり、花は細絲を亂せしごとく、實鞠の形をなせり、ともに葉の裏面につけり、

〔萬葉集十春雜歌〕詠柳
百礒城(モヽシキノ)、大宮人之(オホミヤビトノ)、蘰有(カヅラケル)、垂柳者(シダリヤナギハ)、雖見(ミレド)不飽(アカヌ)鴨(カモ)、

至リ、翌春植地ニ移シ植エ、四五年ヲ經テ笛竹ノ太サニ及タル時、引キ切リテ砧トナシ接木スベシ、

〔勸修寺光豐公文案一〕見事之楊梅一折、遠來之由候て御進上候、則令披露候處ニ、今之時分珍敷思召候旨被仰出候、隨而私へも一折送給候、不打置令賞翫候、猶三平へ申渡候、恐々謹言、

慶長十四年六月十一日

板倉伊賀守殿

〔雍州府志六土産〕楊梅實ヤマモモ　處々出、醍醐山中出者爲佳、一種色白者、形狀風味爲優、中華人是謂水精楊梅、近世浸楊梅實於酒中而飮之、號楊梅酒、

〔增訂豆州志稿七土產〕楊梅ヤマモモ　赤澤八幡野邊ヨリ出ルハ、粒大ニ核小ニ味甘美ナリ、昔時貢物ニ充ツ、此樹皮ハ藥用トシ、又染料トス、

〔本草和名十四木〕白楊樹皮一名靑楊、一名高飛、一名蒲柳、一名盤頭、已上四名出兼名苑和名也奈岐、一名波古岐、

〔倭名類聚抄二十木〕楊　唐韻云、楊音陽、和名夜奈木、赤莖柳也、兼名苑云、靑楊一名蒲柳、

〔箋注倭名類聚抄十木〕本草和名云、白楊樹皮、和名也奈岐、一名波古岐、廣韵同、子虛賦、檗離朱楊、史記索隱引郭注、赤莖柳生水邊也、爾雅云、檉河柳、是也、按、朱楊卽赤檉、則孫氏以赤莖柳釋單楊子者誤、本草和名云、白楊樹皮、一名靑楊、一名蒲柳、巳上出兼名苑、此所引卽是、按爾雅云、揚蒲柳、兼名苑蓋本於此、本草和名作蒱柳者、恐傳寫之誤、非輔仁之舊、今本說文、楊木也、藝文類聚、初學記、御覽俱引說文、作楊蒲柳也、今本蓋缺誤、毛詩不流束蒲、鄭箋、蒲蒲柳也、陸機疏云、蒲柳有兩種、皮正靑者曰小楊、其一種皮紅者曰大楊、其葉皆長廣似柳葉、皆可以爲箭幹、唐本草所云、水楊、葉圓闊而赤、枝條短硬者也、郝懿行曰、唐本所說是今所謂楊也、人多插壓河邊、抽作長條、輕脆易斷、至若陸機所說、卽今柳條插壓其枝、不令成樹、其葉長大、其條柔軟、可作籔箕者也、

味優レリ、漢名水精楊梅五雜組釋名ノ註ニ、白楊梅爲聖僧ト云フ是ナリ、汝南圃史ニ聖僧梅ニ作ル、木皮ヲ藥トス、楊梅皮ト云、俗ニモヽカワト呼ブ、染家ニハ褐色ヲ染ムルニ用ユ、然レドモ布帛ヨハクナルト云、京師工ハ北山及江州ヨリ多ク出ス、

〔古今要覽稿草木〕やまもゝ　山櫻桃　楊梅

やまもゝ、漢名楊梅は本草和名にも、山櫻桃白桃子味苦不中食、黑櫻子味甜美中食、和名類聚抄には、楊梅やまもゝ、狀如苺子とみへ、七卷食經に、山櫻桃有二種、黑櫻子和名同上とみゆれば、山櫻桃黑櫻子ともにやまもゝの一名なり、楊梅は古くより、何國にてもやまもゝと呼て別に方言もなし、皇國固有の種にて處々に生ずれども、多く暖地に生じて、北地には生せずといへり、此花は春開きて松花に似たり、花散て後別に實を結ぶ、夏熟して紫黑色なれば、黑櫻子の名は宜なり、又山櫻桃のやまもゝは、何の木をいひしにや、大和本草には庭さくらを充たれども、にはさくらは郁李の一種、千葉の花をいへり、郁李はにはむめと呼、實を結べども、庭さくらは實を結ばず、

〔草木六部耕種法十九實〕楊梅ハ種類頗ル多ク、實ニモ紅。紫。白。ノ三色有リ、大ナル者ハ味美ク、小者ハ味宜カラズ、其三色中ニ於テ、白者ハ殊更ニ甘美ナリ、其實野梅ノ大ナル者アリ、是ヲ最上品トス、又花早ク發ク者ハ實ヲ結ブコト無シ、是ヲ花楊梅ト名ク、又葉細ニ木縮ル如ク、實小ニシテ味酸者アリ、此ヲ松楊梅ト名ク、此兩種ハ下品ナリ、栽ルコト勿レ、元來楊梅ハ山果ニテ、山中ナルハ其實豐熟シ、家園ナルハ豐熟スルコト稀ナル者ナリ、　楊梅ハ山中ニ栽ルニハ良種ヲ栽レバ、其儘ニ成長セシムルモ宜シ、家園及畑地ニ栽ルトキハ接木スベシ、種子ヲ植法ハ、五月能ク熟タル良種ヲ撰ビ集テ、糞壺中ニ漬ケ置キ、數日ノ後其ノ核ヲ肥土ニ混テ古筵ニ包ミ、濕ハズ燥ザルヤウニ貯ヘ置テ、翌年二月壙土ヲ細ニ耕シ、間遠ニ蒔テ糞苴ヲ和タル土ヲ七八分モ覆ヒ、少シ押シ付ク置キ、時々泔水ヲ澆テ此ヲ潤シ、芽出苗ノ長ズルニ從ヒ草ヲ去テ、此ヲ成長セシメ、一尺以上ニ

間乃時有、李時珍曰、山嬰桃樹如朱櫻、但葉長尖不團、子小而尖、生青熟黄赤、亦不光澤、而味惡不堪食、岩崎氏常正曰、是可以充加波佐久良、今佐久良乃是一種耳、則楊梅山櫻桃非一物、皇國從來以楊梅爲也末毛々、日本後紀楊梅陵是也、唐本草不載楊梅、故輔仁引食經山櫻桃爲也末毛々、其説不同也、源君合楊梅山櫻桃爲一誤、

〔撮壤集(菓子下)〕楊梅(ヤマモヽ)

〔饅頭屋本節用集(草木也)〕楊梅(ヤマモヽ)

〔書言字考節用集(六生植)〕楊梅(ヤマモヽ)(時珍云、楊州人呼白楊梅爲聖僧、)　楊梅皮(ヤウバイヒ)

〔塵袋(二)〕楊梅(ヤウバイ)トカキテハ、カラムメトヨムベシ、楊梅ト云心如何、凡不慮ノヨミナリ、昔ヨリ云ヒナラハセルバカリナリ、但七卷食經中楊梅山櫻桃云ヘリ、コレニツキテハジメヲハリノ字ヲトリアハセテヤマモヽト云フナルベシ、

〔和漢三才圖會(八十七山果)〕楊梅(やまもゝ)　朹子(和名夜末毛々)　白楊梅(名聖僧)　又云水精楊梅○中略

按五雜俎云、白色者名爲水精楊梅、又謂之聖僧、則爲珍也、畿内近國白者希也、海西九州有之、凡楊梅人家座園栽之結實者鮮矣、山中果也、山桃之和名宜矣、

〔重修本草綱目啓蒙(二十一山果)〕楊梅　ヤマモヽ　一名楊家果(事物異名)　楊氏子　龍睛　火實(共同上)　楊果(尺牘雙魚)　鶴頂紅(森果爭奇)　鶴頭紅　楊家之果(同上共)　火齊(行厨集)　金丸(事物紺珠)　日精　曾公(同上共)

庭院ニ多ク栽ユ、自生ハ暖國ニ多ク、寒地ニハ少シ、木ハ大ニシテ聳ヘ高ク、或ハ四旁ニ婆娑ス、葉ハ細長ク、瑞香葉ニ似テ粗キ鋸齒アリ、深緑色冬凋マズ、春葉間ニ黄白色ノ花ヲ著ク、長サ六七分、松ノ花ニ似タリ、別ニ實ヲ生ズ、形苺子(イチゴ)ノ如シ、大サ三四分ニシテ圓ナリ、初メ緑色、六月ニ熟シテ紫赤色生食ス味甘シ、又鹽藏シテ酒毛(サカナ)トス梅醬(ムメビシホ)ニ漬セバ、色赤シテ美ハシ、炒豆ニ反スト云フ、又一種熟シテ白色ナル者アリ、シロモヽト云、泉州ノ日根及ビ河州ノ甘南備村ニアリ、形大ニシテ

増一名化木香香譜　按ニ必栗香ハノグルミ、一名ノブノキ、又ノンノキトモ呼モノナリ、暖國ノ山中ニ自生アリ、葉胡桃葉ニ似テ微シ狹ク、漆ノ葉ニ比スレバ少シ潤クシテ、邊ニ粗キ鋸齒アリ、香椿(タマツバキ)ノ葉ニモ似タリ、春月新葉出テ、後栗ノ如キ花ヲ生ジテ實ヲ結ブ、形松毬ニ似テ小サク軟ナリ、秋ニ至テ落葉ノ後、實ハ落ズシテ枝梢ニ在リ、木心茶色ヲ帶テ質堅シ、此木ヲ燒ケバ沈香ノ如キ香アリ、ソノ煙ハ蚊ヲ熏スベシ、故ニ西國ニテハ夏月コレヲ售ル、諸家集解ノ短文ナルヲ以的當トセズ、然ルニ余〇小野職孝　文政九年四月、淡路ニ採藥セシニ、土人此葉ヲ擣テ河中ニ投ジ、魚ヲ取ルヲ見ル、即集解ノ葉如老椿擣置上流、魚悉暴腮而死ノ文ニ能ク合ヘリ、即救荒本草ノ兜櫨樹ナリ、

〔本草和名十七菓〕山櫻桃白桃子味苦不中食　黑櫻子味甘美、中食、出七卷食經、和名也末毛々、

〔倭名類聚抄十七菓〕楊梅　爾雅注云、楊梅和名夜末毛々狀如苺子、赤色、味甘酸可食之、七卷食經云、山櫻桃有二種、黑櫻子和名上同味甘美可食矣、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏〕爾雅不載楊梅、恐源君誤引他書也、下總本酸甜作甜酸、廣本同、上林賦注、張揖曰、楊梅其實似穀子而有核、其味酸、出江南也、開寶本草云、其樹若荔枝樹、而葉細陰青、其形似水楊子、而生青熟紅、肉在核上、無皮殼、李時珍曰、樹葉如龍眼及紫瑞香、冬月不凋、二月開花、結實形如楮實子、五月熟、有紅白紫三種、類大而核細、充夜末毛々為允、〇中略醫心方、山櫻桃條引七卷經云、此有二種、一者白櫻子、春早所菜、花白味苦、食令頭痛也、一者黑櫻子、花紅白、味甜美也、伯濟人為良藥、本草和名云、山櫻桃、白櫻子、味苦、不中食、黑櫻子、味甜美中食、出七卷食經、此所引即是、今本本草和名、白櫻子誤作白桃子、今依伊呂波字類抄改、引與醫心方引合、伊勢廣本可食作中食、與本草和名合、似是、按、本草綱目山果類、並載楊梅山嬰桃、云楊梅出開寶本草、山嬰桃唐本草有名未用中嬰桃是、證類本草有名未用部云、嬰桃實大如麥、多毛、陶隱居云、此非今果實櫻桃、形乃相似、而實乖異、山

野胡桃

開ク時刃ヲ入テ破リ、仁ヲ採リ食用シ、又小鳥ニ飼フ、一種ヒメクルミ、一名メクルミ、加州核薄シテ皺少ク、中仁採リ易シ、集解出陳倉者、薄皮多肌ト云者ニシテ、陳蒼胡桃ト名クベシ、山胡桃ノ中ニテ、仁全ク採レ、馬鞍ノ形ノ如クナル故上品トス、一種カラスグルミハ、越後ノ産ナリ、核自ラ開キテ、鳥ノ口ヲ開クガ如シ、故ニ名ク、一種奥州會津大鹽村ニ權六グルミト云アリ、核小ニシテ壓口榛子トナスベシ、是穴澤權六ノ園中ノ産ナル故ニ名クト云、甲州ニモコノ種アリ、一種羽州野代ニ、形圓大ニシテ殼薄ク、手ニテ碎キ仁ヲ出スベキモノアリ、テウチグルミト云フ、

〔採藥使記羽州中〕重康曰、羽州秋田ノ野代ト云フ所ニ、胡桃ノ樹アリ、其實ノ形チ圓ク大クシテ、外ノ殼薄ク、手ヲ以テ碎ク時ハ肉出ル所ノ者、コレヲ手打胡桃ト云フ、

光生按ズルニ、中華ニモ陳倉ト云フ所ニモ、又陰平ト云フ所ニモ此種アリ、

〔甲斐國志百二十三物產及製造〕一胡桃　諸村ニアリ、河内ヨリ多ク出ス、栗原筋藤木村ニ、胡桃林壹町壹段餘貢税アリ、延喜式別貢雜物ニ、胡桃子壹石五斗胡桃油ト記セリ、外皮堅シ、敲テ中子ヲ采ベシ、剜胡桃ハ、本州產物ノ一品ナリ、筐ニ盛テ售ル、又姫胡桃ト云アリ、一種友打ト名ケタルハ、外皮自開口ナリ、唐胡桃ト云ハ、大掌ニ充ツ、外皮軟ニテ以爪撤キ去ルベシ、頗ル奇品トス、元來唐山ノ種ハ、是ナルベシト云、

〔草木六部耕種法十九實〕胡桃ハ三種アリ、其一ヲ鬼胡桃トス、實大ニシテ核殼悉ク痞瘟アリ、其二ヲ姫胡桃トス、鬼胡桃ニ比レバ、小ニシテ痞瘟ナシ、其三ヲ軟皮胡桃ト云フ、此ハ鬼胡桃ノ如ク、痞瘟アレドモ、其殼薄クシテ手ニテモ打碎ベキヲ以ナリ、　此ヲ植ル法ハ、全ク榧ニ同ジ、其實ヲ取リ收ムルモ、亦榧ニ異ナルコト無シ、然レドモ我祖父不昧軒翁ノ工夫ニテ、銀杏、榧、胡桃、罌子桐等ノ殼肉ヲ川ニ流棄コト無ク、此ヲ貯ヘ糞苴ト爲シテ用フ、其効能甚ダ妙功有リ、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕必栗香　詳ナラズ

山胡桃　南方有之、底平如檳榔、皮厚而大堅、多肉少穰、其殼甚厚、須椎之方破、

胡桃仁甘熱　能入腎肺、最虛寒者宜、痰火積熱者、不宜多食、利三焦、益氣養血、潤肌黑鬚髮、多食去五痔、多食動風、脫人眉、同酒食、多則咯血、與破故紙同、爲補下焦腎命門之藥、故古有云、黃蘗無知母、破故紙無胡桃、猶水母之無蝦也、胡桃能制銅、

胡桃青皮苦澁　烏髭髮、與科蚪等分、糖泥塗之、一染即黑、治白癜風、與硫黃同擣之、染帛黑色、枯皮亦佳、水煎染之、

按、胡桃有數種、唐胡自中華多來、近頃本朝亦往往種之、其葉似槲之葉、而末不尖、無刻齒、長五六寸、但兩兩不對生、此與本草之說少異、其實核圓大而色淡皮薄易破、仁脂多味最美也、養山雀者破以餌之喜食之、

鬼胡桃　核形似桃核、而圓甚堅硬、炒過入水破之、其仁脂少味不美、

姬胡桃　核微扁仁脂多味美、本草所謂南方山胡桃、而倭胡桃是也、其油磨木器、甚光澤、用其皮染帛、黑色久久不變、凡胡桃與銅錢共嚼合、則錢成粉、制銅之證也、

一種有澤胡桃　岸澤多有之、雖結實不堪食、其材路似欅而理粗、匠人以僞爲欅、

〔重修本草綱目啓蒙二十一山果〕胡桃　トウクルミ　チヤウセングルミ　一名核果事物異名　陳倉巨寶

陰平珍果　胡核事物紺珠　寶者同上　唐楸子訓蒙字會　仁一名蝦蟆琅邪代醉編　山胡桃一名山核桃

萬歲子汝南圃史　楸訓蒙字會北戸錄

異ノ胡桃ハ、韓種ニシテ世ニ少シ、葉オニグルミヨリ長大ニシテ、核モ亦大ナリ、一寸餘ニシテ皺多シ、故ニ仁モ大ニシテ岐多シ、本邦ニ多ク栽ル者ハオニグルミナリ、略シテクルミト云、一名オククルミ加州ヲツコロミ東國大木ナリ、葉ハ漆葉ニ似テ大キク、邊ニ細鋸齒アリ、春新葉ヲ生ジ、夏花アリ、栗花ノ形ニ似テ長大ナリ、穗ノ長サ六七寸、黃白色下垂ス、花ハ至テ細ク粟ノ如シ、後實ヲ生ズ、形桃實ノ如ニシテ青シ、熟スレバ黑色、內ニ核アリ、甚堅硬ニシテ厚シ、火ヲ以テ微シ燒バ、皮微シ

胡桃

アリ食フベカラズ、此種ハ即チ堯州ノ黄芫花ナリト云フ、

〔倭名類聚抄 十六菓蓏〕胡桃　七卷食經云、胡桃、味甘温食之有油、甚美、和名久流美　博物志云、張騫使西域還時得之、故曰胡桃也、

〔箋注倭名類聚抄 四菓部〕醫心方引、無有油甚美四字、有去積氣三字、本草圖經云、胡桃大株厚葉多陰、實亦有房、秋冬熟時採之、本草衍義云、外有青皮包之、李時珍曰、胡桃樹高丈許、春初生葉、長四五寸、微似大青葉、兩兩相對、頗作惡氣、三月開花、如栗花、穗青黄色、結實至秋、如青桃狀、熟時漚爛皮肉、取核爲果、按胡桃見宮内省式、三代實錄仁和三年紀、及主計寮式作呉桃、○中略　久留美依輸仁、古語拾遺呉桃、新撰字鏡栲、占斯、竝同訓、久留美、又見古今集物歌紀貫之集歌物名及枕册子、按久留美、圓實之義、

〔饅頭屋本節用集 久草木〕胡桃(クルミ)

〔書言字考節用集 六生植〕胡桃(クルミ)　羌桃、核桃並同、本草、

〔鹽尻 三十七〕呉桃　くるみと訓せり、くるはくれの音便か、胡桃の胡は、黑色の字訓あれば云ふ、くるはくろの轉語にや、識者の發明を待のみ、

〔新撰六帖 六〕くるみ　家良
夏山のすそ野に茂るくるみはらくる身いとふな行て逢みん
　為家
時雨にもぬる、くるみのかはかずてをのが心となに、そむらん

〔和漢三才圖會 八十七山果〕胡桃　羌桃　核桃　播羅師 梵書　呉桃 延喜式　久留美　言呉菓也、
本綱、胡桃本出羌胡(エビスクニ)、漢時張騫使西域始得種還植之、北土多有之、南方亦有、但不佳、其樹高丈許、春初生葉、長四五寸、微似大青葉、兩兩相對、頗作惡氣、三月開花、如栗花、穗蒼黄色、結實至秋、如青桃狀、熟時漚爛皮肉、取核爲果、人多以櫸柳接之、

〔重修本草綱目啓蒙二十二味〕胡椒　通名　エノミゴシヤウ東國　一名胡辛事物異名　木叔輟耕録　味

履食物本草　棚椒品字箋俗字

和。。。産ナシ、紅毛ヨリ舶來ス、唐山ニモ急蘭丹大泥鍚蘭山滿刺加瓜哇眞臘暹羅三佛齊ヨリ來ルト、廣東新語ニ云リ、其實圓ニシテ梧桐子ヨリ小ク、色黑シテ皺アリ、蠻國ニテ生ズル者ハ色靑ク、蒸熟晒乾即成二黑色一ト、朱氏雜記ニ云リ、本邦ヘ來ル者ハ皆蒸タル者故、下種シテ生ゼズ、皮中ニ堅核アリ、内ニ白仁アリ、味辛シテ香氣アリ、是蔓草ノ實ニシテ木類ニ非ザルコト、時珍ノ說ニ詳ナリ、紅毛ノ圖ヲ見ルニ、土蔞藤葉ニ能似タリ、今花戸ニテコ。シ。ヤ。ウ。ノ。木。ト云アリ、小木ニシテ、葉ハ瑞香ノ葉ニ異ナラズ、春枝梢ニ四瓣ノ白花ヲ開ク、形亦瑞香花ニ同ジ、後圓實ヲ結ブ、初靑ク熟シテ赤シ、味辛ケレドモ胡椒ノ味ト同カラズシテ毒アリ、曝乾スレバ皮ニ皺アリテ胡椒ニ似タリ、故ニ誤テ胡椒ノ木ト云、是白。瑞。香。ナリ、又一種甲州ニテヲ。ニ。シ。バ。リ。ト呼ブ者アリ、是モ花戸ニ誤テ胡椒ノ木ト呼ブ、葉ハ瑞香ニ似テ薄ク色淡シ、春四瓣ノ黃花ヲ開キ、後圓實ヲ結ブ、夏月熟シテ色赤シ、故ニ越後ニテナツボウズト呼ブ、胡椒ノ類ニ非ズ、今花戸ニフ。ウ。ト。ウ。カ。ヅ。ラ。ヲ誤テ胡椒ト云、コレハ土蔞藤ニシテ蒟醬ノ一種下品ナリ、コノ實ハ椒目ノ大ニシテ皮ノ色赤ク、内ニ堅キ核アリ、其仁辛味ナシ、香氣ハ蓽撥似ニ似タリ、決シテ胡椒ニ非ズ、舶來ニ色白キ胡椒アリ、皮ヲ去タル者ノ如ク見ユレドモ、別ニ一種ナリ、通雅ニ玉椒ト云ヒ、朱氏雜記ニ白椒ト云フ、蠻語ウイッテペーブル、ウイッテハ白色ナリ、常ノ胡椒ヲスワルトペーブルト云、スワルトハ黑色ナリ、寒中ニ胡椒水ニテ墨ヲスレバ凍ラズト、本經逢原ニ見ヘタリ、曰嚴冬泡水磨レ墨則硯不レ氷、勝三於皂水火酒二、雋筆易レ禿也、

〔採藥使記中武州〕照任曰、武州所々ニ胡。椒。ノ。木。ト云フ者アリ、其葉ハ柳ノ如クニテ靑白色、コレヲ斷レバ白汁出ル、其實胡椒ノ如ク、色赤ク味辛シ、コレヲ食スレバ舌上ヲ麻スルコト甚シク毒

和產ナシ、熱國ノ產ナリ、實ハ四邊ノ海濱ニ漂流シ來ル、故ニ四國但州佐州奥州若州等ノ地ニ間アリ、木ハ形椶櫚ノ如ニシテ大ナリ、枝ナク直聳スルコト五六丈、葉ハ其梢ニ簇生シ、花ヲ開キ實ヲ結ブ、花ハ千葉蓮花ノ如ク白色ト、廣東新語ニソノ形狀ヲ詳ニス、曰ク、葉間生實如瓠、纍纍房房連纍、一房二十七八實、或三十實、大者如斗、有皮厚包之、曰椰衣、皮中有核甚堅、與膚肉皆緊著、皮厚可半寸、白如雪、味脆而甘、膚中空虛、又有清漿升許、味美於蜜、微有酒氣、曰椰酒、蘇軾詩、美酒生林不待儀、言椰子中有自然之酒、不待儀狄而作也ト、又曰ク、椰心色白而甘、在酒中大小不一、宜以檳榔兼嚼之ト、今四邊ニ漂著スル者、形桃實ノ如ニシテ頭尖リ、長サ八九寸、徑リ五六寸、或ハ二四寸、又三稜ナルモアリ、コレ三十實モ簇リ生ズル者故、形定マラザルナリ、外皮ハ黑褐色ニシテ薄シ、此內ニ二寸許厚ク包メル皮アリ、大腹皮ノ如ニシテ長シ、是廣東新語ノ椰衣ニシテ椰子皮ナリ、此內ニ核アリ、大サ三寸許、甚堅シテ厚サ二三分、形圓ク一頭尖リ、三孔アリテ人面ノ如シ、故ニ釋名ニ越王頭ト云、此核ヲ鋸開スレバ內ニ肉アリ、厚サ四五分ニシテ白色、是椰子瓤ナリ、其中ハ空虛ニシテ清水アリ、コレヲ椰酒ト云、コレ椰子漿ナリ、其中ニ桃實ノ形チノ如キ白肉アリ、是椰心ナリ、コノ核ヲ磨ク時ハ、黑質白紋ニシテ椶竹(シュロチク)ノ如ク美シ、唐山ニテハ酒盃ニ作ル、宗奭ノ說ニ、如酒中有毒則酒沸起或裂破、今人漆其裏、卽失用椰子之意也ト云、時珍ノ說ニ橫破之可作壺爵、縱破之可作瓢杓也ト云、本邦ニテモ縱ニ破リテ掬水及盃トス、然レドモ泥金或ハ朱漆ニテ內ヲ塗タルモノ多シ、皆本意ヲ失スルナリ、椰子油蠻流外科ニ用ユ、ヲーリヨカラップスト云、此ハ核中ノ白肉ヲ煎ジトル油ナリ、一種ウミヤシホ、亦漂流ノ者ナリ、形小ク長サ二寸許、徑一寸餘、外皮ハ椰子ト同ジ、內ニ堅キ仁アリテ空虛ナシ、仁ヲケヅリテ藥トス、是亦椰子ノ一種ナリ、

〔饅頭屋本節用集 古草木〕胡㭉(コセウ)

〔書言字考節用集 六生植〕胡椒(マルハジカミ)　胡椒(コセウ) 蔓生、附樹及作棚引之、葉如扁豆山藥、詳本草、酉陽雜俎、

椰子

ふに、びらうの葉は、六七尺ばかりなるもありて、いと長く、上へ立のびたる物なれば、檳榔は、長穗の枕詞にもあるべし、

〔日本書紀 二十七 天智〕九月、皇太子(天智)○中略御二長津宮一、○中略遣二大山下狹井連檳榔(アヂマサ)、小山下秦造田來津一、率二軍五千餘一、衞二送於本鄕一、

〔延喜式 二十三 民部〕年料別貢雜物○中略

伊豫國(筆一百管、檳榔二百枚、牛皮三張、紙麻一百片、○中略)

交易雜物○中略

太宰府(中略)檳榔馬蓑六十領、同蠟蓑一百廿領、

〔節抄 下〕一車○中略

廂車○中略

檳榔廂

保延二三四、大殿(○藤原忠實)春日詣、直衣冠、檳榔、(有二牛蒡庇一○中略)

金作車

永治元十廿六、御禊女御代、金作、檳榔毛、(左大將殿被レ獻)例檳榔用二金物一也、青簾下簾、(紫)連著鞦、自餘如レ常、

毛車

執柄家々禮之人用二檳榔毛一、(檳榔、前關白(近衞)領、鎮西志摩戸庄土產云々、仍所レ望用レ之云々、)當家用レ菅、但檳榔毛尋得之時用レ之、又無難云々、予兩度尋取、富小路中納言盛兼卿用レ之、以二一囊一爲二一兩一、但不足云々、

〔書言字考節用集 六 生植〕椰子(ヤシ)(本草、木似二檳榔一葉如二栟櫚一勢如二鳳尾一、)

〔重修本草綱目啓蒙 二十二 果實〕椰子　通名　ヤシホ　トウヨシノミ(津輕)　一名　酒樹(潛確類書)　矮胡(名物法言)　楿枒(事物異名)　哥具(東西洋考 呂宋ノ名)

稱尖檳榔者、又本艸呼雞心檳榔、形長尖不偏、味甘而不澀、眞檳榔也、曾聞染家染黒色用尖者、色濃用扁者、色薄不揚光、然則尖與圓、其性異、於是可知矣、今醫棄尖檳榔、反用扁者、無眼之所致也、宜自擇、江南人好食檳榔避瘴、能醉人、與蒟醤煙艸同稱之、食蒟醤檳榔法、張景岳全書中本艸正收之、又府志有云、用檳榔施製小合、或釜或壓爲玩器者用大腹子而非檳榔子、

〔本草一家言二〕蒲葵。。　薩州鹿兒島產之、鄕名飛呂宇、俗用梹榔字非也、古人用製扇及笠、名之蒲葵扇蒲蔞笠、又曰蒲扇、吾邦上古製車有梹榔毛車、用蒲葵爲屋蓋、或以爲梹榔樹皮者非也、千家詩李嘉祐竹樓詩、南風不用蒲葵扇、紗帽閑眼對水鷗是也、楊誠齋南海集、亦有葵葉詩、宜併案、甲賀敬元錄

〔地錦抄五〕びろう　ゑゆろのるい也、葉長八九尺有、葉ヲ二まい合て笠に用、此木薩州にありて、江戸にまれなり、

〔笈埃隨筆八〕雜說八十ヶ條

日向折生迫海中靑島に檳榔子多し、高さ五六尺計り、和名アヂマサといふ、蓋味勝也、上代には我國も閩廣の如く、今の茶を嗜如く喰へるにや、花曆百詠曰、檳榔、賓與郞、皆貴客之稱、土人遇客必薦、故に名付く、

〔古事記中垂仁〕爾出雲國造之祖、名岐比佐都美、飾靑葉山而、立其河下、將獻大御食之時、其子詔言、是於河下、如靑葉山者、見山非山、若坐出雲之石硐之曾宮、葦原色許男大神以伊都玖之祝大廷乎、問賜也、爾所遣御伴王等、聞歡見喜而、御子者坐檳榔。。之長穗宮而、貢上驛使、

〔古事記傳二十五〕檳榔之長穗宮、檳榔は阿遲麻佐と訓、此は地名と聞えたれども、他に物に見えず、出雲の國內にはあるべけれど、何處許なりけむ、詳ならず、國人の說に云く、垂仁天皇の皇子の、大社に詣たまふとき、天穗日命の十五世、來日田維命迎奉て、肥川に黒檳榔をわたし、檳榔の木を以て假宮を作り、大御食奉れり、その宮を、長穗の新宮と云り、其地を古へ長穗邑と云しを、此よりして、にひみや村と云しを、今は字音に新宮村と云て、神門郡にありと云はいかにあらむ、なほよく尋ぬべし、若は出雲郡楯縫郡のほどならむか、下に考あり、又思

醒、蓋酒後嚼之則寬氣下痰、餘醒頓解、三曰饑能使之飽、四曰飽能使之饑、蓋空腹食之則充然氣盛如飽、飽後食之則飲食快然易消、

〔重修本草綱目啓蒙 二十夷果〕檳榔　通名　一名椶然 通雅　仁榔 類書纂要　增、一名螺果、格致鏡原引吳普本草

梹榔 方書　尖梹榔 同上

和産ナシ、子ハ多ク舶來アリ、コノ木甚寒ヲ畏ル、熱地ニ非ザレバ産セズ、故ニ八閩廣州ニ多シ、時珍ノ説ニ、形狀ヲ説コト詳ナレドモ、廣東新語ニ尤盡セリ、舶來ニ數品アリ、形長ジテ尖ル者ハ、鷄。心。檳。榔。ニシテ眞ノ檳榔ナリ、是ニ雌雄ノ分アリ、又形大ニシテ圓ク、扁キ者ハ大。腹。檳。榔。ニシテ即大腹子ナリ、藥家ニ檳榔トナシ賣ルハ誤ナリ、又形狹シテ兩頭尖リ榧實ノ如キ者アリ、是椶。身。檳。榔。ナリ、檳榔ハ味澀ク微シク甘シ、大腹子ハ甘味ナシ、釋名ノ下ニ、交廣人、凡貴勝族客、必先呈此果ト云ハ、本邦客來ニ茶煙盆ヲ出ト同ジ、廣州及南蠻ニテハ、檳榔ノ生ナルヲ果子トシ、客アレバ必出ス、檳榔ニ扶留藤ト瓦屋子灰トヲ加ヘ饗ス、コノ三味ヲ入ル器ヲ檳榔合ト云、桂海虞衡志ニ出、コノ器舶來アリ、茶人珍賞ス、大小アリ、大ナルハ高サ一尺許廣サモ同ジ、四角ニシテ三重、小ナル者ハ一器ニシテ三隔アリ、コレヲ香合ニ用ヒ、キンマデノ香合ト云、皆朱漆ニシテ黑漆ノ細畫アリ、又黑漆ニシテ朱ノ細畫ナルモアリ、扶留藤ハ、芳草類蒟醬ノ一名ナリ、俗ニキンマト呼ブ、瓦屋子灰ハ蚶殼(アカヾヒノカラ)ノ灰ナリ、キンマノ葉ニ、コノ灰ト檳榔トヲ包ミ食ヘバ味甘シ、故ニ果子トス、享保年中ニハ、キンマノ葉ニテ二物ヲ包ミ、蜜漬ニシタル者渡ル、今モ稀ニ藥肆ニ貯ル者アリ、キンマ眞物ハ和産ナシ、今花戸ニフウトウカヅラト呼ブ者、コノ下品ニシテ漢名土蔞藤ナリ、

〔本草一家言 二〕檳。榔。　大。腹。子。　按本艸二木相似、生于陽者爲檳榔、生于陰者爲大腹子、無人島産之樹似椶櫚而高大、檳榔子色赤褐、形緊小而尖鋭、大腹子一名豬檳榔、一名大腹檳榔、形偏味苦澀而不甘、二物大抵功用相似、但形有偏長之異、味有甘苦之別、藥家往々混貨、宜辨擇、蓋倘恒奇效醫術方中、

に檳榔扇檳榔毛車など云し檳榔も、蒲葵と聞ゆれば、阿遲麻佐も蒲葵ならむか、今薩摩に檳榔島と云ありて、其處に在も蒲葵なりと云り、檳榔と椶櫚と蒲葵とは、大かた似たる物にて、既に漢國にても、まぎれつることあれば、況て此方にて、古其漢名を當しハ、まぎれけむことうべなり、さて土佐國の海にも、びらう島と云ありて、人家などはなくて、山はことぐ\〱くびらうの木生たりと云り、

〔大和本草 果木 十〕檳榔子　暹羅(シャム)交趾(カウチ)ノ國俗ニ、客來レバ先檳榔子ヲ出シ食セシム、日本ニテ烟草ヲ客ニ出スガ如シ、而後茶菓ヲ出ス、彼國南方ニアリ、檳榔ハ濕熱ヲ去ルガ故也、本草ニ嶺南人當果食ストイヘリ、嶺南ハ漳州(チヤウシウ)福州(フクシウ)ナド中華ノ内ニテ南土也、檳榔ヲ食フ法、石灰或蜆灰ヲ用フ、同咀ハ、バ不澀、銀錫ヲ以香盒ノ如ク小合ヲ作リテ入テ客ニ出スト、范石湖ガ桂海志ニイヘリ、中華ニモ檳榔多シ、日本ニハ薩摩日向ニアリト云、葉ハ椶櫚ニ似タリ、伊豆ノ下田ノ百里ヲキ無人島ニモ有之ト云、檳榔ト大腹子ト、其樹相似テ別ナリ、然レドモ通用スベシ、但大腹子ノ力ハ檳榔子ニスコシヲトル、是時珍ガ說ナリ、

〔大和本草 雜木 十二〕蒲葵(ビロウ)　本艸椶櫚集解、時珍云、別有蒲葵、葉與此相似、而柔薄可爲扇笠、許愼說文以爲椶櫚、亦誤矣、中華ヨリ來ル蒲葵扇ハ此葉ナリト云、本艸三十八卷、器物類ニ、時珍云、蒲扇嶺南以蒲葵爲之ト云ヘリ、南方草木狀曰、蒲葵如栟櫚而柔薄可爲葵笠、今案ニ蒲葵其葉椶櫚葉ニ似テヒロシ、日向及肥前ノ平戸ニ多シ、肥後ニハビレウ島トテ、此物多ク生ズル島アリト云、對馬ニテハゴハト云、蒲扇今長崎ニアリ、

〔和漢三才圖會 果 八十八〕檳榔子(ひんらうじ)　賓門　仁頻　洗瘴丹　賓與郎皆貴客之稱〇中略

檳榔子 苦辛 溫澀　下一切氣、通關節、利九竅、下水腫、治瀉痢後重、療諸瘧、泄胸中至高之氣、使之下行、性如鐵石之沈重、治蚘厥腹痛、其功有四、一曰醒能使之醉、蓋食之久則熏然頰赤、若飲酒然、二曰醉能使之

云、檳榔子、一名蒳子、上納音

〔箋注倭名類聚抄 十木〕千金翼方、證類本草中品有檳榔子、不載一名、證類本草引陶隱居云、小者南人名蒳子、則知蒳子之名出陶注也、又依陶注、蒳子是檳榔子之小者、非卽檳榔子之別名、源君引爲一名誤、天智紀、狹井連檳榔同訓、古事記檳榔之長尾宮、續日本紀若犬養宿禰檳榔、亦其讀應同、按阿。知末佐。蓋。蒲。葵。之。和。名。檳榔、椶櫚、蒲葵、其狀相似、故多誤混、以椶櫚蒲葵爲一物、上文詳之、又上林賦李善注、引仙藥錄云、檳櫚一名椶、又混檳榔椶爲一物、故輔仁以阿知末佐訓檳榔、續日本紀檳榔扇、齋宮式檳榔葉、及檳榔毛車、皆謂蒲葵、今俗亦呼蒲葵爲毘良宇、對馬呼吳波、源君蓋知其不同、故不從輔仁所訓也、

〔饅頭屋本節用集 草木比〕檳榔子(ビンラウジ)

〔書言字考節用集 生植六〕大腹子(タイフクシ)本草、其木與檳榔相似、莖葉根幹小異耳、　檳榔樹(ビンラウジユ)其實曰檳榔子

〔古事記傳 二十五〕檳榔と云物は、和名抄に、兼名苑云、檳榔、葉聚樹端、有十餘房、一房數百子者也、本草云檳榔子、一名蒳子とありて、和名は見えず、續紀卅四に、檳榔扇、齋宮式年料供物の中に、檳榔葉二枚、戸坐所料など見ゆ、又檳榔毛車と云あり、小右記に、長和三年十二月廿五日、左大臣命云、檳榔太難得、諸卿云、用唐車、汝未聞此議如何者、答云、古檳榔毛車、毎年不改調、隨損壞改替、有何事乎、依每年改張、爲難得物、至唐車不甘心とあり、或人云、びりやう毛の車などのびりやうは、蒲葵と云物なり、其をびりやうと云は、比閭の音なり、然るに比閭は、今云しゆろの木にて檳榔には非るを、古にも誤て、しゆろの木を、蒲葵とせしことありしに依て、此國にても、蒲葵を比閭として、びりやうと云、檳榔字を用ひ來れるなりと云り、今思に、此說さもあるべし、然れども、びりやうを比閭の音と云るは、非ず、びりやうは、びらうとも云れば、卽檳榔字音なり、和名抄にも、檳榔、此間音旻朗と云り、さて古に阿遲麻佐と云し物は、檳榔字をば當つれども、實は檳榔か蒲葵か定めがたけれども、中昔

麒麟竭

如米屑、水飛乾擣、造餻可食是也、又聞、防州吉川氏官舍前有一種異品桄木、其皮裂之、則有粉出、此卽欀木非桄也、左思吳都賦云、枸有桄榔文欀楨橿、此似以欀木桄榔爲一物也、然桄榔似桄榔及椶櫚、欀木似鐵蕉、是其異也、比較二物不甚相遠也、隨錄

〔書言字考節用集 六生植〕麒麟竭(キリンケツ)支那木、見一統志、

〔和漢三才圖會 八十二香木〕麒麟竭(きりんけつ) 血竭 此物如乾血、曰麒麟者隱語也、○中略按麒麟血、柬埔寨、咬𠺕吧、暹羅皆渡之、有數品、以箬包之、如唐粽、故名粽手、爲上、爲粉、正赤者良、今試之所謂透指甲者赤燒之、灰赤不變本色者未見之、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三香木〕麒麟竭 通名 一名海脂輟耕錄 血結遵生八牋 血餬外科正宗

樹脂ナリ、舶來數品アリ、眞臘國ヨリ來ルト云、形小ク包ムモノヲ小粽様(チマキデ)ト云、長ク包ム者ヲ大粽様ト云、古渡ノ小粽様ニモ大小數品アリ、ソノ內色黑シテ光リアリ、末スル時ハ深紅色ナルモノヲ擇デ藥用ニ入ルベシ、上品ナリ、其包ミタル者ハ蒲葵(ビロウ)葉ナリ、外科正宗ニ瓜兒血餬ト云者ハ、小粽様ノコトナリ、大粽様ハ御劒様トモ云中品ナリ、又形長カラズ、唯方塊ヲナス者ヲ盤(バンデ)ノ様トモ、盤様トモ云、古渡ハ下品ナリ、新渡ニハ上品モアリ、本草滙ニ、狀若膠飴凝塊、紅赤與血同色、敲斷而有鏡臉、光彩似能射人ト云ハ、上品ハ破碎スレバ光アリ、コノ說ニ能合ヘリ、古ヨリ麒麟竭ノ木ト呼ブ者アリ、卽カラミツデノ木ナリ、葉末淺ク三ツニ分レテ、厚ク黑綠色、冬ヲ經テ凋マズ、脂ヲ采テ試ミルニ、血竭ニ非ズシテ沒藥ニ近シ、又葉三尖ナラザル者アリ、マルミツデト呼ブ、之ヲ安息香ニ充ルハ非ナリ、又別ニ大和ミツデト呼ブ木アリ、葉ノ剗鈌深シ、樹脂共ニカラミツデト同ジ、

檳榔　蒲葵　大腹子

〔本草和名 十三木〕檳榔仁諝音賓郞二音 猪檳榔大者 蒳子小者仁諝音納 一名檳榔孫俗呼小者爲孫 一名山檳榔出疏文 一名無柯子、一名木實已上二名出錄名苑 和名阿知末佐

〔倭名類聚抄 二十木〕檳榔子附 兼名苑注云、檳榔賓郞二音、此間音豆明、葉聚樹端、有十餘房、一房數百子者也、本草

桄榔子

〔和漢三才圖會八十八夷果〕桄榔子(たがやさん)　本名㆓姑榔木㆒　麪木　董樹　鐵木　俗云太加也左牟○中略

按、桄榔卽鐵樹也、其樫色類㆓花梨㆒而堅、以作㆓器㆒、或爲㆓三絃棹及胴㆒、人以貴㆓重之㆒、

畫譜有㆓鐵樹者㆒、其形狀與㆓桄榔㆒大異、出㆓于喬木類㆒

〔重修本草綱目啓蒙二十二夷果〕桄榔子　ツグ。　クロツグ

琉球。。。ノ產、近年京師ニモ來ル、冬ハ窖ニ入、寒ヲフセガザレバ育セズ、故ニ大木ニナリ難シ、形狀棕櫚ノ如ク直聳シ、梢ニ葉アリ、葉ノ莖三四尺ニシテ、蓖葉ノ如キ者左右ニ互生ス、是レ一葉ナリ、厚ク堅シテ深綠色光リアリ、冬ヲ經テ枯レズ、新葉ハ年年出テ、四五年ヲ經テ舊葉枯ル、葉ゴトニ本ニ長毛アリ、棕毛ヨリ粗シテ黑色ヲ帶ブ、故ニ黑ツグト呼ブ、ツグハ其略ナリ、コノ毛刷(ハケ)子或ハ掃箒ニ用ヲ强シ、繩トナス者薩州ヨリ來ル、棕索ヨリ强シ、

增、一種毛ニ赤色ヲ帶ル者アリ、赤ツグト呼ブ、又桄榔ノ實ハ椰子ノ類ニシテ扁ク、末ニ刷子ノ如キ毛アリ、黑色ニシテ强シ、南方ノ海濱ニ稀ニ漂著スルアリ、

鐵樹

〔百品考下〕鐵樹　一名朱蕉、一名朱竹、　和名センチンセウ

格致鏡原、七修類藁、段貫家有㆓盆樹一株㆒、高可㆓三四尺㆒、幹葉皆紫黑色、葉小類㆓石楠㆒、質理細厚、問㆓於主人㆒、曰鐵樹也、毎㆑遇㆓丁卯年㆒則花開、四瓣紫白色、如㆓瑞香㆒、較少圓耳、一開累㆑月不㆑凋、嗅之有㆓草氣㆒、予以㆑諺以㆓事難㆑成者㆒、則曰須㆓鐵樹開㆑花、然則果有㆓此樹㆒耶、○中略

琉球ヨリ多ク來ル、甚寒氣ヲ畏ル、土窖ニ入ルトイヘドモ、冬月ハ枯易シ、幹ノ巨サ拇指ノ如ク、高サ三四尺ニ至ル、一根叢生シテ棕竹(シユロチク)ノ如ク、幹ニ密節アリテ、紫黑色、鐵ノ如シ、多クハ一幹直上ナレドモ、偶ハ枝ヲ分ツモアリ、葉ハ幹頭ニ聚テ箬葉(チマキザ)ニ似、幅廣ク短シ、縱理ノミニシテ横理ナシ、紅紫色ニシテ微黑色ヲ帶ブ、數十葉相疊リテ觀美ナリ、

榠木

〔本草一家言二〕榠木　一名莎木麪出㆓于交趾㆒、近來聞㆓薩州人話㆒云、琉球國官舍前多植㆑之、皮中有㆓白粉㆒

クマクベシ、木ハ鎗ノ柄トス、皮毛ヲ帯トシ、葉ヲモ帯トス、民ノ產ヲ助ク、時珍云、南方此木有兩種、一種有皮、絲可作繩、一種小而無絲、惟葉可作帚、今案是琉球シユロナルベシ、今自琉球來者葉小也、

椶竹ハ竹類ニ載ス、

〔大和本草 十二 雜木〕犬椶櫚　葉ハ梨ニ似テ小ナリ、高樹ニシテ其幹直ナリ、木堅實ナリ、葉ノ下ニ刺アリ、手ニニギリガタシ、

〔和漢三才圖會 八十三 喬木〕椶櫚(しゆろ)　栟櫚　椶 俗字　和名種 ○中略

按椶櫚今處處有之、薩摩最多、剝皮毛為帶為繩、其葉亦細割如線而為帚、民間多植之有利、

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕椶櫚　スロノキ 古歌　シユロ 今名　一名椶榑 北戶錄　椶坡 月令廣義　椶樹 丹鉛錄　苦兒木 名物法言　比閭 通雅　并閭 同上　椶櫚 群芳譜　無塵子 瑯琊代醉 葉ノ名、

コノ木直聳シテ枝ナシ、梢ニ葉ヲ叢生シテ冬枯レズ、夏月花穗ヲナシテ下垂ス、黃白色ニシテ魚卵ノ如シ、是ヲ椶魚椶筍ト云、一名木魚、行厨集 後實ヲ生ズ、一種トウシユロアリ、花戶ニ多シ、葉短厚ニシテ大サ四五寸アリ、蒲葵ハビロウナリ、南國ノ產ナル故、北地ニテハ生長シ難シ、九州海邊ニハ大木アリ、海島ニハ自生アリト云、木ハ椶櫚ニ似テ葉尤長大ナリ、一葉ノ長サ五六尺、蔕モ亦四五尺、三稃ニシテ刺アリ、椶櫚ノ葉ハ本ヨリ分レテ岐ヲナス、蒲葵ノ葉ハ本ハ續テ分レズ、故ニコノ所ヲ採テ笠トナスヲ蒲葵笠ト云、團扇ニ作ルヲ蒲葵扇ト云、舶來ノ蒲葵扇ハ舊葉ヲ用ユ、厚シテ光リアリ、周邊ニ天蠶絲ヲ纏ヒ、竹ヲ用テ柄トス、薩州ヨリ出ス者ハ嫩葉ヲ用テ作ル、薄シテ皺アリ破レ易シ、柄モ葉ヲ用ユ、蒲葵扇一名芭蕉扇、通雅

〔紀伊續風土記 物產六上〕椶櫚 本草、本草和名二名須呂、和名抄種晉、

各郡皆あり、中にも那賀郡野上莊山奧より在田郡山保田莊邊に多くうゑて、其皮のまゝ又繩となしたるを、諸國へ多く出す、其利甚大なり、

增、集解、類ノ説ニ粗榧ト云ハイヌガヤナルベシ、參攷スベシ、

〔本草和名 二十本草外藥〕栟櫚木、一名椶櫚、和名須呂乃岐、

〔倭名類聚抄 二十木〕椶櫚 唐韻云、椶櫚、一名蒲葵、椶櫚二音宗閭、俗云種呂、説文云、栟櫚可以爲索、栟音并、栟櫚即椶櫚也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕廣韻云、椶子紅切、屬清母、忽倉紅切、屬清母、説文徐音同、此以忩音椶誤、○中略按是木名椶、又名栟櫚、後合二名呼椶櫚、故唐韻謂之椶櫚、又按一名蒲葵、玉篇亦同、然有方草木狀云、蒲葵如栟櫚而柔薄、可爲㲲笠、出龍川、是明蒲葵椶櫚二物也、合爲一者誤、段玉裁曰、椶葉縷析、不似蒲葵爲片、可爲㲲與扇、王念孫曰、椶之言總也、皮如絲縷總々然聚生也、説文、總聚束也又云、布之八十縷爲椶、聲義相近、○中略原書○説文木部椶字注、櫚下有也字、無以字、廣本革作索、按呉都賦劉逵注引異物志曰、栟櫚椶也、皮可作索、南都賦李注引張氏注云、并櫚椶也、皮可以爲索、西山經、石脆之山多椶枏、注椶樹高三丈許、無枝條、葉大而員、枝生梢頭、實皮相裹上行、一皮者爲一節、可以爲繩、一名栟櫚、藝文引廣志云、椶一名并櫚、葉似車輪、乃在顚下、有皮纏之、附地起、二旬一採、轉復上生、則作索亦通、然革字與原書合、作革爲是、革雨衣、一名衰衣、按説文、椶注栟櫚也、栟字注栟櫚椶也、然許書無櫚字、後人連栟字从木也、枚乘七發上林賦甘泉賦作并閭、

〔伊呂波字類抄 志植物附植物具〕栟櫚シユロ 椶櫚 蒲葵 已上同

〔撮壤集 中木〕椶櫚シユロ亦栟櫚、椶也、

〔書言字考節用集 六生植〕栟櫚シユロ 椶櫚スロ椶又作棕、義同、 栟櫚同

〔夫木和歌抄 二十九すろの木〕

あさまだきこずえばかりに音たてゝすろのはすぐるむら時雨哉　民部卿爲家

〔大和本草 十一園木〕椶櫚 本草曰、其皮ヲ一年ニ三四度ハギ取ベシ、シカラザレバイタミテ長ジガタシ、其皮ヲ以テ縄トシ、水ニ入テ千年クサラズト、本草ニ見エタリ、又クツノ緒トスベシ、其子ヲ多

大榧

〔大和本草十二雜木〕ヒヾ　ヘヾトモ云、カヤノ木ニ似テ葉長キ事寸餘、兩々相對ス、榧縦ヨリ葉長シ、葉柔ニ刺ナシ、山中ニアリ、犬ガヤトモ云、榧ハ葉ノサキ矢ハズノ如シ、ヒヾハ矢ハズナシ、處々ニテ方言カハル、西國ニテヲニガヤト云、又ホロメカシトモ、ハリメカシトモ云、其實ハ扁シ、榧ノ皮ノ如シ、皮ヲ去リ實ヲホシテ油ヲトル、不可食、伊勢ニ多シ、京畿ニモ稀ニアリ、山中ニアリ、實ノ形本扁シ、榧子ニ似ズ、

〔本草一家言二〕河勃參　和名邊々、榧、又稱犬榧、所々山多生之、樹短小而不見長大者形狀甚似榧、花零碎黄色、實如棗、生青熟紅、江州稱邊々乃木、土人搾油、外科家曰阿勃參油、能治小兒小瘡、一滴淋瘡上、即時愈、阿蘭陀出一種油、名保留土賀留、一名阿世登宇奈、皆南蠻之方言、而即此油也、然未知的否、實似山茶實、圓扁不可入食用、但入外科用、又藝花家稱伽羅木者、一名一位木、又名志保志保之木、信州飯田稱峯蘇防、實似阿勃參、色尤紅、葉比阿勃參細小、葉實可愛、好事者爲盆玩、葉形實色甚合阿勃參、直以此可爲正、本邦有職家采其木製笏、此蓋取一位之名、以祝官位昇進之儀也、近世修驗道輩、大峯入峯時、以阿羅良木小蘗木製珠數、其稱阿羅良木者即是也、

〔重修本草綱目啓蒙二十二果〕榧實　○中略　一種イヌガヤアリ、一名アブラキ、ペヾカヤ、ヘヾ、紀州熊野ヘーベ、勢州ヘボ、江戸ヘボギ、讃州ヒヾガヤ、江州ヒヾ、筑前ハリメカシ、ホロメガシ、ヲニガヤ、共ニ同上アスナロ、薩州ベコ、ヘンダ、伯州ガヤ、濃州コレニ二品アリ、一ハ葉榧ノ葉ヨリ長大ニシテ薄ク柔ニシテ背白シ、端ニ刺アレドモ人ヲ刺サズ、二三尺ノ小木ニテモ花實アリ、實ノ形圓ニシテ皮赤シ、一ハ葉短小ニシテ背白カラズ、實ノ形長クシテ微シ扁ク三稜アリ、倶ニ食用ニ堪ヘズ、只榨リテ燈油トス、江州ニテハ長實ナル者ヲイヌガヤト呼ビ、奧州ニテハペヾト呼ブ、圓實ナル者ヲ江州ニテハヒヨビト呼ビ、奧州ニテハヒヤウヒ、又ヘツタマト呼ブ、

國の榧の油は、金瘡切疵に妙なり、腫物の肉をあげ痛を和らげ悪血を去り、腰の痛にぬりてよし、

〔闕の秋風〕此頃桑名長壽院の元より澀なし榧といふを送りぬ、珍しき物なり、されどもしぶなしてふは名のみなるべし、ことゝしき名かなとほゝゑみて開き見れば、實も常よりはいと美し、割りて見ればしぶの衣はなくて、白妙のはだへ顯れたり、見るものみな驚く、其箱の傍に書きたる物あり、ひらき見れば祖公御馬上にて接ぎ給ひし木なり、其後いかに實を植ゑ枝取りても、おほく生ひ出でず、生ひ出でゝもかるゝまゝ、今は其樹の靈をしりて、枝など折り取るものもなしとかや、いとたふとき事なり、予〇松平定信常に榧の實をこのみてくふ、祖公も好み給ひきといふ人のありければ、藩翰の任をあぐる事、いかで祖公の烈に從ふ事か、はじかみ好むとてひじりとはいかでいはんといひき、予が名を定信といふ、祖公もしばしが程はかく稱し給ひしよし、予號を旭峯と云ひ、祖公も俊峯と號し給ひしよし、いづれも後に知れたり、偶中とやいはん、なほ不才をはぢぬ、

〔甲斐國志百二十三物產及製造〕榧子(カヤ)　延喜式ノ貢物ニ見エタレバ、舊ヨリ產セシ一品ナリ、河內領諸村ニ多シ、內船(ウツブナ)村ノ產佳ナリトス、榧樹二百十四株、此運上永貳貫貳百壹文八分ヲ貢ス、小石禾筋一ノ宮美和明神ノ社地ニ異種一株アリ、彼子小而尖ラズ、殼色黃ニシテ光滑、中子ニ黑粗(シブカハ)衣ナク潔白如蠟、味殊ニ甘美ナリ、樹葉ハ異ナルコトナシ、白榧(シラカヤ)實ト稱ス、

〔佐渡志五物產〕榧　カヤ
三郡トモ山中ニアリ、種類モマタスクナカラズ、羽茂郡德和村ニハ殊ニ多シ、以テ碁枰ニツクルベシ、實ハ同村東光院ノ境內ニイヅルモノヲ名產トス、

〔紀伊續風土記物產五〕榧(カヤ)實本草和名加倍乃美、和名鈔加倍、　澀無榧(シブナシカヤ)　犬榧(イヌカヤ)牟婁郡にてべい
右三種、牟婁郡山中及高野山より多く出す、

榧油、取中子微炒搾之、以其油煎諸果麪及豆腐、香味勝於麻油、然本草不言榧油何哉、

〔草木六部耕種法十九 需實〕榧ハ木モ亦良材ニテ、且實ハ菓子トモ爲リ、殊ニ油ヲ搾ルトキハ其利厚シ、菓子トスルニハ實大ニシテ甘味アルヲ撰ビ植べシ、又油榧アリ、澀味有リテ醜臭コト甚シ、然レドモ油料トスルニ害ナシ、宜ク二種共ニ多ク栽べシ、植法ハ其實能ク熟シ、自落タル中ニテ肥大ナルヲ撰ビ集メ、外肉トモニ苗地ニ植エ置キ、三年目ニ苗能ク成長シタルヲ、畑ニテモ山野ニテモ眞土ノ肥タル處ヲ撰ビ、牛馬ノ力ヲ用テ粗鑿術上ニ詳ナリヲ行ヒ、且軟膨術亦上ニ詳ナリヲ施シテ、一段ノ地ニ七十五本ヅヽ植エ付べシ、

〔重修本草綱目啓蒙二十二 夷果〕榧實　カヤ カヤリニ用ユ故ニ名ク　一名香實行厨集　栗實事物異名　火榧會稽賦

深山ニ多シ、大木ナリ、葉ハ樅葉ニ似テ厚ク、端尖テ刺アリ、深綠色冬ヲ經テ凋マズ、雌雄ノ別アリ、雄ナル者ハ枝立テ花サク、雌ナル者ハ枝横ニ茂リ下垂ス、實アリテ花ナシ、實ハ長サ一寸許ニシテ、棗ノ形ノ如シ、皮綠色肉ニ脂多シ、内ニ核アリ、淡褐色ニシテ厚シ、形長シテ兩頭尖ル、核ヲ破レバシブカハ白仁ヲ包ム、仁ヲ採テ食フ、シブカハ離レ難キ者ハ常品ナリ、和州芳野山ヨリ出ルヲ名產トス、吉野ガヤト呼ブ、又紀州高野山攝州能瀨村ヨリモ出ス、一種シブナシガヤアリ、シブ皮核ニ著テ仁ニ著カズ、故ニハチノコトモ呼ブ、濃州多良、及伊州上野ニモアリ、伊州方言シロガヤ、又一種形圓ナル者アリ、勢州桑名ニ產ス、凡榧材ハ性堅シ、碁枰將棊枰等ニ用ユ、一種ハダカヾヤアリ、外皮ノミニシテ、內ノ硬核ナクシテ仁アリ、丹波八上磯宮寺ノ產ナリ、

〔閑窻瑣談四〕春盤　〇中略

榧は氣味甘くして毒なし、常に食すれば五痔を治し蟲を去り、寸白を治し筋骨を強くして、榮衞の行よく眼を明にして身を輕くし、陽根を強くす、又榧の油は本草に記さねば、唐山人は知らざるか、カスハルといふ、紅毛人日本へ渡りし時、日本の榧の油を看て上品なりと賞しとぞ、實に我

不尖者、無稜而殼薄黃白色、其仁可生啖、亦可焙收、一樹不止數十斛、說文、柀檆也、徐鉉曰、檆今作杉、是榧實訓加倍乃美、爲是今俗呼加夜乃美、那波本栢作柏、按五經文字云、柏經典相承作栢、知栢柏同字、然本書木類云、栢音百、和名加閉、又云柏音帛、和名可之波、音訓皆不同、則源君誤分栢柏爲二字無疑也、此作柏非源君之舊、○中略 栢重見木類、

〔撮壤集中木〕榧カヘ

〔書言字考節用集六生植〕榧カヤ時珍云、生深山中、人呼爲野杉、其實曰柀子、又曰玉山果、

〔和字正濫抄四中下〕のへ

榧　かへ　和名常にはかやといふ、和名には出さず、通ずるや知らず、神代紀に松栢をもまつかやと點せり、和名云、本草云、柏實音百柏一名榧子、音匪和名加倍、これらによれば、松栢の栢すなはち榧なるやうなれど、本草綱目を考ふれば別なり、似たる故に、異木に同名を付たる歟、

〔倭訓栞前編加六〕かや○中略　榧をいふ、かへの下考ふべし、白かやは殼の色白し、伊賀より出づ、なぎかやは實ならびて糸をもてつなげり、越後にあり、牧谷のかやは甘皮殼につけり、美濃の產也、和州攝州にては、たかがやと稱す、いぬがやは柀子也、

〔和漢三才圖會八十八夷果〕榧かや音斐　柀子　赤果　玉榧　玉山果　和名加倍、俗云加也、　榧字亦作排○中略

按榧和州吉野之產最良、其木理細密而有文采芬香、用爲碁局、又能埋土木不朽、用堪浴室之材、薰火以可避蚊、蚊惡其香去、蜈蚣喜其香慕來、凡好不好之異如此者多、又有不結實樹、俗呼名倍倍榧、凡榧子殼頭近於尖處、有小肬目、以指甲押之則能破、其中子有紫黑衣、此與栗子衣同味甚澀濇、俗呼曰澀皮、難脫、連殼微焙則澀皮易脫、甘香美山人摘榧子、糝灰經日販之、

古今醫統云、榧子陳者浸一宿、以烈火烘皮、皆砧其殼食之如新、

榧

を力柴といふ、きれがたし、其葉水葱に似たるよりいふなるべし、平家物語に梛をよめれど、竹栢也といへり、或は椰をよむは二合の意、本義にあらず、簠簋には楠をよみ、又椥をよめり、山城宇治郡に椥辻(ナギノ)といふ村あり、

〔和漢三才圖會 八十三 香木〕奈岐乃木 正字未詳

按奈岐木高二三丈、老則皮自脫爲紅腐、復次如此、葉似竹葉而厚、有縱理、淺綠色、表裏滑美甚强、兩兩對生、

〔紀伊續風土記 物産六上〕竹柏(ナギ) 本草 一名竹葉栢、秘傳花鏡、俗に椰の字を用ふ二合の意、本義にあらずと和訓栞にいへり、又漢土にて椰の字を用ふるに二説あり、正字通には椰俗榧ノ字、舊注に音那木名誤ルといひ、康熙字典には桂海花志の拘那花を引て、椰と一物とす、拘那花は夾竹桃なり、ともにナキの事にあらず、平家物語に椰の字を用ふ、一本に楠と書す、按ずるに柟は楠と同字、栴檀の栴、字共にナキに用ふるは非なり、簠簋内傳に楠の字を用ふ、考ふべからず、山城宇治郡村里に椥ノ辻あり、是椥字亦考へがたし、

〔倭名類聚抄 十七菓〕榧子 本草云、柏實、柏音百、一名榧子、榧音匪、和名加倍、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏〕按原書栢實在木部上品、榧實在下品、二物不同、本草和名云、榧實、和名加倍乃美、栢實、和名比乃美、一云、加倍乃美、其栢實有兩訓者、蓋舉或說以存疑也、源君以榧實栢實並訓加倍乃美、誤合爲一、遂云栢實一名榧子、其實本草無是文也、本草圖經云、栢實三月開花、九月結子、候成熟收採用、其葉名側柏、皆側向、李時珍曰、其樹聳直、其皮薄、其肌膩、其花細瑣、其實成棣、狀如小鈴、霜後四裂、中有數子、大如麥粒、芬香可愛、小野氏曰、柏多種類、單稱柏者、謂側柏扁柏、本草所載柏實、即側柏子也、側柏和名古乃天加之波、扁柏和名比乃木、依之側柏扁柏木一類、則柏實訓比乃美爲允、又蘇敬注榧實云、其樹大連抱、高數仭、葉似杉、其木如柏、作松理、肌細軟、堪爲器用、又注蟲部彼子云、此彼字當木傍作皮、被木實也、誤入蟲部、爾雅云、被一名杉、葉似杉、木如柏、肌軟、子名榧子、本草衍義云、榧實大如橄欖、殼色紫褐而脆、其中子有一重黑衣、其人黃白色、嚼久漸甘美、爾雅翼云、被似杉而異於杉、彼有美實而木有文采、其木似桐而葉似杉、絕難長、冬月開黃圓花、結實、大小如棗、有尖者

○狗槇 葉扁大於槇、不結子、人家庭園栽之、

〔大和本草 圖 十一 木〕羅漢松 閩書ノ南產志ニ出タリ、古歌ニヨメルマキト云ハ杉ナリ、マキノ葉マキノ戸ナドヨメリ、日本ノ古書柀ヲマキト訓ゼリ、柀ハ字書曰杉也、然ラバ杉ヲ古ニマキト云ルナラン、杉ヲマキト云ニ對シテ、羅漢松ハ犬マキト云、今ハ只マキト稱ス、故實ヲ失ヘリ、西州ニハクサマキト云、其臭クサケレバナリ、犬マキノ木、其實太ニシテ小指ノ如ク長クシテ、人ノ形ニ似テ僧ノ袈裟カケタルガ如シ、故ニ羅漢ノ名アリ、實ノ色黃赤也、日本紀、舊事記、順和名抄ニハ、皆柀ヲマキト訓ズ、和名抄曰、柀木名埋之能不腐者也、又日本紀舊事紀ニモ、柀ヲ用テ棺ニ作ルベキ事ヲイヘリ、久シク朽ザル故ナルベシ、本草ニ柀トイヘルハ榧ナリ、然レバ柀ノ字彼是倭漢通用セリ、今案杉及羅漢松ノ大木ノ心ヲ以、棺ニ作レバ、久シク朽ズ、小木ハ早ク朽ツ、水土ノ中ニ入レバ久シク不腐、土外ニ顯レタルハ早クタサル、笥ト云モノハ羅漢松ノ皮ナリ、船ノスキマヲフサグモノ也、木曾山ヨリ出ヅ、

〔本草一家言 三 木〕羅漢松 中略 羅漢松又名羅漢樹、和名犬槇、又名臭槇、樹葉頗同金松、但葉色深綠、結子儼然、如阿羅漢像頭、如未熟葡萄、下體如半熟棗、相點綴而成一僧形、可謂奇物、與金松實不相類、二種我邦忌用宮室料、供棺槨用而已、事見日本紀神代卷、主錄

〔饅頭屋本節用集 奈 草木〕南木 椛

〔書言字考節用集 六 生植〕榀 未詳 梛 同 仙勤同木

〔倭訓栞 前編 十九〕なぎ 中略 著聞集に成通卿熊野に詣て蹴鞠ありしに、夢中になぎの葉一枚得てまもりにこめて持たれし事をしるし、保元物語に、きりめの王子のなぎの葉を、百度千度かざさんとこそおぼしめすと見え、夫木集に、熊野の事をよめる歌に、なぎの葉にみがける露など見えたり、熊野にてなぎを尊ぶは、伊弉諾尊より出たるなるべし、此は樹になぎと稱するもの也、葉

は、椎を四位に寄てよめるが如し、本義にあらず、一説に位山の木は笏の木ともいふ、一位にていちひの櫟にあらず、椎に似たり、よて飛騨にていぬかやといふ赤き實を結ぶ、椎よりは葉柔らかにして、信州にて峯蘇芳といひ、花肆にては伽羅木といふ物也、滿山皆此木なりとぞ、又楊弓の箭の木とす、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕伽羅木　加羅木 俗稱　於豆古 蝦夷稱

按伽羅木出於蝦夷及松前、土人呼曰於豆古、今京師亦希有之、高五七尺、樹葉並類檜柏、而甚繁茂不見其枝椏、結實圓青色、至秋紅熟如櫻桃、人取食之、味甜美內有小白仁、其樹微黑色光膩如奇楠木理、故俗曰伽羅木、乃柏之屬也、

〔地錦抄 五〕伽羅木　つがもみのごとくにて色青黑し、根本より葉こもりて木ぶり見事、笏に用らるゝ木にて、一位木共いふとぞ、此木異名多し、

おつかう　みねすわり　あらゝぎ　とが　一位、此木を植レば、疫をはらふとて、加羅木といふよし葉は少の異にて、色々の名あり、　めきやらぼくは葉こまかにつまりて八重　をきやらぼくは葉あらし、　ひとへきやらは葉もみのごとし、葉八重成めきやらぼくを上とス、

羅漢松

〔書言字考節用集 六 生植〕羅漢松 一名 仙柏

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕仙柏　羅漢樹 圖書　羅漢松 同　俗云良加牟末木

按仙柏葉似狗槙而小、甚細密、一叢七八十葉、六月葉間結子、大如豆、似小蒲萄而末圓、本細長、有重臺、至秋其本肥大紫熟、末圓青色、儼似僧形、故俗名羅漢樹、其頭中有子、頭以下紫肉味甜可噉、夏月葉間生蛀蠹、葉每可掃去、

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕槇 音顚 中略 ○

モノハ稀ナリ、春新葉生ズ、形横ニ廣クシテ鴨脚ノ如シ雌雄アルコト集解ニ云リ、葉ノ末岐アル者ヲ雌トス、實ヲ結ブ、岐ナキ者ヲ雄トス、實ヲ結バズ、實ハ無患子ノ殼ヲ帶ル者ニ似タリ、熟スレバ内爛テ臭氣多シ、内ニ核アリ色白シ、二稜三稜アリ、三稜ノ者ヲ雄トス、是ヲ三角銀杏ト云、烏臼ノ附方ニ出ヅ、五福全書ニ曰、三稜者有毒ト、又六七稜ナルモアリ甚稀ナリ、大木ニ瘤ヲ生ジテ長ク下垂シテ、石鐘乳ノ如クナルアリ、極メテ長キモノハ丈餘ニ至ル、土州方言イチヤウノチヽ、又唐山ニテハ銀杏木ヲ匾額ニ用テ甚雅ナリト、汝南圃史ニ見ヘタリ、

〔草木六部耕種法十九需實〕銀杏一名鴨脚子、壽ノ永キ木ニテ極テ大木アリ、幹直ク性堅クシテ、棟梁ノ良材ナリ、實亦菓子ト爲ベク、又煮テ藥ト爲スベシ、此木ニ牝牡ノ說アリテ、其核二角ナルヲ牝トシ、三角ナルヲ牡トス、其牡種ヲ植タルハ實ヲ結コト無シト云フ、然レドモ我家ニテ此ヲ植ルニハ、種子ノ牝牡ニ拘ルコト無シ、何トナレバ、栽テ其幹笛竹ノ大ニ至レバ、即引切テ良木ヲ接木スルヲ以ナリ、實ニ無用ノ辨トハ是ナリ、 此ヲ植ル法ハ、十月能ク熟シテ大ナル實ヲ採リ集メテ、其殼肉共ニ溝泥中ニ埋メ置キ、翌年春分後ニ取リ出シ、肥地ニ一尺ノ間ニ一粒ヅヽ植エ、其苗長ジタルヲ、翌年植地ニ移シ栽テ、笛竹ノ太ニ及ビタル時ニ切テ砧木ト爲シ、能ク實ヲ結ブ、銀杏樹ノ南枝ヲ採テ接木スベシ、能ク培養スルトキハ、七八年ノ中ニ必ズ實ヲ結ブ者ナリ、且此木ハ年數ヲ經ルニ從ヒ極テ繁リ、大木ト成ルヲ以テ、其栽ル場處ヲ前方ヨリ能ク心得ベシ、

〔林政八書〕樹木播植方法、杉穗差樣、○中略

一いちよう種子、八月より九月迄熟見合、もぎ取、日に乾し、策にて打ち皮を去り、可成程淺く蒔入候、土深く埋め候へば萌出少相成物に候、

附、皮は不取分候て、殼とも蒔入候ても不苦候、

〔倭訓栞中編二伊〕いちひ ○中略 笏を飛驒の位山の櫟にて造るといへり、よて一位によせていへる

飢タルモノ銀杏ヲ飽マデ食シテ次日死タリ、總ジテ銀杏ト櫻桃ハ、小兒ニハ禁ジテ少モ與ヘザルベシ、合食禁　鰻鱺魚ト同食スレバ、軟風病ヲ生ズ、鰻鱺魚ハウナギナリ、

〔和漢三才圖會 八十七 山果〕銀杏（いちやう ぎんあん）　白果　鴨脚子　俗云一葉（イチヤウ）○中略

按、銀杏處處皆有、出於對州者良、藝州者次之、其葉剡缺、深者雄也、不結實、然三稜實爲雄、二稜爲雌則雄亦結實乎、四月著花于莖頭、其莖細長五七分、其花淡青色、如椒粒（サンセウツブ）無萼、二顆一雙、朝見樹下有落花莖、

〔草木性譜 人〕公孫樹（いちやうのき）

處々に植、雌雄あり、雄木は其葉二三岐をなす、春葉間に黃白色の花簇生す、桑花に彷彿たり、果を結ばず、雌木は其葉岐をなさず、春葉間に花あらずして果を結ぶ、此樹雌雄感通して果（銀杏本草綱目）を結ぶ、果に亦雌雄あり、雌は兩稜、雄は三稜なり、下種して生じ易きといへども、果を結ばざる者あり、俗說に雌雄同種すれば果を結ぶと云ふ、然るべからず、其性長ずれば、近隣の雄木互に相望相感通して果を結ぶ、若近隣に雄木なき時は果を結ばず、是陰陽相感ずるの理、無情中の奇なる者なり、秘傳花鏡云、實熟時以竹篾箍樹木、但雖篾則果自落と、本草綱目、皂角の條に相似たる說あり、夫動物は天に本づきて頭首上にあり、呼吸氣を以てす、神內に在り、植物は地に本づきて根荄下に有り、升降潤を以てす、氣外に有り、竹篾を以て箍するの說、生理の巡環を止るが故に、果自ら落るなるべし、いまだこれを試みず、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一 山果〕銀杏　イチヤウ（木ノ名）　ギンナン（實ノ名、卽銀杏ノ唐音ナリ、）　ギナン（筑前）　一名
仁杏（汝南圃史）　白眼　靈眼（共同上）　玉果（潛確類書）　白杏（事物異名）　樹一名公孫樹（汝南圃史）　鴨脚（同上）　平
仲木（正字通）　火棗木（通雅）　枰（同上）　枰（文選）　佛指甲（浙江通志）　白果樹（袁州府志）

大木ニシテ直ニ聳ルコト三四丈、梢ニテ枝多キ者ハ常ノ產ナリ、木高カラズシテ四旁ニ枝繁ル

古事類苑

植物部三

木二

公孫樹

〔饅頭屋本節用集 草木〕銀杏(イチヤウ)

〔書言字考節用集 六生植〕銀杏(イチヤウ)（一名白葉、梅出、幾、）　鴨脚葉(イチヤウノハ)（見格物論、活法、）　銀杏(ギンアン)

〔庖厨備用倭名本草 六山果〕銀杏(キンアン)　倭名抄ニ銀杏ナシ、多識篇今案ニイチヤウ、俗ニ云キンアン、考本草一名白果、一名鴨脚子(アフキヤクシ)、其葉鴨掌ニ似タリ、因テ鴨脚ト名ヅク、モトハ江南ニ生ズ、宋初ニ始テ入貢ス、改テ銀杏ト云、其形小杏ニ似テ核白キガ故也、今ハ白果ト云、梅堯臣詩ニ、鴨脚類綠李、其名因レ葉高、歐陽修詩ニ絳囊初入貢、銀杏貴中州、其樹高サ二三丈、其葉ウスク縱理アリ、刻缺アリ、面ミドリニシテ背アワシ、二月ニ花ヲ開ク、簇ヲナシテ青白色、夜二更ニ花ヲ開キ、隨テ卽落ル、人ミル事稀ナリ、一枝ニ子ヲ百十ムスブ、ナリアヒ楝子(レンシ)ノ如シ、霜後ニ熟ス、肉ヲ爛シ去テ核ヲ取テ果ニス、其核兩頭トガル、三稜ナルヲ雄トス、二稜ナルヲ雌トス、其仁ワカキ時綠色、久シキ時ハ黃ニナル、雌雄同ジク種レバ、其樹相望テ實ヲムスブ、或ハ雌樹ヲ水ニ臨テ種タルモヨシ、或ハ一孔ヲナシ、其内ニ雄木一塊ヲ入テ泥土ニテヌリフサギタルモ實ヲ結ブ、陰陽ノ妙也、

銀杏味甘苦、性平澀小毒アリ、熟シテ食スレバ、人ニ益アリ、肺ヲ温メ氣ヲ盛シ、喘嗽ヲ定メ、小便ヲシヽメ白濁ヲトヾム、生ニテ食スレバ、痞ヲ引、酒ヲ解シ、痰ヲ降シ、毒ヲ消シ、蟲ヲ殺ス、外科ノ用アリ、　食禁　多食スベカラズ、小兒多食スレバ立ドコロニ死ス、是ヲ一千食スレバ則死ス、ムカシ

竹杉

〔書言字考節用集 六生植〕樛 同万葉 栂 栂

〔鹽尻 十五〕一嵯峨集に、梅栂と字訓同じき事をいへり、湖海新聞にも梅を木母といひし、

〔萬葉集 三雜歌〕登神岳山部宿禰赤人作歌一首并短歌
三諸乃神名備山爾、五百枝刺、繁生有、都賀乃樹乃、彌繼嗣爾、玉葛、絶事無、在管裳、不止將通、明日香能、舊京師者、〇下略

〔萬葉集古義 品物解 木三〕つがのき 樛木 都賀乃樹〇中略
後世栂ノ字を書て登我と呼物是なるべし、〇中略冠辭考に、都賀は黄楊の事ならむと云るはいかゞ、黄楊は都宜とのみ古より云て、都我と云る例なきをや、

〔大和本草 十二雜木〕栂　葉ハモミノ如クニシテコマカナリ、葉兩ニワカル丶事モミノ如シ、樅モミナドハ皆葉上ニ向ヘリ、コレハ上ニ向ハズ、葉ミジカク枝小ナリ、葉ノサキワレタリ、ウラニ又葉付ケリ、大木アリ、板ニシテモミノ木理ノ如シ、本邦ニ昔ヨリ栂ノ字ヲトガトヨム、出處未詳、一種葉ノ鋒ワレズ、葉短小枝柔ナルアリ、

〔大和本草 圖十一木〕虎ノ尾　佳木ナリ、一名竹。杉。ト云、皆國俗ノ所名也、日向霧島山ニ多シ、葉ハ松ニ似テ大ニジテ短シ、味モ少松ニ似タリ、葉シゲキ事亦松ニ似タリ、葉ノ鋒尖レリ、有大毬長數寸、松カサニ似テ長大ナリ、松類也、此樹如檜及羅漢松可爲器材、其木理佳材也、爲宮爲椽並可也、又樅ニモ虎ノ尾モミアリ、與此不同、

べし、冬は糞水を澆ぎてよし、

〔新撰字鏡木〕樅（子容反、平、縮也、毛牟乃木、又太々佐万、）

〔倭名類聚抄木二十〕樅　爾雅云、樅松葉柏身、（七容反、和名毛美、）

〔大和本草十一園木〕樅　爾雅、樅松葉栢身ト云ヘリ、此木西方ノ皮必所々カレテ脱落ス、柱トシ器材トス、杉檜ニヲトレリ、葉ノサキワレテ矢筈ノ如シ、又虎ノ尾ト云モミアリ、葉モミニ似、短小細密ナリ、葉サキニ矢ハズナシ、裏白虎尾モミノ如クニシテ、葉ノウラ白シ、是亦一類別物ナリ、

〔本草一家言三〕樅　一名鳳尾松、和名茂美、其種類有七、又別有一種、總爲八種、一曰茂美、在處人家所植者、葉似榧排生、葉頭尖無岐、二曰八重茂美、其葉重疊尤繁、葢密排者爲八重茂美、疎排者爲茂美、其密排乃重葉樅也、三曰虎尾茂美、但葉極細密、排生如八重茂美、稻彰信云、非是眞虎尾茂美、乃藝圃家所稱虎尾茂美也、眞虎尾茂美者、一枝三椏、枝條直出、左右分岐、密排如鳳張翅狀、然此即眞鳳尾松也、四曰猿猴茂美、但枝椏極長爲異、非別種、藝圃之稱呼也、已上五種倶係于眞樅、六曰栂茂美、又單稱栂、似樅而短葉、頭有岐、成了叉狀、亦樅屬也、曰津加茂美、又單稱津加、葉頭尖而無岐、糾戾葉頭有刺戟、人手不可觸、其狀甚狰獰、結小毬子、形長、若水云、此即古人所指一針松也、又別有稱仁禮茂美者、一名日光茂美、狀似伽羅木、而葉極小短背白、花如松花、而上半紅、如胭脂、長四五寸、略似紅青箱子、穗可以供美觀、此乃榧也、非樅屬、辨于榧條、可併按、

樅　和名茂美、本草栢身松葉即是也、葉似榧而尖、其枝好引東南而茂、按樅亦榧屬也、又有登加津加（トガツカ）、種類不一、此乃松屬也、

〔伊呂波字類抄止植物附植物具〕樛（トガノキ）

〔撮壤集中木〕栂（トガ）

〔饅頭屋本節用集土草木〕栂（トガ）

ヒムロ

按檉樹似檜柏、而高者三四丈、葉甚細密、軟刺經數歲者結子、碧色微如麥門冬子、

〔本草一家言三〕檉　王旨堂準繩幼科、有檉柳湯、治麻疹、用檉葉、其效驗不勝枚擧、醫家不可不知也、諸家解檉、殊致淆亂、不可不辨也、爾雅檉河柳、郭璞遂誤注、以爲河旁赤莖小楊者非也、檉一名西河柳、西河郡名、樹葉似樅及榧、而極細、面青背白、羅願云、天之將雨、檉先知之、起氣以應、又負霜雪不凋、乃木之聖者也、又名雨師及三輔、故事云、漢武帝苑中一日三起三眠、俗稱長壽仙人柳、亦曰觀音柳者卽此也、今洛北天台山文珠樓前有一株、土人呼檜樅、又野州日光山中多生、因名日光樅、雖有柳名、然實非柳屬、蓋以有柳名、郭璞以爲赤莖小楊、詩家相承以三起三眠爲柳事實、而使皆轉々相誤、不致用心之過也、不可不辨、又府志云、檉膠名胡桐淚、此亦藥家須用之物、豈可不知乎、知圭

〔玉勝間三〕むろの木

田中ノ道まろがいへりしは、萬葉の歌によみたる室の木といふものは、今もいづこにも多くある物也、美濃の不破郡、多藝郡などにて、ひむろとも、ひもろ杉ともいひ、伊勢の員辨郡、桑名郡のあたりにて、たちむろはひむろといひ、尾張の羽栗郡にて、ねずむろとも、べぼの木とも、むろともいへり、すべて山におほき木にて、地にはふと、高くたつと、二くさ有て、はふ方には大木はなきを、立るかたには大なるもの多し、柏子(ビャクシン)といふ木に似て、又杉にも似たり、二種ともに實おほくなるなりといへりき、

〔書言字考節用集六生植〕檜柏(ヒムロ)本草、松檜相半者、　檜(同)檉和俗所用

〔增訂豆州志稿七土產〕杜松(ムロスギ)　州人ヒムロト云、木質堅牢、柵、及杙ト爲シテ朽チズ、其實藥ト爲ス、一種地ニ著テ蔓延スル者アリ、方言ハヒスギ、山南山野ニ多シ、亦藥ニ用ウ、

〔草木育種後編下藥品〕杜松(ねつみさし)南產　諸州海邊に生ず、實を採り用ゆべし、一種喬木となるものあり、二月枝を扦してよし、漢名口杉といふ、俗にぼろすゝぎといふ、園に栽て實と材とを藥用とす

檜柏

〔松屋筆記九十四〕白身の木
武州金澤瀨戸明神に、白身の木あまたあり、そのさま枯木のごとく、皮もなく、白骨などのごとくにて並立てり、

〔佐渡志五物產〕柏○中略
ビヤクシンハ、國ナカト云アタリニアリ、通雅ニ所謂刺柏ナルベシ、八幡村邊ニ生雜ニスルモノハ、ハビヤクシンニテ、漢名矮檜ト云モノニヤ、

〔書言字考節用集六生植〕圓柏　栝同、並見本草

〔和漢三才圖會八十二香木〕檜柏　俗云以不木
本綱、松檜相半者檜柏也、
按檜柏樹其葉細密、遠望之與栢杉無別、但葉柔刺不尖硬、有縄文而如柏及檜葉之文、不結實、高一二丈、植之庭園可愛、其木不宜爲材、相州鎌倉之產葉最美、

檉

〔新撰字鏡本〕檉桯　同、諸貞反、楊類、加波也奈支、又牟呂乃木、

〔書言字考節用集六生植〕松楊　李時珍云、其材如松、其身如楊、故云爾、　檉同、俗用此字、檉河柳也、

〔萬葉集三挽歌〕天平二年庚午冬十二月、大宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首、
吾妹子之、見師鞆浦之、天木香樹者、常世有跡、見之人曾奈吉、

〔萬葉集十六有由縁幷雜歌〕詠玉掃鎌天水香棗歌
玉掃、苅來鎌麻呂、室乃樹與、棗本、可吉將掃爲、

〔夫木和歌抄二十九〕六帖題むろ　　衣笠内大臣
しほのみつうらに年ふるむろの木のかはらぬ色もしたばちりつゝ

〔和漢三才圖會八十二香木〕檉音偵　檉和名無呂　姬檉俗、比女無呂、○中略

身木とも見えたり、攝州豐島郡の勝尾寺に百濟國より送りし白心樹あり、今尙荒神廟の後に株杭遺れるよし元亨釋書便蒙にみゆ、

〔爾雅註疏 九釋木〕樅、松葉、柏身、註今大廟梁材用此、木尸子所謂松柏之鼠、不知堂密之有美樅、(樅七容切)檜、柏葉松身、註詩曰、檜楫松舟、疏此辨樅檜之異名也、松葉柏身者名樅、柏葉松身者名檜、郭云今大廟梁材用此木者、以時驗而言也、註尸子所謂已下者、綽子篇文也、云詩曰檜楫松舟者、鄘風竹竿篇文也、毛傳云、楫所以擢舟是也、

〔和漢三才圖會 八十二香木〕栝　圓柏　俗云柏杉(ヒヤクシン)○中略
按、栝高者二丈餘、樹皮似杉及檜而材不堪用、葉似柏而尖硬、微似杉、甚茂盛、其枝極隱不見、葉與身皆曲、蓋此柏與杉相半者也、俗爲柏杉、人植庭園、愛其綠葉也、不結實、但本草所言則檜與栝混註而已、
一種跋(ハヒ)柏杉　其木葉似栝而如蔓跋行、橫延數丈、插枝亦生、植之庭砌、撓爲龍虎船車之形、

〔新撰字鏡 木〕栝(古活反、箭進也、檜也、箭末曰栝、會也、布彌太、)

〔古事談 三僧行〕此寺(○東大寺)ニ三月十四日有大會、號花嚴會、佛前立高座、講師登テ講花嚴經、但法會中間講師自高座下テ自後戶逐電云々、此事古老傳云、昔建立此寺之時、有賣鯖之翁、天皇召留之爲大會講師、所持ノ鯖置經机之上、魚變爲八十花嚴經、魚數八十隻云々、翁登高座講說之間、梵語ヲ囀ケリ、法會中間乍高座上化失了、荷鯖之木大佛殿東面廊前ニ突立、忽成樹枝葉、是白身木也云々、彼會講師于今法會ノ中間ニ逐電也、件樹燒失之時燒了、

〔宇治拾遺物語 八〕これもいまはむかし、東大寺に恒例の大法會あり、花嚴會とぞいふ、大佛殿のうちに高座をたてゝ、講師のぼりて堂のうしろよりかひけつやうにして逃ていづるなり、古老つたへていはく、御堂建立のはじめ鯖賣翁きたる、○中略鯖をうる翁杖をもちて鯖をになふ、其鯖の數八十則變じて八十花嚴經となる、件の杖の木、大佛殿の內東回廊の前につきたつ、忽に枝葉をなす、これ白榛の木也、今伽藍のさかへおとろへんとするにしたがひて、この木さかへ枯といふ、

柏身

ん、あぢきなきかねことなりや、たれにたのめたるにかあらんとおもふに、ましらまほしうおかし、

〔枕草子春曙抄三〕あすはひの木　明日檜にや、世俗にあすならふといふ木なり、檜の木に似て材木につかふ物也、

〔本草一家言二〕當檜　又呼阿天、爲屋柱、呼丸太、從丹波來、當檜者即明日奈郎宇木、即左波羅、質柔、阿尖飛者質剛、或云左波羅、生南方、受日光、故質柔也、阿天飛者生山陰、而不受日光、故其質剛、自是一種、又云阿天、阿天飛分明是二種也、阿天者生信州木曾山中、扁柏之生東南、而受風日甚强、故其質剛、故不爲材用也、阿天者一片剛、一片柔、尤難爲鋸開、謂是阿天即扁柏下品也、阿天飛者即左波羅、而天台山外史所載仙人柏、一名雁翅柏也、此又一說也、宜辨別、

〔伊豆海島風土記下産物〕アスナラウ　イヌマキ、羅漢松ナリ、此木八丈ニ少ク、神津島ニ多シ、國地ニテアスナラウト云、木ハ兒ノ手柏ニ似テ檜ニ近シ、此仙柏ノ皮、直本皮ノ木性ナリ、土人モ皮ヲトリ、打ヤハラゲテ船ノ刎目ヲ塞グ、

〔和漢三才圖會香木八十二〕檜音膾〇中略　一種阿須檜　似檜而木心似被、爲器、脂出不佳、此與檜只如有一夜之差乎、匠人用僞檜、又名阿須奈呂、即柏木也、

〔廣益國産考二〕檜〇中略　又檜の一種に阿須檜といふあり、檜によく似て、木の芯披に似たり、是を世間にてはあすならふといへり、即ち柏木なりといへり、

〔書言字考節用集六生植〕圓柏　柏槙

〔倭訓栞中編二十一比〕びやくし　柏子の音にや、朱舜水混柏也といへり、こは木柏子をいふ、はひびやくしんは臥檜也、いぶきびやくしんは檜栢なり、唐柏子あり、葉よくつまりたり、古事談には白

又汝南圃史ニ、扁柏ニ黃柏ノ名アリ、キハダト同名ナリ、

〔秇苑日涉 三〕檵泉龍栢○中略

又〇長掛記曰、側栢枝幹柔密、揉之不斷、葉々爲幢蓋鸞鶴蛟龍之狀、勤以爲數、曰龍栢坡、今寺院園中有以檜栢爲龍虎之狀者、雖鄙俗可笑、亦有所本矣、又宋景濂遊鐘山記曰、明日甲辰、予同二君遊崇禧院、從西廡下、入永春園、園雖小、衆卉略具、揉柏爲麋鹿形、柏毛方怒、長翠灑々可玩、二君行倦、解衣覆鹿上、掛冠鼠梓間、據石坐、程消千一疏曰、世之爲圃者、松柏之屬、剪縛而爲禽爲獸、山茶杜鵑之屬、結構而爲塔爲亭、竹桂之叢、板列而爲垣爲墻、余家先世圃林數十、號以此相矜尙、甚則有紮束爲美女武夫狀者、尤奇醜可笑、及余輩爲政、乃破此習、草木之性任其直、遂暢茂可也、當何罪而拘係之桎梏之乎、

椹

〔書言字考節用集 六生植〕弱檜(サハラ) 椹(同俗用此字者誤)

〔和漢三才圖會 八十二香木〕椹(さはらぎ)(音斟) 椹(木趺也、斫木櫍也、) 又桑實爲椹、今俗以椹訓左和良、

按椹乃柏之屬、尾州驒州多有之、葉似檜而微淳朴、木皮濃於檜、結實亦如檜、其材微似杉、而縱理也、耕板葺屋甚良、作扇篩、作桶及筯、以僞杉、有臭氣、初以熱湯可洗去臭、(小對時與檜難辨、但試折染、檜折易、椹難折、以之可辨、)

一種黑部。。(久呂倍、正字未詳、) 其樹葉狀與椹木能似、而杢(モク)粗大美、燒焦之則杢愈可愛、人僞爲燒杉、以作扇筥、

〔大和本草 十一園木〕サハラ木。。。 檜ノ類ナリ、葉ハヒカゲノカヅラニ似テ、ツキノ木ニ異ナリ、其皮モ檜ニ似タリ木ハ文理ナシ、マキノ如シ、甍ノフキ板ニ用テ、マキニマサレリ、宮殿ニハコレヲ以フク也、春初挿ニハ活ク、

アスナラフ

〔書言字考節用集 六生植〕明日檜(アスハヒノキ)(アスナラフ)(出枕草紙)

〔枕草子 三〕木は

あすはひの木、此世ちかくも見えきこえず、みだけにまうでゝかへる人など、しかもてありくめる、枝ざしなどのいと手ふれにくげに、あら〳〵しけれど、何の心ありてあすはひの木とつけゝ

シ、故ニ側柏ト云、其葉面共ニ綠色、故ニ兩面ト云、萬葉集十六卷ニ、奈良山ノ兒手柏ノフタヲモニト讀メリ、〇中略側柏ハ西ニ向フテ枝ヲ出ス、故ニ樵夫山ニ入リ、若シ方角ヲ失スレバ、コノ枝ノ向フ方ヲ見テ東西ヲ知ル、因テ土州ニテハ、ハリギト呼ブ、釋名ノ註ニ引トコロノ埤雅ノ說ニ合ヘリ、側柏ノ一種、俗ニ千手ト呼ブ者アリ、葉多ク叢生シ、多ク手ヲ立ルガ如シ、漢名千頭柏、一名佛手柏、共ニ本草徵要ニ出ヅ李時珍、柏ノ品類ヲ分ツコト詳ナリ、子ノ形狀ヲ說クコト殊ニ明白ナリ、コノ子卽チ藥用ノ柏子仁ナリ、別錄ニ四時各依方面采陰乾ト云フハ、本草彙言ニ、如采葉須隨四時建方、春採東、夏採南、秋採西、冬採北、取其得月令之氣也ト云ヘリ、敷ノ說ニ花柏葉ト云フハ、サワラナリ、叢柏葉ト云フハ卽チ千頭柏ナリ、有子圓葉ハ側柏ナリ、時珍ノ說ニ、柏葉松身者檜也ト云フハ、スギビヤクシンナリ、略シテビヤクシント云フ、一名百葉仙人、事物紺珠刺柏、通雅栝子松、結子松共同上圓柏、名物法言檜松、訓蒙字會コノ一種ニ、木直立セズ、地上ニ延ク者アリ、ハヒビヤクシント呼ビ、又ジヤギト呼ブ、漢名矮檜事言要玄ニ出ヅ、又松葉柏身者樅也ト云ハモミノキナリ、一名鳳尾松通雅又松檜相半者檜柏也ト云フ、イブキビヤクシンナリ、略シテイブキト云フ、又鎌倉イブキトモ云フ、鎌倉ノ名產ナル故ニ名ク、木色赤シ、故ニ俗ニミキアカト云、汝南圃史ニ、血柏ノ名アリ、一名檜尖、同上二色檜通雅又黑イブキアリ、葉黑色ヲ帶ブ、又ハヒイブキアリ、地ニ臥シテ矮檜ノ如シ、又竹葉柏身者謂之竹柏ト云フハ、ナギ一名チカラシバ也、葉ノ形竹葉ノ如クシテ短ク、厚シテ對生シ、深綠色、冬モ凋マズ、花ハ松花ノ如ク、實ハ圓ニシテ大サ五六分、地ニ下シテ生ジ易シ、和州ノ春日若宮八幡ノ山ニ甚多シ、大木モアリ、

增、側柏ハ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、松花ノ如シ、後ニ實ヲ結ブ、長サ六七分、濶サ五六分、圓クシテ外ニ軟ナル刺毬アリテ蓖麻子毬ノ如シ、中ニ麻子ノ如キ實アリ、一方尖リテ紅花實ノ如シ、コレヲ破レバ中ニ仁アリテ油多シ、卽チ藥用ノ柏子仁ナリ、又側柏葉ヲ藥用トナスニハ、千頭柏ヲ良トス、

右歌一首、博士消奈行文大夫作之、

〔萬葉集二十〕知波乃奴乃、古乃氐加之波能、保々麻例等、阿夜爾加奈之美、於枳氐他加枳奴、

右一首、千葉郡大田部足人、

〔大和本草藥木十一〕側柏　凡柏ニハ大木アリ、松ノ類ナリ、故松柏トツラネ稱ス、此樹人家ニ多シ、史記龜策傳曰、松柏爲百木長、而守門閭、然ラバ人家門ニハ松柏ヲ植ベシ、時珍云、柏有數種、入藥惟取葉扁側生者、故曰側柏、今按萬葉集歌ニ、奈良坂ノ兒手柏之二面爾トヨメルハ、其葉兩面ナル故ナリ、兒ノ手柏、卽側柏ナリ、藥ニコレヲ用ユ、

〔和漢三才圖會香木八十二〕柏（柏同）　椈　側柏　和名加閉　俗云白檀　又云唐檜葉　兒手柏

其材名阿須奈呂〇中略

按柏其葉似檜、側向如薄片、春月葉耑生小花、褐色而不開、直結子、椂如五倍子、淺綠色、多四裂、中有數子、種之易生、蓋本朝則柏少檜多、中華則柏多檜少、

和名抄云、槲一名柏（加之波）按恐此枹字也、枹柏似而傳寫之誤、後人不得改傳誤矣、（枹者、櫟之屬、見于山果部）

又俗以栢爲榧之訓、恐此不知柏栢同字、而（加閉）與（加夜）和訓相似、故誤用矣、

五雜俎云、嵩山嵩陽觀有古柏一株、五人聯手抱之圍始合、漢武帝封之大將軍、又唐武后亦封柏於五品太夫、人但知秦皇之封松、而不知封柏也、

〔重修本草綱目啓蒙香木二十三〕柏　カヘ（和名抄）　コノテガシハ　兩面　ハリギ（土州）　一名百木長（事物紺珠）

異名　蒼官　阿剌孫（共同上古名）　百花長（事物紺珠）　仙藥　淺色沈（共同上）　參天（名物法言）　鬼廷（續博物志）　鞠（通雅）

附柏（書叙指南）　匾松（訓蒙字會）　實一名鍊形松子（藥譜）

柏ノ類多シ、凡ソ單ニ柏ト稱スルハ、側柏、扁柏ヲ通ジテ言フ、方書ニ柏ト稱シ、柏葉柏子仁ト稱スルハ皆側柏ナリ、故ニ本條モ亦然リ、側柏ハコノテガシハナリ、葉ソバダチ生ジテ掌ヲ立ルガ如

べし、依てこゝに略しぬ、

杉よりも枝よこに榮える心あれば、植立てよく、春彼岸までは枝をきり取べし、一度打ば跡は打べからず、下草は毎年六月より明三月までにかり立、その草は根におくべし、

〔甲斐國志物産及製造百二十三〕富士裾野丸尾檜　良材ナリ、西湖、本栖、精進諸村ノ里人喩僻ニシテ重持スルコト不能、榑木桶具、間切長二三寸角六尺、割貫、割木、梯子、貫木ハ長二間、梯子ハ長短三四間、皆割木而造之、檝梯ノ具皆檜ヲ以テ造ル、檜ノ柄、木刀ノ類ハ樫ヲモ用フ、擣棒ハ藤ノ樹、臼杵ニハ峯榛、鍬鋤農具ノ柄ハ花ガラ、木鉢ハブナノ樹トテ、銘々其用ニ堪ヘタル木ヲ良シト云々、北山筋黒平村モ同之、奈良田村ハ山折敷ニ用フ飯櫃、曲グ物大小品々本州ニ舊キ器物アリ、今多クハ不用之、箕、木履ノ類ヲ造ル、

〔日本書紀神代一〕一書曰、素戔嗚尊曰、韓郷之島、是有金銀、若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也、乃○中略拔散胸毛是成檜、○中略已而定其當用、乃稱之曰、○中略檜可以爲瑞宮之材、

〔古事記上〕於是須佐之男命、○中略爾問其形如何、答白、彼目如赤加賀智而、身一有八頭八尾、亦其身生羅及檜。榲、

〔枕草子三〕木は○中略

ひの木、人ちかゝらぬ物なれど、みつばよつばのとのづくりもおかし、五月に雨のこゑまねぶらんもおかし、

〔夫木和歌抄檜二十九〕家集　僧正行意

かみ山の岩ねのひはら苔むして木するもまろくとしふりにけり

〔書言字考節用集生植六〕側柏コノテガシハ　圓柏之類、今按、支那松柏連呼者是乎、宜照考花鏡　兒手柏同　本朝俗斥側柏云爾、又謂欅爲兒手柏、

〔萬葉集十六有由縁并雜歌〕謗佞人歌一首

奈良山乃、兒手柏之、兩面爾、左毛右毛、佞人之友、

羅木といひしが如き是也、翠寒堂の材、夫等の物に異なるが故に、其物をわかつべきためにこそ、日本羅木とはいひたるらめ、その羅といひしは、埤雅欏一名羅といふ事を釋して、其文細密如羅、故曰羅也といひしが如くに、此樹其文細密如羅なりければ、かく名づけいふ、又此樹歲寒を凌ぎて、色を落さゞるものなれば、其材を得て建られし堂を、翠寒とは名づけられしなるべし、さらば其羅木といふものは、我國にいふ所のヒノキ即是なりとこそ見えたれ、

〔和漢三才圖會〕八十二香木 檜音會 檜　和名非　言火乃木也、　幸種倭俗　左木久佐○中略

按本草綱目柏葉松身者檜也、其葉尖硬、一名栝、又云圓柏蓋此時珍誤、檜與栝二種、相混註之乎、檜葉不尖硬、而似柏葉而肥厚、有縄文、柏直枝檜曲枝、其樹相摩、則有出火、故名火木、其實𣙷𣙷似杉實而無刺、又有無實者、今人盛饅頭器鋪檜葉、不知其據焉、其材白、濃密無縷而美也、能可堪水濕、宜為屋柱、宜作箱器、最良材也、以覆宮屋謂之檜皮葺、土州之產堅而宜柱材、尾州之產柔而宜器木、

〔重修本草綱目啓蒙〕二十三香木 柏○中略

柏ノ類多シ、凡ソ單ニ柏ト稱スルハ側柏扁柏ヲ通ジテ言フ、○中略扁柏ハヒノキナリ、葉平ニ布テ生ズ、故ニ扁柏ト云フ、其葉面綠色ニシテ背ニ白脈アリ、○中略

增○中略扁柏ノ類數種アリ、朝鮮ヒバト呼ブモノアリ、扁柏ニ似テ葉小サク、皺ミアリテ繁密ナリ、盆ニ栽テ玩ブ、大木ニナラズ、一種忠七ヒバト云アリ、朝鮮ヒバニ似テ、枝軟カニシテ長ク、葉繁密ナリ、一種孔雀ヒバハ、枝細長ク軟ニシテ、葉兩方ヘ密ニ生ズルコト、ムカデグサノ葉ノ如ク、孔雀ノ尾ノ狀ノ如シ、一種シノブヒバト云アリ、枝葉共ニ細クシテ、海州骨碎補葉ノ如シ、

〔廣益國產考〕二 檜別にあすならふといふ一種あり

檜は堂塔伽藍神社佛閣武家町家の家造りに至る迄、なくて叶はざる良材なり、此木植る土地は、杉と粗かはる事なければ別に記さず、苗のまき方育方も同じければ、杉苗の拵へかたに見合す

松葉柏身といひ、柏葉松身といふが如きは、松は其幹曲れるものにして、柏は其幹直をいふ、其葉の細亀長短、また各々相別れて同じからずとぞ云はれたりける、今此義に因りて、此にヒノキといふものを見るに、爾雅說文に見えし所の如くにはあらず、さらば正字通に、松葉柏身庶幾近似といひし其謂ありとこそ覺ゆれ、此事をも稻若水子に正したりしに、此にヒノキといふものは、卽扁柏也といひき、されど舜水朱子は、檜は則ヒノキ也、扁柏は檜の類也といひしといふなり、ただ如何にもあれ、古より云ひつぎし如くに、ヒノキといふものに檜の字借り用ひたらむ、卽是我國の方言也、あながちに漢人 近世の說により從ふべき事とも思はれず、

其言長くして事煩しけれど、我おもふ所をもこゝに註して、後の正しなむ事を待ちぬべし、爾雅本草を始として、漢人諸家の說に見えし所の如き、亦此にいふ所をもて併せ見るに、まづ爾雅に檜を柏葉松身とせし者は、後の傳寫訛れるにや、正字通に云ひし如くに、松葉柏身に作るべし、圓柏といひしはイブキ也、側柏といひ、又手掌柏などもいひしはコノテガシハ也、二色檜といひ、混柏ともいひしは、ビヤクシンなり、扁柏といひしはヒバの類也、されば漢にして今に至ては、此に檜といふ者の如きは、無きが如くにも見えぬれど、日本寄語に、檜は丟那雞と見えしは、此國にして太古之初より、人居屋材となすもの、漢字を傳得し後に、檜字讀てヒノキとなせし卽是也、また前にも註せし如くに、或人癸辛雜識に、倭國所產新羅松、卽今之羅木也と見えし事を、新羅松は別牙松なり、此方處々これ有りといふ、新羅松の如き、此方にもありぬれど、本國の人の所居、悉くこれをもて屋材とすべきほど、多かるものにはあらず、彼にして日本羅木といふ事の聞えし始は、宋高宗南渡の後に、日本羅木をもて翠寒堂を建給ひしと、南宋宮殿記に見えしこそ始なりけれ、彼にして羅をもて呼びし木も少なからず、陸璣詩疏に、樣一名赤羅と見え、陸佃埤雅にも樣一名羅赤羅白羅の二種ありと見え、浙江通志汴州府志閩書等に見えし欏木、又癸辛雜識に新羅松を

眼如赤酸醬、〇略　注松柏。生於背上、而蔓延於八丘八谷之間、

〔新撰字鏡　木〕檜（古兌反、又古活反、比、）

〔倭名類聚抄　木二十〕檜　爾雅云、檜柏葉松身、（音會、又入聲、古活反、和名非、）

〔箋注倭名類聚抄　木十〕説文毛傳、檜、柏葉松身、焦循曰、合二家之市曰、檜、檜之爲木合松柏二木而得是名、故謂之檜、樅亦取叢聚之義、叢聚猶之會合也、〇中略　按、字鏡同訓、鑽是木得火、故爲名、廣雅、栝柏也、栝與檜同、柏可充飛乃岐、故源君訓檜爲飛、然對文則栝與柏異、下總本、飛下有乃木二字、與伊呂波字類抄合、類聚名義抄兩載、

〔倭訓栞　前編二十五　比〕ひ〇中略　檜を、ひともひのきともいふ、火を出す木なりといへり、本草に據ば檜はいぶきなるべしともいへり、癸辛雜識にいふ、新羅松一名羅木なるものといへど、羅木は日向松なるべし、又唐ひのきあり、山ひのきあり、葉こもれり、

〔由遠隨筆　下〕檜をさ。き。草。といふは、唐土道州といふ所は濁水の地にて、人常に是を飲ゆへ、短命也、此里には檜を尋ねとりて水に入れば、水澄で短命をのかる丶によつて、檜を幸木（サヽキ）といふ、民部卿入道の御説なり、幸（サチ）とよむ常の事也、サチサヽキ通音なり、

〔東雅　十六　樹竹〕檜ヒ〇中略　李東壁本草に見えし所は、柏葉松身者檜也、其葉尖梗亦謂之栝、今人名圓柏以別側柏と見え、通雅にも圓柏即刺柏、所謂檜也と見えたり、されど圓柏といふは即今俗にイブキといふ物にして、側柏といふは亦俗にコノテガシハといふ是也、古より我國にして、ヒノキといふものにはあらず、正字通には、今檜葉似油杉、幹如柏、其兼柏葉者名二色檜、爾雅説文皆云、檜柏葉松身、然今檜葉四出、葉半作束、半如柏葉、其木堅實、外白內朱、謂之松身、非是、或松葉柏身庶幾近似と見えたり、すべて是等の説の如きも、正しく檜といふもの知れりとは見えず、正字通に二色檜といふものは、即混柏此にビヤクシンといふものこれなるべし、むかし、我師なりし人の敎へて、

榧子をもよめり、歌にもかへとよめり、今かやといふは轉語也、蚊やうの義にはあらじ、柏實とも見へたり、日本紀延喜式などに、柏をかしはとよめば、柏に數種ありと知べし、かへの社、貫之集に見へたり、

〔牛馬問一〕或人の曰、柏の字かしはと訓ずるは誤歟、予〇新井粘登答て曰、柏は和名コノテガシワ、又古訓にカエといふ、不變といふ略訓にして、和朝常盤木の總名なり、此もの種類おほし各和名有、扨又もろこしの俗、柏を栢に書誤用ゆる事久し、日本の俗、栢は柏の字の俗字なる事を志らず、右のカエの訓をカヤとあやまり、榧の字と混ずるものなり、正字俗字を別て二字とし、二物と誤のみ、

〔草木性譜人〕栢

百木の長とす、深山の產なり、其嫩時枝條稠密、數十歲を經れば獨出、其枝横斜し、甚だ長じがたし、多壽にして松と壽を齊す、葉面葉背其色同じ、春時細小花を生じ、實を結ぶ狀小鈴の如し、霜後に至て四裂す、小子あり生じがたし、凡萬木皆陽に隨ふ、然るに此枝西に隨ふ、是其性なり、蓋陰木なるべし、舊說に、樵夫山に入て東西を失すれば、栢を看て知ると云ふ、又扁栢汝南圃史花栢本草綱目竹栢同上檜栢同上刺栢本草彙言羅漢栢山東通志左紐栢事物紺珠等は皆栢の一種なり、瓔珞栢秘傳花鏡矮檜事言要玄は其類屬中の一種なり、最扁栢を貴とす、卽和國の良材なり、

本草綱目釋名云、時珍曰、按魏子才六書精蘊云、萬木皆向陽、而栢獨西指、蓋陰木而有貞德者、故字從白、白者西方也、

〔佐渡志五物產〕柏

扁柏、側柏トモ、昔ハ此國ニナカリシナリ、今アルモノハ、皆近キ世ニ他ノ國ヨリ移シ栽タルモノナリ、

〔日本書紀一神代〕是時素盞嗚尊、自天而降到於出雲國簸之川上時、〇中略至期果有大蛇、頭尾各有八岐、

末、知何據、柀是榧之別種、皮厚、子不耐食、俗呼大榧者是也、又倭俗以槇字訓麻岐、槇字未載字書、和邦所製也、金松之名出于天台山外志、葉皆帶黃色、結子如松梂、故有松之名、

〔紀伊續風土記 物產六上〕金松（西陽雜俎、和名抄末木、槇の字を用ふるは非なり、槇は杉の一名なり、新撰字鏡槇をマキと訓ず、眞木の字を二合したるなり、又萬葉集に眞木とあるは、多く扁柏をよめるなり、此マキにあらず、今も木曾にては扁柏をマキといふと聞けり、）高野山の名品なるをもて、俗に高野マキといふ、一山の林中に多く、中にも奥院、山の南蓮花谷、五大堂より七八町許、東峯の尾に數千の金松森々として、中には一根に數十本叢生して、竹葦の生ずるが如きもの多く、千本槇といふ、空海の手づから植うる所といひ傳ふ、其材大なるは、堂宇或は器物に作りて一山の用を足し、其木皮を剝ぎて繩に綯ひ、諸國に運送して利益を得る事大なり、

〔日光山志 五〕金松樹　御厩の傍にあり、實は本槇と稱するものなり、石玉垣の內にあり、是は弘法大師高野山より移されし種なりといふ、周廻一丈餘、枝葉垂て茂生せり、

〔倭名類聚抄 二十木〕柏　兼名苑云、柏一名椈、（百菊二音、和名加閉、）

〔箋注倭名類聚抄 十木〕本草和名引同、按爾雅云、栢椈、兼名苑蓋本於此、那波本栢作柏、非是、於果蓏部辨之、〇中略說文、栢鞠也、鞠椈正俗字、郝曰、柏有脂而香、其性堅緻、材理最美、

〔倭漢三才圖會 八十八夷果〕榧〇中略倭名抄以柏爲榧異名、而柏與栢同字、故俗多以栢爲榧訓用、皆其誤起于和名抄、（柏即松柏之柏也、其木葉似榧而異、）

〔撮壤集 中木〕栢（カヤ）

〔書言字考節用集 六生植〕栢（カヤ）作柏、義同、一名椈、事詳本草、但與榧不同、

〔倭訓栞 前編加 六〕かへ　日本紀に柏をよめり、香重の義なるべし、倭名鈔同じ、今かへと名くる物なし、松柏とならべ稱するによれば、今世側柏、扁柏、圓柏、混柏、仙柏の類すべていふ成べし、倭名鈔に

金松

可以為顯見蒼生奧津棄戶將臥之具、夫須噉八十木種、皆能播生、(中略)○柀此云磨紀、

〔日本書紀 三神武〕戊午年九月、天皇甚悅、乃以此埴造作八十平瓮天手抉八十枚(手抉、此云多衢餌離、)嚴瓮、而陟于丹生川上、用祭天神地祇、(中略)○祈之曰、吾今當以嚴瓮沈于丹生之川、如魚無大小、悉醉而流、譬猶柀葉之浮流者、(柀、此云磨紀、)吾必能定此國、如其不爾、終無所成、乃沈瓮於川、其口向下頃魚皆浮出、

〔古事記 中仲哀〕答詔、是天照大神之御心者、亦底筒男中筒男上筒男三柱大神者也、(中略)○(註略)今寔思求其國者、於天神地祇亦山神及河海之諸神悉奉幣帛、我之御魂坐于船上而眞木灰納瓠、亦箸及比羅傳(此三字以音)多作、皆々散浮大海以可度、

〔古事記傳 三十〕眞木灰、此眞木は書紀神代卷、又神武卷に、柀此云磨紀、和名抄に、玉篇云、柀木名、作杜、埋之能不腐者也、日本紀私記云、末木とある(今世にも麻紀と云物あり)木か、又檜か、又たゞ佳木と云ことか、辨へがたし、灰は和名抄に、灰、波比、

〔夫木和歌抄 二十九槇〕長承三年顯輔卿家歌合紅葉　　維順朝臣

秋ふかみ朝夕露のもる山のまきのえたえは紅葉しにけり

〔大和本草 十一園木〕金松　俗高野柀ト云、稻若水曰、葉ハ羅漢松ニ似タレドモ、實ノ形松毬ノ如シ、羅漢松ハ實モ葉ノ味モ高野柀ト同カラズ、高野柀ハ高野山ニ多キ故ニ名付、酉陽雜俎續集九曰、金松葉似麥門冬、中一縷如金柀、高野マキハ大葉ノ麥門ノ葉ニ似タリ、是金松ナルベシ、　大明一統志、台州有金松、垂條如弱柳、結子如碧珠、三年子乃一熟、毎歲生者相續、一年者綠、二年者碧、三年者紅、

〔和漢三才圖會 八十二香木〕槇(中略)○

高野槇、　出於紀州高野山、人折小枝葉供佛前、故未見其大木、

〔本草一家言 三木〕金松　金松、倭名本麻幾、又名高野麻幾、紀州高野多有之故名、日本紀以柀字訓麻幾、

柀

而見其腹者、悉常血爛也、

〔倭訓栞前編十二須〕すぎ〇中略　常陸國太田ノ社造營の時、杉の神材の中に、鹿島大明神の文字あり、左右甚分明也、よて一は鹿島に納め、一は當社に納む、其社は、建速男命、建津分命也、

〔倭名類聚抄木二十〕柀　玉篇云、柀(音彼、日本紀私記云末木、今案又杉〇一名也、見爾雅注、)木名、作柱埋之、能不腐者也、

〔箋注倭名類聚抄木十〕爾雅釋木云、柀、煔、釋文云、煔字或作杉、故此爾雅注爲杉一名、其云一名者、蓋舊注也、〇中略今本木部作杉、木也、埋之不腐、釋木柀煔、郭注煔、似松、生江南、可以爲船及棺材、作柱、埋之不腐、顧氏蓋依之、煔、上文擧訓須岐、源君分柀爲未岐、非是、

〔和漢三才圖會香木八十二〕柀(音彼)　臭柀(俗)　和名末木　俗云久佐末木　別有眞柀、故名臭柀別之、

按爾雅注云、柀卽杉別名也、則是亦杉之屬乎、然柏檜之類也、奧州南部津輕松前多出之、其樹皮狀與檜同、剝皮用葺屋、或絢繩以止檜漏脫之功無異于檜、葉亦似檜而肥厚、略狹不結實、其木甚大、有高十餘丈者、用作帆檣、稠堅勝於杉、又長五六尺許、伐斫名檣木籠木、送之大坂、檣木則薪(へぎ)版覆屋、勝于椹也、籠木則作桶樽、皆耐水濕良材也、又長二三間、方五六寸者、宜作屋柱、

榧(音匪)　眞柀(俗)　末々木　俗用榧字、榧者木項也、別有臭柀、故爲之眞柀別之、

按榧以偏傍爲訓、如柾(マサキ)樫(カタギ)之類、俗字也、此與臭柀(クサマキ)材用大似而樹葉逈異也、信州木曾山中多有之、葉略似松而刺扁大、其材色白、密理、最耐水、作槽桶等、勝於臭柀、

〔和漢三才圖會夷果八十八〕榧(かや)〇中略

柀子　神農本草以爲別物、汪頴爲粗榧、蘇恭時珍等以爲榧異名、倭名抄以柀訓末木、異說紛紜、恐以倭名抄可爲是、

〔日本書紀神代一〕一書曰、素戔嗚尊曰、韓鄕之島是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者未是佳也、乃拔鬚髯散之卽成杉、又拔散胸毛是成檜、尻毛是成柀、眉毛是成櫲樟、已而定其當用、乃稱之曰、〇中略柀、

守、太政官處分並依請、

〔禁秘御抄 上〕草木

松　應和二年栽東庭、又栽瀧口廊前、又栽綾綺殿北廊南庭、文範進之、

〔土州淵岳志 中産物〕杉

高岡郡伊野村杉本大明神ハ、大己貴ノ命ヲ祭リ奉ルト云、神主杉本攝津方ヨリ板行シテ、諸方へ配ルナリ、此社頭ニ大木ノ杉數ヲシラズ有、住吉大和ノ三諸山ノ杉苗ヲ植シトイヒ傳フ、

杉利用

〔日本書紀 一神代〕一書曰、素戔嗚尊曰、韓鄉之島、是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者、未是佳也、乃拔鬚髯散之、卽成杉、〇中略已而定其當用、乃稱之曰、杉及櫲樟、此兩樹者、可以爲浮寶、

〔三代實錄 十一清和〕貞觀七年九月十五日癸巳、太政官下知彈正臺、左右京職、山城、攝津、伊賀、近江、丹波、播磨等國、禁材木短狹、及定載車法、曰、步板簀子榑長短厚薄、去延暦十五年初立制法、

〔佐渡志 五物產〕杉

赤白ノ兩種アリ、赤キヲ尙ブナリ、羽茂郡河茂村、加茂郡羽黑村ヨリイヅルモノ、大船ノ檣ニ作ルベシ、神代杉ト云モノ、物理小識ノ老杉ナリ、眞更川山居ノ池、ソノ外國中ノ深田ヨリ出ルナリ、器ニ作ルニ色淡黑ニシテ愛スベシ、

〔土州淵岳志 中産物〕杉

野根山、杉名物ナリ、此山ノ古キ杉ノ根ハ香氣アリ、不淨ヲ拂ヘリ、ムモレ杉、一種ノ奇香トナスニ堪ヘタリ、

〔倭訓栞 前編十二〕すぎ〇中略神代杉と稱するは、箱根の湖の水底より出るをいへり、土佐杉など同じく木理を賞せり、掖玖杉は酒家の槽に佳とす、

杉雜載

〔古事記 上〕答白、彼〇八岐大蛇目如赤加賀智而、身一有八頭八尾、亦其身生蘿及檜榲、其長度谿八谷八尾、

上より葭簀を覆ひにすべし、尤日中は覆ひ、夕方より朝四ッ時までは覆ひをとるべし、六月土用まへ迄に、小便に水六分を加へ和て二度もかけ、草生せば油斷なく取すつべし、左かすれば三四寸に伸出るなり、

其冬は上に屋根をこしらへ、雪霜のかゝらぬ樣覆ひして、其まゝ置べし、○中略

三年目の苗を翌四年目の春植る事○中略

扨右山に植たる杉苗は、兜しと　する事なけれども、下に生るいばらの類は、一年に壹度も刈とり植て、二三年も立て下はらひとて、下の枝を伐とるがよし、薩摩にては下枝を落し、木ぶりを作るよし、斯いたしなば、下のむせ枝をとるゆゑ木の成長よき道理なり、凡植付てより四五年も立ば、火吹竹位になるなれば、其内いがみある木ぶり悪きを撰び、間引心にてぬき伐すべし、餘國にては、はじめ植るとき、貳三尺も間おき植れども、吉野郡にては繁くうゑ三四年にて間引ゆゑ、木にいがみなく生立なり、始よりあらく植たるはいがみてきる也、最早八九ヶ年になれば、拔伐するが宜し、此伐たるは極になる也、十二三年迄の內、追々見計らひて拔切すれば、殘りたる木二十年立ば壹尺七八寸貳尺に廻る、三十年目は貳尺五寸より三尺廻りと、大體壹ヶ年一寸のわりに、十ヶ年に壹尺廻りづゝは成長して、五十年目には凡五六尺廻りの材にはなる也、是は皆吉野郡の杉作る人より聞所なり、

壹丈柱貳丈を、二十年目に伐出せば、吉野の山にて一本(但一丈ニメ)銀三分ぐらゐ賣直段なり、尤是より伐賃川流し等の掛り物かゝれば、山にてはかくのごとく下直也、

〔萬葉集十春雜歌〕古、人之殖兼、杉枝、霞霏、春者來良之、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年正月廿日丁酉、先是常陸國鹿島神宮司言、○中略伏見造宮材木多用栗樹、此樹易栽、亦復早長、宮邊閑地、且栽栗樹五千七百株椙四萬株、望請付神宮司令○令原作今、今據一本改、加殖兼齋

又此材木につき金を儲るもの、まづ地主木伐木挽山出し筏師中買材木屋等の口腹を養ふ事夥し、去からば人の智を以て、此深山幽谷よりかほどの產物を出せり、此材なきときと、今如レ此益となる所を考へ見て、不毛の地を徒に見過す事の有べきや、〇中略

杉を植べき土地の事

杉は平面の地の打ひらきたる所は宜しからず、又砂地石多き地、乾き地の芝山なども、又宜しからず、深山の谷河深く流れなだれの地の、日中二時か三時が間日あたりよく、其餘は日陰にて雜木ありて、土は始終しめやかにして、谷底邊には水草菖根にて、やれぐさともいへり、ひあふぎの葉に似たる草多く生立、去んくとしたる所宜し、吉野郡天の川などゝ云る所は、皆かくのごとくの地にて、杉の盛木至つて見事なり、杉は暖國より寒國の方宜し、暖國にても山ふかき陰地の北をうけて、濕ふかき地には隨分よく生立もの也、朝霧ふかく立覆ふ地ならば、かならず生育よろし、

杉の種子をとりて貯へ置まく事

秋の土用前より土用中實をとり、軒下にひろげ乾し置ば、寒中には己と落るなれば、よく叩き落して、紙の袋やうのものゝ中に入貯へ置て、春の彼岸に取出して蒔べし、若蒔おくれたるは、五月上旬までに蒔ても宜し、隨分彼岸頃をはづさず蒔かた宜し、おそく蒔たるは、寒中と翌年の暑にいたむものなり、

苗床を拵ふるは土地のよき所にすべし、眞土ならば砂を少々入切交て宜し、拵地をよくならし、糞水を一面に打、十日ほど干て鍬もて切まぜ、又よく地をならし、夫にばら蒔にして、其上に砂と土とを合せ、竹の篩にてふるひかけて、うすく蒔、きせ葉をばらりと置べし、然すれば雨にてたねを打あぐる患ひなし、五月入梅過る頃は、右置たる葉大體腐る也、其とき蒔たる種子少し生出る也、右蒔床の四方には犬など入ざるやう、臍丈位にわらをもて垣をすべし、拵はえ出たる時、垣の

杉栽培

杉木、格古要論 紫撒木、同上 白杉ハシラタト呼ブ、木ノ色白シテ腐リ易ク下品ナリ、○中略 凡ソ杉ノ葉ハ、皆末尖リ手ヲ刺ス、別ニ一種柔ニシテ手ヲ刺ザル者アリ、ヒメスギト云フ、一名トウスギ、漢名温杉、物理小識 又一種常ノ杉ニシテ、木ニ節多ク直ナラザル者アリ、オニスギト云フ、板トナシテ文理美シ、ウズラモクト云フ、又薩摩スギ、夜久スギトモ云フ、是野雞斑ナリ、又一種エンコウスギアリ、常杉ノ形狀ニシテ枝長ク下垂ス、又一種イトスギアリ、葉細小枝柔ニ長ク、下垂シテ絲ノ如シ、漢名詳ナラズ、

附錄　丹桎木皮　詳ナラズ

增、近年花戸ニホウワウスギト呼モノアリ、形狀スギニ似テ、枝悉クチヂレテ長ク下垂ス、幹ノ巨サ枝ト同ジ、故ニ倒レ易シ、即チ江南通志ノ羅漢條ナリ、云羅漢條產九華山、本如檜、高數丈、翠葉間、垂心白色、作結成條ト是ナリ、又一種アヤスギト云モノアリ、王氏彙苑ノ塔松ナリ、小木ニシテ葉細ク、軟ニシテ杉葉ノ強クシテ、手ヲ刺スニ異ナリ、

〔廣益國產考 二〕杉木仕立方

杉檜松の良材たるや、神社佛閣家造、其外の普請に至るまでも、此材を用ふるに事たらざるはなし、往昔より人多くなるにしたがひ、所々の山々に植て、其產する材木多きうち、和州吉野郡の杉木、木曾山の杉檜、其外諸國より出るといへども、日向の國より出る材木最も多し、諸方より伐出す所の材木は、中々擧るにいとまあらず、百五六十年ほど已前、吉野郡へ薩州屋久の島より杉の實を取來りて、蒔つけ苗を拵へ、谷々の山へ植弘めしに、深谷ゆゑ成木して、今は此一郡より板にわきて諸方へ商ひ、又柱やうのものに伐て谷河を流し、吉野川にて筏となし、末は紀州の海邊まで出し、船につみて諸國へ商ふ事、幾万兩といふ事あげてかぞへがたし、愛をもつて考ふれば、吉野郡へ未だ杉材なき時は、右の金溯出る所なきに、現在夫だけは昔より餘分に金錢を產出せり、

臭アルヲ、酒家コレヲ酒中ニ投ジテ氣味ヲ助ク、合壁事類ニ倭國ニ出者尤佳トイヘリ、本艸時珍出倭國ノコトヲ云ヘリ、昔日本ヨリ中國ニワタリシニヤ、

杉種類

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕杉 マキ古名 スギ和名抄 一名椙木格古要論 榅木汝南圃史 紗木通雅 剌杉物理小識 剌斗通雅ノ名

古名マキト云、故ニ古書ニマキノト、云ハ、杉戸ノコトナリ、大和本草ニ云リ、今俗ニ水桶等ニ用ユル木ヲマキト呼ブハ、クサマキノ略ニシテ、漢名羅漢松ナリ、其材杉ニ似テ臭キ故クサマキト云、スギト云ハ直ノ義ナリ、木理直ナル故ナリ、○中略又丹後及若州海邊ニハ土中ヨリ掘出ス杉アリ、色紫黒器物ニ造リ甚香氣アリ、コレヲネギト呼ブ、物理小識ノ老杉ナリ、又相州箱根湖中ヨリ出ル神代スギハ色淡黒ナリ、人用テ器物トス、コレモ亦老杉ナリ、

增○中略又神代スギハ物理小識ノ老杉ニシテ、香祖筆記ノ沙板ナリ、年久シク泥中沙ニ在テ、土氣ノ爲メニ滋セラレテ、土木ノ兩性相浹シテ、久ヲ歷テ壞レザルモノナリ、コレニ同名アリ、附方ニ老杉ト云ハ、古キ杉ノコトナリ、又ジンダイスギヲ陰杉トスル說ハ穩ナラズ、籓騷雜記云、密箐中有一種陰杉者、其木橫生土中、不見天日、有枝無葉、在泥沙中、自生自長、世莫之知也ト云ハ、ウモレギノコトニシテ、卽雲南通志ノ木煤ナリ、卽所謂泥沙中自生自長ノモノニシテ、神代スギノ山中自生ノ大樹泥沙中ニ倒入スルモノニ異ナリ、木煤ハ石炭ノ條ニ詳ニ辨ズ、

〔倭訓栞前編十二〕すぎ○中略いとすぎあり、絲杉也、温杉也といふ、吉野杉の上品をべにすぎといふ、猿猴杉あり、姬杉あり、綾杉あり、鬼杉あり、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕杉○中略

集解ニ有赤白二種ト云、赤杉ハアカスギ、一名アブラスギ、色紫ヲ帶テ香氣多シ、器物トナスニ良ナリ、土佐スギハ酒樽ニ造ル、香アリテ蛀クハズ、薩州夜久スギハ蛀クヒ易シ、一名油杉宗奭ノ說紫油

をよむは、三代實錄に見ゆ、榅を誤りたるなるべし、

〔鹽尻五十四〕一杉椵の二字、互にスギともマキとも訓ぜり、スギとは直木の轉語也、マキは眞木也、ゆるまざるを謂、倭歌にもまきの戸とよめるも、まき立山などいへるも、杉の木の事なりとかや、

〔古事記傳九〕榅諸本椙と作、今は延佳本に依れり、抑古書どもに須疑に此字を用ひ、或は椙とも多く作り、書紀顯宗卷に振之神榅、榅此云須疑と見え、出雲風土記に、杉字或作椙と見え、萬葉などにも、杉椙ともに用ひたり、和名抄に杉和名須木、今按俗用榅字非也、榅柱也、見唐韻とあれど、漢籍にも集韻に榅音溫、杉也と云り、此は宋代の書なれども、古き據ぞありけむ、さて榅を椙と作くは、常のことなり、椙は榅を誤れるものなるべし、さて須疑は進木なり、此木かたはらへはびこらず、たゞに上へすみ上る木なればなり、直木とするはわろし、直をすぐと云こと古にあらず、

〔日本書紀十五顯宗〕天皇詔之曰、石上振之神榅、榅此云須疑伐本截末、○中略於市邊宮治天下、天萬國萬押磐尊御裔、僕是也、

〔出雲風土記上意宇郡〕神名樋山、○中略凡諸山野所在草木、○中略杉字或作椙

〔萬葉集四相聞〕丹波大娘子歌
味酒呼、三輪之祝我、忌杉、手觸之罪歟、君二遇難寸

〔夫木和歌抄二十九杉〕題不知
かみなびのみむろの山にかくれすぎ思ひすぎんやこけをふるまで　よみ人しらず

〔大和本草十一園木〕杉　木直ナリ、故スギト云、スキハスク也、種類頗多シ、赤白アリ、赤杉ヲ爲良、鬼杉アリ、木ネヂケ木理ユガミテアシ、不可植、日本ニ昔ハ杉ヲマキト云、マキノ戸ナド云モ杉戸ナリ、凡杉ハ美材ナリ、柱トシ棺ニ作リ、土ニ埋ミ桶トシ、水ヲ入テ久シク不腐、屋ヲツクリ船ニツクリ、帆柱トシ、器ヲ製ス、甚民用ヲ利ス、枝ヲ正二月ニ插ミテ能生ズレドモ、實ヲウヘタルガ、正直ニ美材トナルニシカズ、山ニ宜シク黃赤土ニ宜シ、沙土ニ不宜、棺ニ作ニハ赤キ油杉ヲ用ユ、油杉ノ香

松雜載

にあり、此松赤松にして、すべてくろ松なしとぞ、田深浦の松は根のあがりたる間を、馬にのりて過べしといひ、紀伊國のも人立て往來すべしといふ、その松の立つゞきたる間いづくのも凡三四町ばかりありといへり、

〔夫木和歌抄松二十九〕日向國にことひき松の峯に浪よす　重之
しら浪のよりくる糸ををにすげて風にしらぶることひきの松

〔日本書紀神代一〕是時素戔嗚尊、自天而降到於出雲國簸之川上時、〈中略〉至期果有大蛇、頭尾各有八岐、眼如赤酸醬、〈註略〉〇松栢生於背上、而蔓延於八丘八谷之間、

杉名稱

〔倭名類聚抄木二十〕杉　爾雅音義云、杉〈音彡、一音纖、和名須木、見日本紀私記、今案俗用榅字非也、榅音於紛反、柱也、見唐韻、〉似松、生江南、可以爲船材矣、

〔箋注倭名類聚抄木十〕按須、瘦淸之義、草類薄條詳之、岐、木也、言細瘦直上木也、本居氏謂進木之義、或以爲直木之義者、爲非、未深究其語原也、杉見神代紀上、榅見顯宗紀、按集韻云、榅、烏混切、杉木、是榅訓杉、非皇國俗用也、又按廣韻、於粉切紐、不載榅字、集韻、於問切紐、載云、柱也、廣韻又無載、玉篇、榅、於渾切、柱也、〈中略〉〇所引文、爾雅釋木、被、粘、郭注略同、唯船下有及棺二字爲異耳、此引音義、恐誤、玉篇粘作樧、云、杉同上、

〔圓珠庵雜記〕杉、スギ　直木すぐきといふべきを略せるにや、

〔倭訓栞前編十二〕すぎ　杉を訓せり、新撰字鏡に樧とも見ゆ、日本紀に、榅をもよめり、集韻に杉也と見ゆ、直スグに生ふるもの故に名とするよし萬葉集抄に見えたり、げにもはら神木とし、正直の表物なれば、日本紀にも、石上振之神榅、萬葉集にも、三諸の神すぎなども見えたり、されば我邦の產物なれば、日本紀にも、石上振之神榅、萬葉集にも、三諸の神すぎなども見えたり、されば我邦の產まされる事、合璧事類に見えたれば、もと此邦の產にや、本草にも、倭國に生るものを、倭木といふと書せる也、神名式には棒もよめれど、こは欅字の誤にて、訓もぬぎ謬てすぎとなる也、俗に椙字

住給ふ延喜の御事、ツレ松とは盡ぬことの葉の、シテ榮えは古今相おなじと、二人御代をあがむるたとへ也、ワキよく〳〵きけば有難や、今こそ不審はるの日の、シテ光りやわらぐにしの海の、ワキかしこは住の江、シテ爰は高砂、ワキ松もいろそひシテ春もワキ長閑に上歌同四海浪靜にて、國も治まる時津風、枝をならさぬ御代なれや、あひに相生の、松こそめでたかりけれ、實やあふぎても、ことも、おろかやかゝるよに、すめる民とて豐かなる、君の惠みぞ有難き〳〵、○下略

〔紀伊續風土記物産六上〕根鷹松（ネアガリマツ）

海部郡雜賀莊闕戸村高松茶屋の北、古松數百松原をなし、松の根皆高く揚り、蟠龍屈蛇の狀をなせり、高きものは一丈餘、卑き者は五六尺に下らず、土人呼びて高松の根鷹松といふ、一の奇觀なり、江南通志に載せたる黄山松の類なり、

〔書言字考節用集六生植〕三鈷松（サンコノマツ）在紀州高野山

〔長崎紀行二〕十八日〇明和三年十一月室を出て二里正條にて馬をつぎ、姬路に到り晝食す、此とき五六輩高砂廻りを約す、大道を二里計行て左へわかれ、曾根天神へ參詣す、祠前に偃松有、無類の名木也、菅公手づから植給ふとぞ、

題曾根偃松

聞道菅公遺愛松、盤根偃蓋鬱重々、高風何借大夫爵、長帶祥雲似臥龍、

偃松圖略〇圖今計太周一丈八尺、梢二丈三尺、枝自坤至艮二十間餘、自乾至巽十間餘、其間鬱茂如偃蓋、每枝以木支之百五十八木、天正以前枝葉甚盛、天正中祠宮罹兵火、此時西南枝燒枯、

〔古今要覽稿草木〕根あがり松

根あがり松は豐後國國埼郡田深浦、田邊文三說豐前國企救郡內裏浦、及び紀伊國和歌浦紀伊國名所圖會等

を積みて、泊りの波も遠淺となり、船の出入もよろしからずとて、又數年を經て、今の高砂といへる所へ、家どもを移し、同所ながら高砂尾上と相別ちて隔事八丁計也、相生の松は、天正の頃、羽柴秀吉、三木城別所小三郎を責る時、小三郎救ひを毛利輝元に請ふ、卽藝州より小早川隆景、吉川元春兩大將にて總勢三万餘騎、兵船二百餘艘、明石郡魚住の浦に著き、粮を三木城へ運送の後詰の爲に、總軍今の尾上高砂の邊りに陣を取り、かの松を伐て薪とす、夫より枯朽て、慶長九年領主池田輝政の沙汰として、枯根の上に神祠を移し、左方に鐘樓を建てけり云云、後又祠の艮に移す

〔古今和歌集雜十七〕題しらず　　藤原おきかせ

たれをかもしる人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

〔謠曲〕高砂

ワキ詞抑是は九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とは我事也、我いまだ都をみず候程に、此度思ひ立みやこに上り候、又よき次なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存候、〇中略上歌所は高砂の〳〵、尾上の松も年ふりて老の波もよりくるや、木の下陰の落葉かくなる迄命ながらへて、猶いつまでかいきの松、それを久しき名所哉〳〵、ワキ詞里人を相待處に老人夫婦來れり、いかに是成老人にたつぬべき事の候、シテ詞こなたの事にて候か、何事にて候ぞ、ワキ高砂の松とは何れの木を申候ぞ、シテ唯今木陰を清め候社高砂の松にて候へワキ高砂住の江の松に相生の名有、當所と住吉とは國をへだてたるに、何とて相生の松とは申候ぞ、シテ仰のごとく古今の序に、高砂住の江の松も相生の樣に覺えとあり、去ながら、此尉は津の國住吉の者、是成うばこそ當所の人なれ、しる事あらば申さ給へ、〇中略ワキ謂を聞ば面白や、扨々さきに聞えつる相生の松の物語を、詞所にいひ置いはれはなきか、シテ詞昔の人の申しは、是はめでたき世のためしなり、ツレ高砂といふは上代の萬葉集のいにしへのぎ、シテ住吉と申は、今此御代に

磐代乃、岸之松枝、將結、人者反而、復將見鴨、
磐代乃、野中爾立有、結松、情毛不解、古所念、

〔書言字考節用集生植六〕武隈松事見歌林良材在奥州名取郡、

〔後撰和歌集雜歌十七〕みちのくにのかみにまかりくだれりけるに、たけくまの松のかれて侍けるをみて、小松をうへつかせはべりて、任はて、のち又おなじくにゝまかりなりて、かのさきの任にうへし松を見侍て、　　藤原もとよしの朝臣
うへし時契りやしけむたけくまの松をふたゝびあひみつる哉

〔書言字考節用集生植六〕阿古耶松在羽州最上郡、見歌枕、

〔古事談臣節二〕實方經廻奥州之間、爲見歌枕、每日出行、或日アコヤノ松ミニトテ、欲出之處、國人申云、アコヤノ松ト申所コソ、國中ニ候ハヌト申之時、老翁一人進出申云、君ハイヅベキ月ノイデヤラヌカナ此歌ミチノクノアコヤノ松ニコガクレテト申古歌ヲ思召テ、被仰下候歟、然バ件歌ハ、出羽陸奥未境之時、所讀之歌也、被堺兩國之後者、件松出羽國方ニ罷成候也ト申ケリ、

〔東遊記四〕阿古屋松〇圖略
實方中將の尋侘給ひけるといふ阿古屋の松は、昔は奥州と聞しに、今は出羽の内に屬して、山形の城下より坤の方とも覺えて、二里ばかりを隔てたり、其地を千歲山と云、其松今も昔の色見えて、常盤の陰榮え茂りて、誠に目出度木にてぞ有ける、

〔播磨名所巡覽圖會加古郡三〕尾上松四丁四方の松林にて、長田の莊にあり、四季ともに松露を產す、住吉明神祠大原大明神同林中にあり、例祭八月廿日、
社記云、播州尾上は、神功皇后三韓征伐御歸朝の後、住吉の御神と同村の鎭座也、高砂と號く所、東は池田より、北は此所に續き、人家多くて、船の往來も程近く、漁獵のたよりもよろしきに、世變年

至テ十一丈、枝ゴトニ枝ヲナス、ソノ數百五十八本アリ、傳テ菅公ノ神木ナリト云、又泉州左海難波屋ノ松ハ、高サ僅ニ三尺許ニシテ、四方ニ布クコト數丈、枝下ノ枝三百餘柱ニ至ル、

○唐崎ノ松ノ事ハ、神祇部神木篇ニ詳ナリ、

〔本朝奇跡談中〕同國〇下野日光の内如法山に、還松と云名木有、五葉にして貳里四方有と云、此松を見るに拾八九町程も有と見ゆる、根の方は谷にして上よりは見へず、此木高サ三四尺許にして、段々四方へ還ひはびこりたり、無類の名木なり、

〔松屋筆記八十〕松の名木

陸奥桑折宿に判官の腰掛松あり、身木の高さ一丈許にて、枝十五本四方に出、そのわたり四十五間あり、諸人其間をわけ入て枝にこしかけ、茶菓烟草を服用し、松のさまを賞觀す、枝間こゝかしこに茶屋ありて、客を引こと實に奇絶の名木也、一の城戸、下紐の關などもこゝに並たり、さるに天保二三年の比にや、火に燒失たりといへるは、口をしきわざ也かし、　同國南部盛岡より八九里北に雪浦村あり、そこにしだり松とて、めぐり一丈五六尺、高さ數十丈の松あり、枝ことく〳〵しだれて、行人の笠を拂ふ、實に世の珍木也、　志摩國鳥羽より一里ばかり東に波分とて大樹あり、其形無雙の奇觀也、

〔東遊雜記一〕石母田村〇岩代國といふ所に、街道三丁許り寄りて義經の腰掛松と云名木あり、其木の大キサ二抱半、高サ凡一丈、枝葉八方にたれ、枝の地に入りし所二所、南北十間餘、東西十二間餘、廻りを周り見しに百七十歩、播州曾根の松にさして劣らぬ松なり、しかし女松也、

〔南紀名勝略志日高郡四〕岩代ノ結松

岩代ノ庄、岩代村ノ岸ノ上ニ有、

〔萬葉集二挽歌〕長忌寸意吉麿見結松哀咽歌二首

り松（高田）　鈴掛松（千駄ヶ谷）　遊女松（同上）　鎮座の松（澁谷）　鞍懸松（代々木）　一本松（麻布）　笠松（千駄ヶ谷千手院）

〔江戸名所圖會十七〕時雨岡（しぐれのをか）　同所（○根岸）庚申塚といへるより三四丁艮の方、小川に傍てあり、一株の古松のもとに不動尊の草堂あり、土人此松を御行（おぎやう）の松と號、來由は姑くこゝに省略す、一に時雨松（しぐれまつ）ともよべり

回國雜記　忍ぶの岡といへる所にて、松原のありけるかげにやすみて、

霜の後あらはれにけり時雨をば忍びの岡の松もかひなし（道興准后）

按に、忍の岡（しのぶのをか）といへるは、東叡山の舊名なり、此地も東叡山より連續たれば、回國雜記に出るところの和歌の意を取て、後世好事の人の號けしならん歟、

〔常陸風土記（香島郡）〕郡南廿里濱里（○中略）以南童子女松原、古有年少童子（俗曰加味乃乎止古、加味乃乎止賣、）稱那賀寒田之郎子、女號海上安是之嬢子、並形容端正、光華郷里、相聞名聲、同存望念、自愛心熾、經月累日、嬥歌之會（俗曰宇太我岐、又曰加我毘也、）邂逅相遇、（○中略）玆宵于玆、樂莫之樂、偏耽語之甘味、頓忘夜之將闌、俄而鷄鳴狗吠、天曉日明、爰童子等不知所爲、遂愧人見、化成松樹、郎子謂奈美松、嬢子稱古津松、自古著名、至今不改、

〔重修本草綱目啓蒙（二十三香木）〕松（○中略）增、唐崎ノ一ツ松ハ、江州志賀郡唐崎ニアリ、日本後紀ニハ唐崎ヲ可樂崎ニ作ル、日本奇跡考ニハ辛崎ニ作ル、唐崎松ノ記ニ云、天智天皇御宇コノ松ヲ栽シニ、天正九年ノ大風ニ倒ル、故ニ新庄直頼ト云者フリヨキ松ヲ栽ヘツガシム、其コロ或人ノ歌ニ、自ラチトセモフベシ唐崎ノ松ニヒカルヽミソギナリセバト詠ゼリ、又同國大津石場ニ呼ツギノ松ト云アリ、文政元年ノ比マデハ至テ小木ナリシニ、天保ノ末年ニ至テ僅ニ二十四五年ノ間ニ珍シキ大木トナリ益繁茂ス、此樹後來必ズ唐崎ノ松ヲ欺クベシ、又丹後成合ニ片葉ノ松ト云モノアリ、又曾根ノ松ハ播州印南郡曾根村ニアリ、高サ一丈三尺、周リ一丈八尺アリ、戌亥ノ方ヨリ辰巳ヘサシテ七丈、丑寅ヨリ未申ニ

此事稀にあるのみ、駿府近在巡見集云、羽衣へ行道に女松男松一本に二色に別れたる松あり云云、駿府寺社巡見記云、相生松は、神前向通り大楠より少し先にあり、女松今は枯たり云々、

〔玄同放言 二〕三。浦。平。松。國崎天道松附出

相模國三浦郡一色村にふりたる松ありけり、土人これを平松と唱ふ、松のある處、守渡(もりと)より浦賀路を、十五六町なるべし、近きころより、件の松に靈あり、祈ればよろづの病著平癒すとて、近鄕の人はさらなり、江戸より詣るも亦多かり、その詣るもの、線香を樹下に立て、默禱す、願事成就の日は、各芝を藉ゑ、小幟を建て、賽せざるものなし、小坪の漁夫等、海の幸なきとき、この幟を借りて、その船にたつれば、究めて獲多しとなん、松の前面なる端山の裾に、いとわびたる茶店ありて、線香を鬻けり、眼を病むものは、この樹の虚なる水を乞ひ得て、竹筒にたくはへ、携へかへりて眼を洗へば、果して應驗ありといふ、原この松蔭に、山王の禿倉あり、更に件の松を齋祀て、平松權現と號く、丙子の初冬、余〇瀧澤解は輿樾に扶掖れて、江島に遊べるかへるさ、目擊する所なり、木たちのさま、よのつねの物にして、守渡の千貫松には似るべくもあらず、杪椏からで、只向上るばかりなるを、などて平松となづけけん、むかひて左なる大枝は折れたり、二十とせばかりさきの年、雷の落ちたることありけり、そのとき折られたりといふ、茶店の翁が問はずがたりいとをかし、然らばなほその頃は、この樹に靈のあらざるなめり、現に數百年なる物とは見えず、いかなる草鞋大王が、凡夫の爲に稲ひして、飽まで齋きまつられけん、生物識のかなしさは、いと解しがたきことにぞありける、

〔武江產物志 名木〕松(まつ)　御言葉の松大久保　上意の松龜戸普門院　相生の松上野　龜子松上野

頭巾松御城内にあるよし　首尾の松淺草　船松淺草　霞の松橫揚　斑女が衣懸松向ヶ岡　道灌

船繋松　鏡の松根岸圓光寺　五石松駒込　船繋松小石川　千年松筑土八幡高田　大友の松牛込　光

松といふ、卽黃庭堅の所謂連枝松なり、近きころ肥後國熊本城より一里許へだて、五町、手永うるけ村といふ處にある連理松の圖をみれば、二樹の枝中ほどにて、合してつらなりたり、これは攝津信濃にあるものとは全く別にして、をのづから一種の連理松なり、

〔太平記三十〕吉野殿與相公羽林御和睦事附住吉松折事

憂カリシ正平六年ノ歲晚テ、アラタマノ春立ヌ、○中略二月二十六日、主上○後村上巳ニ山中ヲ御出有テ、○中略東條ニ一夜御逗留有テ、翌日頓テ住吉へ行幸、○中略住吉ニ臨幸成テ、三日ニ當リケル日、社頭ニ一ノ不思議アリ、勅使神馬ヲ獻テ、奉幣ヲ捧グタリケル時、風モ不吹ニ、瑞籬ノ前ナル大松一本、中ヨリ折テ南ニ向テ倒レニケリ、勅使驚テ子細ヲ奏聞シケレバ、傳奏吉田中納言宗房卿、妖ハ不勝德ト宣テ、サマデモ驚給ハズ、伊達三位有雅ガ、武者所ニ在ケルガ、此事ヲ聞テ、穴淺猿ヤ、此度ノ臨幸成セ給ハン事ハ難有、其故ハ、昔殷帝大戊ノ時、世ノ傾ンズル兆ヲ呈シテ庭ニ桑穀ノ木一夜ニ生テ、二十餘丈ニ迸レリ、帝大戊懼テ伊陟ニ問給フ、伊陟ガ申ク、臣聞妖ハ不勝德ニ、君ノ政ノ闕ル事アルニ依テ、天此兆ヲ降ス者也、君早德ヲ修メ給ヘト申ケレバ帝則諫ニ順テ、正政撫民、招賢退佞給シカバ、此桑穀ノ木、又一夜ノ中ニ枯テ、霜露ノ如クニ消失タリキ、加樣ノ聖德ヲ被行コソ、妖ヲバ除ク事ナルニ、今ノ御政道ニ於テ、其德何事ナレバ、妖不勝德トハ傳奏ノ被申ヤラン、返返モ難心得才學哉ト、眉ヲ顰テゾ申ケル、其夜何ナル嗚呼ノ者カシタリケン、此松ヲ押削テ、一首ノ古歌ヲ翻案シテゾ書タリケル、

君ガ代ノ短カルベキタメシニハ兼テゾ折シ住吉ノ松、ト落書ゾシタリケル、

〔駿國雜志二十六〕相生の松。。

有渡郡三穗村三穗明神の社頭にあり、神木也、里人云、良緣を祈るに、此浦の松の枝を結て緣結とす、必志るしあり云々、又云、此浦の松葉悉く一莖一穗あり、故に三穗を以て地名とす云々、然らず、

山野之風致、其下撒枯松葉、是謂敷松葉、松葉貴赤色、所々雖有之、近江勢多山出者爲宜、其葉長大而其色淡紅也、土人携來賣京師、

〔伊豆海島風土記下産物〕松　大木アリ、專ラ漁舟ヲ造、木性最堅シ、然ルニ白蟻ト云ヘル虫好テ食フ、故ニ家財ニ用ヒズ、木フリ、葉形ハ海風ニナレソダツユヘ、リキミアリテ見ルニタレリ、

此木船具ノ用ニ專ラナル故ニ、土人勤テ植養ト云ヘドモ、汐風烈シキ故ソダチ難シ、木性モ下品也、

〔林政八書〕山奉行所公事帳○中略

一松木之儀、船、楷木、舂、とくす、砂糖車之冠基木、加治炭、大薪木相用、肝要成御用木候間、取調候砌、其見合尤候、將又大薪木之儀、木數太分伐取、殊御急用之節は、素生よらべ方不能成、且取出候人夫、並積渡候船間等にも不勝手有之候間、毎年十二月、各間切、百姓男女打立、所之撿者、山奉行、筆者、さはくり以下之役々、前おゑか人迄罷出、致下知、翌年中上納分、津口へ取出置、時節見合、積渡候はゞ、諸座御用、又は百姓農時之故障無之、可宜候條、向後右通可申渡事、

〔本草一家言三木〕連理松　山谷有戲答陳季常寄黄州山中連理松枝詩、

五雜俎曰、段成式云、欲松不長、以石抵其直下、使不必十年方偃、然亦不盡然也、凡松髡其頂則不復長、旁幹四出、久卽偃地矣、京師報國寺有松七八株、高不過丈許、其頂甚平、而枝幹旁出、至十餘丈者數百莖、夭矯如游龍、然寺僧恐其折、每一幹以一木支之、加丹堊焉、好事者携酒上其頂、盤居群座、此亦生平所未嘗見也、

〔古今要覽稿草木〕連理松

連理松は一根に雌雄交り生すと本草家言いへり、攝津國有馬郡香下村攝陽群談矢田部郡駒林村同上等にあり、みな一根にして二幹となり、雌雄交り生じたり、また信濃國上田にも此松あり、土人相生

松利用

留致候、

一同五年三月、宮山より北へ通し山神迄、八十本植付、□□□サドリヲ附、人夫ヲ仕ヒ、風除垣為致候、

一同七年十月、松苗三千五百本、他山より求メ植留、北古城山ヲ見通し植付致候、

一同十年二月、壹萬貳千六百本、南山より取來り、土地見計ヒヲ以植留、

一同十□年、古城山より百日山見通し五千本、并アサドリヲ附、咸々御頂戴ノ地盛木茂リ様盡力シ、是迄一通りあらく植留申候、為後覺記置候事、

慶長十五庚戌五月　日　神主　秦周防守

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕松 祥容切 枀 同 枩 同 和名萬豆 松黄 俗云美止利 樘 音棠 橖 同 學棠之

生處〇中略

按今人採松嫩葉、漬水二三宿、去惡汁、以酒蒸七次、晒乾盛袋擣之、柔靭時代煙草、又用松脂煮湯、去塵滓、冷水、又煮七次、晒乾研末、加氷糖等分服之、治痰痓癖心痛、〇中略

松節　耐久不朽、燃火以代油、凡松性惡濕、其材亦不堪作水器、如屋柱須用煙行處、如近濕地、經久則生蠹、但日向之產為良材、其肥赤色者能耐水、作船槽亦佳、

〔眞俗交談記〕賀表松筆事、此木自何山取之哉、賫實等閉目不答、頃之為長云、此松自三笠山取之云々、雖然菅淳茂天暦賀表、蒙勅勤此事之時、取之所松枝、造筆書之畢、當家守此記云々、賫實尋其所之時、為長以扇二三度打座前、潛嘯不答、予頻雖尋之、終以隱密止問、賫實云、凡取松在所非一、春日山、男山、加茂山、北野等也、然而以春日山為其始、匡衡記錄男山松取之云々、明衡記、自春日山取之云々、爰敦光背明衡例、自賀茂山取之、則鳥羽院御宇、天永元年正月、御元服勤此事畢、依別勅自賀茂取之云々、

〔雍州府志 六 土產〕松葉　倭俗書院并茶亭之庭、謂露地、其徑點平石、賓客步其上、是謂飛石、又種樹木摸

〔松屋筆記 五十一〕松を植る傳

松を植る時節は、寒國暖國の不同ありと雖ども、正月彼岸より二月中植れば、百に一失なし、大木の一尺より五尺に及ぶは、掘て鋸にて根を挽切り、たゞ命根二三本を殘して、切たる廻りによき土を入ておく、俗に是を鉢といふ、又根をまはしておくともいふ、かくして明年の二月移し植べし、梢は鋸にて切べし、梢を切らざれば活(ツク)ことなし、松は沙地によし、又黑土眞土もよし、濕地は相應せざるよし、滕氏裕が中陵漫錄四の卷に見ゆ、また橘春暉が北窻瑣談に、松の木その根さしたるやうに枝もさすもの也、枝ぶりを見てその根を知べし、外の樹木も大かた如此といへり、與淸曰、松は常陸鹿島郡に生るもの奇妙也、小松を刈取し跡に、孫枝を生じて榮ゆるは、他所に未だきかず、戲に引ぬきてなげ捨置に、やがて生付(オヒツク)と云へり、余が見聞の松おほかる中に、坂東にて見たりしは、相模國藤澤宿と、南鄕村の間には松が原あり、今も好キ松四本生立リ、同國曾我山の六本松、早川尻の四本松、本所小名木澤の三本松、下總國印幡沼邊の大松、武藏多摩郡小山田村神明宮の大松、同郡下矢部村八幡宮の大松、鹿島大神宮の神木など擧盡しがたし、高砂、住吉、武隈、辛崎の類の名木は、別に古書を抄出して記すべし、

〔廣益國產考 八〕松山を急に仕立る心得 ○中略

九州或國諸侯の藩中に、山奉行を勤る正田何某といへる人あり、松苗をこしらへ、是迄松木生立あしき山、或は黑土赤土にて地味惡しき所などに植付育けるに、至つて見事なる松山となりたり、

〔杵築浦防風工事舊記〕妙見社山植留之事

一慶長三年五月、砂吹上强ク、東御田地のさわり、且は御宮山廻り砂行込甚敷ニ付、西なだ江付而は、砂除垣ヲ拵初メ、松苗壹萬五千本、南神在鄕より取寄求之、宮山より見通し高見なた手迄、植

松の實をとるは肥て成長宜しくうるはしき松毬【西國關東にて松かさと云、内邊にてちいりといへり、】鱗をとりて、日にほしよく、たゝき落し、紙袋やうのものにいれ、貯へおき、春二月にとり出し、右杉苗床の通り地ごしらへして、蒔やうも、圍ひ方、覆ひの仕方も、杉苗と同じやうに致し育なば其秋貳三寸に伸べし、是は實を賞翫するもの、苗とちがひ、雄苗を賞すれば伸、おそきは多分雌苗なれば、間引すて、雄苗をそだつるやうにすべし、十月末にのこらずこき揚て、畑にうねを切、根をかさねならべ入、土を覆ひ、上に古俵にて覆ひをし、雪霜をいとふべし、苗床少しならば其まゝ置、上に藁にてざつと覆ひを致してよし、暖國ならばたとへ苗床廣くとも、其まゝ置て小竹を伐て幾本も土にさしこみ、竹の葉にて苗を覆ふ様いたし置ば、寒氣をいとふ也、　こき揚て圍ふたるも、其まゝ置て圍ふたるも、春二月に掘いだし、餘り長き牛房根ははさみ捨、圖のごとく〇圖略畦をこしらへ、貳行に間八寸ほどおき植ならべ、十日もすぎて薄小便をかけ、根際に芥の腐りたるを入、夏の土用まへに厩肥やうのものを根ぎはによけて施し、草をとり根に鍬を入育つれば、秋の末には八寸あるひは壹尺にも伸べし、冬は其まゝ置てよし、又寒氣つよく雪のふる所にては、木の根に藁をうすく置べし、　春二三月比掘あげて、山にうつし植て宜し、今一年貯へおきうつしてもよし、

〔草木六部耕種法十一需花〕松ハ黒松モ赤松モ、山上眞土ノ高燥ノ所ニ宜シ、肥養ニハ禽獸魚介ノ肉ヲ腐シテ用ベシ、又油糟モ妙ナリ、凡ソ松モ盆栽等ニ造リ、或ハ花壇ニ栽タルヲ、種々盤屈タル雅狀ニ造ルニハ、實生二年ナル松苗ノ勢壯ナルヲ、根ヨリ上ヲ扭ナガラ曲テ、竹カ皮付ノ木ニ巻付テ、蕨縄ヲ以テ縛綁、ソノ竹カ木ヲ地ニ刺込テ、松ニ肥養ヲ懇ニ培ヒ育ルトキハ、盤曲タル儘ニテ肥リツヽ、古木ノ形容ヲ成就スル者ナリ、何レノ木ヲ屈曲セシムルニモ、皆其枝ヲ扭ル心持ニテ曲ザレバ、折損フモノト知ルベシ、既ニ幹ヲ巻付タル上ニテ、又枝ヘ竹ヲ添ヘ、或ハ銅線カ蕨縄等ニテ枝ヲ巻キ、扭ナガラ曲屈テ望ノ如クニ造ルベシ、

〔新編常陸國誌 六十 土産 一〕鹿島松（カシマツ）○荒神松○一向門徒松

鹿島郡ノ南地小松多シ、數里ニワタリテ、砂地悉ク小松ナリ、古ノ若松浦ト云ハコレナリ、荒神ニ備ル松、及一向門徒ノ佛前ニ供スルモノ、大概コノ地ノ産ナリ、

蝦夷松

〔和漢三才圖會 八十二 香木〕落葉松　富士松 俗〇中略

一種蝦夷（エゾ）松　似富士松而葉略長、其色亦深、至冬落葉、出於蝦夷地、奥州松前有之、

海松

〔和漢三才圖會 八十八 夷果〕海松子（からまつのみ）　新羅松子　俗云朝鮮松子〇中略

按海松子凡出於中國外者皆稱海某、如海紅豆亦然矣、此松子多來於朝鮮、以爲果食、栽其種生者往往有之、葉長而與日本松大異也、然結子者希也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二 夷果〕海松子　朝鮮マツノミ　カラマツノミ　一名位叱 郷藥本草　樹一名新羅海松 通雅

凡ソ松葉二針ナル者ハ常ナリ、コノ松ハ五針ナリ、今俗ニ五葉マツト呼ブ者ハ、赤松（メマツ）葉ノ形ニシテ五針ナリ、海松ハ葉燈心草ノ大ニシテ背白シ、朝鮮人來聘ノ時、多クコノ松子ヲ齎シ來ル、名産ナリ、形大ニシテ巴豆ノ如シ、三稜上尖リ茶褐色、皮厚クシテ破リ難シ、別ニ鐵器アリテ挾ミ按セバ破レ易シ、内ニ白仁アリ油多シ、味山胡桃ノ如シ、生食スベシ、新ナル者ハ種テ生ジ易シ、禪院ニ栽ユル者多シ、コノ松本邦ニモ自生アレバ、カラマツト訓ジ難シ、信州戸隠山ニ多シ、唐松郷ト云地モアリ、又越後出羽ニモ多シテ器材トス、木理扁柏（ヒノキ）ニ似タル故、扁柏ニ代用ユ、コノ松卵（マツカサ）長サ六七寸、鱗甲モ大ナリ、鱗甲ゴトニ子二粒アリ、時珍ノ説ノ中國松子大如柏子ト云ハ、尋常ノ松子ナリ、鱗甲ゴトニ二粒アレドモ、形小シテ米粒ノ如ニシテ白黒斑アリ、藥ニハ海松子尋常ノ松子俱ニ用ユ、果子ニハ海松子ヲ用ユ、松子ハ一名萬年豆、事物異名 錬形子、不老丹 共同上

松栽培

〔廣益國産考 二〕松の實をとり蒔苗を仕立る事

衡嶽志云、繁葉如刺栢、霜後盡脱、故名落葉松、

按、落葉松春生、葉七剌或五剌、如括成、細小而軟、淡緑色可愛、信州木曾及富士山有之、故俗名富士松、京師移種之、呼曰姫小松、多難長、

館松

〔古今要覧稿草木〕館松

館松は一根より數幹を生ず、故に館松といふなるべし、けだし其幹を伐れば、また芽蘖を生ずるを以て、聚幹松の名あり、本草一家言 常陸國鹿島浮島の松は、幹をきりても芽を生ずといへり、即この館松の類なるべし、

矮松

〔大和本草圖十一木〕イサリ松 京ノ方言也、筑紫ニテソナレ松ト云、マレナリ、古歌ニヨメルソナレ松ハ別ナリ、ソナレ松ニ松子アリ、甲州ニ多シ、海松子ト別ナリ、海松子ヨリ小ナリ、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕松〇中略 這松、又イサリ松、 金峯、八ケ岳、白峯、鳳皇山等ニアリ、窮髮ノ風烈キ處ナド、岩石ノ間ヲ莚ヒ、一面ニ布テ如蔓延ビ廣ゴリ、本ト末エヲ知ラズ、貝原云、筑紫ノ方言ソナレ松ト云、和歌ニ詠ズルソナレ松トハ別ナリ、甲州ニ多シ、子ハ海松子ヨリ小サシト、此物ハ甚小ニシテ、比海松子者ニアラズ、

鹿島松 白山松

〔本草一家言三木〕天目松 遵生八牋盆松條論松品中有天目松、身幹短矯屈僂卷、傍枝多而無直幹、按藝園家有一種松、名鹿島松是也、亦出地錦抄一 又賀州有白山松、生于白山峯頭、土人呼之曰絶頂松、葉頭蒼白色、是乃五雜俎所謂矮松、及袁仲郎所詠白松也、二松並宜盆玩、人愛翫之、又按明屠赤水考槃餘事云、盆玩宜天目松、高盈尺而偃卷屈曲、其所説形狀與鹿島松相符也、鹿島白山二松頗相似、而但葉頭蒼白色者爲白山松、是其異耳、蓋一類二種也、賀州人皆云、白山高峻、冬月雪深盈丈、壓覆松上、故滿山之松皆不能直上、偃卷如此、稻彰信云、不然、蓋白山中他松檜等雖深雪中、不偃卷、而特此松偃卷、千万株一般則爲別、是一種物無疑矣、

よべるなるべし、木はあか松たちなるものにして、一葉なるも七葉なるも変りたれば、盆栽の五葉の類なるべし、李唐の俗孔雀松とよべるものならん、〔本草一家言〕

一葉松

〔甲斐國史百二十三産物及製造〕松〇中略　一葉松　酒折社中ニ在リ、異品ナリ、

連葉松

〔古今要覽稿草木〕連葉松

連葉松は、攝津國勝曼院にあり、葉の本一ッにして半より末二ッにわかるゝと、〔和訓栞〕いへり、その狀またしくみずといへども、江戸にて一葉松といふを見るに、二葉ひしとよりつきて、一葉のごとく見ゆるものなり、その中に葉の中比までは風にあへば、わかれて二葉にみゆるもあり、またその中にも風にあたりてもまとまりよく、はなれざるもあり、されば全く一葉にはあらざるなり、和訓栞云、津の國勝曼院は施薬院の舊地といふ、連葉の松あり、葉の本は一本にして、半から二ッにわかれたり、

落葉松

〔大和本草圖十一木〕落葉松　和名フ°ジ°マ°ツ°、河間府志及衡岳志ニ出ヅ、冬ハ葉ヲ落ス、花紫赤色ナリ、青葙子ノ種ニ似タリ、葉ハ五葉ノ松ニ似タリ、ミジカシ、松ハ常葉ナルニ、一類ニテ多葉落ルハメヅラシ、富士山ニ多キ故ニ富士松ト云、信濃ニモ多シ、

〔草木育種後編下藥品〕落葉松(ふじまつ)〔衡嶽志〕　山中に栽て生長し易し、人家庭へ植て愛すべし、材を用ゆべし、木栭(きのこ)を蝦夷にてエブリコ、蘭人是を留飲、又小便を通ずる薬とす、

〔古今要覽稿草木〕ふじ松

ふじ松は富士山中に多く生ずるを以てまか名付たり、また日光山中にも多し、故に或は日°光°松°ともいふ、〔本草綱目啓蒙〕唐畫に見えたるまつに似たるを以て、俗にか°ら°ま°つ°と〔藥名備考和訓鈔〕いへり、西土にていふ落葉〔大和本草〕なり、また金°錢°松°とも〔物品目録〕云、

〔和漢三才圖會八十二香木〕落葉松　富士松俗　布之末豆

坊主未ダ十二三歳ナル子供ナレバ、箒ヲ持、鎗ヲ遣フマネヲスル時、其松ノ枝ヲ折タリ、尤道中乘物ノ内狹クシテ、痛ミシ枝ナレバ、猶安ク折タル也、夫ハ兎モ角モ、主人秘藏ノ松ノ枝ヲ折シ事ナレバ、小姓衆大イニ心配シ、有體ニ申サバ、小坊主イカナル仕置ニカ逢ン、サレバトテ尋ネラレシ時知ラズトモ申サレズ、何ト答テヨカランと、二三人寄合ヒ、相談未ダ決着セザル內ニ、丹後守起出、例ノ通リ椽へ來リ、松ヲナガメシガ、忽チ顏色ヲカへ、此枝ハ誰ガ折シゾト云、小姓衆互ニ顏ヲ見合セシバカリ、何トモ答へズ、其時次ノ間ヨリ、小坊主進ミ出、私折リ候ト云、丹後守ハタト白眼付ケ、何トテ折シゾト尋ネラレケレバ、小坊主答テ、今朝掃除ヲ仕リ候節、箒ヲ持テ鎗ヲ遣フマネ致シ候、其節ホウキノ先ニ障テ折レ申候ト云、丹後守憎キ奴ツ哉ト云ナガラ奥へ入ケル、小姓衆其儘ニモ置レザレバ、小坊主ヲ押込メ置ケル、其後丹後守鷹野ニ出ヲル丶日、曉天ニ食事サレケル、此時野裝束ノ上へ紙子ノカイ卷ヲ引カケテ、箸ヲ取ラレシガ、食事終リテ、小坊主ハ二三日見ヘヌガ、如何シタルヤト尋ネラル、小姓衆答テ押込メ置キ候ト云、丹後守打笑ヒテ是へ呼ベト云ケル故、小姓衆呼來レバ、丹後守引カケ居ラレシ紙子ノカイ卷キヲ、小坊主ノ頭へ打カブセ、我ニ遣ル程ニ祖母ニ著セヨト云ナガラ、立テ鷹野ニ出ラレケル、丹後守五葉ノ松ノ片枝、道中乘物ノ中ニテ痛ミシヲ承知ナレバ、其枝ノ折レシナレバ、左モ有ルベシト思ヒ居タルニ、小坊主ハ、痛ミシ枝有ル事ハ知ラズ、只自分ガ折シト思ヒシ故、其通リ少シモ僞ラズ、有體ニ申セシヲ、丹後守其正直ナルヲ心ニ感ジテ、何トモ沙汰ヲセザリシ也、

三葉松

〔古今要覽稿草木〕三葉松

三葉松は、駿河國三穗松原、陸奥國末松山等にあり、俗にさんごの松といへり、和訓栞、本草綱目啓蒙高野山に三鈷の松とてあるは、大師の三鈷の落留りし所へしるしに植られたる松なりといへば、強に三葉なるを求植られしにもあるべからず、たゞ三鈷といへる三の字を緣として、三葉松をしか

七葉松まれにあり（本草家言）一といへり、植樹家にて千。葉。の。か。ら。松。といふものなりとぞ、（本草綱目啓蒙）西土の果松なりといへり、

〔古今要覽稿草木〕五葉松〇中略 釋名

五葉松（倭名類聚抄、按に本草綱目に唐蕭炳四擘を引て、五粒松一叢五葉如二釵子一とあれば、李唐の人また既に五葉の名をいへり、）五。粒。松。（楊子漢語抄、按に酉陽雜俎に、松今言二兩粒五粒、粒當レ作レ鬣とあれば、李唐の世俗五粒松と言とも、實は五鬣と云べきなりといへるなり、東雅に本草圖經を引て、五粒字當レ作二五鬣一、音轉訛也、五鬣爲二一叢一といへども、酉陽雜俎を引べきなり、信充按に、集韻に鬣弋渉切、音葉とあれば、五鬣もと五葉の義なるべければ、粒の字と轉訛すべきにあらず、然るを五粒五鬣相誤るを以て考ふれば、唐人の既に鬣を叢の音によめると聞えたり、い。）つ。ば。の。松。（藻鹽草）五。鬣。松。（本草家言）一

〔大和本草十果木〕海松 五葉ナリ、若水曰、信州戸隱山ニアリ、然レバ日本ニ本ヨリアリ、カラ松ト訓ズルハ非ナルベシ、松カサ大ナリ、子ハ果トシ食フベシ、日本ノ産ハ朝鮮ヨリ來ルニヲトル、本草新羅者甚香美、又曰新羅往々進レ之、然レバ中華ニモ朝鮮ノ産ヲ佳品トス、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕松〇中略 五鬣松（又五粒、五葉トモ云）、材トシ板トス、鬼。五。葉。ト云ハ、葉強大ニシテ松毬長大、中子如二小脂頭一、外皮ハ胡桃ニ似タリ、海松子是ナリ、姫。五。葉。ハ柔ニシテ、大小相對セリ、

〔拾遺和歌集一春〕おほきさいの宮に、宮内といふ人のわらはなりける時、だいごのみかどのおまへにさぶらひけるほどに、おまへなる五。葉。に鶯のなきければ、正月はつねのひつかうまつりける、　大伴家持

松のうへになくうぐひすのこゑをこそはつねの日とはいふべかりける、

〔臥雲日件錄〕寶德四年（○享德元年）十一月十一日、天英來曰、李賀詩有二五粒松一、注曰、有二五花一云々、然則五鬣、鬣曰二與レ粒音相近一、故云二五鬣一乎、南禪畠藏主來、因出二示雙桂所レ作花溪贊幷眞啓首座所レ述行狀一、

〔明良洪範十七〕松平丹後守（○重信）在江戸ノ時、五葉ノ松ノ鉢植ヲモトメ秘藏セリ、歸國ノ節モ、吾乘物ノ内ヘ入レテ持參シ、居間ノ椽ヘ置キ、朝夕ナガメテ樂メリ、然ルニ或朝坊主掃除ヲセシニ、此

黒松
赤松
白松

幹復生芽葉、又多田金山有連理松、一根雌雄変生、山谷詩集巻九、有戯答陳季常寄黄州山中連理松枝詩、又有眠松、出伏見、枝葉垂下可愛、又有杜松、倭名室之木、經久枝々下垂、掘根陰乾、夏夕焚炳以避蚊蚋豹脚、又有金松、其葉帯黄、故倭名金松、與天台山外志所出金松名同物異、漢所謂金松、今和稱高野眞木者是也、

〔古今要覽稿 草木〕くろ松 雄松

くろ松は皮の色くろみあり、故にくろまつと云、西土にも黒松といふあり、これなるべし、本草綱目啓蒙 これ貝原篤信のいはゆる雄松なり、大和本草 これを雄松といふは、葉粗く太くして松蕈生せざればなるべし、

あか松 雌松

あか松は皮のいろあかし、故にあか松といふ、西土にて赤松といふも是なるべし、本草綱目啓蒙 葉細くして美なり、またよく松蕈を生ず、故に雌松なりと貝原篤信いへり、

しろ松

しろ松も雄松の一種なり、たゞそのみどり白色にして粉あるがごとし、世に霜降松といふものとおなじからず、上野國勢多郡赤城山、その外足尾山などにあるもの、長たかく幹ふとくして、霜降松の類にあらず、武藏國大宮原などにも見へたり、是西土にて白松といふもの 草實鳥獸草木珍玩考 ならん、

〔甲斐國志 百二十三産物及製造〕一松 所在異ナルナシ、白穗赤穗二種アリ、雌雄ト稱ス、然ドモ赤白ノ内各又雌雄ヲ分ツ、白穗ハ海風ノ不及處ニハ生ゼズ、本州八代郡ノ南山、及河内領ニ在ルノ雄白穗ハ、一歳ニ穗長三四尺以上ニ及テ、成長最早シ、赤穗ハ晩シ、九一色、八阪ノ松ハ板ニシテ佳ナリ、

七葉松

〔古今要覽稿 草木〕七葉松

栝楷者也、其一樹恰似五鬣松、木理迥異、且爲巨材之用云、夷言曰古伊、傳此樹者、呼古伊加爾矢、又曰古斯里加爾矢、加爾矢、木耳也、按ニ圖解ニ云、魯耳更樹、及追錄ニ所謂唐檜ハ、同木ニシテ、本州ニ云、加羅松ノ形狀ニ符合セリ、諸書五鬣松、落葉松、加羅松ヲ相混ジテ不分辨ユヱ、互ニ得失アリト見タリ、加羅松ハ聳直シテ爲巨材用、脂液多ク堅硬、曝日遇雨露、能ク久ニ堪フ、其爲用コト松ニ勝レリ、其皮全似縱樹、色赤香アリ、葉細長而稠密、枝末垂下セリ、宛モ鼠サシト云樹葉ニ似テ、五葉二葉ニアラズ、檜ノ類ニ近シ、唐檜ト云モ宜ナルベシ、松ニ類シテ其實似松毬、小ニシテ如魚鱗紋ヲ帶ルノミ、眞ノ魯爾更樹ナリヤ否ヲ知ラズ、

〔倭訓栞前編二十九〕まつ○中略　鹿島松は葉つまり、木もこちたくねぢけて各別の品也、蝦夷松あり、蝦夷に出づ、柄糸さげ緒の箱として、幾年を歴ても脂の患なしと、○中略　西土の書に、二針三針五針ありといふ、此方もまた同じ、七鬣はいまだ見ず、三針を三鈷といふ、五針を五葉といふ、薫物を合せて器に入、五粒松の下に埋むといふ事、類聚雜要に見えたり、津國勝曼院は施藥院の舊地といふ、連葉の松あり、葉の本は一本にて、半より二つに分れたり、○中略　雄松を黑松といひ雌松を赤松といふ、赤松は群芳譜に見ゆ、

〔本草一家言三木〕松　品種不一、有一針、二針、三針、五針、七針之別、針或作鬣、或作粒、二針者常松也、但有肥瘦長短之異、以肥針爲好、瘦針者古人呼柴松、不可爲庭玩、惟供蒸薪耳、五鬣松一名華陰松、又名栝子松、倭呼五葉松、耐觀盆玩最可賞、結子比常松較大、蓋海松子屬也、木身無鱗甲、葉背蒼白色、三葉松一名孔雀松、倭呼三鈷松、其餘一針、七針等、間有之、可自搜索、有海松子、倭名朝鮮松、葉極長而棣亦甚大、棣砌間結子、味油膩可以充果食、韓人柏子謨也、柏子乃側柏子、與是異、又有落葉松、和名日光松、又名富士松、富士峯不有之、其葉冬脫、又白松、袁仲郎有詩、和名霜降松、大悲山頂產之、又有矮松、一名臥松、北地呼爲絕頂松、白山絕頂所產皆是也、歷朝譜彙有十八公、又名聚幹松、和名鮹松、一根數幹、伐其

聚名義抄亦作䕷、名義抄音猪、唐本草不从詣可證、則那波本作蘫者、據今本本草校改、又按通雅云松䕷、大觀本草作䕷、邵文伯所鈔宋五色線引爲松蘀、則又因䕷而轉爲蘀耳、亦其所見本草從諸與唐本合、然元板、朝鮮板、大觀本草皆誤作蘫、則方氏所見本、豈是宋本邪、

〔傍廂（後篇）〕松の花

我〇（齋藤彦麿）若き頃、田中勇甫和棟が許に行たる折ふし、竈神に奉らんとて、花賣老女のもて來たる小松一もと買ひたるを見れば、小枝の傍に、只一つ花咲けり、白小花にて、榊花、橘、柑花などの如くにみゆ、さることある物にや、我は始めて見たり、時珍云、二三月抽蕤生花、長四五寸、采其花蘂爲松黃、食物本草注に、松花、一名松黃、味甘溫無毒云々、

〔和漢三才圖會（九十二山草）〕惠布里古

按惠布里古生韃靼地、其處名加良不止、（一名北高麗）蝦夷島之北界也、生沙濱中、如鎖陽之類、爲大塊、外灰白內白色、似茯苓而不濃、如枯菌理、其味苦、蝦夷松前人傳曰、積聚疝氣一切腹痛等、不用諸藥止用此者愈也、然虛弱人宜斟酌、

〔甲斐國志（百二十三產物及製造）〕一惠夫利古（エブリコ）　蝦夷ノ方言ナリ、漢名詳ナラズ、本州ニ所產ハ加羅松ト云樹ノ、深山ニ有テ老大ニシテ、樹心朽テ外枝未枯者ニ生ズ、テレメンテーナノ餘液蒸テ爲木耳、色淡白シテ黃及ビ淡黑ノ橫條數々アリ、每歲加長スルコトハ、以其條理知之ベシ、內肉皎白ナリ、揉メバ細末トナル、味初如甘ニシテ稍苦シ、又方言猿腰カケト云木耳アリ、形狀之ニ相似タリ、此物堅シテ肉爈色ナリ、用ニ堪ヘズ、榎等諸朽木ニ生ズ、加羅松ニ生ズレドモ類之者アリ、宜可否ヲ辨ズベシ、河內領雨畑村保（ホウ）村邊ニテ、自古村民每戶ニ儲テ用藥トス、近頃白峯（シラネ）ノ諸山ニモ采之、大槻ガ六物新志ニ、和蘭人云、亞互里哥斯（アガリコス）（郎啼蒲里哥）魯爾更（ロルケン）樹ニ附生スト、圖解ヲ載セタリ、又追錄云、野作（エゾ）地生此木耳、樹二種、其一呼曰仍吾（シユング）、槓榦似縱而短、呼其木耳曰多爸矢（トボシ）、則所呼唐檜、又稱蝦夷檜者、劈爲

稜、一角尖、爾馬志謂似小栗、殊失本體、中國松子大如柏子、亦可入藥、不堪果食、按、李賀有五粒小松歌、陸龜蒙詩、松齋一夜懷貞白、霜外空聞五粒風、李義山詩、松喧翠粒新、劉夢得詩、翠粒照晴露、皆以粒言松也、酉陽雜俎云、今松言兩粒五粒、粒當言鬣、癸辛雜志云、凡松葉皆雙股、而高麗所產、每穗乃五鬣焉、○中略 今俗呼朝鮮松子、

〔續日本後紀二淳和〕天長十年八月辛亥、飛驒國貢松。實。御贄、

〔重修本草綱目啓蒙二十三香木〕松○中略

松。毬。ヲマツフグリ、チヽリ、チヽミ、古名 マツカサトモ云フ、本草彙言ニ松卵ト云是ナリ、

松脂、一名琥珀孫、輟耕錄 黃香本草原始 室利薛瑟得迦金光明經

〔倭名類聚抄二十木具〕松。脂。附伏苓 玄中記云、松脂淪入地、千歲則爲茯。苓。部丁反、和名松脂、萬豆夜邇、伏苓、麻豆保止、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕玄中記、太平御覽引、云郭氏玄中記、今無傳本、藝文類聚、初學記、廣韻、太平御覽引、並地下有中字、無則字、太平御覽引、伏苓作伏神茯苓四字、那波本伏作茯、按伏苓古作伏靈、見褚少孫史記龜策傳、以伏在地下得是名、或假借伏令字、後人加艸與車茯字苓耳字、混無別、○中略 本草和名云、松脂一名橘、乎加末都乃也爾、新撰字鏡、橘、木乃也爾、

〔雲根志後編一〕琥珀○中略

相傳ふ、松脂千年をへて茯苓となる、茯苓千歲の後に再化して琥珀となると、誤れり、松脂は琥珀となるべし、茯苓は別種の物也、薰陸琥珀の苗なるべし、塵を吸ふを上品とするは非也、吸ざるものに最上あり、加賀の產よく塵を吸ふあり、

〔倭名類聚抄二十木具〕樹。汁。 蘇敬本草注云、松瀋、音審、和名松乃之流、取松枝燒其上、承取汁之名也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕本草和名、松瀋載在松脂條、無別有和名、○中略 那波本瀋作[illegible]、猪作詣、與證類本草合、集韻又云、瀋音詣、按、原書上品松脂條引、作松取枝燒其上下承取汁名瀋、音主、本草和名、類

百木の長にして陽木なり、其性温にして厲し、威有て猛からず、これを望めば儼然として、君子寛廣の德あるが如し、百歲を經る者、其枝横斜し、千歲に及び甚だ多壽なり、最黑松(說鈴)赤松を以て貴とす、黑松其樹皮厚く、其葉深青長し、赤松其樹皮薄く、其葉淺青短し、俗にこれを雌雄にするは誤なり、皆脂あり、又老松の根下に茯苓を生ず、是松の餘氣なり、春雑を抽で花を生ず、後新葉生ずる時、新條の木に白藻を發し、其叢中に必ず二蟲あり、雌雄なり、夏に至り羽化して散出す、黃虻の小なるが如し、其蟲赤松に多し、五鬚松、(泉州府赤)白松(華實者)海松(本草綱目)等の類には稀なり、又松卵は夏中生じ、花と其時を異にす、明年に至りて熟す、其類屬の中に、多生する者もこれあり、又偶枝間に雑に似たる者數十生ず、其色松皮の如し、蓋し雑の變生なるべし、又偶老松斷枝の痕に、夏より秋に至て蕈を生ず、まつをうじ(松蕈芝)と云ふ、其形地に生ずる松蕈に異ならず、性甚だ硬し、世俗に云ふ、これを食すれば壽を延べ、或は煎じ服すれば疫熱を解すと、又寄生は其枝幹に寄寓す、葉對生し、狹細淺綠色、夏深紅色の筒花を開く、至て密なり、其花瓣の本、卽實にして青綠色、明年春夏の際に至り、熟すれば深紅色、實中粘氣甚し、枝幹に落て自ら蒙る穉子の初生に似たり、其根蔓の如し、偶根に花を開き實を結ぶ、凡寄生は桑、桃、柳、櫧、櫻、梅、栗、朴樹等皆これあり、各其樹に因て狀を異にす、是其樹の餘氣變生する者なり、女蘿(松蘿釋名)は深山の樹木の皮間より生じ下垂す、絲の如し、卽寄生なり、

〔倭名類聚抄十七〕松子。　脚氣論獨活酒方云、獨活一斤、五葉松五兩、(合藥七種之內也、餘不具載、)楊氏漢語抄云、五粒松子、(千葉松子、和名萬豆乃美、)(原說今據一本補五)

〔箋注倭名類聚抄九(果蓏)〕肘後方、療氣有獨活酒方、用獨活附子、無松葉、千金方有松葉酒、療脚弱十二風痺不能行、○(中略)證類本草引蕭炳云、有五葉者、一叢五葉如釵、名五粒松子如巴豆、新羅往々進之、又載開寶本草云、海松子生新羅、如小栗三角、其中仁香美、東夷食之當果、與中土松子不同、亦卽是也、李時珍曰、海松子出遼東及雲南、其樹與中國松樹同、惟五葉一叢者、毬內結實、大如巴豆而有三

馬鬣　龍髯　蛇鱗共同上　霜下傑典籍便覽　支離叟名花譜　蒼顏叟群芳譜　髯翁廣東新語　秦大夫名物
法言　叢木通雅

松ニ雌雄アリ、雄ナル者ハ皮ノ色黒シ、故ニクロマツト呼ブ、漢名黒松、說鈴ヲマツナリ、雌ナルモノハ皮ノ色赤シ、故ニアカマツト呼ブ、漢名赤松、葉苑詳注一名朱松、同上メマツナリ、ソノ葉二針ノ者ハ尋常ノマツナリ、山中自生ノ者ヲ柴松汝南圃史ト云、三針ノ者ヲ俗ニサンコノマツト呼ブ、漢名三針松、一名孔雀松、海松子ノ條下三針ノミニアラズ、二針ノ者モ雜レリ、又尋常ノ松ニモ、稀ニ三針ノ者雜リ生ズルコトアリ、是ハ變生ナリ、又五針ノ者アリ、漢名五粒松、海松子ノ條下一名五鬣松、頌說ノ五鬚松、泉州府志五鬣松、淵鑑類書是ニ二種アリ、葉ノ形細ク短クシテ、赤松ノタチナルモノヲ、俗ニ五葉ノマツト云フ、一種葉ノ形粗ク長クシテ、黒松ノタチナルモノヲ、俗ニカラマツト云フ、又チヤウセンマツトモ云、漢名新羅松、海松子ノ條下コノ松毬(マツカサ)最モ大ニシテ、長サ七寸許、其子卽海松子ナリ、又七葉ノ者アリ、蘇頌ノ說ニ、七鬣ト云フ者ナリ、花戸ニテ千葉ノカラマツト呼ブ、是群芳譜ノ果松ナリ、又一種富士マツアリ、一名日光マツ、富士山日光山ニ自生多キ故ニ名ク、冬ニ至リ葉落ツ、漢名落葉松、物理小識春ニ至リ新葉圓ニ聚リ生ジテ、菊花ノ形ノ如ク大サ錢ノ如シ、故ニ一名金錢松、同上コノ葉皆一針ニシテ薄ク、常松ニ異ナリ、コノ松及五葉松、共ニ皮鱗甲ヲナサズ、又一種常松葉ノ如クニシテ、色白ク粉アルガ如ク見ユル者アリ、シモフリマツト呼ブ、漢名白松、華夷考今花戸ニ葉半白ク半綠ナル者アリ、シラガマツト呼ブ、又黃綠相半スル者、黃綠間道ナル者、白綠間道ナル者、白斑アル者等數品アリ、又盆玩ノ者ニ、形矮ニシテ枝繁リ、古木ノ形ノ如クナル者アリ、サレマツト呼ブ、漢名天目松、汝南圃史一名千年松、秘傳花鏡又根高クアガリ生ズル者アリ、鹿島マツト呼ブ、又根アガリマツトモ云フ、漢名黃山松、江南通志コノ外松ノ名尙多シ、

〔草木性譜 人〕松

ヨリ生ジ、松蕈ハ雌松ヨリ生ズ、西州ニハ雄松多キ故茯苓多シ雌松少キユヘニ松蕈マレナリ、畿内ニハ雌松多ク、雄松少キユヘニ、マツタケ多ク、茯苓少シト云、又合璧事類ニ、松ニ二針三針五針アリト云、名山記云、松有兩鬣三鬣五鬣、是皆其葉ノ數ヲイヘリ、本邦ニモ五鬣松アリ、五葉ノ松ナリ、葉小ニシテ短シ、又三鬣松アリ、肥松ハ油松ト云、常ノ松ノ肥タルナリ、ヨクモユ、牙杖トスレバ歯堅クシテ不動、歯ノ薬ナリト俗ニイヘリ、貧民コレヲ燒キテ燭トシ、又夜作ニ用ユ、民用ニ利アリ、油多キハ石ヨリ重シ、松ヲ栽ルニ正月ヲ用、大ナル根ヲ切、四傍ノ小根ヲトヾメ、根土ヲ不破シテ、其マヽ移シ植レバ無不活、高一二丈トイヘドモ、如此スレバヨク活、根土ヲ破レバ小木モ枯ル、此栽法種樹書ニ見エタリ、今試ニ如此、史記、秦始皇上泰山、風雨暴至、休于樹下、遂封其樹爲五大夫、史初不言何樹、應劭始言爲松、秦始皇松ニ大夫ノ官ヲ贈ラレシ事、本邦ノ俗、松ノ名譽ノヤウニイヘド、左ニハアラズ、秦皇ハ惡王ナレバ、松ノタメニ不足爲榮、却テ辱トスベシ、李誠之ガ松ノ詩ニモ、一事頗爲清節累、秦時曾受大夫官、梁書陶弘景、特愛松風、庭院皆植松、毎聞其響、欣然爲樂、　程子曰、雜書有松脂入地千年爲茯苓、万年爲琥珀之說、蓋物莫久於此、故以塗棺、古人已有用之者、　鶴信曰、本草ニ此說ナシ、故ニコヽニシルス、食物本草註曰、松花一名松黃、味甘温無毒、潤心肺益氣除風止血、亦可釀酒、拂取酒服、又曰、和白沙糖米粉作餻尤佳也、綱目ニモ此事ヲイヘリ、久シク不堪トイヘリ、若綠ノ黃花ナリ、國俗ニモ松モチヲ作ル、ソナレ松、藻鹽草曰、生傾タル也、又ヒ子タル松ヲ云トモ云ヘリ、愚謂礒ニナレテ久シキ松ナルベシ、イソナレ松ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十三 香木〕松　マツ　色無草（イロナシグサ）　オキナグサ　初代草　トキハグサ　千枝グサ　千代木　十千代グサ　スヾクレグサ　タムケグサ　メサマシグサ　コトヒキグサ　ユウカゲグサ　ミヤコグサ　クモリグサ　延喜草　百草 以上古歌　一名　靑士 事物異名　節士　虬枝　十八公　蒼髯叟　髯御史　赤葛刺孫 共同上、蒙古名、　葉垣盛 事物紺珠　木中仙　大夫　淸友　仙友

に有なりとぞ、ちかく見たる人は申し、此松野火にやけにければ、源満仲が任に、またうふ、其後又かる、道貞が任にうふ、其後孝義きりて橋につくる、うたてかりける人なり、是より失たり、なく共なをよむべし、歌林良材に、奥州武隈と云處に二木の松あり、これによりてこもたるといへり、はなはとは山のさし出たる所のあるをいふなり、袖中抄に、武隈のはなはとて、山のさし出たる所のあるなりとぞ、ちかくわたる人は申し、鴨長明云、宮城野に武隈の松も侍りけれど、今はみえずと云、宮城の武くまはなはゝ館ひとつ所なり、奥羽觀蹟聞老志に、鼻端松樹は名取郡武隈館西にあり、岩沼驛より西五丁餘、小坂を過て其地にいれば、二樹相並て枝葉繁茂とあり、是鼻端松なり、また岩沼驛の西五丁に二株松あり、是を先輩混じて一樹とするは誤なり、といへり、

岩代のむすびまつ 同上、岩代の松同事なり、いはしろの野中に立るむすびまつとよめり、

あねはの松 同上、奥州にありと云、

あれはの松 同上、奥州なり、たゞし是もあれはの松おなじことかとあり、

あこやの松 同上、出羽にあり、月をよめりと云、

御陰松 同上、攝州とあり、

わたのかさ松 同上、同萬をよめりと云、

一夜松 同上、北野によめりと云、

翁草 同上、異名なり、藏玉にあり、基俊歌、住よしや庭のあたりの翁くさ長ゐもてみる人なかこちて住吉の濱さとに玉依のまつと云、松あり、かの松年ふりて翁とげんじて、すみけり、恒に心をすまし琴をしらべけり、秋は菊を愛し、多く植けり、かの翁の歌、我庭はきしのまつかげまかぞすむ翁がくさの花もさかなん、是によりて、きくをも翁草と申なり、彼翁と現れしこと五月なり、松にまつり、藏玉にも夏に入たり、又後頼歌に、夏松な住吉にありと云なる翁草きみゆへ秋の風やまつらんとあり、

手むけ草 同上、是も藏玉にあり、山里の古き軒端の手むけ草花はのよそなる名達どぞ見る、是も住吉にある神やうふけんと詠ぜるまつもこれなりと見えたり、

初代草 同上、大内やもゝしき山の初代草いくとせ人になれて立らん、正月二日大内に植松有り、門松也、是も藏玉に有、

色無草 同上、をく露も常盤の名なる色な草かりそめの間も秋は來にけり、是も異名なり、藏玉秋部に入なり、秋まつなりとあり、

延喜草 同上、是も異名なり、藏玉春部なり、はるの野や雪けの澤のひきまくきはなにききけりゆきにおはれて、

登喜草 同上、あすかき立つる宿のときは草風も夏なき時にこそあへ、これも藏玉にあり、雜部に入なりと云、

曇草 同上、藏玉にあり、異名なりとあり、

百草 同上、ふるき物にありといふ、

千枝草 同上

都草 同上

〔易林本節用集 天草木〕貞木ナイボク 松也

〔古今著聞集 十九草木〕松樹を貞木といふ事は、まさしく人のためにかの木の貞あるにはあらず、霜雪のはげしきにも色をあらためず、いつもみどりなれば、これを貞心にくらぶる也、貞松は年のさむきにあらはれ、忠臣は國のあやうきに見ゆと、潘安仁が西征賦にかけるもこのこゝろなり、

〔大和本草 十一木〕松 マツハ、タモツノ意ノ上略ナリ、モトマト通ズ、久ク壽ヲタモツ木ナリ、史記龜策傳、松柏爲百木長而守門閭、松ニモ亦雌雄アリ、雌松ハ其葉美ナリ、葉小ク木皮赤シ、茯苓ハ雄松

〔圓珠庵雜記〕松マツ萬葉にもあまた待によせてよめり、然れば、ちとせをふる物にて、行末をまつ心に名付くるか、

（頭書）眞淵云、いかゞなり、もし眞常(マトハ)木といふか、あるが中にとこはを稱へばなり、

〔倭訓栞前編末二十九〕まつ　松はもつと通ふ、久しきを持の義也といへり、○中略松を貞木といふは西征賦の貞松によれり、秦皇松に大夫の官を贈りしは史記に出たり、朱文恭の話に、今抗存す、大さ十圍ばかりと、○中略安永二年豐後鶴崎の八幡宮修造す、大木の松枝たれて妨に成をもて、折べき議に定れり、其夜右の枝自然によりて常のごとくなれり、其社の地形を築く時は、五尺計蛇集りて土を持たり、永祿十一年八月廿四日津ノ國住吉の松樹六十六株、故なくて根より堀拔たり、神主津守ノ國豐此を奏す、それより十日過て九月三日にウルカンバテレン、鳥羽四塚へ來りぬ、異書に松ハ十八公也とも、湖海新聞に木公は松也とも見えたり、

〔古今要覧稿草木〕松○中略

釋名

麻都　松（井古事記、東雅云、古語の例によれば、マツとは霜雪をまちて其色改ることなきをほめていひしに傚たれど、いにしへよりいひも傳へざる事は、いかにとも定めがたしと云、倭訓栞云、松はもつと通ふ、久しきを持の義なりといへり、たゞし霜雪をまつの義といふも、久しきをもつといふも、共にいかゞあるべき、信充按に、此木の葉は餘木と異に、幹にまつはり付しのなれば、マツ葉木といふこころにもあるべきか、）

比登都麻都（古事記、古事記傳に、今俗言に一木松と云ものなり、扨此尾津前なるは、今もかの入御崎と云地に御掛の松と云て、其跡を殘せり、）

ちはやふる松（藻鹽草、日ひさしきよしなりといへり、）　相おひの松（同上）　おひあひの松（同上、其時生あふこゝろなりと云、）

つままつの木（同上）　こもたる松（同上、子持といふ義なりと云、）　そなれ松（同上、生かたふきたるなり、またいれたるまつないふともいへり、）　姫松（同上）　小松（同上）　姫子松（同上）　わか松（同上）　いつ葉のまつ（同上）　百疊の松（同上）　門松（同上、正月なりまつか門松共いへりとあり、）　山松（同上）　石根松（同上）　海松（同上）　波松（同上、加賀にいへると云共只いふべきなりといへり、）　浦松（同上）　濱松（同上）　あらいそ松（同上、すさの入江にいへれど、只もいづくにもいふべしとあり、）　十かへりの花（同上、松花千年に一度さくと云り、）　ひと木松（同上、市原王宴ニ流道闘一詠と云々といへり、）　たまゝつ（同上、みよしのにいへり、また玉松せともいへり、）　ふたきの松（同上、たけくまなり、奥儀抄にたけくまのはなはとて、山のさし出たる所

字、王大則幷天下人、此內任太平臣守昊命、(天平寶字二年)唐大曆中亦有成都瑞木、有文天下太平、(見金史)恐此類是乎、

神木

〔伊呂波字類抄〕(志植物)神木

〔類聚名物考〕(神祇十三)神木

今神木にて、その社によりて、木を植る事有り、神の託所なり、稻荷三輪の杉をあがむるが如き是なり、その來る事久シ、論語にも見ゆ、事は周禮に出たり、

○按ズルニ、神木ノ事ハ、神祇部神木篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

雜載

〔大和本草〕(二數目)雪中四友。。。。　月令廣義曰、玉梅、臘梅、水仙、山茶、又松竹梅、爲歲寒三友。。。。

〔世事百談〕松竹梅

松竹梅を、わが邦には慶賀のものとす、唐土にては歲寒三友といふこと、月令廣義に見えたり、葛原詩話に、世俗の恒言にして賦咏に題ること稀なり、高士奇が金鼇退食筆記に、五龍亭舊爲太素殿、創于明天順年、在太液池西南、向後有草亭、畫松竹梅于上、曰歲寒門、また元張伯淳題皇甫松竹梅圖詩あり、曰、三友亭々歲晚時、政緣冷澹易相知、何須近舍今皇甫、却向圖中覓補之、元詩二集養蒙先生集に出づといへり、猶ふるく見えたるは、元次山丐論に、古人鄉無君子、則與山水爲友、里無君子、則以松竹爲友、坐無君子、則以琴酒爲友、東坡詩に、風泉兩部樂松竹三益友といへること、陔餘叢考歲寒三友の條にいへり、唐の李邕が題畫の詩に、對雪寒窩酌酒、敲氷暖閣烹茶、醉裏呼童展畫、笑題松竹梅花とあり、

松名稱

〔倭名類聚抄〕(二十木)松　漢書云、樹以靑松、(詳容反、字亦作柗、見唐韻、和名萬豆、)

〔箋注倭名類聚抄〕(十木)所引賈山傳文、○中略　按、廣韻松字下云、寀古文、玉篇同、說文亦有寀字、云松或从容、則㮤當作寀、玉篇云、㮤、余鐘切、木名、又㮤詳見南方草木狀、與寀不同、○中略　說文、松、松木也、

木連理（仁木也、異本同枝、或枝旁出上更還合、○中略）　右下瑞

〔延喜式考異附錄下〕祥瑞考

木連理（原注、仁木也、異本同枝、或枝旁出上更還合、）案國史所載、不可枚擧、又有草連理、見皇極紀、曰、三年六月癸卯、大伴長德、獻百合華、其莖長八尺、其本異末連、符瑞志、異根同體、謂之連理、宋志、王者德澤純洽、八方同一則木連瑞（瑞應圖同）連理者、仁木也、或異枝還合、或兩樹共合、漢終軍傳、其枝旁出輙復合于木上、衆支內附示无外也、援神契見芝草下、

〔大和本草（十二雜木）〕連理　晉中興徵祥記云、或異枝還合、或兩樹共合、瑞應圖云、異根同體、謂之連理、是ハ木ノ名ニ非ズ、根ヲ異ニシテ、兩木一ニ合タルアリ、或一木二ニワカレ、又合テ一木ニナレルアリ、

〔倭訓栞（中編三）〕え。た。を。つ。ら。ぬ。る。　連理枝也、近江國獻木連理の事、和銅中にみゆ、古事記の序に連柯とも見ゆ、又ちぎりのふかき事にいへり、連理樹は、同木或は異木の根はわかれて、枝の合たるをいふ、又幹枝合抱の木あり、又一木にて枝葉の分れたるもあり、伊勢阿濃郡草生村に、一枝は榎の木、一枝は椎の木と次第したるものあり、

〔續日本紀（三文武）〕慶雲元年六月己巳、阿波國獻木連理、

〔續日本紀（五元明）〕和銅五年三月戊子、美濃國獻木連理幷白鷹、

〔續日本紀（六元明）〕和銅六年十一月丙子、大倭國獻嘉蓮、近江國獻木連理十二株、

〔續日本紀（十一聖武）〕天平三年正月庚戌朔、天皇御中宮、宴群臣、美作國獻木連理、

〔延喜式（二十一治部）〕祥瑞

嘉木○中略　右下瑞

〔延喜式考異附錄下〕祥瑞考

嘉木　案木一作本、其品物符應未詳、蓋孝謙紀所謂大和城下郡大和神山生奇藤、其根彫成十六

〔延喜式考異附錄下〕祥瑞考

平露（原注、樹名也、其形如蓋、生於庭以候四方之正也、一方不正、則應一方而轉傾也、）案瑞應圖、王者不私人以官、四方政平、如蓋、則生于庭、宋志、平露如蓋、以察四方之政、其國不平、則隨方而傾、白虎通、平路、賢不肖位不相踰、則生、又云、官位得其人則生、失其人則死、

〔延喜式 治部二十一〕祥瑞

蓮。甫。（樹名也、其形似蓮、枝多葉少、葉如扇、不搖自動轉而風生、〇中略）右大瑞

〔延喜式考異附錄下〕祥瑞考

蓮甫（原注、樹名也、其形似蓮、枝多葉少、葉如扇、不搖自動轉而風生、）案宋志、一名倚扇、狀如蓬、大枝小根如絲、轉而成風、殺蠅、堯時生於廚、（古微書援神契注、引瑞應圖云、蓮甫、樹名也、其葉大如門扇、不搖自動、一名倚扇、狀如蓬、多葉少根如絲、轉而風生、主飲食清涼、驅殺蟲蠅、堯時冬死夏生、舜時生于廚右階左、）帝王世紀、堯時廚中生肉脯、薄如翣形、搖鼓則生風、使食物不臭、一名倚扇、白虎通、王者德至山陵、則阜出蓮甫、又云、孝道至則以蓮甫樹名也、其葉大於門扇、不搖自扇、於飲食清涼、助供養也、春秋潛潭巴、君臣和得、道度叶中、則箑脯生于庖廚、顧會王者不嗜味則生、援神契見龍下、

〔延喜式 治部二十一〕祥瑞

華。平。（其枝正平、王者德強則仰、弱則低也、〇中略）右下瑞

〔延喜式考異附錄下〕祥瑞考

華平（原注、其枝正平、王者德強則仰、弱則低也、）案援神契、瑞應圖、祥瑞圖、六典、作華苹、瑞應圖、其枝正平、王者有德則生、德剛則仰、柔則俯、（宋志同、華作平、）白虎通、華苹者、其枝正平、王政令均則生、（今本白虎通无此文、而云德至地則大平感、或大平華平一物乎、）薛綜曰、華平、瑞木也、天下平則其華平、有不平處、其華向其方傾、（文選東京賦注）援神契、見蓂莢下、又符瑞圖、變蓮爲華苹、獻瑞蓮一莖二花者見舒明皇極元明光仁淸和等紀、

〔延喜式 治部二十一〕祥瑞

瑞木

なれども、田ぬしもせんすべなしといふめり、よりて里人等、この樹をおほの木と呼び做したり、おほの木は大之樹なり、或は訛りて、王の木ともいふとぞ、この樹の高大約一十二三丈、幹の周圍は七尋にあまりつべし、そが根より凡二丈許あがりて、大枝三本にわかれたり、その二枝は周圍二尋に及ぶべく、又一枝は二尋半三尋にも近かるべし、これよりして梢まで枝毎に三叉にわかれて、絶えて増減あることなし、その葉は樫に似たれども、何の木といふことをしらず、郷を三枝(みつえだ)と唱ふること、全くこの木に因りてなり、和名類聚抄〈國郡部〉下總國千葉郡の郷名に三枝あり、又加賀國江沼郡の郷名にも三枝あり、この兩郷は佐伊久佐と訓せたり、これらも亦木によりて、その郷に名づけしならん、彼のおほの木のある處を森谷といふ、樹下に溝あり、これより東をクゲ反畝といふ、クゲの義未詳、反畝より上を、王の垣内(かいと)といふ、方言に、凡稻田によろしき處、苗頭などすべき處を、かいとといふとぞ、こは辛未の夏月、飛驒高山の二の町なる、二木長右衛門來訪し日、この物語に及べるなり、〇中略又老樹の枝のわかるゝよしを詠みたる歌あり、そは〈左のよみ人本書のまゝなり、紀郎女なるべし、〉

古今六帖〈第六〉いづみなるしの田のもりの楠の千枝にわかれて物をこそ思へ
きのらう女

夫木抄〈廿九〉いづみなる信田の森の千枝ながら玉のうゑ木にかざる白雪
前大納言隆季卿

この信田なる楠は、その枝の繁きによりて、千枝にわかるゝと詠みたるなるべし、彼の飛驒のおほの木は、その葉樫に類すといへば、枝のわかれしよしは似て、その物は非なるべし、

〔延喜式〈二十一治部〉〕祥瑞
平露〈樹名也、其形如レ蓋、生二於庭一、以候二四方之正一也、一方不レ正則應二一方一而轉傾也、〇中略〉　右大瑞

源氏箒木卷は作りたるなり、其原伏屋は信濃國にて、美濃の國界なり、遠くみれば、箒をたてたる如く高く見え、近くよりて見れば、何の木ともわかず、さればありとは見えて、あはぬ由にいへり、我(○齋藤彥麿)幼き頃、三河國矢矧の大橋の上よりみれば、西の方に大きなる箒木の如き木あり、里人の云く、彼は伊勢國朝熊山の木なりといひ傳へたりとぞ、幼き頃に見聞きして、今に忘れず、いとよく晴れたる日ならでは見えず、街道行程三十餘里あり、むかし景行天皇の御代に、筑後の御木郷に大歷木(クヌギ)ありて、朝日には肥前の杵島をかくし、夕日には肥後の阿蘇山を隱しゝよし書紀にあり、仁德天皇の御代に兎寸川の西に大木ありて、朝には淡路島に及び、夕日には高安山を越ゆるよし古事記にあり、又肥前佐賀郡にも大樟樹ありて、朝日には杵島、蒲川山をおほひ、夕日には養父郡草横山をおほひしよし風土記にあり、播磨國明石にも、井口に大楠ありて、朝日には淡路島をかくし、夕日には大倭島根をかくすとも風土記にあり、近江國栗太郡に大柞木(タラノキ)ありて、朝日には丹波國にさし、夕日には伊勢國にさすと今昔物語にあり、さる事なきにあらず、我若かりしころ、紀伊國熊野に大榎ありて、二またに諸木竹など數十株生ひ出でたるよし、紀の殿より御申し居になりて、繪圖さへ來たるを見て人々普く志る所なり、

〔玄同放言二〕飛驒三。枝。

飛驒國大野郡に三枝郷あり、(三枝みつえと唱ふ)郷内に五ケ村あり、その三ケ村を、上切、中切、下切と唱ふ中切村に(高山より里半許)巨樹あり、程遠き處といふとも、この樹の見えざるはなし、さる古木なれども、今なほこれを伐ることを許さず、もし人ありて、斧を用ふれば血流れ出づ、且祟ありといひもて傳へて、その落葉だも拾ふことなし、これを犯せば、かならず癰を患むといふ、唯樹下に起臥する乞兒等は、その枯枝を折りもしつ、落葉をあつめて、焚くことあれども、露ばかりも祟をうけず、渠等はよるべなきものとて、神の許させ給ふにや、この樹の爲に日を覆はれて、田圃の爲には不便

天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉、則隱杵島山、當夕日暉、覆阿蘇山也、天皇曰、是樹者神木、故是國宜號御木國、

〔日本書紀 仁德 十一〕六十二年五月、遠江國司表上言、自大樹、自大井河流之、停于河曲、其大十圍、本一以末兩、時遣倭直吾子籠、令造船、而自南海運之、將來于難波津、以充御船也、

〔大扶桑國考 下〕今の世にも然る大木ありやと尋ぬるに、文化九年の事とか、紀伊國熊野山の奧三十里ばかりにて、大木の極を伐出せるに、元木百二十抱、高さ三百二十間餘り、南北へ差たる枝十九抱あり、元木の木口三十四間四尺八寸なるを、角にして廿五間ばかり有り、此木の寄生木高さ七間半餘の杉七本、その外六七間以下の諸木多く、松、柊、楓、椎、柏、柿、竹、南天なども寄れりとぞ、また熊野の山奧に大杉明神と祀へる木は、三十尋餘り有りと云ふ、また陸奧國の郡は知らず關村と云ふ所にも大杉明神とて、三十三尋餘りの木ある由なるが、是等より大きなる木の有りと云ことは未聞かず、其は大地のなほ大に成り行く間は、木もそれにつれて大樹となれるが、大地すでに成竟ては、大かた木の立延べき量の自然に定れりと見えて、右の大杉など、神世の大樹に比ては小木なれど、今しも斯ばかりの木さへに多くは聞えずぞ有りける、然れど飛彈國高山の邊に異木ありて、枝も葉もみな三に分れし樹なるが、其蔭一里ばかりを蔽ひて、今も立榮えありと云へる人あり、また信濃國戸隱山の奧深き所に、一本にして二三里の間にはひ蟠れる松木あり、冬より春に至り五丈餘も雪ふる所なる故に、壓れて直立すること能はず、地につきて低ければ、昔より其幹木を見し人なしと云ことも聞たり、此等の大樹どもの事、なを其國々の人に委く聞ねて、實否を知らまほしき事なり、

〔傍廂 前篇〕箒木。

坂上是則歌に、そのはらやふせやにおふる箒木のありとはみえてあはぬ君かな、此歌によりて、

類別　大木

〔倭名類聚抄 二十木〕榁　唐韻云、榁、音雲、漢語抄云、木佐、或説、木佐者榁之和名也、此木文與榁貝文相似、故取名焉、今案、取和名者義相近矣、以此字為木名、未詳、木文也、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕廣韻作木名、按玉篇集韻並云、木文也、與此所引唐韻合、源君疑漢語抄以榁為木名云未詳者、唐韻作木文、故云爾、唐韻則作木名、蓋誤、

〔新校正本草綱目 三十四〕目錄

李時珍曰、木乃植物五行之一性、有土宜山谷原隰肇由氣化、爰受形質、喬條苞灌根葉華實、堅脆美惡、各具太極、色香氣味、區辨品類、食備果蔬、材充藥器、寒温毒良直有考彙、多識其名、奚止讀詩埤以本草、益啓其知、乃肆蒐獵萃而類之、是為木部、凡一百八十種、分為六類、曰香、曰喬、曰灌、曰寓、曰苞、曰雜、舊本木部三品共二百六十三種、今併入二十五種、移一十四種入草部、二十九種入蔓草、三十一種入果部、三種入菜部、一十六種入器用部、二種入蟲部、自草部移入二種、外類有名未用移入八十一種、

〔爾雅註疏 九釋木〕小枝上繚為喬。註、謂類枝皆翹繚上句者、名為喬木、繚音了、疏、此即上句曰喬、繚不了、故重出之、言小枝上繚翹繚者、名為喬木也、　無枝為檄。註、檄擢直上、檄音亦、疏、此釋上文梢梢擢也、擢、身擢也、謂木無枝、檄擢直上長而殺者也、

木族生為灌。註、族叢、疏、族叢也、木叢生者為灌、即上灌木叢木也、

〔尚書註疏 六禹貢〕厥草惟夭、厥木惟喬、傳、少長曰夭、喬高也、疏、喬高釋詁文、詩曰、南有喬木是也、

〔爾雅註疏 九釋木〕灌木叢木、註、詩曰、集于灌木、疏、灌木者即叢生之木也、下云、木族生為灌、郭云、族叢也、是灌木為叢木也、詩周南云、黃鳥于飛、集于灌木、是也、

〔和漢三才圖會 八十六〕果部

五果者以五味五色應五臟、李杏桃栗棗是矣、　占書曰、欲知五穀之收否、但看五果之盛衰、李主小豆、　杏主大麥、　桃主小麥、　栗主稻、　棗主禾、

本草綱目、集草木之實號為果蓏者、為果部、分為六類、曰五果、曰山果、曰夷果、曰味果、曰蓏、曰水蓏、

〔日本書紀 七景行〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來、時人歌曰、阿佐志毛能、彌概能佐烏麼志、魔幣菟耆彌、伊和哆羅秀暮、彌開能佐烏麼志、爰

を麻都能氣とよめり、氣は必ケの假字なり又近江の佐々木を和名抄に篠笥ともあり、さて今子一人と
あるべきを、かく詔ふ由は未思得ず、

〔撮壤集中木〕樹。　樹木。

〔書言字考節用集六生植〕樹木又云植木　樹木

〔萬葉集三雜歌〕門部王詠東市之樹作歌一首
東市之殖木乃、木足左右、不相久美、宇倍吾戀爾家利、

〔書言字考節用集下數量〕四木桑、楮、漆、茶、　五木桑、槐、楮、楡、柳、桑、槐、桐、櫸、朴、　八木松、柏、桑、柘、棗、橘、楡、竹、

〔大和本草二數目〕四木　桑　楮　桼　茶
五木　桑　槐　桃　楮　柳本草蘇恭

〔和漢三才圖會八十五樹竹之用〕樹音豎　樠音樠木心也　杪和名古須惠　梢同　根和名禰入土處　株和名久比世、今云加布、土上也、
按、樹○字○木○倍○植木總名也、　大枝曰幹和名加良　細枝曰條、又曰枝柯和名衣太　樹岐曰杈音砂丫椏並同和名末太布里　木翹高起曰翹楚俗云須波惠木中之獨高起者、以況人之出類抜萃也、今俗用氣條字　伐木而根復生曰枿俗云比古波惠　所過樹根傍復生嫩條曰蘖與木同　木幹中折而復生支、旁達者曰不牙萬切　右枿蘖不三字雖有小異、而其本字不也、
凡樹陰曰樾音越、和名古加氣、　木自斃曰柛音身　立死曰椔音支　木文曰橒音雲、俗云毛久、　衆樹蔭蔽曰蓊薆波江乃之太

〔剪花翁傳前編凡例〕一花形分解之辨○中略
樹は生木の總體也、幹は身木也、枝は大小與に同じ、大枝より小枝を生ず、此大枝卽ち幹也、椏は樹の胯也、梢は頂上の末條也、標は斜枝の末條也、

云ひしなり、されど是よりさき、陰陽二柱の神生み給ひし木神草祖等の如き神、また鳥石楠船神などいふ神も見えて、日神天磐屋戸にこもり給ひし時、天の香山の賢木、天之婆々迦、また手負帆置彦狭知の神の瑞殿を造られし大峡小峡之材ありと見え、また彼の神の斬り給ひし八岐大蛇の身には、蘿を生じ、松柏榲檜の背上に生ひしなどもしるされしかば、其髪毛をもて化し生ふし給ふを待たずして、是等の物どもおのづからありけるなり、凡そ太古の事の如きは、各みづから傳へ聞きし事を云ひつぎ語りつぎし所なれば、其説同じかるべきにもあらず、強て其義を求むまじき事なり、倭名抄木竹の部に見えし所、釋すべき事あるをば、こゝに釋しつ、其名義或は知るべからず、或は自ら明かなる、釋すべからず、椶櫚をスロといひ、陵苕をノセウといひ、木蘭をモクラニといひ、皂莢子をサイカシといひしは、並に其字の音の轉じて呼びしなり、厚朴をホヽカシハノキといふが如きは、ホヽは朴の字の音を轉じて呼び、カシハとは其葉をいひしなり、五加をウコキといふが如きハ、ウコは五加の漢音をもて呼び、キは卽木也、合歡木をネムリノキといひしが如きは、その朝舒暮斂をいひて、また萬葉集にカウカといひしは、其字音を轉じて呼びしなり、是等の類、また釋するにも及ばず、其餘古より此かた、世の俗いひつぎし所の如きは、悉く擧るにいとまあらず、

〔古事記上〕故爾伊邪那岐命詔之、愛我那邇妹命乎、〈那邇二字以音、下效此、〉謂易子之一木乎、乃匍匐御枕方、匍匐御足方而哭時、於御淚所成神、坐香山之畝尾木本、名泣澤女神、

〔古事記傳五〕易子之一木乎は古能比登都氣爾加閉都流加母と訓べし、玉垣宮段に吾殆見欺乎乃云々とある語勢に似たり、一木は、私記曰、一兒、古事記及日本新抄、並云謂易子之一木乎、古者謂木爲介、故今云神今食者、古謂之神今木矣云々と云り、此訓古き傳と聞えたり、猶古に木を氣とも云し例は、書紀景行卷に、御木、木此云開、萬葉二十〈二十一丁〉に、眞木柱を麻氣波之良、又〈二十八丁〉松木

〔段注說文解字一下〕屮艸木初生也、象丨出形有枝莖也、丨讀若囟、引而上行也、枝謂兩旁莖枝、柱謂丨也、過乎屮則上爲㞢、下垂根則爲木、古文或以爲艸字、漢人所用尙爾、或之言有也、不盡爾也、凡云古文以爲某字者、此明六書之叚借、以用也、本非某字古文、用之爲某字也、如古文以洒爲灑埽字、以疋爲詩大雅字、以丂爲巧字、以臤爲賢字、以㚔爲魯衞之魯、以哥爲歌字、以詖爲頗字、以圌爲靦字、籒文以爰爲車轅字、皆因古時字少、依聲託事、至於古文以屮爲艸字、以疋爲足字、以丂爲亏字、以俟爲訓字、以臭爲澤字、此則非屬依聲、或因形近相借、無容後人效尤者也、讀若徹、上言以爲、且言或、則本非艸字、當何讀也、讀若徹、徹通也、義存乎音、此尹彤說、尹彤見漢人艸木字多用此、俗誤謂此卽艸字、故正之、言叚借必依聲託事、屮艸音類遠隔、古文叚借尙屬偶爾、今則更不當爾也、丑列切、十五部、凡屮之屬皆从屮、尹彤說、三字當在凡屮上、轉寫者倒之、凡言其說者、所謂博采通人也、有說其義者、有說其形者、有說其音者、屯、難也、屯韵會有象艸木之初生、屯然而難、从屮貫一、屈曲之也、一地也、此依九經字樣、宋經音義所引說文多說、一爲地、或說爲天、象形也、屮貫一者、木剋土也、屈曲之者、未申也、乙部曰、春艸木冤曲而出、陰气尙彊、其出乙乙、屯字从屮而象其形也、陟倫切、十三部、易曰、屯剛柔如交而難生、周易彖傳文、左傳曰、屯固比入、序卦傳曰、屯者盈也、不堅固、不盈滿則不能出、

〔日本釋名下木〕木　いきなり、生(イキ)るなり、上を略せり、又氣のをひ出る意、

〔倭訓栞前編七〕き　樹木をよむも、生の義、生々繁茂するをいふ、

〔圓珠庵雜記〕木、(キ/ケ)むかしはけといふ。すさのをのみこと身の毛をぬきて、投げ給へるがさまざまの木となる故なり、

書紀神代卷一書云、素戔嗚尊曰、韓鄕之島、是有金銀、若使吾兒所御之國下不有浮寶者、未是佳也、乃拔鬚髯散之、卽成杉、又拔胸毛、是成檜、尻毛是被、眉毛是成櫲樟、

〔東雅十六樹竹〕素戔嗚神、出雲國に天降りまして、韓鄕の島は金銀あり、吾兒しらすべき國をして浮寶あらず、これよからじとのたまひて、鬚髯の毛を拔き散して、杉檜櫲樟被となし給ひ、また噉ふべき八十木種をば、皆能播生(シキハヤ)さる、五木猛神、妹大屋津姬、抓津姬、神三柱の神、又よく八十種の木を分ち布き、紀伊國に渡し奉る、卽此國に所祭の神是也と、舊事紀日本紀に見えたり、上古の俗、木を呼でケと云ひしと見えしは、彼神の髮毛より出でし所なるをいふなるべし、紀伊國を木國と云ひしも、亦此等の義によれりと見えたり、凡木を呼びてケといひ、キといふが如き、皆これ相轉じて

古事類苑

植物部二

木一

木ハ、キト云ヒ、古クハ、ケトモ云ヘリ、本草家ハ、分テ香木、喬木、灌木、寓木、苞木、雜木ノ六類ト爲シ、梅、李、桃、栗、梨、柿林檎、橘、枇杷、胡桃、無花果、秦椒(サンシヤウ)等ノ果實ヲ主トスル木本ハ、更ニ五果、山果、夷果、味果等ノ名ヲ以テ之ヲ類別セリ、

木ノ効用極メテ大ナリ、神代既ニ杉及ビ樟ヲ以テ船舶ヲ造リ、檜ヲ以テ宮殿ヲ造リ、柀ヲ以テ葬具ヲ作ルノ材ト定メシコトアリ、又果實ヲ採食シ、或ハ此ヲ以テ釀酒ノ料ト爲シヽコトモ、同時代ニ見エタリ、而シテ櫻、梅、桃、牡丹、海棠、椿等ハ、其花ノ美麗ナルヲ以テ、榊、松及ビ鷄冠木(カヘデ)、衞矛(ニシキ)等ハ、其葉ノ常ニ綠ナルト、紅色ヲ呈スルトヲ以テ賞セラル、其他、桑ノ養蠶ニ於ル、漆ノ塗料ニ於ケル、楮ノ製紙ニ於ケル、茶ノ飲料ニ於ケル、樟、桂、伽羅木等ノ香料ニ於ケル、肉桂、龍眼、棗、橙、石榴、崖椒(イヌザンシヤウ)等ノ藥料ニ於ケルガ如キ、木類ノ利用セラルヽモノ、殆ド枚擧ニ遑アラザルナリ、

〔類聚名義抄三木〕木莫卜反、キ、サトル、和モク、

〔伊呂波字類抄植物附植物具〕木キ、莫卜反、樹木、東方之位也、

〔段注說文解字六上木部〕木冒也、以疊韵爲訓、曰冒、冢而前也、冒地而生、東方之行、从屮、下象其根、謂下象其根也、屮象上出、下象下垂、莫卜切、

千振　ヲトギリ草　ガタコ　唐柿　菌類　金菌　松露　山松露　鼠菌(ネズタケ)　針菌(タケ)　舞菌(マヒタケ)
シメジ　土栗　果類　トチノ木　岩梨　和活力柚　園木類　イザリ松　白丁花　梅モ
ドキ　モクコク　ビヤクシ　ヒムロ　花木類　彼岸櫻　花丁子　鳥ノ足　下ッ毛　ウツ木
雲柳鈴掛　雜木類　八手木　チシヤノ木　三マタ栂　タブノ木　ヒヤ　ハヽソノ木　犬
樫(カシ)　玉ミヅキ　ヘラノ木　玉葉　ハイノ木　トビラ　肝木　山燈心　タンガラ　カンヒ精類
也　イチヂク無花果ニ非　黑モジ　フクラ　濱モクコク　濱木蓮　ウバシバ　胡麻木(ギ)　ケラノ木
犬櫻櫚

順フ常理也、葉ノ堅厚ナル木ハ秋冬葉不凋、常ニ葉アリ、草モ春生、夏長ジ、秋實ノリ、冬枯ル、ハ常理ナリ、又草ニハ春不生シテ夏秋冬生ズル者多シ、夏生ズル者ハ、秋海棠、雞冠花、莧、萱、及諸竹等ナリ、又秋生ジ冬春長ジ、夏枯ルアリ、夏枯草、水仙、菘、蔓菁、薺、菠薐、大小麥等是也、是陰氣肅殺ノ時生ジ、陽氣生長ノ時枯ル、草木春夏花サク物アリ、秋冬花サク物アリ、一年ノ内四時花サカザル時ナシ、就中春サク物多シ、夏秋次之、冬サク物ハ稀ナリ、冬花サクハ、只梅、山茶、海紅、寒菊、枇杷、水仙、臘梅、迎春花等ナリ、秋冬ハ霜雪ニ百草千樹皆枯ル時ナルニ、此等ノ花榮開ク事性異ナリ、董仲舒曰、葶藶枯于仲夏、歎冬華于嚴冬、韋應物ガ詩ニ、霜露悴百草、時菊獨妍華、林和靖ガ梅花ノ詩ニ、衆芳搖落獨暄妍ト云ヘルガゴトシ、

諸ノ草木、百穀ノ果實、多クハ秋熟ス、又冬ニイタリテ熟スルアリ、橘、柚、柑子ノ類是也、夏熟スルアリ、櫻桃、枇杷、蠶豆、大小麥、豌豆、瓜、苺等是也、只春熟スル物マレ也、棗ハ夏ニ至リ葉ヲ生ズ、ユヅリ葉ハ春至リテ葉ヲツ、百物ノ性各コトナル事如此、自然ノ理ナリ、學記曰、大時不齊トハ此之謂也、○中略

漢名未詳類　穀類。鵲豆　隱元豆　菜類。山葵(ワサビ)　花草類。ヲカカハホネ　ホトヽキス　福壽草　草棣棠(ヤマブキ)　三波丁子　草牡丹　白粉花(ヲシロイ)　小藤　アツモリ　熊谷　草下毛(ツ)　櫻草　エビネ　一花草　蔓草類。正木ノカヅラ　スヾメ瓜　高蓼　シホデ　松フサ　海草類。ツルモ　索麪苔(ノリ)　ヲゴ　ナゴヤ　海羅(フノリ)　鳥ノ足　水草類。沼ヨモギ　河澁(カハモヅク)　雜草類。タカラカウ　觀音草　モジズリ　シヤウ〳〵バカマ　張良草　樊噲草　コイ草　シヽヤキ草　シヽカクレユリ　濱木綿(ユフ)　雁足　大根菜(ナ)　蛆草(ウジ)　爾許草(ユコ)　小々妻(サヽメ)　ハフテコブラ　ハクリ　岩藤　葉ガラ松　草ハギ　カニトリ草　岩蓮花　ノコギリ草　猫草　サギクサ　岩菊　カウヲウ草　虎ノ尾　カヤツリ草　丁子草　鐵線花　梅バチ　ソバ菜　杉菜　土筆

も相屆、伐取之儀可申付筈ニ候、以來猶更道中筋並木之儀ハ、何ニ不依一己ニ取計間敷候、尤枝折根返等有之、通路之差支ニ相成候ハヾ、早速取除置、其段相屆、其外手入植足之儀ハ、先年觸候通、彌以無遺失嚴敷可申付候、右之趣其向々江可被達候、

右之通、松伊豆守殿○老中松平信明被仰渡候間、被得其意、宿場幷間々村々江可申渡、各々も無怠慢可被心得候、勿論御勘定所より差遣候御用往來之者江並木之樣子見分爲致、若等閑之取計方候ハヾ、急度相糺ニ而可有之條、此旨可被相心得候、

九月

〔日本書紀神代二〕欲立皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊以爲葦原中國之主、然彼地多有螢火光神、及蠅聲邪神、復有草。木。咸。能。言。語。

〔常陸風土記信太郡〕古老曰、天地權與、草木言語之時、自天降來神名、稱普都大神、巡行葦原之中津國、和平山河荒梗之類、

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓十二月准之○中略如此依志奉志國中爾荒振神等乎波神問志爾問志賜、神掃掃賜比氐、語問志磐根樹立、草之垣葉乎毛語止氐、天之磐座放、天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐、天降依志奉支、

〔大和本草一論物理〕○中略四生○中略植物四生アリ、挾サシテ活クハ胎生類也、實マキテ生スルハ卵生類也、荷芡ナドハ濕生也、菌ハ化生也、又曰、植物皮ヲ去バ枯、氣在外也、動物ハ内敗バ死、神在中也、又曰、動物天ニ本ヅキテ頭上ニアリ、呼吸氣ヲ以テス、氣ヲ天ニトル也、身温ナリ、植物ハ地ニ本ヅキテ、根地ニアリ、升降以津、津ヲ地ニトル也、體ヒヤヽカナリ、○中略凡諸木、春至則萌芽ヲ生ジ、夏ハ枝長ジ、秋ハ葉枯レ、冬ハ葉落チ實熟ス、是陰陽ノ生長收藏ノ時ニ

詔旨、一切停止、謹請處分者、右大臣宣、奉勅、今如所申、則知徒設憲章、曾無遵行、〇中略諸國若有斯類者、不論公私、不在敎限、其寄語有要、輙占无要者、事覺之日、必處重科、

大同元年閏六月八日〇又見日本後紀十四

〔延喜式二十五主計〕凡桑漆帳率戸數有闕者、其帳令殖塡、

〔類聚三代格七〕乾政官符

畿內七道諸國驛路兩邊遍種菓樹事

右東大寺普照法師奏狀偁、道路百姓、來去不絕、樹在其傍、足息疲乏、夏則就蔭避熱、飢則摘子噉之、伏願城外道路兩邊、栽種菓子樹木者、奉勅依奏、

天平寶字三年六月廿二日

〔類聚三代格十二〕太政官符〇中略

一應禁制斫損路邊樹木事

右同前解偁、道邊之木、夏垂蔭爲休息處、秋結實民得食焉、而或頑民徒致伐損、去來之輩並失便、望請特加禁制、莫令更然者、依請、

以前右大臣宣、奉勅如件、諸國宜准此、

弘仁十二年四月廿一日

〔延喜式五十雜〕凡諸國驛路邊植菓樹、令往還人得休息、若無水處、量便掘井、

〔牧民金鑑十八〕寬政二戌年九月

道中奉行へ

五海道往還並木之儀、手入植足シ、幷土手築立、田畑境定杭立等之儀迄、寶曆年中も相觸、其後安永年中も、猶又並木敷地者定杭、立杭植足之儀、委細達候上者、風折、根返、立枯等有之候ハヾ奉行所江

ともなひて見にゆきしは、わが〇太田覃十六七の年の頃なり、（吉兵衛楊櫨齋にて、苦しげに案内せしなり、）染井の植木屋伊兵衛がもとに、享保の頃拜領せしといふ躑躅の大きなるが三本あり、面向無三唐松といふ木なり、其のち尋ね見れば、其木もいづちにゆきけんみえず、伊兵衛は地錦抄つくりしものなりしが、其子孫おとろへて植木もすくなし、花屋十軒の內小左衛門八五郎などが植木よろしくありしが、是また久しくみざればいかゞにや、

花賣

〔剪花翁傳前編凡例一〕浪花あたりの俗言に剪出といへる者頗る六七十個あり、嘗て近鄕近國二日路三日路、又甚きは四五日を歷て、草木の花葉を剪得て、賣花市に鬻ぎ家業とせり、此徒の中に代々傳へて業とせる老鍊のもの、、手馴覺えし剪花保育の溫室冷窨升水藥水等の專要たる精義を、今更に著して、插花者流の目近くなし易きためにせり、

〔令義解三田〕凡課桑漆、上戶桑三百根、漆一百根以上、（謂、凡戶上中下者、計口多少、臨時量定、其餘條稱上上戶中中戶等、亦准此例也、）中戶、桑二百根、漆七十根以上、下戶桑一百根、漆卅根以上、五年種畢、（謂、新別爲戶者、亦依此限、其桑漆者、皆於園地種、若無園地者、不在課限也、）鄕土不宜、及狹鄕者、不必滿數、

雜載

〔續日本紀三文武〕慶雲三年三月丁巳、詔曰、〇中略頃者王公諸臣多占山澤、不事耕種、〇中略自今以後、不得更然、但氏氏祖墓、及百姓宅邊、栽樹爲林、幷周二三十許步、不在禁限、

〔類聚三代格十六〕太政官符

　應盡收入公勅旨幷寺王臣百姓等所占山川海島濱野林原等事

古件撿案內、從乙亥年〇天武三年暨于延曆廿年、一百廿七歲之間、或頒詔旨、或下格符、數禁占兼、頻斷獨利、加以氏々祖墓及百姓宅邊栽樹爲林等、所許步數具在明文、又五位以上、六位以下、及僧尼神主等、違犯之類、復立科法、今山陽道觀察使正四位下守皇太子傅兼行宮內卿勳五等藤原朝臣園人解偁、山海之利、公私可共、而勢家專黠、絕百姓活、愚吏阿容、不敢諫止、頑民之亡、莫過此甚、伏請依慶雲三年

雪下躑躅也　ヤシヤノ木　メイサ
カキウ　果李(クハリン)　木樓子
楊梅　新羅松子　藤松
會津林檎(リンキン)　林檎　沙菓(リンゴ)
有檎橘(ミカン)　咬𠺕吧橘(シヤガタラミカン)　紀伊國橘
大殿堂柚　岩梨實　赤梨實
マテハ椎實　白輪柑子　無花果
巴旦杏　唐川楝子　鐵樹(ソテツ)
桐油木此實雨具の油によし　香椿(ヒヤンチン)よく諸瘡を消事妙也　唐枸杞
リヤウブ京都にては一名常若、常州にてはハダカボウ、　櫨一名山漆、俗云ハセノ木、讃岐より來、實は蠟に宜く、木は弓に用ろ木也、
龍眼肉　桐俗云唐桐
棕櫚竹　鳳凰竹　肉桂
甘蔗(サトウダケ)　胡椒
キンメイ竹是は自然と江戸駒込御屋敷に生　瓢木(ヒヨンノキ)葉はモチの木に似、其實は瓢簞の如し、常盤木也、　虎フ竹
要木(カナメ)

植木屋

〔雍州府志 六土産〕諸木幷花草　北野種樹家諸品樹木高低大小、應レ所レ好而賣レ之、又接二柿梨橘一、凡一切菓實或花木無レ不レ有、至二草部一凡有二花類一悉種レ之、是謂二草花一、近世草木上中下分二三段一、限二百種一應二價之貴賤一而賣レ之、北野外亦所々有レ之、又近世河內國土人携二藕根一來種二家園池中一、其歲必花開、赤白隨二其所一レ好、一種自二中華一所レ來紅蓮、小而色紅、尤堪二愛玩一、

〔奴師勞之〕明和の頃、四谷に藥草吉兵衞といふ植木屋あり、藥草多しとて、內山先生大森見昌など

草之類

朝鮮人參（江戸駒込の御屋敷、井水戸にも御植候、）　薩摩人參　蘭

葵（加賀のまつりにかくるあふひなり）　ケンヤウ草　落花生

唐鬼灯　ロウサ（一名ハマメブ、俗云ハマナスビ、）　唐チサ（又云タウチシヤ）

唐芥子　黒葡萄　阿蘭陀茄子

ハラスマレイナ（一名ロウスマレイナ）　麹橘（ナボン）　朝鮮茄子

ヘンルウダ（一名ヘンアルウメ、俗云ルウメ草、）　日蔭蔓　草蓮華

緑蓮花　ツノ蓮華　金緑蓮

唐蓮（紅白）　烏芋（クロクワイ）　フツカウ草

蓴菜（水戸城下、及御領内所々の堀、又西山の池へ御はなち候、）　南部薯蕷　何首烏

水松　眼茄

昆布（松前の海より御取寄、大津濱那珂濱へ御はなち候、）　若紫（此草は西山の山中へ出生仕候を、西山公はじめて御見出し被レ成、わかむらさきと御號候、二月に花咲、）

濱木綿（ユフ）（潮來の濱に御座候へども、人不レ存候、所にては濱芭蕉と申候也、西山公御見出し候より、人是を存知候、）

木之類

難波早梅（咲やこのはな冬籠とよみし梅也）　玉蘭　黒梅

江南所無（梅也）　木犀（又云カツラノ木）　菩提樹

シデ辛夷（コブシ）　娑羅雙樹　雨椿（アマツバキ）

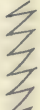
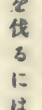
紀州熊野杉　佛手柑　臘梅

柚山椒（青柚の香に同じきがゆへに名とす）　榲桲（マルメル）　多山椒

ソナレ松　唐杉　白木蓮

者以盗論、主司即言者不坐、又條云、毀伐樹木稼穡者准盗論、

按之、稱瓜菓之類即雜蔬菜等皆是也、若於官私田園之內而輙私食者坐贓論、持去者計贓准盗論、並徵所費之贓各還官主矣、

〔大和本草 一〕論物理○中略

南方諸蠻、風土温熱、故草木庶類繁殖、其奇卉珍樹、往々流來于中夏暨本邦者不寡矣、如木綿、秈米、番薯、鳳尾蕉、南瓜、諸香木是也、其餘尙爲多、北土則不然、由寒威嚴肅發生之氣少也、以上五條篤信○中略

日本ニ上世ナクシテ、後世ニ中華及外國ヨリ來ル物多シ、畜ニハ、羊、豕、鵝、鶩、植類ニハ、橘、柑、菊、水仙、菩提樹、鳳尾蕉、番蕉、沙糖、秈米、茶、煙草、番椒、木綿、秋海棠、朱欒、南瓜、美人蕉、番薯、蠟梅、千日紅、迎春花、甘藷等不可枚記、就中秈米、木綿、甚有益于民用、非他物可比、

〔地錦抄附錄 三〕唐土より渡り來る花木草花、何れの時より渡りたるはしらず、正保年中以後來るもの左りに記錄す、牡丹、芍藥、梅、椿等、花木草花の品類一通りづゝ、渡り來るを、和朝にて、其實生、年年にかはり、花の品々、好士の庭々より出たるよし、今にそのごとく、年々實生多く、花葉かはりたるもの、各々名をよび愛賞せり、其品類花壇地錦抄大全に名記して、凡二千八百三十有餘品が中絕なく種植せば、万歲も有りぬべし、草木の種生々絕ざるものにして、天地とともにつきず、三皇の時の花、今に莖葉花實かはらずして花開く、人は眺るほどありて後の人又ながむ、前の人古花といふ花、今の人珍花といひ、今は古花といふて捨たる花、後人初て見て珍花といふべし、万治寬文比渡り來る花中絕して、今又渡り來るを見て、今の人珍花といふがごとし、

〔桃源遺事 五〕一西山公むかしより、禽獸草木の類ひまでも、日本になき物をば唐土より御取寄被成、又日本の國にても、其國に有て此國になきものをば、其國よりこの國へ御うつしなされ候、覺し召末にしるす、

草木黄落して山林に入ると、樹木を伐て人用と爲といふとも、又其時にあらざれば伐る事なかれ、空しく其材をそこなへばなり、月令にも孟春樹木發生の時なれば、伐木を禁止せり、都て財を用ふるは秋分より後に伐るべし、小寒前別してよし、春伐るは輕く、秋冬伐る者は財重し、實すればなり、又葉を愛するもの盆栽など枝をきり込は三月迄なり、かき植こみなどは梅雨の中よし、土用の芽は葉寒に痛まずしてよし、灌園先生云、木を伐鋸は齒を圖の如くすべし、上下の圖の如くなるは悪し、木の屑齒の間に夾りてわるし、又高き木を伐るには、上より段々伐りて下るなり、大枝をきり落して、下の物傷むと思ふ時は、長き綱を付て上の叉へかけて、伐りて後つなをゆるめ、段々と下ろすなり、又根より伐る時は、木へ綱を付て遠くにて挽なり、右へ倒すには右半分きり、左半分は少上を切るなり、きり口の合はぬ樣にするなり、又諸木ともに皮を剝ぎて用ふるものは、春分より秋分迄よし、此間は皮剝易くしてよし、杉木扁柏黄蘗山椒等なり、喜任〇阿部按に、奥州の邊にてシナの皮を剝ぎ用ゆるには、立木のまゝ下を切りまはし、又竪に切りて其のまゝ剝ぎ、段々と遠くにて引なり、根より梢まで剝るなり、これを水に浸し布に織り又繩とす、

〔廣益國產考二〕伐時〇杉木の事幷に皮の事

吉野郡にては、春彼岸より十日立て、十日が間を至極の伐時とす、夫より十日ほどは中とす、　又六月土用中ほどより八月彼岸までは、伐事あり、　春は伐てすぐに皮をはぎ、卷ながら三日ほど水に浸して干あぐる也、左なければ虫入てあしゝ、　秋伐は水に浸すに及ばず、すぐにうらの黄色になるまで干べし、薄皮は凡一日ほし、厚皮は二日干て宜し、

〔法曹至要抄上罪科〕一食瓜菓伐樹木事

雜律云、於官私田園輙食瓜菓之類坐贓論、棄毀者亦如之、即持去者准盗論、主司給與與同罪、强持去

凡植草樹、自親王已下家移常事也、左右衞門府、近來承之植、或又隨勅命便宜進草木之人植之、前栽者首瀧口承之、植萩戸萩云々、草無沙汰、有根樹忌方角、但上古無其沙　如何、菊合前栽合時植之、東庭竹臺、近代木工寮役歟、天德内匠寮作、吳竹架云々、

凡清涼殿及瀧口透垣等、皆木工寮役、他殿舍修理職役也、内匠寮近代如障子破損許奉仕歟、昔與今異、

輸送

〔地錦抄入〕植木荷物遠國持樣

海陸共に籠に入たるがよし、せきだい、又は桶に植たるはとりまはしわろく、おもくして玄かも水のかげん玄られず、箱の内に水滞て根くさる事なり、籠は水多くかけても走不滞とて、根によきほど玄めりをふくみ、とゞこほらずしてよし、陸荷は壹駄に四ッ荷に拵へたるが取まはしよし、二ッ荷はおもくてわろし、籠の大さかつかう、共に大方蜜柑籠よし、みつかんを入レて來ル籠たくさん有物なり、なくばそのごとくこしらへて用べし、籠の内にいとたてむしろを敷、植木壹本宛うちわらを以て枝をまきよせ段々入、多く木數を入ルほど友性にてよし、土も間々少入たるがよし、水苔にてつめる、所により水ごけ才覺なりがたく、なくば打わりをやわらかにして、こけの様にもみて入、少もこけにかわることなし、籠の上をわり竹にてまろかごにして、ござか又いとだてむしろにて、日のさゝぬ様におほひ、春秋は七日に一度宛水をかけ、夏は三日五日に一度宛水をかくる、舟荷ならば玄ほ氣なき水を吟味すべし、但根本へばかりかけべし、葉に水かくる事をきらふなり、雨ふらば葉へ水のかゝらぬやうに、よく〳〵おほいすべし、

伐採

〔壒嚢抄十一〕伐草木罪也ト云ハ如何

切損草木、律ニハ爲輕垢罪也、大莊嚴論第二卷、草繫ノ沙門ノ處曰、佛說諸草木、悉ク是鬼神ノ樹ナリ、我等不敢違、是ヲ以不能絕、文

〔草木育種後編上〕樹木を伐る事

く入ながら棒にて突ば、水土を引て根の間へ入る、これを水うゑといふ、然れども性濕を嫌ふ物には宜しからず、右の如くし、荒根を一度植かへたるものをかたしといふ、喜任〇同部 按に、是花鏡にいふ轉梁なり、これは時節にかゝはらず移して活し易し、されど寒中暑天にはあしゝ、凡て落葉するものは、春月芽の未生せざる前、二月三月の比、秋は落葉して後九月十月の頃よし、冬木の類は新葉を生じてかたまりたる比四五月よし、柿は二三葉を生じ、四月の頃よし、商州厚朴は四五月よし、〇中略

附 諸木砧木仕立方の事

梅は春彼岸に氣條をきり、根も鉢へ入る程にきりつめ、横植にして置べし、芽少し出る頃鉢へ植付、十五日計り過て水肥一度、又六七日過て一度かけてよし、水乾けば葉落るなり、土用前に落葉すれば花付ず、又肥過ては土用芽出て花付ず、土用明て十日計り過て水肥一度、又十日計り過て一度澆ぎてよし、乏かすれば葉も落ず、花格別の勢あり、鉢うゑは生かさずころさず、少しヅヽ一日に二度ヅヽ水を澆ぎてよし、

桃櫻は接て畑にて芽の出る比より曲冬の初に堀りかたし置べし、よきほどにきりつめてよし、

櫻は枝先迄まげてよし、切るはわるし、すべて扦木、接木、ともに春分前にうゑかへてよし、〇下略

〔草木錦葉集 緒卷〕草木植替手入に惡き日の事

接木、さし木、種蒔、植替等に地火とある日を用ひず、大歳の方に向ひて木を切らず、さいけうの方、又は節に入たる日、草木とも種を蒔ず、此外あしき日あれども、古より諸國此日は用ひず、予〇水野忠敬 も平は此日を用ひざりしが、中年の頃より万事繁多にして、いつも手おくれになるゆへ、據なく手入抔に日を撰まず、

〔禁秘御抄 上〕草木

凡木をうつしうゆるには先念を入れ、東西にしるしを付て、其方角を替ふべからず、大きなる木は枝のふとき分は程よく切去、梢をも長く切捨べし、かやうにすれば木の上の體すくなくなり、枝葉もうすくなるゆへ、風にもさのみうごかず、又根いたむといへども、木の上の體すくなくなり、根の力のつよきゆへ、木いたみて枯ることなし、凡木を種るには第一ほりとる事に念を入べし、もし横根遠く出てほりがたくは、大なる根は能比より伐べし、大なるに細小さき木ならば、又のよき道具にてきるべし、

根にはちを付る事、木のかつかうより、少しはちを大く付べし、　大なる木ならば、此次の木を種る所に記すごとく、鳥居を立、中に釣上るやうにすべし、かくせざれば木の根を底まで掘まはしたる時、そこの立根上のおもりにをされて、おるゝ事あればなり、尤細き木は夫に及ばず、　はちを包む事、古きこもかたはらの類を、一尺ばかりに切て、殘らず押あて、其上を繩にて念を入、幾所も多くからげ、少も土の落ざるやうに包むべし、　木の枝に印を付て、前生たる時の東西の方角かはらざるやうに種べし、　木の根のかつかうより種る地を、ひろく深くほるべし、

〔地錦抄 八〕草木植作樣之卷〇中略

一諸木植替時分は、夏木のるひはすべて春秋也、春は葉の未出時、秋は落葉して後植替べし、故に
　二月と九十月よし、冬木るひは夏植替べし、春葉出てかたまりしげりたる時よし、四五月也、

〔草木育種後編 上〕移栽(うへかへ)之事

花鏡曰、凡木有直根一條、謂之命根、趁小時栽便盤屈、或以磚瓦盛之、勿令直下、則易於移動、若大樹稱春初未芽時、或霜降後、根旁寬深堀開、斜將鑽心釘地根截去、惟留四邊亂根、轉成圓梁、仍覆土築實、不但移栽便、而結實亦肥大、灌園先生云、久しく植付たる木を荒根といふ、これを植かへる事大事なり、大樹は直ぐに拔がたし、時のよき時、根の廻り半分堀り、根を切て元の如く土をかけ置、枝も少しきり置、來年に至り枝を多くきり、前年殘したる根を皆伐りて、繩にて卷き、土の落ぬやうにすべし、扨植て根の下へ土のゆきとゞくやうに棒にて突込べし、又根の上へ細き土をかけ、水を多

は北風を受て、盆夏は涼處に置べし、故に暖國の草木冬月枯槁事は人多知るといふとも、寒地の產物夏月いたむ事は知る人稀なり、

〔草木錦葉集緒卷〕鉢并石臺の心得

草木ともに、植る鉢、石臺とも、其品の恰恰より、小ぶりなる鉢へ植るかたよし、鉢大ぶりなれば、雨天の節、其品、水を呑過るゆへ、痛ゝなり、

〔草木奇品家雅見上〕永島先生は東都四谷に住して、享保の頃の人也、天資花木を好み奇品を愛す、其始花壇植木とて區を別地に種しを、後器に栽て壺木と呼、先生始て尾陽瀨戶の陶工に命じて盆を制せしむ、是を緣付と唱、白鍔黑鍔鉢是なり、其辨利今に於て專用る所なり、此頃より奇品大に行て、好人黨を結、相唱和して是を玩、其巨擘として、世人永島先生と推崇、今桒永島連是也、珍品を玩事、實に先生を中興の祖とす、集る盆栽千を以算、自培養灌園に他事を廢して、老將至を志らず、或詰曰、先生彼兼好が徒然草を閱すや、先生笑答曰、資朝卿の兩舍して棄給ひしは、今我徒の玩奇品には非、夫我愛る錦葉銀樹皚々として白きは、月下の花にも勝り、また時志らぬ雪かと訝、斑爛帶紅の絳なるは、末秋の紅葉をみす、筆も及ぬ葉形、變砂子、黃斑、黃金色に至迄、天生の麗質にして、人作の能する所に非、斯珍品奇種誰是を愛重せざらんやと、聞人此答に感伏して、乍此門に入て好人と成、朝比奈、初鹿野の二氏これなり、今好人の盛る、此人々を以嚆矢とす、

〔草木奇品家雅見上〕高室は明和安永の頃、專奇品を弄し人なり、後年王事に遑なくして、今は絕て廢せり、此人高年にして矍鑠、肌膚光潤、容貌壯年のごとし、或人これを問に、我昔盆栽を深く好み玩弄してもつて興を遣る、今廢すといへども猶日夜忘れず、心の中に想像して樂むかたとす、此ゆゑに自老せぬなりとこたへしと云、

〔農業全書九〕諸樹木栽法

て、はんどへあてがひ、四方より土をさら〳〵と入、土一盃になりたる時、前後左右へ暫く動べし、土の空虚のなきためなり、植て一兩日多水をそゝぎ、或は大雨に逢事を忌、土のかたまるを恐るなり、肥を嫌草木は、年々土をあらたに入替てよし、又肥を好物は、土の乾めなる時、先土を箸の様なる物にて和げ置、よくねりたる肥を根廻りへそゝぐべし、又鉢植を地に置て、久く居つく時は、水抜の穴より、蚯蚓升りて、鉢の内にすむときは、必濕てついに根腐する事あり、節々置所を替てよし、其蚯蚓を去る法は、後に見ゆ、又蘇鐵、松の類は、棚にのせ置ても、まゝ蟻の付事あり、早く土を取替てよし、

〔草木育種後編 上〕盆栽之事

考盤餘事云、盆景以几案可置者爲佳、其次則列之庭榭中物也、花鏡曰、至若城市狹隘之所、安能比戸皆園、高人韻士惟多種盆花小景、庶幾免俗、然而盆中之保護灌漑、更難於園圃、花木燥濕冷煖更煩於喬林、喜任(阿部)○按に、盆中は實に土力薄くして養ひ難し、殊に千山萬野の奇艸異木を盆栽にし、一架に置て愛玩する故に、肥水時を得、乾濕其性に從はざれば立所に枯槁に至るべし、灌園先生云、盆はすやきを上とす、土燥く故に根腐朽事なし、盆は土の上に置時は、上半分は乾けども、半は濕りあり、外氣を内へ透す故なり、但夏月は度々水を澆ぐべし、冬は鉢のまゝ土中へ埋め、春に至り堀出してよし、鉢は粗き土にて燒たるもの、内外氣通ず、さる故に樹木自ら痩るものなり、又盆の形によりて燥濕あり、上濶く下狹く淺きは陽氣を含むゆゑに植物によし、上下同して深きは陰氣を含むゆゑに濕易く、植物腐る、上狹く下廣きは濕り強く、又拔く事なりがたくして甚惡し、都て鉢へ植たるは、當ぶんは雨を厭ふべし、植て直に雨にあたれば、土かたまりて根くさるなり、又盆栽は置場所肝要なり、たとへば南方の暖國より來る物は、南風をうけて亢陽の處に置てよし、又南方にても陰地にあるものは、暖處の内にて日をよけたるがよし、喜任曰、寒地より來るもの

盆栽

半時の間毎にこもと花とへきりを吹べし、少しにても乾くときは萎落るなり、一日一夜にして發くなり、泰崎氏云、西洋人某、崎陽にて冬月西瓜を作らんとて、盡日大陽の當る地に穴を堀り、其中に西瓜の苗を植ゑ、培養力を盡し、上に硝子の障子を施し、其上へ油紙一葉隔て養ひけり、寒月に至る頃、果して一瓜を結び大さも十分、皮の色深綠色なりければ、某大ひに喜び、日をトして人を招き、右の西瓜を出し、これを食せんとて割りたるに、外皮とは大ひにたがひて、瓤は白色なり、味ひ更になしとかや、人力にて大陽の光力をからざれば、果も花も十分の香色はなし、唐花唯一時目を喜ばするのみなり、又翠藍桂川先生の說に、西洋にてガラスホイスといふものありて、硝子を以て果木を覆ひ養ひて、冬月葡萄を漂流の人に食はせし事ありと、

〔草木奇品家雅見上〕朝比奈は東都四谷新邸の人なり、永島先生の門に入て好人の聞あり、奇品を愛すること衆に殊なり、寒夜に不寐して草木の寒を想像、窖を造て舶來の種を養、今の唐窖是なり、但唐書其頃は床下に造と云、今の法に異なり、後世改て今の法とすと云、始て草木の性に隨て、寒暑陰陽の護持を別ち、及百兩金の葉を洗てこむしを除、且當歲に花芽を著ることを考傳、萬種培養、斯人最拔群なりと云、

〔草木育種上〕登盆の事附り養花插瓶の事

按に盆栽は土乾ず濕ず、よく下へ水の拔るを第一とす、陶盎にても、又花盆にても、水拔の穴肝要なり、其穴は漏斗の如、少も水のたまりなきをよしとす、穴の所內へ引込たるは、廻りへ水滯て惡し、穴の所低がよし、扨穴を覆に、何の甕器にてもくだき、其まゝふせて穴を覆べし、文蛤などは鉢によりて水拔惡事あり、花鏡に建蘭を植る法に云、用盆先瓦片塡底、後以煉過土覆上と、これ妙法なり、蘭、百兩金などを鉢へ植るには、盆の底の穴を大くして、其上を覆に、赤土の黃めにて、かたまりたる土をあらくくだきふるひて、其篩に殘たる粗土を入て植れば、水よく拔て根腐事なし、物によりて植る土へ、合肥を切まぜたるもよし、總て植る法は、まづ陶盎を下に置、植木の根元を以

唐むろ作方

是は草木育草に詳なり

をかむろ

是は人によりて大小あるべし、まづ二間に九尺程ならば、入口四尺、窓一尺に二尺程なるを一つあけて吉、此割を以て大小にて程をし、又一間に四尺位なるむろならば、入口三尺程、窓は無其吉、方角は東西南うけて吉、晝は障子をたて、夜は土戸を引べし、鼠の用心大節なり、

穴藏むろ

山の手にかぎれり、深さ四尺許、横竪かぎりなし、上へ藁にて屋根をつくりて可也、上なるは、をかむろの如く作、内を三尺も堀、穴藏にしたる、是上也、室高さ五尺程にて吉、

〔草木育種後編上〕變花。催花。の法

凡花の非時に發(ひら)くもの堂花といふ、亦温棚にて開かしむるものも、亦堂花唐花などいふ、是助け長ずるの類といふも、亦都下競ひ其早きこと以壯觀とす、花鏡曰、以紙糊密室、鑿地作坎、緶竹置花其上、糞土以牛溲馬尿硫黄、盡培漑之功、然後置沸湯於坎中、少候湯氣熏蒸則扇之、以微風、花得盎然融淑之氣、不數朝而自放矣、是近時の穴蒸(あなむし)の法に似たり、梅櫻桃李都て春暖の氣を得て發くものは、皆此法にてよし、霜に逢ふもの別してよし、其法は日あたりの山の横へ横穴を堀り、形竈に類す、入口狹くして三四尺計り、中間は四五尺の廣さなり、中檀へ竹をあみて棚をつくり上にぬれごもをしき、其上へ盆栽を並べ霧を吹かけ、棚の下へ埋火をおき、こもにて穴の口を塞ぐときは、温氣昇りて俄然花開く、玄かあれ共太陽の光を得ざる故に色薄し、日にあてる時は色を生ずるなり、尤日に當るにも紙を隔て當る方よし、又窩にてちひさき小舍を作り、竹を緶みて棚とし、上へ樹花を並べ、四方をこものぬらしこもにて口を塞ぎ、下へ剛炭を大火爐に入れ、花に霧を吹かけ、

てる時は色を出すなり、又夕方よりむろの内へ入置べし、

窖の事

あなぐらは南向に入口を明、障子をかけ置なり、深さは五尺より一丈ばかり深く掘、下を平にして、又四方へ棚を拵へ植木を入置べし、然ども窖は濕氣多きゆへ、扶桑花、山丹花、使君子、覇王樹の類の陽氣を好て、甚寒にいたむ物は入べからず、必腐枯るものなり、さして寒をも恐ずして、陰氣を好類を入べし、又はきかけむろと云あり、是はまづから掘を長くほり、左右へ植木を置、段を作、中を通行するなり、其上へ橋の様に木を渡し、簀をあみてかけ、上へ土をかける也、土は厚程よし、兩方口にして明りをとり、夜はむしろにて覆べし、是に入る物は萬年青、石菖など又冬木類、葉物を入てよし、

土藏の事

塗垂も同東西へ長く建て、皆壁にして、入口も窓も皆南向に明、晝は障子をかけ、夜は戸を立る也、是に入る草木は、格別寒をも恐ざる百兩金、珠砂根、蘭の類、其外斑入物多木類を入べし、又高き土地にては、藏の椽の下を掘窖にして、又植木を入べし、上の家根は茅葺又は瓦にてもよし、

〔通賢花壇抄〕唐むろ出入の時節

立冬十月節に入、清明三月節に出すを定とす、但し年の時候によりて遲早あるべし、其草木のうち寒氣を恐るゝものは、早く入て遲く出すなり、

をかむろ出入の時節

これも十月節に入、三月中に出す、但し唐むろとは入るものことなり、

あなぐらむろ

出入をかむろと時節おなじことなり

〔草木育種上〕塘窖ぬりだれの事并圖

按に、本邦の北國寒地などへ、天竺安南等の暖國の草木を植には、冬の手當專要なり、冬は皆唐むろに入置べし、其唐むろの建樣は、北塞て南あきたる地は猶よし、南に陰なく、朝日より夕日までよくあたる所へ建べし、形は圖の如藏を建と同じ、土は厚きほどよし、南の方皆障子なり、九月頃にも寒風來ば、扶桑花、山丹花、使君子の類は、早く塘の內へ入、障子をかけ置、立冬の頃、十月中旬より、嶺南琉球等の暖國より來る草木は、皆入べし、其內日陰を好物は、巣へ入、前には龍舌草、覇王樹の類を置、冬も塘の內は土乾ゆへ、水を折々かくべし、天晴て暖き日には、障子をはづし、日をあててよし、然れども南風吹時は、障子を取べからず、寒中の南風は甚だ惡し、寒中又曇りたる日などは、障子を取べからず、夕七ツ時頃より、酒むしろを三重四重も覆べし、若晝中にても、俄にくもれば、直にむしろをかけべし、八ツ時過には、障子を明る事惡し、又塘の內へ鼠入て草木を喰事あり、其時は針がねへ小鈴を付て置ば、鼠入る事なしと云り、塘の家根は茅にても杉皮にても葺べし、春の彼岸頃より、丈夫なるものを先へ出し、追々出すべし、唐物類は清明の頃には皆出してよし、

方燈むろの圖 略○圖

其造樣は、南向に茅にても藁にても雨覆を拵へ、ひさしの下は、地まで葺下すなり、其形高く、唐むろの雨覆の如にして、其內へ圖のごとく、後は壁にしたるもあり、又障子にてもよし、四方皆障子を合せ、植木を入て、合せめへ目ばりをする也、此むろへ入るものは、梅、桃、櫻、海紅、紫藤の類、其外諸の草木、早く花を開せんと思ふには、是へ入べし、內の樣子を見るために、小く口をあけ置べし、外よりむろの下へかけて土を掘て、火鉢へ炭火をよく埋、消ぬ樣にして入べし、尤寒日は晝も火を絕べからず、むろの內火のある所の上は、竹すのこを渡して、上へ濕むしろを敷べし、此むろへ入て大抵三十日程にて、蕾花開ものなり、然ども櫻は白咲、紅梅は色薄し、是を暖日に出して日にあ

の様に見ゆ、葉を喰、筋をのこして、其葉茶袋の如し、巣の小なる時、枝を切捨べし、捨置ば冬に至て虫皆根もとに下り、枯葉の下或は土中に寒を凌て、春に至て草木の芽出を喰、又桃梅林檎等の實を食、大に害をなす、林檎海紅等に一種の毛蟲を生ず、三四月頃一葉巣になり、段々ふへて一枝皆蜘蛛の巣の如になり、葉を殘さず喰盡、巣の小なる時、葉を取、枝を剪て遠く捨べし、其まゝ置時は、枯木の姿となる、或は云、此虫後にみのむしとなりて、外の木へ移、葉又は實を喰害をなす、菊虎は形蚕に似てほそ長し、菊艾類の宿根より生ずるといふ、故に菊は古根を植うべからず、四月頃早朝に出て、菊艾類の若ばへを吸からし、跡へ卵を產置なり、其吸たる跡二ヶ所横に筋あり、下の吸めより折取て、莖を二ッに割ば、中に黄色の長き卵あり、其まゝ置時は、菊の心に喰入て、蛀となる、秋になりて菊俄に枯るもの也、さんせうむしは、形てんとうむしに似て黒く甲羽あり、夏の頃瞿麥の花を喰、又柳に集りて葉を食ふ、又酸漿にも集り葉を食もの也、節々拂べし、蛞蝓蝸牛は草木の葉を喰事、毛蟲の如し、遠へ捨べし、鼹鼠は草木を根を掘あげ害をなす、珍重なる植物は、竹にて簀をあみ、土中に埋、其中に植ば來らず、又妙法あり、海參を切て所々へ埋置ば、遠く逃去と云、なまこは虫を除ものなり、鉢うゑ類に蚯蚓升ときは、水拔惡なり、植物くさるものなり、無患子の殼を煎、其汁を澆ば皆死す、又生なる小便を澆ば、みゝず逃去もの也、跡へ水を多くそゝぐべし、

温室栽培

〔剪花翁傳前編凡例一〕温暖の頃、開花の遠なるを、冷窖にて保たせる等は素の業なり、然るに冷寒の頃、未開の花を急ぎ、温室に開かせる業などは、人作にして、天時に順はざるに似たれども、さにあらず、椿梅の類は秋より萌して、冷寒の至る迄に漸々咲出しぬれど、寒風霜雪行れては窮し凋みて、暫く開くこと能はず、されど春に至て悉く開花せり、是既に自ら萌し發ける蕾なるが故に、温室に助る、時は忽ち開花するもの也、寒風霜雪の候、輕淡なる風土は、秋より冬に積て漸々咲出べし、かゝればいまだ萌さざる花を、温室にして開かせるにはあらじ、故に是を辨じ出せり、

骨を燒て烟てよし、又麥藁の灰をふりかけてもよし、又常の灰にても度々振べし、あぶらむし生ずる時、必蟻多く聚り、虫をふやす故、蟻を拂捨べし、又鼈甲を其邊へ置ば、蟻集るを遠く持行て拂べし、又砂糖を置、蟻を聚て取捨もよし、花鏡に云、蟻穴以香油或羊骨引出之、又蟻做窠須置一淺盆坐水、使蟻不能渡といへり、こ蟲といふものあり、百兩金、紫金牛、柑、橘、橙類の葉のうらに、砂の如小き虫多付ときは、葉落ちて傷なり、つき初りなれば、刷毛を以て水を澆洗てよし、又柑橘建蘭類に疣の如にして、扁蟲を生ず、群芳譜に、是を蘭蝨といふ、これを去法は、魚洗汁をそゝぎ、或は大蒜を摺て水に解、筆を以て洗べし、土中に生ずる糸虫と云あり、形糸の如にして、長さ二三分、色白し、是肥强して濕熱より生るなり、草の根を腐かすものなり、集り居る所を土ともに取捨てよし、桃樹に生ずる小き蠐螬あり、初二分ばかりにして色薄青し、掃帚にて拂べし、此虫桃實の皮よりくひ入て實を喰、螟蛉は菘蘿蔔芥などに付青虫なり、毎朝拾捨べし、蠐螬は夏中大なる蝶飛來て、葡萄薯蕷類の新枝へ卵をうみ付て去なり、二三日めに一二分のいもむしとなる、青きもの茶色のもの黒きものあり、生長すれば指の大さになり、脊に星ありて眼のごとし、橘虫と云あり、橘柑橙柚茱萸椒類の香ある木に多し、これも蝶飛來て卵を新枝へ著る也、是は頭大にして蠶の如く、此を挾ば黄赤色の角を出し甚臭し、尺蠖も諸木に生ず、よく見て拾取べし、蚝蟲に種々あり、梅桃李林檎などの枝に卵を著置なり、形鮫のごとし、冬の內取捨べし、此卵三四月頃かへりて虫となり、木の又へ巣をかけ、數百あつまりて、新葉を喰ふ、其形あさき色にして島あり、是を取法は、燈油を筆か布に浸、虫の巣を拭取べし、又油をたゞ澆てもよし、虫忽死す、樹の根もと或は割竹の內、又は板屛壁などの日陰に、綿の如にして長く產付たる卵あり、削さるべし、捨置ときは春になりて、皆小き毛蟲となる也、此類に毛多くありて、脊に金色の光あるを、半夏太郎といふ、枝或は樹の皮に居るなり、又八九月頃桑櫻あり、あめかしわ類の木、又草の葉にも生ずる桑樹蟲あり、初は蜘蛛の巣

〔草木育種上〕除蟲法并圖

種樹書曰、種木無時、戴毛蟲於根下皮、以甘草末揷之亦佳、又曰臘月二十四日、種楊樹、不生蟲、又曰、斫松樹、五更初斫倒、便削去皮、則無白蟻、又須擇血忌日、以斧敲之云、今日血忌、則白蟻自出、又曰、元日天未明、將火把、於園中百樹上、從頭用水燎過、可免百蟲食葉之患、又曰、園圃中四旁、口種決明草、蛇不敢入、略○註　又曰、灌洗布衣、灰汁澆瑞香、必能去蚯蚓、且肥花、以瑞香根甜灰汁、則蚯蚓不食而衣垢又自肥也、又曰、柑樹爲蟲所食、取蟻窠於其上、則蟲自去、又曰、果樹有蠹出者、以芫花納孔中、卽或納百部葉、又曰、果木有蟲蠹處、以杉木削小丁塞之、其蟲立死、又曰、生人髮掛樹上、鳥不敢食其實、又曰、桃李蛀者、以煮猪頭汁冷澆卽不蛀、又曰、果樹生小靑蟲、虰蜻蜓掛樹自無、接に、白蘞末置花根下、辟蟲易活、凡樹をうへかへる時、根の下へ大蒜一ッ、甘草少ばかり入て植ば、久く蟲を生せずと、花鏡に見へたり、凡草木に生る蟲甚多し、其內大に害をなす蟲をこゝに志るす也、土中に古根芥などあれば、蟲を生る也、間を遠く植て、風を入る樣にすれば、虫少し、木の類は古枝を切すかし、風を入べし、又肥へ畑草の莖を切まぜて用ば、虫生せず、黑小地蚕（ねきりむし）又芽きりむしとも云、其形いもむしに似て小く、鼠色なり、早春の頃、土中に居て、朝など出て、草の芽を食、よく見てひろふべし、又土中に蠐螬（ぢむし）あり、此類は皆草の根を嚙切ときは忽枯る也、甚害をなす、根廻りの土中を尋て取捨べし、虫多き時は石灰を水にてとき澆ば死す、暫ありて其石灰に、水をそゝぎ去べし、木蠹蟲（きくいむし）は形長く色黑し、林檎無花果などの木の心を喰、皮の所へ小き穴をあけ、鋸屑の如きものを多く出す、此穴へ硫黄を粉にして入てよし、又針金を穴より入て突殺もよし、又鐵炮の焰硝を、搨紙により込、穴へさし入て火を付れば、忽穴の中へ火氣通じて、虫殘ず死す、又虫の穴へ燈油をさしてよし、此虫諸木に付ものなり、草木ともに風入あしき所には、木蝨（あぶらむし）又ありまきともいふ虫、多新葉の所へ付、日々にふへてひしとゝとり卷ときは其芽枯るなり、其時は、虫の聚り居る所へ、烟草の水を度々澆てよし、又鰻鱺の

草にて、うきくさ、又もの類は糞汚に觸ざる故、清潔にして神に供すべしと云り、

〔草木育種後編上〕培養(こやし)之事

韓詩外傳云、孔子曰、夫土者堀之得甘泉焉、樹之得五穀焉、喜任○中略按に、土能萬物を生じ、人命の系する處、百果草木都て又地より生せざるはなし、然れども地に高下肥瘠あり、水に寒冷淡鹹あり、若人力の滋培各其宜しきを得ざれば、百果をして盡く欣々として榮へに向はしむるべけんや、古へにいふ、花師の類、園主必ず肥を貯ふるを事とすべし、下條に肥に用ふべきもの數品を擧ぐ、用るもの其好惡にまかすべし、

本肥(もとごえ)といふは、人糞十升、水十升合せ、糞窖の中に貯へ置もの也、陳氏云、塘水を和すれば諸水に勝るといへり、

下肥(くだしごえ)といふは、金汁(きん)一升、水三升和し貯るものなり、

水肥といふは、人糞一升、水七升和し貯ふるものなり、

魚肥(うをごえ) 卽魚腥血水といふも同じ、魚の腸又肉又洗ひ汰るを貯へ置ものなり、是亦水を和し貯へ用ふべし、○下略

〔花壇綱目下〕諸草可肥事

一馬糞(ばふん) 寒氣を痛草に宜し、暑氣を嫌草にも少宛根のまはりへ用也、

一下肥 強こやしてよき草に用べし、但土にまぜ置、久しくして用也、

一田作(たつくり) 下肥な諸草に用べし、能いりて粉にして用て宜し、

一溝水土(みぞみつつち) 干て粉にして沙を三分一程交てふるい、石竹の類に用て宜し、

一魚洗汁(うをあらひしる) 根に肥の入かれる草に用なり、諸草ともに少づつ根廻へ用て宜し、

一荏油糟(えのあぶらかす) 牡丹芍藥の類に少宛用てよろし、但秋冬計用て宜し、

一小便(せうべん) 大方の草にくるしからず、但葉花に不懸、根廻へ雨の降まへなら見合かくべきなり、

一馬便(ばべん) 右より少やわらか也、諸草とも少づゝ用てよろし、用所同前なり、

一猫鼠類(ねこねずみのるい) 牡丹柑類によろしと云、未用知、

一油土器(かわらけ) 粉にして牡丹の根にちらして宜し、

一茶がら 万草に用て宜し、夏中に少根廻に置べし、

一藁灰 さんじこ、青蘭、水仙等に用也、其外下肥に交、少宛用なり、

一油糟 牡丹菊芍藥の類、其外之草に少用てくるしからず、

一ごみほこり 牡丹、蓮、河骨、水葵、澤瀉、大かた、此類の草に用て宜し、其外の草にも土にまぜ用てくるしからず、

量は前文に記し有ごとく也、

〔培養秘錄四〕穀肥ノ用法ヲ論ズ

翁○佐藤玄明曰、草木類ノ培養ニ用フベキモノ都テ十二種アリ、第一穀肥、第二苗肥、第三芝草肥、第四草木埋肥、第五草木腐肥、第六厩肥、第七草木灰、第八稃肥、第九糠肥第十油精、第十一造釀物精、第十二水藻是ナリ、能其土地ノ剛柔ト、氣候ノ温冷トヲ察シ、作物ヲ適悅シ、十分ニ豊熟セシムルヲ良農家ノ手段トスル也、穀肥トハ穀類ヲ肥養ニ用ユルヲ云フ、總テ粳米糯米ヲ始トシテ、大豆、小豆、豌豆、碌豆、蠶豆、鵲豆、大麥、小麥、蕎麥、黍、稷等、皆此ヲ用ユベシ、然ドモ粳米糯米ヲ糞培ニ用ユルコトハ、近來制禁トナレリ、凡ソ穀類ノ實ヲ生ニテ糞培ニ用ユルトキハ、其滋潤温煖ノ性ト、生氣發達ノ勢トニ因テ、其作物ノ精神ヲ、専ラ莖葉ト穗トニ上湊シム、故ニ能其莖葉ヲ肥大ラセ、殊更ニ其種子ヲ十分ニ實セシム、是其天性ニ從フ法ナリ、然レバ根ヲ需テ作ル者ニハ、穀類ノ肥ヲ用ルハ無益ナリト知ルベシ、

〔草木育種上〕澆灌并培養の事

按るに山野自然に生ずる草木は、實熟して自落腐爛すれば、則その物の肥となる也、冬木は葉繁て暑寒を厭、夏木は秋葉落て土を覆ひ寒を凌、是自然の理なり、𠫞かるを實を採盡、或は葉を掃除などするは、理に逆もの也、故に手入培養の法を用ざれば生長せざる也、花鏡云、人力亦以奪天功と誠に然り、又曰澆灌人之需飮食也、不可太饑、亦不可太飽と云り、凡草木に用る肥二十一品あり、後に審にす、又人糞馬糞などの穢物を嫌ものあり、種樹書曰、花木有不宜糞穢者甚多、尤宜間用之、非其宜立槁と云り、蘭、百兩金、杜鵑、虎刺、枇杷、杜衡などに糞を用事を忌が如し、又神社の庭或は神前に供するは草木等にて糞穢の物を用難事あり、かくの如き時は代に用る肥あり、干鰯、灰汁、油粕、酒粕等を合せ腐して用ば、大抵同様に肥るなり、左傳曰、蘋蘩薀藻之菜、可薦於鬼神と云、これ水

ニ大豆ヲ用ル如キハ良法ナリ、玉揷ニ芋ヲ用ルトキハ、旱繼テモ乾燥スルコト無ク、霖久ニモ濕ヒ過ルコト無ク、揷タル枝ハ傷マズシテ、其芋ノ腐テ根ヲ生ズベキヲ以テナリ、○中略

松、杉、扁柏、樅、櫧、欅、椋、七葉樹、皆新枝ヲ切採テ、揷木スルトキハ、能ク活ク者ニテ、苗ヲ仕立ルニ宜シ、多ク仕立テ植著クベシ、其中松ヲ植ルニ、濕地ハ宜シカラズ、凡ソ揷木スルニハ春葉ノ生ゼザル前ト、秋葉ノ落タル後トニ揷ベシ、

草類ヲ揷ニハ、葉モ莖モ能ク固マリタル處ヲ切テ揷セバ活ク者ナリ、菊ハ苔ノ少シ見エタル頃ニ揷ベシ、其前ニ早ク揷トキハ、根ハ多ク生ズレドモ花ハ無キ者ナリ、故ニ秋菊ハ八月上旬ニ揷ヲ良トス、斯ノ如クスルトキハ、莖短クシテ花アルガ故ニ形色甚ダ宜シ、

壓條

〔草木育種後編上〕壓條之事

花鏡云、驚蟄前後幷八月中皆可過貼、喜任○阿部 按、とり木は大底接木と時節同じ、とり木は枝を曲げるに、段々と曲てよし、四五日も過て又曲ぐれば、枝折れずしてよし、曲る處の皮を少し計り剝ぎてよし、切るも十月の比よし、一度にきるはよろしからず、二三度に段々と切るべし、其まゝ置、來春に至り移し栽べし、又夏木の類は二月に壓條してよし、尤前の扦木と同じ事にて、木の皮を少し剝おき、其處に肉かけたるとき、其處の皮をまた少しとりて、其處へ土を付べし、種樹書に、用竹筒破兩半、封裹之、といふもの、亦下に圖○圖略するとと同じ趣也、

施肥料

〔草木錦葉集緒卷〕清淨の肥用ひ方心得

草木とも下肥を懸て能と記しある品は、豆肥を用ひてよし、梛槙其外丈夫なる品へは畜肥もよし、水肥を懸て能と記す品は、豆肥へ風呂の湯を加へ用ゆべし、又下水を懸ると記す品は、風呂の湯をさまし置懸るか、又は女の手水の湯を懸てよし、鰹節肥は前に記す品へ用ひてよし、魚肥もよけれど、匂ひ甚あしきゆへ見計べし、懸て試んとおもはゞ下肥を用ゆる品へ用ゆべし、都て分

總テ此法ハ、大風或ハ俄照ノ日ニハ、決シテ宜ラズ、但シ風無ク平和ナル日ノ雨氣ヲ催シタル日ハ最モ宜シ、其刻限ハ太陽ノ高ク上ラザル以前、巳ノ上刻マデヲ良トス、土性ハ赤野土黑野土ニテモ、粘氣ノ少ナク常ニ潤ノアル日陰ナル處ヲ撰テ揷べシ、

一管揷ハ其枝ノ梢ニ勢ヒ充テ、未ダ芽ノ出ザル前カ、或ハ今年延タル新枝ナラバ、葉ノ堅固マリタルヲ、長サ二三尺許ニ切リ、葉多ケレバ二三枚殘シ、其餘ハ悉ク剪ミ捨テ、揷方ヲバ小刀ニテ削テ、赤土ノ濕氣ノ有ル陰ニ揷べシ、〇略圖 或ハ揷方ヲ利刀ニテハスニ揷モ宜シ、

二橦木揷ハ拇指許ニ太リタル枝ノ椏枝アルヲ二三尺ニ切リ、下ニ當リタル一枚ヲ殘シ、其餘ヲバ皆切捨テ、揷ス所ノ切目ヲ小刀ニテ淸楚ニ能ク削テ揷スナリ、〇略圖

三玉揷ハ扦べキ梢ヲ長サ三四寸ニ切リ、葉多ケレバ二三枚殘シ、其餘ハ悉ク剪ミ捨テ、扦方ヲバ小刀ニテ淸楚ニ削リ、黃色ナル土ヲ煉テ、團子ノ如クニ丸メ、此土ニ扦テ土中ニ植ウ、此ヲ玉揷ト名ク、所謂此黃土ハ地ヲ三尺モ掘ルトキ、底ニ黃色ニシテ堅ク粘氣アル土ヲ生ズ、此土ヲ煉テ揷木ノ玉ニ用フ、總テ此土ハ揷木ノ根ヲ生ズルコト妙效アリ、(圖略)若シ黃色土ノ無キトキハ、赤土ヲ用フべシ、

四割揷、凡ソ山茶、茶梅、橿木、欅木等、性ノ堅キ木ハ、其本ヲ二ツニ割テ、割タル間ニ小石ヲ一ツ挾ミ植ルノ法ナリ、〇略圖

陳扶搖ガ秘傳花鏡曰、若果木須揀好枝先插於芋頭或萊菔上再下土時則易活ト、今夫レ江戸ノ北郊大久保村ニテ、薔薇類ハ八月其枝ヲ管ニ切リ、芋ニ一本ヅヽ插テ、園中ニ植ルニ、皆悉ク活テ蕃衍ス、又花鏡瑞香ノ條ニ云、剪取嫩條破開放大麥一粒用亂髮纏之入土中ト、然レバ此割揷ニ小石ヲ挾ムヨリハ、大麥一粒或ハ大豆一粒ヲ挾タランニハ、啻ニ根ヲ生ズルノミナラズ、肥養トモ成ヌべシ、〇略圖

信淵按ズルニ、揷木ニ種々ノ說アリ、其中ニ於テ便良ナルヲ撰ビ用フべシ、玉揷ニ芋ヲ用ヒ、割揷

玉挿といふ、良法也、何の木にても此定也、時刻は雨氣の日巳の刻以前がよし、未明より巳刻までを限とすべし、さて後に度々水を漑がよし、物理小識九に、杉鮎不宜、水壤種之、亦發、然挺茂不久焦枯也と見ゆ、

〔草木育種後編上〕扦插之事

花鏡曰、草木之有扦插、雖賓花備之取巧捷徑法、然亦有至理存焉、凡未扦插時、先取肥地熟劚細土成畦、用水滲定、待二三月間樹木芽蘖將出時、須揀肥旺發條如拇指大者、斷長一尺五寸許、毎條下削成馬耳狀、別以杖刺土成孔、約深五六寸、然後將花條插入孔中、築令土著木、毎穴相去尺餘、稀密相等、常澆令潤澤、不可使之乾燥、更搭矮棚蔽日、至冬則換煖蔭、仲春方去候其長成高樹、始可移栽、毎欲扦插、必過天陰方可動手、又曰、若扦薔薇、木香、月季、及諸色藤本花條、必在驚蟄前後、揀嫩枝斫下長二尺許、用指甲刮去枝下皮三四分、插於背陰之處、四旁築實不動、其根自生、灌園先生云、草類は葉も莖も實入かたまりたる處を切てさせば活ものなり、菊などは莟の形少し見えたる頃させば、根を生じ花を開く、八月上旬をよしとす、早くさす時は、根は多く生ずれども花少もなし、又中菊洋菊は夏の中肥土へ扦せば、鉢も小く莖も短くして、花ある故に形よし、木類は春の末葉を生せざる前さすによし、落葉の木は夏に至り葉かたまりたる時さすもよし、常磐木は新芽のかたまりたる頃よし、薔薇は八月よし、○下略

〔種樹秘要〕挿木ノ法

木ヲ挿スニ四法アリ、一ニ管挿、二ニ撞木挿、三ニ玉挿、四ニ割挿是ナリ、總テ挿木ハ種兒ヲ蒔ク如クニシテ、世ニ名高キ美味ノ果實ト、麗艶ナル名花等ヲ、無造作ニ生ズル業ナルヲ以テ、種樹家ニ於テ講習セズンバアルベカラザルノ法ナリ、凡ソ此挿木ノ仕方ハ、二三月ニ致スベキ者ナリ、或ハ梅雨中ニ行フベキ有リ、或ハ八九月頃ニ挿べキ者アリ、其中ニ梅雨中ニ挿べキ者ハ殊ニ多シ、

揷木

てに御覽まし〳〵けるが、此寺へもおもほへず渡御ありしに、折ふし其時の住僧はや八旬に及て、庭に出てみつわくみつゝ、手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば、思ひよらねば、そのまゝ背き居たりしを、房主なに事するぞと仰られしを老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく、接木するよと御いらへ申せしかば、御わらひありて、老僧が年にて、今接木したりとも、其木の大きになるまでの命をまれがたし、それにさやうに心をつくす事ふようなるぞと上意ありしかば、老僧、御身は誰人なれば、かく心なき事をきこゆるものかな、よくおもふて見給へ、今此木どもつぎておきなば、後住の代に至て、いづれも大きくなりぬべし、然らば林もしげり寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもふてする事なり、あながちに我一代に限るべき事かはといひしをきこしめして、老僧が申こそ實も理なれと御感ありけり、その程に御供の人々おひ〳〵來りつゝ、御紋の御物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大きにおそれて奥へにげ入しを、御めしありて、物など賜りけるとなん、

〔松屋筆記五十一〕杉のさし木の傳

中陵漫錄四の卷插杉條に、杉は插木にしたるは皮目の處少し白く、其内は皆赤身也、薩州にては每年四月の比、杉の枝を二尺許に切取り、六本を二把として、山中の泉に浸し置事四五日、取上て赤土の泥中に塗て、山野の空地に杖を立て穴を爲し、深さ七八寸に至る、尤地の堅き處は穿つ事なし、此穴中に插む、風吹時は廻轉す、雨露の潤を歷て自ら堅定する也、大抵百本の内七八十本活(ツク)、是より手附るに及ばず、土地の宜き所には尤長じ易し、先春に至てその木の素情を見立、葉の先新葉を出さんとするを(俗におうめと云)採て插時は、百に一失なし、苗を仕立植るに勝れり云々、與淸曰、擢(サシキ)は今年延(ノビ)の若枝(バエ)を插には、葉莖かたまりてさす、長さ二三寸、或は四五寸にし、葉おほければ切捨て、その本をよく切て、赤土の中に黄色なるを採て、煉て丸くして、それに插てさして植る也、これを

梅はみな接木にすべし、實蒔の儘にては實小さく、却て成長惡し、園中詠めとする計ならば、梅臺に接てよけれども、多く接んと思はゞ桃臺にすべし、先桃の實をふせ、生出たるを肥して育れば、其年一尺、又一尺三四寸にも五寸にも伸るもの也、夫を翌春間五寸位置、綿を育る如く肥しを多く施し作なば、三尺位生立べし、夫を臺木にして接て宜し、攝州邊の梅は殘らず桃臺也、先接旬は、花の盛りより過る頃迄に接べし、花みな落ては、少し靑葉出る頃まではつぐべし、それよりおくれてはつき方惡し

接やうは、此奥に蜜柑の接方を委しく記せば、是に見合接給ふべし、

接て後、臺木の桃より芽を生ずる事夥し油斷なく二三日間置てはかき〳〵すべし、　其冬は霜覆ひして翌春本植すべし、

〔醍醐隨筆 下末〕一接木は本の臺木(だいもく)より養ふに、臺木の善惡によらず、末の接穗(つぎほ)によるはいかにぞや、桃の臺木に梅を接ぬれば梅也、あやまりても桃とならぬ、いかなる道理ぞと不破翁いぶかる、されば臺木は土地とおなじ、接穗はたね也、土地は泥土にても砂土にても、梅のたねをうゝれば梅生じ、桃のたねをうゝれば桃生る、土地にたねを養ふのみ也、臺木も接穗をやしなふのみなり、

〔明月記〕寛喜二年三月七日己亥、早旦重以二宗弘一問二有長朝臣一、〇略註兩株八重櫻、一條殿枝接木、〇花漸開、

永日徒然、令レ分二栽菊苗一、草不レ憚二土用一

〔駿臺雜話 一〕老僧が接木

されば是につけて思ひ出し事あり、恐が岡のあなた谷中のさとに、何がしの院とてひとつの眞言寺あり、翁〇室鳩巣いとけなかりしころ、其住僧を志りて、志ば〳〵寺に行つゝ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人にむかひて、前住の時の事をなん語りしをきゝ侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家〇徳川家光谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにてこゝやかしこ御過が

〔草木育種後編上〕接換之事

明月記曰、寬喜二年三月七日、南株八重櫻（一條殿枝纘木）花漸開、永日徒然、令栽菊苗（草不傳土用）これ本邦にても纘木の事舊し、花鏡曰、如樹發生時、或將黃落時、皆宜接換、大約春分前、秋分後、是其脫胎換骨之候也、凡樹生二三年者、易接云云、貝原花譜云、樹をつぐに、日あての方南にむかへる、うるはしき高き枝をきりて、客木としつぐべし、實多し、日かげの枝を用ゆべからず、接木の枝を遠方より取寄するに、小箱に土を入、枝を横にうづみてよし、數十日をへてかれずといふ、喜任（○中略）按に、今は蘿蔔をきり、これへ穗を扦して遠に送り、又日を過ても新に切りとるものに同じといふ、貝原云、接木のだいよりひこばへ出ば、はやくつみさるべし、接頭つきて後とき〴〵心がけて、ひこばへをつみ去るべし、もし是を去らざればつぎほ枯る、或はかじけて長せず、喜任按に、砧より芽を生ずる時は、根にも新根を生ずる故に勢よし、必ずとり去るものなれども、こゝに又少し見合てよき場もあり考べし、接ほも勢よき時、砧芽を生じたるは少し置き、芽四五寸にも及ぶ時、切り去るべし、灌園先生云、諸木ともに春少々暖氣にて、根より枝幹へ精氣のぼりて、芽未破れざる時をよしとす、故に諸木共に葉を生ずる十五六日前に接てよし、近來扁柏ひば類の穗を樹皮に挾み接ぐ事あり、砧は比翼ひば扁柏花柏等に接、鉢植なればつくあひだ日陰に置、節々きりを吹かけてよし、（○下略）

〔農家益後篇乾〕接苗早仕立之傳

近頃（○文化）豐前の國中津の在、原井村といへるに、櫨を多く植立、太實の苗を接弘む、其銘を太公望と號し、松山の實よりも太く、生り方勝れり、是は豐後國川內村に生りたる實を、原井村の寺の住僧取り來り、七度接かへしたるゆへに、肉厚く仁小く成たるよし、（接かゆるほど仁小さく、肉あつくなるものなり、）

〔廣益國產考八〕梅を植て農家之益とする事（○中略）

少し明けて雨露の氣少し通じ、氣のこもらざるやうにすべし、尤泥にてだい木の切口の下二寸程まで厚くぬり廻し、雀草をうへて、うるほひを引べし、其後早つよくば、水をわきより、朝夕少づつそゝぎ、だい木の廻りをかはかすべからず、だい木の皮の一方を切はなさずして接たるを、袋接といふなり、又皮を穗のそぎたる寸によく合せ、そぎはなして穗の皮目と、だい木の皮の方と付合、心得して少かたよせて、穗を付る事よし、　又水接は穗の本をながくし、だい木に付る所を、一寸半も穗の肉を少かけて、むらなく削り、口にふくみ、さてだい木のそぎやうは替る事なし、但きりひらくに下の所を少横に切、皮をわきにをしひらき、穗を合せ卷包む事前に同じ、さゝいがらにてもなき所ならば、竹の筒にても穗の本をさし入れ、風にもうごかぬやうに臺木に結付をき、冷水を入れ、夏中は水のぬるまざるやうに、頻りに水をかゆべし、よく付て皮肉よくとりあひたるを見て、冬になりて穗の下に出たる本の所を、よくきるゝ物にて切はなすべし、其まゝ置けば痛み枯るものなり、　又さし接とは、穗をながくして、芋魁か蕪菁にても、だい木のきはに肥土にて埋みいけて、雀草をうへ廻し、穗の本をよくそぎて、いもがしらに深くさしこみ、接やうは水つぎに同じ、　又木を接に三の秘事あり、一つには木の肌への少青みたるを見るなり、二つには穗もだいも節の所を切合するなり、三つには穗とだいとの皮肉の取合をよく見て接なり、此三術を違へずして接たるは、活ずといふ事なし、○註略　又よせつぎはよきほどの臺木を樹のわきにうへをき、或は木によりて桶などにうへ、其木のわきによせ置て、穗のある枝を引たはめ、木を立て地に打こみ、其木にしかとゆひ付置て、接事は前に同じ、是は百活うたがひなし、されどはなし接のよくつぎたるよりは、盛長遲し、いかんとなれば、接時手心其外思はしからざる故なり、此外も接法ありといへども、さのみ替事なし、但壯年の人の接たるはよくつきて、老人は精神乏しきゆへ、多くは付かぬ物なり、

を砧の如にして接なり、大木一本をほれば、砧木數十本を得べし、總て根へ接時はしばらく置て、土中の水氣をかわかして接べし、又珍き木など、但一本にして外に砧とする木もなければ、其木の根を切取て砧となして接べし、臘梅連翹などは根より芽を多生ずるゆへ、常の砧木の如にしてはつぎ惡し、根を砧にして接べし、

〔農業全書 九〕接木之法

木を接法樣々あり、先臺木を兼て子種(みうへ)にし置きたるがよし、山野より假にほり取たるは、第一は細根多く付ずして皮めもあらく生付かぬ物なり、假令つきても盛長をそく、後々年をへては、子うへのだい木に接たるには劣れり、山林より取たりとも、根に疵なきを用ゆべし、其ふとさ凡やりの柄ほどなるを中分とすべし、梨柿桃栗梅櫻の類は、大き木に中つぎにしたるもつく物なり、柑橘の類は高くはつぐべからず、だい木の大小をよく見合せ、ふとき程高かるべし、されど高くとも一尺ばかりには過べからず、又下(ひき)くとも四五寸に越べからず、下きは活やすけれども、臺木の皮、切口を包む事遲し、小き木高ければ、木の精上りかねて、穗に及ぶ生氣乏しきゆへ、枯る丶事あり、四五寸一、尺の間を中分とすべし、　齒の細かなる能きる丶鋸にて引きり、切口を見ればまきめあり、其卷目の遠き方に穗を付る物なれば、其方を少高く削り、接穗の長さ三四寸、本の方を一寸餘、肉を三分一ほどかけてそぎ、返し刀少しして口にふくみ、口中の生氣を借り、扨だい木の穗を付る所を、穗のそぎたる分寸に合せ、肉の內に少かけて皮を切ひらき、小刀のきりたる肌をむらなくして穗をさし入、竹の皮か、おもとの葉、古油紙にても、一重まき、其上をあら苧か打わら、又は葛かつらの皮目にて、手心にて、しかと一寸四五分も卷て、其上を又雨露もとをらず、蟻も入ざるやうに稠しく包み卷て、日おほひはおもとか竹の皮にて、日かげの方よりは、穗のさき見ゆる樣にあけて包み置、廻りを鷄犬もさはらぬやうに竹をさしかこひ、わらかこもにて包み、上を

下より上へけづり、皮は捨てよし、扨其寸法ぐらひにほの皮を、片々ばかり薄くけづり合せて接也、跡の手入は前のごとし、
身接　是は夏など接に、砧の切口より一寸も二寸も接口をさげて接なり、夏は木の勢早く枯くだるゆえなり、百両金大山れんげほうの木の類、皆腹へ接なり、
皮接　これはほにする親木をうへかえずして、其まゝ置て接なり、是は砧の木を盆にうへ、或は根へ土をつけ、藁づとのごとくにして、其接べき枝の所へ木をそへ、苧かと結付つるし置つぐなり、藁にて根を包たるは、夏中日々根もとへ水をそゝぐべし、右何も切はなすには、夏接たるは秋の頃肉あがりて、砧木より十分にほへ勢氣かよふを見て、まづほの元の所を半分程切、又數日の後、殘る半分を切はなすなり、然れどもよくつきたるは、一度に切はなしてもよし、
劈接　松などは皆わりつぎ也、總て木軟にしてつき易きものはわりつぎよし、假令ば砧のふとさ指の如くなれば、接ほも指のふとさにて、砧とほと同じ大さなるべし、扨砧の切口の正中を少し割て、兩方をけづり、ほの方も元を兩方より兩刃にそぎ、砧へはさみ巻也、
搭接　砧もほと同ふとさにて、砧をはすにそぎ、又ほもはすにそぎ合て巻、其上へ割竹を竪にそへ、其上を苧かとまきうごかぬやうにして、接めまで土をかけうゆる也、牡丹を接には此法也、
插接　是はまづ其接べきほを長く剪取、揺をする樣に土へさして、そのほの先をよび接の如にして接なり、
水つぎと云あり、是は其接ほの元を水へ入て、插花の如にして、其先を接なり、そのいけたる水は、二日ぐらいに入替てよし、右さし接、水つぎなどは、ほ早く枯て、つき難きたぐひにて、よび接にもなし難きものを接法なり、
根を砧として接法あり、是は砧にする木を掘、其根の勢よく皮のきれいなる所より切取て、これ

はすに切捨て、そのけづりめの長き方を内にして、砧へはさむなり、尤砧の切口よりほのけづりめを一分ほど出してはさめば、其處より砧の切口へ肉あがるなり、砧太ければ二口も三口も接べし、扨其上を、打藁にても、水きたる麻にても、ほの動ぬやうに卷なり、尤あわせめのすかぬやうにまくべし、打藁なればかたく卷、麻などにてはかたくしめ、多く卷は惡し、多くまく時は木くびれて、肉のあがり甚惡し、然ども柿砧梅砧などをやわらかに卷ばつかず、木にもよるべし、扨砧の木口よりつぎめの所を打わらにて包、又紙にて封ずる法もあり、其上を竹の皮にてほにさわらぬやうにおほひ、雨をふせぐべし、又多く數百本も接には、藁にて包たるまゝにて、ほの先を少し土の上に出し、皆うづめうへて、低く平に蘆づをかけ、又圍をこもにてかこひ、風雨をふせぐべし、穗の勢氣をたすくるために、土をかくるゆへ、芽を生ずるにしたがつて、土をだん／＼に去るべし、扨其接たる所へ、物のさはる事を忌、よくかこひて鳥獸をふせぐべし、時々根廻りをうかゞひ、砧より芽を生ずれば、早くかき取べし、だいめ多く出ればつかず、又ほより葉を生ずる頃は見合、竹の皮を切去べし、移植るには、夏の土用を過て、秋又春うへかえてよし、

高接（たかつぎ）　一二丈も上の枝へ接なり、多く枝の垂るゝを接、其法は右にかわる事なし、但し砧の切口幷にほのかれぬために、接たる所へ割竹か又茅の類にてかこひ、其内へ土を入、ほを少し出し置、其上へ少草（ちいさきくさ）をうえ置なり、是を漏斗といふ、又竹の皮の内へ土を入、草を植置ば、日をよけて潤なり、又竹の皮の外へ木の枝を添置て、鳥の止るをふせぐべし、又節々砧芽をかき取べし、又枝ごとに色々接を枝接（しせつ）といふ、則つぎわけなり、

壓接（よびつぎ）　仕方は切つぎの頃に接てよし、又葉を生じて其葉かたまりたる時接もよし、又よび接には時節なく、四季ともに接事もあり、何も接方は同事也、まづ其接べき親木を横へ伏て、植枝の地に近き所に砧木をうへそへ、枝をよびてほを切放ずして接なり、但シ砧の皮をへぐには、小刀を

接木

〔地錦抄 八〕草木植作樣之卷 ○中略

一草木種蒔に、毎月の節の日まくべからず、暦に節と有ル日なり、耕作には節蒔とて大にきらふ事なり、接木指木も無用成べし、

但シ節に入ル刻ヲのぞき其餘はくるしからずといへ共、一日不用たるべし、

〔草木育種 上〕接法の事 并圖

接に農政全書に、接樣又審なり、本邦に接樣色々あり、其木によりて時節のよき時接べし、何も九焦、雨風、天火、地火の日を忌べし、先その接砧の木は三四歳より六七歳までの木は勢よし、又四五歳といへどもこせたる木は惡し、十歳餘の木にても勢よきは又接べし、大樹へ接ときは枝の勢よき所を殘、外の枝は皆截すて、その殘たる枝へ接なり、是を高つぎと云、又砧樹を拔て接時は、長き根を切はさむがよし、又切過はいたむもの也、接梢の事は、去年のびたるほを今年接なり、ほは長くのびて勢よく、肥たる所を切とりて接なり、又弱木は接たるほの枯ぬやうにすべし、糞にてかこひ、又土藏などへ入置なり、風を忌べし、又接て跡にて臺の切口と穗の切口へ、蠟或は墨を塗ことよし、

換接　又根接とも云、則だいつぎなり、仕樣は先ほを大根の切口へさし、或は水にいけ置、砧樹をきり、其切口の鋸めを小刀にてけづり、人行こと四五町程間を置て接べし、但し木口に水けなき木は、直に接てよし、その砧の木口の方より、木の心と皮との間を、竪に小刀にて一寸程、けづる樣にへぐなり、尤へぐに甚かげんあり、木によりて皮の厚きものあり薄きものあり、又大木は厚く、小木は薄し、若薄き皮を厚くけづりて、木のしんに小刀かゝる時はつかず、其時は接口を替てけづり直すべし、拵ほに眼を二ツ三ツかけて、二寸餘にきり、片々の皮を心にかゝらぬやうに竪にけづり、口へ含むべし、砧のへぎめ一寸なれば、ほは一寸一分ほどにけづるなり、外の方の皮より

下種

生育を成すに、皆其丈二三丈に及、菊は黃英白葩燦爛として金玉盤を捧るがごとく、辣茄は紅綠實離離として、琅玕珊瑚を懸るがごとし、都下爭趨てこれを見るに、數百步を隔、屋上樹端に其狀認、實に一大奇觀なりしと云、始八丈島及崎嵜には此法有、關東には之を長大生育の鼻祖とす、培養に長る推知べし、

〔草木育種後編上〕下種之事

南天は十月の比霜の降らざる前にとり皮を去り、直に鉢へ蒔てよし、上へ細きごみを鋪き置べし、雨のかゝらぬ樣にすべし、水の翁云、地蒔は土の上へうす薦一まいかけ置き、七月末にこもを段々にとり、十月頃迄には殘らず芽生する也といへり、雅楓、野雞楓の類は、紙の袋へ實を貯へ、春の彼岸に地に布べし、

〔草木育種後篇上〕下種之事

阿部喜任○嘗て諸木の實をうゑ試みるに、各良非あり、今逐一左方に志るす、鳳尾松、羅漢松、木こく、秋實の熟したるをとり、土に雜へ置、春分に畦に布てよし、羅漢松はとり蒔にても生ずれども、霜に痛む事あり、又暖國にては其心得ありてよし、肉桂樟類は實へきずを付、とり蒔にしてよし、鳥のはみかへしにてはよく生ず、はせうるしは、牛に實を喰せ、其糞の中にあるを、糞と共に檀れバよく生ず、櫧、柯樹、一位、櫧、櫪櫟の類は、實落たる時土に雜へ置べし、直に鉢へ蒔てもよし、實の皮と皮と付時は、中に蟲を生ず、貯ふる時床の下などへ埋おくべし、鼠の用心すべし、春の彼岸の比より出し植べし、松の實ハ秋の彼岸の後に松毬をとり乾かし、落たる核をとり、砂に交へ置、春の彼岸の比まきてよし、根上りの小松を作るにハ、箱の下へころ土を入れ、上へあら砂を志き、其上へ細き土を入て蒔べし、根に叉椏を生ずる故に、石をまたがせなどするによし、根一本になるは用ず、

分に、蘇鐵は砂ばかり眞土少入たるも吉、さつききりしまは野土ほどよし、砂眞土あしきたぐいそれ〴〵かんがへべし、古キ土藏などこぼちたる壁土、是三土集合と同、土藏は、へな土多ク入りてよろしからず、中ぬりかべは最上の三土也、雨のあたらぬ樣にたくわへ置て草木に用べし、

〔草木育種後編上〕雪霜忌避之事

凡園中の樹木、冬月雪霜の候、預め其法を施して、枝葉をして其凛威を防べし、花鏡云、凡生果花盛時、逢霜則無實、是かのみにあらず、雪の爲に枝を折り、芽を損ずる事あり、十一月の中に、園中の樹木ハ、弱き枝ハ下より竹をたて結置、又細き繩にて釣置べし、雪積りても折れる事なし、小木枝多きもの、杜つゝ鵑じ花類、金かん松や土まきさやら蘇ひく木の一種の類、繩にて卷おくべし、蘇鐵芭蕉類も立冬の頃より藁にてまくべし、又草類の盆栽其まゝ鉢を埋置て、春の彼岸比より堀り出してよし、地植のものはわら木葉などかけ置てよし、喜任部○同按に、或人の說に、山中のものは雪霜を除ける事もなくして、自然に勢よし、園中に移す時は傾ハしといふあり、左にあらず、予冬月深山に行きたるに、葉落て根下に重り、一尺もかきわけて、漸く下に生ずる處雜草を得るなり、造物自然の妙にて、自ら根の霜雪を避くるなり、

〔大和本草一〕論物理○中略

今世民俗ノ時好ニヨツテ、草木花容變態百出、是皆人ノ愛賞スル處、人力ニヨツテ造化ノ力ヲ不借ナリ、其變化ノ品色多キ物、草類ニ、牡丹、芍藥、菊、幽蘭、燕カキツバタ子花、紫アヤメ羅ハナ襴花、石竹、桔梗、百合、牽牛花、剪春羅、剪秋羅、葵、鷄冠花、鳳仙花、木類ニ、梅、桃、櫻、山茶、茶梅、躑躅、杜鵑花等也、此外草木ノ花ニ變態ノ品色多シ、

〔草木奇品家雅見上〕借榮傳は東都澀谷金王祠の別當にして、寶曆の頃の人なり、奇品を弄、諸州の好人と贈答す、特に百たち兩はな金の斑を愛して、後世金王斑と唱る物有に至る、又一年菊と蕃たうがらし茄の長大

るい、野花の類に宜し、　一赤土こまかにはたきふるい、蘭百合草の類、又ゑびれ、けいとうのたぐひに宜し、　一肥土赤土の肥て黒みやわらかに成たるを云、此土は諸草に用てよろしきなり、　一沙石竹、瞿麥の類にふるい用て宜し、　一田土杜若、蓮、河骨、水葵、澤瀉、大底此類に用て宜し、但水をこのみ用る草花に宜し、　一合土眞土野土赤土肥土沙、是を等分に突てはたきふるい用也、万草に宜し、是又五土とも云也、　一ゑのぶ土赤沙によのぶ草を切突てはたきふるい、是は躑躅の類赤取木擂木に用て妙なり、

〔草木錦葉集緒卷〕草木植土の事

冬木の類植る土は畑の並土よし、合土なれば別して吉、植方は植付心得の部にあり、土の違ふ品は其品へ記す、

呼接の品切落、七月中頃より後に植る品は、すべて肥なき並土を用ひてよし、

夏木類諸品とも並土にてよし、尤年々植替べし、植法は植付の部にあり、

草類は諸品とも掃溜土下水土よし、合土は前年寒中肥を懸置たる土なれば別して吉、

〔地錦抄八〕江府三土　武陽の名土といふにもあらず、江府にて草木植作ルに集合して肥良の土なり、何國にても如此の土見合可レ用、

葛西眞土　かめいど邊よりなり平、隅田川の筋、みな眞土にて、かさいに似たり、小石まじりたるは砂眞土なり、よくふるいてつかふべし、

武藏野土　巣鴨村邊より板橋染井筋、野土にてむさし野に似たり、但ゞくろめなるを上とす、赤めなるは土の性おとれり、

八王子ノ砂　目黒邊にも間々あり、雜司谷王子の筋大方似たる砂なり、但ゞ白めなるを上とす、黑め赤め成はわるく、小石あらばふるひて用、

右三色の土等分に合たるは、何レの草木を植テも相應せり、但シ草木により、少宛かわるも有べし、たとへ牡芍といへ共、牡丹は三土よし、芍藥は砂と眞土等分に野土無用にてよし、蘭は砂眞土等

ノ耕作往々難澀ナルコト多シ、所謂瘠。薄。トハ、土地堅實太ダ過ギテ凝リ固リ、作物ヲ植ユルト雖ドモ、生長スルコト難ク、或ハ輕虚太ダ過ギ、軟膨ニシテ種植スル處ノ作物、成熟ヲ遂グルコト能ハザルヲ云フ、又陰。冷。トハ其ノ地赤道下ヲ離ルヽコト遠ク、或ハ山谷ノ間、及ビ深林ノ陰等ニシテ、風冷カニ水寒ヘ、作物ヲ成就スルコト能ハザルヲ云フ、又浮。洋。トハ、水多ク泥濘甚深ク、六七月頃ノ日光ト雖ドモ、炎熱ノ氣其地底ニ徹スルコトヲ得ズシテ、作物ノ熟スルコト能ハザルヲ云フ、又太。肥。ハ、土地墳壚ニシテ作物ヲ植ユルトキハ、其ノ繁茂スルコト太ダ過ギテ、實ヲ結ブコト能ハズ、或ハ墳壚ニ非ズト雖ドモ、莖葉ノミ蕃衍シテ、實ムル所ヲ成就セザルヲ云フ、又亢。陽。トハ、土地高燥ニシテ用水足ラズ、或ハ低處ニテモ乾シ渇クノ禍アリテ、旱損常ニ多キヲ云ヘリ、是ヲ以テ元庵翁ハ此ノ五患ヲ免ルベキノ法ヲ工夫シ、本篇ニ述ベタル三十六種ノ糞培料ヲ辨別シテ、或ハ二三種、若シクハ五六種ヲ配合シ、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸ノ十字號ナル糞培ノ例ヲ著ハシ、所謂瘠薄ノ地ニハ、甲乙二號ノ糞苴ヲ用ヒ、陰冷ニハ丙丁ノ二號、浮洋ニハ戊己ノ二號、亢陽ニハ壬癸二號ノ糞苴ヲ用ヒシメ、以テ其ノ太過ト不及ヲ平等ニシ、陰陽虚實ヲ中和セリ、是レヨリ以後ハ我ガ家ノ門人等ハ、所謂五患ニ罹ルノ地タリト雖ドモ、草木ヲ耕種シテ成熟ヲ全クスルコトヲ得タリ、信ニ世上ノ大幸ト云フベシ、故ニ其ノ定例ヲ筆記シテ家塾ニ藏セリ、若シ夫レ農事ヲ學ブコト初心ナル者タリト雖ドモ、此書ニ就キテ、田畑ノ耕作、及ビ糞苴ノ用法ヲ工夫ナサバ、絶ヘテ五患ノ難苦アルコト無クシテ、身ヲ終ルマデ此ヲ用ルモ、尚ホ其ノ利ヲ盡クスコト能ハザルノ妙アラン者ナリ。

文政七甲申年二月初吉　　玄海　佐藤信淵　識

〔花壇綱目下〕諸草可養土の事

一眞土（細にはたきふるい用也、水仙花并柑類に宜し、又菊の類并草の分に少加へ用也、）　一砂眞土（こまかにふるい用也、芍藥に用て宜し、）　一野土（細にはたきふ

シ、茶ハ山中ニモ亦有之、然レドモ北土及信濃ハ甚寒キ故茶ナシ、北土、奥州、羽州ニハ、畿內、近江、美濃ヨリ、茶ヲ越前ノ敦賀ニツカハシ、舟ニノセテ右ノ諸州ニ賣ル、竹モ北州ニハマレナリ、信州岐岨ノ谷中ニハ竹ナシ、檜ノ小枝ヲ以テ桶ノ箍トス、竹壁竹簀スベテナシ、中華ニモ南方ノ閩中ニハ、荔枝、龍眼、佛手柑、橄欖、甘蔗等アリ、北土ニハ無此品、

周禮考工記曰、橘踰淮而北爲枳、鸜鵒不踰濟、貉踰汶則死、此地氣然也、嵇含南方草木狀曰、嶺嶠已南無蕪菁、種之則變爲芥、○中略我北、鬱金、生薑、紅蕉、幽蘭、赬桐、蕃薯、芋之類皆畏寒、冬在國中則根悉爛死矣、埋之於向陽煖處則活、若夫在南州煖地者、栽彼土國中亦不死、是地氣之令然也、

〔地錦抄 八〕草木植作樣之卷

一草木は植作り樣、土地によりて好惡あり、其性山谷原隰の異あるを以て、それ〳〵の榮をなす、剛柔にまちわりて根荄をなし、やはらかかたきにまちわりて枝蘖をなすとなり、たとへば水草を原地に植れば枯、野草を泥中に植ればくさる事必せり、故に土の品々をわかち、草木の植作り樣をしるすのみ、

〔培養深秘錄補遺 一名盆培例〕題言

此ノ書ハ愚老○佐藤信淵ガ曾祖父元庵翁、初心ノ門生等ニ、切リ紙ニテ傳授セラレタル培養方ナリ、抑々我家農政學ヲ講ジテ、遍ネク人ニ敎ユルト雖ドモ、其ノ天意ヲ奉ルベキ窮理ノ說ト、培養ニ用フベキ品物三十六種ノ性功トニ至テハ、一子相傳ノ口授ト定メラレタリ、故ニ此書ニ述ブル處ノ十字號ノ方ヲ以テ、糞培ノ定例ト爲セル者ナリ、蓋田畑ヲ開發シテ草木ヲ作ランコトヲ欲スト雖ドモ、其ノ土地天然ニ瘠薄、陰冷、浮洋、太肥、亢陽ノ不同有リテ、作物ヲ妨障シ、需ムル處ヲ成熟セザルコト有リ、此ヲ土地ノ五患ト名ヅク、故ニ氣候良和ナル國ト雖ドモ、此ノ五患ニ因テ、其

栽培

〔大和本草〕一論物理 ○中略

凡草木ノ味辛シテ可食物、生薑、胡椒、芥子、蘿蔔根、蓼、蒜、和佐美、藤天蓼、蕃椒、右九種ハ草ナリ、山椒、肉桂、此二種ハ木ナリ、 右十一種、凡辛キ物ハ邪氣ヲ散ジ、瘴氣ヲ去リ、食滯ヲ消シ、蟲積ヲ抑ヘ、寒ヲフセグ、然ドモ多ク食ヘバ、氣ヲ耗散シ、津液ヲ乾涸シ、氣ヲ逆上シ、熱ヲ生ジ、瘡瘍ヲ發シ、目ヲ昏クス、少食フニ宜シ、多キヲ禁ズベシ、

〔伊呂波字類抄〕宇辭字 栽ウフ、前栽、栽草木 秧秧稲 殖 植 樹 播 時 種藝 蒔

〔饅頭屋本節用集〕宇用 栽ウユル 植同

〔書言字考節用集〕八言辭 栽ウユル 種同 植同

〔倭訓栞〕前編四 うゝる 植をいふ、万葉集に見ゆ、うゑとはたらく故也、

〔伊呂波字類抄〕都辭字 壅ツチカフ 或云壅瓜茄

〔書言字考節用集〕八言辭 培ツチカフ 糞同

〔倭訓栞〕中編十五都 つちかふ 培をよめり、土をかふ也、糞もよめり、

〔大和本草〕一論物理 ○中略

草木ノ性各異ナリ、植ルニ天ノ時アリ、春夏秋冬ト十二月ト、各植テ宜時アリ、天ノ時ニ順テ植ベシ、又植ルニ地ノ宜アリ、黃黑ノ埴土ニ宜アリ、軟沙土ニ宜アリ、陰地ニ宜アリ、陽地ニ宜アリ、燥溼水陸各宜不宜アリ、糞肥ヲ好ムアリ、惡ムアリ、地ノ宜ニ順テ植ベシ、是孝經ニ所謂、用天之道因地之利也、是種草木之法也、不可不識、○中略

橘柑金橘ハ寒ヲ畏ル、故ニ深山ノ中、又寒國ニハウヘテモ榮ヘズ、活シテモ實ナラズ、京都モ寒土ナレバ橘柑マレナリ、北土及信州ニハ橘類ナシ、柚ハ山中ニモアリ、朝鮮ハ寒國ナル故、橘柑ノ類及茶ナシト云、此類南方ノ暖地ニ宜シ、故ニ紀州駿州肥後ニ多シ、芭蕉、鳳尾蕉、蕃薯等寒國ニハナ

利用

〔大和本草一〕論物理○中略

本草李時珍曰、木中有草、草中有木、　是木ニモ非ズ、草ニモ非ズト云ニ似タリ、草中有木ハ、牡丹、玫瑰花、天竺花、紫陽花、薔薇、迎春花、連翹之類、木中有草ハ、枸杞、棣棠、平地木、懸鉤子、茅藤果等之類也、

〔大和本草一〕論物理○中略

蔓。草ハ皆左旋ス、順天之左旋也、左旋トハ左ヨリ上リ、右ニ落ルヲ云、天道ハ左旋ス、日月星皆同、人ハ北ヲ背ニシ、南ニ向ヘバ、左ハ東、右ハ西ナリ、日月天行皆東ニノボリ、西ニヲツ、是左旋ナリ、順ナリ、茶臼ノメグルモ、蔓草ノ物ニマトフモ、皆左旋ナリ、右ヨリ上リ左ニ落ルハ右旋ナリ、逆ナリ、或ハ茶臼ノ旋ルモ、蔓草ノ物ニマトフモ、皆右旋ト云人アリ、非ナリ、ヨク思フベシ、人力ヲ以テセズシテ、天氣ト茶臼ト蔓草トノメグリヲ以テ考フベシ、

〔大和本草一〕論物理○中略

史記、貨殖傳言植木之利云、安邑千樹棗、燕秦千樹栗、蜀漢江陵千樹橘、淮北千樹萩、注梓木也、陳夏千畝漆、齊魯千畝桑麻、渭川千畝竹云々、千畝巵茜、千畦薑韭、此其人皆與千戸侯等、今案、史記所言皆植テ有益物ナリ、吾邦植テ爲民用有益物多シ、木則白桐、梧桐、梓、桃、杏、栗、棗、橘、柑、金橘、茶、楮、漆、桑、朴、椿、山茶、櫧、櫟、櫻、櫚、柳、檉、柿數種、山椒、梔、梨、榛、杉、檜、樅、羅漢松等也、草類則麻、苧、藍、紅花、蕎麥、油菜、紫草、茜、芋等也、又竹類可植者多シ、史記ニイヘル植テ有益物ハ、棗、栗、橘、梓、漆、桑、麻、竹、梔、薑韭、是イヅレモ日本ニモ植テ宜キ物也、

〔農業全書九〕園籬(えんり)を作る法

いけがきに作る木は臭橘(からたち)、枸杞(く こ)、五加(うこぎ)、秦椒(さんせう)、梔子(くちなし)、刺杉(はりすぎ)、楮(かうぞ)、桑、櫻、桃、細竹、色々多し、此等の類よし、中にも臭橘、うこぎ、枸杞、勝れて宜し、臭橘は盗賊のふせぎ是にこゆる物なし、くこ、うこぎの二色は葉は菜にし茶にしても用ゆべし、根は共に良藥なり、酒にも造る、枸杞子は功能ある物なり、

雌雄

諸木卒然將枯者、急宜灸地上三寸向陽處多活、

〔大和本草　一〕論物理○中略

草木及竹、有雄有雌、雄者無實、雌者有實、雖枝葉相同、然不實者多矣、此植物亦有陰陽也、

〔草木性譜　人〕公孫樹○中略

榧、（本草綱目）雌木の枝横斜し、花あらずして果を結ぶ、雄木の枝直立す、花を生じ果を結ばず、

秦椒、（本草綱目）雄木に花有て實を結ばず、雌木は花を生じ實を結ぶ、柴繩を以て縛すること勿れ、縛すれば即枯る、

鳳尾蕉（秘傳花鏡）實名　無漏子（本草綱目）雌に實有て花を開ず、雄は花を開き實を結ばず、

桑、（本草綱目）雄木に花有て實を結ばず、雌木は花あらずして實を結ぶ、

羅漢松、（函史綱目）雄木に花を生じ實を結ばず、雌木は花あらずして實を結ぶ、

杜麻、（本草綱目）大麻（釋名）に○花有て實を結ばず、苴麻（同上）は花あらずして實を結ぶ、即雌雄なり、

菠薐、（本草綱目）雌に花を生せずして實を結ぶ、雄は花を生じ實を結ばず、

凡草木の常性は、雌雄ある者は前條の如し、又花あれば實を結ぶ、是天理なり、然るに實を結ばざるものあり、巖桂、（本草綱目桂集解）茉莉（本草綱目）瑞香、（同上）芫花（同上）水仙、（同上）胡蝶花、（秘傳花鏡）等の類なり、此餘略す、

類別

〔大和本草　一〕論物理○中略

竹者非草非木、而別爲一種、如戴凱之所謂也、猶動物之中有魚而非禽非獸也、蓋植物之有草木竹、猶動物之有鳥獸魚、而動物各自有這三等耳、植物類復有苔有菌、其爲物也最細微、不可與草木竹相比並也、動物類復有蟲有介、此亦其爲物也最細微、不可與禽獸魚相比並也、動物之中有蟲介、猶植物之中有苔菌也、

〔大和本草　二目〕草木三品　臞仙神隱曰、草木之種類極雜、而別其大較有三、木本、藤本、草本是也、

進也、然而不憚之、

〔倭訓栞前編九〕このみ　神代紀に菓をよみ、古事記に木實と見ゆ、應劭云、木實曰菓、俗にきのみかやのみといへり、かやのみは草の實也、金葉集に、

淺ましや劒の枝のたわむまでこは何のみのなれるなるらん、菓子、因果、此身の三義を兼てよめるなり、此身を佛足石の歌にこれのみと見えたり、

〔日本書紀一神代〕一書曰、〈略〉〇中素戔嗚尊乃教之曰、汝可以衆菓釀酒八甕、吾當爲汝殺蛇、

〔日本書紀二十二推古〕二十四年正月、桃李實之、

〔日本書紀二十九天武〕九年正月丙申、攝津國言、活田村桃李實也、

〔嬉遊笑覽十二草木〕世俗除夜に果樹の實のならぬに、一人杖を持て木のもとに行、ならうか、なるまいかとて打むとするを、又一人その樹に代りてならうと申ますといふなり、寶倉に、或時、姉にはかりて云、君みずや柿木などいへるもの丶年ぎりせるには、節分の夕に、一人斧をとりて、此木をきらんといらなめば、今一人其木に代りて、明年より年ぎりせまじ、ゆるし給へなど、口かためする時は、必明年より年ぎりする事なし云々、汝南圃史に、正月元旦辰剋、將斧斑駁敲樹、則結子不落、名曰嫁樹と是なり、又文昌襍錄云、楊州李冠卿所居堂前、杏一株極大、多花而不實、一老媼曰、來春爲嫁此杏、冬深忽携尊酒云、是婚嫁撞門酒、索處子裙繫樹上、已尊酒辭祝再三、家人咸哂之、明年結子無數とあり、これ嫁樹の義なり、

〔和漢三才圖會八十七五果〕種果法　同接木〇中略

果樹茂盛不結實者、元日五更、或除夜、以斧斫之、即結實、一云辰日將斧斫果樹、結子不落、

按、除夜一人在樹上、一人在其下、諸曰、汝宜結子乎否、今當斫棄也、樹上人答曰、諾、自今以後宜結子也、果翌年多有子、蓋雖俗傳、和漢趣相似矣、

〔段注說文解字艸一下〕蓏在木曰果、在艸曰蓏、各本作在地曰蓏、今正、考齊民要術引說文在木曰果、在艸曰蓏、以別於許慎注淮南云在樹曰果、在地曰蓏、然則賈氏所據未誤、後人用許淮南注臣瓚漢書注改之、惟在艸曰蓏、故蓏字从艸、凡爲傳注者、主說大義、造字書者、主說字形、此所以注淮南作說文出一手而互異也、應劭宋衷云、木實曰果、艸實曰蓏、與說文合、若張晏云、有核曰果、無核曰蓏、臣瓚云、木上曰果、地上曰蓏、馬融鄭康成云、果桃李屬、高注呂氏春秋云、有實曰果、無實曰蓏、沈約注春秋元命苞云、木實曰果、蓏瓠之屬、韓康伯注易傳云、果蓏者物之實、說各不同、皆無不合、高云、有實無實、卽有核無核也、从艸㼌、此合二體會意、㼌者本不勝末微弱也、謂凡艸結實如瓜瓞下垂者、就㼌之蓏、郎果切、十七部、鍇本作㼌聲、誤、㼌盧聲、蓋在五部、此會意形聲之必當辨者也、

〔本草綱目二十九〕目錄

李時珍曰、木實曰果、草實曰蓏、熟則可食、乾則可脯、豐儉可以濟時、疾苦可以備藥、輔助粒食、以養民生、故素問云、五果爲助、五果者、以五味五色應五臟、李、杏、桃、栗、棗是矣、占書欲知五穀之收否、但看五果之盛衰、李主小豆、杏主大麥、桃主小麥、栗主稻、棗主禾、禮記內則列果品菱椇榛瓜之類、周官職方氏辨五地之物、山林宜皁物、柞栗之屬、川澤宜膏物、菱芡之屬、丘陵宜核物、梅李之屬、甸師掌野果蓏、場人樹果蓏、珍異之物以時藏之、觀此則果蓏之土產常異、性味良毒、豈可縱嗜欲而不知物理乎、於是集草木之實、號爲果蓏者爲果部、凡一百二十七種、分爲六類、曰五果、曰山、曰夷、曰味、曰蓏、曰水、舊本果部三品共五十三種、今移一種入菜部、四種入草部、自木部移入併附三十一種、草部移入四種、菜部移入一種、外類移入四種、

〔類聚名義抄入艸〕菓俗果子　クタモノ　コノミ

〔倭訓栞前編久入〕くだもの　菓をいふ、木種物の義也、木種は日本紀に見えたり、倭名鈔に蓏をくさくだものとよめり、今の俗菓子の音を用ゐて、饅餅の類を併せよぶは、朝野群載に見ゆ、又贄の菓子は庭訓に見ゆ、西土にもさかあればにや、市肆記に、果子部ありて、餅餹を多く載たり、寒具の類は、乾菓子と稱せり、又交菓子の稱あり、

〔禁秘御抄上〕賢所○中略

自僧尼及俾人許所進之物不奉之、源雖出僧尼家、男女進物奉之、所謂關白所進菓、多與福寺別當所

蔤

果蓏

母、爲遠支切、又于僞切、並屬喩母、其音皆不同、中略○按核者子中骨、人者核中肉、醫方所謂桃人杏人者、皆用核中肉、則明核人不同也、而有謂人爲核者、如桃人承氣湯或名桃核承氣湯是也、未有謂核爲人者、源君云、核一名人、恐誤、

〔伊呂波字類抄左植物附植物具〕桃サ子、果子中之骨也、桃李皆有之、　實　人○桃人、李人、杏人等也、　犀　奴　雑奴サ子同、カンシノサ子、已上衝李衝出馬琬食經、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

攝津國卌四種　桃人一升、中略○杏人一斗九升、

〔倭名類聚抄十七菓具〕疐　爾雅云、棗李之類皆有疐、部計反、和名保曾、今按疐帶相通、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏具〕原書釋木棗李曰疐之、郭注云、晱食治擇之名、初學記引孫炎亦云、疐去其柢、皆以疐爲用語、與此其義不同、則此所引或是樊光李巡等注文也、按說文、疐礙不行也、蔕瓜當也、二字不同、保曾宜用蔕字、而曲禮爲天子削瓜者、士疐之、正義云、謂脫華處、廣韻云、疐柢也、則知借疐爲蔕、又轉爲用語也、按保曾以似膍臍名之、

〔倭名類聚抄十七菓具〕菓蓏　唐韻云、說文、木上曰果、字或作菓、日本紀私記云、古乃美、俗云、久太毛乃、地上曰蓏、力果反、和名久佐久太毛乃、　漢書注、張晏曰、有核曰菓、無核曰蓏、核見菓具、應劭曰、木實曰菓、草實曰蓏、

〔箋注倭名類聚抄九果蓏具〕干祿字書、菓果上俗下正、果見神代紀上及垂仁九十年紀、古能美見後撰集、按古能美、樹實也、久多毛乃、朽物之義、謂果蓏熟則朽腐也、中略○廣韻、郎果切、說文徐音同、按字異音同、然此引唐韻、則似當作郎果、中略○已上皆廣韻蓏字注同、伊勢廣本、說文下有曰字、與廣韻合、說文今本木部云、果木實也、从木象果形、在木之上、艸部云、蓏、在木曰果、在地曰蓏、此所引艸部文、齊民要術引作在艸曰蓏、廣韻張說在下、應說在上、二菓皆作果、張應二說、並漢書食貨志注文、原書菓作果、與廣韻同、

苞

種子

倍也、是唇音にて外に發し葩を顯す形蕾に倍せり、

〔剪花翁傳 前編凡例 一〕花形分解之辨（中略）

二に曰、苞はあら皮也、萼を包むの義、蓋花の萠しある莟を花袋といへり、此莟は拔群大にして萠せる莟の形、漸々蔓る時、麁皮を被り出る、故に苞をつぼみともよべり、

〔天文本倭名類聚抄 五稻穀具〕種子　日本紀私記云、水田種子（太奈都毛乃）陸田種子（波太介豆毛乃）種（之隴反、太禰）

〔伊呂波字類抄 太植物附殖物具〕穀（タナツモノ）　種子（同）

〔倭訓栞 前編十四〕たね　種をよめり、田根の義なるべし、

〔類聚名義抄 七子〕子（即里反、ミ、コ、タネ）

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國三十八種　榧子（カヘノミ）一斗六升、（中略）車前子（オホバコノミ）二斗八升、

攝津國四十四種　葵子（アフヒノミ）大五升、

〔類聚名義抄 七宀〕實（時質反、ミツ、和ミ、シナ、サネ、ミノル）

〔伊呂波字類抄 見殖物附殖物具〕實（ミ）　子（同）

〔倭訓栞 前編三十美〕み（中略）實は身に同じ、子もよめり、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國三十八種　枳實、通草、大戟各十斤、

〔倭名類聚抄 十七菓具〕核　爾雅云、桃李之類、皆有核、（胡革反、和名佐禰、今按一名人、醫家書云、桃人杏人等是也、）蔣魴切韻云、核者子中之骨也、

〔箋注倭名類聚抄 九果蓏具〕原書釋木、桃李醜、核、郭注云、子中有核人、此所引恐舊注也、單引爾雅非是、按說文、核、蠻夷以木皮爲篋、狀如籢尊、又云、覈實也、二字不同、果中之核、覈實之義、轉注者宜用覈字、以核爲之者、古音近而假借也、下總本僞作爲、伊勢廣本同、按廣韻核下革切、屬匣母、僞危睡切、屬疑

莟

〔撮壤集中木〕英ハナフサ　蕚ハナフサ 正蕚

〔書言字考節用集六生植〕英ハナフサ 字彙、華也、草木之英花也、　蕚 順和名、承レ花附也、字彙、草木花房也、　柎 同 句略

〔倭訓栞中編二十波〕はなぶさ　花房の義、常に英をよみ、倭名抄日本紀に蕚をよめり、

〔剪花翁傳前編凡例〕〔一〕花形分解之辨 〇中略

三に曰、蕚は花總はなぶさとよぶ、花形の總ての括なれば也、又花蕚とよぶ、蘤の蕚にして、歯に齶はぐきあるがごとし、又蒂へたとよぶ、蘤と莖とを隔つの義、劍に鍔あるがごとし、蓋ツバは刃と柄つかとの間をツバメルの義、されば蕚は花總のツバメにて、ツボミのもと也、故にツバメ、ツボムなど、音義通へり、蕚齶鍔三字の形音義ともにひとしきをおもふべし、

〔撮壤集中木〕蓓蕾ツボミ　含レ蕾ツボム 同

〔饅頭屋本節用集生植門〕莟ツボミ

〔書言字考節用集六生植〕莟ツボミ 類書纂要、花含レ心而未レ開也、　蓓蕾 同、俗用二此字一誤矣

〔倭訓栞前編十六都〕つぼみ　莟をよめり、つぼむ義也、蓓蕾も同じ、

〔剪花翁傳前編凡例〕〔一〕花形分解之辨

夫冬より春の花は、莟がんなるもの久くして蕾らいとなり、一旬許して蓓はいつぼみとなり、三五七日許して開花するなり、夏より秋の花は、今朝の莟、午の刻までに蕾となり、夕方より蓓に成、翌早朝開花する也、扨莟は麁あら皮にて包めるをいふ、蕾は蘤の貌、既に莟の中に萌し滿て綻るものをいふ、蓓は蘤既に半外に顯て、開花せんとするものをいへり、乃上層に換するごとし、〇圖略

右各樹艸によて蕚はなぶさの形ち異同あり、

再云、莟蕾蓓をいづれもつぼみとよべり、初を莟といひ、中を蕾といひ、後を蓓といふ、　莟は含がん也、是牙音おくはにて堅く、奥に在ていまだ發せず、　蕾は雷たるかみ也、是舌音にて、内に鳴響て既に萌し發す、蓓は

ける、簡を付て大花と書たりけり、此事は孝道がたうは、みな鼻の大きなるによりて、院の仰にも、鼻がたうとぞ有ける、これによりて大花と簡を付たりけり、比興の沙汰にてこそ侍ける、

〔徒然草下〕花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは、○下略

蘂

〔倭名類聚抄二十木具〕蘂　東宮切韻云、蘂而髓反、和名之倍、花心也、

〔撮壤集中木〕蘂シベ

〔書言字考節用集六生植〕蘂ハナノシベ廣韻、花外曰萼、内曰蘂、

〔倭訓栞前編十一志〕しべ　心瓣の音にや、蘂心をわらしべといひ、花瓣を花のしべといへり、後拾遺集に花のしべ、紅葉の下葉と見えたり、倭名抄に蘂を訓せり、

〔海西漫錄初編三〕陽蘂。陰蘂。梅花に陽蘂陰蘂有り、陰は中に在り、陽は周廻に在り、陰陽氣を通はすによりて香氣を發し、此嘗あるが故に實を結ぶといへり、

葩

〔倭名類聚抄二十木具〕葩　東宮切韻云、葩音巴、和名波奈比良、草木花片也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕說文、葩華也、說文又有皅字、云、艸華白也、

〔伊呂波字類抄波植物附植物具〕葩ハナヒラ、花新也、亦作皅、草木、

〔書言字考節用集六生植〕葩ハナビラ順和名、草木花片也、

〔剪花翁傳前編凡例一〕花形分解之辨○中略
一に曰、葩(はなひら)は花枚の義、ちれば幾枚(いくひら)となる也、又花開(はなひら)くの義、又花ひらけば平になる義あり、

萼

〔倭名類聚抄二十木具〕萼ハナフサ　東宮切韻云、萼五各反、和名波奈布佐、一云花房、承花跗也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕按、韻會云、萼俗作蕚、

〔伊呂波字類抄波植物附植物具〕萼ハナフサ　花房　棠　柎　蔕　蘤已上ハナ、ハナフサ、

る瑞にか侍らん、

〔半日閑話十二〕明和九年八月、當月末より紅梅梨櫻桃李の類ひ、花ひらく事春のごとし、上野山門際の櫻こと〳〵く開、尋常の歸り花に異なり、信州善光寺より便あるに、彼國にても紅梅彼岸櫻など花咲候由、

〔古今著聞集十九草木〕草木者有時、以昔、伊弉諾伊弉冊尊、既生木祖句々廼馳、次生草野姫、於戯春有櫻梅桃李之花、秋有紅蘭紫菊之花、皆是錦繡之色、酷烈之匂也、然而昨開今落、遲速雖異、隨風任露、變衰不遁、似樂有爲可觀無常矣、

〔徒然草下〕花のさかりは冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日おほやうたがはず、

〔和漢朗詠集上春〕早春

東岸西岸之柳、遲速不同、南枝北枝之梅、開落已異、(春生逐地形序、保胤、)

〔橘庵漫筆一〕花は枝毎に陰處より花開けり、南枝花初て開くと云は理の屈にして差へり、唯一理に葛藤せらるれば、古人の糟粕を嘗て聲に吼る徒となり、無見識の域を出がたし、殊に梅は就中北枝陰所よりひらく物なり、陸務觀が北枝の吟、思ひあたれるかな、

〔花月草紙五〕花のちるは、うてなのうちの實のおほきやかになりて、はなびらの居どころなき故にちるなり、この雨に花はちりぬといふは、雨のうるほひにて、かの實の大きくなればなり、秋冬に至りて、葉の落つるは、わかめのくきのうらよりめぐみて、そのわかめの大きくなれば、ふるき葉の居どころなければちるなりけり、

〔古今著聞集十九草木〕同御時(堀河)○内裏にて花あはせ有けり、人々めん〳〵に風流をほどこして、花車りけるに、非藏人孝時、大きなる櫻の枝を兩三人してかゝせて、南殿の池のはたにほりたてたり

り、又花見つゝ人まつ時は云々、是は菊なり、たなびく山の花のかげかも、これは桃、さくら、藤、山吹、つゝじなど、おしなべて花とのみよみしなり、後世にいたりては、花といへば、題も歌もさくらに限れり、いかにも打ちまかせて櫻を花とのみいはんに、憚るべきにはあらず、花てふ花の中にすぐれてめでたくたぐひなき花はさくらなり、かばかりすぐれたる花なき外戎は、國がらいやしき故なり、鶴林玉露に、洛陽人謂牡丹爲花、西都人謂海棠爲花、尊貴之也といへるは、事のかけたる國故なり、牡丹、海棠などこちたくいやしげにて、くらぶべきにあらず、たとへていはゞ、容貌美麗の女官の打ちとけたる姿と、厚化粧の俳優人の粧ひたる姿とのごとし、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、伊弉冊尊生火神時、被灼而神退去矣、故葬於紀伊國熊野之有馬村焉、土俗祭此神之魂者、花時亦以花祭、

〔古事記 上〕故乞遣其父大山津見神之時、大歡喜而、副其姉石長比賣、令持百取机代之物奉出、故爾其姉者、因甚凶醜、見畏而返送、唯留其弟木花之佐久夜毘賣以、一宿爲婚、爾大山津見神、因返石長比賣而大恥、白送言、我之女二並立奉由者、使石長比賣者、天神御子之命、雖雪零風吹、恒如石而常堅不動坐、亦使木花之佐久夜毘賣者、如木花之榮榮坐宇氣比氐(自宇下四字以音)貢進、此令返石長比賣而、獨留木花之佐久夜毘賣、故天神御子之御壽者、木花之阿摩比能微(此五字以音)坐、故是以至于今、天皇命等之御命不長也、

〔日本書紀 二十二推古〕三十四年正月、桃李華之、

〔日本書紀 二十三舒明〕十年九月、霖雨、桃李華、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜十五年九月一日己未、近者萬木華發、諸人煩赤痢、

〔古今著聞集 十九草木〕嘉應二年九月上旬、京中櫻梅桃李花開て、春のそらのごとく成けり、延喜九年八月にもかゝる事侍りけるとかや、そのたびは藤柚柿などもさきたりけり、聖代に此事有、いかな

花なり、新花といへども、すぐれざる花は雜色なり、衆目の見る所かはるまじ、今世間に牡丹菊等手前實生に植出し、さして秀ざる花も上々花といひ、殊に他の花を惡敷と譏るあり、自讃毀他にて花の好士といふべからず、我他の花を譏らば、人又我が花を惡敷といはん、言悖て出るものは、又悖て入るの聖言必せり、是則花をそしり合といふにて、花遊に慢心無益なるへしや、われ實生に植出したればとて、不宜花は世間に用ひず、能花は卑下すれども人褒美す、世上のながめとなりて、他の褒美にあふこそ花の威光にて、花主の規摸なれ、總て好花はよく、惡敷花は雜花とはどほどにながめて捨ざるを花好士といふなるべし、佐々羅、山布、烏頭、鷄頭、空穗、瓢蕈、絲瓜の川骨、破笠、鼓小花にいたるまで、花盛りに開く時は、一花一景のながめありて、心をやはらげ、鬱氣をひらき、容止を咲するは万花の景氣なり、尺地にも植べきものは、草花が中にも、藥草は朝夕ながめて花葉を知り、藥性の宜なるもの百品の葉を摘、黑燒として藥を調せば、眞の百草霜なるべし、藥店に賣る物いかゞ、疑らくは百藥草はあつめがたきもの也、又は其根をとりて、古人の教のごとくに製法して見たるも慰ならずや、唐和のかたち、大小の異あるは、土地にもよるべし、草花のるい土地に合たるは花大りんにして、色よくひらく、土地に合ざるは花形不出來也、牡丹、芍藥、菊等も、花壇の土相應なるを、毎年入かえ吟味して植れば、花形よく艶色して大りんにひらく、その根は日に干てほそらず、油ぎりて性よし、野土に植たるは牡芍の根日に干てほそくしなびて、各別なるにてしるべし、其根つよくして花葉さかふるの理なれば、草花を植作る一助ともなりぬべし、

〔傍廂前篇〕花

いにしへは木にても草にても、今目のまへに花の咲いたるを見ながらよめるは、たゞ花とのみよみし歌、萬葉集にあまたあり、古今集の頃は、さくらをむねと花といへれど、中には花の鏡となる水は云々、流るゝ川を花と見て云々、花ぞむかしの香に匂ひける、これらは梅を花とのみよめ

モ亦然リ、凡草木ニ雌雄アリ、雄ニハ無子、○中略

土之生物、其成數在五、故草木皆五出、桃杏花有六出者必雙仁、皆能殺人、瑯琊代醉

造化無全功、物無全美、豐其花者嗇其實、豐其實者嗇其花、天地ノ物ヲ生ズル兩ナガラ全カラズ、梅、櫻、海棠、薔薇、山茶、牡丹、芍藥等ハ、花美シケレバ其實不可食、棣棠、水仙等ハ、花美クシテ實ナシ、又花ノ千葉ナル者ハ實ナク、或ハ少シ、實ノ美キ者、柿、栗、棗、瓜、橘、柑等ハ花不美、

〔鋸屑譚〕蠡海集云、草木の花雖曰五色、獨無黑色、黑を水の色とす母道也、母は但陰育於中故不現也、按蠶豆花のごとき、白黑相雜るといへども、其黑色黯々墨のごとし、古人此色を紫といふものは甚非なり、唯此花此色をあらはす、いまだしらず、此他此色ある事を、恨らくは不純色、雖然黑白相半、尤分明則化工之妙、不可測識矣、

〔牛馬問二〕藝州侯の醫官武島氏春碩曰、諸木眞黑の花を不開事いまだ諸書に見ず、人に問へども、其説を不聞、此義如何、予○新井祐登が曰、足下もしらず、人も又しらず、予が謭劣、なんぞ是を知ん、然れども古老の話あり、青黃赤白黑の五色を以て、水火木金土の五行に配當するに、黑は水に屬し、四季に當れば、冬の色也、諸木花を開くは、陽氣發顯なれば、極陰閉藏の冬のいろを發く事なき、自然の至理なり、扨又會津に、うすずみ櫻有といへども、變にして常理にあらず、又五色の蓮華の説のごときも、常の事にあらず、

〔草木六部耕種法十一〕木類ノ花ハ古來栽覽シテ樂ムガ爲ニ作ルコトニ限ルト雖ドモ、杜鵑花ハ其味酸美ニシテ、酒ノ肴ト爲ルニ宜シ、又棣棠梅櫻等ノ花ハ飯ヲ和シテ鮓ト作ベシ、味頗ル美ナリ、仙家ニ此ヲ玉結ト名ク、又榴花ハ染料ニ用ヒ、芫花、玫瑰花、薔薇花、柚花、白桃花等ハ皆藥物ト爲ル者ナリ、

〔地錦抄附錄三〕當世實生にてかはり花出來るは珍花なり、古花といへども、好花はいつまでも上

黒色なしと、蠡海集に見えたれど、蠶豆の花は黒白分明に見ゆあり、群芳譜に、黒梅、花黒如墨、或云、以苦楝樹接者とあり、古今集に、

年ふれば齢は老ぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし、是は詩に、窈窕淑女君子好逑とあるが如き、染殿后の風情を、かたはらに照してのたまふなり、花とのみいひて櫻の事とするは、後の事也、鶴林玉露に、洛陽人謂牡丹爲花、成都人謂海棠爲花、尊貴之也と見ゆ、鎌倉右大臣集に、

みよしのゝ山に入けん山人となり見てしがな花にあくやと、古今集、菅家万葉なども、櫻とよめるは勿論にて、花とのみよめるは百花をいへり、よて詩も其意に見えたり、農家に花といふは紅花也、

〔隨意錄 五〕華花二字、兩漢以上唯有華而無花、凡草木皆用華字、魏晉以下、物華、年華、繁華、京華之類、唯用華字、凡草木皆用花字、而獨蓮用華字何也、

〔過庭紀談 二〕五經四書諸子楚辭先秦西漢以上ノ書ニ、花ト云字一字モ無シ、唯後漢書ノ李諧ガ傳ノ述身賦ニ、樹先春而動色、草迎歲而發花トアリテ、末ニ肆雕章之腴旨、咀文藝之英華ト云ヘリ、是レ花ノ字ノ見エ始メニテ、其上一賦ノ内ニ花ト華ト並ビニ組ニ用ユル出所ナリ、故ニ後世ノ詩人モ、一首ノ詩ノ内ニ、花ト華トヲ並ビ用ヒ來レリ、

〔大和本草 一〕論物理○中略

凡群花多クハ五出也、六出、四出、二出ハ稀ニアリ、五出ノ花ノ六出ニサキタルハ、其實ノ核ニ雙仁アリ、紫陽花、連翹花ナドハ四出ニサク、此外ニモ四出ノ花アリ、梔子、威靈仙、鹿葱、射干等ノ花ハ皆六出ニサク、虎耳草ノ花ハ二出ナリ、諸果蓏ハ花ノ後ニミノル、ミノリテ後ニ花サク者ハ、只瓜、壺盧瓜蔞ノ類也、蓮ハ花ト實ト同時、男麻ハ有花テ實ナシ、女麻ハ實有テ無花、此類亦多シ、木ニモ無花果アリ、棣棠、山礬、水仙等ハ、花サキテ實ナシ、此類亦多シ、山椒、樒ナド、雄木ニハ花アリ無實、菠稜

を斑葉にするに奇法あり、よく考へ見るべし、叢下の勇藏といふもの、羅漢松を砧（たい）として、これに斑葉の品翁まきと呼ものを接置たり、砧よりも芽を生じたれど、又景色にもとすて置たれバ、砧芽に實を結びたり、是を蒔たるに斑入二本青葉二本出たり、是に依り考るに、砧の勢を吸上る計りにてもなく、砧へも穂の氣を吸下るものと見ゆ、この例によりて外の品も接て試みたきものなり、

〔倭名類聚抄二十木具〕花　爾雅云、木謂之華、戸花反　草謂之榮、永兵反　榮而不實、謂之英、於驚反、訓阿○太○波○奈○

〔箋注倭名類聚抄十木具〕說文雩艸木華也、又云蕚、榮也、二字其義略同、後二字皆作華無別、按說文無花字、古蓋用蘤字、說文、蘤華也、蘤字艸書譌作花、蓋其體蘤作芲、是譌爲花之漸也、文選琴賦注、引郭璞曰、蘤爲古花字、

〔伊呂波字類抄波植物附植物具〕花ハナ、本作華、今通用、　菁　華　絮　榮草榮　茄　葶　英　蘂已上同

〔撮壤集中木〕花ハナ　華タナハナ

〔圓珠庵雜記〕花、ハナはなとははじめをいへば、實にのぞめていふか、鼻の字をはなとも、はじめともよむにて思ふべし、

楊子方言云、鼻始也、獸之初生謂之鼻、人之初生謂之首、

蠡海集云、人之受氣而生、則先生鼻、鼻通肺主氣也、

野客叢書云、考法言、獸之初生謂之鼻、人之初生謂之首、梁益之間謂鼻爲初、或謂之祖、然則鼻與祖皆始之別名、以鼻祖爲始祖、似未爲是、凡人孕胎、必先有鼻、然後有耳目之屬、今畫人亦然、必先畫鼻、

〔倭訓栞前編二十四波〕はな　花をいふ、春化ナルの訓義にや、神代紀に春を花ノ時と見ゆ、唐音にもはあといへり、單葉はひとへ也、千葉は音にてせんよといひ、又八重あり、樓子はやぐらざき也、筒子はつゞざき也、花の雲、花の雪、花の波、花の瀧、花の袖、花の衣など歌によめり、正花也、花五色といひて、獨

雁鳴きてさむき朝の露ならし龍田の山を搨み出だすものは、此紅葉をいふなり此歌本萬葉集に出で、下句春日山を令黄物者とあり、凡萬葉集もみぢ用黄葉字、唯一首用紅葉字、第十巻に見えたり、

〔草木育種後編上〕斑葉間道の事

邦俗いさ葉といふもの、古へは是を愛玩する事も聞かず、近來享保の比より世に愛玩する人あり、今はこれを斑入りといふ、戸々愛玩せざるはなし、唐山にいふ斑ありといふ、杜衡の類此にいふ斑入とは互へり、又瑞香の類の葉の周圍に白色なるを銀邊といふ、黄色なるを金邊といふ、玉簪萱艸の類、條に筋あるを絲紋また間道といふ、灌園先生云、白色をしろふといふ、黄色なるを黄斑といふ、初黄後白色になるを後ざへといふ、上品なり、春の葉白く斑ありて、秋に至り斑のきゆるを、後くらみといふ、下品なり、又はけめの如くすぢあるをはき込といふ、葉中心にのみあるを、中斑又中おさへといふ、葉の邊緑色なるを青覆輪といふ、圓くぼやしたるをぼだふといふ、小圓點又細白點あるを砂子といふ、其外千變万化逐件しるすにいとまあらず、都而斑葉は人の癜風の如く、毛のある處に至れば少年の人にても白髪となるが如し、斑入は實生よりも生じ、又一枝偶然斑葉になるもあり、自然に出るものなれば、深山にもあるものなりと、又近來荷蘭の説、花の雌雄蘂あり、雄木雌木ありて、花蘂交接の論によりて考るに、譬へば菘或は萊菔に斑入ありて、又別種の菘萊菔に斑を生せしめんと思はゞ、其菘の花開く比に、斑葉の菘の花粉を振落て、實を結びたるを採りて蒔けば、斑いりの奇菘を得べし、喜任部○同接に、今花戸にいふ處斑入に各の稱呼あり、芽の出る比に赤みあるを紅かけといふ、青葉同様に見え、うらに少し斑の見ゆるをかげふといふ、この品を接木とし、又手入にて眞の上斑となる事あり、又枝に斑ありて、其次の葉は青く、又其次の枝に斑あるをもぐりといふ、金邊烏木毒など、折々中にすぢの入るをけ込といふ、又木

ノ四時青々タルヲ愛テ栽ル者ナリ、竹ニモ雅ニシテ愛スベキ者多シ、椶竹、金絲竹、鳳尾竹、龍絲竹、
江南竹等是ナリ、

〔續日本紀八元正〕養老五年十月庚寅、太上天皇〈元明〉又詔曰、〈中略〉〇就山作竈、芟棘開場、卽爲喪處、又其地
者皆殖常葉之樹、卽立剋字之碑、

〔北邊隨筆二〕葉守神
枕草紙に、かしは木いとおかし、葉守の神のますらんも、いとかしこしとある、これは拾遺集に、か
しは木に葉守の神のましけるをしらでぞをりしたゝりなさるな、といふ歌よりいふなるべし、
其後にも、新古今集に、雨中木繁基俊、玉がしはしげりにけりな五月雨に葉もりの神のしめはふ
るまで、ともみえたり、葉もりの神といふ神は、神書にみえず、これはかしは木の葉のおちぬがゆ
ゑに、葉を守りたまひて、おとし給はぬ神のおはしますらんとていふなるべし、されどかしは木
にかぎれるは心えがたし、たゞいひならへるにしたがふなるべし、

〔萬葉集十秋雜歌〕詠黃葉
黃葉之、丹穗日者、然稱、妻梨木乎、手折可佐寒、
妹許跡、馬鞍置而、射駒山、擊越來者、紅葉散筒、

〔松屋筆記九十五〕モミヂと云字
〇栬の字をモミヂと訓は、色木の合字にて、いはゆる連歌文字也、類聚名義抄艸部に、蒅䔍芸などの
字をモミヂ葉、葉、黃葉、紅葉をモミヂバとよめり、万葉には黃葉をモミヂバ、紅をモミヅなどよみ
たり、

〔類聚名義抄三木〕栬〈音脆、黃木、〉

〔鋸屑譚〕後撰集に

溝水一荷、以上四品久シク調煉シ置テ用フ、此藥汁ノ能ク草木ノ葉ヲ肥太繁盛スル理ヲ玆ニ略論センニ、先ヅ大人信季〇佐藤ノ糞培秘錄ニ精ク説レタル如ク、凡ソ草木ヲ燒タル灰ノ中ニハ、神妙不可思議ナル鹽氣アリテ、能ク草木繁榮ノ生氣ヲ雄壯ニス、何トナレバ、草木ノ生長スルハ、總テ是レ天地生々ノ靈機ニテ、自然ニ揮發ナル鹽ト、滋潤アル油トヲ含ヲ以テ、其條達ノ勢ト、肥滿ノ養トヲ得テ以テ、成熟ノ功ヲ遂ル者ナリ、故ニ此ヲ燒テ灰ト爲ストキハ、其質ト膏トハ燃去テ、消滅スルガ如シト雖ドモ、精神ハ尙其灰ノ中ニ遺ル者ナリ、所謂ル揮發ナル鹵鹽ハ上天ノ神氣ナリ、滋潤ナル膏油ハ大地ノ精液ナリ、故ニ其精神ノ尙遺ル所ノ灰ヲ以テ田畠ニ培ヒ、此ヲ大地ニ歸シテ、天日ノ光映ヲ受シムルトキハ、直ニ天地ノ神ト精トヲ媾テ、再ビ揮發ナル鹵鹽ト、滋潤ナル膏油ヲ湊メ、大ニ草木ヲ繁生セシムルノ業ナリ、古來老農、老圃草木ノ種子ヲ蒔ニ、必ズ此物ヲ肥培トスルコトハ、此理ヲ些ク窺得タルナリ、且此草木灰ト云フ者ハ、透窶ノ性氣甚強クシテ、艸木ニ生タル蟲ヲ殺ニ妙ナル功能アリ、又人小便ハ其性功能、草木ヲ肥養スルコト、人糞ニ異ナルコトナシ、但彼人糞ハ滋潤、肥養ノ脂膏ヲ含畜ムコト多キヲ以テ、能ク土ト合體シテ、作物ノ根ヲ肥太ラセ、且其實ヲ成熟セシムルノ功能ニ於テハ、世界第一ノ肥養ナレドモ、揮發運動スル鹽氣少キヲ以テ、葉ヲ繁衍セシムルニ十分ナラズ、而此小便ハ揮發、運動ノ鹽氣ヲ含有コト多キヲ以テ、能ク水ト合體シテ、作物ノ幹ヲ延長シ、且ツ其葉ヲ豐美ニスルコト、他ノ肥養ノ絕テ及バザル所ナリ、

〔兵法雄鑑〕城内の植木は、葉の食物に成木を植べし、

〔草木六部耕種法十一需花〕岩桂、茶梅、山茶等ハ花ヲモ葉ヲモ愛スベキ者ナリ、檉柳、八角金盤等ハ、花モ有レドモ葉ヲ愛ス、又百兩金、硃砂根、珊瑚樹、桃葉珊瑚、虎刺、紫金牛、賽珊瑚、南天竹等ハ、葉モ愛シ實ヲモ愛シテ栽覽スル者ナリ、松、金松、羅漢松、檜、檜柏、雁翅柏、扁柏、仙柏、側柏、瓔珞柏、狗骨、石果等ハ、葉

杈

葉

に穓をよみ、黄をひこばゆとよめり、童蒙頌韻に楴に作る、
　見渡せば山田のひつぢひこばえてほに出るほどに成にける哉

〔東大寺要錄 五〕十四日〇十二月万燈會〇中略
七石四合樂入食祿 在支度、一石四面獸家栫〇栫一本作栟 木直、

〔新撰字鏡 木〕椏 烏可反、江南謂樹枝爲杈椏、木乃万太、

〔倭名類聚抄 二十木具〕杈椏 方言云、河東謂樹岐曰杈椏、砂鵶二音、和名末多布里、

〔箋注倭名類聚抄 十木具〕所引文原書無載、按廣韵引、作江東言樹枝爲椏杈也、説文、杈杈枝也、末太不利、見源氏浮舟卷、字鏡訓木乃万太、

〔古事記 上〕故其八上比賣者、雖率來、畏其嫡妻須世理毘賣而、其所生子者、刺狹木俣而返、故其子云木俣神、亦名謂御井神也、

〔倭名類聚抄 二十木具〕葉 陸詞切韻云、葉 與涉反、和名波、萬葉集黄葉、紅葉、讀皆毛美知波、 草木之敷於莖枝者也、

〔箋注倭名類聚抄 十木具〕黄葉、萬葉集卷一始見、集中凡四十餘見、紅葉、卷十唯一見、〇中略 説文、葉、艸木之葉也、

〔伊呂波字類抄 波植物附植物具〕葉 ハ、黄葉、紅葉、

〔倭訓栞 前編二十四波〕は 葉はひら反也、和名抄に葉手をひらでとよみ、新猿樂記にも千葉をちひらとよめり、

〔草木六部耕種法 八需葉〕草。木。ノ。葉。ヲ。需。テ。作。ル。者。ハ蔬菜、藥物、染料ノ三種アリ、木類ニハ茶料、香料、藥物、養蠶料ノ四種アリ、玆ニ其作法ヲ説示ス、讀者其心ヲ沈潛シテ、宜ク自然ノ天理ヲ精究スベシ、予〇佐藤信淵 ガ文章ノ拙キト、演説ノ鄙キトヲ藐視シテ、輕々シク看過スルコト勿レ、實ニ上天ノ賜物ヲ圓滿ニ拜受スル事業ナリ、〇中略 草木ヲ繁盛スル藥汁法、艸木灰八斗、小便八斗、馬溺八斗、厨下ノ

梢

の漢名よりいへる詞なり、

〔夫木和歌抄木二十九〕文集百集插柳作高林院種桃成老樹　慈鎭和尙

ひきうゑし木々の梢にとしたけてやどもあるじもおひにける哉

〔伊呂波字類抄須植物附植物具〕梢。スヘエ、心杪莖、　楚同

〔撮壤集中木〕楉スワヘ　氣條スワヘ同

〔倭訓栞前編十二須〕すはえ　氣條をいふ、唐詩に見ゆ、直生の義成べし、倭名抄に楚をよめり、万葉集に、楚取五十戸良がこゑといへるも、すはえとるさとらがこゑとよむべし、貧窮問答の歌なれば、笙楚をもて里長の租税をはたるをいふ也、○中略日本紀に笞杖をほそすはえ、ふとすはえとよめり、

〔玉勝間十〕はじめを濁る詞

言のはじめを濁るもまれ〱にはあるは、蒲、石榴、楚、斑、紅粉などのごとし、これらふるき物にも見たる詞也、後世にこそ濁りていへ、古はみな清ていへりし也、○中略楚は末枝也、末をすわといふは、聲をこわづくりなどいふと同じ、

蘗

〔倭名類聚抄木具二十〕蘗　纂要云、斬而復生曰蘗、魚列反、和名比古波衣、

〔箋注倭名類聚抄木具十〕毛詩汝墳篇傳、斬而復生曰肄、方言、陳鄭之間曰枿、秦晉之間曰肄、廣雅按尙書般庚由蘗釋文、本又作枿、則纂要本於毛傳也、說文、巘伐木餘也、又載蘗字云、巘或从木辥聲、下總本蘗作蘖、那波本同、按廣韻云、蘗書作蘖、伊勢廣本作蘖、按薛字或作蕯、故蘗亦作蘖也、○中略字鏡云、穮穀亦更生、比古波江、又云、蘖死木更生、比古波由、比古波衣、孫生也、

〔撮壤集中木〕蘗ヒコハヘ

〔倭訓栞前編二十五比〕ひこばえ　倭名鈔に蘗をよみ、書に由蘗と見ゆ、孫生の義なるべし、新撰字鏡

〔萬葉集十八〕天平勝寶二年正月二日、於國廳給饗郡司等宴歌一首、
安之比奇能夜麻能許奴禮能保與等里天可射之都良久波知等世保久等曾、
右一首、守大伴宿禰家持作、

〔新撰字鏡木〕柯（割多反、法也、枝也、莖也、己牟耳、）

〔倭名類聚抄二十木具〕樾　纂要云、木枝相交、下陰曰樾（音越、和名古無良、）

〔伊呂波字類抄古植物附植物具〕樾（コムラ、楷陰也、樹陰也、木枝相交、）

〔撮壤集中木〕樾（コカゲノムラ）

〔倭訓栞前編九古〕こむら　倭名鈔に樾字をよめり、纂要に、木枝相交、下陰曰樾といへり、木葉の義也、万葉集に樹村と見ゆ、新撰字鏡にも柯をよめり、式大和國高市郡軽樹村坐神社と見えたり、

〔倭訓栞中編三衣〕えだをならさず　西京雜記に、太平世則風不鳴條、雨不破塊と見へたり、

〔千載和歌集十賀〕百首の歌めしける時祝の心をよませ給ふける　崇德院御製
吹風も木々の枝をばならさねど山は久しき聲ぞきこゆる

〔倭名類聚抄二十木具〕樹梢　唐韻云、梢（所交反、和名古須惠、）枝梢也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕廣韻同、王念孫曰、梢之爲言稍々然小也、廣雅、稍、稍小也、按、説文、梢、梢木也、蓋木名、其木未詳、説文手部有捎字、云、自關已西、凡取物之上者爲撟捎、方言同、轉謂物之上爲捎、又木捎字从木作梢、釋木、梢、梢擢、是也、與木名之梢自別、

〔新撰字鏡木〕杪（亡少彌小二反、上、木末也、木細枝也、木高也、梢也、木乃枝、又比古江、）

〔伊呂波字類抄古植物附植物具〕梢（コスエ、枝梢也、）杪（木末也）　標（下杪）　槇（木上也、已上同、）

〔撮壤集中木〕杪（コズヘ）　梢（同）

〔倭訓栞中編八古〕こずゑ　倭名抄に梢をよめり、木末の義なり、こずゑの春、こずゑの秋は、杪春、杪秋

〔撮壤集中木〕枝　朶同　條同

〔倭訓栞前編二十八〕ほづえ　万葉集に、末枝又最末枝など書り、ほは秀なり、つは助語なり、日本紀に上枝といふが如し、大工などのいふ辭に、ほづをつけるといふも、最末の義なるべし、ほゝづともいふ、穗末の義なるべし、

〔古事記上〕是以八百萬神、於天安之河原神集集而、〇中略天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而、自許下五字以音於上枝取著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉、於中枝取繫八尺鏡、訓八尺云八阿多於下枝取垂白丹寸手、青丹寸手而、訓垂云志殿此種種物者、布刀玉命、布刀御幣登取持而、〇下略

〔古事記傳八〕上枝、中枝、下枝は、雄略天皇御歌、又長谷朝倉朝段三重婇歌に、本都延、那加都延、志豆延とあるに依て訓べし、下枝は彼婇が歌の中に三たび出たる、二は志豆延といひ、一は志毛都延といへり、

〔古事記中應神〕天皇卽以髮長比賣賜于其御子、〇仁德所賜狀者、天皇聞看豐明之日、於髮長比賣令握大御酒柏、賜其太子、爾御歌曰、伊邪古杼母、怒毘流都美邇、比流都美邇、和賀由久美知能、迦具波斯、波那多知婆那波、本都延波、登理韋賀良斯、志豆延波、比登登理賀良斯、美都具理能、那迦都延能、本都毛理、阿迦良袁登賣袁、伊邪佐佐婆、余良斯那、

〔古事記傳三十二〕本都延波は、都を濁るは非なり上枝者なり、本は秀の意ぞ、萬葉九二十丁に、最末枝者落過去祁利、十六丁十一に、末枝梅乎、十三丁二十四に、橘末枝乎過而、十九丁四十八に、青柳乃保都枝與治等理などあり、上卷石屋戶段に、上枝中枝下枝と見え、下卷朝倉朝段歌に、本都延那加都延志豆延とよめり、〇中略志豆延波は、〇註略下枝者なり、書紀には辭豆曳羅波とあり、萬葉五丁十八に、和我夜度能烏梅能之豆延爾、七丁三十五に向岡之若楓木下枝取、九丁二十に、下枝爾遺有花者、十丁十六に梅之下枝、

〔萬葉集六雜歌〕山部宿禰赤人作歌一首并短歌〇中略反歌二首
三吉野乃、象山際乃、木末爾波、幾許毛散和口、鳥之聲可聞、

のふしも義通へり、

〔新撰字鏡竹〕筡之客反、平、竹筒、竹乃與、又竹乃豆々、

〔倭訓栞前編三十六與〕よ○中略 兩節間をよむは和名抄にみゆ、竹節之間をいふ節もよめり、古事記に一節竹とみゆ、世の義に通へり、新撰字鏡に筡を竹のよと訓せり、

皮

〔倭名類聚抄二十木具〕樸 玉篇云、樸音璞、字亦作朴、和名古波太、木皮也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕今本木部云、樸、眞也、木素也、又云、朴、本也、與此所引不同、按説文云、樸、木素也、又云、朴、木皮也、玉篇蓋依之、則今本朴本也、當是朴木皮也之譌脱、又按樸朴二字、其義不同、而質樸字古多借朴、老子、敦兮其若樸、釋文、樸又作朴、荀子、生而離其朴、其他尙多、未有借樸爲木皮者、此恐源君誤引也、又按、廣韻云、樸、木素、又載朴字云、上同、厚朴藥名、是雖二字通、然厚朴之訓、不在樸字下、而在朴字下、亦可以見質樸或可用朴字、木皮不可借樸字也、

〔倭訓栞中編一阿〕あまかは 材木又は子實の粗皮の内に、又甘皮といふあり、實にいふは稃也、俗にいふあまかはなこと、いふは是成べし、又あまはだといふ義同じ、

枝條

〔倭名類聚抄二十木具〕枝條 玉篇云、枝柯支哥二音、和名衣太、木之別也、纂要云、大枝曰幹、音翰、和名加良、細枝曰條、音迢、訓與枝同、

唐韻云、葼音聰、和名之毛止、木細枝也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕衣太、肢同訓、○中略 今本木部云、枝、枝柯也、按、王念孫云、柯、幹也、古聲柯與幹同、鄭玄考工記法、笴、矢幹也、笴莖謂之幹、亦謂之笴、樹莖謂之幹、亦謂之柯、聲義並同、柯本莖名、因而枝亦通稱柯、説文云、枝、木別生條也、○中略 山田本幹作榦、詳見身體類脅肋條、可併攷、花嚴經音義引字書云、榦謂庶枝也、○中略 加良與柯柄同訓、○中略 伊勢廣本迢作超、説文云、條、小枝也、並此義、○中略 按、廣韻葼、子紅切、屬精母、聰倉紅切、屬淸母、其音不同、此以聰音葼恐誤、○中略 谷川氏曰、當茂本之義、所引唐韻與廣韻同、説文、靑兗冀謂木細枝曰葼、孫氏本之、方言與説文同、許本方言也、

節

〔古事記 中 神武〕將擊登美毘古之時、歌曰、美都美都斯、久米能古良賀、阿波布爾波、賀美良比登母登、曾泥賀母登、曾泥米都那藝氏、宇知氏志夜麻牟、

〔古事記傳 十九〕曾泥賀母登は其根之莖なり、中略根之莖とは、先凡て本草に母登と云は、立る幹のことにて、必しも末に對へて云には非ず、木に大祓詞に繁木本乎とあるも、繁木の木立を云、孝德紀歌に、模騰渠等爾、波那播左該騰模とあるも、木毎と云ことなり、又一もと二もとなど云も、木にては一木二木と云に同じければ、草も其意にて生立る莖を以云なり、

〔倭名類聚抄 二十 木具〕半天河　本草云、半天河、和名、木乃宇豆保乃見豆、陶隱居曰、竹籬頭水也、

〔箋注倭名類聚抄 十 木具〕千金翼方草部下品載之、本草和名同、證類本草玉石部下品載之、云唐本元在草部、中略證類本草引、竹上有此字、本草和名引同、

〔倭訓栞 前編 四 宇〕うつほ　空の義なり、中略うつほ木は窾木也、うつほぶねは獨木舟也といへり、中略倭名鈔に半天河水、きのうつほのみづと見えたり、うつろといふもうつほと同じ、窕をよめり、

〔源平盛衰記 二十一〕兵衛佐殿隱臥木附梶原助佐殿事

兵衛佐殿ハ、土肥杉山ヲ守テ、搔分々々落給フ、中略鵐ノ岩屋ト云谷ニヲリ下リ見廻セバ、七八人ガ程入ヌベキ大ナル臥木アリ、中略佐殿今ハ遙ニ落延給ヒヌラント思ケレバ、木ヨリ飛下テ、跡目ニ付テ落給ヒ、同伏木ノ天河ニゾ入ニケル、中略大場伏木ノ上ニ登テ弓杖ヲツキ踏マタガリテ、正ク佐殿ハ此マデオハシツル物ヲ、臥木不審ナリ、空ニ入テ搜セ者共ト下知シケルニ、下略

〔倭名類聚抄 二十 木具〕節　四聲字苑云、節、子結反、和名布之、今案從竹者竹節、從草者草木節、見玉篇、草木擁腫處也、

〔箋注倭名類聚抄 十 木具〕按今本玉篇不載節字、其他字書亦無有從草者、蓋俗字也、此云見玉篇恐有誤、節又見竹具、

〔倭訓栞 前編 二十六 不〕ふし　竹木の節は經より出たる詞にや、草には節と書り、又信也と見ゆ、歌曲

やはせぬなどよみて、根ながらに掘取を云、俗にいふ根引にするなり、

〔延喜式 八祝詞〕六月月次 十二月准此 ○中略
辭別、伊勢爾坐天照大御神乃太前爾白久、皇神乃見霽志坐四方國者、○中略自陸往道者荷緒結堅氏、
磐根木根履佐久彌氏、○下略

莖幹

〔倭名類聚抄 二十 木具〕莖 玉篇云、莖 戶耕反、和名久木、枝之主也、

〔箋注倭名類聚抄 十 木具〕字鏡同訓、柾亦同訓、今本艸部云、莖、枝本、按、說文云、莖枝主也、古本玉篇蓋引之、今本說文作枝柱、誤、

〔伊呂波字類抄 久 殖物 附殖物具〕莖 クキ 戶耕反 草木幹也 莢 クキ 蕢萮莢 古膾反 莖 クキ 正作蕳 莖箭苗也、數空反、豆、又云葉、菜名、茄 同、莖也、芙蕖

〔撮壤集 中 木〕榦 カラ 幹同、枝幹、後人門木、句會、

〔倭訓栞 前編 三十〕みき○中略 幹をよむは、身木の義也、

〔倭訓栞 前編 八〕くき○中略 莖をよめるはくゝみの義、くみ反き也、枝葉を含める事也、

〔草木六部耕種法 五 需幹〕凡草。木。ノ。幹。ヲ。需。テ。作。ル。者。ハ、草類ニハ少ケレドモ、木類ニハ極テ多シ、宮室及ビ家財器物薪炭等ニ至ルマデ、皆木幹ヲ以テ製スベキガ故ナリ、然シテ其中ニ於テ先ツ艸ノ食菜ト爲スベキ者ハ、獨活、莖芋、欵冬、蘘荷莖、竹筍、芋艿、甘蔗等アリ、又雜草ノ作ルベキ者ニハ、席艸、莊藺、莞等アリ、又木類ノ作リテ良材ト爲スベキ者ハ、杉、扁柏、松、樅、欅、樟、櫧、槲等有リ、器物ヲ製スベキ者ニハ、桐、黄楊、七葉樹、槐等有リ、又薪炭ノ料ニハ、櫟、宇落樹、朴、檀等アリ、且ツ竹類モ亦要用ノ品ナリ、宜シク此ヲ作ルベシ、以上諸種ハ皆是レ莖幹ヲ需テ作ル者ナリ、

〔延喜式 八祝詞〕大殿祭○中略
今奥山乃大峽小峽爾立留木乎、齋部能齋斧乎以伐採氏、本。末。波平山神爾祭氏、中間乎持出來氏、○下略

子作荄滋、淮南時則訓、爨其燧火、高誘注云、荄讀該備之該、是其例也、

〔伊呂波字類抄〕(チ 植物 附植物具)根(草木本也)柢(木根 又音低 又音柢)荄(草根也)已上

〔倭訓栞(前編 二十二)〕ね(○中略)根はかくれてあらはれぬ事にいへば、宿の義に通へり、たつねを命根といふ、種樹書に見え、こねを根鬚といふ、燕居筆語に見えたり、

〔草木六部耕種法(二 需根)〕凡ソ根ヲ需メテ作ル者ハ、木類ニハ有ルコト無シ、肉桂ト枸杞ノ根皮ヲ採ハ、即其皮ヲ需ルノ事ニ屬シ、樟根ヨリ樟脳ヲ採リ、松根ヨリ松香ヲ採リ、漆樹根ヨリ、零漆ヲ採ガ如キハ、畢覚其幹ニ係レル事ニシテ、根ヲ需ムルノ業ニ非ルナリ、草類ニハ根ヲ需テ作ル者極テ多クシテ、擧テ記載スベカラズ、先ヅ其中ニ於テ人世ノ有用最モ多キ者ハ、蔬菜ニ午蒡、蘿蔔、胡蘿蔔、蕪菁、青芋、紫芋、車轂芋、馬鈴薯、蒟蒻、薯蕷、佛掌藷、黄獨、土圞兒、萆薢、甘藷、甘露兒、百合、生薑、大蒜、薤、葱、蓮根、水慈姑、蕣菜等アリ、染艸ニ紫根、茜根、鬱金等有リ、藥物ニ人蔘、白朮、蒼朮、大黄、附子、川芎、當歸、白芷、地黄、知母、貝母、莪朮、良薑、黄連、黄芩、延胡索、山慈姑、天門冬、麥門冬、天南星、芍藥、牡丹、黄蜀葵、山奇來、栝蔞根、商陸、天麻、防風、獨活、羌活、前胡、細辛等有リ、其他甚ダ多シ、藥艸ハ總テ山野ノ自然生ハ氣味ノ強キヲ以テ、此ヲ上品トシテ此ヲ貴重スル事ナレドモ、世上有用ノ多キ、萬分ノ一ニモ足ルベキニ非ザルヲ以テ、多分ニ此ヲ作リ出シテ、豐饒ナルニ非ザレバ、病者ノ難澀ニ及ブ事必定ナリ、是故ニ國事ハ農政ヨリ急ナルハ無シ、

〔古事記 上〕是以八百萬神、於天安之河原神集集而、(○中略)天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而、(○下略)

〔古事記傳 八〕根許士爾許士而、書紀に掘とあり、又神武卷に拔取、景行卷に拔などもあり、拾遺には、古語佐爾居自能爾居自と見ゆ、万葉八(十四丁)に、去年春、伊許自而植之、吾屋外之、若樹梅者、花咲爾家里、(拾遺集には、去し年根こじて植しとし直して入れり、)古今六帖に、秋野は根許士にこじて持去とも巖の種は遺し

古事類苑

植物部一

總載

植物ノ種類甚ダ多シ、今之ヲ大別シテ、木、竹、草、苔、蕨、菌、藻、ノ六類トス、就中草木二類ニ屬スルモノ最モ多キニ居ル、

本篇ニハ植物一般ニ關スル根、幹、枝、葉、花、種子等ノ大要ヲ揭ゲ、栽培、移植、及ビ伐採等ニ就キテ其二三ヲ收載ス、而シテ果蓏ノ事ハ、尙ホ食物部菓子篇ニ在レバ、宜シク參看スベシ、

名稱

〔伊呂波字類抄 呂〕殖物 付殖物具

〔類聚名義抄 七歹〕殖 今正、音食、ウフ、タチ、タツ、和シキ、シヨク、　〔同 三木〕植 音寔、ウフ、オフ、タツ、

〔書言字考節用集 六生植〕植物 ウエモノ 文選註、草木也、

〔倭訓栞 中編三字〕うゑぐさ　古事記の歌に見ゆ、殖草也、万葉集にうゑたけ、後撰集にうゑ木ともよめり、

根

〔倭名類聚抄 二十木具〕根株 荄附　東宮切韻云、根株 痕誅二音、訓上禰、下久比世、草木本也、唐韻云、荄 音皆 草根也、

〔箋注倭名類聚抄 十木具〕字鏡、柮櫪並訓久比、本居氏曰、久比、杙也、世、當須惠之急呼、謂近根之處、與礎訓伊之須惠同、愚按、伊之須惠、蓋石居之義、植柱以之、爲基也、久比世、恐不與此同語、疑杙末之急呼、○中略 說文、根、木株也、株、木根也、○中略 說文、荄艸根也、孫氏蓋依之、爾雅云、荄、根、郭注云、俗呼韭根爲荄、韓詩外傳云、草木根荄淺、王念孫曰、根荄之言根基也、古聲荄與基同、易箕子之明夷、劉向云、今易箕

植物部十六

草五

植物部十五

草四

植物部十四

草三

植物部十二

草一

植物部十三

草二

植物部十一

竹

木九

植物部十

植物部九

木八

植物部八

木七

植物部七

木六

植物部六

木五

木四

植物部四

木三

植物部五

植物部三

木二

植物部二

木一

古事類苑

植物部一

總載

古事類苑

植物部第一冊目錄

神宮司廳藏版

古事類苑

植物部一
金石部

古事類苑刊行會